

關西學院大學圖書館史

1889年— 2012年

關西學院大學圖書館

表紙題字：山崎 掃雪

歴代館長



J. C. C. Newton
(初代、第3代)
1889. 9 ~ / 1903. 12 ~



T. H. Haden
(第2代)
1897. 6 ~



W. K. Matthews
(第4代)
1908. 4 ~



山本 五郎
(第5代)
1938. 4 ~



東 晋太郎
(第6代)
1943. 4 ~



実方 清
(第7代)
1956. 4 ~



楠井 隆三
(第8代)
1960. 4 ~



大道安次郎
(第9代)
1964. 4 ~



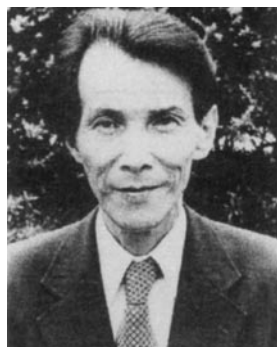
前田 正治
(第10代)
1968. 4 ~



小関藤一郎
(第11代)
1972. 4 ~



川村 大膳
(第12代)
1976. 4 ~



阪本 仁作
(第13代)
1980. 4 ~



金子 精次
(第 14 代)
1984. 4 ~



八重津洋平
(第 15 代)
1988. 4 ~



田中 敏弘
(第 16、17 代)
1992. 4 ~



丸茂 新
(第 18 代)
1998. 4 ~



井上 琢智
(第 19、20 代)
2001. 4 ~



杉原左右一
(第 21 代)
2007. 4 ~



曾我 祐典
(第 22 代)
2008. 4 ～



奥野 卓司
(第 23 代)
2010. 4 ～



新大学図書館玄関から見た時計台

図書館の変遷

1889 年

創立時最初の校舎に 30 畳の図書室が設けられ、書籍館（しょじゃくかん）と称した。



1908 年

学院本館 3 階部分が増築され、その半分が図書館に充てられた。



1922 年

ブランチ・メモリアル・チャペルに図書館が移された。



1929 年

上ヶ原移転記念に、竹中工務店竹中藤右衛門氏から時計台(図書館)の寄贈を受けた。



1955 年

時計台の両翼を拡張し、後方の書庫も増築した。



1963 年

新館を書庫の裏面に増築竣工した。



1973 年

1971 年に第 1 次増築、1973 年に第 2 次増築をして真四角な建物に拡張した。



新大学図書館（1997 年～）



新大学図書館外観



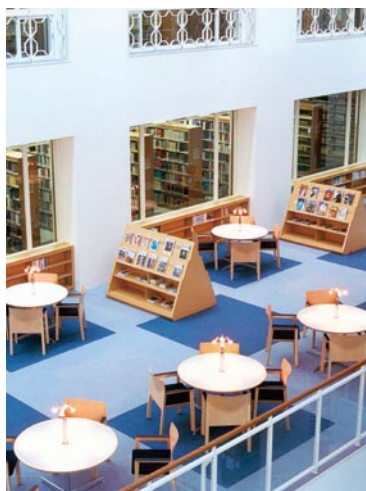
サンクンガーデン



朝明け



B1 階書架



2 階ラウンジ



3 階書架



吹き抜けバナー

新大学図書館のアート



風 「光の海」



光 「光あれ」



力 「浮くかたち -垂-」

これらの作品は校歌「空の翼」の「風」、「光」、「力」をテーマにしたもので、図書館の内外に設置されている。

神戸三田キャンパス大学図書館分室

Ⅱ号館



Ⅱ号館内図書メディア館
(1995年4月～)

Ⅲ号館



Ⅲ号館内図書メディア館
(2001年9月～)

Ⅵ号館



Ⅵ号館内図書メディア館
(2009年3月～)

貴重図書

兵庫県漁具図解
(1897 年)



グーテンベルク 42 行聖書
(1455 年頃)



コーベルガー版ラテン語聖書
第3版 (1478 年)





エラスムス 校訂版新約聖書
初版 (1516 年) と第 2 版 (1519 年)



アダム・スミス「国富論」
英語版初版 (1776 年) と
フランス語版 (1778-1779 年)



トマス・ホッブズ
「リヴァイアサン」
初版 (1651 年)

蔵書印・蔵書票



明治から大正にかけての蔵書印



関西学院図書館の1921年当時の蔵書印



戦前から1940年頃の蔵書票

図書館刊行物等



特別文庫目録



図書館報「時計台」



学術資料講演会冊子



新大学図書館設計画書類



AV ニュース

ポスター・展示



J. C. C. Newton 賞ポスター



学術資料講演会ポスター



図書館エントランス展示（2009 年）



図書館エントランス展示（2010 年）

序

本書は、本学の図書館の歴史を詳細に記述した最初の正史となる「関西学院大学図書館史」です。この書の刊行がくしくも関西学院大学 125 周年記念期間中に実現したことを、大変意義深く感じます。

本格的な図書館史の刊行は本学図書館関係者の長年の念願でしたが、2005 年に当時の館長であった井上琢智学長が具体的な刊行案を提案され、それ以降、柳屋孝安法学部教授（元副館長）を委員長とする編集委員会によって地道で丹念な作業が行われてきました。この資料収集から編集制作の中心となったのは、長く図書館運営の中心として活躍された兄井栄子前事務部長たちで、そのご努力に深く敬意を払います。

1889 年に原田の森に設立された関西学院書籍館以来、現在までの本学図書館の姿と図書館員の業務に対する努力と変容の過程についての詳細な記述は、それ自体、本学ばかりでなく日本の私立大学図書館の変化についての貴重な学術的資料として後世に残るものになることは疑いありません。また、当然本書は今後の本学図書館発展のための原点とされるべきものです。

今日、大学図書館は国際的な変革の波にさらされています。現在の本学図書館も建設されてまもなく二十年が過ぎ、すでに建設時のコンセプトでは、この波を乗り越えられないものになっています。この間に起こってきた書籍、雑誌の急速なデジタル情報化、また学生気質の大きな変化に、本学図書館は積極的に対応していくべきでしょう。

もともと研究のための書籍、学術雑誌の収集、所蔵、閲覧の場として企画・設計された図書館も、現在では多彩な学生のために、各学部の授業から一步距離をおいた自主的な問題発見と解決のための学習の場へと転換をはかろうとしています。

ただ、その際に見失ってはいけない大学図書館の本来の学術的意義と学問・出版の自由を守る原点、とくにキリスト教主義教育、世界市民の育成を

めざすグローバルな関西学院大学らしい教育と研究のための本学図書館の守るべき原点が、本書には示されています。後を受け継ぐ私たちはしっかりとこの意義を肝に銘じて、大学図書館の未来の創造にたずさわってまいります。

最後になりますが、本書は公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団からの助成および本学教職員の方々からのご寄付によって刊行することができたことを記し、心からお礼を申し上げます。

2014 年 1 月

関西学院大学図書館長
奥 野 卓 司

凡例

1. 本書は、関西学院大学図書館の1889（明治22）年から2012（平成24）年3月までの歩みをまとめたものである。
2. 本書の執筆は、関西学院大学図書館史編纂委員会の委員が分担した。
3. 本書は、本文編、資料編と図書館年表で構成した。
4. 本書の記述範囲は、2012（平成24）年3月までである。ただし、資料編および図書館年表は、2013（平成25）年3月までの情報が記載されている場合がある。
5. 表記は以下のとおりとした。
 - (1) 本文編は、原則として「現代仮名遣い」および「常用漢字表」に準拠した。
 - (2) 本文編での和文の引用は、原文の表記を尊重した。ただし漢字は可能な限り常用漢字に改め、明らかに誤字・脱字と認められる箇所は適宜修正した。
 - (3) 本文編中の人名についての所属、肩書きは、当時のものとした。
 - (4) 本文編中の組織名は、当時のものとした。
 - (5) 年代表記は、西暦を基本とし、和暦を併記した。
 - (6) 資料編は、原則として、その原本の表記を尊重した。
6. 索引は本文編についてのみ作成している。
7. 参考資料は、一括して巻末に示した。

関西学院大学図書館史 1889 年～2012 年

目 次

序
凡 例
関西学院大学図書館長 奥野 卓司

本 文 編

第 1 部 原田の森キャンパス時代

1889(明治 22)年～1929(昭和 4)年

I 原田の森キャンパス時代

| | |
|--------------------------------|----|
| 1889(明治 22)年～1929(昭和 4)年 | 3 |
| 1 関西学院の設立と図書館施設の発展 | 3 |
| 2 寄付・寄贈に頼る蔵書の形成 | 10 |
| 3 利用の拡大と貸出ルールの整備 | 11 |
| 4 図書館刊行物と図書整理システムの整備 | 13 |
| 5 館員育成の開始 | 16 |
| 6 対外業務－図書館関連団体への積極参加 | 17 |

第 2 部 上ヶ原キャンパス時代

1929(昭和 4)年～2012(平成 24)年

I 戦前・戦中の図書館

| | |
|--------------------------------|----|
| 1929(昭和 4)年～1945(昭和 20)年 | 21 |
| 1 図書館施設の地道な整備と拡充 | 21 |
| 2 図書費の捻出 | 28 |
| 3 図書館組織と図書館運営 | 29 |
| 4 蔵書・資料の充実と貴重書の収集 | 32 |

| | | |
|---|------------------|----|
| 5 | 利用拡大に向けた工夫 | 34 |
| 6 | 図書館刊行物発刊の試み | 35 |
| 7 | 「読書週間」を利用した展示の開始 | 36 |
| 8 | 対外業務への積極参加 | 36 |

II 戦後－旧図書館（時計台）時代

| | |
|------------------------------------|-----|
| 1945(昭和 20)年～1996(平成 8)年 | 37 |
| 1 施設・設備－図書館全体の動き | 37 |
| 2 図書館規則－大学図書館の位置づけの変化と図書館規則の整備・細分化 | 68 |
| 3 図書費－大学図書館専用の経常的な図書費予算の確保 | 73 |
| 4 組織と要員－図書館機能の拡大と組織・要員配置のめまぐるしい変遷 | 76 |
| 5 蔵書・資料－所蔵数の飛躍的増加と図書館による全学一元管理化 | 94 |
| 6 利用－利用者サービス機能充実のための見直し | 99 |
| 7 刊行物－多様な図書館刊行物の積極的な刊行 | 107 |
| 8 展示・講演会－定例開催に向けて | 111 |
| 9 図書システム－開発 | 113 |
| 10 整理－整理方法の変遷と外部委託の拡大 | 137 |
| 11 館員育成－育成の工夫と実践 | 146 |
| 12 対外業務－学外図書館組織への積極的関与と組織への貢献 | 151 |
| 13 神戸三田キャンパス大学図書館分室－その開設と整備 | 157 |

III 新大学図書館

| | |
|---------------------------------|-----|
| 1997(平成 9)年～2012(平成 24)年 | 160 |
| 1 施設・設備－予想された書架狭隘化 | 160 |
| 2 図書館規則－新大学図書館での規則の改廃制定 | 168 |
| 3 図書費－経常図書費予算初の減額と繰越制度廃止への苦しい対応 | 170 |
| 4 組織と要員－組織の改編と職員の減員 | 173 |
| 5 蔵書・資料－書架スペース狭隘化への多面的な対応 | 174 |
| 6 利用－多様な利用者ニーズへの対応 | 178 |
| 7 刊行物－特別文庫すべての冊子目録の完成 | 227 |
| 8 展示・講演会－さらなる充実に向けて | 228 |

| | | |
|----|---------------------------------------|-----|
| 9 | 図書システム－汎用機からサーバ上のシステムへ | 230 |
| 10 | 整理－システム化の進展と整理業務の変化 | 237 |
| 11 | 館員育成－めまぐるしい変化の時代に対応できる図書館員の育成 | 242 |
| 12 | 対外業務－図書館界の連携強化と連携チャンネルの多様化・大規模化 | 243 |
| 13 | 神戸三田キャンパス大学図書館分室 －新しい図書メディア館の開設と整備 | 255 |
| 14 | その他 | 257 |

第3部 人物史

| | | |
|---|------------------------|-----|
| 1 | J. C. C. ニュートンと図書館の始まり | 267 |
| 2 | マシューズ館長の図書館改革 | 271 |
| 3 | 図書館初代司書 磯部泰治 | 278 |
| 4 | 図書館の基礎を築いた中島猶治郎 | 282 |
| 5 | 図書館とともに 自助の人 入交光三 | 289 |

資料編

| | |
|--------|-----|
| 資料編細目次 | 295 |
|--------|-----|

| | | |
|-----|----------------|-----|
| 1 | 施設・設備 | 299 |
| (1) | キャンパスマップ | 299 |
| (2) | 図面類 | 303 |
| (3) | 新大学図書館建築関連資料 | 317 |
| 2 | 図書館規則 | 406 |
| (1) | 廃止規程 | 406 |
| (2) | 旧規程 | 443 |
| (3) | 現行規程 | 456 |
| (4) | 主要学院外規程等（現行規程） | 476 |

| | | |
|---|-------------------------------------|-----|
| 3 | 図書費 | 494 |
| | (1) 図書費予算 | 494 |
| | (2) 経常図書費以外の図書費予算 | 495 |
| 4 | 運営 | 496 |
| | (1) 議事録等 | 496 |
| | (2) 図書館組織図、組織・課名変遷 | 577 |
| 5 | 要員 | 579 |
| | (1) 図書館長一覧 | 579 |
| | (2) 司書一覧 | 580 |
| | (3) 次長・事務部長一覧 | 580 |
| | (4) 図書館員数 | 582 |
| | (5) Library Advisory Committee 委員一覧 | 584 |
| | (6) 大学図書館運営委員会委員・視聴覚室専門委員会委員一覧 | 591 |
| 6 | 蔵書・資料 | 602 |
| | (1) 蔵書冊数（図書） | 602 |
| | (2) 雑誌資料所蔵・継続受入タイトル数 | 603 |
| | (3) 寄贈図書資料一覧 | 604 |
| | (4) 特別図書費等購入資料一覧 | 608 |
| | (5) 大学図書館のコレクションー特別文庫、その他特色ある貴重資料群ー | 610 |
| | (6) 古文書史料所蔵点数 | 618 |
| 7 | 利用 | 619 |
| | (1) 相互利用件数 | 619 |
| | (2) レファレンス質問件数（上ヶ原） | 622 |
| | (3) 利用統計 | 623 |
| 8 | 刊行物 | 628 |
| | 冊子目録一覧 | 628 |

| | |
|--|-----|
| 9 展示 | 630 |
| (1) 特別展示および学術資料講演会 | 630 |
| (2) 展示企画一覧 | 638 |
| 10 システム | 644 |
| (1) 図書ブロック基本構想書（抜粋）（1985 年 10 月） | 644 |
| (2) 図書システム開発運用状況 | 651 |
| (3) 図書システム概念図 | 653 |
| 11 整理 | 654 |
| (1) 外部委託によるフルマーク処理件数 | 654 |
| (2) 外部委託による整理冊数 | 655 |
| 12 館員育成 | 657 |
| (1) 関西四大学図書館職員研修 | 657 |
| (2) 図書館職員の発表論文等 | 673 |
| (3) 職員研修：宿泊研修および講演会 | 677 |
| 13 対外業務・活動 | 681 |
| (1) 兵庫県大学図書館協議会 | 681 |
| (2) 私立大学図書館協会 | 691 |
| (3) 関西四大学図書館長会議 | 696 |
| 14 その他 | 740 |
| (1) J. C. C. Newton 賞応募数・受賞者一覧 | 740 |
| (2) 関西学院大学リポジトリ統計 | 742 |
| 15 関西学院新聞に見る図書館関連記事（1922 年～1985 年） | 743 |

| | |
|--------|-----|
| 図書館年表 | 748 |
| 本文編索引 | 765 |
| 参考資料一覧 | 771 |

編集後記

関西学院大学図書館史編纂委員会委員長
柳屋 孝安

写真目次

第1部

- 原田の森キャンパス……1
書籍館蔵書票……4
新聞雑誌閲覧室……6
図書閲覧室……8
高等学部商科の図書閲覧室……9
1928年頃の図書館（ブランチ・メモリアル・チャペル）……13
「巡回文庫図書目録一覧 大正5年12月印行」……14
原簿台帳……14
「私立関西学院附属図書館規則及図書分類綱目」……15
『会報』全国高等諸学校図書館協議会 第4号、昭和3年5月……17

第2部

- 上ヶ原キャンパス……19
W. M. ヴォーリズによるキャンパス基本配置設計図 1928年……22
池に映る図書館……23
1943年頃の閲覧室……26
破壊されたエンブレム……27
分館入口……39
図書館閲覧室……41
占拠された第5別館……43
1974年増築後の図書館外観と閲覧室……48
海外視察—シカゴ大学……57
建設工事中の新大学図書館……60
聖句（ヨハネによる福音書 第8章31、32節）……62
倒壊した書架……63
散乱した図書……63
1960年頃の閲覧室……81
視聴覚室のブース……90
新月文庫……97
開架室カウンター……102
「略史」と「小史」……108
学術資料講演会……112
目録カードボックス……139
各種目録カード……141

- 1986年の合宿研修—千刈セミナーハウス……146
1983年の関西四大学図書館職員研修会……150
『磨研録』私立大学図書館協会関西部会 第1号、1964年……156
整備中の神戸三田キャンパス……158
神戸三田キャンパス図書室……159
日本図書館協会建築賞賞状……160
レファレンスカウンター……184
運営課・利用サービス課……186
オリエンテーション—館内ツアー……190
キャンパスライフ ABC!……195
ラウンジ……211
新着図書コーナー……214
先生のおすすめの本コーナー……215
新聞書評掲載図書コーナー……216
レポート・論文作成関連図書コーナー……217
『兵庫県漁具図解』イカナゴ地曳網使用図……220

- 冊子目録……227
第12回特別展示—丸善・東京日本橋店……229
私立大学図書館協会総会・研究大会……251
私立大学図書館協会総会・研究大会会場……251
目録システム地域講習会……254
図書メディア館のあるVI号館……256
第13回 J. C. C. Newton 賞表彰式……258

第3部

- J. C. C. ニュートン初代図書館長……265
南美以教会第14期日本年会 1905年開催……271
中島が留学中に曾根司書に送った絵はがき……274
「山口県立山口図書館と漢図書分類目録 明治37年11月刊」……280
中島猶治郎……282
『目録編成法』……283
全国高等諸学校図書館協議会第9回大会……284
入交作成の「関西学院図書館年表」……289
入交光三……290

本文編

第1部

原田の森キャンパス時代

1889(明治 22)年～1929(昭和 4)年



I 原田の森キャンパス時代

1889(明治22)年～1929(昭和4)年

1 関西学院の設立と図書館施設の発展

(1) 関西学院書籍館と巡回文庫

関西学院は、1889（明治22）年9月28日に兵庫県知事より「私立関西学院」の名称で設立認可を受けて、男子だけの私立学校（神学部と普通学部の2学部制）として出発する。キャンパス用地は、「神戸の東郊原田の森」（現在の神戸市灘区の王子公園周辺）の1万坪余の林地を切り開いて確保したが、校舎は、木造2階建ての第1校舎（建坪78坪）に、付属の木造平屋建て1棟（建坪57.5坪）を加えるのみであった。その第1校舎の1階に、仮のチャペルと講堂を兼ねた図書室（30畳）が設置された。この図書室は、当時の図書館施設一般について使用されていた呼称に従って「書籍（しょじゃく）館（室）」と呼ばれていた。この「書籍館」が、関西学院大学図書館の出発点とみられる。関西学院の設立母体であったアメリカ・南メソヂスト監督教会の日本年会記録にも、1890（明治23）年には図書館は小さく、参考書、海図や地図が非常に乏しいこと、そして1893（明治26）年にはその貧弱な図書室に数冊の図書や関西学院の創立者である W. R. ランバスの寄贈による貴重な地図数編が追加されたことが記録されている。当時の蔵書印には「関西学院書籍館」の名称が用いられ、蔵書票には「書籍館」の印刷が残っている。この「書籍館」ないし「関西学院書籍館」の名称は、1908（明治41）年に「私立関西学院附属図書館」に変更されるまで使用されている。

関西学院の設立母体であるアメリカ・南メソヂスト監督教会は、関西学院設立のわずか3年前の1886（明治19）年9月に、日本での伝道を開始するために、日本伝道部（Japan Mission）の開設式を神戸の地で行う（日本伝



書籍館蔵書票

道部は、1904（明治 37）年には法人格を取得して社団化され、在日本南メソヂスト教会宣教師社団となっている）。その監督教会より日本伝道部の責任者に任命されたのが、関西学院の創立者となる W. R. ランバスである。W. R. ランバスは、伝道に尽力できる人材の育成が急務と考え、神戸に高度な教育機関を設立するための資金を監督教会本部に要請したことが、1888（明治 21）年 9 月のアメリカ・南メソヂスト監督教会日本年会記録に残されている。そして、日本伝道部の方針等を決定していた「ジャパン・ミッション四季会（Japan Mission Quarterly Conference）」において、具体的に用地 10,000 ドル、建物 5,000 ドルが、教育機関設立に必要な予算額として決定され、その旨が監督教会本部に報告されたことが、1889（明治 22）年 1 月の「ジャパン・ミッション四季会記録」に残されている。さらに、同年 7 月の四季会記録によれば、関西学院神学部の図書購入のための委員が任命され、200 ドルが充てられた。このように関西学院は、その設立の当初より、図書の購入費用を含めて必要な資金の提供を、アメリカ・南メソヂスト監督教会から受けていた。

そして、関西学院における最初の図書館である「関西学院書籍館」の初代館長には、日本伝道部のメンバーであった J. C. C. ニュートン（第 3 部『人物史』を参照）が任命された。J. C. C. ニュートンは、「ジャパン・ミッション四季会」の会議において、東京での布教活動に対する感謝決議を受けた後、設立された関西学院神学部に神学部長として移籍する。この神学部長 J. C. C. ニュートンが、開設時の「関西学院書籍館」の初代館長を兼任した

ことが、1890（明治23）年のアメリカ・南メソヂスト監督教会日本年会記録に記載されている（その後、J. C. C. ニュートンは、アメリカへの一時帰国のために、T. H. ヘーデンに館長職を委ねるが、帰日後、館長職に復帰し第3代館長となっている）。また、同記録では、J. C. C. ニュートン館長が、図書館は小さく、参考書、海図、地図は殊に少ないことを嘆じていたと記載されている。当時の学生数が数十名程度であり、蔵書の点でも、まだまだ貧弱であった。また、図書は、教授用参考書を主としたものであったようである。

ところで、「関西学院書籍館」開設後しばらくたった1895（明治28）年の日本年会記録には、巡回文庫（当初は年会文庫と称されていた）を「関西学院書籍館」内に新設すること、また、1897（明治30）年には、伝道活動を行う南メソヂスト監督教会日本年会員を対象に図書の貸出を行う旨の報告が記録されている。巡回文庫は、その後、神学部通信教育部の専属となったが、1916（大正5）年に図書館の管理に復している。なお、南メソヂスト監督教会は、1907（明治40）年にアメリカ・メソヂスト監督教会とカナダ・メソヂスト監督教会とともに3派合同し、日本メソヂスト教会となった。

（2）関西学院本館図書館－「書籍館」から「私立関西学院附属図書館」へ

このようにして出発した原田の森キャンパス時代の図書館施設は、学院の教育体制の発展的見直しに対応した校舎や施設の拡充に合わせて、キャンパス内の建物を移動しつつ、その規模や蔵書数、設備等の充実が徐々にではあるがはかれていった。

まず、1894（明治27）年3月に、校舎として木造2階建ての関西学院本館が新しく建設され、その2階に図書室専用の部屋が確保される。そして、1908（明治41）年には、この本館の2階部分が改造されて3階部分が増設され、3階部分の3室が図書閲覧室、新聞雑誌閲覧室（座席数合計40席）、書庫（1万冊収容可能）に充てられた。1918（大正7）年より図書館に勤務し、後に第7代の図書館司書となった入交光三（第3部『人物史』を参照）は、関西学院学報第15号（1964. 12）の「学院とともに四〇余年」の中で、「記録によるとこの三階は旧二階を改造したもので、道理で新聞雑誌閲覧室

も図書閲覧室も北側の書庫も異様な間取りであった。木造三階建てというのはこの地の名物であったが、風雨の強い日など心持ち揺れていたように思う。ここは眺望がよく眼下に茅渚の海が広がって……場所がらから登館者は少なかった。多い日でも四〇名程度……」と述べている。当時の図書館の様子を彷彿とさせる。

関西学院は、同じ1908（明治41）年に文部省より専門学校として認可され私立関西学院神学校となる。さらに、1912（大正元）年には、神学部と高等学部（文科・商科）からなる専門学校として新たに認可を受ける。また、それに先立ち、1910（明治43）年には、関西学院の経営母体であったアメリカ・南メソヂスト監督教会にカナダ・メソヂスト教会が加わり、アメリカとカナダの合同経営となって、関西学院の経営母体が在日本南メソヂスト教会宣教師社団から関西学院社団に移行されている。

専門学校としての認可に合わせるように、1908（明治41）年に、図書館施設の名称が、「関西学院書籍館」から「私立関西学院附属図書館」に改称されている。関西学院の図書館施設に「図書館」という名称が付されたのは、この時が最初である。

当時の「私立関西学院附属図書館」は、関西学院本館3階にすでにあった



新聞雑誌閲覧室

事務室・整理室・図書閲覧室・新聞雑誌閲覧室・書庫のほか、1912（大正元）年に竣工した神学館と高等学部校舎それぞれに分室として設置された閲覧室を含んでいた。神学館の分室は、神学部1階に設けられ、中央に閲覧室があり、壁面にガラス戸付きの書棚をめぐらした、いわゆる「準開架式」の図書室であった。カナダ・メソヂスト教会が創設した東洋英和学校より寄贈された図書約1,500冊が分置され、その中の洋書がとりわけ学生のために有用な参考書として利用された。

図書館に新しい名称が付された年に、W. K. マシューズ（第3部『人物史』を参照）が、J. C. C. ニュートン第3代館長の後を受けて第4代館長に就任する。W. K. マシューズは、以後、1938（昭和13）年までの31年の長きにわたって図書館長を務め、図書館の充実・発展に大きな力となった。第2次世界大戦中の外国人教師の一斉帰国の影響もあって、関西学院の図書館の歴史の中では、これまでのところ、W. K. マシューズが最後の外国籍の館長となった。W. K. マシューズは、館長在任中、図書館を学院の中心にするよう主張し続け、そのための施策を種々試みている。その一例として、1909（明治42）年に山口県立図書館から磯部泰治（第3部『人物史』を参照）を司書として迎えている。この時期に関西学院における司書職制度も始まったとみられる。これ以降、1958（昭和33）年に図書館事務組織が3係制（庶務係・司書係・閲覧係）を採用し、それぞれの係に主任が配置されるまで、司書は、図書館員の中の専門的職員として位置づけられ、図書館の基幹的役割を担うこととなる。W. K. マシューズは、磯部らの協力のもとに、1911（明治44）年には、冊子体の「私立関西学院附属図書館規則及図書分類綱目」を作成している。後述のとおり、「私立関西学院附属図書館規則」は、図書館の利用を中心に具体的なルールを定めた最初の本格的規程であり、「図書分類綱目」は、当時、国内においては斬新な分類法であった。また、1913（大正2）年4月には、W. K. マシューズ館長の下で、中島猶治郎（第3部『人物史』を参照）が新規採用されている。中島は、後に第2代の司書となって、図書館の管理運営体制や対外活動その他において多くの功績を残している。また、中島は、第2次世界大戦後に「関西学院図書館略史」（1954（昭和29）年）の執筆にもあたっている。



図書閲覧室

(3) ブランチ・メモリアル・チャペル―「関西学院附属図書館」の誕生

しかし、関西学院本館にあった図書館施設は、蔵書数や利用者数の増加で手狭になっていく。そこで、1922（大正 11）年 4 月に中央講堂が完成して、1904（明治 37）年からブランチ・メモリアル・チャペルに置かれていた礼拝堂が中央講堂に移設されたのを機に、図書館施設は、本館からチャペルに移される。これが図書館施設の 2 度目の移転となる。ただし、この移転は、図書館施設のうち事務室・整理室を本館に残したままで、図書閲覧室・新聞雑誌閲覧室をチャペルの大講堂に、書庫をその小講堂に移すという変則的なものであった。

図書館機能のこうした分散状態にはやはり不便が多く、その解消のために、別に独立した建物としての図書館（レンガ造り 2 階建てで、その一部は 3 階建て）の建設が南寮（第 1 校舎）跡に計画されていた。その関係で、チャペル内の図書館施設は、「仮の図書館本館」と称されていた。しかし、この図書館建設計画は、キャンパスが 1929（昭和 4）年に上ヶ原に移転したために実現をみることはなかった。キャンパスが上ヶ原に移転するまでの 7 年間だけ、このチャペルが図書館として使用されたのである。そして、チャ

ペルに図書館施設の主要部分が移設されて後に、関西学院の図書館施設のそれまでの呼称であった「私立関西学院附属図書館」は、「関西学院附属図書館」に微修正されている。

チャペルに設けられた閲覧室では、準開架式（蔵書の三分の一は閲覧室のガラス戸付書架に収納）が採用された。この閲覧室は、図書館としては天井が高く清楚であったがやや暗い感じがあった。しかし場所は正門に近く便利で、しかも独立した建物であり、利用者も倍加する状態で、試験期には夜間開館したこともあったようである。

図書館施設の主要部分がチャペルに移転した後、関西学院本館の空いたスペースは、1921（大正 10）年に高等学部商科から改組された高等商業学部の仮の図書館となる。また、同時に高等学部の文科から改組された文学部の校舎に分室（約 1,500 冊の準開架図書室）が設置されている。ただし、その後、1925（大正 14）年には、図書の本館集中を主張した W. K. マシューズ館長の意見が尊重され、文学部や高等商業学部が管理していた図書は図書館のあるチャペルに移管されたが、神学部分室にあった神学部管理の図書はそのまま残されている。

チャペルは、関西学院がキャンパスを上ヶ原に移転後、その売却先であっ



高等学部商科の図書閲覧室

た阪神急行電鉄（現在の阪急電鉄）を経て神戸市の所有となり、第2次世界大戦後は、アメリカ文化センター、そして神戸市立王子図書館等として利用され、奇しくも図書館施設や展示施設として長く活用されている。

2 寄付・寄贈に頼る蔵書の形成

図書館は、この原田の森キャンパス時代、さらには上ヶ原キャンパスへの移転後しばらくの間は、一般図書を購入するための予算を持たず、蔵書の形成は寄付や寄贈によるところが大きかった。この点は、関西学院のこの時期の図書館における特徴のひとつである。当時の図書館には、所蔵する図書資料を管理する機能が専ら期待されるにとどまっていたのである。

図書館の蔵書数をみると、1922（大正11）年4月にブランチ・メモリアル・チャペルに図書館施設の主要部分が移設される前年度には、12,000冊まで増加している。この移設の翌年である1923（大正12）年度に、学院は、実業家の辰馬吉左衛門氏から2万円という高額の図書購入費の寄付を受け、委員会を作って主として社会学・経済学に関わる英・独・仏語の代表的著作3,678冊を収集し、「辰馬文庫」と名づけた。また、この時期には、W. K. マシューズ館長や中島司書のニューヨーク見聞に基づいて、絵画コレクションも開始されている。

そして、上ヶ原キャンパスへの移転直前である1928（昭和3）年の蔵書数をみると、2万余冊に達している。ただし、洋書の方が和漢書よりかなり多い状況であった。こうしたアンバランスな蔵書の実態は、蔵書形成が、初めから洋書中心に進んできたことによる。この状況は、1939（昭和14）年頃まで続き、第2次世界大戦突入により、洋書の入手が不自由になることで結果的に和漢書の方が多くなった。洋書では、神学関係のものが大部分を占め、一般的なものとしては、東洋英和学校から寄贈されたものの中に著名な図書が多かった。この時期の蔵書については、「辰馬文庫」をはじめ、そのかなりの割合は寄付や寄贈に頼っていたといえる。

ただし、寄付・寄贈以外による蔵書形成の方法として、図書の所蔵者による図書館への図書の委託制度が設けられていたことは興味深い。図書の委託

制度は、個人所有の図書を自己所有のままで図書館での利用に供する制度で、図書館が委託を認めた図書について受託証と引き換えに委託がなされた。委託図書は、委託者の承諾がないものについては、貸出が認められなかったが、それ以外の点では、図書館所蔵の図書の取扱と同様とされた。また、委託者による返還請求はいつでも可能であった。どのくらいの数の図書が委託されていたかは不明である。

3 利用の拡大と貸出ルールの整備

1889（明治22）年に原田の森において関西学院が男子だけの私立学校として出発して以降、図書館の利用その他に関するルールを最初に本格的に規程化したのは、「私立関西学院附属図書館規則」である。図書館が関西学院本館に置かれていた「私立関西学院附属図書館」時代の1911（明治44）年に策定されている。それ以前は、例えば、1904（明治37）年3月発行の「私立関西学院一覧」の中に「圖書」と題して、「一 本學院圖書室所藏ノ圖書新聞紙雜誌類ハ教師及ヒ學生ノ縦覽借用ニ供ス 一 高等科教科用書ハ願ニヨリ見料ヲ以テ學生ニ貸付スルコトアルヘシ」との2カ条の規定が置かれるにとどまっていた。これらの規定からは、この当時、すでに学生に対する図書等の貸出を行い、一部の図書の貸出については有料で実施していたことがわかる程度である。

これに対して「私立関西学院附属図書館規則」は、31カ条からなり、総則・閲覧心得・図書携出・新聞雑誌・図書寄贈・図書委託の各項目を置き、図書の利用等に関するルールを網羅的に定めていた。この規則によれば、図書館は、神学部と高等学部閲覧室を置き、神学部閲覧室には、哲学・宗教に関する図書、高等学部閲覧室には商業・経済・文学に関する図書を備えるものとされていた。また、本館および神学部閲覧室の図書は貸出が許されていたが、高等学部閲覧室の図書は数が少なく当分の間は貸出しなかったことまで定められている。さらに、当時の図書の貸出は、「図書携出借覧券」に必要な事項を記入して行うことが定められていたが、貸出の際には印鑑まで必要とされていた。そして、館内閲覧が可能な図書冊数が、和装本10冊か、

洋装本3冊、または、和装本・洋装本併せて6冊までとされ、貸出可能な図書冊数として、和装本5冊か、洋装本2冊、または、和装本・洋装本併せて3冊までで貸出期間2週間とされていた。

同規則は、その後、関西学院本館からランチ・メモリアル・チャペルに図書館の主要部分が移転し、図書館の名称が変更されたことに合わせて、「関西学院附属図書館規則」へと名称変更がなされる。新規則では、館内閲覧や貸出が認められる冊数等について、旧規則をほぼ変更せず引き継がれている。しかし、他方で、1924（大正13）年以降、学生から保証金を預かり、借覧者証を交付する図書貸出保証金制度（保証金2円を総務部会計係に前納）が新たに導入されている。加えて、貸出図書の返却期限を超過すると、1冊あたり超過日数1日につき2銭の制裁金が新たに課されることとされた。その当時の蔵書管理の厳格化が、これら利用ルールの変更から明らかとなる。

また、図書の利用については、1895（明治28）年に巡回文庫制度が設けられたことは述べた。伝道活動を行う日本メソヂスト教会年会員や、1913（大正2）年に神学部内に設置された通信教授科生を対象に貸出がなされている。巡回文庫の利用については、1897（明治30）年に「文庫書籍貸与規則」、その後「巡回文庫図書貸出規則」が定められていた。これによれば、巡回文庫専用に作成された目録に掲載された図書について、日本メソヂスト教会年会員には、1冊10銭の料金により借用を認め、通信教授科の学生には、同時に2冊まで無料で貸し出されていた。貸出は郵送で行い、送還日数を除き1ヵ月の貸出期間が設定されていた。送料の負担は、送付は図書館、返送は利用者となっている。

図書の利用の増加に伴って、1914（大正3）年には、夏季休暇中に初めての在庫調査が実施され、多数の図書の紛失が判明している。そのため、教員への長期貸出図書の回収もなされた。他方では、神学部生は全員給付生であったことから、これらに対する教科書貸与を開始している。あるいは、授業の参考資料として利用されるようにと、5種類の新聞の経済記事の切抜も開始したりした。また、1915（大正4）年度より、最高学年の学生の入庫が許可されている。さらに、1926（大正15）年度までは、開館時間は通常、



1928 年頃の図書館（ブランチ・メモリアル・チャペル）

午前 8 時から午後 4 時であったが、1926（大正 15）年度の年度末試験期だけは、午後 9 時まで開館することとされた。図書等の利用への便宜付与や配慮の努力がみえる。

図書の利用状況については、当時の理事会記録（Minutes of the Board of Directors of the Kwansei Gakuin）に、関西学院本館 3 階からブランチ・メモリアル・チャペルに図書館の主要部分が移転した 1922（大正 11）年度には、開館日数 257 日、館内閲覧冊数 2,758 冊、館外貸出冊数 3,468 冊との記録が残っている。その後、上ヶ原キャンパスへの移転直前の 1928（昭和 3）年度においても、上ヶ原への移転準備との関係で開館日数は 222 日と多くはないが、館内閲覧冊数が 14,500 冊を超え、先にみた図書貸出保証金制度や制裁金制度のもととはいえ、館外貸出冊数は 5,000 冊に達し、利用が大幅に増加していることが分かる。

4 図書館刊行物と図書整理システムの整備

原田の森キャンパス時代において、図書館が発行する刊行物といえるものは、図書目録である。「私立関西学院附属図書館図書目録」や「私立関西学院蔵書目録」を挙げることができる。さらに、巡回文庫用に「巡回文庫図書

目録一覧」が作成されている。いずれも、当初は筆書と英文タイプによるものであった。

また、図書原簿の作成が始まったのは、1908（明治41）年に図書館の名称が「関西学院書籍館」から「私立関西学院附属図書館」に名称変更がなされた翌年の1909（明治42）年9月からのことである。この頃の蔵書数は、すでに約5,000冊に達していたようであるが、それまでの間の登録や整理方法については明らかでない。図書原簿台帳の作成が始まって第1番目に登録された図書は、Ladd, G. T. 著“Philosophy of conduct”（1904年刊）であった。現在この図書は貴重図書として保存されている。



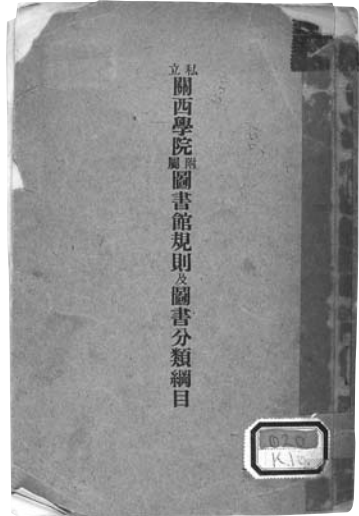
「巡回文庫図書目録一覧
大正5年12月印行」

原簿台帳

(1) カード目録

カード目録については、1911（明治44）年に作成された「私立関西学院附属図書館規則及図書分類綱目」の末尾に「目録の種類」として、和漢書カード書名目録（五十音順配列）、和漢書カード分類目録（分類綱目順配列）、洋書カード著者名目録（アルファベット順配列）、洋書カード書名目録（アルファベット順配列）、洋書カード分類目録（分類綱目順配列）が挙げられている。この時期すでに5種のカード目録が作成されていたことがわかる。

やや遅れて、1914（大正3）年には件名カードの作成をスタートしている。さらに、1925（大正14）年には、著者名、書名、件名の3目録を合体して和洋別の辞書体目録を編成し、以後長期にわたって利用者に提供された。



「私立関西学院附属図書館規則及図書分類綱目」

(2) 分類番号と図書記号

1908（明治41）年に第4代館長に就任した W. K. マッシュースが、司書職として山口県立図書館から磯部泰治を迎えたことは記した。W. K. マッシュース館長は、磯部と共に、図書館の新組織を樹立するとともに、新しい図書分類法と図書記号を採用した。新しい分類法は、1876（明治9）年に発表されたデューイ十進分類法（Dewey Decimal Classification 略称 DDC）の簡略版をもとに、1909（明治42）年に、日本語・日本文学・商業などの箇所を改変した「図書分類綱目」として定められた。国内ではまだ帝国図書館や東京帝国大学の八門分類法が主流であった当時であって、この分類法の採用は斬新なものであった。また、図書記号については、磯部が Cutter・サンボーン著者記号表（Cutter-Sanborn Author-Marks 3 桁表）をもとに作成し

た2桁表を使用した著者記号法が採用された。

なお、新しい分類法として採用されたデューイ十進分類法（DDC）であるが、その初版は M. デューイ（Melvil Dewey）により 1876（明治 9）年に出版されている。その後、版が重ねられ、時代の変遷とともに内容の増補改訂が行われてきた。その充実ぶりは、初版がわずか 42 頁（序説、本表、索引）程度であったものが、2003（平成 15）年の第 22 版では 4 分冊（助記表、本表 2 分冊、索引）、合計 3,983 頁にもおよぶ膨大なものになっていることから分かる。当初の改訂では、各項目の移動や変更がかなり行われたようである。しかし、DDC の普及につれて、そうした改訂が、DDC を採用している図書館に与える影響が大きいため、第 3 版から第 14 版までは分類項目の変更はしない「保守の原則」がとられている。しかし他方で、内容を時代に合わせるようにとの要望も強く、1951（昭和 26）年には第 15 版が大幅な内容の改訂を施されて刊行されている。

本学図書館分類表の骨格となっている第 16 版は、M. デューイの息子の G. デューイ（Godfrey Dewey）によって、1958（昭和 33）年に 2 分冊（本表、索引）で刊行されたものである。内容的には第 15 版の大幅改訂によって混乱を引き起こしたことへの反省から、より第 14 版に近い形で改訂されている。

5 館員育成の開始

原田の森キャンパス時代の館員育成の詳細については、十分な記録が残されていない。ただし、1913（大正 2）年 4 月に専任職員に採用された中島猶治郎が、W. K. マシユース館長の推挙で、1921（大正 10）年 6 月から 1923（大正 12）年 9 月までの約 2 年間にわたって、ニューヨーク図書館学校等に公費留学し、図書館の管理運営について学んだことが記録に残っている。第 2 次世界大戦前の職員留学は珍しく、職員が図書館学の勉強のために 2 年間も米国に留学した例は、わが国では中島が最初であったと言われている。

6 対外業務－図書館関連団体への積極参加

図書館は、学外の図書館関連団体の発足・運営に、早くから積極的に関わってきた。学外の図書館関連団体との関わりは、W. K. マシューズ館長時代の中島猶治郎に始まる。

(1) 全国高等諸学校図書館協議会

中島は、1924（大正 13）年に設立された全国専門高等学校図書館協議会（後の全国高等諸学校図書館協議会）に、その設立時より参加し、協議会の推進力となっていた。1932（昭和 7）年 10 月には、大学としての設立認可を受けて、大学予科を設置したばかりの関西学院において、中島の関係で全国高等諸学校図書館協議会の第 9 回大会が開かれている。全国高等諸学校図書館協議会では、1942（昭和 17）年 3 月に活動を停止するまでの間、全 16 回の大会が開催されたが、中島は、第 1 回から第 14 回（1938（昭和 13）年 7 月）までの大会に全て出席している。1927（昭和 2）年には、中島が編纂



『会報』全国高等諸学校図書館協議会 第 4 号、昭和 3 年 5 月

した目録編成法、翌年には分類表案が協議会会報の付録として配布されている。1938（昭和13）年に中島が満州に出国したのちの第15回（1939（昭和14）年）、第16回（1941（昭和16）年）の大会には、入交光三が出席している。

（2）青年図書館員連盟

また、中島は、青年図書館員連盟の活動にも、初期から加わり（会員番号8）、図書館業務の啓蒙活動を行っている。青年図書館員連盟は、1927（昭和2）年12月に図書館用品製造・販売の間宮商店の間宮不二雄氏が中心となって大阪で結成した組織である。1944（昭和19）年7月16日に解散するまで全16巻におよぶ機関誌「図書館研究」を発行している。中島は、この「図書館研究」にも、「辞書体目録と図書分類に就いて」、「図書分類法概論」、「図書館は果たして教育機関なりや」等の論文を寄稿している。

第2部

上ヶ原キャンパス時代

1929（昭和4）年～2012（平成24）年



I 戦前・戦中の図書館

1929(昭和4)年～1945(昭和20)年

1 図書館施設の地道な整備と拡充

第2次世界大戦前のわが国における図書館の地位はまだまだ低く、図書館の存在がようやく認められるようになったのは、マッカーサー進駐後で、1950(昭和25)年の図書館法公布以降であると評されている。それでも、関西学院は、大学昇格を念頭に、原田の森から上ヶ原へとキャンパスを移転するのを機に、図書館施設を独立した建物・施設として準備し、大学図書館としてふさわしい施設・設備体制を整えていく。しかし、そうした努力は、その後、第2次世界大戦の開始によって中断され、戦時体制への協力を余儀なくされる。

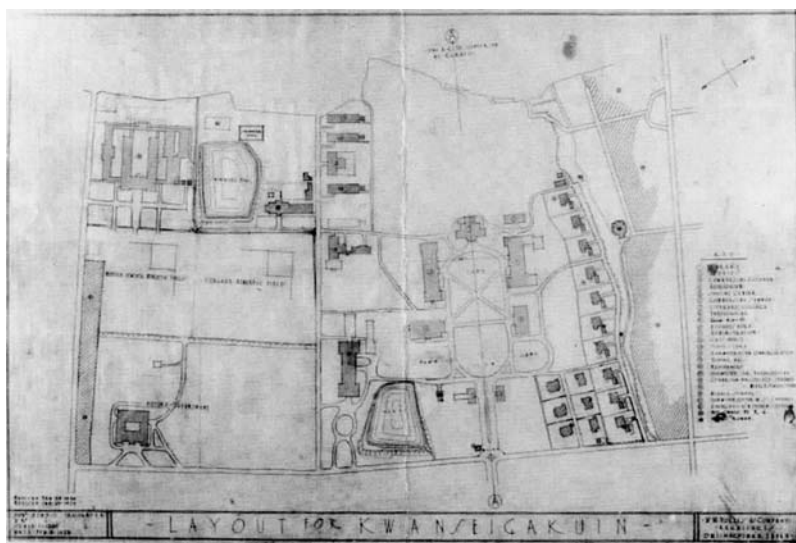
(1) 独立した図書館施設の新設と関西学院図書館

1929(昭和4)年4月～1932(昭和7)年3月

関西学院は、専門学校から大学への昇格の前提として、大学にふさわしい広さのキャンパス用地を確保するべく、原田の森から上ヶ原へのキャンパス移転を実行に移す。創立40周年にあたる1929(昭和4)年の春に施設は未完ながら移転を完了する。図書館の移転にあたっては、館長を委員長とする委員会が設置され、慎重に移転準備が進められた。それでも、実際の移転には相当の苦労があったようである。図書館員は、予定どおりに同年3月31日までに図書等を運び終わるための移転準備に忙しく、また、図書の運搬にあたっては、現在の阪急甲東園駅からの坂道にさしかかるや、図書が余りにも重いのでトラックが立ち往生して困り果て、第3カーブ途中で少数を荷おろしして、ようやく運行できたといったこともあった。

1930（昭和5）年4月に図書館施設が完成するが、この時に関西学院において初めて、図書館施設が独立した専用の建物として建設・設置された。図書館施設も含めて上ヶ原校舎は、W. M. ヴォーリズによって基本設計が行われている。W. M. ヴォーリズは、その設計の際にスパニッシュ・ミッション・スタイルを校舎の統一基本デザインとして採用した。スパニッシュ・ミッション・スタイルは、アメリカ・カリフォルニア州の太平洋沿岸の El Camino（王の道）と呼ばれる要路にそって点在する、18世紀から行われたカトリック伝道の拠点となったミッション（修道院）の建築様式にちなむもので、クリーム色外壁とスペイン風赤瓦を特色としている。宣教師であった W. M. ヴォーリズは、建築家として、日本において数々の建造物の設計を手がけたことで知られる。また、新施設の建設を機に、図書館は「関西学院附属図書館」から「関西学院図書館」へと改称された。

専用の建物・施設は、建坪が約302坪、鉄筋コンクリート2階建て、書庫のみ3層（移転時は未完成）で、一般閲覧室の奥に書庫のある構造を持つT字型図書館であった。また、書架は積層式鋼鉄書架であったが、書庫に



W. M. ヴォーリズによるキャンパス基本配置設計図 1928 年

は原田の森キャンパス時代の本造書架も活用されていた。図書館建物は、竹中工務店竹中藤右衛門氏から贈られたもので、キャンパスの中央に位置し、時計台を備えていた。その時計台は、その後、長く現在に至るまで関西学院のシンボルとなっている。ただし、財政上の理由から、図書館施設の完成と同時に、この時計台に時計を設置することができなかった。図書館時計台にようやく大時計が設置されるのは、大学昇格の翌年、1933（昭和8）年3月のことである。学生会の寄付をもとにしたものであった。この頃は、時計台の西側にはため池があり、建物がなかったことから、大時計は西面には設置



池に映る図書館

されず、3面での設置であった。

新施設には、図書閲覧室、新聞雑誌閲覧室の他に、参考図書室・絵画室も設けられていた。また、書庫が手狭になる度に補修により書庫の拡充がなされている。例えば、1932（昭和7）年4月には、キャンパス移転時には未完成であった3階書架を、原田の森キャンパス時代の本造書架を利用して整備し、15,000冊の収容増を可能にしている。また、1940（昭和15）年頃には、書庫の狭隘化への応急措置として、竹中工務店の手で3層部分より屋上を通して楼上に達する通路が竣工された。

なお、施設の建物内には産業研究所が、創設時（1934（昭和9）年4月）から併設され、1940（昭和15）年に商経学部本館（現在の経済学部棟）に移動するまで南翼の2室を使用していた。

（2）分散した図書館機能と大学図書館の誕生

関西学院は、上ヶ原移転後の1932（昭和7）年3月に、大学令による大学としての設立認可を受け、これに合わせて大学予科を開設した。続いて、1934（昭和9）年には、法文学部と商経学部が開設される。そして、大学の設置に合わせるように、図書館規則その他において図書館の名称として、「関西学院大学図書館」の使用が始まる。

改めて、それまでの図書館の名称の変遷について振り返ると、原田の森キャンパスに開設当初の図書館は、「書籍^{しょうじやくかん}館」という図書館一般に使用される呼称で呼ばれるにとどまったが、明治末期以降、「私立関西学院附属図書館」、「関西学院附属図書館」といった関西学院固有の名称が付された。その後、1929（昭和4）年に学院キャンパスが原田の森から上ヶ原に移転し、1930（昭和5）年に図書館施設が完成したのを機に、「関西学院附属図書館」から「関西学院図書館」に名称がさらに改められている。これら一連の名称は、関西学院を構成する学部等に分散していた図書施設すべてを包括する名称として使用されていたといえる。そうした中で、関西学院は、1932（昭和7）年3月に大学設置の認可を受ける。この時、関西学院内で分散する複数の図書施設全体を指す「関西学院図書館」のひとつに、「関西学院大学図書館」が加わったのである。そのため、その後、大学図書館の記録では、「関西学

院図書館」と「関西学院大学図書館」という2つの名称が混在しつつ使用されていく。

例えば、図書館の年次報告をみると、大学昇格後の7、8年の間は、年次報告の作成主体として「関西学院大学図書館」の名称が使用されている。しかし、1941（昭和16）年度から1957（昭和32）年度の年次報告では、この作成主体が、再び「関西学院図書館」の名称に復している。そして、1958（昭和33）年度以降は、年次報告等において「関西学院大学図書館」の名称が使用されて今日に至っている。この変更の前年度である1957（昭和32）年度の年次報告の表紙には「昭和33年4月より『大学図書館』の名称をとることになった。」と鉛筆書きのメモがわざわざ残されている。こうした名称使用の変遷ないし混乱は、大学図書館の設立前から図書館組織が学部等に分散していたことが大きな要因となっていたといえる。

大学設置の認可からしばらくの間、「関西学院大学図書館」は、後述のとおり、図書購入予算すら持たない組織として、「関西学院図書館」の単なる1管理単位に位置づけられていた。図書購入予算は、大学予科や学部等の各部局（管理単位）に帰属し、大学図書館には独自の予算による図書の購入ができない時期があったのである。しかし、その後、大学図書館は、図書購入予算を持ち、関西学院における図書館組織の中核としての図書館機能あるいは財政基盤を確保していく。それでも、大学図書館に登録されない図書が学部等の各部局で購入、管理され続けることとなっていた。大学図書館とその他の図書管理単位に分散した図書館組織は、長く関西学院の図書館組織の特徴のひとつとして維持されていく。図書館組織の分散状況は、大学図書館設置前から存在し、W. K. マシユース館長によって、解消されるべき重要課題として挙げられていた。これを受けて、分室制が廃止されて図書館に統合されてもいる。しかしその後も、完全な解決の難しい問題として残されていた。

こうした図書館機能をめぐる問題の存在を象徴したのが、「関西学院図書館」と「関西学院大学図書館」の名称の使い分けであったといえよう。図書館機能の分散が、大学図書館への図書集中や学部等が管理する未登録図書の図書館登録によって徐々に解消の方向に向かうのは、1997（平成9）年の新大学図書館の開館以降になるのである。

(3) 第2次世界大戦と図書館の苦しい運営

関西学院の図書館の歴史を語る場合には、第2次世界大戦という特殊な状況下での図書館の状況にも言及しておく必要がある。

第2次世界大戦突入後の1944（昭和19）年には、関西学院の校舎の多くが海軍と川西航空機株式会社に徴用されて軍需品の生産工場と化す。図書館正面入口の上段に掲げられていたエンブレムとスクール・モットーのレリーフも破壊された。また、この頃、神学部も廃止され、高等商業学校の校舎に中学から大学までが雑居する状況となった。そのため、教職員の大幅削減も余儀なくされていく。

図書館施設についてもその一部を軍に供出し、学生の繰り上げ卒業、勤労働員のほか、図書館員の徴用も行われ、一時は図書館員が3名に半減した時期もあって、図書館の機能は次第に失われていく。

学生の徴用としての勤労働員は、長期動員として1943（昭和18）年末に本格化する。以降、学生は近隣工場や工事現場に動員される。また、1945（昭和20）年4月から翌年3月までを予定に授業中断の閣議決定がなされて



1943年頃の閲覧室



破壊されたエンブレム

いる。これを受けて、関西学院では、指導上、連絡上の便宜をはかるために、中学部を除く全学生が川西航空機宝塚工場に勤労働員された。その間、空襲によって工場動員学院生3名が死亡する等の事態が生じた。

そうした状況の中で図書の利用に関して興味深い対応がなされている。勤労働員された学生を対象に、動員先での図書の貸出・閲覧制度が設けられていたのである。この制度について定めた「移動図書館貸出規程」が、終戦間近の1945（昭和20）年6月4日の日付で残っている。勤労働員の本格化に対応して、遅くともこの時期

までには、こうした制度が導入されていたことを示している。規程によると、その第1号で制度全体の総則的規定が定められ、第2号以降を制度運用細則とし、「現場特別貸出規則」（第2号）、「現場図書閲覧規則」（第3号）、「現場寮内閲覧規則」（第4号）の3規則が定められている。これらによれば、動員学生に対する図書の貸出・閲覧の方法として、動員先での図書目録利用による図書の貸出、動員先図書室保管図書の閲覧、動員先の寮内保管図書の閲覧の3つの制度が設けられていたようである。戦時下にあっても、学生による図書の利用希望に可能な限り対応しようとする工夫であった。

同規程によれば、図書目録による現場特別貸出の場合、勤労働員先に図書館員が図書を持参し、派遣教授を通じて学生に図書を引き渡す手順となっていた。また、動員先図書室保管図書については、当日限りの貸出とされていた。そして、動員先の寮内保管図書は、派遣教授の管理責任のもとで利用が許されている。勤労働員学生のために開設した移動文庫「静修文庫」の500

冊が空襲に遭って焼失したことが記録に残っているが、動員先図書室保管図書か寮内保管図書のいずれかであったとみられる。

第2次世界大戦の終焉が近づくにつれて空襲が激化し、図書館では、これに対応するために、1945（昭和20）年5月から7月にかけて、重要図書9,000冊を、名塩国民学校、川西町花屋敷奥小路民蔵邸、武庫村友行国光宣揚会道場に分散疎開させたりしている。

2 図書費の捻出

大学昇格が認可された1932（昭和7）年に、図書館と学部等の関係部局との意見調整の組織として、Library Advisory Committee（図書館委員会）が設けられ、その第1回会議が開催されている。その記録によれば、図書費は、神学部図書費、文学部図書費、高商部図書費、予科図書費、中学部図書費に区分されている。これによると、当時の図書館は、図書館専用の図書費を持っておらず、各学部等に計上された図書、雑誌に関する費用をまとめた図書費によって運営されていたことが分かる。

既述のとおり、1924（大正13）年には、新入生から図書貸出保証金2円を預かり、卒業時に返還請求権放棄の形で寄付された金銭をもって和書購入費として使用していた。保証金制度の開始当初は185円の寄付があった。しかし、1932（昭和7）年頃には、不景気のために寄付を行う学生がほとんどいなくなり、保証金の99%が学生に返還されるようになった。そこで、1936（昭和11）年には、新制度として図書館費（Library Fee）徴収制度が理事会で承認され、同年から実施されている。その内容は、大学、専門部および高商の学生と生徒については1円、予科生については50銭を每学期納付させるというものであった（ただし卒業年度の後期は納付しなくてもよいとされていた）。この制度は、返還を前提とした図書貸出保証金制度とは異なり、返還を予定せず、徴収した金額はすべて図書の購入に充てることができた。大学図書館は、この制度によってようやく独自の予算を持つことができたのである。

この徴収金は、図書館の収入金とされて、図書館の予算に含めて計上され

た。また、徴収金は、図書購入費としてだけでなく、教本補充費および製本費としての General Fund としても繰り越されていたようである。図書館の予算は、1936（昭和 11）年度が 3,183.50 円であり、そのうち徴収金の額は、941.00 円であった。1937（昭和 12）年度の図書館の予算は 3,246.50 円であり、1938（昭和 13）年度が 3,200.00 円となっている。また、図書館の予算は年度を繰り越しての使用が可能であった。

そして、例えば、1941（昭和 16）年開催の第 26 回図書館評議員会記録によると、次年度の図書館の予算として 4,000.00 円が計上され、この予算額が一般参考図書費（Books for general use）、邦文新刊図書費（Japanese new books for students）、古本購入費（Secondhand books）、特別図書購入費（Special books allowance）、基本図書購入費（Standard books）に配分されている。そして、この図書館費の 4,000.00 円に、学部等予算として計上された図書、雑誌に関する費用として合計 13,575.00 円を加えて総額 17,575.00 円となる旨の記述が残されている。学部等の図書予算に比して、図書館専用の予算がまだまだ少額にとどまっていたことが分かる。

第 2 次世界大戦が近づくにつれて新刊図書等が値上がりし、図書予算を圧迫している。1942（昭和 17）年 11 月の図書館評議員会記録では、新刊図書の単価が 5 割値上がりして新刊図書購入費が予算を大幅に超過したために、教授割当図書費の一部を削って不足を補うことが決定されている。

また、学生からの図書館費徴収制度についても、終戦後の 1947（昭和 22）年度第 1 回図書館評議員会記録に、図書価格の高騰に鑑み、一人につき 20 円見当を適当とする旨を理事会等に委員会名で進言することが記載されている。図書館専用の図書費が、学生の納める図書館費に大きく依存していたことが分かる。その後、いつまでこの徴収制度が存続したのかは不明である。

3 図書館組織と図書館運営

図書館組織に関して現存する資料で最も古い年代の記述が見えるのは、上ヶ原にキャンパスが移転した 1929（昭和 4）年度の「関西学院一覧」である。そこには総務部の下に庶務課、会計課と並んで「図書課」が配置されて

いる。また、この一覧には、「図書課長マシウス氏」との記述がある。この「マシウス」は、当時の W. K. マシユース館長と同一人物と考えられ、当時の図書館長は、関西学院の職制の中では課長待遇に格付けられていたことがわかる。

また、当時の図書館組織や図書館運営の状況、あるいはその時代背景等を垣間見ることができる記録として、1938（昭和13）年の1月から12月までの1年間の業務日誌が現存している。この日誌は当時の中島猶治郎司書の提案により、中島、入交、曾木、梶田の4名の輪番で書かれている。この日誌によれば、業務を開始した1月7日には、館員一同の氏名が次のように記載されている。「館長 K. マシウス、司書 中島猶治郎、書記 入交光三、曾木弥太郎、出納主任 梶田弥一郎、出納手 塩田完、西次庄太郎、佐々木勇以上、小使 森傳三出征の為当分臨時としての田中久吉」とあり、図書館員が、館長他、司書1名、書記3名、出納手3名、小使1名で構成され、総勢9名であったことがわかる。また、日誌には、出納手について、3月の卒業によって塩田が、また病気のため西次がそれぞれ退職し、その後任として瓦木小学校から2名が見習いとして3月28日から出勤したことが記されている。そして、この2名については夜間中学校に入学することとなり、「給仕」として採用されていたこと等、細かな人事上の事柄も記録されている。さらに、この業務日誌の12月6日の箇所には、館長とベーツ院長との会談により中島司書を満洲建国大学図書館に司書として赴任させることが正式に決定した旨の記述がある。これを受けて、日誌の最後は、12月15日付で、入交による「中島氏と事務引き続をなす」という言葉で締めくくられている。

また、この1938（昭和13）年は、同年3月末をもって、館長として31年間在職した W. K. マシユース館長から山本館長に館長職が引き継がれた年でもある。日誌によれば、2人の館長の行動についても記録されており、W. K. マシユース館長は職員と同じように、毎日のように図書館に出勤していたらしい。他方、山本館長は、必要な時のみ、1週間に1回程度、図書館に出勤している。館長の勤務状況の違いにまで言及されている。

なお、W. K. マシユース館長については『人物史』の頁に詳しいが、山本館長については、東大法科卒の財界人で、住友系の倉庫・港湾関係の会社経

営に携わるかたわら、学院で経済倫理の講義を担当し、毎夏、浜寺に全図書館員を招き、合宿修養会を主催していた等の人物像が残されている。山本館長は、館長就任後、法学関係図書が少数であることを憂慮し、その分野の図書購入に重点をおく方針を打ち出す等している。山本館長の下で出発した図書館員の陣容は、1939（昭和 14）年度の「関西学院一覧」によれば、司書 武藤誠（大学予科教授との兼任）、書記 入交光三、曾木弥太郎（応召中）、梶田弥一郎、堀家邦好となっている。梶田は、図書館勤続 20 有余年で、第 2 次世界大戦末期に退職している。

第 2 次世界大戦中の図書館員の陣容で記録にとどめておくべきは、当時、日本近代図書館史の研究者として著名であった竹林熊彦の司書採用であろう。竹林は、1943（昭和 18）年 3 月に定年退職した山本館長の後を受けて東晋太郎商経学部教授が第 6 代館長に就任したのを機に、武藤誠教授第 5 代司書兼務の後任として第 6 代の司書に就任した。竹林は、同志社専門学校文科を卒業後、日布時事の記者としてハワイに在住したが、その後、1916（大正 5）年から京都帝国大学附属図書館事務嘱託として勤務し、1925（大正 14）年 6 月からは九州帝国大学司書官、さらに 1939（昭和 14）年 10 月から京都帝国大学図書館司書官を歴任した。1942（昭和 17）年 8 月には、京都帝国大学図書館を退職し、関西学院図書館司書に就任するが、この移籍については、竹林に本学から要請がなされたことによると考えられる。しかし、竹林は、司書就任のわずか 1 年後の 1944（昭和 19）年 4 月には、中学部専任として転出し、その後は、図書館学講師として同志社大学、天理大学等で講義を担当している。

ところで、図書館の運営には、学部等の関連部局との意見調整が欠かせない。1932（昭和 7）年に関西学院は大学に昇格したが、その年に、新職制のもとでの関連部局との意見調整組織として、正式には英文表記による Library Advisory Committee が設置されている。その第 1 回委員会が同年の 11 月 11 日に開催されている。この委員会の記録は、1956（昭和 31）年度第 4 回図書館委員会記録まで書かれている。第 1 回委員会記録には、「大学職員による図書館委員会設置さる。委員氏名 神学部 Dr. Outerbridge、文学部 大藤豊教授、高商部 東晋太郎教授、予科 児玉国之進教授、中学部

大河原憲教諭、図書館 Matthews 館長、中島猶治郎司書。当日は初会の事として全員出席」とあり、W. K. マシユース館長が議長に、書記には中島が選出されている。この委員会の職責として、図書費に係る事項（配分・予算要求・使途・特別会計）、選書（邦語図書・基本図書・学生希望図書・新聞・雑誌・私蔵書購入）、利用に関する事項、図書館規則改正が挙げられている。委員会は年3回程度開催され、図書館に関わる事項は、この委員会で全て決定された。また、委員会記録によれば、1937（昭和12）年2月には、図書館委員会の下に、邦語図書小委員会（後に、学生図書購入委員会と名称変更）が設置され、学部等からの購入希望を調整して購入図書を決定している。記録には、図書購入の見積依頼先として丸善等の周知の書店名もみえる。

なお、記録で使用されている委員会の名称（和名）は頻繁に変遷している。当初は、先に引用した記録の中にあるように、「図書館委員会」であるが、第17回（1938（昭和13）.1.28）から第34回（1943（昭和18）.10.22）までは「図書館評議員会」、1944（昭和19）年度から1945（昭和20）年度第1回までは「図書館委員会」、第2回からは、再び「図書館評議員会」が用いられ、さらに1951（昭和26）年度の第2回委員会から、また「図書館委員会」と記載されている。こうした名称の変遷の事情は必ずしも明らかではない。この「図書館委員会」は、1961（昭和36）年4月に、「図書館運営委員会」に改称されて現在に至っている。

4 蔵書・資料の充実と貴重書の収集

上ヶ原にキャンパスが移転されたのちの1929（昭和4）年度の蔵書数は、22,350冊であった。1922（大正11）年度の12,092冊と比較すると、着実に蔵書数が増加している。満州事変勃発後、日本国内における外国人の活動規制が強まり、1940（昭和15）年の秋に、C. J. L ベーツ第4代院長が辞任し、外国人教師は全員帰国となった。その際、C. J. L ベーツ院長、W. K. マシユース教授、L. S. オールブライト教授が蔵書を寄贈している。アメリカ・南メソヂスト監督教会からも、J. C. C ニュートン博士、T. H. ヘーデン博士を記念した図書購入費2,813円の寄付があった。図書館の蔵書が、1941

(昭和 16) 年度には 5 万冊を超え、終戦直後の 1947 (昭和 22) 年度には 6 万冊を記録しているのは、こうした事情によるものといえよう。

原田の森キャンパス時代にすでに設けられていた委託図書館の制度も、継続して活用されている。高等商業学部長時代の神崎驥一教授から国際連盟関連の図書館の委託を受けたり、村上博輔文学部教授蔵書中の東洋哲学や仏教等に関する図書館が委託図書館となったりしている。また、時節柄、理工科関係の図書館の充実がはかられてもいる。

1941 (昭和 16) 年の太平洋戦争開戦後には、図書購入が困難となっていく。そうした状況の中でも、翌 1942 (昭和 17) 年の 3 月には、寿岳文章文学部教授の仲介で河上肇博士よりアダム・スミス『国富論』初版本 (1776 年刊) のほか 4 点の貴重書を購入している。同年 2 月 23 日開催の第 29 回図書館評議員会および 6 月 18 日の第 30 回の記録によれば、寿岳教授の斡旋により、代金 700 円で入手見込みとあり、さらに、商経学部および高商の教授割当費より関係教授の了解を得て支払を乞い、図書館において残余を負担して調達することが提案され、購入については異議なく可決し、代金分担の方法についてはさらに協議することを決定したことが記録されている。そして、費用分担内容は、商経学部 150 円、高等商業学校 150 円、予科 30 円、消費組合寄付金 170 円、森本文庫寄付金 200 円となっている。

ところで、図書館の蔵書・資料の充実に関しては、既述のとおり、図書館に登録されず、各学部等に分散する図書の存在をどうするかが長年の懸案としてあった。学部等で未登録の図書が購入、管理されていることは、図書館機能の分散を意味した。この点については、すでに、昭和の初め頃から問題となっていたようである。W. K. マシューズ館長が、学部等への蔵書の分散の解消と大学図書館への図書集中の必要性を長年にわたって主張し続けていたことも、先に触れたところである。W. K. マシューズ館長から山本館長に館長職が引き継がれた 1938 (昭和 13) 年頃には、「図書館中央集権と研究室本位に関して何れをとるや分岐点にある事にて大いに事務遂行上板挟て困る」(5 月 25 日図書館評議員会での中島重法文学部教授の発言) といった状況があった。1939 (昭和 14) 年には、「図書館の管理に属せざる図書と謂えども、学院内に存する図書は出来得る限り図書館に於いて目録により一覧し

得る様にすることは各研究室の発展に伴い図書分置の傾向ある今日最も必要な処置を以て院長より各部長へ示達を願い、各部の協力のもとに可及的速やかに実行することを決議す」との記録もある。この時期においても、大学図書館への図書の登録および図書の集中が重要な懸案事項として検討されていたことが分かる。

5 利用拡大に向けた工夫

図書館の利用や運営に関しては、上ヶ原キャンパス移転後の1930（昭和5）年3月までは、原田の森キャンパス時代の「関西学院附属図書館規則」が引き続き適用されていた。その後は、図書館の名称変更に伴って、「関西学院図書館規則」が新たに制定され、1930（昭和5）年4月以降適用となっていた。その内容は、従前の図書館規則の内容を利用者別に再構成して利用者に分かりやすいように改正されている。それでも、図書館の管理運営を行う全般的で網羅的な規程としての意義は失われることなく、そのまま踏襲されている。

1930（昭和5）年4月の日付のある同規則をみると、「第1章 総則」、「第2章 閲覧規則」、「第3章 図書貸出規則（学生貸出規則、教授貸出規則、卒業生及関係者貸出規則から成る）」の3章立ての体裁がとられている。例えば、第2章の「閲覧規則」をみると、館内閲覧が可能な冊数として、利用者共通で、和装本10冊か、洋装本2冊（和装本・洋装本混合の場合は和装本5冊、洋装本1冊）まで、雑誌は1種3冊までとされている。また、貸出冊数については、学生は図書ないし製本雑誌2冊までで1週間と定められている。従前の図書館規則に比べて、貸出冊数や貸出期間がかなり削られている。館内閲覧を主体とする図書の利用がより徹底されていることが分かる。また、貸出禁止の図書として、辞書類等とともに「教授上の必要による指定図書」が挙げられており、この頃すでに、指定図書制度が実施されていることも分かる。また、1935（昭和10）年の同規則では、予約（保留）制度が開始されている。希望図書が貸し出されている場合、希望者は貸出を予約でき、図書の返却があれば、予約者に返却済通知後2日間は、他の者への

貸出を保留しておく制度である。

なお、同規則については、図書館の利用者配布用とみられるリーフレットが残っている。リーフレットには、現在でも十分に通用する、次のような標語と一緒に印刷されている。「一 図書館は知識の泉である。一 読まずんば死せよ。一 最大の国も一個の図書館より小なり。」

図書の利用状況についてみると、既述のとおり、1924（大正 13）年に開始された図書貸出保証金制度や制裁金制度が 1936（昭和 11）年には廃止され、この時期、これらに代わって図書館費徴収制度が採用されている。しかしながら、図書の利用は順調に伸びていった。

また、1930（昭和 5）年 5 月には、学生のための読書指導が、専門部の教授によって午後 2 時から 4 時に実施された。図書利用の促進の試みであったが、教授によって利用者数にバラツキがあり、数ヶ月で中止されている。

さらに、1939（昭和 14）年には、大閲覧室の一部に辞書類約 300 冊の「自由閲覧所」を設けた。この「自由閲覧所」の開設に開架制の起源をみることができる。また、この「自由」は、社会的責任性のある「自由」を持って利用して欲しいという当時の図書館員たちの思いが込められて称せられた。

こうして、図書利用の拡大に向けた様々な工夫は、失敗を重ねながらも、着実に成果をあげていった。

6 図書館刊行物発刊の試み

原田の森キャンパス時代と同様に、上ヶ原キャンパス移転後も新たな蔵書目録の作成が続けられている。大学昇格後となる 1933（昭和 8）年の「図書目録」がその例である。また、1937（昭和 12）年 11 月には、「Catalogue of an exhibition of the English Bible」が刊行されたりしている。

その他、1934（昭和 9）年 6 月から、戦前版ともいうべき館報「時計台」が年 2 回の割合で発行を開始している。発行は、第 1 号の「編集室だより」によれば、有志による自然発生的な発行であり、内容は現在のもものと相当異なり、和洋の新着図書リストが中心であった。この時の「時計台」は、残念ながら 1936（昭和 11）年 10 月の第 6 号で中断している。それでも、1945

(昭和20)年には、東館長より、年に2、3回、図書館本館の館務一般についての広報を予定した「図書館時報(通報)」の刊行が決定された。

7 「読書週間」を利用した展示の開始

1939(昭和14)年に、大学予科教授で第5代図書館司書を兼任した武藤誠のもとで展示が行われたことが第22回図書館評議員会記録に載っている。同年11月中旬に図書館主催の「読書週間」が初めて設けられ、特別企画(書庫内見学会)、講演会、展示が行われて盛況であった。これが記録上最初の展示とみられる。その後、1942(昭和17)年頃までの展示会は、すべて「読書週間」に関連して開催されている。「読書週間」の名称は、学生に対する読書勧奨を目的とする催しであることに由来する。「読書週間」に開催された講演会の講師には、末川博講師、寿岳文章教授の名がみえる。また、展示では、時局に関する学生の関心に応ずるためとして、「支那社会経済及び歴史地理」に関する本館蔵書が別置陳列されたりしている。「読書週間」中に行われる資料の展示と講演会は、武藤司書の在任4年間、毎年行われた。

8 対外業務への積極参加

大学昇格後も、学外の図書館関連団体への積極参加の姿勢は貫かれている。

1938(昭和13)年に全国私立大学図書館協議会(後の私立大学図書館協会)が設立され、関西学院は、1941(昭和16)年第4回協議会から加盟している。すでにその設立当時、中島猶治郎は図書館界では「有為の人」として全国的に知られていたようで『私立大学図書館協会史(1956(昭和31)年発行)』には、次のように紹介されている。「(略)当時の私立大学図書館に有為の人がいないわけでは決してなかった。(略)関西大学図書館(記載のまま)の中島猶治郎氏は大正九年より三年間米国に留学、図書館学を専攻して帰朝されたが、「日本目録編成法」を出版し、尚全国高等諸学校図書館協議会には、東京農業大学図書館の大野史朗氏と共にその創立より参加して、同協議会の推進力となっていた。」

Ⅱ 戦後－旧図書館（時計台）時代

1945(昭和 20)年～1996(平成 8)年

関西学院大学図書館の戦後は、1997（平成 9）年の新大学図書館の開館までの約 50 年間におよぶ時期と、新大学図書館開館以降、現在に至るまでの時期とに区分することが可能である。新大学図書館が開館するまでの図書館は、1929（昭和 4）年に関西学院がキャンパスを原田の森から上ヶ原に移転した際に建設された時計台のある建物に開設され、この建物を繰り返し増改築しつつ、運営された。この時期の大学図書館の時代を、新大学図書館との対比で、旧図書館（時計台）時代と称する。この旧図書館時代は、学生たちは「図書館に行く」ことを「時計台に行く」と言って、時計台に親しんだ時代であった。

1 施設・設備－図書館全体の動き

(1) 図書館機能の戦後復旧と整備

1945（昭和 20）年～1953（昭和 28）年

1945（昭和 20）年 8 月のポツダム宣言受諾後の占領下では、アメリカ教育使節団によって、図書館機能は単なる保存機能に加えて利用者サービス機能への方向が重視された。そうした方向も含めて、終戦後間もない時期から、図書館機能の充実に向けた動きが大学図書館界全体に活発に見られた。例えば、国立国会図書館の設立（1948 年）、図書館法公布（1950 年）、慶應義塾大学文学部図書館学科の開設（1951 年）、さらには、大学基準協会による「大学図書館基準」の決定（1952 年）、文部省による「国立大学図書館改善要項」の発表（1953 年）、日本図書館協会による『図書館ハンドブック』および『日本目録規則』の発行（1952、53 年）等の動きを挙げることができる。

学院においても復員学徒の帰校が進む中で、図書館への疎開図書の戻し入

れも終了し、受入図書の整理も徐々に行われていった。ようやく1948（昭和23）年頃に至って、図書館の運営は、戦後の混乱から少なくとも戦前の常態に復したとされている。その間、1946（昭和21）年4月に法学部、文学部、経済学部の3学部体制で旧制大学が再建され、大学予科や専門部も復旧する。また、1947（昭和22）年には、教育基本法等の制定により新制中学部が開設されたほか、文学部に神学科が設置され、神学教育が再開されている。学院におけるこうした戦後復興の歩みの中で、図書館については必要最小限の対応はなされたものの、施設、図書資料、図書館員数等の充実は、戦後10年間は大きくは望めなかった。

そうした中であって、1947（昭和22）年には、蔵書数が6万冊に増えていたこともあり、書庫の拡張のために大閲覧室の北側の三分の一に間仕切りを作り、約15,000冊を移設したりした。そして、1948（昭和23）年4月には、関西学院大学は新制大学として認可され、文学部、法学部、経済学部が旧制大学から引き継がれた。これに対応して、新制大学における学部の教養科目での指導を充実させる目的で、同年10月に図書館分館が開設されている。分館は、キャンパスが原田の森から上ヶ原に移転した際に造られた「教練用倉庫（銃器庫）」および1936（昭和11）年に増築され「教練課事務室（配属将校室）」として用いられていた木造平屋建て、亜鉛板葺、建坪132坪の建物（現池内記念館の場所）に開設され、分館専用の図書指導が行われた。分館には、書庫（8坪）、閲覧室（78坪）、講義室、絵画室、事務室があり、図書約2,800冊を備えていた。

他方、図書館本館では、1953（昭和28）年3月に、大学院設置等の事情に対応するために、産業研究所に貸与していた本館の2室を雑誌室に復旧した。また、「大学図書館基準」に従い学生用閲覧室の新設が必要となったことから、大閲覧室の一部に充てられていた書庫を開架式自由接架室に改装している。この開架室には約5,000冊の学生用図書を配架した。さらに、教授閲覧室を廃して書庫（11坪）に変更し、教授の閲覧および検索のために書庫内に閲覧台を備えて教授閲覧室の代用とした。しかし分館では、その半分を産業研究所が使用することになったために、分館の書庫および事務室はその閲覧室の一部に移され、分館閲覧室は縮小された。

(2) 新制大学としての図書館機能の確保・充実

1954（昭和 29）年～1969（昭和 44）年

この時期、関西学院は他の私立大学と同様に、新制大学として拡張期に入る。1959（昭和 34）年までにほとんどの既存学部に大学院博士課程が設置された。また、1957（昭和 32）年 3 月に短期大学が廃止されたものの、1960（昭和 35）年に社会学部、1961（昭和 36）年に理学部が開設をみる。

1954（昭和 29）年には、蔵書と学生の数に見合った書庫スペースと閲覧座席数確保を目的とした図書館整備のために、学長の下に学院と各学部代表者による特別委員会が組織された。委員会は 6 月～10 月に調査研究を行い、アウトブリッジ院長が招聘したドリス・クロフォード女史が、図書館学の専門的立場より委員会に助言を与えている。その際、同女史は原田脩一総務部長宛の「関西学院図書館報告書」を作成している。なお、当時の総務部長は教員による役職であり、職員が総務部長となったのは 1974（昭和 49）年からである。

1950 年代初めより、教員や学生の増加に伴う研究室や教室の不足が次第に深刻になってきた。そこで、講義棟や研究棟の建設が行われ、図書館では、1955（昭和 30）年に両翼（2 階建て）と書庫（3 階建て）が増築され



分館入口

た。両翼の拡張によって大閲覧室が広くなり、座席数は約 200 人分増加して、約 450 席となり、雑誌室と準開架室が階下に移転した。書庫は第 1 書庫の後ろの部分が 3 層で拡張され、さらに約 5 万冊の収容が可能となった。この増築で 150 坪のスペース増となった。閲覧室と書庫に各 50 坪を、雑誌室と準開架室に各 25 坪が充てられた。これ以降 30 年間にわたり、図書館施設の増改築が幾度となく繰り返されることになる。

1956（昭和 31）年には、図書館の閲覧室が学生の図書閲覧を指導する点において不十分であったことから閲覧室の一部を改造し、あわせて閲覧事務室も拡充し、学生の閲覧を指導しやすくなるよう工夫した。

1960（昭和 35）年には、書架の狭隘化のため、階上閲覧室の北側部分を書架に充てて収容力の確保を行った。同時に増築を促進するため図書館運営委員会を中心に「増築促進委員会」を設置し、他大学図書館の設計図を参考にするかたわら、京阪神間の他大学の視察等を行いつつ具体的な検討を重ね、増築案を学院に提出した。この案を受けて、1962（昭和 37）年 12 月半ばに新館の増築が着工となり、そして、翌 1963（昭和 38）年 11 月 15 日に完成した。この新館増築では、時計台の背部に蔵書収容力 20 万冊の書庫、閲覧室、管理部門等が設置されたが、計画原案の 40% にとどまった。新館への移動作業は、12 月 13 日より年末にかけて休館して行われ、旧書庫内の図書や分館備え付けの図書の移動、また、既存の各室を改装整備した。これにより、1948（昭和 23）年から開設されていた分館は、1963（昭和 38）年 12 月末日をもって廃止され、本館に統合された。なお、分館の建物は産業研究所が使用することになった。この増築後の新館は 1964（昭和 39）年 1 月にオープンし、図書館利用の増進に予想以上の効果を上げ、閲覧人数、利用冊数とも大幅に増加した。それでも、新館の増築後も書庫の増設は続き、1968（昭和 43）年には新館第 2 書庫 3 階（約 5 万冊）、1970（昭和 45）年には新館書庫 4 階に書架が設置された。

設備についてみると、マイクロ機器や複写機の設置、更新が短期間に進められている。まず、1954（昭和 29）年にアメリカから寄贈されたマイクロフィルムリーダーが図書館に設置された。1958（昭和 33）年には、フジミニコピー、トーコー各 1 台の購入設置がこれに続く。1960 年代初頭とい



図書館閲覧室

われる「コピー時代」の到来が間近いことを感じさせる動きである。1963（昭和 38）年には、マイクロフィルム複写設備の利用増や受入リール数増に合わせてリーダープリンターや密着複写用のクイック 1 台を設置している。1965（昭和 40）年 1 月には、新機種である乾式複写機ゼロックス 914 が導入された。さらに、1966（昭和 41）年には、縮小拡大自由のオフセットマスター作成対応の複写機であるエレファックス 1 台を設置している。これは、学内教員向け学術雑誌のコンテンツサービスや図書原簿作成等に利用された。図書原簿作成については、従前の手書きに比べて省力化が実現した。1972（昭和 47）年には、キャノン・プロセッサカメラ 161 G、ミノルタ・リーダー・プリンター 403 がマイクロ機器として設置された。1975（昭和 50）年には、目録カード複製用に、従来のリソーファックス+シュープリンターに代わって、ゼロックス 1000 が導入された。

この時期、全国的にも図書館機能のあり方をめぐる様々な動きがみられる。1956（昭和 31）年 5 月には、「私立大学図書館改善要項」（私立大学図書館協会）の発表、1960（昭和 35）年からの東京大学附属図書館改革運動、当時の館長の名前を冠したいわゆる「岸本改革」の推進、1961（昭和 36）年の「大学図書館の整備拡充について」（日本学術会議による勧告）、1964

（昭和 39）年 11 月の「大学における図書館の近代化について」（同）、1966（昭和 41）年 3 月の「大学図書館設置基準要項」（大学基準等研究協議会図書館特別委員会答申）等の発表である。文部省では、1960 年代半ば頃から大学図書館整備のために、大学学術局に情報図書館課を新設している。当館も文部省大学図書館視察委員による実地視察が行われ、視察に基づく改善充実要望書が 1966（昭和 41）年 3 月 25 日に交付されている。改善充実すべき事項は以下のとおりであった。

- ① 図書館の運営はおおむね良好であり、とくに図書館長の制度上の権限が強大である点は、図書館行政を有利にしている。なお、図書館運営委員の任期を 2 年に延長し、図書館運営委員会の活動を強化することが望ましい。
- ② 中央図書館を学習図書館として発展させた努力については、みるべきものがある。なお、研究図書館の機能の育成に留意する必要がある。
- ③ 中央図書館の増築計画はおおむね妥当であり、その推進を望む。しかし、増築計画、夜間開館等を考慮し、図書館職員の増強を検討する必要はないか。
- ④ 指定図書制度を、一層強化充実する必要がある。

また、1966（昭和 41）年 3 月には、文部省より「大学図書館施設計画要項」が発表され、大学図書館の建築規模算出の量的基準として用いられたり、「大学図書館実態調査」が同年から開始された。

（3）大学紛争と図書館

1968（昭和 43）年～1970（昭和 45）年

他大学と同様に、関西学院大学においても、1963（昭和 38）年に学費値上げに対する学生による反対運動が起こっている。そして、1960 年代後半には、この反対運動が急速に激しさを増す。反対運動は、1967（昭和 42）年 12 月 16 日の法学部を皮切りに、バリケード封鎖による無期限ストへと展



占拠された第5別館

開していった。この無期限ストは、1968（昭和43）年2月に入り、「バリケード解除」が学生大会で決議されて一応の終焉をみる。しかし、教授会によるストライキ主導者に対するその後の処分決定が、学生側から強い処分撤回闘争を引き起こすことになった。1968（昭和43）年3月28日の卒業式当日に、学生が学院本部建物を封鎖占拠し、処分撤回の要求を行ったのである。大学側は、本部建物の封鎖を解いて本部建物から退去するように懸命の説得を行ったが受入れられなかったため、小宮孝院長と古武弥正学長が合意の上、同日の夕刻になって警察の出動を要請し、機動隊の学内立ち入りによってようやく混乱は収まった。学院としては器物破損について被害の申告はしないことを決定したが、兵庫県警は、この本部建物占拠に関して学内5ヵ所の強制捜査を行った。そして、建造物侵入、威力業務妨害に関する容疑で学生9名が逮捕され、そのうち7名が起訴された。このことは後に起こる紛争の引金のひとつとなった。

その後、1968（昭和43）年12月に新全学執行委員長の下に全学共闘会議（全共闘）が組織され、全学執行委員長は院長宛に公開質問状を提出した。この公開質問状については院長から回答がなされたが、全学執行委員長は大衆団交を行うことを要求した。学内の混乱は1969（昭和44）年に持ち越さ

れ、1月7日に全共闘により第5別館が封鎖された。1月13日に全学執行委員長、全共闘議長からあらためて6項目要求、団交要望書が院長に出された。これに対して学院は、大衆団交は教育の場において認め難いとの理由で拒否した。1月17日には全共闘派学生が学院本部を封鎖した。また同日、法学部では法学部闘争委員会が投票によるスト権を確立し、法学部校舎を封鎖した。1月24日に学院・大学は中央芝生で全学集会を開催し、公開質問状と団交要求に対する回答書を配布したが、実りある話し合いを行うことができず、結局、学院への一般学生の不信に終わってしまった。このことにより1月26日には社会学部、28日には神学部、文学部、商学部、29日には経済学部の封鎖が相次いで行われた。学院・大学は、2月の入試を前にして、入試実施にあたって受験生の安全を確保する意味から、再び機動隊の出動を要請した。経済学部と商学部の入試は機動隊に守られて行われた。さらに、2月9日にも大学の要請で機動隊が入り、封鎖されていた12の建物のうち第5別館を除く11の建物の封鎖が解除された。しかしこれに反対する学生は、2月15日に再び学院本部と理学部を除く各学部を封鎖し、さらには大学本館、教授館も封鎖された。

大学紛争の激化に伴って学内施設は相次いで封鎖されたが、最後まで残されていた図書館も、1969（昭和44）年3月5日、全共闘派学生によりついに全館封鎖されるに至った。当時の図書館の状況を窺い知ることのできる記録として、入交光三次長の報告「非常時の措置－大学紛争の中の図書館－」（私立大学図書館協会会報 No.54（1970.3））がある。これによれば、図書館員は、封鎖が行われるかもしれないことを予想して封鎖直前に退去したこと、図書館の封鎖に対する対策として、早い時期から原簿台帳を学外疎開させたこと、シェルフリスト（書架カード）は閲覧用カード目録に何かがあった場合にこのシェルフリストによって再製することを考えて鉄扉で守られている書庫内に搬入したこと、重要書類については、一部分は書庫内に、一部分は館員個人宅に疎開させたこと、未整理の図書については蔵書印を押して書庫内に搬入し、複写用の機器類についても業者に一時返還するなどし、館内に侵入され、破壊されることを想定して準備し、封鎖に備えたことなどが書かれている。

図書館は、封鎖開始の3月5日から6月13日の解除までの期間、館内での正常な業務執行は不可能となり、図書館としての機能は麻痺するという異常な事態に立ち至った。閲覧業務は全て停止し、図書の整理業務も資材不足でほとんどできなかった。それでも、閲覧業務以外の受入、整理業務等については停止することが許されないので、学外の2ヵ所で業務を行った。庶務課は、甲東園の佐野邸、司書課と閲覧課は住友銀行西宮支店で業務を行った。これら2ヵ所以外に、職員の自宅にも重要書類を疎開させていた記録が、1968（昭和43）年度の年次報告の欄外にメモとして残っている。さらに、封鎖期間中には、学内の業務に図書館員を派遣したり、文部省の私大教育研究のための補助金事業を行ったりした。

1969（昭和44）年6月13日には、学院・大学が、早朝7時より機動隊の応援を得て封鎖解除を実行し、6月30日には授業再開となった。長期間にわたる封鎖により時計台の装置は破壊され、閲覧室の備品類、特に閲覧机はなくなっているものが多数あった。また、館長室を含む全ての事務室が荒らされ、什器類が散乱していた。しかしながら、館内に配架されていた図書の被害は比較的少なく、閲覧用の図書カード目録類もそのまま残されていた。図書館は、6月19日に全面的に閲覧業務を再開した。その後、同年の12月には図書館においても、大学改革を推進するために学長代行の諮問機関として「図書館改革専門委員会（委員長：前田館長事務取扱）」が設けられ、大学図書館のあるべき姿と改革を要する根本的諸問題について検討が続けられた。また、職員集会の総意によって生まれた業務改革推進協議会にも図書管理小委員会が設けられた。そこでは、図書管理業務全般にわたり全学的見地より改革すべき事項が検討され、1970（昭和45）年3月16日に第一次答申が提出されて、協議会のメンバー全員により承認されている。このように図書館では改革すべき問題点を検討するとともに、改革を必要と認め、事務的に可能な事項については主体的にその実施に踏み切った。特に、学生からのC. O. D. を利用した、図書館関係の提案・要望については、関連部局と協議の上、積極的に実現に努力した。C. O. D. とは、Campus Organization Development（キャンパス創意開発機構）の略で、学生の意見や提案をくみあげて、それに担当部課から回答を行い、問題を解決しようとする、要する

に開学版提案箱（目安箱）であり、紛争後の1969（昭和44）年7月26日に新しい大学の創造をめざす大学改革の一環として設立された。1969（昭和44）年度にC. O. D. による改善提案で実施した事項には、①全館の暖房工事、②旧雑誌室の一部を改装し閲覧室（54席）として開放、③開館時間を9月8日より、午後5時50分まで延長、④授業再開後、土曜日は改革推進日のため業務を休止していたが、1970（昭和45）年3月7日より新館2、3階の閲覧室を開放、⑤コピー料金を1枚25円から20円に値下げ、といったものがあつた。

（4）利用者サービス機能の充実に向けた図書館整備

1970（昭和45）年～1984（昭和59）年

1970（昭和45）年6月30日には、小寺武四郎学長宛に「図書館改革専門委員会答申」が提出された。この答申の中で図書館施設・設備の拡大について具体的なプランを示した。答申のねらいは、全学の図書館資料を全ての学生教職員が利用できる組織、体制の整備と、図書館資料の収集・整理・保管にも増して、業務の重点を利用者サービス機能に置くことにあつた。

同年10月には、新たに「図書館増築委員会（前館長は委員）」が発足し、先の答申の具体化のための検討に入った。その結果、書庫増築を主眼とする図書館第1次増築案が作成され、理事会の承認を得て、1971（昭和46）年4月増築工事が着工された。

1971（昭和46）年11月には、図書館第1次増築として第3書庫の増築工事が完成した。約18万冊の収容力を持ち、建坪93坪、延面積350坪の積層式4階建てで、図書館旧館の北側に位置し、総工費は備品等を除き7,900万円であつた。この工事の結果完成した諸施設は以下のとおりである。

- ・ 開架書庫（2階、図書約2万冊で発足）
- ・ 雑誌架の新設
- ・ 開架書庫への接続通路の設置と開架事務室の設置
- ・ 古文書室の設置（3階書庫内東側）

- ・貴重図書室の設置（4階書庫内東側）
- ・エレベーターおよびリフトの新設と書庫内キャレルの設置
- ・閲覧座席の増加（約80席、館全体で約550席となる）

1972（昭和47）年4月下旬には、早くも図書館第2次増築委員会（財務部長が委員長、小関館長は委員）が発足し、同年9月には大綱をまとめる。この大綱に従って、図書館第2次増築工事は、閲覧座席の拡充を主な目的として行われた。同年12月27日に起工式が行われ、1973（昭和48）年11月末に竣工し、改造工事は1974（昭和49）年4月末まで行われた。増築面積は1,879.52 m²で、地上3階、地下1階の建物が図書館旧館の南側に建設された。既存の面積とあわせると5,246.62 m²の図書館になった。また、改造部分は延面積903 m²で、総工費は1億6千万円であった。この工事の結果完成した諸施設は以下のとおりである。

- ・約450席の閲覧座席を増設し、既存分と合わせると約1,000席確保されることになった。
- ・増築部分の2、3階に閲覧室が新設され、2、3階とも旧館閲覧室と渡り廊下でつながった。2階の新設閲覧室は旧館閲覧室とL字型に連結され、3階の新設閲覧室は、移転してきた産業研究所と隣接していて、共同利用の形式を取った。
- ・増築部分の1階に庶務課と司書課が移転（正面玄関を入った両側に面した部屋より）し、さらに館長室、職員ロッカーが設置された。
- ・新設された西入口（第5別館側）1階に目録室が設けられた。
- ・地下1階に電動式書架の保存書庫を設置（26万冊収容可）した。
- ・旧館（時計台）1階北翼に名誉教授室兼会議室が新設された。
- ・旧館（時計台）1階南端を改造し、視聴覚室として6月に開室した。
- ・開架書庫内に置かれていた展示板付カレント雑誌棚とカレント雑誌用のビジョンホールの一部を旧館2階北側の開架閲覧室内に移し、1969（昭和44）年12月以来設置されていなかった雑誌業務を専用とする雑誌室

を再開した。その結果、開架書庫内に 39 席の閲覧座席を設置することができた。

また、1973（昭和 48）年 9 月には、それまで設置されていなかった時計台西側の面にも大時計が取り付けられた。1977（昭和 52）年 3 月からは、始業時、チャペルアワー、そして終業時に時計台から讃美歌のチャイムが流れるようになった。奏でられる曲は、讃美歌 21 211 番「あさかぜしずかにふきて」、495 番「しずけき祈りの」、220 番「日かげしずかに」の順である。

図書館は、以上のように、第 1 次増築、第 2 次増築を経て徐々に充実され



1974 年増築後の図書館外観（上）と閲覧室（下）

てきた。それでも、開架室の狭隘、不備の状況や書庫の狭隘化は十分に解決されることがなかった。そのため、この頃からすでに、新しい図書館建築による抜本的対応への要望が高まりを見せ始める。これを受けて、1977（昭和52）年頃から、図書館の改善・充実について検討されるようになった。とはいえ、新しい図書館の建築が早々に実現するわけでもなく、新図書館の検討と並行して、図書館施設・設備の部分的な改造・改善は、次にみるように種々続けられた。

- ・1978（昭和53）年6月に、図書館第3書庫4階の貴重図書室に学院史資料室を開設し、8月には、第2閲覧室に館内では初めて冷房設備を設置している。
- ・1981（昭和56）年9月に、大学の人権教育重視とその実践の方針を受け、旧館（時計台）1階の一部を視覚障害者読書室に改装した。
- ・1983（昭和58）年3月に、複写室を閉室し、4月からは図書館内にコイン式コピー機3台を設置した。複写室は視聴覚室の事務スペースとして利用した。
- ・1984（昭和59）年4月に、古文書室を第3書庫3階から第3書庫4階の学院史資料室が使用していた1室に移転した。この時から古文書室業務は閲覧課業務から整理課業務となり、専従の嘱託職員が配属されるようになった。この年は全館冷房工事が実施され、夏季休暇期間中の大幅な利用者増を生んだ。また、開架室のカーペット交換や閲覧椅子の取替えを行った。

（5）再度の大学封鎖と図書館の閉館

大学紛争は、1969（昭和44）年の大学封鎖以来しばらく、沈静化の状況がみられた。しかし、関西学院においては、その後、大学紛争を再燃させる事態が生じる。それは、1974（昭和49）年12月に理事会が1975（昭和50）年度入学者の学費値上げを発表したことに端を発する。六総部二自治会（体育会、文化総部、新聞総部、宗教総部、総部放送局、応援団総部、神学部学

生会、法学部学生自治会）や学費値上げ反対を叫ぶ学生は久山康理事長と西治辰雄学長との大衆会見を要求するなど反対運動を展開する。そして、2月の定期試験を妨害し、法学部、経済学部、商学部、文学部、社会学部の校舎を封鎖した。これに対し、2月13日に大学が機動隊にキャンパス外での警戒を要請し、教職員の手で封鎖を解き試験を再開した。しかし、反対学生は、警察（機動隊）の警戒が解かれ試験が始まると再び試験妨害を行い、理学部を除く各学部や大学本館、学院本部を封鎖した。図書館の職員も他の教職員と同様に身の危険を感じて学外に退避し、図書館は閉館となった。その後、3月に入り大学内では学生集会もなく平静を取り戻し、3月5日に学院本部、大学本館の封鎖が解除された。図書館は3月11日より再開した。学内が封鎖され図書館が閉館している間、図書館業務は可能な範囲で、学外で行われた。執務場所は、課ごとに、上ヶ原温泉（銭湯）の2階などに分散された。この学外の執務場所には業務が継続できるように、書類やタイプライターなどの用品が持ち込まれた。

（6）同和・差別問題図書コーナーの設置

1972（昭和47）年2月に同和問題に対する学長の諮問機関として「同和問題委員会」が設置されている。そして、同年6月には、この問題に関する「大学の基本姿勢」が明らかにされた。これを受けて、図書館では、同年6月に開架閲覧室内に「同和・差別問題図書コーナー」を設置し、同和教育関係図書数十冊を配架した。また、これ以後、大学事務室同和関係図書費予算により漸次、関係図書資料を充実させていくことになった。1973（昭和48）年3月末までに160冊の図書と多数のパンフレットが配架された。

1975（昭和50）年9月には、大学において新たに「同和教育の基本方針」が決定される。この方針にもとづいて、全学的な同和教育への取り組みのひとつとして、同和教育プロジェクトチームが活動を開始した。このプロジェクトチームを支援するために、図書館では、1977（昭和52）年以降10年間、毎年6月と11月に同和教育関係図書の全学所在リストを作成した。

また、図書館では、同和教育プロジェクトチームからの要望で、1980（昭和55）年度に、近畿地方を中心とする未購入市史の購入計画を立て、その

準備資料として「近畿地方史誌一覧表」を作成した。図書館では、以降、市史購入の努力を継続してきている。その端緒は、同和教育の推進との関わりにあったといえることができる。

1986（昭和 61）年 4 月に同和問題資料室が、学生サービスセンター竣工後に生じる大学本館の空室を使用して開設された。その後、1992（平成 4）年に人権教育委員会が発足し、人権教育委員会室が図書資料の収集を担当することとなり、新大学図書館第 1 期開館（1995（平成 7）年）の時に「同和・差別問題図書コーナー」はその役割を終え、所蔵の関係図書資料はコーナー配架を解かれ一般配架されることになった。

（7）館内放送自動化の実現

図書館には 4 ヲ所の利用者窓口（出納室、開架室、雑誌室、視聴覚室）と 3 ヲ所の閲覧室があり、それらの利用時間帯は学年暦により変動していた。その日の窓口サービス終了時間や閉室時間を利用者へ伝えるための手段のひとつとして、図書館員が毎日、館内放送を行っていた。このような運用がいつごろから行われていたのかはわからない。

出納室担当者が、学年暦により変わる開室時間帯を伝えるアナウンスの文章作成と、閲覧課内 4 つの窓口を順番に回すアナウンス当番表作成を行い、あとは各窓口の担当者が当番表に従って 1 日に 2 回所定の時間に火災通報装置に付随する放送設備を使ってアナウンスするというものであった。

図書館では、この作業負担はたいしたものではないという見方がなされていて、長い期間、毎日 2 回図書館員がアナウンスを行う形で続いていたものである。しかし、ときとして内容に誤りがあったり、不慣れな者が早口や小さな声でのアナウンスを行ったり、また、風邪などで聞き取り辛いようなこともあり、利用者への情報伝達というサービスの質の面でも欠点の多いものであった。

1986（昭和 61）年には、他部署から図書館に異動してきた職員の提案により、この前時代的な方法からタイマーを用いた自動放送設備の導入が実現した。放送はパターン化したアナウンス文を専門業者に依頼して録音テープを作成し、あとは学年暦によるアナウンス時刻のパターンを年度初めにタイ

マー装置にセットするだけの運用でよいものであった。これにより、利用者への情報伝達の向上と業務負荷軽減に大いに寄与することとなった。

(8) 新大学図書館建築へ向けて－建築着工までの長い道のり

1977（昭和 52）年～1992（平成 4）年

1977（昭和 52）年 9 月に、久保芳和学長の諮問を受けて図書館側が作成した「図書館の改善・充実にに関する要望書」が大学に提出された。この要望書には、「開架室が狭隘、劣悪な状態であるため現在の建物内での拡張・改善は不可能であり、新規に別棟の学生用図書館（学習図書館）の建設を考慮しなければならない」と述べられている。この要望後、1978（昭和 53）年 10 月には、大学の「教育研究施設検討委員会」からの要請に応じ、図書館案として、開架室の改善と書庫スペースの確保を盛り込んだ別棟方式による次のような「学習図書館計画の概要」を提出している。

《学習図書館計画の概要》

- ・床面積 $25\text{ m} \times 30\text{ m} = 750\text{ m}^2$
- ・総面積 $750\text{ m}^2 \times 4 = 3,000\text{ m}^2$ （地下 1 階、地上 3 階）
- ・地下 1 階 保存書庫 電動書架約 30 万冊収容
- ・1 階 参考図書コーナー 図書約 1 万冊 座席数約 50 席 事務室他
- ・2 階、3 階 開架閲覧室 図書約 10 万冊 座席数約 350 席
- ・全館冷暖房完備、エレベーターの設置

この計画を基礎にした床面積 $1,000\text{ m}^2$ 程度の学習図書館棟（別棟）の建築が、1980（昭和 55）年 6 月に「教育研究施設設備整備充実計画・大学案」の中で充実すべき施設のひとつに挙げられた。

これを受けて、図書館では、館内に設置した「図書館長期計画検討委員会」で検討を重ねた。そして、1982（昭和 57）年 2 月に「学習図書館新設と既存図書館増築についての要望書」を城崎進学長に提出した。この要望書の主旨は、学習図書館新設と既存図書館増築を実現して、学習図書館機能を

分離しつつ、研究図書館の機能の根本的整備もはかり、大学図書館全体としての機能を改善・充実させようとするものであった。要望書には、学習図書館、研究図書館（現図書館の増築）の具体的な規模、施設設備等まで記載されていた。この学習図書館構想は、9月の大学評議会において、大学の教育研究施設設備充実計画の重点項目として、第6別館の建設とともに建築優先順位第1位に決定された。他方、研究図書館構想については、1983（昭和58）年1月に、具体案を示した要望書を城崎学長に再度、提出した。しかしながら、学習図書館の建築は大学評議会で承認されたものの、その後、大学図書館を学習図書館と研究図書館に二分することの是非をめぐって学内に議論が起こってきた。議論の最も重要な論点は、以下の3点であった。

- ① 大学図書館を建物上の制約から学習機能と研究機能に分け、資料と利用者を分離できるのかという問題
- ② 建物を分離することによる図書館運営上の非効率性の問題
- ③ 一方で大学の教育研究施設検討委員会において学習図書館建設の検討が進められ、他方で図書館増築について、別途大学図書館と学院の間で直接計画が進められることによる調整の困難さの問題

これらの問題を踏まえ、1984（昭和59）年5月15日に、金子館長から、具体的な建設計画促進のための新委員会設置を要望した「大学図書館施設改善の検討について（要望）」を、大学諸施設検討委員会委員長（城崎学長）宛に提出した。大学は、これを受けて、同年12月の大学評議会で「大学図書館問題検討委員会」（学長代理以下13名）の設置を承認した。「大学図書館問題検討委員会」では、図書館からの要望事項にとどまらず、より大きな視点に立って大学図書館について検討を始めることになった。それまで大学諸施設検討委員会第二部会（教育施設検討委員会）において検討が進められる予定であった学習図書館建設計画を上記委員会から切り離し、大学図書館問題検討委員会に移管して大学図書館充実の一環として検討することが決定された。大学図書館問題検討委員会では、学習図書館建設計画と現図書館増

築計画を合わせて図書館の施設改善計画として抜本的に検討することになった。当委員会の下に作業委員会を設け慎重に検討作業を重ねた結果、1986（昭和61）年6月に「大学図書館建設に関する第1次答申」を武田建学長に提出し、7月の大学評議会で承認された。本答申では、現図書館建物・施設の問題点、新大学図書館の必要性を述べるとともに、建設位置および建設規模等の大枠の構想を示して、「本学の学術研究、教育の発展に寄与し、世界に誇りうる21世紀を展望した大学図書館が1990年代の早い時期に建設される事を強く要望する。」と結ばれている。第1次答申の概要は以下のとおりであった。

基本構想

- 1) 新しい時代に対応し、教職員・学生が利用しやすい機能的な大学図書館をめざす。
- 2) 研究図書館機能と学習図書館機能の兼備・充実をねらい、建物上の分離はおこなわない。
- 3) 全学の図書・資料の集中化を原則とする。ただし、必要な限りでの分置は可能とする。
- 4) 書架は開架式と閉架式の併用を前提とするが、開架部門を強化する。
- 5) 閲覧用の座席数は学生数の10%以上とする。
- 6) 展示雑誌のタイトル数を大幅に増加する。
- 7) レファレンス・サービスを強化する。
- 8) 総合的な利用サービスおよび業務の機械化をはかる。

規模

- 1) 延床面積 約 20,000 m²（地上4階、地下2階程度の建物）
- 2) 収容可能図書・資料数 200万冊
- 3) 閲覧座席数 約 1,500 席

建設場所

第2別館跡地および法学部旧館

図書館内では、1984（昭和 59）年には、建設（書庫を含む）、規程整備および機械化の 3 つを検討するために、館内にチームを設置することになった。その結果、プロジェクトチームとして、同年 6 月には規程の見直しや規程改正を検討する「規程検討プロジェクト」、1985（昭和 60）年 1 月には図書館業務の機械化を検討する「図書館機械化プロジェクト」を、3 月には「大学図書館問題検討委員会作業委員会」に対して図書館から種々の提案を行うために「建設プロジェクト」を設置した。この「建設プロジェクト」は、「大学図書館問題検討委員会作業委員会」のメンバーと重複するメンバー構成であることから、図書館内プロジェクトとしての答申作業を並行して行うことができなかった。そのため、1987（昭和 62）年 2 月の館長室会で、全学的に建設実務に関わる委員会が設置された時点で、改めて図書館内にプロジェクトチームを結成するとの了解のもとで解散が承認された。

第 1 次答申の基本方針に沿って作成された「大学図書館建設に関する第 2 次答申」は、1987（昭和 62）年 3 月末に武田学長宛に提出された。事実上この答申が最終案となった。この第 2 次答申（最終答申）は、新大学図書館建築基本計画、機能、建設概要、建設時期、建設に伴う管理運営の課題の各項目から構成されており、階層レイアウト図、主要施設・備品面積一覧表の付いた 1 次答申に比べ、より詳細な内容となっていた。この「大学図書館建設に関する第 2 次答申」は、同年 6 月の大学評議会の承認を得て大学案として決定された。大学は、理事会に対して早期実現を要望する一方で、大学諸施設検討委員会に新大学図書館構想を検討する「第三部会」（学長代理以下 15 名）を 1987（昭和 62）年 6 月に設置した。同年 9 月には、理事会において、大学と学院理事会双方の委員で構成する図書館建設のための連絡会として、「図書館問題検討委員会」（理事長・院長以下 16 名）、略称「院連」が新たに設置された。同委員会は、同年 10 月に第 1 回会合を持ち、大学案の検討に入った。

1988（昭和 63）年 2 月の第 4 回「図書館問題検討委員会」において、新大学図書館の建設場所を大学案の第 2 別館跡地および法学部旧館から、図書館新館と第 5 別館の東側突出部を解体した跡地に変更し、地上 3 階地下 2 層建てとする変更案が提出された。工事車両の進入路、資材置場の確保、新講

義棟と建物が接近しすぎること、また騒音等で難工事が予測されるという理由からであった。この提案は、同年3月に「第三部会」、8月に大学評議会で承認された。この承認を受けて、「図書館問題検討委員会」は「新図書館建設検討委員会」と名称を改め、この委員会の下に新たに計画を推進するための実務委員会（八重津館長以下24名）を設置し、第1回の実務委員会が同年8月に開催された。

他方、理事会は、アドバイザーを、関集三氏（元大阪大学附属図書館長、元本学理学部教授）と図書館建築の専門家である富江伸治氏（筑波大学助教授）に依頼すること、また、設計を(株)日本設計に依頼することを承認した。12月の理事会では、建設位置、建設規模（19,900 m²）および1994（平成6）年4月開館（予定）が承認された。

その後、1988（昭和63）年11月に、大学評議会は、図書館の建設計画と並行して、管理・運営・利用サービスを検討する「新大学図書館管理運営問題検討委員会」の設置を決定した。そして、12月の大学評議会で委員（図書館長を委員長とし、副学長、学部長、各学部から選出された委員で構成）が決定された。この委員会は精力的な会合を重ね、1989（平成元）年3月末に、武田学長宛に「新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申」を提出した。この答申は柘植一雄新学長の下で、4月の大学評議会に諮られて承認された。以後、検討委員会は、この答申の主旨に沿って具体的に検討を続け、新大学図書館建設の基本計画に直接関係する事項から順次検討が加えられ、「新大学図書館 AV 関係充実計画書」、「新大学図書館学術情報システム計画書」および「新大学図書館利用サービスの支援体制計画書」が作成された。

また、1989（平成元）年夏には、建設計画作成作業の一環として、図書館員4名を含む10名が11日間の日程で北米の大学図書館を視察している。そして、1989（平成元）年10月に、先の答申等で提案した事項や海外図書館視察で得た成果を盛り込みながら検討を重ね、「新大学図書館の基本計画および基本設計書（案）」が完成した。この基本設計書は「第三部会」を経て11月に大学評議会で審議され、承認されて大学案となった。「新図書館建設検討委員会」では、この大学案を受けて具体的な検討を開始したが、経済情



海外視察－シカゴ大学

勢の変化等により新大学図書館の建築工事費が当初の予算額を大幅に上回るとの主張が理事会よりなされ、対応のあり方について議論された。そこでは、建築を実現する意味もあって、理事会が限度と考えている予算の枠の中で、大学案の理念、機能を損なうことなく、どの程度のものが実現可能か検討され、1990（平成2）年1月の「新図書館建設検討委員会」で具体案が提案された。しかし、大学側は、大学案との乖離が大きいとして、これを持ち帰ることを拒否した。

その後、同年2月の「新図書館建設検討委員会」で、学院側から新たな案が提案された。新しい案は、①建築位置は当初どおりとする、②建設面積は当初の21,500 m²（産業研究所分を含む）を第1期、第2期として17,290 m²、第3期工事として4,210 m²に分割する。第3期工事の日程は現在のところ未定である、というものであり、大学側としては当初案と基本的に変わらないと評価して、学院側からの新提案に大筋として同意し、「第三部会」および4月の大学評議会に上程することとした。この提案を大学評議会で審議した結果、大学評議会は基本理念を十分に尊重し基本的な機能の変更はし

ないこと、図書資料の収容冊数 200 万冊のうち、第 1 期、第 2 期工事終了時の図書資料収容冊数を 150 万冊とすることを前提条件として承認した。これを受けて、「第三部会」は慎重に検討した結果、新たに「新大学図書館、新産業研究所の基本計画および基本設計書」を作成した。

その内容の概略は、1990（平成 2）年 5 月 25 日開催の第 431 回定期理事会の記録の中に、承認可決された議案第 13 号として次のように記載されている。

新図書館建設計画変更に関する件

1988（昭和 63）年 12 月 8 日開催の理事会において承認された議案第 126 号について次のとおり変更する。

建設位置 変更なし

建設規模 21,500 m²（約 6,504 坪）から 17,290 m²（約 5,230 坪）に変更、第 1 期・第 2 期工事として施行する。

変更理由 イ．建設費高騰による規模の見直し

ロ．建設費予算枠を 100 億円（消費税別）とするため

なお、建設規模の縮小部分 4,210 m² についてはこれを第 3 期工事とする。ただし、建設時期は未定。

また、1990（平成 2）年 7 月には在学生に向けて「大学ニュース No.47」で「教育研究施設整備充実計画」の一環として新大学図書館の建設準備工事が夏季休暇より始まることが発表された。発表された建設工事概要は次のとおりであった。

- ① 建設準備工事 ⇒ 1990（平成 2）年の夏季に行われる法学部旧本館、第 2 別館の解体工事
- ② 第 1 期工事 ⇒ 1991（平成 3）年に着工され、1993（平成 5）年春季に完成（延床面積 10,360 m²）

第1期工事の完了後、現図書館および産業研究所が移転し、新大学図書館が仮開館

- ③ 第2期工事 ⇒ 1993（平成5）年に着工され、1995（平成7）年春季に開館予定（延床面積 6,930 m²）
- ④ 第3期工事 ⇒ 建設時期未定。（図書資料の増加等から考えて近い将来に建設予定）

同ニュースには、第1期、第2期工事が完成すれば150万冊収容可能、座席数1,700席が設置され、また、第3期工事が完成すれば200万冊収容可能、2,000席設置されることが書かれている。

新大学図書館は、1990（平成2）年夏の準備工事を終え、1991（平成3）年4月より第1期の建設工事が開始される運びとなった。「大学ニュース No.50」にも、4月から仮囲い工事が始まり、工事期間は第1期、第2期を合わせて1991（平成3）年度から向こう5年間であること、また、新大学図書館の基本理念や各階のレイアウトが発表された。ところが仮囲いをして樹木の移植等の事前工事を開始する直前になって、関係庁である兵庫県より風致地区に伴う建築面積・建物の高さ制限との関連で、樹木の移植・伐採等について厳しい条件が示され、工事は早々に中断した。その後、関係庁との調整により約2年遅れで1993（平成5）年2月から事前工事を再開した。これによって当初予定していた完成時期も、第1期工事の完成が1995（平成7）年、第2期工事の完成が1997（平成9）年にずれ込むこととなった。

ところで、「新大学図書館、新産業研究所の基本計画および基本設計書」によれば、第3期工事予定地として、新大学図書館のサンクンガーデン地下が予定されていた。しかし、1992（平成4）年2月に示された兵庫県による第1期、第2期工事に対する行政指導に従うことで、第3期工事の書庫部分が水路の下に来ることの危険性が予測された。そのため、予定されていた場所での建設が極めて困難となり、「第三部会」において第3期工事について再検討がなされた。そして、新学部設置計画が進められている神戸三田キャンパスに第3期工事部分を建設するという計画変更を行ってもよいという結

論に達し、学長に報告した。この第3期工事については、1993（平成5）年5月の大学評議会で、神戸三田キャンパスでの第3期工事着工までの期間、暫定的にテニスコートとして利用することが懇談了承され、学長から図書館長に了承を求める文書が提出されている。

（9）新大学図書館の第1期・第2期工事と開館

1993（平成5）年～1997（平成9）年

1993（平成5）年7月から第5別館東側突出部解体工事や仮歩道橋の設置等が行われて、9月からは第1期の建設工事が開始された。そして、1995（平成7）年10月に第1期開館を迎えることができた。第1期開館時の建設概要は、収容図書冊数約100万冊、座席数約1,000席、延床面積約10,360m²の図書館と産業研究所の複合施設である。また、工事期間中も、既存の図書館施設は平常どおり稼働を続けていたが、同年7月24日から9月30日までの期間だけは、図書資料の移転のために図書館は閉館した。この期間は特別措置としてC号館に臨時閲覧室、事務室を設けた。

第1期工事に引き続き、1995（平成7）年夏季期間中より現行図書館（時計台部分を除く）の解体工事が始められ第2期工事の開始となった。工事は順調に進み、第2期工事部分の建物工事は1997（平成9）年2月末に完成した。そして、同年3月と7月29日から9月30日の期間、図書館を閉館して図書資料の移転および書架等の搬入を行った。第1期工事の際と同様に、図書館を閉館している期間中は特別措置として3月は第5別館に、夏季中はE号館に臨時閲覧室、事務室を設けた。



建設工事中新大学図書館

新大学図書館は、1997（平成9）年10月から開館し、10月29日に開館記念式典を行った。新大学図書館の概要は、収容冊数150万冊、閲覧座席1,700席、延床面積19,586 m²の地上3階地下2層の建物であった。

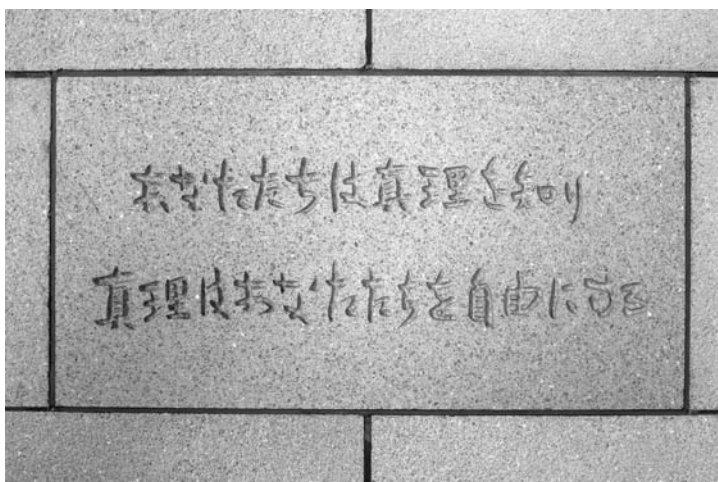
新大学図書館の機能に関して、以下の4つの理念が定められた。

- | |
|---|
| 第1：学術情報センターとしての大学図書館 第2：利用しやすい機能的な大学図書館 第3：情報化時代に対応した大学図書館 第4：知的交流・創造の場としての大学図書館 |
|---|

これらの理念のもとでの、図書館の設備、運営方法、提供サービス等の具体的あり方について「新大学図書館管理運営問題検討委員会」等で検討し、実現を目指した。

具体的には、パソコンの設置、全面開架制の採用、レファレンス機能の充実、インターネットを利用した学外への情報発信、地域への公開等が挙げられる。建物については、スパニッシュ・ミッション・スタイルを継承した外観でキャンパス全体の統一感を持たせた。設備面では、入退館ゲートを設置した。退館ゲート（BDS）は旧図書館でも設置していたが、入館ゲートは新大学図書館で初めて設置した。これは入館者管理を行うと同時に、入館者統計を得ることにより図書館運営に反映させるためであった。入館のためには図書館カードを必要としたが、学生証と図書館カードを一体化して学生の利便性を確保した。

また、大学の下に新大学図書館アート検討委員会を1995（平成7）年5月に設置し、新大学図書館のアート計画を検討した。図書館は利用しやすいもとより、機能性を含めたアメニティー性の高い空間の提供を目指していた。このことから、アート計画を進めるにあたって、時計台との連続性を持った新大学図書館は、キャンパスの中でこれからも関西学院のシンボルとして親しまれる空間であり続けることを願った。同年12月には、検討委員会の下に、より具体的な検討を行う新大学図書館アート選定委員会を発足



聖句（ヨハネによる福音書 第8章31、32節）

し、作者、作品の選定にあたった。アート計画に対する予算は、図書館建築経費に見込まれていないため、別途、新図書館建設検討委員会（院連）での承認を得る必要があった。選定された作品は、新大学図書館第2期工事完成時に図書館の内外に設置された。作品は、「聖書」や関西学院の校歌に謳われる「風」、「光」、「力」をテーマとした構成になっている。野外作品は、図書館を取り巻く豊かな緑と自然の光を基本とした景観の形成に主眼が置かれた。アート作家は、兵庫県、阪神間在住、もしくは卒業生の方々と、作品はすべてオリジナルとした。

また、関西学院のいくつかの建物には聖書の句が刻まれ教育の姿勢が示されている。新大学図書館においても入口壁面にヨハネによる福音書第8章31、32節の聖句「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」を刻んだ石版が埋め込まれた。書は宮本竹逕氏によるものである。

（10）阪神・淡路大震災と被災からの迅速な回復

1995（平成7）年10月の第1期開館に向けて、図書館の第1期建設工事が行われている時期の、1995（平成7）年1月17日、午前5時46分に、兵庫県南部に未曾有の大地震が発生した。この大地震は、発生が早朝で、図書



倒壊した書架



散乱した図書

館の開館時間前であったため、利用者や図書館員への被害はなく、図書館の被害も、図書の落下や散乱、書架の倒壊等があったものの、甚大でなかったのは幸いであった。

図書館の図書資料に被害が少なかった理由としては、主要な書架が積層書架であったためである。積層書架は建物構造の一部を構成しており、書架と建物が固定されていてかなりの強度がある。そのため、書架の倒壊や資料の散乱は少なかった。しかし、据置式の書架であったカレント雑誌架や書庫の狭隘化対

策のために通路等に仮置きした書架が倒壊し被害が出た。また、地下階の保存書庫に設置していた電動集密書架は、かなり斜めに歪んでしまった。

震災の翌日から、出勤できる図書館員により早期復旧をめざし、落下した図書や雑誌の整理等を精力的に行うことで、1月23日より部分開館を実施し、2月13日には全面復旧を果たすことができた。

また、開館時間の延長等を実施して、定期試験や追試レポート等の準備のための学習環境を整えた。

当時、新大学図書館を建設中であり、この震災での貴重な経験を生かし、書架等を頭つなぎにするなど、地震対策について工夫が施されたものとなった。

図書館では、この大震災以後、阪神・淡路大震災に関連した図書を網羅的に収集した。当初は、これらの図書を主題別分類により配架していたが、震災から10年を経た2005（平成17）年に配架方法を変更し、これらの図書を1ヵ所に集めた「阪神・淡路大震災関連図書資料」コーナーを設置した。

以下に、地震直後の図書館の動きを時系列でまとめておこう。

【1月17日】

震災当日、出勤できた図書館員（アルバイト職員も含む）は78名中の17名であった。出勤した職員は、図書館の被害状況を確認した後、各人の自宅の被害確認や整理のこともあり、事務部長の指示により全員午後1時頃帰宅した。

【1月18日】

図書館員の出勤状況は、学院周辺に在住する者を中心に約25名であった。図書館員の安否情報の収集を行い、特に、西宮市以西の職員の状況把握に努めた。

正午すぎ、出勤していた全員が館長室に集合し、事務部長より、震災対応のため臨時に設置された全学連絡会での決定事項等の報告があった。午後1時から本格的な被害調査を各課別に行った。

図書館員の被災状況は、甲東園、仁川、小林、逆瀬川、西宮北口周辺に

在住する者の家屋の被害が甚大であり、芦屋、神戸在住職員の安否が気づかれた。そして、館長の他、職員3人の家が全壊したことが判明した。電話が不通になったため、連絡がつかない者も多かった。図書館の被害として、書架の倒壊、図書の散乱（約5割）および保存書庫の電動集密書架の損傷等が確認できた。

なお、図書システムについては、ホストコンピュータに異常は見られなかった。出勤した職員の昼食は、被害の少なかった職員がおにぎりやパン等と飲み水を持参し、館長室に全員が集まって取るということが27日まで続けられた。

午後3時、遠方からの勤務者は帰宅した。午後4時には全員が帰宅した。

【1月19日】

午後から各課で館内施設の被害状況を綿密に調査した。職員2人の近い親戚に犠牲者のあることが判明した。

【1月20日】

図書館員全員（アルバイト職員を含む）の安否がようやく確認された。

図書館員の出勤状況は、約6～7割程度になった。しかし、神戸方面の在住者は、交通手段が確保できないため出勤できなかった。

図書館は、被災した学生に対し、学習の場を提供するため、1月23日からの第2閲覧室の開室（9:00～16:00）を決定し、開架室、雑誌資料室の復旧作業に努めた。

また、関西大学、同志社大学、立命館大学にも図書館利用についての協力を求め、学生証あるいは身分証の提示で閲覧利用ができるように、関西四大学図書館相互利用協定の弾力的な運用をFAXで依頼した。

【1月23日】

図書館は閉館が続いていたが、第2閲覧室を自習室として開室（平日9:00～16:00、土曜9:00～12:00）した。

震災後初めての館長室会が開かれた。そこではまず、図書館の被害状況および、図書館員の被災状況について報告された。そして、開架室、雑誌資料室を1月26日から開室することを決定した。また、大学の主要決定

事項（行事）には全面的に協力すること、全館協力体制で復旧にあたること等が確認された。

設備面では、暖房が復旧し、井戸水による水道の使用が可能となった。

図書館の被害状況を一覧表にして施設部に報告した。

また、大学から入試業務への支援依頼があり、主任（雑誌資料課）1名を入試課（1/25～3/6）へ、副主査（閲覧課）1名を社会学部（1/26～3/6）へそれぞれ派遣した。

【1月24日】

全館体制で落本の書架への戻し入れの作業を行った（2月3日に完了）。

財務部、施設部および日本ファイリング(株)による図書館の被害状況調査が行われた。

新大学図書館の建物の損害については、窓ガラス1枚が割れた程度ではとどなかった旨、報告を受けた。

【1月25日】

図書館員の出勤状況は、この頃には約8割以上に達していた。特に、神戸方面の在住職員は交通が不便にもかかわらず、長時間かけて出勤してくるようになった。

図書システム運用については、AOM（自動運転装置）に障害があったため、平日は午前10時から午後4時まで、土曜日は午前10時から正午までの運用が続けられた。

【1月26日】

開架室、雑誌資料室および第1、第2、第3閲覧室を当初の目標どおり開室した。開室時間は、平日午前8時30分から午後4時30分、土曜日午前8時30分から正午までであった。

まだ余震が続いており、各書架に「落本注意」のステッカーを貼る等の注意を行った。

関西大学、同志社大学、立命館大学から、関西四大学図書館相互利用協定の弾力的運用により、本学を全面的に支援するとの回答を得ることができた。また、大阪市立大学、筑波大学、摂南大学の図書館からも積極的に、各大学の図書館を利用してほしいとの連絡があった。

【1月30日】

開架室、雑誌資料室および第1、第2、第3閲覧室の開室時間を職員の出勤時間等を考慮して午前9時から午後5時までとした。

【2月1日～8日】

入学試験時期に入り、図書館の復旧作業を行う一方で、地方入試に多くの図書館員を派遣した。

入試期間中は、ホストコンピュータが利用できなくなったため、図書システムに関わる業務は停止した。

出納室書庫関係の復旧作業がほぼ終わり、保存書庫、特別文庫室を除き、ほぼ全面的に開館する準備が整った。

【2月9日】

出納室と雑誌資料室の利用者用 OPAC 端末が復旧した。

【2月10日】

ホストコンピュータの AOM（自動運転装置）が復旧し、貸出返却サブシステムが午前9時から午後9時まで使用できるようになった。

【2月13日】

当初の目標どおり、出納室、視聴覚室が開室し、一部書架の倒壊により利用できない図書はあったが、ほぼ全面的に機能が回復した。

1月31日までの貸出図書の返却期限日は、2月17日まで延長した。

震災に伴い、1～3年生の追試レポート締切日が3月20日となったことを考慮し、特別措置として3月末まで図書館の開館時間を、平日は午後9時（例年春季休暇中は午後6時まで）、土曜日は午後6時までとした。

【2月16日】

閲覧課主任が住宅開発チームの一員として2月20日から25日まで学生部へ派遣されることになった。

2 図書館規則－大学図書館の位置づけの変化と図書館規則の整備・細分化

図書館規則の点からみると、戦前の「関西学院図書館規則」と同様に、戦後も、名称の違いはあれ、図書館規程を中心的規程として図書館運営を行う手法が踏襲される。ただし、この時期の規程類については、組織としての大学図書館の位置づけの変化を反映して制定、改廃されたとみられるものがある点が特徴的である。

大学図書館の位置づけの変化を示す事象として、例えば、1974（昭和49）年度の年次報告に図書館運営の基本的問題として次のような記述がみられる。すなわち、「図書館の拡充、機構充実が進むにつれて、かねてから懸案であった大学の研究・教育の中心としての図書館の位置づけが関係者の理解によってようやく明確になってきた。つまり、図書館は大学図書館として正式に位置づけられ、大学長の命令系統下におかれるということである。もちろん、従来どおり学院全体の利用に供せられることに変わりはないが、正式には大学の機関になることが明らかとなったことは特記されるべきことである。」との記述がある。大学図書館が、これまでのように、関西学院の複数ある図書館施設のひとつにとどまるとの位置づけから、「大学の図書館」として大学組織を構成する機関に位置づけられ、学院の図書館施設の中心としての機能を果たすことが期待されているとの認識が共有されつつあったことを示している。

そうした変化の兆候は、すでに1956（昭和31）年1月に図書館長の選任を従来の理事会からの任命制に替えて選挙制に改める「図書館長選任規程」の制定に認められる。また、この規程によって、任期のなかった点が改められ、任期が4年とされた。この規程に基づく選挙制による最初の館長として、実方清文学部教授が第7代の館長に就任している。

その後、図書館の運営や図書費の使用に関して決定していた図書館運営委員会の位置づけにも変更が加えられた。運営委員会は、従来、図書館長の諮問機関にとどまり、図書館の内規である図書館運営委員会規定にその設置の

根拠があった。この運営委員会を大学図書館の運営についての大学レベルの審議機関に昇格させるべく、「大学図書館運営委員会規定（案）」が策定され、大学評議会で1974（昭和49）年6月7日に承認のうえ、即日施行された。

1975（昭和50）年度の年次報告には、大学図書館の位置づけと課の名称変更の記述がある。「1975（昭和50）年6月1日より、これまで図書館がもっていた学院図書館と大学図書館の二重性を改めて、大学図書館とすることとなった。またこれを機会に課の名称を変更し、庶務課を運営課に、司書課を整理課に改めた。」との記述がある。この大学図書館としての位置づけに伴い、改正された規程類は、「大学図書館規程」、「大学図書館運営委員会規程」、「大学図書館視聴覚室専門委員会規程」である。

まず、これらの規程については、条文を統一するため字句が修正されている（1975（昭和50）年5月6日大学評議会承認）。さらに、当時の「大学図書館規程」の内容が利用規程的なものであったため、これを改正して組織、運営を内容とした「大学図書館規程」とし、別に「大学図書館利用規程」を新しく制定した（1976（昭和51）年1月9日大学評議会承認）。現行の利用者サービスの基本ともなるサービス条件が整備されたのである。

関西学院が発行している「関西学院役員及び教職員名簿」を見ると、1974（昭和49）年までは、図書館は大学の組織ではなく学院の組織とされていたが、1975（昭和50）年以降は、関西学院大学の組織として取り扱われている。

また、1975（昭和50）年度の院長年次報告の中にも、機構改定として図書館の大学図書館への移行の記述がある。そこでは、「図書館の学院図書館と大学図書館の二重性を改めて6月1日付けで大学図書館とした。なお、大学以外の諸図書管理単位を含めて、新たに学院総合図書館の制度を設けた。」とあり、「総合図書館規程」が制定された（1975（昭和50）年7月10日理事会承認）。総合図書館規程は、図書資料を全学的に管理・運営するために制定された規程であり、この規程に関する事務は運営課が行うことになっている。そして、「職制」において、総合図書館長は大学図書館長が兼ねることが明記されている。

その間、特に1970（昭和45）年前後から、理事会、大学評議会、学部長会、大学図書館運営委員会のほか、館長室会をはじめとする図書館内の組織の各レベルで、図書館に関わる規程が細分化され（内規・了解事項・細則・基準・要領・申し合わせ等も含む）、大学組織の質的、量的拡大に対応できる規程の体系的整備が実施されていく。

その過程で、後述のとおり、図書館規程の役割が大きく転換される。また、現在の図書館関連規程の基礎が作られるのが、1974（昭和49）年度から1976（昭和51）年度にかけてである。さらに、この時期に、戦後に懸案事項となっていた図書等の様々な取扱のルール化が果たされている。この時期は、今日の図書館規則の骨格を構築した重要な時期であった。

この時期に至るまでも、理事会レベルでは、図書館長選任規程（1956年）のほか、図書管理規定（1971年）、図書払出基準（1971年）が策定されている。「図書管理規定」および「図書払出基準」の策定によって、図書資料の資産管理が制度化された。こうした資産管理のルール化は、経常費への国庫補助開始に伴い、文部省より私立大学会計基準が示されたことへの対応策として、1970（昭和45）年秋から財務部と協議を重ねて具体化されたものである。これによって図書管理の原則や図書管理責任者の任務が明確化された。

大学図書館運営委員会レベルでは、共同研究室図書分置規程（1953年）やこれを改訂した図書分置規定（1969年）等が策定されている。運営委員会が図書館の諮問機関から大学図書館の審議機関に役割転換されたことにより、これ以降の規程の策定は飛躍的に進んでいく。以後30年間に策定された規程の数は、開学から120年間に図書館運営に関し策定された規程数全体の三分の二以上を占めるに至っている。

特に、1976（昭和51）年制定の大学図書館規程は、それ以前の大学図書館規程とは異なり、さまざまな項目につき網羅的に定めることをやめ、別規程に詳細を委ねる手法を多用することで、あくまで総則的な規程としての役割に転換している。大学図書館規程の委任を受ける形式をとった規程には、現行規程である大学図書館運営委員会規程（1974年）、大学図書館利用規程（1976年）、大学図書館分置図書規程（1976年）等が挙げられる。大学図書

館分置図書規程は、それまで図書分置規定（1969 年）によって、各部局の管理下に置かれていた分置図書を大学図書館で一元管理することを可能にするものであった。

これらのうち、大学図書館利用規程は、さらに多数の下位規程に種々の項目についての定めを委ねている。大学図書館運営委員会レベルでは、すでに廃止された視聴覚資料利用規程（1976 年）、特殊資料利用規程（1976 年）をはじめ、現行規程では、貴重図書・資料利用規程（1976 年）などがその例として挙げられる。

こうした転換は、大学図書館が教育研究上で果たす機能が複雑化、多様化するにつれ、規程によって細部まで明確化されたルールの下で、適正かつ効率的に図書館機能を果たしていく必要性が高まったことによるといえよう。

その他、1974（昭和 49）年には、辞書類を中心とした点字図書 160 冊の購入に伴って整理要領が定められている。また、1976（昭和 51）年 2 月に産業研究所との間で「逐次刊行物保存についての申し合わせ」が締結され、図書館保存分 92 誌と産研保存分 96 誌が取り決められた。その後、この申し合わせは、紀要類の分担収集上の問題や利用条件の違いによる問題点等が多々あったことから、破棄された。

さらにまた、1984（昭和 59）年 6 月には、図書館の課題解決のために設置された 3 つのプロジェクトのひとつである、規程検討プロジェクトが発足し、規程の見直し作業が行われた。プロジェクトでは、現行諸規程の抜本の見直しと本来有すべき基準・内規の設定についての検討を行った。しかし、検討の過程で大幅な規程改正となることが判明したため、当面緊急を要する利用規程を中心とした改正と、貴重図書・資料指定基準等の館内内規を定めるにとどまった。1987（昭和 62）年に改正された「大学図書館利用規程」では、全新生入生に閲覧証を交付するなど、利用改善が盛り込まれた。また、同年には、「貴重図書・資料指定基準内規」が館長室会で決定された他、全館の鍵の使用・管理に関するマニュアルが定められている。

引き続いて、1989（平成元）年 5 月には、特別図書購入基金の運用に関する「特別図書規程」が制定され、「特別図書購入基金委員会」と「特別図書選定委員会」の設置により基金の適正な運用がはかられることとなり、「大

学特別図書選定委員会規程」が制定された。また、同年7月には「大学特別図書選定委員会内規」を制定し、大学における特別図書購入選定に関する必要事項を定めた。

また、新大学図書館の完成に向け1989（平成元）年7月に発足した「規程検討作業プロジェクトチーム」は、先送りされていた図書館規則の抜本的見直しを精力的に行った。検討された規程は1996（平成8）年10月にそれぞれの決定機関に提案された。以下、提案された規程を挙げる。

決定機関が理事会のもの

1975（昭和50）年7月制定の「総合図書館規程」一部改正

決定機関が大学評議会のもの

1974（昭和49）年2月制定の「大学図書館視聴覚室専門委員会規程」
廃止

1974（昭和49）年6月制定の「大学図書館運営委員会規程」全面改正

1976（昭和51）年1月制定の「大学図書館規程」全面改正

1976（昭和51）年1月制定の「大学図書館利用規程」全面改正

1976（昭和51）年12月制定の「大学図書館分置図書規程」全面改正

決定機関が運営委員会のもの

1976（昭和51）年3月制定の「視聴覚資料利用規程」廃止

1976（昭和51）年11月制定の「特殊資料利用規程」廃止

1976（昭和51）年11月制定の「貴重図書・資料利用規程」全面改正

また、運営委員会が制定権限を持ち、新大学図書館のグランドオープンに向けて、1997（平成9）年10月1日付で新設された規程には、「特別文庫及び準貴重図書・資料利用規程」、「古文書史料利用規程」、「マイクロ資料利用規程」、「大学図書館施設・設備使用細則」がある。そして、規程の新設と同時に館長室会が制定主体となる内規も新設されている。1997（平成9）年10月1日付で新設された内規は、「指定図書取扱内規」、「特別文庫取扱内規」、「古文書史料取扱内規」、「マイクロ資料取扱内規」、「貴重図書・資料取扱内

規」である。また、「大学図書館ホール使用に関する取扱要領」が1998（平成10）年4月1日付けで新設された。これらの他に、財務部が所管する規程であった「図書管理規程」、「図書管理規程払出基準」の改正を財務部に提案して、改正されている。

以上の図書館関連規則の制定が、適正で効率的な図書館機能の確保に寄与した。さらに、関西学院大学図書館は、図書館機能の向上を目ざして、戦前より学院外の複数の図書館関連組織に積極的に参加し、あるいは他大学の図書館等との相互協力関係を構築してきている。学院外の図書館関連組織は、他の教学部門に比して図書の管理や利用の方法につき、ある程度の共通性があるということもあって、歴史的には相当早い時期から、しかも全国レベルのものから地方レベルのものまでが立ち上げられてきた。

学院外の図書館関連規程としては、1938（昭和13）年制定の「私立大学図書館協会会則」がまずあげられる。同協会については、その後、1962（昭和37）年には、「私立大学図書館協会会費細則」や「マイクロ写真サービス相互利用に関する取り決め」等、多数の細則が策定されている。また、1947（昭和22）年に「兵庫県大学図書館協議会会則」が定められ、1971（昭和46）年5月の「兵庫県大学図書館協議会規約」および1976（昭和51）年の「兵庫県大学図書館協議会資料相互利用規約」に引き継がれている。また、1965（昭和40）年12月には、「資料の利用に関する関西四大学図書館相互協力規約」が策定され、1981（昭和56）年3月締結の「関西四大学図書館長会議規約」や「関西四大学図書館相互利用協定」、および1983（昭和58）年4月からの文献複写関連諸経費の決済について定めた「関西四大学図書館相互利用に関する申合せ事項」に引き継がれている。さらに、1974（昭和49）年には、「私立大学図書館協会阪神地区相互利用に関する協定」、1978（昭和53）年には、「阪神地区分担保存実施要項」が定められている。

3 図書費－大学図書館専用の経常的な図書費予算の確保

1949（昭和24）年度の第1回図書館評議員会記録に、「今回当局は図書館

充実のため80万円を計上。」と書かれ、さらに、このうち15万円を蔵書購入資金（故吉岡美国名誉院長、曾木銀次郎前副院長の蔵書購入に充当）とし、残り65万円を基本図書の購入に充てる旨の記載がある。この記載からすると、当時の図書費は、経常的な図書費予算としてではなく、その都度の要求により必要な金額が学院から与えられていたようである。また、1953（昭和28）年度第1回図書館委員会記録には、「本年度の図書予算は、図書館に属する正規購入費50万円、及び特別整備費60万円で大学各学部図書費は140万円である。重要な新刊邦書は図書館に於て出来るだけ購入する予定であるが、修士及び博士課程における研究施設を充実するために各学部の図書費は組織的に利用されて本学の図書の充実を計られたい。尚各学部図書費による購入図書は其都度本館に登録の手続を取られたい。」との記述がある。また、1955（昭和30）年度第1回の記録には、「新年度図書館図書購入費につき予算の説明があった。」、さらに、1956（昭和31）年には「昭和31年度図書館予算につき協議が行われた。基本図書については図書館よりカードを研究室単位に配布して希望書目の作成を依頼することになった。」との記述がある。この記録ではじめて図書館予算という言葉が使われており、この年度あたりから、経常的な図書館予算が組まれていたと考えられる。1956（昭和31）年度の予算は、各学部図書費250万円、図書館450万円であった。ただし、一部の図書館予算については選書を各学部依頼していたと思われる。

以上のとおり、戦後においても、図書館専用の経常的な図書費の配分は、しばらくなされていなかったと思われる。それ以前は、各学部図書費からの配分や、資料の購入のための特別な予算をその都度獲得して賄われてきた。また、1924（大正13）年度に始まった学生からの保証金、1936（昭和11）年度からの保証金に代わる徴収金によっても、昭和20年代後半まで図書館蔵書は構築されていた。経常的な図書費とは別に、1961（昭和36）年度から、本館蔵書の充実のために、学院関係者その他の蔵書家の蒐集を厳選して一括購入することを目的とする「特殊文庫購入基金」の設定を許されている。とはいっても、年間50万円の予算が与えられただけであった。年額200万円、オファーがあったとき速やかに手を打つことができるように常時少な

くとも 500 万円の準備金を用意しておきたいという図書館の要求には程遠いものであった。その旨の記述が 1962（昭和 37）年度の年次報告に残されている。

この「特殊文庫購入基金」は、その後「蔵書購入基金」、さらに「特別図書購入基金」へと変遷した。現在は、1989（平成元）年に制定された「特別図書規程」に従って運用している。

（1）図書館図書費の配分と配分割合の固定化

経常の図書館図書費は、図書館に備えるべき教育・研究のための基本的な図書資料および学生の学習・教養のための図書資料を購入するための図書費 A（図書館選定分）と、図書館に備えるべき高度な研究用図書資料を購入するための図書費 B（学部等選定分）の 2 つの図書費に区別して支出している。図書費 A と図書費 B は、現在、図書館図書費を 6 対 4 の割合で分けて配分している。6 対 4 の配分は、1980（昭和 55）年に既にこの割合での配分が行われている記録があるが、例えば、1969（昭和 44）年度から 1973（昭和 48）年度の 5 年間の年次報告を年度順にみると、図書費の約 54%、49%、48%、50%、52% が図書費 A となっており、年度によって配分割合が異なっている。図書費の 6 対 4 の配分は、その後、1974（昭和 49）年から 1980（昭和 55）年の間にルール化されたものと考えられる。

ところで、現在、図書費 A は、①基本図書資料費、②特別図書、雑誌バックナンバー・欠号補充、③雑誌資料費に分けて管理している。①は学部学生用の学習図書や参考図書、視聴覚資料等を購入する予算であり、キャンパス所属学部等の在学学生数に準拠して西宮上ヶ原キャンパス大学図書館と神戸三田キャンパス図書メディア館に分けている。②および③は、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館で一括管理をしている。また、資産化しない資料の購入費用（オンラインデータベースや電子ジャーナル等の購入・契約用）としては、キャンパス共通費として一定額を予算化している。図書費 A の①、②については、図書館内に館長、副館長、図書館員から成る選書組織を設けて選定している。③については、大学図書館運営委員会で各学部等から推薦のあった雑誌について購入承認を受けている。

他方、図書費 B は、各学部、専門職大学院、独立研究科等に所属する教員（大学からの個人研究費の割当対象となっている教員）数に準拠してそれぞれの組織（管理単位）に配分している。それぞれの管理単位での選書方法については、各管理単位で取り決めている。1998（平成 10）年度からは、「新大学図書館管理運営問題検討委員会」での全学的な議論を経た上で、図書費 B の発注を図書館が行うことになった。また、購入された図書資料は、原則として西宮上ヶ原キャンパス大学図書館または神戸三田キャンパス図書メディア館に配架し、各管理単位の資料室等への配架（分置）は認めていない。

新大学図書館になり、W. K. マシユース第 4 代館長の長年の主張であった、図書館への図書集中が、図書館図書費での購入分に限っては実現されるようになったといえる。

4 組織と要員－図書館機能の拡大と組織・要員配置のめまぐるしい変遷

終戦後間もない頃の図書館組織や要員については、「1949（昭和 24）年 1 月館長主簿」が現存しており、当時の東館長の覚書やメモ等から窺い知ることができる。そこに 1943（昭和 18）年の「定員規定」が転載されている。その規定によると、図書館には、館長 1 名、司書 1 名、書記 2 名、書記補 2 名、出納手 5 名、使丁 1 名とされている。

また、1947（昭和 22）年の図書館事務分掌規程では、図書館は管理部、司書部、庶務部で構成され、図書委員会および図書館長は管理部に所属し、司書部には、総務係、目録係、分類係、蔵書係、運営係が所属し、庶務部には、庶務係、会計係、雑役係が所属していた。この組織構成だけから見ると、図書館組織は、実態とは異なり、館長の下組織であることを示していない。また、この頃の専任職員数は 9 名（1948（昭和 23）年）であった。なお、同年 10 月に分館が開設されたことから、分館にも職員を配置している。1948（昭和 23）年度の「図書館報告」に、執務事項として、「本館事務は年度末に於いて本館総務（司書）1 人、分類係 1 人、目録係 2 人、出納係

2人、庶務係1人（計7人）、分館総務（司書）1人、出納係1人（計2人）之に当たる」と書かれている。また、1949（昭和24）年9月の名簿では、館長（東晋太郎）、司書（入交光三）、司書（青木福太郎）、肩書きのない職員8名、嘱託1名（1946（昭和21）年に復職した中島猶治郎）であった。

こうした図書館組織が館長の下で組織として明確に位置づけられるのは、1951（昭和26）年からのことである。館長の下に整理部門、庶務会計部門と運営部門の3つの部門からなる組織が確立された。この年の職員数は、本館に9名、分館に2名の計11名であった。

1955（昭和30）年12月には、1943（昭和18）年以来図書館長を務めてきた東第6代館長が病気退任し、新たな館長の任命が必要となった。それまで館長は理事長が任命していたが、1956（昭和31）年2月に初めて館長選挙が実施され、4年の任期制と定められた。選出された実方第7代館長は、蔵書、図書館員とその組織、施設をはじめ、図書館全般にわたる整備充実を学内各方面に力説し、学院当局に提出した3通の増員申請書の写しが残されている。1956（昭和31）年5月に私立大学図書館協会によって策定された「私立大学図書館改善要項」や10月の「大学設置基準」（文部省令）の影響が考えられる。

1958（昭和33）年には、それまでの部門を廃して「係」を置き、庶務係、司書係、閲覧係の3係とし、それぞれに主任という役職者を配置した。このことにより磯部泰治から続いてきた役職としての司書職制度は廃止された。この時、司書であった芝英八郎は、閲覧係主任となっている。ただし、このことによって、図書館業務における専門職としての司書の存在意義が否定されたわけではない。現行の大学図書館規程には、図書館の構成員に「事務職員（司書等専門的職員を含む）」との文言がみえる。翌1959（昭和34）年には、庶務係に主任1名、書記2名、司書係に、主任1名、司書補2名、書記3名、書記補1名、閲覧係に主任1名、書記7名が配置され、専任職員数は、1951（昭和26）年の11名から18名に増員されていることが分かる。また労務員も3名が配置されていた。その後、1968（昭和43）年には、専任職員数が21名となり、1970（昭和45）年度末には、専任職員24名、臨時職員6名、アルバイト職員3名の計33名となっている。

この間、1960（昭和35）年には、図書館側からの従前の要望であった図書館長の大学評議会入りが実現している。1961（昭和36）年4月には、図書館委員会を図書館運営委員会と改称した。さらに、図書館業務の量的、質的拡大に伴う図書館組織・要員の拡大に対応して、3係制から3課制（庶務、司書、閲覧）に改編されている。そして、1968（昭和43）年9月には、課長を統括する次長職が設けられた。

図書館業務の量的、質的拡大という点からいえば、その後も、1974（昭和49）年6月には、図書館の新しい研究、教育機能の拡充をはかるため語学関連の視聴覚資料を収集整理し、提供する視聴覚室が開設され、視聴覚室は閲覧課業務として位置づけられた。

また、1975（昭和50）年には、既述のとおり、図書館を、関西学院の図書館施設（組織）のひとつとしての位置づけから、大学組織としての図書館の位置づけへの変更が明確化されたのを機に、それまでの「課」の名称を、庶務課から運営課に、司書課から整理課に改めた。この時の専任職員数は、27名であった。この3課制は、1994（平成6）年3月末まで続くことになる。その他、1976（昭和51）年4月からは、運営課と整理課それぞれで行われていた雑誌の受入、整理業務を閲覧課雑誌室にて一元的に処理し、雑誌の受入、整理から利用提供まで一貫した業務として効率的に処理することとした。また、この時期、館長と次長の専掌事項とされていた選書に、一般職の図書館員が参加することとなった。この図書館員による選書が実現するに至った動機や背景には、学問領域の細分化、出版点数の増大、図書費の増額、多様な学部・学科出身の図書館員の増加などを挙げることができる。この図書館員の選書参加は画期的なことであり、図書館員の自覚を促す契機となった。このとき「図書館選書業務実施要領」が策定され、実運用を踏まえ、修正されながらも、現在の選書の基本となる選書体制に整備されていた。

さらに、1983（昭和58）年には、副館長制、事務部長制が導入された。この時の副館長は1名であったが、2001（平成13）年の第19代井上館長就任の時から、神戸三田キャンパスを視野に入れて、2名の副館長制となっている。1983（昭和58）年時点の専任職員数は、31名であった。

翌1984（昭和59）年には、閲覧課業務であった古文書関連業務（受入、整理、閲覧に関する業務）を整理課の業務とした。この時以降、古文書業務には嘱託職員1名が配属されることになった。古文書業務は、1994（平成6）年6月からは再度、閲覧課に移管された。

1984（昭和59）年5月には、図書館の管理・運営責任体制を強化するため、従来の館長・副館長・管理職者・監督職者によって構成されていた「館長打合せ会」を廃止し、館長・副館長・管理職者で構成する「館長室会」が設置された。また、館内3課の業務調整・連携を緊密にするために、管理職者と監督職者の職員のみで構成する「業務連絡会」も設置された。

1994（平成6）年4月には、雑誌資料部門の充実をはかるため閲覧課から雑誌室が分離独立し、雑誌資料課となった。これにより、図書館は4課体制となった。この4課制は、2002（平成14）年度まで続いた。1994（平成6）年時点の専任職員数は、34名であった。

ところで、1995（平成7）年4月から、神戸三田キャンパスの開設に合わせて、そこに大学図書館分室が設置された。神戸三田キャンパスの事務組織は、西宮上ヶ原キャンパスの部局分散型の組織とは異なり、事務統合型の組織であった。そのため、大学図書館分室職員も神戸三田キャンパス事務室に配属されるが、図書館業務の指示命令は大学図書館長から行われるという業務形態をとっている。大学図書館分室担当の専任職員数は、1995（平成7）年4月から1999（平成11）年5月までは2名、1999（平成11）年6月から2001（平成13）年5月までは3名、2001（平成13）年6月からは4名となっていたが、2011（平成23）年4月からは3名の体制に戻っている。

(1) 本格的な開架制の開始

戦前と戦後におけるわが国の図書館運営上の大きな相違は、開架制の実施の有無であろうといわれている。本格的な開架制の実施が1953（昭和28）年9月であったことを、同年の6月および9月の図書館委員会の記録で知ることができる。6月の図書館委員会では、委員より図書の紛失や貸出等に関して質疑があったと記録されている。その質疑の中で、学生が自由に図書を手に取ることができる開架制について委員から懸念が表明されていたものと

みられる。

学院創設当時の図書室（「関西学院書籍館」）においても、おそらく壁面に書架を配置し、中央に閲覧座席を設けたいわゆる開架室と同様の方式が取られていたとみられる。また、1922（大正11）年に、ブランチ・メモリアル・チャペルに開設された「関西学院附属図書館」の閲覧室でも、準開架式（蔵書の三分の一は閲覧室のガラス戸付書架に収納）といわれる方式が採用されていた。しかし、これらは図書館の規模からくる必然の結果といえる。1911（明治44）年発行の「私立関西学院附属図書館規則及図書分類綱目」の第2章閲覧心得第8条に「館員の外猥りに書庫内に入るを許さず」と規定して既に閉架式となっている。その意味で、関西学院においても、戦前には、本格的な開架制が存在したとまではいえない。

1953（昭和28）年9月に新設された「開架閲覧室」は、書庫にあった学習参考書約4,000冊を主とする図書を大閲覧室の北隅に設けた間仕切り内に移し、これを学生が自由に閲覧できるようにしたものであった。興味深いのは、1953（昭和28）年9月の図書館委員会が、開架閲覧室で開催されたことである。現在では、図書館内の利用者エリアでの会議など考えられないことである。この時は、新設の開架閲覧室を委員にお披露目することも兼ねていたのではないかと考えられる。そして、1955（昭和30）年に時計台の両翼が拡張され、それに伴って大閲覧室も広くなり、開架閲覧室への蔵書の追加搬入も行われた。

さらに、1963（昭和38）年11月に完成した新館増築工事により、翌年1月から、新しく2階に完全自由接架方式の開架書庫が設置された。また、1971（昭和46）年には図書館第1次増築が行われ、この時、2階に2万冊収容可能な開架書庫と開架事務室が設置された。開架事務室と開架書庫は専用の通路で結ばれた。開架書庫の開設を機会に、開架図書（学習書・教養書・参考図書・雑誌類）を大幅に増強・整備するとともに、利用度の低下した図書や汚損度のひどい図書を順次取り除き（必要なものは補修製本し）、全面的に図書のリフレッシュをはかった。開架書庫は主として教養科目を学ぶ学部学生の学習を支援する施設として位置づけられた。

その後、1974（昭和49）年には、雑誌業務専用の雑誌室を閲覧室内に設



1960年頃の閲覧室

置したことにより、開架書庫内に置かれていたカレント雑誌棚が雑誌室に移された。と同時に、閲覧室内にあった閲覧机と椅子が開架書庫内に移され、39席の閲覧座席を設置することができた。1995（平成7）年に新大学図書館が1次開館し開架書庫内資料を移設するまでは、開架書庫を「開架室」と呼称することもあれば、また、開架書庫と開架書庫内の閲覧座席をあわせて「開架室」と呼称することもあった。1984（昭和59）年には、開架書庫に32,000冊の図書が配架された。これだけの図書の配架は、部屋の広さからいえば、収納容量の限界を超えていた。そのため、図書を規則的に配架することができず、「書庫見取図」を作成して図書の配架場所を利用者に周知して対応した。また、同時に図書のリフレッシュを大規模に行った。

ところで、開架室の利用については、荷物は持って入ることができず、ロッカーが設置されていた。また、開架室に入るには必ず開架事務室（カウンター）前を通り、その都度、閲覧証の提示が求められた。図書館からの広報等では利用の促進を謳っていたものの、実際には、利用しにくい施設であったといえる。

(2) 雑誌室の再開および雑誌資料課の設置

ア 雑誌室のはじまり

第8代楠井館長の時代の1962（昭和37）年12月半ばに、図書館の懸案であった新館増築工事が着工となり、1963（昭和38）年11月15日に完成した。また、正面玄関から入って右手にあった1階旧準開架室を改装して、64席を持つ雑誌室が設置された。

1966（昭和41）年には、関西四大学図書館および兵庫県大学図書館協議会加盟館の間で、それぞれ外国語雑誌購読リストを交換して、相互利用の便をはかることになった。1969（昭和44）年夏以降、大学紛争を契機に設置されたC. O. D. を通じて表明された学生からの図書館への提案・要望により、旧雑誌室の一部を改装し、閲覧室（54席）として1970（昭和45）年1月半ばより開放することになったため、以後数年間、雑誌を専掌する部屋はなくなった。

1970（昭和45）年6月30日に、図書館の近代化を目標とした「図書館改革専門委員会答申」が、小寺学長宛に提出された。この答申の中で、雑誌について①雑誌の受入タイトル数の増強、②雑誌書架の増設、③所蔵雑誌目録の編集、④Fuji ミニコピー・リーダー・プリンター Q3の新設という改善項目を盛り込んだ。これらの改革の動きの中で、1971（昭和46）年5月には、「関西学院大学図書館雑誌目録」が刊行された。タイプ印刷の暫定版であったが、雑誌サービスの向上と管理の充実をめざしたものであった。あわせて同月には、4年生の書庫内への入庫を認め、卒業論文作成上の便宜をはかることになった。また、同年11月には、第1次増築により第3書庫の増築が完成し、数年来の資料収容スペースの狭隘さを解消するための施設面での改善がはかられた。雑誌も、新刊和洋雑誌480種および既刊和雑誌のうち、利用度の高い雑誌約1万冊を開架書庫内に収容できるようになった。

その後、1973（昭和48）年11月には、閲覧室の拡充をめざした第2次増築が完成した。当時の平面図によると、図書館2階に雑誌（カレント）という表示がある。従来から開架書庫に置かれていた展示板付カレント雑誌棚とビジョンホールの一部を開架閲覧室内に移設し、閲覧座席39席を設置した。

同年12月に発行された図書館報「時計台」No.6（1973. 12）には、「雑誌

はどのように使われているか?－雑誌アンケート結果－」が掲載された。10月22日から25日の短期間ではあったが、470名の学生にアンケート調査用紙を配布し、391名からの回答を得たものであった。その結果、89%の学生が「図書館の雑誌が役立っている」と回答している。

イ 雑誌室の再開

1974（昭和49）年4月に、図書館正面玄関から入った2階にある開架室入口右側の閲覧室内に、雑誌室が設置され、雑誌の集中管理をめざしてサービスを再開した。担当職員は4名であり、図書館報「時計台」No.7（1974.6）に「雑誌室オープン－雑誌サービスの充実をめざして－」の記事が掲載されている。同年7月には、図書館は、「関西学院大学所蔵雑誌総目録1972（昭和47）年10月現在」を刊行している。また、上記アンケートで学生から要望のあった雑誌コンテンツ（目次）サービスを和雑誌36誌について開始し、貸出手続の様式も改定した。他には、シャープ・カードセクターHAC-220を導入し、雑誌の誌名管理と統計作成を行った。後年、このセクターで使用したマークカードだけが残り、雑誌の誌名検索性カードとして長期にわたり事務利用された。さらに、1975（昭和50）年5月には、「雑誌室ガイド」を作成配布し、本格的に雑誌利用の広報活動を開始した。

雑誌資料の収集面では、1976（昭和51）年2月に、産業研究所との間で、逐次刊行物の効果的な保存・利用を行うために、「逐次刊行物保存についての申し合わせ」を結び、経済・商業系雑誌・大学紀要の分担収集・保存を実施した。図書館は92誌、産研は96誌を対象として収集・保存を行った。なお、この申し合わせは、1987（昭和62）年頃まで実施された。

また、雑誌の整理については、1976（昭和51）年4月に運営課と整理課で担当していた雑誌の登録・整理業務を雑誌室に移管し、雑誌業務の一本化を達成した。雑誌原簿を図書原簿と別に作成し、製本雑誌の請求記号ラベルを廃止した。あわせて白書類73種を開架室から雑誌室に移管し、雑誌室作成の「白書一覧」を館内各カウンターに備え付け、利用者の便宜をはかった。

雑誌の利用提供については、さらに、1976（昭和51）年に3M社製のマ

イタロリーダープリンターを導入し、鮮明なドライコピーを提供できるようになった。また、1977(昭和52)年度には、私大助成の購入資料として、“The New York Times”(創刊 Sep. 1851-Dec. 1976)のマイクロフィルム2,893リールと冊子形式のIndex 117冊を受入れた。そして、1978(昭和53)年4月には、私立大学図書館協会阪神地区協議会の「新聞、週刊誌の分担保存協定」に加盟して相互利用サービスの向上をはかることになった。

ウ 雑誌サービスの改善

関西学院大学は、1978(昭和53)年度から、学術雑誌総合目録編集事業に参加し、「自然科学欧文編改訂版」400タイトル分および「人文・社会科学欧文編改訂版」の1,278枚分のデータシートを東京大学情報図書館学研究中心に提供した。1983(昭和58)年7月にも「和文編」の2,625件のデータを提供し、1985(昭和60)年11月には「欧文編」3,621件のデータを提供している。

1979(昭和54)年度には「雑誌室における収書方針」を定め、公表した。この収書方針は、収集計画、収集の分野・範囲、選択の基準、受入処理の方針および方法を示したものであった。あわせて、新着雑誌やパンフレットについて見直しを行い、展示棚を利用しやすくした。また、懸案事項であった保存書庫の雑誌の配架直しや所蔵雑誌の在庫調査を実施した。1980(昭和55)年には、3階書庫に仮置きし、未整理のままであった寄贈雑誌を製本し、資産化したため登録冊数が急増した。1983(昭和58)年度には、雑誌室内にコイン式複写機を設置し利用の便をはかったことで、貸出冊数はやや減少した。雑誌の利用サイクルに鑑み、予約保留期間を3日から1日に短縮する図書館利用規程の一部改正を行った。また、第3書庫3階の古文書室をマイクロ資料保管室として空調付きの書庫とするための工事が認可され、その準備としてマイクロ資料の在庫点検を実施するとともに32ケースのキャビネットを購入した。

1984(昭和59)年度には、和雑誌のコンテンツシートを増加させ、また、洋雑誌のコンテンツサービスを開始した。さらに、新聞コピーについて便宜をはかるために、1階新聞閲覧コーナーに前日と当日の2日分配架していた

新聞を当日分のみの配架に変更した。このころになると、雑誌書架スペースが狭隘化し、日常的に書架調整作業を行わなければならなかった。しかし、狭隘化がある反面、教員、研究者からの雑誌資料へのニーズは増加し、1988（昭和 63）年度には、バックナンバーの購入予算として 300 万円を確保し、購入点数が飛躍的に増加した。

1988（昭和 63）年夏には、以下のとおり雑誌の利用環境の改善を行った。

- ① 雑誌閲覧座席を 12 席から 86 席に増設した。
- ② 照明設備を改善した。
- ③ 新刊雑誌、製本雑誌の配架数（和雑誌 150 タイトルを購入し、大学紀要 200 タイトルを受入）を増加した。
- ④ 新聞展示架を雑誌閲覧室に移設し、閉館時までの利用を可能にした。
- ⑤ 授業のある平日には雑誌室カウンター利用時間を午後 5 時から 6 時に延長した。
- ⑥ 開架室、雑誌閲覧室の 2 ヲ所に BDS（ブックディテクションシステム）を設置した。これによりバッグ類の持込みを可能にし、従来からあったロッカーを廃止した。

エ 雑誌目録の刊行

1983（昭和 58）年 4 月に、「関西学院大学図書館所蔵雑誌目録 1982（昭和 57）年 9 月末現在」を刊行した。予算の関係で全教員に配布できなかったが、雑誌利用のための基本的な検索用ツールとなった。この冊子目録は 1972（昭和 47）年度版の改訂で、以降、5 年を目処に改訂版を発行し、その間は毎年、増加目録（追録）を作成した。追録は、1984（昭和 59）年 11 月、1985（昭和 60）年 3 月、1986（昭和 61）年 3 月、1987（昭和 62）年 3 月に発行し、改訂版として、「関西学院大学図書館所蔵雑誌目録 1988（昭和 63）年 3 月末現在」を 6 年ぶりに発行して、全教員への配布を行った。また、この雑誌目録の追録を 1989（平成元）年 3 月、1990（平成 2）年 3 月に発行した。

1992（平成 4）年 3 月には、後述する「雑誌管理サブシステム」導入の成

果として、「関西学院大学図書館所蔵雑誌目録（1991（平成3）年11月末現在）」を刊行した。この目録は、学術情報センター総合目録データベースの書誌情報を使用した。その後も、「関西学院大学図書館所蔵雑誌目録（1991（平成3）年11月末現在）」の追録を1993（平成5）年3月、1996（平成8）年3月に発行した。

オ 雑誌管理サブシステムの稼働

雑誌の受入整理・蔵書管理を行う雑誌管理サブシステムについては、1986（昭和61）年に契約・発注・受付業務に必要な初期データ6,474件を作成し、1987（昭和62）年には、蔵書管理に必要なデータ54,488件を作成した。1988（昭和63）年度には、雑誌管理サブシステムの確認および運用テストを行った。この頃、図書館配架の和雑誌32,000冊にOCRラベルを貼付した。同年7月に、全プログラムが完成し開発を終了した。その後、1989（平成元）年度に、雑誌管理サブシステムの契約、発注、受付チェック、製本等に使用する初期管理データの入力や雑誌蔵書データの遡及入力を行い、図書館配架の洋雑誌50,000冊にOCRラベルを貼付した。1990（平成2）年10月から雑誌管理サブシステムのうち製本雑誌受入を、1991（平成3）年1月から受付チェックインを稼働した。同年12月までに登録完了した雑誌の所蔵データを遡及入力し、すべての未製本（From-to）データと図書館配架分製本データをロードした。これにより、雑誌管理サブシステムは全面稼働し、雑誌貸出・返却手続も機械化された。

また、1991（平成3）年11月に、学術情報センターのILLシステムモニター館として試験運用に参加した。さらに、1992（平成4）年1月からは、外国語雑誌について、書店の提案する新配送方式を採用した。発注から受入までの期間短縮をめざし、利用者への外国語雑誌提供の便宜をはかった。雑誌管理サブシステムを導入したことにより、これまで数ヵ月を要していた学術雑誌総合目録改訂調査業務が短期間で処理できるようになった。また、同年には図書館配架分の製本雑誌全冊にタトルテープを貼付した。

1993（平成5）年度には、学術情報センターから「学術雑誌目次速報データベース」の試験運用について依頼があり、目次データを作成し提供した。

この事業は、この後も継続することになった。

カ 逐次刊行物課の設置計画案の策定

1990（平成2）年5月7日に新大学図書館に向けての逐次刊行物課設置計画書が館長室会に提案された。計画書には資料として、①他私大逐次刊行物部門の比較、②逐次刊行物の収集範囲とタイトル数、③逐次刊行物業務の概要（業務分担表）、④逐次刊行物課設置時期と段階的人員配置計画が添付された。この計画書は、取扱資料の範疇を雑誌から逐次刊行物に拡大する計画であり、以下の内容が記されていた。

- ① 利用の多い逐次刊行物、雑誌については、未製本雑誌と製本雑誌を隣接して配架する。
- ② 未製本雑誌の配架を現在の3,500タイトルから5,000タイトルに増加する。
- ③ 新聞は各国の代表紙50紙を配架する。

新大学図書館に向けての収書計画分として購読予約を行った外国語雑誌は、255タイトルであった。また、新大学図書館建設に伴う製本雑誌の返還については、1990（平成2）年度に各部局図書室から申請があり、1992（平成4）年度に準備を開始した。新大学図書館の第2期工事部分のBM階集密書架の完成に伴い、1997（平成9）年3月と8月に法学部、商学部、理学部、宗教センター、総合体育館、情報処理研究センター、教職課程室の分置製本雑誌22,893冊を受け取った。

キ 雑誌資料課の設置

1994（平成6）年2月18日の理事会において、1994（平成6）年4月から、閲覧課雑誌室を雑誌資料課として分離独立させることが承認された。新大学図書館の開館に向けての諸準備をはじめ、研究資料として極めて重要な学術雑誌を中心に効果的な運用方法等について具体化をはかり、利用サービ

スの向上に大きな役割を果たすことが期待された。なお、雑誌資料課という名称は、「逐次刊行物」という一般にはわかりにくい名称よりも、利用者になじみのある「雑誌」がよいと判断されたことによるものであった。

雑誌資料課の業務内容は、選書、受入、整理、製本、装備、利用サービス等である。発足当時の課員は、課長（事務部長兼務）1名、主任1名、一般職4名、アルバイト職員6名であった。雑誌資料課では、従来から図書として取り扱われていた年鑑、年報などの継続図書資料を雑誌資料として一元管理し、図書よりも簡易な整理を行うことによって、利用者への迅速な提供が可能となるよう試みた。しかし、海外発行の年鑑、年報については実施することができず、国内発行の資料のみ雑誌資料として管理することになった。

1995（平成7）年1月17日に発生した阪神・淡路大震災によって、保存書庫の書架が損壊し、雑誌資料の約半数が利用できなくなったため、文献複写業務のうち受付業務に制約が生じた。雑誌資料課の閲覧設備も多くが損壊し、雑誌の提供サービスは大きく後退せざるを得なかった。1995（平成7）年10月には、新大学図書館が第1期開館し、全面開架方式による利用サービスを開始した。利用窓口は一本化され、貸出返却業務が閲覧課に移管された。雑誌の貸出については、図書と同様に館外貸出も行っており、未登録雑誌（カレント雑誌）は1日、登録済雑誌（製本雑誌）は1週間、貸出冊数は合計4冊以内であった。利用相談業務等のレファレンス業務は、閲覧課と雑誌資料課各1名ずつの共同体制で進められた。1997（平成9）年10月の新大学図書館のグランドオープン時には、新聞の充実をはかり、国内紙6紙、国内英字紙4紙、海外紙20紙になった。また、2階のラウンジには、教養雑誌60タイトルと地方紙・スポーツ紙10紙の配架を始めた。なお、このグランドオープンを機に、雑誌は、館外貸出を行わずに館内に常設し、必要な場合は館内に設置しているコピー機で対応してもらうことになった。これは、雑誌は利用が重なることが多く、1冊の雑誌を多くの利用者に利用してもらうためであった。

ク 図書館業務の見直しと課の統合

1990年代初頭から、外国語雑誌購読価格の高騰（シリアルズ・クライシ

ス)の傾向が次第に強まった。図書館では毎年図書館図書費から一定額(20万円)を各学部等の管理単位に、新規の外国語雑誌を購入するための予算として計上していたが、高騰化を懸念して、1998(平成10)年の購入分からは、その予算については半減させることで対応せざるを得なくなった。また、1998(平成10)年度には、外国語雑誌購読タイトル数の見直しアンケートを実施し、この見直しは以後2回実施され、外国語雑誌購読タイトル数を削減することで購読価格の高騰に対応せざるを得ないことになってしまった。2000(平成12)年度には、少しでも図書費予算を効率的に運用する方策として、外国語雑誌出版社 Elsevier 社と雑誌 20 タイトルについて直接取引を開始した。また、2001(平成13)年度は円安傾向が追い討ちをかけ、2002(平成14)年度の外国語雑誌購読価格が20%前後高騰するという事態となり、外資系取次店である Swets 社と契約し、少しでも購読価格を抑える努力を行った。

また、神戸三田キャンパス第2期整備計画において理学部が神戸三田キャンパスに移転することに伴い、2001(平成13)年度に雑誌資料課で移転資料の選定を始め、2002(平成14)年度には移転資料の登録と装備を行った。

また、1999(平成11)年11月から電子ジャーナルの提供を開始したが、これに加えて、2000(平成12)年4月からは FirstSearch の WEB 上での提供を開始した。2002(平成14)年度からは、国立情報学研究所が進める紀要の電子化計画に図書館として参画し、学内各部署の協力を得て著作権処理済みの紀要を送付した。

2003(平成15)年4月には図書館の組織が統合され、従来の4課体制(運営課、図書情報課、利用サービス課、雑誌資料課)は2課体制(運営課、利用サービス課)となり、雑誌資料課の収集・整理機能は運営課に、利用サービス・相互利用機能は利用サービス課にそれぞれ吸収され、現在に至っている。

(3) 視聴覚室の開設と視聴覚室専門委員会の設置

視聴覚室は、1974(昭和49)年6月3日に、旧図書館(時計台)1階南側部分に学生の語学学習を支援する目的で設置され、業務を開始した。1974

（昭和 49）年 3 月に運営委員会の下に視聴覚室専門委員会が発足し、準備を進めていた。視聴覚室には学生が視聴覚資料を通して語学を中心に自習できる設備が設置された。開設当初の設置ブースは、カセットテープ用 30 席、スライド用のサウンドプロジェクター用 6 席であった。また、視聴覚室業務は閲覧課業務として位置づけられたが、資料の発注から、整理、利用まで一貫して行った。

視聴覚資料利用規程は、1976（昭和 51）年 3 月 10 日に制定され、新大学図書館グランドオープンに向けて 1997（平成 9）年 9 月 30 日付で廃止された。また、大学図書館視聴覚室専門委員会規程は、1974（昭和 49）年 2 月 8 日に制定され、1998（平成 10）年 3 月 31 日付で廃止された。

視聴覚室の開設については、1973（昭和 48）年度の図書館年次報告に「かねてより総合教育研究室において準備が進められていた」と記載されている。また、1974（昭和 49）年度の総合教育研究室年次報告には「図書館内に総研よりの答申にもとづき、視聴覚室開室の準備が進められ. . .」と記載されている。このことから、総合教育研究室の主導のもと図書館に設置されたといえる。従って、1974（昭和 49）年 2 月 8 日の大学評議会において承認された視聴覚室専門委員会は、図書館長を議長とするものの、委員については、総合教育研究室から推薦された委員および学長から委嘱された委員で構成されていた。設置の経緯はともあれ、図書館に新しい研究、教育機



視聴覚室のブース

能の拡充がはかられたことになった。

1976（昭和 51）年 1 月 9 日の大学評議会で、視聴覚室を図書館業務の一環として自主的に運営するため大学図書館視聴覚室専門委員会規程を改正した。この改正で、委員の構成が図書館長の推薦する委員と、総合教育研究室の推薦する委員の 2 本立てとなった。この総合教育研究室からの推薦委員については、専門委員会が廃止される 1997（平成 9）年度まで継続された。

視聴覚室では、視聴覚室専門委員会で選定された主に語学関係の視聴覚資料を発注、収集、整理し、提供した。対象とした資料類は、当初のカセットテープ、スライドにオープンリールテープ、レコードが加わった。その後、ビデオテープや CD、LD 等が販売されるようになると、それらも収集範囲とした。資料はすべて消耗図書費で購入した。

視聴覚資料は、当初は室内での利用のみであったが、1976（昭和 51）年 4 月からはカセットテープの館外貸出を開始した。また、1977（昭和 52）年 4 月からは、著作権で認められている範囲内でのカセットテープのコピーサービスを開始した。しかし、1979（昭和 54）年度をもってこのサービスを廃止した。

視聴覚室では、利用者サービス向上のために、視聴覚室と利用者を結ぶ新しい試みとして 1977（昭和 52）年 9 月に「AV ニュース」を創刊した。この「AV ニュース」は、1995（平成 7）年に第 1 期開館の新大学図書館に移設されるまで、101 号の発行を重ねた。また、冊子体の「視聴覚室資料目録」として 1977（昭和 52）年 3 月末現在の所蔵目録を初めて発行した。その後、増補版もしくは改訂版の発行を重ね、1986（昭和 61）年版まで発行した。また、視聴覚資料の整理については、図書と同じ DDC 分類を使用するのではなく、言語区分と内容区分を組み合わせたものを使用した。この分類方法は、図書システムで視聴覚資料を登録、整理するようになった 1995（平成 7）年まで使用した。

1989（平成元）年 5 月の新大学図書館管理運営問題検討委員会に「新大学図書館 AV 関係充実計画書」を提出し、新しい大学図書館における視聴覚サービスの充実について提案し、承認された。この計画書では、視聴覚資料の収集範囲を拡大し、全主題にわたる網羅的な収集を行うこと、分類方法は

図書分類（DDC 分類）にあわせ標準的なものにする、資料の整理を図書システムで行うこと、視聴覚室専門委員会を運営委員会に発展的に吸収させるなどが提案された。これらの提案については実施された。

1994（平成 6）年度から、視聴覚室で所蔵している視聴覚資料の遡及データ作成を行い、1995（平成 7）年度には完了した。

1995（平成 7）年夏、視聴覚室は、旧図書館（時計台）から第 1 期開館の新大学図書館 2 階、現グループ閲覧室 2-3、2-4 付近に移設され、視聴覚資料利用コーナーとして仮開設した。1974（昭和 49）年に開設された視聴覚室は、20 年を経て新しい形に変更された。新大学図書館では、視聴覚資料も通常の図書と同様に選書、発注、整理された。1997（平成 9）年夏には、現在の場所に視聴覚資料利用コーナーが移され、10 月の新大学図書館のグランドオープンを迎えた。新しい視聴覚資料利用コーナーに設置されたブースは、カセットテープ、ビデオテープ、CD、LD、DVD が利用でき、座席数は 77 席であった。

視聴覚室は、語学学習を支援する施設として開設されたことから、所蔵資料は語学学習用資料が中心であった。しかし、1989（平成元）年頃から、視聴覚資料も図書館で収集する資料形態のひとつであるという考え方から全主題にわたる網羅的な収集を行うようになった。購入費目も、消耗図書費だけでなく資産化図書費でも購入するようになった。また、西宮上ヶ原キャンパスに外国語教育を多面的に支援する言語教育センターが 1992（平成 4）年 4 月に発足した。これに対応して、視聴覚室が担ってきた語学学習支援機能の移管について検討がなされた。そして、1997（平成 9）年の新大学図書館グランドオープンに合わせて、所蔵していた視聴覚資料のうち、全学開講科目となっていた英語、米語、フランス語、ドイツ語、中国語、日本語の語学関係資料（主にカセットテープ、ビデオテープ）を同センターに移管した。また、2001（平成 13）年度末には 1997（平成 9）年の一部移管に引き続き、語学学習関係の視聴覚資料はすべて同センターに移管した。従って、現在の視聴覚資料利用コーナーには、語学関連資料を除いた資料類が利用者に提供されており、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の資料収集の範囲からは、語学学習用の視聴覚資料は除かれている。

(4) 古文書室の開設と事務分掌・要員配置

古文書室は、1971（昭和 46）年 11 月に増築された旧館北側の 3 階第 3 書庫内東側に初めて設置された。これを機に、芝英八郎司書課長を中心に近世文書の整理が本格化した。芝は、同年、「近世庶民史料整理要綱」を作成し、古文書整理の基礎を築いた。

1982（昭和 57）年 4 月から新規にアルバイト職員を採用し、近世文書の整理を促進した。そして、1984（昭和 59）年には「関西学院大学図書館所蔵史料目録 第一輯（5,244 点収録）」を刊行するに至った。所蔵史料数は、1972（昭和 47）年には 3,097 点であったが、1984（昭和 59）年には 10,799 点を数えるようになった。

1984（昭和 59）年 3 月の芝の退職に伴い、同年 4 月より嘱託職員 1 名が配属された。この年度から、古文書室業務（受入・整理・閲覧）が、整理課の事務分掌となった。1985（昭和 60）年には、古文書室は、それまでの第 3 書庫 3 階から、同 4 階に移転した。これを機に、雑誌室管理となっていた古文書関係のマイクロフィルムが古文書室に移管された。1987（昭和 62）年 10 月には「古文書利用取扱要綱」が定められて、古文書の利用規則が整備された。1992（平成 4）年 5 月にはさらに改訂を加えて「古文書室史料利用内規」が定められた。1988（昭和 63）年には「関西学院大学図書館所蔵史料目録 第二輯（5,368 点収録）」が刊行された。

1994（平成 6）年には、古文書室業務が整理課から閲覧課に移管された。1995（平成 7）年 10 月の新大学図書館第 1 期開館に伴い、古文書室は 1 階南西部（現パソコン室、休憩室）に仮移転した。そして、1997（平成 9）年 10 月の新大学図書館グランドオープンでは、古文書室は 1 階北西部の特別閲覧室内に移転した。このグランドオープンにあわせて、大学図書館関係規程の制定、改廃が行われ、「古文書史料利用規程」も改定された。そして 1998（平成 10）年 3 月、「関西学院大学図書館所蔵史料目録 第三輯（4,739 点収録）」が刊行された。

5 蔵書・資料－所蔵数の飛躍的増加と図書館による全学一元管理化

1945（昭和20）年度の図書館の年間図書登録数は、1,000冊にも満たなかった。しかし、その後、年を追うに従って登録数は増加し、1949（昭和24）年度には5,000冊を超え、1958（昭和33）年度には10,000冊を超える状況になった。特に、戦後の復興期には、学院関係者から多くの寄贈図書や図書購入費の寄付があり、図書館の蔵書の基礎を築いた。1947（昭和22）年、1948（昭和23）年の両年度には、World Church Service より計496冊の洋書が寄贈された。この寄贈は、学院内外に大きな反響を呼んだ。また、戦時中の欠号を補充する洋雑誌27種1,588冊のバックナンバーが、他大学に先んじてアメリカから到着し、外部からの利用者が絶えなかったようである。

また、この時期には、本学の特徴的なコレクションとして位置づけている特別文庫（ただし、この時期には、特殊文庫と呼称されていた。）を構成する図書の寄贈が多々あった。1949（昭和24）年にはオウエン研究、ウォルストクラフト研究をしていた本学教授北野大吉博士が収集していた資料類（購入費を提供した本学同窓の柴田享一氏にちなみ「柴田文庫」と命名）が挙げられる。1959（昭和34）年には、本学の元財務部長であった丹羽俊彦氏により、安喜子夫人収集の近代短歌関連資料の寄贈があった。丹羽安喜子氏は、与謝野晶子に師事し、芦屋短歌会を主宰した歌人であった。その蔵書には、創刊号から揃った『明星』を含む30種以上の短歌雑誌や多くの初版本を含む2,000冊以上の近代各派歌人の歌集が含まれていた。これらは、特別文庫「丹羽記念文庫」と命名して所蔵している。

これらの他、現在、特別文庫に指定している「栗野文庫」、「赤井文庫」、「佐藤清文庫（追加分）」も、戦後から昭和40年代までに寄贈を受けている。1973（昭和48）年には、学院関係者の著作物収集強化に関して、著書刊行時の寄贈ないし連絡を教職員に依頼し収集に努めた。

昭和40年代に入ると、年間登録数も2万冊近くになり、1980（昭和55）年度には年間登録数が3万冊になり、蔵書冊数も50万冊を超えた。1980

(昭和 55) 年度には、カナダ研究や総合コース「カナダ研究」を支援するべく、「The Literatures about Canada」を作成し、カナダ政府やカナダ大使館等からの寄贈図書を収蔵するための「カナダ文庫」を創設した。図書館の蔵書数は順調に増え続け、1995（平成 7）年には年間 5 万冊の増加、蔵書数も 100 万冊を超え、同時に貴重な図書資料、コレクションの収集も行われた。本学図書館の特徴となるこれらコレクション類は、通常の図書館図書費での購入ではなく、「特別図書購入基金」等によって購入された。特に 1997（平成 9）年にグランドオープンした新大学図書館の開館記念として、1996（平成 8）年には、「Thomas Hobbes Collection」、「British Social Policy Collection」、「Historical Social Science Literature Collection」が購入されている。それぞれ特別文庫「トマス・ホッブズ著作文庫」、「イギリス社会政策コレクション」、「イギリス社会科学古典資料コレクション」として所蔵している。

(1) 全学図書資料の一元管理化

1971（昭和 46）年度に会計基準が実施された段階で学院の「図書管理規程」が制定されている。そこでは、図書資産の全学院的な管理方式を明確にし、特に全学院図書の共通利用のために、経済的・効率的な配慮によって図書資料を管理することが謳われている。それ以来、図書館では、学内各部課の協力を得て、全学院の図書資料の一元化に向けて、年々、成果をあげてきていた。それでもまだなお相当冊数が各部局に分散管理されている状況であった。

図書資料の一元的な管理は、単に財産管理の面にとどまらず、少なくとも公費によって購入された図書資料が全学共通に利用されることを大きな目標とした。この背景には、当時の川村館長が関西四大学図書館長会議の席上で、他大学の所蔵冊数の情報を得たことが挙げられる。その情報によれば、関西大学は 86 万冊、同志社大学は 73 万冊、立命館大学は 70 万冊であり、関西学院大学は 54 万冊（そのうち、各部局で独自に所蔵されている図書の冊数が約 11 万冊）であった。学生数を勘案しても、本学の所蔵冊数が他大学に比べはるかに低い数字であった。こうした状況を改善して、図書資料を

少しでも充実した保有量とするためには、更なる努力を重ねていくこと、加えて、各部局が独自で所蔵している高度の研究用図書資料を、図書館へ可能な限り集中化していくことが、方針として定められたのである。

この方針に従って、1976（昭和 51）年 5 月の運営委員会で、1970（昭和 45）年度以前に購入され各部局が独自で所蔵している図書資料の図書館登録の推進が決定される。そして、同年 9 月から、文学部英文学科の図書館未登録図書約 4,000 冊の整理および図書館での配架が行われた。1978（昭和 53）年には、英文学科に引き続いて、日本文学科の図書約 2,000 冊の登録が行われ、図書館に配架された。各部局で所蔵している図書の図書館登録については、教育学科、美学科と続いた。ただし、これらの学科の図書は、図書館登録はするものの、配架は各部局のままとされた。また、それ以後も、仏文学科、社会学部、情報処理研究センター、哲学科、独文学科の図書を対象として、図書館への登録が 1982（昭和 57）年頃まで続いたが、全学の図書資料の一元管理まで至っていない。第 4 代マシューズ館長以来、図書館の長年にわたる一元化の主張の実現は、その後も、道半ばの状況にあった。

（2）新月文庫の寄託収蔵

新月文庫は、1988（昭和 63）年度に、教職員および卒業生の著作等を収集することを企図して、学院史資料室（現学院史編纂室）において発足した。その後、1990（平成 2）年度に、新月文庫図서가、学院史資料室から図書館に寄託された。学院史編纂室規程の了解事項 2 には、「新月文庫は、当分の間大学図書館に寄託し、公開を凍結する。」とある。時期は未定であるが、いずれ学院史編纂室への返還が計画されている文庫である。

図書館では、時計台 1 階の荷解室に新月文庫保管室を設置し、「新月文庫受入れ実施要領」を作成のうえ、文庫図書を適正に保管した。また、教職員への働きかけを粘り強く行うことで、1990（平成 2）年度末には 1,000 冊を収集し、1991（平成 3）年度末には 2,000 冊を擁する文庫になった。2012（平成 24）年 3 月末現在で、図書館内の事務エリア書庫に 7,300 余冊を非公開で保管している。



新月文庫

(3) 学位論文の保管・取扱いの変更

関西学院大学が学位を授与した博士論文、修士論文といった学位論文については、大学の保存分を図書館で保管してきた。通常図書と同様に受入れ、整理して出納室書架に配架しており、禁帯出であるものの館内閲覧やコピーが可能であった。しかし、こうした取扱いについては問題があるのではないかとの意見が、1982(昭和57)年12月の館長室会で出された。そこで、1983(昭和58)年1月の学部長会において、修士論文については、指導教授の許可した者のみ閲覧できるような方向で、図書館で検討することが求められた。図書館では、他大学を調査し、以下の内容の「修士論文閲覧取扱い要領」を作成して、大学院委員会での了承を得た。

- ① 大学図書館保管分の「修士論文」は準図書扱いとし、一般図書扱いとしての閲覧・貸出は行わない。
- ② 3年度生以上の学部生および大学院生から特に閲覧希望のある場合は、研究演習指導教授の承諾ある者に限り、閲覧を許可する。
- ③ 卒業生および学外者からの閲覧希望については、「修士論文」の著者の

承諾のある者に限り閲覧を許可する。

「修士論文閲覧取扱い要領」は、1983（昭和 58）年 4 月から実施されたが、博士論文の取扱いについては引き続き検討が行われた。そして、1985（昭和 60）年 2 月の学部長会で、図書館の提案により、修士論文・博士論文は保管の徹底をはかるため閲覧利用を禁止することが審議・了承され、3 月の大学院委員会です承された。これにより、「修士論文閲覧取扱い要領」は 1985（昭和 60）年 3 月 31 日付をもって廃止され、4 月 1 日からは新たな「学位論文保管取扱い要領」が実施された。新たな「取扱い要領」は、次のような内容となった。

- ① 大学から保管を委任された本学の学位論文（博士論文並びに修士論文）は、大学図書館において保管する。
- ② 学位論文原本の受入れについては、運営課で所定の検収を行い、学位論文受入台帳を整備する。
- ③ 大学図書館所蔵（昭和 60 年 2 月 28 日現在）の本学の博士論文（旧制博士 50 名、新制博士 157 名、計 207 名）および修士論文（2,351 名）は、図書払出基準に基づき図書原簿台帳から除籍する。

学位論文原本は、大学からの委任に基づき保管している文書であり、図書館蔵書としての扱いはしないというものである。従って、保管場所も利用者エリアとは別の書庫で保管している。また、特別な事情で閲覧を希望する場合は、著者本人または著者の指導教員の閲覧承諾書を閲覧希望者本人が得た上で図書館に申し出るという手続きを要求している。この取扱いは、現在も継続されているところである。

（4）書庫の狭隘化対策としての図書資料の外部保管

図書館では、書庫の狭隘化対策のため、図書館の増改築以外の方法として、図書資料の外部保管を検討し、過去 2 度にわたりこれを行ってきた。最

初は1989（平成元）年度から1995（平成7）年度までで、2回目は2008（平成20）年度から2013（平成25）年度（予定）までである。新大学図書館の開館前に行われた第1回目の外部保管の経緯と運用は以下のとおりであった。

図書資料の外部保管は、書庫狭隘化のため、図書資料の保管場所が図書館内に確保できないことから、やむを得ず行った。外部保管は、利用者の便宜を損なうこと、余計な費用がかかるなどの問題があり、図書資料はすべて図書館内に配架することが望ましい。しかし、増え続ける図書資料と、限りの有る保管スペースを考えると外部保管をせざるを得なかった。

図書館は、これまで増改築を繰り返し、図書資料の保管や座席数の確保に努めてきた。しかし、1988（昭和63）年頃にはそれも限界となってきた。法学部棟や就職部のある建物の地下倉庫などに図書の一時的保管場所を確保したものの、年間登録冊数が増加していることもあり、学内でのさらなる保管スペースの確保は困難であった。このため、新大学図書館が建設されるまでの応急措置として、図書資料を外部で保管することになった。外部の倉庫は、日通のトランクルーム（西宮市）とデータ・キーピング・サービス社（伊丹市）の2カ所に確保した。1989（平成元）年の夏季休暇期間を利用し、出納室の図書11,443冊をデータ・キーピング・サービス社に初めて預け入れし、その後、中国方志叢書、アメリカ基本判例、イギリス議会報告書などのセットものや、新大学図書館収書計画で購入された外国語雑誌など、1994（平成6）年度までに総数約13万冊を預け入れた。外部保管資料の管理は、預け入れ当初に図書システムによる管理ができなかったことから、スリップを利用したマニュアルによる管理を行っていた。

外部保管資料の利用については、原則として取寄せをしていたが、教員に限り、希望があれば保管倉庫に直接出向き、閲覧することも可能であった。

6 利用－利用者サービス機能充実のための見直し

この時期においても、図書館の利用者サービス機能の充実に向けた様々な工夫が地道に続けられていく。以下に独立した項目を設けて言及する工夫以

外にも、そうした工夫の例を、時系列で挙げることができる。

まず、1950（昭和25）年度より、大学院の新設に伴い、図書館に登録した図書資料の学部共同研究室への分置が始まった。

1967（昭和42）年に、中学部1年生の夏季休暇前の図書館見学が開始された。

1970（昭和45）年には、大学紛争中の被害状況調査を個人貸出図書につき行うとともに、1959（昭和34）年12月以来、在庫調査を実施してこなかった分置図書について全面的調査がなされた。

1971（昭和46）年5月より、4年生の書庫内図書検索制度を実施し、4年生には書庫入庫を特別に許可して、卒業論文作成上の便宜をはかることとなった。

1973（昭和48）年には、学部生を対象に雑誌に関するアンケート調査を実施し、アンケート調査の結果に基づいて、新規購入雑誌を追加したほか、雑誌利用面の改善もあわせて行っている。また、この年、「図書館規程」の改正によって卒業生の利用が制度化されている。

1973（昭和48）年10月には、図書館をよく利用している学生10数人と、初めての利用者（学生）懇談会が開催されている。懇談会での意見を踏まえて業務の改善を検討し、1974（昭和49）年4月より、貸出の際の貸出日押印を返却日押印に改めたり、閲覧証発行のための登録票を各学部オリエンテーション時に全新入生に配布した。また、「目録の手引」を作成し配布した。

1977（昭和52）年4月に国立国会図書館に利用登録を行い、図書の借用、文献複写依頼のルートが拡充された。また、関西四大学、私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会加盟館、兵庫県大学図書館協議会の各協定に基づく相互利用サービスがさらに充実した。

（1）開館日と開館時間の延長

図書館の開館時間は、長らく職員就業規則に合わせてきた。2003（平成15）年度まで職員の基本的な就業時間は午前8時30分から午後4時30分であった。1973（昭和48）年から、労働時間の短縮を目的として土曜日が半日勤務（8:30～正午）になった。また、1974（昭和49）年からは、夏季休

暇期間（7月16日～8月31日）は勤務が正午までになった。1984（昭和59）年には完全冷房化が行われ、夏季休暇期間中の就業時間は、午前9時から午後4時に変更された。これらの期間は旧図書館（時計台）時代であり、利用者用窓口も出納式カウンター、開架室、1974（昭和49）年4月からは雑誌室、同年6月からは視聴覚室が開室し、窓口も4つになっていた。また、それらの図書資料を複写するための複写室も設けられていた。さらに、窓口とは別に第1閲覧室、第2閲覧室、第3閲覧室があった。

1981（昭和56）年度の開館時間をみると次のようになっている。

① 開講日

- ・ 出納式カウンター、雑誌室カウンター、視聴覚室：午前8時30分から午後5時まで、土曜は正午まで
- ・ 開架室、雑誌閲覧室：午前8時30分から午後7時まで、土曜は午後4時まで
- ・ 複写室：午前8時30分から午後4時30分まで、土曜は正午まで
- ・ 第1閲覧室：午前8時30分から午後7時45分まで、土曜は午後4時まで
- ・ 第2、3閲覧室：午前8時30分から午後5時まで、土曜は午後4時まで

② 夏季休暇期間（土曜は休館）

- ・ 出納式カウンター、雑誌室カウンター、視聴覚室：午前8時30分から正午まで
- ・ 開架室、雑誌閲覧室：午前8時30分から午後4時まで

③ 春休み期間

- ・ 全館：午前8時30分から午後4時30分まで、土曜は正午まで

なお、就業時間以外の開館時間については、出納式カウンター、雑誌室カウンター、視聴覚室は専任職員が午後5時まで超過勤務をし、開架室は午後6時まで専任職員が時差出勤で担当し、午後6時以降は夜間専用のアルバイト



開架室カウンター

ト職員が担当していた。また、職員の休憩（昼食）時であるが、1972（昭和47）年度からは、出納式カウンター、開架室カウンターにはその時間帯のカウンター業務（返却・継続業務のみ）を担当するパート職員をそれぞれ1名雇用した。このパート職員の雇用は、1989（平成元）年まで続いた。それ以後は、各カウンター担当職員の交代でカウンター業務を行っている。

図書館では、開館時間の延長のために交代での超過勤務などの努力をしてきた。今から考えると延長したといっても短い開館時間であった。そのため、利用者から C. O. D. など開館延長を求める声が多く寄せられた。そこで、1982（昭和57）年4月からは、開講日には、開架室、雑誌閲覧室、第1閲覧室は午後9時（土曜日は午後6時）までの開館となった。この開館のために、図書館には嘱託職員2名が配属されることとなり、専任職員が午後5時以降の開館サービスのために超過勤務することは無くなった。1984（昭和59）年度からは職員就業時間の変更があり、この変更に伴って夏季休暇中の開館時間は、出納式カウンター、雑誌室カウンターと視聴覚室については午後4時までに変更された。また、嘱託職員が担当していた夜間の業務は、1996（平成8）年4月から業務委託になった。委託先は、図書館の建物管理を担当していた業者であった。そのため、当初は、年配の男性が配属されたので、サービスの提供というより、管理という面が強調された委託であった。また、1993（平成5）年に、商学研究科のマネジメント・コースに

続き、1996（平成 8）年に、経済学研究科にエコノミスト・コースが開設された。これらのコースは、昼夜開講制で主に社会人を対象としたコースであったため、受講生のために図書館の開館延長が求められた。しかしながら、実際に、図書館がどの程度利用されるか見極めることができなかった。そこで、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館では、暫定的に一週間前までに利用申込みがあれば、午後 9 時以降 10 時までの入館を認めることになった。現実にはこのような申込み制での利用は皆無であった。しかし、学部長会からの要望もあり、1999（平成 11）年 4 月からは閉館時間を午後 10 時とした。この開館時間の延長の措置は、神戸三田キャンパス図書室も対象とした。

（2）利用教育への取り組み－演習単位でのオリエンテーションの開始

大学図書館における利用教育とは、「自立した情報利用者の育成を目的として大学コミュニティの全構成員を対象に体系的・組織的に行われる情報教育」（「図書館利用ハンドブック－大学図書館版」日本図書館協会図書館利用教育委員会 2003 年）である。

この利用教育への取り組みは、1972（昭和 47）年度から始まった新入生を対象としたオリエンテーションプログラムの実施に遡る。

ア 新入生対象オリエンテーション

「新入生のためのオリエンテーション」は、1972（昭和 47）年度から開始し、当初は 4 月の約 1 週間を利用して、新館 2 階第 3 閲覧室で行っていた。図書館員が、図書の探索方法に重点を置いた図書館利用についての説明を行い、参加は自由であった。1974（昭和 49）年度の参加者は、約 400 名であった。

1979（昭和 54）年秋より、閲覧課において、実施方法の根本的見直しが検討された。検討の結果、施設・設備と利用上の基本知識の紹介や、資料形態別各カウンターでのサービスの案内などを中心とする 25 分程度のスライドを作成し、館内ツアーを行う前に映写を行うことになった。この新しい方法で、1980（昭和 55）年 5 月に個人参加、6 月に基礎演習クラス単位のオリ

エンターションを実施し、参加者は新入生の約40%強の1,458名であった。翌年からは、実施時期を4月～5月に変更し、1995（平成7）年の新大学図書館1期開館まで、この方法で実施してきた。

イ 上級生対象オリエンテーション

新入生対象のオリエンテーション以外にも、1983（昭和58）年度からは、別途作成したスライドの映写と質疑応答による「上級生対象オリエンテーション」を、研究演習クラスを対象に実施している。

図書館報「時計台」No.29（1983.11）には、「1983（昭和58）年には、多くの先生方からの要望がありながら、長年懸案となっていた上級生オリエンテーションのスライドを作成した」という記述がある。当時は、6月6日から6月末まで約1ヵ月間の予定で、3、4年生の研究演習クラスを対象としたオリエンテーションを実施していた。「上級生対象オリエンテーション」では、主として「図書館の分類」について、また、当時出納式カウンターの前に設置されていたカード目録や文献調査のための書誌、目録類の使い方の説明を中心とした内容で進められた。しかし、毎年受講申込みは5～6演習クラスであり、ほとんどが特定の教員に限られていた。そのため、特定の教員に対して、図書館経験の長い特定の図書館員が担当するという状況が続いていた。

なお、時期はやや遡るが、1948（昭和23）年4月に、関西学院大学は新制大学として認可され、文学部、法学部、経済学部が旧制大学から引き継がれ、1951（昭和26）年には、商学部が開設された。これらの学部の教養科目における指導を充実させる目的で、1948（昭和23）年10月に図書館分館が開設された。そして、既述のとおりこの分館において、専用の図書指導が行われた。この時、専任の分館図書指導係として就任したのが、後の第11代関西学院理事長・院長となる久山康であった。久山は翌年4月に文学部哲学科助教授として転出するまで分館で図書指導にあたっていた。

（3）障がいのある学生への支援の充実

戦前において、関西学院大学は、日本で唯一、視覚障がい者の受入れを認

めた大学であったようである。日本ライトハウスを大阪に設立した岩橋武夫（1898-1954）や日本点字図書館長だった本間一夫（1915-2003）も、関西学院で学んでいる。戦後では、1973（昭和 48）年に、点字による入学試験が実施された。この年、全盲の学生が入学したことが契機となり、翌年には、学長の諮問機関として「身体障害者問題委員会」が設置された。この委員会において、「身体障害を持つ学生の受入れに関する基本方針」が制定され、①入学試験の実施方法、②入学後の学習研究活動、③在学中の学生生活、④卒業後の就職、という課題が提起された。以後、これらの課題を解決すべく、学内の諸施設・設備の整備や対応等について検討が行われた。

その後、1981（昭和 56）年には、視覚障がいのある学生が 2 名入学した。これを機に、学内に「視覚障害者学生へのボランティア団体」が発足した。このボランティアグループの運営は、教務部教務課の下で図書館との協力により行われ、学習支援のために朗読ボランティア学生を大学が募った。1989（平成元）年には、点訳用のパソコンが寄贈されたことにより、英文点訳グループも発足した。ボランティア学生は、初年度は 9 名、その後多い時には 100 名を超える年もあった。多くの熱心な学生たちによって支えられたこのボランティア活動は、2006（平成 18）年 3 月まで続けられた。彼らの活動内容は、依頼された資料のテープ録音、対面朗読や点訳を行うことであり、年に数回、外部から講師を招いて朗読技術向上のための勉強会を行った。また、夏季休暇中には、合宿も行われた。関西学院大学での障がい者支援、特に 1980 年代以降の支援については、ボランティア学生の働きによるところが大きいものであった。

こうした経過の中で、図書館に「視覚障害者読書室」が設置されたのは、1981（昭和 56）年 9 月のことである。図書館 1 階部分を約 30 m² 改装して 2 部屋に仕切り、点字タイプライター、テープレコーダー、オプタコン、点字図書（辞典類約 300 冊）が備え付けられた。この部屋は、教務部とボランティアの学生との協力により、視覚障がい者学生のための対面朗読、テープ録音、学習などに利用された。当時、在籍していた全盲の学生は、図書館報「時計台」No.23（1981. 10）に次のように記している。「大学には高度の知的水準と知的好奇心を持った多くの学生や教職員が多数おり、そのような人た

ちの協力を得ることによって、大学は目の見えない人にとって最上の学習の場となりうる可能性を持っています。その際に重要な役割を果たすのが図書館です。そして目の見えない人の図書館利用を考えることは図書館の現状をより深く明らかにすることになり、それはさらに全学生のよりよい図書館利用の姿を考えることに連なっていくものです。」

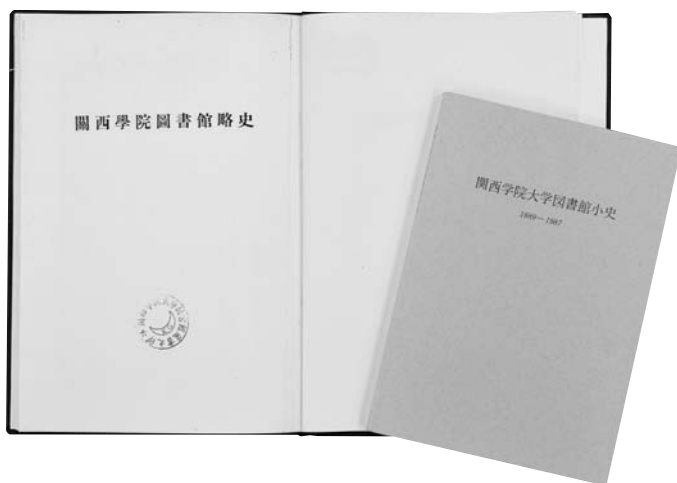
この時期の図書館は、新大学図書館開館前の旧図書館で、1929（昭和4）年に建設された建物である。その後、増築を重ね、非常に複雑な構造になっていた。車椅子の利用者は、事務所内にある業務用エレベーターを使用しなければならなかった。また、書架間の通路が狭く、車椅子での移動が難しい場所がある等、車椅子の利用者にとっては、施設面で改善を必要とする点が多かった。これに対して、1997（平成9）年10月にグランドオープンした新大学図書館では、旧図書館での問題点その他を改善すべく、以下のように施設・設備面で障がい者に配慮されたものとなった。

- ① 図書館エントランス入口の自動ドア設置
- ② 段差がないフルフラット構造
- ③ 利用者用エレベーターの設置
- ④ 図書館入口に車椅子での入館のための引き戸式ドアを併置
- ⑤ 書架間隔を車椅子で回転できる広さに設定（約130cm）
- ⑥ カウンターの高さを70cmに設定
- ⑦ 車椅子のままで利用できる閲覧座席を各階に設置
- ⑧ パソコンデスクは車椅子のままで利用できる高さに設定
- ⑨ 階段の手すり、施設・部屋の入口等に点字サインを設置
- ⑩ 階段昇り口、降り口に点字ブロックを設置
- ⑪ 視覚障がい者読書室4室を設置
- ⑫ 拡大読書器を2台設置
- ⑬ 各階に身障者用トイレを設置

7 刊行物－多様な図書館刊行物の積極的な刊行

1954（昭和 29）年 9 月に東館長の下で、「関西学院図書館略史」が発行された。「略史」の本文は中島猶治郎が担当し、附録は他の図書館員の手によるものであった。学院の創立から 1953（昭和 28）年度までの図書館の歩みが記録されている。図書館で作成した最初の年史で、30 頁程度の手書きの冊子であった。その後の図書館の年史の刊行については、学院創立 100 周年を迎えるにあたって、図書館として何か記念になるものを残したいという願いから、「関西学院大学図書館小史」の編纂がなされた。この「小史」は、図書館一筋に奉職し、当時、洋書分類を担当していた作川竜平が原稿を書き、1990（平成 2）年 12 月に発行された。巻頭に写真を配した 130 頁の冊子となっている。「小史」では、学院創立の 1889（明治 22）年から 1987（昭和 62）年までが記録されている。八重津館長による「はじめに」には、「単に 100 年におよぶ図書館の歴史を回顧するだけでなく、今、図書館が新大学図書館建設計画の推進によって大きく姿を変えようとしている時、その良き伝統をこれからも図書館に継承していきたいと願ってのことであります。」と書かれている。

図書館では、こうした年史以外にも、さまざまな刊行物を発行している。大きく分けると、利用者用広報資料と目録類である。利用者用広報資料では、1953（昭和 28）年に発行された「図書館時報」第 1 号～第 3 号が現存している。図書館時報は、4 月、12 月、3 月と 3 回発行された。その形態は、総ページ数 20 頁～30 頁の冊子体で、ガリ版で印刷されたものである。内容は、全体の 90% 以上は増加目録が収録されているが、図書館長による巻頭言、図書館の近況やお知らせも掲載されていることから、館務一般について利用者に広報する資料と位置づけることができる。この図書館時報については、3 号までしか発行が確認できておらず、いつまで継続発行されたのかは不明である。また、利用者用広報といえば、図書館報「時計台」がある。「時計台」は、戦前の 1934（昭和 9）年 6 月から 1936（昭和 11）年 10 月までの間、第 6 号まで発行したのち中断していた。1971（昭和 46）年 9



「略史」と「小史」

月に、改めて図書館報を刊行するにあたって、いろいろその名称が検討されたが、結局、学院の象徴のように親しまれている図書館の「時計台」の名を継承することになった。戦前の「時計台」が中断して35年が経過していること、情勢もずいぶん変わっていることから、復刊の形式とせず、No.1から新しく刊行することになった。「時計台」は、1980（昭和55）年度まで年2回、1981（昭和56）年度から1997（平成9）年度までは年3回発行された。ただし、1995（平成7）年と1997（平成9）年は新大学図書館建築、完成の時期であり、図書館報発行まで手が回らず、それぞれ1回しか発行されていない。

図書館報には、図書館の動き、資料紹介、利用者の声、図書館からのお知らせ等、盛りだくさんの記事が掲載されていた。新大学図書館のオープンを契機に、また、インターネットの普及により、図書館ホームページが開設されたことから、時事性の強い記事や日常的な利用案内はホームページに掲載し、館報は、図書資料の情報やそれに関連する行事の紹介等、より学術的な記事で構成することになった。また、大きさもB5サイズからA4サイズに変更し、紙質もカラー印刷が映える上質紙にして、年1回発行することになった。新しい方針での「時計台」は、No.68として1999（平成11）年4

月1日から発行が開始された。以後、この方針は継続され現在に至っている。

また、利用者用の広報資料として、利用ガイド類の作成も行った。当初は、図書館ガイドとして「図書館利用の手引き」、「目録の手引き」、「雑誌室ガイド」、「視聴覚室ガイド」といったように、それぞれの機能別にガイドを作成していた。その後、1977（昭和52）年には、それぞれのガイドの他に全体をまとめた新入生向けの「図書館ガイド」を作成し、現在の網羅的なガイド作成の端緒となった。

これに対して、目録類については、登録した図書資料に関するものとして、1962（昭和37）年に、閲覧課が「一般教育科目参考図書目録」を作成し、新入生に配布した。1965（昭和40）年には、その増補版が作成配布されている。授業に直結した参考図書については、1975（昭和50）年10月に図書館報「時計台」の別冊としても発行した。

ところで、図書館では、昭和50年代に入り、長年の懸案としてきた冊子体の蔵書目録の作成に取り掛かることにした。しかし、当時すでに50万冊を超える蔵書を所蔵していた。図書館に登録している全蔵書の蔵書目録作成計画を進めていくにあたっては、そのテストケースとして、比較的整理の行き届いている宗教分野の図書から冊子目録の作成を始めることになった。また、作成方法としては、当時開発されつつあった電算処理による印刷方式をとった。対象とした洋書は、1977（昭和52）年度末に所蔵していた約1万1千タイトル、およそ2万冊であった。作業は、1978（昭和53）年夏から開始した。目録カードの不備の調整からはじまり、また、校正等の業務に予想を大幅に超える人手を要したため、「関西学院大学図書館蔵書目録 宗教篇洋書1978年3月現在」が完成したのは1980（昭和55）年3月であった。この蔵書目録の作成は継続事業として、登録されている全蔵書におよぶはずであった。しかし、今回の蔵書目録作成の経験により、日常業務にあまりにも影響が大きいため、計画を再検討することになった。そして、1978（昭和53）年度以降に登録した宗教分野の洋書については、当時、本学に設置されていたコンピュータ FACOM 230-38 により目録データを磁気テープに順次保管し、数年分をまとめて蔵書目録として編集することになった。この増加

分は、「関西学院大学図書館蔵書目録 宗教篇洋書 1978－1984 年度」として 1986（昭和 61）年 3 月に発行した。以後、特別なコレクション以外の蔵書については、蔵書目録（冊子体）の作成はしていない。

また、雑誌目録については、1961（昭和 36）年度に所蔵外国雑誌の記事索引を刊行し、学内に配布した。1971（昭和 46）年 5 月には、「関西学院大学図書館雑誌目録」を刊行した。この目録は、タイプ印刷の暫定版ながら、雑誌の提供サービスの向上と管理の充実に資するものであった。この目録の増補改訂版として、1974（昭和 49）年に「関西学院大学所蔵雑誌総合目録 1972（昭和 47）年 10 月現在」を刊行し、その後さらに、1983（昭和 58）年 4 月に「関西学院大学図書館所蔵雑誌目録 1982（昭和 57）年 9 月末現在」を刊行した。この目録は、前回の 1972（昭和 47）年版が全学雑誌総合目録であったのに対して、図書館所蔵分のみに限定したものであったが、発刊元の大学名を省いた固有の誌名を見出し語に選定し、その構成を和文編、大学紀要索引、欧文編、ロシア語誌翻字一覧、白書一覧の 5 部構成として、利用者にとってより利便性の高い目録に改良した。

また、視聴覚資料についても、1977（昭和 52）年 3 月末現在の資料目録を発行し、以降、増補版、改訂版を 1986（昭和 61）年まで発行した。

さらに、特別文庫の冊子体目録の作成については、1965（昭和 40）年に「丹羽記念文庫目録」が刊行されている。この「丹羽記念文庫目録」は、図書館で所蔵している特殊文庫（現在は「特別文庫」と呼称）目録の第 1 輯であり、以後の特殊文庫目録の出版の礎となるものである。「丹羽記念文庫目録」の序文に、大道館長により、「毎年 1 冊ぐらいの目標で、今後引続いてこの種の出版を企てたいと念願しています」と記載されている。大道館長の念願には及ばなかったが、1967（昭和 42）年には「佐藤清文庫目録（特殊文庫目録第 2 輯）」、1972（昭和 47）年には「柴田文庫目録（特殊文庫目録第 3 輯）」、1974（昭和 49）年には「栗野文庫目録（特殊文庫目録第 4 輯）」、1985（昭和 60）年には、「ロック、スミス、ミル父子著作文庫目録（特別文庫目録第 5 輯）」を発行した。1997（平成 9）年には、新大学図書館開館記念に購入した 3 つのコレクションの目録の作成を行い、「関西学院大学新大学図書館完成記念特別コレクション（特別文庫目録第 6 輯）」として発行し

た。図書館で所蔵している特別文庫については冊子目録の作成を必須としており、現在では第8輯まで作成している。

8 展示・講演会－定例開催に向けて

展示・講演会は、この時期に、単発の実施から、定例開催の方向に進展していく。「5 蔵書・資料」の項で触れたとおり、1947（昭和22）、1948（昭和23）年の両年度に、World Church Service から、計496冊の洋書が寄贈された。この寄贈図書の第1便が到着してしばらく後の同年11月に、新着洋書紹介講演会が開催されている。講師は、大道安次郎教授（1964（昭和39）年から1968（昭和43）年まで図書館長）であった。また、同月には、本学卒業生で詩人として活躍していた竹中郁氏と歌人の小島清氏による近代文学解説講演会を開催した。さらに、1948（昭和23）年11月には、10月に開設された分館の開設記念として、森昭助教授による「大学生生活の反省」と児玉国之進教授による「アメリカに於ける学生生活の実相」と題した講演会が開催されている。これら講演会は、記念行事として単発に実施されるにとどまっていた。

他方、展示についても、1947（昭和22）年11月に、丹羽安喜子氏所蔵図書を近代歌書展示会として開催した。この近代歌書展示会が図書館における戦後初めての展示会であった。以後、昭和30年代から40年代の展示に関する記録はほとんど残っていない。唯一、1961（昭和36）年に「丹羽蔵書の中の歌書」の展示を行った記録が残されているにとどまる。

ようやく、1979（昭和54）年にグーテンベルク「42行聖書」の復刻版を購入し、これを展示した。これを契機に、展示業務の見直しが行われた。「図書館への理解と利用の促進」を目的とする展示とともに、「ランバス・レクチュア（ランバス記念講座）」と連携した展示が1985（昭和60）年まで続いた。

展示場所については、1987（昭和62）年度より、奥まった場所にあった第1閲覧室での展示を、図書館に入館する利用者が必ず通る図書館玄関ロビーでの展示に変更し、利用者への広報に努めた。このロビー展示は、閲覧

課で企画立案し実施されたが、1990（平成2）年4月からは運営課の業務となり1991（平成3）年度まで続いた。さらに、展示業務は図書館の広報業務のひとつと考えられることから、図書館報編集業務と展示業務の見直しをはかり、1992（平成4）年度からは、図書館全体の業務として位置づけた。そこで、課の枠を越えたメンバーで館報編集業務と展示業務をあわせて企画・立案・実施する広報チームが編成された。また、同年7月には、「展示図書の企画方針」を決めるなど展示のあり方を確認し、さらに、展示の充実と発展のために、展示と関連させた講演会の開催が検討された。展示企画の方針は、図書館所蔵の資料類を年4回展示し、春は卒業と入学、新学期に合わせたもの、夏は学生の身近なもの、秋は学術的なもの、冬は学生への資料紹介的なものと決められた。特に、秋の展示は、図書館で所蔵している貴重な資料類を展示し、講演会と同時開催にするというものであった。この展示と講演会の同時開催は、「大学図書館特別展示と学術資料講演会」という名称で、第1回が1992（平成4）年10月に開催され、毎年1回の実施ではあるが、現在も継続され、2011年度で20回目を迎えた。



学術資料講演会

9 図書システム－開発

(1) 開発期

～1990（平成2）年

ア システム導入の模索期（～1984（昭和59）年）

関西学院大学の図書館業務のシステム化がいつごろから考えられ始めたのかは今となっては、それを記した記録類が残っていないのでまったくわからない。勿論、記録として残されるような図書館として公式あるいは半公式の動きとなる以前に、関心のある一部の図書館員が個人的に考えるようなことはあったであろう。また、その延長線上で何らかの提案が行われたであろうが、その様子はわからない。

今につながる動き（事務トータルシステム開発の中での図書システムの導入）の前の状況を語るいくつかのことを挙げることで、この時期の様子を想像してみる。

1976（昭和51）年に関西学院大学に研究所として情報処理研究センターが開設され、同年 FACOM 230-38 という汎用機が設置されている。この頃から、学内事務組織内でこのマシンを使って一部の事務を機械化する検討が始まっている。それは非常にシンプルな学籍管理や教務事務の機械化であった。

学内のそのような様子を見ながらであろう、図書館でも図書業務へのコンピュータの導入を考える動きがあったようである。そのような動きを図書館報の「時計台」の記事から挙げると以下のようなものがあった。

「時計台」No.14（1977. 11）には「コンピュータと図書館 十年後には」という岡田孝情報処理研究センター専任講師執筆の記事が掲載されている。図書館へのコンピュータ導入について何か参考になる情報を得たいという当時の図書館員の関心を表すものと思われる。

続いて、「時計台」No.15（1978. 4）には「図書館業務機械化検討会の発足」という記事があり、1977（昭和52）年12月に図書館業務機械化検討会が発足したという館内の動きが掲載されている。ただ、この検討会でどのよ

うな活動が行われたのかについては記録も見当たらず、残念ながら不明である。

「時計台」No.19（1980.4）には「蔵書目録（宗教篇洋書）の完成にあたって」という記事がある。これは冊子の蔵書目録の作成にあたり、印刷のための原稿入力に将来の情報検索等に活用できるデータ作成の意味を持たせ、冊子体目録とともに目録データの磁気テープを作成したというものである。このテープは納品後長い間、情報処理研究センターで保管されていた。

「時計台」No.21（1981.4）には「今後の学術情報流通と大学図書館について」という小さな記事がある。この記事では当時ようやく世間で形が見え始めた「データベース構築」と「デジタル回線によるネットワーク化」のことを紹介し、その中で大学図書館の役割の重要性を語っている。

学内での事務処理へのコンピュータ・システムの導入もこの頃から動きが始まっている。それを簡単に記しておく。

上記のように1976（昭和51）年3月に情報処理研究センターにFACOM 230-38という汎用機が導入された後、教務事務機械化の最初の着手として1977（昭和52）年4月から社会学部、商学部の1年生の履修登録処理からマークシート方式が導入され、学籍原簿がコンピュータ出力となった。これが次第に全学部におよび、1979（昭和54）年4月から全学部で教務事務の機械化が始まった。さらに1980（昭和55）年度から卒業判定も機械化され、1981（昭和56）年度には成績証明書発行まで機械化され、一応の教務事務の機械化が完成したとされる。

1983（昭和58）年6月に学内の各種事務処理をトータルな形で機械化することを目的として、事務トータルシステム開発体制（後の「人事・給与」、「財務」、「学生・生徒」、「図書」の4ブロック制につながる体制）が発足している。これは学内のいくつかの部署で個々に検討、あるいは導入されていた事務処理のシステム化を全学的にトータルな形で行い合理的な推進をめざしたものである。1984（昭和59）年5月に「事務機械化実行委員会見解」が公表され、その後総務部の中に「事務機械化プロジェクトチーム」が設置された。これを受けて1985（昭和60）年1月に図書館内に図書業務の機械化プロジェクトが発足している。

1984（昭和 59）年 10 月には機械化 BSP（IBM 社が提供する業務システム開発手法：Business System Planning）活動が開始され、1985（昭和 60）年 3 月に BSP 報告書がまとめられている。

図書館関係の全国的な動きとしては、1980（昭和 55）年 1 月に文部省學術審議会から「今後における學術情報システムの在り方について（答申）」が出された。1981（昭和 56）年度には、文部省の主導で學術情報システム構想が進められ、広域ネットワーク構築、漢字処理の進展、国立大学図書館の電算化といったことが提起されていた。また、1987（昭和 62）年には學術情報ネットワークパケット交換網のサービスが開始されている。

イ 関西学院トータルシステム開発の中の図書システム開発

（1985（昭和 60）年～1990（平成 2）年）

1985（昭和 60）年 5 月、関西学院事務トータルシステムの全体計画書が承認された。これに基づき、同年 6 月に図書ブロックが発足した。図書ブロックのメンバーは大学図書館次長をリーダーとして、事務機械化プロジェクト（総務部）および図書館各課からの数名により構成された。このブロックは、4つの事務機能（人事・給与、財務、学生・生徒、図書）ごとに設置されたものであるが、学内の様々な部署で遂行されている事務のうち、当該機能を抽出してシステム化の基本事項をまとめるための仮想の組織である。関西学院内には大学図書館に限らず、学部図書室や研究所、高等部、中学部といった部署に大学図書館と同じような機能を果たす事務組織が存在しており、図書ブロックではこれらの事務を合理化するためにコンピュータシステムを導入し、その資源を共有して学院全体の事務の合理化、効率化をはかるというものであった。

図書ブロックでは当時事務機械化プロジェクトで採用していた IBM 社の局面化開発法を用いて、図書システム開発の基本方針となる「図書ブロック基本構想書」を作成し、さらに 1985（昭和 60）年 6 月に関西学院大学図書館のシステム化の全体像を示す「図書システム全体計画書」、「同作業計画書」がまとめられ、1985（昭和 60）年 9 月には「図書システム基本構想書」、「同作業計画書」がまとめられている。それによると図書システム開発

の方針は以下のようにまとめられている。

図書システム開発にあたっての基本方針の第一は、本学の教育・研究・学習を、図書資料提供の側面において効率的に支援することである。第二に、近年、学術情報が激増し、それに伴って教員、学生の利用ニーズは高度化、多様化している。この傾向に対して、将来の長きにわたってその対応が可能となるようなシステムにすることである。すなわち、「図書業務の効率化」、「教育・研究・学習活動の支援体制の充実」が図書システム開発の目標とした2本の柱であった。

そのために次の2点を開発の重点として設定した。

- (ア) 全学的規模において図書館業務の効率化、迅速化をはかるとともに、
図書資料の管理、運営を効率的に行いうるシステムであること。
- (イ) 利用者に対して、質の高いサービスの提供が可能となるシステムであること。

まず(ア)については、情報化社会の到来とともに、図書資料の量的増加が著しく、そのために利用者への提供までの時間短縮とコストダウンが急務である。従って、各種手続きに要するコストをいかに削減するかが大きな課題であった。具体的なシステム要件の決定にあたって、次の業務の効率化をはかることを目的とした。

- ①図書資料の発注・検収業務
- ②資産管理業務
- ③予実算管理業務
- ④目録作成および分類業務
- ⑤貸出・返却業務
- ⑥「学術雑誌総合目録」データ作成業務
- ⑦帳票作成業務
- ⑧各種統計作成業務

次に、(イ)については、利用者に提供する情報の質を高め、将来にわたる高度な学術情報の提供によって調査・研究分野のサポートをするとともに、学習用図書資料の迅速な提供を可能にすることを目的とした。そのためにシステムの拡張性、および全国ネットワークの母体である「学術情報セン

ター」との接続を考慮した。具体的には次の諸点を開発当初の目的とした。

- ①図書資料の迅速な提供
- ②検索手段の多様化による情報検索サービスの促進
- ③全学の雑誌情報の一元化と有効利用の促進
- ④不要な重複購入を防ぎ、適正な蔵書構成を実現するための収書の強化
- ⑤学内外における相互利用を拡大することによる情報提供機能の充実

図書システムの開発方針を策定するにあたって、相当大規模なシステムになる可能性が予想されたが、長期的に見て実効性のある内容のものでなければ意味がないと判断された。そのため、1次開発と2次開発に分けて推進した。1次開発においては、主に（ア）で示された図書管理業務に密着した部分の開発を重点的に行い、図書館業務の効率化、迅速化をはかることを目的とした。2次開発においては、上記（イ）について、とりわけ②～⑤の項目に関わる情報検索サービスの強化に重点を置きながら進めることが計画された。

以上のような内容の基本構想書が完成した後、1985（昭和60）年10月に図書館内にシステム運用に携わる作業チームとしてワーキンググループが結成され、さきの図書ブロックメンバーと共同して図書システムの検討作業を行っていくこととなった。

以後、図書システムの開発は、この「図書システム基本構想書」および「同作業計画書」に従って進められていくわけであるが、諸般の事情により当初の開発スケジュールに大幅な遅れが生じる結果となった。

図書システムが先行する他の3システム（人事・給与、財務、学生・生徒）と大きく異なる点は、開発に伴う人的、財政的、時間的制約から、今回のシステム構想に適した既製アプリケーションプログラムを利用して開発する方法を選択したことである。具体的には日立製作所の提供する大学図書館向けの標準図書業務パッケージ（BIBLION）を採用し、それを本学の図書館業務に適用できる形に修正していく方法をとることになった。

本学の図書業務のシステム化を語る際にこのように記述することが多いが、実態は選択肢の乏しい中であまり検討の余地もなく、当時本学で使っていたコンピュータのメーカーである日立製作所が自社の商品を奨め、その奨めに乗ったというのが実情であろう。当時、大学図書館向け業務システムの

パッケージ商品が世間にそれほど多くは流通していなかった状況であった。システム化の先進館では図書館員あるいはシステム担当職員や教員の協力により独自開発のプログラムで業務をシステム化していた例が多かったようである。まして本学のような規模の大学図書館で運用実績があるパッケージとなればむしろまれな状況であった。そのような中で、結果として独自構築ではなくあえて既製パッケージの採用という方法を選択したことは今からみれば優れた判断であったと言える。しかし、そのパッケージ自体が、完成品ではなく東京大学附属図書館で開発中のものであり、この開発元でのスケジュールが大きく遅れたために本学での開発スケジュールを大きく遅延させることとなった。

実際の開発は、1986（昭和61）年2月に利用サブシステム（貸出返却管理機能）の説明書の一部が到着し、この検討作業を開始するところから始まった。その後、同年6月に図書管理サブシステム（図書の受入整理・目録管理）、雑誌管理サブシステム（雑誌の受入整理・目録管理）の説明書が到着し、順次検討を開始した。ただ、到着した説明書はいずれも未完成のものであり、これの検討作業に多大の時間を要することとなった。結局、サブシステムごとにシステム仕様を決定し、システムのテストを繰り返し、ようやく1988（昭和63）年7月段階で3つのサブシステム全ての開発が一応完了することとなった。

なお、この開発を進める中で、今回採用したパッケージ「BIBLION」が文部省で進めていた「学術情報システム」の全国総合目録システム（NACSIS/CAT）との接続を前提としたものであることが判明したため、1987（昭和62）年1月の段階で学術情報センターに対して接続申請を行い、同年3月に接続を完了することとなった。学術情報センターの目録システムへの参加館はまだ少なく、私立大学図書館としては、本学図書館はかなり早い時期での接続館であった。

実際のシステム稼働は、1988（昭和63）年4月より図書管理サブシステムの一部、1989（平成元）年1月より雑誌管理サブシステムの一部（カレント受入機能）、同年4月に図書管理サブシステムの全体と利用サブシステムの一部（開架室窓口）、1990（平成2）年4月に利用サブシステム（出納室、

雑誌室)、1991(平成3)年12月に雑誌管理サブシステム全体というように段階的に稼働した。

ここで、この時期の開発組織について振り返っておく。

開発組織は「BSP 報告書」にもとづき、機能ブロック制が敷かれ、それぞれの機能ブロックごとにブロック代表部課がおかれた。そして、ブロック代表部課の責任者(リーダー)は、ブロックとプロジェクトチームより選出されたメンバーをもって開発チームを編成した。機能ブロック制とは概念上の単位であり、現実の学院の事務組織とは異なるものである。通常各運用部課は経理、人事、図書などの複数の業務を行っているが、トータルシステムを考えるにあたっては、組織活動を機能面でとらえることが必要であり、これらの機能を単位としてまとめたものが、機能ブロックである。ただし、データ、プログラム等の管理は現実の事務組織単位で行わなければならないとされた。

図書システム開発の場合は、システム開発に責任を持つ「図書ブロックメンバー」、システム運用に責任を持つ「図書館ワーキンググループメンバー」、メーカーである日立製作所の「システムエンジニア(SE)グループメンバー」の三者で構成され、この三者が相互に連携を保ちながら、検討が進められた。このようなメンバー構成をとったのは、三者の専門性を活かそうとしたからであり、各々の立場でその力量を十分に発揮できることを期待したものである。なお、ブロック会議、ワーキンググループ会議の場では三者が同等の立場で発言でき、相互理解が行えるようにした。

この当時の各グループの構成およびその役割は次のようになっていた。

(ア) 図書ブロック

- ①構成 大学図書館6名、システム課3名 計9名
- ②役割 図書館業務分析、システム仕様書の設計、システムのテスト、フレームワーク部分の検討

(イ) 図書館ワーキンググループ

- ①構成 大学図書館10名
- ②役割 初期データ作成、週及データの入力準備、運用設計、マニュアル作成、運用テスト

（ウ）SE グループ

①構成 日立製作所 10 名

②役割 システム仕様書による詳細設計、プログラム作成・修正

この図書ブロック、図書館ワーキンググループのメンバーの中で業務システムの開発に携わった経験のある者は一人もいなかったことと、また、SE は図書館業務についての知識がほとんどなかったことにより、相互に学習を行い、理解を深め合いながら開発を進めなければならなかった。図書ブロック、図書館ワーキンググループのメンバーは、仕様書（改造要求書）を作成する上で、システムの目標と実際の業務を分析して、そのポイントがどこにあるかを SE から学び、SE は実際の図書館業務の詳細を学んだといえる。開発を通じて、「図書ブロックメンバー」、「図書館ワーキンググループメンバー」は「使いやすく、分かりやすいシステム」、「業務の流れに沿った道具としてのシステム」を開発することをスローガンとした。なお、図書ブロック、図書館ワーキンググループのメンバーは図書館での日常業務を抱えながら開発に従事するという状態であり、業務上の負担が大変大きかった。しかし、以上のような開発体制をとれたことは「業務の機械化」をめざす全学的なバックアップがあったからにはほかならない。

次にこの当時の図書システムの運用体制を記しておく。

開発時期においては前記「開発組織」のところで記しているとおり、ブロックメンバーおよびワーキンググループメンバーを中心とする運用体制をとってきた。しかし、1988（昭和 63）年度より図書管理サブシステムの一部稼働に至り、次のような運用体制をとって始動した。つまり、ブロックはメンバーの入れ替えはあったがそのまま存置し、従来のワーキンググループは解散することとした。これに代わって行政組織である課制度に関わりなく、機能的にシステム運用の組織を新たに編成した。

図書館員の中で図書システム運用に関わる者を一般に「図書システム担当者」と呼んだが、それを担う役割により運用組織上次のように位置づけた。

まず、図書館長の下に総責任者として「図書システム運用統括者」を置き、次長をこれに当てた。その下に運用体制全般の管理者として正副の「図書システム統括者」を置き、さらにその下に実務第一線の統括者として正副

の「運用開発統括者」を置いた。

この運用開発統括者の下には、図書管理、雑誌管理、利用の各サブシステムに対応する3人の「サブシステム統括者」を置いた。この統括者はそれぞれ自分の担当サブシステムの日常運用を管理する責任を負っていた。さらにそのサブシステム統括者の下にある日常処理業務を作業種類別に区分し、合計7人のキーパーソンを置いた。キーパーソンの役割はオペレータに対し、その作業に関わる端末操作指導および指示を行うものだった。

上記のように当時の運用組織は多くの階層をもっていたが、課の壁を越えて機能的に結合したものであった。運用開発統括者は、同時にサブシステム統括者を集めて「プログラム維持開発チーム」を構成した。このチームは図書システム全体に関して日常運用の連絡調整に当たり、プログラムの維持および必要なプログラムの修正等の作業を行い、今後の課題をも検討する役割を果たした。さらにこのチームには機械周りの知識、プログラムの知識、データベースに関する知識等についての学習が必要とされ、これが相当な負担となっていた。

システム本体の開発以外にシステムの稼働までに実施した大規模な作業として所蔵図書資料の目録データ（遡及データ）入力とOCRラベル貼付作業、および作成された遡及データのシステムへのロード作業がある。

まず、遡及データ入力とラベル貼付作業であるが、システム化以前から所蔵していた図書資料の目録データを遡及作成すべきか否かについては随分議論があった。結論として、「貸出返却業務に最低限必要な項目のデータを作成する」という方針を定め、その入力項目を決定した。具体的な作業は、「目録カードのコピーを入力原稿として業者にわたして外注でパンチ入力する」という方法でデータ作成を行った。この作業が1986（昭和61）年から1988（昭和63）年の3年間継続され、図書については合計約525,000冊、雑誌が約9,600タイトル（製本単位で約76,000冊）のデータ作成を行った。作成されたデータは磁気テープで納品され、これの蔵書データベースへの入力処理（データロード）に1990（平成2）年10月までかかった。また、同時に貸出返却システムのために図書資料に貼付する資料IDのOCRラベルも作成し、これの貼付作業を1987（昭和62）年から1990（平成2）年の4年

計画で主として夏季休暇中に学生アルバイトを動員して行った。

データの外注作成にあたり、業者を選定する際に入力内容のチェックをどこまで行うかについて議論があった。学内で行われていた事務処理では、入力したデータを原稿と読み合わせて点検するという方法が多く取られていたが、図書の廻及入力の場合、データ項目、量ともに多く、言語が多岐にわたり、内容も複雑であることから読み合わせという方法には実施上の難点が指摘された。このとき、業者の提案ではこの点について「ベリファイチェック」を行うということが説明された。まだシステム業務に疎い図書館員にはそのような方法があることすら知識がなく、ベリファイチェックを行うという説明を聞いて提案業者を信頼して採用した。しかし、実際に納品されたデータを見ると単純なパンチミスに起因する間違っただけのデータが膨大に発見され、実際にベリファイチェックを行った結果とはとうてい思えず、業者に対する信頼感を著しく損なうとともに、先述したデータの欠陥としてこれが後々まで尾をひくこととなった。

また、4年間にわたるラベル貼付作業であるが、この作業の過程で①データ（目録カード）があるが現物がない、②データ（目録カード）がないが現物がある、③データ（目録カード）の内容と現物の情報が一致しないといった様々なパターンの不一致が浮き上がった。これへの対応のため膨大な作業が発生したが、結果としてこのラベル貼付作業によりデータ（目録カードや原簿台帳）と現物とが一致することになり、派生効果として徹底的な蔵書点検を実施したのと同じ効果を生むことになった。

次に、廻及データロード作業である。廻及入力により作成されたデータ約61万件をデータベースへロード（コンピュータに入力）する作業を1988（昭和63）年夏から実施し、1990（平成2）年10月まで行った。この作業に着手する直前に、同じシステムを先行して運用していた東京大学附属図書館へ図書システム担当者が運用研修に派遣され、そこで見聞したこととしてこの廻及データロード作業の負荷が膨大であることを報告していた。

東京大学附属図書館では館内に図書館専用コンピュータを設置し、その作業を外部業者からの派遣オペレータにさせるという形の外注運用を行っていた。廻及データロード作業は、通常のオンライン処理が終了した後に実施し

なければならず、外注のオペレータが夜間にデータを収納した磁気テープをセットし、プログラムを無人運用するようにしかけて翌朝結果を確認するという運用で行われていた。しかし、東京大学附属図書館での運用状況について尋ねたところ、ロードの処理速度が極めて遅いということが判明した。東京大学でもあまりに所要時間がかかりすぎるということで、日立製作所に対してプログラムの改善を要求していたということであった。研修時に聞いた実績では処理速度が最初は1時間あたり約25件ということであり、通常の処理では非常に高速に回転する磁気テープが、この処理のときには約10分間に1回、角度にして5度ほど回転するというような有様であった。この処理速度をそのままあてはめるとすれば本学の遡及データ約61万件をロードし終わるのに、365日24時間休みなしに実施したとして1年8ヵ月、実際には夜間のみしか実施できないため5年余りを要する計算となる。これでは到底稼働時までにはロードが間に合わないということになり、一度本学の環境でテストを実施することとなった。このテストは本学の図書システム担当者とSEが情報処理研究センターに泊まりこんで行った。その結果、東京大学附属図書館での実績とほぼ同じ結果がでたため、急遽日立製作所に対してロードプログラムの改善を要求することとなった。その結果、かなりの速度向上が実現したが、まれに磁気テープ中にデータ作成のエラーがあった場合のプログラム上の対応が簡略化されていたりして、異常時の対応に煩雑な処理が必要となるなど、運用上のマイナスも派生した。

このような紆余曲折の末であったが、遡及データの全件ロードをなんとか本稼働に約半年遅れて完了することができた。

この時期（1988（昭和63）年）までに行われた図書システム開発に対する評価として、大学図書館間の研修会等で次のようなことを「効果と課題」として事例報告している。

1 効果

(1) 合理化、省力化

本学の図書システムは事務システムのひとつとして業務の合理化、省力化を大きな目的として出発したものであるが、それはある程度達成されていると考えている。その実例として、次のような事柄を挙げることができる。

- ①年間受入資料の数がシステム化以前の5割増、年間貸出件数がシステム化以前の約4割増となっているが、この処理数の増に対しても図書館員を増員することなく処理できている。
- ②各種統計作成や台帳作成等のための年度末業務の負荷が非常に軽くなっている。
- ③作成される帳票類について、短時間に正確で美しいものを得ることができるようになった。
- ④各種の調査、照会がオンライン画面から行えるようになり、正確迅速に結果が得られるようになった。
- ⑤各種スリップ等手作業時代に維持していた帳票類が激減した。

(2) 外注委託整理の導入

外部の既成 MARC を本学の蔵書マスタデータベースのフォーマットに変換すれば、本学の蔵書マスタデータベースへバッチ処理により一括入力することができる。これにより、整理業務の外部委託が可能となった。現在（1989 年前後頃）はこのかたちで年間約 1.3 万冊の外注処理を行っている。また、まとまった量の蔵書購入や寄贈があったときにも、MARC 作成を業者委託することにより、経常業務に影響を与えることなく処理することができる。これが上記（1）の合理化、省力化に大きく寄与している。

(3) 学術情報センターとの接続

そもそも BIBLION は学術情報センターとの接続を前提としたシステムであったが、接続することにより学術情報センターが提供する種々のサービスの恩恵に浴することができ、これも上記（1）の合理化、省力

化に寄与している。

2 今後の課題

(1) レスポンスの向上

オンライン処理や画面照会のレスポンスが開発前に期待したものよりも大きく下回っている。ホストコンピュータの変更（M 240 H→M 640/30→M 680）の都度、わずかずつの効果はあったが、それでもまだまだ不満な状態である。この原因として、ホストコンピュータと端末機の接続形態（図書館とはなれた場所にあるホストコンピュータとの間がリモート TCE 接続でつながっている）が考えられており、1995（平成 7）年 9 月の新大学図書館第 1 期完成時には学内 LAN（イーサネット）で接続されることになっている。これにより、端末機のレスポンスは大幅に改善されるものと期待している。

(2) データベースの品質向上

本学の蔵書データベースには次のような欠陥が存在している。これらの欠陥については、それぞれを可能な範囲で解決しデータベースの品質向上に努めなければならないと考えている。

①入力内容の誤り

これは、書名や著者名といった書誌項目、請求記号や資料区分といった所蔵管理項目を問わず、誤った内容のデータが入力されているということである。その大部分が遡及作成されたデータで発見されており、パンチミスがその原因である。データ作成時には一部プルーフリストによる校正を行ったが、対象件数が多かったためチェックはシステム運用上重要な必須項目に限定され、納品業者によるチェックを信頼し、全項目にわたった校正までは実行できなかったことも原因である。

②データ項目の精粗

遡及作成したデータは入力項目が限られている。そのため、和書がヨミでは検索できない。なんらかの資料のリストを作成してもヨミでソートできないためヨミ順リストが作成できないという現状がある。これについても、可能な限り学術情報センターへ所蔵登録し、書誌を

修正することで徐々に整備することを考えている。

③複本管理ができていない

本学の蔵書データベースはその個々のデータの作成方法が、「システム受入による作成」、「遡及入力による作成」、「外注による作成」の3通りある。このうち、既所蔵データとの重複受入を系統的にチェックできるのは「システム受入」だけであり、他は重複の有無に関係なく1冊のデータを作ればその都度1件の書誌データを作成することになってしまう。そのため、蔵書データベースを用いた分析を行っても、重複購入調査や複本調査の結果が不正確なものになってしまう。また、このようなデータをそのまま OPAC に公開すると検索結果の表示中に、同一書誌が複数回にわたって現れることになり、利用者にとって非常に見づらいものになってしまう。これへの対応として、ISBN をキーとして同一書誌（と考えられるもの）が複数作成されているデータを抽出するプログラムを作成し、その結果をもとに1書誌に集中させる作業に着手した。この作業は日常業務のかたわら行っているため長期間をかけて継続する予定である。

(3) 運用負荷の軽減

業務のシステム化によって従来の図書館業務の負荷は全体として軽減されているといえるが、従来はなかったものとして「システム運用」業務が発生している。現在、システム運用のために専従要員として3名を置いているが、これ以外にも業務現場のエンドユーザーの若干名に運用上の役割を負わせている。この役割を果たすために、システム要員はハードウェア、OS、DBMS やプログラム言語といったシステムスキルを要求され、また、エンドユーザーといえどもある程度のシステム寄りのスキルを持つことが求められており、このための負荷が軽視できないものになっている。今後、これらの運用負荷をいかに軽減するかを考えていかなければならない。

(2) 汎用機での運用と障害

1991（平成3）年～1992（平成4）年

図書システムの全面稼働は1991（平成3）年12月であった。しかし、順調に運用が軌道に乗ったわけではなかった。この頃の図書システムに関する状況は以下のようなものであった。

ア コンピュータの能力不足

図書システム稼働の直後からホストコンピュータの処理能力不足が明確になり、これが解決すべき課題となっていた。一例を挙げると、図書業務では重複調査を行う。これは既に購入済みの図書資料を重複して購入することを避けるため、あるいは、重複して購入することとなった場合にも新たに購入するものに対して既に所蔵しているものと同じ請求記号を付与するための作業である。重複調査のために必要なデータ（検索条件）を入力し、実行のボタンを押すと結果が返るまでの時間が非常に長いということがわかった。これは、ホストコンピュータの処理能力が必要なレベルよりも低いということが原因であった。図書館員は我慢強く待っていたが、やがて、図書館で重複調査を実行すると、同時に運用されている図書以外のシステム、例えば財務のシステムが止まってしまうという現象が報告されるようになった。これは、図書館の処理がシステム全体にかける負荷が大きいため、全体としてコンピュータの資源が不足してしまうことにより起こる現象であると説明された。すなわち、財務、人事・給与、学生・生徒、図書の4つのシステムを並行処理できるだけの能力を具備していないということであり、メーカーである日立製作所の設計ミスであった。しかし、学内のほかの事務システムのユーザから見れば、図書以外の3システムで運用していたときには支障なく稼働していたのに図書システムが稼働するとトラブルが頻発するようになったということで、図書館が悪いというような誤解にもとづく非難めいたことが言われるようになった。そこでシステム課を中心に対応策を協議した結果、日立製作所に対してホストコンピュータの機種変更を要求することとなり、上位機種に入れ替えられ、処理速度は若干向上した。

イ オンライン時間帯の問題

当時本学の職員の勤務時間帯は8時30分から16時30分であった。ホストコンピュータの運用オペレーションはシステム課が担当していたが、時差勤務により、16時30分のオンライン処理が終了した後、約2時間のバッチ処理を行って、一日のシステム運用を終了するという形がとられていた。

図書システムが稼働するまでは、この時間帯で支障なく運用されていた。しかし、図書館は利用者窓口の終了が20時となる日もあり、図書システムの稼働により、システム運用時間帯という新たな検討課題が生じた。検討の結果、システム課でマシン運用のための外注オペレータを導入することとなり、図書システムのバッチ処理は図書館の窓口業務の終了後に開始されるようになった。しかし、外注オペレータによる処理の過程で、データやプログラムのエラーにより処理が正常に進まなくなることがたびたび発生した。このような場合に外注オペレータは独断で対応することができないため、図書システム担当者に連絡をとり指示を求めるということが頻繁に発生した。図書システム担当者が帰宅している場合は、自宅まで電話で連絡が来ることになる。そして、電話で口頭指示することで対処できる場合と、そうでない場合があり、後者の場合には図書システム担当者が夜間に情報処理研究センターまで出向いて対処を行うということがしばしば発生した。このように非常に不安定で、また運用上の負担の大きいシステムであった。

ウ プログラムの改造

一般にコンピュータシステムを導入する際に既製のパッケージシステムを導入することの利点は、価格を抑えることとともに、独自の業務を見直し業務を標準的なものに近づける契機になるということがある。

しかし、本学における図書システムの導入においては、パッケージシステムの導入の利点の業務標準化という部分を放棄して進められてしまった。それは、業務のシステム化を推進するにあたって、図書館内の保守的な職員層の反発に配慮して、現行の処理を単に機械処理におきかえるだけだ、といった説明が行われていたということが背景にあると考えられる。

そのため、図書館の業務をできるだけ変更せずそのまま機械化することに

重きをおいたシステム導入が行われ、パッケージ標準機能の範囲外の機能をカスタマイズにより独自開発するという結果となった。これは当然、導入費用の高額化をもたらすはずであった。しかし、幸か不幸か SE が図書館員の要望に沿う方向で改造仕様を作成し、結果として費用をそれほど大きく増額させずに多くのカスタマイズが実現できることとなった。本来このようなことは好ましいことではなく、システム開発の統括部課（システム課）においてチェックして排除すべきことであったかもしれない。しかし、無理からぬことであるが、システム課で他部課の業務の細部にわたってシステム化の適不適を的確に判断することは実際問題として不可能に近く、費用の面さえ問題なければカスタマイズが実現するという結果となった。

また、導入後稼働段階になって新規の機能開発や改造要求が多く出されるようになったが、この段階では SE にこれを行わせるには当然さらに費用が発生することになる。そこで、図書システム担当者をプログラム言語（PL/1）に習熟させ、その役割を果たさせることになっていった。幸い、ソースプログラムが見えるような形で納品されていたため、このプログラムの学習を現実に行える条件が満たされていた。

図書システム担当者は、学習によりプログラム作成能力が向上するにつれて、図書館員から出される改造や開発の要望に対してできるだけ応えたいという姿勢が強まっていった。本来、必要度等を勘案し費用対効果の観点から却下すべき要望に対しても、習得した技術を実際に使いたいという気持ちから、開発に着手するというような局面もままあったと思われる。

自前の技術では対応できないような高度なもの、複雑なものは SE 費用を予算申請して確保し外注する、また、館内で対応可能なものは、自前で開発するという形でかなりのメンテナンスを積み上げていくこととなった。

その結果、日立製作所としても、あまり利益にならない状態のままで、いつまでも関西学院大学図書システム担当の SE を配置しておかなければならない状況を嫌ったのであろう、ついに「関西学院大学図書館のシステムは日立製作所のパッケージシステムではなくユーザ独自のシステムである」としたい旨の申し入れが行われ、双方協議の結果、本学独自システムであると位置づけられることとなった。

エ 検索システム（OPAC）に対する要望

本学が導入したシステム（BIBLION）には検索システム（OPAC）が付属していたが、導入当初、本学では検索機能は事務機能か教育研究機能かどちらに属するものかの切り分けがされていなかったこと、不特定多数のユーザがアクセスするシステムである OPAC を特定の内部者だけがアクセスすることが望ましい事務用コンピュータ上で運用することが不適当だということにより、導入は先送りされていた。図書システムが全面稼働して一定の期間を経過した段階で、利用者のニーズを背景に OPAC を運用したいということを図書館内では検討し始めていたが、事務システムの一部分という位置づけの中ではそれは実現することなく、次の段階に先送りされることとなった。

(3) 改善への模索

1992（平成4）年～1998（平成10）年

情報処理研究センターには、事務処理用のホストコンピュータ（M 640/30）とは別に教育研究用のホストコンピュータ（M 680）が設置されていた。

1992（平成4）年は教育研究用コンピュータのリプレースの年にあたっていたが、いくつかの懸案を抱える事務用コンピュータもこの際、再編するという目的で両機を一括してコンピュータのシステム選定が行われた。検討の結果、最終段階になって日立製作所と富士通の2社が残った。興味深いのは、システム選定作業に関与した者の中で両社の支持が半分ずつとなったのであるが、管理者層は、従来と同じメーカーである日立製作所を支持したのに対して、日常の運用に携わる担当者層は、富士通を支持するというように鮮明に分かれたことであった。

結果は日立製作所提案が選択されたが、この検討の中で図書システムが事務システムから半ば独立して、事務用コンピュータから、より高性能の教育研究用コンピュータへ、その稼働環境を移すことになった。これにより、他の3つの事務システムとシステム資源の競合が回避されるという効果が生じた。また、セキュリティの点で障壁があった OPAC の導入も実現しやすい環境となった。

実はこれらの背景には、当時ダウンサイジングという言葉で語られていた汎用機からサーバへという波が教育研究系システムの世界では当たり前となっており、高性能を持つ教育研究用コンピュータでありながら、ほとんどそのシステム資源が使われていないという実態があった。

また、OPAC であるが、システム選定では最終段階で 2 社が争った際に、自社から他社への乗換えという結果を避けた日立製作所がバーゲニングを行い、日立製作所のシステムが選定されれば OPAC の導入経費を無料にするという提案を行ったため、図書システムとしては一種「渡りに船」という形が労せずしてできあがったことになる。

このような経過により、1992（平成 4）年から図書システムは事務の 4 システムの内の 1 つという位置づけから半ば独立し、運用環境としては教育研究用コンピュータ上で稼働するという事となった。このような運用が実現した背景には、教育研究用コンピュータに事務用機には設置されていなかった AOM（自動運転装置）が付いていたこと、および、関学全体としてのマシン運用負荷を軽減させるため、このリプレース時に導入された磁気テープライブラリ装置（磁気テープを無人で機器に着脱させる装置）の存在が大きく寄与している。これら 2 つの装置により、従来ホストコンピュータの前にはマシンオペレータが常駐し、操作を行うとともにコンソールに表示されるメッセージに従った操作を行ったり、処理の進行に伴って必要となるテープ等の着脱やプリンタの操作等を行っていたが、これらを無人に近い状況で運用することが可能となった。

また、1995（平成 7）年の新大学図書館第 1 期開館により、図書館内にコンピュータ機器の設置場所が設けられ、ホストコンピュータ用のサブコンソール、プリンタや磁気テープ装置が図書館内に設置された。このことにより、毎朝あるいは必要ときにテープをセットしたり、プリンタから出力される各種リストを取りに、情報処理研究センターまで毎日往復していたことから解放されることとなった。

ア BIBLION TSS-OPAC の運用

教育研究用コンピュータへの移行により懸案であった OPAC の運用が可

能となった。1992（平成4）年夏のリプレース完了後、1993（平成5）年4月からの運用開始に向けて、この OPAC の構築作業に着手した。約 10 ヶ月にわたる図書館員と SE による、ソフトウェア導入、機能確認、データベース作成、動作テスト、運用テストを実施し、予定どおり 1993（平成5）年4月の本稼働を迎えることができた。しかし、この準備作業はかなりの負荷を伴うものであり、今から振り返るとすべての図書システム構築作業の中で 1992（平成4）年暮れから 1993（平成5）年3月までの間はずっと日々の作業負荷が大きくなった期間であったと言える。

そのようにしてようやく稼働した OPAC であったが、このシステムにはいくつかの欠点があった。

まず、利用者にとっての欠点であるが、現在のシステムのように GUI インタフェースによるものではなく、ラインモード画面の所定の位置へ、一定の文法にもとづくコマンドを入力することにより動作するものであり、検索語等は一種の引数として、これも文法にもとづいて入力しなければならないものであった。従って、利用者がこのシステムを使いこなすには一定の慣れが必要であり、習熟するためにはマニュアルと首っ引きになることが求められた。当時としては優れた検索機能を具備したシステムであったが、その優れた部分を引き出すことができるまでに至らない利用者がほとんどであったと思われる。

また、この OPAC は図書館業務で構築される蔵書データベースとは別のデータベースを使って提供される機能であった。日々の業務により蓄積される蔵書の新規登録分や変更分を OPAC のデータベースへ反映させるためには、蔵書データベースから前回更新時以降の変更分を抽出し、それを中間ファイルとして変換し、その結果を OPAC 用のデータベースへ反映させるという処理を、通常の業務処理が終わった後の時間帯に実行しなければならず、この業務の運用負荷が大きなものとなった。また、データの追加と更新は日常の運用の中で実施することが可能であったが、削除処理は検索用データベースの仕様上の制約により随時に行うことができなかった。しかたなく年度の変わり目に1年分の除籍データを OPAC のデータベースから削除する運用となったが、結果的に、この処理は全件の再作成と同等の処理を

行わざるを得ないものとなり、除籍データが徐々に増加するにつれて、この削除処理の所要時間が増大し、毎年5月の連休をこれにあてなければならぬようになっていた。

さらに、OPACは1年365日、1日24時間という「いつでも使える」という要求とともに、自宅からも使えるといった「どこからでも使える」という要求に応えなければならない宿命があった。しかし、当時のコンピュータの学外からの接続が電話回線によるtelnet接続というものであり、使い勝手が極めてよくないものであった。

以上のようなことにより、せっかく実現したOPACであったが、これを喜ぶ声と同時に、不満を訴える声も大きいものであった。世間ではパソコンのOSがWINDOWS主流となり、初めての人でもマニュアルなしで使えるようなOPACが求められるようになっていたところであり、OPACは稼働と同時に早くも改善が課題として立ち上がったことになる。

イ 新技術導入の模索

1995(平成7)年が教育研究用コンピュータのリブレース期にあたっていた。図書館ではこのとき、世間で進んでいたコンピュータシステムの変革(いわゆるネオダマ:ネットワーク対応、オープンシステム化、ダウンサイジング、マルチメディア化)に対応すべく、図書システムのCSS(クライアント・サーバ・システム)への移行を模索する活動を行った。

これは、図書システム市場に登場し始めたCSS型のパッケージを商品として持つ業者に対して、本学図書館にとって最適と考えられるシステムの提案を依頼するというものであった。いくつかのパッケージは本学で運用していたものとは異なり、画面もGUIの画面であり、ラインモードの画面の古い感じのシステムと比較すると非常に新鮮なものであった。また、機能面でも従来は不可能とされていたことが実現されており、非常に魅力的なものであった。しかし、この時は以下のような理由によりシステムの変更を断念している。その理由は、図書システムが汎用機を必要としなくなったとしても、事務システムは従来どおりのシステムを継続使用するので、関西学院内に汎用機が存在し続けること、CSSシステムのユーザ館には全国を見渡し

ても大規模な大学がほとんどなく、規模への対応という点で実績が乏しかったこと、概ね CSS システムがまだ高価であったことである。

ウ 学内の他の図書館（室）でのシステム使用要望

このころ学内の他の部署にある図書業務にも、図書システムを使いたいという要望が出されるようになった。

そのような部署としてまず、産業研究所がある。産業研究所は図書ブロックでの検討の初期の頃から、学内の図書業務を、システムを使うことにより合理化するという図書ブロック本来の目的に同調して、検討に参加していたが、いくつかの理由により図書館と同じ過程でシステムを導入することは行われなかった。しかし、産業研究所では図書業務のシステム化を断念したわけではなく、しばしばシステム導入が検討され、図書ブロックにも検討依頼が行われたものの、実現に至ることなくこの時期を迎えていた。

次に中学部図書館である。中学部では司書教諭が生徒に対して、検索システムを使って本を探すことを体験させるという教育上の目標を持っており、図書ブロックに対して中学部の事務室を経由してこの相談があった。その際に、システムを導入するとしても、大学図書館と同じものを使うのか、独自のもの、たとえばパソコン上の軽いシステムを使うのかということを検討した。費用の点で、また運用負荷の点では前者に利点があるが、大学生や研究者が使うような OPAC を中学生が使えるのか、という点で議論がわかれた。結局、OPAC は慣れで解決する部分が大きいということ、中学部生徒はやがて大半が本学の大学生となることで、同じシステムを使うことにも意味があるとのことから同じシステムを使用するという結論になった。

次に高等部図書館である。高等部図書館も図書ブロックでの初期の検討段階から対象になっていた。しかし、大学のような規模の大きさがいないため、高等部では汎用機のシステムではなくパソコンのシステムを選択し、これを導入・運用していた。中学部が大学と同じシステムを使用する可能性が大きくなったため、高等部でも検討してもらった結果、同じシステムを使用することになった。ただ、高等部では既に3万件余りのデータをパソコンシステムで作成しており、これを抽出変換して汎用機システムのデータとしてロー

ドするという作業が必要となり、図書システム担当者および SE はこれに手を取られることとなった。

最後に言語教育研究センター（言語教育センターを名称変更）である。言語教育研究センターでは、従来図書館の視聴覚室で提供していた資料のうち、外国語学習用資料を移管し、これらの貸出サービスを行うことになった。この段階で、貸出管理を、コンピュータシステムを使って行うことで効率的に遂行したいという強い希望があり、これが大学の学長室を通して図書館へ伝えられ、図書ブロックでその可否を検討することとなった。管理対象の資料数も貸出件数もそれほど多くはなかったため、図書ブロックとしては費用対効果の点でシステム化対象外との判断をしたが、柚木学学長から田中館長に対して強い要望が行われたこともあり、システム化に踏み切ることになった。

これら学院内の他の図書館の業務を処理するためには当時の BIBLION が具備していた分館管理機能では不十分であるとされ、日立製作所がリリースしていた新しい図書システムである BIBLION21 では、それが可能であるため、新システムへの移行、ないしは、当該機能を備えた CSS パッケージへの移行の必要性が浮上することになった。

エ Y2K（西暦 2000 年）対策

20 世紀末期が近づくにつれて世間全般にコンピュータシステムが抱える Y2K（西暦 2000 年）問題が喧伝されるようになっていた。

本学でも図書システムだけでなく他の事務システムすべてについて、何らかの対策の必要が叫ばれ、情報システム課（システム課を名称変更）を中心に、個別に必要な対策の検討が開始された。図書システムでは担当の SE に調査を依頼し、対応が必要となる点の洗い出しを行った。その結果、パッケージ（BIBLION）に Y2K 対策を施して使用できるようにするためには一定額のシステム改造費用を要するとの結果が出た。しかし、この Y2K 対策は、多額の費用を投じながら、結果として従来とまったく同じことしかできないものであった。そこで、図書システム全体の改善につながり、かつ、いくつかの懸案事項の解決につながるような方策を考えようということで、当

時図書ブロック内に検討チームを設けて検討し、その結果、BIBLION21 へ移行するという案が浮上した。BIBLION21 への移行のための費用の見積金額として Y2K 対策費用の2倍以上の金額が提示されていた。また、BIBLION にメンテナンスを施して分館管理機能を付加するための改造費用見積額としても、ある金額を聞いていた。つまり、選択肢としては、①Y2K 対策を施す時に、BIBLION に改造費用を投じて分館管理機能を付加するが、それ以外の機能は現行どおり、②移行費用を支払って、Y2K 対策が不要で、分館管理機能を標準装備している BIBLION21 へ移行する、のどちらかであった。後は、費用の問題だけであり、交渉により後者の移行費用を下げさせ、どれだけ前者の改造費用に近づけることができるかが、選択の決定要因となった。

再三の交渉により価格が下がってきたところに、さらに新しい要因が発生した。当時、本学より一足先に BIBLION から BIBLION21 への移行を実施していた大阪市立大学学術情報総合センターで、業務系機能は汎用機上の BIBLION21 を使用するが、サーバ上で動作する別のシステム製品を使った OPAC（GUI インタフェースの画面）が開発されたということが伝わってきた。これを本学でも使用できないかということを交渉したところ、それほど大きな費用の増額なしにサーバ上の OPAC が導入できるめどがついた。そこで、図書館では学内の関係部局を説得する努力を行い、1998（平成10）年度のシステム契約更新期に BIBLION21 へ移行することについて承認を得ることができた。これにより、Y2K 対策、分館管理機能導入、サーバ上の OPAC 導入、新 DBMS による管理の省力化や処理の高性能化といったことを実現することができることとなった。しかし、その反面で、BIBLION 導入のときに実施した多くのカスタマイズ機能を捨てることを余儀なくされた。新たなカスタマイズのための費用が捻出できないということがその背景にあったが、その結果、図書システム担当者は自力でいくつかのプログラム開発を行って、欠落するカスタマイズ機能を補完せざるを得ないこととなった。このとき、多くのカスタマイズ機能を捨てる得なくなったために、本学図書館の独自の業務をパッケージシステムの機能に合わせる目的で、運用系や制度面での変更を行っている。たとえば、延滞罰則であるが、従来は

1日の延滞につき、1冊3日の貸出不可期間を設定し、冊数ごとに延滞日数分加算するという、極めてユニークな規則が運用されており、BIBLION時代にはこれをシステム上設定する機能を開発していた。BIBLION21移行に際して、このような独自規則による機能開発を行わず、結果としてシステムに合わせた業務運用を行うこととなった。

10 整理－整理方法の変遷と外部委託の拡大

戦後すぐの頃に2,000冊に満たなかった年間登録図書冊数は、1958（昭和33）年頃からは恒常的に10,000冊を超えるようになった。年間登録図書冊数は、年度を追うごとに増加し、1977（昭和52）年度には20,000冊、新大学図書館がグランドオープンする前の1996（平成8）年には、47,000冊を超えた。これらの登録図書の情報はカード目録で、また図書業務のシステム化後は、OPACで利用者に提供している。本学の目録規則は、和漢書では、1978（昭和53）年に『日本目録規則新版予備版』を採用し、1982（昭和57）年7月に、「和漢書目録マニュアル」を作成した。洋書では、1982（昭和57）年11月に、『英米目録規則北米版（AACR1）1967』に代えて、『同第2版（AACR2）1978』の採用を決定した。国立情報学研究所目録所在サービスへの参加後は、国立情報学研究所の『目録システムコーディングマニュアル（和資料：日本目録規則1987版改訂版、洋資料：英米目録規則第2版（1988年改訂、1993年修正）を適用）』に従って、目録データの作成をしている。

（1）カード目録の変遷と凍結

カード目録は、1955（昭和30）年度までは、和洋別の辞書体目録のみであったが、これ以降の新規登録資料については分類カード目録を作成した。また、すでに登録され配架されている資料についても、書架カードをもとに分類目録カードを複製して配列している。さらに、件名カードは、昭和30年代半ばには、洋書の人名件名を除いて作成を中止した。1961（昭和36）年には、受入カードの作成が開始された。1925（大正14）年から作成され

ていた辞書体目録は、1974（昭和49）年に和漢図書目録、1975（昭和50）年に洋書図書目録が、著者名カード目録（アルファベット順配列）、書名カード目録（アルファベット順配列）にそれぞれ再分割されることで、体系変更が完了した。これら2種のカード目録は、分類カード目録（和洋混配）とともに、利用者用カード目録として使用された。その後、和漢図書書名カード目録は、1981（昭和56）年に語順配列から字順配列に変更された。

カード目録は、OPAC が稼働するまで、出納室所蔵資料の唯一の検索ツールであった。図書業務がシステム化され、1994（平成6）年に OPAC が本格稼働して目録情報の提供が可能となったことにより、1995（平成7）年には、全ての利用者用カード目録が凍結された。

図書館では、図書館に配架する図書以外に、各学部等の図書室に配架する図書（分置図書）の整理も行っている。そのため、目録カードの作成をして図書館内で利用者に提供するだけでなく、各学部等の図書室にも必要部数を配布している。1953（昭和28）年に、これらの目録カードの作成が開始された。

1970年代後半には、図書館内に置かれているカード目録の種類としては、分類（和洋混配）、書名（和洋別、アルファベット順配列）、著者名（和洋別、アルファベット順配列）があった。しかし、1988（昭和63）年になって、開架室分と分置図書分の分類目録カードの作成が中止された。図書システム稼働以前の分置図書は、図書データが遡及して作成されていないため、カード目録が唯一の検索ツールであった。そのため、分置図書のカード目録（書名、著者名）は、1994（平成6）年以前の情報で凍結されたまま、いまだに利用者に提供されている。

また、事務用目録として、受入カード目録（和洋混配、辞書体目録、アルファベット順配列）と書架カード目録の2種類のカード目録を事務室内に設けて、目録の体系化の参考に、また書庫管理に利用していた。しかし、1961（昭和36）年10月から作成していた受入カード目録は、1989（平成元）年に凍結され、1995（平成7）年の新大学図書館（第1期開館）への引越し時に廃棄処分となった。一方、書架カード目録の凍結は、1997（平成9）年の新大学図書館開館後になる。

(2) 開架室のカード目録の変遷

1964（昭和 39）年に図書館の増築により 2 階に完全自由接架方式の開架書庫（開架室）が設けられた際に、所蔵図書のカード目録を設置した。1971（昭和 46）年には、2 万冊収容可能な開架書庫と開架事務室が設置された。所蔵図書の目録は、1974（昭和 49）年 7 月までは、辞書体目録であったが、管理・利用両面の便宜を考慮して、著者名目録と書名目録に分割して目録体系を変更した。この変更で、目録は、分類カード目録（和洋混配）、書名カード目録（和洋別、アルファベット順配列）、著者名カード目録（和洋別、アルファベット順配列）となった。

分類目録については、1988（昭和 63）年にカード目録を廃止し、図書システムで作成した図書データから冊子体目録を出力して、利用者に提供した。この冊子体目録は、従来の所蔵分を収録した本編と、新たに増加した図書を収録したキュムレート版（累積版、月 1 回発行）で構成した。書名カード目録は、同時期に、開架室の全所蔵図書の遡及データから新たに書名カードを出力して、新しいカード目録とした。そのため、以前から蓄積されていたカード目録は廃棄された。書名カード目録には、その後も、図書システムから出力された新規配架図書分の目録カードが繰り入れられた。また、著者名カード目録は、開架室の全所蔵図書のデータが完備されたことにより、カ



目録カードボックス

ウンター内の事務用端末機で、利用者に代わり図書館員が代行検索を行うこととして、同年度末に廃止した。1990（平成2）年12月には、CD-ROM 検索システム（4台）による開架室所蔵図書データの提供が開始された。このことに伴って、分類目録（冊子体）は廃止された。CD-ROM は、OPAC が本番稼働した1993（平成5）年まで使用した。さらに、書名カード目録は、1995（平成7）年の新大学図書館（第1期開館）への引越し時まで使用された。

（3）目録カード作成方法の変遷

目録カードの変遷には、歴史をみることができる。目録の記述は、その時々目録規則に則り、自前で作成していた。目録カードは、手書きの時代を経てタイプライターの使用に移行する。タイプライター使用の初期は、著者名カード、書名カード、分類カードをそれぞれタイプ打ちして作成しなければならなかった。そのため、書名と著者名、あるいは著者名と書名だけしか記載されていない簡略式の目録カードが作成された。その後、複製技術が発達し、1枚の目録カードから複数枚の目録カードの作成が簡便にできるようになった。当初の複製はガリ版方式であったが、数十年の時間を経て目録カードは、専用コピー機によって複製が作成されるようになった。

1976（昭和51）年頃から国立国会図書館印刷カードを、また、1980（昭和55）年頃には米国議会図書館カード（LCカード）等の印刷カードを購入し、分類付与のための参考用や、目録基本カードとして使用し始めた。1987（昭和62）年には、学術情報センターの総合目録データベース事業に参加した。実運用としては1988（昭和63）年から、センターから提供される書誌ユーティリティを利用して目録データを作成した。また、そのデータを利用することによって、必要な種類の目録カードを出力した。書誌ユーティリティに存在しない図書資料については、独自で書誌所蔵データを作成することにより目録カードを出力した。

なお、手書きの時代、タイプライターの時代、複製の時代、印刷カードの時代、それぞれの目録カードは、サンプル抽出し学院史編纂室に保存している。

こうして、図書業務の機械化により、目録データの蓄積・利用が格段に効



各種目録カード

率化された。すなわち、限られた場所（開館中の図書館）から、また、限られた検索項目からのアプローチしかできなかったカード目録の時代から、どこからでも、いつでも、また多様な項目から検索が可能な OPAC へと一気に移行が進んだ。目録データが完備され、ネットワークシステムが発達した現在においては、図書館のカード目録は、過去の遺物だといえるかもしれない。しかし、本学においては、まだ一部、カード目録を図書館内に備え付けている。これは新規に作成しているわけではなく、過去に登録し利用に供している図書で、目録データの遡及作成が行われていない分置図書のカード目録である。目録データが完備すればカード目録は、廃棄されることになる。

カード目録を作成し、維持していた時代は、図書館の目録作成担当者として配属された職員は、まずカード目録の配列ルールを教えられ、毎朝必ず1時間目録カードの配列を行った。カード目録が唯一の所蔵資料の検索手段であり、配列ミスは許されなかったからである。目録カードの配列業務は専任職員の担当業務であり、アルバイト職員は、繰り入れ前の事前準備作業はするものの、実際のカード目録への繰り入れはしなかった。このようにカード目録は、手間暇かけて維持され、図書館の心臓部とも位置づけられ、OPAC が提供されるようになるまでは、図書業務の大きな割合と、図書館施設の物理的スペースの大きな部分を占めてきたのである。

(4) 分類番号と図書記号の変遷

本学図書館の蔵書は、洋書、和漢書ともに、DDC 16 版を骨格としつつ日本の大学図書館に適合するよう改変された分類法によって分類されている。現在使用している分類表の基礎となった改変は、記録は残されていないが、司書職にあった入交光三の手によるものと推測できる。改変の主な点を挙げれば、原表の分類番号では、日本語、中国語が 495.6、495.1 となっているのを 450、460 に、日本文学、中国文学が 895.6、895.1 となっているのを 850、860 にそれぞれ変えている。それに伴い、助記法中の言語区分である記号 5 のイタリア語を日本語に、記号 6 のスペイン語を中国語に変えたこと、仏教が 294.3 となっているのを 293 に変えたこと、商業・経営が 650 の箇所にあるのを 380 に移したことなどが挙げられる。

また、DDC 16 版にオプションとして載っていた分類番号 822.33 の“Special author table for William Shakespeare”による特別分類記号（special scheme）を 1963（昭和 38）年 3 月 20 日に採用したというメモが残っている。同時期に、Goethe についても特別分類記号を開始したことを、当時の原簿台帳から読み取ることができる。

その後、分類表は、時代の変遷によって改訂が重ねられることになる。1985（昭和 60）年には、新しく必要となった主題の設定など、内容的に不備であった部分を補った。また、分類各項目の名辞（term）を DDC 18 版、DDC 19 版の表現に変更し、日本語による表現はできる限り NDC7 版、NDC 8 版、国立国会図書館分類表を参考にした改訂版を発行した。1991（平成 3）年度には、Shakespeare 分類、Goethe 分類を停止した。

図書記号は、蔵書数 6 万 5 千冊の登録分まで著者記号法が使用され、原簿番号 65001 からは受入順記号法を採用した。しかし、著者記号が、以後、まったく使用されなかったかというそうではない。コレクションなどでは巻冊記号に著者記号を用いる場合もある。また、初期（1980 年代）の外部委託による図書の整理では、外部委託業者は、現在のようにインターネット経由で受入順番号を採番することができなかったため、図書記号に著者記号を取らざるを得なかった時代もあった。しかしながら、通常の登録図書の図書記号として、著者記号法が使用された最後の日は、1949（昭和 24）年 3

月2日であるといえる。

(5) 関連索引、変換表の作成

関連索引は、利用者の求める主題が分類表中のどこに位置し、求める図書がどの主題に収められているかを知るためのものである。分類表の中の用語だけでなく、同義語、類語などからも分類番号にたどり着くように並べられた索引である。分類表本体に合冊されたものとして市販されている。分類担当者は、DDC 分類表に合冊されている関連索引（英語）を利用して分類付与の参考としていた。さらに、利用者にも、分類番号へのアプローチのひとつの手段として関連索引を提供することが検討された。そして、日本語による本学独自の分類表に対応する関連索引の作成を行うことになった。1985（昭和60）年の分類番号改定時には、分類表の改訂と同時に関連索引の作成が必要であることは認識されていた。しかし、日本語の関連索引に使用する名辞の適否や分類表との照合、点検作業に時間がかかり、日本語の関連索引（冊子体）の発行は1989（平成元）年3月になった。この関連索引は、1993（平成5）年12月に改訂された。その後、OPAC が公開され、件名情報や書名等に含まれる語（Word）によって目録情報の検索が可能となると、冊子体の関連索引の利便性は薄れたため、それ以降の改訂版は作成されていない。

また、書誌ユーティリティから提供される書誌分類を参考に本学独自の分類番号を付与するために、1987（昭和62）年9月にNDC8版との、1991（平成3）年3月にはDDC20版との変換表（本学の分類番号への変換表）の冊子を作成した。

(6) 外部委託による整理の拡大

外部委託による図書資料整理（データ作成および装備）は、図書業務のシステム化にあわせて始まった。本学に図書システムが導入された1980年代は、国内の大学図書館が図書業務のシステム化を始めた頃にあたる。当時、国内では、国立国会図書館のJAPAN-MARC等いくつかの書誌フォーマットは存在したものの、標準となる書誌フォーマットが確立されていなかった。

た。図書システムのメーカーによってそれぞれ書誌フォーマットは異なっていた。その後、1986（昭和61）年に設置された学術情報センターの総合目録への参加館が増えることにより、各メーカーの図書システムは、この総合目録からのデータ取り込みを標準装備とするようになった。しかし、学術情報センターの総合目録では、書誌階層を子書誌と親書誌の2階層でしか管理できないため、独自路線を歩む大学も存在した。

外部委託開始当初は、データ作成を行う委託業者が利用する既存の MARC（Machine Readable Cataloging）を日立製作所の図書システム BIBLION に取り込むため、書誌データのフォーマット変換仕様を作成することが必要であった。

具体的には、丸善は UTLAS（University of Toronto Library Automation Systems）、図書館流通センター（TRC）は TRC MARC、紀伊國屋書店は OCLC（Online Computer Library Center, Inc.）を利用していた。

外部委託により作成されたデータが最初に本学の図書システムに取り込まれたのは1988（昭和63）年度からである。そして、1997（平成9）年度以降は、外部委託でのデータ作成が年間の登録冊数の半分以上を占めるようになっていく。

外部委託による目録データ作成は、ア．図書館に既に登録されている図書資料のデータ作成、イ．データ整備（フルマーク化）、ウ．新規に図書館に登録する図書資料のデータ作成、に大きく分けることができる。

ア 図書館に既に登録されている図書資料のデータ作成

遡及データと呼ばれるもので、対象データは図書館配架の図書すべてと、1984（昭和59）年度から1988（昭和63）年度までに図書館に登録された部局配架の分置図書の、あわせて約52万5千冊であった。書架カードをもとに、入力原稿をおこし、外部委託により磁気テープを作成させた。これらのデータロードは、1990（平成2）年度にはすべて完了した。

図書館に配架している図書すべての目録データを作成したのは、システムでの貸出に対応するためである。また、部局配架の分置図書の一部について目録データを作成したのは、図書システムによる重複調査に利用するためで

あった。

週及データには、費用、時間の制約から次のような問題があった。

- ①データの入力項目は本書名、最初の著者名、出版者、出版年に限られていた。
- ②所蔵1件につき1件の書誌データを作成しており、現在のように1書誌複数所蔵のデータではなかった。
- ③文字コードの問題があり、フランス語などの音標文字のデータが正しく作成されなかった。

イ データ整備（フルマーク化）

週及データは、書誌データとして不完全であったため、OPACでの検索が主流になるにつれ、その問題点が指摘されるようになった。このため、1994（平成6）年度からは、コレクションを中心に書誌データのフルマーク化が始まる。1995（平成7）年度からは、フルマーク化費用が「使途特定予算」として認められ、TRCに委託するようになり、2002（平成14）年度からは、システムズ・デザイン社に委託業者を変更した。並行して館内でも作業を行うことにより、2011（平成23）年度で図書館に配架している図書は、ほぼすべてのフルマーク化を終了することができた。

ウ 新規に図書館に登録する図書資料のデータ作成

経常図書費で購入する図書資料の目録データ作成の外部委託は、1988（昭和63）年度の4,404冊から始まり、1997（平成9）年度には20,000冊を超え、その後25,000冊前後で推移していた。ここ数年は、2009（平成21）年度を除き、20,000冊前後となっている（2009（平成21）年度は翌年からの図書費予算の繰越廃止に伴い一時的に冊数が増え、32,545冊を外部委託した）。

開始初年度は、開架室の学習図書からスタートし、翌年からは、出納室の図書も対象にしたことで、委託冊数は年々増加していった。選書には、TRCの「週刊新刊全点案内」を利用し、現物図書は関学生協に発注、関学生協の書籍部から現物を調達し、データはTRCに作成させた。約8割を発注から

1ヵ月以内に利用者に提供することを目標にしており、当時としては画期的な委託方法であった。

書誌データには TRC MARC を利用し、書誌、所蔵は遡及データ同様に 1 対 1 の関係で作成していた。まだ、OPAC も導入されておらず、利用者の検索はカード目録の時代であったこと、図書システム自体が現在のように整備されていなかったことや、整理期間を短縮させるためには、当時としては最善の方法であったと思われる。

11 館員育成－育成の工夫と実践

第2次世界大戦後の1950（昭和25）年に制定された図書館法では、司書を図書館に置かれる専門的職員と定義し、その資格要件が定められた。1951（昭和26）年7、8月に、入交光三司書が、司書講習受講のために京都大学に出張している。図書館員の司書講習への派遣については、1961（昭和36）年からは、ほぼ毎年行っており、現在も続いている。また、1961（昭和36）年には、図書館員の図書館学研究を奨励するための表彰制度を設け、この年、3名を表彰している。この表彰制度がいつまで継続されたのかは不明である。



1986年の合宿研修－千刈セミナーハウス

1970（昭和 45）年 10 月には、庶務課、司書課、閲覧課の業務の円滑化をめざして三課協議会が発足し、1978（昭和 53）年度まで続いた。この協議会は、当初は、業務処理の方法や問題点を全図書館員で検討する場として設けられたが、後には、全体研修の場として使われた。

また、1971（昭和 46）年からは、図書館主催の職員研修として講演会や合宿研修を実施し、独自に館員育成を行ってきた。合宿研修については、1973（昭和 48）年から 1976（昭和 51）年までの期間、毎年夏期に近隣の宿泊地で 1 泊研修を行った。講演会については、1971（昭和 46）年から 1995（平成 7）年まで、年 1 回から 2 回実施された。

ところで、図書館員の採用については、大学紛争前と大学紛争後では大きく様変わりしたようである。紛争前は、職員の採用についての各部局の都合がかなり配慮されていたようである。しかし、紛争後は、法人による一括採用の事務職員であり、図書館員として採用されていない。従って、図書館に配属される新採用者については、たまたま図書館に配属されたということであり、将来的には、法人の人事計画により図書館外への異動の可能性もある。このように、図書館に配属された職員は、図書館の専門的職員となることを予定して採用された職員ではない。そのため、現在でも、図書館では、新規採用者や新規配属者については、館員育成のプログラムのひとつとして、原則、配属されて 2 年目に司書講習を受講させ司書資格を取得させている。

また、図書業務のための育成、研修とは趣旨が異なるが、第 6 代東館長の時代に、図書館員の修養のための「馨会（かおるかい）」が始まった。図書館員の中には熱心なキリスト者が少なくなく、特に 1960（昭和 35）、1961（昭和 36）年の両年度には、年 5 回開催されるほど活発な活動が行われた。この「馨会」では、会費を徴収し、図書館員の慶弔時に使用されたりした。会合には図書館員全員の出席を求め、修養を目的とした会合であったが、勤務時間内に設定され、業務のひとつと位置づけられていたようである。1970 年代後半に入ると、会合も年 1～2 回となり、徐々にその活動も衰退して、会を主導するキリスト者の数も少なくなり、1985（昭和 60）年に廃止された。

(1) 国内長期研修の実施

近年になり、図書システムの導入や新大学図書館の建設などの重要な事項に対応するために、図書館員を他大学、他機関に派遣し育成を行ってきた。

1987（昭和62）年11月6日から約2ヵ月間、中村順治閲覧課主任を学術情報センターおよび東京大学附属図書館に派遣した。学術情報センターでは、学術情報センター主催の「総合目録データベース実務研修」に参加した。本学では、1985（昭和60）年から、学院事務トータルシステムの開発作業が本格化し、図書業務のシステム化に着手することになった。図書館の業務システムは、日立製作所の提供するパッケージシステム「BIBLION」を導入することで検討が進められていた。このシステムは、学術情報センターと接続することによってより効率的な運用が可能となるものであった。そこで、本学は、1987（昭和62）年3月に、学術情報センターとのネットワーク接続を完了した。システム導入後は学術情報センターと本学図書館とのデータのやり取りが必要となることもあり、総合目録データベース実務研修に派遣した。この実務研修は、国立大学の図書館員を中心に20名程度の規模で約4週間実施された。内容は、講義と実習、グループ討議で構成されていた。全国の目録担当者が分担して作成する「総合目録」の意義を理解し、目録関連業務においてリーダー的役割を担い、目録講習会の講師を担当できるスキルを養成するものであった。続いて、日立製作所のパッケージシステム「BIBLION」の運用が始まっていた東京大学附属図書館（総合図書館）でシステム運用の実際を学ぶことを目的として約3週間の実務研修を行った。

次に、1990（平成2）年10月1日から約3ヵ月間、磯辺彰閲覧課員を慶應義塾大学研究・教育情報センターに派遣した。学術情報の先進的な提供を行っている同センターにおいて、実務研修をした。この研修は、本学図書館業務の質的な改善を行うことを第一の目的とした。あわせて、間近に迫っていた新大学図書館の建築計画を進めるにあたって、本学にふさわしい充実した学術情報の提供を実現するための業務知識の習得も目的とした。図書業務全般についての研修では、利用サービスに重点を置き、三田情報センターでの研修が中心であった。

その後も、1991（平成3）年10月1日から約2ヵ月間、桑代正一運営課

員を早稲田大学図書館に派遣した。1991（平成3）年4月に完成した早稲田大学新中央図書館は、学習図書館と研究図書館の両機能を兼ね備え、早稲田大学における学術研究発展の基地をなす総合図書館である。早稲田大学の図書館において実務研修を行うことで、その成果を本学の図書館業務の改善に役立てることを第一の目的とした。また、新大学図書館の建築計画を進めるにあたり、収書業務、レファレンスサービス等に関する研修を通して、本学にふさわしい利用者サービスの実現に向けた専門的知識や技能を深めることも研修の目的とした。

さらに、1993（平成5）年10月1日から約2ヵ月間、浜田行弘運営課員を筑波大学附属図書館および図書館情報大学に派遣している。筑波大学附属図書館では、全面開架方式の大学図書館における利用者サービスと図書資料の収集体制を業務実習しながら、調査をした。また、図書館情報大学では、指導教員の指導を受けながら、大学図書館の利用者教育についての事例とその考察を、文献研究を通じて行った。

これらの研修に派遣された図書館員は、図書システムの構築や運用、また、新大学図書館建設に関わるさまざまな業務に、研修において習得した知識、技能を生かし、他の図書館員の指導役となって図書館運営に携わることになった。

（2）関西四大学図書館職員研修の定期開催と貢献

1964（昭和39）年に設立された関西四大学図書館長懇談会（後に、関西四大学図書館長会議に名称変更）が母体となって、関西四大学図書館職員研修が企画、実施され、館員育成のために大きな役割を担ってきた。

ただし、この研修は、関西四大学図書館長懇談会の設立からかなり遅れて実施されている。1976（昭和51）年10月に関西四大学図書館職員研修会運営要項が制定され、同年11月に第1回図書館職員研修会が開催された。研修会の運営のため、各大学から1名の幹事が決められた。発足当時の研修会は、基礎的業務研修と専門的業務研修を2本の柱とした。このうち、基礎的業務研修は、年1回の夏期合宿研修とし、専門的業務研修は、春秋2回の分科会研修とした。分科会研修は、当日研修とし、当初「収書・庶務」、「整

理」、「奉仕」、「雑誌」の4つのグループで実施した。第2回研修会（1977（昭和52）年5月）以降は「機械化」が加えられた。研修会は、2年を一期として、夏期2回、春秋4回実施することとした。1982（昭和57）年からは「機械化」グループについては、他の各グループの中で検討することになり、発展的解消となった。

また、1984（昭和59）年には、4つのグループで研修を続けることへの是非について議論され、1985（昭和60）年から、グループにとらわれない自由なテーマでの研修を実施することが関西四大学図書館長会議で承認された。また、1988（昭和63）年3月の館長会議では、館長会議や研修会等の当番校は、それまで会合ごとに各大学持ち回りでバラバラに担当していたのを、年ごとに同一校が当番校となって、全ての会合を担当することが決定された。従って、四大学各校は、4年に一度当番校を担当することになった。さらに、1992（平成4）年の館長会議では、研修会が夏期合宿研修と当日研修であったのを、実務担当者を対象に2～3日の日程で実施する合宿研修と各大学の共通課題について必要に応じて特定のテーマを設定して実施する研究会の2つの形での開催に変更することが協議され承認された。

1993（平成5）年には、研究会とは別に、関西四大学の相互利用の充実のために、「相互利用に関する申し合わせ事項」の見直しや、四大学での利用



1983年の関西四大学図書館職員研修会

条件や利用資格等の足並みを揃えるための相互利用連絡調整会的なものを定期的に持つことになり「相互利用担当者打ち合わせ会」として発足した。そして、翌年の研修会は相互利用関係について行われ、「関西四大学図書館相互利用マニュアル」の作成を行った。

12 対外業務－学外図書館組織への積極的関与と組織への貢献

(1) 関西四大学図書館長会議の設置と相互協力関係の継続

既述のとおり、1964（昭和 39）年に、大学図書館に内在する共通の諸問題を協議するために、同志社大学、関西大学、立命館大学、関西学院大学の四大学で関西四大学図書館長懇談会を開催することが決まった。この年は 3 回の館長懇談会が開催された。館長懇談会の出席者は、館長および管理職者であった。この年の館長懇談会では、四大学の専任教職員は、一人につき 2 冊、1 ヶ月以内に加盟館からの帯出を可能とする協定を結び、図書館間の協力体制を作った。以後、毎年、館長懇談会は開催され、1966（昭和 41）年には、外国語学術雑誌予約リストを交換して相互利用上の便を計ることを検討し、実施された。

この館長懇談会は、1969（昭和 44）年度には「関西四大学図書館長会議」に名称変更されている。館長会議は、1974（昭和 49）年度までは年 2 回開催され、1975（昭和 50）年度から 1987（昭和 62）年度までは、年 3 回開催されている。開催は、関西学院大学－関西大学－同志社大学－立命館大学の順で各大学の持ち回りで行われた。

この間、1976（昭和 51）年 7 月の館長会議では、関西四大学図書館職員が合同で研修会を行うことについて検討することが決定された。これを受けて、同年 9 月に、図書館職員研修に係る準備打ち合わせ会が四大学の図書館員によって持たれた。この打ち合わせ会でまとめられた骨子は、関西四大学図書館職員研修会運営要項として 10 月の館長会議で提案・了承されて、関西四大学図書館職員研修会が発足した。

また、それまで規約が定められていなかった館長会議については、1981

（昭和 56）年に関西四大学図書館長会議規約を制定した。規約では、館長会議は、原則として年 4 回開催すると定められていたが、実際は年 3 回の開催であった。1983（昭和 58）年 6 月には、第 1 回目の関西四大学図書館収書情報連絡会を開催し、大型コレクションの購入や研究設備図書の購入計画等、収書に関する各図書館の情報を持ち寄り意見交換した。収書情報連絡会は、以後、年 2 回開催され、各大学で所蔵している大型資料一覧を作成するなどし、実務に直結した内容が議論された。

その後、1988（昭和 63）年 3 月の館長会議において、館長会議のあり方が協議されている。そこでは、館長会議は、得がたい機会であることから、今後も続ける方向で検討がなされた。そして、館長会議は、年 3 回開催を年 1 回秋季に開催すること、また、新たに連絡調整をはかるために、館長会議の下に、職員の管理職で構成する関西四大学図書館連絡会を設けることが決定された。すでにあった収書情報連絡会は、この連絡会に吸収され、発展的に解消した。館長会議のこれらの変更については、関西四大学図書館長会議規約を改定して、1988（昭和 63）年 4 月 1 日から施行した。以後、館長会議は、毎年 1 回の開催で、四大学図書館の相互利用、図書館運営の充実に資するための密度の濃い情報交換・協議・親睦の会合として継続され、現在に至っている。

（2）兵庫県大学図書館協議会の発足と発展

1931（昭和 6）年 11 月 7 日付けの神戸新聞に「斯界の発達を期し図書館協会生る」の見出しで、兵庫県下図書館事業の進歩発達をはかることを目的として、県下 90 余の公私立図書館、文庫、学校その他の団体が一団となって「兵庫県図書館協会」を設立することになり、11 月 6 日に発会式が県会議事堂で挙げられたことを報じる記事が掲載されている。この協議会に関西学院も理事として名前を連ねている。しかし、この協議会は、1942（昭和 17）年に統制令により活動休止となった。第 2 次世界大戦後の 1946（昭和 21）年に至って、再建委員会がもたれたが、この時は再建がかなわなかった。兵庫県図書館協会が再発足するのは、1949（昭和 24）年 7 月 5 日のことになる。こうした動きとは別に、全県的な動きではなかったが、1947（昭

和 22) 年 6 月 28 日に「阪神間図書館協議会」が発足している。また、この時期は、「日本図書館協会」が社団法人として再発足した時期でもあり、また、その前年には、現在も活動が続いている「日本図書館研究会」が発足した時期でもあった。

これらの動きのうち、1947 (昭和 22) 年 7 月 19 日に開催された阪神間図書館協議会学校部会の第 1 回目の会合では、阪神間図書館協議会の事務館であった宝塚文芸図書館 (現財阪急学園池田文庫の前身) 館長から、部会成立に関しての事情説明があり、会則の朗読が行われた。また、本会 (協議会) と部会 (学校部会) との連絡の必要上、協議会から連絡員 (幹事校) が派遣されることも協議され、会則どおり実施することになった。第 1 回学校部会は、関西学院図書館で開催され、東館長、中島猶治郎 (嘱託司書) が出席している。第 2 回の部会記録によると、当初の部会加盟館は、神戸女学院 (理事校)、神戸工業専門学校、兵庫師範学校、神戸女子薬学専門学校、海技専門学院、神戸経済大学、神戸経済専門学校、神戸市立外事専門学校、関西学院大学、甲南高等学校、県立医科大学の 11 校であったことがわかる。これらの学校をメンバーとする学校部会の会合には、協議会からの幹事として、宝塚文芸図書館、神戸市立図書館からの参加があった。関西学院大学からは、毎回、中島が出席していた。部会は、年 3 回開催され、開催場所は加盟館の持ち回りであった。1948 (昭和 23) 年 6 月の第 5 回部会では、協議会を拡大して西日本図書館協議会とし、兵庫県図書館協議会を設立しようとする提案が出された。関西学院大学の中島と神戸女学院の溝口靖夫氏が創立委員に任命され、検討に入った。しかし 10 月の第 6 回部会では、協議会を西日本図書館協議会とする案については当分見合わせるとの記録が残っている。また、1949 (昭和 24) 年 12 月の第 11 回部会は、関西学院大学で開催され、東館長、中島、入交光三 (司書) が出席している。中島の手による記録には、宝塚文芸図書館の廃止に関して阪急電鉄社長を訪問したが、社長不在のため小林常務に面会して、宝塚文芸図書館を兵庫県に続けて置くことを請願したが、最早だめでないかとの報告がなされている。1950 (昭和 25) 年 5 月に開催された第 12 回会合で、学校部会の名称について、「兵庫県図書館協会との関連もあり種々論議の結果、兵庫県大学図書館協議会と呼称する

こと、但し旧制の専門学校も含むと決定した」と記載されている。これ以後、兵庫県大学図書館協議会の名称で活動が継続されている。

1952（昭和27）年1月現在の兵庫県大学図書館協議会加盟校は、海技専門学院、関西学院大学、甲南大学、神戸市外国語大学、神戸商科大学、神戸女学院大学、神戸薬科大学、神戸大学（附属図書館、工学部図書館、住吉分館、姫路分館、御影分館）、聖心女子大学小林分校、姫路工業大学、姫路工業大学短期大学部、兵庫県農業短期大学、兵庫県立医科大学、兵庫県立農科大学、武庫川学院女子大学の15校であった。1952（昭和27）年5月開催の第20回協議会の記録には、「本協議会も回を重ねること20回、協議すべき事項も大略一巡したと思われるので、今後は春秋に夫々1回定期的に開催することとし」、「そのお世話を関西学院大学にお願いして」と記載されている。

1952（昭和27）年9月の第21回協議会は、関西学院大学で開催され、東館長、中島、入交、芝英八郎が出席している。この協議会では、新しい運営方法について協議され、協議会は会費制度を採用することになった。中島の手による記録には「年500円と決定、来年度より実施」との記載がある。また、協議会役員校に神戸商船大学と関西学院大学が選出されている。役員校の任期は1年であった。協議会での議長については、学校部会発足当時から当番校（会場校）の館長が行っており、これは現在も引き継がれている。1955（昭和30）年10月の第27回協議会では、兵庫県図書館協会からの入会勧誘に対する処置について議論された。兵庫県図書館協会の申出によれば、同協会では、公共図書館部会と学校図書館部会がすでに組織されていることから、大学図書館部会を組織したいので、兵庫県大学図書館協議会加盟館全ての入会を希望するというものであった。これに関しては、「大学図書館は公共図書館や学校図書館とは自ずから性質を異にする事情もあり、また、すでに本協議会を組織している現状であるから、さらにその構成員が全部兵庫県図書館協会に加入して新たに大学部会を組織する必要は認められない」と決議された。このときの会議は、中島が出席した最後の協議会会合であった。この最後の時に、兵庫県大学図書館協議会の将来に関わる大きな決定がなされたことに、中島の、大学図書館に対する思いがかいま見える。兵庫県図書館協会への加盟については、この後も同協会からの加盟要望があったりし

て、何度か協議されている。しかし、協議会全体として加盟することにはなかった。ただし、大学によっては個別に兵庫県図書館協会に加盟した図書館もあった。

1956（昭和 31）年 3 月に中島が退職し、その後の協議会会合への出席者は入交に代わった。中島は、1946（昭和 21）年に嘱託として関西学院に復職した職員であったが、当時司書職であった入交よりも上位職として位置づけられていたようである。

1958（昭和 33）年 10 月の第 33 回協議会において、実務面の諸問題を解決していくために研究会を持つことについて提案され、1959（昭和 34）年 10 月の第 35 回協議会で、1960（昭和 35）年度より開催することを決定した。しかし、その詳細については検討されないままに、第 1 回研究会は会費を取らずに、自由に出席できるような形で開催された。その後、研究会を実施するうえで必要な経費についての議論がなされて、協議会として会費を徴収することが承認された。また、会費の経理、研究会の連絡や渉外事務を担当する幹事館をおくことになり、1962（昭和 37）年 11 月 29 日の第 41 回協議会において会則の変更がなされた。また、これに先立ち、兵庫県大学図書館協議会職員研修会規約が 1962（昭和 37）年 10 月 17 日に施行されている。

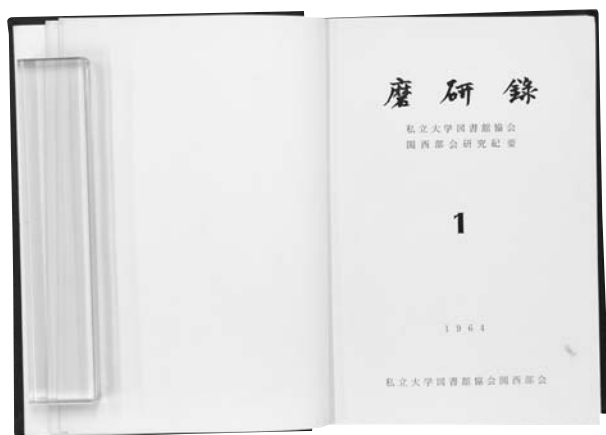
同協議会の役員館は、「協議会幹事館」、「会計館」、「協議会当番館（開催館）」で構成されていた。研修会は、「研修委員館（6 館で構成）」で企画、運営され、「研修幹事館」と「会計館」が「研修委員館」の互選により決められた。協議会は、1952（昭和 27）年以降、春と秋の年 2 回開催された。開催館は、原則、輪番で持ち回られた。また、研修会は、開始当初は年 6 回（午後のみ）、1964（昭和 39）年度からは原則年 2 回（全日）開催され、活発に行われた。

1969（昭和 44）年 10 月第 55 回協議会では、研修委員館の選出について協議された。それまでは、国立、公立大学の委員館が多く選出されていた。しかし、私立大学の加盟館が多くなってきたことにより、国・公立各 1 館、私・短大で 4 館とすることが決められた。この時に今まで「協議会を開く」となっていた文言は「総会を開く」に変更された。また、総会開催当番館が行っていた運営を役員館が行い、会場館となる館には場所の提供のみを行っ

てもらふ等の大幅な規約改正が行われた。この改正された規約は、現在の規約の基礎になっている。その翌年の1970（昭和45）年3月末には、入交次長が退職し、入交の後任として、図書館に転入してきた南論造次長と、芝課長が出席した。1971（昭和46）年11月の第58回総会では、協議会加盟館の図書館資料の相互貸借について協議されている。それまでまちまちであった様式を共通様式に改め、円滑な実施を推進することが決議されている。それ以後、資料の相互利用について種々協議され、1974（昭和49）年には、「兵庫県大学図書館協議会複写サービス規約」が制定された。また、この規約は、1976（昭和51）年に「資料相互利用に関する細則」として改正施行されている。

（3）私立大学図書館協会への加盟と協会活動への参画

私立大学図書館協会と関西学院との関わりは、1946（昭和21）年の高野山大学での第7回大会を機に、中島に代わり入交が大会に出席するようになったことに始まる。その後、1957（昭和32）年から1960（昭和35）年は私立大学図書館協会理事校、1960（昭和35）年には第21回総・大会を関西学院で開催し、1961（昭和36）年から1964（昭和39）年には監事校となるなど、協会の様々な仕事をするようになってきた。また、私立大学図書



『磨研録』私立大学図書館協会関西部会 第1号、1964年

館協会関西西部会（後の西地区部会）は、1964（昭和 39）年に研究紀要『磨研録』を発刊した。この『磨研録』は関西西部会担当理事校が持ち回りで編集した紀要であり、関西学院は第 5 号（1968（昭和 43）年）を発行し、この号には入交による編集後記が載っている。この『磨研録』は、1970（昭和 45）年の第 7 号から私立大学図書館協会会報に掲載され、独立した刊行ではなくなった。このことについて、入交は、私立大学図書館協会会報 No.54（1970. 3）に掲載された「師友・協会・私」の中で、「寿岳博士の尽力によって発刊することができるようになった西地区機関誌磨研録の育成にも関係者の 1 人として努力してきたが、諸般の事情から私大図書館協会会報に吸収することになった。」と報告している。『磨研録』の第 10 号は、私立大学図書館協会会報 No.60（1973. 6）に掲載され、その後は会報から『磨研録』の名前はなくなった。

13 神戸三田キャンパス大学図書館分室－その開設と整備

（1）神戸三田キャンパス第 1 期整備計画と分室の開設

関西学院は、新たな学部開設構想を実現するために、手狭になった西宮上ヶ原キャンパスとは別に、神戸三田の地に新キャンパスを整備することを決定した。そして、その実現のために、現在まで 3 期にわたる整備計画を策定して、神戸三田キャンパスの整備を行ってきた。まず、第 1 期整備計画として、総合政策学部開設に向けての準備が進められた。1993（平成 5）年度から、大学図書館は、大学評議会の下に設置された「新学部選書委員会」の事務局として、設置図書資料収集整理に関する業務を行ってきた。翌 1994（平成 6）年度には、総合政策学部開設用図書資料として受入れた図書約 24,000 冊、学術雑誌 187 タイトル、視聴覚資料等を整理した。

この 1994（平成 6）年度には、総合政策学部開設準備事務室に、大学図書館分室担当として大学図書館に所属している職員 2 名が配属された。1995（平成 7）年 4 月の総合政策学部開設および大学図書館分室の開室に向けて準備作業を行ったのである。

神戸三田キャンパス図書室は、大学図書館分室として、神戸三田キャンパ

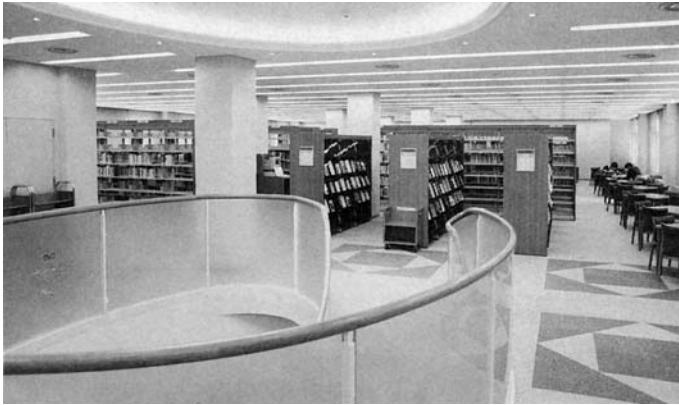


整備中の神戸三田キャンパス

スにおける教育・研究を支援することを目的に、1995（平成7）年4月に神戸三田キャンパス内のⅡ号館に開設された。総合政策学部第2代学部長であった安保則夫教授が語っていた「にぎやかに情報交換しあってブリーフィングできるような図書館」をイメージしたもので、大学図書館分室部分とメディア・フォーラム部分を融合させて、神戸三田キャンパス図書室と呼称した。メディア・フォーラムには、パソコンだけでなく、当時としては最新のマルチメディアパソコンやビデオ編集機、DTP用パソコンなどを備え付けたメディア・ラボがあり、学生たちは自由に利用することができた。

（2）大学図書館分室の組織と業務

神戸三田キャンパス図書室（図書メディア館）に配架する図書資料については、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館において発注から整理まで行っている。従って、同図書室は、利用サービス機能を主に担っているといえる。同図書室は、大学図書館の分室であるが、担当する職員は、神戸三田キャンパス事務室配属の職員である。図書業務の指示命令は大学図書館長から行われるが、業務管理はキャンパス事務室長の下にあるという形であり、この業務体制は、現在の第3期整備計画における図書メディア館においても維持され



神戸三田キャンパス図書室

ている。

図書室業務のうち、大学図書館業務と異なっているものとして、部局図書室業務も担っているということがあげられる。神戸三田キャンパスには、学部図書室を設置しないことが大学の方針として決められた。そのため、神戸三田キャンパスに開設された総合政策学部の図書委員会等の事務局を、大学図書館分室担当者が担い、図書館図書費以外の図書購入に関わる業務も担当している。

(3) キャンパス間連絡便の活用

神戸三田キャンパスが開設された1995（平成7）年当初は、西宮上ヶ原キャンパスと神戸三田キャンパス間の連絡便が設定されていなかった。西宮上ヶ原キャンパス大学図書館で整理した新着図書資料やキャンパス間貸出による利用図書資料については、神戸三田キャンパスの関学生協食材運搬車により、専用のケースを用いて1日1回の搬送が行われた。しかし、この関学生協食材運搬車は、搬送回数が少なく、夏期など便のない時期があり、不自由を極めた。そこで、1998（平成10）年3月からは、学院の業務日に運行されるキャンパス間連絡便に搬送方法が変更され、新着図書資料の提供や取寄せ利用の迅速化がはかられた。

Ⅲ 新大学図書館

1997(平成9)年～2012(平成24)年

1 施設・設備－予想された書架狭隘化

1993(平成5)年7月に始まった新大学図書館の建設工事は、3年半の歳月を経て1997(平成9)年2月に完工し、新大学図書館は、同年10月にグランドオープンした。この新大学図書館は、1999(平成11)年度日本図書館協会建築賞を受賞した。日本図書館協会建築賞は、日本図書館協会が「優れた図書館建築を顕彰し、それを広く世に知らせることによって、図書館建築の質の向上を図ること」を目的として定めたものである。この優れた図書館建築とは、建築としての質はもとより、そこで展開されているサービスもあわせて良好であることが条件とされている。受賞の講評では、新大学図書



日本図書館協会建築賞賞状

館は西宮上ヶ原キャンパスにおけるスパニッシュ・ミッション・スタイルに統一された学舎群となじみよく納まっており、館内の雰囲気には落ち着きと気品があり、知的活動の場として大学の教育研究の中核施設たる雰囲気を醸し出し、大学図書館らしさに満ちた図書館であると述べられた。

(1) 書庫の増設と自動化書庫計画の策定

新大学図書館建設の検討時から、すでに、収容力 150 万冊の書庫では、2002（平成 14）年度には、配架率が 75% を超えて満杯状態になることが試算されていた。そのため、図書館では、書庫の増設について様々な検討を行った。そして、2004（平成 16）年 5 月には、井上館長から、神戸三田キャンパスでの第 3 期工事の着工に優先して、より収容力を持った書庫（150 万冊収容）を西宮上ヶ原キャンパスの図書館に隣接する建物に設置すべきであるとする要望書を、平松一夫学長に提出した。これによって、書庫の増設については、神戸三田キャンパスの第 3 期工事とは別の動きをするようになった。その後も西宮上ヶ原キャンパスでの書庫スペース確保について井上館長から学長宛の要望書が再々提出された。これらを受けて、ようやく 2008（平成 20）年 5 月 23 日の第 672 回臨時理事会において、第 3 次中長期計画の中で、社会学部棟の改築にあわせて、その地下に、閉架書庫の形態を取りつつ、図書の取出し・戻入れを自動化した、100 万冊収容の自動化書庫を設置することが承認された。承認された自動化書庫の概要は以下のとおりである。

- ① 大学図書館に隣接する社会学部校舎の建替時に、地下部分に設置する。
- ② 建設される躯体は 100 万冊収容分であるが、当面 50 万冊収容の書庫を設置する。
- ③ 2012（平成 24）年度に設置し、2013（平成 25）年度から使用する。

このように、計画当初は、自動化書庫を 2012（平成 24）年度に設置する

予定となっていた。しかし、社会学部棟の建替工事の前提となる、旧テニスコート跡地への第一教授研究館本館の建築が、予定より遅れたことにより、2013（平成 25）年度末の完成予定となった。

自動化書庫に入庫する図書資料は以下のとおりとした。

(1) 原則

自動化書庫に入庫する図書資料は、利用頻度が極めて低く、図書館での受入年の古い図書資料を対象とする。

①2008（平成 20）年度から 2013（平成 25）年度までの外部保管図書

②2008（平成 20）年度から 2013（平成 25）年度までの外部保管雑誌

③地下階に配架している利用頻度が極めて低く、図書館での受入年の古い図書

④電子ジャーナル等で代替手段のある製本雑誌

⑤2014（平成 26）年度以降に部局から返還される図書資料

(2) 初期入庫作業（予定）

①作業期間 2014（平成 26）年 2 月～3 月頃

②作業担当 自動化書庫導入業者に委託

計画当初は、社会学部棟から図書館までコンテナ用通路を架設して、図書資料の入出庫を行う出納ステーションを図書館 1 階カウンター付近に設置する予定であったが、社会学部棟の 1 階に約 20m²の広さで設置することになった。変更の理由は、コンテナ用通路が農業用水路を跨ぐことになり、このことが西宮市の条例で禁止されていること、また、図書館内に設置した場合の工事が予想以上に大規模で、事務スペースの狭隘化も発生することであった。

(2) 閲覧座席の増設

2008（平成 20）年度からの人間福祉学部の開設と経法連携コース（経済、法の両学部共同設置のコース）の新設、2010（平成 22）年度からの国際学

部の開設により、国際学部が完成年度を迎える 2013（平成 25）年度には、西宮上ヶ原キャンパスの学生収容定員数が増加し、1997（平成 9）年度のグラントオープン時に設置した閲覧座席数では、認証評価基準の最低基準である 10% を満たすことができなくなることが予測された。そこで、2008（平成 20）年 2 月に、杉原館長から平松学長へ「西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の座席数増加について（お願い）」を提出した。さらに、2009（平成 21）年 6 月にも、曾我館長から杉原左右一学長に要望書を提出し、新大学図書館が開館した 1997（平成 9）年当時の比率である収容定員数の 13% を最低限とする座席数の確保のための検討を依頼した。その結果、2010（平成 22）年 12 月に、閲覧座席の増設工事が実施され、1 階に 20 席、3 階に 62 席、合計 82 席が増設された。これによって国際学部が完成年度を迎えても、認証評価基準である学生収容定員数の 10% を下回らない程度の閲覧座席数が確保された。しかしながら、図書館としては、認証評価基準の 10% ではなく開館当時の 13% を最低限とする座席数の確保が望ましいと考えており、今後も増設の要望を続けていくことになる。

（3）産業研究所図書業務の大学図書館への移管の動き

産業研究所は、これまでみたように、研究所創設時の 1934（昭和 9）年 4 月に図書館の西南隅の小さな 2 室から出発した。その後、一時、図書館施設外に移転したが、1948（昭和 23）年に再び、図書館の北翼の 2 階に移転してきた。さらに、1953（昭和 28）年には図書館分館の東半分に移転した。その後、1963（昭和 38）年 12 月には、図書館分館が増築後の本館に統合されたことから、産業研究所は分館の建物を占有することになった。1973（昭和 48）年 11 月には、図書館の第 2 次増築が完成したことから、産業研究所は、所蔵資料を第 2 書庫 4 階へ搬入して、新館 3 階の旧閲覧室を改造した事務所に移転し、同年 12 月より業務を開始した。1997（平成 9）年 10 月にグラントオープンした新大学図書館でも、産業研究所は、新施設の建物内に併設され、事務室は 3 階西側の一角にあり、所蔵資料は 3 階および BM 階の一部分に配架している。

2003（平成 15）年頃から、大学において、産業研究所など学内の研究所

のあり方が検討された。この検討の中で、図書館と産業研究所では、所蔵する図書資料や業務内容の点で重複する部分があることから、産業研究所の図書業務を図書館に移管する方針が、大学から打ち出された。この移管は、図書館にとっては、書架スペースの狭隘化対策や業務の効率化の意義を有していた。産業研究所の図書業務の図書館への移管についての動きを見てみる。

2003（平成15）年6月19日に、平松学長から、産業研究所所蔵図書資料全体の、大学図書館への移管について、井上館長および海道ノブチカ産業研究所長に対して口頭での諮問があった。これに対して、2004（平成16）年8月2日に、図書館長と産業研究所長の連名で、①オンライン目録の横断検索、②学術雑誌の保存分担の検討、③図書資料の重複購入の中止、の3点について、文書「大学図書館と産業研究所の連携・提携の強化について」を答申した。

2007（平成19）年2月の大学評議会において、産業研究所規程の一部改正が承認され、2008（平成20）年4月1日から、図書館に産業研究所の図書資料業務が移管されることになった。図書館では、産業研究所と移管のための協議を数次にわたり行ったが、移管図書資料の取扱いについて見解の相違があり進捗はなかった。2007（平成19）年10月には、図書館から移管に関わる2008（平成20）年度予算を仮申請したが、保留となった。そこで、2008（平成20）年2月に、保留となった予算を追加申請した。しかし、結局、大学として調整がついていないという理由で、予算化されなかった。

その後、今後の業務移管の進め方を打ち合わせるために、同年12月に学長室、産業研究所と図書館で調整を行った。また、スムーズな業務移管を行うために、曾我館長から杉原学長に対して2009（平成21）年1月13日付で、2009（平成21）年度春学期中には移管スケジュールを決定して欲しい旨を文書で要望した。

2009（平成21）年10月22日に、副学長、産業研究所、図書館の三者会談が行われた。その際、副学長から、①産業研究所図書資料業務を大学図書館へ2013（平成25）年度に移管すること、②産業研究所と大学図書館は、2011（平成23）年9月末までに移管についての具体的な内容や進行について決定すること、という裁定がなされた。その後も、図書館と産業研究所とで移管

の詳細についての調整を継続して行った。そして、奥野館長から井上琢智学長に対して、2011（平成 23）年 9 月 30 日付で「産業研究所図書業務の大学図書館への移管について」を提出して、図書資料業務移管についての合意を得られたが、産業研究所カウンターの現状維持の要否については合意に至らなかった旨を報告し、大学の判断を求めている。

今後は、2013（平成 25）年 4 月からの図書資料業務移管に向け準備をしていくことになっている。

(4) 危機管理への対応

新大学図書館建設時の 1995（平成 7）年 1 月に阪神・淡路大震災を経験した。第 1 期建築部分がほぼ完成した時であり、書架・備品等は設置されていなかった。建物そのものへの被害はなかったが、この経験を踏まえて設置される書架の上部に繋ぎを加え、倒壊を防ぐ仕様にした。また、そのころ他大学図書館で豪雨による漏水があり、配架資料に甚大な被害があったことを知った。第 2 期建築部分はまだ施工されていない時期であったことから、この第 2 期部分の地下に設置するドライエリアの容量を当初計画の約 2 倍にし、水害に耐える建物にした。このように新大学図書館は、経験、知見にもとづき想定される自然災害に対応できる建物として完成した。しかし、図書館で発生するリスクは、自然災害だけでなく、人為的なものが多い。西宮上ヶ原キャンパスにおける新大学図書館開館後の危機に備えた新たな設備等について見てみる。

2001（平成 13）年 7 月に B 1 階、BM 階に防犯ミラーと非常用ブザーを設置した。新大学図書館建設計画時にも、特に地下階では書架間に死角になるところがあることから、防犯対策が必要であると言われていた。2000（平成 12）年 1 月頃から、図書館に配架している図書資料のうち、特定分野の図書や製本雑誌が接着剤で糊づけされた状態で発見されるといったことが頻繁にあった。また、同分野の図書に石灰がまかれるという事態も起こった。これらの破損・汚損行為を防止するためにも、また、図書館内の死角をなくし、安全な図書館利用を提供するためにも、防犯ミラーと非常用ブザーの設置を行った。

また、2003（平成15）年3月には、西宮市消防局の協力を得て、利用ゾーンでの火災を想定した連絡通報および避難誘導訓練を実施した。この時、消防局から、図書館のような大規模建物では、利用者に対して日ごろから避難経路を明示し、災害発生時の避難に備えておく必要があるとの指摘があったため、2004（平成16）年3月に、館内23ヵ所に避難経路図の設置を行った。

さらに、図書館では、授業のある期間は、毎日4,000人から5,000人の入館者があり、定期試験期となると7,000人から8,000人の入館者数になる。入館者は、本学の構成員が大部分を占めており、また、入館ゲートでチェックを行っているとはいえ、盗難等の被害は新大学図書館開館当時から発生している。利用者は、閲覧座席に貴重品を置いたまま書架検索に行ったりして無防備である。財布等の貴重品を常時身につけることを掲示や放送で注意しているが、利用者の防犯意識は高くない。そこで、図書館では盗難等の犯罪行為の抑止を目的として、2011（平成23）年8月に防犯カメラの設置を行った。防犯カメラは、各階に合計21台設置し、画像の記録保存は関西学院セキュリティセンターが行っている。また、設置に際しては、本学の人権教育研究室に相談し、防犯カメラの使用が人権を侵害することに繋がらないよう細心の注意を払った。

危機に備えた設備等ではないが、館内巡回を定期的に行い、利用環境の維持に努めている。新大学図書館開館直後から、図書館員が交代で一日3回、試験期には4回、巡回を行い、静粛、飲食禁止、貴重品の管理等の注意を促している。また、夜間はカウンター業務を委託しており、巡回も業務範囲としている。当初は、カウンター業務担当者6名のうち、男性スタッフ2名が巡回を担当した。しかし、その後図書館内で財布の盗難が頻発したことから、専門的な警備業務を行えるスタッフが必要となり、2007（平成19）年4月からは、男性スタッフの人員枠を専門の警備員に変更し、配置することになった。これにより、授業のある期間では、午後6時から閉館の午後10時までの間は、男性警備員2名が館内に常駐し、巡回等を含め、利用者が安心して学習できる環境を整備する業務に従事している。また、同時期から、西宮上ヶ原キャンパス全体の警備を担当している警備員により、午前中だけで

はあるが、キャンパス内の巡回中に図書館内の巡回も行われるようになった。

また、リスクマネジメントのひとつとして、「緊急時対応マニュアル」を常備している。これは全学的な対応をまとめたもので、過去の事例と対応が参照できるようになっている。内容は、①大学構内において犯罪にあった学生への対応に関する基本指針、②病人等の救急対応、③各種差別落書への対応、④防火管理規程等、⑤事件・事故・不祥事等の広報体制、⑥緊急連絡網、⑦学内立ち入り禁止措置者への対応などがある。また、関西学院保健館が作成した「関西学院救急対応マニュアル」があり、保健館による説明会、研修会が数年に一度実施されている。さらに保健館からは、夜間等時間外対応が可能な病院、医院のリストが配布され、都度更新されている。午後10時まで開館している図書館では、夜間に急病人等が発生した場合の対応の拠りどころとなっている。なお、館内には、AED、車椅子、担架をそれぞれ1台配備している。

神戸三田キャンパス図書メディア館では、2001（平成13）年9月より理学部移転に伴う特例措置として図書メディア館（Ⅲ号館）の限定エリアへの時間外立入りを許可することとなり、カードキーによる入退館管理やBDS、非常用ブザー、防犯カメラを設置し、セキュリティ管理を行った。夜間の時間外立入りについては、2009（平成21）年3月のⅥ号館への図書メディア館移転後も、引き続き同様の設備を設置してセキュリティ管理を行っている。

図書メディア館全体としての防犯カメラの設置は、2012（平成24）年夏の予定である。また、館内巡回については、1995（平成7）年に図書室が開設された時から、神戸三田キャンパス全体の巡回警備の中で、警備員による巡回が行われている。館内各所に非常用ブザーが設置され、緊急時には図書メディア館事務室およびⅠ号館警備室へ連絡される。

「緊急時対応マニュアル」や「救急対応マニュアル」についても西宮上ヶ原キャンパスと同様のものが、神戸三田キャンパス版として図書メディア館にも配備されている。

2 図書館規則－新大学図書館での規則の改廃制定

新大学図書館でのサービス提供の開始にあたり必要となる規程類は、多くは、新大学図書館グランドオープン前に制定してきたが、グランドオープン後に制定された規程もあり、そのひとつが「大学図書館公開規程」である。

この規程は、地域住民への大学図書館の公開について定めたもので、図書館の公開は、旧図書館時代からの懸案事項であった。1998（平成10）年4月1日から施行されたこの規程は、本学の教育・研究に支障を与えない範囲で、地域社会の多様な教育的・文化的要請の高まりに応え、地域における学術情報の受発信機能を果たすことを目的として策定された。この規程に定める公開を一般公開と称し、その対象者を一般公開利用者としている。一般公開の利用資格は、20歳以上の西宮市、三田市等近隣の地域住民で、図書館所蔵の図書資料を利用した調査・研究の目的が明確である者に限っている。登録料として1年間で6,000円、半年で3,000円を徴収する登録制が採用された。当初、利用できるサービスは資料の館内閲覧、複写、利用相談であった。しかし、図書の館外貸出の要望が強く、2001（平成13）年度から館外貸出を可能とするよう規程改正を行った。定員は200名であり、ほぼ毎年定員を満たす方々からの利用申込みがある。

その他、新大学図書館グランドオープン後に制定された規程の中で挙げておくべきは、「研究基盤図書選定委員会内規」および「研究基盤図書選定に関する運用内規」である。2007（平成19）年6月に制定されたこれらの内規では、研究推進社会連携機構に予算化された費用で購入される図書資料を「研究基盤図書」と称し、研究推進社会連携機構長の下に専門部会のひとつとして研究基盤図書選定委員会を置き、そこで研究基盤図書の選定を行うことなどを定めている。

そもそも、大学での図書資料の購入には、図書館図書費、各学部等に配分される学術資料費、個人研究費の他に、上記の研究推進社会連携機構に予算化された費用が充てられ、多様な費目が存在している。これらのうち、機構予算で購入可能な図書資料は、文部科学省の補助金申請と密接な関係を持つ

ものである。

ところで、従来から図書館は、機構予算であっても各学部等から購入推薦された資料について、図書館所蔵図書資料との重複調査を行うなど事務業務の面で協力していた。しかし、図書館図書費の増額が認められなくなることや、外国語雑誌の購読価格の高騰により、図書館図書費による図書資料の収集が厳しくなることで、図書館独自の選定により購入できる図書資料が予算の面から制約を受けることが想定される状況が生まれた。学術資料費や個人研究費の用途については、これらの費目設定の性質上、図書館の関与が認められる余地は乏しい。そこで、この機構予算で購入される図書資料の選定について、図書館が積極的な関わりを持てる方向を模索したのである。内規制定の検討の際にも、図書館を図書資料の推薦組織として認める規定内容になるように努力した。しかし、最終的には、図書館が推薦組織として認められることはなく、事務担当としての位置づけが明確にされただけに終わった。

さらに、この時期には、学院外での図書館組織との繋がりの強化が引き続き進められる。1998（平成 10）年には、西宮市立図書館との間に「西宮市立図書館と関西学院大学図書館との相互協力の申し合わせ」が策定され、同様に三田市立図書館とも申し合わせを行った。2005（平成 17）年には、「大学図書館近畿イニシアティブ運営要項」と、その細則である「能力開発専門委員会設置要項」、翌年の「広報・WEB 専門委員会設置要項」が定められている。また、2005（平成 17）年に関西学院大学が神戸大学、大阪大学とともに EU インスティテュート関西（EUIJ 関西）を創設したことにより、EUIJ 関西が実施する教育活動および研究活動に寄与するため、神戸大学附属図書館、大阪大学附属図書館と「EUIJ 関西・大学図書館相互利用に関する協定書」が 2005（平成 17）年 10 月から 2008（平成 20）年 9 月までの有効期間を定めて交わされ、また第 2 期として 2008（平成 20）年 10 月から 2013（平成 25）年 3 月まで協定が継続されている。

3 図書費－経常図書費予算初の減額と繰越制度廃止への苦しい対応

(1) 経常図書費以外の特別な図書費の計上

新大学図書館建設時の収書計画として、1989（平成元）年から図書館完成時の1997（平成9）年までの期間で、特別な予算が設けられた。この収書計画予算で購入した逐次刊行物については、現在も、継続購入費として経常の図書館図書費とは別枠予算（21,420,000 円）が計上されている。その他にも、臨時定員増に伴う外国語図書購入費（ポルトガル語、ロシア語、朝鮮語、スペイン語資料の購入費）として、また、中国語、朝鮮語、スペイン語が全学開講科目として開設され、専任教員の配属が行われた年度には、これらに関連する図書資料の購入のための図書整備費として、それぞれ特別な図書費予算が計上された。

さらに、外国語雑誌購読価格の高騰対策として、1998（平成10）年、2001（平成13）年、2004（平成16）年に、継続購入している外国語雑誌の必要調査を行い、必要度の低い雑誌については継続購読を中止して、必要度の高い雑誌の購読維持に努めた。その結果、外国語雑誌高騰対策費として1999（平成11）年度から年間1,000万円、2002（平成14）年度から年間1,800万円、そして2006（平成18）年度からは、年間29,621,000円の予算を得ている。

その他、大阪梅田キャンパスで専門職大学院の授業が開講された2005（平成17）年から、西宮上ヶ原キャンパスと同様のオンラインデータベースを大阪梅田キャンパスでも利用できるようになった。そのデータベース費用として、毎年200万円の特別な図書費予算が計上された。また、2009（平成21）年度には、西宮聖和キャンパスに教育学部が開設されたことで、そのデータベース費用として、毎年100万円の特別な図書費予算が計上されている。このように、新大学図書館の開設や大学の研究・教育上の変化に対応するための臨時的予算措置については、適切になされているといえる。

(2) 図書館図書費の増額と減額

以上の特別な図書費に対して、経常費としての図書館図書費の予算申請は、毎年、前年度の図書費をベースにして増額申請をしてきた。また、図書費は、一般経費予算とは異なり、年度末残額を次年度に繰り越すことが認められていた。1970年代から1980年代にかけての図書館図書費は、新しい学部増設などの外的要因はなかったが、毎年10%から、多い時で32%も増額されてきた。1990年代初めのいわゆるバブル崩壊後も、年度平均で3%の増額が認められてきた。しかし、1998（平成10）年度以降はゼロシーリングとなり、年間図書館図書費予算は398,715,000円であった。1995（平成7）年度に、第8番目の学部として総合政策学部が開設され、1999（平成11）年度に完成年度を迎えると、増員となった教員数および学生定員数に応じて図書費の加算が行われた（完成年度を迎えるまでの4年間については通常の図書館図書費ではなく、学部設置図書費、導入用図書費として別枠で予算化された）。以後の図書館図書費の増額も、新設学部、新設学科、専門職大学院の開設が行われ、完成年度を迎え教員数、学生数に変動があった場合にのみ対応されている。

図書館図書費の増額については、図書館の要望をもとに財務担当部課と様々な協議を行ってきた。他方、図書館図書費の減額については、図書費が関西学院大学の教育・研究を支えるための基本的な要件であることから、減額の方針での議論がなされたことはなかった。しかし、2008（平成20）年4月に新理事長が就任すると、関西学院全体の予算制度についての改革、見直しの検討が開始される。2009（平成21）年度予算では、図書館図書費を除く一般事業予算の全てが一律10%削減された。また、2009（平成21）年度をもって繰越制度が廃止されることが決定された。さらに、2010（平成22）年度予算も引き続き10%削減の方針が出された。この時の削減対象には図書館図書費も含まれたが、その削減方法については、他の予算とは異なり、別途、財務部と図書館で検討チームを設置して検討・協議するというものであった。図書館内では、資料購入の方法、収書の考え方等を整理した上で、図書館の努力として削減可能な金額を算出し、財務部と協議に当たった。その結果として、2010（平成22）年度の図書館図書費は、前年度の5.2%減と

なった。図書館にとっては、図書費の削減は大きな痛手であったが、それ以上に、繰越制度の廃止は、それまでの図書費支出の考え方や方法に大きな影響を与えるものであった。2011（平成 23）年度の図書館図書費予算は、498,918,000 円であった。ゼロシーリングとなった 1998（平成 10）年度に比して、1 億円余りの増額となっているものの、この増額は、あくまで学部、大学院等の増設によるものである。

（3）図書費支出と図書費の繰越制度廃止の影響

既述のとおり、図書館図書費は、2009（平成 21）年度までは、次年度への繰越可能な予算とされていた。繰越制度のメリットは、必要な資料を年度の区切りなく発注できることや、計画性をもった図書費の積み立てが可能であることにある。例えば、図書館では、毎年 10%～20% も高騰する外国語雑誌や電子ジャーナル、オンラインデータベースのように、大学全体としてまとまった利用契約が必要な資料について、繰越制度を活用して、そのための図書費を積み立ててきた経緯があった。そうした繰越制度が、2010（平成 22）年度以降廃止されたのである。2010（平成 22）年度、2011（平成 23）年度は、円高により幾分余裕のある図書費支出ができていた。しかし、繰越制度が廃止された今、1990 年代初頭のような外国語雑誌（電子ジャーナルを含む）購読価格の高騰が再現すると、図書費の増額が期待できない状況にあっては、購入資料の中止・削減という事態を想定せざるを得なくなってくる。また、繰越のない単年度予算であるため、予算額を有効に支出するために年度末の予算管理が煩雑になってきている。繰越制度の廃止による業務的影響は大きいと言わざるを得ない。

一方、図書費支出については改善がみられる。例えば、図書館では、図書館図書費を有効に使用するために、1998（平成 10）年度からは、図書館図書費で購入した図書資料を、学部等の図書室ではなく、原則として、図書館に配架するという変更を行っている。学部等の部局で選定された資料も図書館で重複調査を行った上で図書館が発注することになり、不必要な重複購入を避けることができていた。1998（平成 10）年度では、不要な重複図書として約 1,000 冊、金額にして約 1,000 万円分を節約することができた。また、

購入価格については、個別に書店と納入金額の値引き率交渉を行っている。さらに、資料の定価が3万円を超えるものについては、複数書店による相見積を取り、より安価な書店から購入している。また、書店のWEB発注機能を利用できるように支払業務を見直し、2007（平成19）年度発注分からは、WEBを利用した発注も可能にして、購入経費の節約に努めている。

4 組織と要員－組織の改編と職員の減員

1997（平成9）年4月から、新大学図書館のグランドオープンに合わせて課名称を変更した。整理課は図書情報課とし、閲覧課は利用サービス課とした。運営課、雑誌資料課の名称はそのままとし、変更しなかった。1997（平成9）年度の専任職員数は、1996（平成8）年度と同数の37名であったが、これ以降、専任職員数は減員となっていくことから、その数が現在までの最大数となっている。

その後さらに、2003（平成15）年度からは、4課体制を2課体制に変更した。これからの図書館は、従来の機能に加えて、より高度化した学術情報拠点となるために、電子情報の蓄積・受発信基地としての役割が期待されている。また、学内で推進されているさまざまな取り組みに効果的に対応し、迅速に機能することが、大きな課題となってきた。そこで、高度化・多様化する大学の教育・研究ニーズに対応して果たすべき新たな役割を担うことを目的として組織の検討を進めた。そして、2003（平成15）年4月1日から事務組織を改編することが、2002（平成14）年の第9回大学評議会および第602回理事会で承認された。事務組織改編の検討にあたっては、以下の5項目の実現を目指した。

- ① 多様化する学術情報を受発信しやすい組織へ
- ② 非来館型サービス（24時間サービス・学内／遠隔サービス）を可能とする組織へ
- ③ 業務効率がよく、生産性の高い組織へ

- ④ サービスを強化するための適正な人員配置を実現する組織へ
- ⑤ すぐれた職員を育成しやすくする組織へ

こうした項目の実現のために、改編後の事務組織は、間接サービス部門（運営課）と直接サービス部門（利用サービス課）の2課体制となった。主任と一般職の所属はすべて、大学の組織としての「大学図書館」とし、それぞれの課の主担当業務は決めるが、必要に応じて図書館内の他の課の業務も担当できる柔軟な体制とした。こうした改編もあって、2003（平成15）年度の専任職員数は、減員となり29名になった。削減された専任職員数は派遣職員で補充された。

その後の要員の変化としては、2010（平成22）年度から、運営課内に電子情報の収書、契約などを専門として担当する職員を配置したことを挙げることができる。これは、電子情報資料購入費の図書館図書費に占める割合が2009（平成21）年度には約3割に達し、今後も電子ジャーナルやオンラインデータベース、電子ブックの増加が予測されたことによる。また、この時期に、電子情報を利用者によりよく提供する手段・方法を検討するチームも設置し、従来の紙媒体資料とは扱いの異なる資料群についての業務を分離して、効率的な業務処理および利用サービスの向上を目指している。

2011（平成23）年の西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の専任職員数は、さらに減員となって、23名となった。

5 蔵書・資料－書架スペース狭隘化への多面的な対応

(1) 図書の除籍（払出）と除籍マニュアルの作成

図書の管理については、法人財務に関わる規程の中に図書管理規程がある。その第13条に図書の払出について定められている。図書の払出の運用に関しては図書払出基準が定められており、1971（昭和46）年4月から施行されている。学院の資産である図書の除籍については、慎重に行う必要があるのはもちろんである。しかし、一方で、出版点数が膨大な数になり、最近25年間で図書館に登録した図書の数がそれまでの約100年間に登録され

た図書の約 1.5 倍にも上るという状況がある。150 万冊収容可能な図書館ではあるが、年々増加する所蔵資料により、図書館建設中にすでに満杯を予測して種々な対応を検討した。保管場所の狭隘化対策として、学外保管によるスペースの確保の他にも、他機関との共同保存、保存すべき資料と廃棄する資料の選別等を考えていく必要があった。そこで、重複図書や保存の必要がない図書を見極めて定期的に除籍していくことを検討した。

図書館では、図書払出基準に基づき、除籍をしていくための指針となる「除籍マニュアル」を作成し、1996（平成 8）年 10 月の館長室会で承認を受けている。このマニュアルは、図書払出基準第 2 条の払出の対象のうち、同一図書で、必要数以上に重複しているもの（同条 4 項）について、その除籍判断が難しいことから、除籍の具体的運用を定めたものである。1997（平成 9）年の新大学図書館オープン以来、このマニュアルにより、学部図書室等各管理単位からの図書の返還に伴う重複図書の除籍や、電子媒体での閲覧が可能な図書の除籍などを行っている。マニュアルは、その後、利用上、保存の必要がないと認められるもの（5 項）、文献として、利用価値を失ったもの（6 項）についても具体的運用を定め、2008（平成 20）年 11 月の館長室会で改訂について承認を受けた。

（2）電子情報資料への急速な移行

電子情報資料のひとつに CD-ROM 資料がある。図書館が CD-ROM 資料を購入し、登録したのは 1992（平成 4）年度からである。CD-ROM 資料は、資料の利用・提供方法については図書と異なるが、資産化資料として扱われ、目録データ作成等の整理業務は図書に準拠して行うことができる資料であった。電子情報資料として図書館業務に大きく影響を与えたのは、オンライン系の資料の購入であった。2003（平成 15）年度には、オンライン資料が初めて購入されている。当初は、新聞等のデータベースやアグリゲータが主であった。

しかし、その後、世界レベルで、研究成果について発表する論文の刊行媒体が、インターネットによって頒布される電子ジャーナルに移行される流れが生まれた。学術雑誌の購入形態が、従来の紙媒体から電子ジャーナル中心

の形態に変わってきたのである。電子ジャーナルなしでは学術研究が成り立たない状況になってきている。そうした変化に対応するために、本学においても、学術雑誌の提供を紙媒体から電子ジャーナルにシフトせざるを得なくなってきている。本学では、PULC（公私立大学図書館コンソーシアム）に設立当初から加盟し、電子ジャーナルを含む電子情報資料の購入（購読）価格、契約条件等について、コンソーシアムから提案を受けている。また、PULC は、独自の事業だけでなく、国立情報学研究所と国立大学図書館協会（JANUL）との連携により学術コンテンツの整備も行ってきた。本学も、加盟館として、この連携により提供された学術コンテンツについては、全て購入契約を行った。これまで購入契約した学術コンテンツを挙げれば、電子ジャーナル・バックファイルとして、2005（平成 17）年度には、Springer Online Journal Archive（1847-1996）と Oxford University Press Journal Archive（1829-1995）を、人文社会科学系オンライン電子コレクションとして 2009（平成 21）年度には、19/20c House of Commons Parliamentary Papers、2011（平成 23）年度には、The Making of the Modern World を契約した。

冊子体から電子ジャーナルへの移行という重要な変更については、移行案件が生じた時点でその都度、大学図書館運営委員会での協議、承認を得ている。運営委員会では出版社単位での移行を協議しており、2006（平成 18）年度には Elsevier 社、2009（平成 21）年度には、Oxford University Press 社と Annual Reviews 社、2010（平成 22）年度には、Springer 社と Cambridge University Press 社、2011（平成 23）年度には、Taylor & Francis 社発行の購読雑誌について、冊子体から電子ジャーナルへの移行が承認された。しかしながら、限られた図書館図書費の中で電子ジャーナル契約を今後とも増加させることについては、問題がないわけではない。移行当初は購読費が若干の減額になるものの、冊子体購読費の維持を前提とした契約方式が取られていることや、毎年一定の値上がり率を持つことから、将来的には図書費支出に限界が来ることが危惧される。また、出版社によっては、図書館で購入契約をしている雑誌以外の刊行雑誌も利用対象に含めることができる「BigDeal 契約」となっている。こうした場合も、各契約の対象となる雑誌

に占める、部局（学部等）の冊子体購読費の割合に応じて、図書館図書費から支出している。しかし、今後は、全学共通費として電子ジャーナル契約をするべきであるとの意見も出されている。

とはいえ、こうした図書資料の電子情報化は、他方で、書架スペースの狭隘化対策に資するという副次的な効果をあわせ持っていることは否定できない。

(3) 2 度目の学外保管の実施

新大学図書館が完成し 10 年もたたない 2004（平成 16）年頃から、書架スペースの狭隘化が再び問題となってきた。当初計画よりも新大学図書館の建設規模が縮小され、収容能力が 50 万冊程減少し 150 万冊になったこと、各学部図書室等から図書館への図書の返還冊数が多かったことなどが理由である。このため、大学のキャンパス再開発計画のなかで図書館の書庫スペースの検討をするように、大学に対し要望を出してきた。図書館では、重複している図書を除籍したり、地下階壁面や廃棄した目録カード設置場所跡への書架増設を行ったものの、一時しのぎにしかならず、抜本的な解決にはいたらなかった。

そうしたなかで、2008（平成 20）年度から図書資料の学外保管が認められた。学外保管の実施に向けて、保管業者 4 社から提案を受け、(株)カルチャージャパンと契約した。搬出作業は、3 月と 9 月の授業のない期間中に行われた。最初は、海道蔵書約 7,300 冊、ニーシュラーク教授私蔵ドイツ経営経済学関係文庫約 3,000 冊など、一括配架で冊数の多いものを預け入れた。その後、下記「預け入れ基準」に合致する図書資料の預け入れを続けている。

（預け入れ基準）

(1) 図書

①電子媒体で代替手段のある参考図書

②西宮上ヶ原キャンパス大学図書館内で所蔵の複本。ただし、館外貸出の状況からみて、利用頻度の高い図書は除く

- ③学内所蔵分（産業研究所および各学部図書室等）と重複している西宮上ヶ原キャンパス大学図書館所蔵の図書のうち、きわめて利用頻度が低い図書
 - ④西宮上ヶ原キャンパス大学図書館内で一括配架している図書群のうち、きわめて利用頻度が低い図書
 - ⑤西宮上ヶ原キャンパス大学図書館内で配架している図書群のうち、図書館での受入れ年が1980年以前のきわめて利用頻度が低い図書
- (2) 製本雑誌
- ①学内所蔵分（産業研究所および各学部図書室等）と重複している西宮上ヶ原キャンパス大学図書館所蔵の一般雑誌
 - ②学内所蔵分（産業研究所および各学部図書室等）と重複している西宮上ヶ原キャンパス大学図書館所蔵の大学紀要
 - ③電子媒体で代替手段のある雑誌

学外保管図書の利用については、図書館のカウンターで利用申込みを受け付け、翌日には、保管業者から図書資料を取寄せのうえ、利用者に提供している。2011（平成23）年度までの年度ごとの預け入れ冊数と取寄せ利用件数の推移は下表のとおりである。

| 年度 | 預け入れ冊数 | 利用件数 |
|--------|---------------------|------|
| 2008年度 | 38,337冊 | 14件 |
| 2009年度 | 49,088冊 | 163件 |
| 2010年度 | 38,540冊（雑誌1,548冊含む） | 262件 |
| 2011年度 | 17,834冊 | 585件 |

6 利用－多様な利用者ニーズへの対応

(1) 開館日数の拡大と開館時間の延長

図書館利用の利便性に最も大きく関係するのは、いうまでもなく、図書館

の開館日と開館時間である。まず、開館日については、休館日である年末年始や職員の一斉土休日の開館についての利用者からの要望が強く、2002（平成 14）年度からは、就業規則の年末年始である 12 月 26 日から 1 月 6 日の期間中、12 月 26 日、27 日、1 月 5 日、6 日を開館（日曜日は除く）した。また、2003（平成 15）年度からは、授業期間中に設定されている職員の一斉土休日も開館した。これらの日における図書館の開館は、業務委託により実施された。2004（平成 16）年度からは、大学院教育の充実や社会人学生への支援を強化するために、授業のある期間の日曜日（第 4 日曜日を除く）と夏季期間中の土曜日を開館した。

他方、図書館の開館時間については、授業開始時間にあわせて開館時間を設定している。2004（平成 16）年度から、西宮上ヶ原キャンパスと神戸三田キャンパスの授業時間が統一され、両キャンパスとも、授業開始が午前 9 時（神戸三田キャンパスでは開設当時から午前 9 時であったが、西宮上ヶ原キャンパスでは 2003（平成 15）年度までは午前 8 時 40 分であった）からとなった。授業開始時間の変更に伴い、職員の就業規則も変更され、西宮上ヶ原キャンパスでの基本の就業時間が午前 8 時 30 分から午後 4 時 30 分であったのが、神戸三田キャンパスと同じ午前 8 時 50 分から午後 4 時 50 分になった。図書館の開館時間も、20 分遅らせて、午前 8 時 50 分からの開館に変更された。閉館時間については、学内の警備や交通機関の利用との関係もあり、1999（平成 11）年度から授業期間中は午後 10 時としている。いずれにしても、開館日数の拡大と開館時間の延長によって年間の開館日は 310 日を超え、年間の総開館時間も 3,500 時間に届くようになっている。

（2）貸出条件の整備と変更

ア 貸出条件の整備および拡大へ

旧時計台の図書館では、出納室、開架室、雑誌室、視聴覚室のそれぞれのカウンターで利用者へのサービスを提供しており、貸出冊数や利用条件もそれぞれ別々に設定されていた。

学習図書を中心に所蔵していた開架室は、どの利用者であっても一律 4 冊まで、貸出期間は 1 週間であった。しかし、出納室は、利用者によって異

なっていた。

新大学図書館では、開架室と出納室の図書が合体され、各階に配架された。そして、館外貸出を行う場合は、1階あるいは2階のカウンターで手続きを行うことになるため、新大学図書館における図書の貸出条件を決定する必要がある、より教育研究支援の充実をめざすことを主眼として検討が進められた。

まず、利用者を大きく次の6つに区分する整備が行われた。

| | 利用者区分 |
|-----|--------------------|
| I | 専任の教職員 |
| II | 非専任の教職員およびそれに準じる区分 |
| III | 短期契約の補助的職員 |
| IV | 大学院生およびそれに準じる区分 |
| V | 学部生およびそれに準じる区分 |
| VI | 卒業生および館長の許可する者 |

上記に従って、それまでの開架室と出納室での貸出条件を合算する形で、次のように館外貸出できる冊数および貸出期間が決められた。

| | 変更後 | | 変更前 | |
|-----|----------------------|------|---------------------|---------|
| | 図書貸出冊数 | 貸出期間 | 図書貸出冊数 (出納室+開架室) | 貸出期間(*) |
| I | 教育・研究に必要な冊数 (無制限) | 180日 | 30冊+4冊 | 180日 |
| II | 30冊 | 180日 | 30冊+4冊 | 180日 |
| III | 20冊 | 60日 | 5冊+4冊 | 30日 |
| IV | 20冊 | 60日 | 10冊+4冊 | 30日 |
| V | 10冊 | 14日 | 5冊+4冊 | 15日 |
| VI | 5冊 | 14日 | 2冊+4冊 | 30日 |

*「開架室」図書の貸出期間は、全利用者1週間

また、一般図書だけではなく、他の資料についても利用条件の見直しが行われ、それまで教職員のみ館外貸出が可能であった「特別文庫」や、通常の図書と同様に館外貸出していた「製本雑誌」は館内利用のみとなった。

1995（平成7）年4月、神戸三田キャンパスに総合政策学部が開設され、大学図書館の分室が神戸三田キャンパス図書室として設置された。この図書室での館外貸出の条件は、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の条件と同じとし、どちらのキャンパスの図書館を利用しても、その合計数を貸出冊数とした。

イ 延滞罰則の変更

2001（平成13）年4月からは、大学図書館利用規程第12条に基づき、「延滞図書資料（貸出期間を過ぎても返却されない図書資料）がある利用者には、返却が完了するまで新たな貸出は認めない」という内容の延滞罰則が適用されることとなった。

1998（平成10）年度までは、1冊の延滞につき、3日間の貸出不可期間を設定し、冊数ごとに延滞日数分を加算していくという、極めてユニークな罰則が採られていた。しかし、1999（平成11）年4月の図書システムリプレイスでは、本学図書館独自の延滞罰則に合わせたシステム開発を行うのではなく、パッケージとして用意された仕様に業務を合わせる運用に変更することが決められた。それにより、利用者に延滞図書があっても、その冊数を除いた貸出条件の冊数内であれば貸出ができるという運用となったのである。貸出返却カウンターでは、延滞図書がある場合には「強制貸出」というシステム上の処理を行うことで対処した。このような、延滞図書があっても貸出を行うという、実質上延滞罰則のない運用を行った結果、延滞図書の数が激増することになった。そのため、図書システムの運用上、毎朝の必須処理として実行していた延滞図書関係のバッチ処理の所要時間が大幅に延びることとなり、利用窓口のサービス提供時刻になっても処理が終わらない日が発生するようになっていた。そのため、再度、延滞罰則について検討を進めた結果、1冊でも延滞図書がある場合は、新規の貸出が行えないという罰則が採られることとなった。この延滞罰則の運用は、利用者にとっては大きな変更であり、2001（平成13）年4月からの運用変更にあたっては、利用者

に事前に告知する必要があった。そこで、運用の変更が運営委員会で承認された2000（平成12）年11月には、「大学図書館利用規程第12条に基づき、延滞図書資料（貸出期間を過ぎても返却されない図書資料）がある利用者には、返却が完了するまで新たな貸出は認めない」という公示を行った。この公示は、図書館内だけでなく、学内の全部課にも行い、周知をはかった。

（3）レファレンスサービスのためのソフトとハードの整備・充実

ア レファレンスカウンター開設の経緯

旧図書館では、運営課、整理課、閲覧課の3課体制で業務を行っていた。その中で利用部門を担当する閲覧課は、提供資料によって、図書を扱う開架室と出納室（閉架書庫）、さらに雑誌室と視聴覚室の4部門に分かれ、カウンターごとのサービスを行っていた。

それぞれのカウンターは貸出機能が中心であり、レファレンスサービスとしての固有の位置づけではなく、あくまで各カウンターでの利用相談や利用案内といったレベルでのサービスを行っていたにすぎなかった。

また、相互利用業務も、図書貸借は出納室、文献複写は雑誌室と、受付窓口が分かれていた。利用者は、希望する相互利用の内容によって、別々の窓口で手続きを行わなければならなかったのである。このため、相互利用を含むレファレンスサービスを総合的に提供することのできる独立したカウンターの設置が望まれてきた。

新大学図書館建設の動きの中で、1989（平成元）年3月に、「新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申」が出された。その答申を受けて1989（平成元）年9月には、「新大学図書館利用サービスの支援体制計画書」が作成された。ここでは、次の3点が新大学図書館利用サービスの支援体制の整備、充実の基本項目としてあげられた。

- ① 学術図書資料の効率的な収集
- ② 学術情報システムの維持管理
- ③ レファレンスサービスの充実とカウンター業務体制の整備

その中には、「新大学図書館のカウンター業務の目的は大学の教育・研究活動を資料、施設面から支援しうる役割を果たすことである」と記されている。その機能と役割を果たすべく、地上階の各階にレファレンスカウンターを設置するということが計画された。つまり、各階の配架資料とレファレンス機能とが結びついたサービスが行えるよう、1階カウンターでは相互利用を含めたジェネラルレファレンス、2階では社会科学・自然科学分野、3階では人文科学分野の主題別レファレンスを行うという計画がなされたのである。

また、新大学図書館建設の動きの中で、館内の組織変更も行われた。1994（平成6）年度に、雑誌資料の収集と提供を充実させ、学術情報の受発信への支援を強化するため、閲覧課の中から雑誌部門が「雑誌資料課」として独立し、長年の3課体制から4課体制となった。

その後、1995（平成7）年度になってやっとレファレンスサービスの運用に関する詳細な検討が始まり、レファレンスカウンター運用に関する答申案を作成した。この答申案には、1階レファレンスカウンターには、閲覧課および雑誌資料課から1名ずつ常駐すること、1997（平成9）年10月のグランドオープンまでは、2階のカウンターではレファレンスを行わないこと、また貸出返却カウンターを持つ閲覧課では、担当者の業務分担を明確にし、レファレンスカウンターを担当する課員と貸出返却カウンターを担当する課員を明確に分けるといったことが書かれていた。

この答申案に対して、閲覧課長は、「第1期開館時（1995（平成7）年10月）では当面閲覧課の4名を専従でレファレンス部門にあてるが、今後の運用面では他の課員の能力向上の点からも、課員全員の協力関係を強める点からも、レファレンスカウンターと貸出返却カウンターの担当の分担は柔軟に対応する」との見解を出した。このように、レファレンス部門としての独立した組織は設けず、2つの課からのチーム制とし、その中でレファレンスの専門的職員の育成を目指してきた。

レファレンスカウンター開設にあたって、閲覧課には、相互利用業務を中心とした事務室内業務の補助として嘱託職員1名が増員となった。また、アルバイト職員1名も、嘱託職員と同様に、レファレンス業務の補助を担当した。



レファレンスカウンター

イ レファレンス業務の歩みと現状

新大学図書館第1期開館時に1階の貸出返却カウンター横に仮設で設置したレファレンスカウンターは、1997（平成9）年10月のグランドオープン時には、1階から3階までの各階に設置された。1階がメインカウンターであり、2階カウンターでは利用相談が中心であった。しかし、3階は、人員体制の都合によりサービス開始が見送られた。

1997（平成9）年の体制は、1階は利用サービス課（閲覧課を名称変更）より5名、雑誌資料課より4名の計9名の担当者と構成し、各課からそれぞれ各1名、計2名がカウンターに常駐し、それぞれの課で、2～3交代制をとった。2階のレファレンスサービスは、1998（平成10）年10月よりスタートした。授業開講日の午後のみ、利用サービス課の貸出業務担当者5名のうち1名が常駐し、サービスを行った。

カウンターサービス時間は、1階は午前9時30分から午後6時（土曜日は正午）まで、2階は午後12時30分から午後4時30分（土曜日はサービスなし）までであった。

開設当初は、利用サービス課のレファレンス担当者は、貸出業務は兼務せずレファレンスカウンターの専従であった。しかし、その後、人事異動等により、課員の半数が貸出返却カウンター業務も兼務せざるをえない状況とな

り、レファレンス業務だけを専従とする担当者の配置は困難となった。

利用サービス課と雑誌資料課の担当者間の日常の連絡調整や提供サービスの均一化は、2 課体制でレファレンス業務を実施するにあたっての必須課題であった。このころはまだ、電子メールも普及していなかった時代である。レファレンスカウンター開設時より、毎朝午前 9 時から 30 分間のミーティングの実施やその記録の回覧、カウンターの連絡票に相互利用の来館予定者や留意事項を書き残す等の方法で、情報の周知を行った。また、月に 1 回、業務終了後、レファレンス業務担当者会を開催し、担当者のスキルアップ研修や新規業務の検討を行った。この担当者会は、図書館の組織改編が行われ、4 課体制から 2 課体制となる 2003（平成 15）年 4 月まで、53 回にわたって続けられた。10 数種のパスファインダーの作成、そのホームページ版の作成、オリエンテーションや講習会を 3 種類から 13 種類に拡張、CD-ROM や各種オンラインデータベースの提供開始、電子メールによるレファレンスサービスの実施、OCLC-ILL の導入など、サービスの充実を進めていった。また、この時期は、図書館としても、地域住民への公開の開始や近隣 2 市（西宮市と三田市）の市立図書館との相互利用協定なども行い、まさに業務拡張期でもあった。

2003（平成 15）年度には、1994（平成 6）年度から 10 年間続いた 4 課体制から、図書館業務の間接サービスを行う運営課と直接サービスを行う利用サービス課の 2 課体制へと変更する大きな組織改編が行われた。それに伴い、利用サービス課は、従来の業務に加えて、雑誌資料課の所管業務であった相互利用業務の文献複写業務も担当することになった。レファレンス業務、相互利用業務は、すべて利用サービス課で行うことになった。利用サービス課の人員については、雑誌資料課から専任職員 1 名、アルバイト職員 2 名の転入があったが、この組織改編に伴う専任職員の減員もあり、課長を含めて計 9 名となった。減員された専任職員の補充が派遣職員でなされたことで、レファレンスカウンターも、専任職員と派遣職員との協働の体制でサービス提供を行わざるを得なかった。この協働は現在も続いている。

また、当初予定した「各階の配架資料とレファレンス機能が結びついたサービスが行えるよう、1 階カウンターでは相互利用を含めたジェネラルレ



運営課・利用サービス課

ファレンス、2階では社会科学・自然科学分野、3階では人文科学分野の主題別レファレンスを行う」という計画は、専任職員の削減により実現には至らなかった。ほとんどのレファレンス質問が1階カウンターに集中し、2階については、主題別レファレンスにはほど遠い利用相談や館内のパソコン対応に追われる状況であった。3階にいたっては、結局、一度もカウンターが開設されることはなかった。そして、ついに、この3階のカウンターは、2010（平成22）年12月、閲覧座席の増設工事に伴い、撤去された。

レファレンスカウンター開設以来、利用案内だけでなく、レファレンス質問件数も増加の一途をたどっていた。しかし、その後、インターネットの普及、データベースの充実、機関リポジトリ、電子ジャーナル、電子ブックといった電子媒体の導入などの図書館を取り巻く状況が大きく変化したことにより、レファレンスカウンターで受ける質問件数も減少の傾向が見られるようになっている。それは、来館利用が前提であった図書館サービスから、非来館型のサービスが充実したことにより、図書館利用のあり方が大きく変化をしてきたからである。研究室や自宅からでもデータベースや電子ジャーナルの利用ができ、OPAC画面から他大学への文献複写の取り寄せ依頼や図

書貸借依頼、さらには別キャンパスにある図書の取り寄せ申込みもできる。また、従来は直接、カウンターで受け付けていたレファレンス質問も、社会人を対象とした大学院の授業が夜間にも開講されることに伴い、1999（平成11）年度より電子メールでの受付も行うようになった。この電子メールでのレファレンス質問の受付は、当初は専任教員および大学院生だけを対象としたサービスであったが、2010（平成22）年11月からは学部学生にもこのサービスを拡大している。こうした環境の整備によって、利用者にとっては、ここ数年で、利便性が飛躍的に向上した。

とはいえ、学部学生による図書館の利用は、まだまだ来館型利用が中心であり、高校時代までの図書館の規模と大学図書館では大きな隔りがある。図書館では、入学時からの学部学生への利用案内を重視し、基礎演習クラスを対象とした講習会での基本的な図書資料の探し方や電子情報資料の利用方法等についてのガイダンスに力を注いでいる。3年生以上の研究演習クラスにおいても、研究テーマに特化させた内容での講習会を実施している。これらの講習会の実施件数や参加者数は年々増加している。

今後、学生や教員に図書館資料をより有効に利用してもらうためには、基礎演習および研究演習のクラスを利用した学術情報リテラシー教育をますます進めていく必要がある。それらを通して、図書館は、利用者一人一人が自立した利用者になれるように道案内を行っていかなければならない。そのためには、レファレンス業務を担当する図書館員一人一人が、レファレンス業務に必要な知識やスキルを深めていく必要がある。利用サービス課では、雑誌資料課と共同で行っていた時代の、研修を中心としたレファレンス業務担当者会を引き継ぎ、職場研修として、レファレンス事例報告会や外部からの講師を招いた各種データベースの講習会、主題ごとの講習会などを実施して研鑽に努めている。

（4）相互利用

図書館間相互利用（以下、相互利用）とは、図書館間協力の一形態で、利用者が必要とする資料を自館で所蔵していない場合に、他の図書館の資料を利用できるサービスのことである。具体的には、①文献複写、②図書貸借、

③閲覧利用の3つがある。

相互利用は、1992（平成4）年度に学術情報センター図書館間相互貸借（NACSIS-ILL）システムが稼働したことにより、大きく様変わりした。特に、文献複写については、それまで他館への申込みを郵送で行っていたのが、簡単に行えるようになり、また、文献が届くまでの期間が大幅に短縮された。このシステムへの参加館が増えるに従って、他大学への依頼件数も他大学からの受付件数も大幅に増加していった。しかし、図書貸借については、学術情報センターに所蔵データを登録していない図書館も多く、また、所蔵していても他館への貸出は行わない、貸出は協定館のみという制約を設けている図書館も相当数あり、図書貸借の件数は大きくは伸びなかった。

本学における相互利用業務は、雑誌資料課ができるまでは、文献複写は閲覧課雑誌室で、図書貸借は閲覧課出納室で行っていた。1994（平成6）年に閲覧課雑誌室が雑誌資料課となった際には、そのまま文献複写業務を引き継いだ。しかし、2003（平成15）年度に行われた組織改編により、運営課と利用サービス課の2課体制になった時点で、相互利用業務はすべて利用サービス課の業務となった。

NACSIS-ILL システムが稼働後、相互利用は年々増加傾向にあったが、文献複写依頼については、2002（平成14）年度をピークに減少に転じている。全国的にも同じ傾向が見られるようになっていった。その大きな要因としては、雑誌が冊子から電子ジャーナルへと切り替わっていったことが挙げられる。電子ジャーナルの拡大、普及とあわせて、各大学における機関リポジトリ等による資料の電子化が急激に広がっていったことも要因のひとつである。

2004（平成16）年度には、国立情報学研究所の ILL 文献複写等料金相殺サービスが開始された。これにより、それまで国立大学間で行われていた料金相殺制度に私立大学も参加できるようになり、国立から私立大学への依頼が急増するという現象が起こった。当然のこととして、本学への文献複写依頼が殺到した。この状況に対して、本学では、それまで一律であった（関西四大学は除く）料金体系を見直しせざるを得ず、協定館以外の文献複写料金は35円から50円（一部60円）へと値上げを行った。

図書貸借について、件数が多くなかった理由のひとつに複写の問題もあった。著作権法の規定で、借受館での複写が認められておらず、貸借図書の一部の複写を希望する場合は、図書を貸出館に返却後に文献複写の依頼をしなければならなかった。しかし、2006（平成 18）年 1 月に「図書館間協力における現物貸借で借り受けた図書の複製に関するガイドライン」が承認されたことにより、図書貸借で借り受けた図書の一部の複写が可能になったため、必要な資料を迅速に、より安価で入手できるようになった。本学でもレファレンスカウンターで利用者に複写が可能であることを案内した結果、前年度の約 1.5 倍の 442 件となった。2007（平成 19）年 5 月以降は、国立国会図書館からの貸借図書も一部の複写が可能になり、利用者の利便性が向上した。

国内の図書館から入手できない資料は、海外の図書館に依頼を行って入手している。海外に依頼する際に、最初に依頼するのが BLDSC である。BLDSC（British Library Document Supply Centre）は、British Library の一部門で、依頼してから 10 日～2 週間程度で届くものが多く、他の海外相互利用と比較しても迅速で安価である。調査中や貸出中で文献の入手が不可能な場合は、依頼してから 1 週間ほどで通知が郵送されるため、依頼先を変更する場合も、早期に対応できることが利点であった。2012（平成 24）年 1 月からは、BLDSC からの通知は郵送から電子メールに変更になり、謝絶の場合などの情報を迅速に得ることができるようになっている。

また、Global ILL Framework も利用している。Global ILL Framework とは、国立情報学研究所の NACSIS-CAT/ILL システムを通じて OCLC 等の海外の書誌ユーティリティ加盟館との間で国際的な図書館間相互協力を実現するための仕組みのことである。本学では、2006（平成 18）年 2 月より Global ILL Framework を通して OCLC メンバー館との相互利用を開始した。Global ILL Framework はオンラインで処理状況の確認ができ、また、安価で入手できることから、依頼、受付数とも年々増加している。

BLDSC や Global ILL Framework の参加館で所蔵していない資料は、個々の図書館へ電子メール等で直接依頼を行っている。

(5) 利用教育への取り組み－多様なタイプのオリエンテーションの工夫と実施

ア 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館におけるオリエンテーション・講習会

1997（平成9）年10月の新大学図書館開館後も、それまでの利用教育の中心であったオリエンテーションを継続しつつ、新たなタイプのオリエンテーションや講習会を追加して、図書館利用の拡大をはかってきた。

（ア）新入生基礎演習クラス対象オリエンテーション

（1997（平成9）年度～2010（平成22）年度）

新大学図書館は、貴重図書や特別文庫、古文書史料等の一部の資料を除いては、利用者が自由に館内の資料を利用することができる「全面開架制」を導入した。また、館内のフロアサインや書架サインも、利用者がわかりやすいように工夫を行った。そのため、長年にわたり実施してきた館内ツアーを中止してはどうかという声が館内にあった。しかし、教員からは、まずは、学生に図書館を知ってもらうために館内を案内してほしいという要望もあり、旧図書館から始まった館内ツアーを中心としたオリエンテーションはそのまま継続されることとなった。

このオリエンテーションは、担当教員からの申込みにより実施するというものであったが、1999（平成11）年度からは、基礎演習でのオリエンテーション参加を必須としたいとの要望が社会学部から出された。参加日時につ



オリエンテーション－館内ツアー

いては、事前に社会学部で調整の上、実施することとなったが、社会学部の基礎演習が月曜日と水曜日に集中していたこともあり、これらの日時には、他の学部への申込みに応じられなくなるという問題が生じてきた。このため他学部教員からの申込みを受入れることができるように、実施時間設定を調整しなければならなかった。

スライド映写（1998（平成 10）年度からは PowerPoint で作成したスライド）と館内ツアーを組み合わせた新入生向けのオリエンテーションプログラムは、スライドの内容等の若干の修正を行いながらも引き続き実施されていった。しかし、人間福祉・教育・国際学部といった新設学部の増設による学生数および基礎演習クラス数の増加により、4 月から 5 月上旬にかけて、今までどおりのプログラムで実施することは、受入れ体制にも無理が生じてきた。同時に、多くのツアー参加者が館内を移動することにより、館内の静粛が保たれず、利用者の迷惑になることも予測された。そこで、館内ツアーの実施を中止することが再度検討された。しかし、2009（平成 21）年度の基礎演習クラス対象オリエンテーションに参加した教員に対してアンケートを実施したところ、依然として館内ツアーの継続を求める声が多く、2010（平成 22）年度も館内ツアーの中止には至らず、実施せざるを得なかった。しかし、一方では、館内ツアーだけでは物足りなさを感じた教員からの要望も強かった。そこで、2007（平成 19）年度からは、館内ツアーのプログラムに加えて、3 年生以上の研究演習クラスを対象とした「学術情報探索講習会」での実施内容を 1 年生レベルに合わせてアレンジした「文献の探し方講習会」を行うようになった。そして、2010（平成 22）年度までに、神・文・人間福祉・国際学部のすべての基礎演習クラスが参加するようになっていった。社会・法・経済・商・教育学部については、担当教員の申込みによるものであったが、年々申込み数は増加してきた。

（イ）新入生基礎演習クラス対象オリエンテーション

（2011（平成 23）年度～）

2010（平成 22）年度までは、前述したように、基礎演習クラスを対象とした利用教育は、館内ツアーがメインの「新入生オリエンテーション」と情報検索実習主体の「文献の探し方講習会」の 2 本立てで実施してきたが、講

習会の方がオリエンテーションよりも、新入生には効果的であるとの評価が高くなっていった。そこで、運営課員と利用サービス課員からなる「利用教育推進検討チーム」を発足させて、あらためてオリエンテーションのあり方の検討を行った。その結果、2011（平成23）年度からは、館内ツアーを中心とした「新入生対象オリエンテーション」を中止し、「文献の探し方講習会」に集約することを館長室会に提案し、承認された。これにより、長年にわたって実施してきた新入生基礎演習クラスオリエンテーションでの「館内ツアー」が中止されることになった。

講習会を実施するにあたっては、実習用に使用するパソコンの確保ができるかどうか大きな問題であった。そこで、事前に各学部に出向いて説明を行い、パソコン教室の確保に向けた協力依頼をした。

2011（平成23）年度からは、従来の神・文・人間福祉・国際学部に加えて、社会学部も学部全体での講習会参加となった。残る法・経済・商・教育学部の4学部に対して、2011（平成23）年1月下旬に、基礎演習担当教員全員に講習会の案内文書を送付し、申込みを受け付けた。その結果、2011（平成23）年度に実施した基礎演習クラス数は194となり、西宮上ヶ原キャンパスと西宮聖和キャンパスで開講された9学部の全基礎演習クラスのうちの約92%が参加した。

2010（平成22）年度まで行っていた「新入生対象オリエンテーション」の館内ツアーが、運営課、利用サービス課両課に勤務する専任職員と派遣職員によって担当されていたため、2011（平成23）年度からの講習会も全館体制で行うことになった。そこで、「利用教育推進検討チーム」で、実施マニュアルの整備や実施内容の説明会や模擬講習会を行い、均一の内容で講習会が実施できるようにした。

なお、この実施内容の変更に伴い、「新入生オリエンテーション」で扱ってきた図書館の施設やサービスの紹介は講習会の中でスライドを用いて行った。また、館内ツアーを希望する教員もいたことから、後述する4月の授業開始前に開催される「キャンパスライフABC!」終了後および4月中旬の3日間で、個人で参加できる館内ツアーを計画し、実施した。

(ウ) 研究演習クラス対象オリエンテーション

1997（平成 9）年の新大学図書館開館後は、コンピュータ技術の発達により、新聞記事や雑誌記事などを検索することができる CD-ROM が普及するようになった。例えば、朝日新聞の記事を検索することができる「ASAX」や、国立国会図書館の「雑誌記事索引」の CD-ROM が導入されるようになっていた。とはいえ、その頃のコンピュータ利用はまだ一般的ではなく、また、CD-ROM そのものも利用者にとっては使い勝手のいいものではなかった。

しかし、図書館所蔵資料の冊子体から電子媒体への変化は急激に進み、図書館が提供する資料にも大きな変化が見られるようになった。そのため、図書館で実施してきた講習会の内容も見直しが必要となった。名称も「上級生対象オリエンテーション」から「文献の探し方講習会」に変更し、冊子体の目録や書誌類の紹介、OPAC の説明と検索実習に加えて、CD-ROM の検索説明も講習会の内容に加えられていった。

2000（平成 12）年頃になると、CD-ROM に変わって、オンラインデータベースが登場するようになった。それに伴い、「文献の探し方講習会」の内容も当然のこととして、OPAC およびオンラインデータベースの紹介、検索実習が中心を占めるようになっていった。

2010（平成 22）年には、「文献の探し方講習会」や「学術情報探索講習会」は、その演習のテーマに関連する一次、二次資料（データベース、インターネット情報、冊子体など）を紹介し、実際に利用させることにより、学生の学習や卒論準備の情報収集に役立てることを目的とした内容で実施している。

新大学図書館建設計画時には、まだ「情報検索」が主流となることは予測されておらず、1997（平成 9）年にグランドオープンした図書館では、30 名近い学生が一人 1 台のパソコンで同時に検索実習できるという環境は整っていなかった。当初の「文献の探し方講習会」では、パソコンが 8～10 台置かれている 2 階、3 階のパソコン室で実施していた。しかし、年々、教員からも学生からも一人 1 台での実習を望む声が多くなってきた。そこで、2004（平成 16）年夏の教育研究システムのリプレースに合わせて、2 階のグルー

ブ閲覧室の一室をパソコン教室仕様に改修した。そこに28台のパソコンとプリンタ1台を設置し、やっと館内での情報検索実習を行う環境が整った。しかし、参加演習クラス数が増加し続ける中で、同じ日時への申込みも重なり、学内のパソコン教室でも実施せざるを得ない状況もしばしば起こってきている。

1983（昭和58）年度から開始された「上級生対象オリエンテーション」は、情報リテラシー教育も含めた「文献の探し方講習会」や「学術情報探索講習会」に名称が変更され、現在にも引き継がれ、通年にわたって演習担当教員からの要望に合わせた内容で実施している。

（エ）個人対象オリエンテーション

図書館が主催の利用教育の中心は、基礎演習クラスや研究演習クラスを対象としたものであり、学部あるいは担当教員からの申込みによるものである。そのため、演習科目を履修していない学生や、担当教員からの申込みがなくオリエンテーションや講習会を受けることができない学生のために、個人でも参加できるものを設定する必要がある。そこで、個人で参加できる館内ツアー、OPACの検索実習を中心とした「OPAC検索講習会」、二次資料（データベース、インターネット情報、冊子体など）を紹介した「文献の探し方講習会・入門編」、そして卒業論文のテーマに沿った文献収集の方法を説明する「文献の探し方講習会・卒論編」等、様々なものを用意して、参加者を募った。しかし、実施日時の設定や実施内容、広報の方法等をいろいろと工夫しても、数名の参加者しか集まらず、図書館活用への関心の低さが感じられた。

また、2011（平成23）年度は、新入生基礎演習クラス対象オリエンテーションでの館内ツアーを中止としたことにより、個人参加での館内ツアーを4月中旬に1日1回、3日間実施したが、参加者は計4名でしかなかった。

（オ）キャンパスライフ ABC！

全学的な新入生オリエンテーションである「キャンパスライフ ABC！」は、2004（平成16）年度から開始された。このオリエンテーションが開始された背景には、学生のニーズが多様化していく中で、各大学がそれぞれの特性を生かしながら、一人一人の学生の個性に応じたきめ細やかな指導が求

められているということがあった。文部科学省高等教育局の「大学における学生生活の充実に関する調査委員会」による「大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」の中では、入学時のオリエンテーションは、学生が希望する進路や興味・関心に応じて、新入生を大学にソフトランディングさせ、各人に4年後のビジョンを持たせるために非常に重要であるとされている。

関西学院大学における新入生を対象としたオリエンテーションは、毎年、各部課単位で実施されてきた。しかし、前述のような考え方を受けて、本学においても新入生のニーズにあったオリエンテーションの実施が学生部を中心に検討された結果、新入生対象の統一した行事として「キャンパスライフ ABC !」が実現したのである。

2004（平成16）年度の参加部課は図書館以外に、学生課、国際教育・協力課、教職教育研究センター、教務課など多岐にわたった。部課間のスケジュール



キャンパスライフ ABC !

ル調整や、学生配布用のパンフレットの作成など、全体の取りまとめは学生課が担った。実施時期は、入学後すぐの授業開始までの期間に設定され、参加は、学生の任意によるもので、義務づけるものではなかった。

図書館では、当初からこの「キャンパスライフ ABC !」に参加し、2004（平成 16）年度から 2006（平成 18）年度の 3 年間は、「図書館の利用方法、所蔵資料、各フロアの概要をおおまかに理解してもらう」ことを目的とした「大学図書館オリエンテーリング」というプログラムを実施した。参加者は、初年度こそ 190 名の参加があったが、年々減少傾向が見られるようになった。プログラムそのものに新鮮さやインパクトがなかったということが考えられる。それでも、参加者からの意見は概ね図書館に対しプラス評価ばかりであり、入学時に好印象を与えるというねらいは達成できていたように思われる。

しかし、2006（平成 18）年度の参加者数は 50 名であり、初年度に比較して約 74% 近くも減少したことにより、初年度から 3 年間にわたり実施した「オリエンテーリング」という内容の抜本的見直しを行わざるを得なかった。そこで、1 回 30 分間という短時間で、図書館のホームページや所蔵資料の紹介、資料の集め方の説明など、4 年間の大学生活で図書館を活用するための基本的な事項についてコンパクトに説明を行う内容に変更した。この内容で、1 回の参加者の定員を 90 名までとし、同じ内容のものを 4 回にわたって実施した。また、新入生の興味を少しでもひくために、プログラム名をそれまでの「大学図書館オリエンテーリング」から「大学図書館活用術教えます!」とし、レポート作成に役立つ情報を提供するという内容で広報を行った。このように、定員数を設定したり、参加するメリットを分かりやすく伝えたりすることで、新入生に期待感を持ってもらうよう工夫した。また、配布資料として、初めて図書館の「キャンパスライフ ABC !」用のパンフレットも作成した。30 分の説明内容にリンクした構成とし、図書館所蔵資料の中からレポート作成に役立ちそうな資料も紹介した。

プログラム内容を一新したことにより、年々減少傾向にあった参加者が、2007（平成 19）年度は前年度と比べると、一気に 7 倍近くに増加した。その後も、2008（平成 20）年度は若干参加者の減少が見られたが、2009（平

成 21) 年度以降も多く参加があり、好評を得ている。

以上の基礎演習クラスおよび研究演習クラス対象オリエンテーションをはじめ、個人対象のオリエンテーション・講習会の他、大学院生や中学部生、継続校である啓明学院中学生を対象としたものまで、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館では、10 数種類のものを実施している。

イ 神戸三田キャンパス図書メディア館におけるオリエンテーション・講習会

神戸三田キャンパスにある大学図書館分室と学部図書室の機能をあわせ持った図書メディア館では、総合政策学部の開設以来、次のようなオリエンテーションや講習会を実施している。いずれも、新入生が大学生活を始めるにあたって、必要となる情報提供の場として、重要な役割を果たしている。

(ア) 新入生対象オリエンテーション

総合政策学部新入生向けオリエンテーションは、1995（平成 7）年の学部開設時より開始した。大教室での基礎演習の第 1 回目に行われる全体オリエンテーションにおいて、15 分で図書室（図書メディア館）の基本的な利用方法や施設概要を説明している。また、学部からの要請により、図書館員が英語で、館内を案内しながら施設・設備の利用方法、資料の検索方法、図書館サービス、利用上のルールなどについて、説明を行うこともある。

理工学部（2002（平成 14）年度に「理学部」から名称変更）新入生向けオリエンテーションは、理学部が 2001（平成 13）年夏に神戸三田キャンパスへ移転したときに始まった。大教室での新入生用全体オリエンテーションにおいて、事前に配布された学部生用ガイドをもとに、20 分で図書メディア館の基本的な利用方法や施設概要を説明している。

また、個人参加用として約 20 分程度の館内ツアーも実施している。自由参加ながら例年 70% 程度の学生の参加がある。

以上のほか、神戸三田キャンパスでは、SCS（Student Campus Supporter）スタッフが、基礎演習クラスごとにキャンパスを案内して回るキャンパスツアーが行われ、1 年生全員がこのツアーに参加している。全行程で 50 分程度のキャンパスツアーのルートには、10 分程度、図書メディア館が含まれており、館内を案内しながら施設の利用方法、図書館サービス、

利用上のルールなどについて学生の視点から説明している。説明ポイントや案内ルートなどについては、ツアーを担当する SCS スタッフと図書館員が事前に打ち合わせを実施し、当日は、ポイントごとに図書館員が待機し、必要に応じてツアーをサポートしている。

(イ) 基礎演習クラス対象・研究演習クラス対象「文献の探し方講習会」

総合政策学部教員からの求めにより、総合政策学部開設当初から始まった講習会である。総合政策学部教員からの申込みを受け、基礎演習クラス、研究演習クラスそれぞれを対象としたオリエンテーションを行っている。図書館員は、教員から指導内容をヒアリングの上、各演習内容に合わせたレジュメを作成している。基本は、OPAC、WebCat Plus、CiNii などを利用した日本語文献の探し方を中心とした内容であるが、教員の要望によっては海外文献の探し方も説明している。講習会は、パソコン教室を利用し、教員の立会いのもと実習形式で実施している。研究演習クラス用の講習会については、総合政策学部教員のポストに案内を配布している。一方、基礎演習クラス用のオリエンテーションは、「コンピュータ演習Ⅰ」の内容と重複するため、教員の希望に応じて実施するが、案内は行っていない。例年、申込みは年間5クラス程度と多くないが、講習会を実施したところからは高評価を得ている。しかし、近年では、広報を強化するなどの取り組みにより、申込み件数は増加傾向にある。

(ウ) 理工学部卒業研究生対象「研究室オリエンテーション」

研究室単位で申込みを受け付け、40分程度のオリエンテーションを行っている。雑誌の利用方法、自然科学系論文の検索方法、電子ジャーナルや各研究室の専門領域に関する各種データベースの利用方法について、説明している。加えて、海外文献の入手方法や ILL サービスについても、詳しく紹介している。ツアー終了後、必要に応じて同伴の教員または大学院生に、研究分野で必読の雑誌を紹介してもらっている。このオリエンテーションは、旧理学部図書室が実施していたオリエンテーションを引き継ぐ形で、2001(平成13)年より行われている。また、新しいデータベースなどの導入に伴い、随時、内容が改訂され、例年、理工学部の半数近い研究室が参加している。

(エ) 個人対象オリエンテーション

1995（平成7）年度の神戸三田キャンパス図書室の開設時から行われているオリエンテーションである。利用者が個人で申込みができるオリエンテーションとして、「卒業論文対策講座」、「図書メディア館活用講座」を設けている。申込みは、随時、受け付けており、各人の要望に合わせた内容を提供している。広報は館内の掲示やホームページで行っており、レポート作成、卒業論文対策、リサーチフェアの準備等のために利用されている。

(6) 授業支援への取り組みと学術情報リテラシー教育

図書館では、基礎演習クラスや研究演習クラスで提供する利用教育を、ただ単に図書館主催の講習会にとどめるのではなく、授業と連携し、その授業の中で、学生に図書館利用や資料活用法を説明し、情報検索実習を通して、情報へのアクセス方法を知ってもらうための支援を行っている。

図書館は、長年続けてきたオリエンテーションを中心とした利用教育だけでなく、図書館に期待される学習支援機能を果たすために、情報リテラシー教育の一翼を担うべく、取り組みを続けている。

ア 総合政策学部「コンピュータ演習Ⅰ」との連携

神戸三田キャンパスでは、西宮上ヶ原キャンパスより早く、授業との連携を実現させた。

大学図書館分室の職員が、授業と連携した OPAC 検索演習の実現に向けて動き出したのは、OPAC の WEB 版への移行が決定された 1997（平成 9）年頃のことである。教員への情報提供や学部事務室への打診を続けた結果、2000（平成 12）年 5 月、総合政策学部の必修科目「コンピュータ演習Ⅰ」と連携し、本学 OPAC 等の検索実習を実施したのである。実現にあたっては、「コンピュータ演習Ⅰ」のコンピーナをされていた総合政策学部の中條道雄教授のご尽力があった。

この連携は、「総合政策学部の学習過程において学術情報収集加工技能の向上を支援すること」を目的とし、総合政策学部 1 年生全員（11 クラス 375 名）を対象とした「コンピュータ演習Ⅰ」の中で実現した。授業開始から 8

回目の授業においての実施となり、ある程度パソコンの基本操作を習得した頃に設定し、授業の後半50分が当てられることとなった。図書館が実施する独立した演習ではなく、年間を通じて行われる情報リテラシー教育（授業）の一環として実施する以上、演習は、図書館員ではなく、授業の担当教員が担当することになった。演習中、図書館員はシステム上のトラブルや、学生からの質問へ対応するために授業サポートを行っている。サポートには、他に、CSI（Computer Student Instructor）も加わった。このように、担当教員が演習を行うシステムを導入したことで、職員数が3名と少なかった大学図書館分室でも、1学年全員を対象とするような大規模な演習を実施することが可能となった。このシステムの導入にあたり、図書館員が教材を作成し、担当教員に授業内容を説明する必要があった。事前の協議を重ね、担当教員の意見も取り入れながら、より授業に適した内容に変更するなど、教員と連携した教材作成を進めた。

2009（平成21）年度には、学科増などにより学生数が増加し、この「コンピュータ演習Ⅰ」は16クラスで実施している。また、実施時期も当初の第8週目あたりから、4月末から5月初め頃に早まっている。

また、2003（平成15）年度からは、編入生を対象として「コンピュータ演習Ⅱ」との連携も開始している。

イ 文学部「情報処理基礎」への支援

2000（平成12）年6月の館長室会において、神戸三田キャンパス大学図書館分室担当者より「コンピュータ演習Ⅰ」との授業連携についての報告があった。その報告を聞いた副館長の阪倉文学部教授より、文学部で半期ごとの1年生の科目として開講されている「情報処理基礎」の中でも、図書館の情報検索を実施してはどうかという提案がなされた。

この阪倉副館長からの提案のあとすぐに、2000（平成12）年6月14日付、乾原正文学部長宛「『情報処理基礎』における情報検索実施について（お願い）」という文書を図書館長名で提出した。そして、同年7月5日には、文学部情報処理委員であった曾我祐典教授より、「情報処理科目運営委員会」で検討した結果、2000（平成12）年秋学期から実施するということ

で承認が得られたとの報告を受けた。正式には、7月28日付で、文学部長から図書館長に文書を受け取っている。

この文学部1年生全員を対象とした必修科目の「情報処理基礎」は、コーディネータは専任教員であるが、担当者はすべて非常勤講師によるものである。各時間のカリキュラム内容も事前に定められており、文学部としては、最低12回の授業回数は確保する必要があるとのことであった。そのため、13回以上の授業回数を確保できるクラスについてのみ、図書館による情報検索実習が可能となったのである。また、実施にあたっては、7回目の授業において実施するというのも取り決められた。

開始された2000（平成12）年には、3クラスにおいて実施し、レファレンスサービス担当職員が中心となり、2名1組で担当した。その後も、春学期、秋学期とも各3～5クラス程度を実施してきた。この方法で、2008（平成20）年まで継続した。しかし、この方法では、図書館の情報検索実習を受けることができた学生と受けられなかった学生が出ることになり、不平等感があった。そのため、文学部と検討を行った結果、2009（平成21）年度からは、1年生の必修科目である「人文演習」において、4月から5月にかけて、図書館の情報検索実習が組み込まれることとなった。

このことにより、文学部の教員が「人文演習」の時間を使って個別に申込みをしていた新入生基礎演習クラス対象オリエンテーションは中止されることとなった。新たに開始された「人文演習」との連携においては、それまでの「情報処理基礎」の内容を継続しつつ、図書館の利用案内も取り入れた「文献の探し方講習会」へと引き継がれたのである。

ウ 情報メディア教育センター「コンピュータ初歩」への支援

2001（平成13）年4月からは、全学共通科目である「コンピュータ初歩」（-halfセメスター、週1回、1単位）でOPACの検索実習を中心とした情報検索を開始した。この授業との連携は、情報メディア教育センター（情報処理研究センターを名称変更）の雄山真弓教授からの依頼によるものであった。

この科目は、入門的なコンピュータ関連の科目を開講していない学部对所

属する学生が受講できるため、様々な学部の学生が受講しており、また、担当教員はほぼ全員が非常勤講師であった。講義時間ごとに実施する内容は決められていたが、担当教員により図書館に与えられる時間はまちまちであり、担当教員も受講している学生も、この授業の中でなぜ図書館の OPAC 検索実習が行われるのか理解できていないようであり、教壇に立つ図書館員にとっては、非常にやりにくいものであった。

結局、2002（平成 14）年度までは何とか続けたものの、2003（平成 15）年度からの情報関連のカリキュラム改訂により、この「コンピュータ初歩」との連携は中止されることとなった。

（7）一般公開利用登録制度の導入とサービスの向上

関西学院大学図書館の「一般公開」は、地域社会の多様なニーズに応えるため、図書館で所蔵している学術資料を、20 歳以上の西宮市、三田市等の近隣住民の方の利用に供することを目的としている。1998（平成 10）年度より開始した制度で、定員は 200 名である。

この「一般公開」制度をスタートするにあたっては、当初、学内には反対意見もあり、利用条件については、慎重にならざるを得なかった。そのため、図書の館外への貸出は不可、閲覧利用のみ許可した。また、定期試験のため入館者数が増加する 7 月、1 月、2 月については計 3 ヶ月間を利用制限期間とした。それでも、約 150 万冊の図書資料を、開館時間中は自由に利用できるとあって、他大学と比べて登録料金（年間 6,000 円、半期 3,000 円）が高かったにも関わらず、定員数を超える利用登録申請があった。

しかし、その後、利用登録者からの強い要望もあり、2001（平成 13）年度からは、「3 冊 14 日間」という条件で所蔵図書の館外貸出も行うようになった。さらには、図書館だけでなく、ほとんどの学部図書室等の図書資料も利用できるようになった。

2005（平成 17）年 5 月には、2004（平成 16）年度の利用登録者 283 名を対象として、アンケート調査を実施した。そのアンケート結果によると、利用登録者からは貸出冊数の増加、定期試験期間の利用制限の撤廃等、サービス内容の改善を求める要望が寄せられた。こういった要望を受けて、貸出冊

数を増加することは難しかったものの、定期試験期の利用については7月と1月の一定期間のみ利用制限期間とすることでサービスの改善につなげている。

(8) 障がい者支援体制の全学的見直しと図書館の対応

2006（平成18）年4月、障がいのある学生の支援を全学的に統一して担当するキャンパス自立支援課が教務部の下に設置された。また、障がいのある学生の支援に関し生じる諸問題について、大学が行う方針・方策の決定と解決に資することを目的として、副学長が委員長となり、各学部の学生主任等からなる障がい学生支援委員会も設けられた。

キャンパス自立支援課の主な業務は、①障がい学生の授業支援、②学内における学生生活自立支援、③支援のための施設・設備の設置調整、④各種パンフレット等の発行・啓発、⑤講習会、トレーニング等の開催、⑥関係諸機関等との連絡・調整である。西宮上ヶ原と神戸三田の各キャンパスに1名ずつのコーディネータが置かれ、さらに、コーディネータの業務上の相談役となる教員がスーパーバイザーとして委嘱された。

キャンパス自立支援課ができて3年目を迎えた2008（平成20）年には、「障がい学生サポート案内パンフレット」が作成され、配布された。

また、2004（平成16）年度からの総合政策学部での学習支援、取り組みをまとめた「ボーダーをなくすために－視聴覚に障害がある学生への学習支援」（K. G. りぶれっと No.21 関西学院大学出版会）が、総合政策学部とキャンパス自立支援課 KSC コーディネータ室の編集で、2008（平成20）年3月に出版された。また、聴覚障がい学生への修学支援についてまとめたDVD「ノートテイキング in KSC－聴覚障がい学生サポート」も総合政策学部により製作、発行された。さらにまた、社会学部でも、「障がいを有する学生の授業における支援」という教職員のための手引きを作成し、学生の授業支援のために活用されている。

このように、障がいのある学生に対する大学としての全学的な授業、試験、学習支援への取り組みは、確実にその成果をあげている。

障がいのある学生に対する図書館での支援体制も、キャンパス自立支援課

が教務部の下に設置されたことにより、大きく変化した。図書館と教務課でボランティアの活動支援を行っていた時期は、学内の各学部の状況や支援を必要とする利用者の情報収集も手探り状態であった。これに対して、担当部署が設置され、また、「障がい学生支援委員会」が開催されるようになったことにより、学内の情報も一本化され、現状も把握できるようになった。そのため、図書館では、キャンパス自立支援課に配備されたコーディネータと連携をとりながら、障がいのある利用者がより利用しやすい環境作りや、サービス体制の整備を進めていくことができるようになった。

2011（平成23）年4月には、障がいのある学生を支援するためのキャンパス自立支援課と、学生生活をサポートするための心理相談、修学相談、生活相談を柱とする学習支援センターとの組織統合が行われ、関西学院大学総合支援センターが設置された。これは、大学新中期計画の施策である『『オンリーワンを育てる』学生活動支援の強化』にもとづいている。2つの組織が統合することにより、学生相談のワンストップサービスが実現した。また、心と体の支援が一体化され、より一層質の高い相談対応と支援を可能にすることが目指されている。図書館は、障がい学生を担当する組織が変更になっても、今までと同様に、この新たな担当部課と緊密に連携をとりながら、支援を必要とする新入生へのオリエンテーションや、視覚障がい者読書室の提供などの支援を続けている。

図書館で行っている主な直接的な支援サービスとしては以下のものが挙げられる。

- ① レファレンスカウンターでの資料代行検索
- ② 館内所蔵資料の文献複写サービス
- ③ 入館ゲートから視覚障がい者読書室等への案内（手引き）
- ④ 介助者への入館許可証の発行
- ⑤ 利用に関する図書館オリエンテーションの実施
- ⑥ 視覚障がい者用のフロアガイドの配布

(9) 大規模な利用者アンケート（利用実態調査）の計画と実施

図書館では、2004（平成 16）年度から 4 年おきに、無差別に抽出した大学の学部生、大学院生を対象として、郵送・無記名回答による大学図書館利用実態調査を実施している。この調査は、学部生・院生の図書館利用実態を把握し、図書館サービス改善のための諸施策立案の材料を得ることを目的としている。

以前から、図書館では、利用者の利用実態を把握する必要を認識していたものの、実際には、大規模な調査は実施されなかった。それは、手間や費用の面でのハードルがあったことも挙げられるが、実際にどのように調査内容を立案推進すればよいのかがわからなかったということであった。

しかし、大学の自己評価が実施されることが間近になった 2004（平成 16）年秋に、何らかの根拠をもって評価を行いたいということになった。そこで、急遽、郵送アンケート方式で利用実態調査を実施することになり、そのための検討チームが組織された。学生からの回答を一定数以上回収するためには、学年暦を考えると、年末には回答の返送を締め切る必要があり、検討期間が極めて短い中で進めざるを得なかった。

また、精緻な分析に耐えるような質問の準備と、回答の分析のための専門的な知見を要する作業であったが、図書館内にはそのような面での専門知識を持つ者はいなかった。そこで、検討の結果、社会学部内にあった社会調査士資格認定機構事務局を訪ね相談した。そして、社会学研究科を修了した専門家にアドバイザーを依頼することとなった。

まず、質問項目の検討であるが、図書館は学生に何を聞きたいのか、つまり「知りたいこと」を把握するために、館長、副館長および全図書館員を対象とした「アンケートのための館内アンケート」を実施した。その結果を参考に、学生に問う質問の案をまとめ、次にこれをもとにアドバイザーと打ち合わせするという作業経過をたどった。この過程で、アドバイザーから、図書館員が考えた質問の仕方では、適切な調査が行えないとの指摘を受けた。「『排他的』かつ『網羅的』」という、質問に対する回答選択肢設定の原則を教えられた。また、回答の際に、できるだけ具体的な自分の行動にもとづいた回答を求める必要があった。その回答の根拠となる自分の行動の選択を回

答者の恣意に委ねると回答に客観性が欠落する惧れがあるため、回答者が自分の図書館利用経験を振り返ればおのずと特定されるような質問文を考えなければならぬことに作問の難しさを感じ、とまどったりした。

次に、回答者の抽出数であるが、回収率を3割と仮定し、本学の学生数の規模を考えたときに、どのくらいのサンプルが必要であるかということから逆算して、学部生は2,059名、院生は全員（981名）の合計3,040名を調査対象とした。

調査は、12月1日発送、20日が回答の締め切りという日程で行った。回答数は、学部生582、院生341の923件で、回収率は想定どおり30.4%であった。

回答集計結果および分析結果は、図書館ホームページで公開した。この結果から、図書館の各種サービスや提供する資料や情報に関して、利用者の認知度が低いことが明らかになった。このことが、その後に図書館が行う各種広報の見直し作業につながっていった。また、この調査結果の数値をもとに大学の自己評価報告書をまとめていくことができた。

2回目のアンケート調査は、2008（平成20）年度に実施した。調査の継続性の点から、基本的には1回目の質問を踏襲した。ただし、1回目では認知度調査に偏っていたという認識から、満足度を問う質問を追加した。調査対象は、学部生2,333名、院生1,373名とした。回答数は、学部生624、院生374で、回収率は、合計で26.9%であった。この回答集計結果、分析結果も図書館ホームページで公開している。また、回答の中に図書館への要望と理解できる記述がかなりの数あった。そこで、図書館長名でそれら要望に対する図書館からの回答をホームページで公表した。次回は、2012（平成24）年度に実施する予定となっている。

学生対象の利用実態調査に続き、大学の教育・研究を担う大学教員のニーズを把握し、よりよい図書館運営とサービスを行うための情報を得ることを目的として、専任教員対象の調査も行うことになった。2006（平成18）年4月に、利用サービス課員を中心とした7名からなるチームが編成され、全専任教員を対象としたアンケート調査を実施した。調査方法は、学内メールによるアンケート質問用紙の配布、郵送による回答（調査実施期間：2006年9

月 20 日～10 月 13 日)で、対象者 485 名に対して回答者数は 117 名(回収率 24.1%)であった。

調査結果のまとめは、図書館報「時計台」No.78(2008.4)で公表されている。回答からは、教員の来館頻度はあまり高いこと、図書館が実施している各種サービスや提供する機能への認知度が低いこと、オリエンテーション等に対しては満足度が高いこと、といったことなどが、改めて確認できた。また、自由記述に記された意見、要望も合わせて検討すると、図書館が取り組むべき主な課題は、次の 3 点に集約されることになる。これらの課題については、担当部課を中心に課題解決に向けて取り組みを行っている。

- ① 広報のあり方の再検討と充実
- ② 非来館型サービスの充実
- ③ 教員との連携の強化

(10) 活用が望まれる指定図書

「指定図書」は、授業担当教員が授業に関連して学生に必読することを勧める図書資料である。指定図書制度は戦前に東京帝国大学ほかいくつかの大学で実施されていたようであるが、本学においても 1930(昭和 5)年の「関西学院図書館規則」の中に「教授上の必要による指定図書」という言葉を見出すことができる。指定図書制度は開始以来 80 年を越え、現在も引き続き実施している歴史のあるサービスのひとつである。

この指定図書制度は、新大学図書館建設時の「新大学図書館管理運営問題検討委員会」等でも議論がされてきた。それまでの指定図書制度では、教員からの指定図書の回答は 2 割程度しかなく、本来の指定図書制度の目的を十分に果たしているとは言えない状況であった。そのため、指定図書制度の目的と機能を見直し、授業に密接に関連した利用サービスのひとつとして再構築するということが必要とされた。

複本の冊数は、1 タイトルごとに 3 冊までで変更はなかったが、「授業履修者数および利用状況に応じて複本を提供する」とし、1997(平成 9)年度

からの指定図書制度は以下のように変更された。

ア 選定範囲

旧制度では、一般図書の選定基準に準拠して選定していたため、選定範囲については、通俗的な内容のものや、逐次刊行物、視聴覚関係資料については除外していた。新制度では、指定範囲から除外していたこれらの資料も選定対象とし、幅広く授業に密接に関連した資料を提供することにより、利用者サービスの充実をめざすことになった。

イ 予算費目について

旧制度では、登録図書（資産化図書）として複数冊購入し、主題分類のうえ通常の一般図書と同じ書架に配架しており、翌年度に指定されなかった図書は、指定図書から一般図書となり、複本として書架に同一図書が複数冊並べられていた。このため、書架スペースを圧迫することにつながり、書架狭隘化の問題として顕在化してきていた。新制度では、複本購入や資料の保存期間等について柔軟に対応するために、教員から指定されたすべての図書資料を消耗図書費で、購入することにした。指定年度が終了すると、指定図書はすべて除架し、蔵書データも削除するが、再指定されたものについては、指定図書として配架、データを再作成することになった。また、指定図書として選定された図書資料のうち、図書館の蔵書として所蔵すべきものであると判断したものについては、指定図書とは別に一般図書として購入することになった。

ウ 配架

新制度では、一般図書とは異なる図書資料であることを明確に示すために、指定図書コーナーを設け、配架した。

エ 利用条件

利用条件の見直しを行い、旧制度では一般図書と同一の貸出条件であったが、新制度では指定図書の趣旨に沿い、貸出利用できるのは学部生のみと

し、館外貸出期間は一般図書の2週間より短く設定し、1週間とした。

このようにいくつかの見直しを行い、1997（平成9）年度から新たにスタートした指定図書制度であったが、教員からの回答率は旧制度の時代とほとんど変わらなかった。これは、教員の授業方式が指定図書を活用した授業形態になっていないことによると考えられる。指定図書の貸出件数等の利用率は非常に低い。新大学図書館における利用者への学習支援の大きな目玉となるべき指定図書であったが、十分に利用されているとは言えない状況である。

（11）特色ある「場」の提供

大学図書館には利用者のさまざまなニーズに応え、多様な利用の形を可能とする「場」が設けられた。西宮上ヶ原キャンパス大学図書館での特色ある「場」を挙げてみる。

ア グループ閲覧室

複数人数による図書館所蔵図書資料を用いたグループ学習、研究討議の場として、2階に4室、3階に4室が設けられた。少人数で利用できる部屋から最大28名までが利用できる部屋まで、また、機器類もパソコンや視聴覚機器を備えた部屋などがあり、学生たちは目的に応じて、利用する部屋を選択することができる。

利用申込みができるのは、1週間前（2012（平成24）年11月からは2週間前）からであるが、授業のある期間は非常に多くの利用があり、グループでの発表やディベートの準備等、学生たちに活用されている。

このグループ閲覧室の2階の1室は、図書館主催の講習会やガイダンス等でも使用することができるよう、2004（平成16）年夏の教育研究システムのリプレース時にパソコン28台を備えたパソコン教室仕様に改修した。

イ 研究個室

教員および大学院生が図書館所蔵の図書資料を用いて調査研究を行うための場として利用できる個人用の部屋が、1階に5室、2階と3階には各9室、

B1階には5室の計28室が設けられた。

室内にパソコンは備え付けられていないが、2008（平成20）年度には館内に無線LANを配備し、2階と3階の各4室はパソコンを持ち込んで利用できる部屋となっている。

研究個室は、2週間前から利用申込みができ、専任教員だけでなく、個人研究室を持たない名誉教授や非常勤講師、大学院生が図書館内で落ち着いて研究できる場として、多く利用されている。

ウ パソコン室

BM階を除く、各階に8台ずつパソコンを備え付けた部屋が設けられた。それぞれに持ち込みパソコンを利用するスペースも用意したが、持ち込み利用はほとんどなかった。一方で、パソコンの増設要望が多く寄せられたため、教育研究システムのリブレース時に持ち込み用スペースに段階的にパソコンを設置し、館内のパソコンの台数を増加させた。

また、館内にはパソコン室だけでなく、1、2、3階のカウンター前にも自由に利用することができるパソコンを設置した。

2011（平成23）年度では、館内に120台の利用者用のパソコンが配備されているが、学内的に見ても、図書館内のパソコンの利用は非常に多い。

エ 視聴覚資料利用コーナー

新大学図書館には、図書館で所蔵する様々な形態の視聴覚資料を利用することができるコーナーを2階に設置した。コーナーには視聴用の機器を備え付けた51のブースがあり、1人で利用するブースや2人、3人で利用するブースなど様々な利用形態に対応できるようにした。当初は所蔵している視聴覚資料に合わせ、VTR用ブース、カセットテープ用ブース、レコード用ブースも設置していたが、所蔵する視聴覚資料の形態によって、ブースに備え付ける視聴用の機器は変化している。現在ではDVD資料が所蔵資料の主流となり、38ブースでDVDが視聴できるようになっている。また、ブースの中には、衛星放送が視聴できる機器を備え付けたものもある。

視聴覚資料利用コーナーでは、図書館所蔵資料だけでなく、利用者が持ち

込んだ視聴覚資料を利用することもできる。ブースの1回の利用時間は当初、2時間までと決められたが、その後、利用者からの強い要望もあり、3時間まで利用できるようにした。

また、館外貸出ができるのはカセットテープのみとし、他の形態の資料はコーナーでの利用のみである。主にカセットテープで提供していた語学学習関連資料は、1997（平成9）年10月と2001（平成13）年度末に言語教育研究センターへ移管したが、映画等の映像資料の充実をはかったため、館内で視聴する利用者が大幅に増加した。

オ ラウンジ

新大学図書館2階には、利用者が気軽に読める図書や雑誌を配架した「ラウンジ」が設けられた。ラウンジには、通常の登録図書や学術雑誌とは異なり、時事性が強いもの、留学、資格取得、旅行ガイド、コンピュータ関連図書といった図書や雑誌を中心に収集し、配架した。また、地方新聞やスポーツ新聞も配架した。

これらのラウンジ資料は、すべて消耗図書費で購入し、長期保存せず、図



ラウンジ

書館資料として登録しなかった。また、いずれの資料も目録データの作成は行わなかった。館外への貸出ができるのは図書のみとし、他の資料は、原則としてラウンジ内での閲覧利用とした。

しかし、その後、利用者から OPAC で検索ができるようにとの要望があり、ラウンジ雑誌については、タイトルがわかるように簡易な目録データの作成を行った。

さらには、2010（平成 22）年度の図書システムリプレース後に開始されたキャンパス間配送システムの稼働により、ラウンジに図書が配架されているにも関わらず、わざわざ他キャンパスから図書を取り寄せるという状況が頻出したことから、ラウンジ図書の目録データを作成することの必要性が顕著となった。また、目録データがないため、資料の貸出記録として、貸出時にカウンター担当者がラウンジ図書の書名等を入力することが必要であるなど、事務処理の面でも課題となっていた。このような状況を受けて、運営課と利用サービス課の両課員で構成された検討チームが設置され、目録データの作成だけでなく、ラウンジ資料の充実をはかるために、配架方法および配架資料の見直しの検討を行った。

検討チームからの答申により、ラウンジの大幅な見直しが行われ、2011（平成 23）年度からは、図書の目録データが作成され、OPAC で検索できるようになった。また、図書資料の内容も一新するなど、ラウンジの充実をはかった。

現在は、ラウンジ図書は書架の充足具合を勘案しながら、原則として1年間で入れ替えを行うという前提で、①旅行ガイド、②就職活動・留学・資格取得関連資料、③生活、④時事問題、⑤アウトドア・スポーツ、⑥趣味（全般）、⑦IT、WEB、コンピュータ、というカテゴリーに分けて、選書、収集している。

ラウンジ雑誌については、当初の 60 タイトルから 48 タイトルへとタイトル数は減少しているが、廃刊、休刊雑誌が出るたびに、差し替え雑誌を検討し、補充している。新聞は、予算上の問題もあり、当初購読していた地方新聞は中止し、現在はスポーツ新聞 2 紙を配架している。

また、神戸三田キャンパス図書メディア館においても、2011（平成 23）

年度に、利用者が気軽に読める図書や雑誌を配架したブラウジング図書・雑誌コーナーの見直しを行った。図書は、種々雑多なものが混在した状態であったが、見直し後は西宮上ヶ原キャンパス大学図書館と同様のカテゴリで選書、収集し、4階に配架している。雑誌は、旅行ガイド、ファッション、趣味などの分野を追加して42タイトルへと倍増し、3階東側奥のエリアから利用者の目につきやすい2階カウンター前に移設した。

カ 休憩室と喫茶室「アルカディア」

新大学図書館では、利用者が長時間滞在しても快適に過ごせる図書館をめざした。そのため、利用者がリフレッシュできるように、1階から3階の各階に「休憩室」を設けた。2階の休憩室では、喫煙も可としている（2013（平成25）年度から全館禁煙になった）。また、図書館内は飲食禁止であるが、B1階に席数30の喫茶室「アルカディア」を設け、飲み物だけでなく、軽食も提供している。この喫茶室の運営は、関学生協に委託している。営業は、授業のある期間中の、午前10時から午後5時までであったが、次第に営業時間が短縮され、2011（平成23）年度では、午前11時30分から午後2時までとなっている。

キ 図書館ホール

図書館ホールは、図書館主催のオリエンテーション、研修会、講演会等に幅広く利用できる場として設置された。プロジェクターや遠隔会議システムなどの機器も備え付けられており、収容定員は100名である。利用申込みは1年前から受け付けており、図書館主催の行事だけでなく、学内の様々な催事に利用されている。

(12) コーナー配架図書の設置へ

西宮上ヶ原キャンパス大学図書館（以下、上ヶ原）および神戸三田キャンパス図書メディア館（以下、神戸三田）では、全面開架制を採用し、開館時間中は利用者が自由に書架から図書資料を取り出して利用することができることを特徴のひとつとしている。ほとんどの一般図書は、請求記号に従って

配架され、利用者は、必要とする図書資料を直接書架でブラウジングしながら探すことができる。

そのため、特定の資料をまとめて別置する「コーナー配架」は行わないという原則がとられ、旧図書館の開架室で行っていた新着図書コーナーも1997（平成9）年度からは廃止となった。

しかし、その後、利用者からの要望や、少しでも多くの利用者に図書館を利用してもらうため、以下のようにコーナー配架は復活することとなった。

ア 新着図書

新大学図書館は、図書資料の収容能力150万冊を持つ大きな図書館である。新着図書が配架されても、利用者にとっては膨大な図書群の中に埋もれてしまっているような状況になっていた。毎週、400冊から500冊近くの新着図書が配架されているにもかかわらず、利用者からは「この図書館には新しい本が入ってきていない」、「古い本ばかりだ」といった声が多く聞かれた。

そのために、上ヶ原では入館ゲートを入ったすぐのところに、神戸三田では4階に木製ワゴンに新着図書を展示形式で配架する「新着図書コーナー」を2006（平成18）年7月から設置した。このコーナーは、毎週1回、図書の入れ替えを行い、ワゴンの中では分野ごとの見出しを作成して、見やすい



新着図書コーナー

ように工夫をした。

このコーナーに配架された図書の貸出件数は非常に多く、新着図書を利用者に見せることの重要性を再認識した。

イ 先生のおすすめの本

西宮上ヶ原キャンパス新大学図書館が開館してから約 10 年が経過した頃、入館者数および館外への図書貸出数も減少傾向が見られるようになっていた。インターネットによる通信技術の爆発的な進化により、図書館を取り巻く状況が大きく変化したこともあり、次第に学生の読書離れの傾向が見られるようになった。

2008（平成 20）年 12 月、曾我館長から「学生に読ませたい本（教員推薦図書）についてのアンケートを実施し、推薦された図書のコーナー展示を行い、利用者に提供する」ことについての検討依頼があり、それを受けて館内で検討チームが作られた。

その結果、年に 2 回（春と秋）、全専任教員に対して、メールで図書の推薦依頼文書を送付し、推薦図書の冊数は 1 冊、200 字までの推薦文を添えてもらうこととなった。



先生のおすすめの本コーナー

第1回目は、2009（平成21）年5月中旬に全専任教員に依頼をし、7月から「先生のおすすめの本」コーナーとして、展示を開始した。上ヶ原では、1階の参考図書用の低書架と展示用書架に、神戸三田では4階の低書架を利用し、展示を行っている。このコーナーの図書を館外貸出できるのは、学部生と大学院生だけに限定しており、学生たちに少しでも図書館に親しみを持ってほしいという曾我館長の思いがこのコーナーの運用に反映されている。

なお、この教員から寄せられた推薦図書については、推薦文をそのまま掲載した小冊子を作成するとともに、ホームページにも掲載している。毎回の冊数は約50冊程度と少ないが、利用回数が多く、学生に人気のコーナーとなっている。

ウ 新聞書評掲載図書

2009（平成21）年4月初旬、曾我館長から、日曜日の新聞書評欄に掲載される図書を購入し、利用者に提供することが可能かどうか検討するように指示された。

検討の結果、図書館利用の促進のためにという目的で、新聞書評掲載図書をコーナー配架することになった。どの新聞に掲載されたものにするかにつ



新聞書評掲載図書コーナー

いては、費用面と通常の一般図書との重複状況を勘案した結果、上ヶ原では読売新聞に、神戸三田では朝日新聞に掲載された図書になった。

同年8月から、上ヶ原では2階カウンター前の書架に、三田では4階のエレベータ前にコーナー配架している。このコーナーに置かれた図書は、誰でも館外貸出することができ、利用度が高いコーナーとなっている。

エ レポート・論文作成関連図書

大学図書館の果たすべき役割として、研究支援だけでなく、学習支援の強化ということが言われるようになった。図書館でも「レポート・論文作成」をキーワードに、新入生を対象としたオリエンテーションやガイダンスを行ったところ、新入生の関心が非常に強いことがわかった。

そこで、学生の学習支援をより充実させることを目的とし、上ヶ原では利用者の目にとまりやすい1階から2階への吹き抜け階段横に、神戸三田では4階に、レポートや論文作成をするにあたって基本となるような図書を選択し、各タイトル3冊ずつ購入したものを並べた「レポート・論文作成関連図書コーナー」を2010（平成22）年4月に設置した。入学式後の「キャンパスライフABC!」や「文献の探し方講習会」等の実施直後には、このコーナーの図書は、非常に学生の利用度が高い。また、新しく出版された関連図書は、追加購入してコー



レポート・論文作成関連図書コーナー

ナーを充実させている。

このレポート・論文作成関連図書は、「新聞書評掲載図書」や「先生のおすすめの本」と同様に、消耗図書費で購入している。

(13) 図書館への集中配架と機関貸出制度の実施

新大学図書館の開館に向けて、運用の改善についての様々な議論が行われた。そのひとつに、図書館への集中配架と機関貸出制度の実施がある。「新大学図書館管理運営問題検討委員会」で全学的な議論がされた結果、1998（平成10）年度から、図書費Bの発注を図書館で行うことと、購入された図書資料は、原則としてすべて大学図書館に備え付け、集中配架することが決定された。これにより、長年にわたって実施してきた図書費Bで購入した図書の分置が中止されることとなった。また、発注を図書館で行うことにより、不要な重複を避けることができるようになった。新大学図書館になって、ようやく大学図書館が長年にわたり主張してきた図書館への図書の集中化が、図書館図書費での購入分について実現することとなったのである。

この「分置制度」を廃止する代わりに開始されたのが「機関貸出制度」である。この制度は、図書費Bで購入された図書を、選書した部局（機関）が希望すれば、その部局に対して1年間貸出することができるというものである。さらに、希望すれば、1年間ずつ2回まで更新することができ、最長3年間の貸出が可能となる。毎月、利用サービス課で、貸出中の図書リストを作成し、該当部局に送付し、部局はそのリストをもとに、貸出中の図書を利用サービス課まで運び入れ、更新あるいは返却の手続きを行うというものであった。

しかし、その部局との調整やリスト作成作業は非常に煩雑であり、担当者にとっては業務負担のかかるものであった。また、更新可能な図書については、運用ルールどおりに、更新時に現物が持ち込まれることが年々少なくなり、次第にデータだけの処理になっていった。

このように、機関貸出制度の運用ルールは形骸化し、利用サービス課での業務負担だけが残っている状態であった。

2010（平成 22）年夏に行われた図書システムのリプレース後からは、法学部など一部の部局が分館として図書システムを利用することになったため、これに合わせて、機関貸出制度の運用ルールの変更を行った。

変更後は、利用サービス課で貸出手続きを行わず、分置図書と同様に、希望する部局に分置ラベル、機関貸出ラベルを貼付して、図書を引き渡し、返却後に装備および配架場所の修正を行うという方法となった。貸出期間に変更はないが、利用サービス課では貸出後 3 年を経過した図書についてのみ、返却用のリストを作成し各部局に連絡をしている。

機関貸出制度は、主として法学部と司法研究科が利用し、他の部局の利用はほとんどない。これは、図書館の開館時間延長や日曜日開館の開始、また、OPAC からの貸出期間延長が可能になるなど、図書館利用の利便性が向上したことによるものと考えられる。

(14) デジタルライブラリの構築

2001（平成 13）年 4 月、館長室会の下に電子図書館推進チーム（コンビーナは中野副館長）が設置された。このチームは、その前身である電子図書館検討チームから 2000（平成 12）年 12 月に提出された「関学図書館版電子図書館イメージ構想に関する答申」と、それをもとに開催された館長室会での審議や、2001（平成 13）年 7 月に井上館長から出された「図書館の課題」をもとに電子図書館構想を具体的に推進することを目的としたものであった。

デジタルライブラリの構築は、この電子図書館推進チームにおいて検討された、今後の図書館のめざす電子図書館的機能である「学内所蔵資料・知的生産物の電子化－所蔵資料のデジタル化と公開」をもとに、図書館が所蔵する稀少かつ学術的価値の高い図書資料・史料を対象として始められた。当初の計画では、特別文庫に指定されている貴重図書および古文書のうち、すでにマイクロフィルム化されたものを最優先でデジタル化し、オンラインで公開することが検討されていたが、他大学の状況等を調査すると、デジタル資料の発信は多くの大学が図書館広報として用いており、大学独自の特筆すべき資料群に限定されていることがわかってきた。また、海外の図書館におい

ては、学術研究交流のためにデジタル資料が製作、公開されており、有料で提供する高精細な画質のものと、無料で公開するコンテンツの2種類を提供していることがわかった。

図書館のデジタル化について議論を重ね、広報手段としての資料情報発信よりも学術研究の世界的な交流をはかることがデジタル化の目的であるべきという方針が決定され、単なる広報にとどまらず、高精細な画像を製作し、将来における有料での提供を視野に入れた学術研究のためのデジタルコンテンツを構築すべきであるという結論を得るに至った。2003（平成15）年に着手したのは、「関西学院新聞」（2004（平成16）年4月公開）のデジタル化であった。その後は、図書館において、過去に開催された展示会等に出品した資料をデジタル化によって再生するための活動を展開した。「関西学院と聖書」、「与謝野晶子による丹羽安喜子短歌草稿への添削」、「兵庫県漁具図解」、「経済思想家の手稿と自筆書簡」、「明治・大正の文学者たちの書簡と草稿」、「灘の酒造り」と続くデジタル資料は、図書館の貴重な資料であるのみならず、学術研究上も重要な資料群である。

デジタル資料の撮影に必要な経費は、当初の数年間、総合教育研究室の全面的協力のもと、総合教育研究室プロジェクトに申請した補助金によって賄われた。コンテンツが一定程度蓄積された段階からは、これらのデジタル資料群を「デジタルライブラリ」と総称した。



『兵庫県漁具図解』イカナゴ地曳網使用図

(15) 新たな取り組みとサービスの展開

1997（平成9）年10月にグランドオープンした新大学図書館の建設にあたっては、「新大学図書館管理運営問題検討委員会」が設置され、大学全体で新しい大学図書館の管理や運営について精力的に検討が重ねられた。また、図書館内でも新しいサービスの提供を検討するプロジェクトチームを作り、旧図書館では提供できていなかったサービスや、その運営について検討を行った。その結果、グランドオープン時には、利用者に新しいサービス、新しい環境が提供され、「新」の名にふさわしい大学図書館となった。グランドオープン後も図書館では、さらに新しいサービスや環境を提供している。以下にグランドオープン後の新たな取り組みやサービスを挙げる。

ア マイクロコンテナサーバの増設

2004（平成16）年8月にマイクロコンテナサーバの増設を行った。グランドオープン時は、約5万リールの収容力であったが、増設により、約10万リールの収容力となった。また、2005（平成17）年2月には、サーバ機の昇降機のリニューアルと昇降機入口の防火防煙シャッターの取り付けが行われた。

イ 大阪梅田キャンパスでのサービス提供

2005（平成17）年4月から、大阪梅田キャンパスで開講している研究科・コースに在籍する利用者を対象として、大阪梅田キャンパスでの図書資料の取り寄せ、文献複写、閲覧依頼状の受け渡し等のサービス提供を開始した。

ウ 除籍図書の有効利用

2005（平成17）年4月から、重複により除籍した図書を学部生、大学院生の学習・研究に役立てるため、2階カウンター近くに展示し、希望者は所定の手続きの上、持ち帰ることができるようにした。

エ EUIJ 関西ライブラリーの開設と相互利用協定の締結

2005（平成17）年4月、EU（欧州連合）に関する教育・学術研究の促

進、広報活動の推進や情報発信を通じて、日・EU 関係の強化に貢献するため、欧州委員会の資金援助により、神戸大学・大阪大学・関西学院大学からなるコンソーシアムを形成し、EU に関する教育と研究などで連携する学術拠点として EUIJ 関西が創設された。その活動のひとつとして、EUIJ 関西が提供するプログラムに参加する学部生、大学院生および EU 科目授業担当教員の便宜をはかるため、3 階に「EUIJ 関西ライブラリー」を開設し、3 大学図書館間で相互利用協定を締結した。EUIJ 関西は、2009（平成 21）年 4 月から第 2 期がスタートし、「EUIJ 関西ライブラリー」も引き続き設置され、利用されている。

オ リコール制度の導入

2006（平成 18）年 4 月から、リコール制度を導入した。これは、貸出日から 1 ヶ月以上過ぎた図書に対し、新しく貸出を希望する利用者が一時利用の申し出を行い、借り出し者の同意を得られれば、14 日間の借り出しができるという制度である。教員の貸出期間が 180 日、大学院生の貸出期間が 60 日であるため、他の利用者は、それらの図書を利用しようとしても、返却されるまでの長期間利用できなかったが、この制度の実施により所蔵図書の共通利用と利用機会の均等化をはかることができるようになった。

カ OPAC 画面からの「更新（貸出期間延長）」

2006（平成 18）年度からは、OPAC 画面から貸出期間の延長ができるようになった。このシステムを利用できる利用者は、教育・研究用 ID を持っている専任教職員および大学院生・学部生である。OPAC 画面から「更新（貸出期間延長）」ができる回数は、1 回のみであり、他の利用者から予約されている図書の継続はできない。

キ 蔵書点検

図書館では全面開架制を採用しており、開館時間中は貴重図書や特別文庫等を除き、利用者が図書館所蔵資料を自由に利用することができる。

図書館では、日々の業務として、学生アルバイトを中心に、請求記号順に

正しく図書資料が配架されているかどうか書架点検を行ってきた。しかし、それでも利用者からは、図書の所在調査に関する問い合わせや不明図書に関するクレームが多くカウンターに寄せられていた。そのため、2006（平成18）年2月から、資産管理上の必要性からも蔵書点検を順次計画的に実施することとなった。

以後、蔵書点検は、開館を行いながら、1回の蔵書点検では約8万冊ずつを対象として、年に2回、授業のない期間中の2月～3月に約20日間、8月～9月に約20日間、二人一組で、蔵書点検用リストと現物の読み合わせを行うという方式で実施している。2011（平成23）年度末では、一般図書の約95%についての蔵書点検が終了した。

ク 書架の増設

2006（平成18）年8月に、図書館内の書架狭隘化対策として、B1階、BM階の壁面に書架を設置した。また、B1階利用者用カード目録については、目録のデータ化が終了していない部局分置分を除いて撤去、廃棄し、その跡地スペースに書架を設置した。これにより約2万8千冊分の収容増となった。

ケ 紀要の取扱い変更

関西学院大学が発行している紀要類は、BM階に2部配架していたが、2006（平成18）年度からは1部のみの配架とした。配架しない1部については、除籍し、保存用として地下倉庫に置くことになった。また、他大学発行の紀要類については、紀要類のデジタル化が国立情報学研究所の事業で実施され、国立情報学研究所や各大学の機関リポジトリから発信されることが多くなったことから、製本を中止し、受入処理後、1階のカレント書架に配架することになった。この紀要類の取扱いの変更は、書架の狭隘化対策のひとつとして実施された。

コ 和装本の取扱い変更

2006（平成18）年度には、和装本の取扱いを変更した。従来、「和装本」として取り扱っていた資料は、和装（線装）の製本様式をとっている和書・

漢籍が対象となっており、近年に出版されたものから、年代的にかなり古く資料的価値が高いものまで含まれていた。これらの「和装本」の利用については、出納方式をとっていたが、一般図書と同様に館外貸出が可能であったため、紛失や汚損の問題があった。そこで、「和装本」を「和漢古書」と「和装本」に区別した。「和漢古書」は、原則として出版年が1868（慶応4）年までの和古書と1912（大正元）年（辛亥革命）までの漢籍を対象とした。利用については、資料保存の観点から館内利用のみとした。この変更により、新たに「和漢古書利用規程（2013（平成25）年4月1日施行）」を制定した。

サ CD-ROM サーバの撤去

1995（平成7）年から CD-ROM サーバを導入し運用を開始した。1990 年代には図書館界で「電子図書館」という言葉が頻繁に語られ、情報流通が紙から電子媒体を介したものに移行する新時代が始まるという論調が多かった。CD-ROM という媒体は、当時は画期的なものとして脚光を浴びていた。大量の情報をコンパクトに収納でき、多様な検索が可能なものであることから、大学図書館界では主として二次情報の媒体として流通が始まっていた。本学ではこれを提供するサーバシステムを図書システムの一部ではなく教育研究系の資源として、教育研究システムの一部として導入した。西宮上ヶ原キャンパス大学図書館では1995（平成7）年から、神戸三田キャンパス図書室では1996（平成8）年からサービスが開始されている。このシステムの初回導入時は、情報媒体と検索系ソフトウェアは学術情報を扱う書店から、機器や基本管理ソフトは情報機器メーカーからの導入であったが、1998（平成10）年のリプレース以降はすべて書店から納入されるようになった。また、コンピュータ機器の発達により、2004（平成16）年のリプレース時には媒体が DVD-ROM にも広がり、多数の媒体を収納しておき、利用者はメニューから自分が使いたい情報源を選択すれば機械が目的の媒体をセットするチェンジャーも装備されるようになり、名称も CD-ROM サーバからメディアサーバへと変わった。しかし、技術の進歩は情報流通の形をさらに変えることとなり、物理的媒体を介さないオンラインでの情報流通がより多く

なってきた。それにより、2007（平成 19）年のリブレース時に図書館でも情報源をオンライン系のものへシフトすることになり、メディアサーバは置かないこととした。このように登場時には輝かしい存在であった CD-ROM サーバ（メディアサーバ）は本学では 12 年間でその役割を終えたこととなる。電子機器系の栄枯盛衰を実感させるものである。

シ 無線 LAN の敷設

新大学図書館では、オープン時から教育研究用パソコンを設置し、利用者に提供してきたが、館内の無線 LAN の敷設は、2008（平成 20）年夏のことであった。また、館内全体に無線 LAN の敷設が完成したのは、2010（平成 22）年であった。無線 LAN の敷設により、貸出カウンターでは、貸出パソコンの提供も行うようになった。貸出パソコンは、4 台あり、グループ閲覧室や館内のパソコン利用可能閲覧座席で利用されている。

ス 図書館ホームページの改良

図書館のホームページは、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館、神戸三田キャンパス図書室とも 1997（平成 9）年 4 月から公開した。公開当初は開館日・開館時間帯やフロアガイド、サービス内容といった案内、および OPAC やリンク集などを提供していた。また運用環境としては学内他部署の環境を借りていた。1999（平成 11）年 10 月には広報室から移管されたサーバを図書館に置いて運用するようになった。2006（平成 18）年度にサーバ機を更新したがこの頃までにホームページを何回かリニューアルしている。コンテンツも本学で作成したデジタルライブラリや、電子ジャーナル、データベース等の情報源へのポータル機能も付加されていった。2008（平成 20）年 10 月には西宮上ヶ原キャンパス大学図書館、神戸三田キャンパス図書メディア館でそれぞれ個別に運用していたホームページを統合した。現在では、各種ガイダンス・講習会案内、図書館の広報活動、図書館関連規程等のページが追加され、図書館に関する幅広い情報提供を行っている。

セ 返却期限日の押印廃止

2010（平成22）年4月から、貸出処理時に貸出図書1冊ごとに行っていた「図書貸出日表」への返却期限日の押印を廃止し、利用者には返却期限日を押印した「しおり」を渡すことにした。これは、OPAC画面から貸出期間の延長が可能となり、このサービスが浸透してきたため、図書に押印した返却期限日と実際の返却期限日が一致しなくなったこと、また、OPACの「利用者サービス」で返却期限日を確認することができるようになったことによる。この押印の廃止により、カウンターでの貸出処理が簡素化でき、サービスの迅速化につながった。これにあわせ新規登録図書への「図書貸出日表」の貼付も中止した。

ソ 延滞図書への返却依頼（督促）の実施

図書館の利用対象者数が増加すれば、それに伴って貸出冊数は当然増加するが、返却期限どおり返却されない延滞図書も増加する。図書館では延滞図書を減少させるべく、様々な方法でこの延滞図書の問題に取り組んできている。また、延滞図書を返却するまでは新たな貸出ができないという罰則も設けているが、一向に延滞図書は減少していない。

2011（平成23）年度に実施した方法としては、まず、返却期限日までに返却されなかった図書については、返却期限日の翌朝に電子メールで該当者に督促文書を自動送信している。その後もその図書が返却されるまで、10日おきに同様の電子メールがシステムの送信される。そして、年2回、春と秋に、延滞図書を持っている全利用者に対して、督促の文書を郵送で送付している。教職員については、学内メール便で送付している。また、延滞中の図書に対して他の利用者から「予約」がついた場合は、その図書を延滞している利用者に、電話で直接、督促を行っている。この「予約」がある場合の電話での督促は、図書が返却されるまで、2日おきに行っている。利用者と電話が繋がらなかった場合には、教学WEBや学部での掲示を通じて、あるいは郵送などで督促を続けている。さらには、卒業または修了する利用者に対して、延滞中の図書を含めた貸出図書の返却要請の文書を1月から3月の各月に郵送し、また、卒業式当日には、研究演習担当教員から延滞図書

を持っている利用者に対し、速やかに図書を返却するように指導をお願いしている。

このように大学図書館としては、どうすれば延滞図書を減少させることができるか、その効果的な方法を探りながら、この延滞図書の問題に取り組んでいる。

7 刊行物－特別文庫すべての冊子目録の完成

1983（昭和 58）年に特別図書購入基金により購入された「The Scottish Enlightenment: a collection（スコットランド啓蒙思想史コレクション）」は、当初 64 点（109 冊）という小規模なものであった。その後、図書館では、スコットランド啓蒙に関する基本文献の継続的な収集に努め、212 点（371 冊）という規模になった。そこで、これらをひとくくりとして「特別文庫」に指定し、所蔵することとした。また、研究利用を促進するために、コレクションの名称を改め、第一次文献（原典）のみを収録した「スコットランド啓蒙コレクション目録」を、特別文庫目録第 7 輯として、2001（平成 13）年 3 月に刊行した。このコレクションは、その後も充実をはかり、2012（平成 24）年 3 月には、383 点（755 冊）の規模となっている。「The Scottish



冊子目録

Enlightenment」と同時に購入した「宗教改革史と教会法史コレクション」は、キリスト教主義学校である本学としては、比較的貧弱であった聖書を含むキリスト教関連文献・資料を充実させる契機となったコレクションである。このコレクションも特別文庫に指定し、名称を「宗教改革・教会法コレクション」として、2002（平成14）年3月に目録を刊行した。この目録は、特別文庫目録第8輯となった。この特別文庫目録の完成で、本学に所蔵する特別文庫全ての冊子目録を刊行したことになった。

特別文庫ではないが、この時期刊行した冊子目録に「下村寅太郎蔵書目録」がある。下村寅太郎蔵書は、関西学院創立百周年記念事業の一環として1987（昭和62）年にその購入契約がなされ、1993（平成5）年に図書館に正式に移管された資料である。西田幾多郎の最後の高弟である下村博士の旧蔵資料は、総数1万冊弱におよぶもので、幅広い分野の資料が収集されていた。下村博士が「死蔵すべきものでない」といわれたように、多くの学生や研究者に公開している。この「下村寅太郎蔵書目録」は、2002（平成14）年3月に刊行した。

8 展示・講演会－さらなる充実に向けて

1997（平成9）年10月に新大学図書館が開館し、新たな展示スペースがエントランスと館内の2カ所に設けられた。それに合わせて、学術資料講演会と特別展示のほか、館内展示として春夏秋冬年4回の展示を行うこととなった。同年12月には、新大学図書館開館後、初めてとなる「聖書の世界－死海写本から新共同訳まで」と「ディケンズとクリスマス」の2つの展示が実施された。以後、図書館員（広報チーム）により斬新な展示テーマの発掘が行われ、展示技術も年々向上し、学生たちを図書館にいざない続けている。また、2003（平成15）年9月には、丸善・東京日本橋店で、「近代への扉：関西学院大学図書館所蔵資料展」を開催した。学外で実施された初めての展示企画であった。この展示は、1週間の開催中にライブラリートークを3回行うなど、図書館から学外への情報発信の一環として、盛況のうちに終了した。

[illegible]

第12回特別展示－丸善・東京日本橋店

また、新大学図書館建設計画時には想定しなかったことであるが、学内の部署や学生団体から、図書館のエントランスでの展示希望が多く出されるようになった。これに前向きに対応するために、2011（平成 23）年 6 月に「大学図書館エントランス使用に関する取り決め」を定め、使用にあたっての遵守事項を明確にした。図書館の入館者が 1 日に 4,000 人を超えることか

ら、学内では、展示企画の有力な集客手段として、図書館エントランスの利用が人気となっている。

9 図書システム－汎用機からサーバ上のシステムへ

(1) 汎用機末期の短い平和

1998（平成 10）年～2002（平成 14）年

1998（平成 10）年夏に実施したシステムリプレースにより図書システムは BIBLION21 に移行し、1999（平成 11）年 4 月からサーバ上の OPAC の運用を開始した。このとき、学院のネットワークが従来の専用回線によるネットワークから TCP/IP による学内 LAN に切り替えられた。これにより図書システムそのものは汎用機上で運用されているが、業務系の画面および利用者向けの OPAC 画面は従来の汎用機の TSS オンライン画面から WINDOWS による GUI インタフェースのものとなり、エンドユーザ（端末操作者）の操作性が大きく向上することとなった。

また、DBMS も、従来の RDB1 から新しい XDM/RD というものに変更され、システムの機能性能とも大きく向上した。しかし、新システム移行に伴い以前のカスタマイズ機能の多くを捨て去ることとなってしまった。そのため、事前には業務遂行上の不安も寄せられていたが、運用を開始してみると不都合はほとんど生じなかった。

また、BIBLION21 移行と同時に開始された大学図書館以外の分館の業務運用であるが、これについてもほとんど問題らしい問題は発生しなかった。図書ブロックとして学内他部署の図書業務の合理的な運用に寄与することができたといえる。ただし、各分館で実行したバッチ処理の産物で帳票リストがプリンタ出力されるものについては各分館から図書館まで産物（リスト）を取りに来るという日常運用上の負荷は残った。

この新システム移行とはほぼ同時に、従来は図書資料に OCR の資料 ID ラベルを貼付していたが、それをバーコードラベルに変更した。従来からの OCR ラベルを貼付した資料を持つ分館（言語教育研究センター）と大学図書館は OCR ラベルとバーコードラベルが混在することになった。そのた

め、業務上必要なラベルの読み取り装置として、マルチリーダという高額な機器を設置することが必要となった。ただし、新たに参入した分館ではバーコードラベルのみであり、バーコードリーダを設置した。

このように BIBLION21 への移行により従来抱えていた多くの問題点が解決することとなったのであるが、この時代は短く終わることとなる。当時世間で進んでいた汎用機離れの波がようやく関西学院にも波及することとなったのである。

2002（平成 14）年の機器更新時には学院全体から汎用機をなくすという大きな方針が出された。この方針のもとでようやく事務システムも汎用機のシステムからサーバ上のシステムへの移行を余儀なくされることとなった。ここに 2002（平成 14）年度の実施に向けた事務・図書システム再構築の事業が開始されることとなる。

このようなシステムそのものの動きとは別に、学内ではシステム運用部課の統合というようなことが話題となることがしばしばあった。当時事務システムの 3 ブロック（人事・給与、財務、学生・生徒）と図書システム、および情報システム室（情報システム課を名称変更）と情報メディア教育センターというように学内に複数の情報システム運用部課が存在していた。これらについて、主に合理化の観点から運用担当者を一部署に集中して全システムの管理運用を行うようにしてはどうかというものであった。分散している同様の機能を集中化するという点では確かに合理化が進み、有意義な点があるようにも考えられる。しかし、このような議論が出る都度、図書館としては積極的ではないものの反対の立場をとってきた。それは、一口に情報システムと言っても大規模なものから小規模なものまでである。大規模なものでは、その全体を把握して運用に当たるために、当該業務とシステム仕様を熟知した担当者を専従状態で配置することが必要である。しかしながら、それまでに頻繁に経験したことであるが、情報システム室からみた図書システムというものは、おそらく詳細な業務形や仕様まではよく理解されておらず、図書館側から見ると、末端の業務遂行者のニーズを汲み取るといった配慮が欠落しがちであったことによる。ひところ明日にも組織改編かというような勢いで語られたこともあるこのような議論も、一旦立ち消えになったような

時期があった。しかし、今（2011（平成23）年度末）また大学全体の組織検討の議論の中で「情報環境機構」という組織案として浮上している。その行方は今のところ不明である。

(2) CSS WEB

2002（平成14）年～

21世紀に入ってから、世間では情報システムの動作環境として汎用機からサーバへの置き換えが進んでいた。図書システムについても同様であり、図書業務パッケージも次第に汎用機で稼働するものが数を減らし、サーバ上で動作するものが増えていた。図書館では、先に述べたように以前からサーバ上のパッケージの検討を行っていた。それでも、学内では図書システム以外の業務システムは事務汎用機上で運用されており、図書システムだけがサーバへ移行したとしても学内から汎用機をなくすことには直結しない。むしろ、汎用機とサーバが併存することとなるためシステム運用のための全体の経費を増額させることとなる。これが、図書館からのシステム変更提案を思いとどまらせる結果となっていた。

しかし、すでに1996（平成8）年11月の事務システム改善委員会が出された関西学院システム将来構想のなかでは、2002（平成14）年には学内から汎用機をなくし事務・図書システムをサーバ上のシステムとして再構築することが学院の大方針となっていた。この方針に従って、図書システムをサーバ上のシステムに変更する事業が開始された。この事業は「事務・図書システム再構築」の名のもとに進められ、図書システムの再構築についても情報システム室員をメンバーに含めたプロジェクトチームが発足し、BIBLION21の運用を開始するよりも以前の1997（平成9）年度末から図書館内で推進体制をつくってその準備に着手することとなった。

図書館では、再構築を安価に短期間で進めるために既成のパッケージシステム商品のなかから本学の図書業務にもっとも適したものを選定するということを前提とした。1999（平成11）年6月に流通していたパッケージ商品の中から、国立情報学研究所の目録システムとの連携、既存データの利用、大規模大学図書館での稼働実績等を条件として4社の製品を候補として提案

依頼を行った。そして検討の結果、2000（平成 12）年 1 月に富士通のパッケージである iLiswave を選定した。

システム選定後は本学図書館側の担当者と富士通 SE の共同作業により、2000（平成 12）年 4 月から 7 月にかけて、まずシステムの標準機能を把握した。引き続いて、システム機能と本学図書業務とのすり合わせを行い、2000（平成 12）年 8 月にはパッケージ導入の際の機能設定とやむを得ない場合のカスタマイズ実施項目の洗い出しを行った。システム要件書作成の段階でカスタマイズの規模を小さくするため本学独自の業務、運用形を極力なくすよう各業務現場に対して強く要請した。各業務現場はかなりの業務変更を行ったが、それでもカスタマイズをゼロとすることはできず、そのための開発が生じるようになった。

パッケージの標準機能の把握は、本学にテストサーバを設置し、SE から説明を受けながら操作することで理解を進めるという方法で行った。新システムは従来の汎用機上のシステムとは異なり、パラメータ設定等により、かなり柔軟に多様な機能を持たせることができた。しかし、本学の業務を最適な動作状況で運用するための設定内容にするために、かなりの労力を要した。

また、システム移行に際して、2000（平成 12）年 7 月に専任教員を対象としたアンケートを実施したところ、18 名からの回答があり、のべ 52 件の要望が寄せられた。その結果は運営委員会で報告され、可能なものはシステム仕様検討に反映させた。

続いて 2001（平成 13）年 1 月に旧システム（BIBLION21）からのデータ移行仕様を確定し、3 月にパラメータやデフォルト設定等の設計を終え、4 月から富士通 SE によるカスタマイズ作業を開始した。9 月から図書館員によるカスタマイズ部分のテストを開始し、並行して 12 月までに 2 回のデータ移行リハーサルを実施した。そのうえで、2002（平成 14）年 1 月から各分館の担当者も含めたシステム操作訓練を行い、3 月に本番のデータ移行作業を行い、4 月から新システム（iLiswave）の本運用を開始した。

新システムに移行したことにより、利用者にとっての OPAC の機能向上（OPAC 画面からの利用状況確認や予約、ILL の依頼等）が実現した。一方、業務面でも各種処理の高速化が実現され、これにより運用上の負荷軽減

が実現できた。さらに、今回のシステム移行の際にも、従来運用していた本学独自のカスタマイズのうちのいくつかをなくすこととなり、業務運用上の問題発生が危惧されていた。しかし、それらはほとんど杞憂に終わり、稼働直後のトラブルも予想をはるかに下回る少なさであった。運用開始直後から安定運用を実現できたことは、サポート業者（富士通）も驚くほどであった。そのこともあり、最初のリース契約期限満了後も iLiswave を継続して使用することを、2003（平成 15）年 5 月に決定し、2006（平成 18）年 8 月に機器更新のみを行った。

この iLiswave の 2 回目のリース期間中にはあまり特記すべきことがなく、すなわち安定運用されていたわけであるが、この期間中に次の 2 つの動きがあった。ひとつは、2008 年度から関西学院に初等部が設置されることになり、その初等部メディアセンター（図書室）に図書システムを導入したこと、もうひとつは、2009 年度の関西学院と聖和大学の法人合併に伴う聖和大学図書館のシステム対応である。

前者の初等部への図書システム導入は、関西学院内の図書業務についてシステム化の検討を行う図書ブロックに対して、検討依頼があったものである。検討にあたっては、小学校向けに開発されたシステムを使用することも一案として考えたが、費用の面から図書館と同じシステムである iLiswave を使用することにした。導入にあたっては、小学生にも使えるようにするため、OPAC の画面表示を平易な表記（例：「書名」を「書名（本のなまえ）」、「著者名」を「作者（本を書いた人）」など）に変更するといった改造を行った。

後者の聖和大学図書館のシステム対応であるが、聖和大学では丸善の CARIN というパッケージを使って業務を行ってきたが、合併するにあたって同一法人内の図書業務を合理的に運用するという観点からの検討を行った結果、聖和大学図書館でも iLiswave を使用することを合併推進本部へ推奨した。また、聖和大学には「おもちゃとえほんのへや」という幼児教育に携わる部署があり、そこでの図書業務は CARIN における分館としてシステム運用されていた。この部署でも是非、同じシステムを使用したいとの申し出があり、この部署の図書業務のシステム化も同時に実施することに

なった。聖和大学は規模が小さいこともあり、僅少な図書館員で図書館を運用してきていた。そのせいもあってか、図書システム運用に関するノウハウや自館のシステム仕様やデータ構造に関する知識を十分に保持する者がいなかった。そのため、システムの統合に関する作業負荷はほとんど関西学院側が負う形で進めざるを得なかった。そのような中で、聖和大学図書館の既存の資産（作成済目録データや貼付済ラベルなど）を有効に生かせるような統合の方式を立案し作業を行った。2008（平成 20）年 3 月頃から打ち合わせを始め、11 月にデータ移行仕様を作成し、コードやパラメータ設計、データの本番移行を 2009（平成 21）年 3 月に実施した。また、聖和大学の図書館員に本学のテスト環境を用いて操作訓練を行い、2009（平成 21）年 3 月 25 日に本番稼働を迎えた。稼働後はほとんど問題なく業務運用されている。

2010（平成 22）年のシステムリプレースは iLiswave のリース契約の 2 期目を終了することになること、また、世間でのシステムの進展の流れが CSS から WEB システムへと変わりつつあることを背景に、図書館パッケージも新しいものがリリースされ始めていた。富士通でも iLiswave の後継商品として WEB システム商品の iLiswave-J がリリースされていた。これを視野に入れた検討を 2008（平成 20）年頃から図書館内で開始した。推進体制として、図書館員 8 名と情報システム室員 2 名のチームを編成し、2008（平成 20）年 12 月にシステム要件書作成、業者提案 2009（平成 21）年 2 月末、システム決定同年 7 月という日程で開始した。提案依頼対象業者は富士通、NEC、日立製作所の 3 社とした。比較検討の結果、富士通の iLiswave-J を選択するという結論となった。これが 2009（平成 21）年 7 月 24 日の情報システム会議で承認され正式決定となった。

正式決定後はソフトウェアとしての変更点の確認等を行い、システム移行作業を行った。当初、このシステム変更は、同じ社の製品のバージョンアップ版への移行であると考えており、そのためデータ移行の作業負荷はあまり大きくならないものと想像していたが、予想外の負荷が生じた。また、このシステム移行から、これまで要望として聞いてはいたが実現できていなかった学部の部局図書室のうち希望がある一部の部局（神・法・人間福祉学部）については図書システムを使用する分館としての設定を行った。さらに、図

書室とは位置づけが異なるものの、授業が行われている大阪梅田キャンパスでも一部の貸出返却機能を使用できるようにした。その他にも、別のキャンパスで所蔵する図書資料を他のキャンパスから取り寄せる申込みや貸出期間更新を、OPAC 画面からできるようにする機能も実現できた。このようなサービス機能向上の実現の背景にはパッケージ本体の機能向上とともに情報システム室が運用する大学の認証システムを使用して図書館利用者の認証を行うことができるようになったことがある。

ところで、この 2010（平成 22）年のシステム更新を契機として、図書館所蔵資料に貼付されている資料 ID ラベルをすべて貼りかえる作業を実施することとなった。その理由は、2010（平成 22）年のシステム更新時の機器構成を検討していた際に、従来使用していたマルチリーダー（OCR ラベル、バーコードラベルのいずれも読み取り可能な機器）の製造元がこの機器の製造を終了するという情報を得たからであった。この少し前頃から、機械読み取りのための情報媒体としての OCR ラベルが使用される場が少なくなってきたおり、それに代わって IC ラベルまたはバーコードラベルの使用が主流になっていた。使われる場が少なくなった機器は製造されなくなり、OCR ラベルリーダーも流通する商品の種類が減少していた。ましてそれよりも需要が小さいマルチリーダーはさらに選択肢が少ない状況となっており、近い将来の機器調達に不安を抱かざるを得ない状況であった。そこで、図書館内でこの問題を報告し、対応を検討することとなったのである。検討すべき点は、OCR ラベルを何に変えるか、すなわち IC ラベルかバーコードラベルかということ、および、その対象の範囲と貼りかえ作業に要するコストの検討である。検討の結果、新たなラベルはバーコードラベルとし、貼りかえ対象は貴重図書など一部のものを除いた全資料とした。IC ラベルを選択しなかった最大の理由は、その耐用年数に不安があったためであった。一部の公共図書館での IC ラベルの使用事例が報告されていたが、いろいろなメーカーの話を開くかぎりでは IC ラベルの耐用年数は約 10 年とされていた。比較的短い期間で蔵書が入れ替わる公共図書館と、資料の永久保存を使命とする大学図書館ではこの点で判断が大きく異なる。10 年と言わずとも 20～30 年であっても、その程度で ID ラベルの貼りかえを余儀なくされる可能性がある

ということであれば、IC ラベルは選択し難いものであった。貼りかえ対象をほぼ全所蔵資料としたのは、近い将来自動化書庫の建設が計画されており、その入出庫の際のデータ管理のためにラベルを読み取ってデータ入力を行うのであるが、そのためにはバーコードラベルが表紙の外側に貼付されていれば効率的に作業が行えることが、まずあった。さらに、多くの図書館で既に導入されている自動貸出返却機を本学でも導入することとなった際に、ラベルの種類（OCR ラベルは不可）と貼付位置（表紙の外側）が条件となることが明白であったためであった。ほぼ全所蔵資料を対象とする計画となったため、作業対象冊数は約 110 万冊となった。全体の費用を抑えるため、ラベル作成には市販のラベル紙を用い、ラベル作成プログラムは日常の保守サポートを行っている SE に作成を依頼することできわめて安価に抑えることができた。しかし、貼付作業の人件費を新たに予算化することは困難であり、貼付作業は図書館員（主にアルバイト職員）で行うこととした。着手順位は雑誌や参考図書等の貸出対象外のものの優先順位を低くし、日常の貸出が多いものから着手した。ラベルの貼付位置を外側にしたことで、日常の貸出手続きの中のラベル読み取りの際に、わずかずつではあるが所要時間の短縮にもつながった。このラベル貼付作業を 2010（平成 22）年 10 月に開始したが、最初は全件完了まで 5～6 年と見積っていた。しかし、実際に開始してみると予想を上回る進捗速度で進んでおり、2012（平成 24）年 3 月末で約 70% が貼付済となった。このままの進行速度でいけばおそらく 3～4 年で完了するものと考えている。

以上、2011（平成 23）年度までの状況を記してきたが、情報システムは日々新しくなっていくものである。現在も 2014（平成 26）年度に訪れるリース期限に向けたシステムの見直しが予定されており、館内ではその準備に着手しようとしているところである。

10 整理－システム化の進展と整理業務の変化

(1) カード目録の廃棄

カード目録のうち、書架カード目録については、2000（平成 12）年に分

置図書分以外を凍結した。さらに、2002（平成14）年には分置図書分も作成を中止した。そして、2006（平成18）年には、図書館に配架している図書の利用者用カード目録はすべて廃棄した。図書館の中心に配置され、図書館の心臓のように扱われていたカード目録の廃棄は、目録作成業務こそ図書業務の中心であり、図書館は利用サービスより資料の保存が大事であると考えられていたかつての図書業務が、利用サービスを中心とする図書業務へ移行してきた時代の流れを証言しているようである。

（2）分類業務の変遷

本学の分類番号は、DDC 16 版を骨格として日本の大学図書館に適合するよう改変されたものであり、本学独自の分類番号といえる。この分類番号は、社会の変化に沿った形での改訂が重ねられたが、分類体系の考え方は当初のまま維持されてきた。分類業務は判断業務であり、過去の分類番号との整合性が求められる。そこで、分類担当者は、歴代の分類担当者が使用し、分類付与上、参考となる情報が書き込まれている冊子体の分類表を使い、さらに、分類付与のルールとなる約束ごとをまとめた「分類規程」を作成して、分類番号付与時に、過去からの分類との整合性の確保を意識しつつ作業してきた。現在も、この分類体系を維持している。

かつての分類担当者の業務は、分類番号を付与するために、その図書の主題を読み取り、手元に持っている冊子体の分類表のなかから分類番号を選択し、その図書の分類番号を付与するという業務であった。しかし、現在では、分類担当者の業務は、その図書の主題を読み取るのではなく、インターネット等で公開されている書誌ユーティリティに含まれている書誌分類（LCC、DDC 22 版、NDC8 版等）を参考にして分類番号を付与するという業務に様変わりしてきている。もちろん、すべての図書の書誌データが公開されている訳ではない。分類担当者の主題を読み取る能力は現在においても必要な能力であるが、むしろ、過去の蔵書に与えられた分類番号との整合性をもった分類番号の付与が大きな業務内容になってきている。

2001（平成13）年3月には、書誌ユーティリティから提供される書誌分類を参考にして、本学独自の分類番号を付与するために、NDC 9 版および

DDC 21 版との変換表が作成された。変換表の作成当初（1987（昭和 62）年）は、冊子体の変換表で変換作業を行い、本学の分類番号との整合性を判断していた。2001（平成 13）年からは、図書システム内に変換表を持つことによって、自動変換を可能としている。自動変換が可能となり、業務の省力化に繋がったが、最終的に分類番号を決めるのは、やはり分類担当者である。DDC 分類と NDC 分類の体系の違い、また、DDC 分類と本学独自の分類との体系の違いは、分類担当者の主題を読み取る能力をやはり必要としている。

また、分類番号とともに、請求記号を構成する受入一連番号は、1949（昭和 24）年 3 月に著者記号法から受入順記号法に変更以来、カードによる管理を行ってきた。その後、図書システムの導入に伴って、2001（平成 13）年度より、パソコン内に受入一連番号管理ソフトを作成したことで、今では自動採番が行えるようになっている。この自動採番システムは、WEB 上で利用でき、本学の目録作成業務を受託している業者も、インターネットを利用しての自動採番が可能になった。それにより、業者委託による目録作成業務が効率的に行えるようになっている。

分類番号については、社会状況の変化により、コンピュータ、情報科学や環境問題に関する図書が多く出版され、図書館への登録数も増加してきたことから、2000（平成 12）年に、これらの分野に関する分類番号を展開し、実情に合う番号に改変した。

(3) 外部委託による整理の拡大

ア 経常図書（和書）

1988（昭和 63）年度から、関学生協・TRC に委託していた一般図書（和書）の整理は、2002（平成 14）年度からは委託先が紀伊國屋書店に変更になった。1997（平成 9）年度から導入していた書店システムを紀伊國屋書店の Platon に統一し、紀伊國屋書店へ発注することにより、発注データを業者に入力させることができるようになった。その結果、業務の効率化が可能となり、また、発注から納品までのデータ管理が一元的に行えるようになった。

上記のように、発注先、委託先が紀伊國屋書店に変更となっても、選書には TRC の「週刊新刊全点案内」を利用し、現物は、紀伊國屋書店の新宿店から調達し、データは、国立情報学研究所フォーマットで納品させるなど、基本的な考え方は変わっていない。

イ 収書計画等の特別予算購入分

図書館の経常図書費以外の予算で購入される図書は冊数も多く、図書館員による整理冊数の限界を超えている。これらの図書は、予算、購入先が同一であるなど、所蔵項目の一部が固定でき、入力ミスが発生しにくいいため、外部委託が容易である。このため、これらの図書については、外部委託で作成することが多い。現物図書の発注先にデータも作成させており、関学生協（データ作成は TRC）、丸善、紀伊國屋書店の 3 社に委託していた。2002（平成 14）年以降の委託先は主に紀伊國屋書店、システムズ・デザイン社（主に寄贈本）の 2 社である。

以下、委託整理した主なものを挙げる。

（ア）収書計画

新大学図書館では、学内の図書資料の図書館への集中化をはかるとともに、資料の充実のため、グランドオープン前から収書計画が立てられ、順次実施していった。これについては、紀伊國屋書店と、関学生協・TRC の 2 業者によりデータ作成を行った。

（イ）学部増設等

総合政策学部の設置、学科増設、司法研究科等の設置に向けて購入が決定された図書も外部委託で整理している。特に、総合政策学部等の新学部設置については、文部省への設置申請等の関係で、他大学で実績のある紀伊國屋書店を委託業者として選定した。一部、新書・文庫や視聴覚資料について関学生協・TRC や丸善に委託したものもあるが、ごくわずかである。

（ウ）特別図書

特別図書費購入分は、以下の場合のように、冊数が多いものについては、委託整理を行っている。

- ・ 1991（平成 3）年度 ミュンヘン大学ニーシュラク教授私蔵ドイツ
経営経済学関係文庫 3,076 冊
- ・ 1992（平成 4）年度 内藤湖南蔵書(甲骨金文学コレクション)1,838 冊
- ・ 1996（平成 8）年度 新大学図書館開館記念コレクション（イギリス
社会政策コレクション 439 冊、イギリス社会
科学古典資料コレクション 300 冊）
- ・ 2003（平成 15）年度 マックス・プランク研究所長モスラー教授旧蔵
書（国際私法コレクション 626 冊）

（エ）寄贈図書ほか

まとまった冊数で寄贈を受けたものなども委託整理を行っている。

- ・ 2001（平成 13）年度 下村寅太郎蔵書 9,295 冊
- ・ 2003（平成 15）年度 小島達雄本学名誉教授フランス現代演劇関係
図書 3,096 冊

現在では、経常図書費以外の購入図書や寄贈図書については、まず委託整理を考えるようになっている。経常図書費購入分図書については、館内整理の割合は 40% 前後であり、冊数としては館内での整理冊数が 20,000 冊～25,000 冊で推移している。国立情報学研究所の総合目録データベースをはじめ、各種の書誌データが整備されてきており、また、他大学図書館の委託整理の状況を考えると、委託による図書資料の整理は今後ますます拡大していくものと考えられる。

なお、国立情報学研究所の遡及入力事業に本学も以下のとおり採択され、委託により遡及入力が行われた。

- ・ 2004（平成 16）年度 栗野文庫、柴田文庫 2,048 冊
- ・ 2005（平成 17）年度 梅田文庫 1,699 冊
- ・ 2006（平成 18）年度 海道蔵書 7,328 冊
- ・ 2007（平成 19）年度 佐藤文庫 973 冊

11 館員育成－めまぐるしい変化の時代に対応できる図書館員の育成

図書館員に求められる能力は、大学図書館をめぐる状況の変化に応じて変わっていく。大学図書館が大学の教育研究活動を直接的に支援するという基本的な役割を担うためには、大学や大学図書館をめぐる状況に的確に対応できる人材を育成していかなければならない。館員育成のために、私立大学図書館協会などの全国的な組織から地域の大学や機関に至るまで、あらゆるレベルの組織との協力のもとで、研修会等への参加を推進してきた。

恒常的に研修会への参加をしている機関としては、私立大学図書館協会（全国、西地区部会、阪神地区協議会）、国立情報学研究所、兵庫県大学図書館協議会、大学図書館近畿イニシアティブ、関西四大学図書館職員研修会が挙げられる。これらの機関で実施されている職員研修については積極的に参加している。これら以外に、図書館等職員著作権実務講習会、西洋社会科学古典資料講習会など、また他大学が主催する実務講習会や出版社主催のセミナー等にも積極的に参加し、館員育成をはかっている。

国立情報学研究所の教育研修事業としては、講習会、専門研修、実務研修がある。このうち、講習会には、目録システム講習会（図書、雑誌）、ILLシステム講習会があり、これら講習会には、ほぼ毎年受講生として課員（派遣職員を含む）を積極的に参加させている。また、専門研修の大学図書館職員短期研修には、配属されて2年目程度の若手職員が在籍している場合は、必ず受講をさせている。さらに、実務研修では、目録データベース実務研修（2006年9月25日～10月6日）に派遣したりした。

私立大学図書館協会では、1998（平成10）年度から、国際図書館協力委員会を設置し、海外研修を実施している。本学からは、2005（平成17）年度海外集合研修として、10月23日から30日までの期間、魚住英子利用サービス課主任が米国イリノイ大学モータンソン・センターに派遣され、アメリカの大学図書館の現状についての調査を行った。また、2008（平成20）年度には、12月8日から12日までの5日間、角田貴彦運営課員が韓国ソウ

ルの大学図書館、国立図書館、公立図書館の視察に参加した。

12 対外業務－図書館界の連携強化と連携チャンネルの多様化・大規模化

(1) 関西四大学図書館長会議による相互協力関係の維持

旧図書館時代の1994（平成6）年に、関西四大学図書館職員の研修会で、関西四大学図書館間での図書資料の相互利用に関して「関西四大学図書館相互利用マニュアル」が作成された。この「関西四大学図書館相互利用マニュアル」は、1998（平成10）年には、「相互利用協定」、「相互利用に関する申し合わせ事項」、「館長会議規約」、「研修運営要項」など、関西四大学図書館間の相互協力に関わる資料を含めた「関西四大学図書館相互利用ハンドブック」として改訂された。その後、この「ハンドブック」の改訂に関わることや相互利用の実務担当者間での連絡および情報交換の場として、毎年「相互利用担当者会」が開催されている。

2000（平成12）年の館長会議では、合宿研修と研究会から成っていた研修会を、合宿研修、一日研修、研究会の3つの開催形式に変更することが決定された。2007（平成19）年の館長会議では、研究会のあり方について検討し、研究会を研修会の中に含めることが協議された。そして、関西四大学図書館職員研修会は、合宿研修と1日研修で開催されることになった。

(2) 兵庫県大学図書館協議会による地域連携

毎年2回開催されていた総会は、1984（昭和59）年度からは年1回となり、1990（平成2）年度の第89回総会は本学で開催した。2002（平成14）年度からは全日開催していた総会を、開催館の負担を軽減するために、半日開催とすることになった。

1988（昭和63）年度からは、幹事館に代わって会長館、副会長館、監査館が置かれ、任期は3年となった。関西学院大学図書館は、この時から現在に至るまで副会長館を担当している。また、同時に研修事業を企画する企画委員会が設置され、副会長館もこの委員会の構成館になっている。関西学院

大学図書館は、企画委員館として多くの研修事業を企画・運営した。

2001（平成13）年には、兵庫県大学図書館協議会総会第100回記念講演会が実施された。また、この年は、「ホームページワーキンググループ」と「相互利用手続きの簡素化ワーキンググループ」の設置が総会で承認され、各ワーキンググループで検討に入った。本学からは、それぞれのワーキンググループに図書館員を派遣した。そして、検討の結果、「ホームページワーキンググループ」で検討された協議会ホームページは、2001（平成13）年から、神戸大学附属図書館 WWW サーバを使用して公開された。また、「相互利用手続きの簡素化ワーキンググループ」では、加盟館相互の利用を促進するために、相互利用手続きの簡素化について検討された。これについては、2002（平成14）年の総会において、「資料相互利用に関する細則」および「資料相互利用実施要領」の改定が承認された。

また、2002（平成14）年には、今後の研修会等のあり方を検討する「研修会等検討ワーキンググループ」が発足し、本学からも委員として参加した。これは、1990（平成2）年から国立情報学研究所と神戸大学附属図書館が実施し、協議会の研修会として位置づけてきた「目録システム地域講習会（図書コース）」が2003（平成15）年から実施されないことになっていたからである。このワーキンググループは、2003（平成15）年5月に「兵庫県大学図書館協議会における今後の研修会等の在り方について（報告）」を会長館に提出し、この報告は、企画委員会で検討され、総会に諮られた。総会では、研修会等の事業を加盟館全体が支えていくことと、ワーキンググループ報告で提案された企画・運営方式の採用が決定された。この方式は、研修会等については、企画委員館6館のうち大規模館と中小規模館の2館の組み合わせで、毎年2館が3年の任期期間中担当するというものであった。現在もこの方式で研修会が運営されている。

さらに、2008（平成20）年には、新たな事業として海外派遣事業が企画された。また、機関リポジトリの構築支援についての検討も行われた。このように、協議会活動はさらに活発になっており、兵庫県下の大学図書館の連携は今後もさらに深まっていくものと考えられる。

2011（平成23）年の協議会には、38大学、8短期大学の計46館が加盟し

ている。役員館は、会長館・神戸大学、副会長館（会計館を兼務）・関西学院大学、監事館・武庫川女子大学である。また、企画委員館は、国公立大学から神戸大学、神戸市外国語大学の2校、私立大学から関西学院大学、甲南大学、神戸女学院大学の3校、短期大学から神戸女子短期大学の1校で構成されている。任期は2009（平成21）年から2011（平成23）年の3年間である。

このように兵庫県大学図書館協議会は、1947（昭和22）年に阪神間図書館協議会の学校部会として発足し、1950（昭和25）年に兵庫県大学図書館協議会と名称変更して、今日に至っている。協議会は、国公私立、また、四年制、短期大学の種別を問わず、兵庫県内に設置されている大学図書館、短期大学図書館であれば加盟可能な地域密着型の図書館間連携協力組織である。最近では、岡山県、埼玉県、千葉県、愛媛県などに、このような設置種別を問わずに加盟できる協議会が設立されている。しかし、戦後すぐに発足したという歴史を持っている協議会は、兵庫県大学図書館協議会だけである。協議会は、大学図書館の管理・運営に関して、連絡・協議・調査研究を行い、大学図書館の充実・発展に期することを目的とし、現在でも年2回開催される研究会・研修会等が協議会活動の中心的事業となっている。

このような歴史ある協議会の設立に関わり、またその後の活動においても中心的な働きをして今日の協議会の基盤を作上げた関西学院の先人たちに敬意を表したい。

（3）公私立大学図書館コンソーシアム（Private and Public University Libraries Consortium：PULC）の設立

PULC は、電子ジャーナル、データベースの利用環境の拡充、およびそれに伴う契約交渉の効率化や負担軽減のために、2003（平成15）年に設立されたコンソーシアムである。

このコンソーシアムは、Elsevier Science 社からの資料購入に関わる問題から発生した。私立大学図書館協会が、Elsevier Science 社刊行の電子ジャーナル Science Direct の価格体系を不当な価格設定であるとして、過払金の返還を求めて、Elsevier 社と直接交渉を繰り返した。そして、最終的には、2000（平成12）年12月に、日本医学図書館協会、日本薬学図書館協

議会とともに、Elsevier 社の一連の不当な販売行為について独占禁止法違反の疑いを公正取引委員会に対して申し立てたのである。しかし、2002（平成14）年7月に、それが独占禁止法違反に当たらないとの判定が出された。この間、Elsevier 社との交渉において、2002（平成14）年にリリースされた Science Direct の価格体系等について、いくらかの版元の譲歩を引き出した。

また、同時期に、国立大学図書館協会から早稲田大学に ISI 社の Web of Science 導入に関連して、価格交渉の枠組みの中に私立大学図書館から参加する可能性について打診があった。また、私立大学図書館における図書館コンソーシアム形成についても早稲田大学、慶應義塾大学に打診があった。そこで、既に、ISI 社の Web of Science を導入していた私立大学5機関（早稲田大学、慶應義塾大学、東京慈恵医科大学、関西大学、九州産業大学）により、新たな枠組みによるコンソーシアム契約についての協議を、2001（平成13）年1月より開始した。2002（平成14）年10月には、ISI 社と私立大学18機関とのコンソーシアム契約が成立した。

さらに、(社)私立大学情報教育協会による新たな補助金制度の創設により、電子ジャーナル、データベース導入に関わる私立大学図書館の連携を強化していく必要があった。

このような背景のもとで、早稲田大学図書館から関西学院大学図書館に協力の打診があり、関西四大学図書館担当者との調整に入った。その結果、2003（平成15）年5月に、早稲田大学図書館が主体となり、当面、関東地区では早稲田大学、慶應義塾大学、関西地区では関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学を軸として、さらに ISI 社の Web of Science に関わるコンソーシアム参加機関を加えて、電子ジャーナル、データベース導入に関わる私立大学図書館コンソーシアムの形成を、全国の私立大学に対して呼びかけることになった。具体的には、2003（平成15）年7月1日に、私立大学図書館協会加盟館に対して「電子ジャーナル・データベース導入にかかる私立大学図書館コンソーシアムの形成について」の文書が配布され、参加を希望する機関を募った。同時にコンソーシアム形成に関わった8校（関西大学、関西学院大学、九州産業大学、慶應義塾大学、東京慈恵医科大学、

同志社大学、立命館大学、早稲田大学）の図書館は、Oxford University Press、Blackwell 社、Wiley 社との交渉に入り、10 月には、その交渉結果を私立大学図書館協会加盟館に知らせることによって、コンソーシアムへの参加を促した。そして、2004（平成 16）年度には、私立大学図書館コンソーシアムを PULC（Private University Libraries Consortium）と呼称することを決め、幹事校を置き、幹事校が事業の執行を分担して行うこととした。こうして、在京の幹事校には明治大学、法政大学が加わり、関東の 5 校と関西の 4 校、計 9 校で活動することになった。

具体的には、版元との交渉については関東の幹事校が、参加校の版元別購読実態調査については関西の幹事校が担当することになった。2004（平成 16）年度の交渉対象の版元は、Elsevier、Wiley、Blackwell、Springer、Kluwer、Bio-One、Uni-Bio Press であった。また 2004（平成 16）年 6 月時点での参加校数は、83 校であった。版元からの提案内容の説明会については、2004（平成 16）年 11 月に関東地区では早稲田大学で、関西地区では関西大学で開催した。この版元説明会は、毎年関東地区と関西地区で 1 回ずつ開催され、2005（平成 17）年度は、関西地区では関西学院大学大阪梅田キャンパスで行った。2006（平成 18）年度からは、公立大学もコンソーシアムに参加するようになり、2006（平成 18）年度 5 月時点の参加校数は、私立大学 139 校、公立大学 10 校となった。また、2006（平成 18）年度からは、全体会を年 1 回開催して、参加校の意見聴取の機会を設けることとなった。2007（平成 19）年度は、関西学院会館で全体会を開催した。交渉する版元も、海外の版元だけでなく国内の版元も含むようになり、2010（平成 22）年度には、35 社を数えるようになった。こうして、2010（平成 22）年度末の参加校は、392 校（うち公立 57 校、その他大学校 2 校）に増加して、巨大なコンソーシアムになった。

PULC は、国立情報学研究所と国立大学図書館協会（JANUL）との連携により、電子ジャーナル・バックファイルや人文社会科学系オンライン電子コレクションの整備を行い、比較的安価な条件での契約を加盟館に提示してきた。本学も、それらの学術コンテンツを購入することによって学術基盤の整備を進めてきた。

その後、2011（平成23）年4月には、国立情報学研究所と国公立大学図書館協力委員会との間における連携・協力の推進に関する協定書が取り交わされた。この協定書にもとづいて、バックファイルを含む電子ジャーナル等の確保と恒久的なアクセス保障の整備に向けて、国立大学図書館協会（JANUL）コンソーシアムと PULC とを統合した新コンソーシアムとして、大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE: Japan Alliance of University Library Consortia for E-Resources）が発足した。

（4）大学図書館コンソーシアム連合（Japan Alliance of University Library Consortia for E-Resources: JUSTICE）の結成

今日の学術研究は、電子ジャーナルなしでは成り立たない状況になっている。また、電子ジャーナルを提供する海外大手出版社の市場寡占が価格の高騰を招いている。その一方、大学図書館の図書費については削減等の厳しい状況にあることから、既述のとおり、電子ジャーナルの値上がりに対応するために国立大学、公私立大学ではそれぞれコンソーシアムを形成し、海外出版社との交渉によって価格上昇に歯止めをかけることに一定の成果を上げてきた。さらに、出版社との交渉力を強化するために2つのコンソーシアムの連携に至り、新しいコンソーシアムの形成にも結びついた。

2011（平成23）年4月に発足した大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）は、国立情報学研究所と国公立大学図書館協力委員会との間に締結された協定書にもとづき設置された「連携・協力推進会議」の下に置かれている。この運営のために「運営委員会」と「作業部会」が設置されており、事務局は、国立情報学研究所の学術基盤推進部内に設置された図書館連携・協力室が担当している。このコンソーシアム連合が PULC と JANUL コンソーシアムを統合した形になっていることから、PULC 幹事校であった本学も引き続きその運営に関わることになり、JUSTICE 運営委員会委員となった。2011（平成23）年度は、それぞれのコンソーシアム活動のコンソーシアム連合への移行期間として位置づけられた。

JUSTICE は、国立情報学研究所学術基盤推進部内の事務局、および JANUL コンソーシアム事務局の東京大学、PULC 事務局の早稲田大学か

ら、当面の人的協力を得て発足している。今後の安定的・持続的な運営体制を確立するために、組織のあり方、財源・人員確保等の検討が喫緊の課題となっている。

(5) 大学図書館近畿イニシアティブの設立

大学図書館近畿イニシアティブは、近畿地区にある国公立大学図書館の協力組織として2005（平成17）年6月21日に設立された。

その設立は、2004（平成16）年4月の国立大学図書館協会近畿地区協会総会において、近畿地区における国公立大学の相互連携の必要性が確認されたことに端を発する。京都大学、神戸大学が、同年の9月に、私立大学図書館協会西地区部会京都地区協議会理事校等（福井工業大学、同志社大学、佛教大学、立命館大学、同志社女子大学）および阪神地区協議会理事校（姫路獨協大学）とともに、国公立大学図書館の近畿地区協力組織立ち上げに関する打ち合わせ会を開いた。その際に、私立大学は、両地区協議会の総会で了承を得てから進めることを確認した。京都地区協議会は、2005（平成17）年4月の協議会で協力組織への参加を了承した。阪神地区協議会は、2005（平成17）年2月の定期総会で協力組織への参加を承認した。このことにより、2005（平成17）年4月28日に、近畿地区大学図書館委員会（仮称）設立準備会（第1回）が、同志社大学において開催された。設立準備会に出席した大学は、国立大学から京都大学、大阪大学、神戸大学、公立大学から大阪市立大学、大阪府立大学、私立大学からは京都地区協議会加盟館の立命館大学、同志社大学、阪神地区協議会加盟館の関西大学、関西学院大学であった。2回の準備会を経て、近畿地区における国公立大学図書館の新たな協力組織として「大学図書館近畿イニシアティブ（略称：近畿イニシア）」が6月21日に発足した。近畿イニシアの設立母体は、「国立大学図書館協会近畿地区協会」、「公立大学協会図書館協議会近畿地区協議会」、「私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会」、「私立大学図書館協会西地区部会京都地区協議会」の4つの組織（2009（平成21）年6月からは「私立短期大学図書館協議会近畿地区協議会」も加わり5つの組織）である。運営委員校、ならびに主な事業である能力開発に関わる専門委員会や広報・WEBに関わる

専門委員会の委員は、これらの参加母体から選出されている。本学図書館は、阪神地区協議会から運営委員校として選出され、発足時から2012（平成24）年5月まで担当した。また、運営委員会から能力開発専門委員会の専門委員に指名され、2012（平成24）年5月まで担当した。

近畿イニシアでは、主な事業である図書館職員研修を実施している。研修事業は、2005（平成17）年度から実施され、「初任者研修」、「中級研修」をほぼ隔年で行い、「初任者研修」には、本学図書館からも図書館員を講師として派遣している。2005年度の「初任者研修」では、「閲覧・参考・ILL 業務について」の講師として市河原雅子利用サービス課長を派遣した。続く2006（平成18）年度も、「閲覧・参考・ILL 業務について」の講師として、有川浩神戸三田キャンパス大学図書館分室主任、2008（平成20）年度は、「目録・分類」の講師として、澤村裕運営課主任、2010（平成22）年度は、「情報リテラシー教育」の講師として、魚住英子利用サービス課主任が派遣されている。また、2005（平成17）年度の研修は、本学の大阪梅田キャンパスで実施された。

（6）私立大学図書館協会との不断の連携

私立大学図書館協会国際図書館協力委員会（国際協力委員会）が、1998（平成10）年10月1日に同協会内に設置され、2004（平成16）年度までの期間、本学図書館から委員を派遣した。また、2001（平成13）年5月11日にはデューク大学図書館担当教務副部長兼図書館長のデイヴィッド・S. フェリエロ氏を迎え、国際協力シンポジウム（テーマ「学術図書館環境における協力と連携：成功への鍵」）を本学図書館ホールで開催した。また、2011（平成23）年度と2012（平成24）年度には、再度、本学図書館から国際協力委員会に委員を派遣している。

また、2006（平成18）年度には、第67回私立大学図書館協会総会・研究大会を本学で開催した。西宮上ヶ原キャンパスB号館を会場として、2006（平成18）年9月7日～8日に開催し、全国の加盟館486館のうち222大学から375名の参加があった。メインテーマに「今、新たな大学図書館のミッションを考える」を掲げ、総会、竹本洋本学経済学部教授による記念講演、

研修報告、永田治樹筑波大学大学院教授、中元誠早稲田大学図書館総務課長、片山淳京都大学附属図書館情報サービス課長らによる講演やパネルディスカッション、図書館見学、展示など多彩なプログラムを実施した。

協会では、加盟館の図書館員のうち、図書館学の研究・調査、または大学図書館の経営管理において顕著な業績を残した者、もしくは経営管理的な手段を通じて大学図書館の向上発展に顕著な寄与をなし、または協会活動に多大な貢献をした者に対して、協会賞を授与している。本学図書館からは、この協会賞の審査委



私立大学図書館協会総会・研究大会



私立大学図書館協会総会・研究大会会場

員会に、2007（平成 19）年度から委員を派遣している。また、協会関連団体の国公立大学図書館協力委員会「大学図書館研究」編集委員会委員にも、2007（平成 19）年度から 2011（平成 23）年度まで委員を派遣した。このように、本学図書館は、私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会の古参の加盟館として様々な活動を行っている。

（7）国立情報学研究所目録システム地域講習会（図書コース）の開催

本学図書館では、2003（平成 15）年度から毎年、本学を会場として、国立情報学研究所の目録システム地域講習会（図書コース）を国立情報学研究所との共催という形で開催している。この講習会の目的は、国立情報学研究所の総合目録データベース形成事業のための要員育成であり、全国の国公立大学図書館員のための講習会である。

2002（平成 14）年春頃に、事務部長が、私立大学図書館協会の会合で、会長校であった明治大学から、私立大学の開催校として本学での開催の打診を受けた。当時、この地域講習会の開催校を、私立大学でも引き受けるところが複数あった。2002（平成 14）年までは、明治大学、関西大学でも開催されてきた。しかし、この講習会も、年を経るにつれて、開催校になり得るような規模の大学においても、積極的に開催を引き受ける大学が少なくなり、2003（平成 15）年度からは、私立大学での開催校がなくなることが確実となっていた。また、近畿圏は、特に受講希望者と講習会の受講定員の差（需給ギャップ）が大きい地域であった。さらに、地域講習会から神戸大学、関西大学が撤退することが判明していた。そのため、受講の需給関係がタイトなものになることが懸念された。そのような背景のもとでの本学への開催打診であった。

この打診があったとき、館内では「本学にそのような講習会を開催できるだけのパワーがあるのか？」という不安があった。そこで、開催経験がある関西大学図書館へ事情を聴く等して検討した結果、本学での開催が十分可能であると判断し、2002（平成 14）年 11 月 11 日の館長室会で 2003（平成 15）年からの開催を決定した。開催にあたって、国立情報学研究所に協力依

頼を行い、その仲介により京都大学で開催されている同コースに、オブザーバとして本学図書館員3名が参加できることとなった。そこでは講習会の開催実態を見学し、運用上のアドバイスを得ることができた。

国立大学の間では緊密な横のつながりがあり、講習会講師の人員融通も行いやすい。しかし、私立大学が一枚だけで新たに開催する際には、たとえ人員の融通ができたとしても、単なる員数合わせに終わることが懸念された。そこで、会場運営から講師の確保まで独力で行うことに決めた。当時、京都大学の図書館員で本学との窓口の役割を担っていた方から、「初めての開催を、すべて独力で行われることに驚きと尊敬の言葉をお送りします」というメッセージを受け取ったこともあった。

講習会そのものは、初回は、夏季休暇中に社会学部のパソコン教室を借用して開催した。当時、図書館内にこのような講習会に適した施設がなく、図書館から最も近い建物にある開催可能な場所としてこの施設を借用したのであった。そのパソコン教室は、空調の効きが悪く、パソコンから発せられる熱のせいで夏なのに暖房が利いているような非常に劣悪な環境であり、受講者には大変申し訳ない講習会となった。そのような悪条件を少しでも解消するために、ペットボトルで水を凍らせたものをいくつか置き、それに扇風機の風を当てて冷風を送るなど工夫を行った。今に至る関学講習会のホスピタリティが評価される最初の機会となった。2004（平成16）年度からは、図書館内にパソコンを使った講習会に適した部屋（グループ閲覧室）が整備され、図書館内での開催が可能となった。

また、2007（平成19）年からは、受講者や講師の間のコミュニケーションを円滑にすることを目的として、懇親昼食会を企画・実施するようになり、講習成果の一層の向上につながった。

しかし、近年、図書館運営の合理化の名のもとに、各大学で図書館業務の委託が行われるようになっており、また、業務委託でなくても、派遣職員により業務運用を行う図書館が多くなっている。このような中、当講習会の受講者も、各大学の専任職員の比率が年々低下し、最近ではその比率が2割以下という状況になっている。また、国立情報学研究所の目録システムに関する講習を行うことが本来の目的であるが、目録システムの知識の習得以前に



目録システム地域講習会

持っていなければならない目録業務の知識がほとんどないに等しいような受講者に対して、目録規則自体を教えるような場面も少なからずある。講習会開始初期には、専任職員以外の受講希望があれば、それを例外として認めるか否かが議論されていたような時期があったが、今では派遣会社や業務請負会社の社員に対するトレーニングの場となっている面もあり、講習会を担当している職員からは、開催館を引き受けることに対する疑問が呈されることが多くなってきた。

このように、各参加館での目録業務の実施体制が大きく変化し、目録担当者のスキルの全般的な低下がみられる。その結果として、国立情報学研究所では、重複書誌レコード増加など、書誌データベースの品質劣化が危惧されるようになった。そこで、同研究所では、2005（平成17）年に、講習会開催に積極的に関与してきた大学の図書館からメンバーを募り、「目録所在情報サービスを対象とする講習会に関する検討ワーキンググループ」を組織して、講習会の改善について検討することとなった。これに、本学からも図書館員を派遣した。2007（平成19）年以降は、当ワーキンググループの成果を反映して、受講生のための自習用ツールとして、インターネット上での学習教材であるセルフラーニングシステムが開発された。また、講習会のカリ

キュラムも徐々に改善されてきている。

以上のような状況のなか、本学での講習会は毎年 25 名の定員いっぱいの受講者を集めて好評裏に開催してきている。

13 神戸三田キャンパス大学図書館分室－新しい図書メディア館の開設と整備

(1) 神戸三田キャンパス第 2 期整備計画の実施

理学部の神戸三田キャンパスへの移転に向けて、神戸三田キャンパス第 2 期整備計画が実施された。総合政策学部棟のⅢ号館が建設され、その建物の 1 階および 2 階の約半分を利用して、新しい図書メディア館が開設された。Ⅱ号館の図書室からは、2001（平成 13）年夏に引越しを行った。新しい図書メディア館は、旧図書室とは異なり、図書メディア館の入館ゲートの中にメディア・フォーラムを併設し、資料との接近がはかられた。ほとんどの閲覧座席には情報コンセントが配備された。また、パソコンの利用相談や周辺機器貸出を行うコンピュータ利用相談カウンターも設置された。このカウンターには、専門のスタッフが開館時間中常駐して、利用者の様々な質問に対応できるようになっている。2001（平成 13）年 9 月からは、西宮上ヶ原キャンパスから移転してきた理学部（2002（平成 14）年度から理工学部に変更）も、そのサービスの対象となった。西宮上ヶ原キャンパスの理学部で所蔵していた図書資料、および西宮上ヶ原キャンパス大学図書館に所蔵していた理工学関係の資料が、図書メディア館に移され配架された。移設した図書は、38,918 冊、製本雑誌は 34,849 冊であった。図書メディア館は、大学図書館分室担当者と情報システム室分室担当で事務体制が構成された。2001（平成 13）年夏に移転した理学部も、神戸三田キャンパスでは学部図書室は持たず、西宮上ヶ原キャンパスにあった理学部図書室の機能は神戸三田キャンパス図書メディア館が担うことになった。移転前の理学部では、研究室単位で図書室入室用鍵を持っており、図書室が閉室している時間帯も利用可能であった。神戸三田キャンパスでも図書メディア館の閉館時にも図書資料が利用できることが条件のひとつであった。そこで、図書メディ

ア館では、開設時から24時間利用ゾーンとして、カレント雑誌、製本雑誌、参考図書、コピー機を配備したエリアを設けた。また、閉館時のみ利用できる出入口を設置した。理工学部および総合政策学部の専任教員には個人用のカードキーを配布し、理工学部の研究室にも専用のカードキーを配布した。これを用いることによって閉館時の入館を可能とした。また、カードキーは、Ⅰ号館とⅣ号館警備室にも備え付けられており、学部生（特に4年生）や院生も、申し出によりカードキーを使用することができた。この出入口にはBDSや防犯カメラを設置し、警備室に繋がるインターホンを配備してセキュリティの確保に努めていた。

(2) 神戸三田キャンパス第3期整備計画の実施

神戸三田キャンパスは、第3期整備計画のもと、2009（平成21）年4月の総合政策学部、理工学部の学科増設および学科改組により、完成年次（2012（平成24）年度）には約800人の学生増が見込まれ約4,700人規模のキャンパスになる。この学生数の増加に対応し、閲覧環境を維持していくため、大学図書館分室およびメディア・フォーラムを拡充整備する必要があった。そのため、図書メディア館は、Ⅲ号館からキャンパス中央に新しく建設する共用棟（のち、Ⅵ号館と名称変更）2階～4階部分（4階建て）への移転が決



図書メディア館のあるⅥ号館

まった。これを受けて、2009（平成 21）年 2 月～3 月、2 度目の引越しが行われた。また、開架書架、電動式集密書架とも増設され、資料の収容可能冊数はそれまでの 1.5 倍（約 40 万冊）となった。書架の増設とあわせて、蔵書を充実し展示方法も工夫した。利用者の興味を惹くために、4 階階段近くの低書架に特定テーマの資料による専用コーナーを設けて、「総合政策学部 100 冊」、「先生のおすすめの本」、「新聞書評掲載図書」、「レポート・論文作成関連図書」などが設置された。また、学部生の読書意欲を高めるために、3 階壁面書架には新書・文庫を集中配架し、新潮文庫を新たに追加した。

座席数も 528 席に増え、それらのうち個人学習用のキャレルは以前の 3 倍近い 54 席が用意された。館内は無線 LAN に対応していて、閲覧座席にはコンセントが設置され、ノートパソコンの利用にも対応できる。館内 3 階にはメディア・フォーラムを設置し、約 110 台のパソコンの利用やパソコン利用相談カウンターでの常駐サポートサービスを行っている。ただし、Ⅲ号館時代の反省を踏まえて、資料閲覧スペースとパソコン利用スペースを分離した。分離壁には、大きなガラス窓を付けて、閉塞感の無いよう配慮しつつも、フォーラム内での話し声が閲覧スペースには届かないようになっている。

その他、視聴覚資料利用ブースは、2 階カウンター前に配置された。ブースでは、液晶テレビモニターの導入や DVD ブースの増設、2 人用座席の新設が行われた。また、図書メディア館は、神戸三田キャンパスにおける語学学習用視聴覚資料も収集しており、TOEIC、TOEFL 教材等を重点的に提供している。

なお、24 時間利用ゾーンの提供は、Ⅵ号館への移転後も利用エリアを限定し、専用カードキーによる入退館管理で実施している。

14 その他

(1) J. C. C. Newton 賞の創設

図書館は、1997（平成 9）年 10 月の新大学図書館開館以来、「知的交流・創造の場としての大学図書館」を理念として掲げ活動を続けている。この理

念にもとづき、図書館では、学術資料講演会、各種の展示、図書館報「時計台」の発行等、様々な広報活動を行っている。2000（平成12）年度に創設した J. C. C. Newton 賞という作品募集もその取り組みのひとつである。J. C. C. Newton 賞は、初代の図書館長である J. C. C. ニュートンにちなんで名付けられたものである。

また、この賞は、1999（平成11）年に図書館が主催した座談会「『知的緊張感』と大学図書館」において、出席者であった今田寛学長から「知的緊張感」への取り組みのひとつとして、また、図書館が学部を超えた教育の場として機能するために提案されたものである。この座談会の記録が「時計台」No.69（2000.4）に掲載されているので、その箇所を以下に引用する。「そうですね。図書館が主催して『大学図書館－私の経験と将来への展望』というようなテーマで、懸賞論文を募集してもいいですね。学生だけでなく、卒業生も対象にすれば、大学の同窓への働きかけにもなります。学部から選考委員を出してもらい、発表会は図書館ホールですればどうでしょう。（以下省略）」

J. C. C. Newton 賞は、2000（平成12）年度（第1回）から始まり、学部生と大学院生を対象に募集した。その後は卒業生、聴講生、特別受講生、一般公開利用者、中学部生、高等部生、大学院研究員、協定校生徒、提携校生



第13回 J. C. C. Newton 賞表彰式

徒にも対象を広げている。また、テーマは第1回の「知」から「つくる」、「よむ」、「色」、「新しさ」、「道」、「楽」、「極」、「食」、「笑」、「変」、「橋」、第13回の「味」まで、毎年特定のテーマを設定している。そのテーマから連想される題材を自由に選び、新鮮な感覚にあふれ、既成概念にとらわれない作品を募集してきている。論文に限らずエッセイ、評論や創作などさまざまな形式の作品の応募がある。

各審査のポイントとして、論文については、「論述形式の妥当性」、「主張内容の整合性と課題対応」、「視点の独自性」を重視し、その他のジャンルでは、「文章表現の洗練性」、「課題との整合性」、「発想のユニークさ」が重視される。審査は、多数の図書館員と副館長2名により第1次、第2次審査を行い、審査委員による最終審査を経て各賞が決定される。審査委員は、学長、学部教員3名、広報室長、図書館長である。毎年1月中下旬に行われる表彰式では、表彰状のほか、最優秀賞には副賞として20万円、優秀賞には副賞として5万円が授与される。なお、受賞作品は、図書館のホームページに全文を掲載し、情報発信している。また、最優秀賞受賞作品は、図書館報「時計台」にも掲載している。

(2) 関西学院大学リポジトリの開設と本格稼働

ア 教育・研究成果の情報発信と図書館機能

1990年代後半頃、日本全国の大学図書館界で「電子図書館ブーム」の嵐が吹き荒れていた。その言葉が意味するところは、語る人により微妙に異なっていたが、概ね、「所蔵資料の電子化」、「ICT技術の普及による諸手続きの電子化」といった点で共通していたようである。2011（平成23）年の今、当時語られていたことのうち実現していることとそうでないことがあるが、関西学院大学リポジトリも、その当時に種子が蒔かれていたものと考えられる。

2001（平成13）年度には、中野副館長が図書館関係のシステム環境について様々な提言をされた。中野副館長は大学教員になられて日が浅かったこともあり、色々な意味で極めて斬新な発言をされた。その中で「大学で生み出された教育・研究成果と（図書館の）連携の推進」といったことを提案さ

れた。これに対する図書館（員）の反応は、大学図書館は、出版された学術情報を選択・購入し、整理して利用者へ提供することが本来の役割であり、前記提案の事項は大学図書館にはなじまない、というようなものであり、実現に向けての検討には至らなかった。

その後、ライブラリ・システム研究会という大学図書館のシステム担当職員やメーカーの技術者等からなる研究会に参加した職員が、国立情報学研究所職員から「オープンアクセス」をテーマにした発表を聞く機会があり、これにより初めて、前述の副館長提言と図書館が果たす役割を結びつけて考えられるようになった。

イ 情報環境整備事業の実施と図書館の課題

2000（平成12）年頃から、関西学院内では、学内で使っている情報システムに対して様々な問題点が指摘されていた。これに対して、2004（平成16）年度に、情報システム室の事業として、コンサルティング業者を使って、情報システム全体に対する問題点を発掘、整理し、その解決のための提案を求めることを目的とする「情報環境整備事業」が実施された。この過程で、図書館にもヒアリングが実施され、いくつか検討すべき課題を指摘した。その中に、上記の学内研究成果の発信というものがあった。その後まとめられた情報環境整備事業の報告書の中に、この考えがそのまま記載された。この報告書が、2005（平成17）年3月31日の情報システム会議で承認された。報告書によって提案された諸課題（学内ナレッジ統合データベース構築、資料の電子化、デジタル著作権管理システム構築等）を実現するための実施計画の作成が、図書館に新たに課題として課せられることとなった。これら図書システム関係の課題は、「図書システムの機能充実」と命名され、大学と図書館で担当することになった。

これを受けて、同年7月15日の情報システム会議で図書システム充実検討ワーキンググループが組織され検討を行った。その検討結果が12月15日に「学術成果発信システム構築実施計画」としてまとめられた。

ウ 関西学院大学リポジトリの運用主体の確定

学術機関リポジトリ（Institutional Repository：IR）が図書館界での話題になるよりもかなり前から、図書館で購入する学術雑誌の価格高騰が大きな問題となっていた。これは学術情報流通に関与する一部業者による寡占状況から来るものであった。これに対しては、コンソーシアム契約の導入等、ユーザ側の様々な努力が行われていた。このような状況の中で、学術情報流通の主導権を、商業出版社から発信者・受信者（これらはいずれも研究者であり、ここに学術情報流通が持つ一種の特殊性がある）の手に取り戻そうという動きが拡大し始めていた。つまり、いわゆるオープンアクセスの動きである。この動きの中には、オープンアクセス雑誌のように、従来の冊子媒体の雑誌を読者が負担する購読料ではなく、執筆者がコストを負担して維持する流通のモデルを推進しようというものもあった。WEB 上のサイトに学術情報の一次データ（原文データ）を置いて、世界中のどこからでも誰にでも無償で見られるようにするサーバを運用するというモデルも実運用が始まっていた。個人の研究者が独自で維持するサイトに、自分の（あるいは自分の属するグループの）成果物をアップするという形は、少し前から存在していた。とはいえ、個人運用のサーバは不安定であり、確実性・持続性を保障するために、機関が運用するものということが重要視されていた。

日本では、国立情報学研究所が IR の普及を目指して 2005（平成 17）年頃から活発な啓蒙活動を行うようになっていた。そのため、図書館員を中心に、大学界で IR に関する理解が広まり始めていた。

その流れを受けて、2006（平成 18）年に、学内に、学術成果発信システム構築準備委員会・同ワーキンググループが組織され活動を行った。その成果として報告書を作成した（2007（平成 19）年 3 月 26 日）。報告書は、ソフトウェアとして、DSpace（オープンソース、国立情報学研究所が紹介していたいくつかの IR のためのソフトウェアのひとつであり、日本国内でも最もユーザが多い）を採用し、富士通に構築を委託すること、管理運営体制としては、「研究推進社会連携機構規程」に規定する専門部会として「関西学院大学リポジトリ管理委員会」を設けること等を提案していた。その後、必要な運用内規や基準等が制定された。当時、このシステムの運用をどのよ

うな形で行うのかという点について、2つの考え方があった。ひとつは、機関リポジトリの機関とは関西学院大学であり、そのコンテンツである各教員の研究成果の登録を、責任をもって呼びかけるのは大学の代表者である学長であるとの観点から、大学（学長室もしくはそれに準ずる組織）が運用すべきであるという考えである。もうひとつは、実際に運用するのは図書館であるとの観点から、図書館長のもとに図書館で責任をもって運用すべきであるというもので、多くの大学でそのように考えられていた。議論の結果、研究推進社会連携機構に管理委員会を置く（副機構長を委員長とする）こととなったが、この選択が妥当であったか否かは今となっては疑問である。

エ 国立情報学研究所が実施する IR 関連委託事業への応募・採択

2006（平成 18）年に、国立情報学研究所が、国内での IR の普及を目的として CSI（サイバー・サイエンス・インフラストラクチャー）委託事業の公募を行った。これは前年度にも行われていたが、2006（平成 18）年度はオープンな形で委託事業として各大学から計画を提出させ、審査のうえ事業を委託する（費用を出す）というものであった。本学でも、構築を進めていた時期であったので、これに応募し、2007（平成 19）年度と 2008（平成 20）年度の委託事業に採択された。

オ 関西学院大学リポジトリ（KGUR）の本格稼働と登録コンテンツの拡大

KGUR 構築は、2006（平成 18）年秋から実施され、2007（平成 19）年 4 月に完了した。その後、一部の教員へ先行登録という形で、既に電子化(PDF 作成)済のコンテンツの登録許諾を得てサンプルデータの登録を行い、7 月に仮運用、10 月に本運用を開始した。

運用直後に西宮上ヶ原キャンパス、神戸三田キャンパスで各 2～3 回ずつ説明会を開催した。しかし、いずれも参加者は極めて少なかった。また、各学部・研究科へ依頼して、教授会の中で説明会を 5 学部に実施した。

本格稼働後も、コンテンツの登録数はあまり増加せず、2008（平成 20）年夏になっても、先行登録時とほとんど変わらない数であった。そこで、学内紀要の発行元に対して、紀要掲載論文の一括登録を行ってくれるよう検討

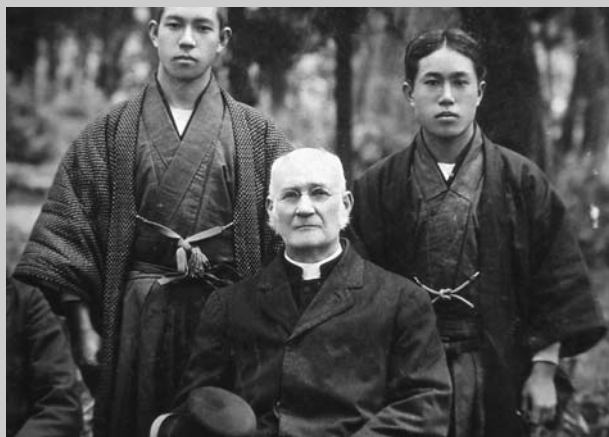
依頼を行った。その結果、2008（平成 20）年度末までに約 35 タイトルの紀要について一括登録が行われることとなった。これにより、登録数は徐々に増え始めた。また、国立情報学研究所が 2002（平成 14）年度から 2008（平成 20）年度に実施した紀要論文電子化事業により作成された PDF を使って、KGUR のコンテンツ登録を行うことを計画した。許諾確認を行いやすい現職専任教員に関して教授会等で話題にしてもらうことで許諾を増やし、コンテンツの増加につなげていった。そうするうちに、文学部（人文学会）発行の「人文論究」のように、発行元の責任で初号から執筆者に許諾確認を行い、許諾が得られたものについては、独自に電子化(PDF 作成)し、KGUR へ登録するという紀要も現れた。

博士論文については、まず、教務課で発行している各年度の要旨集を登録対象とすることを働きかけ、2009（平成 21）年度授与分から、登録することになった。次に、博士論文本体については、2009（平成 21）年 3 月 17 日の研究推進社会連携機構評議員会で、曾我館長から、新たに本学で授与される博士学位論文については、特別な理由がない限り、KGUR へ本文を登録することを標準的な扱いとすることが提案された。その後、学部長会、大学院教務学生委員会を経て、2010（平成 22）年 3 月 23 日の研究推進社会連携機構評議員会で、2010（平成 22）年度授与分から、この扱いを実施することが承認された。

2011（平成 23）年度末で KGUR には、6,420 件のコンテンツが登録されている。年間のファイルダウンロード数は約 38 万回である。KGUR に登録されているコンテンツの大部分は紀要掲載論文（約 93%）である。本学のように学部・研究科の構成が人文社会系分野の比率が大きい大学では、研究成果の発表の媒体として紀要がもつ意味は大きいものがある。本学の研究成果の公表、それによる本学の評価の向上に KGUR は寄与しているものと考えている。

第3部

人物史



1 J. C. C. ニュートンと図書館の始まり

J. C. C. ニュートン (John Caldwell Calhoun Newton, 1848. 5. 25～1931. 11. 10) は、1848 (嘉永元) 年 5 月 25 日、アメリカのサウスカロライナ州アンダーソン郡に生まれ、ケンタッキー陸軍兵学校を経て、1886 (明治 19) 年にジョーンズ・ホプキンス大学研究科を修了した。青年時代に南軍の大尉として南北戦争に従軍し、戦後は宣教師になることを決意し、1874 (明治 7) 年、南メソヂスト監督教会の牧師となる按手札を受け、ケンタッキー州、メリーランド州で牧会に従事した。南メソヂスト教会外国宣教師に任ぜられ、1888 (明治 21) 年 5 月 21 日に来日、東京のフィランデル・スミス・メソヂスト一致神学校の教授となった。また、同時に南メソヂスト監督教会から、将来の伝道師として 7 名の学生がこの神学校に派遣された。翌年関西学院が創設されると、ニュートンは神学部長および教授に就任、7 名の学生たちも関西学院に入学した。

天川潤次郎は、「J. C. C. ニュートン博士の隠れた偉大な思想」¹⁾においてニュートンの新南部主義思想、その生涯と人間像や著作等を紹介しているが、ニュートンには未だに謎に包まれた部分が多いと書いている。また、天川は別の著作「J. C. C. ニュートン博士とブランチ家」²⁾の中で、「ブランチ家は関西学院のために土地のみならず、実に貴重な人員、J. C. C. ニュートン博士をも用意して下さったのである。」と、ブランチ家の人々とニュートンの関係について記述している。ニュートンの人となりについては、元理事長の木村蓬伍がその著作「おもいで」³⁾の中で、次のように書いている。「その人格・信仰・伝道精神において異彩を放ち、他人の追従のできがたい尊いものを備えておられた」、「米国留学中柳原正義、松田明三郎両君と 3 人で訪問したが、ニュートン先生は、毎日、西の窓を開け、日本のため、学院、教師、学生のため、卒業生のために祈っていることを語られた。」また、矢内

1) 『キリスト教主義教育：キリスト教主義教育研究室年報』第 7 号、1979 年 3 月

2) 『キリスト教主義教育：キリスト教主義教育研究室年報』第 18 号、1990 年 11 月

3) 『神学研究：特集』第 9 号、1959 年

正一は『大学とは何か』⁴⁾の中で、ニュートンに初めて会ったときの印象を次のように述べている。「アメリカ南部の、野生的なものが残っているたくましい人が、神にとらえられて日本にやって来たというような印象が僕には非常に強かった。〈中略〉日本人に対してアメリカ人がもっているいちばんいいものを残さねばならないという温かい気持ちが溢れていて、実に人間として大きいという感じがしました。」このように、ニュートンは、その「神のような生活と精魂を傾けた教育」を実践し、多くの学院生から慕われる存在であったことがわかる。ニュートンは、学生には必ず「ブラザー」と呼んで握手をした。関西学院学生会発行の『学生会時報』第7号（大正12年5月15日号）⁵⁾には、「握手」と題する学生（文1 YT生）からの送別の文章が掲載されているので、その一部を転載しておく。

櫻咲く去年の三月頃であつたと思ふ〈中略〉やがて先生は私の方へ向つて「My Brother!」と親しげに言はれた、それは何とも言ふことの出来ない温みのあるものであつた。私は突然の言葉に返事を忘れてどうしてか言へなかつたが心の中では「My good father」と繰返しながら禮をした。先生と私は手をとつて握手を交はした（中略）此一語を聞いて急に私の心は開かれたやうな気がして私は愉快になつた、何かしらぬが感謝したいやうな気持ちになつて先生と別れた。（後略）

関西学院図書館は、1908（明治41）年に神戸原田校地本館の3階増築の際、一室を図書室として使用したことに始まるとされている。しかし、第6代東晋太郎館長の指示で中島猶治郎が作稿した「関西学院図書館略史」には、第4代 W. K. マシューズ館長が残した記録の中に1889（明治22）年10月の学院開校と同時にニュートンが初代書籍館長に就任したという記録⁶⁾がある。また、入交光三が『関西学院七十年史』の編纂に際して作成した図書

4) 『大学とは何か：世界の大学・日本の大学・関西学院』関西学院、1975年8月

5) 『学生会時報』第7号（大正12年5月15日号）は、「ニュートン老博士送別記念号」として発行された。

6) 「南メソヂスト監督教会日本年会記録」1890（明治23）年

館年表には、「1889（明治 22）年、図書館開設さる。神学部長 J. C. C. ニュートン博士、図書館長を兼任。」と記載されている。関西学院における図書館の始まりは、神戸原田村に神学部と普通学部とをもって 1889（明治 22）年に開校した最初の校舎の 1 階にあった「しょじゃくかん」と呼ばれる図書室であると考えたい。図書館開設後、少しずつではあるが、蔵書が充実し、1913（大正 2）年 4 月、神学部に通信用教授部が設置され、9 月には巡回文庫が併設された。この巡回文庫は、通信用教授科に在籍する学生には無料で一度に 2 冊を貸し出すもので、日本メソヂスト教会年会員にも同様に貸し出したが、会員には 1 冊につき 10 銭の料金を徴収するシステムであった。当時の「巡回」は「Circulation＝貸出」から訳された図書館用語であった。

しかし、卒業生が毎年 10 名を超えることはなく、1912（明治 45）年度で累計 216 名の卒業生をもつ私塾のような規模であった当時の学院において書籍館がどのように運営されていたか、その詳細はよくわかっていない。初期の図書館を知ることのできる史料として、第 4 代 W. K. マシユース館長が残した“Notes on the first fifty years of the Kwansei Gakuin Library”⁷⁾がある。以下にその要点を訳してみた。

関西学院図書館が設置された正確な日付はわからない。しかし、関西学院が 1889 年 10 月 9 日に開学され、小さな図書館がその最初の施設の一部であったとき、学校の創設者の 1 人である J. C. C. ニュートン博士は、1888（明治 21）年 5 月 21 日に来日した時、本でいっぱいになったトランクを 1 つ持って来たといわれている。神学部長であり、図書館長でもあったニュートン博士は、1890 年の年次報告書で「図書館は小さく、そして参考書、海図や地図が非常に乏しい。」と報告している。1891 年のレポート（8 月 25 日付）では、「図書館への〔図書の〕若干の追加」に言及している。以降、毎年レポートが提出されたが、図書館の拡大は遅々として進まなかったといえる。

私が 1902 年に初めて関西学院を訪れた時、図書館はかなりの大きさ

7) 『関西学院六十年史』（1949 年 10 月 29 日発行の巻末）に記されている。

になっており、そして使用目的別の部屋ができていた。当時、ニュートン博士は、数年間アメリカに帰国されて留守だった。そして図書館長はたしか神学部長の T. H. ヘーデン博士であった。

1903年に、ニュートン博士は日本に戻り、関西学院に復職した。彼は再び図書館長になって、そして1908年までその任にあった。また、私が1904年9月に関西学院の教員になった時、図書館の蔵書はまだまだ少なかったが、1905年に、神学セクションにかなりの拡充がなされ、多くの貴重な本がバージニア・ガーナー教授と芦田慶治教授の努力により追加された。1907年から1908年にかけて、本館は3階が増築されて図書館にはその大部分が与えられた。

ニュートンは初代館長として1889（明治22）年9月の就任時から病気のため帰国した1897（明治30）年6月まで、第3代館長として1903（明治36）年12月から1908（明治41）年3月まで図書館の発展に尽力したと考えられるが、図書館関係の記録が極端に少なく、まだまだ不明の部分が多い。

その後のニュートンは、1916（大正5）年に関西学院第3代院長に就任し、1920（大正9）年7月に健康上の理由から院長を辞任するまで、その職責を全うした。1923（大正12）年に関西学院を退職し、帰国後はジョージア州アトランタにおいて、愛娘ルース（アンダーウッド夫人）と同居し、ここが亡くなるまでの終の住家となった。ニュートンは、スカーレット・カレッジや、南メソヂスト大学で教鞭をとり、講演、著作等を続け、1931（昭和6）年11月10日、アトランタで没した。83歳であった。

最後に、関西学院への思いが表れているニュートンの言葉で締めくくりたい。

“I want to go to heaven through Kwansei Gakuin.”

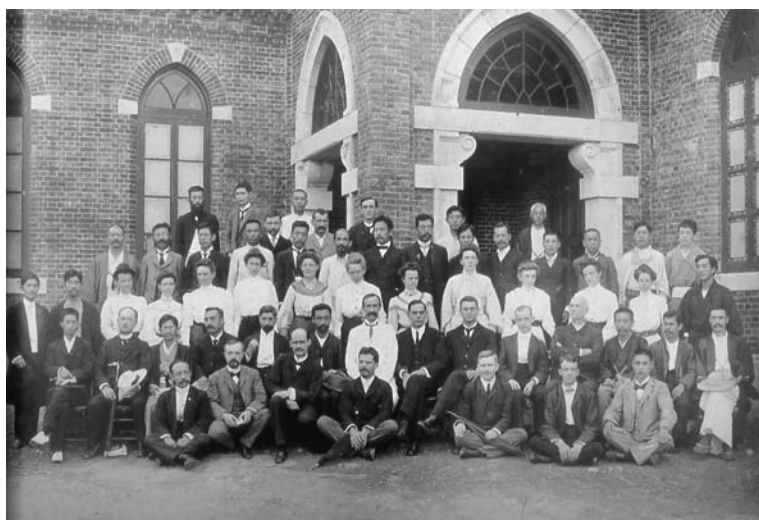
「関西学院を通して神の所へ参る」

2 マシューズ館長の図書館改革

はじめに

1989（平成元）年11月に刊行された『関西学院の100年』⁸⁾の27ページに、南美以教会第14期日本年会（1905（明治38）年9月開催）の写真が掲載されている。その中の最前列右から2人目に若々しいマシューズが写っている。マシューズが原田の森にあった関西学院に着任して1年目の頃である。また、この写真には、初代および第3代図書館長であるニュートンが2列目右から4人目に、第2代館長のヘーデンが最前列右から3人目に、マシューズとともに写っている。（写真）

W. K. マシューズ（Matthews, William Kennon, 1871. 7. 1-1959. 1. 29）は、テネシー州フランクリンに生まれ、1895（明治28）年、ヴァンダビルト大学を卒業（B.A.）後、南メソヂスト監督教会宣教師となり、1902（明治35）年に来日し、その後の2年間山口地区で伝道を行った。この頃に山口県立山



8) 『関西学院の100年』 関西学院創立100周年記念事業委員会、1989年11月

口図書館長の佐野友三郎と知り合い、図書館に関する知識を得たと考えられる。その後、シカゴ大学で M.A. の学位を取得し、1904（明治 37）年に関西学院に着任し、1906（明治 39）年には按手を受けている。そして、1912（明治 45）年に発足した本学の高等学部文科において聖書学と英語を、神学部では新約聖書学を講じた。1941（昭和 16）年 3 月まで関西学院で教鞭をとり、宣教師としては T. H. ヘーデン（Haden, Thomas Henry, 1863. 2. 15-1946. 11. 2）に次ぐ長期間の在任となった。また、マシユースは大学昇格、上ヶ原移転および予科開設時に理事として学院の発展に尽力している。⁹⁾

マシユースは、1908（明治 41）年 4 月から 1938（昭和 13）年 3 月まで、約 30 年間にわたって第 4 代図書館長を務め、数々の図書館改革を実施した。その中でも大事業であったのは、1929（昭和 4）年 3 月の神戸の原田村から上ヶ原への移転である。この時、新しい図書館が竹中氏から贈られた。マシユースは、この時計台をもつ新図書館に従来の神学部および文学部の図書室を統合した。まだ神戸の原田村に学院があった 1918（大正 7）年から図書館に勤めた入交光三の「関西学院生活 50 年」¹⁰⁾の中にマシユースの人となりがわかる一節があるので、ここに引用しておく。「関西学院は神戸高商と同じように数少ない四年制の高等部と本科と別科からなる神学部と普通部からなっていた。（中略）私が最初にいたのは高等部の建物の三階で、ここに三室からなる図書室があった。もと二階建西洋館であったものを三階建に改装したもので、三階は屋根裏になっていた。木造建築としては高さ 10 メートルもあろうという珍しい高層建築で、眼下に敏馬（みぬめ）の浜を見下ろしていた。当時館員は館長のマシユース先生のほか私を何かと指導して下さった中島猶治郎さんと神学館の堀江元三郎さんの三人であった。マシユース先生は週に二、三回しかこれなかったが日本語の上手な人で、いつも金メダルをぶら下げていた。大学では特待生だったそうで、遠く祖先をたどると G. ワシントンの名も出てくるほどの名門出身で私も先生の家系作りを手伝ったことがある。よく気のつく人で、私が一カ月ほど入院したときも何かと気をつかっていただいたことをおぼえている。」

9) 『関西学院事典』学校法人関西学院、2001 年 9 月

10) 『KG TODAY』関西学院大学広報室、1970 年 6 月 11 日号

図書館経営の改革と人材の養成

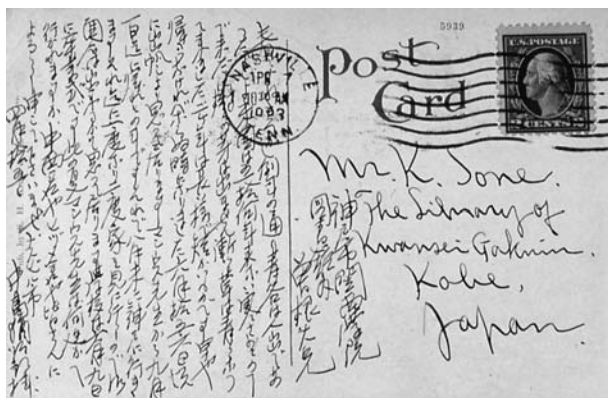
マシユースは、当時の先進的な図書館であった山口県立山口図書館から、磯部泰治を初代の司書として迎え、まず手始めに、デューイ十進分類法を図書館に適合するよう一部を改訂して採用した。さらに、著者記号としてカッター・サンボーン著者記号表を採用した。特に、デューイ十進分類法の採用は、当時の帝国図書館や東京帝国大学がまだ八門分類表を使用していた時代であったことから考えると、斬新な取り組みであったといえる。¹¹⁾

1912（明治 45）年に神学館内に神学部図書室が置かれた。当時の神学館担当は堀江元三郎であった。1913（大正 2）年 4 月、神学部に通信教授部が設置され、9 月には巡回文庫が併設された。1914（大正 3）年 4 月、中島猶治郎（1887-1966）が磯部泰治の後任司書として着任すると、マシユースは、巡回文庫に関する事務は図書館が行うようにし、「巡回文庫目録一覧」を発行した。また、神学部学生に貸与する教科書の貸出業務を図書館がまとめて行うようにしたこと、新聞の経済記事切り抜きを始めたこと、最高学年の学生に対して卒論作成のための書庫入庫を許可したことなど、利用面で数々の改善策を講じた。

マシユースは、図書館経営に大変熱心な館長であり、中島をアメリカに留学させて最新の図書館経営を学ばせる一方、自らも帰国するたびにアメリカ国内の図書館を見学し、そこで得た知識をもとにして新しい図書館制度を取り入れ、関西学院図書館の基礎を作り上げた。マシユースは、1919（大正 8）年 7 月に中島が一時退職したにもかかわらず、自身が 1919（大正 8）年から 1920（大正 9）年にかけて帰米した際に、アメリカ留学における中島の受入先など留学の準備を整えていたのである。マシユースは、中島の人物やその可能性を見抜き、その将来を嘱望していたといえよう。1920（大正 9）年 4 月、曾根鼎が第 3 代司書（～1925（大正 14）年 3 月退職）として着任すると、マシユースは、復職した中島を 1921（大正 10）年 6 月から 1923（大正 12）年 9 月まで、図書館学研究のために理事会の承認を得て、アメリカに留学させた。中島は、留学 1 年目にニューヨーク図書館学校に通いなが

11) 「関西学院大学図書館小史」関西学院大学図書館、1990 年 12 月

ら、ニューアーク市立図書館長のジョン・コットン・デーナ博士のもとで学んだ。デーナ博士はニューアーク博物館の創設者で、ニュージャージーにおいて20数年にわたり公立図書館長を務めた人物である。留学2年目には、テネシー州ナッシュビルのピーボディ師範学校の図書館学科で勉学を続けた。この稿を執筆している途中で、図書館運営課の原簿台帳保管庫の中から1枚の絵はがき（写真）を発見した。中島猶治郎に関することを書こうとするといつも史料を発見することになり、何らかの導きではないかと思うことがある。この絵はがきは、中島が帰国の年の4月15日にナッシュビルから曾根司書に送ったもので、自身の近況と帰国予定を伝えている。



神戸市関西学院

図書館内

曾根大兄

春ですね さぞかし例年の通り青谷は人出であ
ったでしょ 米国は五拾何年来ない寒さとの事で
未だに樹々の芽は出ません 漸く草は青くなっ
て来ました。二ケ年は長い様で短かいものです 早や
帰らなければならぬ時になりました 六月拾五・六日頃
に出帆しよと思つて居ります マシウス先生から九月
一日までに帰れとの事です それで八月末に神戸に行き
ます それ迄に一度なり二度家を見に行くのでご
面会は出来るかと思つて居ります 学校は六月九日
に卒業式です 此の夏マシウス先生は何処かへ
行かれますか 中西君やヒヅメ君や皆さんに
よろしく申して下さいませ

四月拾五日 ナスビル市

中島猶治郎拝

図書館サービスの充実

マシユースは、図書館の近代化とその充実に尽力し、1911（明治44）年に最初の図書館規程と思われる「私立関西学院附属図書館規則及図書分類綱目」という冊子を作った。その第1条には、「本館は私立関西学院内に設置し私立関西学院附属図書館と称す」とあり、名称についての規定を見ることができる。この名称は、1929（昭和4）年まで続くことになる。中島がアメリカから帰任すると、マシユースは、中島がアメリカで学んできた最新の図書館サービス改革を関西学院でも実施するよう指示している。当時の「関西学院新聞」¹²⁾の記事からそのいくつかを紹介する。

12)『関西学院新聞保存版』関西学院新聞タテの会、1988年4月

1. 借覧者証発行のための保証金制度

1924（大正13）年から、館外貸出のための借覧者証を発行するため、武円の保証金を預かり、卒業時に返還する制度を導入した。「関西学院新聞」第74号（昭和7年3月20日）には「懷寒し不景気の春、図書閲覧料回収は今年正に九九パーセント」という記事が掲載され、その中で中島は次のように語っている。「図書館閲覧料は商、文両学部を通じて殆んど返却しました（中略）昨年までは寄附の形式で残して校門を去られる方も相当ありましたが今年は九分九厘まで返却し、寄附していく学生さんもない様です。」この保証金制度は、1936（昭和11）年に図書館費が徴収されることによって廃止されるまで続いた。

2. 辞書体目録の編成

図書検索のための辞書体目録の編成があげられる。「関西学院新聞」第123号（昭和11年6月20日）には、「御自慢の字書体目録（記載のまま。「辞書体目録」の誤り）－図書館訪問記－」という記事が掲載され、図書館の現況を次のように説明している。「何と云っても中島書司（記載のまま。「司書」の誤り）御自慢の第一は字書体目録と十進分類法である、字書体目録とは書籍の索引カードが同一書籍に就き書名、著者名、並に研究題目の三つの中何れから見出し得るのであり、三つの中一つが解れば望みの本が見出し得る（後略）」この取材記事において中島は、年間の図書購入費が1万円、4万冊の蔵書を有し、1日あたり約107名の閲覧者があるが、収容定員が300名であるので、「来館を歓迎する」という図書館の宣伝をしている。

3. 開館時間の延長

1937（昭和12）年の9月13日からの学年末試験期には、午後4時までであった開館時間を午前8時から午後9時までに延長している。これは「関西学院新聞」第132号（昭和12年5月20日）と第135号（昭和12年9月20日）に記事が掲載されている。第135号の「読書の秋－図書館夜間開館－何時迄続く」では「第一日は、利用者五名、同じく第二日は七名の貧弱さで、その永続性が危ぶまれている。」と記されている。

4. 教授による読書指導など

1930（昭和5）年3月から5名の教授に依頼し、学生への読書指導を開始した。午後2時から4時までの指導であった。また、1934（昭和9）年6月から「関西学院大学図書館報時計台」（現在の図書館報の前身）を発行している。この「時計台」は新着図書を利用者に広報するためのリストであったが、6号で発行が停止してしまった。

菊の花と図書館員

1938（昭和13）年4月、理事会の決議により法文学部参与兼理事であった山本五郎がマシユースの後任として、第5代館長に就任した。1938（昭和13）年に中島猶治郎が提案し、館員に記録させていた業務日誌には、マシユースと山本の引き継ぎが頻繁に行われたことが記録されている。退職の日、マシユースに図書館員から送別の品として銅製の花瓶が贈られた。この花瓶は、マシユースが帰国した後も自宅の部屋にあり、いつも菊の花が生けられていたという。一方、マシユースの懐刀であった中島は、同年、満州国立中央図書館創立のため、国务院の招聘を受け、12月初旬で退職することとなり、その後、満州国立中央図書館籌備処勤務を経て満州建国大学の助教授となる。また、中島の後任として大学予科教授の武藤誠が司書を兼任することになった¹³⁾。

『関西学院六十年史』¹⁴⁾の巻末にあるマシユースの“Notes on the first fifty years of the Kwansei Gakuin Library.”には、1929（昭和4）年に上ヶ原に新しい図書館が建てられたことに言及する箇所、マシユースは、図書館のスタッフ（梶田博、曾木弥太郎、梶田弥一郎、入交光三、森傳三）一人一人の名前をあげて、「図書館の忠実で能率的なスタッフが建物よりもさらに重要であった。彼らは私の幸せな記憶の中にいる人たちであり、忠実によく働く館員である。」と賞賛している。菊の花と図書館を愛したマシユースは、1959（昭和34）年1月29日にフロリダにおいて永眠した。

13) 「関西学院図書館略史」関西学院図書館、1954年9月

14) 『関西学院六十年史』関西学院六十年史編纂委員会、1949年10月

3 図書館初代司書 磯部泰治

磯部泰治は、1887（明治20）年9月に山口県吉敷郡山口町（現在の山口市）に生まれた。岡山県の私立金光中学校に入学後、病を得て休学し、その後復学するが、都合により同校を退学している。1906（明治39）年から約1年間、宣教師の W. J. キャラハン氏と翻訳家の後藤一郎氏に英語学を学んだ¹⁵⁾。このことが後年に磯部が翻訳家に転身するきっかけとなる。磯部は、1905（明治38）年12月に山口県立山口図書館事務雇となり、佐野友三郎館長の下で図書館業務に精通していった。「山口図書館旧職員名簿」には、1905（明治38）年12月13日から1909（明治42）年4月24日（在職年数3年5ヵ月）まで「事務雇」として「磯部泰治」の名が見られる¹⁶⁾。磯部の名は山口県の「明治38年度俸給支出調書」や「明治42年俸給支出調書」でも確認することができる。

関西学院では、1908（明治41）年4月に W. K. マッシュース（1871-1959）が J. C. C. ニュートン館長の後任として第4代館長に就任した。マッシュースは1902（明治35）年に来日後、山口県において教育事業に従事していた時に知り合った佐野友三郎山口図書館長の推薦により、1909（明治42）年9月に磯部を関西学院図書館主任（初代司書）として迎え、図書館の充実をはかった¹⁷⁾。同年に発行された“Year book of the Japan Mission”には、マッシュースのレポートが掲載され、磯部と思われる人物に関する“A Japanese assistant librarian has been secured, who is a member of our church and has training in modern library methods.”という記録が残されている¹⁸⁾。また、1909（明治42）年の「関西学院日誌」においても、同様に、5月4日の記録として「図書室掛トシテ、山口ヨリ磯部泰治氏着任」と記されている¹⁹⁾。

15)「普通科職員履歴書」私立関西学院、1909年

16)「山口図書館旧職員名簿」山口県立山口図書館、1953年

17)「関西学院図書館略史」関西学院図書館、1954年

18)“Year book of the Japan Mission” 1909年

19)『関西学院史紀要』第4号、関西学院百年史編集委員会、1994年10月

磯部をマシューに推薦した佐野友三郎は、1864（元治元）年3月10日に武蔵国川越（現在の埼玉県川越市）に生まれた。東京大学の卒業試験のときに外国人教師に対して不信任発言を行い退学した後、米沢尋常中学校教員（教頭兼務）、広島尋常中学校教諭、台湾総督府外務部（嘱託）を経て、東京大学予備門時代からの友人で、当時秋田県知事であった武田千代三郎の誘いによって秋田県立図書館長（嘱託）となり、当時ニューヨーク州立図書館で実施されていた巡回文庫制度を導入するなど、秋田県立図書館の改革を行った²⁰⁾。

その後、佐野は山口県知事に転出した武田に懇望されて山口図書館長に転任し、再度その手腕を発揮することになる。武田が山口県知事に就任した当時を回想した談話が全国専門高等学校図書館協議会の『会報』第3号に掲載されている。「（前略）此处でも佐野の腕を借りなければ殆ど見当がつかぬので、秋田県に交渉して同人を転任させるのに少からず骨が折れました。先方では手離さぬと云う。此方からは是非にと懇望する、仲々埒が明かぬ内に、新築に着手すべき日は遠慮なしに迫って来る。図書館の設計は如何にすべきかと云ふ佐野の考案に基づき、（後略）」²¹⁾。山口図書館の設計に関して武田知事自身が苦心して作成した図書館の平面図が残されている。山口図書館における佐野の主な業績としては、図書館設置普及運動、巡回文庫、図書館無料原則、公開書架の実施、郷土資料の蒐集、児童室設置、著者記号法の導入などがあり、これらは先進的な事業であった。佐野は、その後、1915（大正4）年5月8日から9月7日まで文部省によって図書館視察のため米国に派遣されている²²⁾。

関西学院図書館と磯部泰治

関西学院図書館就任後の磯部は、デューイ十進分類法を図書館に適合するよう分類表の一部を改訂した。（分類番号の改訂はマシュー館長が行った。）現在、関西学院大学図書館には、磯部が山口図書館時代に使っていた

20) 『初代館長佐野友三郎氏の業績 復刻版』山口県立山口図書館、1983年

21) 『会報』全国専門高等学校図書館協議会 第3号、1927年7月

22) 『米国図書館事情 復刻版』佐野友三郎著 山口県図書館協会、1989年

署名入りの「山口県立山口図書館和漢図書分類目録」（明治37年11月刊）（写真）の他に、秋田図書館、京都府立京都図書館、東京高等商業学校図書館、帝国大学東京図書館、財団法人大橋図書館、慶應義塾図書館等の分類表が所蔵されている。磯部は、これらを参照しながら分類表の改訂を進めたと考えられる。当時は帝国図書館や東京帝国大学においてもまだ八門分類法が行われていた時代であり、十進分類法を採用したことはまさに先進的であった。デューイ十進分類法は、凡ゆる知識を九分しこれに総記を配して零から九までを与えたもので、形式的細目と助記性に特徴がある。また、磯部は、カッター・サンボーン著者記号表を採用し、二桁表を作成した。著者記号法というのは、著者の姓の頭字に数字を配当した表で、これによって著者のアルファベット順に自動的に図書を配列することができる仕組みである。カッター・サンボーン著者記号表の採用も当時としては、斬新な企てであった。磯部が初代司書として就任したことにより、関西学院図書館は当時の最先端であった山口図書館（佐野友三郎館長）の影響を色濃く受けたことになる。

当時の関西学院図書館の蔵書数は約5,000冊（このうち和書が1,800冊であった。）に増加しており、磯部が中心となって1909（明治42）年から本格



的に蔵書の再整理が行われ、これと並行して蔵書を図書原簿に記入する業務が同年9月16日付で開始された。ちなみに、図書原簿の第1番目は、George Trumbull Ladd の“Philosophy of conduct” 1904 年（請求記号 170/L15）である。

また、1909（明治 42）年発行の『関西学報』の第 8 号に磯部は、「読書の趣味と図書館」を寄稿している。その中で「欧米の社会、学校、家庭で行われている読書というよい習慣は我国の現状では望むべくもない。書籍が一般に普及し始めてまだ二三十年経ったばかりであり、我国に欧米のような読書の趣味が充分普及していないのは当然のことである。国民に読書の趣味を誘導し奨励するための唯一の機関は、市民大学として今日欧米に称揚されつつある図書館である。（要約）」と述べている²³⁾。

その後、磯部は 1914（大正 3）年に関西学院の職を辞し、東京の巣鴨に居を構え、翻訳家への道を踏み出すこととなる。タゴールの『暗室の王』、ヘンリ・ヴァンダイクの『青い花』、エリザベト・フォルステル・ニイチェの『妹の見たるニイチェ』等の翻訳書が新潮社から刊行されている。雑誌『新潮』にも「タゴールの傳記」、「ニイチェの超人」、「寂しきニッチェ」等、多くの文芸評論が掲載されている。また、関西学院普通学部長を勤めた S. H. ウェンライト（1863-1950）が、総主事であった日本基督教興文協会（現在の教文館）から刊行されたものとしては、J. L. ハルバットの『旧約聖書物語』、『新約聖書物語』などがある。

磯部泰治の名について

磯部泰治の名については、山口図書館と関西学院の史料から「泰治（たいじ）」であったことが明らかである。1954（昭和 29）年発行の「関西学院図書館略史」、1990（平成 2）年発行の「関西学院大学図書館小史」に記されているのは、「泰造（たいぞう）」という名である。「泰造」の名が図書館史に初めて現れるのが、「関西学院図書館略史」であるが、東晋太郎図書館長のもとで刊行された時に何らかの錯誤があったと思われる。

23) 『関西学報』第 8 号 関西学院校友会、1909 年 12 月

4 図書館の基礎を築いた中島猶治郎

1954（昭和29）年9月11日発行の「関西学院図書館略史」は、東晋太郎第6代館長の命を受けて図書館第2代司書の中島猶治郎（写真）が作稿したものである。中島は第2次世界大戦前における図書館員養成や図書館経営の先駆者であり、戦前では珍しくアメリカで図書館学を学ぶために留学した。海外の図書館での実務を経験した彼は、帰国後、本学図書館のみならず、日本国内および満州における図書館界に大きな影響を与えることになる。

中島は、1887（明治20）年に滋賀県栗太郡（現在の栗東市）に生まれた。1912（明治45）年に同志社普通学校を卒業し、その後、同志社英文科に在籍しながら²⁴⁾、関西学院神学部生となり、午後の4時間を関西学院図書館で勤務していた。1914（大正3）年からは、初代司書である磯部泰治の後任として2代目の司書となった。1919（大正8）年に一時退職し、禁酒運動（神戸廃酒期成会主事）などに従事した。中島は、「関西学院新聞」第261号（1953（昭和28）年10月15日）に掲載された座談会で当時のことを次のように回顧している。「私は大正元年から居ますが、古いながらもしばしばムホンを企てましてね。（笑声）仲々アメリカに洋行させないので図書館を飛び出し、株屋の番頭をやったり、禁酒運動に従事したりしました」。これを見ると、中島はかなり自由闊達な人物であったと想像することができる。W. K. マシューズ第4代館長は図書館経営に大変熱心であり、



24) 同志社英文科「学籍簿」1913年

復職した中島を1921（大正10）年6月から1923（大正12）年9月までの約2年間、ニューヨーク図書館学校及びピーボディ師範学校の図書館学科に公費留学させるよう理事会に推薦した。中島はニューヨークにおいて図書館学および図書館の経営についての最新知識を学んで帰国した後²⁵⁾、アメリカで学んだ新しい図書館制度を次々と取り入れ、当時の図書館界では最新であった新入生に対する利用指導の実施（現在の新入生オリエンテーションの原型）や辞書体目録の作成など、当時としては先進的な多くの取り組みを行っている。この意味で、中島は関西学院図書館の基礎を作りあげた人物であるといえよう。

『目録編成法』の発行

1925（大正14）年に全国専門高等学校図書館協議会は、中島猶治郎と鞠谷安太郎に執筆を委嘱し、『目録編成法』（写真）を大阪の間宮商店から刊行している²⁶⁾。鞠谷は、神戸高等商業学校（現・神戸大学）図書館所属であり、その校舎は当時、原田村にあった関西学院に近い神戸市葺合町筒井村（現在の神戸市中央区野崎通）にあった。近隣で働く図書館員として二人には以前から親交があったと想像できる。鞠谷は他に全国専門高等学校図書館協議会から図書館研究叢書第1篇として『図書館事務の執り方』（1926（大正15）年）を編纂している。なお、『目録編成法』の表紙と奥付においては、中島猶治郎の名前が猶次郎となっているが、例言では猶治郎となっているので、出版時の誤植と考えられる。全国高等諸



25) 「関西学院大学図書館小史」1990年12月

26) 『目録編成法』（図書館研究叢書第四編）間宮商店、1926年10月

学校図書館協議会『会報』第4号（1928（昭和3）年発行）には、『目録編成法』の補遺（1927（昭和2）年）と中島が編集した「図書分類表」が掲載されている。また、1932（昭和7）年10月6日に全国高等諸学校図書館協議会第9回大会が関西学院で開催され、中島が大会の司会を担当した²⁷⁾。最前列左端のコートを着ている人物が中島である。（写真）



1927（昭和2）年、大阪で青年図書館員連盟が結成され、中島もその一員となった。連盟創立当時のメンバーとして、森清、南諭造、天野敬太郎らがいる。森清は、1906（明治39）年、大阪に生まれ、1922（大正11）年、16歳で間宮商店に就職し、1929（昭和4）年、23歳の時に『日本十進分類法（NDC）』の初版を刊行。以後、鳥取図書館、神戸市立図書館、上海日本近代科学図書館、市川市立図書館、国立国会図書館などに勤務した。日本における標準分類法の生みの親である。南諭造は、1907（明治40）年、神戸に生まれ、神戸商大（現・神戸大学）図書館司書、大阪府立図書館天王寺分館長等を歴任した後、1963（昭和38）年から1973（昭和48）年まで、関西学院調査室長、大学図書館次長として活躍した。日本図書館協会顧問でもあった。天野敬太郎は、1901（明治34）年、京都に生まれ、京都大学図書館司

27) 『会報』全国高等諸学校図書館協議会 第9号、1933年3月

書として法経図書室に長年勤務、関西大学図書館長、東洋大学社会学部教授等を歴任した。目録法、書誌学に造詣が深く多くの業績を残した。また、図書館用品の販売を通して図書館事業を発展させた間宮商店の間宮不二雄は青年図書館員連盟の支持者であった。

中島は青年図書館員連盟に参加した1927（昭和2）年から1933（昭和8）年にかけて、精力的に分類法、件名法、目録法、読書法に関する7つの論文を『図書館雑誌』に発表している²⁸⁾。それらの論文の中には、東北帝国大学の田中敬司書官によって書かれた「鞠谷、中島両氏共編『目録編成法』を批評す」²⁹⁾という批評に真っ向から反論した「田中敬氏に答ふ」があり、その中で中島はこう書いている。「然るに田中氏は『聊か功を急がれた嫌のあるは遺憾に堪えない次第である』とは何と云う詞であらう、此れは聊か田中氏の過言ではあるまいかと思うと共に筈に惨酷な云い振りである。今少し慎重に調査を綿密にして萬遺漏なきを期さる可きである。最初は印刷の誤植かとも思った」中島は、『目録編成法』を作成した経緯や事情をよく調べないで批評するのは図書館学の大家である田中敬とはいえ、言い過ぎであると反論したのである。

満州国立中央図書館籌備処と中島猶治郎

1938（昭和13）年4月に図書館の改革を共に推進してきたマシュース館長が退任すると、同年12月16日、中島は、満州における国立中央図書館創設および国立建国大学を企図する満州国国务院の招聘に応じ、関西学院を退

28) 中島が1927（昭和2）年から1933（昭和8）年にかけて、『図書館雑誌』に発表した論文は次のとおりである。

- ①「Cutter's Alphabetical Order Table と管理法に対する一考察」第21年第4号、1927年4月
- ②「分類法と件名事項の関係と辞書体目録に就いて」第21年第5号、1927年5月
- ③「田中敬氏に答ふ」第21年第6号、1927年6月
- ④「翻訳書のカード記入法私案」第24年第3号、1930年3月
- ⑤「分類細目と件名の関係に就いて」第24年第8号、1930年8月
- ⑥「読書法に就いて」第24年第12号、1930年12月
- ⑦「誤用される分類統一論」第27年第1号、1933年1月

29) 『図書館雑誌』日本文庫協会 第21年第4号、1927年4月

職し、渡満した。マシューズ館長と中島の退任は、関西学院図書館の歩みの中でひとつの時代の区切りであったといえる。1938（昭和13）年12月20日の「関西学院新聞」第149号の記事「建国大学へ栄転：司書中島猶次郎（記載のまま。「猶治郎」の誤植）氏」は「16日正午鴨緑丸で任地に赴いた」と伝えている。中島が乗船した大阪商船の貨客船であった鴨緑丸は、その最初の航海において愛親覚羅溥傑の婦人、嵯峨浩が乗船したことで有名である。当時、鴨緑丸は「うる丸」、「熱河丸」、「吉林丸」などとともに月間25航海の大連航路に就航していた。当時の大阪商船の運航案内を見ると神戸＝門司＝大連を約70時間で結んでいた。中島は神戸を12月16日正午に出発し、船中で3泊して19日の午前9時に大連に上陸した。大連と新京（現在の長春）を8時間半で結ぶ満鉄の特急「あじあ」号の発車時刻が午前10時である。当時の記録は残されていないが、中島はこの列車に乗り、新京に赴いたのではないかと考えられる。中島はその後、1942（康德9）年9月9日まで、当時の新京順天大街（現在の長春市新民大街）にあった国立中央図書館籌備処の主要メンバーである司書官として勤務した。³⁰⁾

1938（昭和13）年は満州における康德5年にあたる。翌1939（康德6）年6月26日から7月7日まで国立中央図書館籌備処と新京民生部の後援で、「資料取扱事務講習会」が参加者約100名を集めて新京金融合作社講堂で行われた。ここで中島は、「目録法」と「整理用品説明」の講習を行った。同年、7月21日に奉天図書館聯合研究会の結成式が奉天省公署礼堂（奉天は現在の瀋陽）で行われた。中島は、この時、国立中央図書館籌備処の民生部代表として出席し訓示を行っている。翌7月22日、奉天市公立八幡町図書館において、聯合研究会の第1部（日系）委員会が満州各地の図書館長12名の参加により開催された。中島は、衛藤利夫満鉄奉天図書館長等とともに出席している。ここで図書館員の質を向上させるため、委員会主催の短期講習会を9月中に開催することが決定され、講師として、衛藤、中島の名前があがっている。中島は、当日に「米国の図書館事情」と題してJ. C. デーナの図書館経営論について講演を行っている。また、9月28日から30日にか

30) 『満華職員録』満蒙資料協会編、康德9年

けて、「図書館の業務改善並館員の研究修養を計る為斯界の大家を招聘し省
下各市県日系図書館員の講習会」として奉天省図書館員講習会が奉天省公署
礼堂で開催され、中島は「目録法」を 29 日と 30 日に講演している。同年 5
月 9 日に籌備処官制の改正が行われ、人事面、予算面で体制が整えられ、中
島は司書科の司書官となった。6 月 24 日から 29 日まで、満系図書館員講習
会が新京民生部講堂で開催された。この時、中島は「一般管理法」と「目録
法」の講師を担当した³¹⁾。

満州図書館協会の設立と中島猶治郎

1939（康德 6）年 11 月 15 日、満州図書館協会設立趣意書が満州国及び関
東州内図書館関係者、読書人に配布された。設立事務所は新京民生部社会科
内に置かれた。同年 12 月 20 日、満州図書館協会創立総会が新京民生部講堂
において、満州の図書館 82 館と民衆教育機関 110 館が参加して開催され、
「満州図書館協会会則」が決定された。その時、中島は満州図書館協理事
及び評議員であった。1941（康德 8）年 4 月 8 日、第 1 回理事評議員合同会
議が中央銀行倶楽部で開催された。康德 7 年の決算報告、康德 8 年の予算案
審議、図書館大会開催の件、図書館員講習会等の開催、功労者表彰の件など
が議題となった。同年 4 月 19 日、満州図書館大会開催打ち合わせ会が満鉄
奉天図書館で開催された。内容は図書館大会当日の「東洋兵書展覧会」に奉
天図書館から借用出品する資料の打ち合わせであった。6 月 3 日に中島が上
記展示資料を借用するため満鉄奉天図書館に来館し、展示資料 9 部 34 冊を
借用した記録が残っている。6 月 5 日から 6 日まで、満州図書館協会第 1 回
総会・大会が奉天省公署礼堂で会員 100 名他の参加を得て盛況に開催され
た。この総会・大会は「まさに東亜図書館大会の觀をなした」といわれ、中
島はこの大会の司会を担当した。1942（康德 9）年 4 月 24 日、満州図書館協
会役員会が新京記念公会堂で開催された。中島はこの時、満州図書館協会
常務理事となっていた。なお、満州図書館協会の詳細については、中島が
1943（康德 10）年 1 月 15 日に書いた「満州図書館協会ニ就イテ」という論

31) 『「満州国」資料集積機関概観』岡村敬二著、不二出版、2004 年 6 月

なお、本稿における中島の満州国での事績は、本書に拠るものである。

文がある³²⁾。

1939（康德6）年4月に、中島は、家族（妻、長女、長男、次女、次男、三女）を新京に呼び寄せ、新京特別市慈光胡同に住居を定めた。家族到着の日に新京駅前で撮影した記念写真が残されている。1941（康德8）年に官舎が与えられ、一家は信和路第8代用官舎に引越した。中島は1942（康德9）年9月10日付で新京郊外の大同大街歡喜嶺（現在の長春市人民大街とエ星路の交差点にあたり、長春大学のキャンパスがある。）に設立された満州国建国大学の助教授として図書科に勤務することとなった³³⁾。

その後、中島は、戦線拡大を目的とするソ連の侵攻によって建国大学の崩壊を目の当たりにし、家族や隣人とともに国府軍と八路軍の戦闘に2度も遭遇した。中島も国府軍に連行されたが、短期間の拘束で釈放された。1946（昭和21）年7月、中島一家は、日本への引き揚げを開始し、南新京駅から無蓋車で奉天へ、さらに南下して営口の集中営を経て錦県にある胡廬（コロ）島駅に着いた。ここから9月1日に日本へ向け、アメリカのリバティ型貨物船で出航したが、博多港沖で長期間待たされ、10月にやっと上陸帰国することができた。

戦後の中島は、西宮市上之町に住居を定め、1946（昭和21）年10月21日に嘱託職員として関西学院に復職、館員の指導にあたり、1956（昭和31）年3月に退職した。1965（昭和40）年頃には、関西学院大学文学部、甲南大学、神戸女学院大学の講師として教鞭を執った³⁴⁾。中島は、1966（昭和41）年11月3日に勲四等瑞宝章を受けた後、同年12月17日に没している。

32) 『図書館雑誌』第37年第3号、1943年3月

33) 『建国大学年表』湯治万蔵編、1981年11月

34) 『間宮不二雄の印象』前田哲人編、1964年6月

第17号(1979年4月)³⁷⁾の巻頭言「大学における司書の教育について」は、図書館学と文献情報学の融合など図書館の将来についても具体的な課題を含んでおり、まことに示唆に富んだものである。

図書館の指針

入交光三(写真)は、1904(明治37)年5月1日兵庫県多紀郡日置村に生まれ、1918(大正7)年9月に14歳で、神戸市原田村(現在の王子公園)にあった関西学院附属図書館に就職した。大正7年当時の図書館長は W. K. マッシュスであり、入交は主任司書であった中島猶治郎と神学館の図書係をしていた堀江元三郎から図書館員としての手ほどきを受けた。その後も勤務のかたわら自己研鑽を続け、英語・ドイツ語の図書館学文献をも使いこなせるようになったという。入交が「自助の人」と言われる所以がここにある。入交は、図書館の勤務について、『図書館学とその周辺－天野敬太郎先生古稀記念論文集』(1971年6月30日)³⁸⁾に執筆した論文「'Indexing' 書誌散見－私の書誌ノートから－」の中で、「書誌や雑誌記事索引を作ったことのある人なら誰でも索引がどんなに広くて、そして深い知識と、さらに忍耐を必要とする仕事であるかを知っている。図書館でやっている整理技術も索引に関する仕事が大部分を占めているが、このような下積の仕事に対する労苦は一般には十分に理解されていない傾きがある。天野さんはこの縁の下の方持ちの仕事をも黙々として続けられ、輝かしい業績



37) 図書館報「時計台」第17号 1979年4月16日

大学図書館員は資質向上のための精進が大切であると記されている。

38) 『図書館学とその周辺－天野敬太郎先生古稀記念論文集』1971年6月30日

入交の論文は、1348 p.～1358 p.に掲載。天野敬太郎先生古稀記念会発行。

をおさめ、(以降省略)」と記述し、天野の努力を称え、図書館が個々の館員の知られざる地道な努力の上に成り立ち、それが大学の教育研究活動を支えてきたと言っている。天野敬太郎は、1901（明治 34）年、京都に生まれ、京都大学図書館司書として法経図書室に長年勤務し、関西大学図書館長、東洋大学社会学部教授等を歴任。目録法と書誌学に造詣が深く多くの業績を残した人である。

入交は、1944（昭和 19）年 4 月から、竹林熊彦司書の後任として司書心得となり、1957（昭和 32）年 6 月には司書主任になった。竹林は、1910（明治 43）年 8 月に同志社専門学校文科を卒業、ハワイの日布時事の記者を経て 1916（大正 5）年に京都帝国大学附属図書館事務嘱託となり、1925（大正 14）年 6 月には九州帝国大学司書官に就任、さらに 1939（昭和 14）年 10 月には京都帝国大学図書館の司書官に就任している。関西学院図書館司書としての勤務は短く、1 年間だけであったが、竹林が就任した理由や経緯は不明である。

図書館の蔵書は、洋書、和漢書ともに、デューイ十進分類法（Dewey Decimal Classification 略称 DDC）によって分類されている。DDC の採用は 1909（明治 42）年に始まり現在に至っているが、明治年間の日本に標準とすべき分類法が存在しなかったことに起因していると考えられる。その後、図書館の分類表は DDC 16 版（1958 年）を骨格として日本の大学図書館に適合するよう大きく改変された。この改変についての記録は残されていないが、当時の司書であった入交の考えた分類表であろうことが容易に想像できる。入交は、マシューズ館長の志を守って図書館の指針としての役割を果たし、1970（昭和 45）年 3 月、前田正治館長の時に定年退職を迎えた。学院図書館一筋に満 51 年 7 カ月勤続し、その後、黒川古文化研究所に数年間勤務、1978（昭和 53）年 6 月に学院史資料室が設置されると嘱託の主任として関西学院に再び勤務した。入交は、学院史資料室の「資料室分類表」を考案・作成し、資料整理を行った。最晩年には宝塚市立図書館初代館長に就任し、新たな仕事に着手しようとした矢先に、病を得て 1980（昭和 55）年 11 月 15 日に急逝した。入交は、関西学院在職中から図書館の全国組織である私立大学図書館協会や兵庫県大学図書館協議会において、指導的役割を

果たし、文部省主催大学図書館職員講習会の講師や、本学、桃山学院大学、大手前女子大学、神戸山手女子短期大学、明石短期大学などで非常勤講師として図書館学を担当し、後進の司書、司書教諭の養成に尽力した。また、1966（昭和41）年には、教育功労者として兵庫県知事表彰を受けている。

図書館の増築

入交の関西学院での51年間において、2回の図書館増築が行われている。これら数次の増築には入交の指導性が発揮された。第1回増築は東晋太郎館長時代であり、1955年3月に着工し、同年8月に完成した。これが以後30年間続く増築連続時期の始まりであった。第1回増築では、図書館本館（時計台）の両翼が増築された。この増築により、大閲覧室が広くなり、座席は約200名分増加し、約450席となった。書庫も3層拡張し、約5万冊の追加収容が可能になった。「関西学院新聞」第315号（昭和30年2月15日）³⁹⁾は、「図書館増築着工、完成は夏期休暇明け」と報じている。1956（昭和31）年に就任した実方清館長は、図書館の機能拡充や事務能率の増進のための施策を講じた。実方館長当時の蔵書冊数は、14万6千冊であったが、博士課程の大学院をもつ大学図書館としては最小限度30万冊をもつべきであるとして、図書費の増額や図書館の収容能力の向上を理事会に要望し続けた。第2回増築は大学が拡張期に入った楠井隆三館長時代で、1962（昭和37）年12月に着工し、1963（昭和38）年11月に完成した。この増築により、新館として第2書庫、一般出納室、目録室、一般閲覧室2階および3階を増設した。その結果、図書館は新館・旧館を合わせて2,870 m²（増築前の約2倍の大きさ）となった。

入交が76歳で他界した直後、かつて図書館司書を兼務し、親交のあった武藤誠文学部教授が、入交の人柄について、「学院人物風土記（19）－学院図書館と入交さん－」⁴⁰⁾の中で、「図書館の業務は、本来地味なものであり、そ

39)「関西学院新聞」第315号 1955年2月15日

図書館の第1回増築計画が遅れたのは、ヴォーリズ建築事務所の見積額と本学の図書館割当額との差が大きかったためであることが記されている。

40)「関学ジャーナル」No.34 1980年12月4日

ここには、入交が学生のために私費で図書館時計台に照明を取り付けたといふ

の中でも図書の分類、整理、カードの作製は、机上に積まれた図書だけを相手に終始する仕事、しかも綿密な注意を必要とする仕事で、ごまかしや、移り気は許されないから、真面目で忍耐強いことが必要である。入交さんは小さいこともいい加減に出来ない人であり、満足のいく処理が出来るまで、苦勞を惜しまぬ勤勉努力家であった。寡黙で質実の性格から人づきあいは悪いところもあったが、親しく交われれば情誼に厚い人であった。」と入交の急逝に哀惜の念を吐露している。

＼ う話が再掲されている。(当時、図書館周辺は日暮れになると足もとが暗くて学生が困ったそうである。)

資 料 編

資料編細目次

| | |
|--|-----|
| 1 施設・設備 | 299 |
| (1) キャンパスマップ | 299 |
| ①原田の森キャンパス 1913（大正 2）年 | 299 |
| ②上ヶ原移転時 1929（昭和 4）年 | 300 |
| ③西宮上ヶ原キャンパス 2012（平成 24）年 | 301 |
| ④神戸三田キャンパス 2012（平成 24）年 | 302 |
| (2) 図面類 | 303 |
| ①1974 年図書館増築工事完成図面 | 303 |
| ②1995 年新大学図書館第 1 期図面 | 305 |
| ③1997 年新大学図書館完成図面 | 307 |
| ④神戸三田キャンパス図書室図面（第 1 期 1995 年春） | 312 |
| ⑤神戸三田キャンパス図書メディア館図面（第 2 期 2001 年夏） | 312 |
| ⑥神戸三田キャンパス図書メディア館図面（第 3 期 2009 年春） | 313 |
| ⑦西宮上ヶ原キャンパス大学図書館主要施設・設備概要 （1997 年 10 月のグランドオープン時） | 315 |
| ⑧神戸三田キャンパス大学図書館分室建築の変遷 | 316 |
| (3) 新大学図書館建築関連資料 | 317 |
| ①新大学図書館建設経過年表（1984 年～1997 年） | 317 |
| ②大学図書館建設に関する第一次答申 | 320 |
| ③大学図書館建設に関する第二次答申 | 326 |
| ④収書計画書 | 336 |
| ⑤新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申 | 356 |
| ⑥新大学図書館 AV 関係充実計画書・新大学図書館学術情報 システム計画書 | 363 |
| ⑦新大学図書館利用サービスの支援体制計画書 | 376 |
| ⑧収書計画書（その 2） | 386 |
| ⑨新大学図書館、新産業研究所の基本計画および基本設計書（抜粋） | 392 |
| 2 図書館規則 | 406 |
| (1) 廃止規程 | 406 |
| ①圖書（「私立關西學院一覽 自明治三十七年四月 至明治三十八年三月」より抜粋） | 406 |
| ②私立關西學院附屬圖書館規則（「私立關西學院附屬圖書館規則 及圖書分類網目（明治 44 年刊）」より抜粋） | 406 |
| ③巡回文庫圖書貸出規則（「巡回文庫圖書目錄一覽（附貸出規則） （大正 5 年 12 月刊）」より抜粋） | 409 |
| ④關西學院附屬圖書館規則（「關西學院一覽 （昭和 4 年 9 月 26 日發行）」より抜粋） | 410 |
| ⑤關西學院圖書館規則（「利用者用リーフレット（昭和 5 年 4 月）」 より転載） | 412 |

| | | |
|-----|---|-----|
| ⑥ | 關西學院規程のうち圖書館関連規程（「關西學院一覽 昭和十四年十月（創立第五十年）」より抜粋） | 415 |
| ⑦ | 關西學院圖書館規則（「利用者用リーフレット（昭和10年1月）」 より転載） | 420 |
| ⑧ | 移動圖書館貸出規程（昭和20年6月4日） | 423 |
| ⑨ | 共同研究室圖書分置規程（昭和28年2月） | 424 |
| ⑩-1 | 図書館規定（昭和37年4月1日施行） | 425 |
| ⑩-2 | 図書館規定（昭和41年4月1日施行） | 429 |
| ⑪-1 | 図書館視聴覚室専門委員会規定（昭和49年2月8日施行） | 434 |
| ⑪-2 | 大学図書館視聴覚室専門委員会規程（昭和51年1月9日改正施行） | 435 |
| ⑪-3 | 大学図書館視聴覚室専門委員会規程 （昭和58年10月1日改正施行） | 436 |
| ⑫ | 図書館図書費海外持出しに関する了解事項（昭和48年6月15日） | 437 |
| ⑬-1 | 視聴覚資料利用規程（昭和51年4月1日施行） | 438 |
| ⑬-2 | 視聴覚資料利用規程（昭和55年4月1日改正施行） | 439 |
| ⑭ | 特殊資料利用規程（昭和51年11月19日施行） | 441 |
| ⑮ | 視覚障害者読書室利用細則（暫定）（昭和56年9月8日施行） | 442 |
| (2) | 旧規程 | 443 |
| ① | 関西学院図書管理規定（昭和46年4月1日施行） | 443 |
| ② | 総合図書館規程（昭和50年7月10日施行） | 447 |
| ③ | 大学図書館運営委員会規定（昭和49年6月7日施行） | 448 |
| ④ | 大学図書館規程（昭和51年1月9日施行） | 449 |
| ⑤ | 大学図書館利用規程（昭和51年1月9日施行） | 451 |
| ⑥ | 大学図書館分置図書規程（昭和51年12月3日施行） | 454 |
| ⑦ | 貴重図書・資料利用規程（昭和51年11月19日施行） | 455 |
| (3) | 現行規程 | 456 |
| ① | 現行規程リスト | 456 |
| ② | 図書管理規程（2013年4月1日改正施行） | 458 |
| ③ | 総合図書館規程（1997年4月1日改正施行） | 462 |
| ④ | 大学図書館運営委員会規程（2005年4月1日改正施行） | 463 |
| ⑤ | 大学図書館規程（2013年4月1日改正施行） | 465 |
| ⑥ | 大学図書館利用規程（2013年4月1日改正施行） | 467 |
| ⑦ | 大学図書館分置図書規程（1998年4月1日改正施行） | 473 |
| ⑧ | 貴重図書・資料利用規程（2013年4月1日改正施行） | 474 |
| (4) | 主要学院外規程等（現行規程） | 476 |
| ① | 私立大学図書館協会会則 | 476 |
| ② | 兵庫県大学図書館協議会規約 | 482 |
| ③ | 関西四大学図書館長会議規約 | 484 |
| ④ | 西宮市立図書館と関西学院大学図書館との相互協力の申し合わせ （1998年4月1日実施） | 485 |
| ⑤ | 大学図書館近畿イニシアティブ運営要綱（平成24年7月4日改訂） | 489 |
| ⑥ | EUIJ 関西・大学図書館相互利用協定延長に関わる覚書 （2013年3月31日まで） | 492 |

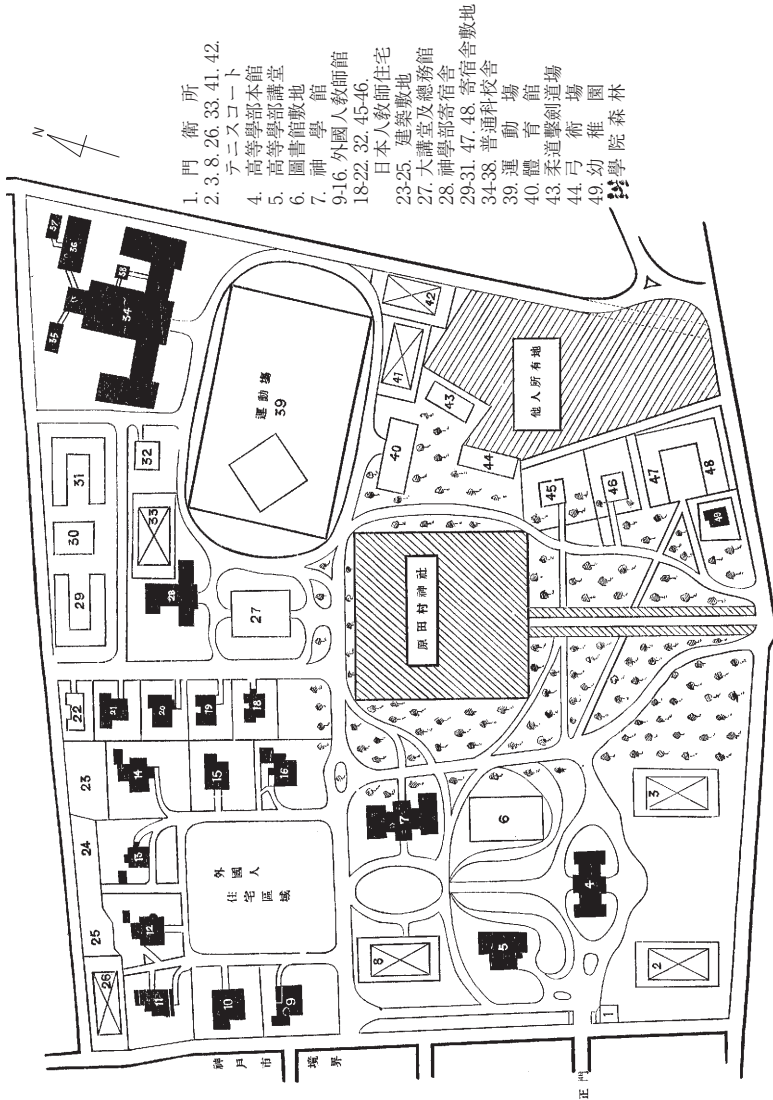
| | | |
|-----|---------------------------------|-----|
| 3 | 図書費 | 494 |
| (1) | 図書費予算 | 494 |
| (2) | 経常図書費以外の図書費予算 | 495 |
| 4 | 運営 | 496 |
| (1) | 議事録等 | 496 |
| ① | Library Advisory Committee 議事録 | 496 |
| ② | 図書館委員会・図書館運営委員会議事等 | 541 |
| ③ | 大学図書館運営委員会議事等 | 553 |
| (2) | 図書館組織図、組織・課名変遷 | 577 |
| ① | 1929（昭和4）年度 | 577 |
| ② | 1947（昭和22）年度 | 577 |
| ③ | 1951（昭和26）年度 | 577 |
| ④ | 1954（昭和29）年度 | 578 |
| ⑤ | 1958（昭和33）年度以降 | 578 |
| 5 | 要員 | 579 |
| (1) | 図書館長一覧 | 579 |
| (2) | 司書一覧 | 580 |
| (3) | 次長・事務部長一覧 | 580 |
| ① | 次長 | 580 |
| ② | 事務部長 | 581 |
| (4) | 図書館員数 | 582 |
| ① | 1918（大正7）年度～1983（昭和58）年度 | 582 |
| ② | 1984（昭和59）年度～2012（平成24）年度 | 583 |
| (5) | Library Advisory Committee 委員一覧 | 584 |
| (6) | 大学図書館運営委員会委員・視聴覚室専門委員会委員一覧 | 591 |
| 6 | 蔵書・資料 | 602 |
| (1) | 蔵書冊数（図書） | 602 |
| (2) | 雑誌資料所蔵・継続受入タイトル数 | 603 |
| (3) | 寄贈図書資料一覧 | 604 |
| (4) | 特別図書費等購入資料一覧 | 608 |
| (5) | 大学図書館のコレクション－特別文庫、その他特色ある貴重資料群－ | 610 |
| (6) | 古文書史料所蔵点数 | 618 |
| 7 | 利用 | 619 |
| (1) | 相互利用件数 | 619 |
| (2) | レファレンス質問件数（上ヶ原） | 622 |
| (3) | 利用統計 | 623 |
| ① | 旧図書館時代（1938年度～1978年度） | 623 |
| ② | 旧図書館時代（1979年度～1994年度） | 625 |

| | |
|--|-----|
| ③新大学図書館時代（1995 年度～2012 年度） | 626 |
| ④神戸三田キャンパス大学図書館分室（1995 年度～2012 年度） | 627 |
| 8 刊行物 | 628 |
| 冊子目録一覧 | 628 |
| 9 展示 | 630 |
| （1）特別展示および学術資料講演会 | 630 |
| （2）展示企画一覧 | 638 |
| 10 システム | 644 |
| （1）図書ブロック基本構想書（抜粋）（1985 年 10 月） | 644 |
| （2）図書システム開発運用状況 | 651 |
| （3）図書システム概念図 | 653 |
| 11 整理 | 654 |
| （1）外部委託によるフルマーク処理件数 | 654 |
| （2）外部委託による整理冊数 | 655 |
| 12 館員育成 | 657 |
| （1）関西四大学図書館職員研修 | 657 |
| （2）図書館職員の発表論文等 | 673 |
| （3）職員研修：宿泊研修および講演会 | 677 |
| 13 対外業務・活動 | 681 |
| （1）兵庫県大学図書館協議会 | 681 |
| ①阪神間図書館協議会々則 | 681 |
| ②兵庫県大学図書館協議会会則（昭和 28 年 5 月 26 日改正） | 682 |
| ③兵庫県大学図書館協議会規約（昭和 46 年 5 月 24 日施行） | 682 |
| ④兵庫県大学図書館協議会研修・研究委員会規則 （昭和 46 年 5 月 24 日施行） | 684 |
| ⑤兵庫県大学図書館協議会議題（第 2 回～第 20 回） | 685 |
| ⑥兵庫県大学図書館協議会研修会・研究会 （1988 年以降の関西学院大学図書館担当分） | 689 |
| （2）私立大学図書館協会 | 691 |
| ①私立大学図書館協会関係の活動記録 | 691 |
| ②私立大学図書館協会研究会等の発表記録 | 693 |
| （3）関西四大学図書館長会議 | 696 |
| 14 その他 | 740 |
| （1）J. C. C. Newton 賞応募数・受賞者一覧 | 740 |
| （2）関西学院大学リポジトリ統計 | 742 |
| 15 関西学院新聞に見る図書館関連記事（1922 年～1985 年） | 743 |

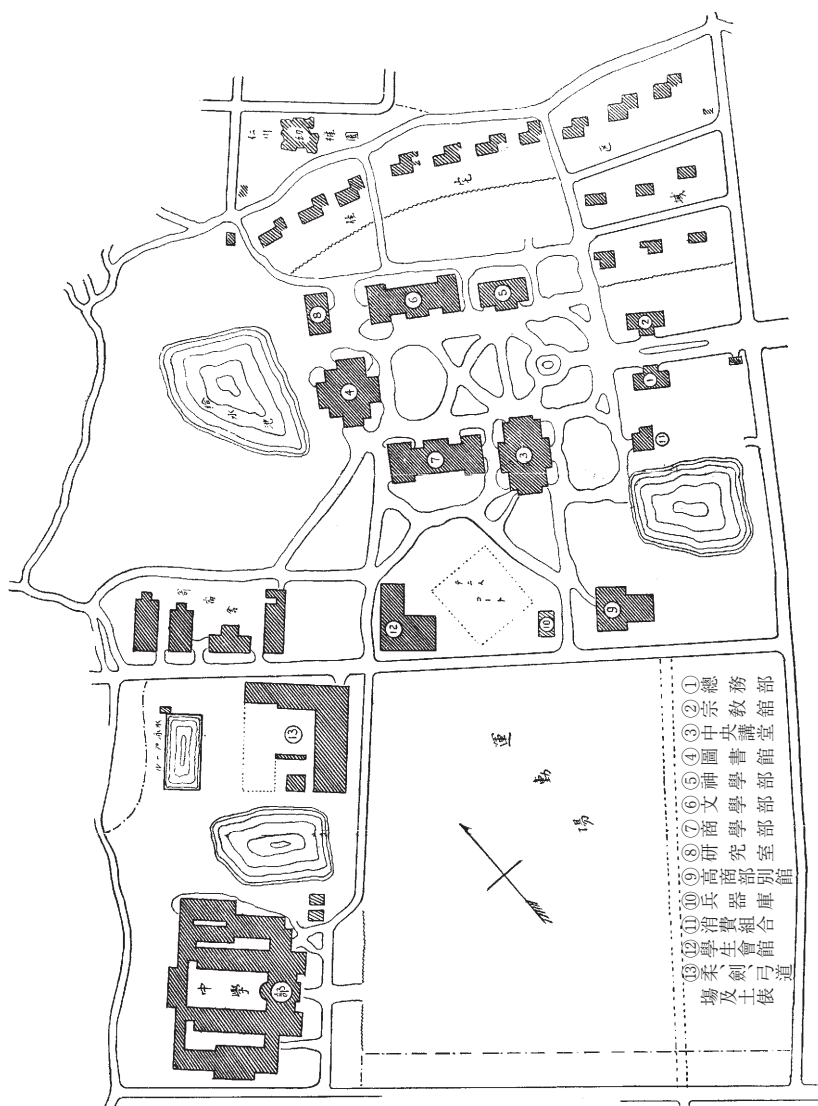
1 施設・設備

(1) キャンパスマップ

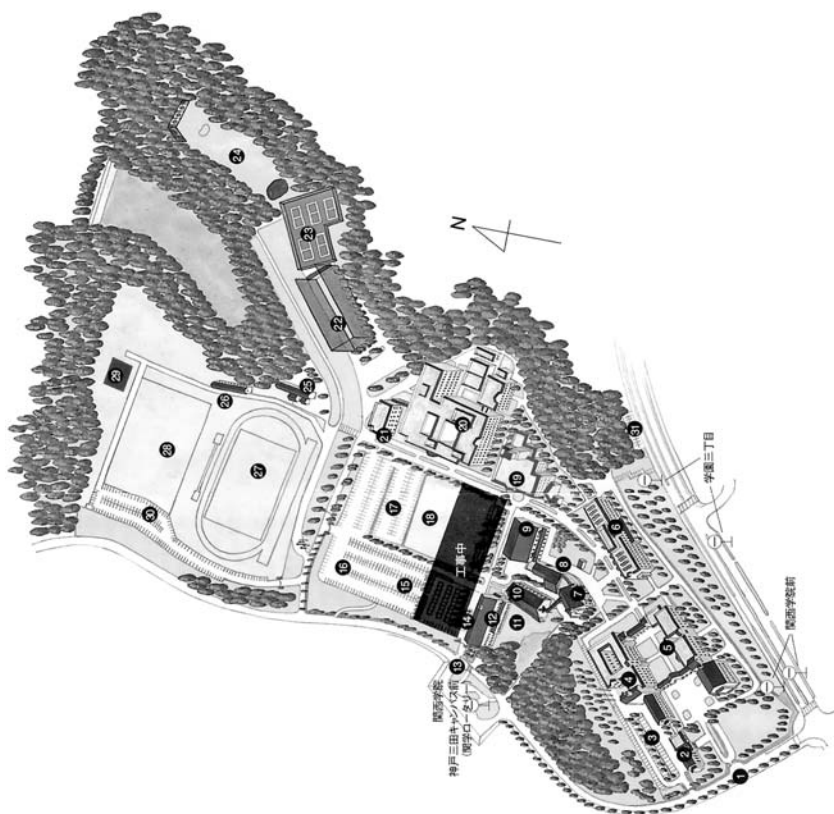
①原田の森キャンパス 1913（大正2）年



②上ヶ原移転時 1929（昭和4）年



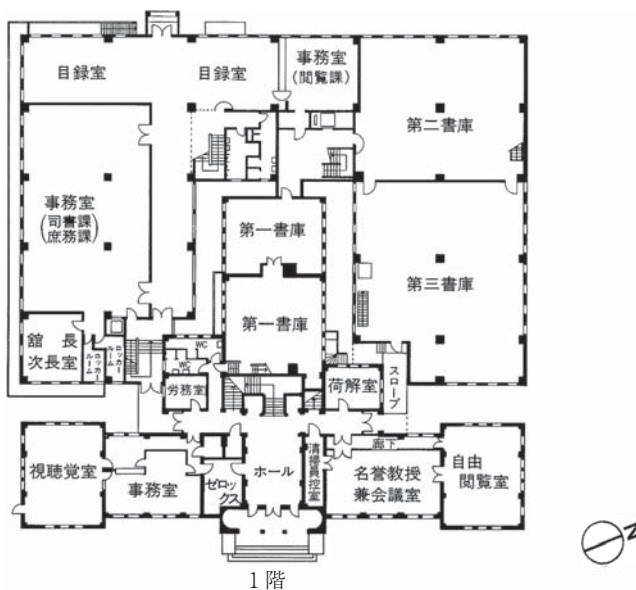
④神戸三田キャンパス 2012（平成 24）年

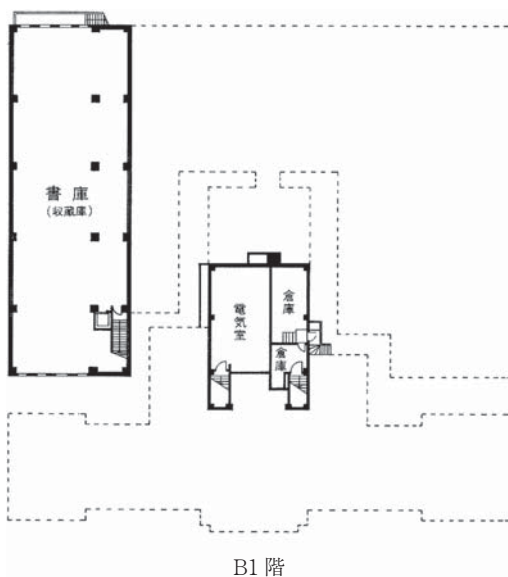
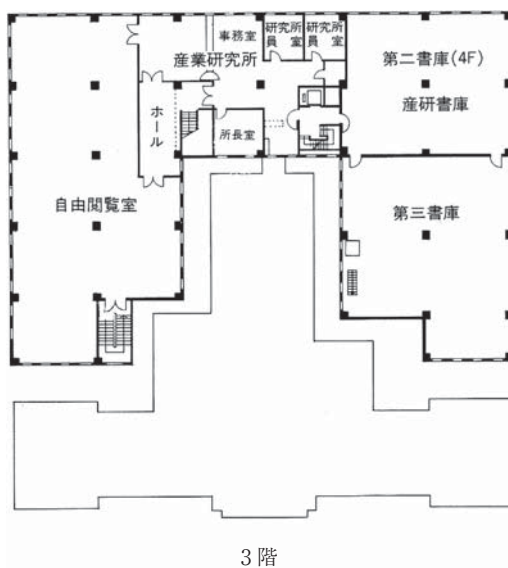


- ① 正門
- ② 神戸三田キャンパス ランバ(記念)校舎
- ③ 1号館(総合政策学部)
- ④ 1号館(総合政策学部)学生相談室、キャンパス(総合政策学部)学生相談室、総合政策センター分室 (キャンパス自立支援室)
- ⑤ 2号館(総合政策学部)
- ⑥ 3号館(総合政策学部)
- ⑦ 第一厚生棟(Lunch Box(食堂)、Toy Box(物販))
- ⑧ Central Garden
- ⑨ 体育館
- ⑩ 第三厚生棟(Colorful Box(コベニ)、Sun Cafe、Free Box(学生ホール))
- ⑪ Sky Garden
- ⑫ 第二厚生棟(Fresh Box(食堂)、ラウンジ、保健館分室、総合支援センター分室(学生支援相談室))
- ⑬ 西門
- ⑭ ショールーム(学生用)
- ⑮ 駐輪場
- ⑯ 理工学部学生駐輪場
- ⑰ 理工学部学生駐輪場
- ⑱ 理工学部学生駐輪場
- ⑲ 理工学部学生駐輪場
- ⑳ 理工学部学生駐輪場
- ㉑ 理工学部学生駐輪場
- ㉒ 理工学部学生駐輪場
- ㉓ 理工学部学生駐輪場
- ㉔ 理工学部学生駐輪場
- ㉕ 理工学部学生駐輪場
- ㉖ 理工学部学生駐輪場
- ㉗ 理工学部学生駐輪場
- ㉘ 理工学部学生駐輪場
- ㉙ 理工学部学生駐輪場
- ㉚ 理工学部学生駐輪場
- ㉛ 理工学部学生駐輪場
- ㉜ 理工学部学生駐輪場
- ㉝ 理工学部学生駐輪場
- ㉞ 理工学部学生駐輪場
- ㉟ 理工学部学生駐輪場
- ㊱ 理工学部学生駐輪場
- ㊲ 理工学部学生駐輪場
- ㊳ 理工学部学生駐輪場
- ㊴ 理工学部学生駐輪場
- ㊵ 理工学部学生駐輪場
- ㊶ 理工学部学生駐輪場
- ㊷ 理工学部学生駐輪場
- ㊸ 理工学部学生駐輪場
- ㊹ 理工学部学生駐輪場
- ㊺ 理工学部学生駐輪場
- ㊻ 理工学部学生駐輪場
- ㊼ 理工学部学生駐輪場
- ㊽ 理工学部学生駐輪場
- ㊾ 理工学部学生駐輪場
- ㊿ 理工学部学生駐輪場

(2) 図面類

①1974 年図書館増築工事完成図面





②1995 年新大学図書館第 1 期図面

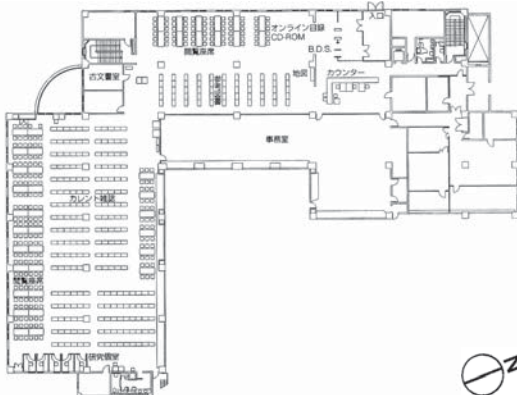
1 階

○配架資料

参考図書 10,000 冊
 (辞書、事典、目録類)
 白書
 地図
 カレント雑誌 5,000タイトル
 新聞 22 紙

○主要施設

総合カウンター
 レファレンス・カウンター
 閲覧席
 オンライン目録 (5 台)
 CD-ROM 用端末 (7 台)
 マイクロリーダー・プリンター
 古文書室
 貴重図書室
 研究個室 (5 室)
 コピー機



2 階

○配架資料

一般図書 100,000 冊
 (社会科学／自然科学)
 参考図書 7,000 冊
 (辞書、事典類)
 視覚資料
 新書・文庫
 ブラウジング図書
 新着図書
 加除式図書 (判例集等)
 点字図書

○主要施設

貸出・返却カウンター
 閲覧席
 AV プース
 オンライン目録 (3 台)
 検索用端末 (1 台)
 視覚障害者読書室
 研究個室 (5 室)
 コピー機

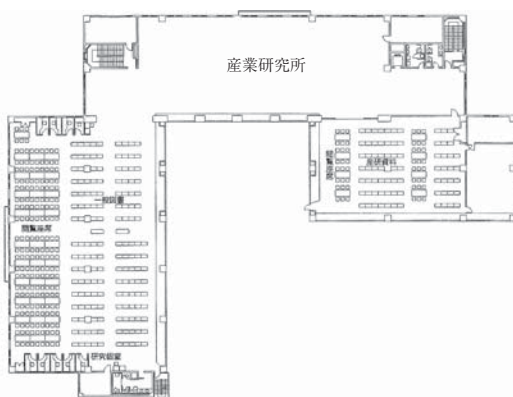


3 階

○配架資料
一般図書 70,000 冊
(総記／人文科学)
参考図書 6,000 冊
(書誌類)

○主要施設
閲覧座席
オンライン目録 (3 台)
研究個室 (9 室)

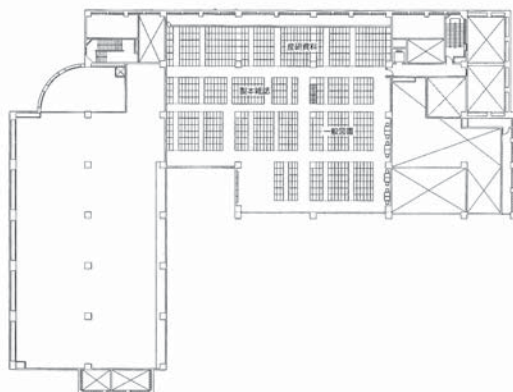
産業研究所



BM 階

○配架資料
一般図書 80,000 冊
(社会科学)
和装本
製本雑誌 60,000 冊

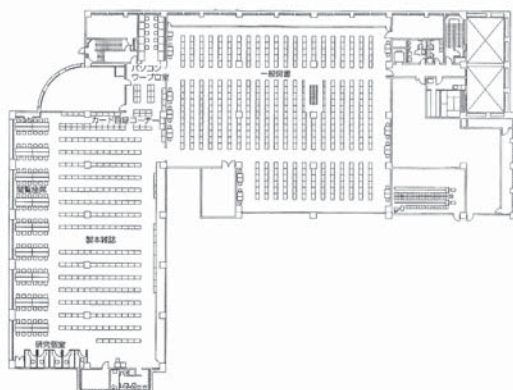
○主要施設
集密書庫
特別文庫書架
準貴重図書書架
オンライン目録 (1 台)



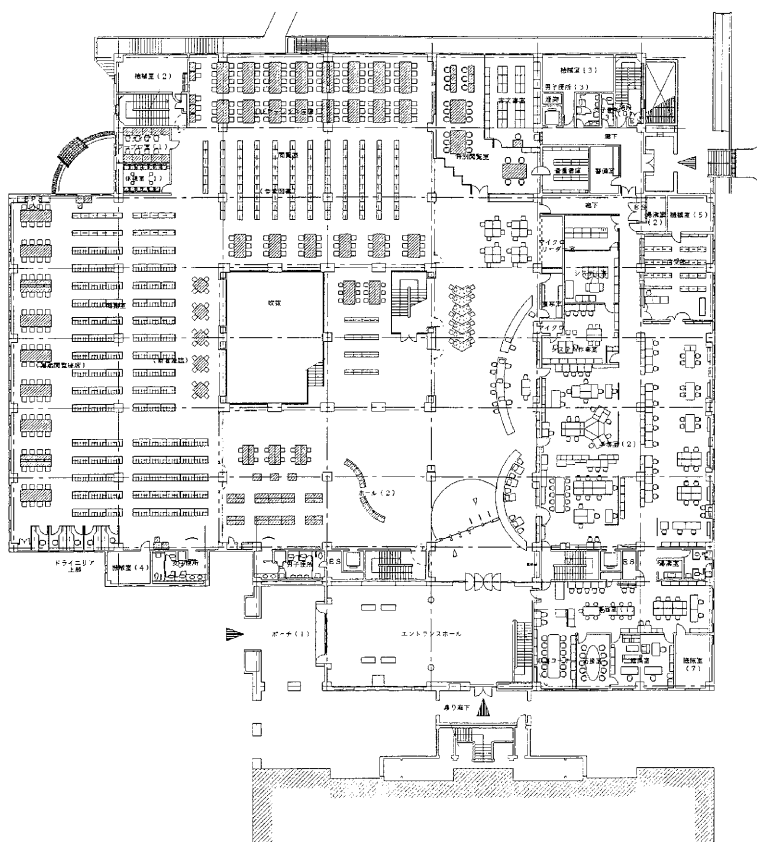
B1 階

○配架資料
一般図書 170,000 冊
(総記／人文科学／自然科学)
製本雑誌 70,000 冊

○主要施設
閲覧座席
パソコン・ワープロ室 (10 席)
オンライン目録 (2 台)
カード目録コーナー
研究個室 (5 室)
コピー機

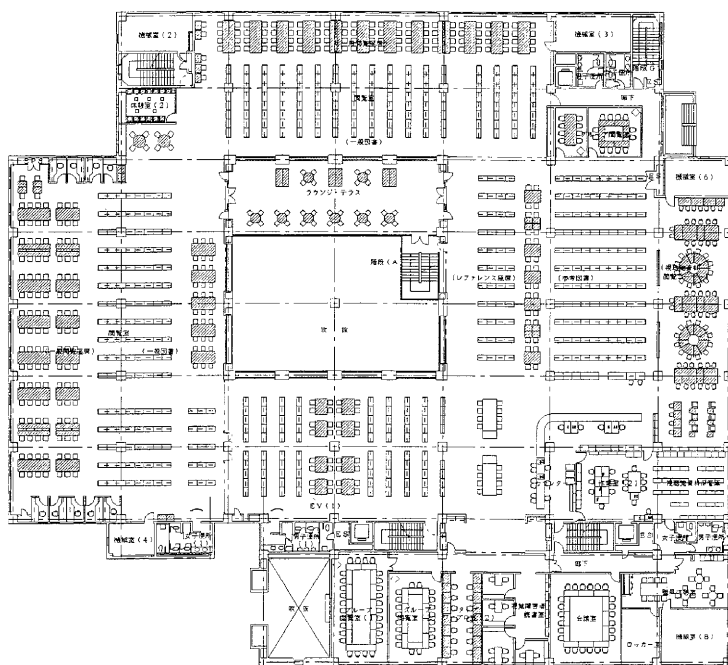


③1997 年新大学図書館完成図面

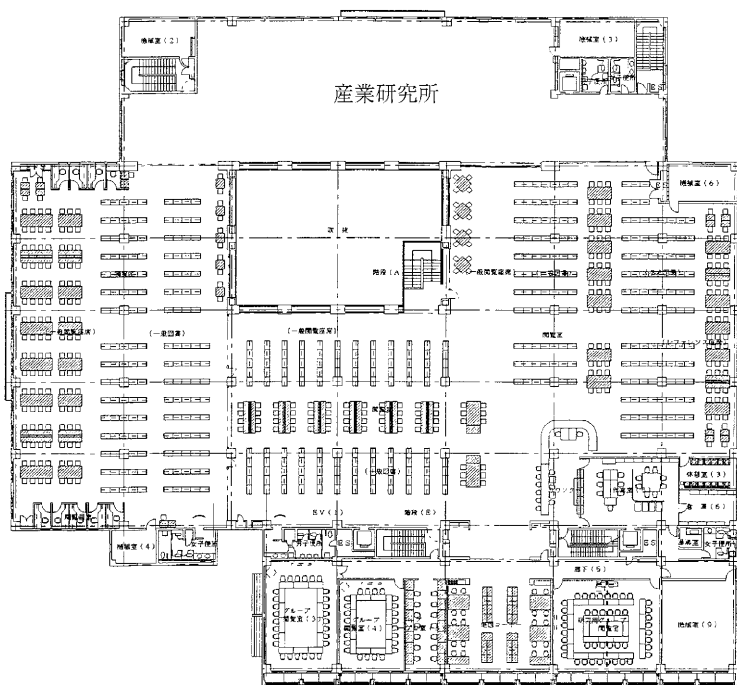


1 階

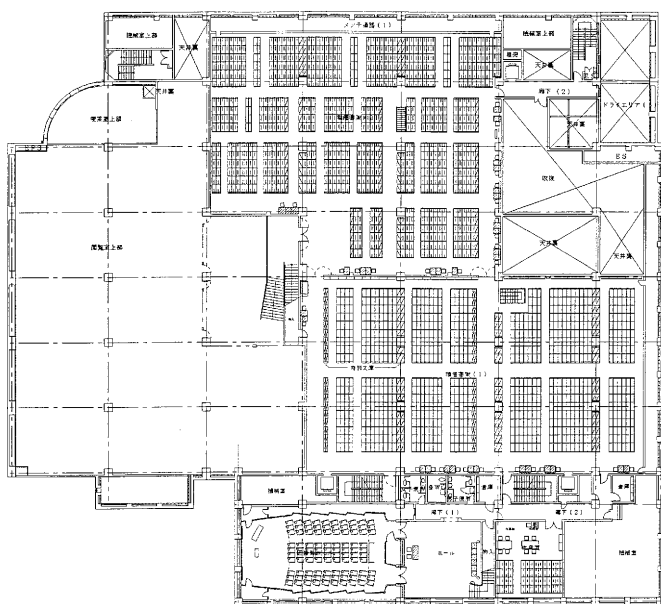




2階



3階



BM 階

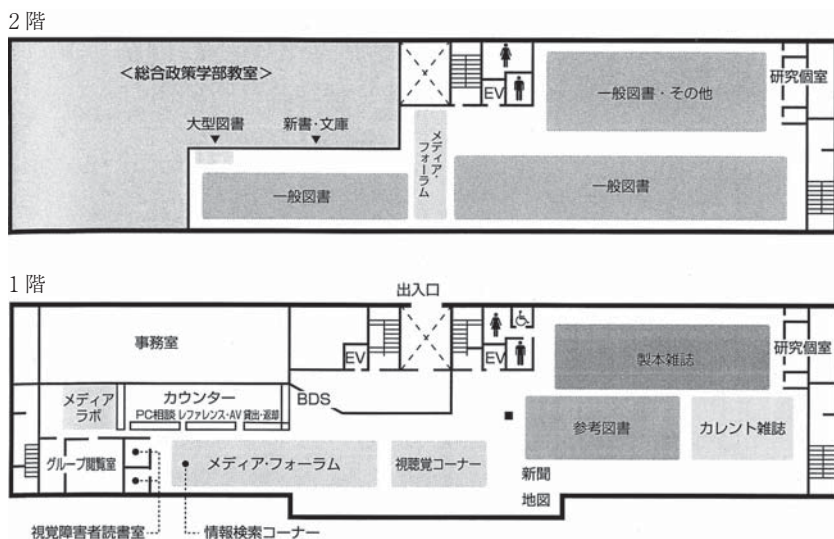
④神戸三田キャンパス図書室図面（第1期1995年春）

*図書室は、Ⅱ号館の1階、2階部分である。



⑤神戸三田キャンパス図書メディア館図面（第2期2001年夏）

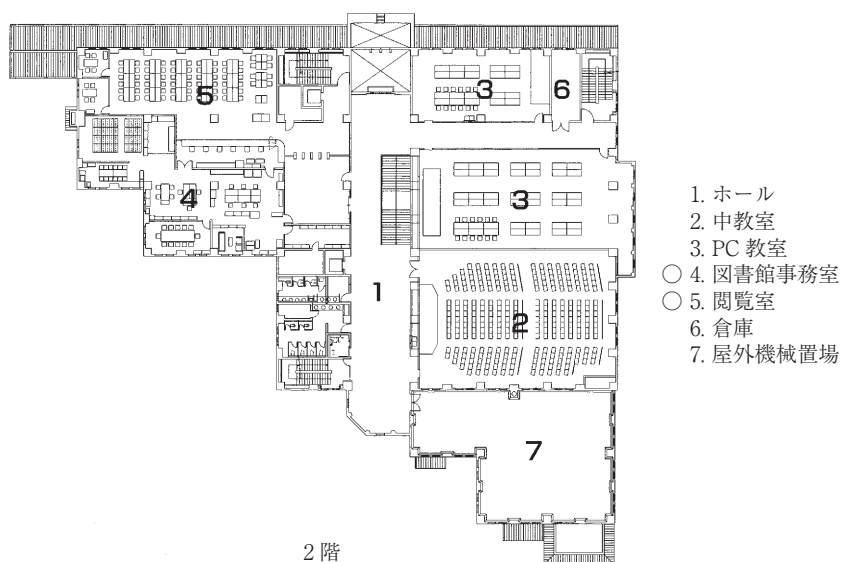
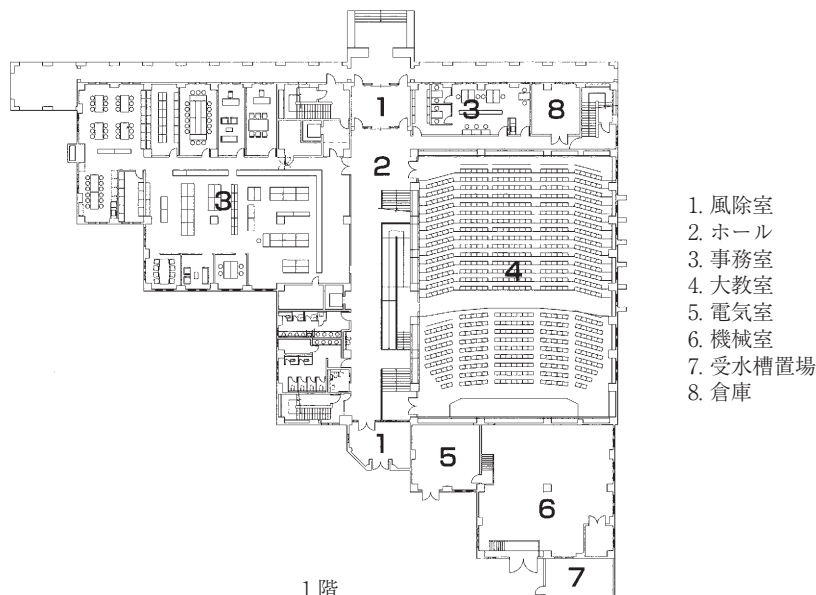
*図書メディア館は、Ⅲ号館の1階、2階部分である。

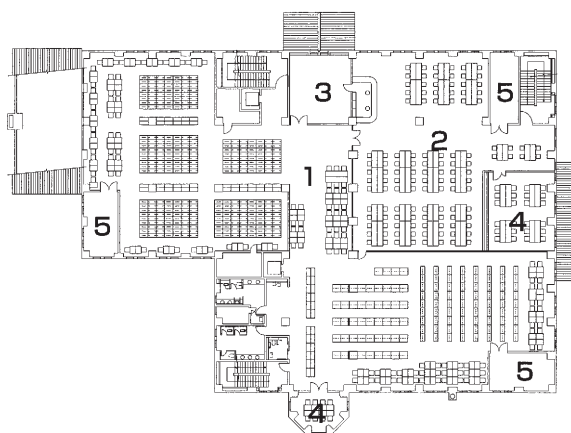


⑥神戸三田キャンパス図書メディア館図面 (第3期 2009年春)

*図書メディア館は、Ⅵ号館の2階一部分と3、4階部分である。

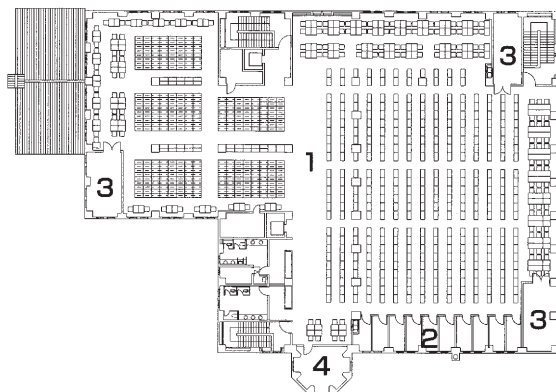
*図書メディア館部分は、各階数字前に○で表した。





- 1. 閲覧室
- 2. メディアフォーラム
- 3. サーバー室
- 4. グループ閲覧室
- 5. 機械室

3階



- 1. 閲覧室
- 2. 研究個室
- 3. 機械室
- 4. 倉庫

4階

⑦西宮上ヶ原キャンパス大学図書館主要施設・設備概要
(1997年10月のグランドオープン時)

| 階 | 床面積 (m ²) | 室名 | 席数 | 資料収容能力 | | |
|-----|-----------------------|--------------------|-------|----------|-----------|--------------|
| B2階 | 1,249 | 工機械室 | | | | |
| B1階 | 3,658 | 座席(製本雑誌) | 108 | 80,000 | 冊 | |
| | | 積層書架 | 28 | 430,000 | 冊 | |
| | | 研究個室(5室) | 5 | | | |
| | | パソコン室 | 10 | | | |
| | | 喫茶室 | 33 | | | |
| BM階 | 2,539 | 図書館ホール | 100 | | | |
| | | 積層書架(上層) | 28 | 530,000 | 冊 | (産業研究所資料を除く) |
| 1階 | 4,119 | ホール | 12 | | | |
| | | レファレンスコーナー | 22 | | | (検索用座席を含む) |
| | | 座席(参考図書) | 165 | 30,000 | 冊 | |
| | | 座席(カレント雑誌) | 92 | | | |
| | | 新聞コーナー | 12 | | | |
| | | 研究個室(5室) | 5 | | | |
| | | パソコン室 | 8 | | | |
| | | 特別閲覧室 | 18 | 10,000 | 点 | (貴重書庫・古文書書庫) |
| | | ニューメディア座席 | 16 | | | |
| | | 休憩室 | 13 | | | |
| 2階 | 3,823 | 座席(社会科学) (自然科学) | 315 | 220,000 | 冊 | |
| | | レファレンスコーナー | 26 | | | (検索用座席を含む) |
| | | 研究個室(9室) | 9 | | | |
| | | パソコン室 | 14 | | | |
| | | 視聴覚資料利用コーナー | 77 | | | |
| | | 視覚障害者読書室(4室) | 10 | | | (点字図書) |
| | | グループ閲覧室(4室) | 68 | | | |
| | | ラウンジ | 32 | | | (カレント雑誌、図書) |
| | | 休憩室 | 13 | | | |
| 3階 | 2,974 | 座席(人文科学) | 282 | 200,000 | 冊 | |
| | | レファレンスコーナー | 28 | | | (検索用座席を含む) |
| | | 研究個室(9室) | 9 | | | |
| | | パソコン室 | 14 | | | |
| | | 地図コーナー | 20 | | | |
| | | グループ閲覧室(3室) | 96 | | | |
| | | 休憩室 | 13 | | | |
| | | 産業研究所 | | | | |
| | 926 | | | | | |
| R階 | 298 | EV機械室 | | | | |
| 計 | 19,586 | | | 図書 | 1,500,000 | 冊 |
| | | 座席 | 1,624 | 雑誌 | 6,000 | 誌 |
| | | 視聴覚座席 | 77 | 新聞 | 40 | 紙 |
| | | | | マイクロフィルム | 100,000 | 巻 |
| | | | | 視聴覚資料 | 50,000 | 点 |

⑧神戸三田キャンパス大学図書館分室建築の変遷

| 名称 | 神戸三田キャンパス図書室（大学図書館分室、メディア・フォーラム） | 神戸三田キャンパス図書メディア館（大学図書館分室、情報システム室分室） | 神戸三田キャンパス図書メディア館（大学図書館分室、情報システム室分室） |
|-----------|--|--|---|
| 設立の理由 | 1995 年 4 月 総合政策学部開設 | 神戸三田キャンパス第 2 期整備計画（2001 年夏理理学部の上ヶ原からの移転） | 神戸三田キャンパス第 3 期整備計画（総合政策学部、理工学部の学科増設、学科改組による定員増） |
| 開室期間 | 1995. 4～2001. 7 | 2001. 9～2009. 1 | 2009. 3. 30～ |
| 場所 | Ⅱ号館の 1 階、2 階 | Ⅲ号館の 1 階、2 階 | Ⅵ号館の 2 階、3 階、4 階 |
| 面積 | 1,236 m ² | 3,009.89 m ² | 3,968.73 m ² |
| 書架の収容力 | 7 万冊 | 27 万冊 | 40 万冊 |
| 座席数 | 213 席（総座席数、PC、AV 席含む） | 435 席（総座席数、PC、AV 席含む）ほとんどの座席に情報コンセントを設置 | 528 席（総座席数、PC、AV 席含む）無線 LAN、一部情報コンセント |
| PC 台数 | 36 席（メディア・フォーラムに設置） | 90 席 | 122 席 |
| メディア・ラボ | PC 14 台、ワークステーション、ビデオ編集機、ビデオダビング機、DTP 用 PC 各 1 台 | PC 8 席 | なし（Ⅲ号館マルチメディアルーム等に機能移転） |
| 視聴覚ブース | 37 席（LL 5 席、VTR 10 席、LD/CD 22 席） | 48 席（VTR 20 席、LD/CD 10 席、DVD 10 席、MD 3 席、LL 5 席） | 42 席（VTR 12 席、LD/CD 5 席、DVD 23 席、MD 1 席、LL 1 席） |
| OPAC 用 PC | 8 台 | 5 台 + メディアサーバ用 PC 3 台 | 7 台 |
| グループ閲覧室 | 1 室 | 2 室（10 人用、24 人用） | 2 室（10 人用、36 人用） |
| 視覚障がい者読書室 | 2 室（対面朗読室と呼称） | 2 室 | 2 室 |
| 研究個室 | なし | 10 室（1F 5 室、2F 5 室） | 10 室（4F） |
| 新聞閲覧座席 | 4 席 | 8 席 | 8 席 |
| 地図閲覧座席 | なし | 4 席 | なし |
| 引越期間 | | 2001 年 7 月 29 日～9 月 9 日 | 2009 年 1 月 30 日～3 月 29 日 |

(3) 新大学図書館建築関連資料

①新大学図書館建設経過年表 (1984 年～1997 年)

* 太字資料は後掲

| 年 | 月日 | 図書館の動き | 備考 | |
|------|------|--------|---|---|
| 1984 | 昭和59 | 5 月 | 「大学図書館施設改善の検討について(要望)」を学長に提出 (具体的建設計画促進のための新委員会設置の要望書) | 大学図書館長から学長に提出 |
| 1985 | 昭和60 | 3 月 | 大学図書館問題検討委員会発足 委員会の下に作業委員会を設置 | 大学評議会で設置承認(昭和 59 年 12 月 7 日) 委員会:委員長学長代理、各学部から 1 名の計 7 名、大学図書館運営委員から 1 名、教務部長、大学図書館長、副館長、大学図書館次長 作業委員会:教員 2 名、大学図書館職員 8 名、大学事務室課長 |
| 1986 | 昭和61 | 6 月 | 「大学図書館建設に関する第一次答申」を学長に提出 | 大学図書館問題検討委員会から学長に提出 |
| 1987 | 昭和62 | 3 月 | 「大学図書館建設に関する第二次答申」を学長に提出 | 大学図書館問題検討委員会から学長に提出 大学評議会で承認され大学案となる(6 月) |
| 1987 | 昭和62 | 6 月 | 大学諸施設検討委員会第三部会発足(学長代理以下 15 名) | 大学図書館問題検討委員会の改組 |
| 1987 | 昭和62 | 9 月 | 図書館問題検討委員会(略称:院連)の設置 (理事長・院長以下 16 名で構成) | 大学と学院の双方で検討する場 |
| 1988 | 昭和63 | 8 月 | 新図書館建設検討委員会(略称:院連)の下に実務委員会(館長以下 24 名)を設置 | 図書館問題検討委員会の名称変更 |
| 1988 | 昭和63 | 10月 | 理事会はアドバイザーとして元大阪大学附属図書館長関集三氏(元本学理学部教授)と筑波大学助教授富江伸治氏の委嘱を承認 | |
| 1988 | 昭和63 | 11月 | 「収書計画書」を作成 | 大学図書館作成 |
| 1988 | 昭和63 | 12月 | 新大学図書館管理運営問題検討委員会発足 | 大学評議会で設置承認 委員会:委員長大学図書館長、学長代理、教務部長、大学諸施設検討委員会第三部会選出委員、学長直属選出委員、各学部長、各学部選出委員、各研究所選出委員、大学図書館選出委員 事務局:大学図書館運営課 |

| 年 | 月日 | 図書館の動き | 備考 |
|------|------------------|---|--|
| 1988 | 昭和63 12月 | 〈討議資料〉「新大学図書館における利用サービスと管理運営」を全教職員に配布 | 新大学図書館管理運営問題検討委員会作成 |
| 1989 | 平成元 3月 | 「新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申」を学長に提出 | 新大学図書館管理運営問題検討委員会作成 |
| 1989 | 平成元 5月 | 「新大学図書館 AV 関係充実計画書」、「新大学図書館学術情報システム計画書」を学長に提出 | 新大学図書館管理運営問題検討委員会作成 |
| 1989 | 平成元 9月 | 「新大学図書館利用サービスの支援体制計画書」を学長に提出 | 新大学図書館管理運営問題検討委員会作成 |
| 1989 | 平成元 9月8日 ～18日 | アメリカ・カナダ大学図書館の視察 7月「新大学図書館建設に伴う米国の図書館視察計画書」作成 1990年3月「アメリカ・カナダ図書館視察報告書」作成 | 第三部会作業委員会メンバーを中心に教員2名、図書館員4名、施設部2名、㈱日本設計1名、富江アドバイザーが派遣された |
| 1989 | 平成元 10月 | 「新大学図書館の基本計画および基本設計書（案）」を作成 | 大学諸施設検討委員会第三部会作成 |
| 1990 | 平成2 1月 | 「収書計画書（その2）」を作成 | 大学図書館作成 |
| 1990 | 平成2 5月 | 「新大学図書館、新産業研究所の基本計画および基本設計書」を学長に提出 | 大学諸施設検討委員会第三部会作成 理事会で承認 |
| 1990 | 平成2 8月 | 建設準備工事：法学部旧本館、第2別館解体工事開始 | |
| 1991 | 平成3 4月 | 兵庫県による風致地区に伴う制限のため工事条件が提示され、工事は中断 | |
| 1993 | 平成5 2月 | 建設準備工事：周辺樹木の移植工事再開 | |
| 1993 | 平成5 7月 | 建設準備工事：第5別館一部解体改修工事、第1期工事開始 | |
| 1995 | 平成7 5月 | 新大学図書館アート検討委員会の発足、12月に委員会の下に新大学図書館アート選定委員会を設置 | 検討委員会：コンビナー副学長、大学図書館長、教員3名、施設部長、㈱日本設計、大学図書館事務部長 選定委員会：委員長大学図書館長、副学長、教員2名、施設部長、㈱日本設計 事務局：大学図書館運営課 |
| 1995 | 平成7 8月 | 第1期建設工事完成 | |
| 1995 | 平成7 7月末 ～9月 | 第1期移転作業 | |
| 1995 | 平成7 10月 | 第1期開館 | |
| 1995 | 平成7 10月 | 第2期工事開始 | |
| 1997 | 平成9 3月 | 第2期移転作業 | |
| 1997 | 平成9 7月 | 第2期工事完成 | |

| 年 | | 月日 | 図書館の動き | 備考 |
|------|------|--------------|-------------------------|----|
| 1997 | 平成 9 | 7 月末 ～9 月 | 第 3 期移転作業 | |
| 1997 | 平成 9 | 9 月 25 日 | 新大学図書館竣工式、内覧会を実施 | |
| 1997 | 平成 9 | 10 月 | 新大学図書館グランドオープン | |
| 1997 | 平成 9 | 10 月 29 日 | 新大学図書館開館記念式典を時計台 2 階で実施 | |

②大学図書館建設に関する第一次答申

昭和61年6月12日

学 長 武 田 建 殿

大学図書館問題検討委員会

委員長 今田 寛（学長代理）

| | | |
|-----|-------------|-----------|
| 委 員 | 宮谷宣史（神） | 小玉新次郎（文） |
| | 芝田正夫（社） | 黒田展之（法） |
| | 安井修二（経） | 町永昭五（商） |
| | 鈴木啓介（理） | 磯 博（図・運委） |
| | 森本好則（教務部） | 金子精次（図書館） |
| | 塩谷 滋（図書館） | 尼子卓司（図書館） |
| | 野村 晃（大学事務室） | |

大学図書館建設に関する第一次答申

本第一次答申は、これまでの経過の説明、現図書館建物・施設の問題点、新大学図書館建設の必要性、新大学図書館の構想、の四部分と別表とから構成されている。

I. 第一次答申作成に到るまでの経過

大学図書館の施設改善については、現図書館施設の増築申請が昭和57年1月25日付で大学図書館長より学長に対して行なわれ、また、同年9月3日の大学評議会において、大学の教育研究施設整備充実計画の重要な一項目として学習図書館建設構想が承認され、おおよその建物位置と建設順序が決定された。この学習図書館建設構想と現図書館増築計画は、別個の手続で計画が進められようとしたものであるが、その基本的な考え方は、現図書館の狭隘化および利用環境の改善の方策を、学習図書館部分と研究図書館部分という機能面で分離させるという形で対処しようとしたものである。ところが、この二つの計画が大学で公表されて以来、果して大学図書館を二分するような形で計画を進めていってよいかという意見が学内で起ってきた。そのもっとも大きな論点は、以下の3点であった。

1. 大学図書館を建物上の制約から学習機能と研究機能に分け、資料と利用者を分離できるのかという問題
2. 建物を分離することによる図書館運営上の非効率性の問題
3. 一方で大学の教育研究施設検討委員会において学習図書館建設の検討が進められ、他方で図書館増築について、別途大学図書館と学院の間で直接計画が進められることによる調整の困難さの問題

これらの問題をふまえ、昭和 59 年 5 月 15 日付で大学図書館長から新たに大学諸施設検討委員会委員長（学長）宛に「大学図書館施設改善の検討について（要望）」が提出され、これを受けて昭和 60 年 5 月 10 日の大学評議会において、それまで大学諸施設検討委員会第二部会（教育施設検討委員会）において検討が進められる予定であった学習図書館建設計画を上記委員会から切り離し、大学図書館問題検討委員会（昭和 59 年 12 月 7 日大学評議会で設置が承認）に移管して大学図書館充実の一環として検討することが決定された。

そこで、本委員会では、この学習図書館建設計画と現図書館増築計画を合わせて大学図書館の施設改善計画として抜本的に検討することになり、以来、8 回の会合を重ねるとともに委員会の下に作業委員会を設け慎重に検討作業を重ねた結果、ここに大学図書館建設に関する第一次答申を提出することになった。

Ⅱ. 現大学図書館建物・施設の問題点

現図書館の建物・施設については、以下に述べるように、機能上さまざまな問題が挙げられる。その根本的な原因は、上ヶ原キャンパスに図書館が建設されて以来すでに 57 年を経しており、建物自体の老朽化、狭隘化が進んでいることである。また、この間の数次にわたる増改築により、建物構造が複雑で、利用しにくいものとなっている。さらに一方で、図書館機能が質・量ともに変化しており、現在の建物ではすでに大学図書館としての機能を十分に果すことができないのが実情である。

1. 利用者に対するサービス提供の問題

第一点は、開架室の問題である。現在の開架室は、従来、書庫であったものを転用して設置しており、開架室面積は少なく、多くの構造上の問題を生じている。現在の開架室で収容できる図書・資料の総冊数は約 3 万 5 千冊が限界であり、開架閲覧座席も僅か 38 席を設置しているのみである。約 1 万 5 千人の利用者を対象とする大学図書館の開架スペースには、20 万冊以上の図書・資料が必要とされている。

第二点としては、雑誌室の問題がある。雑誌室は、閲覧室の一部分を転用して設置しており、開架室と同様に閲覧スペースの狭隘化は深刻な問題となっている。展示雑誌も、本来であれば 5,000 タイトルは必要であるにもかかわらず、1,200 タイトルが限度であり、雑誌閲覧座席も僅か 14 席しか設置できず、他大学に類を見ないほど閲覧条件は劣悪なものとなっている。また、製本雑誌を保存するための雑誌専用書庫が設置されていないために、書庫が各階に分散しており、利用上および出納作業上、非効率なものとなっている。

第三点は、閲覧座席の問題である。閲覧座席数は、開架閲覧室・雑誌閲覧室を含め 1,500 席以上を必要とするが、現状では、1,000 座席程度を提供しているにすぎない。しかも、閲覧室、閲覧座席等設備・備品は不十分で閲覧環境は劣悪と言わざるを得ない。

第四点は、情報化時代の新しいサービスへの対応が遅れている問題である。コン

ピュータを利用した情報検索は図書館の新しい不可欠な機能となってきたが、そのためのスペースの確保が困難である。また、マイクロ資料の閲覧施設・設備が貧弱で、資料及び利用の増加に対処できない。

第五点は、利用カウンターの問題である。現図書館では施設条件が悪いため、利用者、資料、カウンターの関連を機能的に配置できず、利用者にとって非効率なものとなっている。たとえば、利用者が文献調査をする場合、参考図書、目録類が集中的に配架されておらず、カウンターも各所に分散し不便な状況となっている。

また、現図書館施設には障害者に対する配慮が十分なされていないのも問題のあるところである。

その他、館内にロビー、ラウンジ等の施設がないために、閲覧室に騒音が持ち込まれ、学習・研究環境の質的な低下を招いている。

2. 書庫の狭隘化と図書・資料の保存の問題

現在、図書館に登録されている図書・資料は約 70 万冊であり、毎年約 3 万 7 千冊の図書・資料が増加している。所蔵冊数は、すでに書庫の適正収容冊数を越え、その結果、図書・資料を主題別に配架することが不可能となり、一部の図書・資料を別置せざるを得ない状況となっている。そのために利用者にとっては書庫内検索が困難であり、業務上の効率も悪くなっている。また、現在約 22 万冊の図書・資料を各学部等に分置しているが、本来であれば利用度の低い分置図書・資料は、大学図書館に引き取り、全学的に利用すべきである。しかしながら、書庫の狭隘化に伴って、昭和 58 年度からは引き取りを中止せざるを得ない状況である。図書・資料の増加傾向は、今後ますます高まることが予測され、抜本的に収容冊数の拡大を計る必要がある。

次に図書・資料の保存上の問題について触れておきたい。図書館では貴重図書・古文書・特別文庫・マイクロ資料等を所蔵しており、その保存については、資料の適切な保管状態を維持するために特別の施設を必要とする。特に貴重図書のように学術的な価値とともに文化遺産としての意味を持つ資料については、恒久保存の義務があり、保存上、細心の配慮が必要である。しかしながら現状では、そういった機能をもつ施設が不十分であり、破損、虫喰等さまざまな保存上の問題がある。

3. 事務管理上の問題

事務管理スペースは、業務の多様化とそれに伴う業務量の増加に伴って狭隘化が一層進んでいる。それに加えて、現図書館には、会議室・荷受室・応接室等の基本的な施設がなく、既存の施設を併用しており、このことがより一層、事務管理スペースの狭隘化を進めている。

Ⅲ. 新大学図書館の必要性

1. 新時代の大学図書館

大学図書館は「大学の研究・教育に不可欠な図書館資料を効率的に収集・組織・保管し、利用者の研究・教育・学習等のための利用要求に対し、これを効率的に提供することを主要な機能」（大学基準協会「大学図書館基準」）としている。この機能を発揮するには、同基準で示されているように「現在および将来の研究計画を促進するのに十分な規模・内容」を整備する必要がある、大学の教育研究の発展に伴って、大学図書館の充実計画は絶えず検討されるべき課題である。

また、今日の情報化社会においては、図書・資料の量的拡大と資料形態の多様化、各種の国内外のデータベースの整備、学術情報システムに代表される国内外の多種多様な図書館・情報センターとのネットワーク化の進展、情報検索の機械化などの新しい動向に大学図書館は的確に対応し、新時代にふさわしい規模と内容をもつ図書館へ脱皮することが急務となっている。

大学図書館はまた、図書・資料を仲介にした“知的交流”の場でもある。とりわけ、学生にとっては日常の学習・研究の場であり、個人閲覧用の設備だけでなくグループ学習・研究のためのスペースを提供することも、これからの大学図書館にとって重要である。

2. 新大学図書館建設の必要性

本学図書館においても、学生・教職員数の増加、利用者ニーズの拡大・多様化などに対して、これまで実施されてきたサービスを更に発展・充実する必要性がある。一例を示せば、図書・資料の整備、閲覧環境の改善、開館時間の延長、障害者サービスの拡充、情報検索機能の強化などの問題がある。新時代の要請に応え、既存のサービスを充実させるためには、本学図書館の抜本的な改革が焦眉の問題となっている。

ところが、現図書館は、前述のように、主に建物の規模・構造の面から、館内のさまざまな改善努力にもかかわらず、機能を十分に果せない状況におかれている。現図書館は、昭和4年建設以来、増改築を重ねており、上述の諸課題を解決するための抜本的な増改築は、もはや不可能な状態である。他施設と同様再整備の時期にきているといつてよい。

また、先に構想された学習図書館計画は、単に図書館の規模を大きくし、現在のサービスの一部を新図書館に移すにすぎない。このため、1. 学習部門と研究部門を建物上二分しても、図書・資料と利用者は分離できず、サービス提供上不都合が予測されること、2. 建物を分離することにより効率的な運営が困難になること、3. 前述の諸課題に対し、総合的な改善計画にはなりえないこと、などの理由からこの計画では新時代の動向に対応し、全学の教育研究活動から生まれる利用要求に十分応えうるシステムづくりは望めない。

他大学をみると、1980年代にはいり、本学と同等の規模をもつ数多くの大学が、新しい課題に対処するために、かなりの規模と内容をもった新図書館を建設している（別表）。また、今後計画している大学も少なくない。本学の場合、図書館の整備については他大学にくらべて遅れていた事実を認めざるをえない。

以上のような理由から、本委員会は、情報化時代に適合し、7学部7大学院研究科を有する伝統ある本学の教育研究活動を担うことのできる規模と内容をもった新図書館の早期建設が必要であるとの結論に達した。また、新図書館建設は単に建物づくりにとどまらず、同時に本学における資料・情報の収集・提供システムの総合計画立案を含むものとなるべきである。

IV. 新大学図書館の構想

本委員会は細目についてもすでに検討を進めているが、本第一次答申では新大学図書館の大枠について以下のように提案する。

1. 基本構想

- ①新しい時代に対応し、教職員・学生が利用しやすい機能的な大学図書館をめざす。
- ②研究図書館機能と学習図書館機能の兼備・充実をねらい、建物上の分離はおこなわない。
- ③全学の図書・資料の集中化を原則とする。ただし、必要な限りでの分置は可能とする。
- ④書架は開架式と閉架式の併用を前提とするが、開架部門を強化する。
- ⑤閲覧用の座席数は学生数の10%以上とする（「私立大学図書館改善要項」）。
- ⑥展示雑誌のタイトル数を大幅に増加する。
- ⑦レファレンス・サービスを強化する。
- ⑧総合的な利用サービスおよび業務の機械化をはかる。

2. 規模

- ①延床面積 約 20,000 m²

（地上4階、地下2階程度の建物とする。建物の高さ制限の緩和については関係諸官庁との交渉が必要であろう。）

※建物面積の積算基礎となる新図書館の各部門の面積についても本委員会で検討したが、ここでは総面積のみをかかげる。

- ②収容可能図書・資料数

200万冊（うち開架図書・資料20万冊）

- ③閲覧座席数 約 1,500 席

3. 建設位置

大学図書館は、大学の教育研究の中核となる設備であり、キャンパスの中央に位置することが望ましい。本委員会は、教育研究施設の整備充実計画も考慮し、A～C号館（仮称）完成のあと撤去される予定の現第2別館の跡地およびその周辺部分を含めた区域が最適であるとの結論をえた。なお、建物延床面積を約2万 m²とした場合、現第2別館のほか学部棟の建替え時に仮事務室として予定している法学部旧館（昭和60年5月10日、大学評議会承認）をも撤去しなければならないので、この点特別な配慮をする必要があろう。

4. 建設時期

先に述べたように、現図書館は収容能力をはじめとしてさまざまな面において十分に機能を果たすことが困難になってきており、一刻もはやく新図書館建設計画の策定が望まれる。図書館は単なる建物ではなく、資料収集・提供のシステムであり、全学の学術情報センターである。その建設にあたっては、綿密な準備と研究が不可欠である。他大学においても、建築委員会が設けられてから完成まで相当長い準備期間を要している。

以上のことから、本学においても、早急に建設の意思決定をおこない、きたる創立100周年（1989年）の際には、遅くとも実施設計段階を完了していることが望まれる。そして、1990年代の早い時期に「21世紀を展望した大学図書館」として、世界に誇りうる実態を備え、本学の学術研究・教育の一層の発展に寄与する「関西学院大学図書館」を建設することを本委員会は強く要望する。

（（別表）他私大新築図書館の規模 略）

③大学図書館建設に関する第二次答申

昭和62年3月24日

学 長 武 田 建 殿

大学図書館建設に関する第二次答申

大学図書館問題検討委員会

- 委員長 今田 寛（文学部教授・学長代理）
- 委 員 宮谷 宣史（神学部教授）
- 〃 小玉新次郎（文学部教授）
- 〃 芝田 正夫（社会学部助教授）
- 〃 黒田 展之（法学部教授）S 62. 2. 28 まで
- 〃 前野 育三（法学部教授）S 62. 3. 1 より
- 〃 安井 修二（経済学部教授）
- 〃 町永 昭五（商学部教授）
- 〃 鈴木 啓介（理学部教授）
- 〃 磯 博（文学部教授・図書館運営委員）
- 〃 森本 好則（経済学部教授・教務部長）
- 〃 金子 精次（経済学部教授・大学図書館館長）
- 〃 塩谷 滋（文学部教授・大学図書館副館長）
- 〃 尼子 卓司（大学図書館次長）
- 〃 平井 佑二（大学図書館運営課課長）
- 〃 松尾 繁晴（大学図書館整理課課長）
- 〃 野村 晃（大学図書館閲覧課課長）
- 〃 釣部 完治（大学事務室課長）

はじめに

本委員会は昨年6月12日に「大学図書館建設に関する第一次答申」を提出し、これは7月4日の大学評議会で承認された。他方、将来計画委員会の答申が7月1日に提出されその中の図書館構想との関連が問題となったため、大学図書館問題調整委員会がつくられ、その調整結果が本年1月9日の大学評議会で承認された。以上の経過をふまえて、本委員会は作業を進めここに第二次答申を提出する。

第二次答申は、新大学図書館建設基本計画、新大学図書館の機能、新大学図書館の建設概要、建設時期、建設に伴う管理運営の課題、の五部分から構成されている。

本委員会としては、新大学図書館建設に関する相当詳細な内容をこの第二次答申にもりこむことができたと考えているので、今後早急に然るべき機関において検討が加えら

れ、具体的な建設の歩みが一刻も早く始まることを希望しておきたい。

I. 新大学図書館建設基本計画

本委員会の第一次答申で述べたように、大学図書館は「大学の研究・教育に不可欠な図書館資料を効率的に収集・組織・保管し、利用者の研究・教育・学習等のための利用要求に対し、これを効果的に提供することを主要な機能」（大学基準協会「大学図書館基準」）としている。また、情報化・国際化が急速に進む今日の社会においては、「学術情報システム」（注：文部省が推進している学術情報全国総合目録の形成、情報検索および相互利用システム）への参加、国内外のデータベースの利用、他大学の図書館や情報センターとのネットワークの構築、情報検索の機械化など、図書館の新しい動向に的確に対応し、利用者へのサービスをより一層拡大することが急務である。

以上のことから、本委員会が早期建設を提案した新大学図書館を「本学の研究・教育・学習活動を資料・情報提供の面で支援し、情報化時代にふさわしい新しいサービスを取りいれることによって、多様な利用要求に確実に応え、これらの諸活動の一層の発展を支えるために十分な資料と施設・機器および職員とを備えた大学図書館」と規定したい。

なお、建設位置に関して、大学図書館は大学の教育・研究の中核となる施設であることから、新大学図書館はキャンパスの中央に位置するのが望ましいと考える。（建設位置図参照）

新大学図書館の基本計画を述べる前に、これからの大学図書館の在り方について述べておきたい。

大学図書館は所蔵する学術図書・資料（1次資料）を中心とした建物設備（ハードウェア）と、目録・書誌に代表される2次情報（データ）、および運用をする事務組織（ソフトウェア）によって構成される。従来の図書館は学術図書・資料の収集・整理・保存・提供にその主力がそそがれていた。しかし近年急速に発達してきた情報処理技術によって、機械可読目録の作成・利用が可能となり、質の高い2次情報を迅速に検索したいとの要求が拡大している。このような変化に対応して行くためには、現在手作業に頼っている図書館業務にコンピュータと図書管理システムを導入しなければならない。すなわち学術情報としてのデータと図書・資料および施設を効果的に運用するためのソフトウェアの比重が大きくなってきたわけである。さらに、最近のニューメディアの進歩は資料形態の多様化をもたらし、図書館は図書・資料に対する従来の考え方の大幅な変更を余儀なくされる。そしてこのような図書以外の1次資料の収集・整理・提供にも対応していかなければならない。

以上のような点から新大学図書館の理念を4つの役割に集約する。

1. 学術資料・情報センターとしての大学図書館

学術図書資料・情報の収集

2. 利用しやすい機能的な大学図書館

図書・資料の提供、利用環境の整備

3. 情報化に対応した大学図書館

「学術情報システム」への参加、2次情報の提供・利用

4. 知的交流・創造の場としての大学図書館

知的生産活動の支援

次に、新大学図書館の理念を4つの役割に従って具体的に述べてみたい。

1. 学術資料・情報センターとしての大学図書館

新大学図書館は、利用者が必要とする学術図書・資料およびその情報を収集し、利用者に迅速かつ効果的に提供することをその第一の役割とする。「学術情報システム」のネットワーク化が整備される将来においても、1次資料である図書・資料の収集・所蔵の役割は必要とされる。

本学の実学研究にとって、よりの確かな蔵書内容を構成するために、学術図書・資料の収集体制の強化をしなければならない。すなわち、収集・選択の材料となる出版情報の網羅的な収集、学術研究動向の把握をし、迅速に的確な図書・資料の収集を計ることである。特に学術図書・資料の重要な部分をしめる逐次刊行物の収集体制の改善、書誌・参考図書および学習用図書・資料の飛躍的な充実や、本学の研究・教育にふさわしい特色のあるコレクションの収集は十分に考慮されなければならない。また、電子出版など、新しいメディアによる学術図書・資料の収集も十分に考慮し、これらの図書・資料を提供するために、各種のメディアに対応した機器の整備が求められる。

以上のような学術図書・資料収集の役割を担っていくためには、現在、各部局でおこなわれている収集の実情を把握し、全学的な収集体制の確立や分置図書制度の見直しが必要である。

2. 利用しやすい機能的な大学図書館

新大学図書館は利用しやすい機能的な図書館を目指し、利用者中心の施設・機器を充実整備する。利用者にとって利用しやすいとは、なによりも求める資料に近づきやすいということである。そのためには、まず、学習用図書を中心とした開架室の抜本的な改革、学術用雑誌の全面開架、書庫内検索の拡大、閲覧座席の増加、利用動線の重視が求められる。

次に、貸出・返却業務の迅速化・省力化やニューメディアを活用した新しい目録情報の提供などによって機能的な大学図書館を実現する。また図書館の利用条件（開館日・開館時間・貸出条件など）も、利用者中心の観点から再検討が加えられなければならない。学術用図書・資料や学習用図書・資料に近づくために、利用者への援助活動としてのレファレンスサービスの強化は必須条件である。それは学生・教職員向けのガイダンス、書誌・所蔵・所在情報をはじめとする2次情報検索に及ぶ。このようなレファレンスサービスができる専門職員の養成と組織化をする必要がある。

その他、障害者サービスの充実、閲覧個室や書庫内キャレルの設置、カウンターの集中化などを計画したい。

3. 情報化に対応した大学図書館

新大学図書館が本学における学術情報センターの役割を担って行くためには、図書館専用大型コンピュータが必須とされる。現図書館では事務機械化に伴う図書システムが昭和 65 年 4 月に稼働する予定であるが、データベースの蓄積という図書システムの性格上、共用コンピュータではもはや対応できなくなっていることが予測される。

図書館専用大型コンピュータの導入によって、図書システムによる本学書誌・所蔵データベースの構築、「学術情報システム」とのデータ交換、相互貸借システムへの参加がより効率化する。また、学内の部局図書室・研究所・研究室とのオンライン化、国内外のデータベースとのネットワーク化などを、統合しながらより効率的なシステムへと進化させることができる。加えて、新しい機器の配置に柔軟に対応できるように、建物の設計にあたって留意しなければならない。それはシステムがハードおよびソフトの両面において絶えず更新されていく可能性を持っているためである。

4. 知的交流・創造の場としての大学図書館

新大学図書館は、本学の教職員・学生に図書・資料を媒介として「知的交流・創造の場」として活用されることによって初めて生きた図書館となる。そのために、教職員・学生の共同研究・共同学習の場としてグループ閲覧室、研究・学習レポート作成のための各種プロセッサなどの機器、研究発表などのできる多目的ホール、ゆったりとした設備、各種のくつろげる空間の配置が必要である。さらに、今後進展するであろう国際交流に伴い諸外国の研究者や留学生の研究・学習活動を支援し、知的交流の場としても活用されるようになるであろう。また、この新大学図書館は学外研究者や近隣の住民にも可能な限り開放されなければならない。

II. 新大学図書館の機能

I の新大学図書館建設基本計画で述べた 4 つの役割を実現するためには、収容可能図書・資料数 200 万冊、閲覧座席数 1,500 席以上を備え付けることのできる延床面積 20,000 m² 規模の新大学図書館の建設が必要である。これにより、近年の学術情報の量的拡大や、研究分野の広がりに伴う利用者ニーズの高質化、多様化に十分対応しうる大学図書館として機能することが可能となる。以下に新大学図書館が果す機能のうち主たる点について述べる。

1. レファレンス機能の強化

多種、多様な学術図書・資料の収集、整理、保存、提供は、図書館機能の中で基本的なものである。また、目録、参考図書、書誌等を利用しての 2 次情報提供サービスの充

実も、研究・教育・学習活動をより効果的に進めるうえで大変重要な図書館機能といえる。そのため新大学図書館では、このレファレンス機能の強化、充実を行なう。レファレンス機能の強化のために、新大学図書館の1階部分に目録、参考図書、書誌等の検索用ツールを約50,000冊集中して開架式で配架するとともに、そのための利用座席を90席設置する。また、優秀なレファレンサー、情報検索用端末機を配置することにより、利用者へのレファレンス機能を高める。

2. 学術雑誌の充実

学術雑誌を中心とする逐次刊行物は、利用者に最新の情報を提供するための重要な資料であり、情報活動が強調される今日、その資料価値はますます高まっている。新大学図書館では、学術雑誌を中心とする逐次刊行物の収集・整理体制を充実するとともに、1階部分に利用度の高い製本雑誌50,000冊と5,000タイトルの未製本雑誌をレファレンスコーナーに隣接して開架式で備え付ける。また、この資料を利用するための閲覧座席を100席設置するとともに、複写機等も近接して備え付け閲覧環境の整備、充実を行なう。

3. 開架室機能の拡充

新大学図書館では、主として学部学生を利用対象とする開架室を抜本的に拡充し、利用しやすい機能的なものとする必要がある。開架室は2階および3階部分に設け、カリキュラムに沿って収集された学習用図書および辞書、事典を中心とした学習用参考図書を10万冊、学習用雑誌300タイトルを全て開架式で配架することになる。また、ニューメディアに対応した機器もここに設置する。さらに利用目的に応じた約1,000席の閲覧座席を資料と共に有機的に配置し、利用効率を高める。

4. 情報検索サービスの徹底

情報化時代の新大学図書館としては、館内に利用者用端末機を十分に配置し、学内外の学術情報を合理的、効率的に検索できるように配慮する。また、貸出・返却をはじめとする業務の機械化も計り、利用しやすい図書館にすることが重要である。新大学図書館の完成時には、学内の部局図書室・研究所・研究室に備え付けられた端末機から図書情報の検索が行なえるようにする。そのため、新大学図書館の4階部分にシステム室を設け、そこに図書館専用大型コンピュータの設置とシステム要員の配置を行なわねばならない。

5. その他の機能

上記以外にも、グループ研究・討議が行なえるグループ閲覧室、静かな環境で研究ができる教員・大学院生用個室および閲覧室や研究論文・リポート作成のためにタイプライター、ワープロなどを設置した資料作成室などを設ける。また、図書館オリエンテーションをはじめ、講演会、プログラム活動のために視聴覚機器などを完備した図書館

ホールを設ける。その他、長時間にわたる図書館利用者のために喫茶コーナー、喫煙可能な休憩室も用意し、図書館の中にやすらぎの場ももたせる。

以上のように新大学図書館では、新しい時代に対応することのできる多様な機能を充実させる。

Ⅲ. 新大学図書館の建設概要

1. 建設位置

建設位置に関して、本委員会は第一次答申に「大学図書館は、大学の教育研究の中核となる設備であり、キャンパスの中央に位置するのが望ましい。・・・教育研究施設の整備充実計画も考慮し、A～C号館（仮称）完成のあと撤去される予定の現第二別館跡地およびその周辺部分を含めた区域が最適である」と述べた。これを受けて検討の結果、新大学図書館は現第二別館および法学部旧館を含めた場所を建設位置として提案する（建設位置図参照）。この位置に新しい構想による新大学図書館が建設されれば、今後検討が進められる現図書館の跡利用も含め、広い意味での研究エリアとなり、本学の教育研究により寄与すると考える。

2. 延床面積・建築面積

新大学図書館における延床面積は 20,000 m² とし、建築面積を 3,500 m² とする。建設位置および高さ制限を考え建物は地上 4 階、地下 2 階とする。各階の面積は、書庫部門の地下 1 階と地下 2 階を各 4,500 m²、研究機能が集中する地上 1 階を 3,500 m²、学習部門と事務管理部門が入る 2・3・4 階をそれぞれ 2,500 m² とした（階層レイアウト図の面積の項参照）。地下部分の面積を地上部分より大きく確保したのは、隣接建物との距離を考慮したことおよびキャンパス空間の有効利用を考えたからである。

3. 階層レイアウト

新大学図書館の概要は、地上 4 階、地下 2 階と前項で示したが、Ⅰ. 新大学図書館建設基本計画、およびⅡ. 新大学図書館の機能、で述べている方針に従って各階別の階層レイアウト図を作成した。この階層レイアウトの基本は、利用者を中心として考えたものである。

具体的にいえば次のとおりである。

- ①新大学図書館においては、学部学生の利用が急増すると予想されるため、エントランスホール（入口）は学習部門のある 2 階に設け、学部学生の動線を最短にする。
- ②研究部門（1 階）、書庫部門（地下 1・2 階）と学習部門（2・3 階）を合理的に配置することにより各部門における利用者動線と図書・資料動線を短かくし、図書・資料の利用・検索効率の向上を計る。

- ③研究部門と書庫部門を近接させることにより、書庫内検索がスムーズに行われるようにする。
- ④事務管理部門は本来1階部分にあることが望ましいが、利用者を中心に考えた場合、少々の不便は伴っても4階に集中して配置する。ただし、利用サービスを行う閲覧課は1・2階に配置する。

以上の他、図書館ホールは、音響・照明などを考慮して地下1階に置き、外部からも直接入室できる構造が望ましいと考えた。

4. 主要施設および備品

新大学図書館に設置する主要施設および備品については、主要施設・備品面積一覧表に示したとおりである。その中でも、出納効率を高めるため、書庫とサービス窓口をつなぐ自走式搬送設備、マイクロ資料自動搬出装置、BDS（図書・資料無断持出防止装置）、入館者チェックシステムの設置は規模の大きい新大学図書館では必須のものである。また、情報検索機能の飛躍的な向上と図書業務の合理化・効率化のために、図書館専用大型コンピュータと多数の端末機を設置する。その他、図書・資料の適正な保存を行なうための燻蒸設備や、利用者用複写機・ワープロなど、最新の機器やグレードの高い備品を導入する。

(建設位置図 略)

(階層レイアウト図 略)

IV. 建設時期

第一次答申で述べたように、現大学図書館は収容能力と機能面において限界に近づいており、一刻も早く新大学図書館建設に着手する必要がある。将来計画委員会の答申でも、新大学図書館の建設は「大学として直ちに着手すべき基本計画」のトップにかかげられてその必要性が強調されており、また大学評議会に提出された各学部の検討結果を見ても、7学部すべてが図書館問題を緊急ないし最重要な課題とし、新大学図書館の早期建設を要望していることが明らかである。

さて、新大学図書館建設の必要性が十分認識されたとしても、その建設にあたっては相当長い準備期間を要することがさらに注意されねばならない。従来の各建物の建設の場合から考えても、大学評議会による承認、学院・大学連絡会議（院連）の発足と院連での検討、実務委員会の発足と同会での検討、理事会の承認、実施設計、建築申請、住民説明会の過程を経ると、もっとも早い場合でも新大学図書館の建設着工が昭和65年6月頃、竣工が67年4月頃になると予想される。第一次答申で詳しく指摘した現大学図書館の状況からすれば、この5年余を待つことすら困難である。さらに、昭和68年以降の18歳人口の減少という事態を併せ考えると、関西学院大学の新たに誇りうる充

実した施設をその時まで完成させておくことは、大学に計り知れない利益をもたらすものと考えられる。

V. 建設に伴う管理運営の課題について

新大学図書館の建設は、その機能にふさわしい管理運営体制の整備をもって、はじめて完成されることはいうまでもないところである。すなわち、現状の大学図書館から飛躍的に拡大される建物規模と、それに伴う図書・資料の収集・整理・利用サービスの拡大は、当然、合理的・機能的な管理運営システムの力がともなわなければ新大学図書館を支えきれものではない。以下、建設計画の進行と併せて検討していく必要のある管理運営上の課題についてふれておきたい。

1. 図書・資料の収集体制

現在、大学図書館の図書・資料の収集は、大学図書館と各学部を始めとする各部局でおこなっている。大学図書館の保有数は約 69 万冊、そのうち大学図書館に約 47 万冊配架し、各部局に約 22 万冊分置していてその比率は約 2 対 1 である。その他に各部局では大学図書館登録分以外の図書約 20 万冊を保有している。(昭和 60 年度大学図書館年次報告)

新大学図書館完成にあたっては、図書・資料の大学図書館への集中化は大きな前提となっている。これを機会に各部局の保有する図書・資料(一定の分置図書)と大学図書館に保有する図書・資料の収集のあり方を抜本的に見直す必要がある。特に、各部局の分置図書は分置の必要のある図書・資料(原則として研究用)とし、学部学生用の学習用図書は新大学図書館に集中化し、利用制度の整備との関連で、その収集・利用は大学図書館で一元化する必要がある。

以上の点を実施するためには、①大学図書予算の配分と予算費目(現状は、大学図書館図書費、同部局配分図書費と各学部の研究資料費の図書購入費、研究設備図書費)の見直し、②可能な限り効果的な収集がでさうる制度(例えば収書委員会の設置等)をも考えていく必要がある。

2. 利用制度の充実

大学図書館の第一の使命は、所蔵する図書・資料の利用提供である。しかしながら、現行の大学図書館利用条件(規程等)は利用者にとっては極めて不満足であるといわざるを得ない。新大学図書館においては、図書・資料の利用提供の拡大は必須の条件である。それと同時に学術情報としてのデータベース利用(検索サービス)、レファレンスサービスおよび学習・研究活動の場としての利用時間の拡大等、学生・教職員にとって研究・教育・学習諸活動を十分に支えうる利用諸条件を改善することは当然であろう。そのためには、これを保障する利用制度を充実させることが重要である。

3. 分置制度と各部局との連携

新大学図書館建設の前提条件の一つとして、教育・研究上一定枠の図書・資料の各部局への分置は維持していく必要があると考えている。現行では部局と大学図書館との業務上の連携の不十分さや図書・資料の利用および管理の不統一がみられるが、新大学図書館の運用にあたってはできうる限りこれを解消し、連携を密接にしていかなければならない。発展的に言うならば、図書館専用大型コンピュータを駆使した図書システムにより、新大学図書館は、学内の学術情報の一元化・集中化をはかり、本学における学術情報センターとしての役割をもつことによって、各部局との連携のうえに全学的な教育・研究活動の支援をしていくことになる。そのためには、あらたな学内情報システムの整備、確立をはかるという立場から現行の分置制度を見直す必要があると考えられる。

4. 図書・資料の全学的資産管理

現行の図書・資料の資産管理については、各種の規程が複雑にからまって、受入・払出処理および大学図書館と各部局間の図書・資料の移管処理に不合理な面がある。新大学図書館完成後は図書・資料が大学図書館に急速に集中化されてくるので、合理的に資産管理を行なうよう業務改善をする必要がある。また、学部学生を対象とするいわゆる開架学習用図書については、いくつかの大学で実施されているようにリフレッシュの関係から消耗図書扱いとして資産管理図書の枠から除外し、業務処理の効率化を計り学部学生へのサービスの向上をはかる必要がある。

5. 大学図書館の管理運営責任

上記1～4を実現させるためには、新大学図書館の管理運営責任が問題となってくる。現行の大学図書館の管理運営責任体制は、大学評議会・大学院委員会によって選出（「大学図書館長選任規程」）される大学図書館長と大学図書館長が推薦する副館長および事務の責任者である事務部長をもって管理運営責任体制としている。この責任体制は、新大学図書館においても維持されるべきものであるが、新大学図書館においては、図書・資料の全学的な収集・利用および集中管理を行なうため、大学図書館長の権限および責任範囲を現行より拡大する必要があるのではないと思われる。

しかしながら、新大学図書館の管理運営は、大学図書館長および大学図書館の責任と権限を拡大するだけではその機能を十分に果たすものにはならない。大学全体の研究・教育・学習活動を支援する大学図書館の運営は、全学的な教育・研究組織によって強力に支えられてこそ可能となってくる。現大学図書館の運営については、大学図書館運営委員会が大学図書予算の配分や関係諸規程の改正等重要な機能を負っている。現行の運営委員会は、現状の大学図書館の機能および各部局の諸条件を前提とした委員会である。したがって大幅に機能が拡大する新大学図書館においては、全学的な視点からその管理運営を支援しうる機能を備えた委員会に改めていく必要がある。

6. 規程の整備

現大学図書館の管理運営を制度的に支える関連規程は、「大学図書館規程」「大学図書館館長選任規程」「大学図書館運営委員会規程」「大学図書館視聴覚室専門委員会規程」「大学図書館利用規程」「大学図書館分置図書規程」および図書資産の運用管理規程としての「総合図書館規程」「図書管理規程」が主たるものである。これらの規程は、現状の大学図書館の規模と機能と各部局の図書・資料の取扱い条件および学院の図書資産管理の枠内のもとに制定されている規程である。しかしながらこれらの規程は、制定後かなりの年月を経過し、時代にそぐわない種々の問題をかかえている。

新大学図書館においては、全学的な図書・資料の利用運用などを含め合理的な大学図書館の管理運営を行なうため、時代に即した諸規程に整備していかなければならない。特に、現大学図書館から新大学図書館へ円滑に移行するためには、できるだけ早い段階から諸規程の改正を検討することが必要である。

7. 職員・事務組織の課題

新大学図書館の業務体制は、その機能を十分に発揮させるものでなければならない。すなわち、図書資料の受入・整理業務の合理化、迅速化、効率化、およびサービス窓口の充実、レファレンスサービスの強化が大前提となる。そのためには、新大学図書館における事務体制（事務組織）を合理的なものに改めることと、大学図書館職員の資質の向上は不可欠である。建設計画の進行と合わせて、この問題を事務組織、職員人事の問題として、大学図書館はもとより、然るべき機関で具体的な検討を進める必要がある。レファレンス要員、システム関係要員の養成についてはかなりの時間を必要とする。早急に目標を定め具体的な施策を打ち出さなければ間に合わない恐れがある。

上記1～7の問題は、新大学図書館の管理運営にとって重要な問題であろう。新大学図書館建設が実施計画段階に入った時点で、上記の課題のうち全学的な検討を必要とするものについては特別委員会を学長のもとに新たに設置することを提案したい。なお、図書資産管理、予算管理および事務組織、職員人事に関することは、学院の然るべき機関と十分調整を計る必要がある。

以上

※ 本委員会のもとに設けた作業委員会のメンバーは次のとおりである。

| | |
|----------------|------------|
| 安井 修二（コンビーナ・経） | 芝田 正夫（社） |
| 尼子 卓司（図書館） | 平井 佑二（図書館） |
| 松尾 繁晴（図書館） | 野村 晃（図書館） |
| 釣部 完治（大学事務室） | 長尾 文雄（図書館） |
| 中村 順治（図書館） | 嵯峨根克人（図書館） |
| 戸田 隆（図書館） | |

④収書計画書

収 書 計 画 書 －新大学図書館完成に向けて－

1988 年 11 月
関西学院大学図書館

目 次

はじめに 大学図書館長 八重津 洋平

| | |
|-------------------------|----|
| 第Ⅰ章 収書計画の概要 | 1 |
| 1. 図書資料整備充実計画の必要性 | 1 |
| 2. 収書計画の規模 | 1 |
| 3. 予算措置について | 3 |
| 4. 今後の収書スケジュール | 4 |
| 第Ⅱ章 収書実施計画 | 7 |
| 1. 参考図書 | 7 |
| 2. 逐次刊行物 | 9 |
| 3. 特別コレクション | 11 |
| 資料 1、2 | 12 |
| 第Ⅲ章 現図書館の蔵書構成について | 16 |
| 1. 図 書 | 16 |
| 2. 雑 誌 | 51 |

はじめに

大学図書館長 八重津 洋平

本学の全構成員の永年の願いであった新しい図書館の建設が「大学案」をもとに学院と大学との間で協議が重ねられ、いよいよ総延床面積約 20,000 m² という現図書館の 4 倍の規模ですすめられる運びとなつて参りました。これによって現図書館は 5 年後には関西学院大学にふさわしい規模をもつ立派な図書館に飛躍的に発展するわけですが、「大学案」に述べられている新しい大学図書館の理念を実現し、期待される種々の図書館機能を発揮するためには、それにふさわしい図書資料が備え付けられていることと、優秀な図書館員によるサービス体制が必須の条件であります。今後、これらの条件を新しい図書館の完成に向けて着実に準備していく努力をしていかなければなりません。

さて、関西学院大学の教育・研究を支えるために必要とされる図書資料を質・量両面において整備充実することは、多額の予算を必要とすることもあつて、短期間に一挙に

おこなうことは困難であります。したがって、大学図書館としましては、すみやかに新大学図書館完成に向けての図書資料整備充実計画を策定し、次年度より新大学図書館開館昭和 69 年（1994 年）4 月までの期間に段階的に必要な図書資料を収集していくことが必要であると考えます。そのために大学図書館において、「大学案」に示されている学術用参考図書（5 万冊）、逐次刊行物（学術雑誌等 5 千タイトル）および特別コレクションの整備充実の年次計画を検討して、ここに以下の通り収書計画書としてまとめることができました。

つきましては、この収書計画書を充分ご検討頂き、各位の忌憚のないご意見をお聞かせ頂きますとともに、大学図書館の収書努力にご理解頂き、新大学図書館に向けての図書資料整備充実のために全面的なご支援とご協力をお願い申し上げます。

なお、新しい大学図書館完成に向けて大学図書館としてはこの収書計画のみならず、新しい管理・運営のあり方を検討していかなければなりません。これについては大学に設置されることになりました「新大学図書館管理運営問題検討委員会」で「図書資料の集中化」、「新大学図書館における図書システム」、「大学図書予算と選書体制」、「利用制度の重要事項」等々の問題が検討されることになりました。大学図書館としては、全学の英知を集めて、本学にふさわしい新しい図書館が創られていくことを切望する次第であります。

第 I 章 収書計画の概要

1. 図書資料整備充実計画の必要性

新大学図書館建設の目的は、新大学図書館建設の「大学案」にも述べられているように、本学の教育研究活動を支援し、その飛躍的發展に奉仕する優れた大学図書館を創造することである。優れた大学図書館の最も重要な条件の一つは、大学の教育・研究・学習活動に役立つ図書資料を十分に備えることであることは言うまでもない。

現在、本学には、大学図書館所蔵図書資料約 70 万冊、各学部等部局図書室に約 20 万冊を保有しているが、その冊数および図書資料内容において、本学の 7 学部 7 大学院の教育・研究・学習活動を支えるには、決して満足できるものではない。近年、図書資料購入費については、他の経常費とは別途にその充実を計るべき努力が払われているとは言え、昭和 30 年代後半から 50 年代前半にかけての苦しい学院財政の関係で、必要な図書資料の整備が充分になされていない。具体的には、大学図書館として備えるべき、基本的な書誌・参考図書類の不足、学術雑誌・バックナンバーの不足を始めとし、基本的な専門書、古典的名著（コレクションを含む）、学生用参考図書も少なく、本学と同等な歴史と規模を持つ他私大と比較しても十分な図書資料を保有しているとは言いがたい。

大学図書館基準は、大学図書館のあり方として、「大学の教育・研究に不可欠な図書資料を効率的に収集・組織・保管し、利用者の研究・教育・学習等のための利用要求に

対し、これを効果的に提供することを主要な機能とする」としている。特に、各大学とも、大学図書館施設の改善と図書資料の整備充実、大学の最も重要な政策として力を入れているところである。

新大学図書館建設の最も重要なソフト面の問題として図書資料の整備充実は必須の条件である。なぜならば、新大学図書館においては、本学の全図書資料をほぼ全面的に新大学図書館に集中化し、それを全学の教職員、学生に全面開架方式で提供することを願っているからである。そのためには、新大学図書館完成までに、でき得限りの図書資料の整備充実をはかっていく必要がある。

したがって、大学図書館としては、まず第一に現在保有している図書資料の分析（①所蔵リストと現物の照合、②欠本、汚損、紛失図書資料の実態把握および ③所蔵図書資料の評価）をおこない、次に、当然、新大学図書館完成迄に整備充実すべき図書資料の質・量についての検討作業を進めることになった。特に図書資料の整備充実のためには、多額の予算および必要図書資料の質・量を備えることが必要であり、それを一気にこなすことは困難である。ついては、以下に示すように新大学図書館完成迄の年月をもって慎重に整備充実計画を策定し、段階的に着実に準備していく必要があると考える。

2. 収書計画の規模

新大学図書館における収書について、大学案では、①レファレンス機能の強化のために参考図書（書誌・辞典類）を5万冊集中して配架する、②これに隣接して未製本雑誌5,000タイトルを備え付ける、③カリキュラムに添って収書された学習図書10万冊（うち参考図書3,000冊）、学習用雑誌300タイトルを配架すると述べられている。

これらの項目に関して現状の問題点を洗い出すため、図書館では収書に関する3つのプロジェクトチームを構成し、今春より検討を開始した。これらのプロジェクトチームはそれぞれ参考図書、学習用図書、逐次刊行物を分担し、まず現状の所蔵調査と分析を行い、その上にとって収書計画作成のための基礎作業を行った。

図書館では、現在まで蔵書構成に関する調査を、今回のような形で実施したことがなかったため、現状調査においては、各チームとも長時間にわたる検討を行わざるを得なかった。しかし、この作業により、従来は明らかでなかった蔵書構成上の問題点が明確にされたと言えよう。

さて、本計画書では、上記調査（調査内容は第三章参照）により明らかにされた問題点を解消し、蔵書構成上のアンバランスを是正しながら、新大学図書館にふさわしい質・量を備えた蔵書となるよう、その収書規模を設定した。

なお、学習用図書の10万冊および洋書が主になる専門図書・バックナンバーについては、今後検討を必要とするため、今回の収書計画より除外したが追って計画がまとまり次第、提案することとした。

以下本計画の概要を提示する。

表 A 年度別収書冊数

| 資料名 | 年度 昭和64年度 (1989年) | 昭和65年度 (1990年) | 昭和66年度 (1991年) | 昭和67年度 (1992年) | 昭和68年度 (1993年) | 合計 |
|----------------------|-------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------------------------------|------------|
| 参 考 図 書 | 7,000 冊 | 7,500 冊 | 10,500 冊 | 4,500 冊 | 3,500 冊 | 33,000 冊 |
| 参考図書(CD-ROM) | — | — | — | — | 100 タイトル | 100 タイトル |
| 逐 次 刊 行 物 (雑 誌) | — | 400 タイトル (洋) | 450 タイトル (洋) | 450 タイトル (洋) | 1,200 タイトル (洋 400) (和 800) | 2,500 タイトル |
| (年鑑・年報) | — | — | — | — | 500 タイトル | 500 タイトル |
| (新 聞) | — | — | — | — | 38 紙 | 38 紙 |
| 特別コレクション | (未定) 冊 | (未定) 冊 | (未定) 冊 | (未定) 冊 | (未定) 冊 | (未定) 冊 |

1. 参考図書については調査の結果、現図書館には約 2 万冊しかなく、約 3 万冊を主題別に 5 カ年かけて収集する。3 万冊の洋・和書の比率は 7:3 で洋書が約 21,000 冊、和書が 9,000 冊である。なお、学習コーナー用参考図書を 3,000 冊別途収集する。

また、CD-ROM は当初 100 タイトルを収集する。

2. 逐次刊行物は洋雑誌 1,700 タイトルを 4 カ年に分けて収集すると共に、和雑誌 800 タイトルについては昭和 68 年度に収集する。また、年鑑・年報類、新聞は開館前年に収集する。

3. 特別コレクションについては、古書購入になる可能性が強いため、即時適切な収集を行う必要があるので年度別冊数は示していない。

3. 予算措置について

新大学図書館における収書計画を進めるための予算措置については、経常の大学図書館図書費とは別枠として 5 年間にわたって計上し、年度別収書関係総経費としてまとめた(表 B 参照)。また、年度別図書資料購入費(表 C 参照)と整理・保管にかかる年度別付帯経費(表 D 参照)については、それぞれ複数の業者に見積を取り、端数の調整を行って概算計上した。なお、購入費の単価基準については、現在の図書、逐次刊行物の 1 冊 1 タイトル価格を基にし積算する方法をとった。

1) 参考図書は、和・洋書とも 10,000 円(1 冊)とし、CD-ROM については、500,000 円(1 タイトル)としている。

なお、CD-ROM のドライブユニット(パソコン)については、別途備品として申請することとする。

2) 逐次刊行物の 1 タイトル年間購読料は、雑誌(和) 10,000 円、(洋) 25,000 円、新聞(和) 35,000 円、(洋) 270,000 円とした。

なお、洋雑誌については、新規契約が前年度となるため、予算年度をそれぞれ前倒しにして計算した。

3) 特別コレクションについては、毎年一定額を計上した。

本収書計画の総経費は約6億6千5百万円となり、これを新大学図書館の開館までの5年間に、後述する収書スケジュールおよび収書実施計画に従って実施していく。

表 B 年度別収書関係総経費

| 資料名 \ 年度 | 昭和64年度 (1989年) | 昭和65年度 (1990年) | 昭和66年度 (1991年) | 昭和67年度 (1992年) | 昭和68年度 (1993年) | 合計 |
|--------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-----------|
| 参 考 図 書 | 7,910 万円 | 8,355 万円 | 11,732 万円 | 5,164 万円 | 4,090 万円 | 37,251 万円 |
| 参考図書(CD-ROM) | — | — | — | — | 5,000 万円 | 5,000 万円 |
| 逐 次 刊 行 物 | — | 1,000 万円 | 2,254 万円 | 3,527 万円 | 7,517 万円 | 14,298 万円 |
| 〔 雑 誌 〕 | — | — | — | — | — | — |
| 〔 年鑑・年報 〕 | — | — | — | — | — | — |
| 〔 新 聞 〕 | — | — | — | — | — | — |
| 特別コレクション | 2,000 万円 | 2,000 万円 | 2,000 万円 | 2,000 万円 | 2,000 万円 | 10,000 万円 |
| 合 計 | 9,910 万円 | 11,355 万円 | 15,986 万円 | 10,691 万円 | 18,607 万円 | 66,549 万円 |

〈表 B〉の内訳を図書資料購入費〈表 C〉と付帯経費〈表 D〉に分けて以下に示す。

表 C 年度別図書資料購入費

| 資料名 \ 年度 | 昭和64年度 (1989年) | 昭和65年度 (1990年) | 昭和66年度 (1991年) | 昭和67年度 (1992年) | 昭和68年度 (1993年) | 合計 |
|--------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------------|
| 参 考 図 書 | 7,000 万円 | 7,500 万円 | 10,500 万円 | 4,500 万円 | 3,500 万円 | 33,000 万円 |
| 参考図書(CD-ROM) | — | — | — | — | 5,000 万円 | 5,000 万円 |
| 逐次刊行物新規分 | — | 1,000 万円 | 1,125 万円 | 1,125 万円 | 3,850 万円 | 7,100 万円 |
| 〔 雑 誌 〕 | — | 〔 1,000 万円 〕 | 〔 1,125 万円 〕 | 〔 1,125 万円 〕 | 〔 1,800 万円 〕 | 〔 5,050 万円 〕 |
| 〔 年鑑・年報 〕 | — | — | — | — | 1,250 万円 | 1,250 万円 |
| 〔 新 聞 〕 | — | — | — | — | 800 万円 | 800 万円 |
| 逐次刊行物継続分 | — | — | 1,000 万円 | 2,125 万円 | 3,250 万円 | 6,375 万円 |
| 特別コレクション | 2,000 万円 | 2,000 万円 | 2,000 万円 | 2,000 万円 | 2,000 万円 | 10,000 万円 |
| 合 計 | 9,000 万円 | 10,500 万円 | 14,625 万円 | 9,750 万円 | 17,600 万円 | 61,475 万円 |

表 D 年度別付帯経費（整理・保管費等）

| 資料名 \ 年度 | 昭和64年度 (1989年) | 昭和65年度 (1990年) | 昭和66年度 (1991年) | 昭和67年度 (1992年) | 昭和68年度 (1993年) | 合計 |
|--------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|----------|
| 参 考 図 書 | 910 万円 | 855 万円 | 1,232 万円 | 664 万円 | 590 万円 | 4,251 万円 |
| 参考図書(CD-ROM) | — | — | — | — | — | — |
| 逐 次 刊 行 物 | — | — | 129 万円 | 277 万円 | 417 万円 | 823 万円 |
| 〔 雑 誌 〕 | — | — | — | — | — | — |
| 〔 年鑑・年報 〕 | — | — | — | — | — | — |
| 〔 新 聞 〕 | — | — | — | — | — | — |
| 特別コレクション | — | — | — | — | — | — |
| 合 計 | 910 万円 | 855 万円 | 1,361 万円 | 941 万円 | 1,007 万円 | 5,074 万円 |

4. 今後の収書スケジュール

参考図書、逐次刊行物とも収書形態が異なるため、それぞれ別表 1、2 の収書スケジュールを設定した。

(別表 1 参考図書収書スケジュール 略)

(別表 2 逐次刊行物収書スケジュール 略)

第Ⅱ章 収書実施計画

1. 参考図書

参考図書群は、利用者が調査、研究、学習を行う際に情報源として重要な役割を果たすだけでなく、大学図書館の参考業務（レファレンス・サービス）を遂行するにあたって最も基本的な図書資料の一群でもある。したがって、参考図書の量および質が利用サービス内容を大きく左右し、今後のありかたさえ規定する可能性がある。また、現状において、利用者からの充実に向けての要望も非常に強い。

今回の参考図書の収書にあたっては、本学の学部、大学院構成とそのカリキュラムをふまえるとともに、利用者の要望の高まりにも応えてゆく必要がある。また、それに対する本学図書館の将来的な参考業務の質的、量的な一層の向上にも十分に耐えうるだけの内容のものとしなければならない。

この計画においては、その目的の基礎となる土台を設定するものと考え、既蔵分、新規購入分を含めて学術コーナー用参考図書 50,000 冊（購入分 30,000 冊、既蔵分 20,000 冊）、学習コーナー用参考図書 3,000 冊（購入分）の所蔵を開館当初の目標とし、同規模の他大学図書館の水準を下回らないよう考慮した。

なお、参考図書群も学問の進歩とともに、継続的に成長させ、常に最適な状態に保つ必要があることは当然である。そのためには、本学図書館の基本的な収書方針と参考業務の方向性に従い、継続的な収書を行い絶えずその内容の再評価、点検を行い参考図書群の質および量の維持・向上に努めなければならないことは言うまでもない。

(1) 収書冊数

①学術コーナー用参考図書 約 30,000 冊

なお、既蔵分推定冊数 ※約 20,000 冊を合わせ、合計 50,000 冊の所蔵とする。

(※第三章 現図書館の蔵書構成について 1. 図書 参照)

②学術コーナー用参考図書 約 3,000 冊

(2) 収書方針

◎学術コーナー用参考図書

①主な利用対象は、教員、院生、学部上級生とする。

②各主題分野における収書の要点は次のようにする。

- ・総記・人文・社会科学分野は全分野を網羅的、系統的に収集の対象とし、学際的使用に耐えうるもの、学術的価値の高いものは必ず収書する。

ただし、高度に専門的な分野については本学の学部、大学院のカリキュラムを考慮する。

- ・自然科学分野は本学の学部構成、学科およびカリキュラムを考慮する。ただし、包括的な内容のものについては、直接該当する科目がない場合でも収書の対象とする。
- ③価値のある参考図書で従来スペースの関係で購入できなかったものを収書する。
- ④次のものは収書から除外する。
- ・学習コーナー備付けのみでよいもの。(ただし、必要なものは、重複して備付ける)
 - ・趣味的なもの等大学図書館に相応しくないもの。

◎学習コーナー用参考図書

学習コーナー用参考図書の収書は次のように行う。

- ①主な利用対象は学部学生とする。
- ②次のものは収書対象から除外する。
- ・主題の幅が狭く専門的過ぎるもの
 - ・書誌類（原則として学術コーナー用参考図書として扱う。）
 - ・統計、年鑑類は、学術コーナー用参考図書あるいは、逐次刊行物扱いとする。
- ③学術コーナー用参考図書。(ただし、重複しても必要なものは備付ける。)

(3) 選定作業ツール

選定のためのツールには、学術コーナー用参考図書を総括的に網羅し、広く学術図書館における参考図書の選定において用いられている以下のものを主として使用する。なお、最近発行のものおよび以下のツールに掲載されていない場合には、‘Books in print’、『出版年鑑』、『図書館雑誌』および『現代の図書館』最近号、書店・出版社カタログ等で補うこととする。

①学術コーナー用参考図書選定作業ツール：

〈洋書〉

- ・Guide to reference books, 10th ed. by E. P. Sheehy, ALA. 1986.
- ・Walford's guide to reference material, 4th ed. Ed. by A. J. Walford. LA. 1987.

〈和書〉

- ・『日本の参考図書』JLA 1980
- ・『最近の参考図書』JLA 1985
- ・『図書館雑誌』最近号の参考図書関係記事
- ・その他

②学習コーナー用参考図書選定作業ツール：

- ・『日本の参考図書』JLA 1980
- ・『最近の参考図書』JLA 1985
- ・『図書館雑誌』最近号の参考図書関係記事
- ・その他

＊なお、カリキュラムとの対応については、『関西学院大学要覧』を参照し調整する。

(4) CD-ROM の収集

ニューメディアは従来の情報媒体（紙、マイクロフィルム）が持っていなかった大きな特徴を有している。中でも CD-ROM はその特徴が注目され出版量も増大している。

今回の収書にあたっては、規格、ドライブユニットの機種等を慎重に検討した上で収集したい。

◎収書対象 CD-ROM の内容

CD-ROM の適応分野は広範囲にわたるが、参考図書との関連では、次のものが収集対象となる。

- ①百科事典、国語辞典、英和辞典などの各種辞典類および用語集
- ②人名録、人事録、紳士録、会社録、企業要覧、企業年鑑などの年鑑・年報類
- ③蔵書目録、図書目録などの各種書誌類
- ④六法、法令集、判例集、地図などの資料類
- ⑤その他統計資料、ハンドブック、設計図など

〈CD-ROM の特徴〉

情報をデジタル方式で記録し、それをコンパクトな光ディスクに納めた CD-ROM は従来の記録媒体になかった次のような特徴を持つ。

- ①記憶容量が大きく（フロッピー 540 枚分）記録密度が高い。（直径 12 cm、厚さ 1.2 mm）
- ②ランダムアクセスが可能である。
- ③情報劣化がなく、保存性がよい。
- ④メディアとしての文字のほか、画像、音も集録できる。

2. 逐次刊行物

雑誌・逐次刊行物は、利用者に最新の情報を提供するための重要性の高い資料であり、学術研究の見地からも必須の部分を作している。新大学図書館においては、雑誌・逐次刊行物の大幅な質的、量的充実が必要である。

以下に、逐次刊行物収書に関する基本的な考え方を提示する。

(1) 収書方針

- ①関西学院大学の教育・研究に必要な逐次刊行物を収書する。

②収書範囲

- a 逐次刊行物の定義

無制限に継続する意図のもとに、原則として一定の間隔をおいて、順次刊行されるもの。

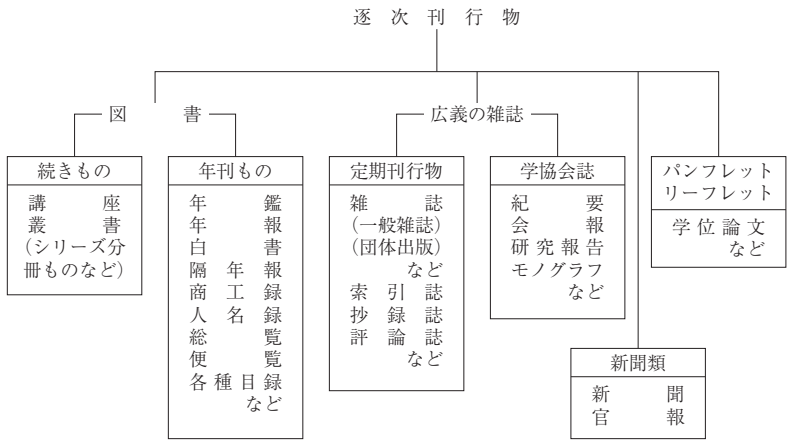
逐次刊行物には、雑誌、新聞、年報、年鑑、学協会等の紀要、会報、議事録等が含まれる。また、学会等が一定の主題に関する図書を逐次出版する叢書、および出版社による販売のための叢書を含むことがある。

- b 本学図書館の逐次刊行物部門で取扱う資料の範囲を次のとおりとする。
- ・ 定期刊行物のうち、一般雑誌、索引誌、抄録誌、評論誌
 - ・ 年刊もののうち、年鑑、年報、白書、隔年報
 - ・ 学協会誌のうち、紀要、会報、研究報告
 - ・ 新聞、官報
 - ・ その他、上記の縮刷版、複製版、マイクロ版、ニューメディア形態のもの
- c 逐次刊行物のうち図書部門で取り扱う資料は次のとおりである。
- ・ 図書の続きもの（講座、叢書、シリーズ、分冊もの）
 - ・ 図書の年刊もののうち、商工録、人名録、総覧、便覧、各種目録類
 - ・ モノグラフ・シリーズ、発行者シリーズ
 - ・ パンフレット、リーフレットなど
 - ・ 統計資料
 - ・ 論文集の巻号のないもの

(2) 収書内容

①収書に際しての現状分析

現状は、各主題分野についてタイトル数が圧倒的に不足している。本学のように7学部7大学院を擁する総合大学においては、より一層の充実が必要である。詳細は、第三章「現図書館の蔵書構成について（2. 雑誌）」を参照のこと。



雑誌タイトル数および製本冊数 (1988. 3. 31 現在)

| | カレント雑誌 (タイトル数) | 製本雑誌冊数 |
|-----------|-------------------|---------|
| 図 書 館 備 付 | 2,800 | 64,431 |
| 分 置 | 500 | 51,760 |
| 合 計 | 3,300 | 116,191 |

②収書対象および内容

- a 学術用カレント雑誌 2,200 タイトル (洋 1,700 タイトル、和 500 タイトル)
 - ・既存の図書館備付分約 2,800 タイトルを基礎として、新規の雑誌を年次計画で購入する。
 - ・研究、教育にとってコアとなる雑誌を中心に収集する。
- b 学習用カレント雑誌 300 タイトル (和)
 - ・購入費目は、消耗図書費とする。
 - ・学習、教養、趣味等にわたる幅広い収集を行う (和雑誌中心)。
- c 新聞 38 紙 (和、洋)
 - ・購入費目は、消耗図書費とする。
 - ・阪神版等で利用が多く、保存が必要なものは一定期間現物で保存する。
 - ・新聞のうち縮刷版、マイクロフィルムのあるものについては、現物と並行して収集する。既存の図書館備付分 12 紙を基礎として、新規分を購入する。
- d 年鑑・年報 500 タイトル
 - ・現在、図書部門で取り扱っているものに加え、研究、教育にとってコアとなる年鑑、年報の不足分 500 タイトルを新規に収集する。
 - ・バックナンバーについても、新館開館時までデータ入力、移管を行う。

③選定方法および選定ツール

②a の学術用カレント雑誌のうち、洋雑誌 1,700 タイトルは、S. S. C. I. (Social Science Citation Index) の J. C. R. (Journal Citation Report) をもとにして、社会科学、人文科学系を中心にして引用件数の多い雑誌を調査し、主題分野ごとにコアとなるジャーナルを抽出し、購入する。

また、新規購読雑誌は研究に必須のもので他分野の研究者も使用する基本的な雑誌とし、現在大学図書館に所蔵していないものを、教員 (研究者) のニーズを調査しリストアップする。

なお、この収書計画による購入分は、毎年行う外国雑誌新規購読申込とは別枠のものである。

3. 特別コレクション

大学図書館において、建学の精神に沿い、かつ教育・研究の推進、深化および学問的伝統を培う特色あるコレクションの収書は非常に重要である。

当館では従来より、本学にふさわしい特別コレクション（特に収集された特定主題の学問的価値の高い図書、文献類及び貴重図書・資料）の収書を行ってきた。

歴史的に見れば、昭和 17 年に河上肇博士旧蔵のスミス「国富論」およびゴドウィン「政治的正義」第 2 版を入手した。また、昭和 24 年に「柴田文庫」が設けられているが、特色あるコレクションが漸次増加するのは昭和 30 年代に入ってからである。昭和 50 年代に入って、特別図書購入基金による貴重図書、大型コレクションの充実が計られ、西洋の古典的著作の収集も進展してきた。昭和 62 年度末現在で、貴重図書 4 コレクションを所蔵している状況である。

(1) 収書の方向性

特別コレクションとして学術的価値の高いコレクションおよび貴重図書・資料を質・量のバランスよく所蔵することは、大学の誇りであり、大学図書館の評価基準の 1 つになる。

現在所蔵されている特別コレクションは、その内容から 2 つの系列に分けることができる。第 1 はキリスト教・教会史関係であり、第 2 はイギリス社会・経済思想関係である。前者は本学の建学の精神に由来するものであり、後者は「柴田文庫」に連なり、経済学を始め、広く人文、社会科学分野の利用において重要な役割を果たしてきた。

近年においては、建学の精神を体した古版本聖書については、まだ緒についたばかりであるが、ロック、スミス、ミル父子の各著作文庫、「柴田文庫」、「粟野文庫」、「スコットランド啓蒙思想史コレクション」などに追加購入がなされ、充実発展が計られている。

これら両系列は本学所蔵のコレクションとして、その特色、伝統に鑑み、妥当性を持つものと考えられる。しかし、他の伝統ある私大と比較すると量的にも見劣りがするため、一層の充実が必要である。

(2) 予算措置

特別コレクションの購入については、過去数年使用が見送られてきた特別な蔵書購入のために準備されている「蔵書購入基金」をもって購入するのが妥当であろう。具体的には、新大学図書館完成に向けて、5 年間に最低 1 億円程度を計上することとした。

ただし、そのような文献類は他にも入手希望競争相手が多く、購入のタイミングが重要である。したがって、即時適切な措置を取ることを可能とするため、相当額にのぼる資金の準備が必須である。また、すみやかな購入意思決定が可能となる、合理的な「基金」運用ができるよう配慮する必要がある。

(資料 1 学術コーナー用参考図書収書のための主要ツールについて 略)

(資料 2 参考図書の収書原則について 略)

(付表 1、付表 2 略)

第三章 現図書館の蔵書構成について

新大学図書館の収書計画並びに方針を立てるにあたって、現在の図書館における図書資料・雑誌の構成がどのようになっているのか、現状の調査、分析を実施した。以下にその内容を詳述する。

1. 図書

(1) 調査の目的

本学図書館所蔵図書数は、現在約 70 万冊に至っている。大学図書館の蔵書構成は、大学を構成している学部、大学院組織によっておのずから定まってくるが、本学のように 7 学部・7 大学院を擁する総合大学の図書館においては、ほぼ全学問分野に渡って網羅的に蔵書の収集を行う必要がある。(ただし、工学・技術分野はその限りではない。)

さて、本学図書館の所蔵図書はどのような状況になっているのであろうか。本調査では、各主題分野毎に本学図書館の所蔵する図書のタイトル数を調査し、その傾向を分析した。また、各主題項目に該当する各学部開講科目を併記し、蔵書と大学教育におけるカリキュラムとの関連も考慮した。

この調査によって、全体としての所蔵状況を表示することができれば、今後の収書に関する政策決定プロセスにおいて、一定の方向性を採用する上での参考資料となり得ると考える。もちろん、大学図書館の蔵書構成は、多面的なものである。今回の調査は、切り口として蔵書の量的把握及び開講科目に対応するであろう蔵書の単純な割り当てによって行ったものである。

総合的な蔵書構成の把握をするためには、評価の基準となる分析モデルを確立することが必要である。すなわち、各学問分野の研究動向と授業内容の把握、蔵書の質的把握と指定図書との関係、備付けの集中と分散の適正なありかた、学内の図書予算配分と各管理単位の収書方針等に関する調査、及びこれらに関する他私大との比較など今後一層きめの細かい調査分析を付け加える必要がある。

したがって、今回の調査結果は、その一部分をなすものにすぎないものであるが、今後これらを足がかりとして、より一層多角的な調査分析資料が作られ、図書館及び大学の収書活動に充分反映されていくことが期待される。

(2) 調査の概要

①調査対象蔵書数

調査対象となった蔵書は昭和 63 年 3 月 1 日現在、大学図書館登録分約 70 万冊のうちのとおりである。

- ・調査対象蔵書数：約 55 万 4 千冊
- ・調査対象外蔵書数：約 14 万 6 千冊

内訳 1. 昭和 24 年以前からの蔵書 約 65,000 冊

2. 理学部分置分 約 25,000 冊

3. 社会学部返還図書 約 28,000 冊

4. 文学部（日文、英文）返還図書、特別文庫、コレクション 約 28,000 冊

*1～3 は著者記号により請求番号が付与されているため、統計が困難である。

*4 は 080（包括的叢書）として、1 タイトル処理されているため統計が困難である。

②調査項目

1. 学問分野における包括的所蔵状況

2. 学問分野における主題別分野別所蔵状況

3. 分類細目別詳細所蔵状況

4. 主題に対する該当科目

5. 総所蔵タイトル数*

*所蔵タイトル数…物理的に複数冊であっても、書誌的に 1 単位であれば、1 タイトルと計算した。

即ち、複本、一括整理図書（多巻物〈全集、上・下本等〉、特別文庫、コレクション、日文、英文返還図書）は 1 タイトルとしている。そのため、物理的蔵書数より蔵書タイトル数は少なくなる。

③主題項目の設定

主題項目の設定については、『関西学院大学図書館図書分類表』によった。

④タイトル算出方法

タイトル数の算出は受入一連番号*（昭和 63 年 3 月 1 日現在）によった。

*受入一連番号…受入図書の請求番号を決定する際、該当分類番号毎に受入順に連番で与えられるもので 1 タイトル 1 番号となる。

⑤主題に対する各学部開講科目の割り当て

『関西学院大学要覧 昭和 62 年度』によった。

(3) 結果の概要

蔵書構成に関する状況把握は、本来、全所蔵図書に対して行う必要があるが、(2) 調査の概要で述べたように、統計が困難である著者記号使用図書、一括整理の貴重図書、コレクション類を対象より除外せざるを得なかった。その結果として、統計結果の厳密性がある程度損なわれることとなったが、量的側面における全体としての傾向はつかめたのではないかと考えられる。

なお、結果の詳細は以下のページを参照されたいが、全体として概括すれば、次のような点が挙げられよう。

- ・社会科学分野は蔵書数は多いが、該当学部、科目数もまた多いため、今後とも一層の内容の充実が必要である。
- ・蔵書は、各分野とも基本図書の漏れのない収集に加え、時代の要請に合致した質量ともに充分なものとし、日々進歩する各学問分野において役立つよう成長させなけ

ればならない。

- ・大学図書館の質的向上及び、利用サービスの拡大という側面からも、和・洋ともに参考図書の一層の充実が必要である。特に図書館以外では備付不可能と考えられる大部なもの、あるいは高価なもの及び、広範な書誌・目録・辞典類についても、各学問分野において必須のものは完備する必要がある。

なお、総所蔵タイトル数及び対象開講科目数については、次のような結果であった。

- ◎所蔵タイトル数：210,358 タイトル（うち、参考図書約 6,725 タイトル、15,000 冊）
対象冊数約 55 万 4 千冊に対して、約 38% となる。同比率で約 70 万冊に対する所蔵タイトル数を推定すれば、約 265,787 タイトルとなる。（うち、参考図書約 8,497 タイトル、19,000 冊 + α 〈各主題に含まれる分〉）
- ◎対象開講科目数：499 科目（各学部主要科目及び、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目）
科目数：調査対象タイトル数の比率は、1 科目：422 タイトルである。
70 万冊より科目数：タイトル数の単純比率を算出すれば、1 科目：533 タイトルと推定される。

*問題点と今後の方向性

今回の調査によって、蔵書タイトル数とカリキュラムとの一定の関連性が明らかになり、量的な側面の把握が可能となったが、逆に見えない部分、すなわち質的側面が『(1) 調査の目的』で述べたように問題となってくる。特に以下の項目については、組織的な取り組みが必要である。

1. 蔵書の質的把握
 - ・基本的蔵書構成モデルの調査・作成
 - ・他大学所蔵図書との比較
 - ・コレクション、文庫、貴重図書の分析・評価
 - ・組織的欠本調査
2. 利用状況調査
3. 利用者ニーズの調査
4. 各研究室の所蔵調査

なお、これ等 4 項目は基準となる分析モデルの確立及び評価の材料の収集であり、具体的な収書活動の前提となるものである。次のステップとして、なされた評価に基づき、蔵書構成上の充実、補強の実施が必要であることは言うまでもない。

①包括的所蔵状況及び評価

a 社会科学

所蔵タイトル数から見れば、社会科学が 90,084 タイトル、構成比率 42.82% で飛び抜

けて多いが、該当科目数 265 で割れば主題 10 区分中で 1 科目あたりのタイトル数は 8 番目となる。加えて、社会学部、法学部、経済学部、商学部の分野の大部分を含むこと及び、分置図書数を考慮に入れば、和・洋ともにより一層の充実が望まれる。

b 哲学、言語、芸術、文学、歴史・地理

当該分野は主に文学部の対象分野である。タイトル数から見れば、他分野より充実度は高く、構成比率も 36.89% と高くなっている。しかし、今後とも基本的な蔵書の漏れのない収書が必要であろう。

また、言語は出版点数の少なさもあるが、主題 10 区分中 9 番目のタイトル数であり、1 科目あたりのタイトル数も 237 で 9 番目である点に留意すべきである。

c 宗教

宗教分野は、構成比率 7.77% でやや量的には少ないと言えるが、1 科目あたりのタイトル数では 629 でほぼ平均である。宗教分野についてはキリスト教主義教育に基づく本学の建学の精神に照らせば、量的充実と言うまでもなく、蔵書の質にも一層の努力が払われる必要がある。

d 自然科学、技術

タイトルの絶対数が少ないのは、学部創設が新しい理学部の対象分野であること、工学部がないこと及び逐次刊行物の占める割合が高いためと思われる。しかし、特に自然科学分野において 1 科目あたりのタイトル数が 174 と最下位である点は、今後の収書において配慮すべきである。変遷の激しい分野ではあるが、基礎的な和・洋の参考図書、学習図書用の収書は重要である。また、新分野への目配りも当然忘れられてはならない。

(表 1 略)

(図 1、図 2 略)

②主題別、分野別所蔵状況及び評価

a 総記 (タイトル数 7,099、該当科目数 11)

総記には、参考図書を収める区分が多く直接授業科目に該当するものは少ないが、図書館サービスに占める部分としては重要である。『図書館学』については、業務面の必要性があるためもあり、比較的充実しているが、『情報科学』『ジャーナリズム・新聞』は 1 科目あたりのタイトル数が、それぞれ 108 及び 196 となっており、数字的には低い。『博物館』は出版点数が少ないものと考えられる。

b 哲学・心理 (タイトル数 13,730、該当科目数 31)

哲学・心理はほぼ均等に収書されていると考えられるが、該当科目数、出版点数から見て心理学・精神分析学がやや低い。

c 宗教 (タイトル数 16,347、該当科目数 26)

宗教分野ではキリスト教関係が多数を占めるのは当然と考えられるが、『宗教学』、『宗教哲学』、『宗教心理学』等の科目に該当する『宗教総記』が出版点数自体も少な

いと考えられるが、1科目あたりのタイトル数がやや低い。

d 社会科学 (タイトル数 90,084、該当科目数 265)

社会科学内の各分野とも比較的平均しているが、『社会学』、『教育』、『統計』分野が1科目あたりのタイトル数が低い。ただし、『社会学』分野は、(2) 調査の概要で述べたように、約 28,000 冊の著者記号使用による整理図書があるため、それ等を合計すれば、かなり充実していると考えられる。

e 言語 (タイトル数 8,059、該当科目数 34)

『言語』分野では、やはり語学辞典を多量に含むと考えられる『比較言語』及び『言語学総記』、『英語』、『日本語』が多い。これらに独、仏を加えれば、この分野の蔵書の 90% 以上を占める。したがって、これらの分野の継続的な充実とともに、それ以外の言語に関する資料も、該当科目は 11 と少ないが、収集の必要があるのではないか。

f 自然科学 (タイトル数 10,489、該当科目数 60)

この分野は逐次刊行物の占める割合が高いため、一概に論じることとはできないが、単純に見れば『物理学』、『化学』分野が該当科目数から見て少ないように思われる。また、直接に該当科目のない分野の参考図書等の収集は工夫が必要であろう。

g 技術 (タイトル数 8,681、該当科目数 7)

『技術』分野は該当科目が少なく、タイトルの絶対量自体が少ない。そのため、1科目あたりのタイトル数は非常に高くなっているが、比較の対象とはなりにくい。『医学』、『農業』が多いのは、保健館への分置と、『農業経済』及び『村落社会学』分野の科目があるためである。

h 芸術 (タイトル数 10,588、該当科目数 11)

総タイトル数の割りに、1科目あたりのタイトル数が多いのは、該当科目数が少ないためである。直接に該当するのは文学部『芸術』、『美学』、社会学部の『映画・演劇論』及び保健体育科目である。その他、この分野は学部生の一般教養としての分野でもある。

i 文学 (タイトル数 27,451、該当科目数 28)

この分野も、日本文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学で全体の 86% を占める。これ等以外の文学は 4.5%、タイトル数にして 1,255 タイトルである。今後、アジア文学、中南米文学等新興文学も順次充実してゆくと考えられるが、見落としのない収集が必要である。

j 歴史・地理 (タイトル数 17,830、該当科目数 26)

主には、文学部の史学関係が直接の該当科目となるが、この分野はそれ以外にも、特に社会科学分野と競合して用いられるケースが多いため比較的充実している。今後とも基本的な文献とともに、質の高い蔵書の収集を続ける必要がある。

(表 2 略)

(主題別蔵書構成細目表 略)

2. 雑誌

(1) 調査の目的

本学図書館の所蔵する雑誌について、現状の分析、すなわち、各主題分野ごとの構成、所蔵構成および傾向を分析することにより、蔵書構成についての問題点を明確にすることおよび、今後の雑誌収集のために一定の方向性を示す参考資料を作成することが本調査の目的である。

現在まで、本学図書館の所蔵する雑誌についての現状分析調査はなされておらず、今回が初めての試みである。

今回の調査は主題別に雑誌タイトルを、数量的な側面から把握しようとしたものである。今後質的な側面からの調査分析を付け加える必要がある。

(2) 調査の概要

①調査対象雑誌タイトル数

調査対象となった雑誌タイトル数は、昭和 63 年 3 月 1 日現在の 4,438 タイトル（大学紀要 1,842 タイトルを除く）である。

②調査項目

雑誌主題別所蔵状況

主題別に本学図書館の所蔵する雑誌のタイトル数を調査し、その傾向を分析した。なお、各主題項目に該当する各学部開講科目を調査し、所蔵雑誌の構成と大学教育におけるカリキュラムとの関連を考慮した。また、所蔵雑誌の構成を考える上で、その収集対象となる雑誌が、主題別にどのくらい出版されているかが問題となる。今回は参考資料とするため、雑誌主題別出版状況を調査した。

③主題項目の設定

主題項目の設定については、『関西学院大学図書館図書分類表』によった。

なお、雑誌は百区分で分類している。（例：法律 340）

④所蔵タイトル数算出基準

タイトル数の算出については、誌名変遷のある場合、誌名が変わる度に 1 タイトルとして数えた。（個別誌名記入方式）

＊うちカレントタイトル数は 2,800 タイトルである。

⑤学部開講科目

『関西学院大学要覧 昭和 62 年度版』によって調査した。

対象開講科目数：499 科目（各学部主要科目及び一般教育・外国語・保健体育科目）

⑥雑誌の主題別出版状況

主題別出版概数について、国内発行誌は「日本雑誌総覧 1984 年版」に、国外発行誌は「ULRICH'S International Periodicals Directory（以下 ULRICH'S という）1985 年版」によった。

(3) 調査結果と今後の課題

①調査結果

各主題分野について1科目あたりのタイトル数が全体的に少なく、雑誌タイトル数が圧倒的に不足している。

本学のように7学部、7大学院を擁する総合大学の図書館においては、ほぼ、全学問分野を対象として、雑誌を収集することが必要である。

②今後の課題

今回の調査によって雑誌所蔵タイトル数とカリキュラム、雑誌所蔵タイトル数と出版点数の関係が明らかになり、量的側面の把握が可能になったと考えられる。

しかし、依然として質的側面が「調査の目的」でも述べたが、大きな問題となる。次の項目について、組織的な取り組みが必要である。

a 所蔵雑誌の質的評価

イ 各学問分野、研究動向に照らして基本となる雑誌（コア・ジャーナル）の調査

ロ 他大学所蔵雑誌の所蔵傾向（内容・種類）の分析

ハ 所蔵雑誌の欠号及びバックナンバー補充のための実態調査

b 利用状況調査（相互利用調査を含む）

c 利用者ニーズの調査

カレント雑誌利用と製本雑誌利用の状況

d 逐次刊行物への収集範囲拡大のための調査

③雑誌主題別所蔵状況

a 総記（タイトル数454、該当科目数11）

総記は授業科目に該当する部分は少ないが、参考図書を収めるので、図書館サービスにおいて重要な部分である。

「知識・情報科学」、「書誌・図書館学」の部分は、合わせると23.8%の構成比率となり、比較的充実している。「逐次刊行物」は雑誌特有のものであり、主題が複数にわたる場合、この部分に収められる。構成比率は、52.4%であり、ウエイトが高い。「ジャーナリズム・新聞」は1科目あたりのタイトル数が37となっており、数字的には高い。「博物館」についても同様のことが言える。

b 哲学・心理（タイトル数241、該当科目数31）

哲学・心理分野は、全体から見て、哲学が41.5%、心理学・精神分析学が55.2%と均等に収集されているが、1科目あたりのタイトル数が9であり、該当科目数、出版点数からみても、低い数字である。

c 宗教（タイトル数324、該当科目数26）

宗教分野は主として神学部の対象分野である。構成比率は7.3%で量は少ないが、1科目あたりのタイトル数は、12タイトルであり、主題10区分中6位である。

この分野は、キリスト教が56.2%、宗教総記が37%を占めている。所蔵タイトル数の約90%がキリスト教関係であるといえる。しかし、該当科目数からみて、キリスト教の1科目あたりのタイトル数が低い数字である。宗教分野については、キリスト

教主義教育に基づく本学の建学の精神に照らして、量的な充実及び収集する雑誌の質的充実にも一層努力を払う必要がある。

d 社会科学（タイトル数 1,795、該当科目数 265）

社会科学分野は、該当科目数が多く、本学の蔵書構成の中心となる分野である。所蔵タイトル数は、1,795 タイトル、構成比率は 40.4% と多いが、該当科目数 265 で割れば、主題 10 区分中で、1 科目あたりのタイトル数は、8 位となる。社会・法・経済・商学部の学問分野を含むことを考慮すれば、より一層の充実をはからねばならない。社会科学分野は、各学問分野とも平均して収集されているが、「社会学」、「教育」、「商業・経営」の 1 科目あたりのタイトル数が低い数字である。

e 言語（タイトル数 120、該当科目数 34）

言語分野では、言語学研究等を中心とした「言語学総記」が 33.3% を占めている。1 科目あたりのタイトル数は、「英語」、「フランス語」が 3 となっており、「ドイツ語」、「日本語」にくらべてやや低い数字を示している。本学の教育研究にとって、言語分野は、欠かせないものであるのに、所蔵タイトル数が少ない。

f 自然科学（タイトル数 492、該当科目数 60）

この分野は主として理学部の対象分野である。技術分野のタイトルの絶対数の少なさは、工学部がないことによるものである。自然科学分野において、1 科目あたりのタイトル数は 8 タイトルであり、主題 10 区分中で、7 位である点や、応用科学技術面の急速な発展に対応した新しい分野（例：バイオテクノロジー等）の雑誌に留意し、今後の収集において配慮する必要がある。この分野は、「数学・コンピュータ」、「物理学」、「生物学」、「化学」の 1 科目あたりのタイトル数が低い数字を示している。該当科目のない分野、例えば「天文学、化石学」等は、ほとんど収集されていないが、学問分野の発展から見てこれらの分野についても、基本的な雑誌を収集する必要がある。

g 技術（タイトル数 211、該当科目数 7）

技術分野は、該当科目数が少なく、タイトルの絶対量が少ない。1 科目あたりのタイトル数は高くなっているが、比較の対象とはなりにくい。「医学」が多いのは、理学部、社会学部の学科目との関連で、学際的分野の雑誌が含まれるからである。また、「建築」、「生活科学」などは、ほとんど収集されていないが、利用者の要求があるので、これらについての基本的な雑誌を収集する必要がある。

h 芸術（タイトル数 230、該当科目数 11）

芸術分野は、該当科目数が少なく、総タイトル数に対する 1 科目あたりのタイトル数が高い。「芸術」、「美学」、「映画」、「スポーツ」、「保健」の分野がこれにあたる。一般教養分野としてのイメージが強いが、この分野の専門的雑誌も多く出版されている。一層の充実が必要である。

i 文学（タイトル数 274、該当科目数 28）

文学分野は、文学研究、文学評論などの「文学総記」が 21.2%、「日本文学」が 38.3% を占め、英・米・独・仏文学が平均して収集されている。1 科目あたりのタイトル

数は、英・米・独・仏文学が6～7で、やや低い数字を示している。また、「その他の文学」に該当する、アジア文学、ロシア文学、中南米文学等についても、収集を検討する必要がある。

j 歴史・地理（タイトル数 297、該当科目数 26）

歴史・地理分野は、文学部史学関係の科目が該当科目となる。特に、歴史分野は、経済・社会・制度等の社会科学の分野と競合しており、比較的充実している。

しかし、内容を見ると、アジア・ヨーロッパ・北アメリカ史と古代史に集中しており、アフリカ・南アフリカ・太平洋諸島史の雑誌は少ない。これらについても基本的な雑誌を収集する必要がある。

（表1、表2 略）

（参考：雑誌主題別出版状況 略）

（表3 略）

⑤新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申

1989年3月30日

学 長 武 田 建 殿

新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申

新大学図書館管理運営問題検討委員会

委員長 八重津 洋 平（大学図書館）

委 員 今 田 寛（学長代理）

森 本 好 則（教務部長）

安 井 修 二（第3部会）

芝 田 正 夫（第3部会）

高 橋 治 男（学長直属）

高 森 昭（神学部）

橋 本 淳（神学部）

栢 植 一 雄（文学部）

義 則 孝 夫（文学部）

遠 藤 惣 一（社会学部）

山 本 剛 郎（社会学部）

時 武 英 男（法学部）

岡 俊 孝（法学部）

柚 木 学（経済学部）

田 中 敏 弘（経済学部）

丸 茂 新（商学部）

池 田 勝 彦（商学部）

新 谷 隆 一（理学部）

鈴 木 啓 介（理学部）

橋 本 徹（産業研究所）

牧 正 英（総合教育研究室）

小 西 岳（情報処理研究センター）

津金沢 聡 広（大学図書館）

尼 子 卓 司（大学図書館）

野 村 晃（大学図書館）

はじめに

本委員会は1988年12月2日の大学評議会において新大学図書館の管理運営に関する問題を検討するために設置された。検討内容が新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関することであるため、委員会は大学図書館長を委員長とし、学長代理、教務部長、大学諸施設検討委員会第3部会選出委員、学長直属選出委員、各学部長、各学部選出委員、各研究所選出委員および大学図書館選出委員によって構成された。

I. 答申作成に至る経緯

1987年5月、大学評議会は新大学図書館建設のための「大学図書館建設に関する第二次答申」を大学図書館問題検討委員会から受理し、これを大学案と決定した。大学案は、その後理事会において審議され、1988年12月の理事会で建設位置と建設面積（約2万m²）および開館年月（1994年4月）が決定した。

新大学図書館建設についての大学案は4つの理念の下に建設計画に関する事項と管理運営に関する事項等で構成されている。建設計画に関する事項は、その後設置された大学諸施設検討委員会第3部会において検討が進められ、1989年3月の第7回委員会では各階の階層レイアウトが大筋において承認された。一方、新大学図書館の管理運営に関して、武田学長より大学案の基本理念に沿って、より具体的に検討し、その方向性を本年3月末迄に答申の形でまとめるよう、本委員会に諮問されたのである。

本委員会は、第1回委員会を1988年12月に開催して都合5回の委員会を開催し、図書館が用意した討議資料〈新大学図書館における利用サービスと管理運営〉（別紙添付）をもとに慎重に検討を重ねた。また、全学から広く意見、提案を聴取し、より具体的に検討できるようこの〈討議資料〉を全教職員に配布した。

幸い、各学部の教授会をはじめ、各部局で活発な討議が行われ、貴重な意見、提案が本委員会の委員を通じて寄せられた。

現在の図書館より飛躍的に充実される新大学図書館は本学の教育研究、学習活動に大きな役割を果たしていかなければならない。したがって、その管理運営のあり方は、本学の歴史と現実を十分踏まえ、かつ将来展望に立った合理的なものでなければならない。特に、収書方法と予算制度、利用サービス体制とシステム化、業務体制といった具体的な管理・運営体制は慎重に検討が加えられ、全学的なコンセンサスを得て結論が出される性格のものだと思われる。ただし、これらの全ての項目を現学長の任期中（1989年3月末）に十分に討議、検討し、答申としてまとめるには学年末の多忙な時期でもあり時間的に無理であった。したがって、本答申においては、これまでの討議で明らかになった管理運営の重要な課題を整理し、おおよそそのあるべき方向性を示すに留まらざるを得なかった。

そのため、本年4月以降に多くの問題を検討課題として持ち越す答申となったが、今

後も引き続き本委員会で別途建築計画の推進と並行して検討がなされ、本学の新大学図書館にふさわしい立派な管理運営体制が確立されなければならないと考える。

II. 新大学図書館の利用サービスについて特に配慮すべき事項

新大学図書館における利用サービスの具体的な内容に関しては、〈討議資料〉に示された大筋で合意を得たが、下記の項目については特に配慮すべき事項として明記する。

1. 図書・資料の整備・充実

図書・資料の整備・充実については近年、利用者からのニーズが高い視聴覚資料、ニューメディア資料を中心に検討した。

(1) 視聴覚資料

視聴覚資料については、著しい利用の増加が予想されるため資料・設備を飛躍的に充実させる。現在の語学偏重の資料構成を改め、全学問分野にまたがる資料構成とする。ビデオテープ、LD、CD 等約 5 万点の視聴覚資料を収集する。

なお、具体的な「AV 資料充実計画書」を別途作成する。

(2) ニューメディア形態の資料

新しい出版形態に対応するため、大量のデータをコンパクトに収容した光ディスク (CD-ROM 等) を中心としたニューメディア形態の資料を収集する。

2. 学術情報検索サービスの整備・充実

学術情報の電子化に対応するため、データベース、情報関連機器・設備、サポート体制等について整備する。

なお、具体的な「新大学図書館学術情報システム計画書」を別途作成する。

(1) CD-ROM、フロッピー・ディスク等のデータベースの検索

CD-ROM、フロッピー・ディスク等のニューメディア資料は、今後ますます増加する傾向にある。これらの動きに対応するため、CD-ROM 等の検索に必要なパソコンを十分用意する。

(2) 学内に所蔵する図書・資料のデータベース検索

学内に所蔵する図書・資料の目録情報をカード目録だけでなく、図書館の端末機から検索できるようにする。さらに、将来的には研究室や自宅の端末機からも検索できるように、関連施設・設備を整備する。そのため、大学図書館を含めた全学的な委員会を設置し、インフラストラクチュア（基盤）となる学内ネットワークシステム（LAN）の整備計画を早急に検討する必要がある。

(3) 国内外データベースの検索

本学に所有していないデータベースについては、文部省によって設置された「学術情

報センター」所有のデータベースをはじめとして、多種・多様なデータベースの検索を可能とする。

(4) 情報検索に対するサポート体制

各種データベースを効率的に検索できるよう、レファレンス担当職員を配置する。
レファレンス担当職員は代行検索などの利用上の援助を行なう。

3. 利用諸条件の整備・充実

新大学図書館の図書・資料、設備、施設を利用しやすいように、可能な限り利用上の諸条件を整える。

(1) 全面開架制

利用者が図書・資料を直接に検索、利用できるよう全面開架制を採用する。

なお、書架の乱れを修正するため、配架点検を1日数回定期的に行う。

(2) 開館日

開館日を現行より16日拡大する(1988年度に適用した場合)。そのため、日曜日、国民の祝日、創立記念日等以外の休館日を減らし、開館日を拡大する。

①夏季休暇中は8月13日から17日を除いて開館する。

②年末、年始は12月29日から1月3日を除いて開館する。

(3) 開館時間

現行では開架室のみ21時まで開館しているが、新大学図書館では全館21時まで開館する。

(4) 貸出冊数

貸出冊数は利用目的(卒業論文等の作成)、利用時期(試験期等)等を踏まえ拡大の方向で、今後大学図書館運営委員会で検討する。

4. 今後継続して検討する事項

上述した「AV資料充実計画書」には備えるべき資料・設備について、また、「新大学図書館学術情報システム計画書」には学術情報システムの内容の詳細について、図書館がそれぞれ別途計画書案を本委員会に提出する。

Ⅲ. 新大学図書館の教育・研究支援体制の充実

新大学図書館が教育・研究を支援するためには、全学的な収集体制の整備、図書予算制度の見直し、図書館の責任体制の強化、図書館職員の充実などをはじめとする管理・運営体制の抜本的な整備が必要である。

1. 図書・資料の充実と収集体制

新大学図書館は、利用者が必要とする図書・資料およびその情報を収集し、利用者に

迅速かつ的確に提供することをその第一の役割としている。学術情報システムのネットワーク化が整備される将来においても、第一次資料である図書・資料の収集、所蔵の必要性に変わりはない。

新大学図書館においては、本学の教育・研究を支えるためにニューメディアを含めた図書・資料の充実が必要である。そのためには、図書・資料の収書が適正に行なわれるように、選定ルールと図書予算の合理的な運用を含む収書体制のあり方が重要である。

(1) 全学的な図書・資料の収集分担

図書・資料の整備・充実を計るために、収集分担の大枠として以下の方向で検討を進める。

- ① 図書館図書費のうち図書館選書分は、従来どおり図書館が主として教育・研究用図書・資料の和書を中心に行なう。なお、参考図書、雑誌等については和書・洋書を網羅的に収書する。さらに大学図書館長が人文、社会、自然科学等の各分野にわたって数名の教員をアドバイザーとして委嘱する収書専門委員制度を新設する。
- ② 図書館図書費のうち各学部割当分（学長直属を含む）では、各学部を選書委員会を設けるなどして図書館に備え付けるべき図書・資料を収書する。収書対象となる図書・資料（雑誌を含む）は主として洋書を中心とした高度な研究図書・資料とする。
- ③ 研究資料費で購入する図書・資料（専用図書を含む）は、研究者または研究グループが研究上必要とする図書・資料を選定する。
- ④ 大型参考図書・資料（文献目録・書誌類）、大型辞書、古文書等歴史関係資料、雑誌の大型バックナンバー等は高額であり、選定に緊急性を要するため特別資料収書委員会（仮称）を大学図書館長のもとに設置する。これらの図書・資料の収書には新たな別途予算が必要である。
- ⑤ 指定図書制度を大幅に拡大し、図書・資料の収書範囲および購入冊数の拡大をはかる。また、学生に教育上推薦する図書・資料を教員が専門分野を越えて幅広く推薦できる推薦図書制度を新設するとともに、学生の希望図書についてもその対応が十分できるようにする。

(2) 収書業務の充実

新大学図書館には収書室を設置して出版情報（出版目録、各種データベース）を収集するとともに、見計らい図書・資料を配架し、教員が自由に図書・資料の選定ができるようにする。さらに収書室には収書担当職員が常駐し、教育・研究動向や利用者ニーズの調査を行い、図書館および各部局の収書活動を全面的にサポートする。

2. 図書予算制度の見直し

本学における図書・資料の購入は大学図書館図書費、各学部の研究資料費の図書購入費、研究設備図書費等により行なわれている。このうち大学図書館図書費は大学図書館

と各学部（学長直属を含む）とに配分されている。また、研究資料費の図書購入費については、社会学部、経済学部、商学部ではそれぞれ独自の専用図書制度をもち、運用されている。

これらの予算制度は本学の教育・研究の実状を踏まえて形成されてきたものであるが、配分比率や予算運用の面で種々の問題があると思われる。したがって新大学図書館完成にむけて全学的な図書・資料購入予算のあり方については、現行の予算制度（図書館図書費の配分および研究資料費の図書費の扱い方も含め）を踏まえながら、今後本委員会で引き続き問題点の整理を行ない、あるべき予算制度を検討していく必要がある。

3. 図書・資料の集中化

- (1) 全学的な図書・資料の有効利用を推進するため「大学案」の基本理念にもとづき、図書・資料は新大学図書館に集中化していく方向で継続して検討を進めていく。集中化にあたっては、新大学図書館の教育・研究条件の整備・充実と合せて、各学部での教育・研究の実態を踏まえながら長期的展望にたって計画的、段階的に進めていく。
- (2) 公費で購入する図書・資料（個人研究費、消耗図書費は除く）は、費目の別を問わず大学図書館に登録し、図書館の学術情報データベースに入れてこれを公開し、全学共通利用の対象とする。ただし、研究者の研究条件を阻害しないよう整理業務の迅速化や利用条件などに工夫を行うことが必要である。
- (3) 図書館図書費の各学部割当分（学長直属を含む）で購入した図書・資料は原則として図書館に常置する。ただし、教育・研究上どうしても共同研究室、あるいは部局図書室に置く必要のある図書・資料については、新たな特別貸出制度（仮称）を設ける。
- (4) 分置図書、専用図書については、この制度を実施している学部の実態を十分に調査し、教育・研究活動に支障がないよう配慮したうえで、全学的な図書・資料の集中化という観点から継続して検討する。なお、専用図書に関する目録情報の集中化については実施の方向で検討する。ただし、研究者の研究条件を阻害しないよう整理業務の迅速化や利用条件などに工夫を行う必要がある。

4. 諸制度の見直しと事務組織の整備

新大学図書館が大学全体の研究・教育・学習活動を支援するためには、図書館機能をより一層強化し、合理的で機能的な管理・運営体制を整えることが不可欠である。

以下に、その整備・充実の方策について提案する。

(1) 新大学図書館における諸制度の見直し

新大学図書館はその規模とサービス内容を飛躍的に充実し、本学の教育・研究を支援するための重要な機構として役割を果たす必要がある。そのため、大学図書館が全学的な図書・資料の収集ならびに利用という立場より十分に責任を持って機能する必要がある。具体的には、大学図書館運営委員会の充実や利用制度の見直しなど、図書館関連

諸規程および諸制度の整備を本委員会と大学図書館運営委員会で引き続き検討していく必要がある。

(2) 事務組織の整備

新大学図書館では、図書・資料の受入・整理業務、逐次刊行物部門の充実、ならびに利用サービス窓口、レファレンスサービスの整備・充実が必要である。すなわち、事務組織を合理的で効率的なものに整えるため、少しでも早い時期に現行の3課体制を再編成して逐次刊行物部門を独立させ4課体制とするのが望ましい。

(3) 図書館職員の育成

新大学図書館におけるサービス体制を支えるために、図書館職員の養成と、優秀な職員の確保を早急に計っておく必要がある。特にレファレンスサービス、収書、システム管理など専門的な業務を行なう職員の育成は急務であり、専門分野の教員の援助をおおきながら養成を計っていく必要がある。これらの図書館職員の養成は相当時間を要することであり、新大学図書館完成までに、上記事務組織の整備・充実と合わせて、内地研修、外地留学等を積極的に取り入れた養成計画の具体化を計っていかなければならない。

なお、図書館職員の育成を含めた人事計画は、「人事計画（案）」としてまとめ、今後然るべき機関との協議を踏まえて提案する。

むすび

本委員会は、今後も新大学図書館の利用サービスと管理運営の残された多くの課題について検討を重ねていかねばならない。そして、これらの検討課題のうち、まとまった事項については大学評議会、大学図書館運営委員会、大学諸施設検討委員会第3部会といった関係する諸機関に提案し解決されるべきであろう。本委員会は検討事項の性格から考えて新大学図書館の建設計画がまとまり、実施計画の段階に入った後も開館時まで引き続いて諸問題の検討と具体案の提案を続けていくことが必要である。

以 上

⑥新大学図書館 AV 関係充実計画書・新大学図書館学術情報システム計画書

新大学図書館 AV 関係充実計画書
新大学図書館学術情報システム計画書

1989 年 5 月

関西学院大学新大学図書館管理運営問題検討委員会

新大学図書館管理運営問題検討委員会

| | | | |
|-----|-----|----|--------------|
| 委員長 | 八重津 | 洋平 | (大学図書館) |
| 委員 | 今田 | 寛 | (学長代理) |
| | 三浦 | 澄雄 | (教務部長) |
| | 安井 | 修二 | (第3部会) |
| | 芝田 | 正夫 | (第3部会) |
| | 高橋 | 治男 | (学長直属) |
| | 橋本 | 淳 | (神学部) |
| | 高森 | 昭 | (神学部) |
| | 義則 | 孝夫 | (文学部) |
| | 亀田 | 隆之 | (文学部) |
| | 遠藤 | 惣一 | (社会学部) |
| | 山本 | 剛郎 | (社会学部) |
| | 時武 | 英男 | (法学部) |
| | 岡 | 俊孝 | (法学部) |
| | 小西 | 唯雄 | (経済学部) |
| | 田中 | 敏弘 | (経済学部) |
| | 丸茂 | 新 | (商学部) |
| | 池田 | 勝彦 | (商学部) |
| | 桑名 | 誉 | (理学部) |
| | 高山 | 奨 | (理学部) |
| | 高井 | 真 | (産業研究所) |
| | 牧 | 正英 | (総合教育研究室) |
| | 小西 | 岳 | (情報処理研究センター) |
| | 津金沢 | 聡広 | (大学図書館) |
| | 尼子 | 卓司 | (大学図書館) |
| | 野村 | 晃 | (大学図書館) |

新大学図書館における AV 関係充実計画書

はじめに

新大学図書館では視聴覚資料と関連設備・機器の充実が大きな特色となっている。特にニューメディア資料を中心とした視聴覚資料は近年出版形態ならびに内容の多様化が急速に進んでおり、大学図書館では教育・研究動向に合わせて今後ますます充実する必要がある。新大学図書館の視聴覚資料、設備・機器および利用サービスの充実は一連の建設計画が具体化している現段階において全学的にますます強い要望として現れている。大学図書館はこれらの要望を受け以下のように視聴覚サービスの充実計画を新大学図書館管理運営問題検討委員会に提案する。

I. 取扱資料ならびに利用サービス

1. 視聴覚資料の収集範囲について

①資料の内容による収集範囲

- a 基本的に全主題にわたって網羅的に収集する（語学教育関係資料を除く）。ただし、教育・学習関係資料を主とする。
- b 図書形態で出版されているものが CD 等で出版された場合は利用者ニーズ、資料特性を考慮して必要なものを収集する。
- c 国内外における TV 放送等の最新情報の収集提供を行なう。衛星放送（海外 TV 放送等）の利用やハイビジョン技術の実用化に伴う視聴覚サービスの新たな展開に対応できるよう検討する。

②資料の形態による収集範囲

- a カセットテープ
- b オープンリールテープ
- c ビデオテープ
- d LP、SP レコード
- e CD
- f LD
- g スライド
- h その他

2. 視聴覚座席の配置計画とその仕様

視聴覚座席を約 100 席設置する。視聴覚座席は個人用だけでなく、2 名用 3 名用さらにグループで利用できるものなど利用者ニーズを考慮した多様な座席を設ける。閲覧机は視聴覚機器類を設置するため幅の広いゆったりとしたものを用意する。さらに座席については映像資料については画面を見やすいように OA 用チェア等を設ける。閱

覧座席の配置については映像関係資料（VTR、LD 等）の座席は光が画面に乱反射しないように採光に考慮し窓際を避けて設置する。音響関係資料（Cas.、CD 等）の座席はリラックスした雰囲気で行うことができるような比較的明るい景色のよい場所に設置するなど閲覧環境に十分考慮する。そのため閲覧座席は一か所に集めて視聴覚室として設けずそれぞれの利用目的に応じて分散して配置する。

①個人用ブースは約 65 席設置する。

| | | |
|---|----------------------|------|
| a | カセットテープ用ブース | 20 席 |
| b | オープンリールテープ用ブース | 2 席 |
| c | ビデオテープ用ブース（VHS、Beta） | 15 席 |
| d | LP、SP レコード用ブース | 3 席 |
| e | CD 用ブース | 10 席 |
| f | LD 用ブース | 10 席 |
| g | TV 等のためのブース | 3 席 |
| h | スライド用ブース | 2 席 |

②グループ用ブースは約 35 席設置する。

グループ用ブースは 3 名迄のグループ閲覧に利用するために設置する。5 名以上の利用についてはグループ閲覧室を利用する。さらに多人数で利用する場合は図書館ホール（100 名収容）を利用する。

| | | |
|---|----------------------|---------------------|
| a | ビデオテープ用ブース（VHS、Beta） | 2 席×5 ブース、3 席×3 ブース |
| b | CD、LD 用ブース | 2 席×5 ブース |
| c | TV 用ブース | 2 席×3 ブース |

3. カウンターサービスについて

①視聴覚資料、閲覧座席の利用は視聴覚カウンターで利用手続きをする。

②視聴覚資料はカウンター内に収容設備を設け係員が出納式で資料提供を行なう。

ただしサービスの迅速化をはかるため最新の自動取出装置（VTR 等）などの設備・施設を積極的に導入する。

③資料の検索についてはカードレスとし、CD-ROM 等を用いて検索する。

④視聴覚資料は館内利用を原則とする。

⑤利用時間を 8:30～21:00 とする。

II. 管理・運用体制

1. 資料の収集について

①図書館に配架する視聴覚資料の選定は主に大学図書館と収書専門委員（新設）が図書とあわせて行なう。

注 収書専門委員：「新大学図書館の利用サービスと管理運営に関する答申」にお

いて新設が提案された収書制度にもとづく委員

- ②学生の希望資料購入制度、教員の推薦資料制度を拡大し資料の整備・充実をはかる。

2. 購入予算および費目

視聴覚資料予算は現行の図書費との連動を改め、予算額を大幅に拡大し予算費目は資料の性質上（破損しやすい）消耗図書費とする。

3. 整理業務について

- ①視聴覚資料を迅速に利用者に提供するために整理業務は可能な限り業者委託とする。
- ②資料のデータについては機械入力し台帳、会計処理、検索などはこのデータを利用して処理する。（詳細は今後の検討課題とする）
- ③現在の視聴覚室独自の分類を改め簡素化し、図書分類（DC）に合わせより標準的な分類とする。（整理業務の合理化）

4. 視聴覚室専門委員会

新大学図書館における視聴覚室専門委員会は現在の語学中心の専門委員構成を改め、図書館運営委員会に発展的に吸収させる。ただし、資料選定のために収書専門委員制度（新設）を設け図書とあわせて全主題にわたる網羅的な収集を行なう。

5. サービス人員体制

カウンターに視聴覚資料の収書・整理、提供ならびに視聴覚機器の利用をサポートするために専任職員を配置する。

6. 学内他機関との連携

新大学図書館の視聴覚サービスは学内の諸機関（総合教育研究室、マルチメディア教育システム等）と機能分担しながら全学的な教育・研究支援機関として十分機能を果たしていくこととする。

Ⅲ. 新大学図書館竣工までの移行措置

新大学図書館の建設は2期に分かれるが、第1期工事終了時（部分開館時）1992年4月に上記の条件で開室する。そのために必要な要件は以下の通りである。

- 1. 大学長へ提案した大学への語学支援機能の移管について明確にする。

- 2. 現在の語学中心の資料構成を改め、全主題を網羅するような資料構成とする。

- ①資料の収集については別途大学図書館で計画している収書計画に視聴覚資料収集計

画を含め、新大学図書館完成までに継続的に必要とする資料を収集する。

- ②設備・機器等については第3部会、実務委員会において最新の設備・機器を具体的に検討する。

(視聴覚サービス関連図 略)

新大学図書館学術情報システム計画書

目次

はじめに

I. 学術情報システム計画

II. 計画推進のための今後の課題とスケジュール

はじめに

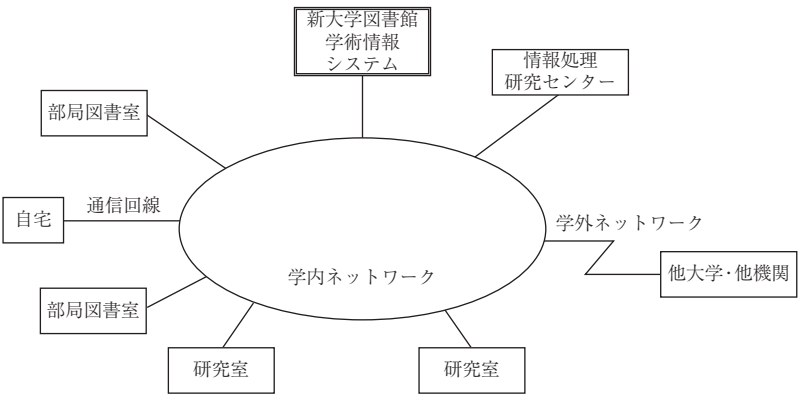
新大学図書館の建設にあたって、「大学図書館建設に関する第二次答申」(1987年5月大学評議会決定)において、新大学図書館の理念として、第一に“学術資料・情報センター”としての役割を挙げている。そこでは、大学図書館内に設置する専用コンピュータを中心として図書館内・館外に多数の端末機を設置し、学内・学外をネットワークで接続して、学術情報の流通を行うことを提案している。大学図書館としては、この「答申」並びに、本委員会の討議及び学内から寄せられた意見を踏まえながら検討した結果、次の通りのシステム計画案を提案する事とする。

まず、第I章に、学術情報システム計画の姿を 1. 本システム構成とシステムの内容 2. ハードウェア構成 の順に説明する。第II章では、この計画を推進していくための課題とスケジュールを示す。

I. 学術情報システム計画

新大学図書館の学術情報システムは、大学図書館のみの単独なシステムではなく、学内及び学外のネットワークとの連携によって有効に機能するシステムでなければならない。これを全体像として図示すれば下記の図1となる。

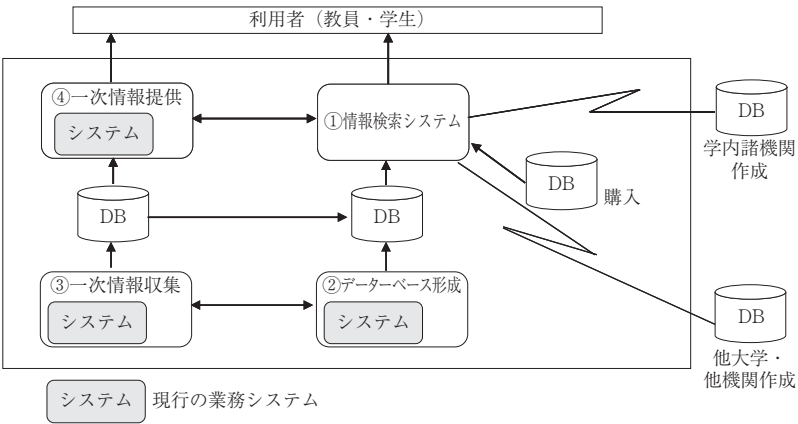
図 1



1. 学術情報システムの構成と内容

学術情報システムは、(1) 情報検索システム、(2) データベース形成システム、(3) 一次情報収集システム、(4) 一次情報提供システムの4つのサブシステムで構成する。以下にシステム関連図と各サブシステムの内容を示す。

図 2 新大学図書館学術情報システム関連図



(1) 情報検索システム

膨大な一次情報 (図書・雑誌等の現物) の中から必要とする情報を的確に入手するためにはコンピュータ技術を利用し、データベース化した二次情報 (一次情報の利用のために加工された目録・索引等) を検索することが最も効果的である。現在、特定分野

の研究情報については国際的な二次情報データベースが流通しており、コンピュータによりデータベースから必要な情報を入手することが可能である。本学においても、学術研究に最も適合した情報検索システムを確立していくことが将来における学術研究の振興にとって重要である。(以下、データベースは DB と省略する)

情報検索システムは、検索対象データによって、大きく2つに分けて構成される。

A. 本学作成 DB 検索システム

- a. 学内の図書・資料の書誌・所蔵情報 DB
- b. 学内論文 DB (新規作成 DB)
- c. その他 DB

検索の方法としては端末機によるオンライン検索及び CD-ROM 等のニューメディアを利用した検索が考えられる。研究者は端末機の簡単な操作で、書名や論文索引中の単語・熟語、著者名、会議名、主題キーワード、出版者、団体名、分類番号などによって本学の学術情報を迅速に入手することができる。

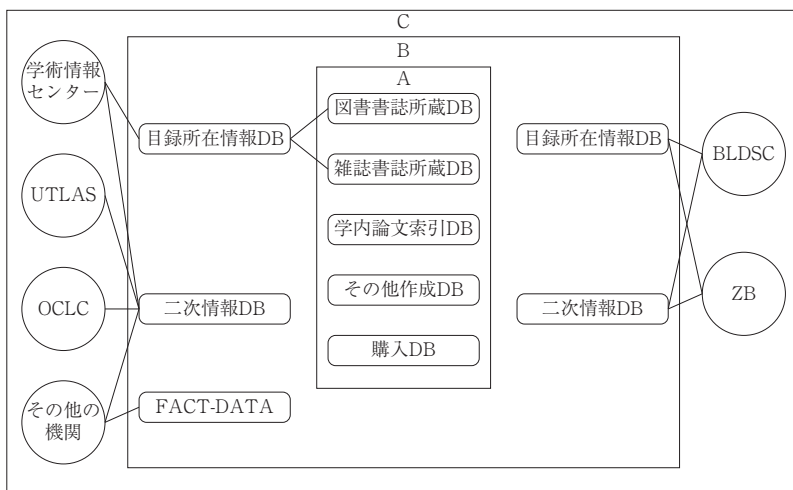
B. 外部機関作成 DB 検索システム

- a. 学外ネットワーク利用 DB
- b. 購入 DB

外部機関作成データベースは書誌・所蔵データのみならず FACT-DATA も対象とし、図書館内から端末機によるオンライン検索を可能とする。又、CD-ROM 等で市販されているデータは専用の検索機器を用いて求める情報を選ぶことができる。ここでいう外部機関作成データベースとは、例えば、書誌情報(JPMARC、LCMARC)、Harvard Business Review, Life Science Collection、学位論文索引情報等のことである。

情報検索システムで対象とするデータベース構成を図3に示す。

図3 データベース構成図



A 関西学院所有DB群 B 他機関作成DB群 C 提供機関群

(2) データベース形成システム

このシステムにおいては書誌・所蔵DBのみならず、学内論文の索引DBを作成し、提供することによって本学の学術研究の促進に貢献することを目的とする。

A. 本学の図書・資料の書誌・所蔵情報DB作成システム

- a. 図書整理システム
- b. 雑誌整理システム

図書業務システムにおいて作成される大学図書館所蔵図書・資料の書誌・所蔵情報DBだけでなく全学に所蔵している図書・資料の書誌・所蔵情報の検索にも答え得る形でデータベースを作成する。

B. 学内論文索引DB作成システム

学内で作成された論文名、目次、アブストラクトなどをデータとして蓄積し、検索用の文献型データベース化して研究活動に利用する。近い将来には、研究者自身がネットワークを利用して、研究室あるいは自宅から直接、原論文を入力することによって、全文型データベースを作成し、さらに電子出版によって一次資料として発行することも可能となろう。

(3) 一次情報収集システム

最新の出版情報を入手し、それらの中からの確な情報を選択するシステムである。書誌情報の入手に関しては、既に利用している学術情報センター所有のデータベースの他に OCLC、UTLAS、出版社 MARC 等が考えられる。これらは、図書・資料（一次情報）の選定に利用するだけでなく、入手した書誌情報を業務システムにも反映させて、より早く利用者に一次情報を提供することができる。

(4) 一次情報提供システム

利用者に一次情報を迅速かつ、効果的に提供するシステムである。本学図書館に所蔵している一次情報を提供するシステムと他大学、他機関で所蔵している一次情報を提供するシステムの2つからなる。

A. 貸出返却システム

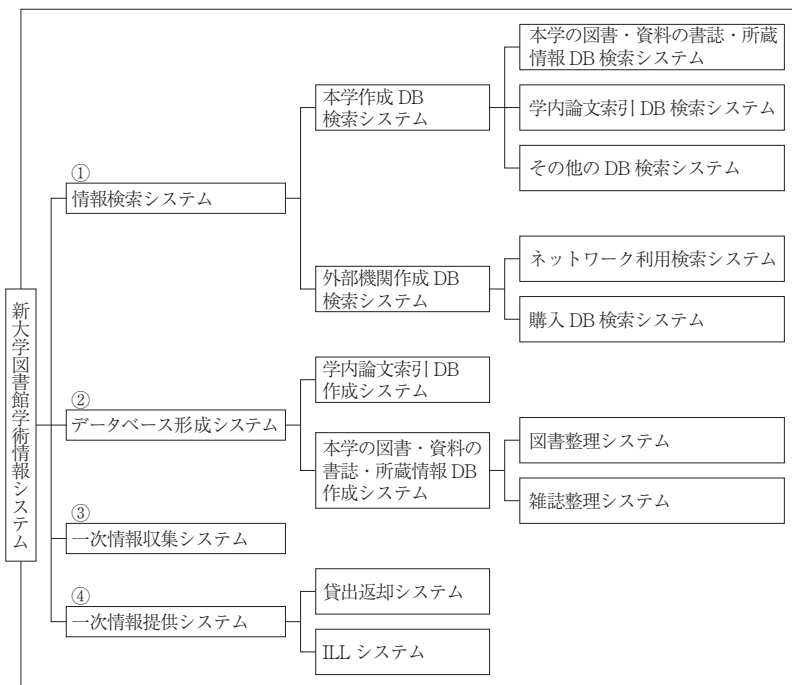
現在すでに運用している貸出返却システムを拡張する。このシステムでは、貸出予約、継続手続き等を部局図書室、研究室からでもできるようにする。

B. ILL（図書館間相互貸借）システム

他大学、他機関で所蔵している一次資料については学術情報センターの ILL システムや海外の BLDSC（British Library Documents Supply Center）、ZB（Zentral Bibliothek）等を利用して、今まで郵送でしか依頼できなかった相互協力による文献複写や一次資料の貸借を即時に申し込むことを可能とする。このシステムは、情報検索システムと有機的に関連付けることによって情報検索から資料の入手まで一貫して迅速に行うことができる。

以上に述べてきたことをシステム構成図で示すと図4となる。

図4 新大学図書館学術情報システム構成図



2. 新大学図書館学術情報システムを支えるハードウェア

ハードウェアの構成図を図5に、個別の機器の設置場所および必要台数を表1に示す。

なおこの機器構成は、1. で示した機能を充足するために必要とされる機器類をあげており、新図書館完成時には機器等の変更が十分ありうると予測される。

(1) CPU（中央処理装置）関係

ア CPU（中央処理装置）

1で述べた本システムを稼働させるためには高性能のCPUが必要となる。またイとの関係で、日立でいえばM-680Hが適当である。

イ IDP（内蔵型データベースプロセッサ）

大規模なデータベースサービスの要求に応えるため、高速のデータベース処理を実現する必要があり、IDPを設置する。

ウ 自動運転支援装置（CSC 2）、自動運転監視盤

長時間にわたるオンラインサービスを支えるため、深夜等のバッチ処理が頻繁に発

生すると考えられるが、これを省力化、確実化するため自動運転装置を設置する。

エ バックアップ電源装置

自動運転装置の安定運用を計るため、停電や事故対策用としてバックアップ電源装置を設置する。

(2) 記憶装置

ア 磁気ディスク装置

現在約 30 万件の書誌所蔵データベースを作成しているが、これを磁気ディスク上に格納するために約 10 GB の容量のディスクを使用している。

本システムを機能させるための大量の書誌所蔵データベースを保有するために少なくとも 30~40 GB の容量の磁気ディスクを設置する。また、書誌所蔵データベースはその性質上時間とともに蓄積され、増大の一途をたどるものであるため、逐次追加していく。

イ 光ディスク装置

今後発展増大してゆくであろう画像情報のデータベースの記憶媒体として光ディスクを設置する。

ウ 半導体記憶装置

アでも触れたように磁気ディスクは暫増していくが、処理速度を確保するためアクセス速度のすぐれた半導体記憶装置を補助的に使用する。

(3) 入出力装置

ア 端末機

多数の利用者に対して本システムの利用機会を保証するために、多くの端末機を図書館内だけでなく学内の様々な場所に設置する。

イ 端末プリンタ

ウ レーザービームプリンタ

エ MT デッキ

カートリッジ式

オープンリール式

オ CD-ROM ドライブ+パソコン

カ 画像入力装置

画像データベースの入力処理用

キ ファックス

(4) ネットワーク関係装置

ア モデム (変復調装置)

イ モデム用 CCP (通信制御処理装置)

ウ 学内 LAN 用ケーブル (学内他システムと共用)

- エ LAN 制御用コンピュータ（学内他システムと共用）
- オ FEP（フロントエンドプロセッサ）

（図5 ハードウェア構成図 略）

（表1 機器設置場所および台数 略）

II. 計画推進のための今後の課題とスケジュール

1. 今後の課題

本計画は、前述したように極めて大きなシステム計画であり、その目的とするところは、本学の教育研究活動を強力に支援することである。学内ネットワーク（LAN）の敷設や、専用コンピュータの設置、また多量な学術情報データベースの形成等は、大学図書館のみが計画を推進し、それを実現しうるものではない。

したがって、本計画を実現させていくためには全学的な協力とコンセンサスを得ながら着実な実施計画の策定と計画の推進、そしてシステム完成後の維持運用が行われなければならないであろう。そのために次のような委員会を設置していくことを提案したい。

（1）学内ネットワーク委員会（仮称）の設置

本計画は、学内ネットワーク（LAN）の敷設が重要な条件となる。学内ネットワーク（LAN）は電話回線、光ファイバーいずれにせよ全学的なケーブルの敷設であり、LANの活用は、単なる学術情報システムのネットワークだけではなく全学の諸活動に役立つ性格を持つものとなる。

したがって、学内ネットワーク（LAN）の敷設計画については、この学術情報システム計画推進の枠を超えた形で、別途に学内ネットワークシステムの構築を目的とする全学的な委員会を早急に設置していくよう学長に提案する。

（2）専門委員会の設置

学術情報システムは、大学全体を対象とするシステムであり、かつ技術的な要素を含んだシステム計画である。そのため、計画推進段階、完成後の維持運用段階で全学的な、かつ専門的な委員会が必要となると考えられる。

- ①学術情報システムを構築・運営するための専門委員会
- ②全学的なデータベース（書誌・所蔵、論文アブストラクト等）を形成するための協力委員会
- ③大型の外部データベースや学外へのネットワーク先を選定するための専門委員会

なお、これらの委員会の設置については、計画がより具体的に進んだ段階で必要となる委員会の設置を検討していくこととする。

(3) 事務組織と職員体制の整備

このシステムを維持開発するためには、事務組織の整備と職員の資質の向上が必須である。図書館内の組織改変と職員養成並びに職員配備計画については別途計画書（新大学図書館利用サービス支援体制充実計画書（仮称））を作成しているが、適合し得る組織と量、質ともに充実させた職員体制の確保は必須の要件である。さらに、各部局図書室等においても、本システムを担える職員を配備する必要がある。

(4) 予算の確保

本計画を実現し、維持していくためには、ホストコンピュータ等のハードをはじめとして、多額の経費が必要である。そのため、本システムに関わる経費について、計画的な予算の確保が必要である。

2. スケジュール

学術情報システムを推進するためのスケジュールをシステム開発、ハード、データについて新大学図書館の建設スケジュールとともに図6に示す。特に、ホストコンピュータを含む機器の設置については、大学図書館建設の設計に組み込まなければならない。また、これらの機器については、第1期工事終了とともに設置し全面稼働の準備を行う必要があろう。更に、未だ遡及して入力していない学内所蔵図書約30万件のデータベース作成作業、並びにシステム開発のための要員確保を早急に行わなければならない。

(図6 学術情報システム推進スケジュール 略)

⑦新大学図書館利用サービスの支援体制計画書

新大学図書館利用サービスの支援体制計画書

1989 年 9 月

関西学院大学新大学図書館管理運営問題検討委員会

新大学図書館管理運営問題検討委員会

| | |
|-----|--------------------|
| 委員長 | 八重津 洋 平 (大学図書館) |
| 委 員 | 今 田 寛 (学長代理) |
| | 三 浦 澄 雄 (教務部長) |
| | 安 井 修 二 (第 3 部会) |
| | 芝 田 正 夫 (第 3 部会) |
| | 高 橋 治 男 (学長直属) |
| | 橋 本 淳 (神学部) |
| | 高 森 昭 (神学部) |
| | 義 則 孝 夫 (文学部) |
| | 亀 田 隆 之 (文学部) |
| | 遠 藤 惣 一 (社会学部) |
| | 山 本 剛 郎 (社会学部) |
| | 時 武 英 男 (法学部) |
| | 岡 俊 孝 (法学部) |
| | 小 西 唯 雄 (経済学部) |
| | 田 中 敏 弘 (経済学部) |
| | 丸 茂 新 (商学部) |
| | 池 田 勝 彦 (商学部) |
| | 桑 名 誉 (理学部) |
| | 高 山 奨 (理学部) |
| | 高 井 真 (産業研究所) |
| | 牧 正 英 (総合教育研究室) |
| | 小 西 岳 (情報処理研究センター) |
| | 津金沢 聡 広 (大学図書館) |
| | 尼 子 卓 司 (大学図書館) |
| | 野 村 晃 (大学図書館) |

はじめに

本委員会は、本年 3 月に学長宛に提出した「新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申」において、別途新大学図書館管理・運営についてのより詳細な 3 つ

の計画書案、即ち「新大学図書館 AV 関係充実計画」、「新大学図書館学術情報システム計画」、「新大学図書館利用サービスの支援体制」を提案することを謳っている。前二者は5月の第6回委員会に提案され、大筋において了承された。今回は最後の計画書である「新大学図書館利用サービスの支援体制」(案)を提案することになった。これらの計画書案は、本委員会です了承された後、10月に予定されている「新大学図書館建設の基本計画および基本設計書」に反映し、まとめる予定である。そして、この基本計画および基本設計書は本委員会はもとより、大学評議会をはじめ大学諸施設検討委員会第三部会、各学部教授会等で十分に審議された上、実務委員会で討議、検討され、いよいよ新大学図書館の実施設計へと進められることになろう。

I. 新大学図書館利用サービス 支援体制充実の基本項目

新大学図書館が、本学の学術情報センターとして教育・研究活動を支援するためには、図書館機能をより一層強化し、合理的で機能的な管理・運営システムの整備充実を進めて行かねばならない。その中でも、とりわけ利用サービス機能を充実するために、事務機構の整備、充実および図書館員の育成は重要である。新大学図書館利用サービスの支援体制については以下の3点を整備、充実の基本項目として提案する。

1. 学術図書・資料の効率的な収集

図書館は全学の図書・資料を効率的に収集するための支援機能を果たす。全学的な蔵書構成および利用動向についての分析調査を行い、その結果が収書に反映されるよう基礎資料の作成、提供を行う。国内外の最新の幅広い出版情報の収集、提供を行うためには、出版社、書店とのネットワークを形成し最新の出版情報を組織的に収集する。また、収書室を設け専門の収書担当職員を配置し、教員に出版情報を提供するなど組織的、継続的に収書業務を支援する。

2. 学術情報システムの維持管理

新大学図書館が学術情報センターとしての機能を有効に発揮するため、本学の図書・資料の目録情報、ならびに論文等の学術情報をデータベース化し、利用者が自由にこれらのデータを利用できるようなシステムを提供する。あわせて大型コンピュータや端末機等の様々な情報機器を図書館内に設置し、円滑な運用をはかる。

また、学術情報システムを維持、発展させるため学内外の諸機関との調整をはかるとともに、これらの業務を円滑、効率的に行うため、図書館業務ならびにコンピュータシステムについても一定の経験と専門的な知識を有する担当者を配置する。

3. レファレンスサービスの充実とカウンター業務体制の整備

新大学図書館のカウンター業務の目的は大学の教育・研究活動を資料、施設面から支援しうる役割を果たすことである。そのためには従来の図書・資料の収集、提供、保存と

いった機能だけでなく、国内外の幅広い図書・資料、情報の受信および発信基地としての役割を果たさなければならない。

情報検索サービスや学外機関、他大学等の情報検索、文献貸借、文献複写などのレファレンスサービスを充実する。この業務を充実するためには教員の支援を得ながら、専門のレファレンス担当者を配置し、利用者からの質問に対する調査、相談業務を行う。レファレンス業務を支えるために資料面では書誌類を中心とした参考図書を約5万冊配架するとともに、施設、機器面では様々な情報検索関連機器、通信機器を整備する。

また、新大学図書館では約2,000席の多種多様な閲覧座席と豊富な学術図書・資料をそれぞれの利用目的に合わせて機能的に配置する。これらの施設・設備を常に利用者にとって使いやすい状態にしておくための閲覧環境の維持、管理業務も重要な利用サービス支援業務である。

新大学図書館の利用サービス支援体制と階層レイアウト（案）を図示すると次の通りとなる。

（利用サービス支援体制図 略）

（階層レイアウト 略）

II. 新大学図書館の業務体制

新大学図書館の利用サービス支援体制を確立するためには、図書・資料の収書機能の充実、受入、整理業務の迅速化、利用サービス窓口の充実、レファレンスサービスの強化ならびに逐次刊行物部門の充実をはからねばならない。新大学図書館では現行の3課体制を再編成し、現行の閲覧課雑誌室を逐次刊行物課として独立させ4課体制とする。さらに、課の名称も業務内容に則したものに變更し、ここに提案する。

1. 運営課（第1課）

運営課は新大学図書館全般にわたる管理運営の総合的調整を行う部門と、全学的視野に立った図書・資料の収集に関する業務を行う収書部門によって構成される。

業務内容

（1）管理・運営部門

①図書・資料の管理運営業務

全学的な図書・資料の管理運営のためには、大学図書館をはじめとして部局も含めた連絡調整の円滑な遂行が必要である。そのため、日常的に各部局、研究所との協力関係および密接な連係をとる。

② 渉外業務

学内他部課との連絡調整をはじめとし、学術情報に関する学外関係諸機関および他大学図書館との情報交換、交流等の業務を行う。また、海外関係諸機関、提携校との学術情報交流や連絡調整の渉外業務を行う。

③ 全館庶務

全館庶務には、建物、設備管理、委託業務の管理、各種調査・統計、企画・広報等の業務がある。特に建物、設備管理においては、現在に比べ約4倍の面積となる建物についての各種営繕を適切に行う。新大学図書館のエレベータや空調等コア部分についての全般的な環境の維持、改善を担当する。また、大量のニューメディア関連機器のメンテナンスとともに、喫茶室や警備、複写室等の新たに発生する外部委託業務管理も重要であり、量的にも大きな業務となる。

(2) 収書部門

全学的な収書体制を充実するために、学術情報ネットワーク等を利用した出版情報の収集、提供を行うとともに、一次資料そのものを迅速に収集し、直ちに利用に供しうる体制を確立する。

① 出版情報の収集、提供業務

図書・資料を網羅的に収集するため、国内外の出版情報を広く収集、提供する。出版社、書店のカatalogのほか、オンラインによる外部データベース検索を利用した収書情報の収集を行う。また、学会、協会、研究所の出版情報や、各種図書館の蔵書目録等、通常の販売ルート以外の情報にも留意し、出版情報の提供を行う。

② 所蔵図書・資料および利用状況に関する調査、分析業務

学術研究動向および教育カリキュラムの変遷に配慮しながら、所蔵図書・資料、利用状況に関する調査、分析を定期的、継続的に行い、各主題群を構成する図書・資料の再評価を行う。

③ 収書委員会および収書専門委員の運営に関する業務

図書・資料を効率的に選定するために収書委員会および収書専門委員に出版情報、所蔵図書分析調査結果および利用動向調査結果を適宜提供する。

上記①～③の業務を実効的に遂行するために収書業務に必要な経験、能力を有する収書担当者を配置する。収書担当者は新刊図書・資料に関する学術情報の収書に加えて、古書市場の動向をも配慮しなければならない。そのためにも、人文、社会、自然等各主題に関する理解とともに、各種媒体による諸外国の選書ツールを駆使するための語学力と出版情報等のデータベース情報検索能力が必要である。

2. 情報システム課（第2課）

情報システム課は情報管理部門とシステム管理部門の2つの部門により構成される。

業務内容

(1) 情報管理部門

本学が収集した図書・資料の目録情報データベース、および論文データベースの作成、維持、管理を行う。

①図書・資料の目録情報作成業務

図書・資料の発注、検収、登録、分類、装備、目録作成を効率的に行う。

これらの業務は、コンピュータ処理により一連のつながりを持って行われ、目録情報のデータベースを作成する。また、業務の迅速化を図るため、データの質を保ちながら業者委託処理を併用する。そのデータベースを利用して、様々な形態（端末機、冊子体目録、CD-ROM 等）で目録情報を提供する。

②論文等データベースの作成業務

学内で作成された論文、目次、アブストラクトなどを本学独自のデータ・ベースとして蓄積し、情報検索用の文献型データベースを作成する。

③情報の維持、管理業務

上記①②で作成したデータベースを常に質の高い、最新の情報として利用できるようにデータの維持、管理を行う。また、図書・資料の配架場所の変更等に伴うデータの変更、修正ならびに目録情報の点検作業を行う。

この部門の担当者には図書館情報学、分類規則・目録規則の知識、語学力等が必要である。さらにこれらの業務を総合的に管理するために業務に習熟した担当者を配置する。

(2) システム管理部門

システム管理部門は、本学学術情報システムの運用全般にわたる維持管理と学内外の関係機関との調整機能を担う。

①学術情報システム統括業務

学術情報システムを構成する各サブシステムを統括し、サブシステム間の連絡調整を行う。また、総合的なデータベースの統括管理、ファイル管理、各サブシステムの運用上の調整や日常の運用に際しての障害対応およびシステムエンジニア等に対する折衝業務を行う。

②学内外関係機関との連絡、調整業務

学術情報システムは学内外ネットワークと連携をとることによって有効に機能するシステムである。従って、学内の関係機関（各部局図書室、情報処理研究センター等）、学外の関係機関（学術情報センター等）と密接な連絡、調整を行う。

③プログラムの新規開発、保守業務

学術情報システムに必要なプログラムの維持、改善を行う。また、システムの拡張に伴う新規プログラムを開発するとともに、システム関連資料の作成、修正を行う。

④情報処理機能の維持、管理業務

専用大型コンピュータおよびその周辺機器とその基本ソフトウェアの維持、管理を行う。

システム管理部門の職員は、専用大型コンピュータによるトータルシステム運用を的確に行うため、オペレーションシステム等の基本ソフトウェアの知識、技術を持つ必要がある。また、このシステムを統括管理するために、図書館業務全般に精通していることのみならず、プログラム読解力、作成能力を養成する。

3. 情報サービス課（第3課）

新大学図書館では、レファレンス業務を充実させるために、これまでの業務体制をそのまま拡大することはせずに、カウンター業務を貸出・返却などの定型的な処理業務とレファレンスサービスなどの相談業務とに分けて効率的に運用する。すなわち、情報サービス課は情報検索、相互利用等を含むレファレンス業務とカウンター業務ならびに書庫・書架管理業務から構成される。

業務内容

(1) レファレンス部門

情報化社会に対応し本学の教育・研究を支援するために、新大学図書館ではレファレンスサービスの充実を重点項目としてあげている。レファレンスサービスは高度な能力を必要とするサービスであるが、当面は利用者からの質問を正確に理解し、その質問に該当する図書・資料ならびに情報を的確に検索するための援助と、情報の提供をレファレンス担当者が行うことを目標とする。

①総合レファレンス業務（1階）

総合的なレファレンス専用のカウンターを1階に設置し、参考図書や各種データベースを用いての情報検索サービスならびに学外諸機関との文献貸借、文献複写等の相互協力業務を行う。この業務を行うためにレファレンス担当者を配置し組織的かつ継続的に業務を行う。レファレンス業務を支えるものとして資料面では書誌類を中心とした参考図書約3万冊を配架するとともに、様々な情報検索に必要な関連機器を整備する。

②主題別レファレンス業務（2階、3階）

2、3階カウンターでは各階に配架している図書・資料の主題に合わせたレファレンスサービスを行う。ここでは本学所属の図書・資料の所蔵調査ならびに事項調査が中心となる。レファレンス業務を遂行するためにレファレンス担当者を配置するとともに資料面では特定主題における専門的な辞書、事典、便覧等の参考図書約2万冊を配架する。さらに様々な情報検索に必要な関連機器を設置する。

③主題別レファレンス担当者制

レファレンスサービスを充実するために、主題別に担当者を定める。1つの主題

(人文、社会、自然等)を数名で担当し、それぞれの担当主題において幅の広い書誌的な知識と各種データベースの検索技術を持ってレファレンスサービスを行う。

特にこれからの新大学図書館におけるレファレンスサービスを実効的に遂行するためには、レファレンス担当者はより専門的な能力として、学術に関するより幅の広い書誌的な知識や各種データベースに関する動向を把握するとともに、新しい学問分野についての知識も要求されてくる。図書館職員の能力の向上と合わせ、それぞれの学問分野での専門家である教員の全面的な支援がなければ充実したレファレンスサービスは不可能である。

(2) 貸出・返却等カウンター部門

①貸出・返却業務

新大学図書館では利用条件の改善、利用環境の充実、さらに全面開架制を採用するため利用件数が従来に比べて飛躍的に増加することが予測される。1階、2階、3階にカウンターを設置し、貸出、返却、予約、督促等のサービスを行い利用件数の増加に対応する。

また、各階に設置されているグループ閲覧室、閲覧個室等諸施設の利用に関する受付窓口は各階カウンターが行う。

②視覚障害者関係業務（2階カウンターが担当する）

視覚障害者ならびに学生ボランティアへの援助活動のためのサービスを行う。点字図書の整備、充実ならびに、視覚障害者読書室利用受付等に関する業務を行う。

(3) 書庫・書架管理業務

図書・資料を利用者にとって常に使いやすい状態にしておくために書庫・書架の配架管理業務が重要となる。そのため、専任職員の管理のもとに嘱託職員、学生アルバイトを常時雇用し、返却図書の配架、配列点検等を迅速かつ正確に行う。

(4) AV 資料収集・閲覧部門（2階カウンターが担当する）

AV 資料については、ビデオテープ、LD、CD など今後著しい利用の増加が予想されるため、専用のカウンターを設置し、資料収集はもちろんのこと、貸出、返却、予約、督促等のサービスを行う。なお、語学関係の教材の取扱いについては全学的に今後、検討する。

4. 逐次刊行物課（第4課）

逐次刊行物課は資料を利用者に迅速に提供しうるサービス体制を確立するために逐次刊行物の収集、情報管理、情報提供業務を一元的に行う。

業務内容

(1) 収書業務

① 逐次刊行物出版情報の収集、提供業務

逐次刊行物を網羅的に収集するため、国内外の出版情報を広く収集、提供する。出版社、書店等のカタログのほか、オンラインによる外部データベース検索を利用した出版情報の収集を行う。それらの情報をもとに収書委員会、収書専門委員への出版情報提供を的確に行う。

また、学会、協会、研究所の出版物の出版情報や、各種図書館の逐次刊行物目録等、通常の販売ルート以外の情報にも留意し、重点的に出版情報の収集を行う。

② 逐次刊行物に関する調査、分析業務

学術研究動向および教育カリキュラムにも配慮しながら、逐次刊行物に関する調査分析を定期的、継続的にするとともに、逐次刊行物の再評価を行う。

(2) 情報の維持、管理業務

逐次刊行物の目録情報データベースの作成、維持、管理を行う。これらの業務は学内の逐次刊行物ならびに目録情報の集中化に伴って、業務量が一層拡大する。業務の迅速な処理や、質の高いデータ作成のために学外諸機関（学術情報センター等）の目録情報を利用する。

① 逐次刊行物の目録情報作成業務

逐次刊行物の契約、発注、受入、製本を行い、全学の逐次刊行物の目録データベースを作成する。これらの業務はコンピュータ処理により一連のつながりをもって行う。そのデータベースを利用して利用者のニーズに合わせた様々な形態（端末機、冊子体目録、CD-ROM 等）で目録情報を提供する。

② 逐次刊行物目録情報の維持、管理業務

逐次刊行物目録情報データベースを常に質の高い、最新の情報としていつでも利用できるように、データの維持、管理を行う。逐次刊行物の配架場所の変更等に伴うデータの変更、修正ならびに目録情報の点検作業を行う。

(3) 情報提供サービス

逐次刊行物課にはカウンターを設置し、速報性等の資料特性に応じた相談業務を行う。

① カウンター業務

逐次刊行物についての調査や問い合わせに対しては逐次刊行物カウンター担当者と情報サービス課（第3課）のレファレンス担当者が協力してサービスを行う。このカウンターでは目録情報調査、所蔵調査を行い、所蔵の詳細情報、例えば、誌名変遷や整理中、製本中、欠号等逐次刊行物そのものについての情報を提供する。

②書庫・書架管理業務

逐次刊行物を利用者にとって、常に使いやすい状態にしておくために書庫・書架の配架業務が重要となる。そのため、専任職員の管理のもとに嘱託職員、学生アルバイトを常時雇用し、逐次刊行物の配列点検や、欠号調査、在庫調査、製本準備、配架の維持に伴う移動等を迅速かつ正確に行う。

Ⅲ. 今後の検討課題について

上記Ⅰ、Ⅱにおいて述べてきた新大学図書館における利用サービス支援体制は、特に教員、学生に直接関連の深い利用サービスカウンターを中心とするサービス体制と、それを強力に支える図書館事務組織のあり方についての提案である。今後は、この提案を基本として、新大学図書館における職員体制の具体的なあり方をより詳細に職員人事計画として検討するとともに、合わせて新大学図書館の利用制度のあり方（利用規程等）を見直していく必要がある。以下それについての重要な課題と検討の方向性を示していきたい。

1. 職員の整備計画（人事計画）の策定と計画の実施

現行の大学図書館よりすべての点において拡大、充実される新大学図書館を支える職員の具体的な配置体制は、無駄のない、効率的なものでなければならない。そのためには、新大学図書館に必要な機能（業務）を十分に予測したうえで人事計画を策定し、新大学図書館の完成時に混乱のないよう事前に職員の業務体制を確立しておく必要がある。

この人事計画の策定は、本学全体の職員体制とも密接に関係してくるため、新図書館建設検討委員会の財務・人事実務委員会において検討されるべきものであるが、図書館職員のあり方については、直接的に教育研究活動を左右するため十分な配慮を期待したい。

なお、この人事計画に含められるであろう職員の養成計画のうち、特に収書、レファレンス、システム担当職員については高度な専門的知識と技能および図書館業務に対する一定の経験を要するため、早急な計画の策定と着実な実施が必要である。特にレファレンス担当職員については欧米の大学図書館とは異なり我が国の場合、司書資格を有する職員が簡単には理想的なレファレンス担当者とはなりえないであろう。したがって、新大学図書館におけるレファレンス担当職員の確保については、可能性のある若手職員の徹底した養成と、わが国や欧米の大学で図書館学を修めた職員の採用なども考慮されねばならない。

2. 新大学図書館の諸制度の検討

新大学図書館は1994年の完成を目標に諸計画の検討が着実に進められてきている。その中でも、特に新大学図書館における利用サービスのあり方が全学的に注目され、大

さく期待されている。本委員会としては、既に新大学図書館の利用サービスおよび管理・運営に関する重要事項について、各種の計画書を作成し提案を行なっているが、これらの計画を踏まえながら、新大学図書館の全学的な利用ルールや図書館および図書・資料の管理・運営制度のあり方を検討していく段階になったと考えたい。したがって、本委員会としては今後、新大学図書館の利用規程をはじめとする諸規程の策定にむけて検討を進めていくことになる。その作業は、まず、現行の諸規程の見直しと新大学図書館における具体的な管理・運営のあるべき姿の検討からはじめていく必要がある。新大学図書館の諸規程の策定にあたっては、全教職員の新大学図書館に対する強い期待を反映させたものでなければならない。

本委員会としては、必要に応じてできるだけ多くの問題点の整理や、種々の提案を討議資料として全学に提供して十分な意見聴取を行う予定であるので全学的な協力とご支援を期待したい。

⑧収書計画書（その2）

収 書 計 画 書 （その2） －新大学図書館完成に向けて－

1990 年 1 月
関西学院大学図書館

目 次

| | |
|--------------------|---------------|
| はじめに | 大学図書館長 八重津 洋平 |
| 第Ⅰ章 収書計画の概要 | 1 |
| 1. 基本図書（洋書）収書の必要性 | 1 |
| 2. 収書計画の規模 | 2 |
| 3. 予算措置 | 2 |
| 4. 収書スケジュール | 4 |
| 第Ⅱ章 収書実施計画 | 5 |
| 1. 収書冊数 | 5 |
| 2. 選定方法 | 5 |
| 3. 選定基準 | 5 |
| 4. 選定のためのツール | 5 |
| 資 料 | |
| 1. 購入予定冊数の算出方法 | 6 |
| 2. 基本図書（洋書）主要選定ツール | 9 |

はじめに

大学図書館長 八重津 洋平

新大学図書館の建設計画は「新大学図書館の基本計画および基本設計書」（大学案）としてまとめられ、現在学院と大学との間で協議が重ねられ、いよいよ具体的な形となって進められる運びとなって参りました。

新大学図書館建設の目的は、今更申し上げるまでもなく本学の研究・教育活動を支援し、その飛躍の発展に奉仕する優れた大学図書館を創造することであります。この目的を実現するためには、研究、教育、学習活動に必要となる十分な図書・資料を備え付けることと、優秀な図書館職員によるサービス体制を整備することが必須の条件であります。

このことを受けて大学図書館では、昨年度、新大学図書館に備え付けるべき図書・資料の充実を図るために、年次計画で参考図書（5万冊）、逐次刊行物（学術雑誌等5千タイトル）および特別コレクションの整備・充実計画を策定し「収書計画書」として提

案いたしました。その結果、全学のみなさまのご理解とご協力を頂き、現在1989年度分（参考図書：総記・社会科学Ⅰ）の収集作業を進めているところであります。

さて、この計画書は、昨年度の「収書計画書」において課題となっておりました洋書を中心とする基本的な学術図書の収書計画について提案するものであります。これまで大学図書館には、教員、大学院生を中心とする利用者から、基本的な学術図書のうち特に洋書が極めて不足しているとの厳しい批判が寄せられており、新大学図書館がその本来の機能を発揮するためにはこの部分の充実が是非とも必要であると考えます。もとより本学の研究・教育を支えるために必要となる学術図書・資料は膨大な量ではありますが、大学図書館では新大学図書館の完成までに最低限必要と考えられる洋書の基本図書（約5万冊）の整備・充実を図るため年次計画を検討して、ここに以下の通り「収書計画書（その2）」として提案させていただくことになりました。

つきましては、この「収書計画書（その2）」を十分ご検討頂き、忌憚のないご意見をお聞かせ願いたいと思います。特に今回の計画は、より専門的知識を必要とする洋書の充実計画であり、大学図書館の努力だけでは実現不可能であります。教員各位の全面的なご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

第Ⅰ章 収書計画の概要

1. 基本図書（洋書）収書の必要性

現在、大学図書館には約71万冊、各学部等部局図書室には約20万冊の図書・資料を所蔵している。昨年度の「収書計画書」においては、7学部7研究科を擁する本学の研究、教育、学習活動にとって、現在所蔵している図書・資料では量的、質的に不十分と考えられる参考図書、逐次刊行物等に関する収書計画を提案した。その計画にもとづき、1989年4月より参考図書について初年度分の収書を実施中であり、1990年度からは、逐次刊行物の購入も開始する予定となっている。

今回の、「収書計画書（その2）」は、昨年度の「収書計画書」において、その必要性を指摘していた洋書を主とする基本的な学術図書の充実計画について提案したものである。

大学図書館が本学における研究、教育を支援するためには、参考図書、逐次刊行物（学術雑誌）に加えて、各学問分野における基本的な学術図書を洋書、和書ともに完備することが大きな役割である。したがって、本学の特色ある研究、教育を一層強力に推進するため、これらの基本的な学術図書・資料を迅速に教員、大学院生、学部生に提供しうる基盤整備を一定の収書計画にしたがって着実に行う必要がある。このことが新大学図書館建設に向けての重要な課題の一つであると考えられる。

この収書計画（洋書）の策定にあたっては、昨年度実施した所蔵図書・資料の分析（①所蔵リストと現物の照合、②欠本、汚損、紛失図書資料の実態把握、③所蔵図書・資料の評価）に加えて、特に本学における学部構成のもとで必要とされる基本的な学術図書に関する現時点での蔵書構成調査を行うとともに、最低必要冊数の算出を行った。その結果、洋書については最低約5万冊を収集していく必要があると判断した。

最後に、基本的な学術図書・資料の新規刊行分については、この計画が完了しても収書委員会等において組織的、継続的に収書していく必要があることを付け加えておきたい。

2. 収書計画の規模

本年度は特に本学の研究、教育にとって不可欠な洋書の基本図書に重点をおいて所蔵調査を行った。その結果、先にも述べたようにその不足が著しく、早急に収書を行う必要があるため、他大学の所蔵状況等の基礎的データをも参照し収書冊数の概数設定を行い、本計画を提案することとした。

計画の内容については、第Ⅱ章以下に詳しく述べるが、その規模および概要は次のとおりである。

- (1) 当面、最低限必要となる基本的な洋書約 5 万冊を 1990 年度より 4 年間にわたり年次的に選定購入する。(年次計画の詳細は「3. 予算措置」「4. 収書スケジュール」を参照)
- (2) 約 5 万冊の選定購入にあたっては、良質の各種選定リストを始めとした収書情報をもとに専門分野の教員各位の協力を得ながら、慎重に行うこととする。

3. 予算措置

新大学図書館に備え付ける基本図書洋書の収書計画を進めるための予算措置については、経常の大学図書館図書費とは別枠として 4 年間にわたって年度別に収書冊数の設定を行い、それによって関係経費を特別予算として下記のように設定した。図書購入費の単価基準については、基本図書選定ツール(資料 2 参照)の掲載図書の平均額(1 冊 8,000 円消費税含む)をとり、整理・保管にかかる付帯経費については、それぞれ複数の業者に見積を取り、端数の調整を行って概算計上した。

本収書計画の総経費は約 4 億 4 千 4 百万円となるが、これを新大学図書館の開館までの 4 年間に、後述する「4. 収書スケジュール」および「第Ⅱ章 収書実施計画」に従って実施していく。

なお、経費については、すでに学長を通して申請しており、理事会のよき理解を得られることを期待している。

表 A 年度別収書冊数

| 年度 冊数 | 1990 年度 | 1991 年度 | 1992 年度 | 1993 年度 | 合計 |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 収書冊数 | 12,500 冊 | 12,500 冊 | 12,500 冊 | 12,500 冊 | 50,000 冊 |

表 B 年度別収書関係総経費

| 年度 経費 | 1990 年度 | 1991 年度 | 1992 年度 | 1993 年度 | 合計 |
|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 図書購入費 | 10,000 万円 | 10,000 万円 | 10,000 万円 | 10,000 万円 | 40,000 万円 |
| 整理関係費 | 994 万円 | 994 万円 | 994 万円 | 994 万円 | 3,976 万円 |
| 保管費 | 19 万円 | 72 万円 | 144 万円 | 216 万円 | 451 万円 |
| 合計 | 11,013 万円 | 11,066 万円 | 11,138 万円 | 11,210 万円 | 44,427 万円 |

* 保管費については累積される。

4. 収書スケジュール

別表の収書スケジュールを設定した。

(別表 基本図書〈洋書〉収書スケジュール 略)

第Ⅱ章 収書実施計画

洋書の基本図書は、現在の本学の研究、教育を踏まえるとともに将来の利用拡大に耐えうる内容のものとしていかなければならない。そのため、本計画実施にあたっては、選定委員会等を設け、教員の専門的立場からの積極的な協力をお願いし、各主題部門別に適切な収書を行っていききたい。先にも述べたとおり、基本図書群をコア・コレクションとして効果的に提供していくためには、本計画終了後も出版される基本図書について継続的に収書していかなければならないことは当然のことである。

なお、和書の基本図書については、洋書の基本図書に比べ充足度が比較的高いので経常の大学図書館図書費のなかで別途収書していくこととする。

1. 収書冊数

図書館に備え付けべき最低限必要な洋書の基本図書を約 5 万冊収書する。

5 万冊の設定については、後述する「購入予定冊数の算出方法」(資料 1) から策定した数値とする。また、基本図書リストとして、代表的な BCL、Choice 等にもとづいて重複調査した結果からも約 5 万冊不足していると言える。(資料 2 参照)

2. 選定方法

大学図書館運営委員会の下承を経て、大学図書館長のもとに教員および図書館職員で構成する基本図書選定委員会(仮称)を設置し、選定を行う予定である。

なお、選定にあたっては、基本図書選定委員会を通じて専門分野別に教員各位に対し十分な収書情報の提供(選書ツールの提供等)や意見聴取を行うこととする。

3. 選定基準

大学図書館に備え付け、全学的な利用を前提とする学術情報が記述されている洋書の

基本図書を対象とする。(具体的な選定基準の策定および選定は選定委員会で行う。)

4. 選定のためのツール

選定のためのツールは、過去に遡って包括的に基本図書を収集することを念頭において、信頼できる機関が作成した客観的で、網羅的な選書資料を使用する必要がある。BCL、Choice については、早稲田大学図書館、慶応義塾大学図書館等の日本の代表的な私立大学において基本的な選書リストとして現在使用されているものである。また、アメリカの大学図書館においても広く基本的な選書資料として利用されている。

したがって、広く大学図書館における基本図書の選定において用いられているものを主として使用する。(資料2参照)

資料1 購入予定冊数の算出方法

昨年度の「収書計画書」の調査結果を踏まえて、本年度は、さらに「図書」のうち過去の購入状況からみて、不足している洋書の冊数に的をしぼり、蔵書の洋・和構成比率から洋書の購入予定冊数の数値を算出した。

1. 基本図書(洋書)の購入予定冊数5.6万冊は次のような算出方法により求めた。

- (1) 現在の図書館登録冊数(分置分を含む)は、約71万冊で、その洋・和比率(3:4)を適正なものとし、購入後の図書館備付冊数の洋・和比率をそれに合わせることを前提とする。(本学と同等の規模をもつ大学の洋・和比率も参考とした。)
- (2) 現在の図書館備付分冊数は洋書17.8万冊、和書が31.2万冊である。
- (3) 図書館登録冊数の洋・和比率を図書館備付分冊数に当てはめた場合、洋書の最低必要冊数は23.4万冊となる。算式は次のとおりである。 $31.2\text{万冊} \div 4 \times 3 = 23.4\text{万冊}$
- (4) したがって、購入予定冊数は洋書の最低必要冊数である23.4万冊から図書館備付分冊数の洋書17.8万冊を引き、5.6万冊となる。

なお、BCL、Choice等の選定ツールに掲載されている基本図書と本学所蔵の洋書を比較した結果からも、約5万冊不足していることが明らかになった。

(2. 表 洋書の主題別最低必要冊数および購入予定冊数 略)

(図1 主題別の蔵書構成比率 略)

(図2 主題別洋書の最低必要冊数および現行冊数比較 略)

資料2 基本図書〈洋書〉主要選定ツール

主要な選定ツールとしては、英・独・仏3カ国語を中心とした洋書の基本図書を過去に遡って全分野に渡って網羅的、系統的に収録している文献および各国主要出版社カタログ等を使用する。

特に①～③の選定ツールは、米国の大学図書館蔵書のベースとなる基本的な学術図書を広く全分野にわたって、包括的に網羅し、その一つ一つを評価・説明・案内している

ものである。これらは、基本図書の解説書としても定評があり、米国大学図書館における基本図書の選定において広く使用されていると共に、日本においては早稲田大学図書館、慶応義塾大学図書館等でも主要選定ツールとして使用されているものである。

選定にあたっては、①を基本とし、1986 年度以降出版のものについては、②と③の選定ツールおよび各国主要出版社のカタログを補完的に使用する。

①Books for college libraries: a core collection of 50,000 titles. 3rd ed. (BCL) American Library Association. 1988.

アメリカ図書館協会 (ALA) の刊行で、Association of College and Research Libraries. (ACRL) 編集による基本図書 50,000 タイトルを収録している。

本書は、米国の 400 人以上の大学教授、および 50 人の学術参考業務担当図書館員に加え、64 人の大学図書館専門スタッフが選書を行い、編集したものである。この 3rd ed. の資料内容は BCL 2nd ed. (1973 年まで収録) に Choice (1972-1985 年収録) を加えたもので構成されている。なお、BCL 1st ed. はカリフォルニア大学新キャンパス計画 (1961-1964 年) において新たに図書館設置のため、ハーバード大学レイモント図書館目録、ミシガン大学学生図書館目録を利用して作成されたものである。

②Choice, Books for college libraries. American Library Association.

年間 6,600 冊の新刊書評および各月 1,000 冊の既刊分出版物の評論論文を掲載している権威ある書評誌である。1964 年創刊。本誌は、大学図書館および大規模公共図書館のための必要不可欠な Book Review のひとつである。その大部分は、研究のために必要な出版物として収録されている。Review は簡潔で鋭く、多くの大学教授や学術参考業務担当図書館員らによって記述されている。

Choice は内容の責任所在を明らかにするために署名入りの書評方法を採用している。

①の補完材料として、1986 年以降の基本的な学術図書を収書するために使用する。

③Directions: Bibliographic selections from Baker & Taylor approval program.

Directions は、Baker & Taylor 社のアカデミックレベル (大学図書館向け) の選書ツールであり、その書誌情報については、Baker & Taylor 社の専門スタッフ (学術参考業務担当図書館員) が大学図書館の目録情報として使用しうる内容のものを作成している。

Baker & Taylor 社は米国の代表的な出版流通業者であるが、図書の流通システムは米国の 15,000 の出版社と 140,000 の図書館並びに書店を結びつけるネットワークを形成している。そのシステムには既に 120 万タイトル (そのうち、大学図書館向けのアカデミックレベルは 40 万タイトル) の文献の情報が入力されているほか、毎年 50,000 タイトルのデータを追加している。

(④各国主要出版社カタログ等 略)

⑨新大学図書館、新産業研究所の基本計画および基本設計書（抜粋）

新大学図書館、新産業研究所の基本計画および基本設計書（抜粋）

目 次

新大学図書館

はじめに

| | |
|--|------|
| I. 新大学図書館建設の動き | (2) |
| II. 新大学図書館の基本計画 | |
| 1. 基本理念 | (3) |
| 2. 各階のレイアウト骨子 | (4) |
| 3. 図書・資料の配架 | (4) |
| 4. 閲覧座席および閲覧関係施設 | (5) |
| 5. システム関係施設 | (6) |
| 6. 階層レイアウト図、主要資料・施設一覧、 図書館内端末機・プリンター設置計画一覧表 | (9) |
| III. 新大学図書館、新産業研究所の基本設計書 | |
| 1. 計画概要 | (10) |
| 2. 位置図 | (11) |
| 3. 配置図 | (12) |
| 4. 平面図 | (13) |

おわりに

（新産業研究所 略）

大学諸施設検討委員会第三部会

| | | |
|------|---------|-------------|
| 委員長 | 柘 植 一 雄 | （学長） |
| 副委員長 | 生 田 種 雄 | （学長代理） |
| 委 員 | 八重津 洋 平 | （大学図書館長） |
| | 津金沢 聡 広 | （大学図書館副館長） |
| | 柚 木 学 | （産業研究所長） |
| | 三 浦 澄 雄 | （教務部長） |
| | 杉 山 貞 夫 | （社会学部教授） |
| | 芝 田 正 夫 | （社会学部助教授） |
| | 安 井 修 二 | （経済学部教授） |
| | 平 松 一 夫 | （商学部教授） |
| | 尼 子 卓 司 | （大学図書館事務部長） |
| | 野 村 晃 | （ 〃 運営課課長） |
| | 山 本 喜一郎 | （ 〃 整理課課長） |

牧 野 勇 (〃 閲覧課課長)
 田 中 力 (産業研究所事務長)
 釣 部 完 治 (大学事務室課長)

作業委員会

委員長 安 井 修 二 (経済学部教授)
 委 員 芝 田 正 夫 (社会学部助教授)
 尼 子 卓 司 (大学図書館事務部長)
 野 村 晃 (〃 運営課課長)
 中 村 順 治 (〃 運営課主任)
 北 山 雅 博 (〃 整理課主任)
 戸 田 隆 (〃 運営課)
 磯 辺 彰 (〃 閲覧課)
 南 昭 二 (産業研究所教授)
 田 中 力 (産業研究所事務長)
 山 下 英 世 (産業研究所主任)
 釣 部 完 治 (大学事務室課長)

はじめに

大学諸施設検討委員会第三部会で作成した「新大学図書館の基本計画および基本設計書」は1989年11月に大学評議会で承認されたが、その後、理事会より新たに新図書館建設に関する〈B'案〉が提案され大学評議会で一定の条件を付して承認された。そこで、第三部会では先の基本計画および基本設計書をもとに検討し、あらためて本計画書を作成した。

本計画書は、大学案に示された基本理念を十分尊重し、新大学図書館の基本的な機能は変更しないという前提条件のもとに、図書・資料の収容冊数を200万冊、座席数を2,000席とした。ただし、〈B'案〉では図書館の建設時期が3期に分かれており、また第3期工事の着工時期・位置等については未定であるため、本計画では第2期工事までの基本計画および基本設計書を作成した。そこでは延床面積を17,290 m²、図書・資料の収容冊数を150万冊、座席数を1,700席とし、その後着工される第3期工事をもってこの計画がすべて満たされるものとした。

なお、この小冊子の構成は、これまでの建設計画の過程、基本計画および基本設計書からなっている。これらの計画内容が十分に学内諸機関で検討、審議され一刻も早く実施設計へと進んでいくことを願いたい。

I. 新大学図書館建設の動き－これまでの経過－

施設の狭隘化・老朽化などの様々な問題に直面していた大学図書館の施設改善につい

ては、現大学図書館施設の増築申請が1982年（昭和57年）1月25日付で大学図書館長（阪本館長）より学長に対して行われた。また、同年9月の大学評議会において、大学の教育研究施設整備充実計画の重要な一項目として現大学図書館とは別棟の学習図書館建設構想が承認され、おおよその建物位置と建設順序が決定された。この学習図書館建設構想と現大学図書館増築計画は、別個の手続で計画が進められようとしたものであるが、その基本的な考え方は、現大学図書館の狭隘化および利用環境の改善の方策を、学習図書館部分と研究図書館部分という機能面で分離させるという形で対処しようとしたものである。ところが、この二つの計画が大学で公表されて以来、果たして大学図書館を二分するような形で計画が進められていったのか、という意見が学内で起こってきた。その最も大きな論点は、以下の3点であった。

- (1) 大学図書館を建物上の制約から学習機能と研究機能に分け、資料と利用者を分離できるのかという問題。
- (2) 建物を分離することによる図書館運営上の非効率性の問題。
- (3) 一方で大学の教育研究施設検討委員会において学習図書館建設の検討が進められ、他方で図書館増築について、別途大学図書館と学院の間で直接計画が進められることによる調整の困難さの問題。

これらの問題をふまえ、1984年（昭和59年）5月、大学図書館長（金子館長）から新たに学長あてに「大学図書館施設改善の検討について（要望）」が提出され、これを受けて大学は「大学図書館問題検討委員会」（柘植学長代理以下13名）を設置し、大学図書館からの要望事項にとどまらず、より大きな視点に立って大学図書館について検討を始めることになった。同時にそれまで大学諸施設検討委員会第二部会（教育施設検討委員会）において検討が進められる予定であった学習図書館建設計画を上記委員会から切り離し、大学図書館問題検討委員会に移管して大学図書館充実の一環として検討することが決定された。

大学図書館問題検討委員会は、学習図書館建設計画と現図書館増築計画を合わせて大学図書館の施設改善計画として抜本的に検討することになり、委員会の下に作業委員会を設け慎重に検討作業を重ねた結果、1986年（昭和61年）6月、第一次答申を学長あてに提出した。

第一次答申では現図書館建物・施設の問題点、新大学図書館の必要性が述べられると共に建設位置及び建設規模、収容可能図書・資料数、閲覧座席数といった大枠の構想が提案されている。そして「本学の学術研究、教育の発展に寄与し、世界に誇りうる21世紀を展望した大学図書館が1990年代の早い時期に建設されることを強く要望する」と結ばれている。答申は1986年（昭和61年）7月の大学評議会で承認され、この基本方針に沿って第二次答申の作成に着手した。

この第一次答申と相前後して大学将来計画委員会が『都市に生き、世界と結ぶニュー関西学院大学をめざして』という答申を学長に提出したため、新大学図書館建設の第二次答申は、この将来計画委員会の答申の趣旨を尊重して作成してほしい旨、大学より要望があった。これをうけて作業委員会を中心に作業を進め、1987年（昭和62年）3月、

学長あてに第二次答申を提出、事実上これが最終案となった。第二次答申には、四つの大学図書館建設の理念が掲げられた。この理念に沿った形で建物及び機能がそれぞれ述べられ、新大学図書館の管理・運営体制については新たに検討委員会を構成して検討すべきだとされた。大学評議会で慎重に審議の結果、1987年（昭和62年）5月の大学評議会で『大学図書館建設に関する第二次答申』を受理し、これを大学案と決定した。

大学は、理事会に対して大学案の早期実現を要望する一方、大学諸施設検討委員会に大学図書館を検討する第三部会（今田学長代理以下15名）を1987年6月に設置した。1987年（昭和62年）9月の理事会において学院・大学両者で「図書館問題検討委員会」（久山理事長・院長以下16名）が新たに設置され、10月に第1回会合が行われ、大学案の審議が始められた。1988年（昭和63年）2月の第4回図書館問題検討委員会で学院側より新大学図書館の建設場所の変更案が提出された。当初大学側は、法学部旧館及び第二別館跡地を建設場所としていたが、施設部で検討した結果、車両の進入路、工事用資材置場の確保、新講義棟との間隔、また騒音等の問題を考慮すると、不可能ではないがあまりにも難工事が予想されるとの事であった。そこで現図書館の新館を中心に第五別館の突出部を解体して建設する新たな変更案が提示された。大学側としては第三部会を中心に検討した結果、建設面積が大学案（約2万m²）とほぼ一致するため、若干の調整は必要としたものの大筋で合意し、1988年（昭和63年）6月の大学評議会で建設場所の変更を承認した。

「図書館問題検討委員会」は「新図書館建設検討委員会」と名称を変更し、この委員会のもとに実務委員会（八重津図書館長以下24名）を設置し、計画を推進していくことになり、第1回の実務委員会が1988年（昭和63年）8月に開催され大学側より大学案の骨子について詳細な説明が行なわれた。なお、この実務委員会は主として建設に関することであり、この他にも新図書館建設に伴う資金計画や人事計画など検討を必要とする事項もあるため、別途、実務委員会が設置されることになった。

また、大学図書館建設は他の建物と違って基本計画、設計等どれ一つとっても非常に複雑なため、アドバイザーとして関集三氏（元本学理学部教授、元大阪大学図書館長）と富江伸治氏（筑波大学助教授、図書館計画専攻）に依頼することとなった。また、設計業者としては㈱日本設計に決定した。さらに、1988年12月の定例理事会において新大学図書館の建設位置および建設面積を19,900m²、竣工予定を1994年4月と決定した。1989年3月、講義棟のA、B、C号館が完成し、学内における次の建設順序は現在建設中の講義棟D号館である。これは1989年度中に竣工し、したがって、新大学図書館の建設はこの次である。

一方、「新大学図書館管理運営問題検討委員会」が1988年（昭和63年）11月の大学評議会で設置され、12月の大学評議会で委員が決定した。この委員会は学年度末の多忙な時期にも拘らず、精力的に会合を重ね、1989年3月末、武田学長宛に『新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申』を提出した。この答申は柘植新学長の下で、4月の大学評議会で諮られて承認、今後、この主旨に沿って具体的に検討を続けていく事になった。そして、まず、新大学図書館建設の基本計画に直接関係する事項

から順次検討が加えられ、基本計画が完成する9月末までに三つの計画書、即ち、「新大学図書館 AV 関係充実計画書」「新大学図書館学術情報システム計画書」、および「新大学図書館利用サービスの支援体制」が作成された。

1989年4月、新理事長に加藤誠之氏、新院長に宮田満雄氏が就任した。そして、6月に開催された第10回新図書館建設検討委員会には加藤新理事長も出席され、大学側からのこれまでの経過報告を聴取され、席上、新大学図書館建設に関しては、従来の建設方針を踏襲して進めていく事を確認した。

大学では管理運営問題検討委員会と相前後しながら、第三部会も再三にわたって開催され、7月の第9回委員会で米国ならびにカナダの図書館視察旅行の決定と第二次答申後の階層レイアウトの変更が承認された。1989年夏季休暇を利用して作業委員ならびに、施設部、日本設計の担当者が合宿や打合せ会を連日にわたって開催し、日本設計が提示した設計図に管理運営問題検討委員会で提案された事項および海外図書館視察で得た成果を盛り込みながら検討を重ね、ようやく1989年10月に基本設計書が完成した。この基本設計書は第三部会を経て11月に開催された大学評議会で審議の上、承認され大学案となった。

「新図書館建設検討委員会」(院連)では、この大学案をうけて、具体的検討を開始したが、経済情勢の変化等により、当初予定していた大学図書館建設の予算額を大幅に上回るとの主張が理事会よりなされた。そのため、再三にわたって院連が開催された。その結果、第16回の院連で理事会から〈B'案〉が提案された。大学としては第三部会を中心に〈B'案〉を検討した結果、一刻も早く新大学図書館の建設が望まれる今、一定の条件を付して、4月の大学評議会で、〈B'案〉を承認した。これを受けて第三部会は作業委員会を中心に慎重に検討した結果、新たに「新大学図書館、新産業研究所の基本計画および基本設計書」を作成した。

II. 新大学図書館の基本計画

1. 基本理念

大学図書館は大学の研究・教育に不可欠な図書・資料および情報を効率的に収集・組織・保管し、利用者の研究・教育・学習のための利用要求に対し、これを効果的に提供することを主要な機能としている。大学図書館がこれらの機能を十分に果たすためには、現在および将来に向けての教育・研究計画を支える規模・内容を備える必要がある。したがって大学の教育・研究の発展に伴って、大学図書館の整備充実計画は絶えず繰り返し検討されるべき課題である。

今日の情報化社会においては、図書・資料の量的拡大と資料形態の多様化とともに各種の国内外のデータベースの整備、「学術情報システム」に代表される国内外の多種多様な図書館・情報センターとのネットワーク化、情報検索の機械化などが急速に進展している。新大学図書館建設にあたってはこれらの新しい動向を的確に把握し、本学の伝統をふまえながら新時代にふさわしい規模と内容を構想し、実現していかなければなら

ない。さらに大学図書館は、図書・資料を媒介とした“知的交流”の場でもある。とりわけ、学生にとっては日常の学習・研究の場であり、もっとも重要な知的生産活動の場の一つである。これらの学習・研究のためのスペースを十分に提供することも、これからの大学図書館にとっては重要である。

以上のような点から新大学図書館の基本理念を以下の4つの役割に集約した。

(1) 学術資料・情報センターとしての大学図書館

本学の教育・研究にとって必要不可欠な蔵書内容を構成するために、収集体制を強化し電子出版などニューメディアを含めた網羅的な学術図書・資料および情報の収集、提供を行う。特に資料面では参考図書を5万冊、未製本雑誌を6,000タイトル配架するなど一層の充実をはかる。また貴重図書、特別文庫等本学の特色あるコレクションの充実をはかる。これらのことにより学術資料・情報センターとしての機能を一段と充実させる。

(2) 利用しやすい機能的な大学図書館

新大学図書館は利用しやすい機能的な図書館を目指し、利用者中心の多種多様な施設・機器を十分整備する。ニューメディアを活用した目録情報や書誌・所在情報をはじめとする新しい情報検索サービスの提供やレファレンス担当者の配置によるサービス機能の向上により、使いやすい機能的な図書館を実現する。さらに、図書・資料を利用しやすくするために全面開架制を採用するとともに、利用目的に合わせた使いやすい閲覧席を約1,700席設置する。各施設については障害者への配慮も十分に行なう。

(3) 情報化に対応した大学図書館

新大学図書館が本学の学術情報センターとしての役割を担うために、図書館専用大型コンピュータを設置する。そのことによって本学書誌・所蔵データベースの構築、「学術情報センター」とのデータ交換、相互貸借システムへの参加を推進し、学術情報の提供をより一層効率化させる。また、学内の部局図書室・研究所等とのオンライン化、国内外のデータベースとのネットワーク化などにより利用サービスの飛躍的な向上をはかる。

(4) 知的交流・創造の場としての大学図書館

新大学図書館が生き生きとした図書館となるために、本学の教職員・学生に図書・資料を媒介とした「知的交流・創造の場」として活用されることが重要である。そのために、共同研究・共同学習の場としてグループ閲覧室や研究発表などのできる多目的ホールをはじめとして、ゆったりとした設備、各種のくつろげる空間の配置を行う。

2. 各階のレイアウト骨子

上記の理念をふまえ、基本設計に具体的に反映させるため、各階の図書・資料ならびに閲覧席、閲覧関係施設のレイアウト骨子を以下の通りとする。

なお、座席数等の数値については、今後実施設計へとすすむ段階で若干の変更があることを、あらかじめことわっておく。

1 階

1 階をメインフロアとし、学術情報センターの中核としての機能を備えたフロアとする。そのため、情報検索機器、参考図書などを設置するとともに利用度の高い近着の未製本雑誌を集中して配架する。また、貴重図書、古文書など特別な保存、閲覧環境を要する施設をできるかぎりオープンなイメージを持たせながら配置する。これらの機能を十分に活用するためにメインカウンターを置き、レファレンス担当者を配置する。利用者サービス動線や資料の取り扱い上の効率を考え、事務室を集中して設置する。

2、3 階

2 階に社会科学の図書約 15 万冊を配架し、3 階には人文科学、自然科学の図書約 15 万冊を配架する。したがって合計約 30 万冊の利用度の高い図書が主題別に提供される。

2、3 階には主題に対応したレファレンスカウンターと参考図書を設置し、レファレンス担当者が利用相談等に応じる。

AV 資料閲覧関係施設は利用度が高いため、利用動線の短い 2 階へ設置する。視覚障害者閲覧施設は、利用度の高い資料に接しやすかつ利用動線の短い 2 階へ設置する。

地下 1 階

地下 1 階には製本雑誌を一括して配架するとともに、高度な研究用図書、特別文庫図書などを配架する。地下 1 階には一部積層・集密書架構造とするが、地上 1 階と資料面、利用面での関連を持たせるため書庫機能だけでなく、むしろ閲覧空間として利用環境を整える。図書館ホールはエントランスから直接動線を設けられる地下 1 階に設ける。

3. 図書・資料の配架

新大学図書館は、利用者が必要とする図書・資料を迅速かつ的確に提供することをその第一の役割としている。そのため、図書・資料の収蔵能力として約 150 万冊を確保する。これらの十分な図書・資料を活用することによって資料提供能力を飛躍的に向上させることができる。

これらの図書・資料を利用者が効果的に利用できるよう、以下に示すように配架・展示する。() は配架の階層を示す。

(1) 学術図書 (2、3 階、B1)

新大学図書館における学術図書の収蔵能力を 113 万冊とし、主題別に配架する。また全館を全面開架とする。

(2) 逐次刊行物 (学術雑誌、新聞等) (1 階、B1)

利用の多い逐次刊行物、雑誌については、未製本雑誌と製本雑誌を隣接して配架する。

未製本雑誌の展示を現在の 2,800 タイトルから 6,000 タイトルに増加させる。

また、製本雑誌については 24 万冊の収蔵力を持たせる。未製本雑誌は表紙の見やすい専用の雑誌架に配架し、製本雑誌は通常の書架と集密書架を併用して配架する。

新聞は、各国の代表紙 50 紙を展示し、吊下げ方式とする。バックナンバーについてはカウンターで取り扱う。

(3) 参考図書 (1、2、3 階)

学術参考図書（レファレンスブック）を約 50,000 冊主題別に配架する。参考図書の内訳は書誌、目録、事典、辞典、索引、年鑑、年報、白書、用語集、地図、統計資料、法令集等である。書架は、用途に合わせて高書架と低書架を併用する。

(4) 貴重図書・古文書 (1 階)

貴重図書を 10,000 冊、古文書 35,000 点を比較的オープンなイメージの部屋を設けて収蔵する。貴重図書および古文書は、学術的価値とともにその文化的価値の重要性に鑑み、形態に合せた専用の収納設備を整えて配架し、恒温、恒湿に保つ等適切な保存環境に置く。特に古文書については燻蒸処理の実施等資料特性に応じた保存を行う。

(5) 特別文庫 (B1)

特別文庫室に本学の特色あるコレクションを 70,000 冊収蔵する。特別文庫は文庫毎に配架する。

(6) マイクロ資料 (B1)

マイクロ資料については、約 10 万リール分の収蔵能力をもつ自動搬出装置を設置する。

(7) 視聴覚資料 (2 階)

ビデオテープ、LD、CD など約 50,000 点の視聴覚資料を備え付ける。これらの資料は、それぞれの資料形態ごとに保管庫に収蔵する。

(8) ニューメディア資料 (1、2、3 階)

光ディスク（CD-ROM 等）を中心としたニューメディア資料を開館時は約 100 タイトル所蔵する。資料の内訳は、判例、統計、地図、辞典、事典、全文データ、抄録等である。なお、この他に学内・外のデータベースをオンラインシステムでアクセスすることにより、学術情報を入手することができる。

新大学図書館における図書・資料の収蔵能力（第 1 期、第 2 期工事完了時）

| 図書・資料の種類 | 収蔵能力 |
|---------------------|---|
| 学術図書 | 1,130,000 冊 |
| 逐次刊行物 | 製本雑誌 240,000 冊 未製本雑誌 6,000 タイトル 新聞 50 紙 |
| 参考図書 (レファレンスブック) | 50,000 冊 |
| 貴重図書 | 10,000 冊 |
| 特別文庫 | 70,000 冊 |
| 古文書 | 35,000 点 |
| マイクロ資料 | 100,000 リール (ロール、フィッシュ) |
| 視聴覚資料 | 50,000 点 |
| ニューメディア資料 | —— |

4. 閲覧座席および閲覧関係施設

新大学図書館では約 1,700 席の座席を設ける。その中には、様々な形態の資料を利用するための閲覧座席を設けるとともに、グループでの利用などの多様な利用目的にあった閲覧室を設ける。() は設置の階層を示す。

(1) 一般閲覧座席 (各階)

図書・資料の近くに個人用、4 人用、6 人用など様々な形態の座席を設置する。座席は長時間の利用に対応できるよう人間工学的に考慮されたものとする。

(2) 閲覧個室 (2、3 階、B 1)

長期にわたる研究や多くの図書・資料を用いての研究に利用できるよう閲覧個室を設ける。室内には情報検索用機器等を設置する。

(3) グループ閲覧室 (2、3 階)

共同学習・共同研究に利用できるようグループの人数に応じ、5 名から 40 名まで様々な大きさの閲覧室を設置する。その一部には AV 機器等を備え、AV 資料の共同利用ができる部屋とする。

(4) 新聞閲覧座席 (1、2 階)

新聞を広げて読むための傾斜した閲覧台、座席ならびにソファを設置する。

(5) AV 資料閲覧座席 (2 階)

AV 資料を利用するための座席をブース形式で設ける。座席には様々な資料形態に応じた機器を設置する。座席は部屋として独立したものではなくコーナーとして他の施設と一体感を持たせたレイアウトとする。

(6) マイクロ資料閲覧座席 (1 階)

マイクロ資料を利用するためにリーダー・プリンターをブース形式で設ける。マイクロ資料を長期にわたって利用したり、必要な箇所を複写できる設備とする。

(7) 地図閲覧座席 (3 階)

地図コーナでは地図を広げて利用するための幅の広い机や、必要な箇所をトレーシングするための専用台を設置する。

(8) 特別閲覧座席 (1 階)

貴重図書、古文書などを利用するためにこれらの資料に隣接して専用の閲覧室を設ける。さらに必要な箇所の撮影などのできる設備を設置する。

(9) タイプ・ワープロ室 (各階)

論文作成、レポート作成にタイプ・ワープロなどの機器を利用できるタイプ・ワープロ室をブース形式で設ける。各ブースには機器や資料を利用しやすいよう幅の広い机を設置する。

(10) 視覚障害者読書室 (2 階)

視覚障害者読書室には録音設備や点訳タイプライターを備える。視覚障害者のカセット・テープや点字図書を用いての学習、ボランティアによる録音対面朗読に利用する。

(11) 図書館ホール (B1)

図書・資料を利用しての研究発表、学会、小講演会、図書館オリエンテーションに利用する。VTR などを利用するための各種の AV 機器、大型スクリーンや音響機器を設置する。

(12) 検索用座席 (各階)

本学所蔵の図書・資料のデータをはじめとする各種データベースを検索するための端末機を設置する。端末機は使用目的に合わせてレファレンスコーナならびに書架間など館内随所に設置する。

(13) ニューメディア閲覧座席 (1、2、3 階)

CD-ROM などのニューメディア資料を利用するためにパーソナルコンピュータをブース形式で設置する。

(14) ラウンジ (2 階)

気軽に新聞、雑誌や文庫・新書などを利用するためにラウンジを設け、座席やソファを設置する。

(15) その他の施設

複写室 (1 階)

多量コピー等のために業者委託による複写室を設ける。複写室のほかに館内各所にカード式複写機を設ける。

休憩室 (1、2、3 階、B1)

学習や研究の合間に休憩・談話ができる休憩室を設ける。

休憩室にはソファを十分設けるとともに、喫煙者のために喫煙コーナを設置する。

喫茶室 (B1)

図書館内に喫茶室を設ける。

なお、カウンターについては1階にメインカウンターを設置し、総合受付、貸出・返却のほかに学術情報センターの中核としてのレファレンスを行なう。

2、3階にもそれぞれカウンターを設け、配架図書・資料の主題に合わせたレファレンス業務を行なう。カウンターには貸出・返却だけでなく情報検索サービスのためのスペースを十分にとりレファレンス業務の充実をはかる。

事務関係施設については、特に収書関連施設を充実し収書室、荷受室などを設ける。

5. システム関係施設

新大学図書館では、専用のホストコンピュータ (日立の M-680 クラス) とその周辺機器を設置する。更に、館内・外に設置されている端末機からアクセスできるようにネットワークシステムを導入する。

〈ホストコンピュータ関係〉

(1) システム機械室 (B1)

ホストコンピュータ及び磁気ディスク装置などの補助記憶媒体や、CCP、FEP などの通信制御装置を設置する。また、コンピュータの安定運用を図るため、コンピュータ専用の電源装置を設置する。

(2) システム室 (入出力室) (1 階)

漢字プリンターや MT 装置などの入出力装置を設置するとともに、コンソール等のホストコンピュータ運転監視装置を設置する。

〈ネットワーク関係〉

(1) 館内ケーブル

館内のネットワーク関係設備として次の3種類のネットワーク関係設備を設置する。

a. バックボーン LAN

各階層を縦貫する基幹ケーブル網と制御装置

b. フロアー LAN

各階層毎に基幹ケーブルと各端末間を結ぶケーブル網と制御装置

c. 図書館業務用端末ケーブル

図書館業務用の専用端末機とホストコンピュータを持続するケーブルおよび制御装置

(2) 館外ネットワーク関係設備

「学術情報センター」をはじめとする学外のネットワークシステムや、学内のネットワークシステムに接続できるよう電話回線等の通信ケーブルおよびネットワーク関係装置を設置する。

〈端末機関係〉

利用者用端末機と図書館業務用の専用端末機を館内に設置する。

(1) 利用者用端末機

利用者が図書・資料を検索したり、学内外の学術データベースを利用するために端末機を設置する。端末機は目録検索コーナー、書架間等に設置する。なお、情報検索コーナーに設置する端末機は CD-ROM 等も利用できるものとする。

(2) 図書館業務用端末機

図書館業務用の専用端末機を各課事務室内に設置し、図書・資料の整理等を行なう。また、カウンターでは、貸出、返却サービスをはじめ、レファレンス業務に利用する。

6. 階層レイアウト図、主要資料・施設一覧表、図書館内端末機・プリンター設置計画一覧表 (略)

Ⅲ. 新大学図書館、新産業研究所の基本設計書

この基本設計書は第Ⅱ章に述べた基本計画に基づき、作業委員会のもとで、施設部、日本設計と共同して作成したものである。構成は計画概要、位置図、配置図および各階の平面図よりなっている。なお、今後実施設計に至る過程において上記の図面等に若干の変更が生じることをあらかじめことわっておきたい。

1. 計画概要

| | |
|---------|----------------------------|
| 計 画 地 | 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 2 番地 他 |
| 敷 地 面 積 | 116,270.22 m ² |
| 地域地区指定 | 第 2 種住居専用地域、第 2 種高度地区、風致地区 |
| 容 積 率 | 200% |
| 建 ぺ い 率 | 60% |
| 建 築 面 積 | 4,235 m ² |
| 延 床 面 積 | 17,290 m ² |

| 階数 | 各階床面積 (m ²) |
|-------------|-------------------------|
| PH | 200 |
| 3 F | 3,870 |
| 2 F | 3,950 |
| 1 F | 4,080 |
| B 1 F | 4,200 |
| B 2 F | 990 |
| 計 | 17,290 |

| | |
|-----------|---|
| 建 物 の 高 さ | 地上 19.50 m |
| 建 物 の 階 数 | 地上 3 階 地下 2 階 |
| 建 物 の 構 造 | 地上部 鉄骨鉄筋コンクリート造 地下部 鉄筋コンクリート造 一部鉄骨鉄筋コンクリート造 |
| 主 な 仕 上 げ | 外装 外壁：コンクリート打放しの上、 モルタル下地スタッコ仕上（コテ引き抜き仕上） 屋根：アスファルト防水の上、 押えコンクリートコテ仕上 内装 床：タイルカーペット （閲覧室） 壁：エマルジョンペイント 一部クロス貼り 天井：岩綿吸音板 |

床：PVC タイル
 (事務室) 壁：エマルジョンペイント
 天井：岩綿吸音板

電 気 設 備

| | |
|---------|---------------------------|
| 受電設備 | 主電気室より高压地中引込 |
| 電灯設備 | 蛍光灯を主体とする |
| 放送設備 | 非常放送、一般放送 |
| AV 設備 | モニター TV、OHP 等 |
| 情報処理 | CPU、端末機 |
| その他弱電設備 | 電話、TV 共聴、インターホン、身障者呼出、防災等 |

空 調 設 備

| | |
|------|-------------------------|
| 冷温熱源 | 吸収冷温水機 空気熱源ヒートポンプチラー |
| 空調方式 | 単一ダクト方式＋ファンコイル |

衛 生 設 備

| | |
|------|---------------------|
| 給水設備 | 上水、雑用水二管給水 |
| 給湯設備 | 電気及びガス湯沸器 |
| 消火設備 | 屋内消火栓 ハロゲン化物消火設備 |

昇 降 機 設 備

| | | | | |
|-------|-----|------|------|-----|
| 利用者用 | 乗 用 | 15 人 | ロープ式 | 1 台 |
| サービス用 | 人荷用 | 15 人 | ロープ式 | 1 台 |
| サービス用 | 人荷用 | 11 人 | ロープ式 | 1 台 |

(昇降機はすべて障害者対応仕様)

- (2. 位置図 略)
- (3. 配置図 略)
- (4. 平面図 略)

おわりに

現時点で予定されている事前工事は、1990 年の夏季休暇中に行われる法学部旧本館および第二別館の解体工事であり、併せて日本庭園へ流れる水路変更も行われる。第五別館の突出部は 1991 年の夏季休暇を利用して解体される予定である。

図書館本体の工事は、建設位置等の関係により3期にわかれる。第1期工事は1991年10月に着工され、約10,360 m²の面積で約18カ月かかり、1993年春季頃に完成する。その後、現図書館および産業研究所が移転し、仮図書館が開館する。この第1期工事が終了後、第2期工事が始まるが、まず現図書館新館部分の解体工事が行われる。この工事はエネルギー源移設、第五別館突出部の解体工事と同様、震動および騒音のため、夏季休暇中を利用して工事が行われる。第2期工事は約6,930 m²の面積で、約15カ月かかり、1995年春季頃には完成し、移転および新館開館準備を行った後、新大学図書館が開館することとなる。また、今回新たに提案された〈B'案〉の第3期工事は書庫が満杯となる2002年頃には完成されねばならない。これについては学内の建設順位等があり、今後、大学内で調整されることとなっている。

新大学図書館の建設位置はキャンパスの中央になるため、工事車両の出入り口の問題、学生・教職員の動線確保といったことも念頭に入れておく必要がある。また、解体工事により発生する騒音にも十分な配慮が必要である。工事期間が2期にわたるため正式開館までの準備期間が長く、また、第3期工事も後に控えていることや、前述した解決すべき問題も多々あり、どれ一つとっても学内の構成員の協力がなくては新しい図書館は完成しないであろう。本学の構成員のすべてが、この上ヶ原キャンパスに立派な図書館を建設しようという意欲をもつことが必要である。

2 図書館規則

* 原本が縦書きのものは、横書きで掲載した。

(1) 廃止規程

① 圖書

「私立關西學院一覽 自明治三十七年四月 至明治三十八年三月」より抜粋

圖 書

- 一 本學院圖書室所藏ノ圖書新聞紙雜誌類ハ教師及ヒ學生ノ縱覽借用ニ供ス
- 一 高等科教科用書ハ願ニヨリ見料ヲ以テ學生ニ貸付スルコトアルヘシ

② 私立關西學院附屬圖書館規則

「私立關西學院附屬圖書館規則及圖書分類網目（明治 44 年刊）」より抜粋

私立關西學院附屬圖書館規則

第一章 總 則

- 第一條 本館は私立關西學院内に設置し私立關西學院附屬圖書館と稱す
- 第二條 本館は博く内外古今の圖書を蒐集し、私立關西學院職員、生徒、其他學院關係者の閱覽に供するものとす
- 第三條 本館の開館時限は左の如し
但し本館の都合に依り開館時限を變更することあるべし
神學部閱覽室、 午前 時 分開館、午後 時閉館
高等學部閱覽室、 午前 時 分開館、午後 時閉館
- 第四條 本館の閉館日は左の如し
但し臨時の閉館は其都度之を揭示す
一、日曜日
一、學院休日
一、曝書期 十月、十一月中凡一週間
- 第五條 本院に功勞ありと認むるものには本院關係者外の者と雖も館長の許可を得開館中隨時圖書の閱覽を得せしむ

第二章 閱 覽 心 得

- 第六條 本館は便宜上當分の間左の二閱覽室を設く
- 一、神學部閱覽室 (神學部校舍内)

- 一、高等學部閱覽室 (高等學部校舎内)
- 第七條 神學部閱覽室には重に哲學、宗教に關する圖書を備付け、高等學部閱覽室には重に商業、經濟、文學に關する圖書を備付く。哲學、宗教に關する圖書を借覽せんとする者は神學部閱覽室に、商業、經濟、文學に關する圖書を借覽せんとする者は高等學部閱覽室に赴くべし
- 第八條 館員の外猥りに書庫内に入るを許さず
但し本院職員は館長の許可を得、開館中館員立會の上書庫内に入り圖書の檢索を爲すことを得
- 第九條 本館の圖書を借覽せんとする者は圖書閱覽請求券に書名、冊數、分類、番號部、年級及び姓名を記入し係員に差出して圖書を借受け、退館せんとする時は其借受けたる圖書を返納すべし
- 第十條 借受けたる圖書は閱覽室以外に於て閱覽することを許さず
- 第十一條 閱覽室に於ては朗讀、談話、飲食、喫烟、其他喧騒に渉る行爲を許さず
- 第十二條 閱覽者は排列せる机、椅子等を猥りに移動し、或は建物其他備付の器具を汚損すべからず
- 第十三條 閱覽人に貸與する圖書の員數は同時に三種以内とし、和装は十冊、洋装は三冊、和洋合せて借る時は六冊を定限とす
- 第十四條 閱覽中臨時外出せんと欲する時は借受けたる圖書を返納すべし
- 第十五條 借覽中圖書を亡失し、又は汚損したる時は本館指定の現品、若くは相當の代金を以て之を辨償せしむ
前項辨償の義務を了せざる間は本館の圖書を借覽することを許さず
- 第十六條 本館の規則又は掲示に違背し、若くは不都合の行爲ありと認むるときは直ちに退館を命じ、且つ登館を停止することあるべし

第三章 圖書 携 出

- 第十七條 本院職員及び神學部生徒は本館の圖書を携出借覽することを得
高等學部生徒には目下商業及び文學圖書少數に付き當分の間携出を許さず
- 第十八條 本館の圖書を携出借覽せんとする者は圖書携出借覽券に書名、冊數、分類、番號、部、年級及び姓名を記入し係員に差出して圖書を借受くべし、但し其際印鑑を要す
- 第十九條 貸付圖書の員數は和装は五冊、洋装は二冊、和洋併せて借る時は三冊を以て定規とす
但し新に備付けたる圖書は二週間を経たる後にあらざれば貸付せず
- 第二十條 圖書携出の期日は二週間とす、尚ほ引續き借覽せんとする者は一旦返納して更に借受の手續を爲すべし、此の場合に於て他に同書の借受を請ふ者ある時は續借することを得ず、但し借覽期中と雖も本館に於て必要ある場合は隨時返納せしむることあるべし
- 第二十一條 本院の教師及び講師は參考書として本館圖書を携出することを得、參考書

の携出期限は當該學科授業期間中とし、其他の携出期限は二週間とす
但し参考書の携出は學期末に一旦返納し更に携出の手續を要す

第二十二條 教師及び講師用参考書の携出員數は和装は二十冊、洋装は十冊、和洋併せて借る時は十五冊を以て定規とす、其他の携出員數は本館規則第十九條に依る

第二十三條 借受けたる圖書を亡失し、又は汚損したるときは本館規則第十五條に依り處分す

第二十四條 貴重圖書、辭書、墨帖、目錄類及び参考書類は携出することを許さず

第四章 新聞、雜誌

第二十五條 新聞、雜誌其他定期刊行書類は最新刊行のもの、みを新聞雜誌閱覽室に備付くるものとす

第二十六條 新聞、雜誌其他定期刊行書類は裝釘の上にあらざれば貸付せず

第五章 圖書寄贈

第二十七條 圖書を寄贈せんとする者は本館の承諾を得たる後、該圖書の目錄、冊數、價格並に住所氏名を記し現品に添へて送付すべし

第六章 圖書委託

第二十八條 本館に圖書を委託せんと欲する者は委託願書に其目錄、冊數及び住所氏名を記し、本館の承諾を得たる後現品を送付すべし、但し本館よりは受託證を交付す

第二十九條 委託圖書は本館所藏の圖書と同一の取扱をなすべし、但し委託者の承諾なきものは館外に携出せしめざるものとす

第三十條 委託圖書は委託者の請求に依り隨時返付すべし、但し本文請求の際受託證を返納すべし

第三十一條 委託圖書は不可抗力に依り亡失、又は毀損したるものは本館に於て辨償の責に任ぜず

③巡回文庫圖書貸出規則

「巡回文庫圖書目錄一覽（附貸出規則）（大正5年12月刊）」より抜粋

巡回文庫圖書貸出規則

- 一、通信教授科にある人々は無料にて一時に二冊以内を借用する事を得。
- 二、借用希望者は本部發行の圖書目錄に依り希望書を撰擇し然る後借用申込書に記入し差出すべし。
- 三、借用期限は送還日數を除き一ヶ月とし郵税は返納の場合に限り借用者の負擔とす。
- 四、借用圖書の汚損紛失等ありし節は借用者に於て相當の賠償をなすべき義務あるものとす。
- 五、圖書借用者は圖書受領の際封入の端書に受領月日を記入し直に當局者へ必ず通知すべきものとす。
- 六、通信教授科に關係なき人々にして日本メソヂスト教會年會員は前條の規定に準じ圖書借用をなす事を得と雖も一書につき金拾錢の料金を支拂ふべきものとす。
- 七、其他の規定は關西學院圖書館規則に依るものとす。

大正五年十一月

關西學院圖書館神學部
通信教授部

※なお、巡回文庫は、1895（明治28）年に設置されており、このとき「年會文庫規則」が置かれ、その後、1897（明治30）年に圖書の貸出のための簡単な「文庫書籍貸与規則」が定められて、本規則に引き継がれている。

④關西學院附屬圖書館規則

「關西學院一覽（昭和4年9月26日發行）」より抜粋

關西學院附屬圖書館規則

第一章 總 則

- 第一條 本館ハ私立關西學院内ニ設置シ關西學院附屬圖書館ト稱ス
- 第二條 本館ハ博ク内外古今ノ圖書ヲ蒐集シ關西學院職員學生生徒及學院關係者ノ
閱覽ニ供ス
- 第三條 本館ノ閉館ハ左ノ如シ
日曜日、祝祭日、學院休日、但シ臨時ノ開閉日ハ其都度之ヲ揭示ス
- 第四條 本院ニ功勞アリト認ムル者ハ本院關係者外ト雖モ館長ノ許可ニ依リ隨時圖
書ノ閱覽又ハ借覽ヲナスコトヲ得ベシ

第二章 閱 覽 心 得

- 第五條 館員ノ外猥ニ書庫内ニ入ル事ヲ得ズ
但シ本學院職員ハ館長ノ許可ニ依リ開館中館員立合ノ上書庫内ニ入り圖書
ヲ檢索スル事ヲ得
- 第六條 本館ノ圖書ヲ借覽セントスル者ハ借覽證ニ所定ノ條目ヲ記入シテ係員ニ差
出シ圖書ヲ借受クベシ
但シ退館スル時ハ其借受ケタル圖書ヲ返納スベシ
- 第七條 閱覽者ハ一時ニ和装ハ十冊洋装ハ二冊和洋合スル時ハ六冊ヲ借受ケルヲ得ベシ
- 第八條 借受ケタル圖書ハ閱覽室以外ニ於テ閱覽スル事ヲ得ズ
- 第九條 閱覽中臨時外出セント欲スル時ハ借受ケタル圖書ヲ一時返納スベシ若シ紛
失シタル時ハ責任ヲ負フベキモノトス
- 第十條 借覽中圖書ヲ亡失又ハ汚損シタル時ハ本館指定ノ現品若クハ相當ノ代金ヲ以
テ之ヲ辨償スベシ辨償ノ義務ヲ了セザル間ハ本館ノ圖書ヲ借覽スル事ヲ得ズ
- 第十一條 閱覽室ニ於テハ朗讀、談話、飲食、喫烟其他喧騒ニ渉ル行爲ナキ様自重ス
ベシ又室内ニ於テハ必ズ脱帽スベシ
- 第十二條 閱覽者ハ机椅子等ヲ勝手ニ移動シ或ハ建物其他備付ノ器ヲ汚損セザル様注
意スベシ
- 第十三條 本館ノ規則又ハ揭示ニ違背シ又ハ不都合ノ行爲アル時ハ直ニ退館ヲ求メ且
ツ登館ヲ斷ルベシ

第三章 圖 書 携 出

- 第十四條 本學院職員學生生徒及關係者ハ本館ノ圖書ヲ携出借覽スル事ヲ得
但シ學生生徒ハ總務部ノ會計係ニ金貳圓ヲ納メ其領收證ト引替ニ本館ニテ
圖書携出借覽券ヲ求ムベシ
前納金貳圓ハ學年末ニ返還ヲ請求スル事ヲ得
- 第十五條 貴重圖書、辭書、墨帳、目錄類及ビ參考書類ハ携出スル事ヲ得ズ

- 第十六條 本館ノ圖書ヲ携出借覽セントスル時ハ圖書携出借覽證ノ各項目ニ記入シ係員ニ差出シテ圖書ヲ借受クベシ
但シ學生及生徒ハ借覽券番號ヲモ記入スベシ
- 第十七條 本學院學生及生徒ニシテ圖書携出借覽券ヲ持參スル者ハ本館ノ圖書ヲ一冊携出スル事ヲ得期間ハ一週間ト定ム
但シ他人ニ借覽券ヲ貸與スル時ハ無効トス紛失シテ再製ヲ乞フ時ハ手数料トシテ金拾錢ヲ納ムベシ
- 第十八條 本學院關係者ノ携出し得ル圖書ノ員數ハ和装ハ五冊洋装ハ二冊和洋合シテ借ル時ハ三冊ト規定シ携出期限ハ一週間ト定ム
- 第十九條 本學院ノ教授教師及ビ講師ハ參考書トシテ本館圖書和装ハ二十冊洋装ハ十冊和洋合シテ借ル時ハ十五冊ト規定シ携出期限ハ一ヶ月ト定ム
- 第二十條 教授、教師及講師ハ當該學科教授中ノ參考圖書ハ一ケ年間携出スル事ヲ得但シ本館ニ一冊ノミ所藏スル圖書ハ携出スルヲ得ズ
- 第二十一條 總テ圖書ハ返納期日ニ返納スベシ尙引續キ携出借覽セントスル時ハ一旦返納シテ更ニ借受ノ手續ヲ爲スベシ
但シ此ノ場合他ノ同書ノ借受ヲ請フ者アル時ハ續借スル事ヲ得ズ
- 第二十二條 圖書ノ携出借覽期間中ト雖モ本館ニ於テ必要アル場合ハ隨時返納ヲ請求スル事アルベシ
- 第二十三條 携出中圖書ヲ亡失シタル時ハ本館規則第九條ヲ守ルベシ
- 第二十四條 携出圖書の返納期日ヨリ遲延スル時ハ一日一冊ニ對シテ金貳錢宛支拂フベキモノトス
- 第四章 新 聞 雜 誌
- 第二十五條 新聞雜誌其他定期刊行書類ハ最新刊行ノモノヲミ新聞雜誌閱覽室ニ備付ク
- 第二十六條 新聞雜誌其他定期刊行書類ハ裝釘ノ上貸出ヲナスベシ
但シ裝釘前ト雖モ必要ニ應ジテ貸出スル事アルベシ
- 第五章 圖 書 寄 贈
- 第二十七條 圖書ヲ寄贈セラル、方ハ該圖書ノ目錄冊數價格並ニ住所氏名ヲ記シ現品ニ添ヘテ送付セラレタシ
- 第六章 圖 書 委 託
- 第二十八條 本館ニ圖書ヲ委託セント望マル、方ハ委託書ニ其目錄冊數及ビ住所氏名ヲ記シテ本館ノ承諾ヲ得ラレタル後現品ヲ送付セラレタシ
但シ本館ヨリハ受託證ヲ交付ス
- 第二十九條 委託圖書ハ本館所藏ノ圖書ト同一ノ取扱ヲナス
但シ委託者ノ承諾ナキモノハ館外携出借覽ヲ許サズ
- 第三十條 委託圖書ハ委託者ノ請求ニ依リ隨時返還スベシ
但シ返還ヲ請求スル際ハ受託證ヲ返納セラレタシ
- 第三十一條 委託圖書ハ不可抗力ニ依リ亡失又ハ毀損シタルモノハ本館ニ於テ辨償ノ責ニ任ゼズ

⑤關西學院圖書館規則

「利用者用リーフレット（昭和5年4月）」より転載

關西學院圖書館規則

第壹章 總 則

- 第一條 本館ヲ關西學院圖書館ト申シマス。
- 第二條 本館ハ博ク内外古今ノ圖書ヲ蒐集致シマシテ學院職員、學生、生徒其他關係者ノ閱覽ニ供シマス。
- 第三條 本館ノ閉館ハ左ノ通りニ定メテアリマス。
一、日曜日、祭日、學院休日（但シ臨時ノ開閉時日ハ其都度ニ揭示シマス。）
- 第四條 館員ノ外猥リニ書庫内ニ入ル事ハ許サレマセヌ。
- 第五條 閱覽者ハ排列シテアル机、椅子其他備付品ヲ勝手ニ移動又ハ汚損セヌ様注意願ヒマス。
- 第六條 本館ノ諸規則又ハ揭示ニ違背又ハ不都合ノ行爲ノアツタ時ハ退館又ハ登館ヲ禁ジマス。
- 第七條 委託書及寄贈書ニ關シマシテハ館長ト相談ノ上デ極メテ下サイ。
但シ委託書及寄贈書ハ本館藏書ト同様ノ取扱ヲ致シマス。

第貳章 閱 覽 規 則

- 第一條 圖書ノ閱覽ヲ望マル方ハ規定ノ用紙ノ各項目ニ記入シテ閱覽係ニ差出シテ下サイ。
- 第二條 閱覽者ニ貸與スル圖書ノ冊數ハ一時ニ和裝本拾冊カ洋裝本二冊カデアリマシテ和洋合シタ時ハ和裝本五冊ト洋裝本一冊ト定メテアリマス。
- 第三條 閱覽者ニ貸與スル雜誌ノ冊數ハ一時ニ新刊、既刊ヲ合シテ壹種參冊ト定メマス。
- 第四條 閱覽中ノ圖書及雜誌ヲ亡失又ハ汚損サレタ時ハ本館指定ノ現品カ之ニ相當スル代金ノ辨償ヲ申し受ケマス。而シテ辨償ノ義務ガ終ラナイ内ハ本館ノ使用ヲ禁ジマス。
- 第五條 閱覽中ノ圖書及雜誌ハ閱覽室外ニ持ち出ス事ヲ禁ジマス。
- 第六條 退館又ハ臨時外出ナサル時ハ閱覽中ノ圖書雜誌ヲ全部一應返却シテ下サイ。
- 第七條 閱覽室内デハ脱帽ハ勿論、朗讀、談話、飲食、喫咽其他喧騒ニ渉ル行爲ノナキ様自重ヲ願ヒマス。

第參章 圖 書 貸 出 規 則

- 第一條 本學院ノ職員、學生、生徒其他關係者ニハ圖書ノ貸出ヲ致シマス。
- 第二條 貴重圖書、辭書、目錄類及參考書類其他教授、教師ノ指定書等ノ貸出ハ致

シマセヌ。

第三條 貸出ヲ望マル方ハ本館規定ノ借覽票ノ各項目ニ記入シテ貸出係ヘ差出下サイ。

第壹項 學 生 貸 出 規 則

第一條 借覽者證ガナケレバ貸出ヲ許シマセヌ。

第二條 借覽者證ハ會計課ヘ金貳圓ノ保證金ヲ納メタ領收書ト引替ニ本館デ交附致シマス。

但シ保證金ハ學年末以外ニハ返却ノ請求ヲスル事ガ出來マセヌ。卒業ニ際シマシテ返却請求ノ無キ方ハ圖書購入費ヘ寄贈下サツタモノト認メマス。

第三條 借覽者證ヲ紛失サレテ再製ヲ願ハル方ハ手数料トシテ金拾錢ヲ支拂レナケレバナリマセヌ。

第四條 貸出圖書ハ一時ニ貳冊カ製本雜誌貳冊カデー週間借覽スルコトガ出來マス。

第五條 特殊研究ノ論文ノ爲メニ參考ニサレル場合ハ冊數ナリ期間ハ館長ノ考慮デ規定以上ノ貸出ヲ許サレル事ガアリマス。

第六條 製本合綴ノ出來テナイ雜誌ノ貸出ハ許シマセヌ。

但シ特別ノ事情ノアル時ハ館長ノ考慮デ許サレルコトガアリマス。

第七條 貸出中ノ圖書及雜誌ノ汚損紛失ハ閱覽規則第四條ニ從ハネバナリマセヌ。

第八條 規定ノ期間ヲ經過シマシタ場合ハ一日ニ付金貳錢宛ヲ申シ受ケマス。

第貳項 教 授 貸 出 規 則

第一條 教授及教師ハ規定ノ借覽票ノ各項目ニ記入セラレテ貸出係ヘ差出シテ下サイ。

第二條 教授及教師ハ次ノ三條件ニ別ケテ貸出マス。

一、圖書ハ和裝本貳拾冊カ洋裝本拾冊カデ合シテ借覽セラル場合ハ和裝本拾冊ト洋裝本五冊ヲ一時ニ貳週間ト定メマスガ尙續ケテ借覽ヲ望マル時ハ他ニ希望者ノ無イ時ニ限り二週間毎ニ借替スルコトガ出來マス。

二、教授用參考トシテケ年間續ケテ使用セラル、圖書ハ一課目ニ對シテ五冊宛借覽セラル、事ガ出來マス

但シ本館ニ只壹冊シカ無イ時ハ館長ノ許シガ無ケレバナリマセヌ。

三、特殊題目ニ付イテ研究セラル、時ハ拾冊借覽セラル事ガ出來マスガ次ノ條件ニ從ハナケレバナリマセヌ。

イ、構内研究室ニ保留セラル、事

ロ、當館書庫ニアルモノト同様ノ取扱ヲ受ケラル事

ハ、何時テモ他ニ希望者ノアル時ハ返却サレル事

ニ、左記ノ期日マデニ全部一應返濟セラル事

三月卅日、六月卅日、九月拾日、十二月廿日

第三條 本館藏書ヲ教授ノ名デ他人ニ貸與サレル事ハ許シマセヌ。

- 第四條 新刊雑誌ハ午後三時カラ開館日ノ午前九時迄借覽スルコトガ出來マス。
- 第五條 既刊雑誌ハ壹週間借覽スルコトガ出來マス。尙續ケテ借覽ヲ希望セラル、時ハ他ニ希望者ノ無イ時ニ限ツテ借替スルコトガ出來マス。
- 第六條 教授、教師デモ汚損紛失ニ對シマシテハ閱覽規則第四條ニ從ハナケレバナリマセス。

第參項 卒業生及關係者貸出規則

- 第一條 卒業生及學院關係者ハ圖書及雜誌ヲ二週間借覽スルコトガ出來マス。
- 第二條 一時ニ貳冊以上借覽スルコトハ出來マセス。
- 第三條 本館ノ諸規則ニ從ハナケレバナリマセス。

以 上

昭和五年四月

- 一、圖書館は知識の泉である。
- 一、讀まずんば死せよ。
- 一、最大の國も一個の圖書館より小なり。

⑥關西學院規程のうち圖書館關連規程

「關西學院一覽 昭和十四年十月（創立第五十年）」より抜粋

四、關 西 學 院 規 程

(一) 圖 書 館 規 程

第一章 總 則

- 第一條 本館ハ關西學院大學圖書館ト稱ス
- 第二條 本館ハ博ク内外古今ノ圖書ヲ蒐集シテ本學院教職員、學生生徒、關係者及特ニ館長ノ許可ヲ得タル者ノ閱覽ニ供ス
- 第三條 本館備付ノ圖書ヲ分チテ左ノ五種トス
- 一、一般圖書
 - 二、貴重圖書
 - 三、辭書事彙類
 - 四、調査報告書圖表等
 - 五、教授上ノ必要ニ由ル指定圖書
 - 六、新聞雜誌等定期刊行物
- 第四條 本館ハ八月一日ヨリ同月末日、十二月二十五日ヨリ翌年一月九日、並ニ日曜日、祝祭日、學院休日ヲ除キ毎日開館ス
- 但圖書點檢其他ノ必要ニヨリ臨時閉館スルコトアルベシ
- 第五條 本館備付ノ圖書ヲ閱覽セントスルモノハ借覽者證ヲ携フベシ
- 第六條 教職員卒業生及關係者ニハ本館ヨリ借覽者證ヲ交付ス
- 學生生徒ハ規定ノ圖書館費ヲ納付ノ上本館ヨリ之ガ交付ヲ受クベシ
- 第七條 借覽者證ヲ紛失シタルトキハ速ニ届ケ出デ手数料トシテ金拾錢ヲ納入シ再交付ヲ願出ズベシ
- 但再交付ハ二週間後トス
- 第八條 學生生徒ハ圖書館費ヲ左ノ通り本學院會計課ニ納付スベシ
- 一、大學專門部及高等商業學校ノ學生生徒ハ每學期金壹圓
 - 但卒業年度ノ後期ハ納付スルヲ要セズ
 - 一、大學豫科ノ生徒ハ每學期金五十錢
- 第九條 登館者ハ館内ニ於テ左ノ諸項ヲ遵守スベシ
- 一、靜肅ヲ保チ容儀ヲ正シクスルコト
 - 二、机、椅子ソノ他備品ヲ恣ニ移動又ハ汚損セザルコト
 - 三、圖書利用ニ資セザル携帶品ヲ閱覽室内ニ持込マザルコト
 - 四、印刷物ソノ他物品ヲ配布セザルコト
 - 五、協議又ハ談論ニ類スル會合ヲナサルコト
- 第十條 本館ノ諸規定又ハ掲示ニ違背シ又ハ不都合ノ行爲アリタルトキハ退館ヲ命

ジ、又ハ登館ヲ禁ズルコトアルベシ

- 第十一條 委託書及寄贈書ニ關スル事項ハ館長之ヲ定ム
但委託書及寄贈書ハ本館藏書ト同様ノ取扱ヲナスモノトス

第二章 閱 覽 規 程

- 第十二條 圖書及雜誌ヲ閱覽セントスル者ハ借覽者證ヲ係員ニ提示シ閱覽請求票ニ所定事項ヲ記入シテ係員ニ差出スベシ
- 第十三條 閱覽圖書ノ冊數ハ一時ニ和漢裝ハ十冊、洋裝ハ二冊、和洋合セタルトキハ和漢裝五冊、洋裝一冊以內トス
- 第十四條 閱覽雜誌ノ部數ハ一時ニ新刊既刊ヲ合セテ三部以內トス
- 第十五條 閱覽中ノ圖書及雜誌ハ閱覽室外ニ持ち出スコトヲ得ズ
- 第十六條 退館又ハ途中外出スルトキハ閱覽中ノ圖書及雜誌ノ全部ヲ一應返却スベシ
- 第十七條 貴重圖書並ニ特殊圖書ノ閱覽ハ指定ノ場所ニ於テナスベシ
- 第十八條 教職員及特ニ許可ヲ得タルモノ、他書庫内ノ檢索ヲ許サズ
- 第十九條 閱覽中ノ圖書及雜誌ヲ汚損又ハ紛失シタルトキハ本館指定ノ現品又ハ之ニ相當スル代金ノ辨償ヲナスモノトス、辨償ノ義務ヲ履行セザルモノハ本館ノ使用ヲ禁ズルコトアルベシ

第三章 帶 出 規 程

第一節 總 則

- 第廿條 本學院ノ教職員、學生生徒及卒業生ソノ他關係者ハ別記ノ規定ニヨリ一般圖書ヲ帶出スルヲ得
右規定ニ於テ帶出スルコトヲ得ベキ冊數ハ洋裝ニツキテ之ヲ定メ和漢裝ノモノハ三冊ヲ以テ洋裝ノ一冊ニ宛ツ
- 第廿一條 貴重圖書、辭書事彙類及教授上ノ必要ニ由ル指定圖書ハ帶出ヲ許サズ
但特別ノ事情アルトキハ館長ノ裁量ニヨリ特ニ許可スルコトアルベシ
- 第廿二條 圖書ヲ帶出セントスルモノハ借覽票ニ所定ノ事項ヲ記入シ借覽者證ト共ニ係員ニ差出スベシ
- 第廿三條 帶出希望ノ圖書ガ貸出中ナルトキハ、ソノ返却アリ次第特ニ之ガ通知アリタキ旨申出ズルコトヲ得、通知後二日間之ヲ保留ス
- 第廿四條 新着圖書ハ一箇月間帶出ヲ許サズ
但特別ノ事情アルトキハ館長ノ裁量ニヨリ特ニ許可スルコトアルベシ
- 第廿五條 帶出中ノ圖書ハ之ヲ轉貸スルコトヲ得ズ
- 第廿六條 館長ニ於テ必要ト認ムル場合ニハ帶出圖書ノ種類冊數ヲ制限シ又期間内ト雖モ返納ヲ求ムルコトアルベシ
- 第廿七條 帶出中ノ圖書ヲ汚損又ハ紛失シタルトキハ第十九條ノ規定ヲ準用スルモノトス

第二節 教 職 員 帶 出 細 則

- 第廿八條 教職員ノ帶出シ得ベキ冊數ハ一人ニツキ廿冊以內トシ期間ハ一ヶ月以內トス
- 第廿九條 帶出中ノ圖書ニシテ二週間經過後他ニ要求アルトキハ返還ノ請求ヲナスコトアルベシ
- 第卅條 期限後引續キ帶出ヲ希望スルトキハ更ニ所定ノ手續ヲ經テ繼續スルコトヲ得
- 第卅一條 教職員ハ特ニ館長ノ許可ヲ得テ一學科目ニ付五冊以內教授用參考書トシテ學年ノ始メヨリ向フ一箇年間引續キ帶出スルコトヲ得
- 第卅二條 教職員ハ左記規定ニ從ヒ雜誌ヲ帶出スルコトヲ得
- 一、新刊雜誌ニアリテハ二冊以內トシ期間ハ午後三時ヨリ次ノ開館日ノ午前九時迄トス
- 二、既刊雜誌ニアリテハ二冊以內トシ期間ハ一週間トス
- 第卅三條 教職員ハ特ニ必要アル場合ニハ部科長ヲ經テ館長ニ申請シソノ許可ヲ經テ規定以上ノ冊數及期間ノ帶出ヲナスコトヲ得

第三節 學生生徒帶出細則

- 第卅四條 學生生徒ノ帶出シ得ベキ冊數ハ一人ニツキ二冊以內トシ期間ハ一週間以內トス
- 第卅五條 期限後引續キ帶出ヲ希望スルトキハ更ニ所定ノ手續ヲ經テ繼續ヲナスコトヲ得
- 第卅六條 規定ノ帶出期間ヲ經過スルモ返納ナサザルトキハ一冊毎ニ一日ニ付金貳錢ノ延滞料ヲ支拂フモノトス
- 第卅七條 學生生徒ニハ雜誌ノ貸出ヲ行ハズ
- 第卅八條 特殊研究、論文作製等ノ場合ニハ館長ノ裁量ニヨリ規定以上ノ冊數及期間ノ帶出或ハ特殊圖書及雜誌ノ帶出ヲ許可スルコトアルベシ
- 第卅九條 休學若クハ停學中ノ者ニハ直ニ其借受セル圖書ヲ返納セシメ且此期間圖書ノ貸出シヲ停止ス

第四節 卒業生及關係者帶出細則

- 第四十條 卒業生及本學院關係者ノ帶出シ得ベキ冊數ハ一人ニツキ二冊以內トシ期間ハ一箇月トス
- 第四十一條 卒業生及本學院關係者ノ帶出ニ關シテハ第三章第三節ノ規定ヲ準用ス

～(略)～

(四) 寄 附 行 爲 細 則

～(略)～

第八章 職員

～(略)～

- 第四十一條 圖書館長ノ職務左ノ如シ
- 一、圖書館長ハ圖書館ヲ管理シ其ノ事務員ヲ統率ス
 - 二、圖書館長ハ理事會ニ於テ任命セラルベキ司書ヲ院長ニ推薦シ院長ト協議ノ上其ノ館ノ事務員ヲ任命ス
- 第四十二條 司書ハ圖書館長ノ指揮ヲ承ケ圖書館ノ事務ニ従事ス

～(略)～

(五) 關 西 學 院 職 制

～(略)～

第五章 關西學院圖書館

- 第四十五條 關西學院圖書館ニ左ノ職員及ビ事務員ヲ置ク
- | | | | |
|---|---|-----|---|
| 館 | 長 | 一 | 名 |
| 司 | 書 | 一 | 名 |
| 書 | 記 | 若 干 | 名 |
- 第四十六條 館長ハ左ノ職務ヲ行フ
- 一、圖書館ヲ管理シ且ツ其ノ職員及ビ事務員ヲ統率スルコト
 - 二、司書ノ任免ニ關シ理事會ニ提議スルタメ之ヲ院長ニ推薦スルコト
 - 三、院長ト協議ノ上事務員ノ任免ヲ爲スコト
 - 四、其ノ館ノ豫算案ノ調製ヲ爲スコト
 - 五、圖書館委員會ヲ召集シ其ノ議長トナルコト
 - 六、毎年理事會ニ館務報告ヲ爲スコト
- 第四十七條 司書ハ館長ノ指揮ヲ承ケ圖書館ノ事務ニ従事ス
- 第四十八條 書記ハ館長及ビ司書ノ指揮ヲ承ケ圖書館ノ事務ヲ執ル
- 第四十九條 圖書館ニ圖書館委員會ヲ置ク
- 圖書館委員會ハ館長、司書及ビ各部々長又ハ校長ヨリ委屬セラレタル各一名ノ教授ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第五十條 圖書館委員會ハ圖書ノ購入、受贈、保管及ビ閱覽ニ關スル事項ヲ審議ス

～(略)～

(六) 事 務 規 程

關西學院ハ事務運用ノ便宜上學院全體ニ關スル事務ト學部ニ關スル事務トニ分ツ
但シ時宜ニ應ジテ協力シ重要ナル報告ハ必ズ相互通牒ヲナスモノトス

イ、總 務 部 ノ 事 務

一、總務部ニ庶務課、圖書課、會計課ヲ置ク

～(略)～

一、圖書課ハ各學部内特別備付ノ圖書ヲ除キ一切ノ圖書ヲ管掌ス其ノ重ナル事務ハ左
ノ如シ

(一) 圖書ノ整理、出納、保管及ビ目錄編纂等ニ關スル事項

(二) 圖書館印ノ保管ニ關スル事項

(三) 圖書閱覽室ノ整頓及ビ取締ニ關スル事項

(四) 新着書報告及ビ圖書閱覽者統計ヲ定期ニ庶務課及ビ各學部ニ發送スル事項

(五) 新聞、雜誌、年報、一覽等ノ製本保管ニ關スル事項

～(略)～

⑦關西學院圖書館規則

「利用者用リーフレット（昭和10年1月）」より転載

關西學院圖書館規則

第壹章 總 則

- 第一條 本館ハ關西學院大學圖書館ト申シマス。
- 第二條 本館ハ博ク内外古今ノ圖書ヲ蒐集致シマシテ學院職員、學生、生徒其他關係者ノ閱覽ニ供シマス。但シ其他ノ方デモ館長ノ許シヲ得ラレバ閱覽スルコトガ出來マス。
- 第三條 本館ノ閉館ハ左ノ通りデアリマス。
一、日曜日、祭日、學院休日（但シ臨時ノ開閉時日ハ其都度ニ揭示シマス。）
- 第四條 館員ノ外ハ猥リニ書庫内ニ入ル事ハ許サレマセス。
- 第五條 閱覽者ハ排列シテアル机、椅子其他備付品ヲ勝手ニ移動又ハ汚損セヌ様御注意ヲ願ヒマス。
- 第六條 本館ノ諸規則又ハ揭示ニ違背又ハ不都合ノ行爲ノアツタトキハ退館ヲ命ジ又ハ登館ヲ禁ジマス。
- 第七條 委託書及寄贈書ニ關シマシテハ館長ト相談ノ上デ極メテ下サイ。
但シ委託書及寄贈書ハ本館藏書ト同様ノ取扱ヲ致シマス。

第貳章 閱 覽 規 則

- 第一條 圖書ノ閱覽ヲ望マルル方ハ規定ノ用紙ノ各項目ニ記入シテ閱覽係ニ差出シテ下サイ。
- 第二條 閱覽者ニ貸與スル圖書ノ冊數ハ一時ニ和裝本ナレバ十冊、洋裝本ナレバ二冊デアリマシテ和洋合セタトキハ和裝本五冊ト洋裝本一冊デアリマス。
- 第三條 閱覽者ニ貸與スル雜誌ノ冊數ハ一時ニ新刊、既刊ヲ合セテ三冊デアリマス。
- 第四條 閱覽中ノ圖書及雜誌ヲ汚損又ハ紛失サレタトキハ本館指定ノ現品カ又ハ之ニ相當スル代金ノ辨償ヲ申シ受ケマス。而シテ辨償ノ義務ガ終ラナイ内ハ本館ノ使用ヲ禁ジマス。
- 第五條 閱覽中ノ圖書及雜誌ハ閱覽室外ニ持ち出ス事ハ出來マセヌ。（第三章參照）
- 第六條 退館又ハ臨時外出ナサルトキハ閱覽中ノ圖書及雜誌ヲ全部一應返却シテ下サイ。
- 第七條 閱覽室内デハ脱帽ハ勿論、飲食、朗讀、談話其他喧騒ニ渉ル行爲ノナイ様御自重ヲ願ヒマス。

第參章 圖書帶出規則

- 第一條 本學院ノ職員、學生、生徒及卒業生其他關係者ニハ圖書ノ帶出ヲ許シマ

- ス。
- 第二條 貴重圖書、辭書、目錄類及參考書類其他教授、教師ノ指定書等ノ貸出ハ致シマセヌ。
- 第三條 帶出ヲ望マレル方ハ本館規定ノ借覽票ノ各項目ニ記入シテ貸出係ヘ差出シテ下サイ。
- 第四條 希望圖書ノ貸出ニナツテ居ル時ハ歸リ次第ニ通知ヲ差上マス。通知以後二日間ダケ保留致シマス。
- 第五條 新着書ハ新刊棚ニ陳列シテ參考ニ供シマスガー箇月間ハ誰ニモ帶出ハ許シマセヌ、二箇月目カラハ三日間帶出ヲ許シマス其後ハ通常ノ規定ニ從ツテ帶出ヲ許シマス。

第壹項 學生帶出規則

- 第一條 借覽者證ガナケレバ帶出ハ許シマセヌ。
- 第二條 借覽者證ハ會計課ヘ金貳圓ノ保證金ヲ納メタ領收書ト引替ニ本館デ交付致シマス。
但シ保證金ハ卒業ノ際又ハ退學ノ場合ニハ返却ノ請求ヲスルコトガ出來マス。卒業ノ際シマシテ返却請求ノ無イ方ハ圖書購入費ヘ御寄贈下サツタモノト認メマス。
- 第三條 借覽者證ヲ紛失サレテ再製ヲ願ハレル方ハ手数料トシテ金拾錢ヲ申し受ケマス。
- 第四條 圖書又ハ製本雜誌ノ帶出ハ一時ニ二冊デー週間借覽スルコトガ出來マス。
- 第五條 特殊研究ノ論文ノ爲メニ參考ニサレル場合ニハ冊數及期間ハ館長ノ考慮デ規定以上ノ帶出ヲ許ス事ガアリマス。
- 第六條 製本合綴ノ出來テ井ナイ雜誌ノ帶出ハ致シマセヌ。
但シ特別ノ事情ノアルトキハ館長ノ考慮デ帶出ヲ許サレルコトガアリマス。
- 第七條 帶出中ノ圖書及雜誌ノ汚損又ハ紛失ニ付テハ閱覽規則第四條ニ從ハネバナリマセヌ。
- 第八條 規定ノ期間ヲ經過シマシタ場合ハ一日ニ付金貳錢宛ヲ申し受ケマス。

第貳項 教授閱覽及帶出規則

- 第一條 教授及教師ハ本館規則第一章及第二章ニ從ツテ本館ノ藏書ヲ自由ニ閱覽ナリ帶出ガ出來マス。
- 第二條 教授及教師ハ教授閱覽室デ閱覽セラル、場合ニハ豫メ所用ノ圖書ヲ借覽票ノ各項目ニ記入セラレタ上係員ニ差出シテ下サイ。閱覽後ハ其儘ニ机上ニ殘シテ置イテ下サイ、尙續イテ使用セラル、場合ハ一應其由ヲ係員ニ通知シテ下サレバ他ニ請求ノ無イ限り保留ヲ致シテ置キマス。
- 第三條 教授及教師ハ圖書ヲ閱覽又ハ帶出ヲ希望セラル、場合ハ必ず規定ノ用紙ニ

記入シテ係員ニ差出シテ下サイ。

第四條 教授及教師ニハ次ノ條件ニ從ツテ帶出ヲ許シマス。

(イ)帶出圖書冊數ハ廿冊デ其期間ハ壹箇月ト致シマス。(帶出中ノ圖書デモ二週間經過後ハ他ニ要求ノアル時ハ返還ノ請求ヲ致ス時ガアリマス。)尙引續イテ帶出希望セラル、場合ハ他ニ希望者ノ無イ時ニ限り二週間借替ガ出來マス。

但シ特別ノ場合ハ館長ノ許シヲ得ラレバ規定以上ノ帶出モ出來マス。

(ロ)教授用參考書ハ學年ノ始メカラ三月卅一日マデー箇年間引續イテ一課目ニ付イテ五冊宛ノ帶出ヲ許シマスガ本館ニ一冊シカナイ圖書ハ帶出ヲ許シマセス。

但シ本館ニ唯一冊シカナイ圖書デモ館長ノ特別ノ許シヲ得ラレバ帶出モ出來マス。

第五條 教授及教師ハ新刊書デ整理済ノ圖書ナラバ新着書棚ニ陳列スル前一週間ダケ帶出スルコトガ出來マス。(第參章第四條參照ノ事)

第六條 教授及教師ノ要求ニ依リ指定參考書トシテ準備サレタ圖書ハ帶出ヲ許シマセス。

第七條 本館藏書ヲ教授及教師ノ名デ學生及其他ノ方ヘ貸與セラレル事ハ許シマセス。

第八條 新刊雜誌ハ午後三時ヨリ次ノ開館日ノ午前九時迄ハ帶出スル事ガ出來マス。

第九條 既刊雜誌(月遅レ)ハ一週間帶出スル事ガ出來マス。

但シ他ニ希望者ノ無イ時ハ一應返済ノ上一週間ダケ延期ガ出來マス。

第十條 教授及教師タリトモ本館規則第貳章第四條及第參章第壹項第八條ニ從ハナケレバナリマセス。

第參項 卒業生及關係者帶出規則

第一條 卒業生及學院關係者ハ圖書及雜誌ヲ一箇月間帶出スルコトガ出來マス。

第二條 一期間ニ二冊以上帶出スルコトハ出來マセス。

第三條 本館ノ諸規則ニ從ハネバナリマセス。

以 上

昭和十年一月

一、圖書館は知識の泉である。

一、讀まずんば死せよ。

一、最大の國も一個の圖書館より小なり。

⑧移動図書館貸出規程（昭和20年6月4日）

移動図書館貸出規程

第一號

一、特別措置トシテ勤勞動員先ニ於テ本館圖書ノ貸出借覽ヲ行フ。

本規程ニ依ル貸出ハ次ノ三種ニ分ツ。

甲、圖書目録ニ依ル貸出

乙、動員先圖書室ニ於ケル閱覽

丙、寮内ニ於ケル閱覽

二、前條甲號ニ依ル貸出ハ本館正規ノ規則ニ準ジテ之ヲ行フ。

但貸出圖書ハ本館ノ作成セル圖書目録ニ從ヒ貸出返入共ニ各部科派遣教授ヲ通シテ之ヲ爲スモノトス。〔現場特別貸出規則ニ從フ〕

三、入隊退學休學等ノ理由ニ依リ退校スル場合ハ借出中ノ圖書ハ即時返入スルコトヲ要ス。

四、乙號ニ依ル閱覽ハ動員先ノ適當ナル場所ニ圖書ヲ保管シ作業ノ餘暇ヲ以テ之ヲ爲サシム。〔現場圖書閱覽規則ニ從フ〕

五、丙號ニ依ル閱覽ハ寮内ノ圖書室ニ於テナシ派遣教授ノ管理ノ下ニ之ヲ爲サシム。〔現場寮内閱覽規則ニ從フ〕

六、スベテ貸出ヲ受ケタル圖書ハ借出當人ノ責任ニ於テ之ヲ取扱フベシ、萬一紛失、汚損滅失等ノ事アル場合ハ本館ノ指示スル所ニ應ジテ辨償ヲ爲スベシ。

第二號 現場特別貸出規則

一、動員現場ニ於テ本館藏書ノ貸出ヲ行フ、貸出ハ本館ノ作成セル圖書目録ニ依ルモノトス。

二、貸出事務取扱ノ爲メ毎週若干圖書館職員出張ス、貸出ハ一時一冊トシ所定ノ用紙ニ之ヲ記入シ其部科派遣教授ニ提出シ該教授ヲ通ジテ現本ノ引渡ヲ受クルモノトス、返入ノ場合モ之ニ準ズルモノトス。

三、貸出期間ハ七日〔貸出返入共〕ニ限り其都度返入日ノ指示ヲ爲ス、返入ヲ怠リタル場合ハ爾後貸出ヲ停止スルコトアルベシ。

四、本規則ハ移動図書館貸出規程ノ細則トシテ之ヲ定ム。

第三號 現場圖書閱覽規則

一、動員現場ニ本館所藏ノ圖書ヲ保管シ動員勤務中ノ職員及學生ノ閱覽ニ供ス。

二、圖書ヲ閱覽セントスル者ハ所定ノ手續ニヨリ借出及返入ヲ爲スヘシ、但一時ニ借出シ得ベキ冊数ニ一冊トス。

三、閱覽事務ハ毎日午前八時ニ始メ午後五時ニ終了ス、借出シタル圖書ハ必ズ當日午後五時迄ニ返入スベシ。

四、借出シタル圖書ハ責任ヲ似テ之ヲ返入スベシ、他人ニ轉貸スルコトヲ得ズ。

五、圖書ヲ汚損、破毀、紛失シタルトキハ相當ノ辨償ヲ求ム。

第四號 現場寮内閲覧規則

- 一、動員現場寮内ニ本館所藏ノ圖書ヲ保管シ動員在寮中ノ職員及學生ノ閲覧ニ供ス。
- 二、寮内閲覧ハ派遣教授ノ管理ノ下ニ之ヲ爲サシム、閲覧手續ハ該教授ノ指示スル所ニ從フモノトス。
- 三、借出シタル圖書ヲ汚損紛失、又ハ破毀シタルトキハ相当ノ辨償ヲ求ム。

⑨共同研究室圖書分置規程（昭和 28 年 2 月）

共同研究室圖書分置規程

- 一、共同研究室に分置する圖書及雑誌は當該学科の研究に直接必要なる基本的なるものに限り、本館における一般の閲覧を妨げない範囲のものとする。
- 二、共同研究室において圖書雑誌を閲覧し得る者は、各学部教職にある者及大学院学生とする。但圖書館において其都度『入室許可証』の交付をうけたる者は入室するを得。
- 三、共同研究室に分置してある本館所属の圖書雑誌は帶出することを得ない。但帶出を必要とする場合は一旦圖書館に返入の手續をとり然る後帶出をすることが出来る。而して用済の後には再び共同研究室に返置すべきものとする。
- 四、共同研究室の圖書雑誌が所在不明になりたる場合は當該部長において責任を負うものとする。本館は年二回（七月、十二月）に於て分置したる圖書雑誌の検査を行うものとする。
- 五、分置圖書雑誌は館長において必要と認める場合は返入を求めることが出来る。
- 六、共同研究室は當該部長の委嘱する学部助手（又は助手補）が其の管理に當るものであつて、毎日一定時間入室して執務するものとする。
- 七、共同研究室に備付ける圖書及雑誌は本館において室毎に區別して目録カードを備付けておく、但當該学部が正規圖書費以外の方法を以て入手したものも便宜上前の如く目録カードに記載することゝする。

⑩-1 図書館規定（昭和37年4月1日施行）

図 書 館 規 定

昭和37年4月1日
大学評議会決定

第1章 総 則

第1条 本館は関西学院大学図書館と称する。

第2条 本館は広く内外古今の図書及び資料を蒐集・保管して本学の教職員、学生及び特に館長の許可を得たる者の閲覧に供する。

第3条 本館の図書及び資料を管理上これを分けて次の6種とする。

- 1 一般図書
- 2 特別図書
辞書類、年鑑、図表、叢書全集及び教授上の必要による指定図書
- 3 貴重図書
特殊文庫を含む
- 4 新聞・雑誌等定期刊行物並びに小冊子類
- 5 開架室備付図書
- 6 共同研究室への分置図書
第6項については別に規定を設ける。

第4条 本館は休日を除き下記の時間に開閉する。

- | | | |
|--------|---|---------|
| 自2月1日 | } | 午前8時半開館 |
| 至11月末日 | | 午後5時 閉館 |
| 自12月1日 | } | 午前8時半開館 |
| 至1月末日 | | 午後4時半閉館 |

但し土曜日は午後2時までとし、臨時の閉館時間の延長はその都度これを定める。

第5条 本館の休日を次の通りとする。

- | | |
|------------|--------------|
| 1 国家の定めた祝日 | 2 日曜日 |
| 3 本学院創立記念日 | 4 冬季休暇中の一定期間 |

但し図書の点検その他の必要による時間の短縮または臨時閉館はその都度これを掲示する。

第6条 本館備付の図書及び資料を閲覧または帯出し得るものは閲覧証を有する者に限る。

第7条 閲覧証は次の者に対し請求があったときこれを交付する。

- 1 本学の教職員
- 2 本学学生
- 3 特に館長の許可を得たもの

第2項の者には入学直後所属学部長の報告によりこれを交付する。

第8条 閲覧証の有効期間を次の通りとする。

本学の教職員 在 職 中

本学学生 在 学 中

特に館長の許可を得たもの その他

第9条 閲覧証は他人に貸与してはならない。

第10条 閲覧証を紛失したときは1週間以内に届出でなければならない。これを怠ることによって生じる事故は名義人の責任とする。再交付は所定の手数料の納入を要し1週間後にこれを交付する。

第11条 本館は毎年1回その管理する図書の点検を行なうものとする。

このため館長は貸出を一時停止し、または貸出中の図書の返還を求めることがある。

第12条 図書及び資料を汚損または紛失したときは、その理由を具し館長に届出ると共に現品またはこれに相当する代金の弁償をなすべきものとする。弁償の終わらない間は本館の利用を禁ずることがある。

第13条 登館者は次の事項を遵守しなければならない。

- 1 静粛を保ち容儀を正しくすること
- 2 図書は大切に取扱い、書き入れ、汚損せざるよう注意すること
- 3 机、椅子その他の備品を妄に移動または汚損しないこと
- 4 閲覧に直接必要のない物品を大量に携帯しないこと
- 5 雑談、喫煙及び飲食等をしないこと

第14条 本館の諸規定または掲示に違背し、または不都合な行為があったときは図書の閲覧を停止し、その帯出を禁止することがある。

第15条 委託図書及び寄贈図書に関する事項は館長がこれを定める。

但し委託図書及び寄贈図書は本館蔵書と同様の管理をなすものとする。

第2章 閱 覧 規 定

第16条 図書及び資料を閲覧せんとするときは閲覧票に所定の事項を記入し閲覧証を添え係員に差出すものとする。

第17条 閲覧図書の冊数は一時に2冊以内とする。以後本規定に於て図書の冊数は洋装本につきこれを定め、和漢装本は5冊を以て洋装本1冊に当てるものとする。

第18条 閲覧雑誌は一時に新刊既刊を合わせて2種以内とする。

第19条 本館の書庫内に入り図書及び資料の検索をなし得るものは、本学の専任教職員、大学院学生及び特に館長の許可を得たものとする。

第20条 専任教職員、大学院学生及び特に館長の許可を得たものに対しては入庫証を交付する。入庫証の有効期間は大学院学生は在学中、特に館長の許可を得たものはその都度とする。

入庫証は他人に貸与してはならない。

第21条 書庫内に入り図書及び資料を検索せんとするものは次の事項を遵守しなければならない。

- 1 入庫証は必ず係員にこれを提出すること
- 2 図書または他の物品を携帯のまま入庫しないこと
- 3 図書の配列順序を乱さないよう注意すること
- 4 図書を書庫外に持ち出す場合は必ず別項の手続を経ること
- 5 貴重図書並びに寄贈図書は館員立合の上検索すること

第22条 閲覧中の図書及び資料は所定の閲覧室以外に持ち出すことができない。

第23条 退館または途中外出するときは閲覧中の図書及び雑誌の全部を一応返却するものとする。

第24条 貴重図書並びに特別図書は指定の場所に於て閲覧するものとする。

第3章 帯出規定

第1節 総 則

第25条 本学の教職員、学生、及び特に館長の許可を得たものは、別記の規定により一般図書を帯出することができる。

第26条 貴重図書及び特別図書は帯出することができない。

但し特別の事情があるときは館長の裁量により特に帯出を許可することがある。

第27条 開架室備付図書は特別図書を除き一人につき1冊、期間は3日以内に於て帯出することができる。

但し休暇中に於ける帯出期間はその都度揭示する。

第28条 新着図書は1ヵ月間帯出を許さない。但し特別の事情があるときは館長の裁量により特に帯出を許可することがある。

第29条 帯出希望の図書が貸出中であるときその返却があり次第特に通知ありたき旨を申出ることができる。

本館はこの予約に応じ通知後3日間これを保留する。

第30条 帯出期間後引き続き帯出を希望するときは他に閲覧申込のない場合に限り図書持参の上所定の手続を経て継続することができる。

第31条 帯出中の図書及び雑誌はこれを転貸することができない。

第32条 館長に於て必要と認める場合には帯出図書の種類冊数及び期間を制限しまた期間内と雖も返納を求めることがある。

第2節 教職員帯出規定

第33条 教職員が帯出することのできる図書冊数を次の通りとする。

- | | |
|---------------|-------|
| 1 教授、助教授、専任講師 | 30冊以内 |
| 2 専任助手 | 10冊以内 |
| 3 専任職員 | 5冊以内 |

第34条 教職員が図書を帯出することのできる期間を次の通りとする。

- | | |
|---------------|-------|
| 1 教授、助教授、専任講師 | 6ヵ月以内 |
| 2 専任助手 | 2ヵ月以内 |
| 3 専任職員 | 1ヵ月以内 |

但し各学部に割当の図書費により購入の図書は、納入の際帯出希望があったとき最長1ヵ年間特に帯出することができる。

第35条 帯出図書は1ヵ月間経過後、他に要求があるとき返還の請求をなすことができる。

第36条 教授、助教授、専任講師は特に館長の許可を得て1学科目につき5冊以内を教授用参考書として1ヵ年間引続き帯出することができる。

第37条 教職員は下記に従い雑誌を帯出することができる。

- 1 新刊雑誌は2冊以内とし期間は午後3時より次の開館日の午前10時までとする。
- 2 既刊雑誌は2冊以内とし期間は1ヵ月以内とする。

第38条 教職員は特に必要ある場合には所属部長を経て館長に申請し、その許可を経て規定以上の冊数及び期間の帯出をなすことができる。

第3節 学生帯出規定

第39条 学生が帯出することのできる図書の冊数及び期間を次の通りとする。

- 1 学部学生は1人につき1冊とし期間は1週間以内とする。
- 2 大学院学生は1人につき5冊以内とし期間は2週間以内とする。

但し休暇中に於ける帯出期間はその都度揭示する。

第40条 図書を帯出せんとするときは帯出票に所定の事項を記入の上閲覧証を添え係員に差出すものとする。

第41条 館長は学生が特殊研究論文作成等のため指導教授を経て館長に所定の申請書を提出し、その許可を経たとき、規定以上の冊数及び期間の帯出を特に許可することがある。

第42条 学生には雑誌の帯出を行なわない。

但し次の場合に限り特に帯出することができる。

- 1 新刊雑誌は2冊以内とし、期間は閉館1時間前より帯出し、次の開館日の午前10時まで返納する場合
- 2 既刊雑誌は2冊以内期間は1週間以内とし、指導教授を経て所定の申請書を館長に提出し、その許可を経た場合

第43条 休学若しくは停学中の者には直ちにその貸出中の図書及び雑誌を返納せしめ且つこの期間図書の貸出を停止するものとする。

第44条 退学及び卒業したときは帯出中の図書及び資料並びに閲覧証を直ちに返還するものとする。

第4節 館長の許可を得たものの帯出規定

第45条 館長の許可を得たものが帯出することのできる図書の冊数は2冊以内とし、期間は1ヵ月以内とする。

- 附則 1 本規定の変更は図書館運営委員会の議を経て大学評議会に於て行なうものとする。
- 2 本規定運営上の細則は別に館長がこれを定めることが出来る。
- 3 大学以外の部課に属する教職員の閲覧並びに帯出は別に定めるところによる。
- 4 本規定は昭和37年4月1日より実施するものとする。

⑩-2 図書館規定（昭和41年4月1日施行）

図 書 館 規 定

昭和41年4月1日
大学評議会決定

第1章 総 則

第1条 本館は関西学院大学図書館と称する。

第2条 本館は広く内外古今の図書及び資料を蒐集・保管して本学の教職員、学生及び特に館長の許可を得たものの閲覧に供する。

第3条 本館の図書及び資料を管理上これを分けて次の6種とする。

- 1 一般図書
- 2 特別図書
辞書類、年鑑、図表、叢書全集及び教授上の必要による指定図書
- 3 貴重図書 特殊文庫を含む
- 4 新聞・雑誌等定期刊行物並びに小冊子類
- 5 開架式備付図書
- 6 共同研究室への分置図書

第6項については別に規定を設ける。

第4条 本館は休日を除き下記の時間に開閉する。

午前8時半開館 午後5時閉館

但し、土曜日は午後2時までとし、臨時の閉館時間の延長はその都度これを定める。

第5条 本館の休日を次の通りとする。

- 1 国民の祝日
- 2 日曜日
- 3 本学院創立記念日
- 4 冬季休業中の一定期間

但し、図書の点検その他の必要による時間の短縮または臨時閉館はその都度これを掲示する。

第6条 本館備付の図書及び資料を閲覧または帯出し得るものは閲覧証を有するものに限る。

第7条 閲覧証は次のものに対し請求があったときこれを交付する。

- 1 本学の教職員
- 2 本学の学生
- 3 特に館長の許可を得たもの

第2項のものには入学後所属の学部長の報告によりこれを交付する。

第8条 閲覧証の有効期間を次の通りとする。

| | |
|--------------|------|
| 本学の教職員 | 在職中 |
| 本学の学生 | 在学中 |
| 特に館長の許可を得たもの | その都度 |

第9条 閲覧証は他人に貸与してはならない。

第10条 閲覧証を紛失したときは1週間以内に届け出なければならない。これを怠ることによって生じた事故は名義人の責任とする。再交付は所定の手数料の納入を要し1週間後にこれを交付する。

第11条 本館は毎年1回その管理する図書の点検を行なうものとする。

このため館長は貸出を一時停止し、または貸出中の図書の返却を求めることがある。

第12条 図書及び資料を汚損または紛失したときは、その理由を具し館長に届け出ると共に現品またはこれに相当する代金の弁償をなすべきものとする。弁償の終わらない間は本館の利用を禁止することがある。

第13条 登館者は次の事項を遵守しなければならない。

- 1 静粛を保ち容儀を正しくすること
- 2 図書は大切に取扱い、書き入れ、汚損しないよう注意すること
- 3 机、椅子その他の備品を恣に移動または汚損しないこと
- 4 閲覧に直接必要のない物品を大量に携帯しないこと
- 5 雑談、喫煙及び飲食等をしないこと

第14条 本館の諸規定または掲示に違背し、または不都合な行為があったときは図書の閲覧を停止し、その帯出を禁止することがある。

第15条 委託図書及び寄贈図書に関する事項は館長がこれを定める。但し、委託図書及び寄贈図書は本館蔵書と同様の管理をするものとする。

第2章 閲 覧 規 定

第16条 図書及び資料を閲覧するときは閲覧票に所定の事項を記入し、閲覧証を添え係員に差出すものとする。

第17条 閲覧図書の冊数は一時に2冊以内とする。以下本規定に於て図書の冊数は洋装本につきこれを定め、和漢装本は5冊を以て洋装本1冊に当てるものとする。

第18条 閲覧雑誌は同時に新刊・既刊を合わせて2種以内とする。

第19条 本館の書庫内に入り図書及び資料の検索をすることができるものは、教職員、大学院学生及び特に館長の許可を得たものとする。

第20条 教職員、大学院学生及び特に館長の許可を得たものに対しては入庫証を交付する。入庫証の有効期間は大学院学生は在学中、特に館長の許可を得たものはその都度とする。入庫証は他人に貸与してはならない。

第21条 書庫内に入り図書及び資料を検索するものは次の事項を遵守しなければならない。

- 1 入庫証は必ず係員にこれを提出すること
- 2 図書または他の物品を携帯のまま入庫しないこと
- 3 図書の配列順序を乱さないように注意すること
- 4 図書を書庫外に持ち出す場合は必ず別項の手続を経ること
- 5 貴重図書並びに特殊文庫は係員の立会の上検索すること

第22条 閲覧中の図書及び資料は所定の閲覧室以外に持ち出すことができない。

第23条 退館または途中外出するときは閲覧中の図書及び雑誌の全部を一応返却するものとする。

第24条 貴重図書並びに特殊文庫は指定の場所において閲覧するものとする。

第3章 帯出規定

第1節 総 則

第25条 教職員、学生、及び特に館長の許可を得たものは、別記の規定により一般図書を帯出することができる。

第26条 貴重図書並びに特殊文庫は帯出することができない。

但し、特別の事情があるときは館長の裁量により特に帯出を許可することがある。

第27条 開架室備付図書は特別図書を除き1人につき1冊、期間は1週間以内にて帯出することができる。

但し、休業中における帯出期間はその都度掲示する。

第28条 新着図書は1ヵ月間帯出を許さない。

但し、特別の事情があるときは館長の裁量により特に帯出を許可することがある。

第29条 帯出希望の図書が貸出中であるときその返却があり次第、特に通知ありたい旨を申出ることができる。

本館はこの予約に応じ通知後3日間これを保留する。

第30条 帯出期間後引き続き帯出を希望するときは他に閲覧申込のない場合に限り図書持参の上所定の手続を経て継続することができる。

第31条 帯出中の図書及び雑誌はこれを転貸することができない。

第32条 館長において必要と認めた場合には帯出図書の種類、冊数及び期間を制限し、また期間内と雖も返却を求めることがある。

第2節 教職員帯出規定

第33条 教職員が帯出することのできる図書の冊数及び期間を次の通りとする。

- 1 専任教員 30冊以内 6ヵ月以内
- 2 専任職員 5冊以内 1ヵ月以内

但し、各学部で割当の図書費により購入の図書は、納入の際帯出希望があったとき最長1ヵ年間特に帯出することができる。

第34条 帯出図書は1ヵ月間経過後、他に要求があるとき返却の請求をなすことができる。

第35条 専任教員は特に館長の許可を得て1科目につき5冊以内を教授用参考書として1ヵ年引続き帯出することができる。

第36条 教職員は下記に従い雑誌を帯出することができる。

- 1 新刊雑誌は2冊以内とし、期間は午後3時より次の開館日の午前10時までとする。
- 2 既刊雑誌は2冊以内とし、期間は1ヵ月以内とする。

第37条 教職員は特に必要ある場合には所属部長を経て館長に申請し、その許可を経て規定以上の冊数及び期間の帯出をすることができる。

第38条 名誉教授については教授に関する規定を準用する。

第3節 学生帯出規定

第39条 学生が帯出することのできる図書の冊数及び期間を次の通りとする。

- 1 学部学生は1人につき1冊とし、期間は1週間以内とする。
- 2 大学院学生は1人につき5冊以内とし、期間は2週間以内とする。

但し、休業中における帯出期間はその都度掲示する。

第40条 図書を帯出するときは帯出票に所定の事項を記入の上閲覧証を添え係員に差し出すものとする。

第41条 学生は館長の許可を得て研究演習等のため規定以上の冊数及び期間の帯出をすることができる。

第42条 学生には雑誌の帯出を行なわない。

但し、次の場合に限り特に帯出することができる。

- 1 新刊雑誌は2冊以内とし、期間は閉館1時間前より帯出し、次の開館日の午前10時までに返納する場合
- 2 既刊雑誌は2冊以内、期間は1週間以内とし、研究演習等のため館長の許可を得た場合

第43条 休学若しくは停学中の者には直ちにその貸出中の図書及び雑誌を返却させ、且つこの期間図書の帯出を停止するものとする。

第44条 退学及び卒業したときは帯出中の図書及び資料並びに閲覧証を直ちに返却するものとする。

第4節 館長の許可を得たものの帯出規定

第45条 館長の許可を得たものが帯出することのできる図書の冊数は2冊以内とし、期間は1ヵ月以内とする。

- 附則
- 1 本規定の変更は図書館運営委員会の議を経て大学評議会において行なうものとする。
 - 2 本規定運営上の細則は別に館長がこれを定めることができる。
 - 3 大学以外の部課に属する教職員の閲覧並びに帯出は別に定めるところによる。
 - 4 館長は本規定にもとづき本学以外の図書館と相互利用に関する細則を定めることができる。
 - 5 本規定は昭和41年4月1日より実施するものとする。

⑪-1 図書館視聴覚室専門委員会規定（昭和 49 年 2 月 8 日施行）

図書館視聴覚室専門委員会規定

昭和49年 2 月 8 日

大学評議会決定

（目 的）

第 1 条 大学の教育・研究の充実をはかるため、図書館に図書館視聴覚室を置く。

（委員会）

第 2 条 図書館視聴覚室の運営を円滑に行なうため、図書館運営委員会のもとに図書館視聴覚室専門委員会（「委員会」という）を置く。

（構 成）

第 3 条 本委員会は次の構成員で組織する。

1）図書館長

2）総合教育研究室評議員会の推薦を経て学長が任命した教員若干名。

（任 期）

第 4 条 委員の任期は次の通りとする。

1）前条第 1 号の委員の任期はその在職期間中とする。

2）前条第 2 号の委員の任期は 2 年（4 月 1 日～翌々年 3 月 31 日）とする。ただし重任を妨げない。

（運 営）

第 5 条 本委員会は図書館長が招集しその議長となる。

（開 催）

第 6 条 本委員会は原則として毎月 1 回これを開催する。

（審議事項）

第 7 条 本委員会は次の事項について審議する。

1）図書館視聴覚室の運営に関する事項。

2）視聴覚教材の内容に関する事項。

3）視聴覚教材費の予算に関する事項。

4）その他図書館長が諮問する事項。

（定足数）

第 8 条 本委員会は委員の過半数の出席をもって成立する。

（その他）

第 9 条 本委員会が必要と認めた場合は第 3 条に規定する構成員以外の者を出席させることができる。

（規定の改廃）

第10条 本規定の改廃は、図書館運営委員会の議を経て大学評議会の承認を得なければならない。

付則 本規定は昭和 49 年 2 月 8 日より施行する。

⑪-2 大学図書館視聴覚室専門委員会規程（昭和 51 年 1 月 9 日改正施行）

大学図書館視聴覚室専門委員会規程

（昭和 49 年 2 月 8 日 大学評議会決定）

（目 的）

第 1 条 大学の教育・研究の充実をはかるため、大学図書館（以下「図書館」という）に視聴覚室を置く。

（委員会）

第 2 条 視聴覚室の運営を円滑に行うため、図書館運営委員会のもとに図書館視聴覚室専門委員会（以下「委員会」という）を置く。

（構 成）

第 3 条 本委員会は次の構成員で組織する。

- 1 図書館長
- 2 図書館長が推薦し、学長が任命した若干名の教員
- 3 総合教育研究室が推薦し、学長が任命した 1 名の教員

（任 期）

第 4 条 委員の任期は次のとおりとする。

- 1 前条第 1 号の委員の任期はその在任期間中とする。
- 2 前条第 2・3 号の委員の任期は 2 年（4 月 1 日～翌々年 3 月 31 日）とする。
ただし再任は妨げない。

（運 営）

第 5 条 本委員会は図書館長が招集し、その議長となる。

（開 催）

第 6 条 本委員会は原則として毎月 1 回これを開催する。

（審議事項）

第 7 条 本委員会は次の事項について審議する。

- 1 図書館視聴覚室の運営に関する事項
- 2 視聴覚教材の内容に関する事項
- 3 視聴覚教材費の予算に関する事項
- 4 その他図書館長が諮問する事項

（定足数）

第 8 条 本委員会は委員の過半数の出席をもって成立する。

（その他）

第 9 条 本委員会が必要と認めた場合は第 3 条に規定する構成員以外の者を出席させることができる。

（規程の改廃）

第 10 条 この規程の改廃は図書館運営委員会の議を経て、大学評議会の承認を得なければ

ばならない。

附 則

- 1 この規程は、昭和 49 年 2 月 8 日から施行する。
- 2 この規程は、昭和 50 年 5 月 6 日から改正施行する。
- 3 この規程は、昭和 51 年 1 月 9 日から改正施行する。

⑪-3 大学図書館視聴覚室専門委員会規程（昭和 58 年 10 月 1 日改正施行）

大学図書館視聴覚室専門委員会規程

（昭和 49 年 2 月 8 日 大学評議会決定）

（目 的）

第 1 条 大学の教育・研究の充実をはかるため、大学図書館（以下「図書館」という。）に視聴覚室を置く。

（委員会）

第 2 条 視聴覚室の運営を円滑に行うため、図書館運営委員会のもとに図書館視聴覚室専門委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（構 成）

第 3 条 本委員会は次の構成員で組織する。

- 1 図書館長
- 2 図書館長が推薦し、学長が任命した若干名の教員
- 3 総合教育研究室が推薦し、学長が任命した 1 名の教員
- 4 図書館副館長
- 5 図書館事務部長

（任 期）

第 4 条 委員の任期は次のとおりとする。

- 1 前条第 1・4・5 号の委員の任期はその在任期間中とする。
- 2 前条第 2・3 号の委員の任期は 2 年（4 月 1 日～翌々年 3 月 31 日）とする。
ただし、再任は妨げない。

（運 営）

第 5 条 本委員会は図書館長が招集し、その議長となる。

（開 催）

第 6 条 本委員会は原則として毎月 1 回これを開催する。

（審議事項）

第 7 条 本委員会は次の事項について審議する。

- 1 図書館視聴覚室の運営に関する事項

- 2 視聴覚教材の内容に関する事項
- 3 視聴覚教材費の予算に関する事項
- 4 その他図書館長が諮問する事項

(定足数)

第8条 本委員会は委員の過半数の出席をもって成立する。

(その他)

第9条 本委員会が必要と認めた場合は第3条に規定する構成員以外の者を出席させることができる。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は図書館運営委員会の議を経て、大学評議会の承認を得なければならない。

附 則

- 1 この規程は、昭和49年2月8日から施行する。
- 2 この規程は、昭和50年5月6日から改正施行する。
- 3 この規程は、昭和51年1月9日から改正施行する。
- 4 この規程は、昭和58年10月1日から改正施行する。

⑫図書館図書費海外持出しに関する了解事項（昭和48年6月15日）

図書館図書費海外持出しに関する了解事項

昭和48年6月15日

学 部 長 会 決 定

外地留学者（学院・補助・学院外の三者とも）の図書館図書費の海外への持出しが原則として認められた。したがって、その持出し手続きの概要を以下のように定める。

- 1 当該図書費の個人割当分の海外持出しの希望者は図書館運営課において「××年度図書費借入証」に所要事項を記入し、学部長の認印を受けて提出すれば、当該年度分は現金として受けとり、また、長期留学者の次年度分は別途送金することができる。
- 2 本図書費によって購入した書籍は直接図書館に送付し登録するものとする。
- 3 購入に際して、書店の Invoice と Receipt を必ず貰って置いて、なるべく当該年度内に図書館で精算するものとする。なお、書籍代及び送料の外貨換算率は出国時換算率を適用する。
- 4 会計処理としては「前払い図書費」として仮支出されるのでなるべく早く精算する必要がある。
- 5 特別な事情のある場合は図書館長と話し合い適当な処理をする。

なお、学部割当の個人図書費についても上記と同様に取扱うこととする。

⑬-1 視聴覚資料利用規程（昭和 51 年 4 月 1 日施行）

視聴覚資料利用規程

（昭和 51 年 3 月 10 日 大学図書館運営委員会決定）

1 総 則

第 1 条 視聴覚室はこの規程に定める条項のほか「大学図書館利用規程（総則の項）」に準拠して運営する。

第 2 条 視聴覚室備付の資料（以下「資料」という）を次のとおりに分けて運用する。

1 カセット・テープ

2 スライド

第 3 条 視聴覚室は原則として午前 9 時に開室し、午後 5 時に閉室する。ただし、土曜日は正午までとする。

2 臨時の開室時間の変更は掲示をもって公示する。

3 視聴覚室はその管理する機器、資料の点検を行うため毎月最終土曜日は閉室する。

第 4 条 資料を利用する者は次の事項に留意しなければならない。

1 機器、資料は大切に取扱い、特にカセット・テープの録音内容の消去及び切断をしないよう注意すること

2 他のカセット・テープへの録音（複製）はしないこと

3 手持のカセット・テープ、スライドを視聴覚室へ持ち込まないこと

2 室内利用

第 5 条 資料を利用するときは閲覧証を提示しなければならない。なお、資料数は 1 点とし、利用時間は 1 点につき 1 講時以内とする。ただし、利用状況により時間を短縮することがある。

第 6 条 利用中の資料は視聴覚室外に持ち出すことができない。

3 帯 出

第 7 条 資料を帯出するときは閲覧証を提示しなければならない。

2 帯出手続きは名義人が行うものとする。

第 8 条 帯出することのできる資料はカセット・テープのみとする。ただし、教員が各学部割当の図書館図書費で購入した資料及び特別の事情により特に図書館長が許可した資料はこの限りでない。

第 9 条 資料は 2 点を限度とし、1 週間以内帯出することができる。また、資料に付属するテキストも同時に帯出することができる。

2 教員が各学部割当の図書館図書費で購入した資料（スライドを含む）は納入の際、貸出の希望があるとき、特に 1 カ年間継続して帯出することができる。

第10条 図書館長は必要と認めた場合、貸出しする資料の種類、点数及び期間を制限し、また、期間内でも返却を求めることができる。

第11条 帯出期間終了後も引き続き帯出を希望するときは、他に利用の申込みのない場合のみ、1回に限り所定の手続きを経て継続して帯出することができる。

第12条 帯出を希望する資料が貸出中であるときは、返却予定日に合わせて予約をすることができる。

2 返却された資料は予約者のために3日間保留する。

第13条 休暇中の貸出資料の点数及び期間の変更は掲示をもって公示する。

4 規程の改廃

第14条 この規程の改廃は図書館視聴覚室専門委員会の議を経て、図書館運営委員会が決定する。

附 則

この規程は、昭和51年4月1日から施行する。

⑬-2 視聴覚資料利用規程（昭和55年4月1日改正施行）

視聴覚資料利用規程

（昭和51年3月10日 大学図書館運営委員会決定）

1 総 則

第1条 視聴覚室はこの規程に定める条項のほか「大学図書館利用規程（総則及び附則の項）」に準拠して運営する。

第2条 視聴覚室備付の資料（以下「資料」という。）を次のとおりに分けて運用する。

- 1 カセット・テープ
- 2 オープンリール・テープ
- 3 ビデオ・テープ
- 4 レコード
- 5 スライド

第3条 視聴覚室はその管理する機器、資料の点検を行うため毎月最終土曜日は閉室する。

第4条 視聴覚室を利用する者は、機器、資料は大切に取扱わなければならない。

2 室内利用

第5条 視聴覚室を利用するときは閲覧証を提示しなければならない。なお、資料数は1点とし、利用時間は1点につき1講時以内とする。ただし、利用状況により時間を短縮することがある。

3 帯 出

第6条 資料を帯出するときは閲覧証を提示しなければならない。

2 帯出手続きは名義人が行うものとする。

第7条 帯出することのできる資料はカセット・テープ、オープンリール・テープ、レコードとする。ただし、教員が各学部割当の図書館図書費で購入した資料及び特別の事情により特に図書館長が許可した資料はこの限りでない。

第8条 資料は3点を限度とし、1週間以内帯出することができる。また、資料に付属するテキストも同時に帯出することができる。

2 教員が各学部割当の図書館図書費で購入した資料は納入の際、貸出の希望があるとき、特に1年間継続して帯出することができる。

第9条 図書館長は必要と認めた場合、貸出しする資料の種類、点数及び期間を制限し、また、期間内でも返却を求めることができる。

第10条 帯出期間終了後も引き続き帯出を希望するときは、当該の資料を持参し、所定の手続きを経て継続することができる。ただし、他に利用の申込みのある場合あるいは返却が遅れた場合は継続することができない。

第11条 帯出を希望する資料が貸出中であるときは、返却予定日に合せて予約をすることができる。

2 返却された資料は予約者のために3日間保留する。

第12条 休暇中の貸出資料の点数及び期間の変更は掲示をもって公示する。

4 規程の改廃

第13条 この規程の改廃は、図書館視聴覚室専門委員会の議を経て図書館運営委員会が決定する。

附 則

- 1 この規程は、昭和51年4月1日から施行する。
- 2 この規程は、昭和52年10月21日から改正施行する。
- 3 この規程は、昭和53年11月20日から改正施行する。
- 4 この規程は、昭和55年4月1日から改正施行する。

⑭特殊資料利用規程（昭和 51 年 11 月 19 日施行）

特殊資料利用規程

（昭和 51 年 11 月 19 日 大学図書館運営委員会決定）

第 1 条 特殊資料を利用する場合は、この規程に定める条項のほか、「大学図書館利用規程（総則の項）」を準用する。

第 2 条 特殊資料は、次のとおりに分けて運用する。

- 1 マイクロ・フィルム
 - 2 マイクロ・フィッシュ
 - 3 マイクロ・カード
 - 4 古文書
 - 5 記録類
 - 6 パンフレット
- 2 古文書及び記録類を利用する場合は「貴重図書・資料利用規程」を準用する。
- 3 パンフレットを利用する場合は「大学図書館利用規程」の雑誌等逐次刊行物に関する規定を準用する。

第 3 条 特殊資料は館外に帯出することはできない。ただし、図書館図書費のうち学部割当図書費で購入した特殊資料は、納入の際貸出しの希望があるとき、特に 1 ヶ年間継続して帯出することができる。なお、帯出手続きは本人が行うものとする。

第 4 条 特殊資料を利用するときは、閲覧証を呈示しなければならない。

- 2 特殊資料の利用の受付は、雑誌室にて行う。

第 5 条 マイクロ化した特殊資料を利用する者は、次の事項に留意しなければならない。

- 1 特殊資料を利用するための機器類の使用法を熟知すること。
- 2 特殊資料は慎重に取扱い、特に表面を汚損しないように注意すること。

第 6 条 この規程の改廃は、大学図書館運営委員会が決定する。

附 則

この規程は、昭和 51 年 11 月 19 日から施行する。

⑮視覚障害者読書室利用細則（暫定）（昭和 56 年 9 月 8 日施行）

視覚障害者読書室利用細則（暫定）

第 1 条 視覚障害者読書室は、対面朗読、録音等の使用に供する。

第 2 条 視覚障害者読書室運営は、閲覧課長のもと視聴覚室がする。

第 3 条 視覚障害者読書室備付の図書及び機器類は次のとおりとする。

1 点字図書

2 参考図書（辞書）

3 テーブルコーダー（マイクロフォン等の附属品を含む）

4 点字タイプライター

イ ライトブレイラー（日本製）

ロ パーキンスブレイラー（外国製）

ハ 片手打ちキーセット

5 オプタコン

第 4 条 視覚障害者読書室備付の機器類は原則として室外に帯出することはできない。

第 5 条 視覚障害者読書室の機器類の使用管理は視聴覚室において行う。

第 6 条 視覚障害者読書室の使用時間は午前 8 時 30 分から午後 6 時までとする。ただし、土曜日は午後 4 時までとする。

2 臨時の使用時間の変更及び授業のない期間（夏季、冬季、春季休暇中等）の使用時間はその都度連絡する。

附則

1. この細則の改廃は図書館長が決定する。

2. この細則は、昭和 56 年 9 月 8 日から施行する。

視覚障害者読書室の利用取扱いについて

1. 視覚障害者読書室の使用は予め届出のあった学生に限る。

2. 平日、午後 5 時以降 6 時まで及び土曜日正午以降午後 4 時までの視覚障害者読書室の使用受付は開架室において行う。

3. 視覚障害者読書室の使用スケジュールは予め図書館と利用者として調整する。

4. 視覚障害者読書室の鍵は視聴覚室、開架室、運営課、労務員室（計 4 本）に備付ける。

5. 大学教務部のボランティア打合せ会に図書館から出席することとする。（閲覧課長、担当者）

(2) 旧規程

①関西学院図書管理規定（昭和 46 年 4 月 1 日施行）

関西学院図書管理規定

（適用範囲）

第 1 条 図書および資料（以下図書という）ならびに委託図書、資料（以下委託図書という）の管理は、この規定の定めるところによる。

（図書の区分）

第 2 条 図書の区分は、別表Ⅰの区分表による。

（図書管理の原則）

第 3 条 図書は教育研究の成果をあげるため、全学的見地より容易に利用しうよう、合理的に整理保管するとともに、常に経済性に留意し、有効適切に運用しなければならない。

（用語）

第 4 条 この規定における用語は、それぞれ次の意義に用いる。

- (1) 委 託 — 個人または団体が、所蔵図書を一定期限または無期限で、利用に供するため、その保管および運用を管理単位に委任すること。
- (2) 受 入 — 図書を購入、譲受、受贈、交換、保管転換等により取得すること。
- (3) 保 管 転 換 — 各管理単位間において、図書の所管を変更すること。
- (4) 分冊・合冊 — 図書の一部を分離し、または複数の図書を合綴すること。
- (5) 改 良 — 既存の図書の機能を向上させて、その価格を増加させること。
- (6) 組 替 — 用途変更、雑誌製本等により、当該図書の区分表に定める区分を変更すること。
- (7) 払 出 — 別に定める図書払出基準にもとづき、固定資産として登録ずみの図書を合冊、組替、保管転換、亡失、破損、不用等の場合、当該管理台帳より除籍すること。

（総括管理）

第 5 条 図書館長は図書の管理および運用について、全学的な共通利用のために、各管理単位の連絡調整を行わなければならない。

（管理単位および管理責任者）

第 6 条 図書の各管理単位および管理責任者は別表Ⅱによる。

（図書利用規定）

第 7 条 各管理責任者は所蔵する図書の利用規定を定め、図書の適切な管理をはからなければならない。

（管理担当者）

第 8 条 各管理単位の管理責任者は、必要な管理担当者を定め、図書の管理にあたらし

めなければならない。

②各管理責任者は、図書館長に管理担当者を報告しなければならない。

(管理図書の記録)

第9条 各管理責任者は、所管図書記録のため管理台帳を整備するとともに、固定資産としての図書については、受入および払出の記録を図書館長に報告しなければならない。ただし、図書館長の許可を得て、全学的共通利用に供するため図書の整理を図書館に依頼するときは、報告を省略するものとする。

(委託図書の管理)

第10条 各管理責任者は、図書の委託の申出があるときは、これに応ずることができる。

②委託図書は、すべて管理単位の所蔵図書と同一の取扱いをする。

③委託図書は、所定の申請書に必要事項を記入し、管理責任者の承諾の後、現物を送付するものとする。

(日常管理)

第11条 管理担当者は、所管の図書について、次の各号により、日常管理を行ない、その直接の責に任ずる。

- (1) 管理担当者は、常に図書の出納保管の状況を明らかにしておかなければならない。
- (2) 管理担当者は、常に所管図書の盗難・亡失・破損等の事故防止上、必要と認める措置を講じなければならない。
- (3) 管理担当者は、所管図書の保管および利用状況につき、調査の記録をしなければならない。
- (4) 管理担当者は、前各号による日常業務につき、管理責任者に随時報告し、指示を受けなければならない。
- (5) 管理担当者は、別に定められた図書利用規定にもとづき業務を執行しなければならない。

(利用者の管理)

第12条 図書の利用者は第11条に準じて、利用図書の管理にあたらなければならない。

②図書の利用者は、その管理について、管理担当者の指示に従わなければならない。

(管理台帳)

第13条 図書の管理に使用する台帳は次の通りとする。

(1) 固 定 資 産

| 名 称 | 備付場所 |
|------------------|-------|
| 1. 図書原簿・逐次刊行物受入簿 | 各管理単位 |
| 2. 特殊資料原簿 | 〃 |
| 3. 視聴覚資料原簿 | 〃 |

(2) 物 品

物品管理台帳 各管理単位

(3) 委 託 図 書

委託図書管理台帳 各管理単位

(受 入)

第14条 図書を受入れたときは、管理担当者は管理台帳に登録するものとする。

(保管転換)

第15条 図書を保管転換したときは、管理担当者は管理台帳に受入または除籍の記録をしなければならない。

(分冊・合冊・改良・組替)

第16条 図書を分冊・合冊・改良または組替えしたときは、管理担当者はその旨管理台帳に記載しなければならない。

(亡失・破損)

第17条 所管図書について、亡失または修理困難な破損の事実を発見したときは、管理担当者はその旨管理責任者に報告しなければならない。

(払 出)

第18条 各管理責任者は、所管図書が亡失・破損・不用の理由により払出の必要を認めるときは、財務部長に申請しなければならない。ただし、払出については、別に定める図書払出基準によるものとする。

(委託図書の返還)

第19条 委託図書については、返還の申出があったときは、委託者に返還するとともに、管理担当者は委託図書管理台帳に、その旨記載しなければならない。

(現物調査)

第20条 管理担当者は毎年度1回以上、所管する図書の全部または一部について、現物の調査を行わなければならない。

(価 額)

第21条 図書の価額は受入価額とする。ただし、譲受によるものはその対価を、寄贈によるものはその評価価額をもって、それぞれ受入価額とする。

(付帯経費)

第22条 前条に定める受入価額の算定については、購入代価のほか、送料・運搬費・補修費その他受入に際し特に要した諸掛費を付帯経費として、含めるものとする。ただし、少額の費用は受入価額に含めないことができる。

②逐次刊行物を合冊製本し、固定資産として登録するときの価額には、製本費を含めないものとする。

付 則

本規定は、昭和46年4月1日より実施する。

経過措置 昭和 45 年度以前の各学部保有図書については、固定資産として計上するに相当と思われる図書は第 9 条に準じて図書館長に報告しなければならない。
なお図書館長に報告しない図書については管理責任者が善意の管理者の注意をもって管理することが望ましい。(46. 11. 2. 部長会承認)

別表Ⅰ 図書区分表

| | | |
|------|--|---|
| 固定資産 | 図 書 | |
| | 逐次刊行物 | |
| | 特殊資料 | パンフレット（研究資料として価値あるもの） マイクロフィルム マイクロフィッシュ マイクロカード 古 文 書 記 録 類 |
| | 視聴覚資料 | フィルム スライド レコード テープ・カセット 一枚物（地図等） 掛 図 博物資料 美術品 |
| 物品 | 必要数以上の複本（指定図書・学習図書等） 時期性の強い出版物 その他通俗的出版物 | |

別表Ⅱ 管理単位及び管理責任者

| 管理単位 | 管理責任者 | 管理単位 | 管理責任者 |
|---------|----------|------|-------|
| 図書館 | 図書館長 | 文学部 | 文学部長 |
| キリスト教主義 | キリスト教主義 | 社会学部 | 社会学部長 |
| 教育研究室 | 教育研究室長 | 法学部 | 法学部長 |
| 宗教センター | 宗教センター主事 | 経済学部 | 経済学部長 |
| 保健体育課 | 保健体育課長 | 商学部 | 商学部長 |
| 体育館 | 教務部長 | 理学部 | 理学部長 |
| 産業研究所 | 産業研究所長 | 高等部 | 高等部長 |
| 神学部 | 神学部長 | 中学部 | 中学部長 |

②総合図書館規程（昭和 50 年 7 月 10 日施行）

総合図書館規程

（昭和 50 年 7 月 10 日 理事会承認）

（目 的）

第 1 条 図書及び資料（以下「図書」という）を全学院的に管理・運営するため、学校法人関西学院に総合図書館を置く。

（構 成）

第 2 条 総合図書館は「関西学院図書管理規程」に定めた各管理単位をもって構成する。

（館長の任務）

第 3 条 総合図書館長は各管理単位の責任者と緊密な連絡をとり、各管理単位を統轄しその管理運営の任に当たる。

（実務担当者）

第 4 条 総合図書館は各管理単位の責任者が定めた管理担当者によって運営する。

（図書の利用）

第 5 条 総合図書館は次の方法で利用する。

- 1 総合図書館は各管理単位が定めた利用規程によって運営する
- 2 図書を利用するときは、学院の機関で発行する身分証明書を持参しなければならない
- 3 各管理単位で管理する図書のうち、大学図書館に登録した図書は大学図書館を経由して利用するものとする。ただし、「関西学院大学雑誌総合目録」に収録された雑誌類はすべて大学図書館を経由しなければならない
- 4 総合図書館として利用することのできる図書は各管理単位において、共通利用の目的で購入されたものに限る

（事務処理）

第 6 条 「関西学院図書管理規程」に定めた総合図書館に関する事務は大学図書館において行う。

（規程の改廃）

第 7 条 本規程の改廃は各管理単位の責任者の了解を得て理事会の承認を得なければならない。

附 則

この規程は、昭和 50 年 7 月 10 日から施行する。

③大学図書館運営委員会規定（昭和 49 年 6 月 7 日施行）

大学図書館運営委員会規定

（昭和 49 年 6 月 7 日 大学評議会決定）

（名 称）

第 1 条 図書館に大学図書館運営委員会（以下委員会という）を置く。

（目 的）

第 2 条 本委員会は大学図書館の運営について審議する。

（構 成）

第 3 条 本委員は次の構成員で組織する。

- 1) 大学図書館長
- 2) 各学部教授会が選出した各 1 名の委員
- 3) 大学長直属の教員より選出された委員 1 名

（任 期）

第 4 条 委員の任期は次の通りとする。

- 1) 前条第 1 号の委員の任期はその在職期間中とする。
- 2) 前条第 2・3 号の委員の任期は 1 年（4 月 1 日～翌年 3 月 31 日）とする。ただし重任は妨げない。

（運 営）

第 5 条 本委員会は大学図書館長が招集しその議長となる。

（開 催）

第 6 条 本委員会は原則として毎月 1 回これを開催する。

（審議事項）

第 7 条 本委員会は次の事項について審議する。

- 1) 事業計画及び予算並に決算に関する事項。
- 2) 図書館資料の収集、保管、運営に関する事項。
- 3) 図書館、部局図書館（室）間の連絡調整に関する事項。
- 4) その他大学図書館長が必要と認めた事項。

（議 決）

第 8 条 本委員会は委員の 3 分の 2 以上の出席をもつて成立し、出席者の過半数をもつて議決する。

（その他）

第 9 条 本委員会が必要と認めた場合は第 3 条に規定する構成員以外の者を出席させることができる。

（規定の改廃）

第 10 条 本規定の改廃は本委員会の議を経て大学評議会の承認を得なければならない。

付 則

本規定は昭和 49 年 6 月 7 日より施行する。

(了解事項)

大学図書館運営委員は学院図書館運営委員を兼ねるものとする。

④大学図書館規程（昭和 51 年 1 月 9 日施行）

大学図書館規程

（昭和 51 年 1 月 9 日 大学評議会決定）

第 1 条 本館は関西学院大学図書館（以下「図書館」という）と称する。

第 2 条 図書館は広く図書及び資料（以下「図書」という）を収集、保管して、本学の教職員、学生（委託生、聴講生及び特別学生を含む）、卒業生及び館長の許可を得た者の利用に供することを目的とする。

第 3 条 図書館に図書館運営委員会を置く。

2 図書館運営委員会の規程は別に定める。

第 4 条 図書館運営委員会のもとに図書館視聴覚室専門委員会を置く。

2 図書館視聴覚室専門委員会の規程は別に定める。

第 5 条 図書館は次の課をもって組織する。

1 運 営 課

2 整 理 課

3 閲 覧 課

第 6 条 図書館に次の教職員を置く。

館長 1 名、次長 1 名、課長 3 名、主任若干名、司書若干名、司書補若干名、書記若干名、書記補若干名、労務職員若干名

2 教職員の職務は「関西学院職制」による。

第 7 条 図書館が所蔵する図書は「関西学院図書管理規程」に準拠して管理する。

第 8 条 図書館が所蔵する図書は図書館備付図書と部局分置図書に分けて運用する。

2 図書館備付図書の利用規程は別に定める。

3 図書の分置に関する規程は別に定める。

4 分置図書は部局において、その所蔵する図書と同様の管理をするものとする。

第 9 条 図書館長は図書の点検に当たり貸出しを一時停止し、また、貸出中のものの返却を求めることができる。

第10条 図書館は原則として午前 8 時 30 分に開館し、午後 5 時に閉館する。ただし、

土曜日は正午までとする。

2 臨時の開館時間の変更は掲示をもって告示する。

第11条 図書館の休日は次のとおりとする。

1 日曜日

2 国家の定めた休日

3 学院創立記念日（9月28日）

4 降誕祭（12月25日）

5 夏季及び冬季休業中の一定期間

6 7月16日から9月7日までの土曜日

2 臨時の休日は掲示をもって告示する。

第12条 図書館を利用する者は諸規程及び図書館長の指示にしたがはなければならない。

第13条 この規程の改廃は図書館運営委員会の議を経て、大学評議会が決定する。

附 則

1 この規程は、昭和51年1月9日から施行する。

2 この規程の制定をもって現行の大学図書館規程は廃止する。

⑤大学図書館利用規程（昭和 51 年 1 月 9 日施行）

大学図書館利用規程

（昭和 51 年 1 月 9 日 大学評議会決定）

1 総 則

第 1 条 大学図書館（以下「図書館」という）を利用できる者は本学の教職員、学生（委託生、聴講生及び特別学生を含む）、卒業生及び館長の許可を得た者とする。

2 名誉教授は教員の規程を準用する。

第 2 条 図書館備付の図書及び資料（以下「図書」という）を次のとおりに分けて運用する。

- 1 出納式一般図書・資料
- 2 開架式一般図書・資料（指定図書を含む）
- 3 参考図書（辞書、事典、年鑑、地図、図表等）
- 4 雑誌等逐次刊行物
- 5 視聴覚資料
- 6 特殊資料
- 7 貴重図書・資料（特殊文庫を含む）
- 8 委託図書・資料

2 視聴覚資料、特殊資料及び貴重図書・資料の利用規程は別に定める。

3 委託図書・資料の利用については委託事情により図書館長が決定する。

第 3 条 図書館備付の図書を利用する者は閲覧証の交付を受けなければならない。

2 閲覧証は本人の請求により交付する。

3 閲覧証は他人に貸与してはならない。

第 4 条 閲覧証の有効期間は次のとおりとする。

- | | |
|-------------|--------------|
| 1 教職員 | 在職中 |
| 2 学 生 | 在学中 |
| 3 卒業生 | 1 ヶ年（満期毎に更新） |
| 4 館長の許可を得た者 | その都度 |

第 5 条 閲覧証を紛失したときは直ちに届け出なければならない。

2 閲覧証の紛失届を怠ることによって生じる事故は名義人の責任とする。

第 6 条 閲覧証の紛失のため再交付を受けるときは所定の手数料を納入しなければならない。

2 閲覧証の再交付は請求の日から 1 週間後にこれを交付する。

第 7 条 利用中の図書を汚損又は紛失したときは所定の手続きを経て現品又は相当額の代金をもって弁償しなければならない。

2 弁償の終わらない間は図書の利用を禁止することがある。

第 8 条 図書の冊数は洋装本を基準とし、和装本は 5 冊をもって洋装本 1 冊に当てるも

のとする。

2 閲 覧

第9条 図書を閲覧するときは閲覧証を提示しなければならない。なお、出納式の図書の閲覧を申込みときは一時に5冊以内とする。

第10条 閲覧を希望する図書が貸出中であるときはその返却予定日に合わせて予約をすることができる。

2 返却された図書は3日間保留する。

第11条 閉架書庫に入り図書の閲覧をすることができる者は教職員、大学院学生及び館長が必要と認めた者とする。

第12条 閉架書庫に入庫することができる者には入庫証を交付する。ただし、学生は閲覧証をもってこれに当てる。

2 入庫証は他人に貸与してはならない。

第13条 入庫証の有効期間は次のとおりとする。

- | | |
|--------------|------|
| 1 教職員 | 在職中 |
| 2 大学院学生 | 在学中 |
| 3 館長が必要と認めた者 | その都度 |

3 帯 出

(1) 総 則

第14条 図書を帯出するときは閲覧証を提示しなければならない。

2 帯出手続きは名義人が行うものとする。

第15条 帯出することのできる図書は次のとおりとする。

- 1 出納式一般図書・資料
- 2 開架式一般図書・資料
- 3 雑誌等逐次刊行物

第16条 新着図書は1ヵ月間帯出することはできない。ただし、特別の事情あるときは図書館長の裁量により特に帯出を許可することがある。

第17条 帯出期間終了後も引き続き帯出を希望するときは他に閲覧申込みのない場合に限り所定の手続きを経て継続して帯出することができる。

第18条 休暇中の貸出図書の冊数及び期間の変更は掲示をもって告示する。

第19条 図書館長は必要と認めた場合貸出しする図書の種類、冊数及び期間を制限し、また、期間内でも返却を求めることができる。

第20条 帯出中の図書は転貸することはできない。

(2) 教職員の帯出

第21条 教職員は出納式一般図書・資料を次のとおり帯出することができる。

- | | |
|------------|-------|
| 1 教員 30冊以内 | 6ヵ月以内 |
| 2 職員 5冊以内 | 1ヵ月以内 |

2 各学部割当の図書館図書費で購入した図書は納入の際、貸出しを希望したとき、特に1ヵ年間継続して帯出することができる。

3 第1項のほかに図書館長の許可を得て次のとおり帯出することができる。

1 教授用参考書 1科目につき 5冊以内 1ヵ年以内

2 業務用参考書 5冊以内 1ヵ年以内

第22条 教職員は開架式一般図書・資料を2冊を限度として、1週間以内帯出することができる。

第23条 教職員は雑誌等逐次刊行物を次のとおり帯出することができる。

1 新刊雑誌、既刊雑誌を問わず4冊以内とする。

2 新刊雑誌の帯出期間は1日（次の開館日）とする。

3 既刊雑誌の帯出期間は1週間以内とする。

第24条 教職員は特に必要のある場合には所属長を経て図書館長に申請し、その許可を得て規定以上の冊数及び期間の帯出をすることができる。

(3) 学生の帯出

第25条 学生は出納式一般図書・資料を次のとおり帯出することができる。

1 学部学生 3冊以内 2週間以内

2 大学院学生 5冊以内 1ヵ月以内

また、開架式一般図書・資料及び雑誌等逐次刊行物についてはそれぞれ第22条、第23条を準用する。

(4) 卒業生の帯出

第26条 卒業生は出納式一般図書・資料を2冊以内、1ヵ月以内にて帯出することができる。また、開架式一般図書・資料及び雑誌等逐次刊行物についてはそれぞれ第22条、第23条を準用する。

(5) 館長の許可を得た者の帯出

第27条 館長の許可を得た者は出納式一般図書・資料を2冊以内、1ヵ月以内にて帯出することができる。

4 規程の改廃

第28条 この規程の改廃は図書館運営委員会が決定する。

附 則

1 大学以外の部課に属する者の利用については別に定める。

2 図書館長はこの規程運営上の細則を別に定めることができる。

3 図書館長はこの規程に基づき本学以外の図書館と相互利用に関する細則を定めることができる。

4 この規程は、昭和51年1月9日から施行する。

⑥大学図書館分置図書規程（昭和 51 年 12 月 3 日施行）

大学図書館分置図書規程

（昭和 51 年 12 月 3 日 大学評議会決定）

第 1 条 大学図書館（以下「図書館」という）に登録された図書及び資料（以下「図書」という）で、総合図書館の各管理単位で管理、運用する図書を分置図書という。

第 2 条 図書の分置を希望するときは、所定の手続きを経て図書館長の許可を受けなければならない。ただし、図書館図書費のうち学部割当図書費で購入した図書及び研究資料費等部課の図書費で購入し、図書館に登録した図書は特に図書館長の許可を要しない。

第 3 条 分置図書は「大学図書館規程第 8 条」及び「関西学院図書管理規程」に準拠して管理するものとする。

第 4 条 分置図書の利用は「関西学院総合図書館規程」に準拠して行うものとする。

第 5 条 分置図書の払出（除籍）あるいは分置個所の変更等管理上の業務は、すべて図書館において行うものとする。

第 6 条 各管理単位において分置図書が不要になったときは、直ちに図書館に返還するものとする。

第 7 条 図書館長の許可を得て分置した図書は、図書館長が必要と認めたとき、返還を求めることができる。

第 8 条 各管理責任者は、分置図書を紛失又は汚損した場合、直ちに文書をもって図書館長に届出なければならない。

2 図書館長は、前項の図書について払出（除籍）の必要を認めたときは、財務部長に申請するものとする。

第 9 条 この規程の改廃は、図書館運営委員会の議を経て、大学評議会が決定する。

附 則

- 1 この規程の制定をもって昭和 44 年 1 月 1 日決定の「図書分置規定」（図書館運営委員会決定内規）は廃止する。
- 2 この規程は、昭和 51 年 12 月 3 日から施行する。

⑦貴重図書・資料利用規程（昭和 51 年 11 月 19 日施行）

貴重図書・資料利用規程

（昭和 51 年 11 月 19 日 大学図書館運営委員会決定）

第 1 条 貴重図書・資料を利用する場合は、この規程に定める条項のほか、「大学図書館利用規程（総則の項）」を準用する。

第 2 条 貴重図書・資料を利用する場合は、所定の閲覧願を大学図書館長に提出し、その許可を受けなければならない。

第 3 条 貴重図書・資料は、所定の場所で閲覧しなければならない。

第 4 条 貴重図書・資料を筆写するときは、鉛筆以外の筆記用具を使用してはならない。

第 5 条 貴重図書・資料の閲覧時間は、午前 9 時から午後 4 時までとする。ただし、土曜日は午前 11 時 30 分までとする。

第 6 条 貴重図書・資料を撮影又は複写する場合は、所定の許可願を大学図書館長に提出し、その許可を受けなければならない。また、原板は当館に寄贈するものとする。

第 7 条 貴重図書・資料の内容を著作物に引用する場合あるいは写真により掲載する場合は、大学図書館長の許可を受けなければならない。

第 8 条 貴重図書・資料を利用した著作物は、その一部を当館に寄贈するものとする。

第 9 条 この規程の改廃は、大学図書館運営委員会が決定する。

附 則

この規程は、昭和 51 年 11 月 19 日から施行する。

(3) 現行規程

①現行規程リスト

1. 規程

* 太字の規程は後掲

| 名称 | 決定機関 | 施行年月日 | 最新の改正施行年月日 |
|---|-------|-----------------------------|-----------------------------|
| 大学図書館長選任規程 | 理事会 | 1956(昭和 31)年 1 月 19 日施行 | 2005(平成 17)年 4 月 1 日改正施行 |
| 図書管理規程 | 理事会 | 1971(昭和 46)年 4 月 1 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| 図書払出基準 | 理事会 | 1971(昭和 46)年 4 月 1 日施行 | 1997(平成 9)年 4 月 1 日改正施行 |
| 総合図書館規程 | 理事会 | 1975(昭和 50)年 7 月 10 日施行 | 1997(平成 9)年 4 月 1 日改正施行 |
| 特別図書規程 | 理事会 | 1989(平成元)年 5 月 12 日施行 | 2004(平成 16)年 4 月 1 日改正施行 |
| 事務分掌規程 総合図書館 運営課 利用サービス課 神戸三田キャンパス事務室 | 常務委員会 | 1977(昭和 52)年 4 月 1 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| 大学図書館運営委員会規程 | 大学評議会 | 1974(昭和 49)年 6 月 7 日施行 | 2005(平成 17)年 4 月 1 日改正施行 |
| 大学図書館規程 | 大学評議会 | 1976(昭和 51)年 1 月 9 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| 大学図書館利用規程 | 大学評議会 | 1976(昭和 51)年 1 月 9 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| 大学図書館分置図書規程 | 大学評議会 | 1976(昭和 51)年 12 月 3 日施行 | 1998(平成 10)年 4 月 1 日改正施行 |
| 大学特別図書選定委員会規程 | 大学評議会 | 1989(平成元)年 5 月 12 日施行 | 2005(平成 17)年 4 月 1 日改正施行 |
| 大学図書館公開規程 | 大学評議会 | 1998(平成 10)年 4 月 1 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| 貴重図書・資料利用規程 | 運営委員会 | 1976(昭和 51)年 11 月 19 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| 古文書史料利用規程 | 運営委員会 | 1997(平成 9)年 10 月 1 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| 特別文庫及び準貴重図書・資料利用 規程 | 運営委員会 | 1997(平成 9)年 10 月 1 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| マイクロ資料利用規程 | 運営委員会 | 1997(平成 9)年 10 月 1 日施行 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日改正施行 |
| 和漢古書利用規程 | 運営委員会 | 2013(平成 25)年 4 月 1 日施行 | |

2. 内規、細則、要項等

| 名称 | 決定機関 | 施行年月日 | 最新の改正施行年月日 |
|--------------------------------------|---------|-------------------------|--------------------------|
| 大学特別図書選定委員会内規 | 大学評議会 | 1989(平成元)年 7月7日施行 | |
| 関西学院大学リポジトリ内規 | 研究推進委員会 | 2007(平成19)年 4月24日施行 | 2013(平成25)年 4月1日改正施行 |
| 研究基盤図書選定委員会内規 | 研究推進委員会 | 2007(平成19)年 6月19日施行 | 2013(平成25)年 4月1日改正施行 |
| 研究基盤図書選定に関する運用内規 | 研究推進委員会 | 2007(平成19)年 6月19日施行 | 2013(平成25)年 4月1日改正施行 |
| 大学図書館図書・資料選定内規 | 運営委員会 | 1997(平成9)年 10月1日施行 | 2011(平成23)年 4月1日改正施行 |
| 大学図書館施設・設備使用細則 | 運営委員会 | 1997(平成9)年 10月1日施行 | 2013(平成25)年 4月1日改正施行 |
| 貴重図書・資料取扱内規 | 館長室会 | 1997(平成9)年 10月1日施行 | |
| 古文書史料取扱内規 | 館長室会 | 1997(平成9)年 10月1日施行 | |
| 特別文庫取扱内規 | 館長室会 | 1997(平成9)年 10月1日施行 | |
| マイクロ資料取扱内規 | 館長室会 | 1997(平成9)年 10月1日施行 | |
| 大学図書館ホール使用に関する取扱要領 | 館長室会 | 1998(平成10)年 4月1日施行 | |
| 館長室会要項 | 館長室会 | 2010(平成22)年 10月25日施行 | |
| 業務連絡会要項 | 館長室会 | 2010(平成22)年 10月25日施行 | |
| 大学図書館エントランス使用に関する取り決め | 館長室会 | 2011(平成23)年 6月20日施行 | |
| 大学図書館防犯カメラ設置・運用に関する内規 | 館長室会 | 2011(平成23)年 9月26日施行 | 2012(平成24)年3 月26日改正施行 |
| 暴風警報発令および交通機関ストライキ等に伴う大学図書館の臨時閉館の取扱い | 館長室会 | 2012(平成24)年 4月1日施行 | |
| 貴重図書・準貴重図書の指定基準運用マニュアル | 館長室会 | 2012(平成24)年 6月18日施行 | |

②図書管理規程（2013年4月1日改正施行）

図書管理規程

（目 的）

第1条 この規程は、物件管理規程第1条にもとづき関西学院が所蔵する図書・資料（以下「図書」という。）の管理について必要な基準を定め、その適正な運用を図ることを目的とする。

（図書の管理）

第2条 図書及び委託図書・資料（以下「委託図書」という。）の管理は、この規程の定めるところによる。

（図書の区分）

第3条 図書の区分は、別表Ⅰの区分表による。

（総括管理）

第4条 総合図書館長は、図書の全学的な管理及び運用のために、管理単位を定め、連絡調整を行わなければならない。

（管理単位及び管理責任者）

第5条 図書の管理単位及び管理責任者は、別表Ⅱの区分表による。

（図書管理の原則）

第6条 管理責任者は、図書を全学的見地から容易に利用しうるよう、所管の図書について、次の各号の管理を行わなければならない。

- 1 必要な管理担当者を定め、図書の管理に当たらなければならない。
- 2 総合図書館長に管理担当者を報告しなければならない。
- 3 固定資産としての図書の管理のために図書台帳を作成し、維持、管理しなければならない。
- 4 固定資産としての図書については、受入及び払出を図書台帳に記録し、総合図書館長に報告しなければならない。
- 5 全学的共通利用のために図書の整理を大学図書館に依頼するときは、総合図書館長への報告を省略することができる。

（日常管理）

第7条 管理担当者は、所管の図書について、次の各号の管理を行わなければならない。

- 1 貸出、保管の状況の把握
- 2 盗難、亡失、破損等の事故防止上の措置
- 3 保管及び利用状況調査の記録
- 4 管理責任者への必要事項の報告

（受入・登録）

第8条 図書を購入、受贈、交換、保管転換等により取得することを受入という。

- 2 図書を受け入れたときは、管理担当者は蔵書印を押印し、登録番号を付して図

書台帳に登録しなければならない。

(保管転換)

第9条 保管転換とは管理単位間において、図書の所管を変更し、当該図書台帳に記録することをいう。

2 図書を保管転換した場合は、管理担当者は図書台帳に受入又は除籍の記録をしなければならない。

(分冊・合冊)

第10条 分冊・合冊とは図書の一部を分離し、又は複数の図書を合綴することをいう。

2 図書を分冊・合冊した場合は、管理担当者は、その旨図書台帳に記載しなければならない。

(組 替)

第11条 組替とは用途変更、雑誌製本等により、当該図書の区分表に定める区分を変更することをいう。

2 図書を組替したときは、管理担当者はその旨図書台帳に記載しなければならない。

(亡失・破損)

第12条 所管図書について、亡失又は破損の事実を発見した場合は、管理担当者はその旨管理責任者に報告しなければならない。

(払 出)

第13条 払出とは、固定資産として登録済の図書を保管転換、合冊、組替、亡失、破損、不用等により、図書台帳から除籍することをいう。

2 管理責任者は、所管図書が亡失・破損・不用の理由により払出の必要を認めた場合は、財務部長に申請しなければならない。ただし、払出については別に定める図書払出基準による。

(委託図書)

第14条 個人又は団体がその所蔵図書を一定期限又は無期限で、利用に供するため、その保管及び運用を管理単位に委託した図書を委託図書という。

2 委託図書の管理のために委託図書台帳を作成し、維持、管理しなければならない。

3 委託図書の管理は、管理単位の所管図書に準じた取扱いをする。

(価 額)

第15条 図書の価額は、受入価額とする。ただし、受贈によるものはその評価額を受入価額とする。

(付帯経費)

第16条 前条に定める受入価額の算定には、購入代価のほか、送料・運搬費補修費その他受入に要した諸掛費を、付帯経費として含める。ただし、少額の費用は、受入価額に含めないことができる。

2 逐次刊行物を合冊製本し、固定資産として登録するときの価額には、製本費を

含めない。

(現物調査)

第17条 管理担当者は、毎年度1回以上、所管する図書の全部又は一部について、現物の調査を行わなければならない。

(利 用)

第18条 管理責任者は、所管する図書の利用規則を定め、図書の適切な管理をはからなければならない。

2 管理担当者は、管理単位で別に定めた利用規則に基づき業務を執行しなければならない。

3 図書の利用者は、その利用について管理担当者の指示に従わなければならない。

(規程の改廃)

第19条 この規程の改廃は、常務委員会の議を経て、理事会で決定する。

附 則

- 1 この規程は、1971年（昭和46年）4月1日から施行する。
- 2 この規程は、1972年（昭和47年）7月13日から改正施行する。
- 3 この規程は、1975年（昭和50年）5月31日から改正施行する。
- 4 この規程は、1982年（昭和57年）12月9日から改正施行する。
- 5 この規程は、1983年（昭和58年）2月10日から改正施行する。
- 6 この規程は、1991年（平成3年）7月1日から改正施行する。
- 7 この規程は、1995年（平成7年）4月2日から改正施行する。
- 8 この規程は、1997年（平成9年）4月1日から改正施行する。
- 9 この規程は、1998年（平成10年）4月1日から改正施行する。
- 10 この規程は、1999年（平成11年）4月1日から改正施行する。
- 11 この規程は、2001年（平成13年）4月1日から改正施行する。
- 12 この規程は、2002年（平成14年）4月1日から改正施行する。
- 13 この規程は、2003年（平成15年）4月1日から改正施行する。
- 14 この規程は、2004年（平成16年）4月1日から改正施行する。
- 15 この規程は、2005年（平成17年）4月1日から改正施行する。
- 16 この規程は、2006年（平成18年）4月1日から改正施行する。
- 17 この規程は、2008年（平成20年）4月1日から改正施行する。
- 18 この規程は、2008年（平成20年）7月11日から改正施行する。
- 19 この規程は、2009年（平成21年）4月1日から改正施行する。
- 20 この規程は、2010年（平成22年）4月1日から改正施行する。
- 21 この規程は、2012年（平成24年）4月1日から改正施行する。
- 22 この規程は、2013年（平成25年）4月1日から改正施行する。

別表Ⅰ 図書区分表

| | 種類 | 対象範囲 |
|------|--------|--|
| 固定資産 | 図書 | 教育・研究・学習に必要とされる図書等 |
| | 逐次刊行物 | 学術雑誌、年鑑、年報、白書等 |
| | 電子情報資料 | CD-ROM、フロッピーディスク、磁気テープ等 |
| | マイクロ資料 | マイクロフィルム、マイクロフィッシュ等 |
| | 視聴覚資料 | カセットテープ、CD、LD、ビデオテープ等 |
| | 古文書 | 古文書史料等 |
| | 地図 | シート、ロール等 |
| | その他 | 絵画、掛図、美術品等を含む |
| 消耗図書 | | 上記の図書区分の内 消耗図書費で購入する図書 必要以上の複本（指定図書等） 時期性の強い出版物 その他通俗の出版物 資産化するのにふさわしくない図書（契約・加除等） |

別表Ⅱ 管理単位及び管理責任者

| 管理単位 | 管理責任者 | 管理単位 | 管理責任者 |
|----------------|-----------------|------------------|---------------------|
| 総合図書館 | 総合図書館長 | 商学部 | 商学部長 |
| 大学図書館 | 大学図書館長 | 理工学部 | 理工学部長 |
| 学長室 | 学長室長 | 総合政策学部 | 総合政策学部長 |
| 共通教育センター | 共通教育センター長 | 人間福祉学部 | 人間福祉学部長 |
| 教職教育研究センター | 教職教育研究センター長 | 教育学部 | 教育学部長 |
| 言語教育研究センター | 言語教育研究センター長 | 国際学部 | 国際学部長 |
| 産業研究所 | 産業研究所長 | 言語コミュニケーション文化研究科 | 言語コミュニケーション文化研究科委員長 |
| 高等教育推進センター | 高等教育推進センター長 | 司法研究科 | 司法研究科長 |
| 人権教育研究室 | 人権教育研究室長 | 経営戦略研究科 | 経営戦略研究科長 |
| キリスト教と文化研究センター | キリスト教と文化研究センター長 | 短期大学 | 短期大学学長 |
| 神学部 | 神学部長 | 高等部 | 高等部長 |
| 文学部 | 文学部長 | 中学部 | 中学部長 |
| 社会学部 | 社会学部長 | 初等部 | 初等部校長 |
| 法学部 | 法学部長 | 千里国際キャンパス事務室 | 千里国際キャンパス事務室長 |
| 経済学部 | 経済学部長 | | |

③総合図書館規程（1997 年 4 月 1 日改正施行）

総合図書館規程

昭和 50 年 7 月 10 日 理事会承認

（目 的）

第 1 条 図書及び資料（以下「図書」という。）を全学院的に管理・運営するため、学校法人関西学院に総合図書館を置く。

（構 成）

第 2 条 総合図書館は「関西学院図書管理規程」に定めた各管理単位をもって構成する。

（館長の任務）

第 3 条 総合図書館長は各管理単位の責任者と緊密な連絡をとり、各管理単位を統轄しその管理運営の任に当たる。

（運 営）

第 4 条 総合図書館の各管理単位の運営は、図書管理規程に定める管理担当者が行う。

（図書の利用）

第 5 条 総合図書館は次の方法で利用する。

- 1 総合図書館の利用は、各管理単位が定めた利用規則によって運営する。
- 2 総合図書館として利用することのできる図書は、各管理単位において共通利用の目的で購入されたものに限る。

（主管部課）

第 6 条 図書管理規程に定めた総合図書館に関する事務及びこの規程に関する事務は、大学図書館運営課が行う。

（規程の改廃）

第 7 条 本規程の改廃は各管理単位の責任者の了解を得て理事会の承認を得なければならない。

附 則

- 1 この規程は、1975 年（昭和 50 年）7 月 10 日から施行する。
- 2 この規程は、1997 年（平成 9 年）4 月 1 日から改正施行する。

④大学図書館運営委員会規程（2005 年 4 月 1 日改正施行）

大学図書館運営委員会規程

昭和49年 6 月 7 日

大学評議会決定

（趣 旨）

第1条 この規程は、大学図書館規程第8条に基づき、大学図書館運営委員会（以下「委員会」という）に関する必要事項について定める。

（目 的）

第2条 委員会は、大学図書館（以下「図書館」という。）の運営に関する基本的な事項を審議することを目的とする。

（構 成）

第3条 委員会は次の構成員で組織する。

- 1 図書館長
- 2 各学部教授会が選出した各1名の委員
- 3 独立研究科委員会が選出した1名の委員
- 4 専門職大学院各研究科教授会が選出した各1名の委員
- 5 学長直属の教員より選出された委員1名
- 6 図書館副館長
- 7 図書館事務部長
- 8 図書館次長

（任 期）

第4条 委員の任期は次のとおりとする。

- 1 前条第1、6、7及び8号の委員の任期はその在職期間中とする。
- 2 前条第2、3、4及び5号の委員の任期は1年（4月1日～翌年3月31日）とする。ただし、再任は妨げない。

（運 営）

第5条 委員会は、図書館長が招集し、その議長となる。

（開 催）

第6条 委員会は、原則として毎月1回これを開催する。

（審議事項）

第7条 委員会は、次の事項について審議する。

- 1 事業計画、予算及び決算に関する事項
- 2 図書・資料の収集、整理、保管及び提供に関する事項
- 3 図書館と各管理単位間の連絡調整に関する事項
- 4 利用サービスに関する事項
- 5 運営に関する諸規程の制定、改廃に関する事項

6 その他図書館長が必要と認めた事項

(議 決)

第8条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、出席者の過半数をもって議決する。なお、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(その他)

第9条 委員会が必要と認めた場合は第3条に規定する構成員以外の者を出席させることができる。

(主管部課)

第10条 この規程に関する事務は、運営課が行う。

(規程の改廃)

第11条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会で決定する。

附 則

- 1 この規程は、1974年（昭和49年）6月7日から施行する。
- 2 この規程は、1975年（昭和50年）5月6日から改正施行する。
- 3 この規程は、1983年（昭和58年）10月1日から改正施行する。
- 4 この規程は、1997年（平成9年）4月1日から改正施行する。
- 5 この規程は、2001年（平成13年）4月1日から改正施行する。
- 6 この規程は、2004年（平成16年）4月1日から改正施行する。
- 7 この規程は、2005年（平成17年）4月1日から改正施行する。

⑤大学図書館規程（2013 年 4 月 1 日改正施行）

大学図書館規程

昭和 51 年 1 月 9 日

大学評議会決定

（趣 旨）

第 1 条 この規程は、関西学院大学学則第 5 条に基づき、大学図書館（以下「図書館」という。）に関する基本的事項について定める。

（名 称）

第 2 条 図書館は、関西学院大学図書館と称する。

（目 的）

第 3 条 図書館は、教育・研究、学習に必要な図書・資料（以下「図書」という。）及びその他学術情報を収集、整理、保管、提供するとともに、利用環境の整備、利用ガイダンス等の諸活動を行い、利用者に資することを目的とする。

（分 室）

第 4 条 図書館に分室を設置する。

2 分室は、神戸三田キャンパスに置く。

（組 織）

第 5 条 図書館に次の 2 課を置く。

1 運営課

2 利用サービス課

（構成員）

第 6 条 図書館に館長、副館長、事務部長、次長、課長、課長補佐、事務職員（司書等専門的職員を含む）及びその他の職員を置く。

2 構成員の職務は、職制による。

（館長の選任）

第 7 条 館長の選任に関する事項は、大学図書館長選任規程に定める。

（運 営）

第 8 条 図書館の運営に関する基本的な事項を審議するために運営委員会を置く。

2 運営委員会に関する事項は、大学図書館運営委員会規程に定める。

（利用）

第 9 条 図書館の利用に関する事項は、大学図書館利用規程に定める。

（図書の管理）

第 10 条 図書館所蔵図書の管理に関する事項は、図書管理規程に準拠する。

（分置図書）

第 11 条 図書の分置に関する事項は、大学図書館分置図書規程に定める。

（図書の選定）

第12条 図書の選定に関する事項は、大学図書館図書・資料選定内規に定める。
(休館日)

第13条 図書館の休館日は、次のとおりとする。

- 1 日曜日（第4日曜日及び授業のない期間中の日曜日）
- 2 国民の祝日に関する法律に規定する休日
- 3 学院創立記念日（9月28日）
- 4 降誕祭（12月25日）
- 5 学則に定める夏季及び冬季休業日の一定期間
- 6 その他学院が臨時に定めた休日

(臨時開館日及び閉館日)

第14条 館長は、必要と認めた場合、臨時に開館日及び閉館日を定めることができる。
(開館時間)

第15条 図書館の開館時間は、次のとおりとする。

- 1 授業期間中の平日は、午前8時50分から午後10時まで、土曜日は、午前8時50分から午後6時30分まで、日曜日は、午後0時から午後6時まで
- 2 授業のない期間は、午前8時50分から午後6時まで
- 2 館長は、必要と認めた場合、臨時に開館時間を変更することができる。
- 3 カウンターサービス時間は、別に定める。

(主管部課)

第16条 この規程に関する事務は、図書館運営課が行う。

(規程の改廃)

第17条 この規程の改廃は、図書館運営委員会の議を経て、大学評議会で決定する。

附 則

- 1 この規程は、1976年（昭和51年）1月9日から施行する。
- 2 この規程の制定をもって現行の大学図書館規程は廃止する。
- 3 この規程は、1983年（昭和58年）10月1日から改正施行する。
- 4 この規程は、1985年（昭和60年）4月1日から改正施行する。
- 5 この規程は、1994年（平成6年）4月1日から改正施行する。
- 6 この規程は、1997年（平成9年）4月1日から改正施行する。
- 7 この規程は、2003年（平成15年）4月1日から改正施行する。
- 8 この規程は、2011年（平成23年）11月1日から改正施行する。
- 9 この規程は、2013年（平成25年）4月1日から改正施行する。

⑥大学図書館利用規程（2013年4月1日改正施行）

大学図書館利用規程

昭和51年1月9日

大学評議会決定

第1章 総則

（趣 旨）

第1条 この規程は、大学図書館規程第9条に基づき、大学図書館（以下「図書館」という。）の利用に関する必要事項を定める。

（利用者）

第2条 図書館を利用することができる者（以下「利用者」という。）は、次のとおりとする。

- 1 学部学生
 - 2 大学院学生
 - 3 教職員
 - 4 名誉教授及び定年退職教職員
 - 5 関西学院大学卒業生及び大学院修了生
 - 6 図書館間相互利用協定に基づく者
 - 7 大学図書館公開規程に定める者
 - 8 図書館長（以下「館長」という。）が許可した者
- 2 前項各号の範囲及び取扱については、別に定める。

（図書館カード）

第3条 利用者に入館、貸出手続等に必要な図書館カード（以下「カード」という。）を交付する。

- 2 カードは、他人に譲渡又は貸与してはならない。
- 3 カードは、名義人が使用するものとする。
- 4 カードは、図書館利用に際して常に携帯し、職員からの提示を求められた場合は、これに応じなければならない。
- 5 カードを紛失したときは、直ちに紛失届を図書館に提出しなければならない。ただし、紛失の届出を行わなかったことによる事故は名義人の責任とする。
- 6 カードの再交付を受けるときは、所定の手数料を納入しなければならない。
- 7 カードの有効期間は、次のとおりとする。
 - 1 学部学生、大学院学生 在籍中（学生証がカードを兼ねる）
 - 2 教職員 在職中（名誉教授及び定年退職者は終身）
 - 3 関西学院大学卒業生 1カ年（満期毎に更新ができる）
 - 4 大学図書館公開規程に定める者 登録期間
 - 5 館長が許可した者 館長が必要と認めた期間

8 利用者は、カードの有効期間が満了する場合及び利用者資格を失った場合は、直ちにカードを図書館に返却しなければならない。

9 カードの交付手続を必要とする利用者の取扱については別に定める。

(図書・資料の区分)

第4条 図書・資料（以下「図書」という。）の利用上の運用区分を次のとおり定める。

- 1 基本図書（教育・研究・学習に必要な学術図書）
- 2 参考図書（辞書、事典、書誌、索引、目録、地図等）
- 3 指定図書（教員が授業に関連して学部学生に必読を勧める図書）
- 4 ラウンジ図書（ラウンジ備え付けの時事性の強い教養的な図書）
- 5 逐次刊行物（学術雑誌、年鑑、年報、白書等）
- 6 特別文庫（全体として学術的、文化的価値が高い相当規模の図書群）
- 7 視聴覚資料（ビデオテープ、カセットテープ、CD、LD、スライド等）
- 8 古文書史料（過去の時代の史料となる学術的価値が高い文書及び記録）
- 9 マイクロ資料（マイクロフィルム、マイクロフィッシュ等）
- 10 電子資料（CD-ROM等の媒体に記録されている資料及びオンラインで接続して利用する資料）
- 11 貴重図書（貴重でかつ学術的価値が極めて高い図書）
- 12 準貴重図書（貴重図書に準じる図書）
- 13 和漢古書（原則として出版年が1868年までの和古書及び1912年までの漢籍）
- 14 その他

(図書の利用)

第5条 利用者は、前条に規定する図書を利用することができる。

- 2 指定図書の利用対象者は、学部学生とする。ただし、館長がその必要を認め許可する者は、利用することができる。
- 3 電子資料のうちオンラインと接続して利用する資料の利用対象者は、学生、大学院学生、および教職員とする。ただし、これらの対象者以外で資料の契約上利用可能な利用者については、館長がその必要を認めた場合、利用することができる。
- 4 特別文庫、古文書史料、マイクロ資料、貴重図書、準貴重図書及び和漢古書の取扱並びに利用に関する事項は、別に定める。

(施設及び設備の利用)

第6条 利用者は、図書館内の次の施設及び設備（以下「施設」という。）を利用することができる。

- 1 閲覧座席
- 2 グループ閲覧室
- 3 研究個室
- 4 パソコン室

- 5 視聴覚資料利用コーナー
 - 6 図書館ホール
 - 7 視覚障がい者読書室
 - 8 特別閲覧室
 - 9 地図コーナー
 - 10 複写室
 - 11 喫茶室
 - 12 休憩室
 - 13 ラウンジ
 - 14 パソコン（オンライン目録専用・電子資料検索専用・教育研究用）
 - 15 複写機
 - 16 その他使用許可されている施設
- 2 前項の施設のうち第2、3、5、6、7、8及び10号の使用目的、使用条件、手続、使用時間等については大学図書館施設・設備使用細則に定める。

（利用者の遵守事項）

第7条 利用者は、次の事項を遵守しなければならない。

- 1 諸規程及び職員の指示に従うこと
 - 2 図書及び施設を亡失、破損、汚損、又は変更しないこと
 - 3 指定された場所以外で飲食及び喫煙しないこと
 - 4 図書館内では静粛にすること
 - 5 許可無く展示や掲示をしないこと
 - 6 危険物の持ち込み及び使用をしないこと
 - 7 その他、他の利用者に迷惑をかけないこと
- 2 館長は、前項に著しく反する利用者の図書館利用を一定期間禁止することができる。

（利用者の責務）

第8条 前条第1項第2号に反した利用者は、現物又は相当額で弁償しなければならない。

第2章 貸出・返却

（貸出・返却）

第9条 利用者が図書の貸出を希望する場合は、所定の手続を行わなければならない。

- 2 貸出図書は、定められた期限までに返却しなければならない。
- 3 貸出図書は、転貸することはできない。

（館外貸出）

第10条 館外貸出できる図書は、基本図書、指定図書、ラウンジ図書（雑誌及び新聞を除く）並びに視聴覚資料（カセットテープ、語学CD及びそれに付属するテキストのみ）とする。

(貸出冊数及び期間)

第11条 貸出冊数及び期間は、次のとおりとする。

- 1 学部学生 10 冊以内 14 日以内
- 2 大学院学生 20 冊以内 60 日以内
- 3 教職員 教育・研究に必要な冊数 180 日以内
- 4 その他 別に定める
- 2 指定図書の貸出期間は、原則として7日以内とする。
- 3 視聴覚資料の貸出は、カセットテープ、語学 CD を合わせて3本以内、7日以内とする。
- 4 館長が必要と認めた場合、貸出図書の種類、冊数及び期間の制限をすることができる。また、期間内でも返却を求めることができる。
- 5 貸出図書の種類、冊数及び期間の変更は、掲示で周知する。

(罰則)

第12条 返却日を過ぎた図書を有する者は、該当図書の返却が終了するまでは、あらたな貸出を行うことができない。

(貸出予約)

第13条 利用を希望する図書が貸出中であるときは、所定の手続きを経て予約することができる。

(継続貸出)

第14条 貸出期間満了後も引き続き貸出を希望するときは、所定の手続きを経て継続することができる。ただし、当該図書について他に予約申込のある場合又は返却が遅れた場合は、継続することができない。

(機関貸出)

第15条 図書管理規程に定める管理単位の管理責任者が、当該管理単位の教員の研究に使用するため、学部割当の図書館図書費で新規に購入する図書の貸出を希望する場合は、所定の手続きを経て機関貸出を受けることができる。

- 2 前項に規定する貸出は、基本図書及び参考図書を対象とする。
- 3 機関貸出図書の貸出期間は、1年間とする。ただし、継続して利用を希望する場合は、所定の手続きを経て、2年間を限度に貸出期間を延長することができる(最長3年間の貸出可能)。

(公用貸出)

第16条 教職員が授業及び業務に使用するため、図書の公用貸出を希望するときは、図書館の運営に支障のない限り、館長はこれを認めることができる。

(リコール制度)

第17条 貸出日から1カ月以上が経過した図書について、借り出している利用者の同意が得られれば、他の利用者が一時的に利用申請を行うことができる。ただし、一時利用できる期間は14日間までとし、利用期間の延長を行うことはできない。

第3章 レファレンス等

(手続及び経費)

第18条 利用者は、レファレンスサービス、他大学図書館等と締結する協定に基づく相互利用サービス、情報検索サービス等のサービスを受けることができる。

- 2 前項のサービスを希望する場合は、所定の手続をしなければならない。
- 3 相互利用サービス、情報検索サービスに要する経費は、利用者の負担とする。
- 4 前項に規定する経費の範囲、徴収額、徴収方法等については、別に定める。

(レファレンスサービスの範囲)

第19条 レファレンスサービスの範囲は、原則として次のとおりとする。

- 1 図書館の利用案内及び利用指導
- 2 図書の所在調査
- 3 特定の主題、事項に関する調査
- 4 他図書館、専門的調査機関についての情報提供及び紹介
- 5 その他

(相互利用サービスの範囲)

第20条 相互利用サービスの範囲は、次のとおりとする。

- 1 図書の閲覧
- 2 図書の貸借
- 3 図書の複写

(購入希望図書)

第21条 学部学生及び大学院学生は、所定の手続を経て、利用したい図書の購入を図書館に希望することができる。

第4章 文献の複写

(文献の複写)

第22条 利用者は、所定の手続を経て、図書館所蔵の図書を著作権法の範囲内で、複写することができる。

- 2 館長は、図書の状態その他の事由により、複写を許可しない場合がある。
- 3 複写を希望する者は、図書の複写によって生じる著作権法上の問題についてその責任を負う。

第5章 補則

(公開による利用)

第23条 図書館公開による利用は、別に定める大学図書館公開規程による。

(分室の利用)

第24条 神戸三田キャンパス図書館分室の利用に関しては、原則としてこの規程を準用する。

(細 則)

第25条 館長は、この規程の運用上の細則を定めることができる。

(主管部課)

第26条 この規程に関する事務は、図書館利用サービス課が行う。

(規程の改廃)

第27条 この規程の改廃は、図書館運営委員会の議を経て、大学評議会で決定する。

附 則

- 1 この規程は、1976 年（昭和 51 年）1 月 9 日から施行する。
- 2 この規程は、1979 年（昭和 54 年）4 月 1 日から改正施行する。
- 3 この規程は、1979 年（昭和 54 年）6 月 1 日から改正施行する。
- 4 この規程は、1980 年（昭和 55 年）4 月 1 日から改正施行する。
- 5 この規程は、1984 年（昭和 59 年）4 月 1 日から改正施行する。
- 6 この規程は、1985 年（昭和 60 年）4 月 1 日から改正施行する。
- 7 この規程は、1987 年（昭和 62 年）4 月 1 日から改正施行する。
- 8 この規程は、1990 年（平成 2 年）4 月 1 日から改正施行する。
- 9 この規程は、1997 年（平成 9 年）10 月 1 日から改正施行する。
- 10 この規程は、2003 年（平成 15 年）4 月 1 日から改正施行する。
- 11 この規程は、2013 年（平成 25 年）4 月 1 日から改正施行する。

⑦大学図書館分置図書規程（1998年4月1日改正施行）

大学図書館分置図書規程

昭和51年12月3日
大学評議会決定

（趣 旨）

第1条 この規程は、大学図書館規程第11条に基づき、分置図書の管理及び運用について必要な事項を定める。

（分置図書）

第2条 大学図書館（以下「図書館」という。）に登録された図書・資料（以下「図書」という。）の中で、図書管理規程に定めた管理単位で管理及び運用する図書を分置図書という。

（分置手続）

第3条 管理単位で図書の分置を必要とする場合は、所定の手続を行い、大学図書館長（以下「館長」という。）の許可を受けなければならない。ただし、研究資料費等の図書費で購入し、図書館に登録した図書は、館長の許可を要しない。

（管 理）

第4条 分置図書は図書管理規程に準拠して管理する。

2 分置図書の払出（除籍）、管理単位の変更等管理上の業務は、図書館において行う。

（返 還）

第5条 管理単位で分置図書が不要になった場合は、直ちに図書館に返還しなければならない。

（亡失又は汚損）

第6条 管理責任者は、分置図書を亡失、破損又は汚損した場合には、直ちに文書で館長に届け出なければならない。

2 館長は、前項の図書について払出（除籍）の必要を認めた場合、財務部長に申請する。

（利 用）

第7条 分置図書の利用は、総合図書館規程第5条に基づき、管理単位が定めた利用規則による。

2 分置図書は、全学共通利用の対象とする。

（主管部課）

第8条 この規程に関する事務は、図書館運営課が行う。

（規程の改廃）

第9条 この規程の改廃は、図書館運営委員会の議を経て、大学評議会で行う。

附 則

- 1 この規程の制定をもって1969年（昭和44年）1月1日決定の「図書館分置規定」（図書館運営委員会決定内規）は廃止する。
- 2 この規程は、1976年（昭和51年）12月3日から施行する。
- 3 この規程は、1998年（平成10年）4月1日から改正施行する。

⑧貴重図書・資料利用規程（2013年4月1日改正施行）

貴重図書・資料利用規程

昭和51年11月19日
大学図書館運営委員会決定

（趣 旨）

第1条 この規程は、大学図書館利用規程第5条第3項に基づき、貴重図書・資料（以下「貴重図書」という。）の利用に関する必要事項を定める。

（利用者）

第2条 貴重図書の利用者は、大学図書館長（以下「館長」という。）の許可を受けた者とする。

（利用方法）

第3条 貴重図書の利用方法は、次のとおりとする。

- 1 閲覧
- 2 筆写
- 3 撮影

（掲載等手続）

第4条 貴重図書の内容を著作物に転載する場合、又は写真により掲載する場合は、所定の手続を行い、館長の許可を受けなければならない。

（利用窓口）

第5条 貴重図書の利用受付は、西宮上ヶ原キャンパス大学図書館レファレンスカウンターで行う。

（利用時間）

第6条 貴重図書の利用サービス時間は、別に定める。

（閲覧）

第7条 貴重図書は、特別閲覧室内で係員の立会いの上、閲覧しなければならない。

（筆写）

第8条 貴重図書を筆写するときは、鉛筆以外の筆記用具を使用してはならない。

(撮影)

第9条 貴重図書の撮影は、係員の立会いの上、大学図書館（以下「図書館」という。）の指定する者が特別閲覧室内で行うものとする。

2 撮影に要する実費は、利用者負担とする。

3 原形を損傷するおそれのある場合は、撮影を許可しない。

(その他)

第10条 貴重図書の利用者は、申請した目的以外に利用してはならない。

2 利用者は、貴重図書を利用した著作物に「関西学院大学図書館所蔵」と必ず所蔵館名を明示し、その1部を図書館に寄贈しなければならない。

3 貴重図書の図書館外貸出は許可しない。ただし、貸出が関西学院の教育・研究の発展に明らかに貢献すると認められる場合に限り、館長が許可することができる。

(主管部課)

第11条 この規程に関する事務は、図書館利用サービス課が行う。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、図書館運営委員会で決定する。

附 則

1 この規程は、1976年（昭和51年）11月19日から施行する。

2 この規程は、1997年（平成9年）10月1日から改正施行する。

3 この規程は、2013年（平成25年）4月1日から改正施行する。

(4) 主要学院外規程等（現行規程）

①私立大学図書館協会会則

私立大学図書館協会会則

（昭和28年11月6日 改 正）（昭和45年7月21日 一部改正）
（昭和32年11月7日 一部改正）（昭和48年7月26日 一部改正）
（昭和35年6月2日 改 正）（昭和57年7月22日 一部改正）
（昭和37年5月19日 一部改正）（平成7年8月2日 改 正）
（昭和38年5月23日 一部改正）（2000年8月2日 一部改正）
（昭和40年5月2日 一部改正）（2003年8月20日 一部改正）
（昭和43年9月1日 一部改正）（2004年9月17日 一部改正）

第Ⅰ部 協 会

（総 則）

第1条 本会は、私立大学図書館協会といい、代表校を会長校とし、会長校の館長は会長となり、事務局を会長校の図書館におく。

第2条 本会は、加盟の私立大学図書館で構成する。

第3条 本会の加盟校は次の2地区に区分する。

東地区……静岡、長野、新潟各県及び以東の地区

西地区……愛知、岐阜、富山各県及び以西の地区

第4条 本会の加盟校は前条の地区区分により、地区部会を構成する。

第5条 本会に加盟又は脱退しようとするときは、所在地区の地区部会長校を通じ文書をもって会長校に申込み、総会の承認を得なければならない。

2 本会への加盟及び脱退の期日は、承認を受けた総会開催年度の4月1日とする。

第6条 本会は、大学図書館の改善発達を図ることを目的とし、その目的達成のために次の事業を行う。

- (1) 大学図書館に関する調査・研究及びその成果の刊行
- (2) 研究会・講演会等の開催
- (3) 機関誌の発行
- (4) 対外関係活動
- (5) その他本会の目的達成に必要な事業

第7条 本会に次の機関をおく。

- (1) 総会
- (2) 役員会
- (3) 常任幹事会

(4) 委員会

(総 会)

第8条 総会は、加盟校の図書館長又はその代表者1名で構成し、議決権は各加盟校1票とする。

ただし、別に補助者1名の出席は妨げない。

2 役員校・開催校及び各委員会委員長は、総会に必要な数の補助者を出席させ、並びに各委員会委員は、自ら総会に出席することができる。

3 総会は、会長校がこれを招集し、毎年1回適当な時期に開催する。

4 総会の開催校は、役員会の計画に基づいて会場を提供し、開催の準備、実施及び司会を行う。

5 総会を開催するために、協会のもとに「総会・研究大会特別会計」を設ける。

第9条 総会は、次の事項を審議・議決する。

(1) 事業計画に関する事項

(2) 予算及び決算に関する事項

(3) 会則及び細則の制定・改廃に関する事項

(4) 役員校の選任に関する事項

(5) 役員校の会務処理報告に関する事項

(6) その他本会の事業、運営に関する事項

第10条 前条に係る事項の提案は、役員会の議決を経て、会長校がこれを行う。

2 前条に係る事項について、加盟校は所属地区部会役員会に諮ってこれを提案することができる。

(役員会)

第11条 役員会は、会長校、理事校及び監事校で構成し、毎年度2回以上、会長校が招集して会務を審議・議決する。役員会は総会に対してその責任を負う。

2 役員校は通信の方法によって前項の会議に参加することができる。

第12条 会長校は、理事校の互選により選出し、総会の承認を得なければならない。

2 会長校は役員会を主宰する。

第13条 理事校は、会長校のほか、東・西各地区部会から5校、監事校は東・西各地区部会から1校をそれぞれ選出して、総会の承認を得なければならない。

2 前項の規定にかかわらず、東・西各地区部会が必要と認めた場合には、会長校と協議の上、各地区部会に理事校1校を加えることができる。但し、本項により選出された理事校は、役員会における議決権を有しない。

3 第31条に規定する地区部会長校は任期中に、第1項の次期役員校を選出し、会長校に通知しなければならない。

第14条 監事校は、本会及び所属地区部会の会計を監査し、その結果をそれぞれ当該総会に報告しなければならない。

2 監事校は、本会の他の役員校を兼ねることができない。

第15条 役員校の任期は、4月1日に始まり、2年間とする。ただし再任を妨げない。

(常任幹事会)

第16条 常任幹事会は、会長校、地区部会長校及び監事校で構成し、会長校が必要と認めたときは役員校及び委員会委員長を加えることができる。

2 常任幹事会は、会長校が招集しその議長となる。

第17条 常任幹事会は、会長校の諮問に応じて次の事項について審議する。

- (1) 諸規定の制定・改廃
- (2) 各種委員会の設置・廃止
- (3) 予算編成方針の重要な変更
- (4) その他本会の運営にとって重要な事項

(委員会)

第18条 委員会は、これを次の2種に区分する。

- (1) 別に定める規程に基づき設置された常設の委員会
- (2) 役員会の議決に基づき設置された本会活動に必要な委員会

2 前項の委員会は、会長校の管轄に属し、その活動結果を役員会及び総会に報告しなければならない。

(会務処理)

第19条 本会の会務は、会長校がこれを処理し、役員会の承認を経て総会に報告しなければならない。

- 2 会務処理のうち重要事項は、常任幹事会及び役員会の事前審議を要する。
- 3 役員会は、会務処理について総会の承認を得て、別に細則を定めることができる。

第20条 会長校は、役員会の承認を得て、会務の一部を他の理事校に委譲することができる。

2 前項の理事校はその委譲を受けた会務を処理して、これを会長校に報告しなければならない。

第21条 会長校に事務局長1名をおくことができる。

2 事務局長は会長校の委嘱により本会の庶務・会計事務を処理する。

(業務処理)

第22条 本会事業の業務は、総会の議決に基づいて設けられた機関がこれを処理する。ただし、特に業務担当の機関が置かれない事業の業務は、会長校がこれを処理する。

2 前項の機関は、会長校の管轄に属し、その結果を総会に報告しなければならない。

(研究大会)

第23条 研究大会は毎年度総会とともに開催して加盟校の図書館員の自由な専門的調査・研究の成果を発表、討議し、若しくは講演等を行う。

(会議の成立)

第24条 総会及び地区部会総会は、加盟校の過半数の出席を要し、議決は、出席校の3

分の2以上の賛成を要する。

第25条 役員会及び常任幹事会は、全構成校の出席を要し、議決は、選出地区ごとに構成校の3分の2以上の賛成を要する。

第26条 前条の規程は、これを地区部会役員会に準用する。

（会議の記録・公表）

第27条 本会各機関の会議の議事は、これを記録し、会長校に報告しなければならない。会長校は、これを会報で公表する。

（会 計）

第28条 本会の経費は、会費、事業分担金及びその他の収入をもってこれに充てる。

2 会費は別に定める細則により、年度始めに本会事務局に納入しなければならない。

3 本会に加盟又は脱退した大学は、当該年度の会費年額を納入しなければならない。

4 会費及び事業分担金は、総会においてこれを定める。

第29条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

（顧問制度）

第30条 本会に顧問を置くことができる。顧問は、加盟校の図書館員であった者の中から、役員会が推薦し、総会の承認を経て会長校がこれを委嘱する。

2 顧問は、本会の重要事項について諮問に応じ、各機関の会合に出席し、発言することができる。

第Ⅱ部 地 区 部 会

（総 則）

第31条 地区部会は、東地区部会及び西地区部会とし、第3条に定めるそれぞれの地区に属する加盟校で構成し、代表校を地区ごとに地区部会長校とし、事務局を地区部会長校の図書館に置く。

第32条 地区部会は、この会則及び総会の議決の範囲を越えない限りにおいて、別に細則を定め独自の活動を営むことができる。ただし第6条第4号に定める対外関係活動を行うことはこの限りではない。

2 前項の細則は総会の承認を要し、地区部会活動は、地区部会長校がこれを会長校に報告しなければならない。

第33条 地区部会に次の機関を置く。

(1) 地区部会総会（以下「部会総会」という。）

(2) 地区部会役員会（以下「部会役員会」という。）

(3) 地区部会研究会（以下「部会研究会」という。）

2 地区部会に協議会を置くことができる。

(部会総会)

第34条 部会総会は、毎年度少なくとも1回、地区部会長校が招集し、当該地区部会における総会事項を審議・議決する。

2 部会総会の議決権は各加盟校1票とする。

第35条 前条に係る事項の提案は、部会役員会の議決を経て、地区部会長校がこれを行う。

2 前項の提案について所属加盟校及び部会研究会は、部会役員会に諮ってこれを部会総会に提案することができる。

第36条 部会総会の開催校は、部会役員会の計画に基づいて会場を提供し、開催の準備、実施及び司会を行う。

(部会役員会)

第37条 部会役員会は、地区部会所属の役員校で構成し、地区部会長校が随時招集して、地区部会の会務を審議・議決する。

第38条 地区部会長校は、地区部会所属の理事校の互選により選出し、その結果を部会総会及び会長校に報告しなければならない。

(部会研究会)

第39条 部会研究会は、地区部会所属加盟校の図書館員で構成し、会員の自由な専門的調査・研究を助長し、その成果を更に改善・向上させることを目的とする。

第40条 部会研究会は地区部会長校の管轄に属し、地区部会が別に定める細則に基づいてこれを運用する。

(地区部会の会務処理)

第41条 地区部会の会務は、地区部会長校がこれを処理し、部会役員会の承認を経てこれを部会総会及び会長校に報告しなければならない。

(地区部会の業務処理)

第42条 第22条の規程は、これを、地区部会に準用する。ただし、会長校はこれを地区部会長校に、総会はこれを部会総会に、それぞれ読み替えるものとする。

(地区部会の会計)

第43条 地区部会の経費は、地区部会費交付金及びその他の収入をこれに充て、独立会計とする。

2 地区部会が別に地区部会費を徴収しようとするときは、総会の承認を得なければならない。ただし、臨時的費用に充てるための分担金等はこの限りではない。

附 則

- 1 この会則は平成8年4月1日よりこれを施行する。
- 2 私立大学図書館協会部会細則はこの会則施行の日これを廃止する。
- 3 旧会則に基づいて制定した部会研究会細則は引き続き効力を有するものとする。
- 4 私立大学図書館協会幹事会設置要項（平成6年3月11日役員会承認）はこの会

則施行の日にこれを廃止する。

5 この会則改正は 2004 年 9 月 17 日より施行する。

会 費 細 則

第 1 条 会則第 28 条第 2 項による会費は、本細則による。

第 2 条 会費は基礎会費と賛助会費を合算したものをいう。

第 3 条 基礎会費は年額 1 校 22,000 円とする。

第 4 条 賛助会費は在学学生数に応じ算出した次の金額とする。

| | | | |
|-----------------|----------|-----------------|----------|
| 500 人以下 | 0 円 | 3,001 人～8,000 人 | 15,000 円 |
| 501 人～1,500 人 | 5,000 円 | 8,001 人以上 | 20,000 円 |
| 1,501 人～3,000 人 | 10,000 円 | | |

第 5 条 加盟校は算定以上の賛助会費額を負担することを妨げない。

第 6 条 加盟校は、賛助会費算出について会長校に対し異議を申し立てることができる。

2 前項の異議は、会長校が役員会に諮ってこれを処理する。

第 7 条 この細則の変更は、総会の承認を必要とする。

附 則

1 この細則は、昭和 37 年 5 月 19 日よりこれを施行する。

2 この細則の改正は昭和 42 年度より施行する。

3 この細則の改正は昭和 48 年度より施行する。

4 この細則の改正は昭和 51 年度より施行する。

5 この細則の改正は昭和 57 年度より施行する。

6 この細則の改正は昭和 58 年度より施行する。

7 この細則の改正は平成 8 年度より施行する。

②兵庫県大学図書館協議会規約

兵庫県大学図書館協議会規約

(名 称)

第1条 この会は、兵庫県大学図書館協議会という。

(会 員)

第2条 この会は、兵庫県内の大学及び短期大学の図書館（以下「大学図書館」という。）をもって会員とし、その入・退会は総会にはかる。

(目 的)

第3条 この会は大学図書館の管理・運営に関して、連絡・協議・調査研究を行い、もって大学図書館の充実・発展を期することを目的とする。

(事 業)

第4条 この会は前条の目的を達成するため研究会・研修会等、必要な事業を行う。

(役 員)

第5条 この会に会長館、副会長館及び監事館をおく。

2 役員は総会において選出し、任期は3年とする。ただし、再任を妨げない。

3 会長館は会を代表し、会務を行ない、副会長館は会長館を補佐する。

(総 会)

第6条 総会は会長館が招集し、年1回開くこととする。ただし、必要あるときは臨時に総会を開くことができる。

2 総会の運営は、会場館の協力を得て、役員館が行なう。

(企画委員会)

第7条 この会の目的及び事業を遂行するため、企画委員会をおく。

2 この委員会は、会長館、副会長館及び総会において選出された会員館をもって構成し、会長館がこれを招集する。

(会 計)

第8条 この会の経費は会費（年額8,000円）その他をもってあて、会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

(監 査)

第9条 監事館は、協議会の会計を監査する。

(規約の変更)

第10条 この規約は、総会の承認を経て変更することができる。

(雑 則)

第11条 この規約に定めるもののほか、必要な事項は、総会が定める。

附 則

(施行期日)

1 この規約は、昭和46年5月24日から施行する。

（旧会則の廃止）

2 兵庫県大学図書館協議会会則（昭和 22 年 7 月 19 日制定）は、これを廃止する。

（経過措置）

3 兵庫県大学図書館協議会会則によって認められた職員研修委員会は、この規約第 6 条によりおかれたものとみなす。

附 則

この改正規約は、昭和 56 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（一部改正）

この規約は、昭和 59 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この規約は、昭和 63 年 4 月 1 日から施行する。

〈申し合わせ〉

1. 第 5 条の役員のうち副会長館は 1 館、監事館は 1 館とする。
2. 企画委員会の構成は、国公立大学 2 館、私立大学 3 館、短期大学 1 館とする。
3. 企画委員の任期は、3 年を原則とする。

③関西四大学図書館長会議規約

関西四大学図書館長会議規約

締結1981年3月23日

実施1981年4月1日

改正1988年4月1日

改正1992年12月15日

改正1998年12月1日

改正2002年3月18日

改正2003年3月12日

改正2006年11月25日

改正2009年9月14日

第1条 関西大学図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館、立命館大学図書館は、相互協力の推進を図り、図書館運営の充実に資するため、関西四大学図書館長会議（以下「本会議」という）を設ける。

第2条 本会議は前条の目的を達成するため、原則として年1回秋季に開催するものとし、会議は当番館が主宰する。

第3条 本会議は四大学の館長、所長その他の管理職をもって構成する。

第4条 連絡調整を図るため本会議の下に、館長、所長以外の管理職をもって構成する四大学図書館連絡会を設ける。

2 この連絡会は第2条の当番館が主宰し、原則として年1回春季に開催する。

第5条 前条の連絡会は必要に応じて小委員会をおくことができる。

第6条 この規約の改正及び廃止は、本会議の議を経て行う。

④西宮市立図書館と関西学院大学図書館との相互協力の申し合わせ (1998 年 4 月 1 日実施)

西宮市立図書館と関西学院大学図書館との相互協力の申し合わせ

第 1 章 総則

(目 的)

第 1 条 この申し合わせは、西宮市立図書館と関西学院大学図書館との相互協力により、利用者サービスの向上と図書館活動の充実をはかることを目的とする。

(対象施設)

第 2 条 この申し合わせによる対象施設は、西宮市立図書館と関西学院大学図書館および神戸三田キャンパス大学図書館分室（以下、三田分室という）とする。

第 2 章 図書館資料の相互貸借

(貸借窓口)

第 3 条 相互貸借の窓口は、西宮市立図書館利用サービス係と関西学院大学図書館利用サービス課とする。

(貸借資料の範囲)

第 4 条 相互貸借を行う資料の範囲は、貸出館において通常館外貸出を行っている範囲内のものとする。ただし、視聴覚資料の相互貸借は行わない。

(貸借資料数)

第 5 条 相互貸借できる冊数は、20 冊以内とする。（個人での申し込みの上限冊数は、3 冊までとする）ただし、貸出館が特に必要と認めた場合は、その数を制限または増加することができる。

(貸借期間)

第 6 条 資料の貸借期間は、発送日を含めて 21 日間とする。ただし、貸出館が必要と認めた場合は、その期間を延長または短縮することができる。

- 2 貸出館は、業務上必要と認めた場合には貸出期間中であっても資料の返還を請求することができる。

(利用方法)

第 7 条 相互貸借資料の利用は、借受館内での閲覧のみとする。借受館での館外貸出は、行うことができない。

(貸借手続)

第 8 条 相互貸借の手続は、次の各号により行うものとする。

1. 資料の借り受けは、所定の相互貸借申込書（別途定める）に記入し、貸出館に FAX あるいは文書で依頼する。
2. 相互貸借申込にあたっては、貸出館に事前に所蔵調査を行い、貸出可能であることの確認を行っておく必要がある。

(資料の受け渡し)

第9条 相互貸借資料の受け渡しは、原則として郵送（書留）で行う。

(借受館の責任)

第10条 借受館は、借受資料を亡失または著しく損傷した場合は、直ちに貸出館に連絡し、貸出館の定めるところに従う。

(費用の負担)

第11条 相互貸借にかかる費用は無料とする。ただし、資料を郵送（書留）で借り受けた場合、また借受館がその資料を郵送（書留）で返却した場合の郵送料は、借受館側が負担するものとする。

第3章 西宮市民の関西学院大学図書館の利用

(利用資格)

第12条 利用者は、次の各号の要件を満たすものとする。

1. 西宮市民で、満20歳以上の者（ただし、大学生は除く）
2. 西宮市立図書館利用登録者であること
3. 特定の研究主題を持っている者

(利用手続)

第13条 利用にあたっての手続は次の各号による。

1. 利用希望者は、西宮市立図書館に「関西学院大学図書館閲覧利用希望」の旨申し出る。その際、利用者は調査・研究のために必要な資料名を特定しておく必要がある。
2. 西宮市立図書館は、関西学院大学図書館にFAXあるいは文書で所蔵調査の依頼および閲覧利用希望日、閲覧希望図書館（上ヶ原または三田）の連絡を行う。
3. 関西学院大学図書館は、所蔵調査を行い、西宮市立図書館に閲覧利用の可否について回答をする。
4. 西宮市立図書館は、関西学院大学図書館からの閲覧可能という資料について「資料の閲覧（複写）申込書」を発行する。（別紙参照）
5. 利用者は西宮市立図書館が発行した「資料の閲覧（複写）申込書」および「身分確認ができるもの」を関西学院大学図書館あるいは三田分室に持参する。

(利用期間)

第14条 西宮市立図書館が発行した「資料の閲覧（複写）申込書」および「身分確認ができるもの」を関西学院大学図書館に持参した西宮市立図書館登録者（以下、西宮市民という）は、3日間同一資料を利用することができる。

(利用の範囲)

第15条 西宮市民の関西学院大学図書館利用は次の各号による。

1. 西宮市民が利用できる資料は、関西学院大学図書館に事前に所蔵調査の依頼

を行い、関西学院大学図書館あるいは三田分室のカウンターで置き置きしている資料のみとする。

2. 置き置き資料の利用は、館内閲覧および複写とする。
3. 閲覧利用時間は、レファレンスカウンターのサービス時間内とする。
（閲覧受付は、サービス時間終了の2時間前までとする）

（複写費用）

第16条 複写施設を利用する場合は、定められた料金を支払うものとする。

（閲覧資料の範囲）

第17条 西宮市民の関西学院大学図書館所蔵資料の利用にあたっては、次の各号に掲げるものは利用することができない。

1. 西宮市立図書館が所蔵する資料
2. 調査研究目的に直接関係ない資料
3. 貴重図書およびこれに準ずる図書
4. 部局研究室備付資料
5. 関西学院大学図書館において閲覧が適当でないと認めた資料

（利用の制限）

第18条 関西学院大学図書館が特に必要と認めた場合は、西宮市立図書館に連絡し、利用者の制限または利用の取り消しを行うことができる。

（利用者の義務）

第19条 複写によって生じる著作権法上の責任は、利用者本人が負うものとする。

- 2 利用者は関西学院大学図書館利用規程に従うものとする。

（補償の義務）

第20条 利用者は利用中の資料や図書館内の備品、施設等に損害を与えた場合は、その損害に対して利用者自身が補償の義務を負うものとする。万一利用者がその義務を怠った場合は、西宮市立図書館が誠意を持って対処するものとする。

第4章 図書館資料の文献複写

（文献複写の窓口）

第21条 文献複写の窓口は、西宮市立図書館利用サービス係と関西学院大学図書館雑誌資料課とする。

（文献複写の申込）

第22条 利用者が文献複写を申し込む場合は、複写申込書（別途定める）に必要事項を記入し、申込受付館から資料所蔵館（西宮市立図書館あるいは関西学院大学図書館）にFAXあるいは文書で申し込む。その場合、事前に所蔵調査を行い、文献複写が可能であることの確認を行っておく必要がある。

（申込の制限）

第23条 受付館は複写処理能力をこえる量の申し込みまたは営利を目的とする申し込みがあった場合は、その申し込みを制限または謝絶することができる。

(複写資料の制限)

第24条 次の各号に掲げる資料は、複写することができない。

1. 貴重図書およびこれに準ずる資料
2. その他複写することが適当でない資料
3. 著作権法 31 条の制限をこえるもの

(複製物の種類)

第25条 複製物の種類は、次の各号に掲げるものとする。

1. 電子複写による印画
2. マイクロフィルム（フィッシュを含む）からの印画

(複写経費)

第26条 複写経費は次の各号により処理するものとする。

1. 複写経費は、別途定める複写料金および郵送料の合算額とする。
2. 申込館は、受付館からの請求に基づいて速やかに複写経費を納入するものとする。

(著作権侵害の責任)

第27条 複製物の使用によって生じる著作権法上の責任は、申込者本人が負うものとする。

第 5 章 雑則

(協 議)

第28条 この申し合わせに定めのない事項および疑義が生じた事項については、双方の図書館で協議のうえ定めるものとする。

(協議の窓口)

第29条 協議および連絡の窓口は、西宮市立図書館利用サービス係と関西学院大学図書館利用サービス課とする。

附 則 この申し合わせは平成 10 年（1998 年）4 月 1 日より実施する。

平成 10 年（1998 年）4 月 1 日

西宮市立中央図書館長 山 本 康 夫 公印
関西学院大学図書館長 丸 茂 新 公印

⑤大学図書館近畿イニシアティブ運営要綱（平成 24 年 7 月 4 日改訂）

大学図書館近畿イニシアティブ運営要綱

平成24年 7 月 4 日 改訂

平成21年 6 月23日 改訂

平成21年 3 月27日 改訂

平成19年 4 月 1 日 改訂

平成18年 9 月21日 改訂

平成17年 6 月21日 制定

（趣 旨）

第 1 条 国立大学図書館協会近畿地区協会、公立大学協会図書館協議会近畿地区協議会、私立大学図書館協会西地区部会京都地区協議会、同阪神地区協議会及び私立短期大学図書館協議会近畿地区協議会は、近畿地区の大学図書館（大学共同利用機関等を含む、以下同じ）において、国公私立の設置形態を超えて共同で実施することが適当な事業等を行うため、近畿地区の大学図書館の連携・協力組織として、「大学図書館近畿イニシアティブ」（以下、「近畿イニシア」という。）を組織する。

（事 業）

第 2 条 近畿イニシアは、次の各号の事業を実施する。

- (1) 近畿地区の大学図書館のために共同で実施することが適当な事業
- (2) 近畿イニシアの活動に関する広報
- (3) その他、運営委員会において合意した事業

（運営委員会）

第 3 条 近畿イニシアの審議の場として、運営委員会を設置する。

（運営委員会の構成）

第 4 条 運営委員会は、国立大学図書館協会近畿地区協会が選出する 3 館、公立大学協会図書館協議会近畿地区協議会が選出する 2 館、私立大学図書館協会西地区部会京都地区協議会が選出する 2 館、同阪神地区協議会が選出する 2 館及び私立短期大学図書館協議会近畿地区協議会が選出する 1 館（以下、「委員館」という。）をもって構成する。

- 2 委員館が欠ける場合は、速やかに後任の委員館を選出するものとする。
- 3 委員館の任期は、6 月 1 日から翌々年の 5 月 31 日までの 2 年とし、再任を妨げない。ただし、後任の委員館の任期は、前任館の残任期間とする。
- 4 委員館は運営委員各 2 名を選出するものとする。ただし、私立短期大学図書館協議会近畿地区協議会が選出する委員館の運営委員は 1 名とする。

- 5 第6条第3項に定める専門委員会の主査は運営委員会に出席し、専門委員会の活動内容の報告及び事業企画案の提案を行なう。

(委員長)

- 第5条 運営委員会に委員長を置き、委員館の互選により選出された委員長館が指名する代表者をもって充てる。
- 2 委員長は、必要に応じて運営委員会を招集し、議事を統括する。
 - 3 委員長館の任期は、委員館としての任期と同一とする。ただし、再任を妨げない。

(専門委員会)

- 第6条 運営委員会は、必要に応じ、専門委員会を設けることができる。
- 2 専門委員会は、運営委員会で決定する担当委員館2館から指名される各1名の専門委員と、その他の専門委員で構成する。
 - 3 専門委員会に主査を置く。主査は、専門委員の互選により選出する。
 - 4 主査は、専門委員会を招集し、議事を統括する。
 - 5 その他、専門委員会の運営に必要な事項は、別に定める。

(監事館)

- 第7条 近畿イニシアに、監事館2館を置く。
- 2 監事館は、委員館のうち、委員長館の所属する地区協（議）会とは異なる2地区協（議）会から各1館を選出する。
 - 3 監事館は、近畿イニシアの会計を監査し、監査結果を運営委員会に報告する。
 - 4 監事館の任期は、委員長館と同一の期間とする。

(賛助会員)

- 第8条 近畿イニシアに、賛助会員を設ける。
- 2 賛助会員は、近畿イニシアの活動に賛同する個人もしくは団体等で、会員になるにあたっては運営委員会の承認を得るものとする。
 - 3 賛助会員は、運営委員会が別に定めるところにより近畿イニシアの活動や事業に参加することができる。
 - 4 近畿イニシアは、必要に応じて賛助会員の周知を図る。
 - 5 その他、賛助会員についての必要な事項は、運営委員会において別に定める。

(寄 付)

- 第9条 近畿イニシアは、近畿イニシアの活動に賛同する個人もしくは団体等からの寄付を受けることができる。

（事務局）

第10条 運営委員会の事務局は、委員長館に置く。

（改 廃）

第11条 運営要綱の改廃には、運営委員会で委員館の三分の二以上の賛成を必要とする。

（その他）

第12条 その他、運営委員会の運営に必要な事項は、運営委員会が別に定める。

（附 則）

1. この要綱は、平成 17 年 6 月 21 日から施行する。
2. 第 4 条第 2 項の規定にかかわらず、最初の委員館の任期は平成 19 年 3 月 31 日までとする。
3. この要綱は、平成 18 年 7 月 1 日から施行し、平成 18 年 4 月 1 日に遡って適用する。
4. この要綱は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。
5. この要綱は、平成 21 年 3 月 27 日から施行する。
6. 平成 19-20 年度の運営委員会委員の任期は平成 21 年 5 月 31 日までとする。
7. この要綱は、平成 21 年 6 月 23 日（改訂日）から施行し、平成 21 年 6 月 1 日に遡って適用する。

（了 解 事 項）

1. 第 4 条第 4 項については、やむを得ない事情がある場合、委員館からの運営委員を 1 名でも可とする。

（附 則）

この了解事項は、平成 25 年 6 月 1 日から施行する。

⑥EUIJ 関西・大学図書館相互利用協定延長に関わる覚書
(2013 年 3 月 31 日まで)

EUIJ 関西・大学図書館相互利用協定延長に関わる覚書

(趣旨)

第 1 条 EU インスティテュート関西（以下「EUIJ 関西」という。）に加盟する神戸大学、大阪大学、関西学院大学の図書館は、EUIJ 関西が実施する教育活動および研究活動に寄与するため、2005 年（平成 17 年）9 月 22 日に EUIJ 関西・大学図書館相互利用に関する協定書（以下「協定書」という。）を締結したが、EUIJ 関西・参加大学相互間単位認定に関する協定の延長に伴い、協定書の延長に関して覚書を締結する。

(図書館の範囲)

第 2 条 この協定が対象とする図書館の範囲は、EUIJ 関西に加盟する各大学の図書館長が指定する図書館および分館等（以下「図書館等」という。）とする。

(利用者の範囲)

第 3 条 この協定が対象とする利用者の範囲は、次のとおりとする。

- (1) EUIJ 関西に加盟する大学で開講される EU 研究修了証プログラムに登録する学部生・大学院学生（以下「学部生・大学院生」という。）
- (2) EUIJ 関西に加盟する大学で開講される EU 研究修了証プログラムを担当する教員および共同研究者（以下「教員・研究者」という。）

(利用申請および利用)

第 4 条 学部生・大学院生は、各大学の受付部局の認印がある EU 研究修了証プログラムの登録用紙の写しを各大学の図書館に提示し、利用申請手続を行う。各大学の図書館は、学部生・大学院生に図書館カードを発行する。

- 2 教員・研究者は、所属する大学の身分証等を各大学の図書館に提示し、利用申請手続を行う。各大学の図書館は「EU 研究修了証プログラム担当者リスト」で確認のうえ、教員・研究者に図書館カードを発行する。
- 3 各大学が発行する図書館カードの有効期間は、原則として EU 研究修了証プログラム登録期間内とする。
- 4 利用者が図書館を利用する場合は、当該大学が発行した図書館カードを図書館に提示するものとする。

(サービス内容)

第 5 条 利用者は、以下のサービスを受けることができる。

- (1) 図書・資料の閲覧

- (2) 図書・資料の館外貸出
 - (3) 著作権法の範囲内での所蔵資料の複写
 - (4) 視聴覚資料の館内視聴
- 2 サービス内容および利用上の詳細な事項については、各大学の図書館の規程類を適用するものとする。

（その他）

第6条 この協定に定める事項のほか必要な事項については、EUIJ 関西に加盟する各大学の図書館が別途協議して定めるものとする。

（有効期間）

第7条 この協定の有効期間は、2008年（平成20年）10月1日から2013年（平成25年）3月31日までとする。

附則

この協定は、2008年（平成20年）10月1日より発効する。

上記締結の証として本協定書を3通作成し、各大学図書館長記名押印の上、各々1通を保有する。

| | | | |
|-------------------|------------|---------|----|
| 2008年（平成20年）9月22日 | 神戸大学附属図書館長 | 武 田 廣 | 公印 |
| 2008年（平成20年）9月22日 | 大阪大学附属図書館長 | 小 泉 潤 二 | 公印 |
| 2008年（平成20年）9月22日 | 関西学院大学図書館長 | 曾 我 祐 典 | 公印 |

3 図書費

(1) 図書費予算

| 年度 | | 予算総額 | UP 率 |
|------|-------|-------------|--------|
| 1944 | 昭和 19 | 9,900 | |
| 1945 | 昭和 20 | 13,400 | 35.4% |
| 1946 | 昭和 21 | 22,300 | 66.4% |
| 1947 | 昭和 22 | 59,500 | 166.8% |
| 1948 | 昭和 23 | 215,000 | 261.3% |
| 1949 | 昭和 24 | 300,000 | 39.5% |
| 1950 | 昭和 25 | 385,500 | 28.5% |
| 1951 | 昭和 26 | 697,000 | 80.8% |
| 1952 | 昭和 27 | 2,890,000 | 314.6% |
| 1953 | 昭和 28 | 2,820,000 | − 2.4% |
| 1954 | 昭和 29 | 不明 | |
| 1955 | 昭和 30 | 不明 | |
| 1956 | 昭和 31 | 3,000,000 | |
| 1957 | 昭和 32 | 不明 | |
| 1958 | 昭和 33 | 10,000,000 | |
| 1959 | 昭和 34 | 10,000,000 | 0.0% |
| 1960 | 昭和 35 | 12,000,000 | 20.0% |
| 1961 | 昭和 36 | 不明 | |
| } | } | | |
| 1968 | 昭和 43 | | |
| 1969 | 昭和 44 | 32,300,000 | |
| 1970 | 昭和 45 | 32,300,000 | 0.0% |
| 1971 | 昭和 46 | 31,000,000 | − 4.0% |
| 1972 | 昭和 47 | 32,500,000 | 4.8% |
| 1973 | 昭和 48 | 35,800,000 | 10.2% |
| 1974 | 昭和 49 | 47,250,000 | 32.0% |
| 1975 | 昭和 50 | 50,350,000 | 6.6% |
| 1976 | 昭和 51 | 65,000,000 | 29.1% |
| 1977 | 昭和 52 | 75,000,000 | 15.4% |
| 1978 | 昭和 53 | 85,000,000 | 13.3% |
| 1979 | 昭和 54 | 95,000,000 | 11.8% |
| 1980 | 昭和 55 | 105,000,000 | 10.5% |

| 年度 | | 予算総額 | UP 率 |
|------|-------|-------------|--------|
| 1981 | 昭和 56 | 125,000,000 | 19.0% |
| 1982 | 昭和 57 | 145,000,000 | 16.0% |
| 1983 | 昭和 58 | 175,000,000 | 20.7% |
| 1984 | 昭和 59 | 204,300,000 | 16.7% |
| 1985 | 昭和 60 | 224,800,000 | 10.0% |
| 1986 | 昭和 61 | 242,800,000 | 8.0% |
| 1987 | 昭和 62 | 259,800,000 | 7.0% |
| 1988 | 昭和 63 | 278,000,000 | 7.0% |
| 1989 | 平成元 | 305,800,000 | 10.0% |
| 1990 | 平成 2 | 321,100,000 | 5.0% |
| 1991 | 平成 3 | 333,900,000 | 4.0% |
| 1992 | 平成 4 | 344,000,000 | 3.0% |
| 1993 | 平成 5 | 357,760,000 | 4.0% |
| 1994 | 平成 6 | 372,070,000 | 4.0% |
| 1995 | 平成 7 | 383,232,000 | 3.0% |
| 1996 | 平成 8 | 390,897,000 | 2.0% |
| 1997 | 平成 9 | 398,715,000 | 2.0% |
| 1998 | 平成 10 | 398,715,000 | 0.0% |
| 1999 | 平成 11 | 447,193,000 | 12.2% |
| 2000 | 平成 12 | 447,193,000 | 0.0% |
| 2001 | 平成 13 | 447,193,000 | 0.0% |
| 2002 | 平成 14 | 451,523,000 | 1.0% |
| 2003 | 平成 15 | 451,523,000 | 0.0% |
| 2004 | 平成 16 | 452,623,000 | 0.2% |
| 2005 | 平成 17 | 478,899,000 | 5.8% |
| 2006 | 平成 18 | 478,899,000 | 0.0% |
| 2007 | 平成 19 | 519,190,000 | 8.4% |
| 2008 | 平成 20 | 520,922,000 | 0.3% |
| 2009 | 平成 21 | 525,108,000 | 0.8% |
| 2010 | 平成 22 | 498,009,000 | − 5.2% |
| 2011 | 平成 23 | 498,918,000 | 0.2% |
| 2012 | 平成 24 | 534,982,000 | 7.2% |

(2) 経常図書費以外の図書費予算

| 年度 | 収書計画費 | | | | 臨時定員俸 に伴う外国語 図書購入費 | 外国語雑誌 高騰対策費 | 中国語関連 図書整備費 | 朝鮮語関連 図書整備費 | 大阪梅田キャ ンバス用デー タベース費 | スペイン語 関連図書 整備費 | 聖和キャン パス用デー タベース費 |
|-----------|------------|------------|------------|-----------|--------------------------|----------------|----------------|----------------|---------------------------|----------------------|-------------------------|
| | 参考図書 | 基本図書 | 逐次刊行物 | 視聴覚資料 | | | | | | | |
| 1989 平成元 | 35,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1990 平成2 | 35,000,000 | 35,000,000 | 5,000,000 | 0 | 20,400,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1991 平成3 | 20,000,000 | 35,000,000 | 6,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1992 平成4 | 22,000,000 | 35,000,000 | 7,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1993 平成5 | 22,000,000 | 35,000,000 | 8,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1994 平成6 | 6,000,000 | 44,000,000 | 16,100,000 | 8,400,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1995 平成7 | 7,500,000 | 44,000,000 | 16,100,000 | 7,200,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1996 平成8 | 6,000,000 | 44,000,000 | 16,100,000 | 8,400,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1997 平成9 | 3,500,000 | 12,500,000 | 20,200,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1998 平成10 | 0 | 0 | 24,020,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1999 平成11 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 10,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2000 平成12 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 10,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2001 平成13 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 10,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2002 平成14 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 18,000,000 | 3,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2003 平成15 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 18,000,000 | 0 | 3,000,000 | 0 | 0 | 0 |
| 2004 平成16 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 18,000,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2005 平成17 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 18,000,000 | 0 | 0 | 2,000,000 | 0 | 0 |
| 2006 平成18 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 29,621,000 | 0 | 0 | 2,000,000 | 3,000,000 | 0 |
| 2007 平成19 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 29,621,000 | 0 | 0 | 2,000,000 | 0 | 0 |
| 2008 平成20 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 29,621,000 | 0 | 0 | 2,000,000 | 0 | 0 |
| 2009 平成21 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 29,621,000 | 0 | 0 | 2,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| 2010 平成22 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 29,621,000 | 0 | 0 | 2,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| 2011 平成23 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 29,621,000 | 0 | 0 | 2,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| 2012 平成24 | 0 | 0 | 21,420,000 | 0 | 0 | 29,621,000 | 0 | 0 | 2,000,000 | 0 | 1,000,000 |

※「収書計画費」は、新大分大学図書館完成に向けての計画であり、新大分大学図書館がグランドオープンするまでの予算である。なお、逐次刊行物については購読の継続維持のためグランドオープン後も予算化されている。

4 運営

(1) 議事録等

①Library Advisory Committee 議事録

- *1932（昭和 7）年度から 1956（昭和 31）年度まで
- *旧字は、原則として常用漢字に改めた。
- *読み取れない文字は、■で表した。
- *図書費等の金額については、記載どおりとした（合計が合わない場合がある）。

| 年度 | 回次 | 議事録 |
|---------------|-----|--|
| 1932 (昭和7) | 第1回 | <p>昭和7年11月11日午後3時 於図書館応接室</p> <p>大学職員による図書館委員会設置さる</p> <p>委員氏名 神学部 Dr. Outerbridge 文学部 大藤豊教授 高商部 東晋太郎教授 予科 児玉国之進教授 中学部 大河原憲教諭 図書館 Matthews 館長 〃 中島猶治郎司書</p> <p>当日は初会の事として全員出席。議長選挙にて Mr. Matthews 当選 次に書記選挙にて中島猶治郎当選</p> <p>議長当選の挨拶あり、ついで委員会の職責につき説明あり議事に入る</p> <p>議題 1. 平野氏寄贈¥500.00 の処理の件 2. 各部の図書費予算報告 3. 開期の件 4. 指導教授の件</p> <p>決議</p> <p>1. 平凡社版及大英百科辞典最新版購入の事、その他今日迄に発行されたる重要叢書購入に決定 中島司書に一任する事</p> <p>2. 神学部図書費 ¥500.00 文学部図書費 ¥1,200.00 参考書 ¥250.00 参考書 ¥400.00 高商部図書費 ¥2000.00 予科図書費 ¥500.00 参考書 ¥700.00 参考書 ¥0 中学部図書費 ¥0 参考書 ¥100.00 以上</p> <p>3. 1年3回として1月、4月、9月に決定。但し臨時はこの限りに非ず</p> <p>4. 当分の内中止 その他決議及申合せ イ. 大学昇格に対して来年度図書購入費2割増加を理事会へ上申する事 ロ. 外国書代価騰の為、教授所有の古本を購入することに決定し各部委員にてその由報告さる事</p> <p style="text-align: right;">以上</p> |
| | 第2回 | <p>昭和8年2月22日午後3時 於図書館応接室</p> <p>出席委員 Dr. Outerbridge 大藤教授 東教授 大河原教諭 Matthews 館長 中島司書</p> <p>1. 前会の決議による第1議題に関して、中島司書より報告あり下の如し a. 大英百科辞典 第14版 ¥230 b. 大言海 全4冊@5 ¥20</p> |

| | | |
|---------------|-----|--|
| 1932 (昭和7) | 第2回 | <p>c. 両替年代記 全3冊 ￥23 d. 大百科事典 全24巻 ￥120 e. 岩波講座 世界文学 全15巻 ￥225 f. 世界思想全集 文学部に既に購入し居るにより、本年3月より以後購入する事次回報告する事 g. 宗教学叢書購入但し神学部にて購入してあり、Outerbridge 先生へ報告の事 2. German book ￥200 English book ￥200 Total ￥400 増加せる事報告あり 3. 関西学院新聞昭和7年12月20日発行の論説「図書館問題」に付き、中島朗読の後協議に入る a. 教授方へ再度の図書館規則を発送する事 b. 広告を出納口に新しくする事 4. 高商学部第4年生雑誌一切抜事件の報告あり 中島司書と関係あるに依り一時除席、協議さる 5. 次回迄なるべく図書館に関する長所短所を研究して発展に資する事を約し散会す a+b+c+d+e=￥415.5 平野氏御寄贈残高￥84.5 報告済 以上</p> |
| 1933 (昭和8) | 第3回 | <p>昭和8年5月5日午後3時 於図書館応接室 出席委員 大藤教授 東教授 中学部大河原氏に代って藤井教頭 Matthews 館長 中島司書 1. 前会の記録朗読 a. 本日午後2時頃学生会会長菅沼氏、その他西垣、津田両氏と来館。12月20日の新聞記事について交渉あり。 前会議の節審議しありしにつき答弁して置き好都合に又図書館保留とす、につき説明すれば満足して帰られし、中島司書より報告 b. 従来は高文別個にて発行し来たる Library Catalogue を合同にて発行するとの事この見積高約￥700との事にて図書館より￥300補助との事に決定 c. 理事会で法律書購入方申請の件 昨年度より￥200及本年度 Special English book ￥2000の内、出来るだけ法律書を順次購入するようとの事申合さる d. 9月までの図書館のため総ての方面よりの研究批判をする事(但し夏休み中に一度注意する事) e. 神学部よりの要求にある世界聖典全集 30 vols @￥2.50 ￥45を購入にて決定 f. 平野氏寄贈金残￥84.5中より世界聖典全集購入の事 残高使途は次回にて決定の事 以上</p> |
| 1933 (昭和8) | 第4回 | <p>昭和8年9月22日午後3時 於図書館応接室 出席委員 大藤教授 東教授 児玉教授 藤井教頭 Matthews 館長 中島司書 議題 1. How to improve the library fundamentally 2. 来年度図書購入費を増加するよう理事会へ申請の事 3. 平野氏寄贈金残高の使途の事 イ. 平野氏残高中よりシェクスピア全集改譯￥18にて購入の事 残額は次回まで保留の事 ロ. 来年度図書購入費￥5000増額申請の事 ハ. 図書館発展策 1. 開校前より開館の事(既に実行している事説明) 2. 予科及専門部の為目録発行の事(2週後に再会。研究発表を約す10月中旬臨時委員会開く事約す) 3. 閲覧室監視する事(時々見回る事約す) 4. How to use the library を教授へ教える事 5. 1ヶ月1度チャペル time=Golden text 式のものの発表の事 6. 学生控室へ新刊書目録揭示の事</p> |

| | | |
|---------------------------|-----|--|
| 1 9 3 3 (昭和8) | 第4回 | <p>7. The Encyclopaedia Britannica の旧版を予約へ貸出すことに決定す</p> <p>8. 出納室の昼食中閉館は不便につき開館されたきとの事にて 11:30~12:30 の間開く事に昼食交代するよう決定報告す</p> <p style="text-align: right;">以上</p> |
| | 第5回 | <p>昭和9年2月21日午後3時 於図書館応接室</p> <p>出席委員 東教授 大藤教授 児玉教授 藤井教頭 Matthews 館長 中島司書</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新刊書出納は教授たりとも1ヶ月禁借出の事(大藤委員案) 2. 研究室への借出規定を作り予約へはいかに取り扱うべきか(児玉委員案) 3. 印刷目録刊行の件(経過報告) 4. 卒業生借覧証にして閲覧回数及冊数統計報告 <p>児玉氏のところにて始められ中島より (3) (4) の報告あり他の議題に入る</p> <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新刊行書陳列棚に入れるまでは教授は優先として1週間のみ貸出し、以後は絶対に1ヶ月禁止との事 2. 予約に研究室の出来るまでは教授研究室借出規定(第3)は見合せの事 3. 印刷目録は財政上困難にて不可能。新聞紙へその理由を掲載記事中島へ一任の事 4. 新刊書購入目録を各部へ掲示する事 5. 新刊書閲覧希望申込より1週間経過して通知なき場合は普通一般の新刊として取扱事に決定 <p style="text-align: right;">以上</p> |
| | 第6回 | <p>昭和9年5月31日午後3時 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 中嶋教授 東教授 Dr. Outerbridge 芥川教授 大河原教諭 武藤教授(児玉教授代理) マシウス館長 中島司書 大学部新学年開始の為 法文学部 中島重教授 商経学部 原田脩一教授 文学部 芥川教授(大藤教授交代) Dr. Outerbridge 教授の祈りにて開会</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 会議期間変更の件 2. 昨年度の統計より閲覧者数説明の事 3. 各教授より注意事項 4. その他 <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 会議時期変更 2月、5月、10月は決定 2. 閲覧室に脱帽、静粛を掲示する事 3. 書庫内の棚の配列案内を作る事 4. 分類の違っているを発見したる場合、通知をする事 5. 指定書を作るよう各教授へ願ふて協力する事 6. 教授研究館のみに帯出を許可する事 <p>その他は認めざる事</p> <p style="text-align: right;">以上</p> |
| 1 9 3 4 (昭和9) | 第7回 | <p>昭和9年11月9日午後3時 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 東教授 原田教授 山田教授(児玉代理) 大河原教諭 Matthews 館長 中島司書 東教授の祈りにて開会</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中央図書館と研究室との関係の件 2. 雑誌購入打合せ開催の件 3. 英、独書購入残高報告 4. 第11回全国高等諸学校図書館協議会報告 5. 来年度よりは部長へ相談前に法文学部及商経学部打合せ会を開くの件 <p style="text-align: right;">以上</p> |

| | | |
|-------------|-----|---|
| | 第7回 | <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Matthews 先生より説明ありて討議に入るもその説色々にて決を得ず。分館式に賛成者もあり中央集権説もあり遂に図書館規則改正に決し Matthews, Y. Nakajima の両氏にて改正案を作る事に一任 2. 中島重教授、芥川教授欠席の為予週に次回へ 3. 芥川教授欠席の為やむなく発表中止次回へ 4. 中島司書より報告あり聴取にて終る 5. 予め承認の事なるも確定せずこれもまた次回へ <p style="text-align: right;">以上</p> |
| 1934 (昭和9) | 第8回 | <p>昭和10年2月22日午後3時 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 中嶋教授 原田教授 東教授 芥川教授 大河原教諭 Matthews 館長 Mr. Jones, H. P. 中島司書 東教授の祈りにて開会。前会議決議録朗読議事に入る</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前会議の記事説明 2. 図書館規則改正の事 3. 特別会計の報告 4. 緊急図書購入委員会の件 5. 雑誌購入方法の改正 6. 館長帰国中の代理者紹介 7. 各委員よりの意見あれば承りたし。 <p style="text-align: right;">以上</p> <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. 館長より改正条項に付き説明され、各委員満足の意を表せらる 3. 中島司書より報告あり <ol style="list-style-type: none"> a. 平野氏残高¥35.00のうちにて岩波法律辞典購入の事 b. 平野氏残高と辰馬文庫残高¥34.82を合して The pictorial dictionary: I see all 5 vols. ¥50.00を購入と決定。その不足額は図書館費にて補助の事 4. 緊急図書購入委員会の既設されたるを館長より説明さる。委員中には兼任される人々もあり 5. 次回委員会にて雑誌種目打合せに決定す 6. Matthews 館長帰国の為その代理者として理事会にて決定せる H. P. Jones 教授を紹介さる Jones 氏の挨拶あり拍手にて迎う 7. 各委員よりは色々意見の交換もあり又 Suggestions あった <p style="text-align: right;">以上</p> |
| 1935 (昭和10) | 第9回 | <p>昭和10年9月19日午後 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 東教授 中嶋教授 松沢教授 (芥川教授代理) Jones 館長代理 中島司書</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 雑誌購入各部との打合の件 2. 図書分類に関する件 <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 雑誌購入の件に関しては前会議の決議により本日集合を願った事を中島司書より説明あり既にタイプにしてある List of magazines for 1935 を配布して各位の注意を願う 原田教授教授会議の為不参加なるも中島司書が代って意見と議案を発表、続いて東教授よりも説明あり。法文学部新設までは法律に関係ある雑誌を購入し、おりしも今日となつては出来るだけ法文学部にて購入せられたしと述べられ、中嶋教授よりは一応その由部長に説明して出来るだけその様に致したいと承認さる 2. 図書分類に関して東教授より説明あり。図書分類せる書庫に時々誤った箇所あり訂正すべき為、専門教授に分類を手伝ってもらつてはとの事なるも至極結構なるも中々煩わしき事ゆえ余りむづかしいものあらば援助を受く事にし、且つ分類の複数ある時は何時にても訂正する事にするとその事を中島司書より答弁せらる <p style="text-align: right;">以上</p> |

| | | |
|----------------|------|--|
| 1935 (昭和10) | 第10回 | <p>昭和11年2月19日午後3時 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 芥川教授 東教授 藤井教授 中島教授 Dr. Outerbridge Matthews 館長 中島司書</p> <p>Matthews 館長帰国の挨拶あり。中島書記より前会議の決議録朗読日程に入る</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Standing Lib Promotion Comm の説明 2. 図書購入の方法、Outerbridge 氏案 <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Matthews 館長より Standing Lib Promotion Committee の成立より経過報告に付き説明さる 2. Outerbridge 先生より説明あり <ol style="list-style-type: none"> a. 他の学校図書館の目録と比較して標準目録を作り、それに依って購入する方法 b. 古本を東京辺にて誰か図書通の人を派遣しても良い事 c. 新たに出来る図書費は各部に分配する事なり。Lib General Fund として使途すべき動議あり賛成あり、決定 3. Special Eng & German Fund の残高報告神学部のみ残り居り他部は残なし 4. 次回4月の招集までに雑誌購入法を研究することなるも、昨年10月に大體了解もある事なれば不必要とのことにて否決さる <p>以上</p> |
| 1936 (昭和11) | 第11回 | <p>昭和11年6月17日午後3時 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 芥川、東、原田、児玉、中島各教授、Matthews 館長、中島司書 中島教授の祈りにて開会</p> <p>議題</p> <p>A List of magazines の相談</p> <p>理事会より新制度設置の件報告、昭和11年12月10日理事会にて現代の図書委員に指名</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 各部の雑誌費を図書館に集中してその使途を委員会にて決定してはとの案、東教授より発表 同意賛成者もありしが、決定に及ばず否決 2. 新制度により徴集したる図書費を早速使用すべき事 議起るも結局特別委員の指名を待つ事に決定 3. A List of magazines は1937は余り変化なき為、図書館より直接に各部長へ交渉ありたしとの事 4. Standing Lib Promotion Comm より理事会への報告せしに対して新学年より下の如き図書館費徴集許可あり 学部及専門部全部生より毎学期1円宛徴集の事。但し最終学期に限り徴集せず 予科生よりは毎期50銭宛徴集の事 本年4月より実施の事、報告す（説明学部及専門部は在学中¥5.00 予科¥3.00） 5. その他種々なる問題も発表されたるも議題にならず4時半頃閉会す <p>以上</p> |
| | 第12回 | <p>昭和12年1月15日午後3時 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 中島、芥川、原田、川辺（児玉代理）、Outerbridge 教授 藤井教頭と交代佐々木忍教諭 Matthews 館長 中島司書 芥川教授の祈りにて開会</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 理事会よりの委員任命の件 2. 新制度による図書費の使途 3. 12月20日学院新聞記事の件 4. 図書館規則改正の件 |

| | |
|-----------------------------|---|
| 第12回 | <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 議長 Matthews 氏より理事会よりの任命報告 現図書館委員に新制度に依る図書費の使途を委託さる 新制度による図書館費は全額にて¥3,183.50。従来よりの図書費預り金¥4,263.24 あり 結局 2.3 (予 2、法文商経、高商文専 3) 払戻 ¥506.00 と ¥3,183.50 と減額して、それに新制度に徴集せる ¥941.00 を加えれば、¥1513.74 が残るのである。 すなわち此の金額は教本補充費及製本費として General Fund として図書館に残す事に決定す (1,684.74 である筈、留級生及編入者を通算計上すれば ¥1,684.74 なる事) ¥3,183.50 へ図書館基本金より ¥16.50 を補助して ¥3,200.00 として内 ¥1,200.00 は邦語図書購入費、決定 (但し本年に限り ¥600.00) ¥2,000.00 は基本図書購入費、決定 (但し本年に限 ¥2,600.00 あり) 次回までに購入方法考究との事申合す 学生希望図書は投書函にて受け委員会にて決定の事 今回は臨時集會として 1 月 29 日午後 3 時同室にて開催の事、申合せす。 以上 |
| 第13回 (臨時) 1936 (昭和11) | <p>昭和 12 年 1 月 29 日 (金) 午後 3 時 於教授閱覽室</p> <p>出席委員 東教授 Matthews 館長 中島司書</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 邦語図書購入の方法 基本図書購入の方法 学生希望図書の選択 新聞購入の可否如何 宣教師中央神学校教授 Dr. Ostrom 文庫仏教専攻者蔵書購入の件。 <p style="text-align: right;">以上</p> <p>出席者少数にて流会。次回は 2 月 4 日 (木) 午後 3 時同室にて開催、再通知發表する事</p> |
| 第14回 (臨時) | <p>昭和 12 年 2 月 4 日 (木) 午後 3 時 於教授閱覽室</p> <p>出席委員 芥川、東、原田、佐々木各教授、玉林 (児玉代理)、Dr. Outerbridge、Matthews 館長、中島司書</p> <p>芥川教授の祈りにて開會</p> <p>議長より前回の臨會において事情を説明あり。出席者の報告あり</p> <p>議題 前回と同様</p> <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> に対しては各部の小委員会を作り新刊目録により選択し決定は法文学部の中島教授、芥川文学部教授、東高商及商経兼、児玉予科、中島司書、委員長として東教授に決定す に対しては、目録提出者に一応返還して、第一、第二、第三希望書に対して符号、◎○△を付して再提出を 2 月 24 日までにされる様通知の事決定 学生の図書購入による投書は邦語図書購入委員に委任の事 議題は提出せず Dr. Ostrom 文庫は購入するとして研究する事とし Dr. Hilburn 及 Matthews 教授にて交渉報告の事 次回には Promotion Comm Member ■、竹支、小寺、山本、田村、松田諸教授を招待する事に決定 小委員は 2 月 16 日 (火) 午後 3 時に同室に開く事 次回本會議は 2 月 24 日 (水) 午後 3 時より同室にて開く事 London, Berlin, Paris, N. Y., 等古本屋の List を集める事 以上 |

| | | |
|----------------|------|--|
| 1936 (昭和11) | 第15回 | <p>昭和12年2月24日（水）午後3時 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 芥川、東、原田、児玉教授、Outerbridge 教授、Matthews 館長、中島司書、 竹支教授のみ傍聴者として出席さる</p> <p>原田教授の祈りにて開会</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 邦語図書購入小委員会報告 2. Dr. Ostrom 文庫の報告 3. 基本図書購入の件 <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中島司書より小委員会報告あり。邦語図書購入の法を説明しその総額¥353.60 小委員会記録の通り説明す。承認 2. 次いで前会議の決議事項を朗読す 3. 館長及 Dr. Hilburn と2月23日兩人にて Dr. Ostrom 夫人を訪問され文庫を研究されたるも Best Book は多くあるもその内 500 vols. が最も良くその価額 ¥2,000.00 との事報告あり。次いで Dr. Outerbridge より下の如く提案あり。神学部より総ての図書購入費即ち Special Eng. German book 及神学部より Total ¥500.00 を支出して他を何とかして支出して欲しいとの事にて協議の決定したは ¥500.00 宛3回に援助する事に決定さる。購入と決定す 4. 基本図書は第1希望各部よりの要求額¥3,131.90 となり本年度購入費¥2,100.00 なるにより、古本にて買う事に外国へ注文しその上にて無きものを購入との事。版数はできるだけ新刊物との事 5. ¥100.00 を除金して学生為 Everyman's Library を買う事に決定し、小委員会に委任さる 但し来年度収入にて購入の事（1937-38） 6. ¥500.00 を教授たちより古本にて発見したる場合中々手に入らざる為即時購入し得る様との事に使用に決定。各部委員にその book と代価を事務所より報告のみにて承認との事。但し来年度収入にて（1937-38） 7. 邦語図書小委員会を改め学生図書購入委員会と決定 |
| 1937 (昭和12) | 第16回 | <p>昭和12年6月18日（金）午後3時 於会議室</p> <p>出席委員 東、芥川、中島、Outerbridge 各教授、Matthews 館長、中島司書 佐々木、児玉、原田欠席</p> <p>東教授の祈りにて開会</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前回の決議記録朗読の事 2. 前回よりの経過報告 3. 本年上半期収入高報告 4. 昨年度収支決算報告 5. Ostrom 氏遺書購入報告 6. 購入すべき図書を丸善に見計わせた理由説明 7. 館長事務理事会へ報告せる報告 8. 雑誌リストを作製して各委員に送付するの件 <ol style="list-style-type: none"> 1. 前回記録中島司書朗読す 2. 前回より今日までに至れる経過報告及その他の理由として丸善を通じて希望図書 List を見計わせたるは為替の関係及手数等注文図書の不着の恐れ等にて丸善を通したる方今日の所最も安全なる方法である事を Matthews 館長及中島司書より説明、開期の遅れたるは丸善をして各国へ見積書取り集めに日数を欲したる事及文科にては未だ見積書到着せざるも止むなく開会せるその説明す <p>a. 学生図書購入委員会の報告をなす</p> |

| | |
|------------------------|---|
| 第16回 | <p>144 冊にして¥611.75 を要し 11.75 超過せるを報告して承認を受く</p> <p>3. 本年の収入高として ¥1,748.50 を報告但し前期のみの事</p> <p>4. 昨年度の収支報告 a. 収入 ¥3,200.00 b. 支出 ¥500.00 Ostrom Library ¥600.00 邦文図書購入 c. 残高 ¥2,100.00</p> <p>5. Ostrom Library を見聞さる</p> <p>6. 第2項参照の事</p> <p>7. Matthews 館長より理事会へ提出されし報告朗読</p> <p>8. 雑誌リストを作り各代表者へ送付 9 月末日までに返還を乞う事に決定</p> <p>決議</p> <p>1. 以上の説明により丸善を通じて注文する事に満場異議なし</p> <p>2. 第1希望図書購入を古本及新本を併して購入に決定。¥3,132.00 程である</p> <p>3. 館長及司書に整理する事を一任を決定す</p> <p>来年 3 月 31 日までに¥368.00 残る筈の事</p> <p style="text-align: right;">以上</p> |
| 1937 (昭和12) 第17回 | <p>図書館評議員会 昭和 13 年 1 月 28 日 (金) 午後 3 時 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 東、原田、佐々木、玉林 (児玉代理)、Outerbridge 各教授、Matthews 館長、 中島司書 以上</p> <p>原田教授の祈りにて開会</p> <p>議題</p> <p>1. 経過報告</p> <p>2. 会計報告</p> <p>その他委員より欲求問題</p> <p>1. 経過報告は Matthews 館長より会期の延期されたる理由として 9 月は学年末にてその機会の無かりしと丸善へ注文したる Standard works の到着の遅きを待ち居りたる故との説明あり又 12 月 8 日理事会にて決定されたる次回館長山本五郎理事の就任と同 Matthews 先生の 30 年間勤続せられ、来る 3 月末日をもって退職せらる旨説明報告せらる</p> <p>次いで購入決定せられたる Ostrom Library の List 及 Standard Works の List とを配布す</p> <p>第 15 回会議にて決定せる割当価額に付き次の如く中島司書より報告</p> <p>昭和 11 年度繰越金 ¥2,600.00</p> <p>昭和 12 年度収入高 ¥3,246.50</p> <p>尚第三学期予科 約¥200.00</p> <p>1. Ostrom Library ¥500.00</p> <p>2. Everyman's Lib ¥100.00</p> <p>3. Second Item books ¥500.00 51 冊 ¥211.50 残高 ¥288.50</p> <p>4. Students books ¥1,200.00 242 冊 ¥618.75 残高 ¥581.25 尚 11 月より 3 月までに購入可の事</p> <p>5. Standardworks ¥3,546.50 配布せる List 通り¥2,171.55 残高 ¥1,374.95</p> <p>6. 製本教本 ¥1,498.24 製本 818 冊 ¥662.40 教本 ¥308.80 残高 ¥527.04</p> <p>尚来年度にて Ostrom Library へ¥500.00 支払うべき事</p> <p>尚同日学生図書委員会を兼ね中島委員より次の如く図書購入の報告</p> <p>Students books 昭和 12 年 3 月より</p> |

| | | |
|----------------|------|--|
| 1937 (昭和12) | 第17回 | <p>3月 ¥132.15 4、5月 ¥121.75 6、7、8月 ¥230.75 9、10月 ¥134.10 Total ¥618.75 この冊数 242冊</p> <p>終って各委員より Standardworks の残高に付協議ありしも色々にて説ありしも 結局 4月10日迄に再度欲求図書の List を新調して会議に附す事に決議せる。 中島司書にて取揃える事も約束せらるその金額¥1,374.95 以上</p> |
| 1938 (昭和13) | 第18回 | <p>図書館評議員会 昭和13年5月25日(水)午後3時 於教授閲覧室 閉会午後5時 出席委員 芥川、原田、中島重、中澤(東教授代理)、Outerbridge、田中(児玉教授交代) 各教授、山本館長、中島司書 館長の祈りにて開会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 経過報告前回記録朗読 2. 会計報告 3. 新議員紹介(田中教授) 4. 文部省よりの為替統制上洋書購入注意事項 5. 英独仏雑誌購入に関する件 6. 学究各部の図書購入費相互関係の研究 7. 法文学部及文学部図書購入方法の研究 8. その他重要諸件 <p>決議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 及 2. は中島司書より前回決議になる事項に付き説明及報告を為す 3. 山本館長より田中彰寛教授の児玉氏と交代せられし事を説明紹介さる。 Matthews 先生を Associate member とする事も報告さる 4. 文部省よりの通達を朗読議長より説明あり。此れにより実行をなすべく出来るかぎり古本及日本図書購入する事に申合を為す 5. 英、独、仏雑誌については商経原田氏、高等商中澤氏小委員会を開き考慮せらる事に決定す。(特に独仏雑誌に限る) 6号議案につき議長より説明され特別委員制を採るべきか否を問われれば特別協議会を組織して全評議員を委員とする事決定即ち (Dec 1936 年 Executive Committee の決議に基き) 7. 法文学部及文学部購入方法につきましては山本館長より部長に交渉するとの事 8. 議長より各部の図書購入費の 20% 増額せるものは図書館のバジェットに繰入れ る事を考慮せらる様注意を引かれ説明さる <ol style="list-style-type: none"> a. 中島重教授よりは図書館中央集権と研究室本位に関して何れをとるや分岐点にある事にて大いに事務遂行上板挟て困るとの事。前館長マシウス氏は中央集権でありし事、山本新館長も図書冊数の少数なるにより研究室本位は不賛成を申述べらる b. 4月10日まで及近日まで蒐集せられたる(中島司書にて調査蒐集せる)図書購入希望中教授たちに希望にて既に取集められたる現品及丸善書店の在庫品のみ購入と決定¥1,317.50 c. 消費組合より寄付せる¥300.00にて <ol style="list-style-type: none"> 1. 明治大正財政史購入¥260.00 2. 徳富氏大日本国民史購入 ¥40.00 <p>次回に於て新年度図書費使途研究の事 本年收入約¥3,200.00にして 使途は従前の通りにして ¥1,200.00 = 邦書学生用 ¥500.00 = 古本購入費 ¥500.00 = Ostrom Lib ¥100.00 = Everyman's Lib Total ¥2,300.00 残高¥900.00 次回に使途研究する事 以上</p> |

| | | |
|----------------|------|--|
| 1938 (昭和13) | 第19回 | <p>図書館評議員会 昭和13年10月22日 午後1時半 於教授閲覧室</p> <p>出席委員 芥川、中江（田中彰寛教授出征の為交代）、中島、松田（Outerbridge 教授代理）等 教授 Matthews 前館長、山本館長、中島司書 欠席 東、佐々木、原田代理 山本館長より依頼せられたる田村教授等</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Mr. Matthews 前館長を正式委員とする事能わざるにより Associate member として御列席を願う事理事会にて許可報告の事 2. 中江教授（予科代表）紹介のこと 3. 前会議録朗読 4. 会計報告 5. 残高整理の件 6. 7月5日大水害にて流失せし学生貸出図書の始末を行う 7. 図書雑誌選択及購入方法の件 8. 外国及内地雑誌の注文決定の件 <p>その他</p> <p>決議及申合</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、2に対して山本館長より御紹介せらる 山本館長開会の祈を自分にて為さる 3. 中島司書より朗読説明をす 4. 中島司書より次の如き会計報告をなす <ol style="list-style-type: none"> a. Standard books ￥1,176.75 支払 198.20 残高 b. Students books ￥476.25 支払 残 ￥723.75 c. Dr. Ostrom Lib と Everyman's lib 等へは全額支払い残高なく決済せる報告あり d. Second hand books に対しては昨年と本年度と合して￥1,000.00 なるも昨年度分にて￥230.69 を支払い￥269.31 残り本年￥500.00 は高商山名教授が暑中休暇中、支那觀察に際し￥500.00 委託せしも支那百科事典￥1,500.00 程なるも丁度￥500.00 にて購入出来その上送料￥96.0 程要するとの事。なるも残高￥180.00 程残る事を報告す e. 消費組合より此度更に￥300.00 寄付ありし事山本館長より報告あり 会計残高￥1,492.76 5. 残高整理に対しては各部门とも今後必要なるに付き残しおき Standard books の￥198.20 中より次の図書購する事に決定す <ol style="list-style-type: none"> (1) 社会事業叢書 全15 vols. ￥21.00 (2) A History of English Law vol.11, 12 ￥60.00 (3) Encyclopaedia of the Laws of England vol. I ￥42.00 (4) Encyclopaedia Britannica book of the 1938 ￥40.00 以上 Total ￥163.00 を支払ものとす 6. 7月5日の大洪水に対して家屋の流失せるに伴い家具一斉流失せる事にて不可抗力にて如何ともなす能わず故に此度の事情を鑑み弁償を免除することに決定するも本人の希望はこの限りに非ず 7. 原案賛成（質問疑義ありたるも館長の説明にて） 8. 外国雑誌及内地雑誌に対しては10月中に各部よりまとめて返事する事に決定 芥川教授の閉会の祈りにて散会時に午後4時半になりき 9. 申合せ当月の雑誌は貸出厳禁する事に決定 以上 |
| | 第20回 | <p>図書館評議員会 昭和14年1月28日午後1時半開会 同4時閉会</p> <p>出席者 東、芥川、原田、マシユース、アウターブリッジ、中江、山本の諸氏 欠席 中島、佐々木の両氏</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前回記録朗読 2. 報告 |

| | | | |
|----------------|------|----|---|
| 1938 (昭和13) | 第20回 | 議題 | a) 中島司書後任として武藤氏への交渉進捗せること |
| | | | b) 財務報告 |
| | | | 1) 図書館費の図書購入費について項目中の説明あり尚その費目中の現状報告ありたり |
| | | | 2) 図書館の予算項目中図書購入費目に於て会計年度末に剰余金を生じたる時は、是を一括 Library Deposit a/c に繰越し次年度の図書購入費に当ること |
| | | | 3) Library Fees を図書館予算として計上し、明年度は下の如く使途を予定せり |
| | | | Japanese new books for student 1,200 |
| | | | Second hand books 500 |
| | | | Special book allowance 300 |
| | | | Standard books 1,200 |
| | | | |
| | | | Library Fees 3,200 |
| | | | 他に Books for General Use 500 |
| | | | |
| | | | 3,700 |
| | | | c) 図書 |
| | | | 1) 支那百科大辞典購入の件 書物代 550 |
| | | | 荷造運賃 104.91 計 654.91 |
| | | | 2) 水害による紛失図書に就て古本勘定より是を補充することを報告し同意を得たり |
| | | | (推定価格¥102 也) |
| | | | d) 雑誌 |
| | | | 本年度予約に就き報告せり |
| | | | 1) 大月氏購入希望の図書は Standard book として購入することに決定す(¥38.50) |
| | | | 2) Hardy 全集の購入に就き芥川委員より購入方決定せるや否や調査の依頼ありたり |
| | | | 3) 本年度に限り各部の図書費は相成べく来年度へ繰越す様各部長に進言すること(館長より) |
| | | | 4) 数冊を要する必需本は図書館に於てリストを作成し、是を各部図書委員に提出したる上可及的に備付くる様なすこと |
| | | | 5) 評議員会の名の下に本年度は各部教授割宛中の図書費より可及的邦文図書を購入せらるる様各部長又は図書委員に依頼すること |
| | | | 6) 基本図書の目録を作成し図書館蔵書を充実する様各部教授に依頼すること。尚前回の同目録は一応返却すること |
| | | | 7) 図書購入に関する新制度を4月より実施することに取運ぶこと。(明細を各教授宛に送付し各委員は教授会又は適当なる機会に於て是が説明をなすこと) |
| | | | 8) アウターブリッジ氏の休暇帰国までに所用古本の調査書を作り、委託購入方を講ずること |
| | | | 9) 雑誌閲覧に就ての神学部之要求。雑誌室に陳列せる雑誌の内特に神学関係の新刊雑誌を神学部へ備付けたき松下部長の希望に否決するに決す |
| | | | 10) 新刊雑誌持出不許可に對し更に新方法を講ずること |
| | | | 11) 藤井勇氏寄贈の¥20 は財務委員會是が使途を決定する職能を有するに就き同会宛提議することとす |
| | | | 12) 図書購入その他重要な図書館の方針を各教授団に説明する為め適當なる会合を図書館に於て開催しては如何との提案に對し図書館に於て考慮することとす |
| | | | 13) 図書館規則の字句を訂正して印刷に附することを承認 |
| | | | 以上 |

| | | |
|----------------|------|--|
| 1939 (昭和14) | 第21回 | <p>2) 基本図書費中より下記図書を購入すること</p> <div>Everyman's Library 100 Encyclopedia of English law, vol.2, 3 } 100.- Vergleichendes Wörterbuch 平凡社 大百科辞典 続編</div> <p>3) 東委員より邦書新刊図書購入費不足につき 200 円及至 300 円増額し基本図書費を減じては如何との提議あり。協議の結果、本年度予算に於いては技術上実行困難につき、基本図書に該当する書は、年額二百円程度基本図書としてその費目より購入することとす</p> <p>4) 古本購入費はアウトワープリッチ部長に依頼せる図書の費用に当てること 以上四件を議決す</p> <p>(ロ) 前年度繰越金の使途に関する件</p> <p>1) 竹友教授、大森助教授、三戸講師、大月教授、玉林教授より申出での基本図書に該当する古典書購入を承認し繰越金より支出すること (総額 234.30)</p> <p>2) 必需本 (閲覧申込多数のもの) にして本館蔵書になきもの、又 2 部以上備えたきものを繰越金より購入すること (総額 約 600)</p> <p>3) 水害により紛失せる図書の補充を繰越金より支出すること (総額 約 100) 以上三件を議決す</p> <p>(ハ) 寄附金の使途に関する件</p> <p>消費組合より寄附金約 300 円あり、右は学生の読物として適当なる全集例えば夏目漱石全集、芥川龍之介全集、世界美術全集等の購入費にあて、一部を以て郷土資料として基本的なる図書、神戸市史続篇、堺市史等の購入をなすことを議決す以上 3 種の予算実行に関する議決を実行の後、残余金の使途は次回の会議に於て協議することとす</p> <p>(ニ) 各部研究室及教授室所蔵図書の目録作製に関する件</p> <p>図書館の管理に属せざる図書と謂えども、学院内に存する図書は出来得る限り図書館に於て目録により一覽し得る様にする事は各研究室の発展に伴い図書配置の傾向ある今日最も必要なる処置を以て院長より各部長へ示達を願い、各部の協力の下に可及的速かに実行することを決議す</p> <p>(ホ) 分類綱目補正に関する件</p> <p>学院の発展と学問の進歩分化のため、現行の分類綱目中に補正を要する点認めらるるにつき図書委員の協力により研究的に補正の方法を行うことを申し合せ且現在分類の不適當なるものに対しては各教授より注意指示を乞い訂正することに努力することを図書館側より約せり</p> <p>(ヘ) 学生閲覧施設に関する件</p> <p>(ト) 時局に対する図書の取扱に関する件</p> <p>以上二件に就いては、前記学生閲覧数漸減の現象に対する対策として充分考究するを要するを以て次回までに考慮することを申合す</p> <p>(チ) 新刊図書見計納入に関する件</p> <p>川瀬書店、丸善より新刊新着図書を可及的多数図書館に持参せしめ、書棚を設けて陳列し、各教授に選択せしむる様、原田委員、芥川委員より提議あり、各委員賛意を表せられしにより、図書館に於て交渉をなすこととせり 以上</p> <p>原野教授閉会祈祷 午後 3 時 40 分閉会</p> |
| | 第22回 | <p>図書館評議員会 昭和 14 年 11 月 18 日 (土) 於教授閲覧室</p> <p>出席者 マシェウス教授、中島教授 (法文)、東教授 (高商)、中江教授 (予科)、 増野教諭 (中学)、山本館長、武藤司書</p> <p>欠席者 原田教授 (商経)、原野教授 (神)、芥川教授 (文)</p> |

1939
(昭和14)
第22回

午後1時30分開会
祈祷 山本館長
議事

1. 前回記録朗読

2. 報告

- イ) アウターブリッジ部長に依頼せし古本購入は希望冊数の十分の一にも達せざる極少数数のみ入手し得たること（その金額約200円）
- ロ) 各部研究室及教授室設置の図書目録の作製は各部事務室の協力によりて進行中なること
- ハ) 学生閲覧施設の改良については大閲覧室の一部に辞書類の自由閲覧所を作りたる処利用多く且憂慮されたる紛失毀損のこともなく、成績良好と認めらるること
- ニ) 学生に対する読書勧奨法として11月中旬に於る読書週間を機とし下記3件の企をなしたること及其成績
 - 1) 特別希望者に書庫内の見学を行わしめたるに（自11月8日至11月11日）56名の見学者ありしこと
 - 2) 11月13日（月）午後3時より読書生活に関する末川博講師、寿岳文章教授の講演会を雑誌室にて開催せしに約130名の学生聴講し非常なる成功を見たること
 - 3) 時局に関する学生の関心に応ずるため、支那社会経済及び歴史地理に関する本館蔵書を別置陳列し読書を勧奨することを実施中なること
- ホ) 丸善及川瀬をして新刊書見計品を図書館一室に於て陳列せしむることは小規模乍ら実行せしめ居るも成績良好ならざること
- ホ) に関して中島教授は右見計納本目録を作製し月1回各教授に通知し、この施設を周知せしむる方法を講ずべきことを提言せられ一同賛成す

3. 協議

- イ) 本年度予算中図書購入費残額下記の様子を報告し、その使用方法に就き協議す
 - Library Fees（繰越金） ￥564.26
 - Second hand books 約 ￥300.00
 - Standard books ￥882.75
 - Japanese new books ￥532.19
 - Special allowance ￥300.00
 - （消費組合寄附金 ￥162.00）洋書購入難の事情に鑑み、各部教授が発見し購入を希望されし良書は出来る限り入手する様にするのみならず、良書の物色を依頼し予算の活用を期することを申合す
- ロ) 各部に於て計上せる図書費は同じく洋書入手難の事情により相当残金を生ずべきにつき、邦書新刊書中の良書をはじめ邦書基本書にして未だ備え付けなきものを此の際購入し以て予算の活用に努むる様評議員に於て配慮することを申し合す
- ハ) 東委員より邦書新刊書購入費が毎月不足し取捨に苦しむを以てその費目の増額又は何等かの対策を講ぜられんことを希望せらる
山本館長より来年度予算に於て多少の増額をなせること及び他費目或は各部計上図書費との融通によりて之に対処すべきことを答弁せらる
- ニ) 消費組合よりの寄附金中より下記の書を購入せることを承知し残額の使途は同じ方針によりて図書館の採量により適当なる書を購入することを議決す
 - 夏目漱石全集 芥川龍之介全集
 - 鴎外全集 翻訳篇 徳富蘆花全集
 - 寺田寅彦全集 有島武郎全集
 - 世界美術全集 日本文化史大系
 - 滋賀県史 堺市史

| | |
|--------------|---|
| 第 22 回 | 兵庫県神社史 明治大正財政史 以上金額 448.50 円 ホ) 中学部増野教諭より同部に於て最近設置したる教授図書室に就き報告ありて 中学部と図書館の關係に就き協議をなす 閉会祈祷 増野教諭 散 会 午後 3 時 30 分 |
| | 図書館評議員会 昭和 15 年 2 月 3 日 於図書館教授閲覧室 出席者 マシユース教授、原田教授 (商経)、原野教授 (神)、芥川教授 (文)、 東教授 (高商)、山本館長、武藤司書、入交書記 欠席者 中島教授 (法文)、中江教授 (予)、増野教諭 (中学) 午後 1 時間会 祈祷 マシユース教授 前回記録朗読 武藤司書 議事 報告 1) 本年度予算の実行状態に関し前回評議会以降に於て購入せる重要書目録を目録 によりて説明し現在残高を費目別に報告す。即ち下記の如し 1. Japanese New Books for Students ￥3.09 2. Standard Books ￥64.09 3. Second Hand Books ￥91.20 4. Special Books Allowance ￥300.00 5. 消費組合寄附金 ￥118.00 6. Reserve ￥409.07 2) 来年度予算に就き館長より下記数字を示し説明あり 1. Japanese New Books for Students ￥1,300.00 (+ 100.00) 2. Standard Books ￥1,200.00 3. Second Hand Books ￥500.00 4. Special Books Allowance ￥500.00 (+ 200.00) 5. Books for General Use ￥500.00 6. Visual Educational Materials ￥50.00 3) 寄贈図書に関し下の如き報告あり イ) 商経学部学生藤井勇君より寄贈の 20 円により「金融大辞典」3 冊、宮本又治 著「近世商業組織の研究」、齋藤利三郎著「國際貨幣制度の研究」を購入せり ロ) 高等商業学校同窓故辰井淳氏の父君辰井友吉氏より故淳氏旧蔵図書 131 冊を 高等商業学校を経て寄贈せらる 協議 1) 本年度予算の実行に関しては邦書新刊書購入費が既に殆ど消費せられ、約 300 円の予算超過になる見込みなる点につき種々協議を行い イ) 超過金額は繰越金によりて補充すること ロ) 来年度は更に選択を厳にし原則として実物を検して後購入決定すること ハ) 各教授、専門に属する基本的図書は成るべく各教授割当金中より購入する様 連絡をとること 二) 選択決定方法につき適當の機会に特別の協議会を催し現行の方法を吟味する こと ホ) 選択に時日を要し閲覧なし得るに至るまでには更に相當の時日を経過するた め新刊書としての生命を失う感にあることに対しては図書館に於ての取扱い 方法につき研究をなし促進策を講ずべきこと等を申し合す |

1
9
3
9
(昭和 14)

第
23
回

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|---|-----------------|------|------------------------------------|-----------|----------------------|---------|----------------------------|----|-------------------|-----------|--------------------|---------|-----------------------|---------|--------------------------|---------|---------------------------------|--------|-----------------------|--------|------------------------|--|-------------------------------------|--------|--------------------|--|----------------------------|--------|------------------------|---------|
| 1939 (昭和14) | 第23回 | <p>2) 各部図書費に関しては前回委員会に於て協議せる如く洋書入手難の事情に鑑み、計上予算の消化に配慮を怠らざるよう努め、残金生ぜる場合は繰越となすやう各部長の了解を得ることを希望する旨申合せをなす</p> <p>3) 基本図書の購入は可及的に評議員会の審議を経るべきことにつき原田委員より注意あり</p> <p>4) 東委員より寄贈図書の取扱いに関し質疑あり、原則としては特別取扱いはず本館蔵書として処置すべきも貴重図書の場合は事情により取扱方法を考慮することを申合す</p> <p>5) 東委員より本図書館事業に特別の後援を続け居らる小田切延壽氏に謝意を表するを適當とする旨、希望せられその方法を研究の上実行すべきことを館長より約言す</p> <p>散会 午後2時半</p> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1940 (昭和15) | 第24回 | <p>図書館評議員会 昭和15年5月16日午後3時 於教授閲覧室</p> <p>出席者 マシウス教授、芥川教授、東教授、中江教授、青木教授(原田教授代理)、松田教授(原野教授代)、中島教授、山本館長、武藤司書、入交書記</p> <p>欠席者 増野教諭(中学部)</p> <p>午後3時15分開会</p> <p>開会の祈祷 武藤司書</p> <p>前回記録朗読 “</p> <p>山本館長挨拶 昨年度図書館概況につき報告をなし評議員諸氏の労を謝すと共に将来の一層の援助を乞わる</p> <p>議事</p> <p>1. 報告</p> <p>イ) 昨年度図書費決算に関し下記報告を行う</p> <table><tr><td>a) Library Fees</td><td>総支出高</td></tr><tr><td>1. Japanese new books for students</td><td>¥1,196.86</td></tr><tr><td>2. Second hand books</td><td>¥365.43</td></tr><tr><td>3. Special books allowance</td><td>¥0</td></tr><tr><td>4. Standard books</td><td>¥1,311.10</td></tr><tr><td>Library Fees として繰越</td><td>¥246.27</td></tr><tr><td>Library Deposit として繰越</td><td>¥335.92</td></tr><tr><td>5. Books for general use</td><td>¥465.11</td></tr><tr><td>6. Visual Educational Materials</td><td>¥24.00</td></tr></table> <p>ロ) 昨年度諸統計に関して武藤司書よりグラフを作製せる一覧表によりて説明あり</p> <p>ハ) 寄贈図書に関して山本館長より下記報告あり、神戸市住岡久穀三郎氏所蔵にかかる「岡久桂堂同松堂手澤本」310部2,146冊を神戸市実業家森本清氏が神戸商工会議所理事福本義亮氏と共に法文学部講師三宅光幸先生の縁故によって学院図書館に買取り寄贈することを考慮せられ、その買取りに要する費用として金1,000円を高等商業部第1回卒業生白石英一郎氏より寄附を受けて、「白石文庫」として右図書を本館に寄贈せられたり</p> <p>2. 協議</p> <p>本年度予算の実行に関し下記の事項を協議決定をなす</p> <p>イ) 基本図書として購入希望の下記図書を承認すること</p> <table><tr><td>Everyman's Library 9冊</td><td>¥15.30</td></tr><tr><td>Schlegelberger, F. ed.</td><td></td></tr><tr><td>Rechtsvergleichendes Handwörterbuch</td><td>¥14.75</td></tr><tr><td>Collingwood, W. G.</td><td></td></tr><tr><td>Life & Work of John Ruskin</td><td>¥35.00</td></tr><tr><td>法文学部 三戸助教授希望法律書(英・独・仏)</td><td>¥191.85</td></tr></table> | a) Library Fees | 総支出高 | 1. Japanese new books for students | ¥1,196.86 | 2. Second hand books | ¥365.43 | 3. Special books allowance | ¥0 | 4. Standard books | ¥1,311.10 | Library Fees として繰越 | ¥246.27 | Library Deposit として繰越 | ¥335.92 | 5. Books for general use | ¥465.11 | 6. Visual Educational Materials | ¥24.00 | Everyman's Library 9冊 | ¥15.30 | Schlegelberger, F. ed. | | Rechtsvergleichendes Handwörterbuch | ¥14.75 | Collingwood, W. G. | | Life & Work of John Ruskin | ¥35.00 | 法文学部 三戸助教授希望法律書(英・独・仏) | ¥191.85 |
| a) Library Fees | 総支出高 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1. Japanese new books for students | ¥1,196.86 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2. Second hand books | ¥365.43 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3. Special books allowance | ¥0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4. Standard books | ¥1,311.10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Library Fees として繰越 | ¥246.27 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Library Deposit として繰越 | ¥335.92 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5. Books for general use | ¥465.11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6. Visual Educational Materials | ¥24.00 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Everyman's Library 9冊 | ¥15.30 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Schlegelberger, F. ed. | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Rechtsvergleichendes Handwörterbuch | ¥14.75 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Collingwood, W. G. | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Life & Work of John Ruskin | ¥35.00 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 法文学部 三戸助教授希望法律書(英・独・仏) | ¥191.85 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | |
|------|---|
| 第24回 | 法学部 片山助教授希望法律書（仏） ￥19.00 文学部 大月教授哲学書（英） ￥29.00 ロ） Loeb classical library は現在丸善より納入せる 60 冊（570 円 1 冊 9 円 50 銭）を全部購入することとし、毎年 200 円宛基本図書費より支払をなすこと ハ） 学生新刊書選択は昨年度予算超過の経験に鑑み厳選主義とし特殊なる書は各部教授に依頼し研究に関係ある教授の割宛金より購入してもらう様になすこと ニ） 新刊書を成るべく早く閲覽せしめ得るようにするため名著と判断せらるるものは選択委員会の議を経ず図書館に於て購入の決定をなし得ることとし、可及的速やかに処理をなして閲覽へまわすこと 以上 散会 午後 4 時 50 分 |
| | 図書館評議員会 昭和 15 年 11 月 21 日（木）於教授閲覽室 出席者 マシユース教授、中島教授、池内教授、芥川教授、濱田教授（中澤教授代理）、中江教授（遅参）、山本館長、武藤司書、入交書記 欠席者 増野教諭、原野教授 午後 3 時 20 分開会 開会祈祷 山本館長 前回記録朗読 武藤司書 議事 報告 1） 評議員更迭の件 商経学部原田教授部長就任のため評議員を辞され池内教授代って就任せられしこと及高等商業学校東教授内地留学にて半ヶ年休任中、中澤教授代って評議員の任に当られしこと 2） 図書館主催読書週間に関する件 昨年 11 月、始めて催して成功を収めたる読書週間を今年も催し、下記の 3 行事を行い成功を見たること イ） 11 月 19 日（月）午後 3 時より雑誌閲覽室にて「学生生活と読書」と題し商経学部堀経夫教授、法学部竹友庸雄教授、読書法、読書回顧に関する講演会を開催す。聴衆約 60 名 ロ） 11 月 19 日（月）より 22 日（金）まで特別希望者に書庫内見学を行わしめたるに 115 名の見学者あり ハ） 11 月 19 日（月）より 30 日（土）まで 2 週間「教養良書百選」と題し学生の教養のため最も適当と認めらるる名著 100 種を蔵書中より選び、新刊書陳列棚に展示し且その目録をプリントして希望者に配布せり 3） 点字図書受贈の件 神学部同窓熊谷鐵太郎氏より氏の製作にかかる点字図書及び所蔵の点字図書 83 部の寄贈ありしこと 4） 来年度雑誌の注文に関する件 ほぼ今年度と同じく継続注文せるも下記の如き変更ありしこと 中 止 ・Survey and Graphic（文学部） 新規購入 ・English Review（文学部） ・Finanz Archiv（商経） ・Weltwirtschaftliche Archiv（商経） 5） 本年度予算の実行に関する件 10 月末日に於ける本年度予算実行状態下記の如し 残高 1. Japanese New Books ￥918.15 ￥381.95 2. Standard Books 777.75 422.25 3. Secondhand books 278.50 221.50 4. Special books Allowance 500.00 |

| | | |
|----------------------------|------|---|
| 1 9 4 0 (昭和15) | 第25回 | 5. Library Deposit 33.50 302.42 6. Books for General Use 273.85 226.15 7. 繰越金 434.57 8. 消費組合寄附金 250.00 計 ¥2,281.75 ¥2,738.74 |
| | | 協議 |
| 1 9 4 0 (昭和15) | 第25回 | 1) 上記予算の実行経過の承認を行いし後、残額の使途に関し下の如き決定をなす イ) 基本図書として購入希望の下記図書を承認すること (高商) 馬淵教授、品川教授、牧岡教授、加藤教授希望 1. Arnould on Marine Insurance 2 vols 95.00 1. Urban, W. M., Language and Reality 20.00 1. Hoche, W. ed., Deutsches Kriegsrecht 52.20 1. Norton, C. E., Letters of Thomas Carlyle 15.25 (文学部) 大月教授希望 1. Mactaggart, M. Man, Mind & Psychology 他 3 冊 35.10 (予科) 田中教授、玉林教授 1. Das deutsche Dichter der Gegenwart 52.80 1. Die grossen Deutschen 1, 2, 3 71.70 (法文学部) 小松教授 1. Boehm, Das Eigenständige Volk 他 4 冊 79.00 竹友教授 1. An Early Eng. Pronunciation with Special reference to Shakespeare & Chocer 160.00 大石教授 1. Jennings, Parliament 他 1 冊 38.00 大森助教授 1. Festgabe für Reinhard von Frank zum 70 Geburtstag 2 Bde 他 5 冊 153.30 今田教授 1. Murchison, History of Psychology in Autobiography 27.50 三戸助教授 1. Wenger, Institutes of the Roman law of civil procedure 他 9 冊 106.20 片山助教授 1. 判例体系 154.00 志賀教授 1. Adams, H. Mont-Saint-Michel & Chartres 他 3 部 45.60 図書館 1. Fichtes Schriften 7 Bde 84.00 ロ) 三戸助教授希望、Bibliographie de Science sociale 他 12 冊 ¥272.55 は法文学部図書費負担の方法を考究すること 2) 芥川教授の希望申出により Hardy の全集を神戸ロゴス書店より購入することを承認す 午後 4 時 40 分開会 尚、引続き 5 時より院内教授食堂に於て評議員に読書週間講演会講師、堀教授及び竹友教授を加え晚餐を共にし懇談をなせり 以上 |
| | | 第26回 図書館評議員会 昭和 16 年 2 月 27 日 (木) 於教授閲覧室 出席者 マシユース教授、中島教授 (法文)、芥川教授 (文)、濱田教授 (高商) (中澤教授代理)、増野教諭 (中)、山本館長、武藤司書、入交書記 欠席者 池内教授 (商経)、原野教授 (神)、中江教授 (予) |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|----------|---|----|----|----|-----------|----------|-------|-------|--------|--------|---------|--------|--------|---------|----------|---------|--------|--|--|-----------------|--------|--------|--|----------|--------|---------------------------------|--------|---|----------|--------------------------|--------|-----------------------------------|--------|--------------------------|----------|---|----------|
| 1940 (昭和15) | 第26回 | 午後3時15分開会 祈祷 山本館長 前回記録朗読 武藤司書 議事 協議事項及報告事項 イ) 本年度予算の実行状態に関し、下記の数字を報告、承認をなす <table><tr><td></td><td>支出</td><td>残高</td></tr><tr><td>邦文新刊図書購入費</td><td>1,284.65</td><td>15.35</td></tr><tr><td>古本購入費</td><td>303.50</td><td>196.50</td></tr><tr><td>特別図書購入費</td><td>167.95</td><td>332.05</td></tr><tr><td>基本図書購入費</td><td>1,790.85</td><td>-156.28</td></tr><tr><td>前年度繰越金</td><td></td><td></td></tr><tr><td>予備金(消費組合寄附金を含む)</td><td>153.90</td><td>432.02</td></tr><tr><td></td><td>3,700.85</td><td>819.64</td></tr></table> <p>ロ) 右残金中11、12、1、2月の4ヶ月新刊邦書購入のため約400円、Matthews教授旧蔵図書103冊譲受け謝礼金として250円、Albright教授旧蔵植物図鑑及文学図鑑購入費として60円支出の件を承認す</p> <p>ハ) 各部図書費に若干の残額あるに付き法文学部三戸助教授、文学部大月教授より基本図書として買入希望の書は、それぞれ各部の残金にて支出の方法を講ずる方針を以て部長に交渉することを申合せ、併せて残金は図書費として繰越すことを各部長に希望すべきことを申合す</p> <p>二) 来年度図書館予算の割当て下記の通り決定を見たる旨館長より報告あり</p> <table><tr><td>一般参考図書費 (Books for general Use)</td><td>500.00</td></tr><tr><td>邦文新刊図書費 (Japanese new books for Students)</td><td>1,300.00</td></tr><tr><td>古本購入費 (Secondhand books)</td><td>500.00</td></tr><tr><td>特別図書購入費 (Special books Allowance)</td><td>500.00</td></tr><tr><td>基本図書購入費 (Standard Books)</td><td>1,200.00</td></tr><tr><td>計</td><td>4,000.00</td></tr></table> <p>ホ) 各部予算に計上せられたる図書、雑誌に関する費用は総計¥13,575.00に達し、之に上記¥4,000.00を加うときは¥17,575となる旨館長より報告あり</p> <p>ヘ) 寄贈図書に関し、下記報告あり</p> <p>(1) ベーツ名誉院長御帰国に当り御所蔵の図書353冊を寄附せられたるにより之を Library of C. J. L. Bates と名付け永く先生を記念すること</p> <p>(2) 木村忠篤氏(貞橘氏令息)より英書97冊の寄贈ありしこと</p> <p>(3) 小寺修三氏(小寺敬一教授令弟)より保険海運に関する英書60冊の寄贈ありしこと</p> <p>ト) 宣教師帰国に当り図書購入基金として¥2,756.56の寄附ありし旨館長より報告あり</p> <p>以上にて議事を終る</p> <p>Matthews 評議員今回帰国せらるることとなりしに付き、館長よりその多年図書館長として又評議員として尽力せられたる功勞に対し謝辞を呈す</p> <p>午後4時10分 散会</p> | | 支出 | 残高 | 邦文新刊図書購入費 | 1,284.65 | 15.35 | 古本購入費 | 303.50 | 196.50 | 特別図書購入費 | 167.95 | 332.05 | 基本図書購入費 | 1,790.85 | -156.28 | 前年度繰越金 | | | 予備金(消費組合寄附金を含む) | 153.90 | 432.02 | | 3,700.85 | 819.64 | 一般参考図書費 (Books for general Use) | 500.00 | 邦文新刊図書費 (Japanese new books for Students) | 1,300.00 | 古本購入費 (Secondhand books) | 500.00 | 特別図書購入費 (Special books Allowance) | 500.00 | 基本図書購入費 (Standard Books) | 1,200.00 | 計 | 4,000.00 |
| | | 支出 | 残高 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 邦文新刊図書購入費 | 1,284.65 | 15.35 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 古本購入費 | 303.50 | 196.50 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 特別図書購入費 | 167.95 | 332.05 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 基本図書購入費 | 1,790.85 | -156.28 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 前年度繰越金 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 予備金(消費組合寄附金を含む) | 153.90 | 432.02 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 3,700.85 | 819.64 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 一般参考図書費 (Books for general Use) | 500.00 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 邦文新刊図書費 (Japanese new books for Students) | 1,300.00 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 古本購入費 (Secondhand books) | 500.00 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 特別図書購入費 (Special books Allowance) | 500.00 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 基本図書購入費 (Standard Books) | 1,200.00 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | 4,000.00 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1941 (昭和16) | 第27回 | 図書館評議員会 昭和16年5月29日(木) 於教授閲覧室 出席者 芥川教授(文)、原野教授(神)、中江教授(予)、竹友教授(中島教授代理-法文)、山本館長、武藤司書、入交書記 欠席者 小宮教授(商経)、東教授(高商)、増野教諭(中) 午後3時15分開会 祈祷 原野教授 前回記録朗読 武藤司書 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

報告及協議

(イ)昨年度図書館諸統計の報告を印刷物によりて行う。主なる事項は蔵書増加数 1,820 冊、図書館利用者総数 16,423 人 (1 日平均 61 人)、利用図書総数 24,065 冊 (1 日平均 90 冊)、等にして昨年度に比し利用者数に於て 942 人 (1 日平均 2 人) 冊数に於て 1,667 冊 (1 日平均 5 冊) の増加を見たるは昭和 11 年度以来毎年漸減の数字を示せる近年の傾向を脱せるものとして注意に値すべし

(ロ)昨年度図書館費の決算に就き下記の通り報告をなす

| | 予算 | 決算 |
|------------|----------|----------|
| 1. 基本図書費 | 1,200.00 | 1,790.85 |
| 2. 邦文新刊書費 | 1,300.00 | 1,364.55 |
| 3. 古本費 | 500.00 | 613.50 |
| 4. 特別図書費 | 500.00 | 317.00 |
| 5. 一般参考図書費 | 500.00 | 332.55 |
| 小計 | 4,000.00 | 4,419.40 |
| 繰越予備金 | 335.92 | |
| 前年度繰越金 | 434.57 | |
| 消費組合寄附金 | 250.00 | 369.40 |
| 小計 | 1,020.49 | 369.40 |
| 総計 | 5,020.49 | 4,788.80 |
| 差引繰越 | | 231.69 |
| | 5,020.49 | 5,020.49 |

(ハ)本年度予算の実行に関し下記の如く協議決定をなす

1) 基本図書費及古本費より購入希望の図書中下記のものを選択決定す

| | |
|---|-----------|
| 法文学部三戸助教授及大森教授 | |
| 1. Mommsen, Römische Strafrecht | ¥95.00 |
| 1. Brunner, Die Entstehung der Schwurgerichte | ¥100.00 |
| 法文学部大森教授 | |
| 1. Köstlin, Geschichte des deutschen Strafrechts | ¥151.00 |
| 1. Köstlin, Neue Revision des Kriminalrechts | ¥60.00 |
| 法文学部片山(謙)助教授 | |
| 1. Dalloz, Dictionnaire de droit 3 vols. | ¥60.00 |
| 法文学部志賀教授 | |
| 1. Rudyard Kipling's Verse Inclusive ed. | ¥20.00 |
| 1. Poetical Works of W. Woodsworth 6 vols. | ¥25.00 |
| 1. Eliot, Works 8 vols. | ¥24.00 |
| 文学部寿岳教授 | |
| 1. Cambridge Bibliography of English Literature 3 vols. | ¥162.50 |
| 文学部芥川教授 | |
| 1. Scot, Works | ¥100.00 |
| 図書館 | |
| 1. Loeb classical library 22 vols. | ¥218.00 |
| 1. Encyclopaedia of the Laws of England | ¥46.00 |
| 以上基本図書費 | 計 ¥925.00 |
| 予科田中教授 | |
| 1. Consary, Schiller | ¥11.00 |
| 他 13 冊 | 計 ¥65.00 |
| 法学部實方講師 | |
| 1. 日本俳書大系 | ¥70.00 |

| | | | |
|----------------|--|---------|---------|
| 第27回 | 以上古本費 | 計 | ¥135.00 |
| | 文学部寿岳教授 | | |
| 1941 (昭和16) | 1. Franchet et Savatier, Enumeratio plantarum Japanicarum 2 vols. | | ¥20.00 |
| | 1. Bretschneider, Botanicon Sinicum 3 vols. | | ¥36.00 |
| | 以上特別費 | 計 | ¥56.00 |
| | 2) 邦文新刊書購入は昨年度単価3、4割方騰貴せしため予算の不足を見たる実情に鑑み本年度は充分選択に努むべき事を申し合せ、館長より選択のため特別委員に協力を懇請せられたり | | |
| | 3) 消費組合寄附金は昨年度に引続き学生のための叢書類、資料類購入に用いること | | |
| | (ニ)ニュートン博士の残されたる図書基金¥2,813.47は当分基金として存置し、博士を記念するに相応しき良書が入手できる機会を待つことに決定す | | |
| | (ホ)学生に対する図書館利用勸奨の方法につき協議し、開架式書棚の増加、夜間開館、教養文庫の設置等種々の意見の開陳あり。図書館に於て慎重研究の上可及的に実現を図ることを申合す | | |
| | 午後4時45分閉会 | | |
| | 図書館評議員会 昭和16年12月11日(木) 於図書館教授閲覧室 | | |
| | 出席者 中島教授(法文)、原野教授(神)、山本館長、武藤司書、入交書記 | | |
| 第28回 | 欠席者 小宮教授(商経)、東教授(高商)、中江教授(予)、芥川教授(文)、増野教諭(中) | | |
| | 午後3時開会 | | |
| | 祈祷 山本館長 | | |
| | 前回記録朗読 武藤司書 | | |
| | 協議及報告 | | |
| | イ) 本年度図書館予算の実行状態に関し下記報告を行う | | |
| | 支出 残高 | | |
| | 邦文新刊図書購入費 ¥766.05 ¥533.95 | | |
| | 基本図書購入費 ¥1,020.05 ¥179.95 | | |
| | 古本購入費 ¥245.00 ¥255.00 | | |
| | 特別図書購入費 ¥186.00 ¥314.00 | | |
| | 一般参考図書購入費 ¥293.40 ¥206.60 | | |
| | 計 ¥2,510.50 ¥1,489.50 | | |
| | ロ) 上記残金の使途に関し協議をなし下記各教授より購入希望ある図書の買入れを決定す。但し支出費課目は適宜振当つることとす | | |
| | (法文) 小松教授 | | |
| | Groves, E. R., Family & It's Social Functions 他42冊 | ¥167.15 | |
| | (法文) 志賀教授 | | |
| | Mencken, H. L., Prejudices First Series 他16冊 | ¥95.65 | |
| | (法文) 竹友教授 | | |
| | Carlyles, A., New Letters of Thomas Carlyle 他4冊 | ¥95.00 | |
| | (文) 大月教授 | | |
| | Dewey, Reconstruction in Philosophy 他2冊 | ¥23.70 | |
| | (高商) 玉谷教授 | | |
| | Muzzey, American Adventure 他2冊 | ¥34.00 | |
| | 以上 計71冊 | ¥415.50 | |
| | (法文) 三戸助教購入希望の基本図書中未払のもの¥404.15あるに付き100円程度支払いをなし残余は別途金(法文学部図書費)により清算するよう交渉すること | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|-----------|--|--|----|----|-----------|-----------|--------|---------|-----------|-------|-------|---------|--------|---------|---------|--------|-----------|---------|--------|---|-----------|
| 1941 (昭和16) | 第28回 | <p>図書館に於て元神戸女学院教授故横川四十八氏蔵書中心理学関係の図書雑誌 95 点計 ¥547.80 を丸善より購入なしたき希望あるも右は先ず 100 円程度内金を支払い、残高は年度末残金ある場合及び来年度早々に支払の方法によりて買入れること</p> <p>ハ) 例年の行事たる読書週間に關し下記報告あり</p> <p>1) 11 月 13 日 (金曜日) 午後 3 時より雑誌室に於て法文学部講師三宅光華氏を講師とし「古典の精神」と題する講演会を開催せり。聴衆 50 名を集め得たり</p> <p>2) 右講演に因み 13 日 (金) 及 14 日 (土) の両日 2 階大閲覧室の一部に於て古事記及日本書紀の古写本に關する展覧会を行い本館蔵書及び西宮市吉井良尚氏の好意により貸与を受けたる図書を展観。熱心なる見学者を集めたり</p> <p>3) 書庫見学を許したところ 170 名の見学者ありたり</p> <p>(期間 11 月 8 日 (月) より同 15 日 (土)迄)</p> <p>ニ) 甲東園住宅地居住、武田鼎一氏より 90 冊、商經学部在学中逝去したる牧野謙一君父君よりトルストキ全集 (22 冊) 及藤村全集 (8 冊) の寄附を受けし旨報告す</p> <p>午後 4 時散会</p> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 第29回 | <p>図書館評議員会 昭和 17 年 2 月 23 日 於図書館教授閲覧室</p> <p>出席者 小宮教授 (商經)、東教授 (高商)、中江教授 (予科)、山本館長、武藤司書</p> <p>欠席者 中島教授 (法文)、原野教授 (神)、芥川教授 (文)、増野教諭 (中)</p> <p>午後 3 時 15 分開会</p> <p>祈祷 中江教授</p> <p>前回記録朗読</p> <p>議事</p> <p>報告及協議</p> <p>イ) 16 年度図書館予算の実行状況に關し下記の報告あり</p> <table><tr><td></td><td>支出</td><td>残高</td></tr><tr><td>邦文新刊図書購入費</td><td>¥1,253.55</td><td>¥46.45</td></tr><tr><td>基本図書購入費</td><td>¥1,198.60</td><td>¥1.40</td></tr><tr><td>古本購入費</td><td>¥455.10</td><td>¥44.90</td></tr><tr><td>特別図書購入費</td><td>¥471.85</td><td>¥28.10</td></tr><tr><td>一般参考図書購入費</td><td>¥463.50</td><td>¥36.50</td></tr><tr><td>計</td><td>¥3,742.60</td><td>¥257.40</td></tr></table> <p>ロ) 文学部寿岳教授の斡旋により河上肇博士旧蔵の Smith, Adams Wealth of Nations 1776 (初版) 入手し得る見込みにつき右代金 700 円を商經学部及高商の教授割当費中より關係教授の了解を得て支出を乞い、図書館に於て残余を負担して調達する案について武藤司書より提案あり</p> <p>購入の方針につきましては異議なく可決し代金分担の方法に就きては更に關係部長と協議の上決定することとなす</p> <p>ハ) 神学部より Eusebius の教会史 (ギリシャ語版) ¥60 を基本図書費にて購入を希望申出あり。年度末残金なきときは新年度にて購入のことを承認す</p> <p>ニ) 洋書の新刊書購入不能となれる關係上各部教授に於て邦文新刊書を購入せらるること多くなりたるを以て図書館に於ける邦文新刊書購入と重複を來す場合も多かるべきを慮り図書館と各教授との連絡を遺憾ならしめて重複を成るべく避ける様努むる必要ある点を各教授に対し通告せしことを報告し委員の協力を懇請するところあり</p> <p>ホ) 図書館所管外の図書に關する調査一覧を配布し将来右図書を図書館に於て総覧なし得るようになす方針につき司書より説明あり</p> <p>午後 4 時 15 分散会</p> | | 支出 | 残高 | 邦文新刊図書購入費 | ¥1,253.55 | ¥46.45 | 基本図書購入費 | ¥1,198.60 | ¥1.40 | 古本購入費 | ¥455.10 | ¥44.90 | 特別図書購入費 | ¥471.85 | ¥28.10 | 一般参考図書購入費 | ¥463.50 | ¥36.50 | 計 | ¥3,742.60 |
| | 支出 | 残高 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 邦文新刊図書購入費 | ¥1,253.55 | ¥46.45 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 基本図書購入費 | ¥1,198.60 | ¥1.40 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 古本購入費 | ¥455.10 | ¥44.90 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 特別図書購入費 | ¥471.85 | ¥28.10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 一般参考図書購入費 | ¥463.50 | ¥36.50 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | ¥3,742.60 | ¥257.40 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

1942(昭和17)

第30回

図書館評議員会 昭和17年6月18日(木) 於図書館教授閲覧室

出席者

寿岳教授(文学部)、中江教授(予科)、池内教授(商経学部)(途中退席)、山本館長、武藤司書

欠席者

中島教授(法文)、東教授(高商)、原野教授(神)、増野教諭(中)

午後3時10分開会

祈祷 山本館長

前回記録朗読 武藤司書

議事

報告事項

(イ)昭和16年度館務及諸統計に関し武藤司書より概要下記の如き報告あり

I) 昭和16年度末に於て登録蔵書数5万52冊に到達せること

II) アダム・スミス国富論初版本(1776年)を入手なし得たること

右に要せし費用は商経学部(¥150) 高等商業学校(¥150)

予科(¥30)、消費組合寄附金(¥170) 森本文庫寄付金(¥200)より分担支弁せること(計¥700)

III) 外国雑誌の購入の方途絶えたるも、将来に於てバックナンバーを購入なし得るよう外国雑誌購入費を積立ておくことにつき各部長の了解を得たること

IV) 昨年度中の本館利用状況は連年の漸減傾向を脱して増加を示したるが16年度に於ても人員に於て殆んど差なく冊数に於て1日26冊の増加を見たること。即、利用者総数16,434人、利用図書数31,618冊、開館日数272日、1日平均60人強、冊数116冊なり

V) 書庫拡張の応急策として時計台下空室を利用し、書庫別室を設けしこと

VI) 蔵書5万冊記念並びにアダム・スミス国富論初版入手と予て学院に寄贈せられありし柴田文庫が本館の管理に帰したることを記念するため5月22日下記の如き講演会を催し成功を収めたること

十八世紀の英国出版会 専門教授 寿岳文章氏

スミス経済学の国民性 高等商業学校教授 大道安次郎氏

関西学院大学とオーウェン研究 東亜同文書院大学教授 北野大吉氏

(ロ)昭和16年度会計報告を下記の如く行う

| | 予算 | 購入高 | 残額又は超過額 |
|-----------|----------|----------|---------|
| 邦文新刊図書購入費 | 1,300.00 | 1,365.75 | -65.75 |
| 古本購入費 | 500.00 | 477.10 | 22.90 |
| 特別図書購入費 | 500.00 | 499.85 | .15 |
| 基本図書購入費 | 1,200.00 | 1,301.10 | -101.10 |
| 一般参考図書購入費 | 500.00 | 372.70 | 127.30 |
| Total | 4,000.00 | 4,016.50 | -16.50 |

協議事項

(ハ)本年度予算は昨年度予算と同一なることを報告し、右の実行に関し次の如き協議及決定をなす

1) 前年度より継続購入のLoeb Classical Libraryの未払額¥190.00の支出

2) 横川元神戸女学院教授旧蔵の心理学関係図書の購入(丸善を通じて)未払金¥372.45の内、¥109.80を図書館にて負担し残額は法文にて支払をなすこと

3) 二宮尊徳全集¥345.00の購入希望を高商東教授予科玉林教授より申出られしにつき高商にて¥100.00予科にて¥100.00を負担するを得ば残額¥145.00は図書館にて負担して可なること

4) 下記図書を基本図書として購入のこと

Hawthorne 全集 15冊 ¥95.00

Lowell 全集 11冊 ¥51.85 (法文志賀教授)

文芸誌“The Dome” 2巻-7巻 ¥35.00 (法文竹友教授)

法文三戸助教授希望 法政史関係文献

第30回

Windscheid, Lehrbuch des Pandektenrechts 3 Bde

¥165.00

他 計

¥225.00

5) 神学部松田教授の希望によりオイセイブススの教会史 (ラテン原書) ¥60.00

を購入せることの承認をなす

(以上にて基本図書費その他にて購入の支出額計¥926.65 となる)

午後4時20分散会

1942 (昭和17)

第31回

図書館評議員会 昭和17年11月26日 (木) 於図書館教授閲覧室

出席者

東教授 (高等商業学校)、中江教授 (予科)、高安教諭 (中学部)、武藤司書、入交書記

欠席者

中島教授 (法文学部)、池内教授 (商経学部)、原野教授 (神学部)、寿岳教授 (文学部)、山本館長

午後3時15分開会

祈祷 中江教授

中学部図書館評議員増野教諭先般退任せられたるにより後任として高安教諭選任せられしことを紹介し出席の同教諭より挨拶あり

次に山本館長要務のため上京中にて欠席の由報告し了解を求め武藤司書代りて議事を司る

議事

イ) 前回記録朗読

ロ) 本年度予算の実行状況につき下記の報告をなす

| | 予算 | 購入額 | 残額 |
|-----------|----------|----------|----------|
| 一般参考図書購入費 | 500.00 | 74.00 | 426.00 |
| 基本図書購入費 | 1,200.00 | 1,124.00 | 75.10 |
| 邦文新刊図書購入費 | 1,300.00 | 966.54 | 333.46 |
| 古本購入費 | 500.00 | 137.43 | 362.57 |
| 特別図書購入費 | 500.00 | 500.00 | |
| 計 | 4,000.00 | 2,302.87 | 1,697.13 |

ハ) 基本図書として買入希望申出ある下記図書の購入の可否を議し之を承認す

1) 法文学部志賀教授希望、英米文学に関する図書

Complete poetical works of Holmes ¥10.00 他 16 部 計¥105.65

2) 予科田中、玉林両教授希望ドイツ文学及ドイツ語学に関する図書

Grillparzer: Werke 5 Bde ¥25.00 他 5 部 計¥90.40

及 Müller: Allgemeines Künstler-Lexikon 5 Bde ¥73.00

但し基本図書購入費は残額¥75.00 なるにつき他の費目より支出すること

ニ) 新刊図書の単価が5割以上値上りのため新刊図書購入費¥1,300.00 にては到底新刊良書の買入れを行い難き実情にあり約¥300.00 予算超過の見込になることに

関し協議し、可及的に各教授割当の図書費中より購入し上述の不足を補い新刊良書の消化に努むべきことを申合せ且此の点を各図書委員より各部教授に徹底せしむるよう計るべきことを議す

ホ) 曾木銀次郎氏より切支丹史に関する邦文図書の譲渡を受け、その代金¥91.68 を古本費より支出せしことにつき承認を求め異議なく之を認む

ヘ) 例年通り読書週間行事として去る 11 月 18 日本館大閲覧室に於て下記の如き講演及び関係文献の展覧を行い、盛会裡に終了せんことの報告あり

講演会 自然主義前後 法文学部教授 志賀勝氏

漱石先生に就て 法文学部講師 北島霞江氏

展観 漱石遺墨及作品及芥川龍之介遺墨及作品

なお「龍之介の憶出」と題し法文学部講師恒藤恭氏の講演ありし筈のところ御病気のため中止となれり

第31回

ト) 昭和4年以来本館書記として館務に尽瘁せられたる曾木弥太郎氏が今回一身上の都合により去る10月末日を以て辞任せられしこと報告あり

以上に協議及報告を終る

東委員より出納手の訓練、学生に対する読書奨励策等の件につき意見の開陳あり。又、新刊図書中購入洩れを防ぐ方法として出版図書一覧の登載ある「出版普及」誌を委員に回覧する方法を採用したきことにつき意見の交換を行う

午後4時10分散会

1942
(昭和17)

第32回

図書館評議会 昭和18年2月24日 於図書館教授閲覧室

出席者
東教授（高等商業学校）、石本教授（法文学部）、中江教授（予科）、
原野教授（神学部）、山本館長、武藤司書、入交書記

欠席者
寿岳教授（文学部）、池内教授（商経学部）、高安教諭（中学部）

午後3時15分開会

祈祷 山本館長

法文学部図書館評議員中島重教授先般退任せられその後任として石本雅男教授選任せられしことを館長より報告し出席の石本教授を紹介せらる

前回記録朗読 武藤司書

議事

1) 報告事項

イ) 本年度図書館予算の実行に関し下記の報告をなす

| | 費目 | 予算 | 購入金額 |
|-----------|----------|----------|----------|
| 一般参考図書購入費 | 500.00 | 143.25 | 356.75 |
| 基本図書購入費 | 1,200.00 | 1,159.70 | 40.30 |
| 邦文新刊図書購入費 | 1,300.00 | 1,569.39 | - 269.39 |
| 古本購入費 | 500.00 | 266.48 | 233.52 |
| 特別図書購入費 | 500.00 | 421.60 | 78.40 |
| 計 | 4,000.00 | 3,560.42 | 439.58 |

ロ) 前回評議会にて基本図書として購入決定をなせしもの、他下記図書を特別図書費にて購入せしことを報告、承認を求む

| | |
|---------|---------|
| 東洋歴史大辞典 | ¥56.00 |
| 校異 源氏物語 | ¥120.00 |

2) 協議事項

イ) 法文学部三戸助教授より基本図書として購入希望ありたる下記図書につき審議し、これを可決す。但し購入費目は基本図書費既に残余なきを以て他費日より支出することす

Mommsen, Histoire Romaine, 7 tomes (¥75.00)

Crispi Sallustii Opera Omnia quae exstant, 1690 (¥48.00)他3部 ¥189.00

ロ) 各部図書費予算の実行状況に関し、東委員、入交書記より報告あり。剰余を見たる場合例年の如く来年度該部図書費中に繰越をするよう図書館より各部長に交渉了解を得ることを申合す

以上に報告及協議を終了す

山本館長より来る3月末日を以て定年制により退任せらるるにつき御挨拶あり。これに対し東委員全評議員を代表して館長多年の尽瘁に対して謝辞を呈す。次に後任館長として決定を見たる東委員より御挨拶あり。了りて原野委員の祈祷あり

散会午後4時20分

| | |
|--|--|
| <p>第 33 回</p> <p>1 9 4 3 (昭和 18)</p> | <p>図書館評議員会 昭和 18 年 5 月 27 日 (木) 於図書館教授閲覧室</p> <p>出席者 池内教授 (商経学部)、寿岳教授 (文学部)、山田教授 (予科)、東館長、竹林司書、入交書記</p> <p>欠席者 石本教授 (法文学部)、中澤教授 (高等商業学校)、手塚教諭 (中学部)</p> <p>祈祷 東館長</p> <p>山本前館長 3 月末を以て定年退職せられ、後任として就任せる旨の挨拶を述べ、武藤司書の後任として竹林司書を紹介せらる</p> <p>前回記録朗読 竹林司書</p> <p>議事</p> <p>(1) 報告</p> <p>イ) 評議員の移動に関する件 商経学部池内教授、予科山田教授、高等商業学校中澤教授、中学部手塚教諭新任せらる</p> <p>ロ) 昨 17 年度図書館統計及決算に関する件 理事会に提出せる昭和 17 年度図書館報告につき重要な事項を説明せらる</p> <p>ハ) 本年度予算並に実行に関する件 昨年度と同様なるが会計課長の意向としては繰越は中止したとし</p> <p>ニ) 邦文新刊図書購入方法に関する件 日本図書館協会の新刊図書優先配給に就て入交書記の説明を聞く</p> <p>ホ) 寄贈図書に関する件 故高安克巳教諭遺族より寄贈図書 1,816 冊雑誌 326 冊、故柳原正義教授遺族より寄贈図書約 900 部を受領</p> <p>(2) 協議事項</p> <p>イ) 時局に即したる邦文雑誌を此際可及の多数図書館に備付ける様各部長に進言すること、而して図書館は必要雑誌の調査をなすこと</p> <p>ロ) 委員会に提出せられたる希望図書は全部購入すること。但し費目は館長に於て適宜決定のこと</p> <p>館長の挨拶にて閉会。午後 5 時</p> |
| <p>第 34 回</p> | <p>図書館評議員会 昭和 18 年 10 月 22 日 (金) 於図書館教授閲覧室</p> <p>出席者 石本教授 (法文学部)、玉谷教授 (高商)、山田教授 (予科)、手塚教諭 (中学部)、東館長、竹林司書、入交書記</p> <p>欠席者 池内教授 (商経学部)、寿岳教授 (文学部)</p> <p>午後 3 時 30 分開会</p> <p>祈祷 東館長</p> <p>(一) 報告</p> <p>イ) 4 月以降 9 月末日に至るまでの図書購入の状況を各学部、予科、高商につき報告</p> <p>ロ) 新規購入雑誌 (22 種) につき報告</p> <p>(二) 特別購入図書につき追認を求むる件 Annals of Commerce 4 冊 (価格 650 円) に対し図書館より 250 円、商経学部より 200 円、高等商業学校より 200 円を支出せる旨を述べて承認を求む</p> <p>(三) 希望図書</p> <p>イ) 委員会に提出せられる希望図書のうち予科、中学部の分は既に蔵書中にあるを以て撤回</p> <p>ロ) 法文学部提出の分に対しては法文学部より費用の提供を希望して保留</p> <p>ハ) 高等商業学校提出の分は高等商業学校より費用を提供することとして可決</p> <p>(四) 教授所蔵図書のうち図書館に譲渡せられ得べきものにつき協力を求め了承せらる</p> <p>(五) 図書館の充実経営につき意見を求めたるに対し各委員より夫々意見の開陳あり</p> <p>午後 5 時散会</p> |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|-----------|---|-----------|-------|--|-----------|---------|--|---------|-------|--|-------|-------|--|---------|-------|-----------|-------|---------|--|-------|-------|--|--------|---------|--|------------|----------|------------|------|-------|---------------|----|-------|-----|-------|-------------|---|-------|
| 1 9 4 4 (昭和19) | 第1回 | <p>図書館委員会 昭和19年5月26日 於本館教授閲覧室</p> <p>出席者 石本、柏井、奥田、寿岳、東、入交</p> <p>欠席者 野本、手塚</p> <p>議事</p> <p>1. 東館長より昭和18年度図書館報告（理事会提出のものと同文）につき詳細に説明す 報告書中、専門図書館に関する件につきましては委員に於ても考究せられたき旨館長より依頼す</p> <p>2. 東館長より本年度図書購入予算につき説明す 本年度図書購入予算次の如し</p> <p>イ) 図書館に於ける図書購入費</p> <table><tr><td>1. 一般参考図書</td><td>500 円</td><td></td></tr><tr><td>2. 邦文新刊図書</td><td>2,000 円</td><td></td></tr><tr><td>3. 基本図書</td><td>600 円</td><td></td></tr><tr><td>4. 古本</td><td>500 円</td><td></td></tr><tr><td>5. 特別図書</td><td>500 円</td><td>計 4,100 円</td></tr></table> <p>ロ) 各部に於ける図書購入費</p> <table><tr><td>1. 学部</td><td>2,000 円</td><td></td></tr><tr><td>2. 予科</td><td>300 円</td><td></td></tr><tr><td>3. 政経科</td><td>3,000 円</td><td></td></tr><tr><td>4. 理工科（臨時）</td><td>30,000 円</td><td>計 35,300 円</td></tr></table> <p>3. 図書特別貸出、主として研究所員に対する限外貸出につきましては図書館規程第33条により実施中のところ今回新たに之が内規を作成し委員会に提出せり。要旨（省略）之に対し委員中より</p> <p>イ) 貸出回数皆無に近き図書にありては規定以上に貸出し得るよう伸縮性を持たしむる必要あり。寧ろ館長の裁量により帯出せしむる現規定にしかず</p> <p>ロ) 研究所より正式に委員の任命、出席を得て改めて審議しては如何との動議あり右動議を採択す</p> <p>4. 敵産として管理中の洋書約 450 冊を ¥465 にて図書館に於て購入することとなりたり。之が支出方法を如何にすべきや 右に対し次の如く決す</p> <table><tr><td>法文商経</td><td>150 円</td><td rowspan="2">} 図書費中予備金より支出</td></tr><tr><td>政経</td><td>150 円</td></tr><tr><td>図書館</td><td>165 円</td><td rowspan="2">} 古本購入費より支出</td></tr><tr><td>計</td><td>465 円</td></tr></table> <p>東館長より本件につきましては各部委員より所属部長に報告せられたき旨依頼せり</p> <p>5. 竹友氏の昨年度購入に係る図書 Bentham's Miscellaneous（¥560）中未掛金 ¥3.4の支出方法如何 右につきましては昨年度残余金中より支払をなすを適當とするを以て館長より会計課に新たに予算として要求することに決す 以上 午後5時散会</p> | 1. 一般参考図書 | 500 円 | | 2. 邦文新刊図書 | 2,000 円 | | 3. 基本図書 | 600 円 | | 4. 古本 | 500 円 | | 5. 特別図書 | 500 円 | 計 4,100 円 | 1. 学部 | 2,000 円 | | 2. 予科 | 300 円 | | 3. 政経科 | 3,000 円 | | 4. 理工科（臨時） | 30,000 円 | 計 35,300 円 | 法文商経 | 150 円 | } 図書費中予備金より支出 | 政経 | 150 円 | 図書館 | 165 円 | } 古本購入費より支出 | 計 | 465 円 |
| | 1. 一般参考図書 | 500 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2. 邦文新刊図書 | 2,000 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3. 基本図書 | 600 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4. 古本 | 500 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5. 特別図書 | 500 円 | 計 4,100 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1. 学部 | 2,000 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2. 予科 | 300 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3. 政経科 | 3,000 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4. 理工科（臨時） | 30,000 円 | 計 35,300 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 法文商経 | 150 円 | } 図書費中予備金より支出 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 政経 | 150 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 図書館 | 165 円 | } 古本購入費より支出 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 計 | 465 円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 第2回 | <p>図書館委員会 昭和20年1月22日 自午後2時至午後4時</p> <p>出席者 寿岳、奥田、野本、清水 東、入交 手塚教諭は欠席</p> <p>議事 前回記録朗読に代え9月関係者に配布せん事業報告の朗読す 後議事に移り：</p> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | |
|----------------|-----|--|
| 1944 (昭和19) | 第2回 | <div>1) 閲覧統計につき説明す</div> <div>2) 図書購入状況につき説明す</div> <div>3) イ. 図書館に於て購入する図書にして法文関係のものは一部法文学部予算中より支弁すること。右清水教授より承認ありたり</div> <div>ロ. 大月教授指定の購入希望図書 (Logos) は次の如く支出すること</div> <div>大月氏 (理工科制当中) 大約 100 円</div> <div>片山正直氏 100 円</div> <div>基本図書 (図書館) 200 円</div> <div>法文学部 500 円</div> <div>900 円 (支払額は 865.50 円)</div> <div>4) 図書利用に関し有益なる方法あれば承りたしー現下の戦況にありては図書の蒐集整理を以て第一義とするより他に対策なきものの如しー</div> <div>5) 専門図書館としての対策如何ーこれに対し寿岳教授より故高木利太氏所蔵の地誌文庫の譲受を交渉しては如何との発言あり。館長之を考慮する旨言明す 以上</div> |
| 1945 (昭和20) | 第1回 | <div>図書館委員会 昭和 20 年 4 月 13 日 自午後 1 時半至 4 時</div> <div>出席者 寿岳、奥田、清水、田村 (研究室代表)、東、入交</div> <div>議事</div> <div>①三戸教授の購入希望図書 Jahrbuch d. gemeinen deutschen Rechts Bde 6. 代価 ¥720</div> <div>右支出を法文学部 ¥500、図書館基本図書 ¥220 とし購入することに決す</div> <div>②前回に於て議題に上りし高木利太氏所蔵の地誌文庫に関しては具体的に購入方法を講ずること</div> <div>③図書館時報発行の件</div> <div>年 2、3 回本館館務一汎を報告すべき時報を発行したき希望を有する旨館長より報告</div> <div>④時局に鑑み貴重本の疎開を実施する予定に付き委員に援助方希望せり</div> <div>以上</div> |
| | 第2回 | <div>図書館評議員会 昭和 20 年 6 月 26 日 於館長室</div> <div>出席者 清水、東、入交</div> <div>欠席者 寿岳、奥田、手塚、田村</div> <div>議事：</div> <div>I. 事業報告書を配布後説明す。報告書は理事会提出と同一のもの。統計諸表略</div> <div>II. 元高等商業学校教授牧岡廉二氏所蔵の文庫を譲受くこととし之が経費を次の如く決定す</div> <div>政経 400 円</div> <div>法文 200 円</div> <div>一般参考図書 200 円 (合計 800 円)</div> <div>図書は主として英文学関係なり。計 151 冊</div> <div>III. 図書疎開事情につき報告す</div> |
| 1946 (昭和21) | 第1回 | <div>図書館評議員会 昭和 21 年 4 月 24 日 午後 1 時半より 於：教授閲覧室</div> <div>出席者 柏井、奥田各教授、東館長、入交司書</div> <div>欠席者 清水、田村、寿岳</div> <div>議事：</div> <div>①双葉書店より新聞関係の図書を次の如き支出を以て購入することに決す</div> <div>図書館 ¥400</div> <div>法学部 ¥500</div> <div>専門部 ¥300 計 ¥1,200</div> <div>②今般館長の顧問機関として清水兼男教授が囑託せられしことを館長より報告す</div> |

1946
(昭和21)

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|--|----------|------|--|-----|------|--------|----|------|--|----|--------|--|-----|--------|----------|
| 第1回 | <p>③時局下図書の紛失相当多きを以て之が対策とし保証金を徴収することにしては如何と図書館側より提案す。これについては図書館に於て具体策を作成することに決す。尚、右趣旨は学生、生徒並に外部関係者にも及ぼすこととす</p> <p>④特設研究室に対する貸出本にして閲覧希望者あるときは図書館に於て適宜返却の手続をせられたき旨柏井教授より発言あり。図書館に於ては図書の保留制度と共に実施することを約す</p> <p style="text-align: right;">以上</p> | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第2回 | <p>図書館評議員会 昭和21年5月23日 午後3時より4時半 於：本館教授閲覧室</p> <p>出席者 奥田（高商）、増野（文学部）、東館長、入交、桃山</p> <p>祈祷：東館長</p> <p>報告：</p> <p>東館長より昭和20年度に於ける館務一般につき説明。理事会へ提出せると同一の報告書を出席者に配布せり。後本年度予算につき説明せり</p> <p>議事：</p> <p>図書館規定改正の件</p> <p>別紙改正案に基き審議する筈の処出席者少数につき第7条の供覧者証の再交付料10銭を金1円に第36条の金2銭を金10銭に改正するに止めたり</p> <p>図書購入の件</p> <p>図書購入に際し支払方法を簡易にする為め司書は手元に資金の一部を保有し図書の納入と同時に支払うこととする。次に図書の入手難に鑑み価格が定価以上になる場合に於ても館長に於て之を認める。尚各部割当額の決定及前述の支払方法の簡易化につきましては各部へ図書館より通達を發せられたきことこれにつきては既に図書館に於て実行せり</p> <p>雑誌の購入改正の件</p> <p>終戦以来新雑誌の刊行せられたるもの相当あり。この際従来の雑誌を一応検討する要あり、との図書館側よりの提案に対し奥田教授より綜合雑誌は図書館に於て決定し専門雑誌は各部に交渉することとしては如何との発言ありたり。尚、図書館側に於ては本■のため終戦後の発行の雑誌目録並に昭和21年度現在購読中の雑誌目録を作成し委員の参考に資したり</p> <p>その他 閲覧状態及改善方法につき種々懇談を重ねたり</p> | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第3回 | <p>図書館評議員会 昭和21年10月8日 於：館長室</p> <p>出席者 平賀、田中、柏井各教授</p> <p>故保田教授所蔵本50冊を¥800にて購入することとし之が支出を如何にすべきかの案を上程、次の通り決定す</p> <table><tr><td>高商</td><td>¥500</td><td></td></tr><tr><td>大学部</td><td>¥300</td><td>計 ¥800</td></tr></table> <p style="text-align: right;">以上</p> | 高商 | ¥500 | | 大学部 | ¥300 | 計 ¥800 | | | | | | | | | |
| 高商 | ¥500 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大学部 | ¥300 | 計 ¥800 | | | | | | | | | | | | | | |
| 第4回 | <p>図書館評議員会 昭和21年11月25日 於：館長室</p> <p>出席者 平賀（東山氏代理）、西沢、田中</p> <p>近來新刊図書の代価は著しく上騰し予算内に於て所用の図書を購入することは困難となれり。今後各部に於て図書購入予算中より一部を之に充當せられたしとの希望を述べて委員に承諾を求めたる所次の通り了解を得たり</p> <table><tr><td>文学部</td><td>300円</td><td></td></tr><tr><td>理工科</td><td>-</td><td></td></tr><tr><td>予科</td><td>300円</td><td></td></tr><tr><td>大学</td><td>2,500円</td><td></td></tr><tr><td>高商部</td><td>1,000円</td><td>計 4,100円</td></tr></table> <p style="text-align: right;">以上</p> | 文学部 | 300円 | | 理工科 | - | | 予科 | 300円 | | 大学 | 2,500円 | | 高商部 | 1,000円 | 計 4,100円 |
| 文学部 | 300円 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 理工科 | - | | | | | | | | | | | | | | | |
| 予科 | 300円 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大学 | 2,500円 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 高商部 | 1,000円 | 計 4,100円 | | | | | | | | | | | | | | |

| | | |
|----------------|-----|---|
| 1946 (昭和21) | 第5回 | 図書館評議員会 昭和22年2月13日 於：教授閲覧室 出席者 奥田、大道、柏井、平賀各教授、東、中島、入交 議事並報告 1. 各部割当予算実行に付き各教授割当残額を2月20日頃までに報告すること 2. 「朝鮮古文化綜鑑」全12巻購入決定 3. 可成長期に亘る教授特別貸出につきましては一応整理する必要があるを以て之が促進方を各委員に依頼す。委員は之に対し適当なる機会を利用して之が徹底方を計ること 図書館側に於ては揭示、返納通知書を発送すること 4. 図書館通報第3号を発行すること 5. 本館蔵書が市場に出品しありたる由につき調査のところ、右は事実でなかりしことを中島氏より報告 6. 閲覧室に於ける風紀の問題に関しては図書館に於ても相当関心を有する処なるも各委員に於ても配慮せられたきこと 7. 禁帯本の制度を速に実施すること 8. 委員より来年度予算を大幅に引上げる様、理事に対し進言せられたき旨発言ありたり。尚、図書館に於ける図書購入費は少額につき各部割当予算中より若干を会計年度始に於て繰入方を要望したる所各委員之を了承せり |
| 1947 (昭和22) | 第1回 | 図書館評議員会 昭和22年5月19日 於：教授閲覧室 出席者 大道（大学文学部）、平山（高商）、山川（中学部（旧））、伊賀（文学専門部）、東館長、中島氏、入交司書 欠席者 平賀（予科）、武内（大学法学部）、柏井（大学経済）、田中（理工） 祈祷 東教授 議事並に報告 1. 書庫の増設並に事務所の移転につき館長より報告す 2. 昭和21年度図書館報告につき館長より報告す 3. 今回新たに事務分掌を定めたるにつき之につき館長より説明す。之に対し大道委員より掛員増員方に関し本評議員会の名を以て本部に申請しては如何との意見の開陳あり 4. 本年度予算は次の如く決定せる旨館長より報告ありたり 経済 ¥6,000 高商 ¥10,000 法学 ¥6,000 理工 ¥5,000 文学 ¥6,000 文専 ¥1,000 予 ¥4,000 以上図書費（学部には他に共通購入費として¥2,000を計上す） 経済 ¥3,000 理工 ¥9,000 法学 ¥3,000 文専 ¥3,000 文学 ¥3,000 予 ¥4,000 高商 ¥5,000 大学共通 ¥1,000 以上備付書物費 本館直轄費 邦文図書 ¥12,000 基本図書 ¥2,000 古本図書 ¥2,000 特別図書 ¥2,500 一般図書 ¥2,500 計 ¥21,000 以上の報告と関連して次の決定を見たり a) 邦文新刊図書購入費は現下の図書価格の昂騰に鑑み必要冊数を到底充たすこと不可能につき之が充実のため学生より図書館費を増徴する様本委員会の名を以て中央に進言すること。図書館費は一人につき¥20見当を適当とすること。 |

| | |
|-----------------------|---|
| 第1回 | <p>b)本館備付の雑誌は各部図書委員に於て改新の上必要なるものを決定すること 尚、雑誌費は備付図書費中に計上、支出せらるべきこと</p> <p>5. 平山委員より図書館内にアメリカ研究室を移転設置せられたき旨の申出あり。 図書館に於いては附帯事業の一つとして協力することを約す</p> <p>5時終了</p> |
| 第2回 | <p>図書館評議員会 昭和22年6月20日 於：教授閲覧室</p> <p>出席者 伊賀（文）、田中（理）、武内（法）、東館長、中島氏、入交司書 欠席者 平山（高商）、柏井（経済）、平賀（予科）、大道（文） 祈祷 東教授 議事並に報告</p> <p>I. 備付雑誌の件</p> <p>A. 図書館原案の備付雑誌割当表を提出して了解を求めたところ各委員之を適 当として承認せられたり。尚法学部より「法律文化」の追加申込ありたり</p> <p>B. 右割当雑誌の支払方法としては各部備付書物費より分割設定したる別個の勘 定科目中より支払うこととし、館長は各委員に部長へ報告方依頼せり</p> <p>II. 図書費支払方法変更について</p> <p>従来図書購入費の支払手続は図書館でしていたが今回之を改め支払は各部長に 於てなすこと。図書館は図書納入と同時に図書受入票を発行することに變更せ られたる旨館長より説明す</p> <p>III. A. 新外国雑誌約7種を今回進駐軍士官の手を経て入手し得る運びとなりたる こと及び B. World Church Service として約150冊の図書の寄託ありたる旨館 長より報告す</p> <p>以上</p> |
| 1947 (昭和22) 第3回 | <p>図書館評議員会 昭和23年1月22日（木）午後3時～5時 於：図書館教授閲覧室</p> <p>出席者 平賀、柏井、平山、武内、田中の諸教授、東館長、中島氏、入交司書 欠席者 伊賀（文専）、大道（文）の諸教授 祈祷 平賀教授 前回の記録朗読</p> <p>開会に当り東館長へ最近の学院新聞に現れた足立助教授の一文を朗読、今後とも各評 議員に於かれては隔意なき意見の開陳を以て指導鞭撻せられしことを希望した</p> <p>議事並に報告</p> <p>1. 各部に於ける図書購入費の残額処理の件 各部の図書購入費残額調によれば本年1月20日現在総計約2万5千円余あり。 会計年度末近きを以て適宜使用の方法を講ぜられたしとの館長の希望に対し、 委員は2月10日を以て一応割当購入を打ち切り使用残りについては図書館の購 入費に当てるよう計うことに決定す</p> <p>2. 図書費の予算編成の件 現在各部に所属している図書費は購入手続の点より言って寧ろ一括図書館に移 管経理を行わしむる方便利と考えられるが予算編成に当って各部長に考慮を促 すこと</p> <p>3. 外国書に対する希望書目表提出の件 アウトプリッツ学長の斡旋により主として米図書を購入し得ることとなりた るにつき2月5日までに書目表を提出すること。図書館側は資料として最近国 立図書館より郵送して来た輸入図書目録により複製を作成して委員宛送付する につき委員は回覧の上希望図書を明示するほか目録以外の希望図書をも追加記 入したる上期日までに返却するよう手配せられること</p> <p>4. 学習図書購入の件 先に学習文庫設置の目的を以て各教授宛に書目表提出方を依頼したが、この他 購入方法を簡略にするため「高等学校教科書目録」により一括購入の方法をも 考慮して可及的速かに充実を計ること</p> |

| | |
|-----------------|--|
| 第3回 | <p>5. 新学制制度に伴う分館並に教授図書室の設置の件 学制制度の変更に伴い学生を対象とする分館3ヶ所、教授図書室を計5ヶ所設置せられる予定なることにつき館長より説明。委員は充分の設備なければ紛失の恐れあり、更に分散による本館の弱体化のため研究調査に支障を来さざるや。閲覧上の不便等につき質問あり 図書館側の善処を期待せられた</p> <p>6. 決議事項 現下の情勢にありては図書費は余りにも僅少であり之にては到底大学図書館としての内容を保持するを得ざるはもちろん月々の新刊さえも購入し難き状態にあり 図書購入費の増額を中央に建議しては如何との動議あり。満場一致可決。案文は東館長作成し、委員署名の上、中央に提出することに決した</p> |
| 1947 (昭和22) 第4回 | <p>図書館評議員会 昭和23年2月18日 午前10時-12時 出席者 柏井、大道、武内、平山、平賀の諸教授、東館長、入交司書 議事</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分館（学生用）並に分室（教授閲覧室）設置の件 右設置につき館長より最近の状況を説明す 2. 学生に対する図書貸出方法改正の件 新制度に伴って図書館利用は急激に増加しつつあり何等かの方法を講ずるにあらざれば之等の需要に応じ難き現況を館長より説明し此際貸出に制限を加えることにつき隔意なき意見を求めたところ原則として学生の貸出を認めず、特に必要ある場合教授の承認を要することとし教授の捺印を以て証とすることに意見の一致を見た 3. 各部図書費残額精算の件 <ol style="list-style-type: none"> a. 前回の決議にもとづき2月10日現在を以て使用残りの精算を行い各部長は残額について館長に一任すること b. 来年度より予算編成方法の変更につき院長はじめ各部長の了解を求めつつあることにつき館長に説明す 4. 図書館と教授との連絡の件 次の如き諸方法あるべし <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書目録を作成すること 2. 各教務主任と図書館側との混合委員会を開き利用策を講ずること <p style="text-align: right;">以上</p> |
| 1948 (昭和23) 第1回 | <p>図書館評議員会 昭和23年5月7日 午後3時-5時 出席者 平山、田中、西尾（平賀氏代理）、眞田（中学校）、東館長、中島氏、入交 記録朗読 議事並に報告</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新制度の実施せらるるに当り図書館としては分館を設置する他、学習図書の購入を計りつつあることにつき館長より説明す 尚、読書相談に応じたるため久山康氏が任命せられた 2. さきに学習図書購入費の計上並に各教科図書購入費の増額を中央に依頼するに当り購入手続の簡素化を計るため各教科図書購入費を図書館に委任計理せしめられる様合せて具申中のところ本年度に於ては右制度は実現するに至らなかった。このため各委員は左記配慮せられたし <ol style="list-style-type: none"> a) 各委員は予算決定後所属の図書委員を招集し、教授制当額を決定の上図書館に氏名、金額を通知せられたきこと、以後図書館に於ては購入に際し図書納入票を発行するにつきこれを証として部長より直接支払を受けること b) 数教科に亘る場合には図書委員会に計ること c) 12月初旬第一次精算を行い再分配をなす等の手続きを経て3月には予算額を可成費消する様計られたし <p style="text-align: right;">以上</p> |

| | |
|-----------------|---|
| 第2回 | <p>図書館評議員会 昭和23年6月10日 午後3時～5時 出席者 武内、柏井、田中、平山、眞田の諸教授 東館長、久山、中島の諸氏、入交 議題並に報告</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 一冊献本運動について 図書館蔵書を充実する為の一つの方法として汎く学生並に関係者に1冊献本運動を起すこととなし。既に6月6日本館楼上にて開会せられた同窓会総会にても右趣旨を説明し依頼する処があった。この運動を積極化することにつき意見を求めた処個々の寄贈に訴えるより寧ろ大口を求め60周年記念事業に加えては如何との意見があった 2. 稲富早苗氏寄贈の件 今回尼崎市文化協会稲富氏より10万円の図書購入資金の寄贈があった。本資金は日本文化に関する新旧図書の蒐集に当てることに決した 3. 図書購入の件 <ol style="list-style-type: none"> 1) History and development of Advertising 600円 2) History of Signboards 600円 右2冊の購入を決定、支払は高商、経済、図書館にて分担すること 4. 報告 <ol style="list-style-type: none"> a. 理事会提出の図書館報告につき説明 b. 大閲覧室利用に関する注意事項 c. 名著開題講座開設につき報告 d. 供覧者証再交付料1円とあるを金10円に又延滞料10銭とあるを2円にそれぞれ改正す。5月17日より実施す |
| 1948 (昭和23) 第3回 | <p>図書館評議員会 昭和23年10月14日午後3時～5時 出席者 武内、大道、田中(理工)、眞田(中)、瀧川(高校平賀氏代理) 東館長、中島、入交 議題並に報告</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 近々制定実施せられる大学基準案によれば本大学は最少10万冊以上の蔵書を必要とするに係らず、現在蔵書は約7万冊であって内容に於ては他の私立大学に遜色なしとするも院内に分散するために生じる蔵書数の不確定、閲覧統計の過少表示更に検索に当り所在の不明確などより生じる不便等のため「院内各部にある図書を本館に統合する件」を審議、原則として図書館以外所属の図書は本館にも登録する外蔵書並びに閲覧統計は本館の各種統計と総合して公表することに決し各委員は所属部科長に報告するとともに館長また面接了解を求めた上11月初旬より実施の運びに致したきこと決した 2. History of Advertising 600円 図書館特別費より支出購入することと決す 3. 分館は来る18日搬入準備を整え27日より開館する予定 Econometrica (Q) 新購入を決定し学長に依頼す <p style="text-align: right;">以上</p> |
| 第4回 | <p>図書館評議員会 昭和23年11月1日 出席者 柏井、平賀、田中の諸教授、東館長、中島、久山、入交 祈祷 平賀教授(本日は分館の開館披露を兼ねて開催した) 前回記録朗読 議題</p> <ol style="list-style-type: none"> I. 入学に際して保証金徴収に関する件 図書の返納を遅延するも延滞料を支払わざる者、紛失に当りて弁償の責に任ぜざるもの、又卒業に際して図書を返却せざるものあり。これ等に対して入学に当り保証金を徴収せば事務上便利多し。これを実行に移すことに対し委員の所見を伺いたる処目下学生の支出額は相当多額に上るを以て別に対策を講ずる方可ならしとの意見が多かった |

| | | |
|----------------|-----|--|
| 1948 (昭和23) | 第4回 | Ⅱ. 10月24日付学院新聞記載の「館内の廃風」に関する件 上記新聞記事を朗読之が対策につき意見の交換をなす Ⅲ. 主としてアメリカ向外国雑誌注文の件 1949年度外国雑誌を予約する為、選択方を委員に依頼した 4時30分終了 |
| | 第5回 | 図書館評議員会 昭和23年12月3日 出席者 寿岳、柏井、風間（平賀氏代理）、眞田の諸氏 （本日は集会の上協議し難きを以て個々に面接の上了解を求めたり） 新刊購入費は代価昂騰のため月々購入も不可能になりつつある現状に鑑み各部予算額（図書費）中より一部を之に流当せしめ得るよう各部科長に委員より了解を求められた き希望を館長より述べたり |
| | 第6回 | 図書館評議員会 昭和24年3月28日 午後2時 出席者 柏井、寿岳、平賀、平山の諸教授、東館長 議題 故吉岡名誉院長並に曾木前副院長両氏の蔵書受入の件 1. 故吉岡名誉院長の蔵書は下記の通り評価。金一封を贈呈すること 洋書 214 @120 25,680 和書 354 80 28,320 漢籍 743 25 18,575 1,311 72,575 2. 曾木前副院長の蔵書は下記の評価に基き購入することに決定 洋書 608 @120 72,960 和書 127 50 6,350 漢籍 30 25 750 765 80,060 |
| 1949 (昭和24) | 第1回 | 図書館評議員会 昭和24年5月13日 出席者 寿岳、柏井、武内、風間（平賀氏代理）、鳥谷（奥田代理）、東、中島、入交 欠席者 安部（理工） 報告並に議題 Ⅰ. 去る5月6日行われた定例理事会に提出の23年度図書館報告につき館長より説明 Ⅱ. 今回当局は図書館充実のため80万円を計上。うち故吉岡名誉院長並に曾木前副院長両氏の蔵書購入資金15万円を差引き残額65万円の用途につき協議 下記の通り決定した 1. 整備委員を選出すること 理 2名、高校 1名、高商 1名、教養 1名、語学 1名 経済（大学）2名、文学部（大学）2名、法学（大学）2名 （内1名は評議員を以て充当） 2. 購入期を次の三期に分つ 5月－8月 30万円 9月－12月 20万円 1月－3月 10万円 3. 購入図書の範囲は洋、和、古本、新本を問わず基本図書に限る 4. 委員は図書の選定のみならず購入の実務も願うこと 5. 図書館にても選定購入すること 6. 委員は選出各部科の各教授購入希望図書の目録を取りまとめ図書館提出願うこと 尚、寿岳教授より提出の旧森六郎氏蔵書のうち必要あるもの約8万円を右整備費より購入することに決定 |

1949
(昭和24)

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----------------------|----------------------------------|------------------------|------------------|------------|---------------------|------------------------|--------------------------------------|------------------------|-------------------------|----------------------------|-------------------------|---|--|
| 第1回 | <div>Ⅲ. 邦文雑誌購入の件 図書館備付の雑誌種目並に各部分担額決定につき協議、新雑誌5点を追加し各部の分担額はその能力に応じて負担を願うことに改める</div> <div>Ⅳ. Church World Service を通じて本年度も外国図書の注文を院長に願い出る予定につき委員は本月末頃までに書目表提出方を適当なる機会に計られたきこと</div> <div>以上</div> | | | | | | | | | | | | | | |
| 第2回 | <div>図書館評議員会 昭和24年11月21日 午後3時より</div> <div>出席者 安部（理工）、奥田（高商）、平賀（高校）、東館長、中島、入交</div> <div>議題並に報告</div> <div>1. 外国雑誌発注の件</div> <div>兼ての50年度外国雑誌の予約のため各部に送付の雑誌目録につき審議追加雑誌を次の通り決定した</div> <div><table><tr><td>1 American literature</td><td>※8 Review of Economic Statistics</td></tr><tr><td>2 Analytical Chemistry</td><td>9 World Politics</td></tr><tr><td>3 Listener</td><td>10 Yale Law Journal</td></tr><tr><td>4 Mathematical Reviews</td><td>11 Journal of Educational Psychology</td></tr><tr><td>5 Monthly Labor Review</td><td>12 Educational Research</td></tr><tr><td>6 Public Opinion Quarterly</td><td>13 Pedagogical Seminary</td></tr><tr><td>7 Transaction of the Am. Mathematical Society</td><td></td></tr></table></div> <div>2. 図書</div> <div>去る6月29日 Liefendorf 博士に入手方依頼中の図書は種々奔走にも係らず目下停頓の状態にあり。右目録中には緊急を要するもの相当あるを以てこの種図書のみを別個に注文することとし目録を新たに調整の上、Outerbridge 学長に依頼すること</div> <div>浜田教授他数名の諸教授による外国図書目録は何れも緊急に必要なものとして Outerbridge 学長に入手方依頼すること。冊数63点</div> <div>報告</div> <div>大日本史料（171冊）を巖南堂より6万8千円にて購入した。代金は整備費中より各部分担にて支払う（右は図書整備委員会にて決定）</div> <div>同時に大日本古文書（101冊）3万8千円も購入の予定であること</div> <div>木坂千秋氏の遺著35点、主として言語学関係の図書を¥4,500にて購入した。資金は一部を前年度繰越金中より（¥1,000）他を特別図書（¥3,000）及び古本図書（¥500）の費目中より支払った</div> <div>近代劇全集を七條某より購入。代価¥2,000</div> <div>以上</div> | 1 American literature | ※8 Review of Economic Statistics | 2 Analytical Chemistry | 9 World Politics | 3 Listener | 10 Yale Law Journal | 4 Mathematical Reviews | 11 Journal of Educational Psychology | 5 Monthly Labor Review | 12 Educational Research | 6 Public Opinion Quarterly | 13 Pedagogical Seminary | 7 Transaction of the Am. Mathematical Society | |
| 1 American literature | ※8 Review of Economic Statistics | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 Analytical Chemistry | 9 World Politics | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 Listener | 10 Yale Law Journal | | | | | | | | | | | | | | |
| 4 Mathematical Reviews | 11 Journal of Educational Psychology | | | | | | | | | | | | | | |
| 5 Monthly Labor Review | 12 Educational Research | | | | | | | | | | | | | | |
| 6 Public Opinion Quarterly | 13 Pedagogical Seminary | | | | | | | | | | | | | | |
| 7 Transaction of the Am. Mathematical Society | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第3回 | <div>図書館評議員会 昭和25年1月20日 午後12時半－1時</div> <div>出席者 柏井、平賀、武内、安部の諸教授</div> <div>欠席者 奥田、東館長</div> <div>報告 去る11月21日決定の外国雑誌及外国図書はそれぞれ発注せんことを報告</div> <div>議題 故玉谷宗市郎氏蔵書購入の件につき協議。蔵書は一括して寄贈を受けたる上謝礼として金5万円見当を贈呈すること財源は整備費第三期中より経済学部1万5千円、高商1万5千円、計3万円を本学年度にて支払い残額は明年度整備費中より支払することとし玉谷氏遺族との交渉は図書館に於て行うこと</div> <div>以上</div> | | | | | | | | | | | | | | |
| 第4回 | <div>図書館評議員会 昭和25年3月17日 午後3時より</div> <div>出席者 柏井、安部、平賀、玉林、東、入交</div> <div>議題</div> <div>①昭和25年度図書整備費は総額80万円計上せられているが、予算の関係上本年度は右整備費中より下記諸項目を支払必要あり。邦文図書の購入に当てられる金額は10万円見当である</div> <div><table><tr><td>1. 外国雑誌</td><td>約12万円</td></tr><tr><td>2. 外国図書</td><td>約13万円</td></tr></table></div> <div>（昭和24年11月発注の分）</div> | 1. 外国雑誌 | 約12万円 | 2. 外国図書 | 約13万円 | | | | | | | | | | |
| 1. 外国雑誌 | 約12万円 | | | | | | | | | | | | | | |
| 2. 外国図書 | 約13万円 | | | | | | | | | | | | | | |

| | | |
|----------------|-----|---|
| 1949 (昭和24) | 第4回 | 3. 外国図書 45万円 (リーフェンドルフ氏に依頼せる目録を修正したもの) 計 70万円 残額 10万円は邦文図書購入に当て購入方法としては金額が少額であるのに鑑み、図書館に List を提出して適当なる選択を行うこと。金額の分割については7部科各約1万5千円見当とすること ②各部科負担による図書館備付邦文雑誌は購入方法を下記の通り改む 1. 原則として専門雑誌は各部科に於て負担すること 2. 図書館は原則として総合雑誌を負担する 3. 各部負担雑誌費は年度始めに於て一括雑誌費として図書館費目に振込むこと 以上 |
| 1950 (昭和25) | 第1回 | 図書館評議員会 昭和25年6月12日(月) 出席者 井上(理)、平賀(高校)、縄田(商科奥田氏代理)、藤田(英文科)、玉林(文学) 欠席者 柏井、武内、眞田の諸氏 議事 1. 昭和25年度図書館事業報告をなす。(別紙図書館報告を朗読す) 2. 昭和25年度各部図書予算につき説明あり 予算額次の如し 大学(三学部) 15万円 高校 3万7千円 短大 商科 1万5千円 理工 2万5千円 英文 3千5百円 尚、図書館備付邦語雑誌に対する予算は予算編成期に館内に雑誌費勘定を設けてこの費用より支払する様評議員会に於ても研究すること 3. 別紙「図書分置規則」につき説明す 4. 竹内講師購入希望の下記社会事業関係雑誌は購入費の乏しい現状に鑑み社会事業 口座保有の資金中より支弁せられる様、図書館より交渉すること 1. Journal of Psychiatric Social Work ￥3.50 1. Social Casework ￥3.50 1. Social Service Review ￥6.00 以上 |
| | 第2回 | 図書館評議員会 昭和25年11月21日(月) 午後3時-5時 出席者 縄田(奥田教授代理)、小島(吉)、風間(平賀氏代理)、玉林教授 欠席者 井上、荻田、柏井、武内、眞田の諸氏 報告 1. 11月6日より同11日に至る読書週間の行事につき報告す a) 書庫内の自由検索 230名 b) 私の推薦する図書の展示 教養書百選の展示 200名 c) レコードコンサート 70名 2. 「経済学論究」及「法と政治」を各10ヶ所の海外著名研究機関に交換図書として発送した 3. 去る3月外国に注文中の図書は目下神戸税関にて通関手続中で近く到着の予定である 議事 外国雑誌予約の件 1951年度予約に下記を追加する 1. American Historical Review 2. Geographical Review 3. American Geographer 4. Accounting Review |

| | | |
|-------------|-----|--|
| 1950 | 第2回 | <p>尚、下記雑誌は1951年度より産業研究所に移管することとなった</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Econometrica 2. Economica 3. Journal of American Statistical Ass 4. Journal of Royal Statistical Ass 5. Monthly Labor Review 6. Review of Economics and Statistics 7. Annals <p>特別図書購入の件 神崎前院長蔵書403冊（内270冊は洋書）を譲り受けることとし、金一封（約12万円見当）を呈することに意見の一致を見た（費目は館長一任） 予算増額を陳述する件 図書購入予算の増額を陳述することとし、実行委員に柏井、玉林の両教授を挙げた</p> |
| (昭和25) | 第3回 | <p>図書館評議員会 昭和26年1月31日 於：教授閲覧室 出席者 柏井、山本（庄）、玉林、井上、平賀、縄田、小島（吉）の各教授 前回記録朗読 報告 <ol style="list-style-type: none"> 1. 神崎前院長蔵書330冊の寄贈を受け是に對し金一封（10万円）を贈呈した 2. 堀博士所蔵の18世紀産業革命時代に関する図書約250冊の寄託を受けた 3. 大石足立両教授の渡米に際し法律、政治に関する図書の購入を依頼した。 右資金10万円は前年度より繰越の整備費中より支弁した事実につき事後承認を乞うた 協議事項 各部の図書購入費は現在相当の残額あるを以て年度末までに図書の購入を完了するよう御配慮乞うこと 4時30分終了</p> |
| 1951 (昭和26) | 第1回 | <p>図書館評議員会 昭和26年5月8日（火）午後3時～5時 於：図書館教授閲覧室 出席者：柏井、前田、風間、荻田、縄田の諸教授 東館長、中島、入交 欠席者：玉林、小泉の両教授 一、祈祷 東館長 二、報告 昨年度図書館事業報告……東館長（報告書別紙の通り） 三、議事 <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書購入予算実行の件 従来図書館備付邦文雑誌は各部図書費より支払われて来たが、今回之を改め概ね本館予算中より支弁することとした。従って本年度整備費の使途は左の如くなる <ol style="list-style-type: none"> a. 外国雑誌購入の為 b. 邦文雑誌購入の為 c. 各部共通の外国書を購入するため d. 外国書購入の補費として e. 学習図書及分館備付図書購入のため f. 予備金（主として文庫等の購入に充当） ※此の為各部図書費は努めて外国図書購入に充当のこと 2. アンダーウッド氏寄贈図書購入費の件 寄贈図書費500ドルを折半し、その半額は宗教書を、他の半額を各部希望の外国図書の購入に当てる 3. 共同研究室運営の件 各共同研究室には開室の時間を明示するほか、利用の少ない研究室は統合すると共に、場合によりては直接必要でない図書を図書館に引き揚ること 4. 邦文備付雑誌の決定は館長に一任する <p style="text-align: right;">以上</p> </p> |

| | | | | | | | | | | | |
|----------------|--|--|---------|----------|---------|--|------|----------|-----|-----------|----|
| 1951 (昭和26) | 第2回 | <p>図書館委員会 昭和26年11月13日 於：教授閲覧室</p> <p>出席者 柏井、平賀、安部、佐藤（商学部）、東館長、中島氏、入交司書 祈祷 東館長 前回記録朗読 議事</p> <p>1. 1952年度外国雑誌予約の件 現在米国より購入中の引続きその全部を継続注文し、更に追加を希望して申し込まれておるものうちより左記雑誌を選び注文を発することに決定</p> <p>1. Chartered Accountants 1. Journal of Symbolic Logic 1. Economic History Review 1. Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft 1. Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft</p> <p>2. 左記雑誌以外の英独仏雑誌は各部科の図書費中より支弁することを得ることとなり注文等の事務は図書館に於て行う</p> <p>3. 故小寺教授蔵書の件 故小寺教授蔵書受入に当っては図書館に於て評価をなし之に基き金一封を贈呈すること。右資金としては図書館予備金中より若干、商経2学部の年度末に於ける残余金を当て、若し不足額の生じたる時は来年度予算より適宜支出すること</p> <p>4. 購入希望を申出られている Journal of Henry D. Thoreau は図書整備費中より一万円残額は文学部より支弁するよう交渉すること</p> <p>報告 共同研究室夜間開館につき館長より報告あり 終了5時</p> | | | | | | | | | |
| | 第3回 | <p>臨時 図書館委員会 昭和26年11月28日 午後3時～4時30分 於：教授閲覧室</p> <p>出席者 奥田、豊倉（柏井氏代理）、増谷（小泉氏代理） 今回は関係3学部のみ招集 東館長、中島、入交</p> <p>議題 昭和26年11月13日の図書館委員会の席上にて、受入方針につき協議をした故小寺教授蔵書を下記の通り評価、各部分担額を定めて正式に受入を決定した。右金額は寄贈図書に対して金一封として贈呈する</p> <table><tr><td>短大</td><td>13,000 円</td></tr><tr><td>商学部</td><td>40,000 円</td></tr><tr><td>経済学部</td><td>45,000 円</td></tr><tr><td>図書館</td><td>102,000 円</td></tr><tr><td>合計</td><td>200,000 円</td></tr></table> | 短大 | 13,000 円 | 商学部 | 40,000 円 | 経済学部 | 45,000 円 | 図書館 | 102,000 円 | 合計 |
| 短大 | 13,000 円 | | | | | | | | | | |
| 商学部 | 40,000 円 | | | | | | | | | | |
| 経済学部 | 45,000 円 | | | | | | | | | | |
| 図書館 | 102,000 円 | | | | | | | | | | |
| 合計 | 200,000 円 | | | | | | | | | | |
| 1952 (昭和27) | 第1回 | <p>図書館委員会 昭和27年4月25日 午後3時～4時半 於：本館教授閲覧室</p> <p>出席者：柏井（経済）、前田（法学）、川村（文学）、アウトバーリッチ（神学）、奥田（短商）、平賀（高校）、眞田（中学）の諸氏 東館長、中島囑託、入交司書</p> <p>欠席者：小泉（商学）、安部（教養）、荻田（短英）の諸教授</p> <p>報告 東館長より昭和26年度事業報告 入交司書より蔵書並びに閲覧統計に関する報告 （これらの報告については評議員会へ提出の年次報告と同様のものを送付の予定）</p> <p>協議事項</p> <p>(1) 予算の件 予算の運用に当っては各部図書費は勉めて外国書の購入に当てる方針をとり、図書整備費は次の如き項目に当て度き旨の原案を東館長より説明、各委員の了解を得た</p> <table><tr><td>1. 外国雑誌</td><td>15 万円</td></tr><tr><td>2. 国内雑誌</td><td>6 万円（従来各部図書費中より分担支出せられていたが昭和26年度より図書館の予算中より支弁することに改めた）</td></tr></table> | 1. 外国雑誌 | 15 万円 | 2. 国内雑誌 | 6 万円（従来各部図書費中より分担支出せられていたが昭和26年度より図書館の予算中より支弁することに改めた） | | | | | |
| 1. 外国雑誌 | 15 万円 | | | | | | | | | | |
| 2. 国内雑誌 | 6 万円（従来各部図書費中より分担支出せられていたが昭和26年度より図書館の予算中より支弁することに改めた） | | | | | | | | | | |

| | |
|----------------|---|
| 第1回 | <p>3. 外国書購入補助 10 万円</p> <p>4. 学習用図書 20 万円</p> <p>5. 分館備付図書 5 万円</p> <p>6. 基本図書（外国書を含む） 12 万円</p> <p>7. 邦文図書補充 5 万円</p> <p>8. 特別使途の為の予備金 17 万円</p> <p>(2) 図書購入の件</p> <p>1. アンダーウッド氏購入資金の残額 300 ドルの使途については各部に図書目録廻付の上 5 月中旬頃書目の決定を行い発注すること</p> <p>2. 日本文学辞典（全 8 冊）購入決定。資金は予備金中より支弁</p> <p>雑件</p> <p>1. アウターブリッジ委員より外国雑誌は 10 月頃に決定発注を要する旨の注意あり</p> <p>2. 神戸 CIE より館外貸出に当って便宜を与える旨の申出あり</p> <p>3. 英国領事館よりロンドンニュース他数点の雑誌寄贈を継続的に受けつつあり</p> <p>追伸</p> <p>以上諸項貴部部長及諸教授へ御連絡方をお願い致します</p> |
| 1952 (昭和27) | <p>図書館委員会 昭和 27 年 10 月 15 日 午後 3 時 - 4 時半 於：教授閲覧室</p> <p>出席者：アウターブリッジ、荻田、小泉（代理佐藤）、東館長、中島氏、入交</p> <p>アメリカより購読中の外国雑誌の予約更新にあたり、次の如き変更が見られた（最後案）</p> <p>1. 中止 Journal of biological chemistry</p> <p>Journal of physical chemistry</p> <p>Journal of applied physics</p> <p>International financial statistics</p> <p>最後の項目は産研との重複による</p> <p>2. 新規予約購読</p> <p>Journal of Marketing 短大 商</p> <p>Atlantic Monthly 短大 英</p> <p>Biblical Archaeologist 神</p> <p>Bulletin of American Schools of Oriental Research 神</p> <p>American Sociological Review 文</p> <p>Journal of Comparative and Physiological Psychology 文</p> <p>Journal of Orthopsychiatry 文</p> <p>Modern Philology 文</p> <p>International Film Guide 文</p> <p>Yale Classical Studies 文</p> <p>Chemische Berichte 大学長直属</p> <p>Journal of Chemical Society 大学長直属</p> <p>Journal of Morphology 大学長直属</p> <p>尚、委員会の承認を得たる下記雑誌は（何れも文学部希望）は Ford Foundation より寄贈を受けることとなったため、新規購入分より除いた</p> <p>Kenyon Review</p> <p>Musical Quarterly</p> <p>その他報告事項</p> |
| 1953 第1回 | <p>図書館委員会 昭和 28 年 6 月 3 日（水） 午後 3 時 - 5 時半 於：開架室</p> <p>出席者</p> <p>平賀教授 佐藤助教授（商、小泉教授代）、前田教授、五日市氏（短大商奥田教授代）</p> <p>アウターブリッジ部長、東山助教授、久山助教授</p> <p>川口講師（大学長直属安部助教授代）、東館長、入交、芝</p> <p>報告 別冊「昭和 27 年度図書館報告」につき館長よりその概略を説明す</p> |

| | | | | | | | |
|-----------------------|---|-----|-----|-------|----|-----|----|
| 第1回 | <p>協議</p> <p>一、開架室設置に関する件 9月開設予定の開架室に関しその設備、運営につき図書館側より計画を説明す。委員より図書の紛失、貸出等に関し質疑のあった後原案を当局に提出して速かに実現を期することになった</p> <p>二、共同研究室に関する件 現在の共同研究室の組織はその運営保管の面より見て著しく不備の点があるから此際各部とも各々1ヶ所に統合し、管理者には図書館所属の職員を当てるよう、大学長、並びに院長に進言することを決議した</p> <p>三、貴重書複写装置の備付に関する件 佐藤委員より写真複写装置を図書館に備付けるよう希望があり又、アウトプリッヂ委員よりマイクロフィルム・リーダーを購入して視聴覚資料室の充実を計りたき旨の発言あり各委員の賛成あつて館長は実現できるよう努力する旨答えた</p> <p>昭和28年度予算の概要 (委員会に於て報告すべき筈の処便宜上左に概略を記載する) 本年度の図書予算は、図書館に属する正規購入費50万円、及び特別整備費60万円で大学各学部図書費は140万円である。重要な新刊邦書は図書館に於て出来るだけ購入する予定であるが、修士及び博士課程における研究施設を充実するために各学部の図書費は組織的に利用されて本学の図書の充実を計られたい。尚各学部図書費による購入図書は其都度本館に登録の手続を取られたい</p> | | | | | | |
| 1953 (昭和28) 第2回 | <p>図書館委員会 昭和28年9月16日(水) 午後3時-4時半 於：開架閲覧室</p> <p>出席者 五日市(短大奥田教授代理)、金子(経済)、平賀(高校)、山本(前田法学部教授代理) 東山(文学)、東館長、入交、芝</p> <p>報告 前回議事の朗読に続き左記事項に関し経過報告あり</p> <p>一、共同研究室の統合に関する委員会案については部長会議に付せられ、考慮する旨の回答を得た</p> <p>二、貴重書複写装置備付の件については直ちに院長に実現方を要望した</p> <p>議題</p> <p>一、開架室に関する件 本日の会合は主として新設の開架閲覧室を中心に協議するのを目的としたが図書館側よりは収容力、蔵書並に今後の方針等につき説明。種々懇談を重ねた</p> <p>二、共同研究室に関する件 共同研究室に別置の図書は従来図書館に一応返入の上、帯出することが出来たが、今回この間の手続を書類により行うこととし、簡易化した旨の説明があった</p> <p>三、外国雑誌予約注文に関する件 図書館にて購読中の外国雑誌は現在約80余种あるが、このうちアメリカの代理業者を通じて購読中のものにあつては、1954年度の予約改訂をなす必要がある。右に関し、在外資金の關係上新規追加は困難であると思われるが故に購入決定に當つては適宜取捨選択せられたく予約事務の關係上近々図書館より回付の目録は変更あれば訂正の上、必ず10月末日まで返送せられたき旨の希望があつた</p> <p>以上</p> | | | | | | |
| 第3回 | <p>図書館委員会 昭和28年11月2日(月) 午後3時より 於：本館協議室</p> <p>出席者 荻田(短大、英)、奥田(短大、商)、東山(文学部)、前田(法学部)、 アウトプリッヂ(神学部)、金子(精)(経済学部代理)、東、中島、入交、芝</p> <p>議事</p> <p>一、1954年度図書館備付外国雑誌の予約改訂に当り左記の通り追加希望あり</p> <table border="0"> <tr> <td>文学部</td> <td>24点</td> </tr> <tr> <td>大学長直属</td> <td>1点</td> </tr> <tr> <td>神学部</td> <td>4点</td> </tr> </table> | 文学部 | 24点 | 大学長直属 | 1点 | 神学部 | 4点 |
| 文学部 | 24点 | | | | | | |
| 大学長直属 | 1点 | | | | | | |
| 神学部 | 4点 | | | | | | |

| | | |
|----------------|-----|---|
| 1953 (昭和28) | 第3回 | <p>商学部 1 点 (これ等追加希望の大部分は部科の増設による)</p> <p>二、これが決定に先だち館長は合同委員会の意向に関しアウトアブリッチ委員に質すところあり、これにつきアウトアブリッチ委員より左の通り説明があった</p> <p>イ、現在入手中の外国雑誌は概ね寄贈であると思われる。従って大幅の追加は困難であるが少数については当地駐在の右委員会に計りたし</p> <p>ロ、アウトアブリッチ氏不在中外国図書並びに雑誌の入手に関し対ミッション関係の折衝のため然るべき代人を詮衡せられたし</p> <p>三、右に関し前田委員より図書館備付雑誌が事実学院予算に関係なく別途に寄贈されている場合にあっては、これによって生じる購入費により更に予約の追加を考慮せられたき旨の発言あり館長は財務当局につき質すことを約した</p> <p>四、以上に基き次の通り決定を見た</p> <p>中止 American Geographer Journal of Marketing (後者は産業研究所にて購読中のものと重複につき)</p> <p>追加 Christian Century English Historical Review Euphorion Journal of Experimental Education Journal of the American Musicological Society Review of English Studies Social Research Social Service Review Zeitschrift für philosophische Forschung</p> <p>尚 1953 年度に限り Ford Foundation より寄贈を受けている 8 種の外国雑誌については引続き継続方を依頼することとし万一寄贈が中止せられたる場合には改めて協議の上予約決定すること</p> <p>追記 アウトアブリッチ氏不在中の代行についてはスタブス氏に依頼することとなった</p> |
| 1954 (昭和29) | 第1回 | <p>図書館委員会 昭和 29 年 5 月 11 日 (火) 午後 3 時より 於：本館協議室</p> <p>出席者 金子弘 (経済学部)、奥田 (短大商)、印具 (神学部)、石原 (文学部)、東、中島、芝 (用度課長 塚本氏)</p> <p>報告 昭和 28 年度図書館報告 (東館長) 昭和 29 年度図書館予算報告 (東館長)</p> <p>議事 図書館増築に関する件 本日の会合は主として増築に関してであった。先ず館長より図書館の現状について克明な説明をなし、増築促進の必要を述べ図書館側増築原案を図示して説明を加え図書館委員会として増築促進に関する学院当局への進言書の提出を要請した次でこの問題のために、特に御出席を願った塚本氏より用度課に於ける原案 (学院当局の要求により作成) について概略説明があった 然し坪数等に若干の差異が認められる度で、両案ともに閲覧室の両袖並びに書庫背後の増築といった結果であり、委員会も体裁にて要求を推進するように各氏より発言があった 最後に前記進言書は、東館長の下で原文作成委員の連名捺印によって提出する事に決定した (尚後日この進言書は作成され当局に提出された)</p> |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|--------|---|------|------|--|----|--------|-------------|----|--------|-----------|--|--|-------------|--|--|-----------|
| 1954 (昭和29) | 第2回 | <p>図書館委員会 昭和29年10月14日(木) 午後3時より 於:本館協議室</p> <p>出席者 平賀(高等部)、佐藤(商学部)、縄田(短大商、奥田氏代理)、川口(大学長)、石原(文学部)、東、芝</p> <p>報告 前回議事の説明。先に前回決議の進言書に対する経過報告 欠勤者の状況を説明。特に協力を懇請</p> <p>議事 今回は特に議題というものではなく、目下学院当局において計画されている増築問題と本年5月以降に創設された図書整備委員会の内容説明を主として計画されたものであった</p> <p>(1) 増築計画の説明 先ず計画の数字的説明があった。即ち</p> <table><tr><td>増築部分</td><td>140坪</td><td></td></tr><tr><td>書庫</td><td>3.5×5間</td><td>54,000冊の収容力</td></tr><tr><td>閲覧</td><td>3.5×6間</td><td>{ 2階 100人</td></tr><tr><td></td><td></td><td>{ 1階雑誌室 50人</td></tr><tr><td></td><td></td><td>{ 開架室 50人</td></tr></table> <p>これに対し平賀委員より学院当局の計画かどうか質したが館長、理事会の決定である旨答う。又、川口委員より特に自然科学関係の雑誌のため特殊書架(書物のサイズのため)設置の要求あり。館長考慮する旨答う</p> <p>(2) 図書整備委員会の件 標記委員会の性格等を説明。図書委員会との混同を招く恐れありとして諒解を求められる意味でなされたものである。そして図書整備委員会では凡そ次の如き内容について図書館としての意向を表現したい旨発言があった。即ち</p> <ol style="list-style-type: none">1. 人員構成の改造 毎年交替する。評議委員的なものがあるため実行委員の性格にもって行く必要あり2. 基本図書の購入についてより強化する3. 図書館の学内活動の強化 対学生・対教授4. 閲覧方法の合理化(館内閲覧の強調)5. 分館が本館の充分なる補助的役割を果たす様に努力する <p>これに対し石原委員より4の問題に関連し開館時間の延長を必要とせぬかとの質問あり。従来の経験上問題だが今後充分研究する旨答う</p> <p>尚、種々意見が開陳されたが、次の3点に集中して記す</p> <ol style="list-style-type: none">①川口委員より図書分類(特に自然科学について)に満足出来ない点があるもので委員会の様なものを設置して分類すればどうかと、種々討議の結果分類表を更に検討して(専門家を交えて)従来通り図書館にて分類する事に決定す②佐藤委員より学院内図書管理権につき発言あり。夫々学部の意見もあるだろうが図書館としては中央図書館中心主義で従来とも進んで来た故この方針を更に強化徹底したく、且実行して行き度き旨答う③石原委員よりマイクロフィルム撮影者の常置を必要とするとの発言あり種々討議の結果実際の利用者には限度のあるものであるから特に利用をされる人々と更に意見を交換して今一度委員会に計る旨館長より答う | 増築部分 | 140坪 | | 書庫 | 3.5×5間 | 54,000冊の収容力 | 閲覧 | 3.5×6間 | { 2階 100人 | | | { 1階雑誌室 50人 | | | { 開架室 50人 |
| 増築部分 | 140坪 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 書庫 | 3.5×5間 | 54,000冊の収容力 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 閲覧 | 3.5×6間 | { 2階 100人 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | { 1階雑誌室 50人 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | { 開架室 50人 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1955 (昭和30) | 第1回 | <p>図書館委員会 昭和30年5月16日 午後3時より</p> <p>出席者 西沢(法)、勝本(大学長直属)、熊谷(神、印具教授代理)、東山(文)、縄田(短大、商)、東館長、中島、入交</p> <p>欠席者 荻田(短、英)、金子(経)、石原(文)、平賀(高校)</p> <p>報告 別紙図書館報告による昭和29年度事業報告があった後、新年度図書館図書購入費につき予算の説明があった</p> | | | | | | | | | | | | | | | |

| | |
|-------------------|---|
| 第1回 | <p>邦文図書（毎月発行の邦文新刊図書中より学生、教授に必要な基礎的図書を選定購入－約25万円） 図書整備費（各学部の図書購入費の不足を補充－約70万円）</p> <p>協議事項</p> <p>一、勝本委員より昨年度の外国雑誌は到着が著しく不規則であったのに鑑み購入方法の改善を計られたしとの発言があり館長は充分研究する旨答えた</p> <p>二、邦文新刊図書を選定する一つの方法として、「出版目録」を委員に廻送しこれにより購入漏の図書を補充追加する事に決した</p> <p>三、雑誌の製本が不十分であるから此際製本費を充分計上せられたしとの希望あり、館長はこれを了承した</p> <p style="text-align: right;">以上</p> |
| 1955（昭和30） 第2回 | <p>図書館委員会 昭和30年10月4日（火） 於：本館集会室</p> <p>出席者 勝本、西沢、熊谷（神、印具氏代理）、東山（文、石原氏代理）、荻田、平賀、金子（弘）の各委員、東館長、中島、入交</p> <p>協議事項</p> <p>1956年度図書館備付外国雑誌の予約改訂に当り文学部より下記4雑誌の追加希望あり</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Cornhill Magazine 2. British J. of Sociology 3. Musical Quarterly 4. J. of Psychiatric Social Work <p>（其の他の部は変更の申出なし）</p> <p>これに対し左の決定あり</p> <p>一、図書館備付の外国雑誌中アメリカ伝道局の斡旋により入手しつつあるものは必ずしも寄贈と断じがたく将来の支払に当てるため、年々相当額を積立つつある現状に鑑み予約金額を現在の枠内に止めたきこと</p> <p>二、但し3、4、の両雑誌は学科創設にもかかわらず久しくこの種のものを欠いていた特殊事情に基き特に購入することに決した</p> <p>報告</p> <p>館長より別紙図書館配置図により増築完成に至る経過報告があり同時に図書館委員の労を多とする感謝の挨拶があった</p> |
| 1956（昭和31） 第1回 | <p>図書館委員会 昭和31年5月16日 於：教授閲覧室</p> <p>出席者 金子、印具（代理小林）、小島（代理高井）、勝本、荻田、平賀、奥田、実方の各委員</p> <p>欠席者 源、西沢、縄田の諸氏</p> <p>報告並に協議</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 別冊図書館報告により昭和31年度の館務につき報告 2. 館長は下記事項につき了解を求めた 関西学院大学要覧昭和31年版所載の図書規程のうち借覧者証再交付料10円とあるのを50円に延滞料1日1冊につき2円とあるのを10円にいずれも変更 3. 館長より本年度予算につき説明あり了解を得た 各部図書費 250万円 図書館 450万円 内150万円は基本図書購入費にあて50万円は文庫の購入費に当てる（この200万円は昨年度一般予算から生じた剰余金から給付） <p>其他</p> <p>共同研究室と関連して本館は中央図書館としての体制を整えたい。又館務については、刷新を計るとともに外国より図書の直接購入につき考慮したいという館長の発言があった。</p> <p>次回は6月中旬適当な土曜日を選び開会することを申合せた</p> <p>5時20分終了</p> |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|--|---|------------|--|--|--|----|-------|----|-------|----|-----|----|------|----|-------|----|------|----|------|-------|------|------|------|----|------|-----|-------|--|--|-----|-------|--|--|-----|-------|---|---------|-----|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|----|-----------|---|--------|
| 1956 (昭和31) | 第3回 | <p>b) 従来外国雑誌は、直接アメリカの代理店に発注せられその代金は援助金中より差引控除によって計算せられてきたが雑誌に未着等の事故があつてその手数も大であるため、今回之を内地の業者に變更発注する考えである旨を館長より説明、委員の了解を求めた</p> <p>2. 基本図書購入に関する件</p> <p>a) 前会の決議に基づき左の通り各研究室より目録の提出があつた（重複のものを除く）</p> <table><tr><td colspan="4">文学部（数字は部数）</td></tr><tr><td>美学</td><td>145 点</td><td>経済</td><td>434 点</td></tr><tr><td>教育</td><td>7 点</td><td>商学</td><td>74 点</td></tr><tr><td>心理</td><td>191 点</td><td>神学</td><td>48 点</td></tr><tr><td>史学</td><td>59 点</td><td>大学長直属</td><td>61 点</td></tr><tr><td>社会事業</td><td>28 点</td><td>短大</td><td>17 点</td></tr><tr><td>英文学</td><td>178 点</td><td></td><td></td></tr><tr><td>日文学</td><td>119 点</td><td></td><td></td></tr><tr><td>社会学</td><td>108 点</td><td>計</td><td>1,469 点</td></tr></table> <p>（総額は内確定価格 3903,385、価格不祥分を合算すれば 500 万円と推定される）</p> <p>b) 右の購入に要する財源には基本図書のうち 50 万、図書整備費のうち 80 万円、計 130 万円を当て之を右の通り配分する</p> <table><tr><td>文学部</td><td>30 万円</td><td>経済学部</td><td>20 万円</td></tr><tr><td>神学部</td><td>20 万円</td><td>商学部</td><td>20 万円</td></tr><tr><td>法学部</td><td>30 万円</td><td>大学長直属</td><td>10 万円</td></tr><tr><td>短大</td><td>10 万円（追加）</td><td>計</td><td>140 万円</td></tr></table> <p>従つて購入希望額が右割当額を超過する部にあつては当該委員、館長及び司書の三者の合議により割当内にて購入を決定することになった</p> <p>四、その他</p> <p>左の事項につき館長より簡単な報告並びに希望があつた</p> <ol style="list-style-type: none">1. 故志賀教授蔵書について2. 10 月 1 日より教職員の帯出図書を書式を新たにして整理中につき御協力願ひたし3. 11 月上旬読書週間には催物を致したい考であること4. 従来図書館に納入の邦文図書は 5% 程度の歩引を受けているが今般版元、卸、小売の 3 業者の間に再販売価格維持協定ができ 10 月 1 日より定価売を実施することになり、その帰趨を注目している | 文学部（数字は部数） | | | | 美学 | 145 点 | 経済 | 434 点 | 教育 | 7 点 | 商学 | 74 点 | 心理 | 191 点 | 神学 | 48 点 | 史学 | 59 点 | 大学長直属 | 61 点 | 社会事業 | 28 点 | 短大 | 17 点 | 英文学 | 178 点 | | | 日文学 | 119 点 | | | 社会学 | 108 点 | 計 | 1,469 点 | 文学部 | 30 万円 | 経済学部 | 20 万円 | 神学部 | 20 万円 | 商学部 | 20 万円 | 法学部 | 30 万円 | 大学長直属 | 10 万円 | 短大 | 10 万円（追加） | 計 | 140 万円 |
| | 文学部（数字は部数） | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 美学 | 145 点 | 経済 | 434 点 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 教育 | 7 点 | 商学 | 74 点 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 心理 | 191 点 | 神学 | 48 点 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 史学 | 59 点 | 大学長直属 | 61 点 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 社会事業 | 28 点 | 短大 | 17 点 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 英文学 | 178 点 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 日文学 | 119 点 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 社会学 | 108 点 | 計 | 1,469 点 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 文学部 | 30 万円 | 経済学部 | 20 万円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 神学部 | 20 万円 | 商学部 | 20 万円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 法学部 | 30 万円 | 大学長直属 | 10 万円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 短大 | 10 万円（追加） | 計 | 140 万円 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第4回 | <p>図書館委員会 昭和 32 年 2 月 6 日 午後 3 時 - 5 時 於：本館教授閲覧室</p> <p>一、出席 源（文）、小島男（商）、小島吉（大学長直属）、行沢（経代理）、縄田（短大、商）、熊谷（神、代理）、西沢（法）の諸氏</p> <p>実方館長、入交 欠席 荻田教授</p> <p>二、報告並に協議事項</p> <ol style="list-style-type: none">1. 去る 12 月 1 日館長は、「大学図書館基準」に基き最低限度の図書購入予算として別紙（略）の通り 1,500 万円を計上して当局に申請し、以来強力に折衝を続けてきたが学内に於ける諸種の事情のため現在のところ計 1,000 万円（但し内 200 万円は昭和 31 年度剰余金中より捻出）の線を出ることが困難な状態にある旨の中間報告を行った2. 小島（男）委員より資料調整のため、予算面に特に配慮を加えられたき旨の発言があり館長は善処を約した <p>三、その他</p> <p>左の事項に関し懇談を重ねた</p> <ol style="list-style-type: none">1. 出納口の改造案につき2. 共同研究室別置図書につき3. 邦文雑誌の選択につき | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

②図書館委員会・図書館運営委員会議事等

*1957（昭和32）年度から1973（昭和48）年度まで

*1967（昭和42）年度から1973（昭和48）年度の委員会記録が見当たらないため掲載していない。

*各委員会記録より抜粋した。

| 年度 | 回次 | 議事等 |
|----------------|-----|---|
| 1957 (昭和32) | 第1回 | <p>日時 昭和32年4月25日 午後3時～5時 場所 本館教授閲覧室</p> <p>出席者 前田（法） 川村（文） 熊谷（神、城崎委員代理） 金子（弘）（経） 小島（男）（商） 勝本（大学長直属） 奥田（中） 実方館長 入交 芝</p> <p>一、報告 イ. 私立大学図書館協会関西側理事校を引受けたこと及び本学にて部会を開催することについて ロ. 館内設備の一部改造について ハ. 図書帯出手続を変更したことについて ニ. 図書館報を発行したことについて ホ. 増員による館内事務分掌について 二、昭和32年度図書館予算内訳の件 三、各学部下の教授宛図書費に関し種々懇談 四、邦文雑誌の備付決定の件</p> |
| | 第2回 | <p>日時 昭和32年6月20日 午後3時～5時 場所 本館教授閲覧室</p> <p>出席者 金子（経） 城崎（神） 川村（文） 前田（法） 勝本（大学長直属） 高井（商、小島（男）委員代理） 実方館長 入交 芝</p> <p>一、報告 イ. 昨年度剰余金について ロ. 学生用指定図書の選定について 二、図書分置規定 三、その他 イ. 故山本教授蔵書の譲受について ロ. 故畑敏三先生蔵書の譲受について ハ. 本学文学部武藤教授による図書寄贈について</p> |
| | 第3回 | <p>日時 昭和32年9月26日 午後3時～5時 場所 本館教授閲覧室</p> <p>出席者 川村（文） 城崎（神） 勝本（大学長直属） 行沢（経、金子（弘）委員代理） 高井（商、小島（男）委員代理） 深瀬（法、前田委員代理） 実方館長 入交 芝</p> <p>一、協議事項 イ. 外国雑誌予約改訂に関する件 ロ. 基本図書に関する件</p> |

| | | |
|----------------|-----|--|
| 1957 (昭和32) | 第3回 | ハ. 立替支払について ニ. 教職員図書帯出期間について 二、その他 イ. 指定図書について ロ. 故畑敏三先生蔵書搬入、並に故山本保教授蔵書受入について |
| | 第4回 | 日時 昭和32年10月24日 午後3時～5時 場所 本館教授閲覧室 出席者 金子(経) 前田(法) 城崎(神) 勝本(大学長直属) 広瀬(高、平賀委員代理) 実方館長 入交 芝 一、報告事項 イ. 故山本教授の蔵書について ロ. 貸出図書整理進捗状況について ハ. 外国雑誌の割引について 二、協議事項 イ. 昭和33年度予算案について ロ. 図書館増築計画について |
| | 第5回 | 日時 昭和32年12月5日 午後3時～5時 場所 教授閲覧室 出席者 前田(法) 小島(男)(商) 城崎(神) 天川(経、金子委員代理) 勝本(大学長直属)、実方館長 入交 芝 一、報告 イ. 昭和33年度図書館予算について ロ. 図書館増築計画について 二、協議 イ. 共同研究室に関する件 ロ. 図書館規定中教授貸出規定について 三、その他 イ. 視聴覚関係 ロ. 伊賀衛氏蔵書購入について ハ. 長期に亘る滞貸図書の整理状況について |
| | 第6回 | 日時 昭和33年1月31日 午後4時～5時 場所 本館教授閲覧室 出席者 城崎(神) 川村(文) 前田(法) 縄田(経、金子委員代理) 勝本(大学長直属)、実方館長 入交 芝 一、議事 イ. 図書館規定改正の件 ロ. 図書費に関する件 |
| | 第1回 | 日時 昭和33年4月24日 午後3時～3時半 場所 教授閲覧室 出席者 大江(文) 城崎(神) 縄田(経、金子委員代理) 高井(商、小島(男)委員代理) 小島(吉)(大学長直属) 実方館長 入交 芝 |

| | | |
|----------------|-----|---|
| 1958 (昭和33) | 第1回 | <p>一、報告</p> <ul style="list-style-type: none"> イ. 昭和32年度の事業報告 ロ. 昭和32年度会計報告 ハ. 図書館規定改正に関する報告 <p>二、議事</p> <ul style="list-style-type: none"> イ. 昭和33年度予算について ロ. 基本図書の選定について |
| | 第2回 | <p>日時 昭和33年6月5日 午後4時-5時半 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 大谷（法） 城崎（神） 小島（男）（商） 縄田（経、金子委員代理） 小島（吉）（直属） 実方館長 入交 芝 岡島</p> <p>一、報告</p> <ul style="list-style-type: none"> イ. 事務組織を庶務、司書、閲覧の三部門に分け事務室の拡張を行った ロ. マイクロフィルム新設 <p>二、議事</p> <ul style="list-style-type: none"> イ. 昭和33年度図書費予算の配分について ロ. 基本図書の購入について各研究室に依頼することになった ハ. 図書の購入決定について |
| | 第3回 | <p>日時 昭和33年9月23日 午後3時-5時 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 城崎（神） 小島（吉）（直属） 金子（弘）（経） 大谷（法） 高井（商、小島委員代理） 実方館長 入交 芝 岡島</p> <p>一、報告</p> <p>前回議事朗読</p> <p>二、協議</p> <ul style="list-style-type: none"> イ. 昭和34年度外国雑誌改訂の件 ロ. 複写に関する規定について ハ. 特別図書の購入について |
| | 第4回 | <p>日時 昭和33年12月4日（木） 午後3時半-4時半 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 大谷（法） 城崎（神） 小島（吉）（直属） 縄田（経、金子委員代理） 実方館長 入交 芝 岡島</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、報告</p> <p>Beilstein 購入について</p> <p>三、協議</p> <ul style="list-style-type: none"> イ. 昭和34年度図書館予算案に関する件 ロ. 図書館規程第43条改正の件 |
| | 第5回 | <p>日時 昭和34年2月2日 午後2時-4時半 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 城崎（神） 縄田（経、金子委員代理） 小島（吉）（直属） 大江（文） 大谷（法） 実方館長 入交 芝 岡島</p> |

| | | |
|----------------|-----|--|
| 1958 (昭和33) | 第5回 | <p>一、協議</p> <p>イ. 研究室選定雑誌の図書館備付けについて</p> <p>ロ. 増加目録の発行について</p> <p>二、その他</p> <p>イ. 図書費関係</p> <p>ロ. 開館時間延長について</p> <p>ハ. 図書貸出の状況について</p> |
| 1959 (昭和34) | 第1回 | <p>日時 昭和34年4月30日 午後3時より</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 大谷(法) 吉良(神、松村委員代理) 縄田(経) 勝本(直属) 実方館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、本年度各学部委員紹介</p> <p>二、前回記事朗読</p> <p>三、議事</p> <p>昭和34年度図書費予算割当について</p> <p>四、その他</p> |
| | 第2回 | <p>日時 昭和34年6月23日 午後4時半より</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 吉良(神、松村委員代理) 縄田(経) 笹森(商) 勝本(直属) 実方館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、報告</p> <p>イ. 前年度剰余金よりの追加図書費配分について</p> <p>ロ. 昭和35年度私立大学図書館協会総・大会の博学開催について</p> <p>二、議事</p> <p>イ. 基本図書購入に関する件</p> <p>ロ. 邦文新刊図書購入方法に関する件</p> <p>ハ. 増築促進に関する件</p> <p>ニ. その他</p> |
| | 第3回 | <p>日時 昭和34年11月1日(木) 午後3時より</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 大谷(法) 勝本(直属) 縄田(経) 実方館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、議事</p> <p>イ. 1960年度外国雑誌予約に関する件</p> <p>ロ. 研究室所属図書の登録に関する件</p> |
| | 第4回 | <p>日時 昭和35年2月4日(木) 午後2時-3時</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 大江(文) 大谷(法) 勝本(直属) 笹森(商) 生田(経、縄田委員代理) 実方館長 入交 芝 岡島</p> <p>一、前回記録朗読</p> |

| | | |
|----------------|-----|--|
| 1959 (昭和34) | 第4回 | <p>二、報告 増築計画並に完成までの設備転用等について</p> <p>三、議事 イ. 図書館規定一部改正に関する件 ロ. 分置図書が紛失した場合の取扱方について ハ. 教授割当図書費について</p> |
| | 第5回 | <p>日時 昭和35年3月10日(木) 午後2時-4時半 場所 開架室</p> <p>出席者 縄田(経) 勝本(直属) 松村(神) 笹森(商) 大谷(法) 大江(文) 実方館長 入交 芝 岡島</p> <p>一、前回記録朗読 二、報告 イ. 増築に関する中間報告について ロ. 次期館長について 三、議事 イ. 分置図書が紛失した場合の取扱方について ロ. 教授割当図書費について</p> |
| | 第1回 | <p>日時 昭和35年4月19日(火) 午後4時より 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 大谷(法) 吉良(神、松村委員代理) 東(経) 高塚(商) 小島(吉)(直属) 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、祈祷 二、新館長挨拶 三、議事 イ. 図書館増築促進委員会に関する件 ロ. 特殊文庫購入基金創設に関する件</p> |
| 1960 (昭和35) | 第2回 | <p>日時 昭和35年5月24日(火) 午後4時半-6時 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 松村(神) 杉原(社) 大谷(法) 高塚(商) 小島(吉)(直属) 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読 二、報告 イ. 図書館増築促進委員会委員の委嘱について ロ. 学部割当図書費について 三、議事 昭和35年度図書館図書費予算案に関する件</p> |
| | 第3回 | <p>日時 昭和35年10月4日(火) 午後4時半-7時 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 東(経) 大谷(法) 実方(文) 杉原(社) 高塚(商) 小島(吉)(直属) 城崎(神、松村委員代理) 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> |

| | | |
|----------------|-----|---|
| 1960 (昭和35) | 第3回 | <p>二、報告</p> <p>イ、図書館増築促進委員会報告</p> <p>ロ、昭和36年度外国雑誌予約改訂に関する件</p> <p>ハ、昭和36年度図書館予算に関する件</p> <p>三、その他</p> <p>関西部会阪神地区研究会について</p> |
| | 第4回 | <p>日時 昭和35年12月6日(火) 午後4時半より</p> <p>場所 新月クラブ</p> <p>出席者 実方(文) 大谷(法) 高塚(商) 縄田(経、東委員代理) 松村(神)</p> <p>楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、報告</p> <p>1961年度外国雑誌予約について</p> <p>三、議事</p> <p>イ、個人割当図書費及び基本図書費の支出状況について</p> <p>ロ、事務組織の課制度へ改編について</p> |
| | 第5回 | <p>日時 昭和36年2月7日(火)</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 高塚(商) 小島(直) 東(経) 松村(神) 杉原(社) 実方(文)</p> <p>楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、報告</p> <p>イ、恒藤恭氏蔵書受入について</p> <p>ロ、昭和36年度予算について</p> <p>ハ、私立大学図書館協会加盟館間でのマイクロ写真相互利用規定の制定について</p> <p>二、議事</p> <p>イ、学部個人割当図書費の帳尻報告について</p> <p>ロ、増加図書に対する収蔵対策について</p> <p>ハ、図書館職制改正について</p> <p>ニ、図書館規程の改正について(第4条但し書)</p> |
| | 第1回 | <p>日時 昭和36年6月2日</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 城崎(神) 実方(文) 杉原(社) 大谷(法) 縄田(経) 勝本(理)</p> <p>平田(直属) 楠井館長 入交 芝</p> <p>一、報告</p> <p>昭和35年度図書館報告</p> <p>二、議事</p> <p>イ、昭和36年度図書費予算について</p> <p>ロ、図書館規定第30条の運営に関する内規について</p> |
| 1961 (昭和36) | 第2回 | <p>日時 昭和36年9月22日(金) 午後4時半より</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 城崎(神) 実方(文) 杉原(社) 大谷(法) 縄田(経) 佐藤(商)</p> <p>勝本(理) 平田(直属) 楠井館長 入交 岡島 芝</p> |

| | | |
|----------------|-----|--|
| 1961 (昭和36) | 第2回 | <p>一、報告</p> <p>イ. 恒藤恭氏蔵書第二次受入について</p> <p>ロ. 臨時書庫第二次拡張について</p> <p>ハ. 丹羽記念文庫目録刊行について</p> <p>ニ. 開架室備付図書の一部入替について</p> <p>二、議事</p> <p>イ. 1962 年度外国雑誌予約に関する件</p> <p>ロ. 図書館規程一部改訂に関する件</p> <p>三、その他</p> <p>基本図書に関する報告</p> |
| | 第3回 | <p>日時 昭和 36 年 11 月 22 日 (水) 午後 4 時半より</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 船本 (神、城崎委員代理) 小関 (社、杉原委員代理) 大谷 (法) 東 (経) 佐藤 (商) 勝本 (理) 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、報告</p> <p>丹羽記念文庫の展覧について</p> <p>三、議事</p> <p>図書館予算原案一部修正について</p> <p>四、その他</p> <p>歩引の取扱方について</p> |
| | 第4回 | <p>日時 昭和 37 年 2 月 7 日 (水) 午後 1 時 - 3 時半</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 大谷 (法) 杉原 (社) 勝本 (理) 佐藤 (商) 実方 (文) 城崎 (神) 縄田 (経) 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、報告</p> <p>イ. 増設学部充実のための図書費について</p> <p>ロ. 図書館増築について</p> <p>三、議事</p> <p>個人割当図書費の帳尻について</p> <p>四、その他</p> <p>図書の整理について</p> |
| | 第1回 | <p>日時 昭和 37 年 4 月 24 日 午後 4 時半より</p> <p>場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 印具 (神) 源 (文) 赤井 (法、前田委員代理) 東 (経) 杉原 (商) 勝本 (理) 網中 (直属) 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、報告</p> <p>内閣文庫府県史料 (複製) の購入について</p> <p>二、議事</p> <p>イ. 故梅田教授蔵書購入に関する件</p> <p>ロ. 故佐藤清氏蔵書購入に関する件</p> <p>三、その他</p> <p>一般教育科目参考図書目録の配布について</p> |

| | | |
|----------------|-----|---|
| 1962 (昭和37) | 第2回 | <p>日時 昭和37年6月5日 午後4時半より 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 藤本（神、印具委員代理） 源（文） 田中（国）（社） 前田（法） 田中（敏）（経、東委員代理） 勝本（理） 網中（直） 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、報告 昭和36年度図書館年次報告</p> <p>二、議事 イ、昭和37年度図書費（図書館）予算について ロ、梅田文庫購入に関する件</p> |
| | 第3回 | <p>日時 昭和37年9月25日（火） 午後4時半より 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 印具（神） 高橋洋（文、源委員代理） 田中（国）（社） 赤井（法、前田委員代理） 田中（敏）（経、東委員代理） 勝本（理） 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、報告 イ、増築案決定 ロ、寄贈図書 ハ、外国雑誌予約に関する件</p> <p>三、その他 イ、徳牧師旧蔵の図書寄贈について ロ、室井庄四郎氏旧蔵キリシタン関係図書購入について</p> |
| 1963 (昭和38) | 第1回 | <p>日時 昭和38年6月7日（金） 午後4時半より 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 印具（神） 東山（文） 藤原（社） 山本（法） 田中（敏）（経） 大鹿（理） 伊藤（直属） 楠井館長 入交 岡島</p> <p>一、報告 イ、図書館増築進行状況の報告 ロ、昭和37年度図書費決算報告</p> <p>二、議事 図書館予算案について</p> |
| | 第2回 | <p>日時 昭和38年10月2日 午後4時半より 場所 教授閲覧室</p> <p>出席者 印具（神） 藤原（社） 田中（敏）（経） 末尾（商） 大鹿（理） 伊藤（直属） 楠井館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、報告 イ、増築について ロ、佐藤文庫の支払について</p> <p>二、議事 1964年度外国雑誌予約改訂に関する件</p> |

| | | |
|----------------------------|-----|---|
| 1 9 6 4 (昭和39) | 第1回 | <p>日時 昭和39年6月5日 午後4時半より 場所 名誉教授室</p> <p>出席者 小林(信)(神) 塩谷(文) 鈴木(社) 福地(法) 楠井(経) 増谷(商) 大鹿(理) 伊藤(直属 新井委員代理) 大道館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、報告 イ. 大道館長の新任挨拶 ロ. 昭和38年度の事業報告 ハ. 昭和38年度図書費決算の報告</p> <p>二、議事 イ. 昭和39年度図書費予算案に関する件 ロ. 開館時間の改正に関する件 ハ. 図書貸出期間延長に関する件</p> |
| | 第2回 | <p>日時 昭和39年10月28日 場所 名誉教授室</p> <p>出席者 楠井(経) 塩谷(文) 鈴木(社) 福地(法) 小林信(神) 大鹿(理) 新井(直属) 入交 岡島 芝</p> <p>一、議事 外国雑誌予約改訂に関する件</p> |
| | 第3回 | <p>日時 昭和40年3月16日 場所 名誉教授室</p> <p>出席者 楠井(経) 塩谷(文) 鈴木(社) 福地(法) 小林(神) 新井(直属) 大道館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、報告 イ. 展示会について ロ. XEROX 導入について ハ. 農学関係図書購入について ニ. 開架室備付図書について ホ. 佐藤清文庫の追加について ヘ. 文部省情報図書館課の設置について</p> <p>三、議事 学部割当図書費について</p> <p>四、その他 イ. 邦文雑誌予約改訂予定について ロ. 特殊文庫目録の刊行予定について ハ. オリエンテーションについて</p> |
| 1 9 6 5 (昭和40) | 第1回 | <p>*「記録」が残っていないため「次第」より掲載する</p> <p>日時 昭和40年6月2日 午後4時半より 場所 名誉教授室</p> <p>一、昭和40年度委員紹介 小林(信)(神) 塩谷(文) 万成(社) 足立(法) 楠井(経) 増谷(商) 納谷(理) 寺田(直属)</p> |

| | | |
|----------------|-----|---|
| 1965 (昭和40) | 第1回 | 二、報告 イ. 事業報告 ロ. 決算報告 三、議事 昭和40年度図書費予算案 四、その他 |
| | 第2回 | 日時 昭和40年10月4日 午後4時半より 場所 名誉教授室 出席者 納谷（理） 万成（社） 足立（法） 内橋（楠井委員の代理） 入交 岡島 芝 一、議事 1966年度外国雑誌予約改訂に関する件 |
| | 第3回 | 日時 昭和40年11月22日 場所 新月クラブ 出席者 村西（法、足立委員代理） 塩谷（文） 楠井（経） 増谷（商） 納谷（理） 他にオブザーバーとして南（産研） 大道館長 入交 岡島 芝 一、報告事項 イ. 前回記録朗読 ロ. 丹羽記念文庫目録刊行について ハ. 私立大学連盟主催第3回図書館研修会・館長会議について 二、協議事項 文部省情報図書館課派遣の大学図書館視察について |
| | 第4回 | 日時 昭和41年1月17日 午後4時半より 場所 名誉教授室 出席者 納谷（理）、坂井（法、足立委員代理）、萩原（神、小林委員代理） 大道館長、入交 岡島 芝 一、報告 イ. 前回記録朗読 ロ. 関西四大学図書館長懇談会による加盟図書館間協力規約について ハ. 開館時間延長について 二、議事 イ. 図書館規定一部改正の件 ロ. 佐藤文庫目録刊行に関する件 ハ. 新予算要求に関する件 |
| | 第1回 | 日時 昭和41年5月12日 午後4時半～5時50分 場所 名誉教授室 出席者 辻（神、城崎委員代理） 高塚（文） 熊谷（社、小関委員代理） 楠井（経） 納谷（理） 平田（直属） 大道館長 入交 岡島 芝 一、報告 図書館年次報告による事業報告 二、議事 文部省学術局より本学によせられた図書館改善充実に関する要望について |

| | | |
|----------------|-----|---|
| 1966 (昭和41) | 第1回 | <p>三、その他</p> <p>イ. 産業研究所所蔵の大東亜関係の図書について</p> <p>ロ. XEROX の学生ノート複写の使用について</p> |
| | 第2回 | <p>日時 昭和41年6月2日(木) 午後4時半-7時</p> <p>場所 名誉教授室</p> <p>出席者 城崎(神) 高塚(文) 小関(社) 前田(法、加藤委員代理) 楠井(経) 吉田(商) 納谷(理) 平田(直属) 大道館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、議事</p> <p>イ. 昭和40年度図書費決算</p> <p>ロ. 昭和41年度図書館予算案に関する件</p> <p>ハ. 佐藤文庫目録刊行見積について</p> <p>ニ. 図書分置規定の改正要望について</p> <p>ホ. カード目録について</p> <p>三、その他</p> <p>故赤井教授ご遺族からの蔵書寄贈申込みについて</p> |
| | 第3回 | <p>日時 昭和41年6月30日 午後4時-6時</p> <p>場所 名誉教授室</p> <p>出席者 城崎(神) 高塚(文) 小関(社) 山下(末)(法、加藤委員代理) 久保(経、楠井委員代理) 吉田(商) 納谷(理) 大道館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、報告</p> <p>学生からの夜間開館希望の申し入れについて</p> <p>二、前回記録朗読</p> <p>三、議事</p> <p>イ. 図書分置規定案</p> <p>ロ. 図書館運営委員会案</p> <p>ハ. 故赤井教授蔵書の寄贈申し入れの受納</p> <p>ニ. 竹中龍雄氏所蔵の公企業関係資料購入について</p> <p>ホ. 次年度図書館予算案作成について</p> |
| | 第4回 | <p>日時 昭和41年9月29日 午後4時より</p> <p>場所 名誉教授室</p> <p>出席者 城崎(神) 小関(社) 加藤(法) 楠井(経) 納谷(理) 大道館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、前回記録朗読</p> <p>二、議事</p> <p>イ. 1967年度外国雑誌予約改訂に関する件</p> <p>ロ. 故赤井教授の寄贈図書について</p> <p>ハ. 竹中龍雄氏所蔵の公企業関係資料購入について</p> <p>ニ. ①新予算案について ②物件費について</p> |
| | 第5回 | <p>日時 昭和41年11月10日(木) 午後4時半-6時</p> <p>場所 名誉教授室</p> <p>出席者 片山(文、高塚委員代理) 小関(社) 山下(法、加藤委員代理) 吉田(商) 納谷(理) 平田(直属) 大道館長 入交 岡島 芝</p> |

| | | |
|----------------|-----|--|
| 1966 (昭和41) | 第5回 | <p>一、報告</p> <p>イ、1967年度外国雑誌予約に関する件について</p> <p>ロ、関西四大学図書館長懇談会及び兵庫県大学図書館協議会加盟館間での相互利用について</p> <p>ハ、国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会について</p> <p>二、前回記録朗読</p> <p>三、議事</p> <p>イ、展覧について</p> <p>ロ、昭和42年度図書館予算案について</p> <p>ハ、図書館規定について</p> |
| | 第6回 | <p>日時 昭和42年1月12日 午後4時半より</p> <p>場所 新月クラブ</p> <p>出席者 小関（社） 城崎（神） 高塚（文） 吉田（商） 納谷（理） 志賀（高） 川北（中） 大道館長 入交 岡島 芝</p> <p>一、報告</p> <p>イ、図書館運営委員会今後の運営について</p> <p>ロ、図書館展覧について</p> <p>ハ、赤井節氏旧蔵図書に対する謝意について</p> |

③大学図書館運営委員会議事等

* 大学図書館運営委員会は、「大学図書館運営委員会規定」が1974年6月7日から施行され、1974年度に設置された。1974年度から1986年度の議事録が見当たらないため、資料は1987年度以降である。

* 回次欄において、「合同」と記載されている委員会議事は、大学図書館視聴覚室専門委員会との合同で実施した委員会議事である。毎年、3月の年度最終委員会は合同で開催された。なお、合同委員会は1994年度を最終とし、また、大学図書館視聴覚室専門委員会はその機能を大学図書館運営委員会に移し、1997年度末に解散した。

* 委員会記録より抜粋した。

| 年度 | 開催 月日 | 回次 | 議事等 |
|----------------|----------|----|---|
| 1987 (昭和62) | 4月30日 | 1回 | I. 報告事項 1. 大学図書館昭和62年度オリエンテーション実施について（中間報告） 2. 大学図書館問題検討委員会の審議経過について II. 協議事項 1. 昭和61年度図書費決算に関する件 2. 昭和62年度図書費予算に関する件 3. 大学図書館問題検討委員会委員（運営委員会よりの選出委員）選出に関する件 III. 懇談事項 図書館システム開発および運用について |
| | 10月22日 | 2回 | I. 報告事項 1. 図書館問題検討委員会について 2. 昭和63年度図書費の予算申請について 3. 図書館における利用サービス改善等について II. 協議事項 1. 1988年度外国語雑誌予約変更・追加に関する件 2. 1988年度外国語雑誌の新規購読誌に関する件 |
| | 2月25日 | 合同 | 議題 1. 昭和62年度各部局別図書費支出状況について 2. 昭和62年度視聴覚室資料費（閲覧課消耗図書費）支出状況について 3. 昭和62年度大学図書館利用状況について 4. 閲覧環境の改善について 5. 昭和63年度図書館図書費予算（中間報告）について 6. 昭和63年度新入生に対する大学図書館オリエンテーション実施について 7. 大学図書館問題検討委員会について 8. 図書システム開発状況について 9. その他 次期図書館長について |
| 1988 (昭和63) | 4月28日 | 1回 | I. 報告事項 1. 大学図書館昭和63年度オリエンテーション実施について（中間報告） 2. 新大学図書館建設について 3. 図書実態調査について 4. B. D. S.（資料無断持出防止装置）について II. 協議事項 1. 昭和62年度図書費決算に関する件 2. 昭和63年度図書費予算に関する件 III. その他 不定期雑誌の購入の可否について |

| | | | |
|----------------|--------|----|---|
| 1988 (昭和63) | 7月22日 | 2回 | I. 報告事項 1. 職員の人事異動について 2. 新大学図書館建設について 3. 雑誌閲覧環境改善に伴う B. D. S. (資料無断持出防止装置) の設置について 4. 部局ヒヤリングについて 5. 機械化の進行状況について 6. 視聴覚室の今後のあり方について 7. 図書費予算の他大学比較について II. 連絡事項 来年度の外国雑誌の選定について |
| | 10月20日 | 3回 | I. 報告事項 1. 昭和64年度図書費の予算申請について 2. 新大学図書館建設について II. 協議事項 1. 1989年度外国語雑誌予約の継続更新に関する件 2. 1989年度外国語雑誌の新規購読誌に関する件 |
| | 1月19日 | 4回 | I. 報告事項 1. 新大学図書館建設について 2. 新大学図書館収書計画について 3. 新大学図書館管理運営について 4. その他 機械化に伴う教員長期貸出図書の返還依頼について II. 協議事項 「参考図書選定委員会」(仮称) の設置に関する件 |
| | 3月9日 | 合同 | 議題 1. 1988年度各部局別図書費支出状況について 2. 1988年度視聴覚室資料費(閲覧課消耗図書費)支出状況について 3. 1988年度大学図書館利用状況について 4. 閲覧環境の改善について 5. 1989年度図書館図書費予算(中間報告)について 6. 1989年度新入生に対する大学図書館オリエンテーション実施について 7. 新大学図書館建設について 8. その他 機械化に伴う教員長期貸出図書の返還依頼について |
| 1989 (平成元) | 4月27日 | 1回 | I. 報告事項 1. 大学図書館1989年度オリエンテーション実施について(中間報告) 2. 新大学図書館建設について 3. 収書計画について II. 協議事項 1. 1988年度図書費決算に関する件 2. 1989年度図書費予算に関する件 3. 図書システムデータ管理基準に関する件 |
| | 10月26日 | 2回 | I. 報告事項 1. 新大学図書館建設について 2. 参考図書の選定について 3. 特別図書について 4. 大学院生の希望図書について II. 協議事項 1. 1990年度図書費予算概算要求に関する件 2. 1990年度外国語雑誌予約の継続更新に関する件 3. 1990年度外国語雑誌の新規購読誌に関する件 4. 特別文庫の製本事故に関する件 |

| | | | |
|---------------|--------|----|---|
| 1989 (平成元) | 3月1日 | 合同 | <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1989 年度図書費支出状況について 2. 1989 年度視聴覚室資料費（消耗図書費）支出状況について 3. 1989 年度図書館利用状況について 4. 1990 年度図書館図書費予算（中間報告）について 5. 1990 年度新入生に対する大学図書館オリエンテーション実施について 6. 新大学図書館建設について 7. 図書システムについて 8. 利用規程の改正について 9. その他 <p>教員の長期貸出図書の返還作業の処理状況について</p> |
| | 4月26日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学図書館 1990 年度オリエンテーション実施について（中間報告） 2. 新大学図書館建設について 3. 収書計画について 4. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 特別図書について (2) 教職員への閲覧証配付について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1989 年度図書費決算に関する件 2. 1990 年度図書費予算に関する件 3. 基本図書（外国書）および逐次刊行物の収書計画に関する件 |
| | 10月25日 | 2回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新大学図書館建設に関する件 2. 新大学図書館建設に伴う人事計画（案）に関する件 3. 収書計画に関する件 <ol style="list-style-type: none"> (1) 新大学図書館建設に伴う収書計画について <ol style="list-style-type: none"> ①参考図書の選定結果について ②逐次刊行物の選定結果について ③基本図書の選定について (2) 特別図書購入基金による収書について (3) 臨時定員増に伴う外国語図書の購入について 4. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 延滞図書・資料の督促について (2) 雑誌・逐次刊行物（収書計画分）の資料提供について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1991 年度図書費予算概算要求に関する件 2. 1991 年度外国語雑誌予約の継続更新に関する件 3. 1991 年度外国語雑誌の新規購読に関する件 4. 開架室所蔵図書の分類冊子目録の取扱い変更に関する件 |
| 1990 (平成2) | 2月28日 | 合同 | <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1991 年度図書館図書費予算（中間報告）について 2. 1990 年度図書費支出状況について 3. 1990 年度視聴覚室資料費（消耗図書費）支出状況について 4. 収書計画について 5. 特別図書について 6. 1990 年度図書館利用状況について 7. 1991 年度新入生に対する大学図書館オリエンテーションの実施について 8. 図書システムについて 9. 日通トランクルーム保管図書の利用取り扱いについて 10. 新大学図書館建設について |

| | | | |
|---------------|--------|----|---|
| 1991 (平成3) | 4月25日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学図書館 1991 年度オリエンテーション実施について（中間報告） 2. 新大学図書館建設について 3. 収書計画について 4. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 特別図書について (2) 雑誌室利用手続きの機械化について (3) 収書計画による雑誌の利用について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1990 年度図書費決算に関する件 2. 1991 年度図書費予算に関する件 |
| | 10月24日 | 2回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新大学図書館建設に関する件 2. 収書計画の進捗状況に関する件 3. 逐次刊行物の返還計画に関する件 4. 次期電算機システム機種選定に関する件 5. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 特別図書購入基金による収書に関する件 (2) 新聞資料選定委員会の設置に関する件 <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1992 年度外国語雑誌予約発注に関する件 2. 1992 年度図書費予算概算要求に関する件 3. 大学図書館長選任規程の改正に関する件 <p>III. 懇談事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 個人（共同）研究費で購入した図書の図書館備付けについて 2. 図書返還作業について |
| | 3月5日 | 合同 | <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1992 年度図書館図書費予算（中間報告）について 2. 1992 年度視聴覚室資料費予算、備品予算（中間報告）について 3. 1991 年度図書費支出状況について 4. 1991 年度視聴覚室資料費（消耗図書費）支出状況について 5. 収書計画について 6. 1991 年度図書館利用状況について 7. 1992 年度大学図書館オリエンテーションの実施について 8. 図書システムについて 9. 新大学図書館建設について 10. 図書館自己評価委員会について 11. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 大学図書館長選任規程の改正について (2) 次期図書館長について |
| 1992 (平成4) | 4月30日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1992 年度大学図書館オリエンテーション実施について（中間報告） 2. 新大学図書館建設について 3. 収書計画について 4. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 雑誌目録改訂版の配布について (2) 学術情報センター ILL システムへの参加について (3) 夏季のホストコンピュータのリプレースについて (4) ライブラリーガイドシリーズの作成・配布について |

| | | | |
|---------------|--------|----|--|
| 1992 (平成4) | 4月30日 | 1回 | II. 協議事項 1. 1991年度図書費決算に関する件 2. 1992年度図書費予算に関する件 3. 大学図書館利用規程の改正に関する件 |
| | 10月22日 | 2回 | I. 報告事項 1. 新大学図書館建設について 2. 収書計画の進捗状況について 3. 特別図書購入基金による収書について 4. M-680 H システムの共同運用に関する申し合わせについて 5. 図書館自己評価委員会について 6. その他 (1) 図書館狭隘化の現状について (2) 学術資料講演会および特別展示について (3) 大学中・長期計画の策定について II. 協議事項 1. 1993年度外国語雑誌予約発注に関する件 2. 1993年度図書費予算概算要求に関する件 |
| | 3月11日 | 合同 | 議題 1. 1993年度図書館図書費予算について 2. 1993年度視聴覚室資料費予算、備品予算について 3. 1992年度図書費支出状況について 4. 1992年度視聴覚室資料費（消耗図書費）支出状況について 5. 収書計画について 6. 1992年度図書館利用状況について 7. 1993年度大学図書館オリエンテーションの実施について 8. 図書システムについて 9. 新大学図書館建設について 10. 図書館自己評価委員会報告について 11. その他 (1) 第一次中長期計画策定（案）について (2) 下村寅太郎博士蔵書の企画部から図書館への移管について |
| 1993 (平成5) | 5月6日 | 1回 | I. 報告事項 1. 1993年度大学図書館オリエンテーション実施について（中間報告） 2. 新大学図書館建設について 3. 収書計画について 4. その他 (1) 雑誌目録追録の配布について (2) 4月からの OPAC 試験稼働について (3) 外国語雑誌購読スケジュールについて (4) 学術資料講演会および特別展示について II. 協議事項 1. 1992年度図書費決算に関する件 2. 1993年度図書費予算に関する件 |
| | 10月21日 | 2回 | I. 報告事項 1. 新大学図書館建設について 2. 収書計画の進捗状況について 3. 特別図書購入基金による収書について 4. その他 (1) 学術資料講演会および特別展示について (2) 大学中期計画について |

| | | | |
|---------------|--------|----|---|
| 1993 (平成5) | 10月21日 | 2回 | <p>(3) 第2次収書計画について</p> <p>Ⅱ. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1994年度外国語雑誌予約発注に関する件 (継続更新、新規購入等について) 2. 1994年度図書費予算概算要求に関する件 |
| | 3月17日 | 合同 | <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1994年度図書館図書費予算について 2. 1994年度視聴覚室資料費予算・備品予算について 3. 1993年度図書館図書費支出状況について 4. 1993年度視聴覚室資料費支出状況について 5. 収書計画の進捗状況について 6. 1993年度図書館利用状況について 7. 1994年度図書館オリエンテーションの実施について 8. ワーキングペーパーの取り扱いについて 9. 新大学図書館建設について 10. 大学図書館組織の改編に伴う規程改正について 11. OPACの利用について 12. 時計台の跡利用について 13. その他 <p>図書館図書費 B 購入図書・資料の重複調査結果および分置状況について</p> |
| 1994 (平成6) | 4月28日 | 1回 | <p>Ⅰ. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1994年度大学図書館オリエンテーション実施について (中間報告) 2. 新大学図書館建設について 3. 第2次収書計画について 4. OPAC (目録検索) システムの業務利用について 5. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 外国語雑誌購読スケジュールについて (2) 学術資料講演会および特別展示について <p>Ⅱ. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1993年度図書費決算に関する件 2. 1994年度図書費予算に関する件 3. ワーキングペーパーの取扱いに関する件 |
| | 10月6日 | 2回 | <p>Ⅰ. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新大学図書館建設に関する件 2. 第2次収書計画の進捗状況について 3. 学術資料講演会および特別展示について 4. 次期大学図書館長の選挙について 5. その他 <ol style="list-style-type: none"> 下村蔵書について <p>Ⅱ. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1995年度図書館図書費予算概算要求に関する件 2. 新任教員 (総合政策学部) の図書費配分に関する件 3. 柚木文書マイクロ化に関する件 4. 新聞覧証に関する件 5. 新大学図書館第1期開館に伴う措置に関する件 6. 第1期開館時の利用サービスに関する件 |
| | 3月30日 | 合同 | <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新大学図書館建設経過について 2. 震災による被害と復旧状況ならびに特別措置について 3. 開架室天井取り壊し工事について 4. 第2次収書計画の進捗状況について |

| | | | |
|---------------|--------|----|--|
| 1994 (平成6) | 3月30日 | 合同 | 5. 1995 年度図書館図書費、視聴覚室資料費予算について 6. 1995 年度視聴覚室備品予算について 7. 1994 年度図書館図書費の支出状況について 8. 1994 年度視聴覚室資料費支出状況について 9. 1994 年度図書館利用状況について 10. AV 資料の選定について 11. 1995 年度図書館オリエンテーションの実施について |
| 1995 (平成7) | 4月27日 | 1回 | I. 報告事項 1. 1995 年度大学図書館オリエンテーション実施について 2. 新大学図書館建設について 3. 第2次収書計画について 4. 次年度外国語雑誌の購読申込みスケジュールについて 5. 保存書庫図書資料の利用制限について II. 協議事項 1. 1994 年度図書費決算に関する件 2. 1995 年度図書費予算(案)に関する件 |
| | 10月26日 | 2回 | I. 報告事項 1. 新大学図書館建設に関する件 (1) 第1期開館について (2) 第2期建設工事について 2. 第2次収書計画の進捗状況について II. 協議事項 1. 1996 年度図書館図書費予算概算要求に関する件 2. 1996 年度外国語雑誌新規購読について III. 懇談事項 図書・資料の購入について IV. その他 新大学図書館の規程改正について |
| 1996 (平成8) | 5月2日 | 1回 | I. 報告事項 1. 新大学図書館建設について 2. 第2次収書計画について 3. 第1期開館の利用状況について 4. 次年度外国語雑誌の購読申込みスケジュールについて 5. 規程改正について II. 協議事項 1. 1995 年度図書費決算に関する件 2. 1996 年度図書費予算(案)に関する件 3. 新聞資料選定について |
| | 11月7日 | 2回 | I. 報告事項 1. 新大学図書館建設について ～グランドオープン図面～ 2. 第2次収書計画について 3. 第1期開館の利用状況について 4. 1996 年度図書費支出状況について 5. 指定図書制度について II. 協議事項 1. 新大学図書館第2期開館にむけての措置について 2. 1997 年度外国語雑誌新規購読について 3. 1997 年度図書費予算申請について 4. 規程改正について |

| | | | |
|---------------|-------|----|---|
| 1996 (平成8) | 12月5日 | 3回 | I. 報告事項 なし II. 協議事項 1. 第2次収書計画による新聞選定に関する件 2. 規程改正に関する件 |
| | 2月20日 | 4回 | I. 報告事項 グランドオープンに向けてのスケジュールについて II. 協議事項 1. 規程改正に関する件 2. その他 新着図書コーナーの考え方 |
| 1997 (平成9) | 5月8日 | 1回 | I. 報告事項 1. 新大学図書館建設について 2. 第2次収書計画について 3. 利用状況について 4. 1998年度外国語雑誌の購読申込みスケジュールについて 5. 選書アドバイザー制度について 6. その他 大学図書館の公開について II. 協議事項 1. 1996年度図書費決算に関する件 2. 1997年度図書費予算(案)に関する件 (1) 指定図書について (2) 学部・直属割当図書費について 3. 雑誌新規選定分の予算に関する件 4. 8月、9月の閉館措置に関する件 5. 特別図書購入基金によるコレクションの特別文庫指定に関する件 |
| | 6月19日 | 2回 | I. 報告事項 1. グランドオープンまでの予定について 2. 利用状況について 3. 新大学図書館グランドオープンに向けての措置について II. 協議事項 大学図書館の公開規程(案)に関する件 |
| | 11月6日 | 3回 | I. 報告事項 1. 大学図書館の利用状況について 2. 第2次収書計画について 3. 選書アドバイザーについて 4. 1997年度図書費支出状況について 5. 指定図書制度について 6. 大学図書館自己点検・評価について II. 協議事項 1. 1998年度外国雑誌新規購読について 2. 1998年度図書費予算申請について III. その他 1. 蔵書の配架について 2. 学部備え付け図書の利用について 3. 図書費Bの事務手続き変更について |

| | | | |
|----------------|-------|----|--|
| 1997 (平成9) | 1月29日 | 4回 | I. 協議事項 外国語雑誌購読価格の高騰に伴う必要タイトル調査について |
| | 3月5日 | 5回 | I. 報告事項 「文芸春秋」、「新潮45」3月号の利用上の取り扱いについて II. 協議事項 外国語雑誌購読価格の高騰に伴う必要タイトル調査について（継続審議） |
| 1998 (平成10) | 5月6日 | 1回 | I. 報告事項 1. 1998年度選書アドバイザーについて 2. 分置図書の返還について 3. 1997年度大学図書館利用状況について 4. 1998年度大学図書館公開登録者について 5. 公共図書館（西宮市、三田市）との相互協力申し合わせについて 6. 1999年度新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 7. 外国語雑誌購読価格の高騰に伴う必要タイトル調査について II. 協議事項 1. 1997年度図書費決算（案）に関する件 2. 1998年度図書費予算（案）に関する件 |
| | 7月1日 | 2回 | I. 協議事項 外国語雑誌購読タイトルの見直しに関する件 |
| | 10月8日 | 3回 | I. 報告事項 大学院の夜間授業開講に伴う大学図書館の対応に関する件 II. 協議事項 1. 外国語雑誌購読タイトル見直しについて【第2次案】に関する件 2. 1999年度の大学図書館図書費の予算申請に関する件 3. 1999年度の新規購読外国語雑誌の推薦に関する件 4. 外国語雑誌変更に関する件 III. 懇談事項 神戸三田キャンパス大学図書館分室の図書館図書費の扱いに関する件 |
| 1999 (平成11) | 5月13日 | 1回 | I. 報告事項 1. 開館時間に関する件 2. 1999年度選書アドバイザーに関する件 3. 1998年度大学図書館利用状況に関する件 4. 1999年度大学図書館公開登録者に関する件 5. 2000年度新規外国語雑誌選定・発注スケジュールに関する件 II. 協議事項 1. 1998年度図書費決算（案）に関する件 2. 1999年度図書費予算（案）に関する件 |
| | 10月7日 | 2回 | I. 報告事項 1. 大学新構想推進委員会の報告（神戸三田キャンパス大学図書館分室関係）に関する件 2. オンラインジャーナル（無料分）の提供に関する件 3. 内部監査および予算執行等に関する件 4. 第15回日本図書館協会建築賞の受賞に関する件 5. 展示・講演会に関する件 II. 協議事項 1. 2000年度の大学図書館図書費予算の申請に関する件 2. 2000年度新規外国語雑誌購読タイトルに関する件 III. 懇談事項 繁忙期（試験期）の対策に関する件 |

| | | | |
|----------------|-------|----|---|
| 2000 (平成12) | 5月11日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 神戸三田キャンパス第2期整備推進委員会の報告について 2. 次期図書システム再構築について 3. 2000年度選書アドバイザーについて 4. 1999年度大学図書館利用状況について 5. 1999年度秋学期定期試験中の自習室としての教室開放について 6. 2000年度大学図書館公開登録者について 7. 2001年新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 8. 2000年新規外国語雑誌購読タイトルの一部差替について 9. 図書館図書費による選書・発注・配架について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1999年度図書費決算(案)に関する件 2. 2000年度図書費予算(案)に関する件 3. 大学図書館公開規程の改正(案)に関する件 <p>III. 懇談事項</p> <p>延滞図書について</p> |
| | 10月5日 | 2回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 展示・講演会について 2. J. C. C. Newton 賞作品募集について 3. 図書館自己点検・評価結果について 4. 指定図書制度について 5. 内部監査(図書館図書費の執行内訳と繰越額)について 6. 次期図書システムのアンケート調査結果について 7. 総政・図書メディア棟(仮称)への引越について 8. 2000年度春学期定期試験中の自習室としての教室開放について 9. 外国語雑誌購読タイトル見直し(3年毎)について 10. First Search の利用について 11. その他 図書館のコピー機の不正利用について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2001年度大学図書館図書費予算の申請に関する件 2. 言語コミュニケーション文化研究科設置に伴う規程改正に関する件 3. 2001年新規購読外国語雑誌タイトルに関する件 4. 2001年外国語雑誌変更に関する件 <p>III. 懇談事項</p> <p>延滞図書の対策について</p> |
| | 1月25日 | 3回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 展示・講演会について <ol style="list-style-type: none"> (1) 2000年度大学図書館特別展示・学術資料講演会について (2) 大学図書館展示企画について 2. J. C. C. Newton 賞について 3. 延滞図書の対策について 4. キャンパス間相互利用・文献複写サービスの実施について 5. 理学部移転に関する図書の移動について 6. その他 カレント雑誌の切り取り被害について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 外国語雑誌購読タイトル見直し(3年毎)について 2. 外部データベースの提供について |

| | | | |
|----------------|--------|----|---|
| 2001 (平成13) | 5月10日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2001 年度選書アドバイザーについて 2. 図書システムのリブレースについて 3. 2000 年度大学図書館利用状況について 4. 2001 年度大学図書館公開登録者について 5. 延滞罰則の実施について 6. A 日程入試期間中の開館について 7. 特別文庫目録第 7 輯 (スコットランド啓蒙コレクション目録) の刊行について 8. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 特別図書について (2) 糊付け被害について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2000 年度図書費決算 (案) に関する件 2. 2001 年度図書費予算 (案) に関する件 3. 神戸三田キャンパス図書メディア館オープンに向けての特別措置について (案) に関する件 <p>III. 連絡事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 機関貸出制度による貸出図書の返却について 2. 2002 年新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 3. 2002 年度契約型データベースの選定と予算措置について 4. 外国語雑誌購読タイトル見直しの必要度調査について 5. J. C. C. Newton 賞の作品募集について |
| | 6月28日 | 2回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 運営委員の交代について 2. 防犯設備の設置について 3. 吉林大学図書館との紀要交換について 4. 神戸三田キャンパス大学図書館分室の閉館について <p>II. 協議事項</p> <p>外国語雑誌購読タイトルの見直しについて</p> <p>III. 連絡事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2002 年新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 2. 2002 年度契約型データベースの選定と予算措置について 3. J. C. C. Newton 賞の作品募集について <p>IV. その他</p> <p>図書館の運営に対する社会学部からの要望について</p> |
| | 10月11日 | 3回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 展示・講演会について 2. J. C. C. Newton 賞作品募集について 3. 図書館自己点検・評価結果について 4. 図書メディア館への引越について 5. 2002 年度契約型データベースの選定と予算措置について 6. エルゼビアサイエンス社オンラインジャーナルの SD サービスについて 7. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 図書分類表と分類表相関索引の改訂冊子の作成について (2) 社会学部からの要望について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2001 年度大学図書館図書費予算の変更に関する件 2. 2002 年度大学図書館図書費予算の申請に関する件 3. 外国語雑誌購読タイトル見直しについて 4. 2002 年新規購読外国語雑誌タイトルに関する件 |

| | | | |
|----------------|--------|----|--|
| 2002 (平成14) | 5月9日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 2002 年度選書アドバイザーについて 図書システムのリブレースについて 2001 年度大学図書館利用状況について 2002 年度大学図書館公開登録者について 入試期間中の図書館利用について 冊子目録の刊行について <ol style="list-style-type: none"> 特別文庫目録第8輯（宗教改革・教会法コレクション目録） 下村寅太郎蔵書目録 J. C. C. Newton 賞 2001 年度審査結果および 2002 年度作品募集について その他 啓明学院中学校からの図書館利用申し出について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 2001 年度図書費決算（案）に関する件 2002 年度図書費予算（案）に関する件 <p>III. 連絡事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 2003 年新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 2003 年度契約型データベースの選定スケジュールについて |
| | 10月10日 | 2回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 自己点検・評価「今後の展望」進捗状況について 大学第三次中長期計画について 国立情報学研究所が電子化する紀要に関する調査について 選書関係資料の情報提供について 2003 年度契約型データベース選定について 特別展示・学術資料講演会開催について 大学図書館事務組織改編について その他 <ol style="list-style-type: none"> 図書システムの新機能について 図書資料の糊付け被害への対応について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 啓明学院生徒および教職員の大学図書館利用の件 大学図書館開館日の拡大の件 2002 年度図書館図書資料費予算書変更の件 2003 年新規外国語雑誌選定の件 2003 年度図書館図書費予算申請の件 <p>III. 連絡事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 図書費の効率的な支出について 書架狭隘化の現状について J. C. C. Newton 賞 2002 年度作品募集について 図書館所蔵資料絵葉書の製作について |
| | 1月16日 | 3回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 第3回（2002 年度）J. C. C. Newton 賞募集結果について 学術情報基盤の環境整備としての大型データベース導入検討について 国立情報学研究所がすすめる紀要の電子化について 特別展示・学術資料講演会の開催結果について 年末年始開館の利用状況について <p>II. 協議事項</p> <p>大学図書館におけるオンラインジャーナルの取り扱いの件</p> <p>III. 懇談事項</p> <p>大学図書館事務組織改編に伴う諸規程一部改正の件</p> <p>IV. 連絡事項</p> <p>分置図書・資料の全学利用について</p> |

| | | | |
|----------------|-------|----|---|
| 2003 (平成15) | 5月8日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2003 年度選書アドバイザーについて 2. 図書システムの新機能について 3. 2002 年度大学図書館利用状況について 4. 2003 年度大学図書館公開登録者について 5. 退職教職員の図書館利用について 6. 図書館の日曜開館の検討について 7. 分置部局への目録データファイル提供について 8. J. C. C. Newton 賞 2002 年度審査結果について 9. J. C. C. Newton 賞 2003 年度作品募集について 10. 学術情報基盤の環境整備としての大型データベース導入について 11. 大学図書館学外展示企画（2003 年 9 月、東京）について 12. 事務組織改編後の業務担当について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2002 年度図書費決算（案）に関する件 2. 2003 年度図書費予算（案）に関する件 <p>III. 連絡事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書費の効率的な支出について 2. 書架狭隘化の現状と分置図書の返還について 3. 2004 年新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 4. 購読雑誌のオンラインジャーナルへの切り替えについて 5. 2004 年度契約型データベースの選定スケジュールについて <p>IV. 懇談事項</p> <p>卒業生および一般公開利用者の分置図書資料の利用について</p> |
| | 10月9日 | 2回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. J. C. C. Newton 賞 2003 年度作品募集について 2. 大学図書館所蔵資料展（2003 年 9 月、東京）開催について 3. 図書館報「時計台」No.73 発行について 4. 購読雑誌のオンラインジャーナルへの切り替えの調査結果について 5. 2004 年度契約型データベース選定の調査結果について 6. 神戸三田キャンパス図書メディア館の遮音壁設置工事について 7. 分置部局への目録データ提供調査（結果）について 8. 国立情報学研究所が電子化する紀要に関する調査結果について 9. 大型データベース導入について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2003 年度図書資料費予算書変更に関する件 2. 2004 年新規外国語雑誌選定およびタイトル切替に関する件 3. 2004 年度図書館図書資料費予算申請に関する件 4. 大学図書館公開規程の改正に関する件 <p>III. 連絡事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書費の効率的な支出について 2. 卒業生および一般公開利用者の分置図書資料の利用条件についての調査依頼について <p>IV. 懇談事項</p> <p>外国語雑誌購読タイトル見直しについて</p> |
| | 1月15日 | 3回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学図書館長の選挙結果について 2. J. C. C. Newton 賞 2003 年度審査結果について 3. 国立情報学研究所が電子化する紀要に関する調査結果について 4. 2004 年度以降の開館時間およびカウンターサービス時間について 5. 卒業生および一般公開利用者の分置図書資料の利用条件調査結果について |

| | | | |
|----------------|-------|----|--|
| 2003 (平成15) | 1月15日 | 3回 | 6. 「図書館図書費海外持ち出しに関する了解事項」の廃止について 7. その他 震災立体映像資料（神戸三田キャンパス図書メディア館備え付け）の上映会参加要請について II. 協議事項 1. 大学図書館運営委員会規程一部改正に関する件 2. 外国語雑誌購読タイトル見直しに関する件 |
| 2004 (平成16) | 5月13日 | 1回 | I. 報告事項 1. 2004 年度選書アドバイザーについて 2. 2003 年度大学図書館利用状況について 3. 2004 年度大学図書館公開登録者について 4. 図書館報「時計台」No.74 発行について 5. 図書館の日曜開館について 6. 平成 16 年度国立情報学研究所週及入力事業について 7. J. C. C. Newton 賞 2004 年度作品募集について 8. 「関西学院新聞」のデータベース公開について II. 協議事項 1. 2003 年度図書費決算（案）に関する件 2. 2004 年度図書費予算（案）に関する件 3. 大学図書館公開規程の改正に関する件 4. 図書館図書資料費 A での外国語雑誌購読についての変更点 III. 連絡事項 1. 図書費の効率的な支出について 2. 書架狭隘化の現状と分置図書の返還について |
| | 6月24日 | 2回 | I. 報告事項 1. 喫茶室アルカディアの禁煙措置について 2. 平成 16 年度私立大学等経常費補助金「私立大学教育研究高度化推進特別補助」申請について 3. ICPSR DIRECT の利用について II. 協議事項 外国語雑誌購読タイトル見直し（案）に関する件 III. 連絡事項 1. J. C. C. Newton 賞の作品募集について 2. 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館内の教育研究用 PC のリプレースについて 3. グループ閲覧室への教育研究用 PC 設置工事について 4. マイクロサーバー機増設工事について 5. 夏季ネットワーク工事等に関連した図書館提供サービスの停止について |
| | 10月7日 | 3回 | I. 報告事項 1. J. C. C. Newton 賞 2004 年度作品募集について 2. 2005 年度契約型データベース選定の調査結果について 3. 秋季特別展示・学術資料講演会開催について 4. 2004 年度春学期オリエンテーション実施結果について 5. 図書館内施設・設備の改善について（グループ閲覧室・マイクロサーバー） 6. 大学図書館の理念目標について II. 協議事項 1. 2005 年度図書館図書資料費予算申請に関する件 2. 2004 年度図書資料費予算変更に関する件 3. 2005 年度新規外国語雑誌選定およびタイトル切替に関する件 4. 外国語雑誌購読タイトルの見直しに関する件 5. 経営戦略研究科設置に伴う運営委員会規程の改正に関する件 |

| | | | |
|----------------|-------|----|--|
| 2004 (平成16) | 10月7日 | 3回 | Ⅲ. 連絡事項 1. 図書費の効率的な支出について 2. OPAC の変更について 3. OPAC の関学紀要データと CiNii とのリンクについて 4. 教育研究用システムリプレースについて 5. 電子メールでの「貸出図書返却予定日のお知らせ」について |
| 2005 (平成17) | 5月12日 | 1回 | I. 報告事項 1. 2005 年度選書アドバイザーについて 2. 2004 年度大学図書館利用状況について 3. 2005 年度大学図書館公開登録者について 4. 図書館報「時計台」No.75 発行について 5. 第 6 回 J. C. C. Newton 賞（2005 年度）作品募集について 6. 「関西学院と聖書」データベースについて 7. EUIJ 関西について 8. 図書館自己評価：大学図書館利用者実態調査について 9. 産業研究所との連携強化について 10. 図書システムの機能向上について 11. 除籍図書の有効利用について 12. 図書館年史編纂委員会の設置について 13. 情報環境整備計画の推進について II. 協議事項 1. 2004 年度図書費決算（案）に関する件 2. 2005 年度図書費予算（案）に関する件 III. 連絡事項 1. 図書費の効率的な支出について 2. 書架狭隘化の現状と分置図書の返還について 3. 2006 年新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 4. 2006 年新規オンラインジャーナル契約・媒体変更について 5. 国立情報学研究所が電子化する研究紀要について IV. 懇談事項 1. リコール制の導入および OPAC 画面からの「継続更新」システムの利用について 2. 個人情報の利用と保護の考え方について |
| | 7月14日 | 2回 | I. 報告事項 1. 個人情報の取り扱いについて 2. EUIJ 関西について II. 連絡事項 1. 2006 年新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 2. 2006 年オンラインジャーナル契約・媒体変更について III. 協議事項 リコール制の導入および OPAC 画面からの「継続更新」システムの利用について |
| | 10月6日 | 3回 | I. 報告事項 1. J. C. C. Newton 賞 2005 年度作品募集について 2. 秋季特別展示・学術資料講演会開催について 3. EUIJ 関西・大学図書館相互利用協定書締結について 4. 2005 年度春学期オリエンテーション実施結果について 5. 情報環境整備における機関リポジトリの構築について 6. 大学図書館利用実態調査結果について 7. 自己点検・評価報告書（第 2 次報告）について |

| | | | |
|----------------|-------|----|--|
| 2005 (平成17) | 10月6日 | 3回 | 8. 震災文庫関連図書資料コーナーの設置について II. 協議事項 1. 2006年度図書館図書資料費予算申請に関する件 2. 2005年度図書資料費予算変更に関する件 3. 2006年新規外国語雑誌選定およびタイトル切替に関する件 III. 連絡事項 図書の効率的な支出について |
| | 11月7日 | 4回 | I. 協議事項（持ち回り） 2006年外国語雑誌タイトル切替に関する件 |
| 2006 (平成18) | 5月11日 | 1回 | I. 報告事項 1. 2006年度選書アドバイザーについて 2. 情報環境整備計画：図書システムの機能向上について 3. 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館書架狭隘化対策について 4. 2005年度大学図書館利用状況について 5. 2006年度大学図書館一般公開利用登録者について 6. 図書館報「時計台」No.76発行について 7. 第7回 J. C. C. Newton 賞（2006年度）作品募集について 8. 「兵庫県漁具図解」データベース構築について 9. 国立情報学研究所週及入力事業の採択状況について 10. 図書システムリプレースについて II. 協議事項 1. 2005年度図書費決算（案）に関する件 2. 2006年度図書費予算（案）に関する件 III. 連絡事項 1. 図書費の効率的な支出について 2. 分置図書の返還について 3. 2007年新規外国語雑誌選定・発注スケジュールについて 4. 2007年オンラインジャーナル契約・媒体変更について 5. 受注生産する図書資料の見計らいについて 6. 教員対象図書館利用実態調査の実施について 7. その他 甲南大学図書館からの耐震補強工事期間中の関西学院大学図書館の利用についての依頼について |
| | 10月5日 | 2回 | I. 報告事項 1. 第67回私立大学図書館協会総会・研究大会について 2. 第7回（2006年度）J. C. C. Newton 賞作品募集について 3. 秋季特別展示・学術資料講演会開催について 4. 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館書架増設に伴う配架場所変更について 5. 教員対象図書館利用実態調査依頼について 6. 図書システム・リプレースについて 7. 和装本の取扱いの変更について 8. 新着図書展示の実施について 9. 夏季期間（8月1日～9月30日）の甲南大学生の特別利用件数について II. 協議事項 1. 2007年度図書館図書資料費予算申請に関する件 2. 2006年度図書館図書資料費予算変更に関する件 3. 2007年新規外国語雑誌選定およびタイトル切替に関する件 |

| | | | |
|----------------|--------|----|--|
| 2006 (平成18) | 10月5日 | 2回 | Ⅲ. 連絡事項 1. 図書費の効率的な支出について 2. 外国語雑誌の購読タイトル見直しについて Ⅳ. 懇談事項 1. 新規外国語雑誌購読に際しての不足額充当について 2. 購読雑誌の冊子体からオンラインジャーナルへの提供方法変更について 3. エルゼビア社発行の購読雑誌のオンライン提供について |
| | 12月14日 | 3回 | Ⅰ. 報告事項 1. 館長の選任について 2. 情報環境整備における機関リポジトリの構築について 3. 大学図書館教員アンケート集計結果について Ⅱ. 協議事項 1. 購読雑誌の冊子体からオンラインジャーナルへの提供方法変更に関する件 2. エルゼビア社発行の購読雑誌のオンライン提供に関する件 Ⅲ. 連絡事項 オンラインのみ刊行されている雑誌の購読条件について |
| | 12月18日 | 4回 | Ⅰ. 協議事項(持ち回り) 1. 購読雑誌の冊子体からオンラインジャーナルへの提供方法変更について 2. エルゼビア社発行の購読雑誌のオンライン提供について |
| 2007 (平成19) | 5月10日 | 1回 | Ⅰ. 報告事項 1. 2007年度選書アドバイザーについて 2. 学術成果発信システム(機関リポジトリ)の稼働について 3. 目録検索システム(OPAC)の機能追加について 4. 2006年度大学図書館利用状況について 5. 卒業生の図書返却について 6. 2007年度大学図書館一般公開利用登録者について 7. 図書館報「時計台」No.77発行について 8. 第8回 J. C. C. Newton 賞(2007年度)作品募集について 9. 「経済思想家の手稿と自筆書簡」データベース構築について 10. 図書館年史編纂委員会委員長(柳屋法学部教授)の継続について 11. 西宮上ヶ原キャンパスにおける書庫スペースの確保について 12. 神戸三田キャンパス第3期整備計画における大学図書館分室について Ⅱ. 協議事項 1. 2006年度図書資料費予算変更に関する件 2. 2006年度図書費決算(案)に関する件 3. 2007年度図書費予算(案)に関する件 Ⅲ. 連絡事項 1. 図書費の効率的な支出について 2. 分置図書の返還について 3. 2008年外国語雑誌の新規購読の推薦等について 4. 2008年冊子体からオンラインジャーナルへの媒体変更について 5. 受注生産する図書資料の見計らいについて |
| | 10月4日 | 2回 | Ⅰ. 報告事項 1. 第8回(2007年度)J. C. C. Newton 賞作品募集について 2. 秋季特別展示・学術資料講演会について 3. 関西学院大学リポジトリの本稼働について 4. 西宮上ヶ原キャンパスにおける書庫スペースの確保について Ⅱ. 協議事項 1. 2007年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. 2008年度図書館図書資料費予算申請に関する件 |

| | | | |
|----------------|--------|----|--|
| 2007 (平成19) | 10月4日 | 2回 | 3. 2008年新規外国語雑誌選定およびタイトル切替に関する件 4. 図書・資料の学外保管に関する件 Ⅲ. 連絡事項 1. 図書費の効率的な支出について 2. アンケート「電子ジャーナル利用動向調査2007」への協力依頼について |
| | 11月29日 | 3回 | I. 報告事項 1. 関西学院大学リポジトリについて 2. その他 杉原図書館長の次年度からの学長就任に伴う図書館長の任期について Ⅱ. 懇談事項 1. 図書・資料の学外保管について 2. 図書館図書費Bの配分について |
| 2008 (平成20) | 5月8日 | 1回 | I. 報告事項 1. 2008年度選書アドバイザーについて 2. 関西学院大学リポジトリの稼働状況について 3. 2007年度大学図書館利用状況について 4. 2008年度大学図書館一般公開利用登録者について 5. 図書館報「時計台」No.78発行について 6. 第9回J.C.C. Newton賞(2008年度)作品募集について 7. 「クラーク＝ギディングズ往復書簡」データベース構築について 8. 学外保管の図書資料の運用について 9. 神戸三田キャンパス共用棟の大学図書館分室建設について 10. 学長宛の閲覧座席数確保に関する要望について 11. 聖和大学図書館の耐震および改修工事に伴う聖和大学生の関学図書館利用依頼について 12. 卒業生の未返却図書リストの配布結果について Ⅱ. 協議事項 1. 2007年度図書費決算(案)に関する件 2. 2008年度図書費予算(案)に関する件 3. 図書館図書費Bの配分に関する件 4. 内部監査報告書に関する件 Ⅲ. 懇談事項 1. 図書館図書費Bの配分について 2. 内部監査報告書について Ⅳ. 連絡事項 1. 図書費の効率的な支出について 2. 分置図書の返還について 3. 2009年外国語雑誌の新規購読の推薦等について 4. 2009年冊子体からオンラインジャーナルへの媒体変更について 5. 各管理単位による図書システム利用について |
| | 6月19日 | 2回 | I. 報告事項 1. 図書資料の学外保管について 2. 第3次中長期計画の見直しについて 3. 予算制度の見直しについて Ⅱ. 懇談事項 図書館図書費の配分案について |
| | 7月17日 | 3回 | I. 報告事項 1. 講師等の派遣について 2. 2008年度大学図書館利用実態調査について |

| | | | |
|----------------|-------|----|---|
| 2008 (平成20) | 7月17日 | 3回 | II. 懇談事項 <ol style="list-style-type: none"> 1. 自動化書庫について 2. 理事長からの検討依頼に対する回答案について 3. 繰越制度廃止に伴う事務処理上の問題点について 4. 2008 年度繰越分の 2009 年度における使用について |
| | 10月9日 | 4回 | I. 報告事項 <ol style="list-style-type: none"> 1. 理事長からの検討依頼に対する回答について 2. 秋季特別展示・学術資料講演会について 3. 図書・資料の学外保管状況について 4. 自動化書庫調査結果について 5. 各管理単位による図書システム利用について 6. 神戸三田キャンパス第3期整備計画に伴う図書メディア館引越しについて 7. 提携校生徒の大学図書館利用者証の発行について 8. 2008 年度大学図書館利用実態調査について 9. 図書館ホームページリニューアル版の稼働について 10. 祝日授業日に伴う対応について 11. 繰越制度廃止に伴う事務処理について II. 協議事項 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2008 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. 2009 年度図書館図書資料費等予算申請に関する件 3. 2009 年新規外国語雑誌選定およびタイトル切替に関する件 4. 2009 年冊子体からオンラインジャーナルへの媒体変更に関する件 III. 懇談事項 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2009 年度図書費予算配分について 2. 2008 年度繰越分の 2009 年度における使用について |
| 2009 (平成21) | 5月7日 | 1回 | I. 報告事項 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2009 年度選書アドバイザーについて 2. 2008 年度大学図書館利用状況について 3. 2009 年度大学図書館一般公開利用登録者について 4. 図書館報「時計台」No.79 発行について 5. 第10回 J. C. C. Newton 賞（2009 年度）作品募集について 6. 神戸三田キャンパス図書メディア館新規オープンについて 7. 関西学院大学リポジトリの稼働状況について 8. 新規サービス（MyLibrary、SDI アラート）の開始について 9. OPAC オンラインサービスについて 10. 図書システムリブレースプロジェクトチームについて 11. 卒業式当日の未返却図書リストの配布結果について 12. 2008 年度学外保管図書利用状況について 13. 2008 年度大学図書館利用実態調査結果について 14. 「先生のおすすめの本」コーナー設置について 15. 「新聞書評掲載図書」コーナー設置について II. 協議事項 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2008 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. 2008 年度図書費決算（案）に関する件 3. 2009 年度図書費予算（案）に関する件 III. 連絡事項 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2010 年外国語雑誌の新規購読の推薦等について 2. 2010 年冊子からオンラインジャーナルへの媒体変更について IV. 懇談事項 <ol style="list-style-type: none"> 1. 2009 年度以降の図書館図書費予算の執行について 2. 自動化書庫について |

| | | | |
|----------------|--------|----|--|
| 2009 (平成21) | 6月11日 | 2回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「与謝野晶子による丹羽安喜子短歌草稿への添削」デジタルライブラリ全文公開について 2. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 2008 年度実施の大学図書館実態調査報告書の HP からの公開について (2) 「先生のおすすめの本」コーナー設置について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2009 年度以降の図書館図書費 B 予算の執行に関する件 2. 自動化書庫の運用と設備要件に関する件 |
| | 7月9日 | 3回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の座席数確保について 2. 秋季特別展示企画・学術資料講演会について 3. 図書館紹介パンフレット発行について 4. 「先生のおすすめの本」コーナー設置について <p>II. 協議事項</p> <p>2009 年度図書館図書資料費予算変更に関する件</p> <p>III. 懇談事項</p> <p>Annual Reviews 発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えについて</p> <p>IV. その他</p> <p>第 2 回大学図書館運営委員会資料の訂正について</p> |
| | 10月8日 | 4回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新聞書評掲載図書コーナー設置について 2. 図書・資料の学外保管状況について 3. 次期図書システムについて 4. 学長宛「2010 年度以降の図書館図書費予算について（要望）」について 5. 学長宛「[H. S. フォックススウェル文書] 購入について（要望）」について 6. その他 <p>産業研究所図書業務の図書館への移管について</p> <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2009 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. 2010 年度図書館図書資料費等予算申請に関する件 3. 2010 年新規外国語雑誌選定およびタイトル切替に関する件 4. 2010 年冊子体からオンラインジャーナルへの媒体変更に関する件 5. Oxford University Press 発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えに関する件 6. Annual Reviews 発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えに関する件 <p>III. 懇談事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2011 年以降の外国語雑誌新規購読推薦の中止について |
| | 11月12日 | 5回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学図書館内への警備員の配置について 2. 産業研究所の図書業務移管時期等について 3. 2010 年度図書館図書資料費等予算申請について 4. 第 10 回 J. C. C. Newton 賞応募状況について 5. 次期大学図書館長について 6. その他 <p>学術資料講演会について</p> <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2009 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. 2011 年以降の新規外国語雑誌購読推薦制度の廃止に関する件 |

| | | | |
|----------------|-------|----|--|
| 2010 (平成22) | 5月6日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2010 年度選書アドバイザーについて 2. 2009 年度大学図書館利用状況について 3. 2010 年度大学図書館一般公開利用登録者について 4. 大学リポジトリの運用状況について 5. 大学自己点検評価について（目標設定シートの報告） 6. 「先生のおすすめの本」について 7. 図書館報「時計台」No.80 発行について 8. 第 11 回 J. C. C. Newton 賞（2010 年度）作品募集について 9. 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館閲覧座席増設工事について 10. 図書貸出日表への押印廃止について 11. 新規受入図書の装備変更について（バーコードラベルほか） 12. 既登録分へのバーコードラベル週及貼付について 13. 図書資料の学外保管状況について 14. 「レポート・論文作成関連図書コーナー」の設置について 15. 千里国際中等部生、高等部生、大阪インターナショナルスクール生の大学図書館利用について 16. 貴重品袋の運用について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2009 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. 2009 年度図書館図書資料費決算（案）に関する件 3. 2010 年度図書館図書資料費予算（案）に関する件 <p>III. 連絡事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新規外国語雑誌購入制度廃止に伴う購読雑誌の差し替えについて 2. 2011 年冊子からオンラインジャーナルへの媒体変更について |
| | 6月10日 | 2回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書費 B 予算執行状況の図書管理担当者へのお知らせについて 2. 「H. S. フォックスウェル文書」について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2010 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. 「大学図書館図書・資料選定内規」一部改正に関する件 <p>III. 懇談事項</p> <p>Springer 社発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えについて</p> |
| | 7月8日 | 3回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「明治・大正の文学者たちの書簡と草稿」データベースの公開について 2. OPAC から提供される新サービスについて 3. 聖和短期大学図書館との延滞罰則についての申し合わせについて <p>II. 懇談事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Springer 社発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えについて 2. Cambridge University Press 発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えについて |
| | 10月7日 | 4回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書・資料の学外保管状況について 2. 出版元変更に伴う冊子からオンラインジャーナルへの媒体変更について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2010 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. 2011 年度図書館図書資料費等予算申請に関する件 3. 2011 年外国語購読雑誌タイトル変更（差し替え）および冊子から電子ジャーナルへの媒体変更に関する件 4. Springer 社発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えに関する件 |

| | | | |
|----------------|-------|----|---|
| 2010 (平成22) | 10月7日 | 4回 | 5. Cambridge University Press 発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えに関する件 6. 冊子から電子ジャーナルへの媒体変更 (図書館提案分) に関する件 7. 防犯カメラの設置に関する件 Ⅲ. その他 1. 「先生のおすすめの本」パンフレットについて 2. OPAC の書影表示機能について 3. 自動化書庫計画について |
| 2011 (平成23) | 5月12日 | 1回 | I. 報告事項 1. 2011 年度選書アドバイザーについて 2. 2010 年度大学図書館利用状況について 3. 2011 年度大学図書館一般公開利用登録者について 4. 大学リポジトリの運用状況について 5. 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館閲覧座席増設について 6. 図書資料の学外保管状況について 7. 2011 年度営繕工事・備品予算申請結果について 8. 東日本大震災で被災された大学生への支援について 9. 卒業式当日の未返却図書リストの配布結果について 10. オンラインでのキャンパス間取り寄せ対象資料の変更について 11. 「先生のおすすめの本」について 12. 図書館報「時計台」No.81 発行について 13. 第 12 回 (2011 年度) J. C. C. Newton 賞作品募集について II. 協議事項 1. 2010 年度図書館図書資料費決算 (案) に関する件 2. 2011 年度図書館図書資料費予算 (案) に関する件 Ⅲ. 連絡事項 1. 2012 年外国語購読雑誌タイトル変更 (差し替え) について 2. 2012 年冊子から電子ジャーナルへの媒体変更について 3. 2011 年度の図書発注・納品に関するスケジュールについて |
| | 6月9日 | 2回 | I. 報告事項 1. 東日本大震災で被災された地域の大学に在学中あるいは入学予定の学生への対応期間の延長について 2. 製本雑誌バーコードラベル貼付位置変更について 3. その他 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館閲覧座席増設について II. 協議事項 2011 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 Ⅲ. 懇談事項 Taylor & Francis 社発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えについて |
| | 7月7日 | 3回 | I. 報告事項 防犯カメラの設置図について II. 懇談事項 Taylor & Francis 社発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えについて Ⅲ. 連絡事項 部局配架カレント雑誌 (図書館図書費 A 購読分) の管理および製本時の欠号補充について |

| | | | |
|----------------|--------|----|--|
| 2011 (平成23) | 10月6日 | 4回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「H. S. フォックスウェル文書」について 2. 産業研究所図書業務の大学図書館への移管について 3. 図書・資料の学外保管状況について 4. 図書館ホームページ Web データベース表示画面のリニューアルについて 5. NetLibrary（電子ブック）の OPAC 公開について 6. 「経済思想家の手稿と自筆書簡」データベースへの書簡追加について 7. 秋季特別展示・学術資料講演会について 8. 防犯カメラの設置及び稼働について 9. 「先生のおすすめの本」について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2012 年度図書館図書資料費等予算申請に関する件 2. 2012 年外国語購読雑誌タイトル変更（差し替え）および冊子から電子ジャーナルへの媒体変更に関する件 3. Taylor & Francis 社発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えについて 4. 大学図書館規程改正について <p>III. 懇談事項</p> <p>AIP (American Institute of Physics) 発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えについて</p> |
| | 11月10日 | 5回 | <p>I. 報告事項</p> <p>2011 年度基礎演習対象「文献の探し方講習会」教員アンケートの実施結果について</p> <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2011 年度図書館図書資料費予算変更に関する件 2. AIP (American Institute of Physics) 発行購読雑誌の電子ジャーナルへの切り替えに関する件 <p>III. 懇談事項</p> <p>電子ジャーナル、データベースの共通費での購入について</p> <p>IV. 連絡事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 第 20 回大学図書館学術資料講演会について 2. CiNi のサービス変更について |
| | 12月8日 | 6回 | <p>I. 懇談事項</p> <p>電子ジャーナル、データベースの共通費での購入について</p> |
| 2012 (平成24) | 5月10日 | 1回 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2012 年度選書アドバイザーについて 2. 2011 年度大学図書館利用状況について 3. 2012 年度大学図書館一般公開利用登録者について 4. 大学リポジトリの運用状況について 5. 図書資料の学外保管状況について 6. フォックスウェル文書の購入について 7. 大学図書館の開館に関する暴風警報発令時の取扱いについて 8. 2012 年度宮繕工事・備品予算申請結果について 9. 東日本大震災で被災された大学生への支援について 10. 卒業式当日の未返却図書リストの配布結果について 11. 電子ジャーナルリストの切替に伴う不備について 12. 「先生のおすすめの本」について 13. 新書・文庫コーナーの充実について 14. 図書館報『時計台』No.82 発行について 15. 第 13 回 (2012 年度) J. C. C. Newton 賞作品募集について |

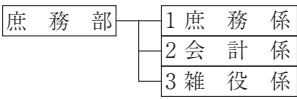
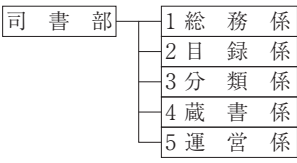
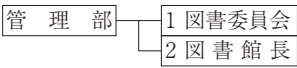
| | | | |
|----------------|--------|----|---|
| 2012 (平成24) | 5月10日 | 1回 | II. 協議事項 1. 2011 年度図書館図書資料費決算（案）に関する件 2. 2012 年度図書館図書資料費予算（案）に関する件 III. 連絡事項 1. 2013 年外国語購読雑誌タイトル変更（差し替え）について 2. 2013 年冊子から電子ジャーナルへの媒体変更について 3. 2012 年度の図書発注・納品に関するスケジュールについて |
| | 7月5日 | 2回 | I. 報告事項 1. 自動化書庫の運用および設備要件について 2. 2012 年度大学図書館利用実態調査の実施について 3. デジタルライブラリ「灘の酒造り」公開について 4. 秋季特別展示・学術資料講演会「キェルケゴール生誕 200 年－ただ一度の人生－」について 5. 計画停電時の図書館開館時間・閉館時間の変更について II. 協議事項 教育学部図書費 B 購入図書の配架場所に関する件 III. 連絡事項 1. 各管理単位における図書館システムの利用について 2. 雑誌製本時の欠号補充について 3. 発注・納品に関するスケジュール変更について |
| | 10月11日 | 3回 | I. 報告事項 1. 「H. S. フォックスウェル文書」について 2. 産業研究所図書業務の大学図書館への移管の進捗について 3. 「先生のおすすめの本」について 4. 入退館システムの入替えについて 5. 神戸三田キャンパス大学図書館分室の防犯カメラ設置について II. 協議事項 1. 2012 年度図書館図書資料費予算変更案に関する件 2. 2013 年度図書館図書資料費等予算申請案に関する件 3. 2013 年外国語購読雑誌タイトル変更（差し替え）および冊子から電子ジャーナルへの媒体変更に関する件 III. 懇談事項 大学図書館規程改正案について IV. その他 兵庫県大学図書館協議会研究会の案内について |
| | 11月8日 | 4回 | I. 報告事項 1. 2013 年 4 月以降の図書館カードの取り扱いについて 2. Web データベース画面の変更について 3. 大学図書館学術資料講演会・特別展示について 4. Wiley Online Library オンラインジャーナルコレクションの導入について 5. 次期大学図書館長について II. 協議事項 1. 2012 年度図書館図書資料費予算変更案に関する件 2. 大学図書館規程改正案に関する件 |

(2) 図書館組織図、組織・課名変遷

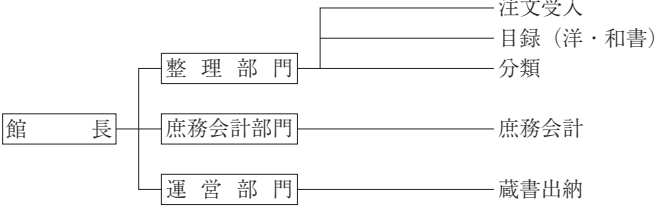
①1929（昭和 4）年度



②1947（昭和 22）年度



③1951（昭和 26）年度



④1954（昭和 29）年度

管 理 部

| | |
|-------|-------|
| 司 書 部 | 総 務 係 |
| | 分 類 係 |
| | 目 録 係 |
| | 整 理 係 |

| | |
|-------|---------|
| 運 営 部 | 運 営 係 |
| | 蔵 書 係 |
| | 開 架 室 係 |
| | 雑 誌 室 係 |

対外活動部

| | |
|-------|-------|
| 庶 務 部 | 館 員 係 |
| | 庶 務 係 |

⑤1958（昭和 33）年度以降
組織・課名変遷

| 1958. 4～ | | | 1961. 4～ | | | 1975. 6～ | | | 1994. 4～ | | |
|----------|-------|---------|----------|---------|-------|----------|-----------|--|----------|--|--|
| 3 係制 | 庶 務 係 | 3 課制 | 庶 務 課 | 3 課制 | 運 営 課 | 4 課制 | 運 営 課 | | | | |
| | 司 書 係 | | 司 書 課 | | 整 理 課 | | 整 理 課 | | | | |
| | 閲 覧 係 | | 閲 覧 課 | | 閲 覧 課 | | 閲 覧 課 | | | | |
| | | | | | | | 雑 誌 資 料 課 | | | | |

| 1995. 4～ | | 1997. 4～ | | 2003. 4～ | |
|----------------------------|-----------|----------------------------|-----------|----------------------------|---------|
| 4 課制 | 運 営 課 | 4 課制 | 運 営 課 | 2 課制 | 運 営 課 |
| | 整 理 課 | | 図 書 情 報 課 | | 利用サービス課 |
| | 閲 覧 課 | | 利用サービス課 | 神戸三田キャンパス 大 学 図 書 館 分 室 | |
| | 雑 誌 資 料 課 | | 雑 誌 資 料 課 | | |
| 神戸三田キャンパス 大 学 図 書 館 分 室 | | 神戸三田キャンパス 大 学 図 書 館 分 室 | | | |

5 要員

(1) 図書館長一覧

| 代 | 氏名 | 在任期間 | 所属等 | |
|-----|---------------------|------------------------------|------------|---|
| 初代 | J. C. C. Newton | 1889(明 22). 9～1897(明 30). 6 | 神 | |
| 2代 | T. H. Haden | 1897(明 30). 6～1903(明 36). 12 | 神 | |
| 3代 | J. C. C. Newton(再任) | 1903(明 36). 12～1908(明 41). 3 | 神 | |
| 4代 | W. K. Matthews | 1908(明 41). 4～1938(昭 13). 3 | 高商 大学予科 | |
| 5代 | 山本 五郎 | 1938(昭 13). 4～1943(昭 18). 3 | 法文 | |
| 6代 | 東 晋太郎 | 1943(昭 18). 4～1955(昭 30). 12 | 経 | |
| 7代 | 実方 清 | 1956(昭 31). 4～1960(昭 35). 3 | 文 | |
| 8代 | 楠井 隆三 | 1960(昭 35). 4～1964(昭 39). 3 | 経 | |
| 9代 | 大道 安次郎 | 1964(昭 39). 4～1968(昭 43). 3 | 社 | |
| 10代 | 前田 正治 | 1968(昭 43). 4～1972(昭 47). 3 | 法 | |
| 11代 | 小関 藤一郎 | 1972(昭 47). 4～1976(昭 51). 3 | 社 | |
| 12代 | 川村 大膳 | 1976(昭 51). 4～1980(昭 55). 3 | 文 | 副館長 |
| 13代 | 阪本 仁作 | 1980(昭 55). 4～1984(昭 59). 3 | 法 | 1983. 10. 1～杉山貞夫(社) |
| 14代 | 金子 精次 | 1984(昭 59). 4～1988(昭 63). 3 | 経 | 塩谷 滋(文) |
| 15代 | 八重津 洋平 | 1988(昭 63). 4～1992(平 4). 3 | 法 | 津金澤 聡広(社) |
| 16代 | 田中 敏弘 | 1992(平 4). 4～1995(平 7). 3 | 経 | 田中 穂積(文) |
| 17代 | 田中 敏弘(再任) | 1995(平 7). 4～1998(平 10). 3 | 経 | 田中 穂積(文) |
| 18代 | 丸茂 新 | 1998(平 10). 4～2001(平 13). 3 | 商 | 1998 山本 剛郎(社) 1999～阪倉 篤秀(文) |
| 19代 | 井上 琢智 | 2001(平 13). 4～2004(平 16). 3 | 経 | 加藤 哲弘(文) 中野 幸紀(総政) |
| 20代 | 井上 琢智(再任) | 2004(平 16). 4～2007(平 19). 3 | 経 | 柳屋 孝安(法) 御厨 正博(理工) |
| 21代 | 杉原 左右一 | 2007(平 19). 4～2008(平 20). 3 | 商 | 永田 彰三(文) 村上 芳夫(総政) |
| 22代 | 曾我 祐典 | 2008(平 20). 4～2010(平 22). 3 | 文 | 2008 利光 強(経) 2009 西村 智(経) 村上 芳夫(総政) |
| 23代 | 奥野 卓司 | 2010(平 22). 4～2013(平 25). 3 | 社 | 福井 幸男(商) 北村 泰彦(理工) |

*初代 Newton 館長から第6代東館長までは理事長の指名により就任した館長

*第6代東館長は1955年12月に病気のため辞任、館長代理として原田脩一商学部教授兼総務部長が就任

*第7代以降は、図書館長選任規程(1956年1月19日施行)により選任された館長

*第7代から第15代は、任期4年、第16代以降は任期3年(大学図書館長選任規程1992年4月1日改正施行)

*第10代前田館長は1969年4月に法学部長に就任したため図書館長は事務取扱という形で兼務した(1970年4月9日まで)

*1983年10月1日より副館長の職制を設置

*2001年度から副館長は2名(西宮上ヶ原キャンパスの学部から1名、神戸三田キャンパスの学部から1名)

*第21代杉原館長は任期途中で学長に就任したため、第22代曾我館長はその任期を継承

(2) 司書一覧

*1957（昭和32）年度まで「司書」の職制があった。

| | 司書 | 在任期間 | 備考 |
|------|--------|----------------------------------|---|
| 初代 | 磯部 泰治 | 1909(明治42)年9月～ 1914(大正3)年3月 | |
| 2代 | 中島 猶治郎 | 1914(大正3)年4月～ 1919(大正8)年7月 | |
| 3代 | 曾根 鼎 | 1920(大正9)年4月～ 1925(大正14)年3月 | |
| 4代 | 中島 猶治郎 | 1925(大正14)年4月～ 1938(昭和13)年12月 | 昭和13年12月6日に満州国国务院の招聘のため退職 |
| 5代 | 武藤 誠 | 1939(昭和14)年4月～ 1943(昭和18)年3月 | 大学予科教授が司書を兼務 |
| 6代 | 竹林 熊彦 | 1943(昭和18)年4月～ 1944(昭和19)年3月 | 昭和19年4月、学院中学部に転出 |
| 7代 | 入交 光三 | 1944(昭和19)年4月～ 1958(昭和33)年3月 | 昭和19年4月に司書心得に昇任 昭和33年の3係制の導入時には、司書係主任 昭和45年3月、次長として定年退職 |
| 8代 | 芝 英八郎 | 1954(昭和29)年4月～ 1958(昭和33)年3月 | 昭和33年の3係制の導入時には、閲覧係主任 昭和59年3月、定年まで2年を余して事務部長として退職 |
| 嘱託司書 | 中島 猶治郎 | 1946(昭和21)年10月 ～1956(昭和31)年3月 | 昭和21年10月に嘱託職員として復職、昭和31年3月退職 |

(3) 次長・事務部長一覧

*1968（昭和43）年9月より事務職員の職制に次長職が置かれ、事務部長職が置かれるまでの間、図書館員を統括した。

*1983（昭和58）年10月より事務職員の職制に事務部長職が置かれ、図書館員を統括している。

①次長

| | 次長 | 在任期間 | 備考 |
|----|-------|--------------------------------------|--|
| 初代 | 入交 光三 | 1968(昭和43)年9月～ 1970(昭和45)年3月31日 | 1970年3月31日退職 |
| 2代 | 南 論造 | 1970(昭和45)年4月1日～ 1973(昭和48)年3月31日 | 1969年9月24日広報室主幹より主幹・次長付として転入 1973年3月31日退職 |
| 3代 | 芝 英八郎 | 1973(昭和48)年6月1日～ 1983(昭和58)年9月30日 | 1973年6月1日次長昇任、司書課長兼務 1983年10月1日事務部長に昇任 |

②事務部長

| | 事務部長 | 在任期間 | 備考 |
|----|-------|---------------------------------------|---|
| 初代 | 芝 英八郎 | 1983(昭和58)年10月1日～ 1984(昭和59)年3月31日 | 1984年3月31日退職 |
| | 欠 | 1984(昭和59)年4月1日～ 1989(平成1)年5月31日 | 1984年4月1日、尼子卓司閲覧課長が次長事務取扱に昇任 1985年度に次長に昇任 |
| 2代 | 尼子 卓司 | 1989(平成1)年6月1日～ 1995(平成7)年3月31日 | 1989年6月1日、事務部長に昇任 1995年4月1日、神戸三田キャンパス事務室長に転出 |
| | 欠 | 1995(平成7)年4月1日～ 1996(平成8)年5月31日 | 藤田耕一次長 1995年4月1日、総合政策学部開設準備事務室より転入 1996年6月1日、広報室次長に転出 |
| 3代 | 三波 正和 | 1996(平成8)年6月1日～ 2000(平成12)年5月31日 | 1996年6月1日、就職部長より転入 2000年6月1日、学院本部調査役に転出 1998年6月1日から図書館次長：鈴木敏之（総務課長より） |
| 4代 | 鈴木 敏之 | 2000(平成12)年6月1日～ 2001(平成13)年3月31日 | 2001年4月1日、財務部長に転出 2000年6月1日から図書館次長：萩原一良（神戸三田キャンパス事務室次長より） |
| | 欠 | 2001(平成13)年4月1日～ 2002(平成14)年3月31日 | 萩原一良次長 |
| 5代 | 萩原 一良 | 2002(平成14)年4月1日～ 2004(平成16)年3月31日 | 2004年4月1日、神戸三田キャンパス事務室室長に転出 2002年4月1日から図書館次長：中村順治（運営課長より、運営課長兼務） |
| 6代 | 中村 順治 | 2004(平成16)年4月1日～ 2008(平成20)年3月31日 | 2008年4月1日、総務部長に転出 2007年6月1日から図書館次長：兄井栄子（運営課長より、運営課長兼務） |
| | 欠 | 2008(平成20)年4月1日～ 2009(平成21)年3月31日 | 兄井栄子次長 |
| 7代 | 兄井 栄子 | 2009(平成21)年4月1日～ 2013(平成25)年3月31日 | 2013年3月31日退職 2012年4月1日から図書館次長：安本裕和（運営課主幹より） |

(4) 図書館員数

①1918（大正7）年度～1983（昭和58）年度

| 年度 | 専任職員 | 専任職員 (労務) | 嘱託・ 臨時職員 | アルバイト 職員 | 年度 | 専任職員 | 専任職員 (労務) | 嘱託・ 臨時職員 | アルバイト 職員 |
|-----------|------|--------------|-------------|-------------|-----------|------|--------------|-------------|-------------|
| 1918 大正7 | 2 | — | — | — | 1951 昭和26 | 10 | 2 | — | — |
| 1919 大正8 | 2 | — | — | — | 1952 昭和27 | 不明 | | 1 | — |
| 1920 大正9 | 2 | — | — | — | 1953 昭和28 | 11 | — | 1 | — |
| 1921 大正10 | 2 | — | — | — | 1954 昭和29 | 不明 | | 1 | — |
| 1922 大正11 | 2 | — | — | — | 1955 昭和30 | 13 | 1 | 1 | — |
| 1923 大正12 | 3 | — | — | — | 1956 昭和31 | 13 | 1 | — | — |
| 1924 大正13 | 3 | — | — | — | 1957 昭和32 | 17 | 2 | — | — |
| 1925 大正14 | 3 | — | — | — | 1958 昭和33 | 18 | 3 | — | — |
| 1926 大正15 | 3 | — | — | — | 1959 昭和34 | 18 | 3 | — | — |
| 1927 昭和2 | 3 | — | — | — | 1960 昭和35 | 19 | 3 | — | — |
| 1928 昭和3 | 2 | — | — | — | 1961 昭和36 | 18 | 3 | — | — |
| 1929 昭和4 | 3 | — | — | — | 1962 昭和37 | 20 | 3 | — | — |
| 1930 昭和5 | 不明 | | | — | 1963 昭和38 | 20 | 3 | — | — |
| 1931 昭和6 | 不明 | | | — | 1964 昭和39 | 22 | 3 | — | — |
| 1932 昭和7 | 5 | — | — | — | 1965 昭和40 | 21 | 3 | — | — |
| 1933 昭和8 | 5 | — | — | — | 1966 昭和41 | 22 | 3 | — | — |
| 1934 昭和9 | 不明 | | | — | 1967 昭和42 | 22 | 3 | — | — |
| 1935 昭和10 | 4 | — | — | — | 1968 昭和43 | 21 | 3 | 6 | — |
| 1936 昭和11 | 4 | — | — | — | 1969 昭和44 | 20 | 2 | 9 | — |
| 1937 昭和12 | 4 | 1 | — | — | 1970 昭和45 | 24 | 2 | 6 | 3 |
| 1938 昭和13 | 4 | 1 | — | — | 1971 昭和46 | 26 | 2 | 5 | 3 |
| 1939 昭和14 | 5 | — | — | — | 1972 昭和47 | 27 | 2 | 4 | 4 |
| 1940 昭和15 | 不明 | | | — | 1973 昭和48 | 26 | 2 | 3 | 5 |
| 1941 昭和16 | 不明 | | | — | 1974 昭和49 | 27 | 2 | 3 | 不明 |
| 1942 昭和17 | 4 | — | — | — | 1975 昭和50 | 27 | 2 | 3 | 16 |
| 1943 昭和18 | 不明 | | | — | 1976 昭和51 | 29 | 2 | 3 | 不明 |
| 1944 昭和19 | 不明 | | | — | 1977 昭和52 | 31 | 2 | 3 | 不明 |
| 1945 昭和20 | 6 | — | — | — | 1978 昭和53 | 32 | 2 | 3 | 不明 |
| 1946 昭和21 | 5 | — | — | — | 1979 昭和54 | 32 | 2 | 3 | 不明 |
| 1947 昭和22 | 不明 | | | 1 | 1980 昭和55 | 32 | 2 | 3 | 不明 |
| 1948 昭和23 | 9 | — | 1 | — | 1981 昭和56 | 32 | 2 | 3 | 不明 |
| 1949 昭和24 | 10 | — | 1 | — | 1982 昭和57 | 31 | 2 | 5 | 不明 |
| 1950 昭和25 | 9 | 1 | 1 | — | 1983 昭和58 | 31 | 2 | 5 | 不明 |

※1947年度から1955年度までの嘱託職員は、中島猶治郎（嘱託司書）

※1970年度よりアルバイト職員採用

②1984（昭和 59）年度～2012（平成 24）年度

*4 月または 6 月の職員数

| 年度 | 西宮上ヶ原キャンパス 大学図書館 | | | | | | 神戸三田キャンパス 大学図書館分室 | | | | 備 考 | |
|-------------|---------------------|--------------|------|---------|-------|------|----------------------|-------------------------|------|---------|--------------|------------------------------|
| | 専任職員 | 専任職員 （労務） | 嘱託職員 | アルバイト職員 | パート職員 | 派遣職員 | 期限付契約職員 | 専任職員 | 嘱託職員 | アルバイト職員 | | 派遣職員 |
| 1984(昭和 59) | 31 | 2 | 6 | 21 | 2 | | | | | | | 古文書担当嘱託職員 1 名配属の開始 |
| 1985(昭和 60) | 32 | 2 | 6 | 23 | 2 | | | | | | | |
| 1986(昭和 61) | 32 | 1 | 5 | 33 | 2 | | | | | | | 図書システム関連業務専従アルバイト職員を含む（5 名） |
| 1987(昭和 62) | 33 | 1 | 5 | 31 | 2 | | | | | | | 同上 5 名 |
| 1988(昭和 63) | 32 | 1 | 5 | 30 | 2 | | | | | | | 同上 5 名 |
| 1989(平成元) | 32 | 0 | 6 | 35 | 2 | | | | | | | 同上 7 名 |
| 1990(平成 2) | 32 | 0 | 6 | 35 | 0 | | | | | | | 同上 3 名 |
| 1991(平成 3) | 33 | 0 | 6 | 37 | 0 | | | | | | | 同上 3 名 |
| 1992(平成 4) | 34 | 0 | 6 | 37 | 0 | | | | | | | 同上 3 名 |
| 1993(平成 5) | 35 | 0 | 6 | 38 | 0 | | | | | | | |
| 1994(平成 6) | 34 | 0 | 6 | 38 | 0 | | | 3 課体制から 4 課体制へ（雑誌資料課設置） | | | | |
| 1995(平成 7) | 35 | 0 | 6 | 38 | 0 | | | 2 | 2 | 3 | 0 | 神戸三田キャンパス大学図書館分室開室 |
| 1996(平成 8) | 37 | 0 | 4 | 36 | 0 | | | 2 | 2 | 3 | 0 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の夜間開館の業務委託開始 |
| 1997(平成 9) | 37 | 0 | 3 | 36 | 0 | | | 2 | 2 | 3 | 0 | |
| 1998(平成 10) | 36 | 0 | 2 | 38 | 0 | | | 2 | 2 | 3 | 0 | |
| 1999(平成 11) | 36 | 0 | 1 | 39 | 0 | | | 3 | 1 | 3 | 0 | |
| 2000(平成 12) | 36 | 0 | 1 | 39 | 0 | | | 3 | 0 | 3 | 0 | 神戸三田キャンパス図書メディア館の夜間開館の業務委託開始 |
| 2001(平成 13) | 36 | 0 | 1 | 39 | 0 | | | 4 | 0 | 3 | 0 | |
| 2002(平成 14) | 35 | 0 | 1 | 40 | 0 | | | 4 | 0 | 6 | 0 | |
| 2003(平成 15) | 29 | 0 | 1 | 40 | 0 | | | 4 | 0 | 6 | 0 | 4 課体制から 2 課体制へ |
| 2004(平成 16) | 27 | 0 | 1 | 40 | 0 | | | 4 | 0 | 6 | 0 | |
| 2005(平成 17) | 27 | 0 | 1 | 39 | 0 | | | 4 | 0 | 6 | 1 | |
| 2006(平成 18) | 26 | 0 | 1 | 35 | 0 | | | 4 | 0 | 6 | 0 | |
| 2007(平成 19) | 26 | 0 | 1 | 34 | 0 | 4 | 0 | 6 | 1 | | | |
| 2008(平成 20) | 25 | 0 | 1 | 33 | 0 | 4 | 0 | 6 | 1 | | | |
| 2009(平成 21) | 25 | 0 | 1 | 31 | 0 | 4 | 0 | 6 | 1 | | | |
| 2010(平成 22) | 25 | 0 | 1 | 29 | 0 | 4 | 0 | 6 | 1 | | | |
| 2011(平成 23) | 23 | 0 | 1 | 28 | 0 | 3 | 0 | 6 | 2 | | | |
| 2012(平成 24) | 24 | 0 | 1 | 28 | 0 | 2 | 3 | 0 | 6 | 2 | 期限付契約職員の採用開始 | |

(5) Library Advisory Committee 委員一覧

* 委員名・役職名・所属学部名は委員会記録を元にし、他の名簿等の資料も参考にした。

* 原則として「常用漢字表」に準拠して記載した。

1932（昭和7）年度

マシューズ, W. K. (図書館長)

アウターブリッジ, H. W. (神学部・教授) 大藤 豊 (文学部・教授)

東晋太郎 (高等商業学部・教授) 児玉国之進 (大学予科・教授)

大河原憲 (中学部・教諭)

1933（昭和8）年度

マシューズ, W. K. (図書館長)

大藤 豊 (文学部・教授) 東晋太郎 (高等商業学部・教授)

児玉国之進 (大学予科・教授) 藤井秀樹 (中学部・教頭)

1934（昭和9）年度

マシューズ, W. K. (図書館長)

アウターブリッジ, H. W. (神学部・教授) 芥川 潤 (文学部・教授)

東晋太郎 (高等商業学部・教授) 児玉国之進 (大学予科・教授)

中島 重 (法文学部・教授) 原田脩一 (商経学部・教授)

大河原憲 (中学部・教諭)

1935（昭和10）年度

マシューズ, W. K. (図書館長)

アウターブリッジ, H. W. (神学部・教授) 芥川 潤 (文学部・教授)

東晋太郎 (高等商業学校・教授) 中島 重 (法文学部・教授)

藤井秀樹 (中学部・教頭)

1936（昭和11）年度

マシューズ, W. K. (図書館長)

アウターブリッジ, H. W. (神学部・教授) 芥川 潤 (文学部・教授)

東晋太郎 (高等商業学校・教授) 児玉国之進 (大学予科・教授)

中島 重 (法文学部・教授) 原田脩一 (商経学部・教授)

藤井秀樹 (中学部・教頭)

* 藤井秀樹教頭は、昭和12年1月15日から佐々木忍教諭に交代となる

1937（昭和12）年度

マシユース, W. K. (図書館長)
アウターブリッジ, H. W. (神学部・教授) 芥川 潤 (文学部・教授)
東晋太郎 (高等商業学校・教授) 児玉国之進 (大学予科・教授)
中島 重 (法文学部・教授) 原田脩一 (商経学部・教授)
佐々木忍 (中学部・教諭)

1938（昭和13）年度

山本五郎 (図書館長)
アウターブリッジ, H. W. (神学部・教授) 芥川 潤 (文学部・教授)
東晋太郎 (高等商業学校・教授) 田中彰寛 (大学予科・教授)
中島 重 (法文学部・教授) 原田脩一 (商経学部・教授)
マシユース, W. K. (教授) 佐々木忍 (中学部・教諭)
* 田中彰寛教授は、出征のため昭和13年10月22日から中江漣教授に交代となる
* マシユース教授は、昭和13年10月22日から associate member になる

1939（昭和14）年度

山本五郎 (図書館長)
原野駿雄 (神学部・教授) 芥川 潤 (文学部・教授)
東晋太郎 (高等商業学校・教授) 中江 漣 (大学予科・教授)
中島 重 (法文学部・教授) 原田脩一 (商経学部・教授)
増野 肇 (中学部・教諭) マシユース, W. K. (教授)

1940（昭和15）年度

山本五郎 (図書館長)
原野駿雄 (神学部・教授) 芥川 潤 (文学部・教授)
東晋太郎 (高等商業学校・教授) 中江 漣 (大学予科・教授)
中島 重 (法文学部・教授) 原田脩一 (商経学部・教授)
増野 肇 (中学部・教諭) マシユース, W. K. (教授)
* 東晋太郎教授は、内地留学のため昭和15年11月21日から中澤慶之助教授に交代となる
* 原田脩一教授は、商経学部長就任のため昭和15年11月21日から池内信行教授に交代となる

1941（昭和16）年度

山本五郎 (図書館長)
原野駿雄 (神学部・教授) 芥川 潤 (文学部・教授)
東晋太郎 (高等商業学校・教授) 中江 漣 (大学予科・教授)

中島 重（法文学部・教授） 小宮 孝（商経学部・教授）
増野 肇（中学部・教諭）

1942（昭和17）年度

山本五郎（図書館長）
原野駿雄（神学部・教授） 寿岳文章（文学部・教授）
東晋太郎（高等商業学校・教授） 中江 攄（大学予科・教授）
中島 重（法文学部・教授） 池内信行（商経学部・教授）
増野 肇（中学部・教諭）

*増野肇教諭は、退任のため昭和17年11月26日から高安教諭に交代となる

*中島重教授は、退任のため昭和18年2月24日から石本雅男教授に交代となる

1943（昭和18）年度

東晋太郎（図書館長）
寿岳文章（文学部・教授） 中澤慶之助（高等商業学校・教授）
山田友治（大学予科・教授） 石本雅男（法文学部・教授）
池内信行（商経学部・教授） 手塚一夫（中学部・教諭）

1944（昭和19）年度

東晋太郎（図書館長）
野本道一（大学予科・教授） 石本雅男（法文学部・教授） 柏井象雄（商経学部・教授）
奥田 勲（政経科・教授） 寿岳文章（理工科・教授） 手塚一夫（中学部・教諭）

1945（昭和20）年度

東晋太郎（図書館長）
清水兼男（法文学部・教授） 奥田 勲（政経科・教授） 寿岳文章（理工科・教授）
田村市郎（研究室代表・教授） 手塚一夫（中学部・教諭）

1946（昭和21）年度

東晋太郎（図書館長）
大道安次郎（大学文学部・教授） 増野正衛（文学専門部・教授）
奥田 勲（高等商業学部・教授） 平賀耕吉（大学予科・教授）
清水兼男（大学法学部・教授） 柏井象雄（大学経済学部・教授）
田中彰寛（理工専門部・教授） 寿岳文章（理工専門部・教授）

1947（昭和22）年度

東晋太郎（図書館長）
大道安次郎（大学文学部・教授） 平山政市（高等商業学部・教授）

平賀耕吉（大学予科・教授） 柏井象雄（大学経済学部・教授）
田中彰寛（理工専門部・教授） 武内辰治（大学法学部・教授）
伊賀 衛（文学専門部・教授） 山川学三郎（中学部・教諭）

1948（昭和 23）年度

東晋太郎（図書館長）
大道安次郎（文学部・教授） 平山政市（高等商業学部・教授）
平賀耕吉（高等部・教授） 武内辰治（法学部・教授）
柏井象雄（経済学部・教授） 田中彰寛（理工専門部・教授）
眞田淑子（中学部・教諭）

1949（昭和 24）年度

東晋太郎（図書館長）
寿岳文章（文学部・教授） 奥田 勲（高等商業学部・教授）
武内辰治（法学部・教授） 柏井象雄（経済学部・教授）
安部栄造（理工専門部・専任講師） 平賀耕吉（高等部・教授）

1950（昭和 25）年度

東晋太郎（図書館長）
玉林憲義（文学部・教授） 奥田 勲（短大商・教授）
武内辰治（法学部・教授） 柏井象雄（経済学部・教授）
井上文雄（理工専門部・教授） 縄田栄次郎（短大商・専任講師）
荻田庄五郎（短大英・教授） 平賀耕吉（高等部・教授） 眞田淑子（中学部・教諭）

1951（昭和 26）年度

東晋太郎（図書館長）
玉林憲義（文学部・教授） 前田正治（法学部・教授）
柏井象雄（経済学部・教授） 小泉貞三（大学商学部・教授）
縄田栄次郎（短大商・専任講師） 荻田庄五郎（短大英・教授）
平賀耕吉（高等部・教授） 風間力三（高等部・助教授）

1952（昭和 27）年度

東晋太郎（図書館長）
アウターブリッジ, H. W.（神学部・教授） 川村大膳（文学部・助教授）
前田正治（法学部・教授） 柏井象雄（経済学部・教授）
小泉貞三（大学商学部・教授） 安部栄造（学長直属・助教授）
荻田庄五郎（短大英・教授） 奥田 勲（短大商・教授） 平賀耕吉（高等部・教授）
眞田淑子（中学部・教諭）

1953（昭和 28）年度

東晋太郎（図書館長）

アウトアブリッチ, H. W.（神学部・教授） 東山正芳（文学部・助教授）

前田正治（法学部・教授） 金子 弘（経済学部・教授） 小泉貞三（商学部・教授）

安部栄造（学長直属・助教授） 荻田庄五郎（短大英・教授）

奥田 勲（短大商・教授） 平賀耕吉（高等部・教授）

1954（昭和 29）年度

東晋太郎（図書館長）

印具 徹（神学部・教授） 石原岩太郎（文学部・助教授）

足立忠夫（法学部・教授） 金子 弘（経済学部・教授） 小泉貞三（商学部・教授）

奥田 勲（短大商・教授） 荻田庄五郎（短大英・教授） 平賀耕吉（高等部・教授）

1955（昭和 30）年度

東晋太郎（図書館長）

印具 徹（神学部・教授） 石原岩太郎（文学部・助教授）

東山正芳（文学部・教授） 西沢 修（法学部・教授） 金子 弘（経済学部・教授）

三浦 信（商学部・助教授） 勝本卓美（大学長直属・助教授）

縄田栄次郎（短大商・助教授） 荻田庄五郎（短大英・教授）

平賀耕吉（高等部・教授）

1956（昭和 31）年度

実方 清（図書館長）

印具 徹（神学部・教授） 源 豊宗（文学部・教授） 西沢 修（法学部・教授）

金子 弘（経済学部・教授） 小島男佐夫（商学部・教授）

勝本卓美（大学長直属・助教授） 小島吉雄（大学長直属・教授）

縄田栄次郎（短大商・助教授） 荻田庄五郎（短大英・教授）

平賀耕吉（高等部・教授） 奥田 修（中学部・教諭）

1957（昭和 32）年度

実方 清（図書館長）

城崎 進（神学部・助教授） 川村大膳（文学部・教授） 前田正治（法学部・教授）

金子 弘（経済学部・教授） 小島男佐夫（商学部・教授）

勝本卓美（大学長直属・助教授） 平賀耕吉（高等部・教授）

奥田 修（中学部・教諭）

1958（昭和 33）年度

実方 清（図書館長）

城崎 進（神学部・助教授） 大江清一（文学部・教授） 大谷英一（法学部・教授）
金子 弘（経済学部・教授） 小島男佐夫（商学部・教授）
小島吉雄（大学長直属・教授）

1959（昭和 34）年度

実方 清（図書館長）
松村克己（神学部・助教授） 大江清一（文学部・教授） 大谷英一（法学部・教授）
縄田栄次郎（経済学部・助教授） 笹森四郎（商学部・教授）
勝本卓美（大学長直属・助教授）

1960（昭和 35）年度

楠井隆三（図書館長）
松村克己（神学部・助教授） 実方 清（文学部・教授）
杉原 方（社会学部・教授） 大谷英一（法学部・教授）
東晋太郎（経済学部・教授） 高塚正規（商学部・教授）
小島吉雄（大学長直属・教授）

1961（昭和 36）年度

楠井隆三（図書館長）
城崎 進（神学部・助教授） 実方 清（文学部・教授）
杉原 方（社会学部・教授） 大谷英一（法学部・教授）
縄田栄次郎（経済学部・助教授） 佐藤 明（商学部・教授）
勝本卓美（理学部・教授） 平田重信（大学長直属・専任講師）

1962（昭和 37）年度

楠井隆三（図書館長）
印具 徹（神学部・教授） 源 豊宗（文学部・教授） 田中国夫（社会学部・教授）
前田正治（法学部・教授） 東晋太郎（経済学部・教授）
杉原信男（商学部・助教授） 勝本卓美（理学部・教授）
網中 実（大学長直属・専任講師）

1963（昭和 38）年度

楠井隆三（図書館長）
印具 徹（神学部・教授） 東山正芳（文学部・教授） 藤原 恵（社会学部・教授）
山本正太郎（法学部・教授） 田中敏弘（経済学部・助教授）
杉原信男（商学部・助教授） 大鹿 譲（理学部・教授）
伊藤文雄（大学長直属・助手）

1964（昭和 39）年度

大道安次郎（図書館長）

小林信雄（神学部・教授） 塩谷 滋（文学部・助教授）

鈴木信五郎（社会学部・教授） 福地俊雄（法学部・教授）

楠井隆三（経済学部・教授） 増谷裕久（商学部・教授） 大鹿 譲（理学部・教授）

新井節男（大学長直属・主事）

1965（昭和 40）年度

大道安次郎（図書館長）

小林信雄（神学部・教授） 塩谷 滋（文学部・教授） 万成 博（社会学部・教授）

足立忠夫（法学部・教授） 楠井隆三（経済学部・教授） 増谷裕久（商学部・教授）

納谷恵三（理学部・教授） 寺田元美（大学長直属・主事）

1966（昭和 41）年度

大道安次郎（図書館長）

城崎 進（神学部・教授） 高塚洋太郎（文学部・教授）

小関藤一郎（社会学部・教授） 加藤一明（法学部・教授）

楠井隆三（経済学部・教授） 吉田和夫（商学部・教授） 納谷恵三（理学部・教授）

平田重信（大学長直属・主事）

(6) 大学図書館運営委員会委員・視聴覚室専門委員会委員一覧

- *1974 (昭和 49) 年 6 月 7 日、大学評議会で「大学図書館運営委員会規定」を承認。
大学図書館の運営についての審議機関として、大学の各学部等選出の委員による大学図書館運営委員会と位置付けられた。ただし、大学図書館運営委員は学院図書館運営委員を兼ねた。これ以前は、図書館長の諮問機関として内規の形式で「図書館運営委員会規定」が定められていた。(委員等詳細不明)
- *1974 (昭和 49) 年から開設される図書館視聴覚室の運営のために、「図書館視聴覚室専門委員会規定」の制定を 2 月 8 日の大学評議会で承認
- *1975 (昭和 50) 年 6 月 1 日から、従来図書館が持っていた学院図書館と大学図書館の二重性を改めて、大学図書館とすることになった。これに伴い、5 月 6 日の大学評議会で「大学図書館運営委員会規程」および「大学図書館視聴覚室専門委員会規程」と改正
- *1997 (平成 9) 年度をもって「大学図書館視聴覚室専門委員会」はその機能を大学図書館運営委員会に移し、解散した。
- *1990 (平成 2) 年度から、大学図書館事務部長が委員となる。
- *1998 (平成 10) 年度から、大学図書館事務部長に加え、大学図書館次長も委員となる。

1974 (昭和 49) 年度

(大学図書館運営委員会)

小関藤一郎 (図書館長) 高森 昭 (神・助教授) 今来陸郎 (文・教授)
本出祐之 (社・教授) 三浦澄雄 (法・教授) 豊倉三子雄 (経・教授)
正田啓造 (商・教授) 高山 奨 (理・教授) 新井節男 (学直・体育主事)
広瀬 保 (高・教諭) 川北信彦 (中・教諭)

(大学図書館視聴覚室専門委員会)

小関藤一郎 (図書館長) 谷村 晃 (総研・文・教授)
新谷隆一 (総研・理・教授) 荒木 泰 (文・教授) 東山正芳 (文・教授)
蛭沼寿雄 (文・教授) 高塚洋太郎 (文・教授) G. E. バスカム (経・助教授)

1975 (昭和 50) 年度

(大学図書館運営委員会)

小関藤一郎 (図書館長) 宮谷宣史 (神・助教授) 今井 清 (文・教授)
牧 正英 (社・教授) 黒田展之 (法・教授) 田中敏弘 (経・教授)
津田迪雄 (商・助教授) 高山 奨 (理・教授) 高橋治男 (学直・助教授)

*なお、「学長直属」選出の委員が 10 月 1 日付で柿本宏樹専任講師に変更。

(大学図書館視聴覚室専門委員会)

小関藤一郎 (図書館長) 新谷隆一 (総研・理・教授) 荒木 泰 (文・教授)
蛭沼寿雄 (文・教授) 小山 義美 (文・教授) 西脇英逸 (文・教授)

高塚洋太郎（文・教授） 宮田満雄（社・助教授） G. E. バスカム（経・助教授）
山地健次（理・教授）

1976（昭和 51）年度

（大学図書館運営委員会）

川村大膳（図書館長） 宮谷宣史（神・助教授） 野田欣孝（文・教授）
牧 正英（社・教授） 佐野 彰（法・教授） 田中敏弘（経・教授）
岩根典夫（商・教授） 高山 奨（理・教授） 南 昭二（学直・助教授）

*なお、経済学部選出の委員が5月12日付で天川潤次郎教授に変更。

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

川村大膳（図書館長） 新谷隆一（総研・理・教授） G. E. バスカム（経・助教授）
小山義美（文・教授） 宮田満雄（社・教授） 西谷俊昭（文・助教授）
西脇英逸（文・教授） 曾我祐典（文・専任講師） 山地健次（理・教授）

1977（昭和 52）年度

（大学図書館運営委員会）

川村大膳（図書館長） 高森 昭（神・教授） 磯 博（文・教授）
田中国夫（社・教授） 八重津洋平（法・教授） 北村次一（経・教授）
岩根典夫（商・教授） 山田晴河（理・教授） 南 昭二（学直・教授）

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

川村大膳（図書館長） 新谷隆一（総研・理・教授） G. E. バスカム（経・助教授）
小山義美（文・教授） 宮田満雄（社・教授） 仲原晶子（文・教授）
西谷俊昭（文・助教授） 曾我祐典（文・専任講師） 山地健次（理・教授）

1978（昭和 53）年度

（大学図書館運営委員会）

川村大膳（図書館長） 宮谷宣史（神・助教授） 磯 博（文・教授）
田中国夫（社・教授） 小関藤一郎（社・教授 5月17日以降）
八重津洋平（法・教授） 田中敏弘（経・教授） 町永昭五（商・教授）

山田晴河（理・教授） 岡田 孝（学直・専任講師）

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

川村大膳（図書館長） 杉山貞夫（総研・社・教授） G. E. バスカム（経・教授）
小山義美（文・教授） 宮田満雄（社・教授） 仲原晶子（文・教授）
西谷俊昭（文・助教授） 曾我祐典（文・専任講師） 山地健次（理・教授）

1979（昭和 54）年度

（大学図書館運営委員会）

川村大膳（図書館長） 宮谷宣史（神・助教授） 磯 博（文・教授）

小関藤一郎（社・教授） 時武英男（法・教授） 生田種雄（経・教授）
町永昭五（商・教授） 吉光浩二（理・助教授） 岡田 孝（学直・専任講師）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
川村大膳（図書館長） 杉山貞夫（総研・社・教授） G. E. バスカム（経・教授）
小山義美（文・教授） 宮田満雄（社・教授） 仲原晶子（文・教授）
西谷俊昭（文・助教授） 宇佐美 齐（文・助教授） 山地健次（理・教授）

1980（昭和 55）年度

（大学図書館運営委員会）

阪本仁作（図書館長） 高森 昭（神・教授） 磯 博（文・教授）
西尾 朗（社・教授） 時武英男（法・教授） 生田種雄（経・教授）
穴戸 亨（商・助教授） 吉光浩二（理・助教授） 岡田 孝（学直・専任講師）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
阪本仁作（図書館長） 仲原晶子（総研・文・教授） J. A. ジョイス（社・教授）
畑 道也（文・助教授） 倉賀野安英（文・専任講師） 加藤林太郎（文・教授）
山田恭治（理・教授） 山地健次（理・教授）

1981（昭和 56）年度

（大学図書館運営委員会）

阪本仁作（図書館長） 小林信雄（神・教授） 磯 博（文・教授）
安田三郎（社・教授） 山崎 寛（法・教授） 柚木 学（経・教授）
穴戸 亨（商・助教授） 吉光浩二（理・教授） 南 昭二（学直・教授）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
阪本仁作（図書館長） 仲原晶子（総研・文・教授） 畑 道也（文・助教授）
倉賀野安英（文・専任講師） 加藤林太郎（文・教授） J. A. ジョイス（社・教授）
山田恭治（理・教授） 山地健次（理・教授）

1982（昭和 57）年度

（大学図書館運営委員会）

阪本仁作（図書館長） 宮谷宣史（神・教授） 磯 博（文・教授）
杉山貞夫（社・教授） 黒田展之（法・教授） 柚木 学（経・教授）
今井 譲（商・助教授） 吉光浩二（理・教授） 柿本宏樹（学直・助教授）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
阪本仁作（図書館長） 仲原晶子（総研・文・教授） 畑 道也（文・教授）
倉賀野安英（文・専任講師） 加藤林太郎（文・教授） J. A. ジョイス（社・教授）
山田恭治（理・教授） 山地健次（理・教授）

1983（昭和 58）年度

（大学図書館運営委員会）

阪本仁作（図書館長） 高森 昭（神・教授） 磯 博（文・教授）

杉山貞夫（社・教授） 黒田展之（法・教授） 内橋吉朗（経・教授）

今井 譲（商・助教授） 吉光浩二（理・教授） 柿本宏樹（学直・助教授）

＊社会学部選出の杉山貞夫教授は 10 月 1 日付大学図書館副館長に就任のため、同学部西山美瑛子教授と交代。

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

阪本仁作（図書館長） 仲原晶子（総研・文・教授） 畑 道也（文・教授）

倉賀野安英（文・専任講師） 加藤林太郎（文・教授） J. A. ジョイス（社・教授）

山田恭治（理・教授） 佐野直克（理・助教授）

1984（昭和 59）年度

（大学図書館運営委員会）

金子精次（図書館長） 塩谷 滋（副館長） 高森 昭（神・教授）

磯 博（文・教授） 西山美瑛子（社・教授） 田村精一（法・教授）

森本好則（経・教授） 森 泰博（商・教授） 鈴木啓介（理・教授）

柿本宏樹（学直・助教授）

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

金子精次（図書館長） 塩谷 滋（副館長） 中川 努（総研・文・専任講師）

畑 道也（文・教授） 倉賀野安英（文・助教授） 加藤林太郎（文・教授）

J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 吉光浩二（理・教授）

1985（昭和 60）年度

（大学図書館運営委員会）

金子精次（図書館長） 塩谷 滋（副館長） 向井孝史（神・助教授）

磯 博（文・教授） 西山美瑛子（社・教授） 林 紀昭（法・教授）

長岡 豊（経・教授） 森 泰博（商・教授） 鈴木啓介（理・教授）

網中 實（学直・教授）

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

金子精次（図書館長） 塩谷 滋（副館長） 中川 努（総研・文・助教授）

加藤林太郎（文・教授） 畑 道也（文・教授） 倉賀野安英（文・助教授）

J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 吉光浩二（理・教授）

1986（昭和 61）年度

（大学図書館運営委員会）

金子精次（図書館長） 塩谷 滋（副館長） 向井孝史（神・教授）

磯 博（文・教授） 杉山貞夫（社・教授） 黒田展之（法・教授）

長岡 豊（経・教授） 深山 明（商・助教授） 鈴木啓介（理・教授）
脇坂義郎（学直・教授）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
金子精次（図書館長） 塩谷 滋（副館長） 安保則夫（総研・経・助教授）
加藤林太郎（文・教授） 畑 道也（文・教授） 倉賀野安英（文・助教授）
J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 久保田観治（理・教授）

1987（昭和62）年度

（大学図書館運営委員会）
金子精次（図書館長） 塩谷 滋（副館長） 向井考史（神・教授、前期）
神田健次（神・助教授、後期） 津田静男（文・教授） 杉山貞夫（社・教授）
前野育三（法・教授） 杉谷 滋（経・教授） 今井 譲（商・教授）
鈴木啓介（理・教授） 米田 満（学直・体育主事）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
金子精次（図書館長） 塩谷 滋（副館長） 安保則夫（総研・経・助教授）
加藤林太郎（文・教授） 畑 道也（文・教授） 倉賀野安英（文・助教授）
J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 久保田観治（理・教授）

1988（昭和63）年度

八重津洋平（図書館長） 津金澤聡広（副館長） 山内一郎（神・教授、前期）
向井考史（神・教授、後期） 津田静男（文・教授） 杉山貞夫（社・教授）
岡 俊孝（法・教授） 福尾洋一（経・教授） 深山 明（商・教授）
鈴木啓介（理・教授） 高橋治男（学直・教授）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
八重津洋平（図書館長） 津金澤聡広（副館長） 杉原左右一（総研・商・教授）
加藤林太郎（文・教授） 永田彰三（文・助教授） 西谷俊明（文・教授）
J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 矢倉達夫（理・助教授）

1989（平成元）年度

（大学図書館運営委員会）
八重津洋平（図書館長） 津金澤聡広（副館長） 高森 昭（神・教授）
津田静男（文・教授） 山本剛郎（社・教授） 岡 俊孝（法・教授）
山本栄一（経・教授） 杉原左右一（商・教授） 高山 奨（理・教授）
高塚大志郎（学直・教授）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
八重津洋平（図書館長） 津金澤聡広（副館長） 杉原左右一（総研・商・教授）
加藤林太郎（文・教授） 永田彰三（文・助教授） 西谷俊明（文・教授）
J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 矢倉達夫（理・助教授）

1990（平成2）年度

（大学図書館運営委員会）

八重津洋平（図書館長） 津金澤聡広（副館長） 高森 昭（神・教授）
津田静男（文・教授） 山路勝彦（社・教授） 澤田庸三（法・助教授）
林 宜嗣（経・教授） 梶浦昭友（商・助教授） 高山 奨（理・教授）
高塚大志郎（学直・教授） 尼子卓司（図書館事務部長）

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

八重津洋平（図書館長） 津金澤聡広（副館長） 卷下吉夫（総研・経・教授）
中川 努（文・助教授） 永田彰三（文・助教授） 神崎昭伍（法・教授）
J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 尾崎幸洋（理・助教授）
尼子卓司（図書館事務部長）

1991（平成3）年度

（大学図書館運営委員会）

八重津洋平（図書館長） 津金澤聡広（副館長） 高森 昭（神・教授）
津田静男（文・教授） 山路勝彦（社・教授） 森脇俊雅（法・教授）
井上勝雄（経・教授） 深山 明（商・教授） 高山 奨（理・教授）
岡田 孝（学直・教授） 尼子卓司（図書館事務部長）

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

八重津洋平（図書館長） 津金澤聡広（副館長） 卷下吉夫（総研・経・教授）
中川 努（文・教授） 永田彰三（文・助教授） 神崎昭伍（法・教授）
J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 尾崎幸洋（理・助教授）
尼子卓司（図書館事務部長）

1992（平成4）年度

（大学図書館運営委員会）

田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 高森 昭（神・教授）
津田静男（文・教授） 芝田正夫（社・教授） 森脇俊雅（法・教授）
鈴木克彦（経・教授、前期） 小西唯雄（経・教授、後期） 深山 明（商・教授）
吉光浩二（理・教授） 高塚大志郎（学直・教授） 尼子卓司（図書館事務部長）

（大学図書館視聴覚室専門委員会）

田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 卷下吉夫（総研・経・教授）
中川 努（文・教授） 畑 道也（文・教授） 神崎昭伍（法・教授）
J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 新谷隆一（理・教授）
尼子卓司（図書館事務部長）

1993（平成5）年度

（大学図書館運営委員会）

田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 高森 昭（神・教授）
笹山 隆（文・教授） 芝田正夫（社・教授） 塚本和彦（法・教授）
池田 信（経・教授） 深山 明（商・教授） 吉光浩二（理・教授）
高塚大志郎（学直・教授） 尼子卓司（図書館事務部長）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 大鹿薫久（総研・文・教授）
中川 努（文・教授） 畑 道也（文・教授） 神崎昭伍（法・教授）
J. A. ジョイス（社・教授） 山田恭治（理・教授） 新谷隆一（理・教授）
尼子卓司（図書館事務部長）

1994（平成6）年度

（大学図書館運営委員会）

田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 橋本 淳（神・教授、前期）
高森 昭（神・教授、後期） 笹山 隆（文・教授） 芝田正夫（社・教授）
塚本和彦（法・教授） 鈴木克彦（経・教授） 浅田福一（商・教授）
吉光浩二（理・教授） 高塚大志郎（学直・教授） 尼子卓司（図書館事務部長）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 大鹿薫久（総研・文・教授）
永田彰三（文・助教授） 河村昭夫（文・教授） 廣瀬典生（法・教授）
田村和彦（経・助教授） 中谷拓士（商・教授） 新谷隆一（理・教授）
尼子卓司（図書館事務部長）

1995（平成7）年度

（大学図書館運営委員会）

田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 高森 昭（神・教授）
杉本尚次（文・教授） 石川 明（社・教授） 荒川雅行（法・教授）
篠原 久（経・教授） 小菅正伸（商・教授） 吉光浩二（理・教授）
安保則夫（総政・教授） 新井節男（学直・教授）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 大鹿薫久（総研・文・教授）
永田彰三（文・助教授） 福井幸男（商・教授） 廣瀬典生（法・教授）
田村和彦（経・助教授） 中谷拓士（商・教授） 新谷隆一（理・教授）

1996（平成8）年度

（大学図書館運営委員会）

田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 高森 昭（神・教授）
杉本尚次（文・教授） 石川 明（社・教授） 平松 毅（法・教授）
鈴木多加史（経・教授） 広瀬憲三（商・助教授） 矢ヶ崎篤（理・助教授）

安保則夫（総政・教授） 新井節男（学直・教授） 三波正和（図書館事務部長）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 大鹿薫久（総研・文・教授）
永田彰三（文・教授） 須賀洋一（法・教授） 藤田友尚（経・助教授）
大日向幻（商・教授） 藤原武弘（社・教授） 渡辺泰堂（理・教授）
三波正和（図書館事務部長）

1997（平成9）年度

（大学図書館運営委員会）
田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 橋本 淳（神・教授）
中島洋一（文・教授） 浅野 仁（社・教授） 田村精一（法・教授）
松本有一（経・教授） 広瀬憲三（商・教授） 矢ヶ崎篤（理・助教授）
安保則夫（総政・教授） 伊藤文雄（学直・教授） 三波正和（図書館事務部長）
（大学図書館視聴覚室専門委員会）
田中敏弘（図書館長） 田中穂積（副館長） 岡本仁宏（総研・法・教授）
永田彰三（文・教授） 須賀洋一（法・教授） 藤田友尚（経・助教授）
大日向幻（商・教授） 北山俊哉（法・助教授） 渡辺泰堂（理・教授）
三波正和（図書館事務部長）

1998（平成10）年度

（大学図書館運営委員会）
丸茂 新（図書館長） 山本剛郎（副館長） 宮谷宣史（神・教授）
大井浩二（文・教授） 浅野 仁（社・教授） 岡本仁宏（法・教授）
松本有一（経・教授） 井上達男（商・教授） 矢ヶ崎篤（理・助教授）
安保則夫（総政・教授） 石原俊彦（学直・助教授） 三波正和（図書館事務部長）
鈴木敏之（図書館次長）

1999（平成11）年度

（大学図書館運営委員会）
丸茂 新（図書館長） 阪倉篤秀（副館長） 橋本 淳（神・教授、春学期）
宮谷宣史（神・教授、秋学期） 森田雅也（文・助教授） 浅野 仁（社・教授）
加藤 徹（法・教授） 竹本 洋（経・教授） 山本昭二（商・教授）
矢ヶ崎篤（理・助教授） 村上芳夫（総政・教授） 雄山真弓（学直・教授）
三波正和（図書館事務部長） 鈴木敏之（図書館次長）

2000（平成12）年度

（大学図書館運営委員会）
丸茂 新（図書館長） 阪倉篤秀（副館長） 宮谷宣史（神・教授）

森田雅也（文・助教授） 室田保夫（社・教授） 澤田庸三（法・教授）
竹本 洋（経・教授） 井上達男（商・教授） 矢ヶ崎篤（理・助教授）
村上芳夫（総政・教授） 新井節男（学直・教授）
三波正和（図書館事務部長、4、5月） 鈴木敏之（図書館事務部長、6月～）
鈴木敏之（図書館次長、4、5月） 萩原一良（図書館次長、6月～）

2001（平成13）年度

（大学図書館運営委員会）

井上琢吾（図書館長） 加藤哲弘（副館長） 中野幸紀（副館長）
橋本 淳（神・教授） 小倉 肇（文・教授） 田中耕一（社・教授）
安井 宏（法・教授） 竹本 洋（経・教授） 井上達男（商・教授）
矢ヶ崎篤（理・教授） 長峯純一（総政・教授） 甲斐知彦（学直・専任講師）
小山敏夫（言コミ・教授） 萩原一良（図書館次長）

2002（平成14）年度

（大学図書館運営委員会）

井上琢吾（図書館長） 加藤哲弘（副館長） 中野幸紀（副館長）
向井孝史（神・教授） 玉置邦雄（文・教授） 山路勝彦（社・教授）
長岡 徹（法・教授） 篠原 久（経・教授） 山本昭二（商・教授）
矢ヶ崎篤（理工・教授） 長谷川計二（総政・教授） 南本長穂（学直・教授）
門田修平（言コミ・教授） 萩原一良（図書館事務部長） 中村順治（図書館次長）

2003（平成15）年度

（大学図書館運営委員会）

井上琢吾（図書館長） 加藤哲弘（副館長） 中野幸紀（副館長）
向井孝史（神・教授） 根無喜一（文・教授） 山路勝彦（社・教授）
曾和俊文（法・教授） 篠原 久（経・教授） 山本昭二（商・教授）
矢ヶ崎篤（理工・教授） 中村広幸（総政・教授） 甲斐知彦（学直・助教授）
浅田壽男（言コミ・教授） 萩原一良（図書館事務部長） 中村順治（図書館次長）

2004（平成16）年度

（大学図書館運営委員会）

井上琢吾（図書館長） 柳屋孝安（副館長） 御厨正博（副館長）
向井孝史（神・教授） 阿河雄二郎（文・教授） 山路勝彦（社・教授）
岡野祐子（法・教授） 松本有一（経・教授） 山本昭二（商・教授）
矢ヶ崎篤（理工・教授） 久野 武（総政・教授、6月11日まで）
村上芳夫（総政・教授、6月12日以降） 小谷正登（学直・専任講師）
浅田壽男（言コミ・教授） 曾和俊文（司法・教授） 中村順治（図書館事務部長）

2005（平成 17）年度

（大学図書館運営委員会）

井上琢智（図書館長） 柳屋孝安（副館長） 御厨正博（副館長）
窪寺俊之（神・教授） 倉賀野安英（文・教授） 奥野卓司（社・教授）
前田雅子（法・教授） 松本有一（経・教授） 井上達男（商・教授）
矢ヶ崎篤（理工・教授） 古川靖洋（総政・教授） 小谷正登（学直・助教授）
福地直子（言コミ・助教授、10 月 30 日まで）
小山敏夫（言コミ・教授、11 月 1 日以降） 曾和俊文（司法・教授）
石原俊彦（経営戦略・教授） 中村順治（図書館事務部長）

2006（平成 18）年度

（大学図書館運営委員会）

井上琢智（図書館長） 柳屋孝安（副館長） 御厨正博（副館長）
向井考史（神・教授） 倉賀野安英（文・教授） 奥野卓司（社・教授）
前田雅子（法・教授） 松本有一（経・教授） 井上達男（商・教授）
高橋和子（理工・教授） 古川靖洋（総政・教授） 小谷正登（学直・助教授）
嶋村 誠（言コミ・助教授） 堤 龍弥（司法・教授） 徳崎 進（経営戦略・教授）
中村順治（図書館事務部長）

2007（平成 19）年度

（大学図書館運営委員会）

杉原左右一（図書館長） 永田彰三（副館長） 村上芳夫（副館長）
向井考史（神・教授） 荒山正彦（文・教授） 奥野卓司（社・教授）
櫻田大造（法・教授） 藤井和夫（経・教授） 井上達男（商・教授）
高橋和子（理工・教授） 関根孝道（総政・教授） 小西砂千夫（学直・教授）
大高博美（言コミ・教授） 堤 龍弥（司法・教授） 新庄浩二（経営戦略・教授）
中村順治（図書館事務部長） 兄井栄子（図書館次長、6 月～）

2008（平成 20）年度

（大学図書館運営委員会）

曾我祐典（図書館長） 利光 強（副館長） 村上芳夫（副館長）
浅野淳博（神・准教授） 荒山正彦（文・教授） 居樹伸雄（社・教授）
内山衛次（法・教授） 松本有一（経・教授） 井上達男（商・教授）
高橋和子（理工・教授） 関根孝道（総政・教授） 室田保夫（人福・教授）
小谷正登（学直・准教授） 森本達夫（言コミ・教授） 荒川雅行（司法・教授）
新庄浩二（経営戦略・教授） 兄井栄子（図書館次長）

2009（平成 21）年度

（大学図書館運営委員会）

曾我祐典（図書館長） 西村 智（副館長） 村上芳夫（副館長）
浅野淳博（神・准教授） 荒山正彦（文・教授） 森久美子（社・教授）
内山衛次（法・教授） 藤井和夫（経・教授） 井上達男（商・教授）
高橋和子（理工・教授） 関根孝道（総政・教授） 室田保夫（人福・教授）
武田俊昭（教育・教授） 横山利弘（学直・教授） 大喜多喜夫（言コミ・教授）
荒川雅行（司法・教授） 稲澤克祐（経営戦略・教授） 兄井栄子（図書館事務部長）

2010（平成 22）年度

（大学図書館運営委員会）

奥野卓司（図書館長） 福井幸男（副館長） 北村泰彦（副館長）
浅野淳博（神・准教授） 志村 洋（文・教授） 森久美子（社・教授）
高島千代（法・教授） 松本有一（経・教授） 井上達男（商・教授）
岡村 隆（理工・教授） 関根孝道（総政・教授） 室田保夫（人福・教授）
武田俊昭（教育・教授） 田村和彦（国際・教授） 樋口 進（学直・教授）
河村克俊（言コミ・教授） 丸田 隆（司法・教授） 岡田克彦（経営戦略・教授）
兄井栄子（図書館事務部長）

2011（平成 23）年度

（大学図書館運営委員会）

奥野卓司（図書館長） 福井幸男（副館長） 北村泰彦（副館長）
浅野淳博（神・教授） 北村昌幸（文・准教授） 中野康人（社・教授）
草野元己（法・教授） 松本有一（経・教授） 広瀬憲三（商・教授）
岡村 隆（理工・教授） 井垣伸子（総政・教授） 室田保夫（人福・教授）
佐々木正昭（教育・教授） 田村和彦（国際・教授） 樋口 進（学直・教授）
長谷尚弥（言コミ・教授） 松井幸夫（司法・教授） 中島稔哲（経営戦略・准教授）
兄井栄子（図書館事務部長）

2012（平成 24）年度

（大学図書館運営委員会）

奥野卓司（図書館長） 福井幸男（副館長） 北村泰彦（副館長）
浅野淳博（神・教授） 東浦弘樹（文・教授） 中野康人（社・教授）
松本有一（経・教授） 岡村秀夫（商・教授）
松田祐介（理工・教授） 関根孝道（総政・教授） 山 泰幸（人福・教授）
上中 修（教育・准教授） 田村和彦（国際・教授） 樋口 進（学直・教授）
森田由利子（言コミ・准教授） 松井宏興（司法・教授） 中島稔哲（経営戦略・准教授）
兄井栄子（図書館事務部長） 安本裕和（図書館次長）

6 蔵書・資料

(1) 蔵書冊数 (図書)

* 1926 年度～1928 年度、1930 年度については、記録が残っていないため割愛している。

| 年度 | | | 年度 | | | 年度 | | |
|------|-------|--------|------|-------|---------|------|-------|-----------|
| 年度 | | 蔵書冊数 | 年度 | | 蔵書冊数 | 年度 | | 蔵書冊数 |
| 1921 | 大正 10 | 11,948 | 1955 | 昭和 30 | 99,377 | 1984 | 昭和 59 | 612,761 |
| 1922 | 大正 11 | 12,092 | 1956 | 昭和 31 | 111,076 | 1985 | 昭和 60 | 636,656 |
| 1923 | 大正 12 | 13,039 | 1957 | 昭和 32 | 117,657 | 1986 | 昭和 61 | 660,623 |
| 1924 | 大正 13 | 13,945 | 1958 | 昭和 33 | 128,077 | 1987 | 昭和 62 | 686,134 |
| 1925 | 大正 14 | 16,099 | 1959 | 昭和 34 | 140,142 | 1988 | 昭和 63 | 710,666 |
| 1929 | 昭和 4 | 22,350 | 1960 | 昭和 35 | 153,222 | 1989 | 平成元 | 746,074 |
| 1931 | 昭和 6 | 28,210 | 1961 | 昭和 36 | 165,242 | 1990 | 平成 2 | 786,336 |
| 1932 | 昭和 7 | 30,770 | 1962 | 昭和 37 | 178,287 | 1991 | 平成 3 | 823,412 |
| 1933 | 昭和 8 | 34,655 | 1963 | 昭和 38 | 192,657 | 1992 | 平成 4 | 872,510 |
| 1934 | 昭和 9 | 36,755 | 1964 | 昭和 39 | 208,342 | 1993 | 平成 5 | 913,501 |
| 1935 | 昭和 10 | 38,995 | 1965 | 昭和 40 | 225,077 | 1994 | 平成 6 | 969,984 |
| 1936 | 昭和 11 | 40,385 | 1966 | 昭和 41 | 241,857 | 1995 | 平成 7 | 1,021,446 |
| 1937 | 昭和 12 | 42,940 | 1967 | 昭和 42 | 259,127 | 1996 | 平成 8 | 1,067,894 |
| 1938 | 昭和 13 | 44,480 | 1968 | 昭和 43 | 277,654 | 1997 | 平成 9 | 1,117,275 |
| 1939 | 昭和 14 | 46,160 | 1969 | 昭和 44 | 298,632 | 1998 | 平成 10 | 1,150,340 |
| 1940 | 昭和 15 | 47,980 | 1970 | 昭和 45 | 324,731 | 1999 | 平成 11 | 1,182,999 |
| 1941 | 昭和 16 | 50,052 | 1971 | 昭和 46 | 336,557 | 2000 | 平成 12 | 1,226,561 |
| 1942 | 昭和 17 | 51,592 | 1972 | 昭和 47 | 355,917 | 2001 | 平成 13 | 1,290,133 |
| 1943 | 昭和 18 | 53,482 | 1973 | 昭和 48 | 373,103 | 2002 | 平成 14 | 1,332,897 |
| 1944 | 昭和 19 | 55,197 | 1974 | 昭和 49 | 389,746 | 2003 | 平成 15 | 1,374,186 |
| 1945 | 昭和 20 | 56,107 | 1975 | 昭和 50 | 404,774 | 2004 | 平成 16 | 1,404,016 |
| 1946 | 昭和 21 | 57,857 | 1976 | 昭和 51 | 423,707 | 2005 | 平成 17 | 1,434,477 |
| 1947 | 昭和 22 | 60,000 | 1977 | 昭和 52 | 444,663 | 2006 | 平成 18 | 1,473,964 |
| 1948 | 昭和 23 | 72,326 | 1978 | 昭和 53 | 472,528 | 2007 | 平成 19 | 1,512,312 |
| 1949 | 昭和 24 | 77,701 | 1979 | 昭和 54 | 498,873 | 2008 | 平成 20 | 1,540,625 |
| 1950 | 昭和 25 | 75,161 | 1980 | 昭和 55 | 528,873 | 2009 | 平成 21 | 1,590,511 |
| 1951 | 昭和 26 | 81,304 | 1981 | 昭和 56 | 534,302 | 2010 | 平成 22 | 1,624,831 |
| 1952 | 昭和 27 | 86,904 | 1982 | 昭和 57 | 556,747 | 2011 | 平成 23 | 1,652,177 |
| 1953 | 昭和 28 | 90,674 | 1983 | 昭和 58 | 584,762 | 2012 | 平成 24 | 1,682,077 |
| 1954 | 昭和 29 | 93,249 | | | | | | |

(2) 雑誌資料所蔵・継続受入タイトル数

| 年度 | | 所蔵タイトル数 | | | 継続受入タイトル数 | | | |
|------|-------|---------|-------|--------|-----------|-------|-------|--|
| | | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | |
| 1990 | 平成 2 | 4,616 | 3,780 | 8,396 | 2,087 | 1,605 | 3,692 | |
| 1991 | 平成 3 | 4,651 | 3,840 | 8,491 | 2,193 | 1,693 | 3,886 | |
| 1992 | 平成 4 | 4,991 | 4,029 | 9,020 | 2,289 | 1,713 | 4,002 | |
| 1993 | 平成 5 | 5,427 | 4,163 | 9,590 | 2,378 | 1,747 | 4,125 | |
| 1994 | 平成 6 | 5,594 | 4,323 | 9,917 | 2,407 | 1,820 | 4,227 | |
| 1995 | 平成 7 | 5,788 | 4,506 | 10,294 | 2,503 | 1,921 | 4,424 | |
| 1996 | 平成 8 | 6,303 | 5,114 | 11,417 | 2,780 | 2,537 | 5,317 | |
| 1997 | 平成 9 | 6,486 | 5,309 | 11,795 | 2,655 | 2,605 | 5,260 | |
| 1998 | 平成 10 | 6,605 | 5,426 | 12,031 | 2,612 | 2,585 | 5,197 | |
| 1999 | 平成 11 | 7,926 | 6,582 | 14,508 | 2,659 | 2,344 | 5,003 | |
| 2000 | 平成 12 | 8,071 | 6,803 | 14,874 | 2,531 | 2,384 | 4,915 | |
| 2001 | 平成 13 | 8,253 | 7,214 | 15,467 | 2,546 | 2,230 | 4,776 | |
| 2002 | 平成 14 | 8,249 | 6,831 | 15,080 | 2,544 | 2,325 | 4,869 | |
| 2003 | 平成 15 | 8,375 | 7,004 | 15,379 | 2,608 | 2,362 | 4,970 | |
| 2004 | 平成 16 | 8,657 | 7,025 | 15,682 | 2,680 | 2,421 | 5,101 | |
| 2005 | 平成 17 | 8,854 | 7,115 | 15,969 | 2,626 | 2,322 | 4,948 | |
| 2006 | 平成 18 | 9,066 | 7,207 | 16,273 | 2,625 | 2,302 | 4,927 | |
| 2007 | 平成 19 | 9,235 | 7,292 | 16,527 | 2,551 | 2,288 | 4,839 | |
| 2008 | 平成 20 | 9,360 | 7,404 | 16,764 | 2,582 | 2,141 | 4,723 | |
| 2009 | 平成 21 | 9,599 | 7,582 | 17,181 | 2,508 | 2,118 | 4,626 | |
| 2010 | 平成 22 | 9,810 | 7,648 | 17,458 | 2,418 | 1,822 | 4,240 | |
| 2011 | 平成 23 | 9,993 | 7,656 | 17,649 | 2,413 | 1,631 | 4,044 | |
| 2012 | 平成 24 | 10,139 | 7,608 | 17,747 | 2,084 | 1,604 | 3,688 | |

*1 外国語雑誌購読タイトルの見直しにより洋雑誌 313 タイトルの削減

*2 外国語雑誌購読タイトルの見直しにより洋雑誌 263 タイトルの削減

*3 外国語雑誌購読タイトルの見直しにより洋雑誌 172 タイトルの削減

(3) 寄贈図書資料一覧

* このリストには主要な寄贈資料（現物寄贈・購入費寄付）を載せている。

また、現図書館に所蔵されていない資料も含まれている。

| 年 | 氏名等 | 職名等（寄贈時） | 数量、金額 | 内容等 |
|------|------|-----------------------|-------------------------|------------------------------|
| 1913 | 大正 2 | 東洋英和学校 | | 約 1,500 冊 |
| 1923 | 大正12 | 辰馬吉左衛門 | 実業家 | 20,000 円 |
| | | | | 社会学関係図書を 3,678 冊購入。「辰馬文庫（注）」 |
| 1925 | 大正14 | 吉崎彦一 | 前神学部教授 | 神学書 |
| 1925 | 大正14 | 松本益吉 | 前副院長 | 神学書 |
| 1925 | 大正14 | 佐藤密蔵 | 大毎社論説委員 | 500 冊 |
| | | | | 商業経済関係書 |
| 1925 | 大正14 | 三戸吉太郎 | 牧師 | 500 冊 |
| | | | | 児童研究書 |
| 1929 | 昭和 4 | 今川尚 | 前高商教授 | 380 冊 |
| | | | | 経済学関係書 |
| 1930 | 昭和 5 | 加納治郎左衛門 | 実業家 | 2,000 円 |
| 1930 | 昭和 5 | 小田切延寿 | 川崎製鉄重役 | 1,150 冊 |
| | | | | 経済学関係書 数次にわたっての寄贈 |
| 1931 | 昭和 6 | 中島保太郎 | 実業家 | 2,080 冊 |
| | | | | 経済学関係書、雑誌 |
| 1931 | 昭和 6 | 三宅光華 | 中学部教諭 | 500 円 |
| | | | | 日本文学関係図書購入 |
| 1931 | 昭和 6 | 平野七郎 | 高商卒業生 | 500 円 |
| 1934 | 昭和 9 | 吉阪修治 | 前高商教授 | 800 冊 |
| | | | | 経済学関係書 |
| 1936 | 昭和11 | オストロム博士 | 仏教研究家 | 587 冊 |
| | | | | 仏教書 |
| 1936 | 昭和11 | 田村徳治 | 法文学部教授 | 140 冊 |
| | | | | 法学書 |
| 1939 | 昭和14 | Mr. Hayashi | Hiroshima Girls' School | 92 冊 |
| | | | | 心理学関係 |
| 1940 | 昭和15 | 白石英一郎 岡久敬蔵 | 卒業生 | 2,146 冊 |
| | | | | 国漢文関係書 岡久家手沢本、「白石文庫（注）」 |
| 1940 | 昭和15 | 熊谷鉄太郎 | 神学部同窓 | 60 冊 |
| | | | | 点字書 |
| 1940 | 昭和15 | 熊谷鉄太郎 木村忠篤 小寺修三 | 同窓・校友 | 約 450 冊 |
| 1940 | 昭和15 | C. J. L. ベーツ | 院長 | 358 冊 |
| 1940 | 昭和15 | J. C. C. ニュートン | 前院長 | 2,813 円 |
| 1940 | 昭和15 | T. H. ヘーデン | 前神学部長 | |
| 1942 | 昭和17 | 武田鼎一 | 関西大学教授 | 80 冊 |
| 1942 | 昭和17 | 吉田長祥 | 実業家 | 35 冊 |
| 1943 | 昭和18 | 高安克己 | 前中学部教諭 | 1,816 冊 |
| | | | | 文学歴史関係書 「高安文庫（注）」 |
| 1943 | 昭和18 | 柳原正義 | 前高商教授 | 913 冊 |
| | | | | 神学哲学関係書 |
| 1943 | 昭和18 | 村上博輔 | 前文学部教授 | 206 冊 |
| | | | | 漢籍ほか寄託書 |
| 1944 | 昭和19 | 西山広栄 | 前高商教授 | 537 冊 |
| | | | | 法経書 |
| 1945 | 昭和20 | 牧岡廉二 | 前高商教授 | 151 冊 |
| | | | | 英語関係書 |

| 年 | 氏名等 | 職名等（寄贈時） | 数量、金額 | 内容等 | |
|------|------|------------------------------------|------------|---------|---------------------------------------|
| 1945 | 昭和20 | 前島正一 | 会計主任 | 11 冊 | 医学及び水戸藩史料書 |
| 1946 | 昭和21 | 保田正 | 前高商教授 | 90 冊 | 英語通信関係書 |
| 1946 | 昭和21 | 吉岡美国 | 名誉院長 | 189 冊 | |
| 1947 | 昭和22 | World Church Service（世界教会奉仕活動） | | 230 冊 | 諸学関係 戦後初めて輸入された洋書 アウトアブリッジ学長の斡旋 |
| 1947 | 昭和22 | 竹内正 | 前文学部講師 | 1,082 冊 | 文学関係書 |
| 1947 | 昭和22 | 進駐軍 | | 220 冊 | |
| 1948 | 昭和23 | 稲留早苗 | 実業家 | 10 万円 | 日本文学関係図書（472 冊） |
| 1948 | 昭和23 | 芝川又四郎 | 実業家 | 1,000 冊 | 文学漢籍関係書ほか 「芝川文庫（注）」 |
| 1948 | 昭和23 | 麻生一郎 | 卒業生 | 80 冊 | 歌書 |
| 1948 | 昭和23 | ウッズウォース夫人 | 前文学部長夫人 | 3,950 冊 | 部長蔵書に新購入書を加えて |
| 1948 | 昭和23 | World Church Service（世界教会奉仕活動） | | 266 冊 | |
| 1948 | 昭和23 | 吉岡美国 | 名誉院長 | 1,310 冊 | 神学関係書 |
| 1948 | 昭和23 | 曾木銀次郎 | 学院理事 | 760 冊 | |
| 1949 | 昭和24 | 柴田亨一 | 卒業生 | | 「柴田文庫」 北野大吉博士蒐集文献含む |
| 1950 | 昭和25 | アンダーウッド夫人 | ニュートン元院長令嬢 | 500 ドル | 「ニュートン文庫（注）」 |
| 1950 | 昭和25 | 神崎驥一 | 元院長 | 340 冊 | 歴史外交教育関係書 |
| 1951 | 昭和26 | 小寺敬一 | 前高商教授 | 670 冊 | |
| 1952 | 昭和27 | 島田重雄 | 同窓生 | 300 冊 | 神学書 |
| 1957 | 昭和32 | 原田脩一 | 元商学部教授 | 425 冊 | |
| 1959 | 昭和34 | 大石兵太郎 | | 1,093 冊 | |
| 1959 | 昭和34 | 丹羽俊彦 | 財務部長 | 2,705 冊 | 近代短歌 「丹羽記念文庫」 |
| 1960 | 昭和35 | 恒藤恭 | | 573 冊 | |
| 1961 | 昭和36 | アジア財団 | | 156 冊 | |
| 1961 | 昭和36 | 恒藤恭 | | 350 冊 | 「恒藤文庫」 |
| 1962 | 昭和37 | 神戸アメリカ文化センター | | 1,880 冊 | |
| 1962 | 昭和37 | W. Q. マックナイト | 神学部教授 | 120 冊 | |
| 1962 | 昭和37 | 原田清市 | | 155 冊 | 金融関係 |
| 1962 | 昭和37 | 櫻根好之助 | | 235 冊 | |
| 1964 | 昭和39 | 芦田幸男 | | 191 冊 | |
| 1964 | 昭和39 | Theological Education Fund, London | | 323 冊 | |

| 年 | 氏名等 | 職名等（寄贈時） | 数量、金額 | 内容等 |
|------|------|-------------|--------------------|---------------------------------------|
| 1964 | 昭和39 | 佐藤清 | | 513 冊 「佐藤清文庫」 追加分 |
| 1966 | 昭和41 | 赤井節 | | 982 冊 「赤井文庫」 |
| 1966 | 昭和41 | 竹友藻風 | | 62 冊 |
| 1966 | 昭和41 | 黒川幸吉 | | 23 冊 |
| 1966 | 昭和41 | 高尾有 | | 36 冊 |
| 1969 | 昭和44 | オーストラリア政府 | | 149 冊 オーストラリア関係新刊洋書 |
| 1969 | 昭和44 | 山本五郎 | 元理事、元図書館長 | 833 冊 商業、経済関係 |
| 1969 | 昭和44 | 島谷照夫 | 教授 | 81 冊 写真技術、紀行、文学、沖縄関係 |
| 1971 | 昭和46 | 石野博一 | 故池内信行名誉教授遺族代表 | 約 6,000 冊 経済学関係蔵書 「池内文庫（注）」 |
| 1971 | 昭和46 | 田中周友 | 京都大学名誉教授 | 戦後 10 年間にわたる日本学術 会議関係資料 |
| 1973 | 昭和48 | 青山秀夫 | 社会学部教授 | 230 冊 |
| 1974 | 昭和49 | 栗野頼之祐 | | 洋 166 冊 冊子目録刊行に際しての寄贈 「栗野文庫」 |
| 1975 | 昭和50 | 佐藤清 | | 図書 195 冊 雑誌 85 種 「佐藤清文庫」 追加分 |
| 1976 | 昭和51 | 小宮孝 | 名誉院長 | 844 冊 ゴットル経済関係 247 冊は「小 宮文庫」 |
| 1976 | 昭和51 | 笹森四郎 | 元商学部教授 | 208 冊 |
| 1976 | 昭和51 | 虎田帙雄 | 元商学部教授 | 322 冊 |
| 1976 | 昭和51 | 河野三通士 | | 204 冊 |
| 1976 | 昭和51 | 平賀幸吉 | 故高等部教諭 | 3,934 冊 |
| 1976 | 昭和51 | 植木錬之助 | 経済学部教授 | 経済関係雑誌 |
| 1977 | 昭和52 | 栗野頼之祐 | | 和 285 冊 「栗野文庫」 |
| 1977 | 昭和52 | 阪口秋良 | 故阪口明社会学部 3 年生父 | 200 万円 「阪口文庫（注）」 |
| 1977 | 昭和52 | 神崎先生の胸像を作る会 | | 3,245 千円 国際連盟、国際連合関係資料 「神崎記念文庫（注）」 |
| 1979 | 昭和54 | 加輪上保 | 高商卒業生 | 1 冊 マルサス「人口論第 2 版」 |
| 1979 | 昭和54 | J. ローラー | ワシントン大学名 誉教授 | 470 冊 会計学 「ローラー文庫（注）」 |
| 1980 | 昭和55 | カナダ大使館 | | 50 点 総合コース「カナダ研究」支援 のため「カナダ文庫」を開設 |
| 1980 | 昭和55 | クィーンズランド大学 | | 514 点 |
| 1982 | 昭和57 | 村山冴子 | 社会学部教授 | 400 冊 社会福祉関係 |
| 1982 | 昭和57 | 堀経夫 | 故名誉教授 | 541 タイトル 1,059 冊 「堀文庫」の追加分 |
| 1983 | 昭和58 | 百元好雄 | 日本基督教教団 改革派芦屋教会 | 112 冊 山岳関係 |

| 年 | 氏名等 | 職名等（寄贈時） | 数量、金額 | 内容等 |
|-------------------|-------------|-----------------------|-----------------|--|
| 1983 | 昭和58 | 木村ヨシ | 卒業生父兄 | 401 冊 ドイツ文学関係 |
| 1983 | 昭和58 | 藤井康雄 | 大学事務室長 | 345 冊 芸能関係図書・雑誌 |
| 1983 | 昭和58 | 橘眞琴 | 山岳部 OB | 17 冊 山岳関係雑誌 |
| 1984 | 昭和59 | 岩橋明子 | 日本ライトハウス 理事長 | 1,876 冊 神学、哲学、教育関係 |
| 1984 | 昭和59 | 藤井康雄 | 大学事務室長 | 52 冊 芸能関係図書・雑誌 |
| 1984 | 昭和59 | 内田政秀 | 法学部教授 | 232 点 内田家文書（古文書） |
| 1985 | 昭和60 | 松浦績司 | 故名誉教授 | 1,200 冊 英文学関係図書・雑誌 |
| 1985 | 昭和60 | 藤井康雄 | 大学事務室長 | 53 冊 芸能関係図書・雑誌 |
| 1988 | 昭和63 | 大道安次郎 | 名誉教授 | 約 9,000 冊 |
| 1989 | 昭和64 | 今井清 | 故文学部教授 | 1,369 冊 |
| 1989 | 昭和64 | 青木倫太郎 | 故名誉教授 | 約 5,000 冊 |
| 1990 | 平成 2 | 仲原晶子教授定年退 職記念事業委員会 | | 773,805 円 教育学関係 |
| 1991 | 平成 3 | 楠井隆三 | 故名誉教授 | 417 冊 |
| 1991 | 平成 3 | 新浜邦夫 | 故名誉教授 | 98 冊 |
| 1999 | 平成11 | 八重津洋平 | 元図書館長 | 31 点 八重津家旧蔵資料 書簡 17 点、草稿および原稿 14 点 |
| 2000 | 平成12 | 真鍋由郎 | 故名誉中学部長 | 117 点 古文書 |
| 2001 | 平成13 | 張源祥 | 故名誉教授 | 938 点 音楽関係 |
| 2002 | 平成14 | 小島達雄 | 名誉教授 | 約 4,000 冊 フランス現代演劇関係 |
| 2002 | 平成14 | 加藤隆久 | 生田神社宮司 | 521 点 丹羽安喜子の自筆原稿 |
| 2002 | 平成14 | 中井政寿 | 故司書課主任 | 100 万円 2003 年にウエスレー兄弟著の 図書を購入 |
| 2002 ～ 2007 | 平成14 ～19 | 津金澤聡広 | 名誉教授 | 計 98 万円 2006 年に木版挿絵入りラテン 語聖書を購入 |
| 2003 | 平成15 | 櫛原庸雄 | | 54 点 攝津国大坂三郷質屋櫛原家文書 |
| 2004 | 平成16 | 海道進 | 神戸大学名誉教授 | 7,328 冊 社会主義経営関係 |
| 2004 | 平成16 | 前川貞次郎 | 故京都大学名誉教 授 | 約 4,000 冊 フランス革命史関係 |
| 2006 | 平成18 | 浅井睦也 | 卒業生、元浅井産 業社長 | 1,107 冊 歌舞伎、オペラ関係 |
| 2007 | 平成19 | ひょうごボランティア ープラザ | | 約 1,600 冊 阪神淡路大震災関連図書資料 |
| 2007 | 平成19 | 加藤一明 | 故名誉教授 | 280 冊 行政学関係図書 |
| 2008 | 平成20 | 西山美瑛子 | 名誉教授 | 約 1,300 冊 父君の西山重和氏の美術、文 学、博物学関係蔵書 |
| 2008 | 平成20 | 佐々木薫 | 名誉教授 | 35 万円 鳥類図鑑を購入 |

※(注) 現在は文庫指定されていない

(4) 特別図書費等購入資料一覧

| 年度 | | | 資料名 | 冊数等 |
|------------|------|------|--|--------------------------|
| 特殊文庫購入基金 | 1961 | 昭和36 | 恒藤恭博士蔵書（二次分） （「恒藤文庫」の一部） | 350 冊 |
| | | | 神崎驥一元院長蔵書 | 1,225 冊 |
| | 1962 | 昭和37 | 梅田教授記念文庫 （特別文庫「梅田文庫」） | 2,026 冊 |
| | | | 佐藤清先生記念文庫 （特別文庫「佐藤清文庫」） | 3,990 部 |
| 蔵書購入基金 | 1977 | 昭和52 | 名誉教授玉林憲義先生（ドイツ文学）の蔵書 （このうちドイツ語史およびゲート関係の貴重な資料をまとめて「玉林文庫」とする。） | 約 1,300 冊 |
| | 1980 | 昭和55 | 19 世紀英国教会史、政治神学論争研究文献コレクション | 200 タイトル |
| | | | 古代法制史文庫 Ancient and Roman Law | 280 タイトル |
| | 1982 | 昭和57 | アダム・スミス著作のコレクション、D. ヒュームからアダム・スミスにあてた書簡一葉を含む（特別文庫「アダム・スミス著作文庫」） | 79 タイトル 162 冊 |
| 特別図書購入基金 | 1983 | 昭和58 | John Locke collection （特別文庫「ジョン・ロック著作文庫」） | 224 items |
| | | | James Mill and John Stuart Mill collection （特別文庫「ジェームズ及びジョン・ステュアート・ミル著作文庫」） | 122 items |
| | | | 宗教改革史と教会法史コレクション （特別文庫「宗教改革・教会法コレクション」） | 658 タイトル 954 冊 |
| | | | Don Yoder collection of American Church history （ドン・ヨーダーコレクション） | 2,454 冊 |
| | | | 19th century British theology : a collection of 400 contemporary biographies（19 世紀英国神学コレクション） | 446 冊 |
| | | | 「松野賢吾博士文庫」：財政学を中心としたコレクション | 1,721 タイトル |
| | | | An important and complete collection of First edition of Kierkegaard's works（キェルケゴール初版本コレクション） | 32 titles in 30 vols. |
| | | | The Scottish Enlightenment : a collection of 66 item（特別文庫「スコットランド啓蒙コレクション」） | 66 items |
| 大学特別図書購入基金 | 1989 | 平成元 | 中国方志叢書第三期、および台湾地区第一期、第二期 | 2,751 冊 |
| | 1990 | 平成 2 | アメリカ法基本判例・法令集成 | 8,047 冊 |
| | | | 19 世紀英国議会報告書 | 673 冊 |
| | 1991 | 平成 3 | ドイツ経営経済学関係文庫（ニーシュラク教授私蔵） | 3,076 冊 |
| | 1992 | 平成 4 | 甲骨金文学コレクション（内藤湖南蔵書） | 1,874 冊 |
| | | | 17～18 世紀初期英国新聞コレクション | 458 リール |
| 1993 | 平成 5 | | Journals of the House of Commons. (1547-1989/90) | 266 冊 |

| 年度 | | | 資料名 | 冊数等 |
|----------------------------|------|------|---|-------------------------|
| 大学 特別 図書 購入 基金 | 1996 | 平成 8 | Thomas Hobbes Collection (特別文庫「トマス・ホッブズ著作文庫」) | 158 冊 |
| | | | British Social Policy Collection (特別文庫「イギリス社会政策コレクション」) | 500 冊 |
| | | | Historical Social Science Literature Collection (特別文庫「イギリス社会科学古典資料コレクション」) | 300 冊 |
| | 1998 | 平成10 | ランドルト・ベルンシュタイン数値データ集 | 90 冊 |
| | 2000 | 平成12 | イギリス功利主義原典コレクション | 19 点 |
| | 2001 | 平成13 | ゲーテンベルク 42 行聖書 第 2 巻 145-146 葉 | 2 葉 |
| | 2003 | 平成15 | モスラー教授旧蔵書 国際私法コレクション | 720 冊 |
| | 2005 | 平成17 | ボーリ親子コレクション、L. ワルラスコレクション | 771 点 |
| | 2007 | 平成19 | ヒューム「人間本性論」初版 | 3 冊 |
| | 2009 | 平成21 | The Holy Bible: King James Authorized Version; The Great He Bible (1611) | 1 冊 |
| | 2011 | 平成23 | 西洋哲学名著古版本コレクション | 10 冊 |
| | | | H. S. フォックスウェル文書 | 全体の 1/3 程度 約 8,000 点 |

| 年度 | | | 資料名 | 冊数等 |
|-----|------|------|--|-------------------------|
| その他 | 1984 | 昭和59 | (院長・理事長による予算外支出) 東山名誉教授ソーロー関係図書 | 229 点 |
| | 1993 | 平成 5 | (関西学院創立 100 周年記念事業購入分の移管) 下村寅太郎博士蔵書 | 9,426 冊 |
| | 2011 | 平成23 | (関西学院創立 125 周年記念事業費より) H. S. フォックスウェル文書 | 全体の 1/3 程度 約 8,000 点 |

(5) 大学図書館のコレクション ー特別文庫、その他特色ある貴重資料群ー

大学図書館で所蔵するコレクションは、大きく以下の5種類に分類することができる。

これらのコレクションについては、特別文庫や貴重図書（準貴重図書）に指定し、利用・保存に関する基準を別に定めて運用している。

1. ホッブズ、ロック、スミス、ミル父子等の卓越した学者・思想家の著作とその研究文献から構成されるコレクション
2. スコットランド啓蒙やイギリス社会政策、イギリス社会科学古典資料、宗教改革史・教会法史等の特定のテーマに関連した体系的コレクション
3. 柴田文庫や堀文庫等の収集者や収集に関連ある人の氏名を冠したコレクション（丹羽記念、佐藤清、栗野、赤井、小宮、高坂、梅田、室井、玉林、恒藤、山本）
4. クラーク＝ギディングズ書簡やイギリス功利主義原典コレクション等の主として自筆書簡・ノート等の手稿類を中心とするコレクション
5. その他、キリスト教や経済学史関係等の特色ある貴重図書・資料群

1. 学者・思想家の著作とその研究文献から構成されるコレクション

①トマス・ホッブズ著作文庫（特別文庫）

近代政治思想の父と呼ばれるトマス・ホッブズ（Thomas Hobbes, 1588-1679）の著作と彼の著作を批評する資料からなる。ホッブズは、ロックと共に17世紀イギリスを代表する思想家で、ルネッサンス以来の近代哲学を背景に、物体論、人間論、市民論の三本柱からなる哲学体系を構築したといわれる。このコレクションは169冊からなり、ホッブズの有名な名著『リヴァイアサン』（1651年）が、初版だけでなく17世紀に出された7つの版のすべてが揃っていることや、最大の稀覯書のひとつとされている『哲学要綱 第三部、市民について』（ラテン語版初版、1642年）が含まれていることが特筆すべき点である。

②ジョン・ロック著作文庫（特別文庫）

ジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）の著作と研究文献からなる。ロックは、17世紀イギリスを代表する思想家であり、とくにそのイギリス経験論哲学、および近代民主主義思想は著名である。中でも、『人間知性論』（1690年）や『統治二論』（1690年）はよく知られている。このコレクションは、414冊からなっているが、ロックの名著は各版にわたってほとんど揃っている。

③アダム・スミス著作文庫（特別文庫）

経済学の創始者とされるアダム・スミス（Adam Smith, 1723-1790）の著作と彼の著作に関する研究書からなる。スミスの著作は、『国富論』（1776年）と『道徳感情論』（1759年）および彼の死後友人によって出版された『哲学論文集』（1795年）の3冊だけである。このコレクションは、最初は小さなコレクションであったが、大学図書館の

継続的な補充作業によって、現在では 308 冊となり、幅広く価値の高いコレクションとなった。

④ジェイムズおよびジョン・ステュアート・ミル著作文庫（特別文庫）

父の James Mill (1773-1836) の著作と、息子の John Stuart Mill (1806-1873) の著作と研究文献、合わせて 368 冊からなる。ミル父子、とくに息子のミルは、19 世紀にスミス、マルサス、リカードウを経た古典派経済学を継承し、新しい時代の要請に応じて、新しい思想を吸収し、経済学に社会哲学を導入して、経済学の再構築をはかるとともに、新しい学問体系を目指した思想家である。このコレクションには主要な版がほとんど含まれている。

2. 特定のテーマに関連した体系的コレクション

①スコットランド啓蒙コレクション（特別文庫）

スミス著作文庫と最も深く関連し、それを直接補うのが、このスコットランド啓蒙コレクションである。このコレクションは、18 世紀スコットランド啓蒙における、法・政治思想史、社会思想史、経済思想史だけでなく、広く哲学、倫理学、宗教思想、美学、文芸評論などに関連した文献、755 冊からなる。18 世紀スコットランド啓蒙思想に関連した不可欠のものであり、デイヴィッド・ヒュームとケイムズを中心に、D. ステュアート、ロバートソン、ハチスン、ファーガスン、リード、ジェイムズ・ステュアートなど、多くの啓蒙思想家の著作が含まれている。

②イギリス社会政策コレクション（特別文庫）

イギリス社会政策コレクションは、正確には「1557 年以降のイギリス社会政策：貧困・慈善・公的給付」というタイトルをもっている 473 冊からなるユニークなコレクションである。これは、救貧をめぐる 16 世紀以来のイギリス史に関する極めて貴重で体系的なコレクションであり、この問題に関する法律、政治、経済、社会の実態を明らかにする歴史史料と思想史資料が含まれている。その中でも、スコットランドの救貧法関係の文献について特筆すべきものがある。

③イギリス社会科学古典資料コレクション（特別文庫）

イギリス社会科学古典資料コレクションは、17 世紀から 19 世紀にかけての経済思想史、社会思想史上の多くの稀覯本を含む貴重な図書およびパンフレット類 344 冊からなり、一部フランスの著作家の作品を含んでいる。例えば、経済学史関連ではペティ、デュト、カンティロン、ローダーデイル、リカードウ、マルサス、アーサー・ヤングの稀覯書、社会思想史の分野では、モンテスキュー、ドルバックの著作が含まれている。

④宗教改革・教会法コレクション（特別文庫）

このコレクションは、ドイツの宗教改革とそれ以後のプロテスタント教会法関係資料、そしてカトリック教会法関係資料 1,003 冊からなる。コレクションの特色として、その多くが貴重な古版本からなっていること、カトリック、プロテスタントを問わず、教会法関係の資料に重点が置かれていること、宗教改革期の貴重かつ豊富な資料や文献が含まれていることなどがあげられる。古版本の中にマルティン・ルター (Martin

Luther, 1483-1546) の小著書、講解、説教などがあり、これらはルター存命中の貴重な版本である。

3. 収集者や収集に関連ある人の氏名を冠したコレクション

①丹羽記念文庫（特別文庫）

近代短歌を中心とした図書 2,975 冊（和書）からなる。正岡子規によって創始された根岸短歌会と与謝野鉄幹・晶子によって創始された東京新詩社の流れは広大な近代短歌の世界を形成しているが、前者の流れを汲む写実主義短歌の世界と後者の流れを汲む浪漫主義短歌の世界は二つの大きな短歌世界の流れをなし、その中に多くの歌人を出している。これらの歌人達の歌集を多く集めた丹羽記念文庫は近代短歌の研究者にとって必須の文献である。さらに現代短歌にまで広範囲に歌集を集めているので、本文庫には、正岡子規をはじめ伊藤左千夫・長塚節・島木赤彦・斎藤茂吉に至るアララギ派歌人の歌集の初版本がある。さらに、近代から現代にかけての短歌雑誌が 30 種類以上集められている。本文庫は、本学院の財務部長や理事として活躍された丹羽俊彦氏の令夫人である安喜子氏によって蒐集された、近代短歌を中心としたものである。1959 年に丹羽氏より寄贈を受けた。丹羽安喜子（1892-1960）は三重県津市出身で、1905 年に東京府立第三高等女学校を卒業し、1909 年に丹羽俊彦氏と結婚。1919 年 5 月に与謝野鉄幹、晶子に師事し、新詩社の社友となる。1936 年 3 月に第一歌集『芦屋より』を出版する。翌年 1937 年に関西の友人たちと紫絃社を起こし、1940 年に芦屋短歌会を起こした。1944 年 2 月に第二歌集『低唱』を出版した。

②佐藤清文庫（特別文庫）

英文学関係図書 5,783 冊からなる。ウィリアム・ブレイク、ロバート・バーンズ、バイロン、ワーズワース、シェリー、キーツ、ブラウニング、テニスン、ローレンス、ショー、T. S. エリオット、イェーツ等の図書が中心であり、とりわけロマンティズムの文学の中の詩を中心とした蔵書が多い。佐藤清（1885-1960）は、1910 年東京帝国大学文学部英文科を卒業し、関西学院では 1913 年高等学部文科教授となり、1923 年まで 10 年間在職した。その間、1917 年から 2 年間関西学院からイギリスに留学。ロンドンのブリティッシュ・ミュージアムで英文学の研究をした。関西学院の英文科は佐藤教授によってその基礎が築かれた。原田の森時代の教え子には、志賀勝、寿岳文章、由木康、岩橋武夫などがいる。教授は英文学会で活躍しただけでなく、詩人として多くの詩集をだすとともに、『関西文学』や『想苑』など、文学雑誌を起こし、編集者としても活躍した。特に当時、文学部の学生だったモダニズム詩人、竹中郁や、詩集『たんぽぽ』で知られる農民詩人の坂本遼、さらに足立巻一といった詩人・作家たちの輩出に貢献した。

③柴田文庫（特別文庫）

18、19 世紀イギリス経済・社会史関係図書 319 冊からなる。ロバート・オウエン、メアリ・ウルストンクラフト、ウィリアム・モリスを中心とした文庫である。北野大吉元高等商業学部教授が、同窓の柴田享一の篤志をもとに収集した文庫である。柴田享一

(1892-1952) は、1916 年関西学院高等商業学部を卒業し、柴田土地家屋株式会社を設立した。北野大吉 (1896-1945) は、神戸市出身で関西学院中学部卒業の 1917 年に神戸高等商業学校予科に入学。1920 年に同校本科第 2 年修了後、東京商科大学に入学。同校卒業の 1923 年に関西学院高等商業学部教授となり、経済史、社会政策などを担当した。北野は柴田享一の経済的援助によってロバート・オウエン関連の貴重図書を購入した。相撲部顧問。1928 年に受洗。1941 年に関西学院を退職。上海東亜同文書院教授となり、1943 年、臨時学長代理。1942 年経済学博士 (一橋大学)。

④栗野文庫 (特別文庫)

西洋古代資料を中心とした 2,076 冊からなる。古代ギリシャ、ローマ史関係の学術書で研究上必要不可欠な文献がほとんど網羅されている。なかでも貴重なのは、碑文、パピルス文書の史料やヘレニズム史関係の図書である。本文庫は研究書、碑文、パピルス文書の史料集のほか古代史辞典、地図、雑誌とその抜刷、年表等をも含み、また歴史学だけでなく、言語学、教育学、キリスト教史の分野を含んでいるのが特色である。栗野頼之祐 (1896-1970) は、兵庫県出身で、青山学院高等部卒業後、アメリカ・オハイオ州ウェスレアン大学で B. A.、コロンビア大学大学院史学科で M. A. を取得。その後、1939 年までハーバード大学で碑文、パピルス文書などの史料にもとづく古代ヘレニズム史の研究を継続し、一時期ボストン美術館東洋部に勤務した。帰国後神戸女学院を経て、1951 年 4 月の文学部史学科開設に伴い本学文学部教授に就任、停年の 1967 年まで、その充実・発展のために尽力した。1950 年に『出土史料によるギリシャ史の研究』を刊行、1951 年これにより学士院賞を受賞した。

⑤赤井文庫 (特別文庫)

西洋古代法制史関係図書を中心とした 942 冊からなる。洋書は 1945 年から 1965 年の出版物が主であり、ローマ法、旧約ユダヤ法関係が 77 点、他には旧約聖書の研究書、古代中近東社会史、ヒブル語文法・辞書などがある。和書は 1935 年から 1955 年の出版物が主であり、ローマ法、旧約ユダヤ法関係図書が 30 点ある。赤井節 (1925-1966) は、京都大学法学部卒業後、2 年間の特別研究生を経て大阪市立大学法文学部 (後に法学部として独立) で助手、講師、助教授を務め、1959 年本学助教授に就任した。1965 年に法学部教授となるが、翌 1966 年に 40 歳で逝去。研究者として活動した期間は 20 年に満たないが、その業績はローマ法、フランス法、法思想史、西洋法史、方法論と多岐にわたる。その中でも最も重要なものがヘブライ法の研究である。

⑥堀文庫 (特別文庫)

経済学史・社会思想史関係図書 1,177 冊からなる。洋書の大部分は研究書であり、ブルードンやコベットなど 19 世紀イギリスおよびフランス社会思想史関係書 (その主なものは 171 点) からなっていて、柴田文庫と資料的に補完しあうものである。また、和書と和雑誌とは、堀経夫のもう一つの学会への貢献領域である明治経済思想史関係のものが中心である。堀文庫は、夫人の堀きみえ氏より 1982 年に寄贈された。すでに 1968 年に購入されていた 19 世紀イギリスおよびフランス社会思想史関係の貴重書 171 点を加え、本文庫としてまとめた。堀経夫 (1896-1981) は、北海道出身で、第三高等学校

在学中、京都の吉田教会で受洗。京都帝国大学在学中、河上肇の影響で経済学史への関心を深め、大学院へ進学。1922年東北帝国大学法文学部助教授に就任。1923年から1925年にイギリスを中心に留学。1929年経済学博士（京都帝国大学）。1932年大阪商科大学教授。1934年新設の関西学院大学商経学部および法文学部講師となり経済原論を担当。1936年には商経学部教授を兼任。1942年大阪商科大学予科長。1948年大阪商科大学退職、新制関西学院大学経済学部教授。1954年経済学部長、1955年本学学長を歴任。1966年退職。多くの学会の創立メンバーとなる。1966年日本学士院会員。

⑦小宮文庫（特別文庫）

近代ドイツ経済学関係図書を中心とした247冊からなる。歴史学派、全体主義経済学系統の学者（シェフレ、シュバン、ゴットルほか）の国民経済学、社会学、価値論などの著作が主である。小宮孝（1902-1975）は、1929年、東京商科大学卒業後、関西学院高等商業学部経済学担当教授に就任。1941年、大学商経学部助教授、1946年、同教授。理論経済学を担当した。戦後の学院民主化とキリスト教活動の旗頭として活躍。1950年から4年間経済学部長を務めた。戦後の学院キリスト教活動活性化の中核としても活躍し、1958年から1969年まで院長（第9代院長）、学長代理を兼任後退職。その後、名古屋学院大学教授を経て神戸女学院院長を務めた。1974年には吉岡美国、C. J. L. ベーツに続いて名誉院長の称号を受けた。

⑧高坂文庫（特別文庫）

ドイツを中心とする近世・近代の哲学および歴史図書を中心とした2,114冊からなる。その中にはアメリカの大学論を主とする教育関係図書・資料が含まれている。主として1920から30年代、1950から60年代にかけて出版された図書が多いが、哲学・歴史書中には1900年以前出版のものが約50点ある。高坂正顕（1900-1969）は、名古屋市出身で、1923年京都帝国大学文学部卒業。京都府立大学予科助教授。1936年東京文理科大学助教授。1940年から1945年まで京都帝国大学教授・人文科学研究所所長。1951年関西学院大学文学部教授。1955年京都大学教育学部教授、4月同教育学部長。西田幾多郎門下の哲学者であり、1964年7月、ハワイ大学で開催された『東西哲学会議』に出席。（日本側報告者高坂正顕、中村元、上田義文、古川哲史、堀一郎、川島武宜の諸氏、鈴木大拙氏は公開講演）。同年中央教育審議会特別委員会の主査に任命された。1967年に国立教育会館館長。

⑨室井文庫（特別文庫）

大正～昭和に刊行されたキリシタン関係図書を中心とした574冊からなる。幕末から明治初年にかけての排邪書とオリジナル版を含む日本語訳聖書、撰・河・泉の宗門改帳・寺請帳などからなる92冊の和装本に加えて、大正から昭和戦前刊行のキリシタン関係、日本キリスト教史、南蛮文化関係の図書が多い。室井庄四郎（1893-1962）は、宮城県出身で、1914年宮城県師範学校二部を卒業後、同年4月宮城県柴田郡大河原小学校に就職。1915年宮城県立師範学校に就職。1918年大阪市立盲啞学校に就職。1927年校長である宮島茂次郎が海外出張中は校長代理を務めた。1939年神戸市立盲学校初代校長となる。1948年大阪市立盲学校校長を務め、1957年停年退職。同年4月、日本ラ

イトハウス総務に就任した。障害者教育に献身された教育家である。

⑩梅田文庫（特別文庫）

バルカン諸国（ギリシャ、アルバニア、ブルガリア、ルーマニア、旧ユーゴスラビア）に旧ソ連、ポーランド、ハンガリー、旧チェコスロヴァキアを加えた東欧諸国の歴史と文明に関する資料 1,699 冊からなる。貴重な大著や史料集、辞典、百科事典、学会誌から教養書や広報誌まで幅広く、また、地域的なまとまりがある。ビザンティン帝国史関連資料を含む。梅田良忠（1900-1961）は、ポーランドのワルシャワ大学に学び、卒業後同大学で日本文化を紹介するかたわら、ポーランド文化を研究し、さらに東欧諸国を歴訪した。帰国後は本学文学部教授（1955-1961）として史学科で東欧史を講義し、その間に東欧文化の研究と紹介に寄与した。ギリシャ正教聖フランチェスコ修道院から寄贈を受けたポーランド語の宗教書（1850～1900 年代出版のものが大半）などを本文庫に追加した。

⑪玉林文庫

ドイツ語史およびゲーテ関係書。玉林憲義（1907-1996）元本学文学部教授の旧蔵書であり、557 冊からなる。

⑫恒藤文庫

国際法・外交史および経済学関係書 874 冊からなる。ドイツ語、フランス語の研究書が多い。旧大阪商大教授で戦後大阪市立大学長を務めた恒藤恭教授（1888-1967）の旧蔵書の一部である。

⑬山本文庫

法律・経済・思想・歴史・宗教関係書など 825 冊からなる。財界人で元学院理事、第 5 代図書館長（1938-1943）を務めた山本五郎（1879-1969）の旧蔵書である。

4. 自筆書簡・ノート等の手稿類を中心とするコレクション

①クラーク＝ギディングズ往復書簡（1886 年－1930 年）

この The Correspondence of John Bates Clark written to Franklin Henry Giddings, 1886-1930 は、アメリカにおける近代経済学の成立に最も大きく貢献したジョン・ベーツ・クラーク（1847-1938）の理論形成過程を示す、F. H. ギディングズ（社会学者・経済学者）宛の未公表自筆書簡およびその関連資料 292 点からなっている。

②イギリス功利主義原典コレクション

この資料は、ベンサムとミル父子の著作 12 点と、自筆書簡 7 通、J. S. ミルの若い時代のフランス旅行日記など 20 点からなっており、直接的にはジェイムズおよびジョン・ステュアート・ミル著作文庫と関連し、それを補うものである。

③与謝野晶子による丹羽安喜子短歌草稿への添削

④「小島政二郎宛芥川龍之介書簡」など明治・大正期の文学者の書簡・草稿

⑤明治政治史関連文書・書簡

5. その他、特色のある貴重図書・資料群

- ① エラスムス校注ギリシャ語新約聖書 初版(1516年)、第2版(1519年)、第5版(1535年)
- ② ゲーテンベルク 42 行聖書 (原本第2巻、2葉4頁) (1455年頃)
- ③ 死海写本断片

(A Fragment from the Dead Sea Scrolls from 11 QpaleoLev, Fragment L)

本学図書館が収蔵する死海写本断片はクムラン第11洞窟から出土した、古レビ記の断片Lと呼ばれる断片群の中の一片。

- ④ コーベルガー版ラテン語聖書
- ⑤ 『欽定訳聖書』初版初刷 (1611年)
- ⑥ 下村寅太郎旧蔵書

下村寅太郎博士は、西田幾多郎と田辺元¹に直接教えを受けた京都帝国大学の「京都学派」の最後の人物である。「下村寅太郎蔵書」は、関西学院創立百周年記念事業の一環として1987年にその購入の契約がなされ、1993年に大学図書館に正式に移管された。その後、1995年に下村博士は逝去されたが、1997年に新大学図書館の完成を機に洋書を中心とする1万冊にのぼる蔵書の整理が開始され、2002年3月に完了、『下村寅太郎蔵書目録』を編集・発行した。下村寅太郎博士は無類の蔵書家であり、この蔵書も博士の専門研究の幅広い関心を反映して、近世哲学、数理哲学、科学哲学の研究に留まらず、精神史としての科学史という範囲にまで広がりを持っている。

- ⑦ 兵庫県漁具図解 (1897年)
- ⑧ さぬき日記 (讃岐典侍日記)
- ⑨ 『世間胸算用』など西鶴の著作群
- ⑩ 近世灘酒造業に関連する文書

本学の柚木重三元教授が収集され、それを子息の元学長柚木学教授が研究を大成した。

- ⑪ 『東寺文書』(正文16通)
- ⑫ 『算術、幾何、比および比例総論』
- ⑬ キェルケゴール初版本コレクション

付1) 関西学院大学図書館 特別文庫目録

- ① 『丹羽記念文庫目録』(近代短歌関係)、第1輯、1965年、「丹羽記念文庫によせて」(実方清)、「序文」(大道安次郎)
- ② 『佐藤清文庫目録』(19世紀英文学関係)、第2輯、1967年、「序文」(大道安次郎)、「あとがき」(東山正芳)
- ③ 『柴田文庫目録』(19世紀イギリス経済・社会思想関係)、第3輯、1972年、「序文」(前田正治)、「柴田文庫と北野教授について」(堀経夫)
- ④ 『栗野文庫目録』(古代ギリシャ、ローマ史関係)、第4輯、1974年、「序文」(小関藤一郎)、「栗野頼之祐先生と栗野文庫について」(関西学院大学文学部史学研究室)

- ⑤『ロック、スミス、ミル父子著作文庫目録』、第5輯、1985年、「序文」（金子精次）
- ⑥『関西学院大学図書館所蔵特別文庫目録一覧』、第1分冊、1992年。（上記①～⑤からなる）。

⑦同上、第2分冊、1993年。

赤井文庫、堀文庫、小宮文庫、高坂文庫、室井文庫、玉林文庫、恒藤文庫、梅田文庫、山本文庫からなる。

- ⑧『特別コレクション目録』（新大学図書館完成記念）

トマス・ホップズ著作文庫・イギリス社会政策コレクション・イギリス社会科学古典資料コレクション、第6輯、1997年、「序文」（田中敏弘）、「トマス・ホップズ著作文庫について」（岡本仁宏）、「イギリス社会政策コレクションについて」（池田信）、「イギリス社会科学古典資料コレクションについて」（篠原久）

- ⑨『スコットランド啓蒙コレクション目録』、第7輯、2001年、「序文」（丸茂新）、「スコットランド啓蒙コレクションについて」（竹本洋）

- ⑩『宗教改革・教会法コレクション目録』、第8輯、2002年、「序文」（井上琢智）、「宗教改革・教会法コレクションについて」（高森昭）

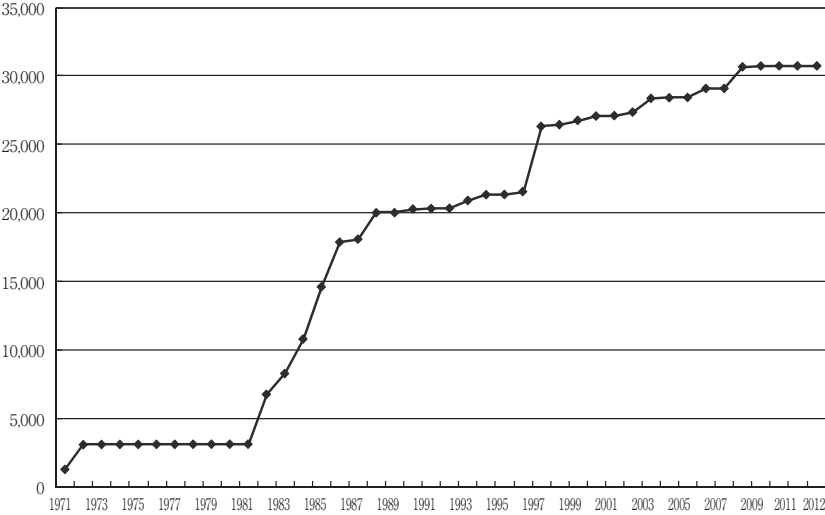
付2)『関西学院大学図書館所蔵史料目録』

- ①第一輯（1984年3月）近世史料、5,244点
- ②第二輯（1988年3月）同上、5,368点
- ③第三輯（1998年3月）同上、4,739点

(6) 古文書史料所蔵点数

| 年度 | | | 年度 | | | 年度 | | |
|------|-------|--------|------|-------|--------|------|-------|--------|
| 年度 | | 点数 | 年度 | | 点数 | 年度 | | 点数 |
| 1971 | 昭和 46 | 1,296 | 1985 | 昭和 60 | 14,604 | 1999 | 平成 11 | 26,744 |
| 1972 | 昭和 47 | 3,097 | 1986 | 昭和 61 | 17,867 | 2000 | 平成 12 | 27,059 |
| 1973 | 昭和 48 | 3,113 | 1987 | 昭和 62 | 18,083 | 2001 | 平成 13 | 27,090 |
| 1974 | 昭和 49 | 3,117 | 1988 | 昭和 63 | 20,009 | 2002 | 平成 14 | 27,347 |
| 1975 | 昭和 50 | 3,120 | 1989 | 平成 元 | 20,014 | 2003 | 平成 15 | 28,351 |
| 1976 | 昭和 51 | 3,122 | 1990 | 平成 2 | 20,278 | 2004 | 平成 16 | 28,394 |
| 1977 | 昭和 52 | 3,124 | 1991 | 平成 3 | 20,313 | 2005 | 平成 17 | 28,414 |
| 1978 | 昭和 53 | 3,128 | 1992 | 平成 4 | 20,336 | 2006 | 平成 18 | 29,071 |
| 1979 | 昭和 54 | 3,133 | 1993 | 平成 5 | 20,902 | 2007 | 平成 19 | 29,076 |
| 1980 | 昭和 55 | 3,135 | 1994 | 平成 6 | 21,326 | 2008 | 平成 20 | 30,647 |
| 1981 | 昭和 56 | 3,137 | 1995 | 平成 7 | 21,340 | 2009 | 平成 21 | 30,710 |
| 1982 | 昭和 57 | 6,767 | 1996 | 平成 8 | 21,552 | 2010 | 平成 22 | 30,714 |
| 1983 | 昭和 58 | 8,288 | 1997 | 平成 9 | 26,299 | 2011 | 平成 23 | 30,716 |
| 1984 | 昭和 59 | 10,799 | 1998 | 平成 10 | 26,430 | 2012 | 平成 24 | 30,716 |

古文書史料点数の推移



7 利用

(1) 相互利用件数

| 年度 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館 | | | | | | 神戸三田キャンパス大学図書館分室 | | | | 備考 |
|------------|-----------------|-------|------------|-----|------------|--------------------|------------------|-----|----------------|----------------|---|
| | 文献複写 依頼 | 受付 | 図書貸借 依頼 | 受付 | 閲覧利用 依頼 | 所蔵調査 (照会) 依頼 | 文献複写 依頼 | 受付 | 図書 貸借 依頼 | 閲覧 利用 依頼 | |
| 1973 昭和 48 | 101 | 140 | - | - | - | - | - | - | - | - | 「阪神地区相互利用に関する協定」を4月1日より施行 |
| 1974 昭和 49 | 172 | 114 | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| 1975 昭和 50 | 609 | 155 | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| 1976 昭和 51 | 680 | 528 | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| 1977 昭和 52 | 706 | 631 | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| 1978 昭和 53 | 520 | 779 | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| 1979 昭和 54 | 623 | 691 | 219 | 120 | 120 | - | - | - | - | - | |
| 1980 昭和 55 | 779 | 751 | 104 | 106 | 244 | 72 | - | - | - | - | |
| 1981 昭和 56 | 824 | 859 | 54 | 25 | 279 | 146 | - | - | - | - | |
| 1982 昭和 57 | 903 | 999 | 30 | 21 | 228 | 57 | 29 | 116 | - | - | |
| 1983 昭和 58 | 1,027 | 1,153 | 7 | 33 | 210 | 56 | 36 | 183 | - | - | 兵庫県大学図書館協議会「資料相互利用に関する細則」「資料相互利用実施要領」を制定、6月より施行 |
| 1984 昭和 59 | 890 | 905 | 27 | 36 | 212 | 5 | 49 | 126 | - | - | |
| 1985 昭和 60 | 923 | 861 | 30 | 30 | 239 | 89 | 52 | 253 | - | - | |
| 1986 昭和 61 | 768 | 627 | 15 | 37 | 380 | 228 | 99 | 515 | - | - | |
| 1987 昭和 62 | 771 | 671 | 24 | 21 | 362 | 240 | 122 | 446 | - | - | |
| 1988 昭和 63 | 728 | 712 | 18 | 34 | 353 | 313 | 115 | 443 | - | - | |
| 1989 平成 元 | 844 | 936 | 10 | 24 | 195 | 305 | 221 | 407 | - | - | |
| | | | | | | | | | | | 「関西四大学図書館相互利用協定」の発効。(複写料金の相殺、大学院生の相互利用の拡大等) |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |

| 年度 | | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館 | | | | | | 神戸三田キャンパス 大学図書館分室 | | | | | | 備考 |
|------|-------|-----------------|-------|------|-----|------|-----|----------------------|-----|-------|-------|----------------|----|--|
| | | 文献複写 | | 図書貸借 | | 閲覧利用 | | 所蔵調査 (照会) | | 文献複写 | | 図書 貸借 利用 | | |
| | | 依頼 | 受付 | 依頼 | 受付 | 依頼 | 受付 | 依頼 | 受付 | 依頼 | 受付 | 依頼 | 受付 | |
| 1990 | 平成 2 | 1,020 | 1,082 | 34 | 45 | 310 | 218 | 290 | 451 | | | | | 学情の総合目録データベースに図書館登録分の雑誌データを登録 NACSIS-ILL のモニター館となる NACSIS-ILL システムがスタートし、参加館となる。NACSIS-IR システムを試験的に導入 OPAC の稼働開始 |
| 1991 | 平成 3 | 1,450 | 1,169 | 52 | 90 | 375 | 293 | 1,081 | 687 | | | | | |
| 1992 | 平成 4 | 1,870 | 1,722 | 116 | 133 | 366 | 179 | 369 | 747 | | | | | |
| 1993 | 平成 5 | 2,762 | 1,978 | 198 | 177 | 307 | 227 | 474 | 673 | | | | | |
| 1994 | 平成 6 | 2,618 | 1,844 | 163 | 164 | 264 | 167 | 544 | 463 | | | | | |
| 1995 | 平成 7 | 2,681 | 1,453 | 176 | 135 | 292 | 80 | 1,402 | 467 | 12 | — | 6 | 2 | 1995 年 1 月 17 日の阪神・淡路大震災の影響により、文献複写の 受付業務を一部謝絶 |
| 1996 | 平成 8 | 2,813 | 2,389 | 291 | 280 | 302 | 120 | 1,181 | 731 | 17 | — | 12 | 0 | |
| 1997 | 平成 9 | 3,118 | 2,544 | 375 | 360 | 220 | 202 | 989 | 556 | 28 | — | 7 | 4 | |
| 1998 | 平成 10 | 3,439 | 3,412 | 459 | 498 | 239 | 294 | 1,052 | 596 | 83 | — | 16 | 6 | |
| 1999 | 平成 11 | 3,398 | 3,646 | 395 | 575 | 197 | 471 | 558 | 489 | 95 | — | 24 | 8 | 雑誌の継続受け入れタイトル数は 1997 年度から減少 ニューメディアコーナーに First Search を導入することにより、 国外の所蔵データの確認が可能 西宮・三田市立図書館と相互利用協定を締結・実施 洋雑誌のオンラインジャーナルの提供開始 |
| 2000 | 平成 12 | 2,942 | 3,487 | 315 | 530 | 234 | 354 | 405 | 416 | 130 | 29 | 19 | 12 | |
| 2001 | 平成 13 | 4,310 | 4,018 | 289 | 517 | 240 | 396 | 430 | 397 | 646 | 334 | 51 | 12 | Elsevier 社の Science Direct (無料) が 2001 年 12 月でサービス 停止 理学部が西宮上ヶ原キャンパスから神戸三田キャンパスへ移転 図書システム iliswave へ移行。OPAC オンラインサービス (文 献複写依頼) 開始 |
| 2002 | 平成 14 | 5,730 | 4,634 | 289 | 564 | 244 | 345 | 359 | 378 | 1,217 | 686 | 30 | 22 | 図書システム iliswave をオンライン版へ切替 理工学部で Chemical Abstracts をオンライン版へ切替 相互利用手続きの簡素化措置を実施 (所蔵調査依頼書の回答を問 覧依頼書とする) |
| 2003 | 平成 15 | 5,658 | 4,929 | 534 | 286 | 332 | 348 | 436 | 312 | 1,675 | 702 | 47 | 15 | NACSIS-ILL 文献複写等料金相殺サービスがスタート |
| 2004 | 平成 16 | 5,107 | 7,557 | 372 | 640 | 152 | 294 | 213 | 330 | 1,160 | 1,295 | 37 | 5 | |

| | | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館 | | | | | | 神戸三田キャンパス大学図書館分室 | | | | | | |
|------|-------|-----------------|-------|------|-----|------|-----|------------------|-----|------|----------|----------|----|---|
| 年度 | | 文献複写 | | 図書貸借 | | 閲覧利用 | | 所蔵調査 (照会) | | 文獻複写 | 図書 貸借 | 閲覧 利用 | 備考 | |
| | | 依頼 | 受付 | 依頼 | 受付 | 依頼 | 受付 | 依頼 | 受付 | 依頼 | 依頼 | 依頼 | | |
| 2005 | 平成 17 | 5,275 | 4,863 | 292 | 511 | 209 | 261 | 324 | 286 | 955 | 770 | 38 | 8 | 2005 年 4 月から文献複写料金改定 (35 円→50 円) 2006 年 1 月から 貸借図書の 一部分の複写が可能 2 月から Global ILL Framework 加入 |
| 2006 | 平成 18 | 5,235 | 3,888 | 442 | 440 | 150 | 225 | 177 | 264 | 905 | 556 | 18 | 5 | |
| 2007 | 平成 19 | 4,052 | 3,550 | 368 | 469 | 140 | 229 | 167 | 279 | 705 | 552 | 15 | 1 | 2007 年 5 月から国立国会図書館からの 貸借図書の複写可能 6 月 2 日から 15 日まで麻疹感染防止のため臨時休館、ILL 受付 停止 |
| 2008 | 平成 20 | 4,135 | 3,727 | 361 | 453 | 89 | 218 | 151 | 216 | 496 | 346 | 12 | 3 | |
| 2009 | 平成 21 | 3,726 | 3,015 | 436 | 380 | 75 | 169 | 102 | 196 | 442 | 367 | 24 | 1 | OPAC オンラインサービス (図書貸借依頼) 開始 |
| 2010 | 平成 22 | 3,417 | 2,705 | 448 | 318 | 54 | 147 | 92 | 152 | 368 | 299 | 12 | 3 | |
| 2011 | 平成 23 | 3,681 | 2,859 | 423 | 263 | 60 | 150 | 129 | 138 | 331 | 290 | 5 | 6 | |
| 2012 | 平成 24 | 3,390 | 2,410 | 464 | 258 | 72 | 111 | 131 | 131 | 326 | 276 | 51 | 0 | |

※西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の図書貸借および閲覧利用の受付には、神戸三田キャンパス大学図書館分室を含む。
※「－」は不明

(2) レファレンス質問件数 (上ヶ原)

| 年度 | | 書誌調査 | 所蔵調査 | 事項調査 | 利用案内等 | 電子メール |
|------|-------|------|------|------|-------|-------|
| 1995 | 平成 7 | 112 | 760 | 43 | 3,603 | |
| 1996 | 平成 8 | 99 | 880 | 63 | 4,741 | |
| 1997 | 平成 9 | 76 | 846 | 15 | 6,509 | |
| 1998 | 平成 10 | 57 | 869 | 40 | 6,267 | |
| 1999 | 平成 11 | 32 | 514 | 16 | 5,276 | 20 |
| 2000 | 平成 12 | 19 | 446 | 21 | 4,970 | 16 |
| 2001 | 平成 13 | 20 | 473 | 18 | 4,668 | 9 |
| 2002 | 平成 14 | 26 | 400 | 9 | 4,212 | 2 |
| 2003 | 平成 15 | 28 | 396 | 8 | 6,134 | 6 |
| 2004 | 平成 16 | 12 | 222 | 3 | 4,553 | 2 |
| 2005 | 平成 17 | 25 | 341 | 11 | 4,638 | 27 |
| 2006 | 平成 18 | 22 | 190 | 15 | 4,828 | 23 |
| 2007 | 平成 19 | 14 | 167 | 8 | 4,778 | 24 |
| 2008 | 平成 20 | 20 | 159 | 5 | 4,854 | 28 |
| 2009 | 平成 21 | 16 | 108 | 8 | 4,658 | 16 |
| 2010 | 平成 22 | 5 | 97 | 8 | 4,499 | 18 |
| 2011 | 平成 23 | 11 | 167 | 13 | 4,641 | 14 |
| 2012 | 平成 24 | 9 | 161 | 21 | 4,953 | 12 |

※1999 年度より大学院生、専任教員を対象に電子メールによるレファレンスサービスを開始
2010 年 11 月より学部学生にもサービスを拡大

(3) 利用統計

* 大学図書館保存の「図書館年次報告」の記録による。

①旧図書館時代 (1938 年度～1978 年度)

| 年度 | 開館 日数 | 閲覧 人数 | 図書 | | | | | | 圖書 貸出 冊数 | 雑誌 マイクロ 資料利 用件数 | 視聴覚 資料利 用件数 | |
|------------|----------|----------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|----------------|--------------------------|-------------------|--------|
| | | | 館内 | | | 館外 | | | | | | 合計 |
| | | | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | | | | |
| 1938 昭和 13 | 264 | 18,214 | 6,726 | 1,323 | 8,049 | 15,380 | 4,161 | 19,541 | 22,106 | 5,484 | 27,590 | 27,590 |
| 1939 昭和 14 | 264 | 15,481 | 4,849 | 913 | 5,762 | 12,855 | 3,787 | 16,642 | 17,704 | 4,700 | 22,404 | 22,404 |
| 1940 昭和 15 | 268 | 16,423 | 4,996 | 627 | 5,623 | 14,264 | 4,178 | 18,442 | 19,260 | 4,805 | 24,065 | 24,065 |
| 1941 昭和 16 | 272 | 16,434 | 7,807 | 704 | 8,511 | 19,280 | 3,827 | 23,107 | 27,087 | 4,531 | 31,618 | 31,618 |
| 1942 昭和 17 | 271 | 13,106 | 3,329 | 371 | 3,700 | 16,384 | 1,792 | 18,176 | 19,713 | 2,163 | 21,876 | 21,876 |
| 1943 昭和 18 | 275 | 7,459 | 1,582 | 173 | 1,755 | 6,746 | 1,159 | 7,905 | 8,328 | 1,332 | 9,660 | 9,660 |
| 1944 昭和 19 | 259 | 4,691 | 796 | 21 | 817 | 4,230 | 513 | 4,743 | 5,026 | 534 | 5,560 | 5,560 |
| 1945 昭和 20 | 241 | 1,933 | — | — | — | 2,780 | 252 | 3,032 | 2,780 | 252 | 3,032 | 3,032 |
| 1946 昭和 21 | 233 | 5,492 | 1,356 | 33 | 1,389 | 7,413 | 489 | 7,902 | 8,769 | 522 | 9,291 | 9,291 |
| 1947 昭和 22 | 263 | 11,091 | 5,052 | 685 | 5,737 | 5,159 | 1,294 | 6,453 | 10,211 | 1,979 | 12,190 | 12,190 |
| 1948 昭和 23 | 251 | 25,453 | 15,985 | 1,135 | 17,120 | 10,155 | 2,048 | 12,203 | 26,140 | 3,183 | 29,323 | 29,323 |
| 1949 昭和 24 | 271 | 39,192 | 26,551 | — | 26,551 | 12,641 | — | 12,641 | 39,192 | — | 39,192 | 39,192 |
| 1950 昭和 25 | 261 | 42,520 | 29,708 | 2,472 | 32,180 | 13,522 | 3,006 | 16,528 | 43,230 | 5,478 | 48,708 | 48,708 |
| 1951 昭和 26 | 274 | 40,695 | 28,595 | 2,488 | 31,083 | 13,688 | 2,823 | 16,511 | 42,283 | 5,311 | 47,594 | 47,594 |
| 1952 昭和 27 | 274 | 43,073 | 31,110 | 2,335 | 33,445 | 15,062 | 2,591 | 17,653 | 46,172 | 4,926 | 51,098 | 51,098 |
| 1953 昭和 28 | 272 | 36,082 | 27,448 | 2,223 | 29,671 | 10,229 | 2,566 | 12,795 | 37,677 | 4,789 | 42,466 | 42,466 |
| 1954 昭和 29 | 272 | 46,092 | 32,846 | 1,749 | 34,595 | 11,739 | 1,999 | 13,738 | 44,585 | 3,748 | 48,333 | 48,333 |
| 1955 昭和 30 | 278 | 40,936 | 32,690 | 1,617 | 34,307 | 9,567 | 1,843 | 11,410 | 42,257 | 3,460 | 45,717 | 45,717 |
| 1956 昭和 31 | 297 | 45,495 | 34,559 | 1,867 | 36,426 | 11,072 | 2,051 | 13,123 | 45,631 | 3,918 | 49,549 | 49,549 |
| 1957 昭和 32 | 292 | 45,468 | 34,902 | 2,405 | 37,307 | 12,540 | 2,911 | 15,451 | 47,442 | 5,316 | 52,758 | 52,758 |
| 1958 昭和 33 | 292 | 51,063 | 35,821 | 3,360 | 39,181 | 14,977 | 3,451 | 18,428 | 50,798 | 6,811 | 57,609 | 57,609 |
| 1959 昭和 34 | 288 | 53,705 | 35,635 | 2,999 | 38,634 | 17,983 | 2,945 | 20,928 | 53,618 | 5,944 | 59,562 | 59,562 |

マイクロフィルムリーダー設置

| 年度 | 開館 日数 | 閲覧 人数 | 図書 | | | | | | 図書 貸出 冊数 | 雑誌 マイクロ 資料 利用件 数 | 視聴覚 資料 利用 件数 | | |
|------------|----------|----------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|----------------|------------------------------|-----------------------|--------|--------|
| | | | 館内 | | | 館外 | | | | | | | |
| | | | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | | | | | |
| 1960 昭和 35 | 297 | 46,202 | 33,651 | 2,307 | 35,958 | 15,663 | 2,460 | 18,123 | 49,314 | 4,767 | 54,081 | 54,081 | — |
| 1961 昭和 36 | 293 | 47,613 | 35,328 | 2,288 | 37,616 | 17,475 | 2,765 | 20,240 | 52,803 | 5,053 | 57,856 | 57,856 | — |
| 1962 昭和 37 | 294 | 60,270 | 43,571 | 2,245 | 45,816 | 21,711 | 2,985 | 24,696 | 65,282 | 5,230 | 70,512 | 70,512 | — |
| 1963 昭和 38 | 283 | 60,234 | 46,671 | 1,757 | 48,428 | 20,374 | 2,117 | 22,491 | 67,045 | 3,874 | 70,919 | 70,919 | — |
| 1964 昭和 39 | 297 | 91,290 | 21,017 | 2,203 | 23,220 | 32,054 | 2,660 | 34,714 | 53,071 | 4,863 | 57,934 | 57,934 | — |
| 1965 昭和 40 | 293 | 130,874 | 24,884 | 2,532 | 27,416 | 44,038 | 2,995 | 47,033 | 68,922 | 5,527 | 74,449 | 74,449 | — |
| 1966 昭和 41 | 293 | 158,118 | 27,353 | 3,314 | 30,667 | 52,550 | 3,661 | 56,211 | 79,903 | 6,975 | 86,878 | 86,878 | — |
| 1967 昭和 42 | 292 | 187,065 | 29,635 | 3,634 | 33,269 | 61,593 | 4,282 | 65,875 | 91,228 | 7,916 | 99,144 | 99,144 | — |
| 1968 昭和 43 | 269 | 168,359 | 26,672 | 3,271 | 29,943 | 55,434 | 3,854 | 59,288 | 82,106 | 7,125 | 89,231 | 89,231 | — |
| 1969 昭和 44 | 185 | 145,435 | 24,390 | 3,068 | 27,458 | 48,026 | 3,396 | 51,422 | 72,416 | 6,464 | 78,880 | 78,880 | — |
| 1970 昭和 45 | 285 | 190,553 | 22,475 | 2,310 | 24,785 | 52,416 | 3,636 | 56,052 | 74,891 | 5,946 | 80,837 | 80,837 | — |
| 1971 昭和 46 | 280 | 181,118 | 18,799 | 2,459 | 21,258 | 47,569 | 3,130 | 50,699 | 66,368 | 5,589 | 71,957 | 71,957 | — |
| 1972 昭和 47 | 284 | 202,941 | 19,143 | 2,858 | 22,001 | 55,374 | 3,320 | 58,694 | 74,517 | 6,178 | 80,695 | 80,695 | — |
| 1973 昭和 48 | 278 | 165,565 | 16,725 | 2,933 | 19,658 | 47,904 | 3,390 | 51,294 | 64,629 | 6,323 | 70,952 | 70,952 | — |
| 1974 昭和 49 | 257 | 134,239 | 3,435 | 552 | 3,987 | 51,036 | 3,467 | 54,503 | 54,471 | 4,019 | 58,490 | 62,509 | 19 |
| 1975 昭和 50 | 278 | 153,944 | 4,517 | 713 | 5,230 | 66,268 | 4,490 | 70,758 | 70,785 | 5,203 | 75,988 | 81,191 | 96 |
| 1976 昭和 51 | 279 | 148,863 | 4,708 | 740 | 5,448 | 66,261 | 3,655 | 69,916 | 70,969 | 4,395 | 75,364 | 79,759 | 167 |
| 1977 昭和 52 | 277 | 145,089 | 5,531 | 893 | 6,424 | 67,907 | 3,967 | 71,874 | 73,438 | 4,860 | 78,298 | 83,158 | 179 |
| 1978 昭和 53 | 267 | 158,117 | 6,115 | 1,049 | 7,164 | 69,425 | 4,002 | 73,427 | 75,540 | 5,051 | 80,591 | 80,591 | 162 |
| | | | | | | | | | | | | | 11,574 |

封鎖による閉館日数を控除

封鎖および改革推進日(土)による閉館日数を控除

雑誌室開室
視聴覚室開室

封鎖による閉館日数を控除
封鎖および改定推進日(土)に
よる閉館日数を控除

雑誌室開室
視聴覚室開室

※「—」は不明

②旧図書館時代 (1979 年度～1994 年度)

| 年度 | 開館 日数 | 館外貸出冊数・館内閲覧冊数 | | | | | | | | | | 開架室 入室 者数 | 雑誌 館外貸出数 ／コピー館 内閲覧数 | 視聴覚 資料 利用件数 | |
|------|----------|---------------|--------|-------|--------|--------|--------|--------------|-------|--------|--------|-----------------|------------------------------|-------------------|--------|
| | | 館外貸出 | | | 館内閲覧 | | | 視聴覚 | | | | | | | |
| | | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | 室内 | 館外 | 計 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | 昭和 54 | 273 | 65,500 | 5,318 | 70,818 | 6,105 | 1,136 | 7,241 | 2,364 | 10,028 | 12,392 | 76,874 | 8,938 | 234 | 14,007 |
| 1980 | 昭和 55 | 270 | 64,988 | 5,184 | 70,172 | 6,806 | 1,385 | 8,191 | 3,246 | 14,720 | 17,966 | 69,879 | 10,134 | 196 | 20,636 |
| 1981 | 昭和 56 | 272 | 67,483 | 5,050 | 72,533 | 11,741 | 1,737 | 13,478 | 2,301 | 15,419 | 17,720 | 63,033 | 10,864 | 122 | 20,141 |
| 年度 | 開館 日数 | 館外貸出冊数・館内閲覧冊数 | | | | | | | | | | 開架室 入室 者数 | 雑誌 館外貸出数 ／コピー館 内閲覧数 | 視聴覚 資料 利用件数 | |
| | | 出納室 | | | 開架室 | | | | | | | | | | |
| | | 館外貸出 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | プラウジ ング図書 | 和 | 洋 | 計 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | 昭和 57 | 271 | 25,223 | 3,948 | 5,713 | 1,003 | 35,887 | 40,981 | 160 | 41,141 | 1,844 | 10,126 | 2,202 | 12,328 | 152 |
| 1983 | 昭和 58 | 272 | 25,738 | 4,476 | 6,865 | 1,197 | 38,276 | 41,562 | 167 | 41,729 | 1,771 | 7,944 | 2,224 | 10,168 | 117 |

| 年度 | 開館 日数 | 館外貸出冊数・館内閲覧冊数 | | | | | | | | | | 視聴覚 資料 利用件数 | マイクロ 資料 利用件数 | |
|------|----------|---------------|--------|-------|--------|---------|-----|---------|--------|-------|--------|-------------------|--------------------|-----|
| | | 出納室 | | | 開架室 | | | 雑誌室 | | | | | | |
| | | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | | | | |
| 1984 | 昭和 59 | 263 | 35,193 | 5,594 | 40,787 | 47,482 | 162 | 47,644 | 8,562 | 1,908 | 10,470 | 25,467 | 136 | 136 |
| 1985 | 昭和 60 | 267 | 34,100 | 6,747 | 40,847 | 45,419 | 163 | 45,582 | 9,336 | 2,471 | 11,807 | 25,664 | 205 | 205 |
| 1986 | 昭和 61 | 271 | 32,638 | 7,835 | 40,473 | 43,234 | 175 | 43,409 | 8,089 | 2,691 | 10,780 | 24,837 | 239 | 239 |
| 1987 | 昭和 62 | 272 | 30,945 | 6,530 | 37,475 | 48,615 | 189 | 48,804 | 8,221 | 2,619 | 10,840 | 25,459 | 302 | 302 |
| 1988 | 昭和 63 | 268 | 27,339 | 5,757 | 33,096 | 52,059 | 176 | 52,235 | 8,157 | 2,165 | 10,322 | 22,514 | 92 | 92 |
| 1989 | 平成元 | 270 | 26,197 | 5,061 | 31,258 | 63,600 | 229 | 63,829 | 8,156 | 2,256 | 10,412 | 21,832 | 101 | 101 |
| 1990 | 平成 2 | 265 | 29,653 | 5,383 | 35,036 | 62,015 | 200 | 62,215 | 8,183 | 1,826 | 10,009 | 21,743 | 80 | 80 |
| 1991 | 平成 3 | 268 | 27,181 | 5,985 | 33,166 | 70,408 | 187 | 70,595 | 8,979 | 1,963 | 10,942 | 21,781 | 85 | 85 |
| 1992 | 平成 4 | 272 | 27,673 | 6,028 | 33,701 | 84,959 | 241 | 85,200 | 10,342 | 2,139 | 12,481 | 24,668 | 91 | 91 |
| 1993 | 平成 5 | 271 | 29,199 | 6,709 | 35,908 | 102,775 | 334 | 103,109 | 10,934 | 2,540 | 13,474 | 26,511 | 131 | 131 |
| 1994 | 平成 6 | 261 | 28,136 | 6,396 | 34,532 | 111,529 | 326 | 111,855 | 10,540 | 2,437 | 12,977 | 24,034 | 122 | 122 |

※「－」は不明

③新大学図書館時代 (1995 年度～2012 年度)

| 年度 | 開館日数 | 入館者数 | 貸出冊数 | | | | | 視聴覚 資料 利用件数 | マイクロ 資料 利用件数 | 備考 | | |
|------------|------|---------|---------|--------|---------|-------|-------|-------------------|--------------------|--|--------|-----|
| | | | 図書 | | 雑誌 | | | | | | | |
| | | | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | | | | |
| 1995 平成 7 | 221 | | 146,382 | 6,590 | 152,972 | 7,305 | 1,697 | 9,002 | 22,149 | 10月 第1 期開館 | | |
| 1996 平成 8 | 242 | | 159,498 | 9,117 | 168,615 | 5,995 | 1,272 | 7,267 | 24,135 | 119 | | |
| 1997 平成 9 | 227 | 688,446 | 164,883 | 10,005 | 174,888 | 2,620 | | 2,620 | 17,494 | 4月 入館ゲート設置 10月 グランドオープン 雑誌の館外貸出は、4月～9月まで | | |
| 1998 平成 10 | 268 | 843,142 | 167,767 | 10,254 | 178,021 | | | | | | 17,649 | 123 |
| 1999 平成 11 | 267 | 895,679 | 179,421 | 9,812 | 189,233 | | | | | | 17,345 | 108 |
| 2000 平成 12 | 265 | 903,800 | 191,679 | 9,627 | 201,306 | | | | | | 18,026 | 134 |
| 2001 平成 13 | 270 | 869,569 | 179,911 | 10,334 | 190,245 | | | | | | 20,165 | 87 |
| 2002 平成 14 | 274 | 866,484 | 174,605 | 11,739 | 186,344 | | | | | | 21,192 | 90 |
| 2003 平成 15 | 282 | 859,416 | 176,494 | 10,891 | 187,385 | | | | | | 23,293 | 103 |
| 2004 平成 16 | 303 | 799,240 | 170,152 | 10,721 | 180,873 | | | | | | 19,094 | 147 |
| 2005 平成 17 | 306 | 798,859 | 165,046 | 10,006 | 175,052 | | | | | | 17,901 | 101 |
| 2006 平成 18 | 306 | 794,862 | 160,152 | 11,363 | 171,515 | | | | | | 16,907 | 138 |
| 2007 平成 19 | 289 | 764,187 | 156,950 | 8,713 | 165,663 | | | | | | 15,343 | 197 |
| 2008 平成 20 | 306 | 783,841 | 160,004 | 8,323 | 168,327 | | | | | | 15,157 | 255 |
| 2009 平成 21 | 303 | 773,454 | 161,130 | 7,846 | 168,976 | | | | | | 19,105 | 167 |
| 2010 平成 22 | 309 | 815,976 | 183,097 | 23,961 | 207,058 | | | | | | 20,156 | 119 |
| 2011 平成 23 | 313 | 826,136 | 187,968 | 36,316 | 224,284 | | | | | | 19,045 | 134 |
| 2012 平成 24 | 309 | 830,722 | 194,764 | 47,160 | 241,924 | | | | | | 19,327 | 127 |

④神戸三田キャンパス図書館分室 (1995年度～2012年度)

| 年 度 | 開館日数 | 入館者数 | 貸出冊数 | | | 視聴覚 資料 利用件数 | 備 考 |
|------|-------|------|---------|--------|---------|-------------------|----------------------|
| | | | 図 書 | | | | |
| | | | 和 | 洋 | 計 | | |
| 1995 | 平成 7 | 274 | 7,811 | 622 | 8,433 | 690 | 4 月 大学図書館分室開設 (Ⅱ号館) |
| 1996 | 平成 8 | 272 | 13,169 | 983 | 14,152 | 1,000 | |
| 1997 | 平成 9 | 273 | 19,288 | 969 | 20,257 | 1,370 | |
| 1998 | 平成 10 | 273 | 22,283 | 1,743 | 24,026 | 1,672 | |
| 1999 | 平成 11 | 273 | 23,247 | 1,845 | 25,092 | 2,592 | |
| 2000 | 平成 12 | 273 | 23,208 | 1,800 | 25,008 | 3,160 | |
| 2001 | 平成 13 | 272 | 28,894 | 1,940 | 30,834 | 1,848 | 9 月 Ⅲ号館に移転 (入館ゲート設置) |
| 2002 | 平成 14 | 275 | 34,166 | 3,313 | 37,479 | 1,614 | |
| 2003 | 平成 15 | 282 | 38,664 | 4,557 | 43,221 | 1,440 | |
| 2004 | 平成 16 | 306 | 40,691 | 6,550 | 47,241 | 1,873 | |
| 2005 | 平成 17 | 307 | 37,009 | 6,485 | 43,494 | 1,407 | |
| 2006 | 平成 18 | 306 | 38,790 | 9,435 | 48,225 | 1,094 | |
| 2007 | 平成 19 | 290 | 30,871 | 9,718 | 40,589 | 670 | |
| 2008 | 平成 20 | 307 | 310,858 | 34,847 | 345,014 | 1,218 | 3 月 Ⅵ号館に移転 |
| 2009 | 平成 21 | 302 | 290,296 | 39,385 | 329,681 | 1,956 | |
| 2010 | 平成 22 | 310 | 295,426 | 43,169 | 338,595 | 2,651 | |
| 2011 | 平成 23 | 314 | 295,699 | 44,400 | 340,099 | 2,364 | |
| 2012 | 平成 24 | 309 | 320,466 | 47,552 | 368,018 | 2,275 | |

※神戸三田キャンパス図書館分室では、開設当初から雑誌の館外貸出を行っていないため、利用統計の項目からはずした。
 ※神戸三田キャンパス図書館分室では、マイクロフィルムの利用がほとんどないため、利用統計の項目からはずした。

8 刊行物

冊子目録一覧

| 年 | 冊子名称 | 備考 |
|-----------------|---|---|
| 不明 | 私立関西学院附属図書館図書目録（分類目録之一部 100、300、400、800） | 筆書、英字タイプ |
| 不明 | 私立関西学院蔵書目録 | 筆書、英字タイプ 奥付なし 大型 |
| 1916 (大正 5) | 巡回文庫図書目録一覧（附貸出規則） | 印刷物、洋書目録 16 p.、和書目録 25 p.、和洋 512 冊を収録。B 6 サイズ |
| 1925 (大正 14) | 私立関西学院蔵書目録（帳面） | 表題紙は筆書、英字タイプ |
| 1929 (昭和 4) | 文献目録（関西学院高等商業學部 商學會） | |
| 1931 (昭和 6) | 文献目録（関西学院文學會） | |
| 1933 (昭和 8) | 図書目録（関西学院） | |
| 1937 (昭和 12) | Catalogue of an exhibition of the English Bible | 英文小冊子 |
| 1957 (昭和 32) | 増加図書目録 | 昭和 36 年度に中止 |
| 1962 (昭和 37) | 一般教育科目参考図書目録 | 増補版を 1965 年に発行 |
| 1965 (昭和 40) | 丹羽記念文庫目録 | 特殊文庫目録第 1 輯 |
| 1967 (昭和 42) | 佐藤清文庫目録 | 特殊文庫目録第 2 輯 |
| 1971 (昭和 46) | 関西学院大学図書館雑誌目録 | タイプ打ちの暫定版 |
| 1972 (昭和 47) | 柴田文庫目録 | 特殊文庫目録第 3 輯 |
| 1974 (昭和 49) | 栗野文庫目録 | 特殊文庫目録第 4 輯 |
| 1974 (昭和 49) | 関西学院大学所蔵雑誌総合目録 1972（昭和 47）年 10 月現在 | |
| 1977 (昭和 52) | 視聴覚室資料目録 1977 年 3 月末現在 | 増補版、改訂版を 1986 年まで発行 |
| 1980 (昭和 55) | 関西学院大学図書館蔵書目録 宗教篇洋書 1978 年 3 月現在 | |

| 年 | 冊子名称 | 備考 |
|-----------------|---|---|
| 1983 (昭和 58) | 関西学院大学図書館所蔵雑誌目録 1982 (昭和 52) 年 9 月末現在 | 追録を 1987 年 3 月まで毎年発行 |
| 1984 (昭和 59) | 関西学院大学図書館所蔵史料目録第 1 輯 | |
| 1985 (昭和 60) | ロック、スミス、ミル父子著作文庫目録 | 特別文庫目録第 5 輯 |
| 1986 (昭和 61) | 関西学院大学図書館蔵書目録 宗教篇洋書 1978-1984 年度 | |
| 1988 (昭和 63) | 関西学院大学図書館所蔵史料目録第 2 輯 | |
| 1988 (昭和 63) | 関西学院大学図書館所蔵雑誌目録 1988 (昭和 63) 年 3 月末現在 | 追録を 1989 年 3 月、1990 年 3 月に発行 |
| 1992 (平成 4) | 特別文庫目録一覧第 1 分冊 (丹羽、佐藤、柴田、粟野、ロック、スミス、ミル) | |
| 1992 (平成 4) | 関西学院大学図書館所蔵雑誌目録 1991 (平成 3) 年 11 月末現在 | 追録を 1993 年 3 月、1996 年 3 月に発行 |
| 1993 (平成 5) | 特別文庫目録一覧第 2 分冊 (赤井、堀、小宮、高坂、室井、玉林、恒藤、梅田、山本) | |
| 1997 (平成 9) | トマス・ホップズ著作文庫目録 | 関西学院大学新大学図書館完成記念特別コレクション目録 |
| 1997 (平成 9) | イギリス社会政策コレクション目録 | 関西学院大学新大学図書館完成記念特別コレクション目録 |
| 1997 (平成 9) | イギリス社会科学古典資料コレクション目録 | 関西学院大学新大学図書館完成記念特別コレクション目録 |
| 1997 (平成 9) | 関西学院大学新大学図書館完成記念 特別コレクション目録 | 特別文庫目録第 6 輯 トマス・ホップズ著作文庫目録 イギリス社会政策コレクション目録 イギリス社会科学古典資料コレクション目録 以上、3 目録の合冊 |
| 1998 (平成 10) | 関西学院大学図書館所蔵史料目録第 3 輯 | |
| 2001 (平成 13) | スコットランド啓蒙コレクション目録 | 特別文庫目録第 7 輯 |
| 2002 (平成 14) | 宗教改革・教会法コレクション目録 | 特別文庫目録第 8 輯 |
| 2002 (平成 14) | 下村寅太郎蔵書目録 | |

9 展示

(1) 特別展示および学術資料講演会

第1回「灘五郷・酒造りの歴史－近世灘酒造業の発展－」

特別展示

期間：1992年10月19日（月）～21日（水）

会場：大学図書館大会議室

学術資料講演会

日時：1992年10月20日（火）13:10～14:40

会場：学生会館新館 会議室9

講師：経済学部教授 柚木 学

第2回「シェイクスピア本文の系譜－著名な版本をめぐって－」

特別展示

期間：1993年6月1日（火）～3日（木）

会場：大学図書館第1閲覧室

学術資料講演会

日時：1993年6月2日（水）13:10～14:40

会場：学生会館新館 会議室9

講師：文学部教授 中條和夫

第3回「経済学の成立」

特別展示「アダム・スミス著作文庫を中心に」

展示資料紹介 経済学部教授 田中敏弘

期間：1993年10月26日（火）～28日（木）

会場：大学図書館第1閲覧室

学術資料講演会

講演：「経済学の成立－アダム・スミスとジェイムズ・ステュアート－」

日時：1993年10月27日（水）13:10～14:40

会場：学生会館新館 会議室9

講師：立教大学名誉教授 小林 昇

（アダム・スミスの会会長 日本学士院会員）

第4回「近代詩の展開」

特別展示「丹羽記念文庫から」

展示資料紹介「丹羽記念文庫について」文学部教授 中島洋一

期間：1994 年 5 月 31 日（火）～6 月 2 日（木）

会場：大学図書館第 1 閲覧室

学術資料講演会

講演：「近代詩の展開－『明星』を中心として－」

日時：1994 年 6 月 1 日（水）13:10～14:40

会場：学生会館新館 会議室 9

講師：文学部教授 中島洋一

第 5 回「経済学の発展」（関西学院大学創設 60 周年記念特別展示・学術資料講演会）

特別展示「ジェイムズおよびジョン・ステュアート・ミル著作文庫から」

展示資料紹介「ジェイムズおよびジョン・ステュアート・ミル著作文庫について」

経済学部教授 田中敏弘

展示資料解題「『ミル自伝』による解題」経済学部教授 井上琢智

期間：1994 年 10 月 18 日（火）～20 日（木）

会場：大学図書館第 1 閲覧室

学術資料講演会

講演：「経済学の発展－ミル父子を中心として－」

日時：1994 年 10 月 19 日（水）13:10～14:40

会場：学生会館新館 会議室 9

講師：元甲南大学学長 杉原四郎

（甲南大学および関西大学名誉教授）

第 6 回「近代イギリス社会－思想と文化－」

特別展示「開館記念コレクションを中心に」

開館記念コレクション紹介

トマス・ホップズ著作文庫 法学部教授 岡本仁宏

イギリス社会政策コレクション 経済学部教授 池田 信

イギリス社会科学古典資料コレクション 経済学部教授 篠原 久

展示資料解説 「開館記念コレクションを中心に」

経済学部教授 篠原 久

経済学部教授 竹本 洋

期間：1997 年 10 月 29 日（水）～11 月 3 日（月）

会場：大学図書館特別閲覧室

学術資料講演会

講演：「経済学成立期の諸相－アダム・スミスとその最初期批判考－」

日時：1997 年 10 月 29 日（水）13:10～14:20

会場：大学図書館ホール

講師：静岡大学および東京経済大学名誉教授 杉山忠平

一般展示「近代イギリスの出版の魅力」

期間：1997 年 10 月 1 日（水）～11 月 3 日（月）

会場：大学図書館エントランスホール

第 7 回「ホッブズと時代－17 世紀から現代まで－」

特別展示「トマス・ホッブズ著作文庫から」

「トマス・ホッブズ著作文庫について」法学部教授 岡本仁宏

展示資料解説 経済学部教授 篠原 久

期間：1998 年 10 月 1 日（木）～11 月 20 日（金）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケース

学術資料講演会

講演：「ホッブズのアポリアと generosity」

日時：1998 年 11 月 5 日（木）13:10～14:30

会場：大学図書館ホール

講師：法学部教授 岡本仁宏

一般展示について

ホッブズの時代とその背景

ホッブズと同時代の人々

自然科学とホッブズ

リヴァイアサンの図像学と聖書、神話

日本におけるホッブズの研究史

第 8 回「明治・大正の文学者たち」

特別展示

「八重津家旧蔵資料について」光華女子大学教授 清水康次

「丹羽記念文庫について」関西学院大学名誉教授 中島洋一

展示資料解説 光華女子大学教授 清水康次

期間：1999 年 10 月 1 日（金）～11 月 30 日（火）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケース

学術資料講演会

講演：「書簡資料に見える文学者たち－角田浩々歌客・真山青果・芥川龍之介－」

日時：1999 年 11 月 15 日（月）13:10～14:30

会場：大学図書館ホール

講師：光華女子大学教授 清水康次

第 9 回「『明治政治史』関係書翰－『真鍋由郎名誉中学部長旧蔵書翰』から－」

特別展示

期間：2000 年 11 月 1 日（水）～11 月 30 日（木）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケース

学術資料講演会

講演：「明治政治史の新解釈－関西学院大学図書館所蔵『安田書翰』をふまえて－」

日時：2000年11月17日（金）13:10～14:30

会場：大学図書館ホール

講師：東京大学史料編纂所教授 宮地正人

第10回「経済思想家の手稿と自筆書簡」

特別展示「ジェイムズ・ステュアート、アダム・スミス、ジェイムズおよびジョン・ステュアート・ミル等の経済思想家の著作、自筆書簡、翻訳書および研究書」

展示資料解説 経済学部教授 井上琢智、経済学部教授 篠原 久、

経済学部教授 竹本 洋、名誉教授 田中敏弘

期間：2001年9月下旬～11月下旬

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース

学術資料講演会

講演：「関西学院大学図書館所蔵資料の特徴：その発展のために－特別コレクション・自筆書簡・手稿・その他貴重資料を中心に－」

日時：2001年11月6日（火）13:10～14:30

会場：大学図書館ホール

講師：名誉教授 田中敏弘

第11回「晶子と安喜子－与謝野晶子と同時代の歌人たち－」

特別展示

人物解説 与謝野晶子 文学部教授 森田雅也、

文学研究科研究員 内倉尚嗣、中村清治

資料解説1 文学部教授 細川正義、細川研究室の大学院生諸氏

資料解説2、3 光華女子大学教授 清水康次

人物解説 丹羽安喜子・丹羽俊彦

元大谷女子大学教授 入江春行

資料解説「資料から見る与謝野晶子と丹羽安喜子の接点」

関西学院大学図書館

期間：2002年10月1日（火）～11月下旬

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース

学術資料講演会

講演：「晶子に師事した安喜子－同時代の歌人たち－」

日時：2002年11月18日（月）14:50～16:20

会場：大学図書館ホール

講師：名誉教授 中島洋一

第12回「近代への扉：関西学院大学図書館所蔵資料展」

展示資料解説

「近代短歌－与謝野晶子を中心として」

経済学部教授 井上琢智、元大谷女子大学教授 入江春行、
光華女子大学教授 清水康次、名誉教授 中島洋一、文学部教授 森田雅也、
文学部非常勤講師 内倉尚嗣、文学研究科研究員 中村清治

「書物としての聖書」

文学部教授 田淵 結

「経済学と会計学の世界」

経済学部教授 篠原 久、経済学部教授 竹本 洋、
経済学部教授 井上琢智、大阪経済大学教授 渡邊 泉

「古文書にみる阪神地域の産業」

図書館職員 井戸田史子

「ヴォーリズと関西学院」

文学部教授 田淵 結

期間：2003年9月21日（日）～27日（土）

会場：丸善・東京日本橋店4F ギャラリー A

ライブラリー・トーク

講演①：「顔の見える大学図書館をめざして－特別文庫を中心に－」

日時：2003年9月21日（日）14:00～14:30

講師：図書館長・経済学部教授 井上琢智

講演②：「キリスト教が拓いた日本の近代文化」

日時：2003年9月23日（火）14:00～14:30

講師：大学宗教主事・文学部教授 田淵 結

講演③：「関西学院の創立から未来へ」

日時：2003年9月26日（金）18:30～19:00

講師：学長・商学部教授 平松一夫

会場：丸善・東京日本橋店4F ギャラリー A

第13回「創立者ウォルター・R・ランバスのたどった足跡－生誕150周年を記念して－」

特別展示

期間：2004年10月8日（金）～11月27日（土）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース

学術資料講演会

講演：「ウォルター・R・ランバスの瀬戸内伝道圏構想」

日時：2004年11月18日（木）13:30～15:00

会場：大学図書館ホール
講師：神学部教授 神田健次
*学院史編纂室と共催

第14回「史料が語る城の魅力」

特別展示

期間：2005年10月7日（金）～11月30日（水）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース

学術資料講演会

講演：「徳川時代の大坂城再築工事をめぐって－甲山石切丁場と城内巨石の紹介を中心に－」

日時：2005年11月9日（水）15:10～16:40

会場：大学図書館ホール

講師：大阪城天守閣館長 中村博司

第15回「上方文化と西鶴」

特別展示「西鶴」

期間：2006年10月23日（月）～11月30日（木）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース

学術資料講演会

講演：「上方文化と西鶴～関西学院大学図書館所蔵西鶴本書誌について～」

日時：2006年11月17日（金）13:30～15:00

会場：大学図書館ホール

講師：文学部教授 森田雅也

第16回「語る写真－『ライフ』誌と写真ジャーナリズム」

特別展示「『ライフ』誌と写真ジャーナリズム」

期間：2007年10月29日（月）～12月4日（火）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース

学術資料講演会

講演：「語る写真－『ライフ』誌と写真ジャーナリズム」

日時：2007年11月9日（金）13:30～15:00

会場：大学図書館ホール

講師：京都精華大学デザイン学部専任講師 佐藤守弘

第17回「男読み源氏物語－光源氏の生涯を読む」

特別展示「～源氏物語千年紀～源氏物語と王朝文学」

期間：2008年10月31日（金）～11月28日（金）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース
学術資料講演会
講演：「男読み源氏物語－光源氏の生涯を読む」
日時：2008 年 11 月 13 日（木）13:30～15:00
会場：大学図書館ホール
講師：文学部教授 高木和子

第 18 回「『兵庫県漁具図解』から見えてくるもの」

特別展示「『兵庫県漁具図解』に見る伝統的漁法」
期間：2009 年 10 月 30 日（金）～11 月 5 日（木）、11 月 10 日（火）～12 月 4 日（金）
会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース
学術資料講演会
講演：「『兵庫県漁具図解』から見えてくるもの」
日時：2009 年 11 月 13 日（金）13:30～15:00
会場：大学図書館ホール
講師：文学部教授 田和正孝

第 19 回「民藝運動と関西学院－雑誌『工藝』を中心として－」

特別展示
期間：2010 年 10 月 29 日（金）～12 月 3 日（金）
会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース
学術資料講演会
講演：「民藝運動と関西学院－雑誌『工藝』を中心として－」
日時：2010 年 11 月 11 日（木）13:30～15:00
会場：大学図書館ホール
講師：神学部教授 神田健次

第 20 回「カレンダーから世界を見る」

特別展示「暦（こよみ）と文化を考える」
期間：2011 年 10 月 28 日（金）～11 月 22 日（火）
会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース
学術資料講演会
講演：「カレンダーから世界を見る」
日時：2011 年 11 月 18 日（金）13:30～15:00
会場：大学図書館ホール
講師：日本カレンダー暦文化振興協会理事長・国立民族学博物館教授 中牧弘允

第21回「キェルケゴール生誕200年 “ただ1度の人生・・・”」

特別展示「キェルケゴール生誕200年」

期間：2012年11月1日（木）～12月5日（水）

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース

学術資料講演会

講演：「キェルケゴール生誕200年 “ただ1度の人生・・・”」

日時：2012年11月30日（金）13:30～15:00

会場：大学図書館ホール

講師：名誉教授 橋本 淳

2001年度春季大学図書館展示企画・資料講演会 共催：関西学院宗教活動委員会
展示「関西学院と聖書～Mastery for Service の根底にあるもの～」

期間：2001年3月24日（土）～ 5月下旬

会場：大学図書館特別閲覧室展示ケースおよびエントランス展示ケース

資料講演会Ⅰ

講演：「建学の精神と聖書：ウェスレー、ランバース、ベーツ」

日時：2001年4月27日（金）14:50～16:20

会場：大学図書館ホール

講師：院長 山内一郎

資料講演会Ⅱ

講演：「聖書はとてもミステリアス」

日時：2001年5月10日（木）10:50～12:20

会場：大学図書館ホール

講師：文学部教授・大学宗教主事 田淵 結

(2) 展示企画一覧

| 開催時期 | | テーマ・内容 | 備考 |
|-----------------|-------------------------|--|-------------------|
| 1939 (昭和 14) | 秋 | 学生の利用促進と勉学奨励を企図し資料の展示と講演会の開催（読書週間講演会と辞書類の展示） | 読書週間に関連させた展示を実施 |
| 1940 (昭和 15) | 11 月 | 展示、講演会（「教養良書百選」と「学生生活と読書」） | |
| 1941 (昭和 16) | 11 月 | 展示、講演会（古事記、日本書紀の古写本の展示、「古典の精神」の講演） | |
| 1942 (昭和 17) | 11 月 | 読書週間行事として講演会および作品展を開催 | |
| 1947 (昭和 22) | 11 月 | 近代歌書展示会（丹羽安喜子氏所蔵） | 戦後初めての展示会 |
| 1961 (昭和 36) | 11 月 | 丹羽蔵書の中の歌書の展示（記念祭参加行事として） | |
| 1979 (昭和 54) | 9 月 | ライシャワー博士関係図書を一括展示 | ランパス・レクチャー始まる |
| | 11 月 | グーテンベルク「42 行聖書」復刻版の展示 | |
| 1980 (昭和 55) | 4 月 28 日～ 5 月 27 日 | 「死海写本」講談社発行（復刻版卷子本全 3 巻）を購入し、正面玄関ホールに公開展示 | |
| | | 丹羽記念文庫から 5 点を選び展示。「桐の花」、「小扇」、「海の声」、「毒草」、「明星辰歳第九号」 | |
| | 5 月 | ランパスレクチャーのために Ezra F. Vogel 博士の著書及び関係書を館内に展示 | ランパス・レクチャーとのタイアップ |
| | 11 月中旬～ 12 月末 | 大学図書館所蔵の珍しい貴重な図書 | |
| 1981 (昭和 56) | 9 月 25 日～ 10 月 30 日 | 関西学院創立者 W. R. ランパス博士関係図書 | |
| | 6 月 | ランパスレクチャーの関係図書の展示（ペラー博士の関係図書を展示） | ランパス・レクチャーとのタイアップ |
| | 12 月 14 日～ 12 月 25 日 | クリスマスを迎えて－聖書と讃美歌－（聖書、讃美歌、絵入り聖書の原画集（小磯良平）を展示） | |
| 1982 (昭和 57) | 5 月 22 日～ 5 月 31 日 | 文学作品に描かれた「関西学院」（関西学院－その文学的風土） | |
| | 5 月 | ランパスレクチャーの講師関係図書の展示 第 4 回ランパス記念講演に関連して、講師のスジャトモコ博士の著書・論文を開架室に展示 | ランパス・レクチャーとのタイアップ |
| | 11 月～12 月 | 古典に親しむ－『源氏物語』を読む－ | |
| 1983 (昭和 58) | 4 月 7 日～ 5 月 31 日 | 古典に親しむ－「芭蕉」を読む－ | |
| | 6 月～7 月 | 学内逐次刊行物展観－学術研究雑誌を中心に－ | |
| | 12 月 | ランパス・レクチャーの講師関係図書の展示 第 5 回ランパス記念講座に関連して、講師のウイler キンソン氏の著書、論文を開架室に展示 | ランパス・レクチャーとのタイアップ |
| | 9 月 8 日～ 10 月 31 日 | 郷土を知る（Ⅰ）－地方史誌の書誌－ | |
| | 11 月 4 日～ 12 月 24 日 | 郷土を知る（Ⅱ）－古版地誌－ | |

| 開催時期 | テーマ・内容 | 備考 |
|-----------------|-------------------------|---|
| 1984 (昭和 59) | 1 月 9 日～ 2 月 28 日 | 歳時記を読む |
| | 4 月 16 日～ 5 月 31 日 | 学院出身作家の著作 |
| | 6 月 20 日～ 8 月 31 日 | 図書展観「阪口文庫と山の本」 |
| | 9 月 19 日～ 10 月 31 日 | 図書展観「関西学院の歴史を読む」 |
| | 6 月 | ランバス・レクチャーの講師関係図書の展示 第 6 回ランバス記念講座に関連して、H. バッシン氏の著書を開架室に展示 |
| | 11 月 12 日～ 12 月 21 日 | 図書展観「聖書の歴史」 |
| 1985 (昭和 60) | 1 月 21 日～ 2 月 28 日 | 図書展観「丹羽記念文庫と近代詩歌」 |
| | 5 月 8 日～ 6 月 29 日 | 図書展観「図書館利用の手引き－蔵書目録－」 |
| | 11 月 1 日～ 30 日 | ビザンティン帝国史関係資料 |
| 1986 (昭和 61) | 5 月 1 日～ 6 月 27 日 | 図書展観「大学図書館所蔵蔵書目録集覧」 |
| 1987 (昭和 62) | 4 月 | 学内刊行物 |
| | 5 月 | 姉妹校写真パネルと出版物 |
| | 6 月 1 日～ 7 月上旬 | 海外見聞記 幕末から明治 |
| | 7 月中旬～ 10 月初旬 | 学院の歴史をふりかえる |
| | 10 月 | 明治の政治家たち－その伝記－ |
| | 11 月下旬～ 12 月下旬 | 名画に見る新約聖書－12 のモチーフ |
| 1988 (昭和 63) | 4 月上旬～ 5 月上旬 | 日本の百科事典の歩み |
| | 6 月 1 日～ 7 月 22 日 | 中央アジア踏査記録 1885～1935 |
| | 9 月 26 日～ 10 月 15 日 | 資料で見る学院の歴史 |
| | 11 月 14 日～ 12 月 3 日 | 関西学院－人とその著作を中心に－(1) |
| | 12 月 5 日～ 24 日 | 聖書と讃美歌 |

| 開催時期 | | テーマ・内容 | 備考 | |
|---------------|---------------|----------------------------------|--|--------------------|
| 1989 (平成元) | 4月～5月 | 学内刊行物 | 梅田阪急百貨店で開催 | |
| | 6月5日～7月22日 | 関西学院－人と文芸著作 | | |
| | 6月9日～14日 | オール関西学院グラフィティに貴重図書14点とブロンズ像3体を展示 | | |
| | 9月25日～10月14日 | 古典に親しむ－芭蕉「奥の細道」へのいざない－ | | |
| | 11月2日～30日 | 関西学院の歴史を読む | | |
| 1990 (平成2) | 4月 | 学内刊行物 | 展示業務が運営課担当になる | |
| | 7月1日～9月30日 | 夏休みに読みたいこの1冊 | | |
| | 10月1日～11月30日 | 秋の夜長は王朝文学で－影印・古文・現代語訳－ | | |
| | 12月 | 聖書－ことばとかたち－ | | |
| 1991 (平成3) | 1月下旬～3月上旬 | 論文・レポートを作成するために | | |
| | 5月中旬～7月下旬 | 大学史について | | |
| | 10月上旬～11月下旬 | 本学名誉教授の著作 | | |
| | 12月 | クリスマスを迎えて－聖書、讃美歌、そして聖画 | | |
| 1992 (平成4) | 4月上旬～5月下旬 | 図書館の刊行資料（目録・分類表・ライブラリーガイド・時計台など） | 図書館広報業務がチーム制になる | |
| | 6月～7月 | 話し方のいろいろ | | |
| | 7月 | 進学説明会当日の特別展示「歴史から見た聖書の数々」 | 展示企画の方針策定 | |
| | 10月～11月 | 関西学院出身の主要な文芸家 | | |
| | 10月19日～21日 | 灘五郷・酒造りの歴史－近世灘酒造業の発展－ | | 第1回学術資料講演会、特別展示と関連 |
| | 12月～1993年1月 | クリスマス、新年を祝して－目でみる聖書の世界－ | | |
| 1993 (平成5) | 4月～5月 | 西宮の文学散歩 | 第2回学術資料講演会、特別展示と関連 第3回学術資料講演会、特別展示と関連 | |
| | 6月～7月 | シェークスピアの世界 | | |
| | 10月～11月 | 経済学の生誕 | | |
| | 12月1日～1994年1月 | 名画に見る新約聖書－12のモチーフ－ | | |

| 開催時期 | | テーマ・内容 | 備考 |
|-----------------|------------------------|--|---------------------------|
| 1994 (平成 6) | 4 月～ 5 月下旬 | 「情報」を知る －情報を探す、入手する、利用する－ | |
| | 5 月下旬～ 7 月下旬 | 近代短歌の系譜 | 第 4 回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 10 月 18 日～ 20 日 | 経済学の発展 | 第 5 回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 11 月 2 日～ 4 日 | 大学創設 60 周年記念行事「関西学院と大学－大学 60 年の歩み」 | |
| | 12 月上旬～ 1995 年 1 月 | 近代以降の日本文学とキリスト教 | |
| | | | |
| 1995 (平成 7) | 4 月中旬～ 7 月中旬 | 関西学院大学教員の最近の著書から（第 1 期：人文 科学・自然科学、第 2 期：社会科学） | |
| 1997 (平成 9) | 10 月 1 日～ 11 月 3 日 | 近代イギリスの出版の魅力 | 新大学図書館エント ランスでの展示開始 |
| | 10 月 29 日～ 11 月 3 日 | 開館記念コレクションを中心に | 第 6 回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| 1998 (平成 10) | 春季 | 関西学院 | 第 7 回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 幕末維新の日本－関西学院創立前夜－ | |
| | 秋季 | ポップズとその時代－17 世紀から現代まで－ | |
| | 冬季 | 「人権の 21 世紀」への架け橋として | |
| 1999 (平成 11) | 春季 | 関西学院と阪神地域 | 第 8 回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 世紀末の世界 | |
| | 秋季 | 明治・大正の文学者たち | |
| | 冬季 | ミレニアムと新世紀－聖書の姿－ | |
| 2000 (平成 12) | 春季 | 関西学院の姿－関西学院の歴史、卒業生の著作、大 学の研究成果－ | 第 9 回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 灘地域と酒造－古文書史料と産業・歴史・文化－ | |
| | 秋季 | 明治維新期における日本の社会 | |
| | 冬季 | キリスト教と学校創設 | |
| 2001 (平成 13) | 春季 | 関西学院と聖書 －Mastery for Service の根底にあるもの－ | 第 10 回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 印刷技術と書物の発展－粘土から紙まで－ | |
| | 秋季 | 経済思想家たちの手稿と自筆書簡 | |
| | 冬季 | クリスマスと新年 | |
| 2002 (平成 14) | 春季 | キャンパスの風景 | 第 11 回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 日本映画と監督たち | |
| | 秋季 | 晶子と安喜子－与謝野晶子と同時代の歌人たち－ | |
| | 冬季 | 真の平和と博愛のために －ノーベル賞とノーベル賞受賞者－ | |

| 開催時期 | | テーマ・内容 | 備考 |
|-----------------|----|--|-------------------------|
| 2003 (平成 15) | 春季 | 私が選ぶ学生時代に読みたい 1 冊 | 第12回特別展示 |
| | 夏季 | 関学の基礎知識 －関学生なら知っておきたいキーワード－ | |
| | 秋季 | 近代への扉：関西学院大学図書館所蔵資料展 | |
| | 冬季 | ジョン・ウエスレー生誕三百年 －メソヂスト、関西学院の根底にあるもの－ | |
| 2004 (平成 16) | 春季 | 竹中郁と坂本遼 | 第13回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 私が書いたこの 1 冊 | |
| | 秋季 | 創立者ウオルター・R・ランバスのたどった足跡 －生誕 150 周年を記念して－ | |
| | 冬季 | 三浦綾子－その生涯と作品－ | |
| 2005 (平成 17) | 春季 | 阪神間の文学作品 | 第14回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 使えるデータベース | |
| | 秋季 | 史料が語る城の魅力 | |
| | 冬季 | あの日を忘れない －阪神・淡路大震災関連図書資料より－ | |
| 2006 (平成 18) | 春季 | 早わかり図書館 | 第15回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 世界を歩く | |
| | 秋季 | 西鶴 | |
| | 冬季 | 井上靖の世界 | |
| 2007 (平成 19) | 春季 | レファレンス・カウンターに行こう！ | 第16回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | We Love CS! | |
| | 秋季 | 「ライフ」誌と写真ジャーナリズム | |
| | 冬季 | どさつと近畿 | |
| 2008 (平成 20) | 春季 | 私たちの身近な動物たち | 第17回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 世界遺産－The World Heritage－ | |
| | 秋季 | ～源氏物語千年紀～源氏物語と王朝文学 | |
| | 冬季 | 純文学再考 | |
| 2009 (平成 21) | 春季 | 関学生なら知っておきたいキーワード | 第18回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 姫路城 | |
| | 秋季 | 魚をとる～人々の知恵と工夫～ | |
| | 冬季 | 冬季オリンピック | |
| 2010 (平成 22) | 春季 | 関西学院の出版物－研究紀要を中心として－ | 第19回学術資料講演 会、特別展示と関連 |
| | 夏季 | 日本万国博とその時代 | |
| | 秋季 | 民藝運動とその展開 | |
| | 冬季 | 歌舞伎を愉しむ | |

| 開催時期 | | テーマ・内容 | 備考 |
|-----------------|----|------------------------------|---------------------|
| 2011 (平成 23) | 春季 | 2F ラウンジコーナーが新しくなりました | |
| | 夏季 | 身近な駅の今・昔 | |
| | 秋季 | カレンダーから世界を見る | 第20回学術資料講演会、特別展示と関連 |
| | 冬季 | 平清盛と兵庫県 | |
| 2012 (平成 24) | 春季 | ようこそ大学図書館へ | |
| | 夏季 | ロンドンオリンピック | |
| | 秋季 | セーレン・キェルケゴールの生涯 ーただ1度の人生ー | 第21回学術資料講演会、特別展示と関連 |
| | 冬季 | 関西創業の百貨店～その発展と特色～ | |

10 システム

(1) 図書ブロック基本構想書（抜粋）（1985 年 10 月）

関西学院事務トータルシステムを構築するため、設計段階の要件定義作業計画に従って作業を行ない基本構想書にまとめた。

なお、これは現時点における内容を示したものであり、詳細については外部設計局面の作業ステップを経るに従って明確にする。

| | |
|-------|---------|
| リーダー | 尼 子 卓 司 |
| チーフ | 北 山 雅 博 |
| サブチーフ | 重 松 正 己 |
| メンバー | 池 田 裕 子 |
| | 長 尾 文 雄 |
| | 徳 田 真 二 |
| | 戸 田 隆 |

1. システム開発の目的

新システムの必要性・背景

図書業務の目的は、本学の特色ある教育・研究・学習活動を支え、その質的発展に資するため、学術資料を効率的に収集、整理し、迅速、的確に利用者に提供することである。この目的達成のためには、図書館業務が全学的にその機能を十分に果たさなければならぬであろう。

特に、近年の著しい傾向として、学術情報の激増、研究分野および教職員、学生等の利用者ニーズの高質化、多様化によって図書業務への要求は量質ともに拡大化している。さらに、文部省が推進している『学術情報システム』が一部稼働し、近い将来このシステムへの参加が本学の大学図書館機能をより強化すると考えられる。

これらの状況に対応するために図書業務の効率化、迅速化をはかり、全学的な図書資料の管理・運営を効果的に行ない、利用者に対して質の高いサービスの提供ができる図書システムを構築する必要がある。

昭和 60 年 2 月、BSP によって事務のトータルシステム化が提言され、同年 6 月より図書ブロックが編成されて、図書システムの開発に着手した。

その結果、図書・雑誌の収書・受入・製本・整理・登録・目録作成の省力化・効率化・迅速化、貸出・返却・督促等の窓口業務の迅速化、情報提供サービスと相互利用の充実が大きな問題として取り上げられた。その解決のために、図書システムは発注・受入情報および書誌・所蔵情報のデータベースを軸とした図書トータルシステムを開発する必要がある。このトータルシステムは 4 つのサブシステム、すなわち図書管理・目録

サブシステム、雑誌管理サブシステム、利用サブシステム、書誌・所蔵情報検索サブシステムをもって構成される。

システム開発の目的

○図書業務（収書－受入－整理－利用）の効率化

1. 図書整理時間の短縮
2. 重複調査の省力化、迅速化
3. 資産管理作業（在庫調査等）の省力化
4. 目録作成作業の省力化、迅速化
5. 貸出・返却・督促業務の迅速化
6. 「学術雑誌総合目録」原稿作成の省力化、迅速化
7. 帳票作成の省力化、迅速化
8. 統計処理の省力化、迅速化
9. 予算管理の省力化、迅速化

○教育・研究・学習活動の支援体制の充実

10. 図書資料の迅速な提供
11. 情報検索サービスの充実
 - ・ 検索手段の多様化
 - ・ 新着速報の提供
 - ・ 冊子体目録の提供
12. 全学の雑誌情報の一元化、有効利用の促進
13. 収書・選書の適正化
 - ・ 不要な重複購入の防止
 - ・ 雑誌の欠号防止、欠号補充
 - ・ 蔵書構成の適正化
14. 学外および学内相互利用の拡大

前提条件－本システムを実現し、かつ有効に機能させるためには次の前提条件を満たす必要がある。－

条件1－開発方法について

全体計画書に規定したように、今回のシステム開発は、個別業務のみならず、図書業務全体を対象とし要件定義局面の作業を行なった。その結果、図書業務は一連の機能の流れにそって情報を徐々に付加して行く作業であり、この側面からみると、単一業務の機械化ではなくトータルなシステム開発を行なわなければ機械化のメリットはないと判断した。また、要件定義局面の作業の一つとして行なった業務担当者のニーズを総合しても同様の結果が得られた。

一方、開発に要する人的、財政的、時間的な制約を考えると、このような規模のシステムを独自に開発することは他大学の事例をみても困難であると目される。従って、今

回のシステム構想に適した既製アプリケーションプログラムを一部利用し開発する方法を選択する。

条件 2－書誌データの水準について

このシステムは図書業務の効率化を背景として検討しており、その結果生みだされる図書の書誌データは従来どおりの標準的な水準が保持される。

また雑誌については現在維持されつつある『学術雑誌総合目録システム』の書誌データの基準に従う。

条件 3－データの事前入力について

このシステムを早期に、かつより効果的に稼働させるためには、62 年 3 月までに次のデータの事前入力が必要である。そのため図書については重複調査に対応するために過去 3 年間のデータ（約 9 万冊）を事前入力する。なお、このデータは利用サブシステムのデータともなり得る。雑誌については和雑誌約 3,000 タイトル（但し学術雑誌総合目録と文編のデータを取り込むことが前提となる）及び、受入雑誌（和・洋）約 2,700 タイトルを入力する。

また、65 年 4 月から全面稼働させるため、利用の多い図書約 30 万冊分のデータを 62 年から 65 年までに入力する必要がある。但し遡及の際のデータの質は量的、時間的な制約から簡易な形態にならざるを得ない。雑誌については洋雑誌約 2,000 タイトルを当該期間中に入力する（但し上記目録欧文編の整備が 65 年までに終了することを前提とする）。

条件 4－図書システムを実現するためには次のデータをデータベース化することを前提としている。

1. 発注・受入データ（IPF データ）
2. 予実算管理データ
3. 所蔵情報データ
4. 書誌情報データ
5. 所在情報データ
6. 利用者データ
7. 製本準備データ

条件 5－利用サブシステム関係

1. 図書（製本雑誌）に機械可読シール（OCR 等に対応可能なシール）を貼る。
2. 利用者全員に閲覧証を交付する。
3. 閲覧証に機械可読シールを貼る。

条件 6－図書管理・目録サブシステム関係

出版マーク・ジャパンマーク・LC マーク等から書誌データを取り込む。

条件 7－雑誌管理サブシステム関係

1. 雑誌目録データのフォーマットを学術情報システムの雑誌サブシステムの仕様に合わせる。
2. 学術雑誌総合目録のデータを取り込む。

3. 全学の雑誌情報の集中をはかる。

条件 8－図書館の改築等の物理的変化・図書管理制度等の将来予測し得る変化について

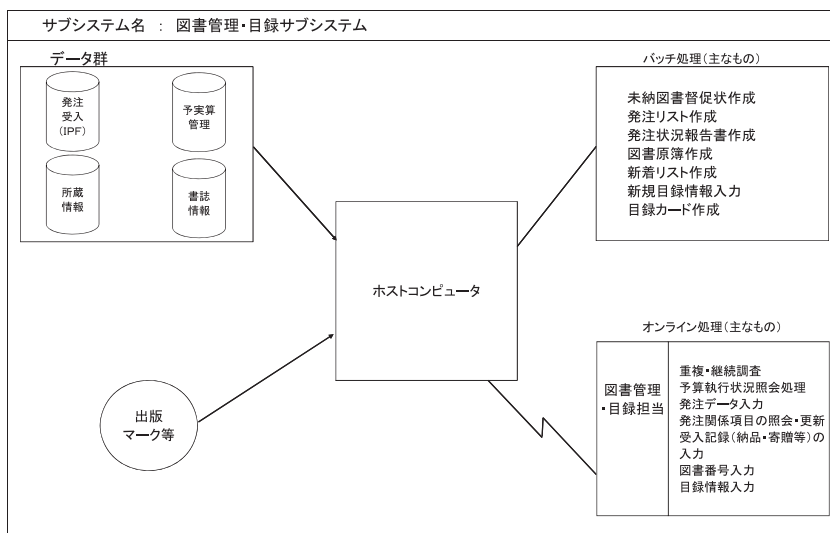
今回のシステム構築に際しては上記の変化に左右されない範囲で検討する。従って、図書業務の根幹となる部分を中心に行なっていく、詳細部分については条件が整備された時点から開発・導入していく。

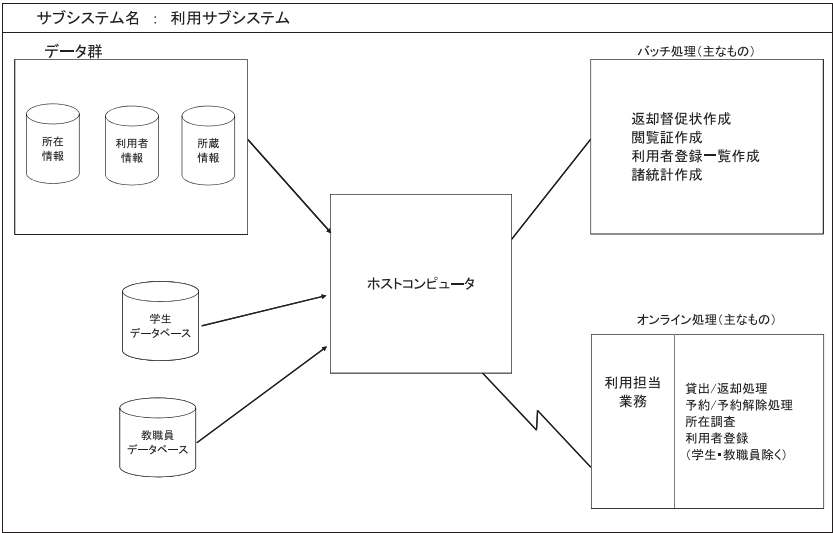
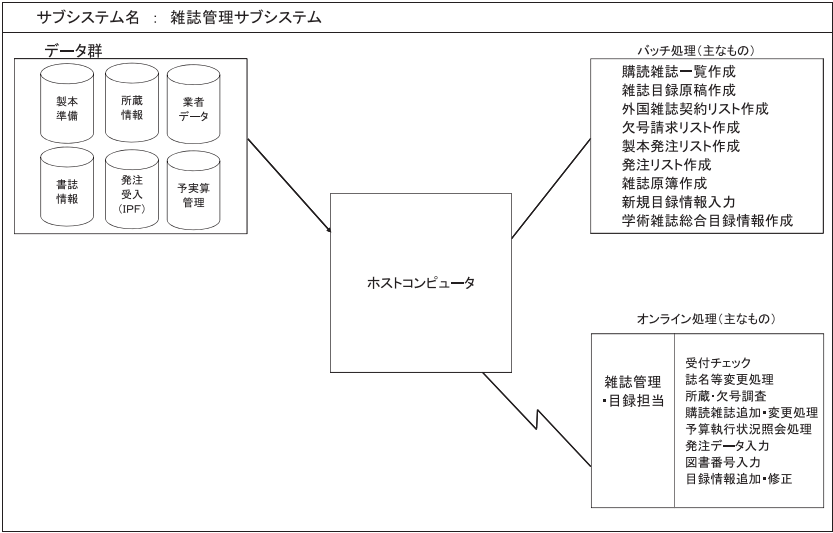
条件 9－現行の図書業務との関係について

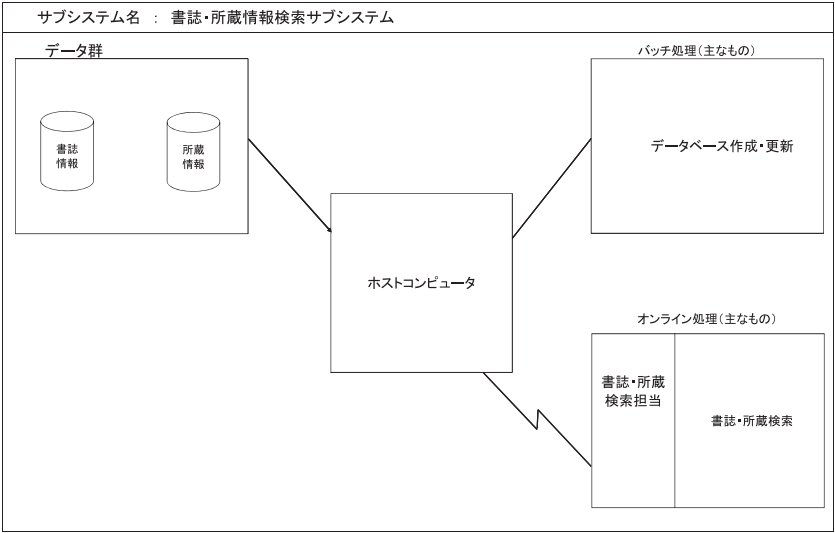
全体計画書に規定されたように、今回のシステム開発は現在の図書業務を機能と情報から分析し、ニーズと照合することによりトータルなシステム構想を行なった。そのため、システム構築後は、業務の流れや業務方式の大幅な変更を必要とする。

- (注) 1. マークとは、Machine Readable Catalog (MARC) の略であり、書誌データを機械可読化したもので、例えば磁気テープ等に保存されている。
2. IPF とは In Process File のことで完成されたデータではなく発注、受入、整理事業途上のデータであり、作業過程を把握するためにも利用される。
3. 学術情報システムとは、学術情報の相互利用を目指して、文部省を中心に推進しようとしているシステム。このため各大学図書館は保有している学術資料の情報提供を義務付けられている。現在、本学では雑誌資料についてデータ提供や調査を毎年行なっている。

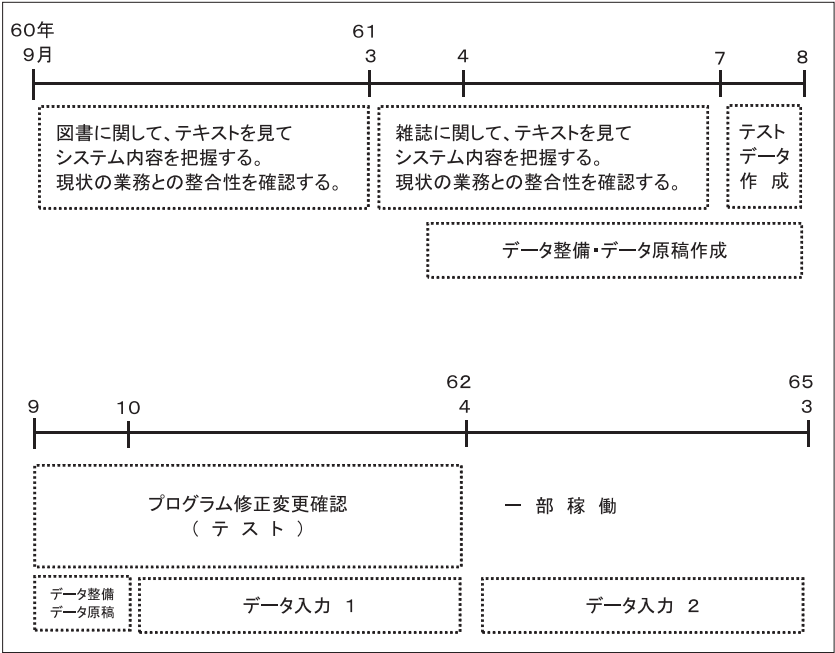
2. システム構想図







3. 開発スケジュール



データ入力1で対象とするもの

図 書：過去3年間約9万冊（重複調査のための簡易データ項目）

雑 誌：和雑誌約3,000タイトル

受入雑誌（和・洋）約2,700タイトル

データ入力2で対象とするもの

図 書：週及分約30万冊（簡易データ項目）

雑 誌：和雑誌約2,000タイトル

一部稼働には新規購入分のデータ入力を含む。

4. 外部設計局面作業計画書

開発手順としては、要件定義局面に続く外部設計局面では、以下のステップに基づいて作業を進めるのが一般的である。

- ・業務仕様の設定
- ・コード設定
- ・出力設定
- ・オンライン入出力設計
- ・入力設計
- ・ファイル設計
- ・DB 設計
- ・DC 設計
- ・機械処理設計
- ・運用設計
- ・移行方法の決定
- ・テスト方式設計
- ・信頼性設計

しかし、当システムでは、「前提条件」で触れたように、既製アプリケーションプログラムを利用して開発する方法を採用するので、上記の作業ステップの内容はカバーするものの、明確にステップとしてとらえることは困難である。

したがって、要件定義局面の次の局面でおこなう作業としては、「図書、雑誌に関して、既製アプリケーションプログラムのテキストを見て、システム内容を把握し、現状の業務との整合性を確認する」ことになる。

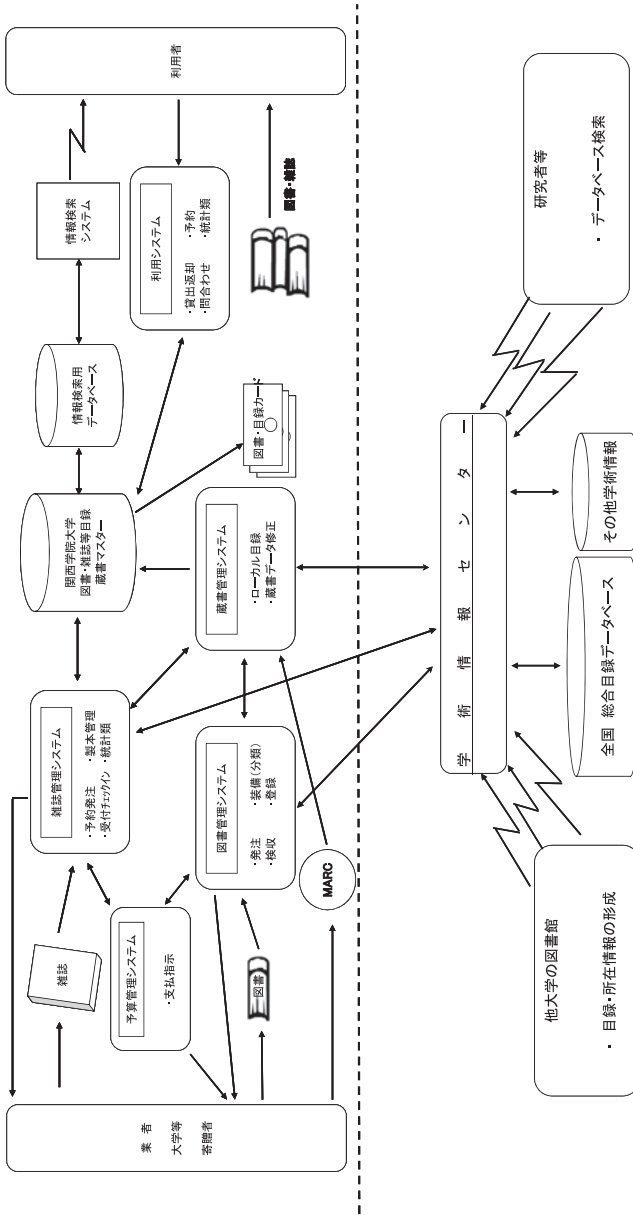
(2) 図書システム開発運用状況

| 年月 | システム全体 | 図書管理サブシステム | 雑誌管理サブシステム | 利用サブシステム |
|----------------|--------------------------|------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------|
| 1985 (昭和60) 5 | 全体計画承認 図書ブロックの発足 | | | |
| 1985 (昭和60) 10 | 基本構想書の承認 開発体制の確定 | WG 発足 | WG 発足 | WG 発足 |
| 1986 (昭和61) 2 | 開発予算概算内諮 | | | |
| 1986 (昭和61) 2 | APP 説明書検討作業開始 | 週及データ作成 120,000 冊 APP 説明書検討作業開始 | | APP 説明書検討作業開始 |
| 1986 (昭和61) 6 | | | | |
| 1986 (昭和61) 7 | WG 合宿研修会 | | | |
| 1986 (昭和61) 8 | | | | |
| 1986 (昭和61) 9 | 図書館員合宿研修会 | | | |
| 1986 (昭和61) 12 | 図書ブロック開発研修会 | 週及データ作成 155,000 冊 | APP 説明書検討作業開始 初期データ 2,700 タイトル作成 | |
| 1987 (昭和62) 1 | 学術情報センター稼働申請 | | | |
| 1987 (昭和62) 1 | M 280 使用承認 (学情接統のため) | システム仕様決定 | | |
| 1987 (昭和62) 3 | | | | |
| 1987 (昭和62) 5 | 学術情報センター稼統 教育モードで使用開始 | | | システム仕様決定 |
| 1987 (昭和62) 7 | | | | |
| 1987 (昭和62) 9 | 図書ブロック開発研修会 | | | |
| 1987 (昭和62) 8 | 端末機設置 (運営課、整理課) | 確認テスト 1 | システム仕様決定 | OCR ラベル貼付作業 105,000 冊 |
| 1987 (昭和62) 10 | | 週及データ作成 160,000 冊 | 週及データ (和) 4,000 タイトル作成 | |
| 1987 (昭和62) 11 | | 確認テスト 2 | | 確認テスト |
| 1987 (昭和62) 11 | | | | |
| 1988 (昭和63) 3 | 端末機設置 (開架室) | | | |

| 年月 | システム全体 | 図書管理サブシステム | 雑誌管理サブシステム | 利用サブシステム |
|---------------|--|------------------------------|---|--------------------------------------|
| 1988 (昭和63) 4 | 図書管理一部稼働 | 一部稼働 | 確認テスト | |
| 1988 (昭和63) 8 | 学術情報センター接続形態を業務モードに変更 CPU 置き換え 端末機設置 | 週及データ作成 75,000 冊 週及データロード | 週及データ(洋)3,000タイトル作成 OCR ラベル貼付作業 50,000 冊 雑誌管理 (仮受システム) 稼働 | OCR ラベル貼付作業 120,000 冊 |
| 1988 (昭和63) 9 | (運営課、整理課、開架室、雑誌室) | | | |
| 1989 (平成元) 1 | CPU 置き換えによる機能テスト | | | |
| 1989 (平成元) 3 | 雑誌管理 (仮受システム) 稼働 | | | 利用者データロード |
| 1989 (平成元) 4 | 図書管理稼働、利用一部稼働 | 稼働 | 週及データ (和洋) 作成 OCR ラベル貼付作業 50,000 冊 週及データロード | 開架室利用稼働 OCR ラベル貼付作業 135,000 冊 |
| 1989 (平成元) 8 | | | | |
| 1990 (平成2) 1 | | | | |
| 1990 (平成2) 3 | 端末機設置 (出納室) | | | |
| 1990 (平成2) 4 | 出納室、雑誌室利用稼働 | 週及データロード | | 出納室、雑誌室利用稼働 OCR ラベル貼付作業 165,000 冊 |
| 1990 (平成2) 8 | | | | |
| 1990 (平成2) 10 | | | | |
| 1991 (平成3) 12 | 雑誌管理稼働 | | 稼働 | |

※APP・・・アプリケーションプログラムのこと。本システムでは、日立製作所の標準図書システムパッケージ (BIBLION) を採用する。
※WG・・・ワーキンググループ。図書館内でシステム運用に携わる作業チーム
※図書ブロック・・・図書システム開発に携わる作業チーム

(3) 図書システム概念図



11 整理

(1) 外部委託によるフルマーク処理件数

| 年度 | 1994 | 1995 | 1996 | 1997 | 1998 | 1999 |
|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 図書館流通センター | 2,096 | 5,166 | 3,500 | 12,448 | 10,797 | 10,876 |
| システムズ・デザイン社 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 年度 | 2000 | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 |
| 図書館流通センター | 22,639 | 22,933 | 12,080 | 0 | 0 | 0 |
| システムズ・デザイン社 | 0 | 0 | 8,013 | 10,953 | 33,820 | 17,641 |
| 年度 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
| 図書館流通センター | 0 | 3,196 | 5,914 | 3,539 | 0 | 0 |
| システムズ・デザイン社 | 37,919 | 6,312 | 8,555 | 13,402 | 704 | 1,241 |

合計 253,744

(2) 外部委託による整理冊数

* 経常図書費購入分とその他の費用での購入分に分けた。その他については委託業者別に分けた。

* 1988 年度～2001 年度までの経常分の委託業者は、生協・図書館流通センター (TRC)、2002 年度以降の経常分の委託業者は、紀伊國屋書店

* M は丸善株式会社、T は生協・TRC、K は紀伊國屋書店、SD はシステムズ・デザイン社による委託整理

| 年度 | | 経常分 | その他 M | その他 T | その他 K | その他 SD | 委託総数 |
|------|-------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|
| 1988 | 昭和 63 | 4,404 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4,404 |
| 1989 | 平成元 | 9,467 | 2,751 | 870 | 370 | 0 | 13,458 |
| 1990 | 平成 2 | 9,239 | 4,298 | 330 | 2,519 | 0 | 16,386 |
| 1991 | 平成 3 | 10,049 | 3,957 | 300 | 2,122 | 0 | 16,428 |
| 1992 | 平成 4 | 12,090 | 2,802 | 1,800 | 10,990 | 0 | 27,682 |
| 1993 | 平成 5 | 10,900 | 508 | 5,437 | 4,661 | 0 | 21,506 |
| 1994 | 平成 6 | 11,233 | 0 | 1,836 | 23,216 | 0 | 36,285 |
| 1995 | 平成 7 | 18,787 | 0 | 2,597 | 5,033 | 0 | 26,417 |
| 1996 | 平成 8 | 16,670 | 1,004 | 2,524 | 0 | 0 | 20,198 |
| 1997 | 平成 9 | 21,080 | 0 | 1,093 | 0 | 5,383 | 27,556 |
| 1998 | 平成 10 | 20,433 | 0 | 0 | 0 | 3,421 | 23,854 |
| 1999 | 平成 11 | 22,964 | 0 | 0 | 0 | 0 | 22,964 |
| 2000 | 平成 12 | 26,546 | 0 | 0 | 2,196 | 0 | 28,742 |
| 2001 | 平成 13 | 25,753 | 0 | 21,654 | 2,295 | 0 | 49,702 |
| 2002 | 平成 14 | 26,221 | 0 | 1,000 | 1,652 | 0 | 28,873 |
| 2003 | 平成 15 | 23,999 | 0 | 0 | 7,332 | 2,928 | 34,259 |
| 2004 | 平成 16 | 23,094 | 0 | 0 | 3,151 | 2,127 | 28,372 |
| 2005 | 平成 17 | 23,388 | 0 | 0 | 847 | 498 | 24,733 |
| 2006 | 平成 18 | 18,768 | 0 | 0 | 285 | 7,669 | 26,722 |
| 2007 | 平成 19 | 20,716 | 0 | 0 | 1,796 | 315 | 22,827 |
| 2008 | 平成 20 | 19,589 | 0 | 0 | 5,455 | 0 | 25,044 |
| 2009 | 平成 21 | 32,545 | 0 | 0 | 8,655 | 469 | 41,669 |
| 2010 | 平成 22 | 23,189 | 0 | 0 | 4,040 | 1,653 | 28,882 |
| 2011 | 平成 23 | 26,005 | 0 | 0 | 3,302 | 0 | 29,307 |
| 2012 | 平成 24 | 26,083 | 0 | 0 | 4,425 | 30 | 30,538 |

〈主な委託の種類〉

- 1989 年度：方志叢書、新大学図書館収書計画
- 1990 年度：大学史コレクション、British Parliament papers、臨時定員増に伴う収書（キリル文字他）、新大学図書館収書計画
- 1991 年度：ニーシュラク教授旧蔵書、承政院日記、臨時定員増に伴う収書（スペイン語他）、新大学図書館収書計画
- 1992 年度：内藤湖南蔵書、社会主義経済理論コレクション、新大学図書館収書計画
- 1993 年度：明清宮廷文献集成、新大学図書館収書計画
- 1994 年度：アジア経済関係図書、新大学図書館収書計画、総合政策学部設置用図書
- 1995 年度：新大学図書館収書計画、総合政策学部設置用図書
- 1996 年度：新大学図書館収書計画
- 1997 年度：イギリス社会科学古典、イギリス社会政策コレクション、新大学図書館収書計画、総合政策学部設置用図書
- 1998 年度：総合政策学部設置用図書
- 2000 年度：言語コミュニケーション文化研究科設置用図書
- 2001 年度：総合政策学部・理工学部学科増設用図書、下村寅太郎蔵書、第2次返還図書（法学部）
- 2002 年度：総合政策学部・理工学部学科増設用図書、中国語授業関連図書
- 2003 年度：モスラー教授旧蔵書、小島達雄名誉教授蔵書、司法研究科設置用図書、総合政策学部・理工学部学科増設用図書
- 2004 年度：シュミーレヴィッチ教授旧蔵書、総合政策学部・理工学部学科増設用図書、経営戦略研究科設置用図書
- 2005 年度：ボーリ親子コレクション
- 2006 年度：海道進蔵書
- 2007 年度：堀文庫、人間福祉学部設置用図書
- 2008 年度：教育学部・人間福祉学部設置用図書、総合政策学部・理工学部学科増設用図書
- 2009 年度：教育学部・人間福祉学部・国際学部設置用図書、総合政策学部・理工学部学科増設用図書、フランス語コミック
- 2010 年度：教育学部・人間福祉学部・国際学部設置用図書、総合政策学部・理工学部学科増設用図書
- 2011 年度：教育学部・国際学部設置用図書、総合政策学部・理工学部学科増設用図書
- 2012 年度：国際学部設置用図書、文科省グローバル人材育成推進事業関連図書

12 館員育成

(1) 関西四大学図書館職員研修

| 年度 | 種類 | 概要 |
|-----------------|-------------------------|---|
| 1976 (昭和 51) | 研修会 (第 1 期 第 1 回) | ・庶務・収書グループ 開催日：1976 年 11 月 18 日 場所：同志社大学 内容：蔵書構成論 |
| | | ・整理グループ 開催日：1976 年 12 月 3 日 場所：関西大学 内容：各館の現況、整理業務の実情、問題点についての情報交換 研修テーマの決定 |
| | | ・奉仕グループ 開催日：1976 年 11 月 24 日 場所：立命館大学 内容：1. 研究室との結びつき 2. 図書資料の管理 3. 二次文献の相互交換 |
| | | ・雑誌グループ 開催日：1976 年 11 月 30 日 場所：関西学院大学 内容：雑誌業務の全般について（総論） |
| 1977 (昭和 52) | 研修会 (第 1 期 第 2 回) | ・庶務・収書グループ 開催日：1977 年 5 月 10 日 場所：関西大学 内容：各館開架室備付のレファレンスブックス比較一覧表の作成 蔵書構成論 |
| | | ・整理グループ 開催日：1977 年 5 月 11 日 場所：立命館大学 内容：整理業務の迅速化（合理化）の問題 |
| | | ・奉仕グループ 開催日：1977 年 5 月 20 日 場所：関西学院大学 内容：1. 相互利用・相互協力 2. 身障者問題について |
| | | ・雑誌グループ 開催日：1977 年 5 月 17 日 場所：同志社大学 内容：雑誌目録のとり方について |
| | | ・機械化グループ 開催日：1977 年 5 月 24 日 場所：関西学院大学 内容：1. 関西大学の「雑誌管理システム」について 2. 関西学院大学の電算機処理による蔵書目録作成について |

| | | |
|----------------|-----------------------------|--|
| | 夏期合宿 研修会 (第1期 第3回) | 開催日：1977年7月14日～16日 場所：高野山普賢院 内容：1. 大学図書館と図書館員 2. 図書館サービスについて 3. 資料組織論 |
| | 研修会 (第1期 第4回) | ・庶務・収書グループ 開催日：1977年10月26日 場所：立命館大学 内容：各館開架室備付のレファレンスブックス比較一覧表の作成 |
| | | ・整理グループ 開催日：1977年10月25日 場所：関西学院大学 内容：冊子目録刊行上の問題 |
| | | ・奉仕グループ 開催日：1977年10月31日 場所：同志社大学 内容：1. 相互利用に関するアンケート調査実施要領について 2. 開架閲覧室の管理・運営上の諸問題 |
| | | ・雑誌グループ 開催日：1977年10月28日 場所：関西大学 内容：1. 雑誌利用について 2. 関西大学の雑誌業務の電算化の取り組み状況について（報告） |
| | | ・機械化グループ 開催日：1977年10月27日 場所：関西大学 内容：1. MARCⅡについて 2. 関西大学の「雑誌管理システム」について |
| 1978 (昭和53) | 研修会 (第1期 第5回) | ・庶務・収書グループ 開催日：1978年5月8日 場所：関西学院大学 内容：各館の分掌説明および業務手順・実情の紹介 |
| | | ・整理グループ 開催日：1978年5月10日 場所：同志社大学 内容：目録規則改正（ISBD および NCR 新版）の問題 |
| | | ・奉仕グループ 開催日：1978年5月11日 場所：関西大学 内容：1. アンケート調査まとめ 2. 二次文献資料の利用方法について |
| | | ・雑誌グループ 開催日：1978年5月15日 場所：立命館大学 内容：1. 冊子体雑誌目録について 2. 関西大学の電算化による雑誌管理システムについて（報告） |

| | | |
|----------------|----------------------|--|
| | | <p>・機械化グループ 開催日：1978年5月18日 場所：立命館大学 内容：1. 関西大学の「雑誌管理システム」について 2. 同志社大学、立命館大学、関西学院大学での蔵書目録機械処理作成について 3. 機械化グループの反省会</p> |
| | 夏期合宿 研修会 (第2回) | <p>開催日：1978年7月13日～15日 場所：高野山普賢院 内容：第1分科会 大学図書館の組織 第2分科会 大学図書館業務の機械化</p> |
| | 研修会 (第2期 第1回) | <p>・庶務・収書グループ 開催日：1978年11月13日 場所：同志社大学 内容：図書館庶務・収書業務の実情（情報交換）</p> |
| | | <p>・整理グループ 開催日：1978年11月14日 場所：関西大学 内容：各大学図書館整理部門の事情説明（情報交換）</p> |
| | | <p>・奉仕グループ 開催日：1978年11月15日 場所：立命館大学 内容：1. 各館の現状と課題 2. 視聴覚資料とその利用について</p> |
| | | <p>・雑誌グループ 開催日：1978年11月16日 場所：関西学院大学 内容：1. 相互利用の各館の実情 2. 第2次資料の整備と利用の状況について</p> |
| | | <p>・機械化グループ 開催日：1978年11月17日 場所：同志社大学 内容：1. 各大学での業務機械化の現状報告 2. 講演 日外アソシエーツ社長 大高利夫氏</p> |
| 1979 (昭和54) | 研修会 (第2期 第2回) | <p>・庶務・収書グループ 開催日：1979年5月18日 場所：関西大学 内容：受入業務</p> |
| | | <p>・整理グループ 開催日：1979年5月15日 場所：立命館大学 内容：1. 外部カード利用率（カバー率） 2. 冊子目録作成手順</p> |
| | | <p>・奉仕グループ 開催日：1979年5月16日 場所：関西学院大学 内容：1. 学内相互利用と類縁機関について 2. レファレンス業務の現状について</p> |

| | | |
|-------------------------------|-------------------------------|--|
| | | <p>・雑誌グループ 開催日：1979 年 5 月 14 日 場所：関西大学 内容：(機械化グループと合同開催)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. JICST の文献情報検索システム (JOIS) の見学 (大阪大学) 2. 関西大学図書館雑誌管理システム (KULPIS) の見学 |
| | | <p>・機械化グループ 開催日：1979 年 5 月 14 日 場所：関西大学 内容：(雑誌グループと合同開催)</p> |
| 夏期合宿 研修会 (第 3 回) | | <p>開催日：1979 年 7 月 12 日～14 日 場所：那智勝浦 国民年金保養センター「くまのじ」 講演：図書館及び図書館員に望むこと 関西大学元図書館長 中村幸彦氏 テーマ：館員育成の問題、研修体制の問題</p> |
| 当日 研修会 (第 2 期 第 3 回) | | <p>・庶務・収書グループ 開催日：1979 年 11 月 12 日 場所：立命館大学 内容：各種既製カードの利用</p> |
| | | <p>・整理グループ 開催日：1979 年 11 月 13 日 場所：関西学院大学 内容：古書、漢籍、現代中国語書、ハングル書に関する整理方法</p> |
| | | <p>・奉仕グループ 開催日：1979 年 11 月 14 日 場所：同志社大学 内容：1. 参考業務の実態と問題点 2. 閲覧規程とその問題点 3. 「資料の利用に関する四大学図書館相互協力協定 (案)」について</p> |
| | | <p>・雑誌グループ 開催日：1979 年 11 月 15 日 場所：同志社大学 内容：1. 逐次刊行物の相互協力について～重複・不要資料の交換と欠号補充～ 2. 第 2 次資料のあつかい方</p> |
| | | <p>・機械化グループ 開催日：1979 年 11 月 16 日 場所：関西学院大学 内容：1. 関西学院大学図書館における電算写植機を用いた蔵書目録の作成について 2. 「今後における学術情報システムの在り方について」</p> |
| 1980 (昭和 55) | 当日 研修会 (第 2 期 第 4 回) | <p>・庶務・収書グループ 開催日：1980 年 5 月 12 日 場所：関西学院大学 内容：出版情報と選書の組織・方針</p> |
| | | <p>・整理グループ 開催日：1980 年 5 月 13 日 場所：同志社大学 内容：編成業務について</p> |

| | |
|-------------------------------|--|
| | <p>・奉仕グループ 開催日：1980 年 5 月 14 日 場所：関西大学 内容：1. 主題別閲覧制度についての中間報告 2. 相互利用活動、国外の問題について 3. 第 2 期研修会のまとめ</p> |
| | <p>・雑誌グループ 開催日：1980 年 5 月 15 日 場所：立命館大学 内容：国際標準書誌記述（逐刊用）= ISBD（S）について</p> |
| | <p>・機械化グループ 開催日：1980 年 5 月 16 日 場所：立命館大学 内容：1. 京都産業大学図書館の和図書誌情報システム等機械化システムの見学 2. 「関西四大学図書館の共同機械化の指針」の検討と作成</p> |
| 夏期合宿 研修会 (第 4 回) | <p>開催日：1980 年 7 月 10 日～12 日 場所：関西学院千刈セミナーハウス テーマ：大学図書館の閲覧施設～学習用、研究用～ 講演：図書館建築の機能と形 関西大学工学部 山田幸一教授</p> |
| 当日 研修会 (第 3 期 第 1 回) | <p>・庶務・収書グループ 開催日：1980 年 11 月 10 日 場所：同志社大学 内容：各館の現状報告</p> |
| | <p>・整理グループ 開催日：1980 年 11 月 11 日 場所：関西大学 内容：1. 各館の現状報告 2. NCR 新版の現状と問題点について</p> |
| | <p>・奉仕グループ 開催日：1980 年 11 月 12 日 場所：立命館大学 内容：図書館ガイダンスについて</p> |
| | <p>・雑誌グループ 開催日：1980 年 11 月 13 日 場所：関西学院大学 内容：ISBD(S) について</p> |
| | <p>・機械化グループ 開催日：1980 年 11 月 14 日 場所：同志社大学 内容：1. 各館の機械化の現状 2. 機械化グループ（第 2 期）からの提案に関する館長会議の意向について 3. 学術審議会「今後における学術情報システムの在り方について」</p> |

| | | |
|-----------------|-------------------------------|---|
| 1981 (昭和 56) | 当日 研修会 (第 3 期 第 2 回) | ・ 庶務・収書グループ 開催日：1981 年 5 月 11 日 場所：関西大学 内容：資料をもとに大学図書館の選択機構、収書方針の在り方について議論 |
| | | ・ 整理グループ 開催日：1981 年 5 月 12 日 場所：立命館大学 内容：洋書目録の現状と問題点～LC カードを中心として～ |
| | | ・ 奉仕グループ 開催日：1981 年 5 月 13 日 場所：関西学院大学 内容：相互利用の現状と問題点 |
| | | ・ 雑誌グループ 開催日：1981 年 5 月 14 日 場所：同志社大学 内容：国際標準書誌記述（逐次刊行物用）= ISBD(S) について |
| | | ・ 機械化グループ 開催日：1981 年 5 月 16 日 場所：関西大学 内容：1. JAPAN-MARC の利用の仕方 2. ISBN について 3. 関西大学図書館雑誌管理システムの見学 |
| | 夏期合宿 研修会 (第 5 回) | 開催日：1981 年 7 月 13 日～15 日 場所：高野山普賢院 テーマ：大学図書館のあり方 第 1 分科会：資料収集について 第 2 分科会：情報サービスについて |
| | 当日 研修会 (第 3 期 第 3 回) | ・ 庶務・収書グループ 開催日：1981 年 11 月 9 日 場所：立命館大学 内容：蔵書構成論 |
| | | ・ 整理グループ 開催日：1981 年 11 月 10 日 場所：関西学院大学 内容：目録の標準化～NCR 新版を中心に～ |
| | | ・ 奉仕グループ 開催日：1981 年 11 月 11 日 場所：同志社大学 内容：1. ブックディテクションシステムのその後 2. 利用統計について～統計の種類と利用法 3. 身障者問題について |
| | | ・ 雑誌グループ 開催日：1981 年 11 月 12 日 場所：関西大学 内容：各大学図書館及び関連諸機関との利用体制及び相互利用について |
| | | ・ 機械化グループ 開催日：1981 年 11 月 13 日 場所：立命館大学 内容：貸出システムの機械化について |

| | | |
|-----------------|-------------------------------|---|
| 1982 (昭和 57) | 当日 研修会 (第 3 期 第 4 回) | ・ 庶務・収書グループ 開催日：1982 年 5 月 10 日 場所：関西学院大学 内容：1. 整理（同志社）、閲覧（関大予定）機械化と収書業務について 2. 学習図書館機能とカリキュラムに合った収書について 3. 第 3 期まとめ |
| | | ・ 整理グループ 開催日：1982 年 5 月 11 日 場所：同志社大学 内容：1. AACR 2 について 2. 第 3 期の総括について |
| | | ・ 奉仕グループ 開催日：1982 年 5 月 12 日 場所：関西大学 内容：1. 貸出システムの機械化について 2. 各大学の参考業務の現状と問題点 |
| | | ・ 雑誌グループ 開催日：1982 年 5 月 13 日 場所：立命館大学 内容：機械化の導入について |
| | | ・ 機械化グループ 開催日：1982 年 5 月 14 日 場所：関西学院大学 内容：1. 第 3 期機械化グループのまとめ 2. 関学情報処理センターの見学 |
| | | 夏期合宿 研修会 (第 6 回) |
| | 当日研修 (第 4 期 第 1 回) | 開催日：1982 年 7 月 12 日～14 日 場所：大阪商工会議所 賢島研修センター テーマ：大学図書館の機械化 広島大学附属図書館学術情報係 板垣護人氏 |
| | | ・ 収書・庶務グループ 開催日：1982 年 11 月 15 日 場所：関西大学 内容：1. 受贈本の評価基準について 2. 収書情報について |
| | | ・ 整理グループ 開催日：1982 年 11 月 16 日 場所：立命館大学 内容：1. 各図書館の現状報告 2. 目録業務の電算処理について |
| | | ・ 奉仕グループ 開催日：1982 年 11 月 17 日 場所：同志社大学 内容：図書館利用の向上を目指して～利用指導について～ |
| | | ・ 雑誌グループ 開催日：1982 年 11 月 18 日 場所：関西学院大学 内容：雑誌利用の分担目録と分担保存を中心とした相互協力 ～学術情報システムに向けて～ |

| | | |
|-----------------|-------------------------------|---|
| 1983 (昭和 58) | 当日 研修会 (第 4 期 第 2 回) | ・収書・庶務グループ 開催日：1983 年 5 月 16 日 場所：関西学院大学 内容：1. 返納個研図書の取扱いについて 2. 出版界の流通機構について（TRC より） |
| | | ・整理グループ 開催日：1983 年 5 月 17 日 場所：同志社大学 内容：1. 整理業務とは 2. 機械化入力を前提とした読みの問題（和漢書を中心に） |
| | | ・奉仕グループ 開催日：1983 年 5 月 18 日 場所：立命館大学 内容：参考業務の現状と課題～カウンター業務との関連において～ |
| | | ・雑誌グループ 開催日：1983 年 5 月 19 日 場所：関西大学 内容：学術情報システムへの対応としてのオンラインネットワークを作り上げることにに関して |
| | 夏期 研修会 (第 7 回) | 開催日：1983 年 7 月 4 日～6 日 場所：いこいの村びわ湖 テーマ：図書館の機械化について 広島大学附属図書館学術情報係 板垣護人氏 |
| | 当日 研修会 (第 4 期 第 3 回) | ・収書・庶務グループ 開催日：1983 年 11 月 14 日 場所：同志社大学 テーマ：大型資料（コレクション）の収集について ～英米の議会資料、マイクロ資料等～ |
| | | ・整理グループ 開催日：1983 年 11 月 15 日 場所：関西学院大学 テーマ：1. 分類業務について 2. ネットワークの動向 |
| | | ・奉仕グループ 開催日：1983 年 11 月 16 日 場所：関西大学 テーマ：1. 各図書館のスライド紹介 2. 利用者教育について |
| | | ・雑誌グループ 開催日：1983 年 11 月 17 日 場所：立命館大学 テーマ：ISBD と AACR 2 の比較について |

| | | |
|-----------------|-------------------------------|---|
| 1984 (昭和 59) | 当日 研修会 (第 4 期 第 4 回) | <p>・収書・庶務グループ 開催日：1984 年 5 月 15 日 場所：立命館大学 テーマ：1. 学習図書を選書のあり方における問題点及び受入業務の省力化について 2. 図書館における基本的ビブリオ・レファレンス関係資料について 3. 第 4 期研修会の総括について</p> |
| | | <p>・整理グループ 開催日：1984 年 5 月 16 日 場所：関西大学 テーマ：1. 非図書資料の整理について 2. 研修について ①整理業務と研修（内部研修・外部研修） ②四大学研修（反省と今後の展望）</p> |
| | | <p>・奉仕グループ 開催日：1984 年 5 月 17 日 場所：関西学院大学 テーマ：図書館利用の向上を目指して～学生の要求に答える図書館～ ①図書館規程をめぐって～図書貸出冊数、期間、その他～ ②開架図書のリフレッシュ問題 ③研修制度（レファレンサーの位置づけ等）</p> |
| | | <p>・雑誌グループ 開催日：1984 年 5 月 18 日 場所：同志社大学 テーマ：1. 学術雑誌目録の電算化処理を中心に ～東京大学文献情報センターセミナー 4 ヶ月研修から～ 同志社女子大学運営課 望月裕美氏 2. 日本のネットワークー学術情報システムー情報交換に認識を深める</p> |
| | 夏期 研修会 (第 8 回) | <p>開催日：1984 年 7 月 9 日～11 日 場所：仁川ハイッ テーマ：図書資料「古文書」について 関西学院大学文学部 三浦俊明教授 関西学院大学経済学部 柚木学教授 研修：1. 関西大学所蔵近世文書について～内容・整理・利用～ 2. AV・マイクロ資料類の取扱いについて～各校の事例報告～ 3. 講演・見学会 柚木教授、白鹿記念酒造博物館</p> |
| 1985 (昭和 60) | 当日 研修会 (第 5 期 第 1 回) | <p>開催日：1985 年 5 月 10 日 場所：関西大学 テーマ：1. 関西大学総合図書館の建築と機能 2. 閲覧業務の機械化について 3. 総合図書館見学</p> |
| | 夏期 研修会 (第 9 回) | <p>開催日：1985 年 7 月 10 日～12 日 場所：三重県松阪市松阪ハイッ（日本勤労福祉センター） テーマ：MARC を利用した収書・整理・閲覧の各業務について 講演：北アメリカにおける 4 大図書館ネットワークの紹介 関西大学図書館課長補佐 葛馬寿秀氏 研修：1. TRC-MARC を用いた開架図書のリフレッシュと収集・整理業務 2. TRC-MARC を用いた目録・図書マスター等の作成 3. 機械化における書誌入力諸問題</p> |

| | | |
|----------------|---------------------------|--|
| | 当日 研修会 (第5期 第2回) | テーマ別(収書、整理、閲覧、逐刊)の実地研修 1985年11月25・28日(於同志社)、26・27・28日(於関西学院)、27日(於立命館)、28日(於関西) 参加者は実地研修後レポートを提出し、12月20日に報告会を同志社大学図書館で開催 |
| 1986 (昭和61) | 夏期 研修会 (第10回) | 開催日:1986年7月7日～9日 場所:大阪商工会議所賢島研修センター(三重県志摩郡阿児町) テーマ:図書館相互協力について 講演:日本近代史研究の今後の動向 立命館大学図書館長 後藤靖経済学部教授 |
| | 当日 研修会 (第6期 第1回) | 開催日:1986年11月7日 場所:同志社大学田辺校地 テーマ:1. ラーネッド記念図書館の概要 2. 同志社大学における機械化の最近の動き |
| 1987 (昭和62) | 夏期 研修会 (第11回) | 開催日:1987年7月6日～8日 場所:ユニトピアささやま(松下休暇村) テーマ:「図書館利用」および「電算化の現状」 講演:哲学の道なかばにて 同志社大学図書館長 川島秀一文学部教授 研修:1. 図書館利用 ①新入生を対象とした図書館のPRおよびオリエンテーションの現状 ②図書館における障害者サービスの現状 2. 電算化の現状 ①日販マークの業務への利用状況 ②関西学院大学図書システム開発の現状 |
| | 当日 研修会 (第6期 第2回) | 開催日:1987年11月13日 場所:関西学院大学 テーマ:1. 学術情報センター目録システムについて(デモを含む) 2. 利用分析の方法について |
| 1988 (昭和63) | 夏期合宿 研修会 (第12回) | 開催日:1988年7月6日～8日 場所:扇芳閣(鳥羽) テーマ:近未来における大学図書館の機能について 講演:学生にとっての図書館イメージ 関西学院大学図書館副館長 津金澤聡広社会学部教授 |
| | 当日 研修会 (第7期 第1回) | 開催日:1988年11月25日 場所:関西大学 テーマ:図書館におけるコンピュータ化の基本は何か 発題:関西大学運営課長 濱瀬義雄氏 討議:四大学事例報告 テーマ:1. 「館内研修会の在り方」について 2. 関西大学総合図書館の説明と見学 |

| | | |
|---------------|---------------------------|---|
| 1989 (平成元) | 夏期 研修会 (第13回) | <p>開催日：1989年7月5日～7日 場所：関西大学飛鳥文化研究所 植田記念館 テーマ：研究者が望む図書館サービス</p> <ol style="list-style-type: none"> 講演：研究者から見た図書館への期待について 関西大学図書館長 高島義郎教授 見学会：飛鳥史跡見学 講演：飛鳥文化をたずねて 関西大学文学部 網干善教教授 ①発表－その1－テーマ：新図書館建設について ②発表－その2－テーマ：図書館職員について |
| | 当日 研修会 (第7期 第2回) | <p>開催日：1989年12月7日 場所：関西大学 テーマ：教育・研究者サービスへの対応</p> <ol style="list-style-type: none"> 学術情報システム接続をひかえて ～同志社大学目録作成システムから NACSIS-CAT への移行～ 立命館大学学術情報システムへの取り組み アメリカの大学図書館建設（関学） イリノイ大学のレファレンス図書館（関大） |
| 1990 (平成2) | 夏期 研修会 (第14回) | <p>開催日：1990年7月4日～6日 場所：鳥羽国際ホテル</p> <ol style="list-style-type: none"> 基調講演 テーマ：情報化時代と図書館 立命館大学図書館長 西川富雄文学部教授 研修会 ①関西四大学新入生オリエンテーション紹介 同大、関学はスライド、関大、立命はビデオによる報告 ②テーマ別グループ研修会 ・第1分科会：利用者教育 ・第2分科会：資料収集の現状と今後の課題 ・第3分科会：資料提供サービスの現状と課題 |
| | 当日 研修会 (第8期) | <p>開催日：1990年12月6日 場所：立命館大学 テーマ：ニューメディア時代における情報サービス</p> <ol style="list-style-type: none"> 資料保存政策について 学術情報システムの将来展望～過去・現在・未来～ 立命館大学学術情報システムとその操作 |
| 1991 (平成3) | 夏期 研修会 (第15回) | <p>開催日：1991年7月3日～5日 場所：滋賀厚生年金休暇センター テーマ：ニューメディア時代における情報サービス</p> <ol style="list-style-type: none"> 講演：コンピュータとニューメディア 同志社大学学術情報センター所長 戸高敏之工学部教授 分科会 第1分科会：非図書資料の収集・整理 第2分科会：非図書資料の利用と問題 全体会 |
| | 当日 研修会 | <p>開催日：1991年11月28日 場所：同志社大学</p> <ol style="list-style-type: none"> 大学設置基準の大綱化と図書館（同志社） 図書館の一般市民への開放について（立命館） ILLシステムの試験的利用を終えて（関学） 外国雑誌一括購入システムについて（関大） 同志社大学オンライン目録検索システムの操作（実習） |

| | | |
|----------------|---------------------|---|
| 1992 (平成 4) | 夏期 研修会 (第16回) | <p>開催日：1992 年 7 月 8 日～10 日</p> <p>場所：ユニットピアささやま</p> <p>テーマ：サービスポイントの多様化と図書館のあり方</p> <ol style="list-style-type: none"> 講演：アダム・スミスと現代経済 関西学院大学図書館長 田中敏弘経済学部教授 全体会 <ol style="list-style-type: none"> ①二拠点化について（同志社） ②二拠点キャンパスにおける図書館業務の在り方（関学） ③二拠点化後の図書館の機能とサービスについて（立命館） ④メディアの多様化について関西大学図書館の現状と課題（関大） |
| | 当日 研修会 | <p>開催日：1992 年 12 月 2 日</p> <p>場所：関西学院大学</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学術情報の多様化と収集整理 図書について（同志社） 2. 学術情報の多様化と収集整理 AV 資料について（関学） 3. 関西学院大学図書館見学（昼食時） 4. ニューメディアへの対応と課金問題（立命館） 5. 図書館施設・設備の利用と課題（関大） |
| 1993 (平成 5) | 合宿 研修会 (第17回) | <p>開催日：1993 年 9 月 8 日～10 日</p> <p>場所：地方職員共済組合・和歌の浦ビーチホテル</p> <p>テーマ：資料の収集整理と利用のあり方</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講演：18 世紀イギリスにおける作者と読者 立命館大学図書館長 中原章雄文学部教授 2. 全体会 問題提起 <ol style="list-style-type: none"> ①関西大学における目録の今後のあり方 ②立命館大学図書館の地域公開 ③関西学院大学図書館における目録作成方法及びオンライン目録の現状について ④正確・迅速な目録情報の提供を目指して（同志社） 3. 分散会と全体会 |
| | 研究会 | <p>開催日：1993 年 11 月 24 日</p> <p>場所：立命館大学</p> <p>テーマ：利用者サービスの充実</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「利用者サービスの充実」について（同志社） <ol style="list-style-type: none"> ①大学図書館の機能について ②「利用者サービスの充実」を要請している一般的情勢 ③本学図書館のレファレンス業務の懸案事項 ④本学図書館のレファレンス業務において新たな対応を要する事項 ⑤問題提起 2. 利用者サービスの充実（関大） <ol style="list-style-type: none"> ①関西大学図書館の利用者サービス体制 ②レファレンスカウンターにおけるレファレンス業務の現状 ③サービス充実への方策 3. 関西四大学相互利用の充実のために（関学） <ol style="list-style-type: none"> ①相互利用の現状と問題点 ②今後の課題（利用資格の見直し、利用資料の見直し、利用方法の見直し〈事前連絡の必要性、共通閲覧証－京都地区との関連－〉、四大学 ILL ネットワーク等の検討） ③提案 4. 関西四大学相互利用の発展（立命館） <ol style="list-style-type: none"> ①関西四大学相互利用の現状 ②関西四大学相互利用の発展に向けて |

| | | |
|----------------|-------------|---|
| 1994 (平成 6) | 夏期合宿 研修会 | 台風のため中止 |
| | 研究会 | <p>テーマ：相互利用関係 1994 年 7 月 6 日、関西大学 1994 年 10 月 13 日、同志社大学 1994 年 11 月 17 日、立命館大学</p> <p>検討項目 ①利用資格 ②支払方法 ③複写料金の見直し（「複写料金の申告せ」の見直しを含む）④貸出条件（期間、貸出冊数等）⑤事前連絡を必要とする資料 ⑥ハンドブックへの取りまとめ ⑦年間開館時間数（日数も含む）：調査項目 ⑧四大学間の利用状況：調査項目</p> |
| | 当日 研修会 | <p>開催日：1994 年 11 月 30 日 場所：関西大学高槻キャンパス</p> <ol style="list-style-type: none"> 基調報告 テーマ：大学および図書館の自己点検・自己評価 立命館大学図書館次長 岩佐英宣氏 報告 1 テーマ：（関大）自己点検・評価体制と事務組織による検討過程について 報告 2 テーマ：（同志社）利用者サービスを中心とした自己点検・評価と業務改善 報告 3 テーマ：関西学院大学および図書館の自己点検・評価 報告 4 テーマ：利用状況から見た立命館大学図書館の課題 |
| 1995 (平成 7) | 研修会 | <p>開催日：1995 年 11 月 8 日 プログラム 1 テーマ：レファレンス担当者の要件</p> <ol style="list-style-type: none"> 報告発表（関学） <ol style="list-style-type: none"> ①図書館における専門的職員の必要性 ②レファレンス担当職員について ③関西学院大学におけるレファレンス業務 ④関西学院大学におけるレファレンス等図書館職員の養成について ⑤今後の課題 報告発表（立命館） <ol style="list-style-type: none"> ①個人の能力 ②集団の能力 ③利用促進活動 |
| | | <p>開催日：1995 年 11 月 15 日 プログラム 2 テーマ：カリキュラムと蔵書構成</p> <ol style="list-style-type: none"> 蔵書のカリキュラムへの反映 <ol style="list-style-type: none"> ①教員の協力体制 ②カリキュラムに対する資料の選書の範囲と基準 ③運用と利用 リタイヤ（除籍～第 2 の選書～） 入手不可資料の取扱いについて 蔵書評価について |

| | | |
|----------------|-----------|--|
| | | <p>プログラム 3</p> <p>テーマ：目録業務の現状と将来</p> <p>関学における目録業務の現状と今後の課題、将来展望について</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学術情報センターの利用 2. データの質とOPAC、マーク 3. 目録と閲覧 4. 学術情報センターの共同分担目録事業 5. 目録業務（資料組織化）の新展開と人材育成 |
| 1996 (平成 8) | 研究会 | <p>テーマ：ニューメディアについて～各大学の事例報告と問題点の確認、今後の方向性～「ニューメディアの予算と収書、利用について」</p> <p>第 1 回研究会</p> <p>開催日：1996 年 10 月 2 日</p> <p>場所：関西学院大学</p> <p>内容：1. 今後の進め方についての検討</p> <p>2. 四大学としてのニューメディアの定義</p> <p>第 2 回研究会</p> <p>開催日：1996 年 10 月 16 日</p> <p>場所：同志社大学</p> <p>内容：各大学の事例報告（予算、収集範囲、サポート体制、利用条件等）</p> <p>第 3 回研究会</p> <p>開催日：1996 年 11 月 20 日</p> <p>場所：立命館大学</p> <p>内容：1. 現在の問題点の整理とその対応～総合、運用（収集範囲、予算、ハード等）</p> <p>2. 現在の問題点の整理とその対応～利用（課金、提供環境、利用者教育等）</p> <p>3. 今後の課題のまとめ</p> |
| | 当日 研修会 | <p>第 1 回研修会</p> <p>開催日：1996 年 11 月 12 日</p> <p>場所：関西学院大学</p> <p>内容：収書業務におけるアウトソーシング</p> <p>発題：関西学院大学</p> |
| | | <p>第 2 回研修会</p> <p>開催日：1996 年 11 月 7 日</p> <p>場所：関西学院大学神戸三田キャンパス</p> <p>内容：整理業務におけるアウトソーシング</p> <p>発題：関西大学、同志社大学</p> |
| | | <p>第 3 回研修会</p> <p>開催日：1996 年 11 月 12 日</p> <p>場所：関西学院大学</p> <p>内容：カウンターサービスにおけるアウトソーシング</p> <p>発題：同志社大学、立命館大学</p> |
| 1997 (平成 9) | 研修会 | <p>開催日：1997 年 11 月 5 日</p> <p>場所：関西学院大学</p> <p>テーマ：図書館の公開</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関西学院大学 新図書館オープン翌年の 1998 年 4 月から実施予定の一般公開制度について 2. 立命館大学 1994 年 4 月から開始している一般公開について |

| | | |
|-----------------|-----------|---|
| | | <p>3. 関西大学 卒業生、定年退職者等の利用について</p> <p>4. 同志社大学 卒業生への貸出、一般市民への公開について</p> |
| | 研修会 | <p>開催日：1997 年 11 月 12 日 場所：関西学院大学 テーマ：図書館と広報活動 図書館ホールにて各大学のホームページ紹介 印刷媒体を含めた広報活動について各館から発表の後意見交換 ・HP 紹介 ・各館の活動</p> |
| | 研究会 | <p>開催日：1997 年 11 月 19 日 場所：関西大学 テーマ：関西四大学図書館相互利用マニュアルの見直し</p> |
| 1998 (平成 10) | 合宿 研修会 | <p>開催日：1998 年 11 月 12 日～13 日 場所：立命館大学びわこ・くさつキャンパス テーマ：「図書館コンソーシアム」 「大学図書館の役割と自己点検・評価：新世紀へ向けての私立大学図書館の経営のあり方」 「同志社大学における情報ネットワークを基盤とした組織戦略」</p> |
| 1999 (平成 11) | 研修会 | <p>開催日：1999 年 11 月 5 日 場所：同志社大学 テーマ：外国語雑誌を取り巻く状況について</p> |
| | 研修会 | <p>開催日：1999 年 11 月 12 日 場所：同志社大学 テーマ：ホームページを利用したサービス展開～電子図書館への取り組み～</p> |
| 2000 (平成 12) | 研修会 | <p>開催日：2000 年 11 月 10 日 場所：関西学院大学 テーマ：メディアの多様化に対応したレファレンス (インターネット情報、CD-ROM、オンラインデータベース他)</p> |
| | 研修会 | <p>開催日：2000 年 11 月 20 日 場所：関西学院大学 テーマ：大学図書館の機能と組織～図書館の中核的組織能力をめぐって～ 図書館情報大学 永田治樹教授</p> |
| 2001 (平成 13) | 研修会 | <p>開催日：2001 年 11 月 20 日 場所：関西大学 テーマ：これからの図書館職員像</p> |
| 2002 (平成 14) | 研修会 | <p>開催日：2002 年 12 月 13 日 場所：立命館大学 テーマ：図書館における『エクステンション・サービス』をさぐる ～情報リテラシーと攻めの図書館サービス～</p> |
| 2003 (平成 15) | 研修会 | <p>開催日：2003 年 11 月 11 日 場所：同志社大学京田辺キャンパス テーマ：大学における著作権について 1. コイン式複写機の管理 2. ILL 業務との関連についてディスカッション 講演：大学図書館における著作権～情報サービスの新たな展開に向けて～ 京都大学附属図書館情報管理課長 森生也氏</p> |

| | | |
|-----------------|-----------|--|
| | 研究会 | 開催日：2003 年 11 月 11 日、他、メールによる実施 場所：同志社大学 テーマ：データベースの契約について |
| 2004 (平成 16) | 研究会 | 開催日：2004 年 11 月 2 日、他メールによる実施 場所：関西学院大学 テーマ：電子ジャーナル等に関する四大学ネットワーク活用 |
| | 合宿 研修会 | 開催日：2004 年 11 月 19 日、20 日 場所：関西学院大学、有馬龍泉閣 テーマ：「図書館活動と評価」 講演 1：大学図書館経営の新境地を拓く 慶応義塾大学文学部 高山正也教授 講演 2：図書館活動の活性化を ～ライブラリーマネジメント・ゼミナールの試み 国立女性教育会館客員研究員 尼川洋子氏 1 日目：講演会 2 日目：各校発題と質疑、ディスカッション |
| 2005 (平成 17) | 研修会 | 開催日：2005 年 12 月 2 日 場所：関西大学 テーマ：大学図書館の広報について |
| 2006 (平成 18) | 研修会 | 開催日：2006 年 12 月 5 日 場所：立命館大学 テーマ：学術情報の利用促進について |
| 2007 (平成 19) | 研修会 | 開催日：2007 年 11 月 14 日 場所：同志社大学 テーマ：大学図書館職員の新たな役割 基調講演：同志社大学教育開発センター所長 山田礼子教授 |
| 2008 (平成 20) | 研修会 | 開催日：2008 年 11 月 21 日 場所：関西大学 テーマ：図書館の危機管理について |
| 2009 (平成 21) | 研修会 | 開催日：2009 年 11 月 24 日 場所：関西学院大学 テーマ：図書館の利用促進に向けた取り組みについて 基調講演：「書店に学ぶ読書空間の活性化」 夙川学院短期大学 湯浅俊彦准教授 |
| 2010 (平成 22) | 研修会 | 開催日：2010 年 11 月 17 日 場所：立命館大学 テーマ：図書館の来館型利用の促進に向けた取り組みについて |
| 2011 (平成 23) | 研修会 | 開催日：2011 年 11 月 11 日 場所：同志社大学 テーマ：電子情報のよりよい提供に向けて |
| 2012 (平成 24) | 研修会 | 開催日：2012 年 11 月 28 日 場所：関西学院大学 テーマ：学習・教育支援と大学図書館 |

(2) 図書館職員の発表論文等

| 年 | 著者 | 論文タイトル | 掲載雑誌 | 巻号 | 備考 |
|------|---------------|--|-----------------------------|--------|---|
| 1927 | 昭和2 中島猶治郎 | Cutter's Alphabetical Order Tableと管理法に対する一考察 | 図書館雑誌 | 21(4) | |
| 1927 | 昭和2 中島猶治郎 | 分類法と件名事項の関係と辞書体目録に就いて | 図書館雑誌 | 21(5) | |
| 1927 | 昭和2 中島猶治郎 | 田中敬氏に答ふ | 図書館雑誌 | 21(6) | 図書館研究叢書第4編として発行された、鞠谷、中島の「目録編成法」に対する田中氏の批評(88号)に答えたもの |
| 1929 | 昭和4 中島猶治郎 | Dana 先生の長逝を悼む | 図書館研究 | 2 | |
| 1929 | 昭和4 中島猶治郎 | 図書分類法概論 | 図書館研究 | 2 | |
| 1930 | 昭和5 中島猶治郎 | 翻訳書のカード記入法私案 | 図書館雑誌 | 24(3) | |
| 1930 | 昭和5 中島猶治郎 | 分類細目と件名の関係に就いて | 図書館雑誌 | 24(8) | |
| 1930 | 昭和5 中島猶治郎 | 読書法に就いて | 図書館雑誌 | 24(12) | |
| 1933 | 昭和8 中島猶治郎 | 誤用される分類統一論 | 図書館雑誌 | 27(1) | |
| 1933 | 昭和8 南 論造 | 和漢図書目録法に於ける書名主記入と著者名主記入 | 図書館雑誌 | 27(5) | |
| 1935 | 昭和10 中島猶治郎 | 図書館は果して教育機関なりや | 図書館研究 | 8 | |
| 1936 | 昭和11 中島猶治郎 | 辞書体目録と図書分類に就いて | 図書館研究 | 9 | |
| 1936 | 昭和11 南 論造 | 図書館随想 | 図書館研究 | 9 | |
| 1940 | 昭和15 南 論造 | 宇垣大將の真摯なる図書館参観 | 図書館研究 | 13 | |
| 1943 | 昭和18 中島猶治郎 | 満洲図書館協会ニ就イテ | 図書館雑誌 | 37(3) | |
| 1963 | 昭和38 芝 英八郎 | 図書館利用の実態とその問題点 —関西学院大学の場合— | 私立大学図書館協会会報 | 39 | |
| 1964 | 昭和39 芝 英八郎 | 近世文書の件名標目化について | 磨研録 (私立大学図書館協会西地区部会研究紀要) | 1 | |
| 1964 | 昭和39 芝 英八郎 | 近世文書の件名標目化について —近世文書件名目録法の一思索— | 私立大学図書館協会会報 | 41 | 昭和38年度秋季関西西部会報告 |
| 1964 | 昭和39 入交 光三 | 貸出方式 | 私立大学図書館協会会報 | 41 | 昭和38年度阪神地区研究会 |

| 年 | 著者 | 論文タイトル | 掲載雑誌 | 巻号 | 備考 |
|------------|-------|--|---------------------------------|----------------|----------------------------|
| 1965 昭和 40 | 入交 光三 | 著者記号表に関する一つの試み 附、著者記号表 | 磨研録 (私立大学図書館協会西 地区部会研究紀要) | 2 | |
| 1965 昭和 40 | 入交 光三 | 大学図書館収書政策 | 私立大学図書館協会会報 | 44 | |
| 1965 昭和 40 | 入交 光三 | CATALOGING-IN-SOURCE について | 私立大学図書館協会会報 | 45 | 私立大学図書館協会 第 26 回総大会研究発表 |
| 1966 昭和 41 | 平山 和一 | 標目撰定をめぐる編者・編纂者の取扱い方について | 私立大学図書館協会会報 | 47 | |
| 1966 昭和 41 | 入交 光三 | 大学図書館の施設・設備について〔大会談事〕 | 私立大学図書館協会会報 | 47 | |
| 1966 昭和 41 | 入交 光三 | 大学図書館会計論 | 磨研録 (私立大学図書館協会西 地区部会研究紀要) | 3 | |
| 1967 昭和 42 | 芝 英八郎 | 閲覧業務の内容について | 私立大学図書館協会会報 | 48 | |
| 1967 昭和 42 | 入交 光三 | 大学図書館統計雑感 | 私立大学図書館協会会報 | 48 | |
| 1969 昭和 44 | 芝 英八郎 | 近世庶民史料の分類について | 磨研録 (私立大学図書館協会西 地区部会研究紀要) | 6 | |
| 1969 昭和 44 | 入交 光三 | マープル紙 その歴史・技術・美 | 私立大学図書館協会会報 | 52 | 私立大学図書館協会 第 29 回総大会研究発表 |
| 1970 昭和 45 | 入交 光三 | 非常時の措置 －大学紛争の中の図書館－ | 私立大学図書館協会会報 | 54 | |
| 1970 昭和 45 | 入交 光三 | 「主題」の在り方について | 私立大学図書館協会会報 | 54 | |
| 1970 昭和 45 | 入交 光三 | 師友・協会・私 | 私立大学図書館協会会報 | 54 | |
| 1971 昭和 46 | 南 論造 | 図書館員における真実の追究 | 私立大学図書館協会会報 | 56 | |
| 1974 昭和 49 | 田中 力 | 館員研修のあり方を考える －閑字図書館における事例を中心として－ | 私立大学図書館協会会報 | 62 | |
| 1989 平成元 | 桑代 正一 | 市販データベースを使って業務改善－関西学院大学図書館 の場合（特集：図書選択の現状と課題 II. 図書選択の現 状を考える） | 図書館雑誌 | 83(11) | |
| 1994 平成 6 | 今村 大朗 | 国立国会図書館に期待すること | 国立国会図書館月報 | 400・401 合併号 | 国立国会図書館関西館への 要望を提言 |

| 年 | 著者 | 論文タイトル | 掲載雑誌 | 巻号 | 備考 |
|------|---|---|-------------|-------|-----------------------------|
| 1995 | 平成 7 安本 裕和 | 検索システム開発事例 | 私立大学図書館協会報 | 102 | |
| 1995 | 平成 7 魚住 英子 | ALA 認可ライブラリースクールにおける図書館・情報学教育 ーハワイ大学大学院を例に | 同志社大学図書館学年報 | 21 | |
| 1995 | 平成 7 Eiko Uozumi (魚住英子) | The Impact of CD-ROM on Reference Services and Bibliographic Instruction in Academic Libraries. | 同志社図書館情報学 | 6 | |
| 1995 | 平成 7 安本 裕和 | 関西学院大学図書館システム概要 (私立大学図書館協会平成 6 年度 (第 55 回) 総大会・研究会記録-メインテーマ「足元を見つめつつ、大学図書館の新たな展開を」-第 1 分科会 図書館のシステム化とネットワークを使った図書館サービス [含 質疑応答]) | 私立大学図書館協会報 | 103 | 第 55 回私立大学図書館協会総大会 分科会講演 |
| 1995 | 平成 7 浜田 行弘 | 漢字とコンピュータ ー文字と文字コードの標準化ー活字が消えても文字は残る (私のおすすめ本 〈特集〉) | 情報の科学と技術 | 45(7) | |
| 1997 | 平成 9 今村 太朗 | 関西学院大学図書館における CD-ROM サービス ー現状と課題 (特集：図書館資料としての CD-ROM) | 図書館雑誌 | 90(5) | |
| 1997 | 平成 9 Eiko Uozumi (魚住 英子) | Evaluating Reference Librarians in Academic Libraries. (邦題 大学図書館におけるレファレンス業務の評価) | 同志社図書館情報学 | 8 | |
| 1997 | 平成 9 〔著〕マイケル・ ゾーマン 〔訳〕渡辺信一 魚住英子 | 21 世紀における図書館およびライブラリアンシップ ー太平洋沿岸の諸国に関連して (特別公開講演) | 同志社大学図書館学年報 | 23 | |
| 2000 | 平成 12 浜田 行弘 | 図書館の選書・発注業務と書籍流通ーファアイル共有とエクストラネット | 図書館界 | 50(3) | |
| 2000 | 平成 12 市河原雅子 村上 幸江 魚住 英子 | 関西学院大学図書館におけるレファレンスサービスの試み ー2 課チーム制によるレファレンスカウンター開設とその後の実践 (事例報告) | 大学図書館研究 | 58 | |
| 2000 | 平成 12 魚住 英子 | 大学図書館における留学生への対応 ー米国の事例をもとに | 同志社図書館情報学 | 11 | |
| 2004 | 平成 16 伊藤 幸江 (村上) | 人文・社会科学分野における主題に即した利用教育の検討 ：利用者研究と主題別情報探索法指導 | 図書館界 | 56(4) | |

| 年 | 著者 | 論文タイトル | 掲載雑誌 | 巻号 | 備考 |
|------|--------------------------------|--|-------------|---------|----|
| 2005 | 伊藤 幸江 | 人文・社会科学分野における主題別情報探索法指導の検討－事例からの考察 | 図書館界 | 57(4) | |
| 2006 | 魚住 英子 | アメリカの大学図書館見学記 レファレンスデスクからバーチャルレファレンスヘ ーイリノイ大学図書館におけるレファレンスサービス | 同志社大学図書館学年報 | 32 | |
| 2006 | 魚住 英子 小島 勢子 | 2005年度私立大学図書館協会海外集合同修報告 ーイリノイ大学図書館における職員研修を中心に(小特集 図書館職員の研修・スキルアップ) | 大学図書館研究 | 78 | |
| 2006 | 魚住 英子 | ACRL「高等教育のための情報リテラシー能力基準」日本 語版の意義 | 大学図書館研究 | 78 | |
| 2006 | 市河原雅子 | れふあれんず三題断 連載その百三十三／関西学院大学図書館の巻－求めなさい、探しなさい、門をたたきなさい | 図書館雑誌 | 100(8) | |
| 2007 | 魚住 英子 小島 勢子 鈴木 昭子 (他) | 2005年度海外集合同修報告 (私立大学図書館協会第67回(2006年度)総会記録－総 会・研究大会記録) | 私立大学図書館協会報 | 127 | |
| 2008 | 魚住 英子 | 大学図書館が教育・リテラシーに果たす役割 －情報リテラシー教育とインフォメーション・コモنز (2006年度国立国会図書館調査研究報告書 米国の図書館 事情 2007－社会的な論点と図書館) | 図書館研究シリーズ | 40 | |
| 2008 | 市河原雅子 | 第2分科会 大学・短大・高専図書館 学術情報の発信とさらなる活用 をめざして(平成20年度(第94回)全国図書館大会ハイ ライト) | 図書館雑誌 | 102(12) | |
| 2012 | 伊藤 幸江 | 学生の利用のため今ここに行けること：私立総合大学の選 書の立場から ー関西学院大学図書館の最近の取り組みを踏まえてー | 大学図書館研究 | 94 | |

(3) 職員研修：宿泊研修および講演会

夏期宿泊研修

| 年度 | 開催年月日 | 演題等 | 開催場所 | 備考 |
|------|---------------------------------|--|--------|------|
| 1973 | 昭和 48 1973 年 8 月 24～ 25 日 | 館員のモラルとあるべき姿勢 館員からみたあるべき管理職像 | 仁川ハイッ | 全員参加 |
| 1974 | 昭和 49 1974 年 7 月 15～ 16 日 | 講演：大学の歴史 全体討議：大学職員と図書館員の役割 | 神戸私学会館 | 全員参加 |
| 1975 | 昭和 50 1975 年 8 月 28～ 29 日 | 詳細不明 | 不明 | |
| 1976 | 昭和 51 1976 年 8 月 30～ 31 日 | 講演：2 次資料の利用方法について 中嶋正夫大谷女子大学助教授・同図書館副館長 | 不明 | |

職員研修用講演会

| 年度 | 開催年月日 | 演題等 | 講師 | 講師所属等 |
|------|---------------------------|-----------------------|----------------|---|
| 1971 | 昭和 46 1971 年 6 月 26 日 | 情報検索と電子図書館 | 大野 才三 | 理学部教授 |
| 1972 | 昭和 47 1972 年 10 月 21 日 | 大阪府立図書館蔵書目録の刊行と経緯その他 | 山下日出子 樋口美和子 | 大阪府立図書館参考係長・元 総合目録編成室班長 大阪府立図書館目録分類係長 |
| 1973 | 昭和 48 1973 年 10 月 13 日 | 第 1 回書誌解題：歴史について | 藤木喜一郎 | 文学部教授 |
| 1975 | 昭和 50 1975 年 11 月 1 日 | 日本の近代文芸を中心とした講演会 | 水谷 昭夫 | 文学部教授 |
| 1976 | 昭和 51 1976 年 11 月 20 日 | マスコミに関する文献資料について | 津金澤聡広 | 社会学部教授 |
| 1978 | 昭和 53 1978 年 9 月 30 日 | 中国雑感 | 八重津洋平 | 社会学部教授 |
| 1979 | 昭和 54 1980 年 2 月 21 日 | 死海写本 | 芦沢 偵吉 | 講談社専務、日本キリスト教 団豊島岡教会会員 |
| 1981 | 昭和 56 1982 年 3 月 1 日 | 学術情報システムと図書館情報管理 | 池田 秀人 | 筑波大助教授 |
| 1982 | 昭和 57 1983 年 3 月 12 日 | 大学図書館と視覚障害者 ～その現状と課題～ | 関 宏之 | 日本ライオハハウス常務理事 |
| 1983 | 昭和 58 1983 年 12 月 22 日 | これからの大学図書館に期待するもの | 関 集三 | 理学部教授 |
| | 1984 年 3 月 27 日 | 中国の高等教育と大学図書館 | 趙 鳳彬 | 中国吉林大学経済系副教授 |
| 1984 | 昭和 59 1985 年 3 月 9 日 | 私と図書館のつきあい方 | 小原二三夫 | 大学院社会学部研究科研究員 |

| 年度 | 開催年月日 | 演題等 | 講師 | 講師所属等 |
|------|-------------|--|-------------------|--------------------|
| 1985 | 昭和 60 | 大学図書館の直面する課題～関西大学としての対応～ | 濱瀬 善雄 | 関西大学総合図書館運営課長 |
| 1986 | 昭和 61 | 人権教育と図書館員の役割 | 湯木 洋一 | 学長代理・神学部教授 |
| 1987 | 昭和 62 | 図書館とニューメディア | 三上 市蔵 | 関西大学工学部教授 |
| 1988 | 1988年7月12日 | アメリカの出版事情について（第1回収書情報の会） | 大西 和夫 | 関西学院大学生協書籍部店長 |
| | 1988年9月21日 | ロンドンにおける出版事情等について（第2回収書情報の会） | 井出 武志 | 丸善株式会社 |
| | 1988年10月19日 | トロントの図書館事情等について（第3回収書情報の会） | 今村 太朗 | 閲覧課職員 |
| | 1988年11月11日 | 日米大学図書館会議に出席して（第4回収書情報の会） | 八重津洋平 | 図書館長 |
| | 1989年2月18日 | 金沢大学の図書館建設 | 永田 治樹 | 金沢大学図書館情報サービス課長 |
| 1989 | 1989年4月27日 | これからの大学図書館と図書館員 | 原田 勝 | 京都大学教育学部助教授 |
| | 1989年10月11日 | 古書コレクションの流通事情について～本学図書館蔵書との関連を含めて～（第5回収書情報の会） | 富田 修二 | 丸善株式会社 美術・古書部部長 |
| | 1989年11月13日 | 米国大学図書館の収書について～全米一の取次店 Baker & Taylor から見て～（第6回収書情報の会） | Laure C. Aubuchon | Baker & Taylor 社 |
| | 1989年12月20日 | なぜ、図書館の情報化か | 斉藤 明 | 早稲田大学事務システムセンター調査役 |
| | 1990年1月17日 | 図書館収書業務の新たな展開について（第7回収書情報の会） | 谷川 恭生 | 関西学院大学生協書籍部 |
| 1990 | 1990年4月18日 | 大学図書館の収書のあり方について－特別文庫のあり方について－（第8回収書情報の会） | 大庭 健吉 | 大阪城南女子短期大学講師 |
| | 1990年6月13日 | 貴重図書の収集、整理、保管について（第9回収書情報の会） | 佐藤 図 | 紀伊國屋書店古書部 |
| | 1990年9月17日 | 図書館情報システムの動向－製品保証の立場から－ | 中尾 健治 | 日本アイ・ビー・エム株式会社 |
| | 1990年10月26日 | 関西学院大学図書館所蔵経済学古典資料について（第10回収書情報の会） | 田中 敏弘 | 経済学部教授 |
| | 1991年1月16日 | Harrassowitz とドイツの出版事情－ドイツの中のアメリカ－（第11回収書情報の会） | 谷川 恭生 | 関西学院大学生協書籍部 |
| 1991 | 1991年2月13日 | 慶応大学図書館の内地研修を終えて（第12回収書情報の会） | 磯辺 彰 | 閲覧課職員 |
| | 1991年3月20日 | 学術情報センターとしての大学図書館（第13回収書情報の会） | 濱瀬 善雄 | 関西大学図書館運営課長 |

| 年度 | 開催年月日 | 演題等 | 講師 | 講師所属等 |
|------|-------------------|--|-------------------------|--------------------------------------|
| 1991 | 1991年7月1日 | ニューメディア(CD-ROM、オンラインDB等)について(第14回 収書情報の会) | 平山 惠三 | 紀伊國屋書店オンライン課長 |
| | 平成3 1992年3月23日 | 図書館と障害者サービス | 藤井 千年 | 尼崎市立中央図書館長 |
| | | ①中国人民大学図書館の訪問を終えて ②トロント大学語学研修を終えて ③早稲田大学図書館の内地研修を終えて (第15回収書情報の会) | 八重津洋平 北山 雅博 桑代 正一 | 図書館長 閲覧課職員 運営課職員 |
| 1993 | 1994年3月8日 | ヨーロッパの出版事情(第16回収書情報の会) | 岡見 精夫 | 関西学院大学生協書籍部 |
| 1995 | 1996年3月13日 | 新大学図書館における利用者サービス | 芝田 正夫 | 社会学部教授 |
| | 1996年3月22日 | 図書館建築と利用者サービス | 富江 伸治 | 筑波大学教授 |
| 2001 | 2001年4月27日 | 建学の精神と聖書：ウエスレー、ランバース、ペーツ | 山内 一郎 | 神学部教授 |
| | 2001年5月10日 | 聖書はとてどもミスデリアス | 田淵 結 | 文学部教授 |
| 2003 | 2003年9月30日 | アウトカム指標を中心とした図書館パフォーマンス指標の類型と活用 | 糸賀 雅児 | 慶應義塾大学文学部教授 |
| 2005 | 2005年7月28日 | リーガルリサーチー法学文献の探し方講習会 | 門 昇 | 大阪大学法学研究科資料室 大阪大学法学部講師 |
| | 2005年9月26日 | 利用者対応相談「こんなときどうすればいいの？」 | 川喜田好恵 | 大阪ドーンセンター 神学部非常勤講師 |
| 2006 | 2006年7月25日 | 資料保存研修 -資料保存の基本を学ぶ | 栗木 衛 | 株式会社コデックス |
| 2007 | 2008年2月20日 | 講座・イベントなどの企画・業務フローの作成・プレゼンテーション を学ぶ | 尼川 洋子 稲葉 洋子 | 人と情報をつなぐ WE プロデ ュース代表 国立民族学博物館 |
| 2008 | 2009年2月26日 | 図書館カウンターの対人コミュニケーションの技術 (図書館マナー研修①) | — | 株式会社キャリアパワー |
| 2009 | 2009年7月30日 | 利用者対応における言葉遣い (図書館マナー研修②) | — | 株式会社キャリアパワー |

| 年度 | 開催年月日 | 演題等 | 講師 | 講師所属等 |
|------|---------------------------|--|-------------------------|--|
| 2010 | 2010年7月30日 | レファレンスツールを知る－国立国会図書館のツールを使う | 小川 那瑠 中世古重希子 | 国立国会図書館関西館 |
| | 2010年8月11日 | 韓国の図書館の最新事例報告 | 川崎 安子 | 武庫川女子大学図書館 |
| | 2010年10月18日 | これからの図書館のシステムを考える | 入江 伸 | 慶應義塾大学メディアイアセンター本部課長 |
| | 2010年10月28日 2010年12月2日 | 大学図書館の明日を考えよう（発題、グループ討議、グループ発表） | 安本 裕和 渡部 信吾 澤村 裕 | 運営課主幹 運営課主幹 運営課主任 |
| | 2011年2月15日 | 中国の図書館を巡って | 今村 太朗 | 運営課長 |
| | 2011年3月10日 | ERMS について | 増田 豊 | ユサコ株式会社 システム販売事業部 |
| | 2011年6月20日 | 関西学院大学 SmartPhone 向け教務システム KGD の開発 | 芝辻 裕太 渡辺 翔太 | 理工学部4年生 |
| 2011 | 2011年6月30日 | 学術ポータル Ufinity を知ろう | — | 富士通株式会社 文教ソリューション事業本部 |
| 2012 | 2011年11月28日 | 大学図書館の役割 | 中野 幸紀 | 総合政策学部教授 |
| | 2012年5月21日 | 電子情報セミナー in 関西学院2012 ～電子ジャーナルの“今”を知る～ ①電子時代の新しい図書館戦略：予算可視化による電子ブックの活用 ②電子ジャーナルの最新動向とバックファイル | ジョナサン・ バンケル 永井光太郎 | プロクセス・ 部門担当副社長 株式会社紀伊國屋書店仕入流通本部雑誌部次長 |
| | 2012年7月27日 | 法令・議会・官庁情報の探し方を学ぶ | 中島 寛 | 国立国会図書館利用者サービス部 |
| | 2013年2月28日 | 海外集合研修に参加して－東アジアにおける電子化推進図書館を見る | 瀬戸口雅士 | 神戸三田キャンパス図書館メデア館職員 |

13 対外業務・活動

(1) 兵庫県大学図書館協議会

* 原本が縦書きのものは、横書きで掲載した。

① 阪神間図書館協議会々則

阪神間図書館協議会々則

- 第一條 本会ハ阪神間図書館協議会ト云ヒ事務所ヲ宝塚文藝図書館ニオク
- 第二條 本会ハ阪神間及ソノ近傍ニ在ル図書館ノ連絡ヲ計リ相協力シテ図書館事業ノ進歩発展ヲ促シ以テ新文化国家建設ニ寄與スルヲ以テ目的トス
- 第三條 本会ハ右ノ目的ヲ達成スル爲比ノ事業ヲ行フ
- 1、毎年一回ノ総会及隔月ニ一回ノ連絡協議会ヲ開催ス
総会ハ本会ノ運営ニ付キ相談シ事業ノ経過報告ヲナス
臨時緊急事項アルトキハ臨時総会ヲ催スコトヲ得
 - 2、図書館ノ種類ニヨリ学校図書館及公共図書館ノ二部ニ分ケ各部毎ニ臨時部会ヲ各図書館輪番ニテ催シ各図書館施設及事業ノ紹介並特殊事情ニ基キテ協議ヲナス
 - 3、各図書館催物ノ宣傳ニ協力スル
 - 4、図書入手斡旋、藏書ノ交換又ハ、貸與等ノ友誼的關係ヲ厚クス
 - 5、図書館用品ノ共同購入及製作ヲナス
 - 6、各図書館ノ情報ヲ常時交換シテ経営上ノ資料トナス
 - 7、ソノ他本会ノ目的ヲ達成スルニ必要ナル事項ヲナス
- 第四條 本会ノ会員ハ阪神間各地及ソノ近傍ニ設置サレタル図書館ヲ以テ会員トシ、ソノ代表者一名ヲ理事トナス
- 理事ノ内適當ナルモノ一名ヲ常任理事トシ各部会毎ニ部会理事ヲ選任シ、常任理事及部会理事ヲ以テ本会ヲ運営シ、ソノ他理事ハ本会事業ノ評議ニ掌ル
- 第五條 常務理事及部会理事ノ任期ハ一ヶ年トス 但シ重任ヲ妨ゲス
- 第六條 会員ノ加入及脱退ハ理事会ノ議決ニヨツテ常務理事之ヲ決ス
- 第七條 本会ノ経費ハ寄附金及分担金ヲ以テ処理ス
- 第八條 本会則ノ変更ハ総会ニヨツテ議決ス

②兵庫縣大学図書館協議會會則（昭和 28 年 5 月 26 日改正）

兵庫縣大学図書館協議會會則

（昭和二十二年七月十九日制定）

昭和二十八年五月二十六日改正

- 第一條 本會は兵庫縣大学図書館協議會と稱し事務所を例會開催図書館に置く
- 第二條 本會は図書館並びにその運営に関する研究を行い併せて會員相互の協力と親密を圖ることを目的とする
- 第三條 本會は右の目的を達成する爲に春秋二回に例會を開く
但し緊急の事項あるときは臨時會を開くことができる
- 第四條 本會は兵庫縣内の大学図書館を會員とする
- 第五條 理事は例會開催會員と前回開催會員の二名とする
次回開催會員（理事）は例會においてこれを選出する
- 第六條 入會は例會の決議による
- 第七條 本會の経費は會費及び寄附金をもってこれにあてる
會費については別にこれを定める
- 第八條 この會則は例會の決議によって変更することができる

③兵庫県大学図書館協議會規約（昭和 46 年 5 月 24 日施行）

兵庫県大学図書館協議會規約

（名 称）

第 1 条 この会は兵庫県大学図書館協議會という。

（目 的）

第 2 条 この会は兵庫県内の大学図書館の充実・発展を期するため、図書館の管理・運営に関して、連絡・協議・調査研究を行ない、會員相互の協力と親睦をはかることを目的とする。

（会 員）

第 3 条 この会は兵庫県内の大学図書館をもつて會員とし、その入・退会は総会にはかかる。

（総 会）

第 4 条 総会は年 2 回開くこととする。ただし、必要あるときは臨時に総会を開くことができる。

2. 総会の運営は、会場館の協力を得て、役員館が行なう。

(委員会および部会)

第5条 この会には総会の同意を得て、その目的達成上必要な委員会または部会をおくことができる。

(研修・研究委員会)

第6条 この会に研修・研究委員会をおき、総会において選出された委員館をもつて構成する。

2. 前項に定める委員会の組織および運営等については別に定める。

(役員)

第7条 この会に 幹事館 1、 副幹事館 若干 をおく。

2. 役員は総会において選出し、任期は1年とし、再任を妨げない。

3. 幹事館は会を代表し、会務を行ない、副幹事館は幹事館を補佐する。

(会計)

第8条 この会の経費は会費（年額1,000円）その他をもつてあて、会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

(規約の変更)

第9条 この規約は総会の承認を経て変更することができる。

附 則

(施行期日)

1. この規約は昭和46年5月24日から施行する。

(旧会則の廃止)

2. 兵庫県大学図書館協議会会則（昭和22年7月19日制定）は、これを廃止する。

(経過措置)

3. 兵庫県大学図書館協議会会則によって認められた職員研修委員会は、この規約第6条によりおかれたものとみなす。

申し合わせ

1. 幹事館・副幹事館は毎年少なくとも1館は留任することが望ましい。

2. 総会等の費用はこの会の負担とし、総会等の昼食代は参加者が支出し、会場館の負担とならないよう配慮する。

以 上

④兵庫県大学図書館協議会研修・研究委員会規則（昭和46年5月24日施行）

兵庫県大学図書館協議会 研修・研究委員会規則

（趣 旨）

第1条 兵庫県大学図書館協議会（以下「協議会」という。）規約第6条に規定する研修・研究委員会の組織運営等については、この規則の定めるところによる。

（事 業）

第2条 この会は次の事業を行なう。

1. 研修会
2. 研究会
3. その他必要な事業

（委員および役員）

第3条 協議会規約第6条によつて選ばれた委員館の任期は1年とし、互選によつて主務館および副主務館各1館を定める。

2. 主務館は、この会を代表し、会務を行ない、副主務館は主務館を補佐する。

（部会その他の組織）

第4条 この会はその事業遂行上必要な部会その他の組織をおくことができる。

（会 計）

第5条 この会の経費は協議会からの補助金その他をもつてあてる。

（報 告）

第6条 主務館は前年度の事業状況および決算状況を委員会の承認を経て協議会に報告しなければならない。

（改 正）

第7条 この規則の改正は委員会において行ない、協議会の承認を受けなければならない。

附 則

この規則は昭和46年5月24日から施行し、同時に兵庫県大学図書館協議会研修会規約（昭和37年10月17日施行、昭和43年10月8日改正）は廃止する。

申し合わせ

委員館は毎年半数ずつ交替するように、また館種が偏らないように努めること。

⑤兵庫県大学図書館協議会議題（第2回～第20回）

*神戸商科大学図書館の担当者により作成された資料から抜粋した。

*縦書きの資料を横書きで表した。

兵庫県大学図書館協議会 議題

第二回

- 一、目的図書のを在を公開所在索引に便利に致し度し
- 二、新刊図書にして、稍々もすれば入手し難きものあり。是が確保のため、本協議会の名をもつて、日本出版配給株式会社に連絡交渉するの件
- 三、阪神間図書館協議会加盟学校教官研究の爲、各学校図書館で、図書を自由に閲覧借用の便を与えられたきこと
- 四、図書購入の実情を承り度し
- 五、学生の図書館利用時間に就て
- 六、図書館現況を宝塚文芸図書館に報告の件

第三回

- 一、GHQ に対し、米国新刊図書入手斡旋方を協議会員連名にて懇請の件（神経大）

第四回

- 一、神戸女子薬専新設図書館図面の検討
- 二、教授之の貸出情況、学生之の貸出情況承り度し

第五回

- 一、兵庫県図書館協議会設立の件
- 二、現在協議会を拡大して、西日本図書館協議会とする要なきや
- 三、「法律第一七一号に関連し、古書代價査定機関設置及至指定方々運動の件」

第六回

- 一、兵庫県図書館協会の会則について再審議
- 二、兵庫県図書館協会学校部会の組織について
- 三、分類並に書架配列に、和漢と洋書とを別置するの便不便（神外専）
- 四、洋書購入の時、書名を邦訳して市会計課へ廻すにつき、他校の事情如何（神外専）

第七回

- 一、不用図書を相互に融通する方法如何（神外専）
- 二、個人蔵書の買入に際して、取引商税証紙はどうするか
- 三、公共図書館法案について

第八回

- 一、中国人を著者名目録に採る時の配列法如何 (外 大)
- 二、著者記号の採用法如何 (〃)
- 三、N. D. C. と日本図書館協会新訂案との喰違いに左のものがある。いづれに分類すべきか
 - (a) 企業経営が N. D. C. では経済。協会案では商業
 - (b) 協会案では金融から物価貨幣為替が独立し、銀行が金融と一緒になっている
- 四、教職員への貸出制度を承りたい (外 大)

第九回

- 一、専門書と学生用教養書との割合承りたし
- 二、各学校図書館の統計報告を一枚刷り謄写の件
- 三、政令第一七一号と古本価格処理につき各校の実状承り度し
- 四、近畿大学図書館連盟（仮称）と本部会との関係 (神経大・神外大)
- 五、各種の専門を互に利用し合える様に重要な蔵書及將來の蒐書の方針をお尋ねし度し (神女薬大)

第十回

- 一、書庫及び閲覧室の構造や設備について (外 大)
- 二、アメリカの図書館について (神女学院)
- 三、司書の名称について
- 四、講習会について
- 五、図書館学について

第十一回

- 一、著者記号について
- 二、兵庫縣図書館協会及宝塚文芸図書館の廢止に関して阪急の社長訪問の件
- 三、宝塚文芸図書館の存続を運動しては如何 (外 大)

第十二回

- 一、一般教養図書に関し其の内容冊数等について
- 二、各校經常費に対する図書館經費について

第十三回

- 一、雑誌に関する諸問題について
 - (a) 雑誌購入額の全購入額に対する割合について
 - (b) 前渡資金の問題について
 - (c) 一般綜合雑誌の取扱情況

- (d) 新聞につき
- 二、大学図書館基準案について
 - (a) 図書館の等級と蔵書について
 - (b) 図書館法に関する疑議
 - (c) 司書資格について
- 三、本会の開催を他の協会に連絡する件

第十四回

- 一、大学図書館の職階制について
- 二、ガリオア図書購入の経過について
- 三、既處経済図書の改訂分類法による適当なる事務的取扱方法について

第十五回

- 一、手軽な文献複写設備に付て
- 二、各大学図書館に付て
- 三、事務組織
- 四、研究報告に付て

第十六回

- 一、司書職階制に公立大学は準拠すべきか (神外大)
- 二、司書講習会の受講について承りたし (神外大)

第十七回

- 一、短期大学図書館に関する件
- 二、近畿大学図書館會議開設について
- 三、司書職制度実施促進の件
- 四、学外（市民）の利用について

第十八回

- 一、土曜日の午後並に、日曜日及夜間の開館について承りたし
- 二、夏期休暇の開館状況承り度し
- 三、文部省及大学基準協会への報告図書分類欄を一定するように、文部省並大学基準協会へ申請するの件
- 四、第二次近畿地区国立大学図書館協議会への加入の件
- 五、読書週間について実施事項承り度し
- 六、ガリオア注文の精算方法について承りたし
- 七、洋雑誌の注文並支払について承りたし
- 八、姫路工大内の短大、加古川短大等に次回より案内状を発送すること

第十九回

- 一、映画・講演・展覧などその他図書館の行事の御計画があれば承りたし (兵庫医大)
- 二、昭和二十六年度・二十七年度の図書費承りたし (神外大)
- 三、著者記号を使用する便・不便 (ク)
- 四、配架上、和洋書を区別するの便・不便 (ク)
- 五、卒業期にある学生に対する貸出図書の回収方法につき承りたし (関西学院)
- 六、指定図書の運用につき承りたし (ク)
- 七、二月二十一日より実施予定の地方価格について如何なる処置をとるべきか (兵農短大)

第二十回

- 一、図書館専門職員講習会の受講計画と司書職の実施状況承りたい (神商大)
- 二、簡単な製本(修理)についての実状を承りたい (姫路工大)
- 三、新入学生に対する図書館案内について承りたい (関西学院)
- 四、図書の除籍取扱方について承り度い (ク)
- 五、除籍する場合に於ける各図書館の取扱方について承りたい (海技専門)
- 六、本協議会の運営方針について (神戸医大)
- 七、アメリカ文化センターの利用方について (アメリカ文化センター)

以上

⑥兵庫県大学図書館協議会研修会・研究会 (1988 年以降の関西学院大学図書館担当分)

| 年月日 | 種類 | 場所 | テーマ等 | 参加者 |
|---------------|-------|--------------------------|---|-----------|
| 1988年 9 月27日 | 研修会 | 関西学院大学学生会館 および大学図書館 | テーマ：学術情報センター総合目録データベースを利用した図書システム ①関西学院大学図書館システム事例報告 ②図書管理サブシステム概要紹介およびデモンストレーション | 24 館 36 名 |
| 1989年 7 月20日 | 研修会 | 関西学院大学学生会館 | 総合テーマ：図書館整理の省力化と迅速配架計画 －利用者サービスの向上を目指して－ 事例報告：①関西学院大学図書システムと外注整理方式との連携 ②関西学院大学学生生活協同組合による整理現場紹介 | 30 館 42 名 |
| 1991年 9 月27日 | 研究会 | 関西学院大学図書館 | テーマ：CD-ROM とパソコンを使った目録検索システム 講演①：CD-ROM とパソコンを使った目録検索システム 講演②：CD-ROM の作り方－CD-ROM の構造およびデータ処理について 講演：富江伸治筑波大学助教授 「これからの大学図書館の施設計画について」 | 17 館 35 名 |
| 1992年 8 月 4 日 | 研究会 | 関西学院大学学生会館 | テーマ：学術情報センター ILL システムの現状と課題－参加館の立場から | 17 館 39 名 |
| 1992年 9 月30日 | 研究会 | 関西学院大学図書館 | 総合テーマ：図書システムの現状と課題 発表①：近畿大学図書館システムの現状と課題 発表②：神戸市外国語大学図書館システムの現状と課題 発表③：園田学園女子大学図書館システムの現状と課題 | 23 館 34 名 |
| 1994年 9 月22日 | 研究会 | 関西学院大学学生会館 | 総合テーマ：大学図書館の経営と評価を考える 講演：①高山正也慶應義塾大学文学部教授 「大学図書館経営の新境地を拓く」 ②尼川洋子国立女性教育会館客員研究員 「図書館活動の活性化を～ライブラリーマネージメント・ゼミナールの試み」 | 30 館 48 名 |
| 2004年11月19日 | 講演会 | 関西学院大学図書館 ホール | | 40 館 78 名 |
| 2007年 1 月27日 | 施設見学会 | 大手前大学メディアライ ブラリー CELL | | 27 館 39 名 |
| 2007年12月 9 日 | 研究会 | 関西学院大学図書館 ホール | 総合テーマ：目録の将来と大学図書館 講演：平田義郎国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課係長 「NACSIS-CAT の現状、課題、将来」 事例報告：①神戸市外国語大学学術情報センター ②神戸常盤短期大学図書館 ③関西学院大学図書館 | 34 館 65 名 |

| 年月日 | 種類 | 場所 | テーマ等 | 参加者 |
|-------------|-------|------------------------------------|--|-----------|
| 2009年10月27日 | 施設見学会 | 大阪大学附属図書館 総合図書館ラーニング commons | | 18 館 38 名 |
| 2009年11月19日 | 研究会 | 関西学院大学図書館 ホール | 総合テーマ：機関リポジトリ概論 講演：①村上祐子東北大学大学院理学研究科准教授 「機関リポジトリとコミュニケーション」 ②伊藤義人名古屋大学情報戦略室長 「機関リポジトリと大学の役割と今後」 | 35 館 66 名 |
| 2012年10月23日 | 研究会 | 関西学院大学図書館 ホール | 総合テーマ：図書館員と教員、学生との連携を考える 講演：竹内比呂也千葉大学文学部日本文化学科教授 「アカデミック・リンクの取り組み：千葉大学における新しい学習環境の構築」 事例報告：①甲南大学図書館「甲南大学における教科支援図書館ガイドランス」 ②関西学院大学図書館「関西学院大学図書館における利用教育検討チーム の取り組み」 | 38 館 84 名 |

(2) 私立大学図書館協会

①私立大学図書館協会関係の活動記録

| 年度 | | 回 | 事項 |
|-----------|----------|--------|--|
| 1941 | 昭和 16 | 第 4 回 | 加盟 |
| 1948～1949 | 昭和 23～24 | | 関西西部会幹事校 |
| 1952～1953 | 昭和 27～28 | | 司書職法制化委員会 |
| 1954 | 昭和 29 | 第 14 回 | 中島猶治郎、勤続四十年で勤続賞を受ける 中島猶治郎、議長団に指名される |
| 1957～1960 | 昭和 32～35 | | 理事校 |
| 1957 | 昭和 32 | | 関西西部会春季部会会場校 |
| 1958～1959 | 昭和 33～34 | | 研修、及び司書職に関する委員会 |
| 1960 | 昭和 35 | 第 21 回 | 総・大会会場校 |
| 1961～1964 | 昭和 36～39 | | 監事校 |
| 1961～1964 | 昭和 36～39 | | 文献所在情報センター制度調査研究委員会 |
| 1967～1968 | 昭和 42～43 | | 理事校 |
| 1975～1984 | 昭和 50～59 | | 協会賞審査委員会委員 書誌・歴史部門（芝英八郎） |
| 1977 | 昭和 52 | | 阪神地区協議会相互協力分担保存実施要領検討委員会 |
| 1978～1980 | 昭和 53～55 | | 阪神地区協議会相互協力分担保存検討委員会 |
| 1983～1986 | 昭和 58～61 | | IFLA 東京大会組織委員会委員（平井祐二） |
| 1985～1986 | 昭和 60～61 | | 常任理事校 |
| 1985～1986 | 昭和 60～61 | | 大学図書館国際連絡委員会 |
| 1985～1986 | 昭和 60～61 | | 国公私立大学図書館協力委員会 |
| 1987～1988 | 昭和 62～63 | | 西地区監事校 |
| 1987～1993 | 昭和62～平成5 | | 機械化委員会 学情ネットワーク検討作業委員（87-90 北山雅博、91-93 中村順治） |
| 1989～1992 | 平成元～4 | | 機械化委員会 東西両地区委員、西地区責任者（北山雅博、平成3年度より中村順治） |
| 1989～1993 | 平成元～5 | | 国公私立大学図書館協力委員会 |
| 1989～1994 | 平成元～6 | | 阪神地区協議会小委員会 |
| 1990～ | 平成 2～ | | 阪神地区相互利用運営委員校 |
| 1991～1992 | 平成 3～4 | | 国公私立大学図書館協力委員会 |
| 1991～1993 | 平成 3～5 | | 西地区部会役員校 |
| 1992～1993 | 平成 4～5 | | 阪神地区協議会分担保存検討委員会 |
| 1993～1994 | 平成 5～6 | | 阪神地区協議会機械化研究会世話人校 |
| 1993 | 平成 5 | | 平成5年度第1、2回阪神地区機械化研究会会場校 |
| 1994 | 平成 6 | | 平成6年度第1、2回阪神地区機械化研究会会場校 |
| 1997～1998 | 平成 9～10 | | 自己点検・評価手法ガイドライン作成委員会委員（中村順治） |

| 年度 | | 回 | 事項 |
|-----------|----------|--------|---------------------------------|
| 1998～2004 | 平成 10～16 | | 国際図書館協力委員会 |
| 2001 | 平成 13 | | 国際図書館協力シンポジウム会場校 |
| 2006 | 平成 18 | 第 67 回 | 総会・研究大会会場校 |
| 2007～ | 平成 19～ | | 協会賞審査委員会委員（中村順治、平成 20 年度より今村太朗） |
| 2007～2011 | 平成 19～23 | | 「大学図書館研究」編集委員会委員（市河原雅子） |
| 2011～2012 | 平成 23～24 | | 国際図書館協力委員会 |

※昭和 13 年全国私立大学図書館協議会創立

※昭和 18 年私立大学図書館協会と改称

※昭和 24 年関西西部会の結成

※昭和 33 年関西西部会にて阪神地区研究会、京都地区研究会を承認

※昭和 40 年第 26 回総・大会にて、「関東部会」を「東地区部会」、「関西西部会」を「西地区部会」と改めることを承認

②私立大学図書館協会研究会等の発表記録

| 年度 | 研究会等名称 | 種類 | | 氏名 | テーマ |
|-----------------|------------|-----|---------|-------|---|
| 1958 (昭和 33) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 研究発表 | 入交光三 | 著者記号法試案 |
| 1960 (昭和 35) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 報告・研究発表 | 中井政寿 | 辞書体目録配列における記入の問題 |
| 1960 (昭和 35) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 研究報告 | 入交光三 | 「和漢書目録配列におけるローマ字分ち書きの研究」及び「不在図書の原因調査について」 |
| 1961 (昭和 36) | 京都地区研究会 | 研究会 | 研究発表 | 平山和一 | 海外マイクロ・フィルミングの諸例とそのカタログニング |
| 1962 (昭和 37) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 討議 | 芝 英八郎 | 図書館利用の実態とその問題点 |
| 1963 (昭和 38) | 第 24 回総・大会 | 研究会 | 研究分科会司会 | 入交光三 | 大学図書館建築の諸問題 |
| 1963 (昭和 38) | 秋季関西西部会 | 研究会 | 研究発表 | 芝 英八郎 | 近世文書の件名標目化について－近世文書件名目録法の一試案－ |
| 1963 (昭和 38) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 討議 | 入交光三 | 貸出方式 |
| 1965 (昭和 40) | 第 26 回総・大会 | 研究会 | 研究発表 | 入交光三 | Cataloging in Source |
| 1965 (昭和 40) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 研究発表 | 平山和一 | 標目選定をめぐる編纂者の取り扱いについて |
| 1966 (昭和 41) | 第 27 回総・大会 | 大会 | 議事発題 | 入交光三 | 大学図書館の施設・設備について |
| 1966 (昭和 41) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 研究発表 | 入交光三 | 逐次刊行物の整理についての二、三の問題点 |
| 1966 (昭和 41) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 研究発表 | 芝 英八郎 | 閲覧業務の内容について |
| 1968 (昭和 43) | 第 29 回総・大会 | 研究会 | 研究発表 | 入交光三 | マール紙、その歴史・技術・美 |
| 1969 (昭和 44) | 第 30 回総・大会 | 研究会 | 特別報告 | 入交光三 | 非常時の措置－大学紛争のなかの図書館 |
| 1969 (昭和 44) | 秋季西地区部会 | 研究会 | 研究発表 | 入交光三 | 主題の在り方について |
| 1969 (昭和 44) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 講演 | 入交光三 | 目録の簡素化について |
| 1970 (昭和 45) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 講演 | 南 諭造 | 図書館員における真実の追究－著者名・書名・刊年－ |
| 1970 (昭和 45) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 討議 | 芝 英八郎 | 大学図書館改革の一側面－学生の要望と図書館運営について－ |
| 1971 (昭和 46) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 分科会司会 | 芝 英八郎 | 和漢書目録と洋書目録の混排について |
| 1971 (昭和 46) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 座談会 | 入交光三 | 館員の養成 |

| 年度 | 研究会等名称 | 種類 | | 氏名 | テーマ |
|-----------------|----------------------------|-------------|------------|--------------|--|
| 1973 (昭和 48) | 西地区部会秋季部会 | 研究会 | 研究発表 | 田中 力 | 館員研修のあり方を考える |
| 1974 (昭和 49) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 個人研究発表 | 土井義一 | 関学大図書館の視聴覚室について |
| 1977 (昭和 52) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 研究発表 | 徳田真二 | 大学図書館の図書選択について |
| 1981 (昭和 56) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 事例発表 | 戸田 隆 | 視聴覚資料ならびに視聴覚室の管理について |
| 1982 (昭和 57) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 事例報告 | 磯辺 彰 | 館報について |
| 1982 (昭和 57) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 事例報告 | 吉村淳子 | 蔵書構成について |
| 1983 (昭和 58) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 事例報告 | 中村順治 | 外国資料の収集について |
| 1987 (昭和 62) | 第 48 回総大会・研究会 | パネルディスカッション | パネラー | 長尾文雄 | 図書館と情報ネットワーク |
| 1989 (平成元) | 阪神地区機械化研究会 | 研究会 | 事例発表 | 北山雅博 | 学術情報センター総合目録データベースを利用した図書館システム（関西学院大学図書館の事例） |
| 1990 (平成 2) | 機械化委員会（ライブラリーオートメーションセミナー） | パネルディスカッション | パネラー | 北山雅博 | 機械化の課題と今後の展望について |
| 1990 (平成 2) | 阪神地区機械化研究会 | 研究会 | 報告 | 北山雅博 | 私立大学図書館協会機械化委員会をめぐる状況等について |
| 1993 (平成 5) | 秋季西地区部会研究会 | 研究会 | 研究発表 | 安本裕和 | 目録検索システム開発事例 |
| 1993 (平成 5) | 阪神地区機械化研究会 | 研究会 | 事例報告 実演 | 安本裕和 渡部信吾 | 関西学院大学図書館システムについて－OPAC を中心に－ |
| 1993 (平成 5) | 阪神地区機械化研究会 | 研究会 | 報告 | 迫田圭介 | 大規模図書館の図書システムの現状と課題－アンケート調査結果のまとめ－ |
| 1994 (平成 6) | 第 55 回総大会・研究会 | 研究会 | 報告 | 安本裕和 | 関西学院大学図書館システムの現状と今後の課題 |
| 1998 (平成 10) | 阪神地区機械化研究会 | 研究会 | 施設見学 | | 関西学院大学図書館見学 |
| 1998 (平成 10) | 阪神地区機械化研究会 | 研究会 | 事例発表 | 浜田行弘 | 選書・発注システムの導入と業務－図書館業務と書籍流通のネットワーク－ |
| 2000 (平成 12) | 阪神地区研究会・阪神地区機械化研究会共催 | パネルディスカッション | パネラー | 市河原雅子 | 館種を超えた図書館協力－関西学院大学図書館の現状と課題－ |
| 2002 (平成 14) | 九州地区研究会 | パネルディスカッション | パネラー | 浜田行弘 | アウトソーシングについての現状報告 |

| 年度 | 研究会等名称 | 種類 | | 氏名 | テーマ |
|-----------------|---------------|------|------|------|---------------------------------|
| 2005 (平成 17) | 西地区部会研究会 | 研究会 | 研究発表 | 中鶴三奈 | 関西学院大学図書館における障がい者支援サービスの取組みについて |
| 2006 (平成 18) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 事例報告 | 中鶴三奈 | 大学図書館における地域公開の現状と課題 |
| 2006 (平成 18) | 第 67 回総会・研究大会 | 研究大会 | 研修報告 | 魚住英子 | 2005 年度海外集合研修報告 |
| 2008 (平成 20) | 西地区部会 | 研究会 | 研究発表 | 今村太郎 | 競争的資金と図書資料のデジタル化 |
| 2009 (平成 21) | 第 70 回総会・研究大会 | 研究大会 | 研修報告 | 角田貴彦 | 2008 年度海外集合研修報告 |
| 2010 (平成 22) | 阪神地区研究会 | 研究会 | 研修報告 | 今村太郎 | 中国の図書館を巡って |

※阪神地区研究会は 1957（昭和 32）年より開始

(3) 関西四大学図書館長会議

* 1964 年に関西四大学図書館長懇談会が発足し、1969 年に関西四大学図書館長会議に名称変更した。

* 1964 年から 1978 年の記録が見当たらないため掲載していない。

* 会議記録より抜粋した。

| 開催年月日 | 当番校 | 開学出席者 | 議題・内容等 | 配布資料等 |
|--------------------|------------|-------|--|-------|
| 1979 年 7 月 3 日 | 関西学 院大学 | 不明 | I. 議題 全学図書総合管理について II. 承合事項 1) マイクロ資料、貴重図書の保管について (関学) 2) 選書における館員のかわり方について (関学) | 不明 |
| 1979 年 11 月 6 日 | 関西 大学 | 不明 | I. 議題 1) 第 3 回関西四大学図書館職員夏期研修会報告 2) 第 4 回夏期研修会について 3) 1980 年度図書資料費要求について | 不明 |
| 1980 年 3 月 11 日 | 同志社 大学 | 不明 | I. 議題 1) 1980 年度各大学図書費予算について (同志社) 2) 1980 年度春期当日研修日程について (関学) II. その他 1) 関西四大学図書館相互協力規約 (関大) 2) ハワイ大学図書館アジアコレクションからの整理業務要員派遣要請について (同志社) 3) 滞貨図書処理について (同志社) 4) 学術審議会の「今後における学術情報システムの在り方について」報告 | 不明 |
| 1980 年 6 月 30 日 | 立命館 大学 | 不明 | I. 議題 1) 関西四大学図書館職員研修会第 2 期 (78 年秋～80 年夏) の総括と報告 (関学) 2) 関西四大学夏期研修会の開催について (関学) 3) 機械化グループの指針提言について (関学) II. 承合事項 身障学生に対する図書館施設について (関学) | 不明 |
| 1980 年 11 月 5 日 | 関西学 院大学 | 不明 | I. 議題 1) 関西四大学夏期研修会報告 2) 機械化グループと館長会メンバーとの討議報告 (立命館) 3) 関西四大学図書館長会議規約、相互利用協定等 (関大) | 不明 |

| | | | | |
|----------------|-------|---|---|---|
| 1981年 3月23日 | 関西大学 | 図書館長 阪本仁作 運営課長 青山茂生 整理課長 宮本義澄 閲覧課長 箕浦太一郎 | <p>I. 議題</p> <p>1) 関西四大学図書館長会議規約(案)について(関大) 各大学の閲覧担当課長で検討してまとめた規約案を協議の結果承認(3月23日締結、4月1日施行)</p> <p>2) 関西四大学相互利用協定(案)について(関大) 一部文言を修正の上承認(3月23日締結、4月1日施行) *協定施行の日をもって「資料の利用に関する関西四大学図書館相互協力規約」を廃止</p> <p>3) 電子式複写料金を1枚20円とすることを申合せた</p> <p>4) 昭和56年度関西四大学の図書予算について(同志社) 目録を中心とした電算化の経緯について(同志社)</p> <p>5) その他 同志社、立命館から機械化の現状報告</p> <p>①昭和56年度関西四大学図書館職員研修会夏期研修会(案)について(関大) 日時：7月13日～15日 場所：高野山普賢院 内容：講演と討論の二本立て</p> <p>②立命館大学図書館の私立大学図書館協会常任理事校就任について(立命館)</p> <p>③1981年度～1982年度就任について挨拶 ④次回当番校とした</p> | <p>「関西四大学図書館相互利用協定」(1981年3月23日締結、1981年4月1日施行)</p> <p>「関西四大学図書館長会議規約」(1981年3月23日締結、1981年4月1日施行)</p> <p>「1981年度関西四大学図書費(予算)および教員・学生数表」(1981年3月1日現在)</p> |
| 1981年 6月22日 | 同志社大学 | 図書館長 阪本仁作 次長 芝英八郎 運営課長 平井祐二 整理課長 宮本義澄 閲覧課長 松尾繁晴 | <p>I. 報告事項</p> <p>関西四大学図書館職員当日研修会について 第3期第2回(5月11日～15日)の総括報告(関大) ・庶務・収書グループ 日時：5月11日 場所：関西大学東西学術研究所会議室 内容：資料とともに大学図書館の選択機構、収書方針の在り方について議論 次回テーマを「蔵書構成」とする</p> <p>・整理グループ 日時：5月12日 場所：立命館大学図書館会議室 内容：洋書目録の現状と問題点～LCカードを中心として～ 次回テーマを「目録の標準化～NCR新版を中心にして～」とする</p> <p>・奉仕グループ 日時：5月13日 場所：関西学院大学図書館会議室</p> | <p>「関西四大学図書館長会議記録」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第5回夏期研修会実施要項(案)」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会講演依頼等に関する謝礼金内規(案)」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第3期第4回幹事会メモ」</p> |

| | | | | |
|--|--|--|--|--|
| | | | 内容：相互利用の現状と問題点 次回テーマを「ブックデザイン・テクニクシヨシステムのその後」、「利用統計について（統計の種類とその利用法）」、「身障者問題について」とする | 「関西四大学図書館職員研修会庶務係事務研修会第3期第2回記録」 |
| | | | ・雑誌グループ 日時：5月14日 場所：同志社大学図書館実習室 内容：国際標準書誌記述（逐次刊行物用）=ISBD（S）について 次回テーマとして「各大学内での利用体制」、「関大の集中管理方式」、「立命の雑誌センター構想」などについて情報交換を行う | 「関西四大学整理グループ研修会（第3期）第2回報告」 |
| | | | ・機械化グループ 日時：5月16日 場所：関西大学 内容：JAPAN-MARC の利用の仕方 ISBN について 関西大学図書館雑誌管理システムの見学 次回は各館の参加者が独自の考案で貸出システムの機械化案を持ち寄る | 「第3期第2回関西四大学図書館職員研修会奉仕グループ記録」 「関西四大学図書館職員研修会第3期第2回雑誌グループ記録」 |
| | | | II. 議題 関西四大学図書館職員夏期合宿研修会（第5回）開催について（関大） 別紙実施要項について了承 幹事会から提案のあった「講演者礼金内規」（案）について申合せ事項として了承 日時：7月13日～15日 場所：高野山普賢院 テーマ：大学図書館のあり方 第1分科会：資料収集について 第2分科会：情報サービスについて | 「関西四大学図書館職員研修会第3期」報告第2回 |
| | | | III. その他 1) 欠号補充のための文献複写協力依頼について（同志社） 2) 視覚障害者への対応について（同志社） 3) レファレンスに関する自館作成のツールについて（同志社） 4) 分類表の共同検討について（同志社） 5) マイクロフィルムとの閲覧について（立命館） 6) 文部省の学術情報システムとの対応について（関学） 以上6件について懇談 | |

| | | | | |
|-----------------|-----------|--|---|---|
| 1981年 10月26日 | 立命館 大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 阪本仁作 芝英八郎 平井祐二 宮本義澄 松尾繁晴 | <p>I. 議題</p> <p>1) 関西四大学図書館職員研修会当日研修会の実施について (立命館) 第3期第3回当日研修会実施について、日程、テーマ等について報告があり了承</p> <ul style="list-style-type: none"> ・庶務・収書グループ 日時：11月9日 場所：立命館大学 内容：蔵書構成論 ・整理グループ 日時：11月10日 場所：関西学院大学 内容：目録の標準化～NCR 新版を中心にして～ ・奉仕グループ 日時：11月11日 場所：同志社大学 内容：①ブックデティテクションシステムのその後 ②利用統計について～統計の種類と利用法 ③身障者問題について ・雑誌グループ 日時：11月12日 場所：関西大学 内容：雑誌利用の体制、方法について ・機械化グループ 日時：11月13日 場所：立命館大学 内容：貸出システムの機械化について <p>2) 関西四大学図書館職員研修会夏期合宿研修会の報告について (関大)</p> <p>3) その他</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大型資料の購入に関して (関大) 分担収集は困難なため、収書段階の相互協力事項として大型資料を購入した場合は、各大学間で情報交換を行い、重複を避けたいとの提案があり、可能なところから着手することを了承 2. 1館でできないことを4館共同でやれないか (関大) 3. 国文学研究資料館よりの依頼の件について (同志社) 各大学の漢籍、国書の整備状況について情報交換 4. 図書館業務の機械化について (立命館) 立命館の機械化検討の状況説明と各大学の状況報告 | <p>「関西四大学図書館長会議 記録」</p> <p>「高価本リスト」(同志社大 学)</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会1981年(第5回)夏 期研修会収支決算書」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会1981年(第5回)夏 期研修会(記録)」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会・日程及研修テーマ」</p> |
|-----------------|-----------|--|---|---|

| | | | | | |
|----------------|------------|------------------------------------|--------------------------------------|---|---|
| 1982年 3月24日 | 関西学 院大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 阪本仁作 芝英八郎 平井祐二 宮本義澄 松尾繁晴 | <p>I. 協議事項</p> <p>1) 1981年秋期当日研修会の報告（立命館） 第3期第6回幹事会記録により1981年秋期当日研修会の報告があった奉仕グループが次回貸出システムの機械化をテーマにするにつき専門業者を招聘したいとの希望があり、これを承認</p> <p>2) 1982年春期当日研修会の日程について（立命館） 関西四大学図書館職員研修会（第3期第4回）の当日研修会日程案を承認</p> <p>3) 1982年夏期合宿研修会について（立命館） 日程、場所等は未定。会場は大阪商工会議所賢島研修センターの予定 研修テーマについては幹事会に一任することを承認</p> <p>II. 懇談事項</p> <p>1982年度図書費予算および教員・学生数について</p> <p>III. 承合事項</p> <p>1) 近世文書の刊行について（関大） 関西大学図書館資料シリーズ第一輯「江戸書状その一」について 刊行経過と関大所蔵の近世文書の整理状況について報告</p> <p>2) 学部専門課程学生への図書館オリエンテーションについて（関学）</p> <p>3) 指定図書について（関学）</p> <p>4) 視覚障害者読書室の現況について（関学）</p> | <p>「1982年度関西四大学図書費〔予算〕および教員・学生数」</p> <p>「関西四大学図書館の業務分担一覧表」（関西四大学図書館職員研修会 第2期庶務・収書グループ作成）</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第3期第6回幹事会記録」</p> <p>「江戸書状その一」（関大出版部チラシ）</p> |
| 1982年 6月22日 | 関西 大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 阪本仁作 芝英八郎 平井祐二 松尾繁晴 尼子卓司 | <p>I. 議題</p> <p>1) 関西四大学図書館職員研修会（第3期）の報告と総括について（立命館） ・幹事会記録に沿って報告。研修会の今後の在り方について協議の結果、当日研修会5グループのうち、機械化グループの発展的解消を承認 ・機械化問題については他の各グループの中で検討することとしつつ、夏期研修会にその場を設けることを配慮する。各グループ間の横のつながりを保持した総合、調整の場が必要とされ、幹事会で協議の上館長会議に報告することとなった</p> <p>2) 関西四大学図書館職員夏期研修会の開催について（立命館） 第6回実施要項を承認 日時：7月12日～14日 場所：大阪商工会議所 賢島研修センター テーマ：大学図書館の機械化（トータルにどう進めていくべきか） 講師：広島大学附属図書館学術情報係 板垣護人氏</p> <p>3) 関西四大学図書館相互利用について（関大） 現行の関西四大学相互利用協定（1981年3月締結）をさらに一歩進めて、文献複写料金の決済方式を含めて改善のための検討の場を設けること、および資料収集を通じて四大学間の緊密な協力関係をもつため継続的な情報交換の場を設けることを提案</p> | <p>「関西四大学図書館職員研修会第3期第7回幹事会記録」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第3期各グループのまとめ-1982.6-」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第6回夏期研修会実施要項（案）」</p> <p>「関西四大学図書館相互利用協定」</p> |

| | | | | | |
|-----------------|-----------|------------------------------------|--------------------------------------|--|---|
| 1982年 10月26日 | 同志社 大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 阪本仁作 芝英八郎 平井祐二 松尾繁晴 尼子卓司 | <p>1. 相互利用関係の推進、改善のために、主任以上の職制による検討委員会を設け館長会議に報告させる</p> <p>2. 収集についての協力体制として、収書担当者で構成する情報交換の場を設ける 以上2件が了承された</p> <p>I. 報告事項</p> <p>1) 関西四大学図書館職員研修会第6回合宿研修会について（立命館） 広島大学の図書業務電算化の経緯と実情についての講演が好評との評価。次年度も逐刊や整理等について継続して欲しいとの意見が出された</p> <p>2) 合宿研修会収支決算の報告を了承</p> <p>・秋期当日研修会第4期第1回について日程、内容の報告があった（同志社） ・収書・庶務グループ 日時：11月15日 場所：関西大学 内容：受贈本の評価基準について、収書情報について</p> <p>・整理グループ 日時：11月16日 場所：立命館大学 内容：各図書館の現状報告、目録業務の電算処理について</p> <p>・奉仕グループ 日時：11月17日 場所：同志社大学 内容：図書館利用の向上を目指して～利用指導について～</p> <p>・雑誌グループ 日時：11月18日 場所：関西学院大学 内容：雑誌利用の分担目録と分担保存を中心とした相互協力 ～学術情報システムに向けて～</p> <p>3) 関西四大学図書館相互利用に関する検討委員会についての中間報告があった（同志社） 〈議題①〉文獻複写料金の問題（決済方法）について ・関西四大学間に限って、複写料金・郵送料の決済を年1回互いに相殺、清算する ・決済の期間は3月1日に始まり翌年2月末を区切りとして行う ・複写料金を統一し、現行より安くする方向で検討することも確認されたが、文獻複写が近年活発化する中で全体とのバランスを欠いて安くなることへの問題点指摘もあり、1枚20円～35円の幅で対応し得るよう各大学に持ち帰り検討する</p> | <p>「関西四大学図書館職員研修会 1982年（第6回）夏期研修会収支決算書（案）」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第4期研修会当番校予定表」</p> <p>「1982年秋期研修会日程（第4期第1回）」</p> <p>「関西四大学相互利用に関する検討委員会記録」</p> |
|-----------------|-----------|------------------------------------|--------------------------------------|--|---|

| | | | | | |
|----------------|-----------|------------------------------------|--------------------------------------|---|--|
| 1983年 3月23日 | 立命館 大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 阪本仁作 芝英八郎 平井祐二 松尾繁晴 尼子卓司 | <p>《議題②》文献複写を除く相互利用問題について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・院生に限っては、学生証を持参し、手続きをすれば閲覧貸出が可能。ただし、その範囲は大学院前期及び後期に在籍する学生に限る。オーバーワーク・研修生等は当面対象とはしない ・貸出期間、冊数等利用全般はそれぞれの大学の規則に則る ・上記の対応は各大学の図書館所蔵文献に限るが、部局分についても可能な限り努力する <p>* 貸出、開架書庫への入庫については懸案の大学もあり、結論は次回に持ち越すこととなった</p> <p>II. その他（承合事項）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 関西四大学間の図書資料の収集について（関大） 2) 取書担当者で構成する情報交換の場の設定を近々行うとの説明 円安の現在、外国雑誌の収集、契約について（立命館） <ol style="list-style-type: none"> 1. 各大学はどうしているか 2. 契約に対してどんな方針を持っているか <p>立命館：レポートをその時点に合わせて業者とマージンを打合せて価格を決めている</p> <p>関大：契約時に折衝して決めている</p> <p>関学：丸筆が価格表を持参する。欠号補充がしにくいので国内業者3社に絞っている</p> <p>同志社：各教科で個々に対応している。出入業者間の調整や学内調整は行っていない。外国雑誌を一番多く購入している部科の契約結果に準じている</p> | <p>「関西四大学図書館相互利用協定」（1983年4月1日改正）</p> <p>「関西四大学図書館相互利用に關する申合せ事項」（1983年3月23日）</p> <p>「1983年度 関西四大学図書資料費（予算）」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第4期第4回幹事会記録」</p> |
|----------------|-----------|------------------------------------|--------------------------------------|---|--|

| | | |
|--|---|--|
| | <p>場所：関西学院大学 内容：返納個研図書の取扱いについて 出版界の流通機構について（TRC より）</p> <ul style="list-style-type: none">・整理グループ 日時：5月17日 場所：同志社大学 内容：整理業務とは 機械化入力を前提とした読みの問題（和漢書を中心に）・奉仕グループ 日時：5月18日 場所：立命館大学 内容：参考業務の現状と課題～カウンター業務との関連において～・雑誌グループ 日時：5月19日 場所：関西大学 内容：学術情報システムへの対応としてのオンラインネットワークを作 り上げることに 3. 夏期研修会の開催について 第7回夏期研修会の計画について報告 日程を変更することを条件に了承 日時：後日幹事会で調整 場所：いこいの村びわ湖 テーマ：大学図書館業務の機械化について 講師：広島大学から機械化担当者1名 3) 関西四大学図書館相互利用に関する申合せ事項について 関大濱瀬課長より経過説明のあと立命館大長屋課長から別紙にもとづき提 案があり、承認。成立日付は3月23日付で4月1日付で発効することとで 了承 <p>II. 承合事項 洋書目録の電算入力について（関学） ・関学より、洋書（宗教部門関係）の整理に関してオフラインタッチ処理方式 による電算化を行うことについて先行の同志社、立命館と同じ日本電子計算 を委託先としたことの報告と協力依頼があった ・立命館からも同志社に対してシステムを参考、利用することについて依頼が あり、了解が得られた</p> | <p>「関西四大学図書館職員研 修会第4期第2回当日研修 会テーマ（予定）」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会第4期第3回幹事会記 録」</p> |
|--|---|--|

| | | | | | |
|----------------|------------|------------------------------------|--------------------------------------|---|--|
| 1983年 6月29日 | 関西学 院大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 阪本仁作 芝英八郎 平井祐二 松尾繁晴 尼子卓司 | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 1983年度春期当日研修会（第4期第2回）について（同志社）</p> <p>2) 研修総括と各グループの討議内容について報告（同志社）</p> <p>6月14日開催の標記連絡会の内容について報告</p> <p>各大学における図書費予算、大型コレクションの購入、研究設備購入計画、マイクロ資料の取扱い、欧文新聞紙の取扱い、図書購入に伴う割引等について意見交換。今後年2回程度情報交換を行うことを報告</p> <p>II. 協議事項</p> <p>1) 1983年度夏期合宿研修会開催について（同志社）</p> <p>第7回の実施要領にもとづき説明があり了承</p> <p>日時：7月4日～6日</p> <p>場所：いこいの村 びわ湖</p> <p>テーマ：図書館の機械化について</p> <p>講師：広島大学附属図書館整理学情報係 板垣護人氏</p> <p>2) 関西四大学図書協会の取扱い、図書購入について（同志社）</p> <p>3月31日四大学相互利用に関する検討委員会を開催し「複写料金の暫定統一料金について」の合意をみたため1983年4月1日から実施したいとの提案があり承認</p> <p>* 暫定統一料金を35円とする。全国的な統一料金が決定された場合、その時点で再検討する</p> <p>3) 関西四大学図書協会の取扱いについて（同志社）</p> <p>「協定」第3条（教職員、院生は身分証明書、学生は各館発行の依頼状によって利用できる）による利用に関して各館ができるだけ統一する方向で協議を進めるとともに「取扱要領」に準拠して取扱うことを了承</p> <p>III. 懇談事項</p> <p>1) 全学図書資産に対する適正損害（火災）保険加入と支払い保険料について（同志社）</p> <p>2) 私立大学図書協会相互協力委員会の報告（同志社）</p> <p>同志社服部課長から話題提供ののち懇談</p> | <p>「関西四大学図書協職員研修会第7回夏期研修会実施要領」</p> <p>「複写料金の暫定統一料金について」</p> <p>「関西四大学図書協相互利用に関する検討委員会記録」</p> <p>「関西四大学図書協相互利用協定」（1983年4月1日改正）</p> <p>「関西四大学図書協相互利用に関する申合せ事項」（1983年3月23日）</p> <p>「関西四大学図書協相互利用に関する取扱要領」（1983年4月1日）</p> <p>「関西四大学図書協図書資産保全（火災保険）実態表」</p> <p>「第3回私立大学図書協会相互協力委員会協議要旨」</p> <p>私立大学図書協会相互協力委員会委員長宛て「報告書の提出について」</p> <p>「第4回私立大学図書協会相互協力委員会協議要旨」</p> |
|----------------|------------|------------------------------------|--------------------------------------|---|--|

| | | | | |
|-----------------|----------|--|---|--|
| 1983年 10月24日 | 関西 大学 | <p>図書館長 阪本仁作 次長 芝英八郎 運営課長 平井祐二 整理課長 松尾繁晴 閲覧課長 尼子卓司</p> | <p>I. 報告事項 1) 関西四大学図書館職員第7回夏期研修会について (同志社) 2) 第2回関西四大学図書館収書情報連絡会について (立命館) 次の項目について意見交換を行ったことを報告 1. 本年度私立大学研究設備整備費等補助金の結果 2. 各大学における大型コレクションの収集状況 3. 納入書店の歩引きの現状とその問題点 4. 学習用図書収集と運用について</p> <p>II. 協議事項 関西四大学図書館職員研修会当日研修会 (第4期第3回) について (関西) 別紙日程を了承 ・収書・庶務グループ 日時：11月14日 場所：同志社大学 テーマ：大型資料 (コレクション) の収集について ～英米の議会資料、マイクロ資料等～ ・整理グループ 日時：11月15日 場所：関西学院大学 テーマ：分類業務について・ネットワークの動向 ・奉仕グループ 日時：11月16日 場所：関西大学 テーマ：各図書館のスライド紹介・利用者教育について ・雑誌グループ 日時：11月17日 場所：立命館大学 テーマ：ISBDとAACR2の比較について なお、各グループのテーマ設定に行き詰まり状態がみられるため、研修会の在り方について館長会議で再検討の必要があるとの発言があり、次回に検討することになった</p> <p>III. 懇談事項 館長会議の持ち方について (立命館) 館長会議の会場設定等そのもち方について意見交換</p> | <p>「第5回私立大学図書館協会「相互協力委員会」の開催について (通知)」</p> <p>「関西四大学図書館長会議記録」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第7回夏期研修会経費収支報告書」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第4期研修会当番校予定表」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第4期第3回秋期研修会の日程・場所およびテーマについて (案)」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第4期第6回幹事会記録」</p> |
|-----------------|----------|--|---|--|

| | | | | |
|----------------|-----------|--|---|--|
| 1984年 3月13日 | 同志社 大学 | | <p>IV. その他</p> <p>1) IFLA 第52回東京大会組織委員会について 関西学院大学平井課長（東京大会組織委員会委員）から準備委員会ならびに組織委員会の発足経緯、活動状況大会日程、テーマ等について概要が報告された</p> <p>2) 関西学院大学図書館職制の改正について 副館長職、事務部長職制の新設に伴う新人事について紹介があった</p> | <p>「関西四大学図書館長会議 記録」</p> <p>「1984年度関西四大学図書 資料費（予算）一覧表」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会第4期第4回研修会の 開催日程、時間、会場およ び研修会テーマについて （案）」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会第8回夏期合宿研修会 の開催について（案）」</p> <p>「同志社大学図書館文庫一 覧表」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会第4期第7回幹事会記 録」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会第4期第3回雑誌グル ープ記録」</p> |
| | | <p>図書館長 阪本仁作</p> <p>次長 芝英八郎</p> <p>運営課長 平井祐二</p> <p>整理課長 松尾繁晴</p> <p>閲覧課長 尼子卓司</p> | <p>I. 報告事項</p> <p>関西四大学図書館職員研修会 '83年秋期当日研修会について（関学） 当日研修会のテーマ設定が困難になっているが無事終了したとの報告</p> <p>II. 協議事項</p> <p>1) 1984年度各大学の図書予算について 別紙の日程・テーマについて了承</p> <p>2) 第4期第4回春期当日研修会日程について ・取組・庶務グループ 日時：5月15日 場所：立命館大学 テーマ：①学習図書の選書のあり方における問題点及び受入業務の省力化について ②図書館における基本的ビブリオ・レファレンス関係資料について ③第4期研修会の総括について</p> <p>・整理グループ 日時：5月16日 場所：関西大学 テーマ：①非図書資料の整理について ②研修について （イ）整理業務と研修（内部研修・外部研修） （ロ）関西四大学研修（反省と今後の展望）</p> <p>・奉仕グループ 日時：5月17日 場所：関西学院大学 テーマ：図書館利用の向上を目指して～学生の要求に答える図書館～ ①図書館規程をめぐって～図書貸出冊数、期間、その他～ ②開架図書のリフレッシュ問題 ③研修制度（レファレンサーの位置づけ等）</p> <p>・雑誌グループ 日時：5月18日</p> | |

| | | | | | |
|-----------------|------------|---|--|---|--|
| 1984年 6月23日 | 立命館 大学 | 図書館長 副館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 金子精次 塩谷 滋 尼子卓司 平井祐二 松尾繁晴 石田 孝 | <p>場所：同志社大学 テーマ：①学術雑誌目録の電算化処理を中心に ～東大図書館情報学セミナー4ヶ月研修から～ 講師：同志社女子大学運営課 望月裕美氏 ②日本のネットワーク ～学術情報システム～情報交換に認識を深める 3) 1984年夏期合宿研修会日程について（関学） 日程：未定（幹事会一任） 場所：仁川ハイッ テーマ：未定 講師：関西学院大学経済学部 柚木 学教授 見学：白鹿記念酒造博物館（予定） 以上6月の館長会議で正式決定する</p> <p>I. 報告事項 1) 関西四大学図書館職員研修会（第4期第4回）の報告について（関学） 各グループ討議内容及び件数総括について報告。各グループとも研修テーマの設定に苦慮しており、研修会のあり方について検討が必要との報告を受けて協議した結果次の事項を確認した 1. 今後の研修会のあり方について幹事会に各館課長も加わって検討する 2. 上記の検討は来年3月までに結論を出し館長会議に報告を行う 3. 本年秋の当日研修会は行わない 2) 関西四大学取事情報連絡会の報告について（関学） 6月11日開催の第3回連絡会の報告 1. 1984年度文部省私立大学研究設備整備費等補助金に係わる研究設備申請図書の情報交換 2. VTR等の取扱いについて固定資産化及び著作権の2点で問題になって いることについて情報交換 II. 協議事項 関西四大学図書館職員第8回夏期研修会の開催について（関学） 別紙の実施要項にもとづく提案を承認 III. 懇談事項 次回館長会議の日程調整について</p> | 「関西四大学図書館長会議 記録」 |
| 1984年 11月10日 | 関西学 院大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 | 金子精次 尼子卓司 平井祐二 松尾繁晴 | <p>I. 報告事項 1) 関西四大学図書館職員研修会第8回夏期研修会実施報告について（関学） 日時：7月9日～11日 場所：仁川ハイッ</p> | 「関西四大学図書館職員研 修会第8回夏期合宿研修会 収支報告書」 |

| | | | | |
|--------------------|----------|---|---|---|
| 1985 年 3 月 29 日 | 関西 大学 | <p>石田 孝</p> <p>金子精次 塩谷 滋 平井祐二 松尾素晴 石田 孝</p> <p>図書館長 副館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長</p> | <p>テーマ：図書資料「古文書」について 講師：関西学院大学文学部 三浦俊明教授 同 経済学部 柚木 学教授 研修：1. 関西大学所蔵近世文書について～内容・整理・利用～ 2. AV・マイクロ資料類の取扱いについて～各校の事例報告～ 3. 講演・見学会 柚木教授、白鹿記念酒造博物館 2) 関西四大学図書館収書情報連絡会について（同志社） 日時：11 月 7 日 場所：同志社大学</p> <p>II. 協議事項 関西四大学図書館職員研修会（当日研修）のもち方について（関大） ・来年 3 月の館長会議に幹事会でまとめた実施案を再度提案 ・幹事会は当日研修企画について研修会を存続する方向で再検討 ・研修会の 4 グループ（庶務・収書・整理・閲覧・奉仕、雑誌）業務別実施にとらわれない自由なテーマ参加を考慮する ・さまざまなテーマについて研修の必要性</p> <p>III. 懇談事項 1) 関西学院大学が昭和 60 年 4 月から、私立大学図書館協会常任理事校に就任することに関して 2) 立命館大学図書館年次報告 1983 年版の配布 3) 同志社大学広報（臨時 247 号～田辺校地施設整備実施について～）の配布</p> | <p>「関西四大学図書館職員研修会第 8 回夏期研修会実施要領（案）」</p> |
| | | | <p>I. 協議事項 1) 昭和 60 年度各大学図書予算について 2) 第 5 期第 1 回当日研修会の開催日程について 3) 昭和 60 年度夏期研修会（第 9 回）の開催日程について 日時：7 月 10 日～12 日 場所：松阪ハイッ（三重県松阪市） テーマ：MARC を利用した収書、整理、閲覧の各業務について 講演：未定 参加者数 各館 6 名（幹事を含む）</p> <p>II. その他 1) 同志社大学より、昭和 50 年度以降各大学で収集された 1 点 100 万円以上の大型資料コレクション（144 点）のリストについて説明 2) 関西大学総合図書館・情報処理センターの開館式・披露について 3) 関西学院大学図書館の私立大学図書館協会常任理事校就任について 4) 立命館大学図書館長の交替について 5) 関西大学総合図書館について</p> | <p>「昭和 60 年度関西四大学図書資料費（予算）一覧表」</p> |

| | | | | | |
|----------------|------------|------------------------------------|--------------------------------------|---|--|
| 1985年 7月6日 | 同志社 大学 | 図書館長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 金子精次 平井祐二 松尾繁晴 石田 孝 | <p>I. 報告事項 関西四大学図書館職員研修会当日研修会第5期第1回（1985年5月）について（関大） 日時：5月10日 場所：関西大学総合図書館 テーマ：関西大学総合図書館の建築と機能 ： 図覧業務の機械化について ： 総合図書館見学</p> <p>II. 協議事項 関西四大学図書館職員研修会第9回夏期宿研研修会について（関大）</p> <p>III. 承合事項 図書館関係研修会・研究会の参加について（同志社）</p> <p>IV. その他 同志社大学田辺図書館について（同志社）</p> | <p>「関西四大学図書館職員研修会第9回夏期研修会実施要項」</p> <p>「関西四大学図書館長会議承合事項回答」</p> <p>「同志社大学広報臨時240、247、251号」</p> |
| 1985年 11月9日 | 立命館 大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 金子精次 尼子卓司 平井祐二 松尾繁晴 石田 孝 | <p>I. 報告事項 1) 関西四大学図書館職員研修会第9回夏期研修会について 日時：7月10日～12日 場所：三重県松阪市松阪ハイッ（日本勤労福祉センター） テーマ：・北アメリカにおける4大図書館ネットワークの紹介 ・TRC-MARCを用いた開架図書のリフレッシュと収集・整理業務 ・TRC-MARCを用いた目録・図書マスター等の作成 ・機械化における書誌入力の諸問題</p> <p>2) 関西四大学図書館収書情報連絡会について 日時：11月5日 場所：立命館大学 1. 四大学の昭和60年度中に購入（予定）の大型設備、図書の情報交換 2. 高額図書リストの作成、提出について</p> <p>II. 協議事項 関西四大学図書館職員研修会第5期第2回当日研修会開催について</p> <p>III. 懇談事項 1) 次回関西四大学図書館長会議の日程について 2) その他 文部省視学委員の実地視察に関して意見交換</p> | <p>「関西四大学図書館職員研修会第9回夏期研修会実施要項」</p> |
| 1986年 3月29日 | 関西学 院大学 | 図書館長 副館長 次長 運営課長 | 金子精次 塩谷 滋 尼子卓司 平井祐二 | <p>I. 報告事項 1) 昭和61年関西四大学図書館資料費予算について 2) 関西四大学図書館職員研修会（第5期）について 第5期第2回当日研修会業務別（収書、整理、閲覧、逐刊）研修を実施</p> | <p>「昭和61年度関西四大学図書館資料費（予算）一覧表」</p> |

| | | | | |
|----------------|----------|--|---|----------------------------|
| 1986年 6月23日 | 関西 大学 | <p>整理課長 松尾繁晴 閲覧課長 石田 孝</p> | <p>昭和60年11月25・28日(同志社)、26・27・28日(関学)、27日(立命館)、28日(関大)</p> <p>3) 関西四大学所蔵大型資料について 昭和54年以降各大学で収集された1点100万円以上の大型資料(200点)について説明</p> <p>4) 同志社大学田辺キャンパス図書館の開館について</p> <p>II. 協議事項</p> <p>1) 昭和61年関西四大学図書館職員夏期研修会(第10回)について 日時:7月7日～9日 2泊3日 場所:大阪商工会議所貿易研修センター(三重県志摩郡阿児町) テーマ:図書館相互協力について 講演:「日本近代史研究の今後の動向」 立命館大学図書館長・経済学部 後藤 靖教授</p> <p>参加人員:1大学6名(幹事を含む)</p> <p>2) 関西四大学図書館職員研修会(第5期)について 3月7日の幹事会で検討の結果、開催を見送ることになった</p> <p>III. 懇談事項</p> <p>1) 次回関西四大学図書館長会議の日程について 6月下旬(開催日時、場所等は追って各大学と調整)に開催予定したい旨説明がありました</p> <p>2) 同志社大学図書館長の退任(任期満了)について</p> <p>3) 立命館大学宮西課長の退職について</p> | 「関西四大学図書館職員研修会第5期第7回幹事会記録」 |
| | | <p>図書館長 金子精次 次長 尼子卓司 整理課長 松尾繁晴 閲覧課長 石田 孝</p> | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 関西四大学図書館取書情報連絡会について 昭和61年度文部省研究設備等補助金対象の特別設備・特定図書物件リストに基づき情報交換(6月10日開催の第7回取書情報連絡会の報告)</p> <p>2) 関西四大学図書館職員夏期研修会について 前回の関西四大学図書館長会議で確認された大綱にそって第7回幹事会(6月4日開催)の協議結果にもとつき当番校(立命館)から運営方法について報告</p> <p>II. 懇談事項</p> <p>1) 昭和60年度図書館利用状況等について各大学から利用状況の報告をもとに懇談 ・試験期の利用率が高いこと、研究者の海外よりの相互利用の増が見受けられる</p> <p>2) 次回関西四大学図書館長会議の日程について</p> | |

| | | | | |
|---------------------|-----------|--|--|--|
| 1986 年 11 月 25 日 | 同志社 大学 | 図書館長 次長 整理課長 閲覧課長 金子精次 尼子卓司 松尾繁晴 野付 晃 | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 関西四大学図書館職員第 10 回夏期研修会について (立命館) 日時：7 月 7 日～9 日 場所：大阪商工会議所賢島研修センター 議題：「日本近代史研究その後の動向」 テーマ：「図書館相互協力について」</p> <p>2) 関西四大学図書館職員第 6 期第 1 回当日研修会について (同志社) 日時：11 月 7 日 場所：同志社大学田辺校地ラーネット記念図書館 テーマ：「ラーネット記念図書館の概要」 「同志社大学における機械化の最近の動き」</p> <p>3) 関西四大学第 8 期取書情報連絡会について (同志社) 日時：11 月 5 日 場所：同志社大学</p> <p>以下のとおり報告があった</p> <p>① 1986 年度文部省私立大学研究設備整備費等補助金に係る特別設備・特定図書の利用状況および後期購入の大型図書資料について協議した</p> <p>② 今年度購入した大型資料を「関西四大学所蔵大型資料目録」(累積版) に載せ配布する</p> <p>③ 毎年 3 月に開催の館長会議で情報交換している図書資料費予算一覧表において区分・用語等を各館共通にするため当番校で考慮して作成してもらうこととした</p> <p>II. その他</p> <p>1) 前回館長会議記録の訂正について (立命館)</p> <p>2) ファクシミリによる相互利用について (立命館) 四大学間における利用と年度末における料金決算について、相互利用協定に盛り込む提案があったが、次回館長会議で協議するための準備を行うことになった</p> <p>3) 同志社大学田辺校地ラーネット記念図書館について (同志社) 基本方針から現状に至るまでの概略について説明があり、その後見学した</p> | 「関西四大学図書館職員研修会第 10 回夏期研修会実施要綱」 「関西四大学図書館職員研修会第 10 回夏期研修会実施報告書」 「同志社大学ラーネット記念図書館について」 |
| 1987 年 3 月 23 日 | 立命館 大学 | 図書館長 次長 整理課長 閲覧課長 金子精次 尼子卓司 松尾繁晴 野付 晃 | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 関西四大学図書資料費予算について 各大学の昭和 62 年度図書資料費予算について情報交換</p> <p>2) 関西四大学所蔵大型資料一覧について 昭和 54 年以降に各大学で収集された 1 点 100 万円以上の大型資料について報告</p> | 「昭和 62 年度関西四大学図書資料費 (予算一覧表)」 「第 11 回夏期研修会実施要項 (案)」 |

| | | | | | |
|--------------------|------------|---|---|---|--|
| | | | | <div>Ⅱ. 協議事項</div> <div>1) 関西四大学図書館職員夏期研修会の開催について 当番校同志社大学から第 11 回夏期研修会の実施内容について提案があり大綱を承認 日時：7 月 6 日～8 日 場所：ユニトピアささやま（松下休暇村）</div> <div>2) ファクシミリによる相互利用および相互利用担当者会の設置について 館長会議の議に基づき立命館大学において相互利用業務にファクシミリを使用する可能性についての検討結果の報告があった。続いて「関西四大学図書館相互利用連絡会」（仮称）の設置提案があったが、同会の性格、権限などについて疑義が出されたため再提案することとなった</div> <div>Ⅲ. 懇談事項</div> <div>立命館大学図書館長の任期満了退任の挨拶</div> | <div>「関西四大学図書館職員夏期研修会」経過一覧表</div> <div>「ファクシミリによる相互利用および相互利用連絡会の設置について」（立命館提案資料）</div> |
| 1987 年 6 月 15 日 | 関西学 院大学 | <div>図書館長 金子精次 副館長 堀谷 滋 次長 尼子卓司 運営課長 平井佑二 整理課長 松尾繁晴 閲覧課長 野村 晃</div> | <div>Ⅰ. 報告事項</div> <div>1) 関西四大学図書館取書情報連絡会について 5 月 20 日開催の第 9 回取書情報連絡会の報告 ・補助金申請に関し、学位論文（セロックス版）収集の許容範囲、納入予定業者の競争見積もり等の問題、マイクロ資料の検取・管理などについて意見交換 ・研究設備申請事務の早期化に伴い、重複申請・購入を避けるという会合の主旨が薄れてきたため、取書情報連絡会を年 2 回から年 1 回（秋）に変更 ・「関西四大学所蔵大型資料一覧」を活用し、今後とも相互利用と分担収集保存について四大学間の情報交換を緊密にすることを確認</div> <div>2) 国公立大学図書館協力委員会について 関西大学演習課長より、標記委員会に活動状況と文献複写三案（国公立大学図書館間文庫複写に関する協定、文献複写マニュアル、文献複写業務一覧）について説明と委員会での審議経過の報告</div> <div>3) ファクシミリによる相互利用および相互利用連絡会の設置について 各大学での機器の設置状況、連絡会の性格、構成についての具体案を今後継続して検討するとの報告</div> <div>Ⅱ. 協議事項</div> <div>関西四大学図書館職員夏期研修会（第 11 回）の件 ・標記研修会の実施案に基づき 6 月 3 日に幹事会を開催し研修運営方法の具体案の提案があり承認 日時：7 月 6 日～8 日 場所：ユニトピアささやま（松下休暇村） テーマ：「図書館利用」および「電算化の現状」 講演：「哲学の道なかばにて」 同志社大学図書館長 川島秀一教授 ・研修：図書館利用 ①「新入生を対象とした図書館の PR およびオリエンテーションの現状」</div> | <div>「関西四大学図書館職員夏期研修会」経過一覧表</div> <div>「ファクシミリによる相互利用および相互利用連絡会の設置について」（立命館提案資料）</div> <div>「関西四大学図書館相互利用協定」（昭和 56 年 3 月 23 日制定、昭和 58 年 4 月 1 日改正）</div> <div>「関西四大学相互利用に関する申合せ事項」（昭和 58 年 3 月 23 日制定）</div> <div>「関西四大学図書館相互利用に関する取扱要領」（昭和 58 年 4 月 1 日制定：関大図書館の要領）</div> <div>「関西四大学図書館職員研修会運営要項」（昭和 51 年 10 月 18 日制定、昭和 53 年 11 月 1 日改正）</div> <div>「関西四大学図書館職員第 11 回夏期研修会実施要項」</div> <div>「第 11 回夏期研修会日程」</div> | |

| | | | | | |
|----------------|-----------|------------------------------------|--------------------------------------|---|--|
| 1987年 10月5日 | 関西 大学 | 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 金子卓司 野村晃 山本喜一郎 松尾繁晴 | <p>②「図書館における障害者サービスの現状」</p> <p>Ⅲ. 懇談事項 図書館長会議の在り方について ・会議の開催回数、現行規約に定める協議事項について懇談。効果的な合 の持ち方について今後検討する</p> <p>Ⅰ. 報告事項 1) 関西四大学図書館職員研修会第11回夏期研修会について ・同志社大学から報告書をもとに報告 2) 昭和61年度図書館の利用状況について ・各大学から利用統計をもとに報告 Ⅱ. 協議事項 関西四大学図書館職員研修会第6期第2回当日研修会開催について 9月30日開催の幹事会で検討した標記について提案 日時：11月13日 場所：関西学院大学図書館会議室 テーマ：①学術情報センター目録システムについて（デモを含む） ②利用分析の方法について</p> <p>Ⅲ. 懇談事項 関西四大学図書館長会議の在り方について 次回館長会議までに成果を得るよう各館の運営課長レベルでの事務折衝を今 館長会議後に開催することになった</p> | <p>「関西四大学図書館職員研 修会第6期第2回当日研修 会実施要項」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会第11回夏期研修会報 告書」</p> <p>「各大学図書館利用統計」</p> |
| 1988年 3月28日 | 同志社 大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 金子精次 金子卓司 野村晃 山本喜一郎 松尾繁晴 | <p>Ⅰ. 報告事項 1) 昭和63年度関西四大学図書資料費予算について 標記について各大学から報告 2) 関西四大学大型資料一覧について 3) 関西四大学図書館職員研修会（第6期第2回）について * 議題にメモとして「中止」とあり</p> <p>Ⅱ. 協議事項 1) 第12回関西四大学図書館職員夏期研修会の開催について 当番校の関学から実施要項をもとに提案 日時：7月6日～8日 場所：扇芳閣（鳥羽） テーマ：近未来における大学図書館の機能について 講演：学生にとつての図書館イメージ 関西学院大学図書館副館長・社会学部 津金澤聡広教授</p> <p>2) 図書館長会議の在り方について 前回館長会議後の事務折衝の結果をもとに下記の提案があり承認</p> | <p>「各大学図書費関連資料」</p> <p>「関西四大学館長会議の今 後の運用について」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会第12回夏期研修会実 施要項」</p> <p>「関西四大学図書館職員研 修会第11回夏期研修会報 告書」</p> |

| | | | | |
|----------------|-----------|---------------------------------------|---|--------------------------------|
| 1988年 5月17日 | 立命館 大学 | 運営課長 野村 晃 運営課主任 長尾文雄 閲覧課主任 中村順治 | <p>・ 関西四大学図書館長会議規約 (1981.3.23 締結) 第4条「本会議は原則として年4回開催するものとし・・・」は、現実的実際の観点から、春秋2回開催とする</p> <p>・ 上記2回のうち、春期は関西四大学図書館連絡会的なものとして事務レベルの会合とし、秋期はこれまでの関西四大学図書館長会議と同一のメンバーで実質的な会合とする</p> <p>Ⅲ. 懇談事項</p> <p>1) 関西学院大学金子館長の退任の挨拶</p> <p>2) 立命館大学より普沼館長の次期就任の挨拶</p> <p>I. 懇談事項</p> <p>1) 取書情報の交換について</p> <p>各大学より、昭和63年度文部省私立大学研究設備整備費等補助金申請資料の申請状況と、それに関連する大型(基本図書)資料収集計画について報告</p> <p>1. 申請資料</p> <p>特別設備(但し、図書資料に限る)</p> <p>* 中国方志叢書 第3期および台湾部分 第1、第2 他2点(関学)</p> <p>* The Whole epoch of the commentators. 1300-1500. 75 works. Original. (関大) 特定図書</p> <p>* マイクロフロッピー版 中近東=北アフリカ諸国統計集成 他15点(関学)</p> <p>* The eighteenth century. Unit No.60-72 in 13 units. (Reel No.2066-2520 in 455 reels) Microfilm. 他2点(関大)</p> <p>* The Guardian (Manchester edition). Microfilm edition 1821-1952. 他2点(同志社)</p> <p>* ドイツ連邦議会(下院)(上院)議事録・議事速記録・付録資料(Microfiche edition) 1949/1986/87. 他1点(立命館)</p> <p>2. 関連事項</p> <p>* 大型(基本図書)資料の収集計画について</p> <p>* 大型(基本図書)資料予算(同補助金申請分を含む)について</p> <p>* 同補助金申請事務について</p> <p>* マイクロ資料の会計上の扱いについて</p> <p>2) 図書館の利用状況について</p> <p>各大学より、説明・報告があった</p> <p>3) その他</p> <p>1. 各大学図書館近況報告(図書館ガイダンス他)について</p> <p>2. 外国雑誌契約と支払い方法、手数料率について</p> | 「関西四大学所蔵大型資料一覧」 各大学閲覧、利用状況表 |
|----------------|-----------|---------------------------------------|---|--------------------------------|

| | | | | | |
|-----------------|-----------|------------------------------------|---------------------------------------|--|---|
| 1988年 11月29日 | 立命館 大学 | 図書館長 次長 運営課長 整理課長 閲覧課長 | 八重津洋平 尼子卓司 野村晃 山本喜一郎 松尾繁晴 | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 関西四大学夏期研修会 第12回夏期研修会報告書にもとづき報告（関学より）</p> <p>2) 関西四大学当日研修会 第7期第1回関西四大学図書館職員研修会次第にもとづき報告（関大） テーマ：「図書館におけるコンピュータ化の基本は何か」 発題：関西四大学図書館運営課長 濱瀬義雄氏 テーマ：①「館内研修会の在り方」について ②関西大学総合図書館の説明と見学</p> <p>II. 協議事項</p> <p>1) 関西四大学関係会の今後の当番校について 関西学院大学より次の提案があり承認 ・今後、関西四大学関係の会合、研修会等の当番校は同一年度について1校が全てを担当する。したがって各校は4年に一度担当する ・新当番校の順序は1989年度：関大、1990年度：立命館、1991年度：同志社、1992年度：関学、1989年度は夏期研修会の当番は関大とする</p> <p>2) 関西四大学夏期研修会参加費用（宿泊費）の改定について 関学より7,500円から1万円に引き上げたいとの提案があり承認</p> <p>3) 関西四大学図書館長会議参加費の改定について 立命館より参加費を今後6,000円としたい旨提案があり承認</p> <p>III. 懇談事項</p> <p>1) 各大学報告 〈立命館大学〉 ・NACSIS-IR 接続と情報検索の開始 ・学術情報システム開発状況 1990年4月から稼働 〈関西大学〉 ・第4回日本図書館協会表彰 ・コンピュータシステムの開発・運用状況 ・目録システム開発中。検索システム改変中 ・学習用11万冊フルデータ ・研究用80万冊簡易データ（1986年からフルデータ入力） ・利用者用端末3台から8台へ 〈関西学院大学〉 ・新図書館建設について 面積19,900㎡（産研と合わせて21,500㎡） 1994年4月オープン予定</p> <p>2) 国公立大学の相互協力状況について 関大より以下の概要を報告 ・国公立大学図書館協力委員会の取り組み経過</p> | <p>「関西四大学関係会合年間スケジュール（現行）」</p> <p>「新当番校順序について（案）」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第12回下記研修会報告書」</p> <p>「第7期第1回関西四大学図書館職員研修会次第」</p> <p>「著作権審議会第8小委員会（出版社の保護関係）中間報告書概要」 文化庁</p> <p>「著作権審議会第8小委員会（出版社の保護関係）中間報告書」に対する意見（回答） 私大図協会長校</p> |
|-----------------|-----------|------------------------------------|---------------------------------------|--|---|

| | | | |
|---------------------|--|---|---|
| 1989 年 11 月 28 日 | 関西 大学 | <p>・ 国立大学の経理処理の問題点 ・ 阪神地区の相互協力の現状</p> <p>3) 複写と著作権について 関大より別紙「著作権審議会第 8 小委員会（出版社の保護関係）中間報告書に対する意見（回答）私立大学図書館協会」ならびに「著作権審議会第 8 小委員会（出版社の保護関係）中間報告書概要文化庁」にもとづき報告これに対して以下の意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 文献複写における国立大学の対応（課金方式）の問題点 ・ 国公立を越えた地域的協力の必要性 ・ 各大学の学内機関をも含めた協力の必要性 | <p>「第 2 回関西西四大学図書館連絡会議（記録）」</p> <p>「関西西四大学図書館職員研修会第 13 回夏期研修会報告書」</p> <p>「関西西四大学図書館職員研修会第 7 期第 2 回当日研修会の実施について（ご案内）」</p> <p>「大学院学生用購入希望図書取扱について」（関大）</p> <p>「大学院生希望図書取扱要領」（関学）</p> <p>「大学院生の希望図書の取扱について」（立命館）</p> <p>「ニューメディアへの対応について」（立命館）</p> <p>「図書館における図書資料としてのニューメディアの取扱・暫定要領」（関大）</p> |
| | <p>図書館長 八重津洋平 副館長 津金澤聡広 次長 尼子卓司 運営課長 野付 晃 整理課長 山本喜一郎 閲覧課長 牧野 勇</p> | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 第 2 回関西西四大学図書館連絡会議の報告 5 月 24 日開催の標記会議について当番校から報告 2) 第 13 回関西西四大学夏期研修会の報告 テーマ：「研究者が望む図書館サービス」 日時：7 月 5 日～7 日 場所：関西大学飛鳥文化研究所 植田記念館 第 7 期第 2 回関西西四大学当日研修会の開催について 12 月 7 日に関西大学で開催する 3) 学術情報システム接続をひかえて～同志社大学日録作成システムから NACSIS-CAT への移行～ 2. 立命館大学学術情報システムへの取り組み 3. アメリカの大学図書館建設（関学） 4. イリノイ大学のレファレンス図書館（関大） <p>II. 承合事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 大学院生の希望図書の取り扱いについて 11 月 1 日付けで制定した関学の「取扱要領」の説明後各館の状況説明あり 2) 1990 年度図書費予算について 関大より、次年度予算申請の概要説明の後、各大学の状況を報告 3) ニューメディアの対応について 関大より 10 月に制定した「図書館における図書資料としてのニューメディアの取扱・暫定要領」の説明後、各大学の状況説明を行った 4) 補助金申請関係 関大より本年度申請結果の報告があり、その後各館の状況を報告 <p>III. 懇談事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 「大学特別図書費」について 関学より、5 月に制定された「特別図書規程」について説明があり、懇談 | |

| | | | | | |
|----------------|-----------|----------------------|-----------------------|--|--|
| 1990年 12月3日 | 立命館 大学 | 図書館長 運営課長 閲覧課長 | 八重津洋平 野村 晃 牧野 勇 | <p>2) 研究用及び教員用資料の考え方について 立命館より、研究条件の改善にむけての図書費の増額の現状と学部間配分比率のアンバランスの状況について説明があり、各大学の状況について懇談</p> <p>3) 関学の新図書館建設計画の進捗の報告あり</p> | <p>「各大学研究設備関係リスト」</p> <p>「大学特別図書選定委員会規程」(関学)</p> <p>「特別図書規程」(関学)</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会第14回夏期研修会報告書」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会1990年度(第8期)当日研修会要項」</p> <p>「関西四大学の図書館相互利用に関する統計」(関大)</p> <p>「関西大学総合図書館利用状況－1990年10月末現在」</p> <p>「関西四大学相互利用件数」(関学)</p> <p>「新大学図書館収書計画－年度別予算表－」(関学)</p> <p>「図書館図書費予算申請額検討資料」(関学)</p> <p>「91年度製本費予算資料」(年次比較)(立命館)</p> <p>「91年度図書資料費予算要求資料」(立命館)</p> |
| | | 図書館長 運営課長 閲覧課長 | 八重津洋平 野村 晃 牧野 勇 | <p>2) 研究用及び教員用資料の考え方について 立命館より、研究条件の改善にむけての図書費の増額の現状と学部間配分比率のアンバランスの状況について説明があり、各大学の状況について懇談</p> <p>3) 関学の新図書館建設計画の進捗の報告あり</p> | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 第14回関西四大学夏期研修会 当番校の立命館より資料にもとづいて報告 テーマ：教育・研究者サービスへの対応 日時：7月4日～6日 場所：鳥羽国際ホテル</p> <p>1. 基調講演 テーマ：情報化時代と図書館 講師：立命館大学図書館長・文学部 西川富雄教授</p> <p>2. 研修会</p> <p>① 関西四大学新入生オリエンテーション紹介 同志社、関学はスライド、関大、立命館はビデオによる報告</p> <p>② テーマ別グループ研修会 ・第1分科会：利用者教育 ・第2分科会：資料収集の現状と今後の課題 ・第3分科会：資料提供サービスの現状と課題</p> <p>2) 関西四大学当日研修会 12月6日に第8期当日研修会を開催する旨報告 テーマ 1. 資料保存政策について(同志社) 2. 学術情報システムの将来展望～過去・現在・未来～(立命館) 3. 立命館大学学術情報システムとその操作</p> <p>II. 承合事項</p> <p>1) 関西四大学図書館相互協力について 関大より別紙の関西四大学相互利用に関する統計をもとに報告があった相互利用担当者の連絡会として阪神地区相互利用協定登録加盟館の会議があるが立命館と同志社はこの会議に出席しない。関西四大学の実務担当者が情報や意見交換を定期的に行える場を作りたいと問題提起あり</p> <p>2) 1991年度図書予算要求について 立命館より次年度図書費予算要求の現状について承合があり、各大学の状況を報告</p> |

| | | | | |
|--|--|---|---|---|
| | 同志社大学 | 1991 年 12 月 18 日 | <div>Ⅲ、懇談事項</div> <div>1) 図書館建設の進捗状況について 関学より資料にもとづき経過報告があり懇談</div> <div>2) 各大学の当面する課題について 〈関西大学〉 1991 年 4 月から学術情報システムに接続 〈同志社大学〉 ・ 1991 年 4 月から組織変更 ・ 現行の図書館 4 課体制から教務部の視聴覚業務と計算機センター事務室と 合体し学術情報センター 5 課体制 〈立命館大学〉 ・ 最近の図書館利用状況について ・ 重複図書の取扱について ・ 大型図書資料の収集方針について ・ 図書館と学内関係機関の役割分担について ・ 保存政策について 〈関西学院大学〉 ・ 現図書館の狭小化対策に関する事項 ・ 新大学図書館建設に関する事項 ・ 実施設計について ・ 管理運営について</div> | <div>「90 年度私立大学研究設備整備等補助金内定一覧」(関大)</div> <div>「新大学図書館建設計画の経過要約」(関学)</div> <div>「大学ニュース」No.47 (関学)・・・新大学図書館の建設準備工事について－法学部 旧本館・第 2 別館の解体工事</div> <div>「同志社大学広報」臨時 326 号 (90. 1. 31) (立命館)</div> <div>「1991 年 4 月 1 日発足 同志社大学学術情報センター(組織)」</div> <div>「'90 年度上半期閲覧統計」(立命館)</div> <div>「'90 年度夏季図書館施設改善によるサービス改善内容」(立命館)</div> |
| | 図書館長 八重津洋平 運営課長 萩原一良 整理課長 山本喜一郎 閲覧課長 牧野 勇 | <div>Ⅰ、報告事項</div> <div>1) 第 15 回関西四大学図書館職員夏期研修会 当番校の同志社大学より資料にもとづき報告 テーマ：ニューメディア時代における情報サービス 日時：7 月 3 日～5 日 場所：滋賀厚生年金休暇センター</div> <div>1. 講演 テーマ：コンピュータとニューメディア 講師：同志社大学学術情報センター所長・工学部 戸高敏之教授</div> <div>2. 分科会 第 1 分科会：非図書資料の収集・整理 第 2 分科会：非図書資料の利用と問題</div> | <div>「関西四大学図書館職員研修会第 15 回夏期研修会報告書」</div> <div>「同志社大学学術情報センター報」No.2. (1991 年 12 月)</div> <div>「平成 4 年度図書館予算総括表(案)」(関大)</div> <div>「1992 年度図書館予算の申</div> | |

| | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|---|
| | | | | | | 請について」(同志社) 「平成3年度私立大学研究設備整備費等補助金内定一覧」(同志社) 「平成3年度私立大学研究設備整備費等補助金内定一覧」(関大) 「1991年度研究設備補助金の内定状況」(関学) 「新大学図書館収書計画－年度別予算表－」(関学) 「図書館図書費予算申請額検討資料」(関学) |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |

| | | | | | |
|--|---|--|--|--|---------------------------------|
| | | | | | 年度別予算表ー」(関学) |
| | | | | | 「1993年度図書関係予算の申請について」(同志社) |
| | | | | | 「1993年度立命館大学図書費予算要求一覧」 |
| | | | | | 「平成5年度図書費予算総括表(案)」(関大) |
| | | | | | 「図書館図書費予算申請額検討資料」(関学) |
| | | | | | 「1992年度図書費予算書」(関学) |
| | | | | | 「平成4年度私立大学研究設備整備費等補助金内定一覧」(同志社) |
| 2. 全体会 各大学より研修テーマにしたがいがいい以下の内容で発表があり、質疑・討論を行なった | ①二拠点化について(同志社) ②二拠点キャンパスにおける図書館業務の在り方(関学) ③二拠点化後の図書館の機能とサービスについて(立命館) | 2) 関西四大学秋期当日研修会報告 当番校の関学より資料にもとづき報告 日時: 12月2日 場所: 関西学院図書館会議室 テーマ: 1. 学術情報の多様化と収集整理(1)～図書について～(同志社) 2. 学術情報の多様化と収集整理(2)～AV資料～(関学) 3. 関西学院大学図書館見学(昼食時) 4. ニューメディアへの対応と課題(立命館) 5. 図書館施設・設備の利用と課題(関大) | | | |
| | | II. 承合事項 1) 1993年度図書費予算の申請について(関学) 2) 私立大学研究設備整備費等補助金について(関学) 3) 蔵書の虫害対策について(関大) | | | |
| | | III. 協議事項 1) 関西四大学図書館長会議規約の改正について(関学) 2) 関西四大学当日研修会のあり方について(関学) 「関西四大学図書館職員研修会運営要項」を改正し平成4年12月15日から施行する。要点は以下のとおり ・研修の開催形式を従来の夏期合宿研修と当日研修(春季・秋季、グループ別開催)であったのを合宿研修と研究会(各大学の共通課題について、特定のテーマを設定して実施)に変更 ・運営について、従来の館長会議の承認を経て行うとしていたものを、連絡会の承認を得て館長会議に報告すると変更 *提案内容に文言の修正意見が出されたため持ち回りで審議することとした | | | |
| | | IV. 総談事項 1) 大学自己評価に対する取り組みについて(関学) 2) 図書館各課の抱える課題・取組みについて(各大学課長から) 3) 図書館の地域公開について(立命館) 4) 週刊誌の購読状況について(立命館) | | | |

| | | | | |
|----------------|-----------|--|--|---|
| 1993年 12月1日 | 立命館 大学 | <p>図書館長 田中敏弘 事務部長 尼子卓司 運営課長 萩原一良 整理課長 牧野 勇 閲覧課長 高橋 正</p> | <p>I. 議事</p> <p>1). 第17回関西四大学図書館職員合宿研修会報告 当番校の立命館より資料にもとづき報告 テーマ：資料の収集整理と利用のあり方 日時：9月8日～10日 場所：地方職員共済組合・和歌の浦ビーチホテル</p> <p>1. 講演 テーマ：18世紀イギリスにおける作者と読者 講師：立命館大学図書館長・文学部 中原章雄教授</p> <p>2. 全体会 〈問題提起〉</p> <p>① 関西大学における目録の今後のあり方 (関大) ② 立命館大学図書館の地域公開 (立命館) ③ 関西学院大学図書館における目録作成方法及びオンライン目録の現状について (関学) ④ 正確・迅速な目録情報の提供を目指して (同志社)</p> <p>3. 分代会と全体会 上記の問題提起を受けて2班に分かれて分散会討議を実施。その後全体会で討議内容を報告、総括討議。主な討議事項は次のとおり</p> <p>〈目録の今後〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンライン目録への移行が進むことにより、カード作成経費およびカード保管場所の削減につながる利点と、検索効率を向上させるために端末の増設が必要となる。経費や保管場所の削減できる利点と、検索の利便性を高めるために端末の増設が必要となる点の指摘 ・利用対策として、 <ul style="list-style-type: none"> ① 機械操作が苦手な利用者への代行検索 ② 分かりやすいマニュアルの作成 ③ 発注中、貸出中等の情報提供、視聴覚機器を用いた利用者教育の充実 ・オンライン目録の今後については、 <ul style="list-style-type: none"> ① 使い易い検索システムの開発 ② データの質の向上 ③ 分類検索よりも複数件名によるアクセスポイントの充実をめぐって意見交換を行った <p>〈地域公開〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立命館の事例に則して、 <ul style="list-style-type: none"> ① 実施にあたっての留意点 ② 実施後に発生した事項 ③ 学内利用者サービスへの影響 | <p>〈関西大学〉</p> <p>「文部省私立大学研究設備整備費等補助金の申請及び交付確定状況」</p> <p>「ヨーロッパ法制史研究の原資料 コンシリア (助言文庫)」</p> <p>〈同志社大学〉</p> <p>「平成5年度私立大学研究設備整備費等補助金 (私立大学研究設備等整備費) 内定一覧」</p> <p>「同志社大学学術情報センター (事務組織)」</p> <p>〈関西学院大学〉</p> <p>「1993年度研究設備購入計画」</p> <p>「図書館図書費予算申請検討資料」</p> <p>「新大学図書館第2次収書計画 - 年度別予算表 -」</p> <p>「図書館報 時計台 No.58」</p> <p>「LIBRARY GUIDE 1993」</p> <p>「1992年度 大学図書館年次報告」</p> <p>〈立命館大学〉</p> <p>「1993年度「基本図書整備費」執行状況と追加購入案」</p> <p>「1994年度図書予算・製本費の概算要求資料 (過年度比較)」</p> <p>「立命館大学の近況報告」</p> <p>「1992年度図書館年次報告」</p> <p>「1993年度 CROSSROADS」</p> <p>「1993年度 LIBRARY GUIDE」</p> |
|----------------|-----------|--|--|---|

| | |
|---|--|
| <p>④高額資料の紛失</p> <p>⑤企業・官利目的利用に対する考え方等、理念と現状の問題点について 議論</p> <p>〈四大学相互協力体制〉</p> <p>①オンライン目録の相互検索</p> <p>②高性能ファックスによる雑誌論文の送受信</p> <p>③分担収集</p> <p>④不用図書の有効利用</p> <p>⑤外国語雑誌・図書の価格問題に対する4大学間での共同対応などについて議論</p> <p>2) 関西四大学研究会の開催結果報告 当番校より資料にもとづき報告 テーマ：利用者サービスの充実 日時：11月24日 場所：立命館大学図書館 〈問題提起〉</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「利用者サービスの充実」について（同志社） <ul style="list-style-type: none"> ・大学図書館の機能について ・「利用者サービスの充実」を要請している一般的情勢 ・本学図書館のレファレンス業務の懸案事項 ・本学図書館のレファレンス業務において新たな対応を要する事項 ・問題提起 2. 利用者サービスの充実（関大） <ul style="list-style-type: none"> ・関西四大学図書館の利用者サービス体制 ・レファレンスカウンターにおけるレファレンス業務の現状 ・サービス充実への方策 3. 関西四大学相互利用の充実のために（関学） <ul style="list-style-type: none"> ・相互利用の現状と問題点 ・今後の課題（利用資格、利用方法の見直し〈事前連絡の必要性、共通閲覧証－京都地区との関連－〉、四大学ILL ネットワーク等の検討・提案 4. 関西四大学相互利用の発展（立命館） <ul style="list-style-type: none"> ・関西四大学相互利用の現状 ・関西四大学相互利用の発展に向けて <p>〈討議内容〉</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「利用者サービスの充実」について 利用者ニーズの高度化、多様化に対するレファレンス業務の現状は人的にも組織的にも十分とは言えないが、研修と関連部署との連携、知識の | <p>「第17回関西四大学図書館職員合宿研修会報告」</p> <p>「関西四大学研究会報告」</p> <p>「1995年度図書予算・製本費の予算要求資料（過年度比較）」（立命館）</p> <p>「1994年度私立大学研究設備整備費等補助金（私立大学研究設備等整備費）内定一覧」（立命館）</p> <p>「1994年度研究設備購入計画（文部省申請関係）」（関学）</p> |
|---|--|

| | | | | |
|--|-----------------|----------|---|---|
| | 1994年 11月30日 | 関西 大学 | <p>交換により質の高いレファレンスを目指すことを共通認識とすることが結論となった</p> <p>2. 関西四大学相互利用の充実のために 全国的なネットワークの形成により利用は飛躍的な増大となっているが、関西四大学のみ相互利用のメリットは少なくなっている。相互利用連絡調整会的なものを定期的にものつととし、後日連絡会議等で具体化をはかることにした。また、京都地区の共通閲覧証については賛否両論があった</p> <p>3) 1994年度図書予算概算要求および1993年度文部省研究設備整備費補助金受給状況報告</p> <p>4) 各大学の近況報告</p> <p>5) 立命館大学図書館の地域公開の運用状況報告</p> <p>I. 報告事項</p> <p>1) 平成6年度(第18回)図書館職員合宿研修会の中止について 9月29日、30日に予定していた確記研修会は台風襲来により中止したとの報告があった</p> <p>2) 関西四大学研究会(相互利用関係)事項について 幹事会から別紙にもとづき検討状況を報告。概要は以下のとおり各館の相互利用担当者2名と幹事により、3回の会合を行った相互利用充実に向けて検討した内容の報告提案 (検討・調査項目)</p> <p>①利用資格 ②支払方法 ③複写料金の見直し(「複写料金の申合せ」の見直しを含む) ④貸出条件(期間、貸出冊数等) ⑤事前連絡を必要とする資料 ⑥ハンドブックへの取りまとめ ⑦年間開館時間数(日数も含む):調査項目 ⑧四大学間の利用状況:調査項目 (検討結果報告)</p> <ul style="list-style-type: none">・図書館間貸借に伴う料金について立命館は郵便振替であったが、今後は切手で可とする。また、文献複写の年度末相殺について郵便振替としていたが、今後銀行振込も可とする→四大学の取扱が統一できる・同志社は、直接来館教職員の開架図書貸出期間を従来の3ヶ月から1ヶ月に変更→四大学の取扱が統一できる・目的の資料を確実に利用したい場合の事前連絡を確認・ニューメディアの利用については今後の課題とする。ただし、商用DBについては当面利用不可とする | <p>「関西四大学図書館職員研究会」の検討状況について(メモ)」</p> <p>「開館時間数について」(四大学調査資料) (1) 開館形態 (2) 年間開館日数・時間</p> <p>「関西四大学間の相互利用状況」 ・文献複写・相互貸借・来館者数・紹介状発行件数等</p> <p>「関西四大学相互利用複写料金の暫定統一料金について」一部改正の新旧対照表(案)」</p> <p>「関西四大学図書館相互利用マニュアル(案)」</p> <p>「1994年度同志社大学の近況」</p> |
|--|-----------------|----------|---|---|

| | | | | | | |
|---------------------|-----------|---|---|---------------------------------|--|--|
| 1995 年 11 月 28 日 | 同志社 大学 | 図書館長 田中敏弘 次長 藤田耕一 運営課長 萩原一良 整理課長 牧野 勇 閲覧課長 岡本敏夫 | I. 報告事項 1) 1995 年度関西四大学図書館職員研修会について 〈プログラム 1〉 テーマ：レファレンス担当者の要件 日時：11 月 8 日 1. 関学発表 | 2) 次年度幹事館について 次年度は同志社が幹事館となる | 3) 1995 年度図書費予算申請概要について各館から口頭報告あり 4) 1994 年度文部省「私立大学研究設備整備費等補助金」の申請状況及び交付決定状況について資料にもつき各館から報告 5) 各大学の近況について 各大学から近況を報告 II. 協議事項 1) 関西四大学研究会（相互利用関係）事項について研究会からの提案事項について協議した 1. 複写料金 現行の「暫定統一料金 35 円、欠号補充等業務用 20 円」を「欠号補充等業務用も含め一律 20 円」としたい。ただし、マイクロ複写料金は従来どおり 35 円とする→このことに伴い現行の「相互利用複写料金の暫定統一料金について」を改正したい 2. 貸出条件 現行の図書館間貸出について立命館と関大で冊数制限を設けていたが「特に上限を設けない」と改善したい→このことに伴い現行の「相互利用協定」第 5 条を改正する必要がある。ただし、この件については結論がでなかったもので年度内に再検討して結論を得たい 3. 相互利用マニュアル（案） 研究会での検討を踏まえ、案を作成した 4. 改正実施日 すべて 1995 年 4 月 1 日から実施したい旨提案 〈結論〉 館長会議として上記の提案を了承。ただし懸案事項として残っている次の事柄については年度内に研究会を行い結論を得ることとした ・「相互利用協定」の改正 ・利用資格の見直し ・「申し合わせ事項」の見直し 等 なお、研究会での検討結果については連絡会に判断をゆだねることとなった 2) 次年度幹事館について 次年度は同志社が幹事館となる | 「平成 6 年度関西四大学図書館職員当日研修会プログラム」 |
| 1995 年 11 月 28 日 | 同志社 大学 | 図書館長 田中敏弘 次長 藤田耕一 運営課長 萩原一良 整理課長 牧野 勇 閲覧課長 岡本敏夫 | I. 報告事項 1) 1995 年度関西四大学図書館職員研修会について 〈プログラム 1〉 テーマ：レファレンス担当者の要件 日時：11 月 8 日 1. 関学発表 | 2) 次年度幹事館について 次年度は同志社が幹事館となる | 3) 1995 年度図書費予算申請概要について各館から口頭報告あり 4) 1994 年度文部省「私立大学研究設備整備費等補助金」の申請状況及び交付決定状況について資料にもつき各館から報告 5) 各大学の近況について 各大学から近況を報告 II. 協議事項 1) 関西四大学研究会（相互利用関係）事項について研究会からの提案事項について協議した 1. 複写料金 現行の「暫定統一料金 35 円、欠号補充等業務用 20 円」を「欠号補充等業務用も含め一律 20 円」としたい。ただし、マイクロ複写料金は従来どおり 35 円とする→このことに伴い現行の「相互利用複写料金の暫定統一料金について」を改正したい 2. 貸出条件 現行の図書館間貸出について立命館と関大で冊数制限を設けていたが「特に上限を設けない」と改善したい→このことに伴い現行の「相互利用協定」第 5 条を改正する必要がある。ただし、この件については結論がでなかったもので年度内に再検討して結論を得たい 3. 相互利用マニュアル（案） 研究会での検討を踏まえ、案を作成した 4. 改正実施日 すべて 1995 年 4 月 1 日から実施したい旨提案 〈結論〉 館長会議として上記の提案を了承。ただし懸案事項として残っている次の事柄については年度内に研究会を行い結論を得ることとした ・「相互利用協定」の改正 ・利用資格の見直し ・「申し合わせ事項」の見直し 等 なお、研究会での検討結果については連絡会に判断をゆだねることとなった 2) 次年度幹事館について 次年度は同志社が幹事館となる | 「1995 年度関西四大学図書館職員研修会記録」（11 月 8 日開催分） 「1995 年度関西四大学図書館職員研修会〈カリキュラ |

| | | |
|------------------------|--|---|
| <p>雑誌資料課長 中井 隆</p> | <p>①図書館における専門的職員の必要性 ②レファレンス担当職員について ③関西学院大学におけるレファレンス業務 ④関西学院大学におけるレファレンス等図書館職員の養成について ⑤今後の課題 2. 立命館発表 ①個人の能力 ②集団の能力 ③利用促進活動 以上2名の発表を受けて、グループ討議を行い、レファレンス担当者の要件をまとめた (プログラム2) テーマ：カリキュラムと蔵書構成 日時：11月15日 蔵書のカリキュラムへの反映を中心に討議。その他リタイア（第2の選書）、入手不可資料の取扱などを討議 (プログラム3) テーマ：目録業務の現状と将来 関学における目録業務の現状と今後の課題、将来展望について報告後、5つのポイントで討議を行った ①学術情報センターの利用 ②データの質とOPAC、マーク ③目録と閲覧 ④学術情報センターの共同分担目録事業 ⑤目録業務（資料組織化）の新展開と人材育成 2) 各大学の近況について (関西大学) ①1996年度予算の見通し ②自己点検・評価の進捗状況 ③文部省補助金採択状況 (関西学院大学) ①阪神・淡路大震災に際してお礼 ②新図書館の竣工と運営 ③文部省補助金採択状況 ④1996年度予算の見通し (立命館大学) ①1996年度予算の見通し ②図書館の運営状況</p> | <p>ムと蔵書構成) グループ討議要旨」(11月15日開催分) 「関西四大学図書館職員研修会プログラム3〈目録業務の現状と課題〉の討議概要」(11月15日開催分) 「1995年度研究設備購入計画(文部省申請関係)」(関学) 「関西学院大学新大学図書館1期開館時パンフ」 「1995年度私立大学研究設備整備費等補助金(特定図書)採択状況」(同志社) 「同志社大学学術情報センター組織および業務内容」 「立命館大学戦後50年平和企画展示ー戦争と新聞報道ー」(展示パンフレット) 「関西四大学図書館案内」(冊子) 「関西大学通信」第239号</p> |
|------------------------|--|---|

| | | | | |
|-----------------|------------|--|---|--|
| 1996年 12月18日 | 関西学 院大学 | 図書館長 田中敏弘 事務部長 三波正和 運営部長 牧野 勇 整理課長 中村順治 閲覧課長 岡本敏夫 雑誌資料課長 中井 隆 | ③文部省補助金採択状況 ④戦争と新聞報道（展示） 〈同志社大学〉 ①学術情報センター組織変更の概要 ②文部省補助金採択状況 ③ その他 前年度の館長会議で了承された「図書の低価格購入に向け、ガイドラインを作成されるための検討会を開催する」件について協議し、「1996年度の幹事校である関学において担当課長レベルでの意見交換（勉強会）の場をとりあえず開催する」とこととなった | 「1996年度関西四大学図書館研究会関係資料」 「1996年度関西四大学図書館当日研修会関係資料」 「1996年度文部省私立大学研究設備整備費等補助金の申請及び交付内定状況」（立命を除く3大学分） 「1996年度関西四大学図書館研究会資料集」（ニューメディアの取扱について～各大学事例報告、ニューメディアの取扱の課題） |
| | | | I. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会について 日時：7月16日 場所：関西学院大学 「図書資料の流通に関する大学図書館を取り巻く環境について」 テーマ：ニューメディアについて～各大学の事例報告と問題点の確認、今後の方向性～ 「ニューメディアの予算と収書、利用について」 第1回研究会 日時：10月2日 場所：関西学院大学 内容：1. 今後の進め方についての検討 2. 関西四大学としてのニューメディアの定義 第2回研究会 日時：10月16日 場所：同志社大学 内容：各大学の事例報告 （予算、収集範囲、サポート体制、利用条件等） 第3回研究会 日時：11月20日 場所：立命館大学 内容：1. 現在の問題点の整理とその対応～総合、運用（収集範囲、予算、ハード等） 2. 現在の問題点の整理とその対応～利用（課金、提供環境、利用者教育等） 3. 今後の課題のまとめ | |

| | | | | |
|----------------|----------|---|---|---|
| 1997年 12月9日 | 関西 大学 | 図書館長 田中敏弘 事務部長 三波正和 運営部長 牧野 勇 図書情報課長 中村順治 利用サービス課長 兄井栄子 雑誌資料課長 隆 中井 | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 1997年度関西四大学図書館職員第1回秋期研修会について テマ：図書館の公開 日時：11月5日 場所：関西学院大学図書館 テマに沿って各大学から事例発表、質疑応答 〈関西学院大学〉 新図書館オープン翌年の1998年4月から実施予定の一般公開制度について報告 〈立命館大学〉 1994年4月から開始している一般公開について報告 〈関西大学〉 卒業生、定年退職者等の利用について実態報告。一般市民への一般公開については検討中との報告 〈同志社大学〉 卒業生への貸出、一般市民への公開は検討中 2) 1997年度関西四大学図書館職員第2回秋期研修会について テマ：図書館と広報活動 日時：11月12日 場所：関西学院大学図書館 ・図書館ホールにて各大学のホームページ紹介。また、印刷媒体を含めた広報活動について各館から発表の後、意見交換 ・HP紹介 ・各館の活動</p> <p>3) 1997年度関西四大学図書館職員研究会について テマ：関西四大学図書館相互利用マニュアルの見直し 日時：11月19日 場所：関西大学図書館 1995年から運用している相互利用マニュアルについて変更点の確認作業と日常運用上の問題点について調整を行った</p> <p>II. 協議事項 「関西四大学所蔵・大型資料一覧」の今後の取扱いについて III. 各大学の近況 〈立命館大学〉 ・11月の図書館と総合情報センターの統合再編について ・4月の経済学部と経営学部のBKC 移転に関して ・衣笠キャンパスで図書館システムを汎用マシンからネットワークへ変更</p> | <p>「1997年度関西四大学図書館職員秋期研修会（第1回）記録」</p> <p>「1997年度関西四大学図書館職員第2回秋期研修会記録」</p> <p>「1997年度関西四大学図書館職員研究会記録」</p> <p>「関西四大学所蔵・大型資料一覧の今後の扱いについて（ご提案）」</p> <p>「資料収集作業部会についての申し合わせ（案）」（同志社）</p> <p>「同志社大学図書除籍手続内規」</p> <p>「同志社大学図書管理内規」</p> <p>「同志社大学学術情報センター資料費」</p> <p>「1997年度同志社大学資料費関連予算」</p> <p>「同志社大学学術情報センター各課の機能と業務」</p> <p>「同志社大学学術情報センター規程」</p> <p>「学術情報センター学術情報運営委員会内規」</p> <p>「学術情報センター計算機システム運営委員会内規」</p> <p>「同志社大学学術情報センター資料収集方針」</p> <p>「関西大学図書館の近況」</p> |
|----------------|----------|---|---|---|

| | | |
|--|---|--|
| | <div>・2000年度開校予定の大分キャンパス新大学設置に関して、図書館及びセンターの対応について 〈同志社大学〉 ・講武館地下1階に12万冊分の保存書庫を整備し、各学部の資料を移設し10月にオープンした ・CD-ROMサーバーは今出川(36ドライブ)と田辺(28ドライブ)で運用し、検索端末は12台ずつを設置 〈関西学院大学〉 ・図書予算はゼロシリング。三田キャンパス関係の図書費は完成年度まで別枠で4000万円との報告 ・第1次、第2次収書計画が完了したが、この中の雑誌継続費用について折衝中 ・新大学図書館の概要について説明 〈関西大学〉 ・CD-ROMサーバーは現行の閉鎖型サーバーに加えて次年度に向けて公開型サーバーの導入を検討中 ・蔵書検索システムは、昭和60年度から情センの設備を利用して自宅からでも検索できていたが、昨年度からインターネットで利用可能なUNIX版システムを開発し、現在テスト運用中 ・総合情報学部の完成に伴い高槻図書室が図書館の一部となった ・貴重書3300点について5ヵ年計画で解題目録の編集作業を開始する予定 ・一般書庫の配架率は80%超となっており、拡張計画を検討中</div> | <div>・補助金内定状況 ・1997年度の重点整備事項 ・図書館の自己点検・評価活動 ・平成10年度に向けて 「文部省私立大学研究設備整備費等補助金の申請及び交付内定状況」 「同志社大学の近況」 ・講武館書庫の完成 ・LL機能付き情報処理実習教室の開設 ・「マルチメディア・ライブラリーの開設」 「1997年度私立大学研究設備整備費等補助金内定一覧」(同志社) 「立命館大学 1997年度研究設備採択リスト」 「新しい学術情報・情報システム部門の確立について」(立命館) 「1997年度研究設備購入分」(関学) 「新大学図書館の開館にあたって」(関学) 「関西四大学図書館相互利用マニュアル」 「関西四大学所蔵・大型資料一覧」1996年度版・1997年3月末現在</div> |
|--|---|--|

| 1998年 12月1日 | 立命館 大学 | 図書館長 事務部長 次長・運営課長 図書情報課長 利用サービスク 雑誌資料課長 | 丸茂 新 三波正和 三波正和 鈴木敏之 中村順治 課長 兄井栄子 篠崎陽一 | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 1998年度関西四大学図書館職員合宿研修会について デーマ:「図書館コンソーシアム」 「大学図書館の役割と自己点検・評価: 新世紀へ向けての私立大学図書館の経営のあり方」 「同志社大学における情報ネットワークを基盤とした組織戦略」 日時: 11月12日～11月13日 場所: 立命館大学びわこ・くさつキャンパス 3つのデーマの講演を聞き討議を行い、さらに合宿により交流を深めた。併せて、滋賀県立琵琶湖博物館見学を実施</p> <p>2) 関西四大学図書館相互利用ハンドブックについて 関西四大学間相互協力マニフェスタを“相互利用協定”相互利用に関する申し合わせ事項“館長会議規約”研修運営要項など関西四大学図書館間の相互協力に関わる資料も含めたハンドブックとして作成し、1998年8月1日から運用していることが報告された</p> <p>II. 協議事項 関西四大学図書館長会議規約の改正について 立命館より、第1条の“立命館大学図書館を立命館大学総合情報センターとする、組織変更(1998年4月)に伴う名称変更を内容とする規約改正の提案がされ、これを了承した</p> <p>III. 各大学から、1999(平成11)年度図書館予算の見通しと、文部科学省補助金採択状況の報告が出された後、近況報告が行われた 〈関西大学〉 ①内藤文庫目録検索 CD-ROM (Libre) を作成したこと ②図書館蔵書検索システム (KOALA) の公開についての紹介 ③電子ジャーナルサービス (英国 MCB University Press 発行の8誌の全文データ提供) の紹介 〈関西学院大学〉 ①外国語雑誌高騰の対応策で、購入タイトル見直しを行い、約1,000万円の経費削減を実施したこと ②1998年4月より図書館一般公開を開始。1日平均20名位の利用がある 〈同志社大学〉 ①貴重資料(新島記念文庫)の電子化と公開についての紹介 ②今出川校地区図書館の日曜開館をキャンパス開放要求により1998年10月より実施 〈立命館大学〉 ①1998年4月より組織改革により総合情報センターとして発足 ②1998年4月より経済・経営学部の衣笠からびわこ・くさつキャンパスへの移転に伴い、メディアライブラリーが開設</p> | <p>「1998年度関西四大学図書館職員合宿研修会の報告」</p> <p>「図書館コンソーシアムについて」</p> <p>「財団法人大学コンソーシアム京都」</p> <p>「大学図書館の役割と自己点検・評価」</p> <p>「同志社大学における情報ネットワークを基盤とした組織戦略」</p> <p>「関西四大学図書館相互利用ハンドブック」</p> <p>「関西四大学図書館長会議規約(案)」</p> <p>「文部省 私立大学研究設備整備費等補助金の申請及び交付内定状況」</p> <p>「関西学院大学図書館の近況」</p> <p>「外国語雑誌購読タイトル見直しについて(第2次案)」</p> |
|----------------|-----------|--|--|--|---|
|----------------|-----------|--|--|--|---|

| | | | | |
|----------------|-----------|--|--|---|
| 1999年 12月1日 | 同志社 大学 | <p>事務部長 三波正和 次長・運営課長 鈴木敏之 図書・情報課長 中村順治 利用サービス課長 兄井来子 雑誌資料課長 篠崎陽一</p> | <p>IV. その他</p> <p>1) 図書館の一般公開にあたっては、窓口対応は人権問題等に考慮し慎重に行うことの重要性について意見交換があった</p> <p>2) 外国語雑誌高騰など図書館運営について、国立国会図書館関西館（仮称）の進展も視野に入れつつ、協力関係を進めていくことを確認</p> <p>I. 報告事項</p> <p>1) 1999年度関西四大学図書館連絡会について 本年7月に開催された連絡会での協議内容について報告があった</p> <p>1. 関西四大学図書館連絡会の今後の方向性について</p> <p>2. 秋季日帰り研修会について</p> <p>3. 研究会について</p> <p>4. 関西四大学図書館連絡会・提出資料について</p> <p>5. その他 年表記について</p> <p>2) 関西四大学相互利用担当者連絡会について（10月8日） 相互利用の増加に対する対策、優遇措置、閲覧利用の受付時間、CD-ROM・外部データベースの利用等各大学の現状報告および情報交換を行った</p> <p>3) 1999年度第1回関西四大学図書館職員研修会について テーマ：外国語雑誌を取り巻く状況については、書店の協力も得て各大学が工夫しながら取り組んでいる状況が報告された</p> <p>電子ジャーナルについては、立命館大学以外の3大学は無料提供のものを、紙媒体の補完的位置づけで取り扱っている状況であり、雑誌利用者の理解、テクニク、情報活用能力、部局との関係等整備調整すべき課題が多く、利用者支援体制も必要。立命館大学は、コアデータベースとして有料のデータベースも利用者に無料提供</p> <p>4) 1999年度第2回関西四大学図書館職員研修会について テーマ：ホームページを利用したサービス展開 ～電子図書館への取り組み～ 関西大学、立命館大学から報告発表が行われ、ホームページになった経緯や現状を、実際に提供されているホームページを見ながら説明を受けた。今後ますますホームページの機能が拡大され、クローズアップされていくにつれ、その基盤となる人員、組織、予算等の整備が必要となる。また、学外リンク集については、利用度が高く大学図書館としてのよう提供していくかについても話し合われた</p> <p>II. 各大学の近況報告・情報交換および懇談 各大学から以下の項目に添って近況報告が行われ、質疑応答、懇談が行われた</p> | <p>「1999年度第1回関西四大学図書館連絡会記録」</p> <p>「1999年度第1回関西四大学図書館職員研修会記録」</p> <p>「1999年度第2回関西四大学図書館職員研修会記録」</p> |
|----------------|-----------|--|--|---|

| | | | | |
|-----------------|------------|--|---|--|
| 2000年 11月28日 | 関西学 院大学 | <p>図書館長 丸茂 新 副館長 阪倉篤秀 事務部長 鈴木敏之 次長・運営課長 萩原一良 図書情報課長 中村順治 利用サービス課長 兄井栄子 雑誌資料課長 篠崎陽一</p> | <p>1) 2000年度図書館予算の見通しについて 2) 電子情報の利用および発信について（新システム、電子ジャーナル、資料の電子化・公開等） 3) 利用サービスの拡大について（市民への公開、休日開館等） 4) その他、各大学のトピック、課題、将来計画等</p> <p>I. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会について 2) 2000年度関西四大学相互利用担当者会について 相互利用マニュアルの返却方法「簡易書留の書籍小包」は現在はその制度がないという指摘があり訂正することとなった。また、関西学院の休館日の大学入試期間（2月1日～7日）を（2月1日～8日）に訂正した 3) 2000年度関西四大学図書館職員研修会（第1回）について 4) 2000年度関西四大学図書館職員研修会（第2回）について</p> <p>II. 協議事項 関西四大学図書館職員研修会運営要項改正案について改正案が承認された</p> <p>III. 承合事項 なし</p> <p>IV. 近況報告・情報交換および懇談 1) 2001年度図書館予算の見通しについて 2) 電子情報の利用および発信について 3) 利用サービスの拡大について 4) 各大学のトピック、課題、将来計画等</p> | <p>「2000年度第1回関西四大学図書館連絡会記録」</p> |
| 2002年 3月18日 | 関西 大学 | <p>図書館長 井上琢智 次長・図書情報課長 萩原一良 運営課長 中村順治 図書情報課主幹 安本裕和 利用サービス課長 兄井栄子 雑誌資料課長 篠崎陽一</p> | <p>I. 報告事項 1) 2001年度関西四大学図書館連絡会について 2) 2001年度関西四大学相互利用担当者会について 今年度は、相互利用手続の簡素化を検討し、事前紹介願のフォームを統一するとともに、その回答を閲覧依頼状に替えることにした。また、相互利用マニュアルの修正を行った 3) 2001年度関西四大学図書館職員研修会について</p> <p>II. 協議事項 1) 関西四大学図書館長会議規約改正案について改正案を了承した 2) 関西四大学図書館相互利用手続の簡素化について</p> <p>III. 承合事項 なし</p> <p>IV. 近況報告・情報交換および懇談 〈関西学院大学〉 ①2002年度図書館図書費予算について</p> | <p>「2001年度第1回関西四大学図書館連絡会（記録）」</p> <p>「2001年度第1回関西四大学図書館相互利用担当者会（記録）」</p> <p>「2001年度関西四大学図書館職員研修会記録」</p> <p>「関西四大学図書館相互利用マニュアル」</p> |

| | | | |
|----------------|---|---|--|
| 2003年 3月12日 | 立命館 大学 | <p>②利用関連事項について</p> <p>③神戸三田キャンパス第二次整備計画に関わる動きについて</p> <p>④外国語雑誌関連事項について</p> <p>⑤図書館システム関連事項について</p> <p>⑥図書館主催の懸賞作品 (J. C. C Newton 賞) の募集 (2年目) について</p> <p>⑦今後の課題について</p> <p>〈同志社大学〉</p> <p>①総合情報センター組織変更について</p> <p>②2002年度図書館予算について</p> <p>③利用サービスの拡大について</p> <p>④各大学のトピック、課題、将来計画等</p> <p>〈立命館大学〉</p> <p>①2002年度図書費</p> <p>②利用サービスの拡大</p> <p>③その他、各大学のトピック、課題、将来計画</p> <p>〈関西大学〉</p> <p>①図書費予算申請について</p> <p>②電子情報の利用、及び発信</p> <p>③利用サービスの拡大</p> <p>④その他、各大学のトピック、課題、将来計画</p> | <p>「2002年度第1回関西四大学図書館連絡会記録」</p> <p>「関西四大学図書館長会議資料」</p> <p>「関西四大学図書館相互利用マニュアル」</p> <p>「関西四大学図書館長会議規約附則表記に係る改正について(案)」</p> |
| | <p>図書館長 井上琢智</p> <p>事務部長 萩原一良</p> <p>次長・運営課長 中村順治</p> <p>図書情報課長 比留井弘司</p> <p>図書情報課主幹 安本裕和</p> <p>利用サービス課長 兄井栄子</p> <p>雑誌資料課長 戸田 隆</p> | <p>I. 報告事項</p> <p>1) 2002年度関西四大学図書館連絡会について</p> <p>2) 2002年度関西四大学図書館相互利用担当者会について</p> <p>2002年度においては、①相互利用手続き簡素化後の改善点、要望事項等に係る意見交換、②相互利用統計の集計方法等統一化の再確認、③相互利用マニュアルの整備、等を行った。内容は、以下の通り</p> <p>* 部局図書室は紹介状を必要とする(従来どおり)</p> <p>* 卒業生、市民(一般公開)登録者、オープンカレッジ受講生は、印刷物以外(オンライン商用データベース、CD-ROM等)は相互利用の対象としない</p> <p>3) 2002年度関西四大学図書館職員研修会について</p> <p>II. 協議事項</p> <p>関西四大学図書館長会議規約改正案について</p> <p>改正案を了承した</p> <p>III. 承合事項</p> <p>2002年11月1日に立命館大学衣笠キャンパスで行われた丸善株式会社からの関西四大学コンソーシアム提案の経過等を紹介し、「電子ジャーナル等に関する四大学ネットワーク活用」研究会の準備について説明・提案があり、</p> | |

| | | | | |
|----------------|-----------|--|--|--|
| 2004年 3月15日 | 同志社 大学 | 図書館長 井上琢智 次長・運営課長 中村順治 運営課主幹 安本裕和 利用サービス課長 兄井栄子 神戸三田キャンパス 事務室主幹（大学図 書館分室担当） 磯辺 彰 | その方向性について了承。なお、2000年11月28日に改正された関西四大学図書館職員研修会運営要項にもとづき、2003年度関西四大学図書館連絡会の承認を得て進めることを確認した IV. 近況報告・情報交換および懇談 1) 図書費予算申請について 2) 電子情報の利用及び発信 3) 利用サービスの拡大 4) その他、各大学のトピック、課題、将来計画 I. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会（2003.7.10開催）について 2) 関西四大学図書館相互利用担当者会（2003.9.16開催）について 3) 関西四大学図書館職員研修会（2003.11.11開催）について 講師：京都大学附属図書館情報管理課長 森 生也氏 テーマ：「大学における著作権について」 ①コイン式複写機の利用 ②ILL業務との関連について ③データベースの契約について 4) 関西四大学図書館職員研究会について 近況報告 〈関西大学〉 1) 2004年度図書館図書予算 2) 電子情報の利用及び発信について 1. 利用 ①外部データベースの拡充 ②PULC参加による電子ジャーナルへの転換促進 2. 発信 ①電子展示室の公開 ②全国漢籍データベース事業への参加 3) 利用サービスの拡大 1. 利用資格者の拡大 ①本学博士課程後期課程修了者等の特別利用 ②在学生父母の閲覧利用 ③地域住民の閲覧利用 〈関西学院大学〉 1) 2004年度図書館図書予算 2) 電子情報の利用及び発信について 1. 国立情報学研究所による研究紀要の電子化（研究紀要ポータル）について 2. 国立国会図書館レファレンス共同データベース実験事業への参加について | 「2003年度第1回関西四大学図書館連絡会記録」 「2003年度関西四大学図書館職員研修会記録」 「オンラインデータベース／契約更新型CD-ROM利用契約条件一覧」 |
|----------------|-----------|--|--|--|

-
3. 「関西学院新聞」データベース構築について
- 3) 利用サービスの拡大
1. 開館日の拡大について
 2. 授業時間の両キャンパス統一による開館時間の変更について (2004年度から)
 - 4) 課題と将来計画
 1. 外国語雑誌購読タイトル見直しについて
 2. 研究推進基盤の環境整備としての大型データベース導入について
 3. 学術ポータルおよび図書館ポータルの構築について
 4. 大阪梅田キャンパス (仮称) での図書館サービス提供について
 5. 書架の敏感化と収容能力の限界について
 6. 2キャンパス間の図書館機能の連携について
 - 5) その他
 1. 館長再任および副館長の交代について (2004年度～)
 2. 大学図書館所蔵資料展 (於・丸善東京日本橋店) の開催について (2003年9月)
 3. 国立情報学研究所目録システム地域講習会の実施について (2003年9月)
 4. J. C. C. Newton 賞 2003年度 (第4回) 募集・審査結果について
 5. 大学図書選定委員会の選定結果について
 6. 「与謝野晶子による丹羽安喜子短歌添削原稿」の解説・翻刻について (立命館大学)
- 1) 2004年度図書館図書費予算
1. 法科大学院ロー・ライブラリーおよび情報理工学部、工学部新学科2004年度開学に伴う図書費増額措置
 2. 外国雑誌の値上げに対する増額対応
 3. 私立大学等経常費補助金特別補助獲得に伴う図書費へのインセンティブ措置
- 2) 電子情報の利用及び発信について
1. 図書館システム「RUNNERS」の第4期リリース (2004年3月16日後働)
 2. 私立大学図書館コンソーシアムへの参加と電子ジャーナル Oxford Journals および Wiley InterScience の導入 (2004年1月)
 3. ISI Web of Science SCL/SSCI/A&HCI のバックファイルを1987年まで溯及
 4. コア・データベース4タイトルの新規導入
- 3) 利用サービスの拡大
1. 図書館 (衣笠) の全面改修 (1,700席の閲覧席リニューアル、利用者用トイレ、フロアカーペット等の改修等)
-

| | |
|--|--|
| | <p>2. 立命館大学学術情報施設利用規則および同施行細則の制定 (2004年度適用)</p> <ul style="list-style-type: none">①利用規則の全学統一化②学部学生に対する研究図書・館外貸出の実現③「リコール制」の導入 <p>3. 「総合情報センターだより」(前誌名:「図書館だより」) 100号刊行達成</p> <p>4. 情報リテラシー授業「学術情報 収集・利用法」の全学部実施</p> <p>5. OPACとリンクしたBKCメディアセンター自動書庫(収容冊数約35万冊)の実現(2004年4月運用)</p> <p>4) 課題と将来計画</p> <ul style="list-style-type: none">1. 立命館アジア太平洋大学との協力関係の強化2. 関西四大学図書館連絡会をはじめ大学コンソーシアム京都、私立大学図書館協会、国公私立大学図書館協力委員会等図書館ネットワークとの連携強化3. 学生ライブラリー・スタッフの活用の拡大4. 電子ジャーナルへの重点化と予算のあり方の検討5. 図書購入方式の多様化6. 「情報化の第三段階」の推進 <p>〈同志社大学〉</p> <ul style="list-style-type: none">1) 2004年度図書館図書費予算2) 電子情報の利用及び発信について1. 新学術情報システム稼働(2月23日稼働)3) 利用サービスの拡大<ul style="list-style-type: none">1. Webサービスの開始2. My Library(図書館ポータル)のサービス開始(2004年4月)4) 課題と将来計画<ul style="list-style-type: none">1. 竹林熊彦文書の整理について2. 今後の図書館のあり方についての検討開始5) その他<ul style="list-style-type: none">1. 日・EUフレンドシップウィーク開催 <p>Ⅲ、情報交換・質疑応答</p> <ul style="list-style-type: none">1) 関西大学の図書費予算編成の経緯について2) 立命館大学のAmazon.com.での図書購入(法人購入の可能性)について3) 大学の情報発信(ポータル)の今後について4) 図書館の高校生への開放について5) 立命館大学のリコール制導入時の教員コンセンサスについて |
| | |
| | |

| | | | | |
|-----------------|------------|--|---|--|
| 2004年 9月14日 | 関西学 院大学 | 図書館長 井上琢智 事務部長 中村順治 運営課長 兄井栄子 運営課主幹 安本裕和 運営課主幹 今村太朗 利用サービス課長 市河原雅子 神戸三田キャンパス 事務室主幹 (大学図 書館分室担当) 磯辺 彰 | Ⅰ. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会 (2004.6.29開催) について 2) 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2004.9.14開催) について 3) 関西四大学図書館職員研究会 (2004.11.19～20開催予定) について Ⅱ. 近況報告・情報交換および懇談 各校から2005年度図書館図書資料費予算、電子情報の利用および発信、利 用サービスの拡大、課題・将来計画、その他の5項目について説明があった Ⅲ. 承合事項等 なし | 「2004年度第1回関西四大 学図書館連絡会記録」 |
| 2005年 9月20日 | 関西 大学 | 図書館長 井上琢智 事務部長 中村順治 運営課長 兄井栄子 利用サービス課長 市河原雅子 神戸三田キャンパス 事務室主幹 (大学図 書館分室担当) 磯辺 彰 | Ⅰ. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会 (2005.7.6開催) について 2) 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2005.9.20開催) について 3) 関西四大学図書館職員研究会 (2006.12.12開催予定) について Ⅱ. 近況報告・情報交換および懇談 1) 2006年度図書館図書資料費予算について 2) 電子情報の利用および発信について 3) 利用サービスの拡大について 4) 課題、将来計画について 5) その他 | 「2005年度第1回関西四大 学図書館連絡会記録」 「関西四大学図書館研修会 企画案」 |
| 2006年 11月25日 | 立命館 大学 | 図書館長 井上琢智 事務部長 中村順治 運営課長 兄井栄子 利用サービス課長 市河原雅子 運営課主幹 安本裕和 運営課主幹 今村太朗 神戸三田キャンパス 事務室主幹 (大学図 書館分室担当) 磯辺 彰 | Ⅰ. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会 (2006.7.5開催) について 2) 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2006.9.12開催) について 3) 関西四大学図書館職員研究会 (2006.12.5開催予定) について Ⅱ. 関西四大学図書館長会議規約改正 Ⅲ. 近況報告・情報交換および懇談 1) 2007年度図書館図書資料費予算について 2) 電子情報の利用および発信について 3) 利用サービスの拡大について 4) 課題、将来計画について Ⅳ. その他 | 「2006年度第1回関西四大 学図書館連絡会記録」 「関西四大学図書館長会議 規約」 |

| | | | | |
|----------------|------------|---|--|--|
| 2007年 9月21日 | 同志社 大学 | 副館長 永田彰三 事務部長 中村順治 次長・運営課長 兄井栄子 利用サービス課長 市河原雅子 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関西四大学図書館連絡会 (2007.7.12 開催) について 2. 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2007.9.21 開催) について 3. 関西四大学図書館職員研修会 (2007.11.14 開催予定) について 4. 関西四大学図書館職員研修会運営要項について <p>II. 近況報告</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2008 年度図書館資料費予算について 2. 電子情報の利用および発信について 3. 利用者サービスについて 4. 課題および将来計画について 5. その他 <p>III. その他</p> | <p>「2007 年度第 1 回関西四大学図書館連絡会記録」</p> <p>「2007 年度関西四大学図書館職員研修会企画 (案)」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会運営要項」</p> <p>「関西四大学図書館長会議規約」</p> |
| 2008年 9月25日 | 関西 大学 | 図書館長 曾我祐典 次長 兄井栄子 運営課長 今村太朗 利用サービス課長 市河原雅子 | <p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関西四大学図書館連絡会 (2008.7.9 開催) について 2. 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2008.9.25 開催) について 3. 関西四大学図書館職員研修会 (2008.11.21 開催予定) について <p>II. 近況報告・情報交換</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2009 年度図書館図書資料費予算について 2. 電子情報の利用および発信について 3. 利用者サービスについて 4. 課題および将来計画について 5. その他 <p>III. その他</p> | <p>「関西四大学図書館連絡会記録」</p> <p>「2008 年度関西四大学図書館職員研修会 (案)」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会運営要項」</p> <p>「関西四大学図書館長会議規約」</p> <p>「関西四大学図書館近況報告資料」</p> |
| 2009年 9月14日 | 関西学 院大学 | 図書館長 曾我祐典 事務部長 兄井栄子 運営課長 今村太朗 利用サービス課長 市河原雅子 | <p>I. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関西四大学図書館長会議規約の改正について <p>II. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関西四大学図書館連絡会 (2009.7.8 開催) について 2. 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2009.9.14 開催) について 3. 関西四大学図書館職員研修会 (2009.11.24 開催予定) について <p>III. 近況報告・情報交換</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2010 年度図書館図書資料費予算について 2. 電子情報の利用および発信について 3. 利用者サービスについて 4. 課題および将来計画について | <p>「関西四大学図書館長会議規約」</p> <p>「関西四大学図書館連絡会記録」</p> <p>「関西四大学図書館職員研修会運営要項」</p> <p>「2009 年度関西四大学図書館職員研修会」</p> |

| | | | | |
|----------------|------------|--|---|---|
| 2010年 9月6日 | 立命館 大学 | 副館長 福井幸男 事務部長 兄井栄子 運営課長 今村太朗 利用サービス課長 市河原雅子 | IV. その他 I. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会 (2010.7.16開催) について 2) 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2010.9.6開催) について 3) 関西四大学図書館職員研修会 (2010.11.17開催予定) について II. 近況報告・情報交換 1) 2011年度図書館図書資料費予算について 2) 電子情報の利用および発信について 3) 利用者サービスについて 4) 課題および将来計画について III. その他 | 「関西四大学図書館近況報告資料」 「関西四大学図書館連絡会記録」 「関西四大学図書館職員研修会運営要項」 「2010年度関西四大学図書館職員研修会」 「関西四大学図書館近況報告資料」 |
| 2011年 9月28日 | 同志社 大学 | 図書館長 奥野卓司 事務部長 兄井栄子 運営課長 今村太朗 利用サービス課長 市河原雅子 | I. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会 (2011.7.8開催) について 2) 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2011.9.28開催) について 3) 関西四大学図書館職員研修会 (2011.11.11開催予定) について II. 近況報告・情報交換 1) 2012年度図書館図書資料費予算について 2) 電子情報の利用および発信について 3) 利用者サービスについて 4) 課題および将来計画について 5) その他 III. その他 | 「関西四大学図書館連絡会記録」 「関西四大学図書館職員研修会運営要項」 「2011年度関西四大学図書館職員研修会」 「関西四大学図書館近況報告資料」 |
| 2012年 9月10日 | 関西学 院大学 | 図書館長 奥野卓司 事務部長 兄井栄子 次長 安本裕和 運営課長 今村太朗 利用サービス課長 市河原雅子 | I. 報告事項 1) 関西四大学図書館連絡会 (2012.7.3開催) について 2) 関西四大学図書館相互利用担当者会 (2012.9.10開催) について 3) 関西四大学図書館職員研修会 (2012.11.28開催予定) について II. 近況報告・情報交換 1) 2013年度図書館図書資料費予算について 2) 電子情報の利用および発信について 3) 利用者サービスについて 4) 課題および将来計画について 5) その他 III. その他 | 「関西四大学図書館連絡会記録」 「関西四大学図書館職員研修会運営要項」 「2012年度関西四大学図書館職員研修会」 「関西四大学図書館近況報告資料」 |

14 その他

(1) J. C. C. Newton 賞応募数・受賞者一覧

| 年度 | 回次 | テーマ | 応募数 | 受賞数 | 受賞者および作品名 (所属および学年等は当年度のもの) |
|---------|-------|-------|-----|-----|---|
| 2000 年度 | 第 1 回 | 「知」 | 16 | 3 | <p>該当者なし 最優秀賞 富田 洋子 (社会学部 4 年) 「知の存在被拘束性を超えて～知識から知性へ～」</p> <p>優秀賞 八木 丈二 (社会学部 4 年) 「自然の心と人の知」</p> <p>優秀賞 山本 龍彦 (総合政策研究科修士課程 2 年) 「新たな「知」のパラダイムを求めて～「知」の創造のインキュベーターとしての大学像～」</p> |
| 2001 年度 | 第 2 回 | 「つくる」 | 32 | 4 | <p>該当者なし 最優秀賞 高原 知愛 (総合政策研究科修士課程 2 年) 「在日コリアン三世のアイデンティティ創出に向けての提言」</p> <p>優秀賞 上山 香織 (法学部 3 年) 「ある職人の物語」</p> <p>優秀賞 天野 真将 (文学部 2 年) 「私たちは「創」り得るか」</p> <p>審査員特別賞 井谷 善恵 (文学研究科美学専攻後期課程) 「三田青磁一型作り、物作り」</p> |
| 2002 年度 | 第 3 回 | 「よむ」 | 38 | 3 | <p>該当者なし 最優秀賞 天野 真将 (文学部 3 年) 「跳躍」</p> <p>優秀賞 富永 浩史 (高等部 3 年) 「日本の淡水魚を訪ねて ～魚と川を「よむ」～」</p> <p>審査員特別賞 畑中 頼親 (法学部 4 年) 「力」の闘争 ～校歌を読み解く～」</p> |
| 2003 年度 | 第 4 回 | 「色」 | 29 | 3 | <p>最優秀賞 宮本 ゆき (神学部 4 年) 「黄金のエルサレム」</p> <p>優秀賞 辻 千絵美 (商学部 2 年) 「曼珠紗華」</p> <p>優秀賞 山本 龍彦 (総合政策研究科博士課程後期課程 3 年) 「色彩の再発見と色彩論の再構築序説～電子メディア時代の色彩におけるアウラ喪失とその復権～」</p> |
| 2004 年度 | 第 5 回 | 「新しさ」 | 21 | 4 | <p>該当者なし 最優秀賞 田中 明尚 (社会学部 3 年) 「路上とマスのメディア・ミックス～新しいコミュニケーションのために」</p> <p>奨励賞 岡田 悟 (社会学部 3 年) 「豪奢な反逆～谷崎文学の現代における可能性～」</p> <p>奨励賞 山本 龍彦 (総合政策研究科大学院研究員) 「苦とともに生きる～人生の New vision を求めて～」</p> <p>審査員賞 牧野 弘 (高等部 3 年) 「新しさは個性～手塚治虫を通して～」</p> |
| 2005 年度 | 第 6 回 | 「道」 | 36 | 3 | <p>該当者なし 最優秀賞 横田 直美 (文学部 4 年) 「カミーノ」</p> <p>優秀賞 岩田 純 (社会学部 1 年) 「かかし通り」</p> <p>優秀賞 牧野 弘 (商学部 1 年) 「祖国への道～シンガポールで終戦を迎えた一人の青年の証言～」</p> |

| 年度 | 回次 | テーマ | 応募数 | 受賞数 | 最優秀賞 優秀賞 優秀賞 優秀賞 | 該当者なし 英司 稲津 秀樹 ル・ターン 川村 里奈 | 受賞者および作品名 (所属および学年等は当年度のもの) |
|---------|--------|-----|-----|-----|--|---|---|
| 2006 年度 | 第 7 回 | 「楽」 | 34 | 3 | 最優秀賞 優秀賞 優秀賞 優秀賞 | 平 英司 聴者に何を語るか? ~Deaf コミュニティにおける笑い: デフジョーク~ 稲津 秀樹 (社会学部前期課程 1 年)「在日韓国・朝鮮人運動のカルチュラ・ター ンへ生野民族文化祭における〈民族〉と〈楽しさ〉」 川村 里奈 (啓明学院中学 3 年)「スワニメタの笑顔」 | (言語コミュニケーション文化研究科博士課程前期課程 2 年)「ろうのすずめは 聴者に何を語るか? ~Deaf コミュニティにおける笑い: デフジョーク~」 |
| 2007 年度 | 第 8 回 | 「極」 | 19 | 3 | 最優秀賞 優秀賞 審査委員特別賞 | 該当者なし 豊田 恵理 松谷 玲菜 神谷 俊晴 梶井 康人 | (文学部 4 年)「ビュリダンのロボ あるいは 4 人の学生」 (啓明学院高校 1 年)「ボラリス」 後晴 (代表) (総合政策学部 4 年)「理文武融合型プロジェクト「FITTERS」」 |
| 2008 年度 | 第 9 回 | 「食」 | 41 | 4 | 最優秀賞 優秀賞 審査委員特別賞 審査委員特別賞 | 梶井 康人 八尾 弘一 山本 歩 竹縄 未希 | (社会学部卒業生)「生きること、食べること」 (経済学部卒業生)「6・3・1 (ろくさんびん) で会話を食べよう」 (文学部 3 年)「明日の朝食の準備をするということ」 (総合政策学部 4 年)「大学で「食」の大変さを学ぶ」 |
| 2009 年度 | 第 10 回 | 「笑」 | 29 | 4 | 最優秀賞 優秀賞 審査委員特別賞 審査委員特別賞 | 梶井 康人 勝井 慧 松浦 千春 谷口 真紀 顔、峠越えの後 | (文学部 4 年)「笑う影法師」 (文学研究科博士課程前期課程 2 年)「亀は善哉と笑う」 (法学部 4 年)「おぞましい「笑い」」 (言語コミュニケーション文化研究科博士課程後期課程 2 年)「安堵の笑 顔、峠越えの後」 |
| 2010 年度 | 第 11 回 | 「変」 | 34 | 4 | 最優秀賞 優秀賞 優秀賞 優秀賞 審査委員特別賞 | 該当者なし 三田 英信 武田 航 梶井 裕基 山本 歩 | (社会学部 3 年)「変を生きる」 (社会学部 2 年)「変心」 (商学部卒業生)「真冬の月下美人」 (文学研究科修士課程 1 年)「減塩」 |
| 2011 年度 | 第 12 回 | 「橋」 | 39 | 4 | 最優秀賞 優秀賞 優秀賞 審査委員特別賞 | 武井 紫乃 三田 英信 金本 磨耶 三隅 貴史 | (清教学園高校 2 年)「優しい妖怪」 (社会学部 4 年)「橋屋・ジョニーの受難」 (社会学部 3 年)「ガリガリ橋のこと」 (法学部 1 年)「なぜ大阪から橋が無くなるのかー江戸・明治時代の大坂 に学ぶー」 |
| 2012 年度 | 第 13 回 | 「味」 | 40 | 5 | 最優秀賞 優秀賞 優秀賞 審査委員特別賞 審査委員特別賞 | 大前 彩織 森 修平 桜井 裕基 新井 金城 康人 | (社会学部 4 年)「人間の味」 (社会学部 1 年)「サルバドール」 (卒業生)「大人って、どんな味?」 (法学部 2 年)「「オンマ」の味」 (総合政策学部 4 年)「或る味」 |

(2) 関西学院大学リポジトリ統計

| | 2007 年度 | 2008 年度 | 2009 年度 | 2010 年度 | 2011 年度 | 2012 年度 |
|--------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| コンテンツ数 | 232 | 523 | 2,117 | 4,642 | 6,420 | 7,857 |
| アイテムダウンロード回数 | 3,783 | 28,063 | 146,207 | 387,755 | 375,335 | 928,158 |

*コンテンツ数は年度末時点の数

*アイテムダウンロード数は当該年度の年間回数。ただし、2007 年度は 7 月のテスト稼働以後の 6 ケ月分のダウンロード回数

*2012 年度ダウンロード回数が大幅に増加しているのは、2011 年度末にシステム改修を実施したことによる、各種検索エンジンやポータルでの視認性向上の結果による。

15 関西学院新聞に見る図書館関連記事(1922 年～1985 年)

| 号数 | 頁 | 発行年月日 | 見出し |
|---------|---|------------|--------------------------------|
| 1 巻 4 号 | 2 | 1922/10/30 | 眠れる図書館 |
| 1 巻 5 号 | 6 | 1923/2/1 | 図書館購入和書名 |
| 11 号 | 4 | 1924/6/25 | 学院図書館 |
| 18 号 | 3 | 1926/2/1 | 図書館消息 |
| 23 号 | 4 | 1926/11/7 | 図書館購入書籍 |
| 26 号 | 2 | 1927/3/1 | 流行らぬ夜の図書館 |
| 27 号 | 2 | 1927/4/27 | マシウス氏一時帰国 |
| 28 号 | 4 | 1927/5/30 | 蔵書いよいよ充実す |
| 30 号 | 1 | 1927/11/2 | 増加和書一班 |
| 31 号 | 4 | 1927/12/3 | 学校図書館の趨勢 |
| 41 号 | 2 | 1929/6/20 | 学院図書館の特異性 |
| 41 号 | 2 | 1929/6/20 | 全国に誇る大図書館閲覧室 |
| 43 号 | 3 | 1929/8/20 | 学院図書館文献目録発行（商学会事業） |
| 44 号 | 2 | 1929/9/28 | 図書館の内容は：まだ大学昇格即行には |
| 50 号 | 3 | 1930/3/20 | 不景気の空っ風：図書館にまで浸透し保証金の引き出し続出す |
| 60 号 | 2 | 1931/1/20 | 近頃奇矯の士：図書館へ二千円を寄付 |
| 66 号 | 1 | 1931/7/20 | 休暇中学生は図書館で論文作成 |
| 69 号 | 2 | 1931/10/20 | 故人の遺志により図書館へ五百円寄付す |
| 74 号 | 3 | 1932/3/20 | 懐寒し不景気の春、図書閲覧料回収率は今年正に九九パーセント |
| 75 号 | 7 | 1932/4/20 | 図書館倉庫設置のため講義料全部投出す、森本講師の美挙 |
| 78 号 | 1 | 1932/7/20 | 四月－六月図書館で読まれた書籍は？ |
| 81 号 | 1 | 1932/10/17 | 全国高等諸学校図書館協議大会 盛会裡に終了 |
| 83 号 | 1 | 1932/12/20 | 論説「図書館問題」 |
| 106 号 | 1 | 1934/11/20 | 図書館案内（新刊書案内） |
| 108 号 | 1 | 1935/1/20 | 購入図書案内 |
| 108 号 | 2 | 1935/1/20 | 故吉阪教授の蔵書 800 冊学院図書館に寄贈 |
| 110 号 | 2 | 1935/3/20 | マシウス教授休暇で帰国 |
| 110 号 | 3 | 1935/3/20 | 購入図書案内 |
| 110 号 | 3 | 1935/3/20 | 寄贈図書 |
| 113 号 | 1 | 1935/6/20 | 図書館購入書籍 |
| 113 号 | 2 | 1935/6/20 | 教え子より謝恩の寄贈を図書館へ三宅氏の美挙（五百円） |
| 116 号 | 3 | 1935/10/17 | マシウス教授帰院 |
| 117 号 | 1 | 1935/11/20 | 図書館案内 新着図書 |
| 118 号 | 3 | 1935/12/20 | 充実を目指し臨時図書館振興委員会開かる 要求額五万二千二百円 |
| 118 号 | 4 | 1935/12/20 | 図書館案内 |
| 119 号 | 1 | 1936/1/20 | 図書館新刊購入案内 |
| 120 号 | 3 | 1936/2/20 | 図書館購入案内 |
| 123 号 | 2 | 1936/6/20 | 充実を目指し図書館費徴収 現在学生よりも |
| 123 号 | 2 | 1936/6/20 | 御自慢の字書体目録－図書館訪問記－ |

| 号数 | 頁 | 発行年月日 | 見出し |
|------|---|------------|--------------------------------|
| 128号 | 2 | 1936/12/20 | 図書館に求む |
| 129号 | 2 | 1937/1/20 | 改善要望に応じ図書館愈々乗り出す－投書函を設置 |
| 130号 | 2 | 1937/2/20 | 改善愈々実現 図書館の新計画 |
| 132号 | 1 | 1937/5/20 | 図書館案内 |
| 132号 | 2 | 1937/5/20 | 議案対策 図書館夜間開館 九月十一日より |
| 133号 | 2 | 1937/6/20 | 図書購入選択権 学生にも与えよ 其後の図書館問題 |
| 135号 | 3 | 1937/9/20 | 読書の秋 図書館夜間開館 何時まで続く |
| 136号 | 1 | 1937/10/20 | 図書館新刊 |
| 137号 | 4 | 1937/11/20 | 時局下の図書館 |
| 139号 | 4 | 1938/1/20 | 時局下の図書館 (2) |
| 140号 | 3 | 1938/2/20 | 図書館前の電燈は廃燈か |
| 144号 | 4 | 1938/6/20 | 図書館新刊 |
| 149号 | 1 | 1938/12/20 | 建国大学へ栄転 司書中島猶次郎氏 |
| 150号 | 3 | 1939/1/20 | 図書館案内 |
| 154号 | 1 | 1939/6/20 | 図書館新刊 |
| 159号 | 2 | 1939/11/20 | 読書週間に因み 末川、寿岳両氏の読書術を訊く 図書館主催にて |
| 166号 | 6 | 1940/7/20 | 数字から見た学院図書館 |
| 187号 | 2 | 1942/7/20 | 休暇中もどしどし利用を 図書館行事予定 |
| 187号 | 2 | 1942/7/20 | 英国社会経済史図書館に贈らる |
| 193号 | 1 | 1943/1/20 | 図書館新刊書 |
| 203号 | 1 | 1946/5/27 | 図書館をのぞく |
| 212号 | 1 | 1947/3/25 | オストラコ 図書掛員へ望む |
| 214号 | 1 | 1947/5/25 | 盛り上る学生の力で 学院美化運動へ 図書館の明装早急実現か |
| 214号 | 1 | 1947/5/25 | オストラコ 図書館に告ぐ |
| 217号 | 2 | 1947/8/30 | 図書館新着書案内 |
| 218号 | 1 | 1947/9/30 | 館内照明近く完備 開館時間1時間延長 貸し出しは一人一冊に |
| 218号 | 1 | 1947/9/30 | 図書館蔵書統計 57857冊 |
| 219号 | 1 | 1947/10/31 | 上昇する利用者 第一位は経済学 |
| 219号 | 1 | 1947/10/31 | 図書館主催講演会 アメリカ新思潮紹介 |
| 221号 | 1 | 1947/12/31 | 学院へ望む 貧弱なる学院図書館 |
| 221号 | 1 | 1947/12/31 | 読書週間を機に展覧と講演会行わる |
| 223号 | 1 | 1948/2/29 | 新制度切り換えを機に張切る図書館 |
| 223号 | 1 | 1948/2/29 | 図書委員会が当局へ 三ヶ条要求書提出 |
| 224号 | 1 | 1948/5/15 | 久山教授図書館に落着く |
| 226号 | 1 | 1948/6/25 | 一万三千部を目標に寄本運動に乗り出す |
| 229号 | 1 | 1948/10/24 | 分館新装成る 後期より開館 |
| 229号 | 4 | 1948/10/24 | オストラコ 図書館内の廃風 |
| 230号 | 2 | 1948/11/25 | 図書館開題 |
| 236号 | 1 | 1949/4/10 | 廿四年度学院予算決定 健全財政の維持え |
| 240号 | 2 | 1949/6/25 | 図書館白書 読書指導に教授の協力が必要 |

| 号数 | 頁 | 発行年月日 | 見出し |
|-------|---|------------|-----------------------------|
| 241 号 | 1 | 1949/9/10 | 八割を新、増築に 図書の充実は申し訳だけ |
| 243 号 | 7 | 1949/10/25 | 新着洋書目録 |
| 244 号 | 2 | 1949/11/15 | 盛んな雑誌利用 就職シーズンを迎えて |
| 246 号 | 2 | 1950/1/25 | 新着図書目録 |
| 248 号 | 2 | 1950/5/15 | 歴史は古く、蔵書少なし 「きけ図書館のこえ」 |
| 249 号 | 2 | 1950/6/5 | 新着図書目録 |
| 254 号 | 1 | 1951/1/22 | なおしばらくは冬眠 修理を待つ図書館時計台 |
| 256 号 | 1 | 1951/5/10 | 26 年度学院予算 |
| 256 号 | 2 | 1951/5/10 | 25 年度図書館白書 望ましい外国文献の読破 |
| 258 号 | 4 | 1951/6/25 | 図書館懇談会 |
| 258 号 | 4 | 1951/6/25 | 新購入図書 |
| 259 号 | 1 | 1951/9/15 | 知識の首にぶら下がる人々 秋の図書館に拾う |
| 259 号 | 2 | 1951/9/15 | 新購入図書 |
| 260 号 | 1 | 1951/10/1 | 米エモリー大学より神学図書寄贈 |
| 260 号 | 2 | 1951/10/1 | 新購入図書 |
| 261 号 | 2 | 1951/10/15 | 学院「今と昔と」淡い原田への郷愁 六十二年を語る |
| 261 号 | 4 | 1951/10/15 | 新購入図書 |
| 263 号 | 2 | 1951/12/1 | 書評入選発表 |
| 264 号 | 1 | 1951/12/15 | 経営書など七〇〇冊を 故小寺教授夫人が寄贈 |
| 267 号 | 2 | 1952/4/15 | 新購入図書 |
| 268 号 | 2 | 1952/5/1 | 新購入図書 |
| 269 号 | 1 | 1952/5/15 | 膨張した学院予算 総額一億一千六百万円に |
| 274 号 | 3 | 1952/9/15 | 新購入図書 |
| 275 号 | 1 | 1952/10/15 | 事典展示 十日から図書館で |
| 275 号 | 2 | 1952/10/15 | 事務室から見た学院生気質 座談会 |
| 279 号 | 4 | 1952/12/15 | 図書館 |
| 282 号 | 3 | 1953/4/15 | 新購入図書 |
| 283 号 | 1 | 1953/5/1 | 視聴覚資料室を新設 図書館春の模様変え |
| 283 号 | 2 | 1953/5/1 | 新購入図書 |
| 284 号 | 2 | 1953/5/15 | 新購入図書 |
| 286 号 | 2 | 1953/6/15 | 新購入図書 |
| 288 号 | 4 | 1953/9/15 | 新購入図書 |
| 299 号 | 2 | 1954/4/15 | 新入生案内 図書館 |
| 300 号 | 5 | 1954/5/1 | 学院の問題を探る |
| 304 号 | 1 | 1954/6/21 | 図書館分館を食堂に予定 |
| 306 号 | 2 | 1954/9/15 | 新購入図書 |
| 309 号 | 8 | 1954/10/25 | 学院の悩み ②図書館 |
| 313 号 | 2 | 1954/12/15 | 大学発展と図書館拡充 故大石学長の功績を偲んで |
| 314 号 | 2 | 1955/1/15 | 図書館について 基本書増加に重点 近く開館時間をのばす |
| 315 号 | 1 | 1955/2/15 | 図書館増築着工 完成は夏期休暇明け |

| 号数 | 頁 | 発行年月日 | 見出し |
|------|----|------------|---------------------------|
| 324号 | 1 | 1955/9/15 | 八十名分増席 図書館増築成る |
| 330号 | 2 | 1955/12/15 | これで十分だろうか 図書館の現状を検討する |
| 332号 | 1 | 1956/1/15 | 図書館長選挙規程原案成る 19日の理事会で正式決定 |
| 332号 | 1 | 1956/1/15 | 図書館 二月から五時まで開館 |
| 333号 | 2 | 1956/2/15 | 13日頃図書館長選挙 東経済学部教授の後任に |
| 333号 | 2 | 1956/2/15 | 新購入図書 |
| 334号 | 1 | 1956/4/15 | 実方教授図書館長に 図書館長選定委で選定 |
| 334号 | 4 | 1956/4/15 | 学院の誇りと埃 図書館時計台上に二本の酒ビン |
| 336号 | 4 | 1956/5/15 | 図書延滞料など値上げ |
| 338号 | 3 | 1956/6/8 | 縁の下の力もち 図書館出納係 一日二里歩く |
| 340号 | 3 | 1956/7/15 | 夏休み中の図書館開館時間 |
| 343号 | 2 | 1956/10/15 | 新購入図書 |
| 344号 | 7 | 1956/10/28 | 縁の下の力もち 本に埋れて四十年間 入交光三氏 |
| 346号 | 2 | 1956/11/26 | 新購入図書 |
| 347号 | 4 | 1956/12/15 | 新購入図書 |
| 348号 | 2 | 1956/12/18 | 新購入図書 |
| 349号 | 4 | 1957/1/15 | 新購入図書 |
| 351号 | 2 | 1957/4/15 | 施設案内 図書館試験中だけ満員 |
| 352号 | 4 | 1957/4/25 | 新購入図書 |
| 355号 | 2 | 1957/5/25 | 私の読書遍歴 足がかりは立川文庫 |
| 360号 | 1 | 1957/9/25 | 学術振興に熱意持て |
| 362号 | 3 | 1957/10/26 | 貸出閲覧を開始 |
| 374号 | 4 | 1958/6/15 | 新購入図書 |
| 375号 | 2 | 1958/7/15 | 新購入図書 |
| 377号 | 4 | 1958/9/25 | 新購入図書 |
| 387号 | 3 | 1959/4/15 | 新購入図書 |
| 395号 | 4 | 1959/7/15 | 新購入図書 |
| 401号 | 2 | 1959/12/7 | 新購入図書 |
| 403号 | 4 | 1960/1/15 | 図書館は誰のもの？ |
| 411号 | 2 | 1960/6/15 | 新購入図書 |
| 411号 | 3 | 1960/6/15 | 図書館の増築など 第三期拡張計画決まる |
| 414号 | 2 | 1960/9/29 | 新購入図書 |
| 416号 | 10 | 1960/11/3 | 新購入図書 |
| 417号 | 2 | 1960/11/15 | 新購入図書 |
| 418号 | 2 | 1960/12/5 | 新購入図書 |
| 419号 | 2 | 1960/12/15 | 新購入図書 |
| 420号 | 2 | 1961/1/15 | 新購入図書 |
| 422号 | 3 | 1961/4/15 | 新購入図書 |
| 423号 | 4 | 1961/4/25 | 新購入図書 |
| 425号 | 2 | 1961/5/25 | 新購入図書 |

| 号数 | 頁 | 発行年月日 | 見出し |
|------|----|------------|-------------------------|
| 427号 | 4 | 1961/6/15 | 新購入図書 |
| 429号 | 2 | 1961/9/15 | 新購入図書 |
| 431号 | 2 | 1961/10/15 | 新購入図書 |
| 434号 | 2 | 1961/12/5 | 新購入図書 |
| 436号 | 2 | 1962/1/15 | 新購入図書 |
| 439号 | 2 | 1962/4/28 | 新購入図書 |
| 441号 | 2 | 1962/5/29 | 新購入図書 |
| 446号 | 2 | 1962/9/29 | 新購入図書 |
| 446号 | 2 | 1962/9/29 | 投書 開館時間の延長を |
| 450号 | 2 | 1962/11/21 | 新購入図書 |
| 455号 | 4 | 1963/4/15 | 新購入図書 |
| 463号 | 4 | 1963/9/26 | 新購入図書 |
| 464号 | 2 | 1963/10/15 | 新購入図書 |
| 465号 | 10 | 1963/11/1 | 新購入図書 |
| 466号 | 2 | 1963/11/20 | 新購入図書 |
| 467号 | 1 | 1963/12/3 | 図書館利用は13日までに |
| 467号 | 2 | 1963/12/3 | 新購入図書 |
| 469号 | 1 | 1963/12/21 | 蔵書の移動進む 新館書庫へ |
| 472号 | 2 | 1964/4/15 | 新購入図書 |
| 474号 | 2 | 1964/5/15 | 新購入図書 |
| 479号 | 6 | 1964/9/15 | 新購入図書 |
| 495号 | 2 | 1965/7/15 | 夏季休暇中の学院開館状況 図書館 |
| 507号 | 4 | 1966/4/15 | がくいん・あんない 図書館 |
| 513号 | 2 | 1966/7/15 | 夏季休暇中の学院開館状況 図書館 |
| 651号 | 6 | 1984/11/25 | 「ねえねえ聞いてよ」希望図書どうなってるのか？ |
| 652号 | 3 | 1985/2/20 | どうなる学習図書館問題 |

図書館年表

* 「月」が不明な場合は空欄にしている。

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|-------|---|----------------------|
| | 2月 | | 大日本帝国憲法公布 |
| | 7月 | 関西学院憲法を起草。W. R. ランバスが院長に就任。神学部および普通学部の2部とし、校名を関西学院と命名 | |
| 1889 | 明治 22 | 兵庫県知事より関西学院設立認可 | |
| | 9月 | 第1校舎1階に30畳の図書室を設置し、「書籍館（しよじゃくかん）」と呼称 | |
| | | 初代館長に J. C. C. ニュートンが就任 | |
| | 10月 | 授業開始 | |
| 1892 | 明治 25 | | 日本文庫協会（日本図書館協会の前身）設立 |
| | 3月 | 学院本館2階に図書室専用の部屋を確保 | |
| 1894 | 明治 27 | | 日清戦争始まる |
| | 8月 | | |
| | 9月 | 新月の校章制定 | |
| 1895 | 明治 28 | 巡回文庫の新設 | |
| 1897 | 明治 30 | 第2代館長に T. H. ヘーデンが就任 | |
| | 6月 | | |
| 1899 | 明治 32 | | 私立学校令公布 |
| | 8月 | | |
| | 11月 | | 図書館令（勅令第429号）公布 |
| 1903 | 明治 36 | 第3代館長に J. C. C. ニュートンが就任 | |
| 1904 | 明治 37 | | |
| | 2月 | | 日露戦争始まる |
| 1908 | 明治 41 | 学院本館3階に移転。名称を私立関西学院附属図書館とする | |
| | 3月 | | |
| | 4月 | 第4代館長に W. K. マシュースが就任 | |
| | | DDC 十進分類法の簡易版、カッター・サンボーン著者記号表の採用 | |
| 1909 | 明治 42 | | |
| | 9月 | 山口県立図書館から磯部泰治を初代司書として招聘 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|-----------|--|------------|
| 1909 | 明治 42 9 月 | 図書原簿登録開始 | |
| 1911 | 明治 44 | 「私立関西学院附属図書館規則及図書分類綱目」発行 | |
| 1912 | 明治 45 | 後に第4代院長となる C. J. L. ベーツがスクールモットー “Mastery for Service” を提唱 | |
| 1913 | 大正 2 9 月 | 巡回文庫を神学部通信教授部に併設 | |
| 1914 | 大正 3 7 月 | | 第1次世界大戦始まる |
| 1916 | 大正 5 8 月 | 在庫調査を初めて実施 | |
| 1918 | 大正 7 12 月 | 神学部通信教授部専属になっていた巡回文庫が図書館の管理に復帰 | |
| 1921 | 大正 10 6 月 | 中島猶治郎がニューヨーク図書館学校に公費留学 | 大学令公布 |
| 1922 | 大正 11 4 月 | 図書館施設をブランチャ・メモリアル・チャペルに移設 | |
| | | 辰馬吉左衛門氏から図書購入費2万円の寄付を受け、3678冊を購入し 「辰馬文庫」と命名 | |
| 1923 | 大正 12 2 月 | 蔵書数 12,000 冊 | |
| | 9 月 | | 関東大震災発生 |
| 1924 | 大正 13 | 図書貸出保証金制度の導入 | |
| 1925 | 大正 14 8 月 | 閲覧用の著者名、書名、件名の3日録を合体して辞書体日録を編成 | |
| | | 上ク原に移転 | |
| 1929 | 昭和 4 4 月 | 竹中工務店竹中藤右衛門氏から時計台（図書館）を受贈 | |
| | | 指定図書制度の実施 | |
| 1930 | 昭和 5 4 月 | 関西学院附属図書館から関西学院図書館へ改称 | |
| 1931 | 昭和 6 9 月 | | 満州事変始まる |
| | 11 月 | | 兵庫県図書館協会設立 |
| 1932 | 昭和 7 3 月 | 「大学令」により関西学院大学の設立認可 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|--------------|-----|---|--------------------------------|
| 1932 昭和7 | 4月 | 大学予科の開設 書庫3階の整備、15,000冊の収容冊数増 | |
| | 5月 | | 五・一五事件発生 |
| | 10月 | 全国高等学校図書館協議会第9回大会を開催 | |
| | 11月 | Library Advisory Committee (図書館委員会) の設置 | |
| 1933 昭和8 | 3月 | 図書館時計台に大時計設置 | |
| | 9月 | 校歌「空の翼」発表 (作曲山田耕筰、作詞北原白秋) | |
| 1934 昭和9 | 4月 | 大学法文学部・商経学部の新設 | |
| | 6月 | 館報「時計台」の発行開始、年2回発行 (第6号で中断) | |
| 1935 昭和10 | | 予約 (保留) 制度の開始 | |
| 1936 昭和11 | | 新制度として図書館費徴収制度導入 | |
| | 2月 | | 二・二六事件発生 |
| 1937 昭和12 | 4月 | 大学院の新設 | |
| | 5月 | ヘレン・ケラー来院、講演 | |
| | 7月 | | 日中戦争始まる |
| 1938 昭和13 | 4月 | 第5代館長に山本五郎法文学部教授が就任 | |
| | 5月 | | 全国私立大学図書館協議会 (私立大学図書館協会の前身) 創立 |
| 1939 昭和14 | | | 第2次世界大戦始まる |
| | 9月 | 学院創立50周年 | |
| | 11月 | 初めての「読書週間」を開催 | |
| 1941 昭和16 | | 大閲覧室に自由閲覧所を設置 | |
| | 12月 | | 太平洋戦争始まる |
| 1942 昭和17 | 3月 | 河上肇博士所蔵スミス「国富論」初版本の購入 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|--------------|--------------------------------------|--------------------------------|
| 1942 | 昭和 17 5 月 | 蔵書数 5 万冊を記念して講演会を実施 | |
| 1943 | 昭和 18 4 月 | 第 6 代館長に東晋太郎商経学部教授が就任、竹林熊彦が司書に就任 | |
| 1944 | | 校舎の多くが海軍と川西航空機株式会社に徴用 | |
| | 昭和 19 | 図書館正面のエンブレムとスクロールのレリーフが破壊される | |
| 1945 | 5 月 | 蔵書 9,000 冊を疎開 | |
| | 昭和 20 8 月 | | ボツダム宣言受諾 |
| 1946 | | 疎開していた図書を復帰 | |
| | 昭和 21 4 月 | 大学の機構を改め、法学部、文学部、経済学部の 3 学部とする | |
| 1947 | 11 月 | | 日本国憲法公布 |
| | | 閲覧室北側 3 分の 1 を仕切り、書庫として約 15,000 冊を収容 | |
| 1948 | 昭和 22 3 月 | | 教育基本法、学校教育法公布。6・3 制実施 |
| | 6 月 | | 阪神間図書館協議会設立 |
| 1949 | 2 月 | | 国立国会図書館設立 |
| | 3 月 | 蔵書数 6 万冊 | |
| 1948 | 昭和 23 4 月 | 新学制による新制大学（文学部、法学部、経済学部）、新制高等部の設置 | |
| | 10 月 | 図書館分館の開設 | |
| 1949 | 昭和 24 3 月 | 著者記号を停止し、新規受入図書より受入順番号を採用 | |
| | 12 月 | | 私立学校法公布 |
| 1950 | 昭和 25 4 月 | 短期大学の設置 | |
| | 5 月 | | 図書館法公布 |
| 1951 | 昭和 26 5 月 | | 阪神間図書館協議会学校部会を兵庫県大学図書館協議会に名称変更 |
| | 6 月 | | 朝鮮戦争始まる |
| 1951 | 昭和 26 2 月 | 学校法人関西学院寄附行為認可 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|-------------|---|-----------------------------------|
| 1951 | 昭和 26 4月 | 商学部の開設 | |
| | 9月 | | サンフランシスコ平和条約、日米安保条約調印 |
| 1952 | 昭和 27 4月 | 文学部神学科を独立させ神学部を開設 | |
| | 6月 | | 大学基準協会「大学図書館基準」制定 |
| 1953 | 昭和 28 | 雑誌室の復旧・整備（新刊雑誌和 82 種、洋 84 種） | |
| | 3月 | 閲覧室内書庫を改造し、開架室（5,000 冊備付）を設置 | |
| 1954 | 昭和 29 5月 | | 日本図書館協会「図書館の自由に関する宣言」発表。1979 年に改訂 |
| | 9月 | 「関西学院図書館略史」発行 | |
| 1955 | 昭和 30 8月 | 第 1 回増築工事（図書館本館の両翼および書庫の増築）完成 | |
| | | 閲覧用日録として従来の辞書体日録に分類日録を追加 | |
| | 4月 | 第 7 代館長に実方清文学部教授が就任 | |
| 1956 | 昭和 31 5月 | | 私立大学図書館協会「私立大学図書館改善要項」制定 |
| | 10月 | | 文部省「大学設置基準」制定 |
| 1957 | 昭和 32 3月 | 短期大学を廃止 | |
| | 4月 | 私立大学図書館協合理事校に就任 | |
| 1958 | 昭和 33 4月 | 職制変更により、庶務、司書、閲覧の 3 係を置く | |
| 1959 | 昭和 34 | 丹羽俊彦元財務部長から近代短歌関係図書資料 2,705 冊を受贈 | |
| | | | 東京大学附属図書館「岸本改革」の推進 |
| | 3月 | 蔵書数約 14 万冊 | |
| 1960 | 昭和 35 4月 | 第 8 代館長に楠井隆三経済学部教授が就任 図書館長が大学評議会のメンバーとなる | |
| | | 文学部社会科学科を独立させ社会科学部を開設 | |
| | 6月 | 私立大学図書館協会第 21 回総・大会を開催 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|-----|--------------------------------|---------------------------------|
| 1961 | | 理学部（物理学科・化学科）の開設 | |
| | 4月 | 3係制から3課制（庶務課・司書課・閲覧課）に改編 | |
| | 5月 | 図書館委員会を図書館運営委員会に改称 | 日本学術会議「大学図書館の整備拡充について（勧告）」発表 |
| 1963 | 10月 | 受入カードの作成開始 | |
| | 3月 | シェイクスピアおよびゲーテ関係資料にDDC特別分類記号を採用 | |
| | 11月 | 第2回増築工事（新館）完成 | |
| 1964 | 12月 | 分館を廃止し、本館に統合 | |
| | | | 関西四大学図書館長懇談会の設置 |
| | | | 文部省「大学図書館職員講習会」開始 |
| 1964 | 4月 | 第9代館長に大道安次郎社会学部教授が就任 | |
| | 10月 | | 東海道新幹線開業 |
| | | | 東京オリンピック開催 |
| 1965 | 11月 | | 日本学術会議「大学における図書館の近代化について（勧告）」発表 |
| | 12月 | | 「資料の利用に関する関西四大学図書館相互協力規約」の締結 |
| 1966 | 3月 | | 文部省「大学図書館施設計画要項」発表 |
| | 5月 | | 文部省「大学図書館実態調査」開始 |
| 1967 | 4月 | 私立大学図書館協会理事校に就任 | |
| | 12月 | 関学・大学紛争始まる | |
| | 4月 | 第10代館長に前田正治法学部教授が就任 | |
| 1968 | | 次長制を採用 | |
| | 9月 | 第2書庫（約5万冊収容）が完成 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|---------------|-----|---------------------------------|---------------------|
| 1969 昭和 44 | 3月 | 全共闘派学生により図書館封鎖 | |
| | 12月 | 図書館改革専門委員会（委員長・前田図書館長）の設置 | |
| 1970 昭和 45 | 3月 | | 大阪万国博覧会開催 |
| | 5月 | | 「著作権法」制定 |
| 1971 昭和 46 | 6月 | 「図書館改革専門委員会答申」を学長に提出 | |
| | 9月 | 図書館報「時計台」1号発行 | |
| 1972 昭和 47 | 11月 | 第1次増築工事完成 | |
| | 4月 | 第11代館長に小園藤一郎社会学部教授が就任 | |
| 1973 昭和 48 | 6月 | 開架閲覧室内に「同和・差別問題図書コーナー」を設置 | |
| | 11月 | 第2次増築工事完成 | |
| 1974 昭和 49 | | 雑誌室の開設 | |
| | 4月 | | 「阪神地区相互利用に関する協定」の発効 |
| 1975 昭和 50 | 6月 | 視聴覚室の開設 | |
| | 6月 | 学院図書館と大学図書館の二重性を改めて、大学図書館になる | |
| 1976 昭和 51 | | 課名称の変更。庶務課を運営課に、司書課を整理課に変更 | |
| | 3月 | 情報処理研究センターの開設 | |
| 1977 昭和 52 | | 第12代館長に川村大膳文学部教授が就任 | |
| | 4月 | 雑誌の受入・整理業務が運営課・整理課から閲覧課雑誌室へ移管 | |
| | 6月 | 館員が選書に参加。主題別選書担当者会の設置 | |
| | 10月 | | 関西四大学図書館職員研修会の発足 |
| 1977 昭和 52 | 4月 | 国立国会図書館に利用登録し、図書借用・文献複写依頼ルートを拡充 | |
| | 9月 | 視聴覚室「AV ニュース」創刊 | |
| | | 「図書館の改善・充実に関する要望書」を学長に提出 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|-----|------------------------------------|--|
| 1978 | 1月 | 和漢書目録に「日本目録規則新版予備版」を採用 | |
| | 1月 | | 文部省学術審議会「今後における学術情報システムの在り方について（答申）」発表 |
| 1980 | 3月 | 「関西学院大学図書館蔵書目録 宗教篇洋書」刊行 | |
| | 4月 | 第13代館長に阪本仁作法学部教授が就任 | |
| | 5月 | 新入生オリエンテーションを館内ツアー形式で実施 | |
| | 6月 | 蔵書数50万冊を超える | |
| 1981 | 4月 | | 「関西四大学図書館相互利用協定」の発効 |
| | 9月 | 視覚障害者読書室の開設 | |
| | 2月 | 「学習図書館新設と既存図書館増築についての要望書」を学長に提出 | |
| 1982 | 4月 | 開館時間を延長（開架室、雑誌閲覧室、第1閲覧室を午後9時まで） | |
| | 11月 | 洋書目録に「AACR2」採用を決定 | |
| 1983 | 4月 | 「蔵書購入基金」を改称し、「特別図書館購入基金」を設置 | |
| | 10月 | 副館長、事務部長制を採用。副館長に杉山貞夫社会学部教授が就任 | |
| | 4月 | 第14代館長に金子精次経済学部教授が、副館長に塩谷滋文学部教授が就任 | |
| | 5月 | 「大学図書館施設改善の検討について（要望）」を学長へ提出 | |
| 1984 | 5月 | 「館長打合せ会」を「館長室会」に名称変更。「業務連絡会」の設置 | |
| | 7月 | 全館冷房工事完成 | |
| | 12月 | | 東京大学文献情報センター目録所在情報サービス(NACSIS-CAT)開始 |
| | 4月 | 私立大学図書館協会常任理事校に就任 | |
| 1985 | 6月 | 「図書システム全体計画書」が理事会で承認 | |
| | 9月 | 「図書システム基本構想書」作成 | |
| | | 図書システム BIBLION の採用決定 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|-------|-------------------|--|
| 1985 | 昭和 60 | 館内機械化ワーキンググループの発足 | |
| 1986 | 昭和 61 | 4 月 | 学術情報センター設置（東京大学文献情報センターを改組） |
| | | 6 月 | 「大学図書館建設に関する第 1 次答申」を学長へ提出 |
| | | 3 月 | 学術情報センターと接続 |
| | | | 「大学図書館建設に関する第 2 次答申（最終答申）」を学長へ提出 |
| | | 4 月 | 週及データ入力開始（カードのパンチ入力を外注） |
| 1987 | 昭和 62 | 6 月 | 新規登録図書へ OCR ラベルの貼付を開始 |
| | | 8 月 | 貴重図書のマイクロ資料化開始（1987 年度から 5 年計画） |
| | | 9 月 | 「図書分類番号変換表」作成 |
| | | 11 月 | 館内に建設問題検討委員会発足 |
| | | | 第 15 代館長に八重津洋平法文学部教授が、副館長に津金澤聡広社会学部教授が就任 |
| | 4 月 | | 閲覧証を（機械可読形式のものに変更して）全員に配布 |
| | | | 開架室学習図書の整理委託を開始 |
| | | | 図書管理サブシステムの一部稼働 |
| 1988 | 昭和 63 | | 開架室の目録体系変更（分類カード目録を廃止し、冊子体目録へ） |
| | 8 月 | | 週及データロードを開始 |
| | | | 雑誌室環境改善工事、開架室・雑誌室 BDS 設置工事の実施 |
| | 9 月 | | 開架室に新着図書コーナーを設置 |
| | | | BDS 導入に伴い新規購入図書に対するタートルテープ貼付を開始 |
| | 11 月 | | 「収書計画書」作成 |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|---------------|-----|---|--|
| 1988 昭和 63 | 11月 | 大学評議会で新大学図書館管理運営問題検討委員会の設置を承認 | |
| | 12月 | 分置図書の種類目録カードを廃棄 | |
| | 1月 | 雑誌管理サブシステムの一部稼働 | |
| | 2月 | 新校地（神戸三田キャンパス）購入の正式契約 | |
| | 3月 | 「新大学図書館の利用サービス体制と管理運営に関する答申」を学長に提出 | |
| | | 出納室備付図書一部の整理委託を開始 | |
| | 4月 | 開架室で利用サブシステムの運用開始 | |
| | | 図書管理サブシステムの全面稼働 | |
| | 5月 | 「新大学図書館 AV 関係充実計画書」、「新大学図書館学術情報システム計画書」を学長に提出 | |
| | 6月 | 学院創立 100 周年記念事業・オール関西学院グラフィティを開催 | |
| 1989 平成元 | 7月 | 受入カード目録の凍結 | |
| | 8月 | 出納室図書 11,443 冊を外部保管 | |
| | | 北米に大学図書館樹察団を派遣 | |
| | 9月 | 「新大学図書館利用サービスの支援体制計画書」を学長に提出 | |
| | | 学院創立 100 周年 | |
| | 11月 | 大学院生のための希望図書制度を実施 | |
| | | | 文部省学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会「学術情報流通の拡大方策について（報告）」発表 |
| | 1月 | 書架狭隘化対策検討チームの設置 | |
| | | 「収書計画書（その2）」作成 | |
| | 4月 | 出納室、雑誌室で利用サブシステムの運用開始 | |
| 1990 平成 2 | 5月 | 「新大学図書館、新産業研究所の基本計画および基本設計書」を学長に提出、理事会で承認 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|--------------|------|---|--|
| 1990 平成 2 | 6 月 | 兵庫県大学図書館協議会総会を開催 | |
| | 10 月 | 週及データーロード作業完了 | |
| | 12 月 | 「関西学院大学図書館小史」発行 | |
| | 12 月 | CD-ROM による開架室所蔵図書検索システムの稼働 (1995 年廃止) | |
| 1991 平成 3 | 12 月 | 雑誌管理サブシステムの全面稼働。これにより図書システム (BIBLION) の全面稼働となる | |
| 1992 平成 4 | | 大学図書館長の任期を 4 年から 3 年へ変更 | |
| | 4 月 | 第 16 代館長に田中敏弘経済学部教授が、副館長に田中穂積文学部教授が就任 | 学術情報センター図書館間相互貸借 (ILL) システムの運用開始 |
| | 10 月 | 学術情報センターの ILL システムに加入 | |
| | 4 月 | 「特別展示および学術資料講演会」を開催。以後、毎年開催 OPAC の運用開始 | |
| 1993 平成 5 | 12 月 | | 文部省学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会「大学図書館機能の強化・高度化の推進について(報告)」発表 |
| 1994 平成 6 | 4 月 | 閲覧課雑誌室を雑誌資料課として分離独立。4 課体制 (運営課、整理課、閲覧課、雑誌資料課) となる | |
| | 6 月 | 古文書業務が整理課から閲覧課へ移管 | |
| 1995 平成 7 | 1 月 | | 阪神・淡路大震災発生 |
| | | 第 17 代館長に田中敏弘経済学部教授が、副館長に田中穂積文学部教授が再任 | |
| | 4 月 | 神戸三田キャンパスに総合政策学部を開設 神戸三田キャンパスⅡ号館に大学図書館分室 (図書室) を開設 | |
| | | 学生、院生の閲覧証が学生証と一体化 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|--------------|--|--|
| 1995 | 平成 7 10 月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館第 1 期開館 | |
| | | 利用者用カード目録の凍結 | |
| 1996 | 3 月 | 蔵書数 100 万冊を超える | |
| | 4 月 | 夜間開館業務を業務委託により実施 | |
| | 平成 8 7 月 | | 私立大学図書館協会「新私立大学図書館改善要項」発表 |
| | | | 文部省学術審議会「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について（建議）」発表 |
| 1997 | 4 月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館に入館ゲート導入 | |
| | | 課名称の変更。整理課を図書情報課に、閲覧課を利用サービス課に変更 | |
| | 平成 9 10 月 | 図書館ホームページの公開開始 | |
| | | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館グラウンドオープン | |
| | | 選書アドバイザー制度の設置 | |
| | 12 月 | 語学学習関係視聴覚資料の一部を言語教育研究センターへ移管 | 文部省学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会「学術情報データベースの整備について（報告）」発表 |
| | 4 月 | 図書費 B 購入分を図書館で一元的に発注。図書館に集中配架 | |
| | | 第 18 代館長に丸茂新商学部教授が、副館長に山本剛郎社会学部教授が就任 | |
| | 平成 10 7 月 | 一般公開制度の開始 | |
| | | 西宮市立図書館、三田市立図書館と相互利用協定を締結・実施 | |
| | 7 月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の 1 日の入館者数が初めて 1 万人を超える（7 月の定期試験前 10,400 名入館） | |
| | 8 月 | 図書システム BIBLION21 の運用開始 | |
| | 10 月 | 外国語雑誌購読タイトルの見直し（第 1 回目） | |
| 1999 | 平成 11 4 月 | 山本副館長に代わり、阪倉篤秀文学部教授が副館長に就任 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|-----|--|--|
| 1999 | 4月 | 開館時間を午後10時まで延長 | |
| | 10月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館が日本図書館協会建築賞を受賞 | |
| | 12月 | 「知的緊張感と大学図書館」と題して座談会を開催 | |
| 2000 | | K. G. ハブスクエア大阪（現・大阪梅田キャンパス）の開設 | |
| | 4月 | | 国立情報学研究所設置（学術情報センターを廃止・転換） |
| | 6月 | J. C. C. Newton 賞の創設 | |
| | | 大学院言語コミュニケーション文化研究科の開設 | |
| | 4月 | 第19代館長に井上琢智経済学部教授が、副館長に加藤哲弘文学部教授と中野幸紀総合政策学部教授が就任 | |
| 2001 | | 延滞罰則の強化 | |
| | 8月 | 理学部が神戸三田キャンパスへ移転 | |
| | 9月 | 神戸三田キャンパスⅢ号館に大学図書館分室（図書メディア館）を移設 | |
| | 10月 | 外国語雑誌購読タイトルの見直し（第2回目） | |
| | | 国立情報学研究所の紀要の電子化事業に参加 | |
| | | 語学学習関係視聴覚資料を言語教育研究センターへ移管完了 | |
| 2002 | 3月 | | 文部科学省科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会情報科学技術委員会デジタル研究情報基盤ワーキング・グループ「学術情報の流通基盤の充実について（審議のまとめ）」発表 |
| | 4月 | 理学部が理工学部に変更 | |
| | 4月 | 図書システム iLiswave の運用開始 | |
| 2003 | 12月 | 年末年始の開館日の拡大を開始（12月26日、27日、1月5日、6日） | |
| | 3月 | | 文部科学省研究振興局情報課「学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について（報告書）」発表 |
| | 4月 | 事務組織の改編。4課を2課体制（運営課、利用サービス課）とする | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|-------------|------------------------|--|--|
| 2003 | 7月 | | 私立大学図書館コンソーシアム (PULC) 設立 |
| | 平成 15 9月 | 東京オフィスの開設 | |
| | | 国立情報学研究所と共催し、目録システム地域講習会 (図書コース) を開催。以後、2012年度まで毎年開催 | |
| | | 丸善・東京日本橋店で展示会を開催 | |
| | | 第20代館長に井上琢智経済学部教授が再任、副館長に柳屋孝安法学部教授と御厨正博理工学部教授が就任 | |
| 2004 | 平成 16 4月 | 専門職大学院司法研究科 (ロースクール) の開設 | |
| | | 授業期間中の日曜日 (第4日曜を除く)、夏季休暇中の土曜日の開館開始 | |
| | | 西宮上ヶ原キャンパスと神戸三田キャンパスの授業時間の統一により、開館時間を統一 | |
| | | 全学対象オリエンテーション「キャンパスライフ ABC」の開始 | |
| | | ホームページからデジタルライブラリの公開開始 | 国立情報学研究所は大学共同利用機関法人情報・システム研究機構の一組織として新しくスタート |
| 2005 | 平成 17 6月 | 8月 | 西宮上ヶ原キャンパス図書館内グループ閲覧室の一室をパソコン室仕様に改修 |
| | | マイクロコナサーバの増設 | |
| | | 10月 | 外国雑誌購読タイトルの見直し (第3回目) |
| | | 12月 | 第1回大学図書館利用実態調査の実施 |
| | | 4月 | 専門職大学院経営戦略研究科の開設 |
| 平成 17 4月 | 阪神・淡路大震災関連連図書資料コーナーの設置 | | |
| | 大阪梅田キャンパスでの図書館サービスを開始 | 大学図書館近畿イニシアティブ (近畿イニシア) 設立 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|--|---|--|
| 2005 | 平成 17 9 月 | EUIJ 関西・大学図書館相互利用協定調印 (2005 年 10 月 1 日 ~ 2008 年 9 月末) | |
| | | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館内に EUIJ 関西ライブラリーを開設 | |
| 2006 | 3 月 | | 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「学術情報基盤の今後の在り方について (報告)」発表 |
| | 4 月 | リコール制度の導入 | |
| | 平成 18 7 月 | 新着図書コーナーの設置 | |
| | 8 月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館内に地下階書架の増設。書架増設のため B1 階の利用者用カード目録を部局分置分を除き撤去、廃棄 | |
| 2007 | 9 月 | 教員対象大学図書館利用実態調査の実施 | |
| | | 私立大学図書館協会第 67 回総会・研究大会を開催 | |
| | 4 月 | 第 21 代館長に杉原左右一商学部教授が、副館長に永田彰三文学部教授と村上方夫総合政策学部教授が就任 | |
| | 平成 19 6 月 | 東京丸の内キャンパスの開設 | |
| | 10 月 | 関西学院大学リポジトリの本稼働 | |
| | | 蔵書数 150 万冊を超える | |
| | 3 月 | 図書資料の再度の外部保管開始 | |
| | | 人間福祉学部の開設 | |
| 2008 | 4 月 | 初等部の開設 | |
| | 平成 20 第 22 代館長に曾我祐典文学部教授が、副館長に利光強経済学部教授と村上方夫総合政策学部教授が就任 | | |
| | 5 月 | 100 万冊収容の自動化書庫設置を理事会で承認 | |
| | 8 月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館内に無線 LAN の敷設開始 | |
| | 9 月 | 第 2 期 EUIJ 関西・大学図書館相互利用協定調印 (2008 年 10 月 1 日 ~ 2013 年 3 月 31 日) | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|------|--------------|--|--|
| 2008 | 10月 | 第2回大学図書館利用実態調査の実施 | |
| | 平成 20 12月 | | 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「学術情報基盤整備に関する対応法策等について（審議のまとめ）ー情報基盤センターの在り方及び学術情報ネットワークの今後の整備の在り方」発表 |
| | | 神戸三田キャンパスⅥ号館に大学図書館分室（図書メディア館）を移設 | |
| 2009 | 3月 | | 国立情報学研究所学術コンテンツ運営・連携本部図書館連携作業部会（次世代目録ワーキンググループ）「次世代目録所在情報サービスの在り方について（最終報告）」発表 |
| | | 学校法人聖和大学と合併 | |
| | 4月 | 教育学部・教育学研究科の開設。西宮聖和キャンパスの開設 | |
| | 平成 21 | 利光副館長に代わり、西村智経済学部准教授が副館長に就任 | |
| | | 「先生のおすすめの本」コーナーの設置 | |
| | 7月 | | 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）」発表 |
| | 8月 | 「新聞書評掲載図書」コーナーの設置 | |
| | 11月 | 2011年以降の新規外国語雑誌購読推薦制度の廃止を決定 | |
| 2010 | | 第23代館長に奥野卓司社会学部教授が、副館長に福井幸男商学部教授と北村泰彦理工学部教授が就任 | |
| | | 学校法人千里国際学園と合併 | |
| | 平成 22 4月 | 国際学部の開設 | |
| | | 図書館図書費の減額（約5%）、図書費予算の繰越制度廃止 | |
| | | 「レポート・論文作成関連図書」コーナーを設置 | |

| 年 | 月 | 図書館 / 大学・学院 | 図書館界 / 社会 |
|---------------|------|---|---|
| 2010 平成 22 | 8 月 | 図書システム iliswave-J の運用開始 | |
| | 8 月 | 一部の部局図書室、大阪梅田キャンパスで分館システムの運用開始 | |
| | 8 月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館内に無線 LAN の敷設完了 | |
| | 10 月 | 資料 ID のバーコードラベル週及貼付を開始 | |
| | 12 月 | | 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」発表 |
| 2011 平成 23 | 12 月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館の閲覧座席増設 (82 席)、3 F カウンター撤去 | |
| | 3 月 | | 東日本大震災発生 |
| | 4 月 | | 大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE) の設立、PULC の発展的解消 |
| | 4 月 | ラウンジ資料、ブラウジング資料を見直し、目録データの作成開始 | |
| 2012 平成 24 | 8 月 | 西宮上ヶ原キャンパス大学図書館に防犯カメラの設置 | |
| | 8 月 | 神戸三田キャンパス図書メディア館に防犯カメラの設置 | |
| | 9 月 | 第 3 回大学図書館利用実態調査の実施 | |

本文編索引

2 課体制 ……89, **173**, 174, 185, 188
 3 係制 ……7, 78
 3 課体制 ……182, 183
 4 課体制 ……**79**, 89, 173, 183, 185
 AV ニュース ……91
 BDS ……61, 85, 167, 256
 BIBLION ……**117**, 118, 124, 130, 131, **135-137**,
 144, 148, **230-233**
 CD-ROM ……**140**, 175, 193, **224**, 225
 C. O. D. ……45, 46, 82, 102
 DDC ……**15**, 16, 91, 92, **142**, 143, 238, 239, 273,
 279, 280, 291
 EUIJ 関西 ……169, 221, 222
 iLiswave ……233-235
 ILL ……86, 185, **188**, 189, 198, 233, 242, 250
 J. C. C. Newton 賞 ……257, 258
 JUSTICE ……248
 Library Advisory Committee
 → 図書館評議員会
 MARC ……124, 143, 144, 146
 OCLC ……144, 185, 189
 OCR ラベル ……86, **121**, 230, 236, 237
 OPAC ……67, 126, 130, **131-134**, 136-138, 140,
 141, 143, 145, 146, 186, 193, 194, 198, 199,
 201, 202, 212, 219, 222, 225, 226, 230, 233,
 234, 236
 PULC ……176, 245, 247, 248
 TRC → 図書館流通センター
 UTLAS ……144
 Y2K ……135, 136

ーあー

東館長 ……**31**, 36, **76**, 77, 107, 147, 153, 154, 268,
 281, 282, 292
 アート計画 ……61, 62
 アンケート ……83, **89**, **100**, 191, 202, **205**, 206,
 215, 233
 磯部泰治 ……7, 15, 77, 273, **278-282**
 委託図書 ……11, 33
 一般公開 ……168, 202, 258
 移動図書館貸出規程 ……27

移動文庫 → 静修文庫
 井上館長 ……78, 161, 164, 219
 入交光三 ……5, 18, 30, 31, 44, 77, 142, 146,
 153-157, 268, 272, 277, 289-293
 院連 → 新図書館建設検討委員会
 上ヶ原キャンパス → 西宮上ヶ原キャンパス
 ヴォーリズ ……22, 292
 受入カード ……137, 138
 運営委員会 ……32, 42, **68-72**, 75, 78, 90, 92, 96,
 176, 182, 233
 運営課 ……**69**, 78, 83, 89, 98, 112, 173, 174, 182,
 185, 186, 188, 192, 212, 274
 閲覧課 ……45, 49, 51, 66, 67, 78, 79, 87, 88, 90,
 93, 103, 109, 147, 173, 182-184, 188
 閲覧証 ……71, 81, 100
 延滞図書 ……181, 182, 226, 227
 延滞罰則 ……136, 181
 大阪梅田キャンパス ……170, **221**, 236, 247, 250
 奥野館長 ……165
 オリエンテーション ……100, **103**, 104, 185,
190-195, 197-199, 201, 204, 207, 213, 217,
 283
 オンラインデータベース → 電子情報資料

ーかー

開架閲覧室 ……47, 50, 52, **80**, 82
 開架室 ……**38**, 49, 51, 52, 65-67, 80, **81**, 83, 85,
 101, 102, 118, 138-140, 145, 179, 180, 182,
 214
 開架書庫 ……**46-48**, **80-82**, 139
 開架制 ……35, 61, **79**, 80, 190, 213, 222
 開館時間 ……12, 46, 63, 64, 67, **100-103**, **178**,
 179, 202, 213, 219, 222, 225, 255, 276
 開館日数 ……13, 178, 179
 開館日 ……100, 179, 225
 外部委託 ……124, 137, 142, **143-145**, **239**, 240
 外部保管 → 学外保管
 警会 ……147
 学院史資料室 → 学院史編纂室
 学院史編纂室 ……49, 96, 140, 289, 291
 学外保管 ……98, 99, 162, 175, 177, 178

学習図書館 ……………42, 52-54
 学術情報センター → 国立情報学研究所
 学術情報探索講習会 ……………191, 193, 194
 学術資料講演会 ……………112, 228, 258
 貸出返却カウンター ……………181, 183, 184
 カッター・サンボン著者記号表 ……15, 273, 280
 カード目録 ……………15, 44, 45, 104, 137-141, 146, 223, 237, 238
 カナダ文庫 ……………95
 金子館長 ……………53
 カレント雑誌 ……………47, 81, 82, 88, 256
 川村館長 ……………95
 館員育成 ……………16, 146, 147, 149, 242
 館外貸出 ……13, 88, 91, 168, 177, 180, 181, 202, 209, 211, 216, 217, 224, 276
 関学生協 ……………145, 159, 213, 239, 240
 関西四大学 ……82, 100, 150-152, 188, 243, 246
 — 図書館職員研修会 ……………149-151, 242, 243
 — 図書館相互協力 ……………73
 — 図書館相互利用 ……………65, 66, 73, 151, 243
 — 図書館長会議 ……………73, 95, 149, 150, 151, 152, 243
 関西四大学図書館長懇談会
 → 関西四大学図書館長会議
 関西学院一覧 → 私立関西学院一覧
 関西学院書籍館 → 書籍館
 関西学院大学生活協同組合 → 関学生協
 関西学院大学図書館 ……3, 24, 25, 37, 73, 93, 115, 129, 169, 202, 228, 243, 246, 279, 282
 — 小史 ……………107, 108, 273, 281, 283
 関西学院図書館 ……21, 22, 24, 25, 31, 39, 153, 268, 269, 273, 279, 280, 283, 286, 289, 291
 — 規則 ……………34, 68, 207
 — 略史 ……7, 107, 108, 268, 277, 278, 281, 282
 関西学院附属図書館 ……3, 5-7, 8, 9, 11-15, 22, 24, 34, 80, 275, 290
 館長打合せ会 ……………79
 館長室会 ……55, 65, 70-72, 79, 87, 97, 175, 192, 200, 219, 252
 館内ツアー ……………103, 190-192, 194, 197
 機関貸出制度 ……………218, 219
 機関リポジトリ → リポジトリ
 寄贈 ……3, 7, 10, 11, 32, 40, 84, 94, 95, 105, 111,

124, 240, 241
 貴重図書 ……14, 47, 49, 71, 72, 190, 219, 222, 236
 喫茶室（アルカディア） ……………213
 紀伊國屋書店 ……………144, 239, 240
 希望図書 ……………32, 34
 キャンパス間配送システム ……………212
 キャンパス自立支援課 ……………203, 204
 キャンパスライフ ABC! ……192, 194-196, 217
 休憩室 ……………93, 213
 狭隘化 ……24, 40, 49, 63, 85, 98, 99, 160, 162, 164, 174, 175, 177, 208, 223
 教育研究システム ……………193, 209, 210, 224
 教員推薦図書 → 先生のおすすめの本
 業務委託 ……………102, 179, 253
 業務連絡会 ……………79
 近畿イニシア ……………169, 242, 249, 250
 楠井館長 ……………82, 292
 久山康 ……………50, 104
 グランドオープン ……72, 88, 90, 92, 93, 95, 106, 137, 160, 163, 168, 173, 183, 184, 193, 221, 240
 繰越制度 ……………170-172
 グループ閲覧室 ……………92, 209, 225, 253
 研究基盤図書 ……………168
 研究個室 ……………209, 210
 研究推進社会連携機構 ……………168, 261-263
 研究設備図書 ……………152
 研究図書館 ……………42, 53, 54
 言語教育研究センター（言語教育センター）
 ……………92, 135, 211, 230
 原簿台帳 → 図書原簿
 件名 ……………15, 137, 143, 285
 公私立大学図書館コンソーシアム → PULC
 神戸三田キャンパス ……59, 60, 78, 79, 89, 157-159, 161, 167, 179, 181, 197, 199, 203, 255-257, 262
 — 大学図書館分室 ……79, 157-159, 197, 199, 200, 255, 256
 — 図書室 ……103, 157-159, 181, 199, 224, 225
 — 図書メディア館 ……75, 76, 158, 167, 197, 199, 212, 213, 225, 255-257
 語学関連資料 ……………92
 国立国会図書館 ……37, 100, 140, 142, 143, 189, 193, 284
 国立情報学研究所 ……86, 89, 118, 124, 125, 137, 140, 144, 148, 176, 188, 189, 223, 232, 240-

242, 244, 247, 248, 252-254, 260-263
 小関館長47
 コーナー配架51, **213**, 214, 216, 217
 古文書46, 49, 72, 79, 84, **93**, 190, 219

ーさー

在庫調査 → 蔵書点検
 雑誌管理サブシステム85, 86, 118, 119
 雑誌室38, 40, 46, 47, 51, 78-81, **82-85**, 87, 93,
 101, 102, 109, 119, 179, 182, 188
 雑誌資料課66, 79, 82, **87-89**, 173, 183-185,
 187, 188
 雑誌目録82, 85, 86, 110
 実方館長68, 77, 292
 三課協議会147
 産業研究所24, 38, 40, 47, 57-60, 71, 83, 134,
163-165, 178
 視覚障がい（害）者読書室49, 105, 106, 204
 四季会4
 司書課45, 47, 69, 78, 93, 147
 司書講習146, 147
 司書職制度7, 77
 辞書体目録**15**, 18, **137-139**, 276, 283, 285
 システム課 → 情報システム室（課）
 システムズ・デザイン社145, 240
 次長（職制）78, 115, 120
 視聴覚室47, 49, 51, 67, 78, **89-92**, 101, 102,
 109, 135, 179, 182
 ——専門委員会69, 72, **89-92**
 視聴覚資料利用コーナー92, 210
 実地視察42
 指定図書34, 42, 72, **207-209**
 自動化書庫161, 162, 237
 事務部長（職制）78
 自由閲覧所35
 収書計画87, 99, 170, 240
 修士論文97, 98
 寿岳文章33, 36, 157
 準開架7, 9, 40, 80, 82
 巡回文庫3, **5**, **12-14**, 269, 273, 279
 小史 → 関西学院大学図書館小史
 情報システム室（課）119, 127-129, 135,
 231, 232, 235, 236, 255, 260
 情報処理研究センター
 → 情報メディア教育センター

情報メディア教育センター87, 96, **113**, 114,
 123, 128, 130, 131, 201, 231
 消耗図書費91, 92, 208, 211, 218
 書架カード44, 137, **138**, 144, 237
 書誌86, 104, 125, 126, 140, 143-146, 189,
 193, 238, 241, 254, 285, 290, 291
 書籍館**3-6**, 14, 24, 80, 268, 269
 除籍98, 132, 133, **174**, 175, 177, 221, 223
 庶務課45, 47, 69, 78, 147
 書名目録15, 139
 シリアルズ・クライシス88
 私立関西学院一覧11, 29, 31
 私立大学図書館協会**36**, 41, 44, 73, 77, 84,
 100, **156**, 157, 242, 245-247, 249, **250-252**,
 291
 資料 ID121, 230, 236
 新館**40**, 46, 55, 80, 82, 103, 163, 292
 新月文庫96, 97
 人権教育49, 51, 166
 震災関連図書64
 新大学図書館管理運営問題検討委員会**56**,
 61, 76, 91, 207, 218, 221
 新着図書コーナー214
 新図書館建設検討委員会55-57, 62
 新聞書評216, 218, 257
 出納式カウンター101, 102, 104
 杉原館長163
 スパニッシュ・ミッション・スタイル22,
 61, 161
 聖句62
 制裁金12, 13, 35
 静修文庫27
 青年図書館員連盟18, 284, 285
 製本雑誌34, 83, 85-88, 162, 165, 178, 181,
 255, 256
 整理課49, 69, **78**, 79, 83, 93, 173, 182
 聖和170, 192, 234, 235
 接架方式80, 139
 全国高等諸学校図書館協議会17, 36, 284
 全国私立大学図書館協議会
 → 私立大学図書館協会
 全国専門高等学校図書館協議会17, 279, 283
 先生のおすすめの本215, 216, 218, 257
 専任職員16, **76-79**, 101, 102, 141, **173**, 174,
 185, 186, 192, 253, 254
 全面開架**61**, 88, 149, 190, 213, 222

相関索引143
 総合教育研究室90, 91, 220
 総合支援センター204
 総合図書館69, 72
 総合目録83, 84, 86, 110, 116, 118, 140, 144,
 148, 241, 252
 相互利用65, 66, 73, 82, 84, 89, 100, 117,
 150-152, 156, 169, 182, 183, 185, **187-189**,
 221, 222, 243, 244
 蔵書印3, 44
 蔵書点検12, 84, 100, 122, **222**, 223
 蔵書票3, 4
 蔵書目録13, 35, 109, 110, 114, 228
 曾我館長163, 164, 215, 216, 263
 週及データ92, 119, **121-123**, 139, **144-146**

ーたー

第1 閲覧室101, 102, 111
 第1 期開館51, **60**, 62, 88, 91-93, 131, 138,
 140, 183, 184
 第1 次増築46, 48, 80, 82
 第2 閲覧室49, 65, 101
 第2 期開館 → グランドオープン
 第2 次増築47, 48, 82, 163
 第3 閲覧室66, 67, 101, 103
 第3 期工事**57-60**, 161
 大学紀要83, 85, 110, 178
 大学諸施設検討委員会53, 55
 大学設置基準77
 大学図書館基準37, 38
 大学図書館近畿イニシアティブ
 → 近畿イニシア
 大学図書館コンソーシアム連合 → JUSTICE
 大学図書館分室
 → 神戸三田キャンパス大学図書館分室
 大学図書館利用実態調査205
 大学評議会53-57, 60, 69, 70, 72, 78, 90, 91,
 157, 164, 173
 大学紛争**42**, 44, **49**, 82, 100, 147
 第三部会**55-59**
 大道館長110, 111
 宝塚文芸図書館153
 竹中工務店23, 24
 竹林熊彦31, 291
 辰馬吉左衛門10

田中館長135
 徴収制度28, 29, 35
 重複調査127, 144, 169, 172
 著者名**15**, 125, 137-140, 145, 234, 276
 著者名目録15, 139
 デジタルライブラリ219, 220, 225
 デューイ十進分類法 → DDC
 展示**36**, **111**, 112, 220, **228-230**, 251, 258
 点字71, 105, 106
 電子ジャーナル75, 89, 162, 172, 174,
175-177, 186, 188, 198, 225, 245-248
 電子情報資料75, 170, 172, 174, **175**, 176,
 185, 187, 193
 電子図書館219, 224, 259
 東洋英和学校7, 10
 同和・差別問題図書コーナー50, 51
 特殊文庫 → 特別文庫
 特別閲覧室93
 特別図書購入基金71, 75, 95, 227
 特別文庫67, 72, **94**, 95, 110, 111, 181, 190,
 219, 222, **227**, 228
 時計台（建物）**23**, 37, 40, 45, 47-49, 60, 61,
 80, 89, 92, 96, 101, 179, 272, 292
 時計台（図書館報）**35**, 82, 83, 104, 105,
107-109, 112-114, 207, 258, 259, 277, 289,
 290
 図書館委員会 → 図書館評議会
 図書館運営委員会 → 運営委員会
 図書館改革専門委員会45, 46, 82
 図書館カード61
 図書館規則7, 11, 12, 15, 24, 32, **34**, **68**, 70, 72,
 80, **168**, 207, 275
 図書館規程68-70, 72, 77, 100, 275
 図書館時報36, 107
 図書館長選任規程68, 70
 図書館図書費75, 76, 89, 95, 159, 168, 169,
170-172, 174, 176, 177, 218
 図書館評議会**28**, 29, 31, **32**, 33, 36, 73, 74,
 78-80
 図書館報 → 時計台（図書館報）
 図書館ホール73, 213, 250, 258
 図書館問題検討委員会
 → 新図書館建設検討委員会
 図書管理規程73, 95, 174
 図書管理サブシステム118, 120
 図書館流通センター144-146, 239, 240

図書記号 ……15, 142
 図書原簿 ……**14**, 41, 44, 83, 98, 122, 142, 274, 281
 図書システム ……65-67, 91, 92, 99, **113**, 115-117,
 119-124, 127-136, 138, 139, 143, 144, 146,
 148, 149, 181, 212, 219, 224, **230-232**, 234,
 235, 239, 260
 図書情報課 ……89, 173
 図書貸借 ……182, 187-189
 図書払出基準 ……70, 98, 174, 175
 図書費 A → 図書館図書費
 図書費 B → 図書館図書費
 図書ブロック ……**115**, 117, 119, 120, 134, 135,
 230, 234
 図書分類目録 ……7, 15, 80, 275
 図書分類法 → 分類
 図書メディア館
 → 神戸三田キャンパス図書メディア館

ーなー

中島猶治郎 ……7, 10, 16-18, 30, 32, 36, 77, 107,
 153-156, 268, 272-277, **282-288**, 290
 西宮上ヶ原キャンパス ……10, 13, 34, 35, 79, 92,
 157, 159, 161, 163, 165-167, 170, 179, 192,
 199, 250, 255, 262
 ——大学図書館 ……75, 76, 92, 103, 158, 159,
 163, 174, 177, 178, 181, 190, 197, 209, 213,
 224, 225, 255
 西宮聖和キャンパス → 聖和
 日本図書館協会 ……37, 103, 153, 160, 284
 入館ゲート ……**61**, 166, 204, 214, 255
 ニュートン館長 ……4, 5, 7, 32, 258, **267-271**, 278

ーはー

博士論文 ……97, 98, 263
 バーコードラベル ……230, 231, 236, 237
 パソコン ……61, 93, 105, 106, 133, 134, 158, 186,
 192-194, 198, 200, 209, **210**, 225, 239, 253,
 255, 257
 原田の森 ……**3**, 5, 10, 11, 13, 16, 21, 23, 24, 33-35,
 37, 38, 271
 阪神・淡路大震災 ……62, 64, 88, 165
 阪神間図書館協議会 ……153, 245
 阪神地区協議会 ……84, 100, 242, 249, 250, 252

兵庫県大学図書館協議会 ……73, 82, 100,
152-156, 242-245, 291
 兵庫県図書館協会 ……152-155
 副館長（職制） ……75, **78**, 79, 200, 205, 219, 259,
 260
 複写室 ……49, 101
 ブラウジング ……213, 214
 ブランチ・メモリアル・チャペル ……**8**, 10, 12,
 13, 80
 フルマーク ……144, 145
 ブロック ……114, 115, 119, 231
 分館 ……**38-40**, 76, 77, 104, 111, 163
 分館（システム） ……135, **136**, 219, 230, 231,
 233-235
 文献の探し方講習会 ……**191-194**, 198, 201, 217
 文献複写 ……73, 88, 100, 182, 185, 186, **187-189**,
 204, 221
 分置 ……7, 34, 54, 70-72, 76, 87, **100**, 138, 144,
218, 219, 223, 238
 分類 ……7, **15**, 16, 18, 64, 76, 80, 91, 92, 104, 116,
 137-140, **142**, 143, 208, **238**, 239, 250, 273,
 275, 276, 279, 280, 284, 285, 289, 291, 293
 分類規程 ……238
 分類目録 ……**15**, **137-140**
 ベーツ院長 ……30, 32
 ヘーデン館長 ……5, 32, 270-272
 変換表 ……143, 239
 防犯カメラ ……166, 167, 256
 保証金 ……**12**, 13, 28, 35, 74, 276
 ホストコンピュータ ……65, 67, 125, **127**, 128,
 130, 131
 保存書庫 ……**47**, 52, 64, 65, 67, 84, 88
 ホームページ ……108, 185, 196, 199, 206, 216,
225, 244, 259
 ボランティア ……105, 204

ーまー

マイクロ ……40, 41, 72, 73, 84, 93, 219, **221**
 前田館長 ……45, 46, 291
 磨研録 ……156, 157
 マシェース館長 ……7, 9, 10, 15-17, 25, 30, 32, 33,
 76, 96, 268, 269, **271-273**, 275, 277-279, 282,
 285, 286, 290, 291
 問宮商店 ……18, 283-285
 丸善 ……32, 144, 228, 229, 234, 240

南メソヂスト監督教会……3-6, 32, 267, 268, 271
 無線 LAN ……210, 225, 257
 武藤誠 ……31, 36, 277, 292
 メディア・フォーラム ……158, 255-257
 目録カード ……41, 109, 121, 122, 137-139, **140**,
 141, 177
 目録規則 ……37, 137, 140, 254
 目録システム地域講習会 ……244, 252, 254

ーやー

八重津館長 ……56, 107
 夜間開館 ……9, 42, 276
 山本館長 ……30, 31, 33, 277
 予約 ……**34**, 84, 87, 151, 222, 226, 233

ーらー

ラウンジ ……88, 211, 212
 ランバス ……3, 4, 111
 リコール制度 ……222

理事会……13, 28, 29, 46, 49, 55-58, 68-70, 72, 87,
 161, 173, 273, 277, 283, 292
 リブレース ……130-133, 181, 193, 209, 210, 212,
 219, 224, 225, **230**, 235
 リフレッシュ ……80, 81
 リポジトリ ……186, 188, 223, 244, **259**, 261, 262
 略史 → 関西学院図書館略史
 利用規程 ……**69-72**, 84, 90, 93, 181, 182, 224
 利用教育 ……**103**, **190-192**, 194, 199
 利用サービス課 ……**89**, **173**, 174, 184, **185-188**,
 192, 206, 212, 218, 219
 利用サブシステム ……118
 レファレンス ……54, 61, 88, 149, **182-187**, 189,
 201, 204
 レポート・論文作成関連図書 ……217, 218, 257

ーわー

和漢古書 ……224
 和装本 ……11, 12, 34, **223**, 224

参考資料一覧

〔刊行物〕

- 1 開校四十年記念関西学院史 1929 年
- 2 関西学院五十年史 1940 年
- 3 関西学院六十年史 1949 年
- 4 関西学院七十年史 1959 年
- 5 関西学院の 100 年 1989 年
- 6 関西学院大学産業研究所六十年の回顧と展望 1995 年
- 7 関学生の阪神大震災 1996 年
- 8 関西学院百年史 通史編、資料編 1994 年－1998 年
- 9 関西学院事典 2001 年
- 10 私立大学図書館協会史 1956 年、1978 年
- 11 私立大学図書館協会 50 年史 1993 年
- 12 その他

〔雑誌〕

- 1 関西学院新聞
- 2 図書館報「時計台」
- 3 関西学院史紀要
- 4 全国専門高等学校図書館協議会会報
- 5 図書館雑誌
- 6 磨研録
- 7 その他

〔学内資料〕

- 1 私立関西学院一覧
- 2 私立関西学院職員現住所一覧表
- 3 大学ニュース
- 4 年次報告
- 5 関西学院例規集
- 6 KG TODAY
- 7 関学ジャーナル
- 8 関西学院役員及び教職員名簿
- 9 理事会等会議録
- 10 その他

〔館内資料〕

- 1 Library Advisory Committee 記録
- 2 図書館通報
- 3 館長主簿
- 4 図書館時報
- 5 関西学院図書館略史
- 6 関西四大学図書館長会議議事録
- 7 大学図書館運営委員会議事・記録
- 8 館長打合せ会議事・記録
- 9 館長室会議事・記録
- 10 関西学院大学図書館小史
- 11 利用ガイド類
- 12 展示・講演会関係資料
- 13 新大学図書館建設関連資料
- 14 業務日誌、会議録、記録類等
- 15 その他

編集後記

関西学院大学図書館の年史は、1954（昭和 29）年に「関西学院図書館略史」（全 30 頁）、1990（平成 2）年に「関西学院大学図書館小史」（全 129 頁）として、既に 2 度、編纂されてきたところである。いずれも、今となつては確認の難しい貴重な情報を数多く含むものの、特定の館員個人の手による略説的な内容に留まっていた。本学図書館の年史としてより本格的なものの編纂が望まれていたところである。第 20 代井上琢智館長の時代に、館長の発案で年史の編纂構想が持ち上がり、2005（平成 17）年 3 月に「関西学院大学図書館史編纂委員会」が立ち上げられ、当時副館長であつた私が委員長となり年史の編纂作業が開始された。それ以来、兄井事務部長が牽引役となつて、資料収集や執筆を委員で分担し、ほぼ月 1 回のペースで委員会を開催して成果の確認や課題のチェック等を行った。本来の業務の合間を縫つての作業ではあつたが、細部もゆるがせにせず、可能な限り正確で本格的な年史を作り上げたいとの委員の並々ならぬ意欲と、委員以外の館員や学院史編纂室の職員の惜しみない協力とによって、80 回近い委員会の開催と 8 年の歳月を経て、この度ようやく図書館史として結実したところである。この図書館史は、これまでの本学図書館の発展の経過と図書館業務における創意工夫の軌跡を中心に記録するものであるが、単なる過去の記録に留められることなく、今後の本学図書館の発展のためにいかばかりかでも役立てられることを祈念致す次第である。

関西学院大学図書館史編纂委員会委員長

柳 屋 孝 安

（法学部教授）



1929 年、第 4 代 C. J. L. Bates 院長により制定されたエンブレムは、スクール・モットーの“Mastery for Service”を土台にした楯の中央に十字架をかたどり、新月、聖書、商人の守護神ヘルメスの杖、松明とペンの 4 つのシンボルを配している。これらの 4 つのシンボルは、エンブレム制定時の関西学院の構成（中学部、神学部、高等学部商科、高等学部文科）を表している。

関西学院大学図書館史編纂委員会

委員長 柳 屋 孝 安（法学部教授）

委員 中 村 順 治

兄 井 栄 子

安 本 裕 和

今 村 太 朗

市河原 雅 子

渡 部 信 吾

酒 井 いずみ

得 平 綾 子

関西学院大学図書館史 1889 年～2012 年

2014 年 1 月 20 日

発 行 関西学院大学図書館

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

tel 0798-54-6121

編 集 関西学院大学図書館史編纂委員会

印 刷 協和印刷株式会社

ISBN 978-4-9907476-0-2